現代日本文學全集
XXX

芥川龍之介集

杉浦非水装幀

改造社版

最もこの問は嚴粛だ——一編の傳記作者は彼
等の間の問答を記録に残してゐる。しかし
彼の投げつけた問は我等は如何に生きるべき
かである。クリストの一生は短かつたであら
う。が、彼はこの問に、——やつと三十歳に及
の總身をしなければなら
てみた。モオゼはナポレオ
戰略に長じた將軍である。エ
よりも政治的天才に富んでゐ
今日は明日ではない。今日

(SM印 B…1) 10×20

松屋製

著者と其筆蹟

「芥川龍之介集」目次

卷頭寫眞（照影 筆跡）

小傳

芥川龍之介小傳

この全集の計畫の成つた初め、この集の卷頭に、かうした氏の小傳を添へるやうにならうとは、何人がよく豫想し得たらう。これは當然に、他の現存の諸作家の集と同じく、氏のォォトグラフの序詞が載るべきであつたのだ。氏の存在は吾等に取つてまだそのやうに親近な感じを抱かすものがある。

芥川龍之介氏は明治二十五年三月一日、東京京橋區入船町に、新原敏三氏の長男として生れた。辰年、辰月、辰日、辰刻の出生たりしに因んで、龍之介と名付けられたのださうである。生後母堂の病弱であつたために、又母方に子供がなかつたために、引き取られて遂に芥川姓を冒すに至つた。養父章道氏は母堂の實兄である。

江戸末期の大通細木香以が、芥川氏母方の大叔父であつた事は、藝術家としての氏を考へる上に若干の暗示にはなる。併し勿論、それを餘りに重要視し過ぎては、却つて氏を正しく評價すべき妨げとならう。

明治三十一年初めて小學校の門を潜つて、大正五年東京帝國大學の英文科を卒業するまで、前後十四年の學生生活を通じ、氏は稀に見るの「秀才」として終始した。恐らくはその文藝書に親しんだ最初と見て然るべき德富蘆花の『自然と人生』を歡び讀んだのが實に尋常小學校の三年の時であつたと傳へられる。以て如何に早熟の才であつたかを窺ひ見るべきであらう。學生時代の最難關たる高等學校の如きも、無試驗推薦で、一高に入つたのである。

帝大卒業の時の卒業論文は『ウヰリアム・モリス研究』であつた。この題目の選擇は凡ゆる點で如何にも芥川氏らしいと云ふ氣がする。

これより前大正三年、諸友人と第三次「新思潮」を刊行し、短篇『老年』を發表した。即ち處女作と言へよう。翌四年には「帝國文學」に『ひよつとこ』と『羅生門』の二作發表。氏自らは「世評未だ一言を加へず」と言つてゐるが、少くとも後者の如き、夙に少數具眼の士の注目を引いてゐたのである。

その同じ四年十二月、夏目漱石の門下に加はつた。蓋し氏の作家的生活に及ぼした漱石の感化は最も著大で、次に鷗外の影響を受けた。

五年、第四次「新思潮」に『鼻』を發表した時の如き、漱石は實に、「君がかかる作を十も書いたら、日本は勿論、世界でもユニイクな作家の一人となるであらう」と云ふ意味の激勵を與へた。大正六年五月創作第一集『羅生門』刊行、十一月第二集『煙草と惡魔』刊行、早くも作家としての確固たる地位を得、八年第三集『傀儡師』の出た頃は、既に儼然たる一方の大家であつた。

その後はただ、フラウベルにも比すべき「藝術的精進」のたゆみなき連續であつた事を語れば足らう。詳細は年表の參照を乞ふ。

それが昭和二年七月二十四日早朝、氏は自ら一命を絶つた。それは實に有島武郎氏の死以來の衝撃をただに文壇のみならず、廣く一般社會に與へた。それは確かに意外であつた。

何故に選んだ死であつたらう乎。凡ての自殺の場合と同じくその全的解決は永久に望まれないものの、もしそれ本集に收錄された『齒車』或舊友へ送る手記』などを一讀すれば、少くともそのための重要な鍵を攫む事が出來よう。

死後現れた多くの批評の中で、特に注目すべきは、ある社會運動家がこれをペトロニウスに比した一語であつた。なるほどペトロニウスも芥川氏も、過ぎ去く階級の最高教養を渾合してゐた意味で、又新しきものの胎動に決して全然盲目ではなかつたが併し今更自分では如何とも出來なかつた點で、似てゐたと言へよう。

羅生門

或日の暮方の事である。一人の下人が羅生門の下で雨やみを待つてゐた。

廣い門の下には、この男の外に誰もゐない。唯、所所丹塗の剥げた、大きな圓柱に、蟋蟀が一匹とまつてゐる。羅生門が、朱雀大路にある以上は、この男の外にも、雨やみをする市女笠や揉烏帽子が、もう二三人はありさうなものである。それが、この男の外には誰もゐない。

何故かと云ふと、この二三年、京都には、地震とか辻風とか火事とか饑饉とか云ふ災がつづいて起つた。そこで洛中のさびれ方は一通りではない。舊記によると、佛像や佛具を打砕いて、その丹がついたり、金銀の箔がついたりした木を、路ばたにつみ重ねて、薪の料に賣つてゐたと云ふ事である。洛中がその始末であるから、羅生門の修理などは、元より誰も捨てて顧る者がなかつた。するとその荒れ果てたのをよい事にして、狐狸が棲む。盗人が棲む。とうとうしまひには、引取り手のない死人を、この門へ持つて來て、棄てて行くと云ふ習慣さへ出來た。

そこで、日の目が見えなくなると、誰でも氣味を惡るがつて、この門の近所へは足ぶみをしない事になつてしまつたのである。

その代り又鴉が何處からか、たくさん集つて來た。晝間見ると、その鴉が何羽となく輪を描いて、高い鴟尾のまはりを啼きながら、飛びまはつてゐる。殊に門の上の空が夕焼けであかくなる時には、それが胡麻をまいたやうにはつきり見えた。鴉は、勿論、門の上にある死人の肉を、啄みに來るのである。――尤も今日は、刻限が遲いせゐか、一羽も見えない。唯、所所、崩れかかつた、さうしてその崩れ目に長い草のはえた石段の上に、鴉の糞が、點點と白くこびりついてゐるのが見える。下人は七段ある石段の一番上の段に、洗ひざらした紺の襖の尻を据ゑて、右の頬に出來た、大きな面皰を氣にしながら、ぼんやり、雨のふるのを眺めてゐた。

作者はさつき、「下人が雨やみを待つてゐた」と書いた。しかし、下人は雨がやんでも、格別どうしようと云ふ當てはない。ふだんなら、勿論、主人の家へ歸る可き筈である。所がその主人からは、四五日前に暇を出された。前にも書いたやうに、當時京都の町は一通りならず衰微してゐた。今この下人が、永年使はれてゐた主人から、暇を出されたのも、實はこの衰微の小さな餘波に外ならない。だから「下人が雨やみを待つてゐた」と云ふよりも、「雨にふりこめられた下人が、行き所がなくて、途方にくれてゐた」と云ふ方が、適當である。その上、今日の空模樣も少からず、この平安朝の下人の Sentimentalisme に影響した。申の刻下りからふり出した雨は、未に上るけしきがない。そこで、下人は、何を措いても差當り明日の暮しをどうにかしようとして――云はばどうにもならない事を、どうにかしようとして、とりとめもない考へをたどりながら、さつきから朱雀大路にふる雨の音を、聞くともなく聞いてゐたのである。

雨は、羅生門をつつんで、遠くから、ざあつと云ふ音をあつめて來る。夕闇は次第に空を低くして、見上げると、門の屋根が、斜につき出した甍の先に、重たくうす暗い雲を支へてゐる。

どうにもならない事を、どうにかする爲には、手段を選んでゐる遑はない。選んでゐれば、築土の下か、道ばたの土の上で、饑死をするばかり

である。さうして、この門の上へ持つて來て、犬のやうに棄てられてしまふばかりである。選ばないとすれば——下人の考へは、何度も同じ道を低徊した揚句に、やつとこの局所へ逢着した。しかしこの「すれば」は、何時までたつても、結局「すれば」であつた。下人は、手段を選ばないといふ事を肯定しながらも、この「すれば」のかたをつける爲に、當然、その後に來る可き「盗人になるより外に仕方がない」と云ふ事を、積極的に肯定する丈の、勇氣が出ずにゐたのである。

下人は、大きな嚏をして、それから、大儀さうに立上つた。夕冷えのする京都は、もう火桶が欲しい程の寒さである。風は門の柱と柱との間を、夕闇と共に遠慮なく、吹きぬける。丹塗の柱にとまつてゐた蟋蟀も、もうどこかへ行つてしまつた。

下人は、頸をちぢめながら、山吹の汗衫に重ねた、紺の襖の肩を高くして門のまはりを見まはした。雨風の患のない、人目にかかる惧のない、一晩楽にねられさうな所があれば、そこでともかくも、夜を明かさうと思つたからである。すると幸、門の上の樓へ上る、幅の廣い、これも丹を塗つた梯子が眼についた。上なら、人がゐたにしても、どうせ死人ばかりである。下人はそこで、腰にさげた聖柄の太刀が鞘走らないやうに氣をつけながら、藁草履をはいた足を、その梯子の一番下の段へふみかけた。

それから、何分かの後である。羅生門の樓の上へ出る、幅の廣い梯子の中段に、一人の男が、猫のやうに身をちぢめて、息を殺しながら、上の容子を窺つてゐた。樓の上からさす火の光が、かすかに、その男の右の頰をぬらしてゐる。短い鬚の中に、赤く膿を持つた面皰のある頰である。下人は、始めから、この上にゐる者は、死人ばかりだと高を括つてゐた。それが、梯子を二三段上つて見ると、上では誰か火をとぼして、しかもその火を其處此處と動かしてゐるらしい。これは、その濁つた、黄いろい光が、隅々に蜘蛛の巣をかけた天井裏に、揺れながら映つたので、すぐにそれと知れたのである。この雨の夜に、この羅生門の上で、火をともしてゐるからは、どうせ唯の者ではない。

下人は、守宮のやうに足音をぬすんで、やつと急な梯子を、一番上の段まで這ふやうにして上りつめた。さうして體を出來る丈、平にしながら、頸を出來る丈、前へ出して、恐る恐る、樓の内を覗いて見た。

見ると、樓の内には、噂に聞いた通り、幾つかの死骸が、無造作に棄ててあるが、火の光の及ぶ範圍が、思つたより狭いので、數は幾つともわからない。唯、おぼろげながら、知れるのは、その中に裸の死骸と、着物を着た死骸とがあるといふ事である。勿論、中には女も男もまじつてゐるらしい。さうして、その死骸は皆、それが、嘗て、生きてゐた人間だと云ふ事實さへ疑はれる程、土を捏ねて造つた人形のやうに、口を開いたり手を延ばしたりして、ごろごろ床の上にころがつてゐた。しかも、肩とか胸とかの高くなつてゐる部分に、ぼんやりした火の光をうけて、低くなつてゐる部分の影を一層暗くしながら、永久に唖の如く黙つてゐた。

下人は、それらの死骸の腐爛した臭氣に思はず、鼻を掩つた。しかし、その手は、次の瞬間には、もう鼻を掩ふ事を忘れてゐた。或る強い感情が、すつかりこの男の嗅覺を奪つてしまつたからである。

下人の眼は、その時、はじめて、其死骸の中に蹲つてゐる人間を見た。檜皮色の着物を着た、背の低い、痩せた、白髪頭の、猿のやうな老婆である。その老婆は、右の手に火をともした松の木片を持つて、その死骸の一つの顔を覗き

きこむやうに眺めてゐた。髪の毛の長い所を見ると、多分女の死骸であらう。

下人は、六分の恐怖と四分の好奇心とに動かされて、暫時は呼吸をするのさへ忘れてゐた。舊記の記者の語を借りれば、「頭身の毛も太る」やうに感じたのである。すると、老婆は、松の木片を、床板の間に挿して、それから、今まで眺めてゐた死骸の首に兩手をかけると、丁度、猿の親が猿の子の虱をとるやうに、その長い髪の毛を一本づゝ拔きはじめた。髪は手に從つて拔けるらしい。

その髪の毛が、一本づゝ拔けるのに從つて、下人の心からは、恐怖が少しづゝ消えて行つた。さうして、それと同時に、この老婆に對する烈しい憎惡が、少しづゝ動いて來た。——いや、この老婆に對すると云つては、語弊があるかも知れない。寧、あらゆる惡に對する反感が、一分毎に強さを增して來たのである。この時、誰かがこの下人に、さつき門の下でこの男が考へてゐた、饑死をするか盜人になるかと云ふ問題を改めて持出したら、恐らく下人は、何の未練もなく、饑死を選んだ事であらう。それほど、この男の惡を憎む心は、老婆の床に挿した松の木片のやうに、勢よく燃え上り出してゐたのである。

下人には、勿論、何故老婆が死人の髪の毛を拔くかわからなかつた。從つて、合理的には、それを善惡の何れに片づけてよいか知らなかつた。しかし下人にとつては、この雨の夜に、この羅生門の上で、死人の髪の毛を拔くと云ふ事が、それ丈で既に許す可らざる惡であつた。勿論、下人は、さつき迄自分が、盜人になる氣でゐた事なぞは、とうに忘れてゐるのである。

そこで、下人は、兩足に力を入れて、いきなり、梯子から上へ飛び上つた。さうして聖柄の太刀に手をかけながら、大股に老婆の前へ歩みよつた。老婆が驚いたのは云ふ迄もない。

老婆は、一目下人を見ると、まるで弩にでも彈かれたやうに、飛び上つた。

「おのれ、どこへ行く。」

下人は、老婆が死骸につまづきながら、慌てふためいて逃げようとする行手を塞いで、かう罵つた。老婆は、それでも下人をつきのけて行かうとする。下人は又、それを行かすまいとして、押しもどす。二人は死骸の中で、暫、無言のまゝ、つかみ合つた。しかし勝敗は、はじめから、わかつてゐる。下人はたうとう、老婆の腕をつかんで、無理にそこへ捩ぢ倒した。丁度、雞の脚のやうな、骨と皮ばかりの腕である。

「何をしてゐた。云へ。云はぬと、これだぞよ。」

下人は、老婆をつき放すと、いきなり、太刀の鞘を拂つて、白い鋼の色をその眼の前へつきつけた。けれども、老婆は默つてゐる。兩手をわなわなふるはせて、肩で息を切りながら、眼を、眼球が瞼の外へ出さうになる程、見開いて、啞のやうに執拗く默つてゐる。これを見ると、下人は始めて明白にこの老婆の生死が、全然、自分の意志に支配されてゐると云ふ事を意識した。さうしてこの意識は、今までけはしく燃えてゐた憎惡の心を、何時の間にか冷ましてしまつた。後に殘つたのは、唯、或仕事をして、それが圓滿に成就した時の、安らかな得意と滿足とがあるばかりである。そこで、下人は、老婆を、見下しながら、少し聲を柔げてかう云つた。

「己は檢非違使の廳の役人などではない。今し方この門の下を通りかかつた旅の者だ。だからお前に繩をかけて、どうしようと云ふやうな事はない。唯、今時分、この門の上で、何をして居たのだか、それを己に話しさへすればいいのだ。」

すると、老婆は、見開いてゐた眼を、一層大きくして、ぢつとその下人の顏を見守つた。瞼の

赤くなつた、肉食鳥のやうな、鋭い眼で見たのである。それから、皺で、殆、鼻と一つになつた脣を、何か物でも嚙んでゐるやうに動かした。細い喉で、尖つた喉佛の動いてゐるのが見える。その時、その喉から、鴉の啼くやうな聲が、喘ぎ喘ぎ、下人の耳へ傳はつて來た。

「この髮を拔いてな、この髮を拔いてな、鬘にせうと思うたのぢや。」

下人は、老婆の答が存外、平凡なのに失望した。さうして失望すると同時に、又前の憎惡が、冷な侮蔑と一しよに、心の中へはひつて來た。すると、その氣色が、先方へも通じたのであらう。老婆は、片手に、まだ死骸の頭から奪つた長い拔け毛を持つたなり、蟇のつぶやくやうな聲で、口ごもりながら、こんな事を云つた。

「成程な、死人の髮の毛を拔くと云ふ事は、何ぼう惡い事かも知れぬ。ぢやが、こゝにゐる死人どもは、皆、その位な事を、されてもいい人間ばかりだぞよ。現在、わしが今、髮を拔いた女などはな、蛇を四寸ばかりづゝに切つて干したのを、干魚だと云うて、太刀帶の陣へ賣りに往んだわ。疫病にかゝつて死ななんだら、今でも賣りに往んでゐた事であろ。それもよ、この女の賣る干魚は、味がよいと云うて、太刀帶どもが、缺かさず菜料に買つてゐたさうな。わしは、この女のした事が惡いとは思うてゐぬ。せねば、饑死をするのぢやて、仕方がなくした事であろ。されば、今又、わしのしてゐた事も惡い事とは思はぬぞよ。これとてもやはりせねば、饑死をするぢやて、仕方がなくする事ぢやわいの。ぢやて、その仕方がない事を、よく知つてゐたこの女は、大方、わしのする事も大目に見てくれるであろ。」

老婆は、大體こんな意味の事を云つた。

下人は、太刀を鞘にをさめて、その太刀の柄を左の手でおさへながら、冷然として、この話を聞いてゐた。勿論、右の手では、赤く頰に膿を持つた大きな面皰を氣にしながら、聞いてゐるのである。しかし、之を聞いてゐる中に、下人の心には、或勇氣が生まれて來た。それは、さつき門の下で、この男には缺けてゐた勇氣である。さうして、又さつきこの門の上へ上つて、この老婆を捕へた時の勇氣とは、全然、反對な方向に動かうとする勇氣である。下人は、饑死をするか盜人になるかに、迷はなかつたばかりではない。その時のこの男の心もちから云へば、饑死などと云ふ事は、殆、考へる事さへ出來ない程、意識の外に追ひ出されてゐた。

「きつと、さうか。」

老婆の話が完ると、下人は嘲るやうな聲で念を押した。さうして、一足前へ出ると、不意に右の手を面皰から離して、老婆の襟上をつかみながら、嚙みつくやうにかう云つた。

「では、己が引剝をしようと恨むまいな。己もさうしなければ、饑死をする體なのだ。」

下人は、すばやく、老婆の着物を剝ぎとつた。それから、足にしがみつかうとする老婆を、手荒く死骸の上へ蹴倒した。梯子の口までは、僅に五歩を數へるばかりである。下人は、剝ぎとつた檜皮色の着物をわきにかゝへて、またたく間に急な梯子を夜の底へかけ下りた。

暫、死んだやうに倒れてゐた老婆が、死骸の中から、その裸の體を起したのは、それから間もなくの事である。老婆は、つぶやくやうな、うめくやうな聲を立てながら、まだ燃えてゐる火の光をたよりに、梯子の口まで、這つて行つた。さうして、そこから、短い白髮を倒にして、門の下を覗きこんだ。外には、唯、黑洞々たる夜があるばかりである。

下人の行方は、誰も知らない。

（大正四年九月作）

鼻

禪智内供の鼻と云へば、池の尾で知らない者はない。長さは五六寸あつて上唇の上から顋の下まで下つてゐる。形は元も先も同じやうに太い。云はば細長い腸詰のやうな物が、ぶらりと顔のまん中からぶら下つてゐるのである。

五十歳を越えた内供は、沙彌の昔から内道場供奉の職に陞つた今日まで、内心では始終この鼻を苦に病んで來た。勿論表面では、今でもさほど氣にならないやうな顔をしてすましてゐる。これは專念に當來の淨土を渇仰すべき僧侶の身で、鼻の心配をするのが惡いと思つたからばかりではない。それより寧、自分で鼻を氣にしてゐると云ふ事を、人に知られるのが嫌だつたからである。内供は日常の談話の中に、鼻と云ふ語が出て來るのを何よりも惧れてゐた。

内供が鼻を持てあました理由は二つある。——一つは實際的に、鼻の長いのが不便だつたからである。第一飯を食ふ時にも獨りでは食へない。獨りで食へば、鼻の先が鋺の中の飯へとどいてしまふ。そこで内供は弟子の一人を膳の向うへ坐らせて、飯を食ふ間中、廣さ一寸長さ二尺ばかりの板で、鼻を持上げてゐて貰ふ事にした。しかしかうして飯を食ふと云ふ事は、持上げてゐる弟子にとつても、持上げられてゐる内供にとつても、決して容易な事ではない。一度この弟子の代りをした中童子が、嚔をした拍子に手がふるへて、鼻を粥の中へ落した話は、當時京都まで喧傳された。——けれどもこれは内供にとつて、決して鼻を苦に病んだ重な理由ではない。内供は實にこの鼻によつて傷けられる自尊心の爲に苦しんだのである。

池の尾の町の者は、かう云ふ鼻をしてゐる禪智内供の爲に、内供の俗でない事を仕合せだと云つた。あの鼻では誰も妻になる女があるまいと思つたからである。中には又、あの鼻だから出家したのだらうと批評する者さへあつた。しかし内供は、自分が僧である爲に、幾分でもこの鼻に煩される事が少くなつたとは思つてゐない。内供の自尊心は、妻帶と云ふやうな結果的な事實に左右される爲には、餘りにデリケイトに出來てゐたのである。そこで内供は、積極的にも消極的にも、この自尊心の毀損を恢復しようと試みた。

第一に内供の考へたのは、この長い鼻を實際以上に短く見せる方法である。これは人のゐない時に、鏡へ向つて、いろいろな角度から顔を映しながら、熱心に工夫を凝らして見た。どうかすると、顔の位置を換へるだけでは、安心が出來なくなつて、頰杖をついたり頤の先へ指をあてがつたりして、根氣よく鏡を覗いて見る事もあつた。しかし自分でも滿足する程、鼻が短く見えた事は、是までに唯の一度もない。時によると、苦心すればする程、却て長く見えるやうな氣さへした。内供は、かう云ふ時には、鏡を箱へしまひながら、今更のやうに溜息をついて、不承不承に又元の經机へ觀音經をよみに歸るのである。

それから又内供は、絶えず人の鼻を氣にしてゐた。池の尾の寺は、僧供講説などの屢行はれる寺である。寺の内には、僧坊が隙なく建て續いて、湯屋では寺の僧が日毎に湯を沸かしてゐる。從つてここへ出入する僧俗の類も甚多い。内供はかう云ふ人人の顔を根氣よく物色

した。一人でも自分のやうな鼻のある人間を見つけて、安心がしたかつたからである。だから内供の眼には、紺の水干も白の帷子もはひらない。まして柑子色の帽子や椎鈍の法衣なぞは、見慣れてゐるだけに、有れども無きが如くである。内供は人を見ずに唯、鼻を見た。――しかし鍵鼻はあつても、内供のやうな鼻は一つも見當らない。その見當らない事が度重なるに從つて、内供の心は次第に又不快になつた。内供が人と話しながら、思はずぶらりと下つてゐる鼻の先をつまんで見て、年甲斐もなく顏を赤めたのは、全くこの不快に動かされての所爲である。

最後に、内供は、内典外典の中に、自分と同じやうな鼻のある人物を見出して、せめても幾分の心やりにしようとさへ思つた事がある。けれども、目連や、舍利弗の鼻が長かつたとは、どの經文にも書いてない。勿論龍樹や馬鳴も、人竝の鼻を備へた菩薩である。内供は、震旦の話の序に蜀漢の劉玄德の耳が長かつたと云ふ事を聞いた時に、それが鼻だつたら、どの位自分は心細くなくなるだらうと思つた。

内供がかう云ふ消極的な苦心をしながらも、一方では又　積極的に鼻の短くなる方法を試みた事は、わざわざここに云ふ迄もない。内供はこの方面でも殆出來るだけの事をした。烏瓜を煎じて飲んで見た事もある、鼠の尿を鼻へなすつて見た事もある。しかし何をどうしても、鼻は依然として、五六寸の長さをぶらりと脣の上にぶら下げてゐるではないか。

所が或年の秋、内供は用を兼ねて、京へ上つた弟子の僧が、知己の醫者から長い鼻を短くする法を教はつてゐた。その醫者と云ふのは、もと震旦から渡つて來た男で、當時は長樂寺の供僧になつてゐたのである。

内供は、いつものやうに、鼻などは氣にかけないと云ふ風をして、わざとその法もすぐにやつて見ようとは云はずにゐた。さうして一方では、氣輕な口調で、食事の度毎に、弟子の手數をかけるのが、心苦しいと云ふやうな事を云つた。内心では勿論弟子の僧が、自分を說伏せて、この法を試みさせるのを待つてゐたのである。弟子の僧にも、内供のこの策略がわからない筈はない　しかしそれに對する反感よりは、内供のさう云ふ策略をとる心もちの方が、より强くこの弟子の僧の同情を動かしたのであらう。弟子の僧は、内供の豫期通り、口を極めて、この法を試みる事を勸め出した。そして、内供自身も亦、その豫期通り、結局この熱心な勸告に聽從する事になつた。

その法と云ふのは、唯、湯で鼻を茹でて、その鼻を人に踏ませると云ふ、極めて簡單なものであつた。

湯は寺の湯屋で、毎日沸かしてゐる。そこで弟子の僧は、指も入れられないやうな熱い湯を、すぐに提に入れて、湯屋から汲んで來た。しかしぢかにこの提へ鼻を入れるとなると、湯氣に吹かれて顏を火傷する惧がある。そこで折敷へ穴をあけて、それを提の蓋にして、その穴から鼻を湯の中へ入れる事にした。鼻だけはこの熱い湯の中へ浸しても、少しも熱くないのである。しばらくすると弟子の僧が云つた。

――もう茹つた時分でござらう。

内供は苦笑した。これだけ聞いたのでは、誰も鼻の話とは氣がつかないだらうと思つたからである。鼻は熱湯に蒸されて、蚤の食つたやうにむづ痒い。

弟子の僧は、内供が折敷の穴から鼻をぬくと、そのまだ湯氣の立つてゐる鼻を、兩足に力を入れながら、踏みはじめた。内供は横になつて、鼻を床板の上へのばしながら、弟子の僧の足が上下に動くのを眼の前に見てゐるのである。弟

子の僧は、時時氣の毒さうな顔をして、内供の禿げ頭を見下しながら、こんな事を云つた。

——痛うはござらぬかな。醫師は責めて踏めと申したで。ぢやが、痛うはござらぬかな。

内供は、首を振つて、痛くないと云ふ意味を示さうとした。所が鼻を踏まれてゐるので思ふやうに首が動かない。そこで、上眼を使つて、弟子の僧の足に皹のきれてゐるのを眺めながら、腹を立てたやうな聲で、

——痛うはないて。

と答へた。實際鼻はむづ痒い所を踏まれるので、痛いよりも却て氣もちのいい位だつたのである。

しばらく踏んでゐると、やがて、粟粒のやうなものが、鼻へ出來はじめた。云はば毛をむしつた小鳥をそつくり丸炙にしたやうな形である。弟子の僧は之を見ると、足を止めて獨り言のやうにかう云つた。

——之を鑷子でぬけと申す事でござつた。

内供は、不足らしく頬をふくらせて、默つて弟子の僧のするなりに任せて置いた。勿論弟子の僧の親切がわからない譯ではない。それは分つても、自分の鼻をまるで物品のやうに取扱ふのが、不愉快に思はれたからである。内供は、信用しない醫者の手術をうける患者のやうな顔をして、不承不承に弟子の僧が、鼻の毛穴から鑷子で脂をとるのを眺めてゐた。脂は、鳥の羽の莖のやうな形をして、四分ばかりの長さにぬけるのである。

やがて之が一通りすむと、弟子の僧は、ほつと一息ついたやうな顔をして、

——もう一度、之を茹でればようござる。

と云つた。

内供は矢張、八の字をよせたまま不服らしい顔をして、弟子の僧の云ふなりになつてゐた。

さて二度目に茹でた鼻を出して見ると、成程、何時になく短くなつてゐる。これではあたりまへの鍵鼻と大した變りはない。内供はその短くなつた鼻を撫でながら、弟子の僧の出してくれる鏡を、極りが惡るさうにおづおづ覗いて見た。

鼻は——あの顋の下まで下つてゐた鼻は、殆ど譃のやうに萎縮して、今は僅に上唇の上で意氣地なく殘喘を保つてゐる。所所まだらに赤くなつてゐるのは、恐らく踏まれた時の痕であらう。かうなれば、もう誰も哂ふものはないのにちがひない。——鏡の中にある内供の顔は、鏡の外にある内供の顔を見て、滿足さうに眼をしばたたいた。

しかし、その日はまだ一日、鼻が又長くなりはしないかと云ふ不安があつた。そこで内供は誦經する時にも、食事をする時にも、暇さへあれば手を出して、そつと鼻の先にさはつて見た。が、鼻は行儀よく唇の上に納まつてゐるだけで、格別それより下へぶら下つて來る氣色もない。それから一晩寢てあくる日早く眼がさめると内供は先、第一に、自分の鼻を撫でて見た。鼻は依然として短い。内供はそこで、幾年にもなく法華經書寫の功を積んだ時のやうな、のびのびした氣分になつた。

所が二三日たつ中に、内供は意外な事實を發見した。それは折から、用事があつて、池の尾の寺を訪れた侍が、前よりも一層可笑しさうな顔をして、話も碌碌せずに、じろじろ内供の鼻ばかり眺めてゐた事である。それのみならず、嘗て、内供の鼻を粥の中へ落した事のある中童子なぞは、講堂の外で内供と行きちがつた時に、始めは、下を向いて可笑しさをこらへてゐたが、とうとうこらへ兼ねたと見えて、一度にふつと吹き出してしまつた。用を云ひつかつた下法師たちが、面と向つてゐる間だけは、愼んで聞いてゐても、内供が後さへ向けば、すぐ

にくすくす笑ひ出したのは、一度や二度の事ではない。

内供は始め、之を自分の顔がはりがしたせゐだと解釈した。しかしどうもこの解釈だけでは十分に説明がつかないやうである。――勿論、中童子や下法師が嗤ふ原因は、そこにあるのにちがひない。けれども同じ嗤ふにしても、鼻の長かつた昔とは、嗤ふのにどことなく容子がちがふ。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の方が滑稽に見えると云へば、それまでである。が、そこにはまだ何かあるらしい。

――前にはあのやうにつけつけとは嗤はなんだて。

内供は、誦しかけた經文をやめて、禿げ頭を傾けながら、時時かう呟く事があつた。愛すべき内供は、さう云ふ時になると、必ぼんやり、傍にかけた普賢の畫像を眺めながら、鼻の長かつた四五日前の事を憶ひ出して、「今はむげにいやしくなりさがれる人の、さかえたる昔をしのぶがごとく」ふさぎこんでしまふのである。――内供には、遺憾ながらこの問に答を與へる明が欠けてゐた。

――人間の心には互に矛盾した二つの感情がある。勿論、誰でも他人の不幸に同情しない者はない。所がその人がその不幸を、どうにかして切りぬける事が出來ると、今度はこつちで何となく物足りないやうな心もちがする。少し誇張して云へば、もう一度その人を、同じ不幸に陷れて見たいやうな氣にさへなる。さうして何時の間にか、消極的ではあるが、或敵意をその人に對して抱くやうな事になる。――内供が、理由を知らないながらも、何となく不快に思つたのは、池の尾の僧俗の態度に、この傍觀者の利己主義をそれとなく感づいたからに外ならない。

そこで内供は日毎に機嫌が惡くなつた。二言目には、誰でも意地惡く叱りつける。しまひには鼻の療治をしたあの弟子の僧でさへ、「内供は法慳貪の罪を受けられるぞ」と陰口をきく程になつた。殊に内供を怒らせたのは、例の惡戲な中童子である。或日、けたたましく犬の吠える聲がするので、内供が何氣なく外へ出て見ると、中童子は、二尺ばかりの木の片をふりまはして、毛の長い、痩せた尨犬を逐ひまはしてゐる。それも唯、逐ひまはしてゐるのではない。「鼻を打たれまい。それ、鼻を打たれまい」と囃しながら逐ひまはしてゐるのである。内供は、中童子の手からその木の片をひつたくつて、したたかその顏を打つた。木の片は以前の鼻持上げの木だつたのである。

内供はなまじひに、鼻の短くなつたのが、反つて恨めしくなつた。

すると或夜の事である。日が暮れてから急に風が出たと見えて、塔の風鐸の鳴る音が、うるさい程枕に通つて來た。その上、寒さもめつきり加はつたので、老年の内供は寢つかうとしても寢つかれない。そこで床の中でまじまじしてゐると、ふと鼻が何時になく、むづ痒いのに氣がついた。手をあてて見ると少し水氣が來たやうにむくんでゐる。どうやらそこだけ、熱さへもあるらしい。

――無理に短うしたで、病が起つたのかも知れぬ。

内供は、佛前に香花を供へるやうな恭しい手つきで、鼻を抑へながら、かう呟いた。

翌朝、内供が何時ものやうに早く眼をさまして見ると、寺内の銀杏や橡が一晩の中に葉を落したので、庭は黄金を敷いたやうに明い。塔の屋根には霜が下りてゐるせゐであらう。まだうすい朝日に、九輪がまばゆく光つてゐる。禪智内供は、蔀を上げた縁に立つて、深く息をすひこんだ。

殆、忘れようとしてゐた或感覺が、再、内供に歸つて來たのは、この時である。

内供は慌てて鼻へ手をやつた。手にさはるものは、昨夜の短い鼻ではない。上脣の上から顋の下まで、五六寸あまりもぶら下つてゐる、昔の長い鼻である。内供は鼻が一夜の中に、又元の通り長くなつたのを知つた。さうしてそれと同時に、鼻が短くなつた時と同じやうな、はればれした心もちが、どこからともなく歸つて來るのを感じた。

――かうなれば、もう誰も哂ふものはないにちがひない。

内供は心の中でかう自分に囁いた。長い鼻をあけ方の秋風にぶらつかせながら。

（大正五年一月作）

ユダ

笑は量的に分てば微笑哄笑の二種あり。質的に分てば嬉笑嘲笑苦笑の三種あり。……予が最も愛する笑は嬉笑嘲笑苦笑と兼ねたる、爆聲の如き哄笑なり。アウエルバッハの穴藏に愚昧の學生を奔らせたる、メフィストフエレエスの哄笑なり　――カアル・エミリウス――

逾越と云へる「種入れぬ麵包の祭」近づけり。祭司の長學者たち、如何にしてかイエスを殺さんと窺ふ。但民を畏れたり。偖惡魔十二の中のイスカリオテと稱ふるユダに憑きぬ。ユダ橄欖の林を歩める時、惡魔彼に云ひけるは、「イエスを祭司の長たちに賣せ。然すれば三十枚の銀子を得べし。」されどユダ耳を蔽ひ、林の外に走り去れり。後又イエルサレムの町をさまよへる時、惡魔彼に云ひけるは、「イエスを祭司の長たちに賣せ。然らずば爾もイエスと共に、必十字架に釘けらるべし」されどユダ耳を蔽ひ、イエスのもとに走り去れり。イエス彼に云ひけるは、「ユダよ。我誠に爾を知る。爾は荒野の獅子よりも強し。但小羊の心を忘るる勿れ。」ユダ、イエスの言葉を悦べり。されどその意味を覺らざりき。

逾越の祭來りし時、イエス弟子と共に食に就けり。惡魔三度ユダに云ひけるは、「イエスを祭司の長たちに賣せ。然すれば爾の名、イエスの名と共に傳はらん。イエスの名太陽よりも光あれば、爾の名黑暗よりも恐怖あらん。爾は天國の奴隸たらざるも、必地獄の王たるべし。バビロンの淫婦は爾の妃、七頭の毒龍は爾の馬、火と煙と硫黄とは汝が黑檀の寶座の前に、不斷の香煙を上らしめん。」ユダこの聲を聞きし時、目のあたり地獄の莊嚴を見たり。イエス忽ちユダに一撮の食物を與へ、靜かに彼に云ひけるは、「爾が爲さんとする事は速に爲せ。」ユダ一撮の食物を受け、直ちに出でたり。時既に夜なりき。ユダ祭司の長カヤパの前に至り、イエスを彼に賣さんと云へり。カヤパ駭きて云ひけるは、「爾は何者なるか、イエスの弟子か、はたイエスの師か。」そはユダの姿、額は嵐の空よりも黑み、眼は焔よりも輝きつつ、王者の如く振舞ひしが故なり。

（「點心」の「LOS CAPRICHOS」より）

父

自分が中學の四年生だつた時の話である。

その年の秋、日光から足尾へかけて、三泊の修學旅行があつた。「午前六時三十分上野停車場前集合、同五十分發車……」かういふ箇條が、學校から渡す謄寫版の刷物に書いてある。

當日になると自分は、碌に朝飯も食はずに家をとび出した。電車でゆけば停車場まで二十分とはかからない。――さう思ひながらも、何となく心がせく。停留場の赤い柱の前に立つて、電車を待つてゐるうちも、氣が氣でない。

生憎、空は曇つてゐる。方々の工場で鳴らす汽笛の音が、鼠色の水蒸氣をふるはせたら、それが皆霧雨になつて、降つて來はしないかと思はれる。その退屈な空の下で、高架鐵道を汽車が通る。被服廠へ通ふ荷馬車が通る。店の戸が一つづつ開く。自分のゐる停留場にも、もう二三人、人が立つた。それが皆、眠の足りなさうな顔を、陰氣らしく片づけてゐる。寒い。――そこへ割引の電車が來た。

こみ合つてゐる中を、やつと吊皮にぶらさがると、誰か後から、自分の肩をたたく者がある。自分は慌ててふり向いた。

「お早う。」

見ると、能勢五十雄であつた。やはり、自分のやうに、紺のヘルの制服を着て、外套を卷いて左の肩からかけて、麻のゲエトルをはいて、腰に辨當の包やら水筒やらをぶらさげてゐる。

能勢は、自分と同じ小學校を出て、同じ中學校へはひつた男である。これと云つて、得意な學科もなかつたが、その代りに、これと云つて、不得意なものもない。その癖、ちよいとした事には、器用な性質で、流行唄と云ふやうなものは、一度聞くと、すぐに節を覺えてしまふ。さうして、修學旅行で宿へとまる夜などは、それを得意になつて披露する。詩吟、薩摩琵琶、落語、講談、聲色、手品、何でも出來た。その上、身ぶりとか、顔つきとかで、人を笑はせるのに獨特な妙を得てゐる。從つて級の氣うけも、教員間の評判も、悪くはない。尤も自分とは、互に往來はしてゐながら、さして親しいと云ふ間柄でもなかつた。

「早いね、君も。」

「僕は何時も早いさ。」能勢はかう云ひながら、ちよいと小鼻をうごめかした。

「でもこの間は遲刻したぜ。」

「この間?」

「國語の時間にさ。」

「ああ、馬場に叱られた時か。あいつは弘法にも筆のあやまりさ。」能勢は、教員の名前をよびすてにする癖があつた。

「あの先生には、僕も叱られた。」

「遲刻で?」

「いいえ、本を忘れて。」

「仁丹は、いやにやかましいからな。」「仁丹」と云ふのは、能勢が馬場教諭につけた渾名である。――こんな話をしてゐる中に、停車場前へ來た。

乘つた時と同じやうに、こみあつてゐる中をやつと電車から下りて停車場へはいると、時刻が早いので、まだ級の連中は二三人しか集つてゐない。互に「お早う」の挨拶を交換する。先を爭つて、待合室の木のベンチに、腰をかける。それから、何時ものやうに、勢よく饒舌り出した。皆僕と云ふ代りに、「己」と云ふの

を得意にする年輩である　その自ら「己」と称する連中の口から、旅行の豫想、生徒同志の品騭、教員の悪評などが盛に出た。

「泉はちやくいぜ、あいつは教員のチョイスを持つてゐるもんだから、一度も下讀みなんぞした事はないんだとさ。」

「平野はもつとちやくいぜ。あいつは試驗の時と云ふと、歴史の年代をみんな爪へ書いて行くんだつて。」

「さう云へば先生だつてちやくいからな。」

「ちやくいとも。本間なんぞは receive の i と e と、どつちが先へ來るんだか、それさへ碌に知らない癖に、教師用でいい加減にごま化しごま化し、教へてるぢやあないか。」

どこまでも、ちやくいで持ちきるばかりで一つも、碌な事は出ない。すると、その中に能勢が、自分の隣のベンチに腰をかけて、新聞を讀んでゐた、職人らしい男の靴を、パッキンレイだと批評した。これは當時、マッキンレイと云ふ新形の靴が流行つたのに、この男の靴は、一體に光澤を失つて、その上先の方がぱつくり口を開いてゐたからである。

「パッキンレイはよかつた。」かう云つて、皆一時に、失笑した。

それから、自分たちは、いい氣になつて、この待合室に出入するいろいろな人間を物色しはじめた。さうして一々、それに、東京の中學生でなければ云へないやうな、生意氣な悪口を加へ出した。さう云ふ事にかけて、ひけをとるやうな、おとなしい生徒は、自分たちの中に一人もゐない。中でも能勢の形容が、一番辛辣で、且一番諧謔に富んでゐた。

「能勢、能勢、あのお上さんを見ろよ。」

「あいつは河豚が孕んだやうな顔をしてゐるぜ。」

「こつちの赤帽も、何かに似てゐるぜ。ねえ能勢。」

「あいつはカロロ五世さ。」

しまひには、能勢が一人で、悪口を云ふ役目をひきうけるやうな事になつた。

すると、その時、自分たちの一人は、時間表の前に立つて、細い數字をしらべてゐる妙な男を發見した。その男は羊羹色の背廣を着て、體操に使ふ球竿のやうな細い脚を、鼠の粗い縞のズボンに通してゐる。縁の廣い昔風の黑い中折の下から、半白の毛がはみ出してゐる所を見ると、もう可成な年配らしい。その癖頸のまはりには、白と黑と格子縞の派手なハンケチをまきつけて、鞭かと思ふやうな、寒竹の長い杖をちよいと腋の下へはさんでゐる。服装と云ひ、態度と云ひ、すべてが、ポンチの插畫を切拔いて、そのままそれを、この停車場の人ごみの中へ、立たせたとしか思はれない。――自分たちの一人は、又新しい惡口の材料が出來たのをよろこぶやうに、肩でをかしさうに笑ひながら、能勢の手をひつぱつて、

「おい、あいつはどうだい。」とかう云つた。

そこで、自分たちは、皆その妙な男を見た。男は少し反り身になりながら、チョッキのポケットから、紫の打紐のついた大きなニッケルの懷中時計を出して、丹念にそれと時間表の數字とを見くらべてゐる。横顔だけ見て、自分はすぐに、それが能勢の父親だと云ふ事を知つた。

しかし、そこにゐた自分たちの連中には、一人もそれを知つてゐる者がない。だから皆、能勢の口から、この滑稽な人物を、適當に形容する語を聞かうとして、聞いた後の笑ひを用意しながら、面白さうに能勢の顔をながめてゐた。中學の四年生には、その時の能勢の心もちを推測する明がない。自分は危く、「あれは能勢の父だぜ。」と云はうとした。

するとその時、
「あいつかい。あいつはロンドン乞食さ。」
かう云ふ能勢の聲がした。皆が一時にふき出したのは、云ふ迄もない。中にはわざわざ反り身になつて、懐中時計を出しながら、能勢の父親の姿を眞似て見る者さへある。自分は、思はず下を向いた。その時の能勢の顔を見るだけの勇氣が、自分には缺けてゐたからである。
「そいつは適評だな。」
「見ろ。見ろ。あの帽子を。」
「日かげ町か。」
「日かげ町にだつてあるものか。」
「ぢやあ博物館だ。」
皆が又、面白さうに笑つた。
曇天の停車場は、日の暮のやうにうす暗い。自分は、そのうす暗い中で、そつとそのロンドン乞食の方をすかして見た。
すると、何時の間にか、うす日がさし始めたと見えて、幅の狭い光の帶が高い天井の明り取りから、茫と斜にさしてゐる。能勢の父親は、丁度その光の帶の中にゐた。――周圍では、すべての物が動いてゐる。眼のとどく所でも、とどかない所でも動いてゐる。さうして又その運動が、聲とも音ともつかないものになつて、この大きな建物の中を霧のやうに蔽つてゐる。しかし能勢の父親だけは動かない。この現代と縁のない洋服を着た、この現代と縁のない老人は、めまぐるしく動く人間の洪水の中に、これもやはり現代を超越した、黒の中折をあみだにかぶつて、紫の打紐のついた懐中時計を右の掌の上にのせながら、依然としてポンチの如く時間表の前に佇立してゐるのである……

あとで、それとなく聞くと、その頃大學の薬局に通つてゐた能勢の父親は、能勢が自分たちと一しよに修學旅行に行く所を、出勤の途すがら見ようと思つて、自分の子には知らせずに、わざわざ停車場へ來たのださうである。
能勢五十雄は、中學を卒業すると間もなく、肺結核に罹つて、物故した。その追悼式を、中學の圖書室で擧げた時、制帽をかぶつた能勢の寫眞の前で悼辭を讀んだのは、自分である。「君、父母に孝に、――自分はその悼辭の中に、かう云ふ句を入れた。

（大正五年三月作）

魔女

魔女は箒に跨りながら、片片と空を飛んで行つた。
それを見たものが三人あつた。
一人は年をとつた月だつた。これは又かと云ふやうに、默默と塔の上にかかつてゐた。
もう一人は風見の鷄だつた。これはびつくりしたやうに、ぎいきい樓の上に啼きまはつた。
最後の一人は大學教授 Lunderdeitz 先生だつた。これはその實熱心に、魔女が空を飛んで行つたのは、箒が魔女を飛ばせたのか、魔女が箒を飛ばせたものか、どちらかと云ふ事を研究し出した。
何でも先生は今日でも、やはり同じ大問題を研究し續けてゐるさうである。
魔女は箒に跨りながら、昨夜も大きな蝙蝠のやうに、片片と空を飛んで行つた。

（「ゴヤ」の「LOS CAPRICHOS」より）

運

目のあらい簾が、入口にぶらさげてあるので、往來の容子は仕事場にゐても、よく見えた。清水へ通ふ往來は、さつきから、人通りが絶えない。金鼓をかけた法師が通る。壺裝束をした女が通る。その後からは、めづらしく、黄牛に曳かせた網代車が通つた。それが皆、疎な簾の目を、右からも左からも、來たかと思ふと、通りぬけてしまふ。その中で變らないのは、午後の日が暖に春を炙つてゐる、狹い往來の土の色ばかりである。

その人の往來を、仕事場の中から、何と云ふ事もなく眺めてゐた、一人の青侍が、この時、ふと思ひついたやうに、主の陶器師へ聲をかけた。

「不相變、觀音樣へ參詣する人が多いやうだね。」

「左樣でございます。」

陶器師は、仕事に氣をとられてゐたせゐか、少し迷惑さうに、かう答へた。が、これは眼の小さい、鼻の上を向いた、何處かへうきんな所のある老人で、顏つきにも容子にも、惡氣らしいものは、微塵もない。著てゐるのは、麻の帷子であらう。それに萎えた揉烏帽子をかけたのが、此頃評判の高い鳥羽僧正の繪卷の中の人物を見るやうである。

「私も一つ、日參でもして見ようか。かう、うだつが上らなくちや、やりきれない。」

「御冗談で。」

「なに、これで善い運が授かるとすれば、私だつて、信心をするよ。日參をしたつて、參籠をしたつて、さうとすれば、安いものだからね。つまり、神佛を相手に、一商賣をするやうなもんさ。」

青侍は、年相應な上調子なもの言ひをして、下唇を舐めながら、きよろきよろ、仕事場の中を見廻した。——竹藪を後にして建てた、藁葺きのあばら家だから、中は鼻がつかへる程狹い。が、簾の外の往來が、目まぐるしく動くのに引換へて、此處では、甕でも瓶子でも、赭ちやけた土器の肌をのどかな春風に吹かせながら、百年も昔からさうしてゐたやうに、ひつそりかんと靜まつてゐる。どうやらこの家の棟ばかりは、燕さへも巢を食はないらしい。

翁が返事をしないので、青侍は又語を繼いだ。

「お爺さんなんぞも、この年までには、隨分いろんな事を見たり聞いたりしたらうね。どうだい。觀音樣は、ほんたうに運を授けて下さるものかね。」

「左樣でございます。昔は折節、そんな事もあつたやうに聞いて居りますが。」

「どんな事があつたね。」

「どんな事と云つて、さう一口には申せませんがな。——しかし、貴方がたは、そんな話をお聞きなすつても、格別面白くもございますまい。」

「可哀さうに、これでも少しは信心氣のある男なんだぜ。愈運が授かるとなれば、明日にも——」

「信心氣でございますかな。商賣氣でございますかな。」

翁は、眼に皺をよせて笑つた。捏ねてゐた土が、壺の形になつたので、やつと氣が樂になつたと云ふ調子である。

「神佛の御考へなどと申すものは、貴方がた位の御年では、中中わからないものでございますよ。」

「それはわからなからうさ。わからないから、お爺さんに聞くんだあね。」

「いやさ、神佛が運をお授けになる、ならないと云ふ事ぢやございません。そのお授けになる運の善し惡しと云ふ事が。」

「だつて、授けて貰へばわかるぢやないか。善い運だとか、惡い運だとか。」

「それが、どうも貴方がたには、ちとおわかりになり兼ねませうて。」

「私には運の善し惡しより、さう云ふ理窟の方が、わからなさうだね。」

日が傾き出したのであらう。さつきから見ると、往來へ落ちる物の影が、心もち長くなつた。その長い影をひきながら、頭に桶をのせた物賣りの女が二人、簾の目を横に、通りすぎる。一人は手に宿への土産らしい櫻の枝を持つてゐた。

「今、西の市で、績麻の店を出してゐる女なぞもさうでございますが。」

「だから、私はさつきから、お爺さんの話を聞きたがつてゐるぢやないか。」

二人は、暫くの間、默つた。青侍は、爪で頤のひげを拔きながら、ぼんやり往來を眺めてゐる。貝殼のやうに白く光るのは、大方さつきの櫻の花がこぼれたのであらう。

「話さないかね、お爺さん。」

やがて、眠さうな聲で、青侍が云つた。

「では、御免を蒙つて、一つ御話し申しませうか。又、何時もの昔話でございますが。」

かう前置きをして、陶器師の翁は、徐に話し出した。日の長い短いも知らない人でなくては、話せないやうな、悠長な口ぶりで話し出したのである。

「もう彼是三四十年前になりませう。あの女がまだ娘の時分に、この清水の觀音樣へ、願をかけた事がございました。どうぞ一生安樂に暮せますやうにと申しましてな。何しろ、その時分は、あの女もたつた一人のおふくろに死別れた後で、それこそ日日の暮しにも差支へるやうな身の上でございましたから、さう云ふ願をかけたのも、滿更無理はございません。

「死んだおふくろと申すのは、もと白朱社の巫子で、一しきりは大そう流行つたものでございますが、狐を使ふと云ふ噂を立てられてからは、めつきり人も來なくなつてしまつたやうでございます。これが又、白あばたの、年に似合はず水々しい、大がらな婆さんでございましてな、何しろ、あの容子ぢや、狐どころか男でも……」

「おふくろの話よりは、その娘の話の方を伺ひたいね。」

「いや、これは御挨拶で。――、そのおふくろが死んだので、後は娘一人の痩せ腕でございますから、いくらかせいでも、暮の立てられやうがございませぬ。そこで、あの容貌のよい、利發者の娘が、お籠りをするのにも、襤褸故に、あたりへ氣がひけると云ふ始末でございました。」

「へえ、そんなに好い女だつたかい。」

「左樣でございます。氣だてと云ひ、顏と云ひ、手前の欲目では、先、どこへ出しても、恥しくないと思ひましたがな。」

「惜しい事に、昔さね。」

青侍は、色のさめた藍の水干の袖口を、ちよいとひつぱりながら、こんな事を云ふ。翁は、笑聲を鼻から拔いて、又ゆつくり話しつづけた。後の竹藪では、頻に鶯が啼いてゐる。

「それが、三七日の間、御籠りをして、今日が滿願と云ふ夜に、ふと夢を見ました。何でも、

同じ御堂に詣つてゐた連中の中に、なむし坊主が一人ゐて、そいつが何か陀羅尼のやうなものを、くどくど誦してゐたさうでございます。大方それが、氣になつたせゐでございませう。うとうと眠氣がさして來ても、その聲ばかりは、どうしても耳をはなれません。とんと、縁の下で蚯蚓でも鳴いてゐるやうな心もちで――すると、その聲が、何時の間にやら人間の語になつて、『ここから歸る路で、そなたに云ひよる男がある。その男の云ふ事を聞くがよい。』と、かう聞えると申すのでございますな。

「はつと思つて、眼がさめると、坊主はやつぱり陀羅尼三昧でございます。が、何と云つてゐるのだか、いくら耳を澄ましても、わかりません。その時、何氣なく、ひよいと向うを見ると、常夜燈のぼんやりした明りで、觀音樣の御顔が見えました。日頃拜みなれた、端嚴微妙の御顔でございますが、それを見ると、不思議にも又耳もとで、『その男の云ふ事を聞くがよい。』と、誰だか云ふやうな氣がしたさうでございます。そこで、娘はそれを觀音樣の御告だと、一圖に思ひこんでしまひましたげな。」

「はてね。」

「さて、夜がふけてから、御寺を出て、だらだら下りの坂路を、五條へくだらうとしますと、案の定後から、男が一人抱きつきました。丁度、春さきの暖い晩でございましたが、生憎の暗で、相手の男の顔も見えなければ、著てゐる物などは、猶の事わかりません。唯、ふり離さうとする拍子に、手が向うの口髭にさはりました。いやはや、とんだ時が、満願の夜に當つたものでございます。

「その上、相手は、名を訊かれても、名を申しませぬ。所を訊かれても、所を申しませぬ。唯、云ふ事を聞けと云ふばかりで、坂下の路を北へ北へ、抱きすくめたまま、引きずるやうにして、つれて行きます。泣かうにも、喚かうにも、まるで人通りのない時分なのだから、仕方がございませぬ。」

「ははあ、それから。」

「それから、とうとう八坂寺の塔の中へ、つれこまれて、その晩は其處ですごしたさうでございます。――いや、その邊の事なら、何も年よりの手前などが、わざわざ申し上げるまでもございますまい。」

翁は、又眦に皺をよせて、笑つた。往來の影は、愈長くなつたらしい。吹くともなく渡る風のせゐであらう。其處此處に散つてゐる櫻の花も、何時の間にか、こつちへ吹きよせられて、今では、雨落ちの石の間に、點々と白い色をこぼしてゐる。

「冗談云つちやいけない。」

青侍は、思ひ出したやうに、頤のひげを拔き拔き、かう云つた。

「それで、もうおしまひかい。」

「これだけなら、何もわざわざお話し申すがものはございませぬ。」翁は、やはり壺をいぢりながら、「夜があけると、その男が、かうなるのも大方宿世の縁だらうから、とてもの事に夫婦になつてくれと申したさうでございます。」

「成程。」

「夢の御告げでもないなら兎も角、娘は、觀音樣の思召し通りになるのだと思つたものでございますから、とうとう首を竪にふりました。さて形ばかりの盃事をすませると、先、當座の用にと云つて、塔の奧から出して來てくれたのが綾を十疋に絹を十疋でございます――この眞似ばかりは、いくら貴方にもちとむづかしいかも存じませんな。」

青侍は、にやにや笑ふばかりで、返事をしない。鶯も、もう啼かなくなつた。

「やがて、男は、日の暮に歸ると云つて、娘

[illegible]人を[illegible]時に、慌しく何處か出て參りました。その後の淋しさは、又、倍でございます。いくら利發者でも、かうなると、流石に心細くなるのでございませう。そこで、心晴らしに、何氣なく塔の奥へ行つて見ると、どうでございませう、綾や絹は愚な事、珠玉とか砂金とか云ふ金目の物が、皮匣に幾つとなく、並べてあると云ふぢやございませぬか。これにはあゝ云ふ氣丈な娘でも、思はず肚胸をついたさうでございます。

一物にもよりますが、こんな財物を持つてゐるからは、もう疑はございませぬ。引剝でなければ、物盗りでございます。――さう思ふと、今までは唯淋しいだけだつたのが、急に、怖いのも手傳つて、何だか片時も此處にかうしては、ゐられないやうな氣になりました。何さま、惡く放免の手にでもかからうものなら、どんな目に遇ふかも知れませぬ。

――そこで、逃げ場をさがす氣で、急いで戸口の方へ引返さうと致しますと、誰だか、皮匣の後から、しはがれた聲で呼びとめました。何しろ、人はゐないとばかり思つてゐた所でございますから、驚いたの驚かないのぢやございませぬ。見ると、人間とも海鼠ともつかないやうなものが、砂金の袋を積んだ中に、圓くなつて、坐つて居ります。――これが目くされの、皺だらけの、腰のまがつた、背の低い、六十ばかりの尼法師でございました。しかも娘の思惑を知つてか知らないでか、膝で前へのり出しながら、見かけによらない猫撫聲で、初對面の挨拶をするのでございます

「こつちは、それ所の騒ぎではないのでございますが、何しろ逃げようと云ふ巧みをけどられなどしては大變だと思つたので、しぶしぶ皮匣の上に肘をつきながら心にもない世間話をはじめました。どうも話の容子では、この婆さんが、今まであの男の炊女か何かつとめてゐたらしいのでございます。が、男の商賣の事になると、妙に一口も話しませぬ。それさへ、娘の方では、氣になるのに、その尼が又、少し耳が遠いと來てゐるものでございますから、一つ話を何度となく、云ひ直したり聞き直したりするので、こつちはもう泣き出したい程、氣がじれます。――

「そんな事が、彼是午までつづいたでございませう。すると、やれ清水の櫻が咲いたの、やれ五條の橋普請が出來たのと云つてゐる中に、幸、年の加減か、この婆さんが、そろそろ居睡りをはじめました。一つは娘の返答が、はかばかしくなかつたせゐもあるのでございませう。そこで、娘は、折を計つて、そつと入口まで這つて行つて、戸を細目にあけて見ました。外にも、いゝ案配に人のけはひはございませぬ。――

「此處でそのまま、逃げ出してしまへば、何事もなかつたのでございますが、ふと今朝貰つた綾と絹との事を思ひ出したので、それを取りに、又そつと皮匣の所まで歸つて參りました。すると、どうした拍子か、砂金の袋にけつまづいて、思はず手が婆さんの膝にさはつたから、たまりませぬ。尼の奴め驚いて眼をさますと、暫は唯、あつけにとられて、ゐたやうでございますが、急に氣ちがひのやうになつて、娘の足にかじりつきました。さうして、半分泣き聲で、早口に何かしやべり立てます。切れ切れに、語が耳へはひる所では、萬一娘に逃げられたら、自分がどんなひどい目に遇ふかも知れないと、かう云つてゐるらしいのでございます。が、こつちも此處にゐては命にかかはると云ふ時でございますから、元よりそんな事に耳をかす譯がございませぬ。そこで、とうとう、女同志のつかみ合がはじまりました。

一打ち擲る、砂金の嚢をなげつける、――梁に巣を食つた鼠も、落ちさうな騒ぎでございます。それに、かうなると、死物狂ひだけに、婆さんの力も、莫迦には出來ません。が、そこは年のちがひでございませう。間もなく、娘が、綾と絹とを小脇にかかへて、息を切らしながら、塔の戸口をこつそり、忍び出た時には、尼はもう、口もきかないやうになつて居りました。これは、後で聞いたのでございますが、死骸は、鼻から血を少し出して、頭から砂金を浴びせられたまま、薄暗い隅の方に、仰向けになつて、臥てゐたさうでございます。

「こつちは八坂寺を出ると、町家の多い所は、流石に氣がさしたと見えて、五條京極邊の知人の家をたづねました。この知人と云ふのも、その日暮しの貧乏人なのでございますが、絹の一疋もやつたからでございませう、湯を沸かすやら、粥を煮るやら、いろいろ經營してくれたさうでございます。そこで、娘も漸く、ほつと一息つく事が出來ました。」

「私も、やつと安心したよ。」

青侍は、帶にはさんでゐた扇をぬいて、簾の外の夕日を眺めながら、それを器用に、ぱちつかせた。その夕日の中を、今しがた白丁が五六人、騒騒しく笑ひ興じながら、通りすぎたが、影はまだ往來に殘つてゐる。……

「ぢやそれで愈けりがついたと云ふ譯だね。」

「所が」翁は大仰に首を振つて、「その知人の家に居りますと、急に往來の人通りがはげしくなつて、あれを見い、あれを見いと、罵り合ふ聲が聞えます。何しろ、後暗い體ですから、娘は又、胸を痛めました。あの物盗りが仕返しにでも來たものか、さもなければ、檢非違使の追手がかかりでもしたものか、――さう思ふと、おちおち、粥を啜つても居られません。」

「成程。」

「そこで、戸の隙間から、そつと外を覗いて見ると、見物の男女の中を、放免が五六人、それに看督長が一人ついて、物物しげに通りました。それからその連中にかこまれて、繩にかかつた男が一人、所所裂けた水干を著て烏帽子もかぶらず、曳かれて參ります。どうも物盗りを捕へて、これからその住家へ、實錄をして行く所らしいのでございますな。」

「しかも、その物盗りと云ふのが、昨夜、五條の坂で云ひよつた、あの男だらうぢやございませぬか。娘はそれを見ると、何故か、涙がこみ上げて來たさうでございます。これは、當人が、手前に話しました――何も、その男に惚れてゐたの、どうしたのと云ふ譯ぢやない。が、その繩目をうけた姿を見たら、急に自分で、自分がいぢらしくなつて、思はず泣いてしまつたと、まあ云ふのでございますがな。まことにその話を聞いた時には、手前もつくづくさう思ひましたよ――」

「何とね。」

「觀音樣へ願をかけるのも考へ物だとな。」

「だが、お爺さん。その女は、それから、どうにかやつて行けるやうになつたのだらう。」

「どうにか所か、今では何不自由ない身の上になつて居ります。その綾や絹を賣つたのを本に致しましてな。觀音樣も、これだけは、御約束をおちがへになりません。」

「それなら、その位な目に遇つても、結構ぢやないか。」

外の日の光は、何時の間にか、黄いろく夕づいた。その中を、風だつた竹藪の音が、かすかながら、其處此處から聞えて來る。往來の人通りも、暫はとだえたらしい。

「人を殺したつて、物盗りの女房になつたつて、する氣でしたんでなければ仕方がないやね。」

青侍は、扇を帶へさしながら、立上つた。

翁も、もう提の水で、泥にまみれた手を洗つてゐる——二人とも、どうやら、暮れてゆく春の日と、相手の心もちとに、物足りない何ものかを、感じてでもゐるやうな容子である。

「兎に角、その女は仕合せ者だ。」

「御冗談で。」

「まつたくさ。お爺さんも、さう思ふだらう。」

「手前でございますか。手前なら、さう云ふ運はまつぴらでございますな。」

「へええ、さうかね。私なら、二つ返事で、授けて頂くがね。」

「ぢや觀音樣を、御信心なさいまし。」

「さうさう、明日から私も、お籠でもしようよ。」

（大正五年十二月作）

疲勞

雨を孕んだ風の中に、龍騎兵の士官を乗せた、アラビア種の白馬が一頭、喘ぎ喘ぎ走つて行つた。と思ふと銃聲が五六發、續けさまに街道の寂寞を破つた。その時白楊の並木の根がたに、尿をしやんだ一頭の犬は、これも其處へ來かかつた、仲間の尨犬に話しかけた。

「どうだい、あの白馬の疲れやうは？」

「莫迦莫迦しいなあ。馬ばかりが獸ぢやあるまいし、——」

「さうとも、僕等に乗つてくれれば、地球の極へも飛んで行くのだが、——」

二匹の犬はかう云ふが早いか、龍騎兵の士官でも乗せてゐるやうに、昂然と街道を走つて行つた。

Don Juan aux enfers

ドン・ジュアンは舟の中に、薄暗い河を眺めてゐる。時時古い舟べりを打つては、蒼白い火花を迸らせる、泊夫藍色の浪の高さ。その舟の艫には嚴のやうに、默默と今日も櫂を取つた、おお、お前！　寂しいシャアロン！

或靈は遠い浪の間に、高高と兩手をさし上げながら、舟中の客を呪つてゐる。又或靈は口惜しさうに、舟べりを煙らせた水沫の中から、ぢつと彼の顏を見上げてゐる。見よ！　あちらの舳に縋つた、或靈の腕の逞しさを！　と思ふとこちらの艫にも、シャアロンの櫂に拂はれたのか、眞逆樣に沈みかかつた、或靈の二つの足のうら！

妻を盜まれた夫の靈、娘を掠められた父親の靈、戀人を奪はれた若者の靈。——この河に浮き沈む無數の靈は、一人も殘らず男だつた。おお、わが詩人ボオドレエル！　君はこの地獄の河に、どの位夥しい男の靈が、泣き叫んでゐたかを知らなかつた！

しかしドン・ジュアンは冷然と、舟中に劍をついた儘、匂の好い葉卷へ火をつけた。さうして眉一つ動かさずに、大勢の靈を眺めやつた。何故彼はこの時でも、流俗のやうに恐れなかつたか？　それは一人も靈の中に彼程の美男がゐなかつたからである。

（「點心」の「LOS CAPRICHOS」より）

手巾

東京帝國法科大學教授、長谷川謹造先生は、ヴェランダの籐椅子に腰をかけて、ストリントベルクの作劇術を讀んでゐた。

先生の專門は、殖民政策の研究である。從つて讀者には、先生がドラマトゥルギイを讀んでゐると云ふ事が、聊、唐突の感を與へるかも知れない。が、學者としてのみならず、教育家としても、令名ある先生は、專門の研究に必要でない本でも、それが何等かの意味で、現代の學生の思想なり、感情なりに、關係のある物は、暇のある限り、必、一應は、眼を通して置く。現に、昨今は、先生の校長を兼ねてゐる或高等專門學校の生徒が、愛讀すると云ふ、唯、それだけの理由から、オスカア　ワイルドのデ・プロフンディスとか、インテンションズとか云ふ物さへ、一讀の勞を執つた。さう云ふ先生の事であるから、今讀んでゐる本が、歐洲近代の戯曲及俳優を論じた物であるにしても、別に不思議がる所はない。何故と云へば、先生の薫陶を受けてゐる學生の中には、イブセンとか、ストリントベルクとか、乃至メエテルリンクとかの評論を書く學生が、ゐるばかりでなく、進んでは、さう云ふ近代の戯曲家の跡を追つて、作劇を一生の仕事にしようとする、熱心家さへゐるからである。

先生は、警拔な一章を讀み了る毎に、黄いろい布表紙の本を、膝の上へ置いて、ヴェランダに吊してある岐阜提灯の方を、漫然と一瞥する。不思議な事に、さうするや否や、先生の思量は、ストリントベルクを離れてしまふ。その代り、一しよにその岐阜提灯を買ひに行つた、奧さんの事が、心に浮んで來る。先生は、留學中、米國で結婚をした。だから、奧さんは、勿論、亞米利加人である。が、日本と日本人とを愛する事は、先生と少しも變りがない。殊に、日本の巧緻なる美術工藝品は、少からず奧さんの氣に入つてゐる。從つて、岐阜提灯をヴェランダにぶら下げたのも、先生の好みと云ふよりは、寧、奧さんの日本趣味が、一端を現したものと見て、然る可きであらう。

先生は、本を下に置く度に、奧さんと岐阜提灯と、さうして、その提灯によつて代表される日本の文明とを思つた。先生の信ずる所によると、日本の文明は、最近五十年間に、物質的方面では、可成顯著な進歩を示してゐる。が、精神的には、殆、これと云ふ程の進歩も認める事が出來ない。否、寧、或意味では、墮落してゐる。では、現代に於ける思想家の急務として、この墮落を救濟する途を講ずるのには、どうしたらいいのであらうか。先生は、これを日本固有の武士道による外はないと論斷した。武士道なるものは、決して偏狹なる島國民の道德を以て、目せらるべきものでない。却てその中には、歐米各國の基督教的精神と、一致すべきものさへある。この武士道によつて、現代日本の思潮に歸趣を知らしめる事が出來るならば、それは、獨り日本の精神的文明に貢獻する所があるばかりではない。惹いては、歐米各國民と日本國民との相互の理解を容易にすると云ふ利益がある。或は國際間の平和も、これから促進されると云ふ事があるであらう。――先生は、日頃から、この意味に於て、自ら東西兩洋の間に横はる橋梁にならうと思つてゐる。かう云ふ先生にとつて、奧さんと岐阜提灯と、その提灯

によつて代表される日本の文明とか、或調和を保つて、意識に上るのは決して不快な事ではない。

所が、何度かこんな滿足を繰返してゐる中に、先生は、追追、讀んでゐる中でも、思量がストリントベルクとは、縁の遠くなるのに氣がついた。そこで、ちよいと、忌忌しさうに頭を振つて、それから又丹念に、眼を細い活字の上に曝しはじめた。すると、丁度、今讀みかけた所にこんな事が書いてある。

——俳優が最も普通なる感情に對して、或一つの恰好な表現法を發見し、この方法によつて成功を贏ち得る時、彼は時宜に適すると適せざるとを問はず、一面にはそれが樂である所から、又一面には、それによつて成功する所から、動もすればこの手段に赴かんとする。しかしそれが即ち型なのである。……

先生は、由來、藝術——殊に演劇とは、風馬牛の間柄である。日本の芝居でさへ、この年まで何度と數へる程しか、見た事がない。——嘗て或學生の書いた小説の中に、梅幸と云ふ名が、出て來た事がある。流石、博覽強記を以て自負してゐる先生にも、この名ばかりは何の事だかわからない。そこで序の時に、その學生を呼んで訊いて見た。

——君、梅幸と云ふのは何だね。

——梅幸——ですか。梅幸と云ひますのは、當時、丸の内の帝國劇場の座附俳優で、唯今、太閤記十段目の操を勤めて居る役者です。

小倉の袴をはいた學生は、慇懃に、かう答へた。——だから、先生は、ストリントベルクが、簡勁な筆で論評を加へて居る各種の演出法に對しても、先生自身の意見と云ふものは、全然ない。唯、それが、先生の留學中、西洋で見た芝居の或るものを聯想させる範圍で、幾分か興味を持つ事が出來るだけである。云はば、中學の英語の教師が、イディオムを探す爲に、バアナアド・ショウの脚本を讀むと、別に大した相違はない。が、興味は、曲りなりにも、興味である。

ヴェランダの天井からは、まだ灯をともさない岐阜提灯が下つてゐる。さうして、籐椅子の上では、長谷川謹造先生が、ストリントベルクのドラマトゥルギイを讀んでゐる。自分は、これだけの事を書きさへすれば、それが、如何に日の長い初夏の午後であるか、讀者は容易に想像のつく事だらうと思ふ。しかし、かう云つたからと云つて、決して先生が無聊に苦しんでゐると云ふ譯ではない。さう解釋しようとする人があるならば、それは自分の書く心もちを、わざとシニカルに曲解しようとするものである。

——現在、ストリントベルクさへ、先生は、中途でやめなければならなかつた。何故と云へば、突然、訪客を告げる小間使が、先生の清興を妨げてしまつたからである。世間は、いくら日が長くても、先生を忙殺しなければ、止まないらしい……。

先生は、本を置いて、今し方小間使が持つて來た、小さな名刺を一瞥した。象牙紙に、細く西山篤子と書いてある。どうも、今までに逢つた事のある人では、ないらしい。交際の廣い先生は、籐椅子を離れながら、それでも念の爲に、一通り、頭の中の人名簿を繰つて見た。が、やはり、それらしい顏も、記憶に浮んで來ない。そこで、栞代りに、名刺を本の間へはさんで、それを籐椅子の上に置くと、先生は、落着かない容子で、銘仙の單衣の前を直しながら、ちよいと又、鼻の先の岐阜提灯へ眼をやつた。誰も、さうであらうが、待たせてある客より、待たせて置く主人の方が、かう云ふ場合は猶、待遠しい。尤も、日頃から謹嚴な先生の事だから、これが、今日のやうな未知の女客に對してでな

くとも、さうだと云ふ事は、わざわざ斷る必要もないであらう。
　やがて、時刻をはかつて、先生は、應接室の扉をあけた。中へはひつて、おさへてゐたノッブを離すのと、椅子にかけてゐた四十恰好の婦人の立上つたのとが、殆、同時である。客は、先生の判別を超越した、上品な鐵御納戸の單衣を著て、それを黒の絽の羽織が、胸だけ細く剩した所に、帯止めの翡翠が、涼しい菱の形にうき上らせてゐる。髪が、丸髷に結つてある事は、かう云ふ些事に無頓着な先生にも、すぐわかつた。日本人に特有な、丸顔の、琥珀色の皮膚をした、賢母らしい婦人である。先生は、一瞥して、この客の顔を、どこかで見た事があるやうに思つた。
　――私が長谷川です。
　先生は、愛想よく、會釋した。かう云へば、逢つた事があるのなら、向うで云ひ出すだらうと思つたからである。
　――私は西山憲一郎の母でございます。
　婦人は、はつきりした聲で、かう名乘つて、それから、丁寧に、會釋を返した。
　西山憲一郎と云へば、先生も覺えてゐる。やはりイブセンやストリントベルクの評論を書く生徒の一人で、專門は確か獨法だつたかと思ふが、大學へはひつてからも、よく思想問題を掲げては、先生の許に出入した。それが、この春、腹膜炎に罹つて、大學病院へ入院したので、先生も序ながら、一二度見舞ひに行つてやつた事がある。この婦人の顔を、どこかで見た事があるやうに思つたのも、偶然ではない。あの眉の濃い、元氣のいい青年と、この婦人とは、日本の俗諺が、瓜二つと形容するやうに、驚く程、よく似てゐるのである。
　――はあ、西山君の……さうですか。
　先生は、獨りで頷きながら、小さなテエブルの向うにある椅子を指した。
　――どうか、あれへ。
　婦人は、一應、突然の訪問を謝してから、又、丁寧に禮をして、示された椅子に腰をかけた。その拍子に、袂から白いものを出したのは、手巾であらう。先生は、それを見ると、早速テエブルの上の朝鮮團扇をすすめながら、その向う側の椅子に、座をしめた。
　――結構なおすまひでございます。
　婦人は、稍、わざとらしく、室の中を見廻した。
　――いや、廣いばかりで、一向かまひません。
　かう云ふ挨拶に慣れた先生は、折から小間使の持つて來た冷茶を、客の前に直させながら、直に話頭を相手の方へ轉換した。
　――西山君は如何です。別段御容態に變りはありませんか。
　――はい。
　婦人は、つつましく兩手を膝の上に重ねながら、ちよいと語を切つて、それから、靜にかう云つた。やはり、落著いた、滑な調子で云つたのである。
　――實は、今日も倅の事で上つたのでございますが、あれもとうとう、いけませんでございました。在世中は、いろいろ先生にも御厄介になりまして……
　婦人が手にとらないのを遠慮だと解釋した先生は、この時丁度、紅茶茶碗を口へ持つて行かうとしてゐた。なまじひに、くどく、すすめるよりは、自分で啜つて見せる方がいいと思つたからである。所が、まだ茶碗が、柔な口髭にとどかない中に、婦人の語は、突然、先生の耳をおびやかした。茶を飲んだものだらうか、飲まないものだらうか。――かう云ふ思案が、青年の死とは、全く獨立して、一瞬の間、先生の心を煩はした。が、何時までも、持ち上げ

た茶碗を、片づけずに置く譯には行かない。そこで先生は思切つて、がぶりと半碗の茶を飲むと、心もち眉をひそめながら、むせるやうな聲で、「そりやあ」と云つた。

――……病院に居りました間も、よくあれが御噂なぞ致したものでございますから、御忙しからうとは存じましたが、お知らせかたがた、御禮を申上げようと思ひまして……

――いや、どうしまして。

先生は、茶碗を下へ置いて、その代りに靑い蠟を引いた團扇をとりあげながら、憮然として、かう云つた。

――とうとう、いけませんでしたかなあ。丁度、これからと云ふ年だつたのですが……私は又、病院の方へも御無沙汰してゐたものですから、もう大抵、よくなられた事だとばかり、思つてゐました。――すると、何時になりますかな、なくなられたのは。

――昨日が、丁度初七日でございます。

――やはり病院の方で……

――さやうでございます。

――いや、實際、意外でした。

――何しろ、手のつくせる丈は、つくした上なのでございますから、あきらめるより外は、ございませんが、それでも、あれまでに致して見ますと、何かにつけて、愚痴が出ていけませんものでございます。

こんな對話を交換してゐる間に、先生は、意外な事實に氣がついた。それは、この婦人の態度なり、擧措なりが、少しも自分の息子の死を、語つてゐるらしくないと云ふ事である。眼には、涙もたまつてゐない。聲も、平生の通りである。その上、口角には、微笑さへ浮んでゐる。これで、話を聞かずに、外貌だけ見てゐるとしたら、誰でも、この婦人は、家常茶飯事を語つてゐるとしか、思はなかつたのに相違ない。先生には、これが不思議であつた。

――昔、先生が、伯林に留學してゐた時分の事である。今のカイゼルのおとうさんに當る、ウイルヘルム第一世が、崩御された。先生は、この訃音を行きつけの珈琲店で耳にしたが、元より一通りの感銘しかうけやうはない。そこで、何時ものやうに、元氣のいい顏をして、杖を脇にはさみながら、下宿へ歸つて來ると、下宿の子供が二人、扉をあけるや否や、兩方から先生の頸に抱きついて、一度にわつと泣き出した。一人は茶色のジャケットを著た、十二になる女の子で、一人は、紺の短いズボンをはいた、九つになる男の子である。子供好きな先生は、二人の明い色をした髪の毛を撫でながら、しきりに、どうした。どうした。と云つて慰めた。が、子供は、中中泣きやまない。さうして、洟をすすり上げながら、こんな事を云ふ。

――おぢいさまの陛下が、おなくなりなすつたのですつて。

先生は、一國の元首の死が、子供にまで、これ程悲まれるのを、不思議に思つた。獨り皇室と人民との關係と云ふやうな問題を、考へさせられたばかりではない。西洋へ來て以來、何度も先生の視聽を動かした、西洋人の衝動的な感情の表白が、今更のやうに、日本人たり、武士道の信者たる先生を、驚かしたのである。その時の怪訝と同情とを一つにしたやうな心もちは、未に忘れようとしても、忘れる事が出來ない。――先生は、今も丁度、その位な程度で、逆に、この婦人の泣かないのを、不思議に思つてゐるのである。

が、第一の發見の後には、間もなく、第二の發見が次いで起つた。

丁度、主客の話題が、なくなつた靑年の追懷から、その日常生活のディテイルに及んで、

更に又、もとの追懷へ戻らうとしてゐた時である。何かの拍子で、朝鮮團扇が、先生の手をすべつて、ぱたりと寄木の床の上に落ちた。會話は無論寸刻の斷續を許さない程、切迫してゐる譯ではない。そこで、先生は、半身を椅子から前へのり出しながら、下を向いて、床の方へ手をのばした。團扇は、小さなテエブルの下に――上靴にかくれた婦人の白足袋の側に落ちてゐる。

その時、先生の眼には、偶然、婦人の膝が見えた。膝の上には、手巾を持つた手が、のつてゐる。勿論これだけでは、發見でも何でもない。が、同時に、先生は、婦人の手が、はげしく、ふるへてゐるのに氣がついた。ふるへながら、それが感情の激動を強ひて抑へようとするせゐか、膝の上の手巾を、兩手で裂かないばかりに緊く、握つてゐるのに氣がついた。さうして、最後に、皺くちやになつた絹の手巾が、しなやかな指の間で、さながら微風にでもふかれてゐるやうに、繡のある縁を動かしてゐるのに氣がついた。――婦人は、顏でこそ笑つてゐたが、實はさつきから、全身で泣いてゐたのである。

團扇を拾つて、顏をあげた時に、先生の顏には、今までにない表情があつた。見てはならないものを見たと云ふ敬虔な心もちと、さう云ふ心もちの意識から來る或滿足とが、多少の芝居氣で、誇張されたやうな、甚、複雜な表情である。

――いや、御心痛は、私のやうな子供のない者にも、よくわかります。

先生は、眩しいものでも見るやうに、稍、大仰に、頸を反らせながら、低い、感情の籠つた聲でかう云つた。

難有うございます。が、今更、何と申しましても、かへらない事でございますから。……

婦人は、心もち頭を下げた。晴々した顏には、依然として、ゆたかな微笑が、たたへてゐる。――

＊　＊　＊　＊

それから、二時間の後である。先生は、湯にはひつて、晩飯をすませて、食後の櫻實をつまんで、それから又、樂々と、ヴェランダの籐椅子に腰を下した。

長い夏の夕暮は、何時までも薄明りをただよはせて、硝子戸をあけはなした廣いヴェランダは、まだ容易に、暮れさうなけはひもない。先生は、そのかすかな光の中で、さつきから、左の膝を右の膝の上へのせて、頭を籐椅子の背にもたせながら、ぼんやり岐阜提灯の赤い房を眺めてゐる。例のストリントベルクも、手にはとつて見たものの、まだ一頁も讀まないらしい。それも、その筈である。――先生の頭の中は、西山篤子夫人のけなげな振舞で、未だに一ぱいになつてゐた。

先生は、飯を食ひながら、奥さんに、その一部始終を、話して聞かせた。さうして、それを、日本の女の武士道だと賞讚した。日本と日本人とを愛する奥さんが、この話を聞いて、同情しない筈はない。先生は、奥さんに熱心な聽き手を見出した事を、滿足に思つた。奥さんと、さつきの婦人と、それから岐阜提灯と――今では、この三つが、或倫理的な背景を持つて、先生の意識に浮んで來る。

先生はどの位、長い間、かう云ふ幸福な回想に耽つてゐたか、わからない。が、その中に、ふと或雜誌から、寄稿を依賴されてゐた事に氣がついた。その雜誌では「現代の青年に與ふる書」と云ふ題で、四方の大家に、一般道德上の意見を徵してゐたのである。今日の事件を材料にして、早速、所感を書いて送る事にしよう。――かう思つて、先生は、ちよいと頭を掻いた。

搔いた手は、本を持つてゐた手である。先生は、今まで閑却されてゐた本に、氣がついて、さつき入れて置いた名刺を印に、讀みかけた頁を、開いて見た。丁度、その時、小間使が來て、頭の上の岐阜提灯をともしたので、細い活字も、さほど讀むのに煩はしくない。先生は、別に讀む氣もなく、漫然と眼を頁の上に落した。ストリントベルクは云ふ。――

――私の若い時分、人はハイベルク夫人の、多分巴里から出たものらしい、手巾のことを話した。それは、顏は微笑してゐながら、手は手巾を二つに裂くと云ふ、二重の演技であつた。それを我等は今、臭味と名づける。……

先生は、本を膝の上に置いた。開いたまま置いたので、西山篤子と云ふ名刺が、まだ頁のまん中にのつてゐる。が、先生の心にあるものは、もうあの婦人ではない。さうかと云つて、奥さんでもなければ日本の文明でもない。それから平穏な調和を破らうとする、得體の知れない何物かである。ストリントベルクの指彈した演出法と、實踐道德上の問題とは、勿論ちがふ。が、今、讀んだ所からうけとつた暗示の中には、先生の、湯上りののんびりした心もちを、擾さうとする何物かがある。武士道と、さうしてその型と――

先生は、不快さうに二三度頭を振つて、それから又上眼を使ひながら、ぢつと、秋草を描いた岐阜提灯の明い灯を眺め始めた。……

(大正五年九月作)

新緑の庭

櫻　さつぱりした雨上りです。尤も花の萼は赤いなりについてゐますが。

椎　わたしもそろそろ芽をほごしませう。このちよいと鼠がかつた芽をね。

竹　わたしは未だに黄疸ですよ。………

芭蕉　おつと、この綠のランプの火屋を風に吹き折られる所だつた。

梅　何だか寒氣がすると思つたら、もう毛蟲がたかつてゐるんだよ。

八つ手　痒いなあ、この茶色の產毛のあるうちは。

百日紅　何、まだ早うござんさあね。わたしなどは御覽の通り枯枝ばかりさ。

霧島躑躅　常――常談云つちやいけない。わたしなどはあんまり忙しいもんだから、今年だけはつい何時にもない薄紫に咲いてしまつた。

覇王樹　どうでも勝手にするが好いや。おれの知つたことぢやなし。

石榴　ちよいと枝一面に蚕のたかつたやうでせう。

苔　起きないこと?

石　うんもう少し。

楓　「若楓茶色になるも一盛り」――ほんたうにひと盛りですね。もう今は世間並みに唯水水しい鶸色です。おや、障子に灯がともりました。　(「百艸」の「野人生計事」より)

尾形了齋覺え書

今般、當村内にて、切支丹宗門の宗徒共、邪法を行ひ、人目を惑はし候儀に付き、私見聞致し候次第を、逐一公儀へ申上ぐ可き旨、御沙汰相成り候段承知仕り候。

陳者、今年三月七日、當村百姓與作後家篠と申す者、私宅へ參り、同人娘里(當年九歲)大病に付き、檢脈致し吳れ候樣、懇懇賴入り候。

右篠と申候は、百姓惣兵衞の三女に有之、十年以前與作方へ緣付き、里を儲け候も、程なく夫に先立たれ、爾後再緣も仕らず、機織乃至賃仕事など致し候うて、その日を糊口し居る者に御座候。なれども、如何なる心得違ひにてか、與作病死の砌より、專ら切支丹宗門に歸依致し、隣村の伴天連ろどりげと申す者方へ、繁繁出入致し候間、當村内にても、右伴天連の妾と相成候由、取沙汰致す者なども有之、兎角の批評絕え申さず、依つて、父惣兵衞始め姉弟共一同、種種意見仕り候へども、泥烏須如來より難有きもの無しなど申し候うて、一向に合點仕らず、朝夕、唯、娘里と共にくるすと稱へ候小き磔柱形の守り本尊を禮拜致し、夫與作の墓參さへ怠り居る始末に付き、唯今にては、親類緣者とも義絕致し居り、追つては、村方にても、村拂ひに行ふ可き旨、寄り寄り評議致し居る由に御座候。

右樣の者に候へば、重重賴み入り候へども、私檢脈の儀は、叶ふまじき由申し聞け候所、一度は泣く泣く歸宅致し候へども、翌八日、再び私宅へ參り、「一生の恩に着申す可く候へば、何卒御檢脈下され度」など申し候うて、如何樣斷り候も、聞き入れ申さず、はては、私宅玄關に泣き伏し、「御醫者樣の御勤は、人の病を癒す事と存じ候。然るに、私娘大病の儀、御聞き棄てに遊ばさるる條、何とも心得難く候」など、怨じ候へば、私申し候は、「貴殿の申し條、萬萬道理には候へども、私檢脈致さざる儀も、全くその理無しとは申し難く候。何故と申し候はば、貴殿平生の行狀誠に面白からず。別して、私始め村方の者の神佛を拜み候を、惡魔外道に憑かれたる所行なりなど、屢誹謗致され候由、確と承り居り候。然るに、その正道潔白なる貴殿が、私共天魔に魅入られ候者に、唯今、娘御の大病を癒し吳れよと申され候は、何故に御座候や。右樣の儀は、日頃御信仰の泥烏須如來に御賴みあつて然る可く、もし、たつて私、檢脈を所望致され候上は、切支丹宗門御歸依の儀、以後緊く御無用たる可く候。此段御承引無之に於ては、假令、醫は仁術なりと申し候へども、神佛の冥罰も恐しく候へば、檢脈の儀平に御斷り申し候。」斯樣、說得致し候へば、篠も流石に、推してとも申し難く、其儘凄凄歸宅致し候。

翌九日は、ひき明け方より大雨にて、村内一時は人通も絕え候所、卯時ばかりに、篠、傘をも差さず、濡鼠の如くなりて、私宅へ參り、又又檢脈致し吳れ候樣、賴み入り候間、私申し候は、「長袖ながら、二言は御座無く候。然れば、娘御の命か、泥烏須如來か、何れか一つ御棄てなさるる分別肝要と存じ候。」斯樣申し聞け候へば、篠、此度は狂氣の如く相成り、私前に再三額づき又は手を合せて拜みなど致し候うて、「仰せ千萬御尤も

に候。なれども、切支丹宗門の教にて、一度ころび候上は、私魂魄とも、生生世世亡び申す可く、何卒私心根を不憫と思召され、此儀のみは、御容赦下され度候。など掻き口説き、泣き入り候。邪宗門の宗徒とは申しながら、信心に二無き體相見え多少とも、哀れには存じ候へども、私情を以て、公道を廢す可らざるの道理に候へば、如何樣申し候うても、ころび候上ならでは、檢脈叶ひ難き旨、申し張り候所、篠、何とも申し樣無き顏を致し、少時私顏を見つめ居り候が、突然涙をはらはらと落し、私足下に手をつき候うて、何やら蚊の樣なる聲にて申し候へども、折からの大雨の音にて、確と聞き取れ申さず、再三聞き直し候上、漸、然らば詮無く候へば、ころび候可き趣、判然致し候。なれどもころび候實證無之候へば、右證明を立つ可き旨、申し聞け候所、篠、無言の儘、懷中より、彼くるすを取り出し、玄關式臺上へ差し置き候うて、靜に三度まで踏み候。其節は、格別取亂したる氣色も無之、涙も既に乾きし如く思はれ候へども、足下のくるすを眺め候眼の中、何となく熱病人の樣にて、私方下男など、皆皆氣味惡しく思ひし由に御座候。

扨、私申し條も相立ち候へば、即刻下男に藥箱を擔はせ、大雨の中を、篠同道にて、同人宅へ參り候所、至極手狹なる部屋に、里獨り、南を枕にして打臥し居り候。尤も、身熱甚しく候へば、殆正氣無之き體に相見え、いたいけなる手にて、繰返し、繰返し、空に十字を描き候うては、頻にはれるやと申す語を、現の如く口走り、其都度嬉しげに、微笑み居り候。右、はれるやと申し候は、切支丹宗門の念佛にて、宗門佛に讃頌を捧ぐる儀に御座候由、篠、其節枕邊にて、泣く泣く申し聞かし候。依って、早速檢脈致し候へば、傷寒の病に紛れ無く、且は手遲れの儀も有之、今日中にも、存命覺束なかる可きやに見立て候間、詮方無く其旨、篠へ申し聞け候所、同人又又狂氣の如く相成り、「私ころび候仔細は、娘の命助け度き一念よりに御座候。然るを、落命致させては、其甲斐、萬が一にも無之かる可く候。何卒泥烏須如來に背き奉り候私心苦しさを御汲み分け下され、娘一命、如何にもして、御取り留め下され度候」と申し、私のみならず、私下男足下にも、手をつき候うて、頻に賴み入り候へども、人力には如何とも致し難き儀に候へば、心得違ひ致さざる樣、哭れ哭れも、申し含し、煎藥三貼差し置き候上、折からの雨止みを幸、立ち歸らんと致し候所、篠、私袴に縋りつき候うて離し申さず、何やら申し出でんとする氣色にて、唇を動かし候へども、一言も申し果てざる中に、見る見る面色變り、忽、其場に悶絶致し候。然れば、私大に仰天致し、早速下男共共、介抱仕り候所、漸く正氣つき候へども、最早立上り候氣力も無之、「所詮は、私心淺く候儀、娘一命、泥烏須如來、二つながら失ひしに極まり候」とて、さめざめと泣き沈み、種種申し慰め候へども、一向耳に掛くる體も御座無く、且は娘容態も無く相見え候間、止むを得ず再下男召し伴れ、匆匆歸宅仕り候。

然るに、其日未の下刻、名主塚越彌左衛門殿の母儀檢脈に參り候所、篠娘死去致し候由、竝に篠、悲歎のあまり、遂に發狂致し候由、彌左衛門殿より承り候。右に依れば、里落命致し候は、私檢脈後、一時の間と相見え、巳の上刻には、篠、既に亂心の體にて、娘死骸を抱き、高高に何やら、蠻音の經文讀誦致し居りし由に御座候。猶、此儀は、彌左衛門殿直に見受けられ候趣にて、村方爲右衛

門殿、藤吾殿、治兵衛殿等も、其場に居合されし由に候へば、千萬實事たるに紛れ無かる可く候。

追つて、翌十日は、朝來小雨有之候へども辰の下刻より春霽を催し、稍、晴れ間相きざし候折から――村郷士篠遠金十郎殿より、迎への馬差し遣けされ、檢脈致し呉れ候様、申し越され候間、早速馬上にて、私宅を立ち出で候所、篠宅の前へ來かかり候へば、村方の人人大勢佇み居り、伴天連よ、切支丹よなど、罵り交し候うて、馬を進め候事さへ叶ひ申さず、依つて、私、馬上より、家内の容子差し覗き候所、篠宅の戸を開け放ち、候中に、紅毛人一名、日本人三名、各法衣めきし黒衣を著し候者共、手に手に彼くるす、乃至は香爐様の物を差しかざし候うて、同音に、はれるや、はれるやと唱へ居り候。加之、右紅毛人の足下には、篠、髪を亂し候儘、娘里を搔き擁き候うて、失神致し候如く、蹲り居り候。別して、私眼を驚かし候は、里、兩手にてひしと、篠頸を搔き居り、母の名とはれるやと、代る代る、あどけ無き聲にて、唱へ居りし候事に御座候。尤も、遠眼の事とて、確とは辨へ難く候へども、里血色至極麗しき様に相見え、折折母の頸より手を離し候うて、香爐様の物より立ち昇り候煙を捉へんとする眞似など致し居り候。然れば、私、馬より下り、里蘇生致し候次第に付き、村方の人人に委細相尋ね候へば、右紅毛の伴天連ろどりげ儀、今朝、伊留滿共相從へ、隣村より篠宅へ參り、同人懺悔聞き屆け候上、一同宗門佛に加持致し、或は異香を焚き薫らし、或は神水を振り灑ぎなど致し候所、篠の亂心は自ら靜まり、里も程無く蘇生致し候由、皆皆恐しげに申し聞かせ候。古來、一旦落命致し候上、蘇生仕り候類、元より少からずとは申し候へども、多くは、酒毒に中り、乃至は瘴氣に觸れ候者のみに有之、里の如く、傷寒の病にて死去致し候者の、還魂仕り候例は、未嘗承り及ばざる所に御座候へば、切支丹宗門の邪法たる儀此一事にても分明致す可く、別して伴天連當村へ參り候節、春雷頻に震ひ候も、天の彼を惡ませ給ふ所かと推察仕り候。

猶、篠及娘里當日伴天連ろどりげ同道にて、隣村へ引移り候次第、並に慈元寺住職日寛殿計らひにて同人宅焼き棄て候次第は、既に名主塚越彌左衛門殿より、言上仕候へば、私見聞致し候仔細は、荒荒右にて相盡き申す可く候、但、萬一記し洩れも有之候節は、後日再應書面を以て言上仕る可く、先は私覺え書斯くの如くに御座候。以上。

甲午三月二十六日

伊豫國宇和郡――村

醫師　尾形了齋

（大正五年十二月作）

沙羅の花

沙羅木は植物園にもあるべし。わが見しは或人の庭なりけり。玉の如き花のにほへるもとには太湖石と呼べる石もありしを、今はた如何になりはてけむ、わが知れる人さへ風のたよりにただありとのみ聞えつつ。

また立ちかへる水無月の
歎きをたれにかたるべき。
沙羅のみづ枝に花さけば、
かなしき人の目ぞ見ゆる。

（「梅・馬・鶯」の「小品第一」より）

貉

書紀によると、推古天皇の三十五年春二月、陸奥で始めて、貉が人に化けた。尤もこれは、一本によると、化人でなくて、比人とあるが、兩方ともその後に歌之と書いてあるから、人に化けたにしろ、人に比つたにしろ、人並に唄を歌つた事だけは事實らしい。

それより以前にも、垂仁紀を見ると、八十七年、丹波の國の甕襲と云ふ人の犬が、貉を嚙み食したら、腹の中に八尺瓊曲玉があつたと書いてある。この曲玉は馬琴が、八犬傳の中で、八百比丘尼妙椿を出すのに借用した。が、垂仁朝の貉は、唯肚裡に明珠を藏しただけで、後世の貉の如く變化自在を極めた譯ではない。すると、貉の化けたのは、やはり推古天皇の三十五年春二月が始めなのであらう。

勿論貉は、神武東征の昔から、日本の山野に棲んでゐた。さうして、それが、紀元千二百八十八年になつて、始めて人を化かすやうになつた。――かう云ふと、一見甚唐突の觀があるやうに思はれるかも知れない。が、それは恐らく、こんな事から始まつたのであらう。――

その頃、陸奥の汐汲みの娘が、同じ村の汐焼きの男と懇をした。が、女には母親が一人ついてゐる。その目を忍んで、夜な夜な逢ふにしても、二人とも一通りな心づかひではない。

男は毎晩、磯山を越えて、娘の家の近くまで通つて來る。すると娘も、刻限を見計らつて、そつと家を扱け出して來る。が、娘の方は、母親の手前をかねるので、ややもすると、遅れやすい。或時は、月の落ちかかる頃になつて、やつと來た。或時は、遠近の一番鷄が啼く頃になつても、まだ來ない。

そんな事が、何度か續いた或夜の事である。男は、屏風のやうな岩のかげに蹲りながら、待つてゐる間のさびしさをまぎらせるつもりで、高らかに唄を歌つた。沖を通る浪の音に消されまいと、いらだたしい思ひを鹽からい喉にあつめて、一生懸命に歌つたのである。

それを聞いた母親は、傍に寝てゐる娘に、あの聲は何だと云つた。始めは寝たふりをしてゐた娘も、二度三度と問ひかけられると、答へない譯には行かない。人の聲ではないさうな。――狼狽した揚句、娘はかう誤魔化した。

そこで、人でなうて何が歌ふと、母親が又問ひかへした。それに、貉かも知れぬと答へたのは、全く娘の機轉である。――戀は昔から、何度となく女にかう云ふ智慧を教へた。

夜が明けると、母親は、この唄の聲を聞いた話を近くにゐる苗績りの媼に話した。媼も亦この唄の聲を耳にした一人である。貉が唄を歌ひますかの――かう云ひながらも、媼はこれを、蘆刈りの男に話した。

話が傳はり傳はつて、その村へ來てゐた、乞食坊主の耳へはひつた時、坊主は、貉の唄を歌ふ理由を、仔細らしく説明した。――佛説に輪廻と云ふ事がある。だから貉の魂も、もとは人間の魂だつたかも知れない。もしさうだとすれば、人間のする事は、貉もする。月夜に歌を唄ふ位な事は、別に不思議でない。……

それ以來、この村では、貉の歌を聞いたと云ふ者が、何人も出るやうになつた。さうして、しまひにはその貉を見たと云ふ者さへ、現れて來た。これは、鷗の卵をさがしに行つた男

が、或夜岸傳ひに歸つて來ると、未だ殘つてゐる雪の明りで、磯山の陰に貉が一匹唄を歌ひながら、のそのそうろついてゐるのを目のあたりに見たと云ふのである。

既に、姿さへ見えた。それに次いで、殆一村の老若男女が、悉その聲を聞いたのは、寧自然の道理である。貉の唄は、時としては、山から聞えた。時としては、海から聞えた。さうして又更に時としては、その山と海との間に散在する、苫屋の屋根の上からさへ聞えた。そればかりではない。最後には汐汲みの娘自身さへ、或夜突然この唄の聲に驚かされた。——

娘は、勿論これを、男の唄の聲だと思つた。寢息を窺ふと、母親はよく寢入つてゐるらしい。そこで、そつと床をぬけ出して、入口の戸を細目にあけながら、外の容子を覗いて見た。が、外はうすい月と浪の音ばかりで、男の姿はどこにもない。娘は暫あたりを見廻してゐたが、突然つめたい春の夜風にでも吹かれたやうに、頬をおさへながら、立ちすくんでしまつた。戸の前の砂の上に、點點として貉の足跡のついてゐるのが、その時朧げに見えたからであらう。……

この話は、忽ち幾百里の山河を隔てた、京畿の地まで喧傳された。それから山城の貉が化ける。近江の貉が化ける。遂には同属の狸までも化け始めて、徳川時代になると、佐渡の團三郎と云ふ、貉とも狸ともつかない先生が出て、海の向うにゐる越前の國の人をさへ、化かすやうな事になつた。

化かすやうになつたのではない。化かすと信ぜられるやうになつたのである——かう諸君は、云ふかも知れない。しかし、化かすと云ふ事と、化かすと信ぜられると云ふ事との間に、果してどれ程の相違があるのであらう。

獨り貉ばかりではない。我我にとつて、すべてであると云ふ事は、畢竟するに唯あると信ずるにすぎないではないか。

イエエツは、「ケルトの薄明り」の中で、ジル湖上の子供たちが、青と白との衣を著たプロテスタント派の少女を、昔ながらの聖母マリアだと信じて、疑はなかつた話を書いてゐる。ひとしく人の心の中に生きてゐると云ふ事から云へば、湖上の聖母は、山澤の貉と何の異る所もない。

我我は、我我の祖先が、貉の人を化かす事を信じた如く、我我の内部に生きるものを信じようではないか。さうして、その信ずるものの命ずるままに我我の生き方を生きようではないか。

貉を輕蔑すべからざる所以である。

（大正六年三月作）

臘梅

わが裏庭の垣のほとりに一株の臘梅あり。ことしも亦筑波おろしの寒きに琥珀に似たる數朶の花をつづりぬ。こは本所なるわが家にありしを田端に移し植ゑつるなり。嘉永それの年に鐫られたる本所繪圖をひらきたまはば、土屋佐渡守の屋敷の前に小さく「芥川」と記せるを見たまふらむ。わが家も徳川家瓦解の後は多からぬ扶持さへ失ひければ、朝あさのけむりの立つべくもあらず、父ぎみ、叔父ぎみ道に立ちて家財のたぐひすら賣りたまひけるとぞ。おほぢの脇差しもあとをとどめず。今はただひと株の臘梅のみぞ十六世の孫には傳はりたりける。

臘梅や雪うち透かす枝の丈

（「梅・馬・鶯」の「小品第一」より）

芋粥

　元慶の末か、仁和の始にあつた話であらう。どちらにしても時代はさして、この話に大事な役を、勤めてゐない。讀者は唯、平安朝と云ふ、遠い昔が背景になつてゐると云ふ事を、知つてさへゐてくれれば、よいのである。――その頃、攝政藤原基經に仕へてゐる侍の中に、某と云ふ五位があつた。

　これも、某と書かずに、何の誰と、ちやんと姓名を明にしたいのであるが、生憎舊記には、それが傳はつてゐない。恐らくは、實際、傳はる資格がない程、平凡な男だつたのであらう。一體舊記の著者などと云ふ者は、平凡な人間や話に、餘り興味を持たなかつたらしい。この點で、彼等と、日本の自然派の作家とは、大分ちがふ。王朝時代の小說家は、存外、閑人でない。――兎に角、攝政藤原基經に仕へてゐる侍の中に、某と云ふ五位があつた。これが、この話の主人公である。

　五位は、風采の甚揚らない男であつた。第一背が低い、それから赤鼻で、眼尻が下つてゐる。口髭は勿論薄い。頬が、こけてゐるから、頤が、人並はづれて、細く見える。脣は――一一、數へ立ててゐれば、際限はない。我五位の外貌はそれ程、非凡に、だらしなく、出來上つてゐたのである。

　この男が、何時、どうして、基經に仕へるやうになつたのか、それは誰も知つてゐない。が、餘程以前から、同じやうな、色の褪めた水干に、同じやうな、萎萎した烏帽子をかけて、同じやうな役目を、飽きずに、毎日、繰返してゐる事だけは、確である。その結果であらう、今では、誰が見ても、この男に若い時があつたとは思はれない。（五位は四十を越してゐた。）その代り、生まれた時から、あの通り寒さうな赤鼻と、形ばかりの口髭とを、朱雀大路の衢風に、吹かせてゐたと云ふ氣がする。上は主人の基經から、下は牛飼の童兒まで、無意識ながら、悉さう信じて疑ふ者がない。

　かう云ふ風采を具へた男が、周圍から、受ける待遇は、恐らく書くまでもない事であらう。侍所にゐる連中は、五位に對して、殆ど蠅程の注意も拂はない。有位無位、併せて、二十人に近い下役さへ、彼の出入りには、不思議な位、冷淡を極めてゐる。五位が、何か云ひつけても、決して彼等同志の雜談をやめた事はない。彼等にとつては、空氣の存在が見えないやうに、五位の存在も、眼を遮らないのであらう。下役でさへさうだとすれば、別當とか、侍所の司とか云ふ、上役たちが、頭から彼を相手にしないのは、寧ろ自然の數である。彼等は、五位に對すると、殆ど、子供らしい無意味な惡意を、冷然とした表情の後に隱して、何を云ふのでも、手眞似だけで用を足した。人間に、言語があるのは、偶然ではない。從つて、彼等も手眞似では用を辨じない事が、時時ある。が、彼等は、それを、全然、五位の個性に缺陷があるからだと、思つてゐるらしい。そこで彼等は、用が足りないと、この男の歪んだ揉烏帽子の先から、切れかかつた藁草履の尻まで、萬遍なく見上げたり、見下したりして、それから、鼻で哂ひながら、急に後を向いてしまふ。それでも、五位は、腹を立てた事がない。彼は、一切の不正を、不正として感じない程、意氣地のない、臆病な、人間だつたのである。

所が、同僚の五位の侍たちになると、進んで、彼を飜弄しようとした。年かさの同僚が、彼の振はない風采を材料にして、古い洒落を聞かせようとする如く、年下の同僚も、亦それを機會にして、所謂興言利口の練習をしようとしたからである。彼等は、この五位の面前で、その鼻と口髭と、烏帽子と水干とを、品隲して飽きる事を知らなかつた。そればかりではない。彼が五六年前に別れたうけ脣の女房と、その女房と關係があつたと云ふ、酒のみの法師とも、屢彼等の話題になつた。その上、どうかすると、彼等は甚性質の惡い惡戯さへする。それを、今一一、列記する事は、出來ない。が、彼の篠枝の酒を飲んで、後へ尿を入れて置いたと云ふ事を、書けば、その外は凡、想像される事だらうと思ふ。

しかし、五位は、これらの揶揄に對して、全然、無感覺であつた。少くもわき眼には、無感覺であるらしく、思はれた。彼は何を云はれても、顏の色さへ變へた事がない。默つて例の薄い口髭を撫でながら、するだけの事をして、すましてゐる。唯、同僚の惡戯が、高じすぎて、髷に紙切れをくつけたり、太刀の鞘に草履を結びつけたりすると、彼は、笑ふのか、泣くのか、わからないやうな笑顏をして、「いけぬなう、お身たちは。」と云ふ。その顏を見、その聲を聞いた者は、誰でも、一時或いぢらしさに打たれてしまふ。彼等にいぢめられるのは、一人、この赤鼻の五位だけではない。彼等の知らない誰かが――多數の誰かが、彼の顏と聲とを借りて、彼等の無情を責めてゐる。――さう云ふ氣が、朧げながら、彼等の心に、一瞬の間、しみこんで來るからである。唯その時の心もちを、何時までも、持續ける者は、甚少い。その少い中の一人に、或無位の侍があつた。これは、丹波の國から來た男で、まだ柔い口髭が、やつと鼻の下に、生えかかつた位の青年である。勿論、この男も始めは皆と一しよに、何の理由もなく、赤鼻の五位を輕蔑した。所が、或日何かの折に、「いけぬなう、お身たちは。」と云ふ聲を聞いてからは、どうしても、それが頭を離れない。それ以來、この男の眼にだけは、五位が、全く別人として、映るやうになつた。營養の不足した、血色の惡い、間のぬけた五位の顏にも、世間の迫害にべそを掻いた、「人間」が覗いてゐるからである。この無位の侍には、五位の事を考へる度に、世の中のすべてが、急に、本來の下等さを露すやうに思はれた。さうして、それと同時に、霜げた赤鼻と、數へる程の口髭とが、何となく、一味の慰安を、自分の心に、傳へてくれるやうに思はれた。……

しかし、それは、唯この男一人に、限つた事である。かう云ふ例外を除けば、五位は、依然として、周圍の輕蔑の中に、犬のやうな生活を、續けて行かなければならなかつた。第一、彼には着物らしい着物が一つもない。青鈍の水干と、同じ色の指貫とが、一つづつあるが、今では、それが上白んで、藍とも、紺とも、つかないやうな色に、なつてゐる。水干は、それでも、肩が少し落ちて、丸組の緒や菊綴の色が怪しくなつてゐるだけだが、指貫になると、裾のあたりのいたみ方が、一通りでない。その指貫の中から、下の袴もはかない、細い足が、出てゐるのを見ると、口の惡い同僚でなくとも、痩公卿の車を牽いてゐる、痩牛の歩みを見るやうな、みすぼらしい心もちがする。それに、佩いてゐる太刀も、頗る覺束ない物で、柄の金具も、如何はしければ、黑鞘の塗も、剝げかかつてゐる。これが例の赤鼻で、だらしなく草履をひきずりながら、唯でさへ猫背なのを、一層寒空の下に背ぐくまつて、もの欲しさうに、左右を眺め眺め、きざみ足に、歩くのだから、通りがかりの物賣りまで、莫迦にするのも、無理はない。現に、

から云ふ事さへ、あつた。……

　或日、五位が三條坊門を神泉苑の方へゆく所で、子供が六七人、路ばたに集つて何かしてゐるのを見た事がある。「こまつぶり」でも、廻してゐるのかと思つて、後から覗いて見ると、何處かから迷つて來た、尨犬の首へ繩をつけて、打つたり毆いたりしてゐるのであつた。臆病な五位は、これまで、何かに同情を寄せる事があつても、あたりへ氣を兼ねて、まだ一度もそれを行爲に現はした事がない。が、この時だけは相手が子供だと云ふので、幾分か、勇氣が出た。そこで出來るだけ、笑顏をつくりながら、年かさらしい子供の肩を叩いて、「もう、堪忍してやりなされ。犬も打たれれば、痛いでなう。」と聲をかけた。すると、その子供は、ふりかへりながら、上眼を使つて、蔑すむやうに、じろじろ、五位の姿を見た。云はば侍所の別當が用の通じない時に、この男を見るやうな顏をして、見たのである。「いらぬ世話はやかれたうもない。」その子供は一足下りながら、高慢な脣を反らせて、かう云つた。「何ぢや、この赤鼻めが。」五位は、この語が、自分の顏を打つたやうに、感じた。が、それは、惡態をつかれて、腹が立つたからでは毛頭ない。云はなくともいい事を云つて、恥をかいた自分が、情なくなつたからである。彼は、きまりが惡いのを、苦しい笑顏に隱しながら、默つて、又、神泉苑の方へ步き出した。後では、子供が、六七人、肩を寄せて、「べつかつかう」をしたり、舌を出したりしてゐる。勿論彼はそんな事を知らない。知つてゐたにしても、それが、この意氣地のない五位にとつて、何であらう。……

　では、この話の主人公は、唯、輕蔑される爲にのみ、生れて來た人間で、別に何の希望も持つてゐないかと云ふと、さうでもない。五位は五六年前から芋粥と云ふ物に、異常な執著を持つてゐる。芋粥とは山の芋を中に切込んで、それを甘葛の汁で煮た、粥の事を云ふのである。當時はこれが、無上の佳味として、上は萬乘の君の食膳にさへ、上せられた。從つて、我五位の如き人間の口へは、年に一度、臨時の客の折にしか、はいらない。その時でさへ、飲めるのは、僅に喉を沾すに足る程の少量である。そこで芋粥を飽きる程飮んで見たいと云ふ事が、久しい前から、彼の唯一の欲望になつてゐた。勿論、彼は、それを誰にも話した事がない。いや、彼自身さへ、それが、彼の一生を貫いてゐる欲望だとは、明白に意識しなかつた事であらう。が事實は彼がその爲に、生きてゐると云つても、差支ない程であつた。――人間は、時として、充されるか、充されないか、わからない欲望の爲に、一生を捧げてしまふ。その愚を哂ふ者は、畢竟、人生に對する路傍の人に過ぎない。

　しかし、五位が夢想してゐた、「芋粥に飽かむ」事は、存外容易に、事實となつて、現れた。その始終を書かうと云ふのが、芋粥の話の目的なのである。

　或年の正月二日、基經の第に、所謂臨時の客があつた時の事である。（臨時の客は二の宮の大饗と同日に攝政關白家が、大臣以下の上達部を招いて、催す饗宴で、大饗と別に變りがない。）五位も、外の侍たちにまじつて、その殘肴の相伴をした。當時はまだ、取食みの習慣がなくて、殘肴は、その家の侍が一堂に集まつて、食ふ事になつてゐたからである。尤も、大饗に比しいと云つても昔の事だから、品數の多い割に碌な物はない。餅、伏菟、蒸鮑、干鳥、宇治の氷魚、近江の鮒、鯛の楚割、鮭の内子、燒蛸、大海老、大柑子、小柑子、橘、串柿などの類である。唯、その中に、例の芋粥があつた。五位は毎年、

この芋粥を樂しみにしてゐる。が、何時も人數が多いので、自分が飮めるのは、いくらもない。それが今年は、特に、少かつた。さうして氣のせゐか、何時もより、餘程味が好い。そこで、彼は飮んでしまつた後の椀をしげしげと眺めながら、うすい口髭についてゐる滴を、掌で拭いて誰に云ふともなく、「何時になつたら、これに飽ける事かなう。」と、かう云つた。

「大夫殿は、芋粥に飽かれた事がないさうな。」

五位の語が完らない中に、誰かが、嘲笑つた。錆のある、鷹揚な、武人らしい聲である。五位は、猫背の首を擧げて、臆病らしく、その人の方を見た。

聲の主は、その頃、同じ基經の恪勤になつてゐた、民部卿時長の子藤原利仁である。肩幅の廣い、身長の群を拔いた逞しい大男で、これは、煠栗を嚙みながら、黑酒の杯を重ねてゐた。もう大分醉がまはつてゐるらしい。

「お氣の毒な事ぢや。」利仁は、五位が顏を擧げたのを見ると、輕蔑と憐憫とを一つにしたやうな聲で、語を繼いだ。「お望みなら、利仁がお飽かせ申さう。」

始終、いぢめられてゐる犬は、たまに肉を貰つても容易によりつかない。五位は、例の笑ふのか、泣くのか、わからないやうな笑顏をして、利仁の顏と、空の椀とを、等分に見比べてゐた。

「おいやかな。」

「……」

「どうぢや。」

「……」

五位は、その中に、衆人の視線が、自分の上に、集まつてゐるのを感じ出した。答へ方一つで、又、一同の嘲弄を、受けなければならない。或は、どう答へても、結局、莫迦にされさうな氣さへする。彼は躊躇した。もし、その時に、相手が、少し面倒臭さうな聲で、「おいやなら、たつてとは申すまい。」と云はなかつたなら、五位は、何時までも、椀と利仁とを、見比べてゐた事であらう。

彼は、それを聞くと、慌しく答へた。

「いや……忝うござる。」

この問答を聞いてゐた者は、皆、一時に、失笑した。「いや、忝うござる。」――かう云つて、五位の答を、眞似る者さへある。所謂、橙黃橘紅を盛つた窪坏や高坏の上に、多くの揉烏帽子や立烏帽子が、笑聲と共に、一しきり、波のやうに動いた。中でも、最、大きな聲で、機嫌よく、笑つたのは、利仁自身である。

「では、その中に、御誘ひ申さう。」さう云ひながら、彼は、ちよいと顏をしかめた。こみ上げて來る笑と、今飮んだ酒とが、喉で一つになつたからである。「……しかと、よろしいな。」

「忝うござる。」

五位は、赤くなつて、吃りながら、又、前の答を繰返した。一同が、今度も、笑つたのは、云ふまでもない。それが云はせたさに、わざわざ、念を押した當の利仁に至つては、前よりも、一層可笑しさうに廣い肩をゆすつて、哄笑した。この朔北の野人は、生活の方法を二つしか心得てゐない。一つは、酒を飮む事で、他の一つは、笑ふ事である。

しかし、幸に、談話の中心は、程なく、この二人を離れてしまつた。これは事によると、外の連中が、たとひ嘲弄にしろ、一同の注意を、この赤鼻の五位に集中させるのが、不快だつたからかも知れない。兎に角、談柄は、それからそれへと移つて、酒も肴も殘少になつた時分には、某と云ふ侍學生が、行縢の片皮へ、兩足を入れて馬に乘らうとした話が、一座の興味を集めてゐた。が、五位だけは、まるで外の話が聞えないらしい。恐らく芋粥の二字が、彼のすべての思量を、支配してゐるからであらう。

前に、雉子の炙いたのが、あつても、箸をつけない。黒酒の杯が、あつても、口を觸れない。彼は、唯、両手を膝の上へ置いて、見合ひをする娘のやうに、霜に犯されかかつた鬢の邊まで、初心らしく、上氣しながら、何時までも空になつた黒塗の椀を見つめて、他愛もなく、微笑してゐるのである。……

それから、四五日たつた日の午前、加茂川の河原に沿つて、粟田口へ通ふ街道を、靜に馬を進めてゆく二人の男があつた。一人は、濃い縹の狩衣に同じ色の袴をして、打出の太刀を佩いた「鬚黒く鬢ぐきよき」男である。もう一人は、みすぼらしい青鈍の水干に、薄綿の衣を二つばかり重ねて著た、四十恰好の侍で、これは、帯のむすび方の、だらしのない容子と云ひ、赤鼻でしかも穴のあたりが、洟にぬれてゐる容子と云ひ、身のまはり萬端のみすぼらしい事、夥しい。尤も、馬は二人とも、前のは月毛、後のは蘆毛の三歳駒で、道をゆく物賣りや侍も、振向いて見る程の駿足である。その後から、又二人、馬の歩みに遅れまいとして隨いて行くのは、調度掛と舎人とに相違ない。――これが、利仁と五位との一行である事は、わざわざ、ここに斷るまでもない話であらう。

冬とは云ひながら、物靜に晴れた日で、白けた河原の石の間、潺湲たる水の邊に、立枯れてゐる蓬の葉を、ゆする程の風もない。川に臨んだ、背の低い柳は、葉のない枝に飴の如く、滑かな日の光りをうけて、梢にゐる鶺鴒の尾を動かすのさへ、鮮かにそれと、影を街道に落してゐる。東山の暗い緑の上に、霜に焦げた天鵞絨のやうな肩を、丸々と出してゐるのは、大方、比叡の山であらう。二人は、その中に鞍の螺鈿を、まばゆく日にきらめかせながら、鞭をも加へず悠悠と、粟田口を指して、行くのである。

「どこでござるかな、手前をつれて行つて、やらうと仰せられるのは。」五位が、馴れない手に、手綱をかいくりながら、云つた。

「すぐ、そこぢや。お案じになる程遠うはない。」

「すると、粟田口邊でござるかな。」

「まづ、さう思はれたがよろしからう。」

利仁は、今朝、五位を誘ふのに、東山の近くに、湯の湧いてゐる所があるから、そこへ行かうと云つて出て來たのである。赤鼻の五位は、それを眞にうけた。久しく湯にはひらないので、體中がこの間から、むづ痒い。芋粥の馳走になつた上に、入湯が出來れば、願つてもない、仕合せである。かう思つて、豫め、利仁が牽かせて來た、蘆毛の馬に跨つた。所が、轡を並べて此處まで來て見ると、どうも、利仁はこの近所へ來るつもりではないらしい。現にさうかうしてゐる中に、粟田口は通りすぎた。

「粟田口では、ござらぬなう。」

「いかにも、もそつと、あなたでな。」

利仁は、微笑を含みながら、わざと、五位の顔を見ないやうにして、靜に馬を歩ませてゐる。両側の人家は、次第に稀になつて、今は、廣々とした冬田の上に、餌をあさる鴉が見えるばかり、山の陰に消残つて、雪の色も仄に青く煙つてゐる。晴れながら、とげとげしい櫨の梢が、眼に痛く、空を刺してゐるのさへ、何となく肌寒い。

「では、山科邊ででもござるかな。」

「山科は、これぢや。もそつと、さきでござるよ。」

成程、さう云ふ中に、山科も通りすぎた。それ所ではない。何かとする中に、關山も後にして、彼是、午少しすぎた時分には、とうとう三井寺の前へ來た。三井寺には、利仁の懇意にしてゐる僧がある。二人はその僧を訪ねて、午餐の馳走になつた。それがすむと、又、馬に乘つ

て、途を急ぐ。行手は今まで來た路に比べると遙に人煙が少ない。殊に當時は、盗賊が、四方に横行した、物騒な時代である。――五位は猫背を一層低くしながら、利仁の顔を見上げるやうにして、訊ねた。

「まだ、さきでござるなう。」

利仁は、微笑した。悪戯をして、それを見つけられさうになつた子供が、年長者に向つて、するやうな微笑である。鼻の先へよせた皺と、眼尻にたたへた筋肉のたるみとが、笑つてしまはうか、しまふまいかとためらつてゐるらしい。さうして、とうとう、かう云つた。

「實はな、敦賀まで、お連れ申さうと思うたのぢや。」笑ひながら、利仁は鞭を擧げて遠くの空を指さした。その鞭の下には、的皪として、午後の日を受けた近江の湖が光つてゐる。

五位は、狼狽した。

「敦賀と申すと、あの越前の敦賀でござるかな。あの越前の――」

利仁が、敦賀の人、藤原有仁の女婿になつてから、多くは、敦賀に住んでゐると云ふ事も、日頃から聞いてゐない事はない。が、その敦賀まで、自分をつれて行く氣だらうとは、今の今まで、思はなかつた。第一、幾多の山河を隔ててゐる越前の國へ、この通り、僅二人の伴人をつれただけで、どうして、無事に行かれよう。まして、この頃は、往來の旅人が、盗賊の爲に、殺されたと云ふ噂さへ、諸方にある。――五位は、歎願するやうに、利仁の顔を見た。

「それは又、滅相な、東山ぢやと心得れば、山科。山科ぢやと心得れば、三井寺。揚句が越前の敦賀とは、一體どうしたと云ふ事でござる。始めから、さう仰せられうなら、下人共なりと、召つれようものを。――敦賀とは、滅相な。」

五位は、殆べそを掻かないばかりになつて、呟いた。もし「芋粥に飽かむ」事が、彼の勇氣を鼓舞しなかつたとしたら、彼は恐らく、そこから別れて、京都へ獨り歸つて來た事であらう。

「利仁が一人居るのは、千人ともお思ひなされ。路次の心配は、御無用ぢや。」

五位の狼狽するのを見ると、利仁は、少し眉を顰めながら、嘲笑つた。さうして、調度掛を呼寄せて、持たせて來た壺胡籙を背に負ふと、やはり、その手から、黒漆の眞弓をうけ取つて、それを鞍上に横へながら、先に立つて、馬を進めた。かうなる以上、意氣地のない五位は、利仁の意志に盲從するより、外に仕方がない。そこで、彼は、心細さうに、荒涼とした周圍の原野を眺めながら、うろ覺えの觀音經を口の中に念じ念じ、例の赤鼻を、鞍の前輪に、すりつけるやうにして、覺束ない馬の歩みを、不相變とぼとぼと進めて行つた。

馬蹄の反響する野は、茫茫たる黄茅に蔽はれて、その所所にある行潦も、つめたく、青空を映したまま、この冬の午後を、何時かそれなり凍つてしまふかと疑はれる。その涯には、一帯の山脈が、日に背いてゐるせゐか、かがやく可き殘雪の光もなく、紫がかつた暗い色を、長長となすつてゐるが、それさへ蕭條たる幾叢の枯薄に遮られて、二人の從者の眼には、はひらない事が多い。――すると、利仁が、突然五位の方をふりむいて、聲をかけた。

「あれに、よい使者が參つた。敦賀への言づけを申さう。」

五位は利仁の云ふ意味が、よくわからないので、怖怖ながら、その弓で指さす方を、眺めて見た。元より人の姿が見えるやうな所ではない。唯、野葡萄か何かの蔓が、灌木の一むらにからみついてゐる中を、一疋の狐が、暖かな毛の色を、傾きかけた日に曝しながら、のそりのそり歩いて行く。――と思ふ中に、狐は、慌しく身を跳らせて、一散に、どこともなく走り

出した。利仁が急に、鞭を鳴らせて、その方へ馬を飛ばし始めたからである。五位も、われを忘れて、利仁の後を、逐つた。従者も勿論、遅れてはゐられない。しばらくは、石を蹴る馬蹄の音が、戛々として、曠野の静けさを破つてゐたが、やがて利仁が、馬を止めたのを見ると、何時、捕へたのか、もう、狐の後足を攫んで、倒に、鞍の側へ、ぶら下げてゐる。狐が、走れなくなるまで、追ひつめた所で、それを馬の下に敷いて、手取りにしたものであらう。五位は、うすい髭にたまる汗を、慌しく拭きながら、漸、その傍へ馬を乗りつけた。

「これ、狐、よう聞けよ。」利仁は、狐を、高く眼の前へ、つるし上げながら、わざと物物しい声を出してから云つた。「其方、今夜の中に、敦賀の利仁が館へ参つて、かう申せ。『利仁は、唯今俄に客人を具して下らうとする所ぢや。明日、巳時頃、高島の辺まで、男たちを迎ひに遣はし、それに、鞍置馬二疋、牽かせて参れ。』よいか、忘れるなよ。」

云ひ畢ると共に、利仁は、一ふり振つて狐を、遠くの叢の中へ、抛り出した。

「いや、走るわ。走るわ。」

やつと、追ひついた二人の従者は、逃げてゆく狐の行方を眺めながら、手を拍つて囃し立てた。落葉のやうな色をしたその獣の背は、夕日の中を、まつしぐらに、木の根石くれの嫌ひなく、何処までも、走つて行く。それが一行の立つてゐる所から、手にとるやうによく見えた。狐を追つてゐる中に、何時か彼等は、曠野が緩い斜面を作つて、水の涸れた川床と一つになる、その丁度上の所へ、出てゐたからである。

「広量の御使でござるなう。」

五位は、ナイイヴな尊敬と讃嘆とを洩らしながら、この狐さへ頤使する野育ちの武人の顔を、今更のやうに、仰いで見た。自分と利仁との間に、どれ程の懸隔があるか、そんな事は、考へる暇がない。唯、利仁の意志に、支配される範囲が広いだけに、その意志の中に、包容される、自分の意志も、それだけ、自由が利くやうになつた事を、心強く感じるだけである。――阿諛は、恐らく、かう云ふ時に、最も自然に生れて来るものであらう。読者は、今後、赤鼻の五位の態度に、幇間のやうな何物かを見出しても、それだけで妄にこの男の人格を、疑ふ可きではない。

抛り出された狐は、なぞへの斜面を、転げるやうにして、駈け下りると、水の無い河床の石の間を、器用に、ぴよいぴよい、飛び越えて、今度は、向うの斜面へ、勢よく、すぢかひに駈け上つた。駈け上りながら、ふりかへつて見ると、自分を手捕りにした侍の一行は、まだ遠い傾斜の上に馬を並べて立つてゐる。それが皆、指を揃へた程に、小さく見えた。殊に入日を浴びた、月毛と蘆毛とが、霜を含んだ空気の中に、描いたよりも、くつきりと、浮き上つてゐる。

狐は、頭をめぐらすと、又枯薄の中を、風のやうに、走り出した。

一行は、予定通り翌日の巳時ばかりに、高島の辺へ来た。此処は琵琶湖に臨んだ、ささやかな部落で、昨日に似ず、どんよりと曇つた空の下に、幾戸の藁屋が、疎にちらばつてゐるばかり、岸に生えた松の樹の間には、灰色の漣漪をよせる湖の水面が、磨ぐのを忘れた鏡のやうに、さむざむと開けてゐる。――此処まで来ると利仁が、五位を顧みて云つた。

「あれを、御覧じろ。男どもが、迎ひに参つたげでござる。」

見ると、成程、二疋の鞍置馬を牽いた、二三十人の男たちが、馬に跨つたのもあり、徒歩の

もあり、皆水干の袖を、寒風に飜へして、湖の岸、松の間を、一行の方へ急いで來る。やがてこれが、間近くなつたと思ふと、馬に乗つてゐた連中は、慌しく、鞍を下り、徒歩の連中は、路傍に蹲踞して、いづれも恭しく、利仁の來るのを、待ちうけた。

「やはり、あの狐が、使者を勤めたと見えますなう。」

「性得、變化ある獸ぢやて、あの位の用を勤めるのは、何でもござらぬ。」

五位と利仁とが、こんな話をしてゐる中に、一行は、郎等たちの待つてゐる所へ來た。「大儀ぢや。」と、利仁が聲をかける。蹲踞してゐた連中が、忙しく立つて、二人の馬の口を取る。急に、すべてが陽氣になつた。

「夜前、稀有な事が、ございましてな。」

二人が、馬から下りて、敷皮の上へ、腰を下すか下さない中に、檜皮色の水干を著た、白髪の郎等が、利仁の前へ來て、かう云つた。

「何ぢや。」利仁は、郎等たちの持つて來た、篠枝や破籠を、五位にも勸めながら、鷹揚に問ひかけた。

「されば、でございまする。夜前、戌時ばかりに、奥方が俄に、人心地をお失ひなされましてな。『おのれは、阪本の狐ぢや。今日、殿の仰せられた事を、言傳てせうほどに、近う寄つて、よう聞きやれ。』と、かう仰有るのでございまする。さて、一同がお前に參りまするを、奥方の仰せられまするには、『殿は唯今俄に客人を具して、下られようとする所ぢや。明日巳時頃、高島の邊まで、男どもを迎ひに遣はし、それに鞍置馬二疋牽かせて參れ。』と、かう御意遊ばすのでございまする。」

「それは、又、稀有な事でござるなう。」五位は利仁の顔と、郎等の顔とを、仔細らしく見比べながら、兩方に滿足を與へるやうな、相槌を打つた。

「それも唯、仰せられるのでは、ございませぬ。さも、恐ろしさうに、わなわなとお震へになりましてな、『遅れまいぞ。遅れれば、おのれが、殿の御勘當をうけねばならぬ。』と、ひつきりなしに、お泣きになるのでございまする。」

「して、それから、如何した。」

「それから、他愛なく、お寐みになりましてな。手前共の出て參りまする時にも、まだ、お眼覺にはならぬやうで、ございました。」

「如何でござるな。」郎等の話を聞き完ると、利仁は五位を見て、得意らしく云つた。「利仁には、獸も使はれ申すわ。」

「何とも驚き入る外は、ござらぬなう。」五位は、赤鼻を掻きながら、ちよいと、頭を下げて、それから、わざとらしく、呆れたやうに、口を開いて見せた。口髭には、今飲んだ酒が、滴になつて、くつついてゐる。

その日の夜の事である。五位は、利仁の館の一間に、切燈臺の灯を眺めるともなく、眺めながら、寐つかれない長の夜をまじまじして、明してゐた。

すると、夕方、此處へ著くまで、利仁や利仁の從者と、談笑しながら、越えて來た松山、小川、枯野、或は、草、木の葉、石、野火の煙のにほひ――さう云ふものが、一つづつ、五位の心に、浮んで來た。殊に、雀色時の靄の中を、やつと、この館へ辿りついて、長櫃に起してある、炭火の赤い焰を見た時の、ほつとした心もち、――それも、今かうして、寐てゐると、遠い昔にあつた事としか、思はれない。五位は綿の四五寸もはひつた、黄いろい直垂の下に、樂樂と、足をのばしながら、ぼんやり、われとわが寐姿を見廻した。

直垂の下に利仁が貸してくれた、練色の衣の綿厚なのを、二枚まで重ねて、著こんでゐる。それだけでも、どうかすると、汗が出かねない程、暖かい。そこへ、夕飯の時に一杯やつた、酒の醉が手傳つてゐる。枕元の蔀一つ隔てた向うは、霜の冴えた廣庭だが、それも、かう陶然としてゐれば、少しも苦にならない。萬事が、京都の自分の曹司にゐた時と比べれば、雲泥の相違である。が、それにも關らず、我五位の心には、何となく釣合のとれない不安があつた。第一、時間のたつて行くのが、待遠い。しかもそれと同時に、夜の明けると云ふ事が、――芋粥を食ふ時になると云ふ事が、さう早く、來てはならないやうな、心もちがする。さうして又、この矛盾した二つの感情が、互に剋し合ふ後には、境遇の急激な變化から來る、落著かない氣分が、今日の天氣のやうに、うすら寒く、控へてゐる。それが、皆、邪魔になつて、折角の暖かさも、容易に、眠りを誘ひさうもない。

すると、外の廣庭で、誰か、大きな聲を出してゐるのが、耳にはひつた。聲がらでは、どうも、今日、途中まで迎へに出た、白髮の郎等が、何か告れてゐるらしい。その乾からびた聲が、霜に響くせゐか、凜凜として凩のやうに、一語づつ、五位の骨に、應へるやうな氣さへする。

「この邊の下人、承れ。殿の御意遊ばさるるには、明朝、卯時までに、切口三寸、長さ五尺の山の芋を、老若、各、一筋づつ、持つて參る樣にとある。忘れまいぞ、卯時までにぢや。」

それが、二三度、繰返されたかと思ふと、やがて、人のけはひが止んで、あたりは、忽ち元のやうに、靜な冬の夜になつた。その靜な中に、切燈臺の油が鳴る。赤い眞綿のやうな火が、ゆらゆらする。五位は欠伸を一つ、噛みつぶして、又、とりとめのない、思量に耽り出した。――山の芋と云ふからには、勿論芋粥にする氣で、持つて來させるのに相違ない。さう思ふと、一時、外に注意を集中したおかげで、忘れてゐた、さつきの不安が、何時の間にか、心に歸つて來る。殊に、前よりも、一層強くなつたのは、あまり早く芋粥にありつきたくないと云ふ心もちで、それが、意地惡く、思量の中心を離れない。どうもかう容易に「芋粥に飽かむ」事が、事實となつて、現れては、折角今まで、何年となく、辛抱して、待つてゐたのが、如何にも、無駄な骨折のやうに、見えてしまふ。出來る事なら、何か突然故障が起つて、一旦、芋粥が飲めなくなつてから、又、その故障がなくなつて、今度は、やつとそれにありつけると云ふやうな、そんな手續きに、萬事を運ばせたい。――こんな考へが、「こまつぶり」のやうに、ぐるぐる一つ所を廻つてゐる中に、何時か、五位は、旅の疲れで、ぐつすり、熟睡してしまつた。

翌朝、眼がさめると、直に、昨夜の山の芋の一件が、氣になるので、五位は、何よりも先に部屋の蔀をあげて見た。すると、知らない中に、寢すごして、もう卯時をすぎてゐたのであらう。廣庭へ敷いた、四五枚の長筵の上には、丸太のやうな物が、凡そ、二三千本、斜につき出した、檜皮葺の軒先へつかへる程、山のやうに、積んである。見るとそれが、悉く、切口三寸、長さ五尺の、途方もなく大きい、山の芋であつた。

五位は、寢起きの眼をこすりながら、殆ど周章に近い、驚愕に襲はれて、呆然と、周圍を見廻した。廣庭の所所には、新しく打つたらしい杭の上に、五斛納釜を五つ六つ、かけ連ねて、白い布の襖を著た若い下司女が、何十人となく、そのまはりに、動いてゐる。火を焚きつけるもの、灰を掻くもの、或は、新しい白木の桶に、「あまづらみせん」を汲んで釜の中へ入れるもの、皆芋粥をつくる準備で、眼のまはる程、忙しい。

釜の下から上る焔と、釜の中から湧く湯氣とが、まだ消え殘つてゐる明方の靄と一つになつて、廣庭一面、はつきり物も見定められない程、灰色のものが罩めた中で、赤いのは、烈烈と燃え上る釜の下の焔ばかり、眼に見るもの、耳に聞くもの悉く、戰場か火事場へでも行つたやうな騷ぎである。五位は、今更のやうに、この巨大な山の芋が、この巨大な五斛納釜の中で、芋粥になる事を考へた。さうして、自分が、その芋粥を食ふ爲に京都から、わざわざ、越前の敦賀まで旅をして來た事を考へた。考へれば考へる程、何一つ、情無くならないものはない。我五位の同情すべき食慾は、實に、此時もう、一半を減却してしまつたのである。

それから、一時間の後、五位は利仁や舅の有仁と共に、朝飯の膳に向つた。前にあるのは、銀の提の一斗ばかりはひるのに、なみなみと海の如くたたへた、恐るべき芋粥である。五位はさつき、あの軒まで積上げた山の芋を、何十人かの若い男が、薄刃を器用に動かしながら、片端から削るやうに、勢よく切るのを見た。それから、それを、あの下司女たちが、右往左往に馳せちがつて、一つのこらず、五斛納釜へすくつては入れ、すくつては入れするのを見た。最後に、その山の芋が、一つも長筵の上に見えなくなつた時に、芋のにほひと、甘葛のにほひとを含んだ、幾道かの湯氣の柱が、蓬蓬然として、釜の中から、晴れた朝の空へ、舞上つて行くのを見た。これを、目のあたりに見た彼が、今、提に入れた芋粥に對した時、まだ、口をつけない中から、既に、滿腹を感じたのは、恐らく、無理もない次第であらう。——五位は、提を前にして、間の惡さうに、額の汗を拭いた。

「芋粥に飽かれた事が、ござらぬげな。どうぞ、遠慮なく召上つて下されい。」

舅の有仁は、童兒たちに云ひつけて、更に幾つかの銀の提を膳の上に並べさせた。中にはどれも芋粥が、溢れんばかりにはひつてゐる。五位は眼をつぶつて、唯でさへ赤い鼻を、一層赤くしながら、提に半分ばかりの芋粥を大きな土器にすくつて、いやいやながら、飲み干した。

「父もさう申すぢやて。平に、遠慮は御無用ぢや。」

利仁も側から、新な提をすすめて、意地惡く笑ひながらこんな事を云ふ。弱つたのは五位である。遠慮のない所を云へば、始めから芋粥は、一椀も吸ひたくない。それを今、我慢して、やつと、提に半分だけ平げた。これ以上、飲めば、喉を越さない中にもどしてしまふ、さうかと云つて、飲まなければ、利仁や有仁の厚意を無にするのも、同じである。そこで、彼は又眼をねぶつて、殘りの半分を三分の一程飲み干した。もう後は一口も吸ひやうがない。

「何とも、忝うござつた。もう、十分頂戴致したて。——いやはや、何とも忝うござつた。」

五位は、しどろもどろになつて、かう云つた。餘程弱つたと見えて、口髭にも、鼻の先にも、冬とは思はれない程、汗が、玉になつて、垂れてゐる。

「これは又、御少食な事ぢや、客人は、遠慮をされると見えたぞ。それそれその方ども、何を致して居る。」

童兒たちは、有仁の語につれて、新な提の中から、芋粥を、土器に汲まうとする。五位は、兩手を蠅でも逐ふやうに動かして、平に、辭退の意を示した。

「いや、もう、十分でござる。——失禮ながら、十分でござる。」

もし、此時、利仁が、突然、向うの家の軒を指さして、「あれを御覽じろ」と云はなかつたなら、有仁は猶、五位に、芋粥をすすめて、止ま

なかつたかも、知れない。が、幸ひにして、利仁の聲は、一同の注意を、その狐の方へ持つて行つた。檜皮葺の軒には、丁度、朝日がさしてゐる。さうして、そのまばゆい光に、光澤のいい毛皮を、洗はせながら、一疋の獣が、おとなしく、坐つてゐる。見るとそれは一昨日、利仁が枯野の路で手捕りにした、あの阪本の野狐であつた。

「狐も、芋粥が欲しさに、見參したさうな。男ども、しやつにも、物を食はせてつかはせ。」

利仁の命令は、言下に行はれた。軒からとび下りた狐は、直に、廣庭で芋粥の馳走に、與つたのである。

五位は、芋粥を飲んでゐる狐を眺めながら、此處へ來ない前の彼自身を、なつかしく、心の中でふり返つた。それは、多くの侍たちに愚弄されてゐる彼である。京童にさへ「何ぢや。この鼻赤めが。」と、罵られてゐる彼である。色のさめた水干に、指貫をつけて、飼主のない尨犬のやうに、朱雀大路をうろついて歩く、憐む可き、孤獨な彼である。しかし、同時に又、芋粥に飽きたいと云ふ慾望を、唯一人大事に守つてゐた、幸福な彼である。――彼は、この上芋粥を飲まずにすむと云ふ安心と共に、滿面の汗が次第に、鼻の先から、乾いてゆくのを感じた。晴れてはゐても、敦賀の朝は、身にしみるやうに、風が寒い。五位は慌てて、鼻をおさへると同時に、銀の提に向つて大きな嚔をした。

（大正五年八月作）

霜夜

霜夜の記憶の一つ。

いつものやうに机に向つてゐると、いつか十二時を打つ音がする。十二時には必ず寝ることにしてゐる。今夜もまづ本を閉ぢ、それからあした坐り次第、直に仕事にかかれるやうに机の上を片づける。片づけると云つても大したことはない。原稿用紙と入用の書物とを一まとめに重ねるばかりである。最後に火鉢の火の始末をする。はんねらの瓶に鐵瓶の湯をつぎ、その中へ火を一つづつ入れる。火は見る見る黒くなる。炭の鳴る音も盛んにする。水蒸氣ももやもや立ち昇る。何か樂しい心もちがする。何か又はかない心もちもする。床は次の間にとつてある。次の間も書齋も二階である。寝る前には必ず下へおり、のびのびと一人小便をする。今夜もそつと二階を下りる。家族の眼をさまさせないやうに、出來るだけそつと二階を下りる。座敷の次の間に電燈がついてゐる。まだ誰か起きてゐるなと思ふ。誰が起きてゐるのかしらとも思ふ。その部屋の外を通りかかると、六十八になる伯母が一人、古い綿をのばしてゐる。かすかに光る絹の綿である。

「伯母さん」と云ふ。「まだ起きてゐたの？」と云ふ。「ああ、今これだけしてしまはうと思つて。お前ももう寝るのだらう？」と云ふ。後架の電燈はどうしてもつかない。やむを得ず暗いまま小便をする。後架の窓の外には竹が生えてゐる。風のある晩は葉のすれる音がする。今夜は音も何もしない。唯寒い夜に封じられてゐる。

薄綿はのばし兼ねたる霜夜かな

（「百艸」の「續野人生計事」より）

MENSURA ZOILI

僕は、船のサルーンのまん中に、テエブルをへだてて、妙な男と向ひあつてゐる。——待つてくれ給へ。その船のサルウンと云ふのも、實はあまり確でない。部屋の工合とか窓の外の海とか云ふもので、やつとさう云ふ推定を下しては見たものの、事によると、もつと平凡な場所かも知れないと云ふ懸念がある。いや、やつぱり船のサルウンかな。それでなくては、から搖れる筈がない。僕は木下杢太郎君ではないから、何サンチメエトル位な割合で、搖れるのかわからないが、搖れる事は、確かに搖れる。譃だと思つたら、窓の外の水平線が、上つたり下つたりするのを、見るがいい。空が曇つてゐるから、海は煮切らない緑靑色を、どこまでも擴げてゐるが、それと灰色の雲との一つになる所が、窓枠の圓形を、さつきから色色な弦に、切つて見せてゐる。その中に、空と同じ色をしたものが、ふはふは飛んでゐるのは、大方鷗か何かであらう。

さて、僕の向ひあつてゐる妙な男だが、こいつは、鼻の先へ度の強さうな近眼鏡をかけて、退屈らしく新聞を讀んでゐる。口髭の濃い、顋の四角な、どこかで見た事のあるやうな男だが、どうしても思ひ出せない。頭の毛を、長くもじやもじや生やしてゐる所では、どうも作家とか畫家とか云ふ階級の一人ではないかと思はれる。が、それにしては着てゐる茶の背廣が、何となく釣合はない。

僕は、暫、この男の方をぬすみ見ながら、小さな杯へついだ、甘い西洋酒を、少しづつなめてゐた。これは、こつちも退屈してゐる際だから、話しかけたいのは山山だが、相手の男の人相が、甚、無愛想に見えたので、暫、躊躇してゐたのである。

すると、角顋の先生は、足をうんと踏みのばしながら、生あくびを噛みつぶすやうな聲で、「ああ、退屈だ。」と云つた。それから、近眼鏡の下から、僕の顔をちよいと見て、又、新聞を讀み出した。僕はその時、愈、こいつにはどこかで、會つた事があるのにちがひないと思つた。

サルウンには、二人の外に誰もゐない。

暫して、この妙な男は、又、「ああ、退屈だ。」と云つた。さうして、今度は、新聞をテエブルの上へ抛り出して、ぼんやり僕の酒を飲むのを眺めてゐる。そこで僕は云つた。

「どうです。一杯おつきあひになりませんか。」

「いや、有難う。」彼は、飲むとも飲まないとも云はずに、ちよいと頭をさげて、「どうも、實際退屈しますな。これぢや向うへ著くまでに、退屈死に死んぢまふかも知れません。」

僕は、同意した。

「まだ、ZOILIAの土を踏むには、一週間以上かかりませう。私は、もう、船が飽き飽きしました。」

「ゾイリア——ですか。」

「さやう、ゾイリア共和國です。」

「ゾイリアと云ふ國がありますか。」

「これは、驚いた。ゾイリアを御存知ないとは、意外ですな。一體どこへ御出でになる御心算か知りませんが、この船がゾイリアの港へ寄港するのは、餘程前からの慣例ですぜ。」

僕は當惑した。考へて見ると、何の爲にこの船に乗つてゐるのか、それさへもわからない。

まして、ゾイリアなどと云ふ名前は、未嘗、一度も聞いた事のない名前である。

「さうですか。」

「さうですとも。ゾイリアと云へば、昔から、有名な國です、御承知でせうが、ホメロスに猛烈な惡口をあびせかけたのも、やつぱりこの國の學者です。今でも確、ゾイリアの首府には、この人の立派な頌德表が立つてゐる筈ですよ。」

僕は、角顋の見かけによらない博學に驚いた。

「すると、餘程古い國と見えますな。」

「ええ、古いです。何でも神話によると、始は蛙ばかり住んでゐた國ださうですが、パラス。アテネがそれを皆、人間にしてやつたのださうです。だから、ゾイリア人の聲は、蛙に似てゐると云ふ人もゐますが、これはあまり當になりません。記録に現れたのでは、ホメロスを退治した豪傑が、一番早いやうです。」

「では今でも相當な文明國ですか。」

「勿論です。殊に首府にあるゾイリア大學に、一國の學者の粹を拔いてゐる點で、世界のどの大學にも負けないでせう。現に、最近、教授連が考案した、價値測定器の如きは、近代の驚異だと云ふ評判です。尤も、これは、ゾイリアで出るゾイリア日報のうけ賣りですが。」

「價値測定器と云ふのは何です。」

「文字通り、價値を測定する器械です。尤も主として、小說とか繪とかの價値を、測定するのに使用されるやうですが。」

「どんな價値を。」

「主として、藝術的な價値をです。無論まだ其他の價値も、測定出來ますがね。ゾイリアでは、それを祖先の名譽の爲に、MENSURA ZOILIと名をつけたさうです。」

「あなたは、そいつを御覽になつた事があるのですか。」

「いいえ。ゾイリア日報の挿畫で、見ただけです。なに見た所は、普通の計量器と、ちつとも變りはしません。あの人が上る所に、本なりカンヴァスなりを、のせればよいのです。額縁や製本も、少しは測定上邪魔になるさうですが、さう云ふ誤差は後で訂正するから、大丈夫です。」

「それは兎に角、便利なものですね。」

「非常に便利です。所謂文明の利器ですな。」角顋は、ポケットから朝日を一本出して、口へくはへながら、「かう云ふものが出來ると、羊頭を掲げて狗肉を賣るやうな作家や畫家は、屛息せざるを得なくなります。何しろ、價値の大小が、明白に數字で現れるのですからな。殊にゾイリア國民が、早速これを税關に据ゑつけたと云ふ事には、最も賢明な措置だと思ひますよ。」

「それは、又何故でせう。」

「外國から輸入される書物や繪を、一一これにかけて見て、無價値な物は、絕對に輸入を禁止する爲です。この頃では日本、英吉利、獨逸、墺太利、佛蘭西、露西亞、伊太利、西班牙、亞米利加、瑞典、諾威などから來る作品が、皆、一度はかけられるさうですが、どうも日本の物は、あまり成績がよくないやうですよ。我々のひいき眼では、日本には相當な作家や畫家がゐるさうに見えますがな。」

こんな事を話してゐる中に、サルウンの扉があいて、黑坊のボイがはひつて來た。靑磁色の夏服を著た、敏捷さうな奴である。ボイは、默つて、脇にかかへてゐた新聞の一束を、テエブルの上へのせる。さうして、直又、扉の向うへ消えてしまふ。

その後で角顋は、朝日の灰を落しながら、新聞の一枚をとりあげた。楔形文字のやうな、妙な字が行列した、所謂ゾイリア日報なるものである。僕は、この不思議な文字を讀み得る點で、再、この男の博學なのに驚いた。

「不相變、メンスラ・ゾイリの事ばかり出てゐますよ。彼は、新聞を讀み讀み、こんな事を云つた。「ここに、先月日本で發表された小説の價値が、表になつて出てゐますぜ。測定技師の記要まで、附いて。」

「久米と云ふ男のは、あるでせうか。」

僕は、友だちの事が氣になるから、訊いて見た。

「久米ですか。『銀貨』と云ふ小説でせう。ありますよ。」

「どうです。價値は。」

「駄目ですな。何しろこの創作の動機が、人生のくだらない發見ださうですからな。そしておまけに、早く大人がつて通がりさうなトオンが、作全體を低級な卑しいものにしてゐると書いてあります。」

僕は、不快になつた。

「お氣の毒ですな。」角顋は冷笑した。「あなたの『煙管』もありますぜ。」

「何と書いてあります。」

「やつぱり似たやうなものですな。常識以外に何もないさうですよ。」

「へええ。」

「またかうも書いてあります。――この作者早くも濫作をなすか……。」

「おやおや。」

僕は、不快なのを通り越して、少し莫迦莫迦しくなつた。

「いや、あなた方ばかりでなく、どの作家や畫家でも、測定器にかかつちや、往生です。とてもまやかしは利きませんからな。いくら自分で、自分の作品を賞め上げたつて、現に價値が測定器に現れるのだから、駄目です。無論、仲間同士のほめ合にしても、やつぱり評價表の事實を、變へる譯には行きません。まあ精精、骨を折つて、實際價値があるやうなものを書くのですな。」

「しかし、その測定器の評價が、確だと云ふ事は、どうして、きめるのです。」

「それは、傑作をのせて見れば、わかります。モオパッサンの『女の一生』でも載せて見れば、すぐ針が最高價値を指しますからな。」

「それだけですか。」

僕は、默つてしまつた。少少、角顋の頭が、沒論理に出來上つてゐるやうな氣がしたからである。が、又、別な疑問が起つて來た。

「じや、ゾイリアの藝術家の作つた物も、やはり測定器にかけられるのでせうか。」

「それは、ゾイリアの法律が禁じてゐます。」

「何故でせう。」

「何故と云つて、ゾイリア國民が承知しないのだから、仕方がありません。ゾイリアは昔から共和國ですからな。Vox populi, vox Dei を、文字通りに遵奉する國ですからな。」

角顋は、かう云つて、妙に微笑した。「尤も、彼等の作物を測定器へのせたら、針が最低價値を指したと云ふ風説もありますがな。もしさうだとすれば、彼等はディレムマにかかつてゐる譯です。測定器の正確を否定するか、彼等の作物の價値を否定するか、どつちにしても、難有い話ぢやありません。――が、これは風説ですよ。」

かう云ふ拍子に、船が大きく搖れたので、角顋はあつと云ふ間に、椅子からころがり落ちた。するとその上へテエブルが倒れる。酒の罎と杯とがひつくりかへる。新聞が落ちる。窓の外の水平線が、どこかへ見えなくなる。皿の破れる音、椅子の倒れる音、それから、波の船腹へぶつかる音――、衝突だ。衝突だ。それとも海底噴火山の爆發かな。

氣がついて見ると、僕は、書齋のロッキング・

チェアに腰をかけて St. John Ervine の The Critics と云ふ脚本を讀みながら、欠伸をしてゐたのである。何だと云つたのは、大方その子の描れるせゐであらう。

何しろ、久米のやうな氣もするし、久米でないやうな氣もする。これは、未だにわからない。

（大正五年作）

鏡

自分は無暗に書物ばかり積んである書齋の中に蹲つて、寂しい僞の松の内を蕩らしてゐた。本をひろげて見たり、好い加減な文章を書いて見たり、それにも飽きると出たらめな俳句を作つて見たり――要するにまあ太平の逸民らしく、のんべんだらりと日を暮してゐたのである。すると或日久しぶりに、よその奥さんが子供をつれて、年始旁遊びに來た。この奥さんは昔から若くつてゐたいと云ふ事を、口癖のやうにしてゐる人だつた。だからつれてゐる女の子がもう五つになると云ふにも關らず、まだ娘の時分の美しさを昨日のやうに保有してゐた。その日自分の書齋には、梅の花が活けてあつた。そこで我々は梅の話をした。が、千枝ちやんと云ふその女の子は、この間中書齋の額や掛物を上眼でじろじろ眺めながら、退屈さうに側に坐つてゐた。

暫くして自分は千枝ちやんが可哀さうになつたから、奥さんに「もうあつちへ行つて、母とでも話して御出でなさい。」と云つた。母なら奥さんと話しながら、しかも子供に退屈させない丈の手腕があると思つたからである。すると奥さんは懐から鏡を出して、それを千枝ちやんに渡しながら「この子はかうやつて置きさへすれば、決して退屈しないんです。」と云つた。

何故だらうと思つて聞いて見ると、この奥さんの良人が逗子の別莊に病を養つてゐた時分、奥さんは千枝ちやんをつれて、一週間に二三度宛東京逗子間を往復したが、千枝ちやんは汽車の中でその度に退屈し切つてしまふ。のみならず、その退屈を紛らしたい一心で、隨分勝手な惡戯をして仕方がない。現に或時はよその御隱居樣をつかまへて、「あなた、佛蘭西香を使つていらつしやる。」などとませた事を云ひ出したりした。そこで奥さんも持て餘して、[illegible]たり、八[illegible]りをあてがつたり、いろいろ退屈させない心配をしたが、とうとうしまひに懐鏡を持たせて置くと、[illegible]中おとなしく坐つてゐる事實を發見した。千枝ちやんはその鏡を覗きこんで、白粉をつけ直したり、髪を撫いたり、或は又わざと顔をしかめて見たり、鏡の中の自分を相手にして、何時までも遊んでゐるからである。

奥さんはかう鏡を渡した因縁を説明して、「やつぱり子供ですわね。鏡さへ見てゐれば、それでもう何も忘れてゐられるんですから。」とつけ加へた。

自分は刹那の間、この奥さんに輕い惡意を働かせた。さうして思はず笑ひながら、こんな事を云つて冷評した。

「あなただつて鏡さへ見てゐれば、それでもう何も忘れてゐられるんぢやありませんか。千枝ちやんと違ふのは、退屈なのが汽車の中と世の中だけの差別ですよ。」

（[illegible]の「東京小品」より）

奉教人の死

たとひ三百歳の齢を保ち、樂しみ身に餘ると云ふとも、未來永永の果しなき樂しみに比ぶれば、夢幻の如し。

——慶長譯 Guia do Pecador——

善の道に立ち入りたらん人は、御教にこもる不可思議の甘味を覺ゆべし。

——慶長譯 Imitatione Christi——

一

去んぬる頃、日本長崎の「さんた・るちや」と申す「えけれしや」（寺院）に、「ろおれんぞ」と申すこの國の少年がござつた。これは或年御降誕の祭の夜、その「えけれしや」の戸口に、餓ゑ疲れてうち伏して居つたを參詣の奉教人衆が介抱し、それより伴天連の憐みにて、寺中に養はれる事となつただけでござるが、何故かその身の素性を問へば、故鄕は「はらいそ」（天國）父の名は「でうす」（天主）などと、何時も事もなげな笑に紛らいて、とんとまことは明した事もござない。なれど親の代から「ぜんちよ」（異教徒）の輩であらなんだ事だけは、手くびにかけた靑玉の「こんたつ」（念珠）を見ても、知れたと申す。されば伴天連はじめ、多くの「いるまん」衆（法兄弟）も、よも怪しいものではござるまいと、おぼされて、ねんごろに扶持して置かれたが、その信心の堅固なは、幼いにも似ず「すぺりおれす」（長老衆）が舌を捲くばかりであつたれば、一同も「ろおれんぞ」は天童の生れがはりであらうずなど申し、いづくの生れ、たれの子とも知れぬものを、無下にめでいつくしんで居つたげでござる。

して又この「ろおれんぞ」は、顏かたちが玉のやうに淸らかであつたに、聲ざまも女のやうに優しかつたれば、一しほ人人のあはれみを惹いたのでござらう。中でもこの國の「いるまん」に「しめおん」と申したは、「ろおれんぞ」を弟のやうにもてなし、「えけれしや」の出入りにも、必仲よう手を組み合せて居つた。この「しめおん」は元さる大名に仕へた、槍一すぢの家がらなものぢや。されば身のたけも拔群なに、性得の剛力であつたに由つて、伴天連が「ぜんちよ」ばらの石瓦にうたるるを、防いで進ぜた事も、一度二度の沙汰ではござない。それが「ろおれんぞ」と睦じうするさまは、とんと鳩になづむ荒鷲のやうであつたとも申さうか。或は「ればのん」山の檜に、葡萄かづらが纏ひついて、花咲いたやうであつたとも申さうず。

さる程に三年あまりの年月は、流るるやうにすぎたに由つて、「ろおれんぞ」はやがて元服もすべき時節となつた。したがその頃怪しげな噂が傳はつたと申すは、「さんた・るちや」から遠からぬ町方の傘張の娘が、「ろおれんぞ」と親しうすると云ふ事ぢや。この傘張の翁も天主の御教を奉ずる人故、娘ともども「えけれしや」へは參る慣であつたに、御祈の暇にも、娘は香爐をさげた「ろおれんぞ」の姿から、眼を離したと申す事がござない。まして「えけれしや」への出入りには、必、髮かたちを美しうして、「ろおれんぞ」のゐる方へ眼づかひをするが定であつた。されば おのづと奉教人衆の人目にも止り、娘が行きずりに「ろおれんぞ」の足を踏んだと云ひ出すものもあれば、二人が艶書をとりかはすをし

かと見とどけたと申すものも出て來たげでござる。

由つて伴天連にも、すて置かれず思されたのでござらう。或日「ろおれんぞ」を召されて、白ひげを噛みながら、「その方、傘張の娘と兎角の噂ある由を聞いたが、よもやまことではあるまい。どうぢや。」と、もの優しう尋ねられた。したが「ろおれんぞ」は、唯憂はしげに頭を振つて、「そのやうな事は一向に存じやう筈もござらぬ。」と、涙聲に繰返すばかり故、伴天連もさすがに我を折られて、年配と云ひ、日頃の信心と云ひ、かうまで申すものに僞はあるまいと思されたげでござる。

さて一應伴天連の疑は晴れてぢやが、「さんた・るちや」へ參る人人の間では、容易に、とかうの沙汰が絶えさうもござない。されば兄弟同樣にして居つた「しめおん」の氣がかりは、又人一倍ぢや。始はかやうな淫な事を、ものものしう詮議立てするが、おのれにも恥しうて、うちつけに尋ねようは元より、「ろおれんぞ」の顏さへまさかとは見られぬ程であつたが、或時「さんた・るちや」の後の庭で、「ろおれんぞ」へ宛てた娘の艶書を拾うたに由つて、人氣ない部屋にゐたを幸、「ろおれんぞ」の前にその文をつきつけて、嚇しつ賺しつ、さまざまに問ひ質いた。なれど「ろおれんぞ」は唯、美しい顏を赤らめて、「娘は私に心を寄せましたげでござれど、私は文を貰うたばかり、とんと口を利いた事もござらぬ。」と申す。なれど世間のそしりもある事でござれば、「しめおん」は猶も押して問ひ詰つたに、「ろおれんぞ」はわびしげな眼で、ぢつと相手を見つめたと思へば、「私はお主にさへ、嘘をつきさうな人間に見えるさうな。」と、咎めるやうに云ひ放つて、とんと燕か何ぞのやうに、その儘つと部屋を出つて行つてしまうた。かう云はれて見れば、「しめおん」も己の疑深かつたのが恥しうもなつたに由つて、悄悄その場を去らうとしたに、いきなり駈けこんで來たは、少年の「ろおれんぞ」ぢや。それが飛びつくやうに「しめおん」の頸を抱くと、喘ぐやうに「私が惡かつた。許して下されい。」と、囁いて、こなたが一言も答へぬ間に、涙に濡れた顏を隱さう爲か、相手をつきのけるやうに身を開いて、一散に又元來た方へ、走つて往んでしまうたと申す。されば その「私が惡かつた」と囁いたのも、娘と密通したのが惡かつたと云ふのやら、或は「しめおん」につれなうしたのが惡かつたと云ふのやら、一圓合點の致さうやうがなかつたとの事でござる。

するとその後間もなう起つたのは、その傘張の娘が孕つたと云ふ騒ぎぢや。しかも腹の子の父親は、「さんた・るちや」の「ろおれんぞ」ぢやと、正しう父の前で申したげでござる。されば傘張の翁は火のやうに憤つて、即刻伴天連のもとへ委細を訴へに參つた。かうなる上は「ろおれんぞ」も、かつふつ云ひ譯の致しやうがござない。その日の中に伴天連を始め、「いるまん」衆一同の談合に由つて、破門を申し渡さるる事になつた。元より破門の沙汰がある上は、伴天連の手もとをも追ひ拂はれる事でござれば、糊口のよすがに困るのも目前ぢや。したがかやうな罪人を、この儘「さんた・るちや」に止めて置いては、御主の「ぐろおりや」（榮光）にも關る事ゆゑ、日頃親しう致いた人人も、涙をのんで「ろおれんぞ」を追ひ拂つたと申す事でござる。

その中でも哀れを とどめたは、兄弟のやうにして居つた「しめおん」の身の上ぢや。これは「ろおれんぞ」が追ひ出されると云ふ悲しさよりも、「ろおれんぞ」に欺かれたと云ふ腹立たしさが一倍故、あのいたいけな少年が、折からの凩が吹く中へ、しをしをと戸口を出かかつたに、傍から拳をふるうて、したたかその美しい顏を

を打つた。「ろおれんぞ」は剛力に打たれたに由つて、思はずそこへ倒れたが、やがて起きあがると、涙ぐんだ眼で、空を仰ぎながら、「御主も許させ給へ。『しめおん』は己が仕業もわきまへぬものでござる」と、わななく声で祈つたと申す事ぢや。「しめおん」もこれには気が挫けたのでござらう。暫くは戸口に立つて、拳を空にふるうて居つたが、その外の「いるまん」衆も、いろいろととりないたれば、それを機会に手を束ねて、嵐も吹き出でようず空の如く、凄じく顔を曇らせながら、悄々「さんた・るちや」の門を出る「ろおれんぞ」の後姿を、貪るやうにきつと見送つて居つた。その時居合はせた奉教人衆の話を伝へ聞けば、時しも凩にゆらぐ日輪が、うなだれて歩む「ろおれんぞ」の頭のかなた、長崎の西の空に沈まうず景色であつたに由つて、あの少年のやさしい姿は、とんと一天の火焔の中に、立ちきはまつたやうに見えたと申す。

その後の「ろおれんぞ」は、「さんた・るちや」の内陣に香炉をかざした昔とは打つて変つて、町はづれの非人小屋に起き伏しする、世にも哀れな乞食であつた。ましてその前身は、「ぜんちよ」の輩には××のやうにさげしまるる、天主の御教を奉ずるものぢや。されば町を行けば、心ない童部に嘲らるるは元より、刀杖瓦石の難に遭うた事も、度々ござるげに聞き及んだ。いや、嘗ては、長崎の町にはびこつた、恐しい熱病にとりつかれて、七日七夜の間、道ばたに伏しまろんでは、苦み悶えたとも申す事でござる。したが、「でうす」無量無辺の御愛憐は、その都度「ろおれんぞ」が一命を救はせ給うたのみか、施物の米銭のない折々には、山の木の実、海の魚貝など、その日の糧を恵ませ給ふのが常であつた。由つて「ろおれんぞ」も、朝夕の祈は「さんた・るちや」に在つた昔を忘れず、手くびにかけた「こんたつ」も、青玉の色を変へなかつたと申す事ぢや。なんのそれのみか、夜毎に更闌けて人音も静まる頃となれば、この少年はひそかに町はづれの非人小屋を脱け出いて、月を踏んで住み馴れた「さんた・るちや」へ、御主「ぜす・きりしと」の御加護を祈りまゐらせに詣でて居つた。

なれど同じ「えけれしや」に詣づる奉教人衆も、その頃はとんと、「ろおれんぞ」を疎んじはてて、伴天連はじめ、誰一人憐みをかくるものもござらなんだ。ことわりかな、破門の折から所行無慚の少年と思ひこんで居つたに由つて、何として夜毎に、独り「えけれしや」へ参る程の、信心ものぢやとは知られうぞ。これも「でうす」千万無量の御計らひの一つ故、よしない儀とは申しながら、「ろおれんぞ」が身にとつては、いみじくも亦哀れな事でござつた。

さる程に、こなたはあの傘張の娘ぢや。「ろおれんぞ」が破門されると間もなく、月も満たず男の子を産み落いたが、さすがにかたくなしい父の翁も、初孫の顔は憎からず思うたのでござらう、娘ともども大切に介抱して、自ら抱きもし、かかへもし、時にはもてあそびの人形などもとらせたと申す事でござる。翁は元よりさもあらうずなれど、ことに稀有なは「いるまん」の「しめおん」ぢや。あの「ぢやぼ」（悪魔）をも挫がうず大男が、娘に子が産まれるや否や、暇ある毎に傘張の翁を訪れて、無骨な腕に幼子を抱き上げては、にがにがしげな顔に涙を浮べて、弟と愛しんだ、あえかな「ろおれんぞ」の優姿を、思ひ慕つて居つたと申す。唯、娘のみは、「さんた・るちや」を出でてこの方、絶えて「ろおれんぞ」が姿を見せぬのを、怨めしう歎きわびた気色であつたれば、「しめおん」の訪れるのさへ、何かと快からず思うげに見えた。

この国の諺にも、光陰に関守なしと申す通り、とかうする程に、一年あまりの年月は、瞬

くひまに過ぎたと思召されい。ここに思ひもよらぬ大變が起つたと申すは、一夜の中に長崎の町の半ばを燒き拂つた、あの大火事のあつた事ぢや。まことにその折の景色の凄じさは、末期の御裁判の喇叭の音が、一天の火の光をつんざいて、鳴り渡つたかと思はれるばかり、世にも身の毛のよだつものでござつた。その時、あの傘張の翁の家は、運惡う風下にあつたに由つて、見る見る焔に包まれたが、さて親子眷族、慌てふためいて、逃げ出いて見れば、娘が産んだ女の子の姿が見えぬと云ふ始末ぢや。一定、一間どころに寢かいて置いたを、忘れてここまで逃げのびたのであらうず。されば翁は足ずりをして罵りわめく。娘も亦、人に遮られずば、火の中へも馳せ入つて、助け出さう氣色に見えた。なれど風は益加はつて、焔の舌は天上の星をも焦さうず吼り狂ふ。それ故火を救ひに集つた町方の人人も、唯、あれよあれよと立ち騒いで、狂氣のやうな娘をとり鎭めるより外に、せん方も亦あるまじい。所へひとり、多くの人を押しわけて、駈けつけて參つたは、あの「いるまん」の「しめおん」でござる。これは矢玉の下もくぐつたげな、逞しい大丈夫でござれば、ありやうを見るより早く、勇んで焔の中へ向うたが、あまりの火勢に辟易致いたのでござらう。二三度煙をくぐつたと見る間に、背をめぐらして、一散に逃げ出いた。して翁と娘とが佇んだ前へ來て、「これも「でうす」萬事にかなはせたまふ御計らひの一つぢや。詮ない事とあきらめられい。」と申す。その時翁の傍から、誰とも知らず、高らかに「御主、助け給へ。」と叫ぶものがござつた。聲ざまに聞き覺えもござれば、「しめおん」が頭をめぐらして、その聲の主をきつと見れば、いかな事、これは紛ひもない「ろおれんぞ」ぢや。清らかに痩せ細つた顏は、火の光に赤うかがやいて、風に亂れる黒髮も、肩に餘るげに思はれたが、哀れにも美しい眉目のかたちは、一目見てそれと知られた。その「ろおれんぞ」が、乞食の姿のまま、群る人人の前に立つて、目もはなたず燃えさかる家を眺めて居る。と思うたのは、まことに瞬く間もない程ぢや。一しきり焔を煽つて、恐しい風が吹き渡つたと見れば、「ろおれんぞ」の姿はまつしぐらに、早くも火の柱、火の壁、火の梁の中にはいつて居つた。「しめおん」は思はず遍身に汗を流いて、空高く「くるす」(十字)を描きながら、己も「御主、助け給へ。」と叫んだが、何故かその時心の眼には、凩に搖る日輪の光を浴びて、「さんた・るちや」の門に立ちきはまつた、美しく悲しげな、「ろおれんぞ」の姿が浮んだと申す。

なれどあたりに居つた奉教人衆は、「ろおれんぞ」が健氣な振舞に驚きながらも、破戒の昔を忘れかねたのでもござらう。忽ち兎角の批判は風に乘つて、人どよめきの上を渡つて參つた。と申すは、「さすが親子の情あひは爭はれぬものと見えた。己が身の罪を恥ぢて、このあたりへは影も見せなんだ「ろおれんぞ」が、今こそ一人子の命を救はうとて、火の中へはいつたぞよ。」と、誰ともなく罵りかはしたのでござる。これには翁さへ、同心と覺えて、「ろおれんぞ」の姿を眺めてからは、怪しい心の騒ぎを隱さうず爲か、立ちつ居つ身を悶えて何やら愚しい事のみを、高らかにひとりわめいて居つた。なれど當の娘ばかりは、狂ほしく大地に跪いて、兩の手で顏をうづめながら、一心不亂に祈誓を凝らいて、身動きをする氣色さへもござない。その空には火の粉が雨のやうに降りかかる。煙も地を掃つて、面を打つた。したが、娘は默然と頭を垂れて、身も世も忘れた祈り三昧でござる。

とかうする程に、再、火の前に群つた人人

が、一度にどつとどよめくかと見れば、髪をふり亂いた「ろおれんぞ」が、もろ手に幼子をかい抱いて、亂れとぶ焰の中から、天くだるやうに姿を現いた。なれどその時、燃え盡きた梁の一つが、俄に半ばから折れたのでござらう。凄じい音と共に、一なだれの煙焰が、半空に迸つたと思ふ間もなく、「ろおれんぞ」の姿ははたと見えずなつて、跡には唯火の柱が、珊瑚の如くそば立つたばかりでござる。

あまりの凶事に心も消えて、「しめおん」をはじめ翁まで、居あはせた程の奉教人衆は、皆目の眩む思ひがござつた。中にも娘はけたたましう泣き叫んで、一度は脛もあらはに躍り立つたが、やがて雷に打たれた人のやうに、そのまま大地にひれふしたと申す。さもあらばあれ、ひれふした娘の手には、何時かあの幼い女の子が、生死不定の姿ながら、ひしと抱かれて居つたをいかにしようぞ。ああ、廣大無邊なる「でうす」の御知慧、御力は何とたとへ奉る詞だにござない。燃え崩れる梁に打たれながら、「ろおれんぞ」が必死の力をしぼつて、こなたへ投げた幼子は、折よく娘の足もとへ、怪我もなくまろび落ちたのでござる。

されば娘が大地にひれ伏して、嬉し涙に咽んだ聲と共に、もろ手をさしあげて立つた翁の口からは、「でうす」の御慈悲をほめ奉る聲が、自らおごそかに溢れて參つた。いや、まさに溢れようずけはひであつたとも申さうか。それより先に「しめおん」は、さかまく火の嵐の中へ、「ろおれんぞ」を救はうず一念から、眞一文字に躍りこんだに由つて、翁の聲は再、氣づかはしげな、いたましい祈りの詞となつて、夜空に高くあがつたのでござる。これは元より翁のみではござない。親子を圍んだ奉教人衆は、皆一同に聲を揃へて、「御主、助け給へ。」と、泣く泣く祈りを捧げたのぢや。して「びるぜん・まりや」の御子、なべての人の苦しみを己がものの如くに見そなはす、われらが御主「ぜす・きりしと」は、遂にこの祈りを聞き入れ給うた。見られい。むごたらしう焼けただれた「ろおれんぞ」は、「しめおん」が腕に抱かれて、早くも火と煙とのただ中から、救ひ出されて參つたではないか。

なれどその夜の大變は、これのみではござなんだ。息も絶え絶えな「ろおれんぞ」が、とりあへず奉教人衆の手に舁かれて、風上にあつたあの「えけれしや」の門へ横へられた時の事ぢや。それまで幼子を胸に抱きしめて、涙にくれてゐた傘張の娘は、折から門へ出でられた伴天連の足もとに跪くと、並居る人人の目前で、「この女子は『ろおれんぞ』樣の種ではおぢやらぬ。まことは妾が家隣の『ぜんちよ』の子と密通して、まうけた娘でおぢやるわいの。」と、思ひもよらぬ「こひさん」(懺悔)を仕つた。その思ひつめた聲ざまの震へと申し、その泣きぬれた雙の眼のかがやきと申し、この「こひさん」には、露ばかりの僞さへ、あらうとは思はれ申さぬ。道理かな、肩を竝べた奉教人衆は、天を焦がす猛火も忘れて、息さへつかぬやうに聲を呑んだ。

娘が涙ををさめて申し次いだは、「妾は日頃『ろおれんぞ』樣を戀ひ慕うて居つたなれど、御信心の堅固さからあまりにつれなくもてなされる故、つい怨む心も出て、腹の子を『ろおれんぞ』樣の種と申し僞り、妾につらかつた口惜しさを思ひ知らさうと致いたのでおぢやる。なれど、『ろおれんぞ』樣の御心の氣高さは、妾が大罪をも憎ませ給はいで、今宵は御身の危さをもうち忘れ、『いんへるの』地獄にもまがふ火焰の中から、妾が娘の一命を辱くも救はせ給うた。その御憐み、御計ひ、まことに御主『ぜす・きりしと』の再來かともをがまれ申す。さるにても妾が重重の極惡を思へば、この五體は忽『ぢやぼ』の爪にかかつて、寸寸に裂か

その女の一生は、この外に何一つ、知られなんだげに聞き及んだ。なれどそれが、何事でござらうぞ。なべて人の世の尊さは、何ものにも換へ難い、刹那の感動に極るものぢや。暗夜の海にも譬へようず煩惱心の空に一波をあげて、未出ぬ月の光を、水沫の中へ捕へてこそ、生きて甲斐ある命とも申さうず。されば「ろおれんぞ」が最期を知るものは、「ろおれんぞ」の一生を知るものではござるまいか。

二

予が所藏に關る、長崎耶蘇會出版の一書、題して「れげんだ・おうれあ」と云ふ。蓋し、LEGENDA AUREA の意なり。されど内容は必しも、西歐の所謂「黄金傳說」ならず。彼土の使徒聖人が言行を錄すると共に、併せて本邦西教徒が勇猛精進の事蹟をも採錄し、以て福音傳道の一助たらしめんとせしものの如し。

體裁は上下二卷、美濃紙摺草體交り平假名文にして、印刷甚しく鮮明を缺き、活字なりや否やを明にせず。上卷の扉には、羅甸字にて書名を橫書し、その下に漢字にて「御出世以來千五百九十六年、慶長二年三月上旬鏤刻也」の二行を縱書す。年代の左右には喇叭を吹ける天使の畫像あり。技巧頗る幼稚なれども、亦掬す可き趣致なしとせず。下卷も扉に「五月中旬鏤刻也」の句あるを除いては、全く上卷と異同なし。

兩卷とも紙數は約六十頁にして、載する所の黄金傳說は、上卷八章、下卷十章を數ふ。その他各卷の卷首に著者不明の序文及羅甸字を加へたる目次あり。序文は文章雅馴ならずして、間々歐文を直譯せる如き語法を交へ、一見その伴天連たる西人の手になりしやを疑はしむ。

以上採錄したる「奉教人の死」は、該「れげんだ・おうれあ」下卷第二章に依るものにして、恐らくは當時長崎の一西教寺院に起りし、事實の忠實なる記錄ならんか。但、記事の大火なるものは、「長崎港草」以下諸書に徵するも、その有無をすら明にせざるを以て、事實の正確なる年代に至つては、全くこれを決定するを得ず。

予は「奉教人の死」に於て、發表の必要上、多少の文飾を敢てしたり。もし原文の平易雅馴なる筆致にして、甚しく毀損せらるる事なからんか、予の幸甚とする所なりと云爾。

(大正七年八月作)

惡魔

惡魔の數甚多し。總數百七十四萬五千九百二十六匹あり。分つて七十二隊と爲し、一隊每に隊長一匹を置くとぞ。是れ十六世紀の末葉、獨人 Wierus が惡魔學に載する所、紀古今を問はず、東西を論ぜず、魔界の消息を傳へて詳密なる、斯くの如きものはあらざるべし。(十六世紀の歐羅巴には、惡魔學の先達尠からず。ウイルスが外にも、以太利の Pietro d'Apone の如き、英吉利の Reginald Scot の如き、皆天下に雷名あり。)又曰、惡魔の變化自在なる、法律家となり、崑崙奴となり、黑驢となり、僧人となり、驢となり、猫となり、兎となり、或は馬車の車輪となると。既に馬車の車輪となる。豈半夜人を誘つて、煙花城中に去らんとする自動車の車輪とならざらんや。畏る可く、戒む可し。

(『點心』の「骨董羹」より)

るしへる

天主初成世界　隨造三十六神　第一鉅神　云輅齊布兒（中略）自謂其智與天主等　天主怒而貶入地獄（中略）輅齊雖入地獄受苦　一半魂神作魔鬼遊行世間　退人善念

——左闢第三闢裂性中艾儒略荅許大受語——

一

破提宇子と云ふ天主教を辯難した書物のある事は、知つてゐる人も少くあるまい。これは、元和六年、加賀の禪僧巴毗弇なるものゝ著した書物である。巴毗弇は當初南蠻寺に住した天主教徒であつたが、その後何かの事情から、DS如來を捨てて佛門に歸依する事になつた。書中に云つてゐる所から推すと、彼は老儒の學にも造詣のある、一かどの才子だつたらしい。

破提宇子の流布本は、華頂山文庫の藏本を、明治戊辰の頃、杞憂道人鵜飼徹定の序文と共に、出版したものである。が、その外にも異本がない譯ではない。現に予が所藏の古寫本の如きは、流布本と内容を異にする個所が多少ある。

中でも同書の第三段は、惡魔の起原を論じた一章であるが、流布本のそれに比して、予の藏本では内容が遙に多い。巴毗弇自身の目撃した惡魔の記事が、あの辛辣な辯難攻擊の間に態々引證されてゐるからである。この記事が流布本に載せられてゐない理由は、恐らくその餘りに荒唐無稽に類する所から、かう云ふ破邪顯正を標榜する書物の性質上、故意の脱漏を利としたからでもあらうか。

予は以下にこの異本第三段を紹介して、聊、巴毗弇の前に姿を現した、日本の Diabolus を一瞥しようと思ふ。猶、巴毗弇に關して、詳細を知りたい人は、新村博士の巴毗弇に關する論文を一讀するが好い。

二

提宇子のいはく、DSは、すひりつあるすたんしや、とて、無色無形の實體にて、間に髮を入れず、天地いづくにも充滿して在ませども、別して威光を顯し善人に樂を與へ玉はん爲にはらいそ、とて極樂世界を作り、上に在り玉ふ。その始人間よりも前に、安助、とて無量無數の天人を造り、いまだ色體を顯し玉はず。上一人の位を望むべからずとの天戒を定め玉ひ、この天戒を守らばその功德に依つて、DSの尊體を拜し、不退の樂を極むべし。若し又破戒せばいんへるの、とて、寒熱充滿の地獄に墮し、苛責無盡の苦難を與ふべしとの義なりしに、造られて未だ一刻をも經ざるに、即ち無量の安助の中にるしへる、と云へる安助、DSの尊體に誇つて我は是DSなり、我を拜せよと勸めしに、かの無量の安助の中、三分が一はるしへるに同意し、多分は與せず。茲に於てDSるしへるを始とし、彼に與せし三分の一の安助をば下界へ追ひ下し、「いんへるの」に墮せしめ玉ふ。即、安助高慢の科に依つて、「じやぼ」とて天狗と成りたるものなり。

破していはく、汝提宇子、この段を說く事、ひとへに自縄自縛なり。先DSは、いづくにも充ち滿ちて在ますと云ふは、眞如法性本分の天地に充塞し、六合に遍滿したる理を、聞きはつりと云ふかと覺えたり。似たる事は似たれども、是なる事は未だ是ならずとは、如此の事をや云ふ可き。さて汝云はずや、DSはさひえん

いしもとて、三世了達の智なりとは。然らば彼安助を造らば、即時に科に落つ可きと云ふ事を知らずんばあるべからず、知らずんば、三世了達の智と云へば虚誕なり、又知りながら造りたらば、慳貪の第一なり、萬事に叶ふ天主ならば、安助の科に墮せざるやうには、何とて造らざるぞ。科に落つるを心に任せ置きたるは、頗る天魔を造りたるものなり。無用の天狗を造り、邪魔を爲とするは、何と云ふ事ぞ。されど「ぢやぼ」と云ふ天狗、もとよりこの世になしと云ふべからず。唯、こゝ安助を造り、安助惡魔と成りし理、聞えずと辯ずるのみ。

よし又、「ぢやぼ」の成り立ちは、さる事なりとするも、汝がこれを以て極惡兇猛の鬼物となす條、甚以て不審なり。その故は、われ、昔、南蠻寺に住せし時、惡魔「るしへる」を目のあたりに見し事ありしが、彼自らその然らざる理を述べ、人間の「ぢやぼ」を知らざる事、夥しきを歎きしを如何。云ふこと勿れ、巴毗弇、天魔の惑亂する所となり、妄に胡亂の言をなすと。天主と云ふ名に嚇されて、正法の明なるを悟らざる汝提宇子こそ、愚癡のただ中よ、わが眼より見れば、尊げに、さんた・まりあ、など念じ玉ふ、伴天連の數は多けれど、惡魔るしへる程の議論者は、一人もあるまじく存ずるなり。今、事の序なれば、わが「ぢやぼ」に會ひし次第、南蠻の語にては「あぼくりは」とも云ふべきを、あらあら下に記し置かん。

年月の程は、さる可き用もなければ云はず。とある年の秋の夕暮、われ獨り南蠻寺の境内なる花木の茂みを歩みつつ、同じく切支丹宗門の門徒にして、さるやんごとなきあたりの夫人が、涙ながらの懺悔を思ひめぐらし居たる事あり。先つごろ、その夫人のわれに申されけるは、「この程、怪しき事あり。日夜何ものとも知れず、わが耳に囁きて、如何ぞさばかりむくつけき夫のみ守れる。世には情ある男も少からぬものをと云ふ。しかもその聲を聞く毎に、神魂忽ち恍惚として、戀慕の情、自ら止め難し。さればとて、又、誰と契らんと願ふにもあらず、唯、わが身の年若く、美しき事のみなげかれ、徒らなる思に身を焦すなり」と。われ、その時、宗門の戒法を説き、且、嚴に誡めけるは、「その聲こそ、一定惡魔の所爲とは覺えたれ。總じて、この「ぢやぼ」には、七つの恐しき罪に人間を誘ふ力あり、一に驕慢、二に憤怒、三に嫉妬、四に貪望、五に色慾、六に饕餮、七に懈怠、一つとして墮獄の惡趣たらざるものなし。されば DS が大慈大悲の泉源たるとうらうへにて、「ぢやぼ」は一切諸惡の根本なれば、苟くも天主の御教を奉ずるものは、かりそめにもその爪牙に近づくべからず。唯、專念に祈禱を唱へ、DS の御徳にすがり奉つて、萬一にいんへるのの業火に燒かるる事を免るべし」と。われ、更に又南蠻の書にて見たる、惡魔の凄じき形相など、こまごまと談りければ、夫人も今更に「ぢやぼ」の恐しさを思ひ知られ、「さてはその蝙蝠の翼、山羊の蹄、蛇の鱗を備へしものが、目にこそ見えね、わが耳のほとりに蹲りて、淫らなる戀を囁くにや」と、身ぶるひして申されたり。われ、その一部始終を心の中に繰返しつつ、異國より移し植ゑたる、名も知らぬ草木の薫しき花を分けて、ほの暗き小路を歩み居しが、ふと眼を擧げて、行手を見れば、われを去る事十歩ならざるに、伴天連めきたる人影あり。その人、わが眼を擧ぐるより早く、風の如く來りて、問ひけるは、「汝、われを知るや」と。われ、眼を定めてその人を見れば、面はさながら崑崙奴の如く黒けれど、眉目さまで卑しからず、身には法服の裾長きを着て、首のめぐりには黄金の飾りを垂れたり。われ、遂にその面を見知らざりしかば、否と答へけるに、その人、忽ち嘲笑ふが如き聲にて、「われは惡魔るしへ

枯野抄

丈艸、去來を召し、昨夜目のあはざるまま、ふと案じ入りて、呑舟に書かせたり、おのおの咏じたまへ
旅に病んで夢は枯野をかけめぐる
——花屋日記——

元祿七年十月十二日の午後である。一しきり、赤赤と朝燒けた空は、又昨日のやうに時雨れるかと、大阪商人の寢起の眼を、遠い瓦屋根の向うに誘つたが、幸、葉をふるつた柳の梢を、煙らせる程の雨もなく、やがて曇りながらもうす明い、もの靜な冬の晝になつた。立ちならんだ町家の間を、流れるともなく流れる川の水さへ、今日はぼんやりと光澤を消して、その水に浮く葱の屑も、氣のせゐか靑い色が冷たくない。まして岸を行く往來の人人は、丸頭巾をかぶつたのも、革足袋をはいたのも、皆凩の吹く世の中を忘れたやうに、うつそりとして歩いて行く。暖簾の色、車の行きかひ、人形芝居の遠い三味線の音——すべてがうす明い、もの靜な冬の晝を、橋の擬寶珠に置く町の埃も、動かさない位、ひつそりと守つてゐる……

この時、御堂前南久太郎町、花屋仁左衞門の裏座敷では、當時俳諧の大宗匠と仰がれた芭蕉庵松尾桃靑が、四方から集つて來た門下の人人に介抱されながら、五十一歳を一期として、「埋火のあたたまりの冷むるが如く、」靜に息を引きとらうとしてゐた。時刻は凡そ、申の中刻にも近からうか。——隔ての襖をとり拂つた、だだつ廣い座敷の中には、枕頭に焚きさした香の煙が、一すぢ昇つて、天下の冬を庭さきに堰いた、新しい障子の色も、ここばかりは暗くかげりながら、身にしみるやうに冷冷する。その障子の方を枕にして、寂然と橫はつた芭蕉のまはりには、先、醫者の木節が、夜具の下から手を入れて、間遠い脈を守りながら、浮かない眉をひそめてゐた。その後に居すくまつて、さつきから小聲の稱名を絕たないのは、今度伊賀から伴に立つて來た、老僕の治郎兵衞に違ひない。

と思ふと木節の隣には、誰の眼にもそれと知れる、大兵肥滿の晋子其角が、紬の角通しの懷を鷹揚にふくらませて、憲法小紋の肩をそば立てた、ものごしの凜凜しい去來と一しよに、ぢつと師匠の容態を窺つてゐる。それから其角の後には、法師じみた丈艸が、手くびに菩提樹の珠數をかけて、端然と控へてゐたが、隣に座を占めた乙州の、絕えず鼻を啜つてゐるのは、もうこみ上げて來る悲しさに、堪へられなくなつたからであらう。その容子をじろじろ眺めながら、古法衣の袖をかきつくろつて、無愛想な頤をそらせてゐる、背の低い僧形は惟然坊で、これは色の淺黑い、剛愎さうな支考と肩をならべて、木節の向うに坐つてゐた。あとは唯、何人かの弟子たちが皆息もしないやうに靜まり返つて、或は右、或は左と、師匠の床を圍みながら、限りない死別の名殘りを惜しんでゐる。が、その中でもたつた一人、座敷の隅に蹲つて、ぴつたり疊にひれ伏した儘、慟哭の聲を洩してゐるのは、正秀ではないかと思はれる。しかしこれさへ、座敷の中のうすら寒い沈默に抑へられて、枕頭の香のかすかな匂を、擾す程の聲も立てない。

芭蕉はさつき、痰喘のかすれた聲で、覺束な

い遺言をした後は、半ば眼を開いた儘、昏睡の状態にはいつたらしい。うす痘痕のある顔は、顴骨ばかり露に痩せ細つて、皺に圍まれた唇にも、とうに血の氣がなくなつてしまつた。殊に傷々しいのはその眼の色で、これはぼんやりした光を浮べながら、まるで屋根の向うにある、際限ない寒空でも望むやうに、徒に遠い所を見やつてゐる。「旅に病むで夢は枯野をかけめぐる。」――事によるとこの時、このとりとめのない視線の中には、三四日前に彼自身が、その辭世の句に詠じた通り、茫々とした枯野の暮色が、一痕の月の光もなく、夢のやうに漂つてゐたのかも知れない。

「水を。」

木節はやがてかう云つて、靜に後にゐる治郎兵衛を顧みた。一椀の水と一本の羽根楊子とは、既にこの老僕が、用意して置いた所である。彼はその二品をおづおづ主人の枕もとへ押し並べると、思ひ出したやうに又、口を早めて、專念に稱名を唱へ始めた。治郎兵衛の素朴な、山家育ちの心には、芭蕉にせよ、誰にせよ、ひとしく彼岸に往生するのなら、ひとしく又、彌陀の慈悲にすがるべき筈だと云ふ、堅い信念が根を張つてゐたからであらう。

一方又木節は、「水を。」と云つた刹那の間、果して自分は醫者として、萬方を盡したらうかと云ふ、何時もの疑惑に遭遇したが、すぐに又自ら勵ますやうな心もちになつて、隣にゐた其角の方をふりむきながら、無言の儘、ちよいと合圖をした。芭蕉の床を圍んでゐた一同の心に、「愈」と云ふ緊張した感じが咄嗟に閃いたのはこの時である。が、その緊張した感じと前後して、一種の弛緩した感じが――云はば、來る可きものが遂に來たと云ふ、安心に似た心もちが、通りすぎた事も亦爭はれない。唯、この安心に似た心もちは、誰もその意識の存在を肯定しようとはしなかつた程、微妙な性質のものであつたからか、現にここにゐる一同の中では、最も現實的な其角でさへ、折から顔を見合せた木節と、際どく相手の眼の中に、同じ心もちを讀み合つた時は、流石にぎよつとせずにはゐられなかつたのであらう。彼は慌しく視線を側へ外らせると、さり氣なく羽根楊子をとりあげて、

「では、御先へ。」と、隣の去來に挨拶した。さうしてその羽根楊子へ湯呑の水をひたしながら、厚い膝をにじらせて、そつと今はの師匠の顔をのぞきこんだ。實を云ふと彼は、かうなるまでに、師匠と今生の別をつげると云ふ事は、さぞ悲しいものであらう位な、豫測めいた考もなかつた譯ではない。が、かうして愈、末期の水をとつて見ると、自分の實際の心もちは全然その芝居めいた豫測を裏切つて、如何にも冷淡に澄みわたつてゐる。のみならず、更に其角が意外だつた事には、文字通り骨と皮ばかりに痩せ衰へた、致死期の師匠の不氣味な姿は、殆、面を背けずにはゐられなかつた程、烈しい嫌惡の情を彼に起させた。いや、單に烈しいと云つたのでは、まだ十分な表現ではない。それは恰も目に見えない毒物のやうに、生理的な作用さへも及ぼして來る、最も堪へ難い種類の嫌惡であつた。彼はこの時、偶然な契機によつて、醜き一切に對する反感を師匠の病軀の上に洩らしたのであらうか。或は又「生」の享樂家たる彼にとつて、そこに象徴された「死」の事實が、この上もなく呪ふ可き自然の威嚇だつたのであらうか。――兎に角、垂死の芭蕉の顔に、云ひやうのない不快を感じた其角は、殆、何の悲しみもなく、その紫がかつた唇に、一刷毛の水を塗るや否や、顔をしかめて引き下つた。尤もその引き下る時に、自責に似た一種の心もちが、刹那に彼の心をかすめもしたが、彼の先に感じてゐた嫌惡の情は、さう云ふ道徳

悲に斷すべく、餘り強烈だつたものらしい。

其角に次いで羽根楊子をとり上げたのは、さつき木節が相圖をした時から、既に心の落着きを失つてゐたらしい去來である。日頃から恭謙の名を得てゐた彼は、一同に輕く會釋をして、芭蕉の枕もとへすりよつたが、そこに横はつてゐる老俳諧師の病みほうけた顏を眺めると、或滿足と悔恨との不思議に錯雜した心もちを、嫌でも味はなければならなかつた。しかもその滿足と悔恨とは、まるで陰と日向のやうに、離れられない因縁を背負つて、實はこの四五日以前から、絶えず小心な彼の氣分を搔亂してゐたのである。と云ふのは、師匠の重病だと云ふ知らせを聞くや否や、すぐに伏見から船に乘つて、深夜にもかまはず、この花屋の門を叩いて以來、彼は師匠の看病を一日も怠つたと云ふ事はない。その上之道に頼みこんで手傳ひの周旋を引き受けさせるやら、住吉大明神へ人を立てて病氣本復を祈らせるやら、或は又花屋仁左衞門に相談して調度類の買入れをして貰ふやら、殆、彼一人が車輪になつて、萬事萬端の世話を燒いた。それは勿論去來自身進んで事に當つたので、誰に恩を著せようと云ふ氣も、皆無だつた事は事實である。が、一身を擧げて師匠の介抱に沒頭したと云ふ自覺は、勢、彼の心の底に大きな滿足の種を蒔いた。それが唯、意識せられざる滿足として、彼の活動の背景に暖い心もちをひろげてゐた中は、元より彼も行住坐臥に、何等のこだはりを感じなかつたらしい。さもなければ夜伽の行燈の光の下で、支考と浮世話に耽つてゐる際にも、故に孝道の義を釋いて、自分が師匠に仕へるのは親に仕へる心算だなどと、長長しい述懷はしなかつたであらう。しかしその時、得意な彼は、人の惡い支考の顏に、ちらりと閃いた苦笑を見ると、急に今までの心の調和に狂ひの出來た事を意識した。さうしてその狂ひの原因は、始めて氣のついた自分の滿足と、その滿足に對する自己批評とに存してゐる事を發見した。明日にもわからない大病の師匠を看護しながら、その容態をでも心配する事か、徒に自分の骨折ぶりを滿足の眼で眺めてゐる。——これは確に、彼の如き正直者の身にとつて、自ら疚しい心もちだつたのに違ひない。それ以來去來は何をするのにも、この滿足と悔恨との扞格から、自然と或る程度の掣肘を感じ出した。殊に支考の眼の中に、偶然でも微笑の影が見える時は、反つてその滿足の自覺なるものが、一層明白に意識されて、その結果、愈自分の卑しさを情なく思つた事も度度ある。それが何日か續いた今日、かうして師匠の枕もとで、末期の水を供する段になると、道德的に潔癖な、しかも存外神經の纖弱な彼が、かう云ふ内心の矛盾の前に、全然落着きを失つたのは、氣の毒ではあるが無理もない。だから去來は羽根楊子をとり上げると、妙に體中が固くなつて、その水を含んだ白い先も、芭蕉の脣を撫でながら、頻にふるへてゐた位、異常な興奮に襲はれた。が、幸、それと共に、彼の睫毛に溢れようとしてゐた、涙の珠もあつたので、彼を見てゐた門弟たちは、恐らくあの辛辣な支考まで、全くこの興奮も彼の悲しみの結果だと解釋してゐた事であらう。

やがて去來が又憲法小紋の肩をそば立てて、おづおづ席に復すると、羽根楊子はその後にゐた丈艸の手へわたされた。日頃から老實な彼が、つつましく伏眼になつて、何やらかすかに口の中で誦しながら、靜に師匠の脣を沾してゐる姿は、恐らく誰の見た眼にも嚴だつたのに相違ない。が、この嚴な瞬間に突然座敷の片すみからは、不氣味な笑ひ聲が聞え出した。いや、少くともその時は、聞え出したと思はれたのである。それはまるで腹の底からこみ上げて

來る哄笑が、喉と脣とに堰かれながら、しかも猶可笑しさに堪へ兼ねて、切れ切れに鼻の孔から、迸つて來るやうな聲であつた。が、云ふまでもなく、誰もこの場合、笑を失したものがあつた譯ではない。聲は實にさつきから、涙にくれてゐた正秀の抑へに抑へてゐた慟哭が、この時胸を裂いて溢れたのである。その慟哭は勿論、悲愴を極めてゐたのに相違なかつた。或はそこにゐた門弟の中には、「塚も動けわが泣く聲は秋の風」と云ふ、師匠の名句を思ひ出したものも、少くはなかつた事であらう。が、その凄絶なる可き慟哭にも、同じく涙に咽ばうとしてゐた乙州は、その中にある一種の誇張に對して、――と云ふのが穩でないならば、慟哭を抑制すべき意志力の缺乏に對して、多少不快を感ぜずにはゐられなかつた。唯、さう云ふ不快の性質は、どこまでも智的なものに過ぎなかつたのであらう。彼の頭は否と云つてゐるにも關らず、彼の心臟は忽ち正秀の哀慟の聲に動かされて、何時か眼の中は涙で一ぱいになつた。が、彼が正秀の慟哭を不快に思ひ、惹いては彼自身の涙をも潔しとしない事は、さつきと少しも變りはない。しかも涙は益、眼に溢れて來る――乙州は遂に兩手を膝の上についた儘、思はず嗚咽の聲を洩らしてしまつた。が、この時歔欷するらしいけはひを洩らしたのは、獨り乙州ばかりではない。芭蕉の床の裾の方に控へてゐた、何人かの弟子の中からは、それと殆、同時に洟をすする聲が、しめやかに冴えた座敷の空氣をふるはせて、斷續しながら聞え始めた。

その惻々として悲しい聲の中に、菩提樹の念珠を手頸にかけた丈艸は、元の如く靜に席へ返つて、あとには其角や去來と向ひあつてゐる、支考が枕もとへ進みよつた。が、この皮肉屋を以て知られた東花坊には周圍の感傷に誘ひこまれて、徒に涙を落すやうな纖弱な神經はなかつたらしい。彼は何時もの通り淺黒い顏に、何時もの通り人を莫迦にしたやうな容子を浮べて、更に又何時もの通り妙に横風に構へながら、無造作に師匠の脣へ水を塗つた。しかし彼と雖もこの場合、勿論多少の感慨があつた事は爭はれない。「野ざらしを心に風のしむ身かな」――師匠は四五日前に、「かねては草を敷き、土を枕にして死ぬ自分と思つたが、かう云ふ美しい蒲團の上で、往生の素懷を遂げる事が出來るのは、何よりも悦ばしい。」と繰返して自分たちに、禮を云はれた事がある。が、實は枯野のただ中も、この花屋の裏座敷も、大した相違がある譯ではない。現にかうして口をしめしてゐる自分にしても、三四日前までは、師匠に辭世の句がないのを氣にかけてゐた。それから昨日は、師匠の發句を滅後に一集する計畫を立ててゐた。最後に今日は、たつた今まで、刻々臨終に近づいて行く師匠を、どこかその經過に興味でもあるやうな、冷淡な眼で眺めてゐた。もう一歩進めて皮肉に云へば、事によるとその眺め方の背後には、他日自分の筆によつて書かるべき終焉記の一節さへ、豫想されてゐなかつたとは云へない。して見れば師匠の命終に侍しながら、自分の頭を支配してゐるものは、他門への名聞、門弟たちの利害、或は又自分一身の興味打算――皆直接垂死の師匠とは、關係のない事ばかりである。だから師匠はやはり發句の中で、屢、豫想を逞くした通り、限りない人生の枯野の中で、野ざらしになつたと云つて差支へない。自分たち門弟は皆師匠の最期を悼まずに、師匠を失つた自分たち自身を悼んでゐる。枯野に窮死した先達を歎かずに、薄暮に先達を失つた自分たち自身を歎いてゐる。が、それを道德的に非難して見た所で、本來薄情に出來上つた自分たち人間をどうしよう。――かう云ふ厭世的な感慨に沈みながら、しかもそれ

に沈み得る事を得意にしてゐた支考は、師匠の唇をしめし終つて、羽根楊子を元の湯呑へ返すと、涙に咽んでゐる門弟たちを、嘲るやうにじろりと見廻して、徐に又自分の席へ立ち戻つた。人の好い去來の如きは、始からその冷然とした態度に中てられて、さつきの不安を今更のやうに又新にしたが、獨り其角が妙に擽つたい顔をしてゐたのは、どこまでも白眼で押し通さうとする、東花坊のこの性行上の習氣を、小うるさく感じてゐたらしい。

支考に續いて惟然坊が、墨染の法衣の裾をもそりと疊へひきながら、小さく這ひ出した時分には、芭蕉の斷末魔も既にもう、彈指の間に迫つたのであらう。顔の色は前よりも更に血の氣を失つて、水に濡れた唇の間からも、時時忘れたやうに息が洩れなくなる。と思ふと又、思ひ出したやうにぎくりと喉が大きく動いて、力の無い空氣が通ひ始める。しかもその喉の奧の方で、かすかに二三度痰が鳴つた。呼吸も次第に靜になるらしい。その時羽根楊子の白い先を、師匠の唇へ當てようとしてゐた惟然坊は、急に死別の悲しさとは縁のない、或る恐怖に襲はれ始めた。それは師匠の次に死ぬものは、この自分ではあるまいかと云ふ、殆、無理由に近い恐怖である。が、無理由であればある丈に、一度この恐怖に襲はれ出すと、我慢にも抵抗のしやうがない。元來彼は死と云ふと、病的に驚悸する種類の人間で、昔からよく自分の死ぬ事を考へると、風流の行脚をしてゐる時でも、總身に汗の流れるやうな不氣味な恐しさを經驗した。從つて又、自分以外の人間が、死んだと云ふ事を耳にすると、まあ自分が死ぬのではなくつてよかつたと、安心したやうな心もちになる。と同時に又、もし自分が死ぬのだつたらどうだらうと、反對の不安をも感じる事がある。これはやはり芭蕉の場合も例外には洩れないで、始まだ彼の臨終がこれ程切迫してゐない中は、――障子に冬晴の日がさして、園女が贈つた水仙が、清らかな匂を流すやうになると、一同師匠の枕もとに集つて、病間を慰める句作などをした時分は、さう云ふ明暗二通りの心もちの間を、その時次第で徘徊してゐた。が、次第にその終焉が近づいて來ると――忘れもしない初時雨の日に、自ら好んだ梨の實さへ、師匠の食べられない容子を見て、心配さうに木節が首を傾けた、あの頃から安心は追追不安にまきこまれて、最後にはその不安さへ、今度死ぬのは自分かも知れないと云ふ險惡な恐怖の影を、うすら寒く心の上にひろげるやうになつたのである。だから彼は枕もとへ坐つて、刻銘に師匠の唇をしめしてゐる間中、この恐怖に祟られて、殆、末期の芭蕉の顔を正視する事が出來なかつたらしい。いや、一度は正視したかとも思はれるが、丁度その時芭蕉の喉の中では、痰のつまる音がかすかに聞えたので、折角の彼の勇氣も、途中で挫折してしまつたのであらう。「師匠の次に死ぬものは、事によると自分かも知れない。」――絶えずかう云ふ豫感めいた聲を、耳の底に聞いてゐた惟然坊は、小さな體をすくませながら、自分の席へ返つた後も、無愛想な顔を、一層無愛想にして、なる可く誰の顔も見ないやうに、上眼ばかり使つてゐた。

續いて乙州、正秀、之道、木節と、病床を圍んでゐた門人たちは、順順に師匠の唇を沾した。が、その間に芭蕉の呼吸は、一息毎に細くなつて、數さへ次第に減じて行く。喉も、もう今では動かない。うす痘痕の浮んでゐる、どこか蠟のやうな小さい顔、遙な空間を見据ゑてゐる、光の褪せた瞳の色、さうして頤にのびてゐる、銀のやうな白い鬚――それが皆人情の冷さに凍てついて、やがて赴くべき寂光土を、ぢつと夢みてゐるやうに思はれる。すると

この時、去來の後の席に、默然と頭を垂れてゐた丈艸は、あの老實な禪客の丈艸は、芭蕉の呼吸のかすかになるのに從つて、限りない悲しみと、さうして又限りない安らかな心もちとが、徐に心の中へ流れこんで來るのを感じ出した。悲しみは元より說明を費すまでもない。が、その安らかな心もちは、恰も明方の寒い光が次第に暗の中にひろがるやうな、不思議に朗な心もちである。しかもそれは刻々に、あらゆる雜念を溺らし去つて、果ては涙そのものさへも、毫も心を刺す痛みのない、清らかな悲しみに化してしまふ。彼は師匠の魂が虛夢の生死を超越して、常住涅槃の寶土に還つたのを喜んででもゐるのであらうか。いや、これは彼自身にも、肯定の出來ない理由であつた。それならば――ああ、誰か徒に躊躇逡巡して、己を欺くの愚を敢てしよう。丈艸のこの安らかな心もちは、久しく芭蕉の人格的壓力の桎梏に、空しく屈してゐた彼の自由な精神が、その本來の力を以て、漸く手足を伸ばさうとする、解放の喜びだつたのである。彼はこの恍惚たる悲しい喜びの中に、菩提樹の念珠をつまぐりながら、周圍にすすりなく門弟たちも、眼底を拂つて去つた如く、唇頭にかすかな笑を浮べて、恭しく臨終の芭蕉に禮拜した。

かうして、古今に倫を絕した俳諧の大宗匠、芭蕉庵松尾桃青は、「悲歎かぎりなき」門弟たちに圍まれた儘、溘然として屬纊に就いたのである。

（大正七年九月作）

耳

芭蕉の俳諧を愛する人の耳の穴をあけぬのは殘念である。もし「調べ」の美しさに全然無頓著だつたとすれば、芭蕉の俳諧の美しさも殆ど半ばしかのみこめぬであらう。俳諧は元來歌よりも「調べ」に乏しいものである。僅々十七字の活殺の中に「言葉の音樂」をも傳へることは大力量の人を待たなければならぬ。のみならず「調べ」にのみ執するのは俳諧の本道を失したものである。芭蕉の「調べ」を後にせよと云つたのはこの間の消息を語るものであらう。しかし芭蕉自身の俳諧は滅多に「調べ」を忘れたことはない。いや、時には一句の妙を「調べ」にのみ託したものさへある。

　夏の月御油より出でて赤坂や

これは夏の月を寫す爲に、「御油」「赤坂」等の地名の與へる色彩の感じを用ひたものである。この手段は少しも珍らしいとは云はれぬ。寧ろ多少陳套の譏りを招きかねぬ技巧であらう。しかし耳に與へる效果は如何にも旅人の心らしい、悠々とした美しさに溢れてゐる。

　年の市線香買ひに出でばやな

假に「夏の月」の句をリブレットオよりもスコアのすぐれてゐる句とするならば、この句の如きは兩者ともに傑出したものの一例である。年の市に線香を買ひに出るのは物寂びたとは云ふものの、懷しい氣もちにも違ひない。その上「出でばやな」とはずみかけた調子は、宛然芭蕉その人の心の小躍りを見るやうである。更に又下の句などを見れば、芭蕉の「調べ」を驅使するのに大自在を極めてゐたことには呆氣にとられてしまふ外はない。

　秋ふかき隣は何をする人ぞ

かう云ふ莊重の「調べ」を捉へ得たものは茫茫たる三百年間にたつた芭蕉一人である。芭蕉は子弟を訓へるのに「俳諧は萬葉集の心なり」と云つた。この言葉は少しも大風呂敷ではない。芭蕉の俳諧を愛する人の耳の穴をあけねばならぬ所以である。

『梅・馬・鶯』の「芭蕉雜記」より

開化の殺人

下に掲げるのは、最近予が本多子爵（假名）から借覧する事を得た、故ドクトル・北畠義一郎（假名）の遺書である。北畠ドクトルは、よし實名を明かにした所で、もう今は知つてゐる人もあるまい。予自身も、本多子爵に親炙して、明治初期の逸事瑣談を聞かせて貰ふやうになつてから、初めてこのドクトルの名を耳にする機會を得た。彼の人物性行は、下の遺書によつても幾分の説明を得るに相違ないが、猶二三、予が仄聞した事實をつけ加へて置けば、ドクトルは當時内科の專門醫として有名だつたと共に、演劇改良に關しても或急進的意見を持つてゐた、一種の劇通だつたと云ふ。現に後者に關しては、ドクトル自身の手になつた戯曲さへあつて、それはヴォルテエルの Candid の一部を、徳川時代の出來事として脚色した、二幕物の喜劇だつたさうである。

北庭筑波が撮影した寫眞を見ると、北畠ドクトルは英吉利風の頰鬚を蓄へた、容貌魁偉な紳士である。本多子爵によれば、體格も西洋人を淩ぐばかりで、少年時代から何をするのでも、精力拔群を以て知られてゐたと云ふ。さう云へば遺書の文字さへ、鄭板橋風の奔放な字で、その淋漓たる墨痕の中にも、彼の風貌が看取されない事もない。

勿論予はこの遺書を公にするに當つて、幾多の改竄を施した。譬へば當時まだ授爵の制がなかつたにも關らず、後年の稱に從つて、本多子爵及夫人等の名を用ゐた如きものである。唯、その文章の調子に至つては、殆、原文の調子をそつくりその儘、ひき寫したと云つても差支へない。

本多子爵閣下、竝に夫人、

予は予が最期に際し、既往三年來、常に予が胸底に蟠れる、呪ふ可き祕密を告白し、以て卿等の前に予が醜惡なる心事を暴露せんとす。卿等にして若しこの遺書を讀むの後、猶卿等の故人たる予の記憶に對し、一片憐憫の情を動す事ありとせんか、そは素より予にとりて、望外の大幸なり。されど又予を目して、萬死の狂徒と做し、當に屍に鞭打つて後已む可しとするも、予に於ては毫も遺憾とする所なし。唯、予が告白せんとする事實の、餘りに意想外なるの故を以て、妄に予を誣ふるに、神經病患者の名を藉る事勿れ。予は最近數ケ月に亙りて、不眠症の爲に苦しみつつありと雖も、予が意識は明白にして、且極めて鋭敏なり。若し卿等にして、予が二十年來の相識たるを想起せんか。（予は敢て友人とは稱せざる可し）請ふ、予が精神的健康を疑ふ事勿れ。然らずんば、予が一生の汚辱を披瀝せんとする此遺書の如きも、結局無用の故紙たると何の選ぶ所か是あらん。

閣下、竝に夫人、予は過去に於て殺人罪を犯したると共に、將來に於ても亦同一罪惡を犯さんとしたる卑む可き危險人物なり。しかもその犯罪が卿等に最も親近なる人物に對して、企畫せられたるのみならず、又企畫せられんとしたりと云ふに至りては、卿等にとりて正に意外中の意外たる可し。予は是に於て予が警告を再びするの、必要なる所以を感ぜざる能はず。予は全然正氣にして、予が告白は徹頭徹尾事實なり。卿等幸にそを信ぜよ。而して予が生涯の唯一

う記念たる、この數枚の遺書をして、空しく狂人の譫語たらしむる事勿れ。

予はこれ以上予の健全を喋喋すべき餘裕なし。予が生存すべき僅少なる時間は、直下に予を驅りて、予が殺人の動機と實行とを敍し、更に進んで予が殺人後の奇怪なる心境に言及せしめずんば、已まざらんとす。されど、嗚呼されど、予は硯に呵し紙に臨んで、猶惶惶として自ら安からざるものあるを覺ゆ。惟ふに予が過去を點檢し記載するは、予にとりて再過去の生活を營むと、畢竟何の差違かあらん。予は殺人の計畫を再し、その實行を再し、更に最近一年間の恐る可き苦悶を再せざる可らず。是果して善く予の堪へ得可き所なりや否や。予は今にして、予が數年來失却したる我耶蘇基督に祈る。願くば予に力を與へ給へ。

予は少時より予が從妹たる今の本多子爵夫人（三人稱を以て、呼ぶ事を許せ　往年の甘露寺明子を愛したり。予の記憶に溯りて、予が明子と偕にしたる幸福なる時間を列記せんか。そは恐らく卿等が卒讀の煩に堪へざる所ならん。されど予はその例證として、今日も猶予が胸底に歴歴たる一場の光景を語らざるを得ず。予は當時十六歲の少年にして、明子は未十歲の少女なりき。五月某日予等は明子が家の芝生なる藤棚の下に嬉戲せしが、明子は予に對して、隻脚にて久しく立つ事を得るやと問ひぬ。而して予が否と答ふるや、彼女は左手を垂れて左の趾を握り、右手を擧げて平衡を保ちつつ、隻脚にて立つ事、時を久うしたりき。頭上の紫藤は春日の光を揺りて垂れ、藤下の明子は凝然として彫塑の如く佇めり。予はこの畫の如き數分の彼女を、今に至つて忘るる能はず。私に自ら省みて、予が心頭に深く彼女を愛せるに驚きしも、實にその藤棚の下に於て然りしなり。爾來予の明子に對する愛は益、烈しきを加へ、念念に彼女を想ひて、殆、學を廢するに至りしも、予の小心なる、遂に一語の予が衷心を吐露す可きものを出さず。陰晴定りなき感情の悲天の下に、或は泣き、或は笑ひて、茫茫數年の年月を閲せしが、予の二十一歲に達するや、予が父は突然予に命じて、遠く家業たる醫學を英京倫敦に學ばしめぬ。予は訣別に際して、明子に語るに予が愛を以てせんとせしも、嚴肅なる予等が家庭は、斯る機會を與ふるに吝なりしと共に、儒教主義の敎育を受けたる予も、亦桑間濮上の譏を懼れたるを以て、無限の離愁を抱きつつ、孤笈飄然として英京に去れり。

英吉利留學の三年間、予がハイド・パアクの芝生に立ちて、如何に故國の紫藤花下なる明子を懷ひしか。或は又予がパル・マルの街頭を歩して、如何に天涯の遊子たる予自身を憐みしか。そは茲に敍說するの要なかる可し。予は唯、倫敦に在るの日、予が所謂薔薇色の未來の中に、來る可き予等の結婚生活を夢想し、以て僅に悶悶の情を排せしを語れば足る。然り而して予の英吉利より歸朝するや、予は明子の既に嫁して第×銀行頭取滿村恭平の妻となりしを知りぬ。予は卽座に自殺を決心したれども、予が性來の怯懦と、留學中歸依したる基督敎の信仰とは、不幸にして予が手を麻痺せしめしを如何。「卿等にして若し當時の予が、如何に傷心したるかを知らんとせば、予が歸朝後何日にして、再、英京に去らんとし、爲に予が父の震怒を招きたるの一事を想起せよ。當時の予が心境を以てすれば、實に明子なきの日本は、故國に似て故國にあらず。この故國ならざる故國に止つて、徒に精神的敗殘者たるの生涯を送らんよりは寧、チヤイルド ハロルドの一卷を抱いて、遠く萬里の孤客となり、骨を異域の土に埋むるの遙に愈む可きものあるを信ぜしなり。されど予が身

邊の事情は、遂に予をして渡英の計畫を抛棄せしめ、加之予が父の病院内に、一個新歸朝のドクトルとして多數患者の診療に忙殺さる可き、退屈なる位地に倚らしめ了りぬ。

是に於て予は予の失戀の慰藉を神に求めたり。當時築地に在住したる英吉利宣教師ヘンリイ・タウンゼンド氏は、この間に於ける予の忘れ難き友人にして、予の明子に對する愛が、幾多の惡戰苦鬪の後、漸次熱烈にしてしかも靜平なる肉親的感情に變化したるは、一に同氏が予の爲に釋義したる聖書の數章の結果なりき。予は屢、同氏と神を論じ、神の愛を論じ、更に人間の愛を論じたるの後、半夜行人稀なる築地居留地を歩して、獨り予が家に歸りしを記憶す。若し卿等にして予が兒女の情あるを嗤はずんば、予は居留地の空なる半輪の月を仰ぎて、私に從妹明子の幸福を神に祈り、感極つて歔欷せしを語るも善し。

予が愛の新なる轉向を得しは、所謂「あきらめ」の心理を以て、説明す可きものなりや否や、予は之を詳にする勇氣と餘裕とに乏しけれど、予がこの肉親的愛情によりて、始めて予が心の創痍を醫し得たるの一事は疑ふ可らず。是を以て歸朝以來、明子夫妻の消息を耳にするを蛇蝎の如く恐れたる予は、今や予がこの肉親的愛情に依頼し、進んで彼等に接近せん事を希望したり。こは予にして若し彼等に幸福なる夫妻を見出さんか、予の慰安の益大にして、念頭些の苦悶なきに至る可しと、早計にも信じたるが故のみ。

予はこの信念に動かされし結果、遂に明治十一年八月三日兩國橋畔の大煙火に際し、知人の紹介を機會として、折から校書十數輩と共に柳橋萬八の水樓に在りし、明子の夫滿村恭平と、始めて一夕の歡を倶にしたり。歡か、苦か、予はその苦と云ふの、遙に勝れるの所以を思はざる能はず。予は日記に書して曰、「予は明子にして、かの滿村某の如き、濫淫の賤貨に妻たるを思へば、殆、一肚皮の憤怨何の處に向つてか吐かんとするを知らず。神は予に明子を見る事、妹の如くなる可きを教へ給へり。然り而して予が妹を、斯の禽獸の手に委せしめ給ひしは、何ぞや。予は最早、この殘酷にして奸黠なる神の惡戯に堪ふる能はず。誰か善くその妻と妹とを強盜の爲に凌辱せられ、しかも猶天を仰いで神の御名を稱ふ可きものあらむ。予は今度斷じて神に依らず、予自身の手を以て、予が妹明子をこの色鬼の手より救助す可し。」

予はこの遺書を認むるに臨み、再、當時の呪ふ可き光景の、眼前に彷徨するを禁ずる能はず。かの蒼然たる水靄と、かの萬點の紅燈と、而してかの隊隊相銜んで、盡くる所を知らざる畫舫の列と——嗚呼、予は終生その夜、その半空に仰ぎたる煙火の明滅を記憶すると共に、右に大妓を擁し、左に雛妓を從へ、猥褻聞くに堪へざるの俚歌を高吟しつつ、傲然として涼棚の上に醉臥したる、かの肥大豕の如き滿村恭平をも記憶す可し。否、否、彼の黑絽の羽織に抱茗荷の三つ紋ありしさへ、今に至つて予は忘却する能はざるなり。予は信ず、予が彼を殺害せんとするの意志を抱きしは、實にこの水樓煙火を見しの夕に始る事を。又信ず、予が殺人の動機なるものは、その發生の當初より斷じて單なる嫉妬の情にあらずして、寧、不義を懲し不正を除かんとする道德的憤激に存せし事を。

爾來予は心を潛めて、滿村恭平の行狀に注目し、その果して予が一夕の觀察に背かざる痴漢なりや否やを檢査したり。幸にして予が知人中、新聞記者を業とするもの、當に二三子に止らざりしを以て、彼が淫虐無道の行跡の如きも、その予が視聽に入らざるものは絕無なりしと云ふも妨げざる可し。予が先輩にして且知

人たる貞白如き楽生より、彼が高貴なる同の反撥を
に、彼の存在を快からざるものを植ゑしめて、以
て死に到らしめしを欣快せしも、實に此間の事
に屬す。しかもこの貞操の夫にして、尻に温良
貞淑の稱ある夫人明子を遇するや、奴婢と一般
なりと云ふに至っては、誰か苦く彼を目して、
人間の獲物と做さざるを得んや。既に彼を存す
るの風を傷し俗を亂る所以なるを知り、彼を除
くの老を扶け幼を憐む所以なるを知る。是に於
て予が殺害の意志たりしものは、徐に殺害の
計畫と變化し來れり。

然れども若し是に止らんか、予は恐らく予が
殺人の計畫を實行するに、猶其機會の逢遇なき
を得ざりしならん。幸か、抑亦不幸か、運命
はこの危険なる時期に際して、予を予が年少の
友たる本多子爵と、一夜墨上の某亭柏屋に會
せしめ以て酒間その口より一場の秘話を語らし
めたり。予はこの時に至って、始めて本多子爵
と明子とが、既に許嫁の約ありしにも關らず、
彼、滿村恭平が黄金の威に壓せられて、遂に破
約の已む無きに至りしを知りぬ。予が心、豈
憤を加へざらんや。かの酒燈一穂、畫樓簾裡
に黯淡たるの處、本多子爵と予とが杯を含ん
で、滿村を痛罵せし當時を思へば、予は今に至
つて自ら[illegible]ざるを得ず。されど同時
に又、當夜人力車に乘じて、柏屋より歸るの
途、本多子爵と明子との舊情を思ひて、一種名
狀す可からざる悲哀を感ぜしも、予は猶明かに記
憶する所なり。請ふ、再び予が日記を引用す
るを許せ。「予は今夕本多子爵と會してより、
愈、旬日の間に滿村恭平を殺害す可しと決
心したり。子爵の口吻より察するに、彼と明子
とは、獨り許嫁の約ありしのみならず、又實に
相愛の情を抱きたるものの如し。予は今日に
して、子爵の獨身生活の理由を發見し得たる
を覺ゆ。若し予にして滿村を殺害せんか、子爵
と明子とが伉儷を完うせんは、必しも難事に
あらず、假令明子の滿村に嫁して、未一兒を
擧げざるは、恰も天意亦予が計畫を扶くるに
似たるの觀あり。予はかの獸心の巨紳を殺害す
るの結果、予の親愛なる子爵と明子とが、早晩
幸福なる生活に入らんとするを思ひ、自ら口
邊の微笑を禁ずる事能はず。」

今や予が殺人の計畫は、一轉して殺人の實行
に移らんとす。予は幾度か周密なる思慮に思慮
を重ねたるの後、漸くにして滿村を殺害す可き
適當なる場所と手段とを選定したり。その何處
にして何なりしかは、敢て詳細なる敍述を試
みるの要なかるべし。[illegible]にして明治十二年
六月十二日、獨逸皇孫殿下が新富座に於て日
本劇を見給ひしの夜、彼、滿村恭平が同劇場
よりその自邸に歸らんとするの途次、馬車中に
於て突如病死したる事實を記憶せよ。予は新
富座に於て滿村の血色宜しからざるを説き、
これに所持の丸藥を服用せしめたる、一個
壯年のドクトルありしを記せよ。嗚呼、願
請ふ、そのドクトルの面を想見せよ。彼は[illegible]
點たる紅球燈の光を浴びて、新富座の木戸口に
佇みつつ、雷雨の中に奔し去る滿村の馬車を
目送するや、昨日の憤怨、今日の歡喜、一時に
胸中に蝟集し來り、笑聲と哭聲と共に咽頭に溢れん
として、殆、處の何處たる、時の何時たるを
忘却したりき。しかもその彼が且泣き且笑ひつ
つ、癲狂の如く泥濘を踏んで、狂せる如く歸途
に就きし時、彼の呟いて止まざりしものは、唯明
子の名なりしをも忘るる勿れ。予は終夜
眠らずして、予が書齋を徘徊しつつ、歡喜か、
悲哀か、予はそを明にする能はず。唯、或云
ひ難き強烈なる感情は、予の全身を支配して、
一霎時たりと雖も、予をして安坐せざらしめ
を如何。予が卓上には三鞭酒あり。薔薇の花
あり。而して又かの丸藥の箱あり。予は殆、

天使と惡魔とを左右にして、奇怪なる饗宴を開きしが如くなりき。

予は爾來數ケ月の如く、幸福なる日子を閲せし事あらず。滿村の死因は警察醫によりて、予の豫想と寸分の相違もなく、腦出血の病名を與へられ、卽刻地下六尺の暗黑に、腐肉を蟲蛆の食としたるが如し。既に然り、誰か又予を目して、殺人犯の嫌疑ありと做すものあらん。しかも仄聞する所によれば、明子はその良人の死に依りて、始めて蘇色ありと云ふにあらずや。予は滿面に喜色を以て予の患者を診察し、閑あれば卽本多子爵と共に、好んで劇を新富座に見たり。是全く予にとりては、予が最後の勝利を博せし、光榮ある戰場として、屢、その花瓦斯とその掛毛氈とを眺めんとする、不思議なる欲望を感ぜしが爲のみ。

然れどもこは眞に、數ケ月の間なりき。この幸福なる數ケ月の經過すると共に、予は漸次予が生涯中最も憎む可き誘惑と闘ふ可き運命に接近しぬ。その闘の如何に酷烈を極めたるか、如何に歩歩予を死地に驅逐したるか。予は到底茲に絮說するの勇氣なし。否、この遺書を認めつつある現在さへも、予は猶この水蛇の如き誘惑と、死を以て闘はざる可らず。卿等にして若し予が煩悶の跡を見んと欲せば、請ふ、以下に抄錄せんとする予が日記を一瞥せよ。

「十月×日、明子、子なきの故を以て滿村家を去る由、予は近日本多子爵と共に、六年ぶりにて彼女と會見す可し。歸朝以來、始予は彼女を見るの己の爲に忍びず、後は彼女を見るの彼女の爲に忍びずして、遂に荏苒今日に及べり。明子の明眸、猶六年以前の如くなる可きや否や。」

「十月×日、予は今日本多子爵を訪ね、始めて共に明子の家に赴かんとしぬ。然るに豈計らんや、子爵は予に先立ちて、既に彼女を見る事兩三度なりと云はんには。子爵の予を疎外する何ぞ斯くの如く甚しきや。予は甚しく不快を感じたるを以て、辭を患者の診察に託し、匆惶として子爵の家を辭したり。子爵は恐らく予の去りし後 單身明子を訪れしならんか」

「十一月×日、予は本多子爵と共に、明子を訪ひぬ。明子は容色の幾分を減却したれども、猶紫藤花下に立ちし當年の少女を髣髴するは、未必しも難事にあらず 嗚呼予は既に明子を見たり 而して予が胸中、反つて止む可らざる悲哀を感ずるは何ぞ。予はその理由を知らざるに苦しむ。」

「十二月×日、子爵は明子と結婚する意志あるものの如し。斯くして予が明子の夫を殺害したる目的は、始めて完成の域に達するを得ん。されど――されど、予は予が再、明子を失ひつつあるが如き、異樣なる苦痛を免るる事能はず。」

「三月×日、子爵と明子との結婚式は、今年年末を期して、擧行せらる可しと云ふ。予はその一日も速ならん事を祈る。現狀に於ては、予は永久にこの止み難き苦痛を脫離する能はざる可し。」

「六月十二日、予は獨り新富座へ赴けり。去年今月今日、予が手に仆れたる犧牲を思へば、予は觀劇中も、自ら會心の微笑を禁ぜざりき。されど同座より歸途、予がふと予の殺人の動機に想到するや、予は殆、歸趨を失ひたるかの感に打たれたり。嗚呼、予は誰の爲に滿村恭平を殺せしか。本多子爵の爲か、明子の爲か、抑亦予自身の爲か。こは予も亦答ふる能はざるを如何。」

「七月×日、予は子爵と明子と共に、今夕馬車を驅つて、隅田川の流燈會を見物せり。馬車の窓より洩るる燈光に、明子の明眸の更に美しかりしは、殆、予をして傍に子爵あるを忘れしめぬ。されどそは予が語らんとする所にあらず。予は馬車中子爵の胃痛を訴ふるや、予に

袈裟と盛遠

上

夜、盛遠が築土の外で、月魄を眺めながら、落葉を踏んで物思ひに耽つてゐる。

その獨白

「もう月の出だな。何時もは月が出るのを待ちかねる己も、今日ばかりは明くなるのがそら恐しい。今までの己が一夜の中に失はれて、明日からは人殺しになり果てるのだと思ふと、かうしてゐても、體が震へて來る。この兩の手が血で赤くなつた時を想像して見るが好い。その時の己は、己自身にとつて、どの位呪はしいものに見えるだらう。それも己の憎む相手を殺すのだつたら、己は何もこんなに心苦しい思をしなくてもすんだのだが、己は今夜、己の憎んでゐない男を殺さなければならない。

己はあの男を以前から見知つてゐる。渡左衞門尉と云ふ名は、今度の事に就いて知つたのだが、男にしては優しすぎる、色の白い顏を見覺えたのは、何時の事だかわからない。それが袈裟の夫だと云ふ事を知つた時、己が一時嫉妬を感じたのは事實だつた。しかしその嫉妬も、今では己の心の上に何一つ痕跡を殘さないで、綺麗に消え失せてしまつてゐる。だから渡は己にとつて、戀の仇とは云ひながら、憎くもなければ、恨めしくもない。いや、寧、己はあの男に同情してゐると云つても、よい位だ。衣川の口から渡が袈裟を得る爲に、どれだけ心を勞したかを聞いた時、己は現にあの男を可愛く思つた事さへある。渡は袈裟を妻にしたい一心で、わざわざ歌の稽古までしたと云ふ事ではないか。己はあの生眞面目な侍の作つた戀歌を想像すると、知らず識らず微笑が脣に浮んで來る。しかしそれは何も、渡を嘲る微笑ではない。己はさうまでして、女に媚びるあの男をいぢらしく思ふのだ。或は己の愛してゐる女に、それ程までも媚びようとするあの男の熱情が、愛人たる己に或種の滿足を與へてくれるかも知れない。

しかしさう云へる程、己は袈裟を愛してゐるだらうか。己と袈裟との間の戀愛は、今と昔との二つの時期に別れてゐる。己は袈裟がまだ渡に緣づかない以前に、既に袈裟を愛してゐた。或は愛してゐると思つてゐた。が、これも今になつて考へると、その時の己の心もちには不純なものも少くはない。己は袈裟に何を求めたか、童貞だつた頃の己は、明に袈裟の體を求めてゐた。もし多少の誇張を許すなら、己の袈裟に對する愛なるものも、實はこの欲望を美しくした、感傷的な心もちに過ぎなかつた。それが證據には、袈裟との交渉が絕えたその後の三年間、成程己はあの女の事を忘れずにゐたにちがひないが、もしその以前に己があの女の體を知つてゐたなら、それでもやはり忘れずに思ひつづけてゐたであらうか。己は恥しながら、然りと答へる勇氣はない。己が袈裟に對するその後の愛著の中には、あの女の體を知らずにゐる未練が可成混つてゐる。さうして、その悶々の情を抱きながら、己はとうとう己の恐れてゐた、しかも己の待つてゐた、この今の關係にはひつてしまつた。では今は？　己は改めて己自身に問ひかけよう。己は果して袈裟を愛してゐるだらうか。

が、その答をする前に、己はまだ一通り、嫌

でもう一度いきさつを思ひ出す必要がある。――渡の橋の供養の時、三年ぶりで偶然袈裟にめぐり遇つた己は、それから凡そ半年ばかりの間、あの女と忍び合ふ機会を作る為に、あらゆる手段を試みた。さうしてそれに成功した。いや、成功したばかりではない、その時、己は、己が夢みてゐた通り、袈裟の体を知る事が出来た。が、当時の己を支配してゐたものは、必しも前に云つた、まだあの女の体を知らないと云ふ未練ばかりだつた訳ではない。己は衣川の家で、袈裟と一つ部屋へ坐つた時、既にこの未練が何時か薄くなつてゐるのに気がついた。それは己がもう童貞でなかつたと云ふ事も、その場になつて、己の欲望を弱める役に立つたのであらう。しかしそれよりも、主な原因は、あの女の容色が、衰へてゐると云ふ事だつた。実際今の袈裟は、もう三年前の袈裟ではない。皮膚は一体に光沢を失つて、眼のまはりにはうす黒く暈のやうなものが輪どつてゐる。頬のまはりや顋の下にも、以前の豊な肉附きが、嘘のやうになくなつてしまつた。僅に変らないものと云つては、あの張りのある、黒瞳勝な、水々しい眼ばかりであらうか。――この変化は己の欲望にとつて、確に恐しい打撃だつた。己は三年ぶりで始めてあの女と向ひ合つた時、思はず視線をそらさずにはゐられなかつた程、強い衝動を感じたのを未にはつきり覚えてゐる。

では、比較的さう云ふ未練を感じてゐない己が、どうしてあの女と関係したのであらう。己は第一に、妙な征服心に動かされた。袈裟は己と向ひ合つてゐると、あの女が夫の渡に対して持つてゐる愛情を、わざと誇張して話して聞かせる。しかも己にはそれが、どうしても空虚な感じしか起させない。「この女は自分の夫に対して虚栄心を持つてゐる。」――己にはかう考へた。「或はこれも、己の憐憫を買ひたくないと云ふ反抗心の現れかも知れない。」――己は又かうも考へた。さうしてそれと共に、この嘘を暴露させてやりたい気が、刻々に強く動きかけた。唯、何故それを嘘だと思つたかと云はれれば、それを嘘だと思つた所に、己の己惚れがあると云はれれば、己には元より抗弁するだけの理由はない。それにも関らず、己はその嘘だと云ふ事を信じてゐた。今でも猶信じてゐる。

が、この征服心も亦、当時の己を支配してゐたすべてではない。その外に――己はかう云つただけでも、己の顔が赤くなるやうな気がする。己はその外に、純粋な情欲に支配されてゐた。それはあの女の体を知らないと云ふ未練ではない。もつと下等な、相手はあの女である必要のない、欲望の為の欲望だ。恐らくは傀儡の女を買ふ男でも、あの時の己程は卑しくなかつた事であらう。

兎に角己はさう云ふいろいろな動機で、とうとう袈裟と関係した。と云ふよりも袈裟を辱めた。さうして今、己の最初に出した疑問へ立ち戻ると、――いや、己が袈裟を愛してゐるかどうかなどと云ふ事は、いくら己自身に対してでも、今更改めて問ふ必要はない。己は寧、時にはあの女に憎しみさへも感じてゐる。殊に萬事が完つてから、泣き伏してゐるあの女を、無理に抱き起した時などは、袈裟は破廉恥の己よりも、より破廉恥な女に見えた。乱れた髪のかかりと云ひ、汗ばんだ顔の化粧と云ひ、一つとしてあの女の心と体との醜さを示してゐないものはない。もしそれまでの己があの女を愛してゐたとしたなら、その愛はあの日を最後として、永久に消えてしまつたのだ。或は、もしそれまでの己があの女を愛してゐなかつたとしたなら、あの日から己の心には新しい憎しみが生じたと云つても差支へない。さうして、あ

あ、今夜己はその己が愛してゐない女の爲に、己が憎んでゐない男を殺さうと云ふのではないか！

それも完く、誰の罪でもない。己がこの己の口で、公然と云ひ出した事なのだ。「渡を殺さうではないか。」――己があの女の耳に口をつけて、かう囁いた時の事を考へると、我ながら氣が違つてゐたのかとさへ、疑はれる。しかし己は、さう囁いた。囁くまいと思ひながら、齒を食ひしばつてまでも囁いた。己にはそれが何故囁きたかつたのか、今になつて振りかへつて見ると、どうしてもよくはわからない。が、もし強いて考へれば、己はあの女を蔑めば蔑む程、憎く思へば思ふ程、益何かあの女に凌辱を加へたくてたまらなくなつた。それには渡左衞門尉を、――袈裟がその愛を衒つてゐた夫を殺さうと云ふ位、さうしてそれをあの女に、否應なく承諾させる位、目的に協つた事はない。そこで己は、まるで惡夢に襲はれた人間のやうに、したくもない人殺しを、無理にあの女に勸めたのであらう。それでも己が渡を殺さうと云つた、動機が十分でなかつたなら、後は人間の知らない力が、(天魔波旬とでも云ふが好い。)己の意志を誘つて、邪道へ陥れたとでも解釋するより外はない。兎に角、己は執念深く、何度も同じ事を繰返して、袈裟の耳に囁いた。

すると袈裟は暫くして、急に顔を上げたと思ふと、素直に己の目ろみに承知すると云ふ返事をした。が、己にはその返事の容易だつたのが、意外だつたばかりではない。その袈裟の顔を見ると、今までに一度も見えなかつた不思議な輝きが眼に宿つてゐる。姦婦――さう云ふ氣が、己はすぐにした。と同時に、失望に似た心もちが、急に己の目ろみの恐しさを、己の目の前へ展げて見せた。その間も、あの女の淫りがましい、凋れた容色の厭らしさが、絶えず己を虐んでゐた事は、元よりわざわざ云ふ必要もない。もし出來たなら、その時に、己は己の約束をその場で破つてしまひたかつた。さうして、あの不貞な女を、辱しめと云ふ辱しめのどん底まで、つき落してしまひたかつた。さうすれば己の良心は、たとへあの女を弄んだにしても、まださう云ふ義憤の後に、避難する事が出來たかも知れない。が、己にはどうしても、さうする餘裕が作れなかつた。まるで己の心もちを見透しでもしたやうに、急に表情を變へたあの女が、ぢつと己の眼を見つめた時、――己は正直に白状する。己が日と時刻とをきめて、渡を殺す約束を結ぶやうな羽目に陥つたのは、完く萬一己が承知しない場合に、袈裟が己に加へようとする復讐の恐怖からだつた。いや、今でも猶この恐怖は、執念深く己の心を捕へてゐる。臆病だと嗤ふ奴は、いくらでも嗤ふが好い。それはあの時の袈裟を知らないもののする事だ。「己が渡を殺さないとすれば、よし袈裟自身は手を下さないにしても、必、己はこの女に殺されるだらう。その位なら己の方で渡を殺してしまつてやる。」――涙がなくて泣いてゐるあの女の眼を見た時に、己は絶望的にかう思つた。しかもこの己の恐怖は、己が誓言をした後で、袈裟が蒼白い顔に片靨をよせながら、眼を伏せて笑つたのを見た時に、裏書きをされたではないか。

ああ、己はその呪はしい約束の爲に、汚れた上にも汚れた心の上へ、今又人殺しの罪を加へるのだ。もし今夜に差迫つて、この約束を破つたなら――これも、やはり己には堪へられない。一つには誓言の手前もある。さうして又一つには、――己は復讐を恐れると云つた。それも決して嘘ではない。しかしその上にまだ何かある。それは何だ？ この己を、この臆病な己を追ひやつて罪もない男を殺させる、その大き

しく思つた事であらう。

私は腹立たしさと寂しさとで、いくら泣くまいと思つても、止め度なく涙が溢れて来た。けれども、それは何も、操を破られたと云ふ事だけが悲しかつた為ではない。操を破られながら、その上にも卑められてゐると云ふ事が、丁度癩を病んだ犬のやうに、憎まれながらも虐まれてゐると云ふ事が、何よりも私には苦しかつた。さうしてそれから私は一体何をしてゐたのであらう。今になつて考へると、それも遠い昔の記憶のやうに、朧げにしかわからない。唯、すすり上げて泣いてゐる間に、あの人の口髭が私の耳にさはつたと思ふと、熱い息と一しよに低い聲で、「渡を殺さうではないか。」と云ふ語が、囁かれたのを覺えてゐる。私はそれを聞くと同時に、未に自分にもわからない、不思議に生生した心もちになつた。生生した？ もし月の光が明いと云ふのなら、それも生生した心もちであらう。が、それはどこまでも月の光の明さとは違ふ、生生した心もちだつた。しかし私は、やはりこの恐しい語の爲に、慰められたのではなかつたらうか。ああ、私は、女と云ふものは、自分の夫を殺してまでも、猶人に愛されるのが嬉しく感ぜられるものなのだらうか。

私はその月夜の明さに似た、寂しい、生生した心もちで、又暫く泣きつづけた。さうして？ さうして？ 何時か、私は、あの人の手引きをして夫を討たせると云ふ約束を、結んでなどしまつたのであらう。しかしその約束を結ぶと一しよに、私は始めて夫の事を思ひ出した。私は正直に始めてと云はう、それまでの私の心は、唯、私の事を、辱められた私の事を、一圖に、ぢつと思つてゐた。それがこの時、夫の事を、あの内氣な夫の事を、——いや、夫の事ではない。私に何か云ふ時の、微笑した夫の顔を、ありあり眼の前に思ひ出した。私のもくろみが、ふと胸に浮んだのも、恐らくその顔を思ひ出した刹那の事であつたらう。何故と云へば、その時に私はもう死ぬ覺悟をきめてゐた。さうして又きめる事の出來たのが嬉しかつた。しかし泣き止んだ私が顔を上げて、あの人の方を眺めた時、さうしてそこに前の通り、あの人の心に映つてゐる私の醜さを見つけた時、私は、私の嬉しさが一度に消えてしまつたやうな心もちがする。それは——私は又、乳母と見た月蝕の暗さを思ひ出してしまふ。それはこの嬉しさの底に隱れてゐる、さまざまの物の怪を一時に放つたやうなものだつた。私が夫の身代りになると云ふ事は、果して夫を愛してゐるからだらうか。いや、いや、私はさう云ふ都合の好い口實の後で、あの人に身を任した私の罪の償ひをしようと云ふ氣を持つてゐた。自害をする勇氣のない私は。少しでも世間の眼に私自身を善く見せたい、さもしい心もちがある私は。けれどもそれはまだ大目にも見られよう。私はもつと卑しかつた。もつと、もつと醜かつた。夫の身代りに立つと云ふ名の下で、私はあの人の憎しみに、あの人の蔑みに、さうしてあの人が私を弄んだ、その邪な情欲に、仇を取らうとしてゐたではないか。それが證據には、あの人の顔を見ると、あの月の光のやうな、不思議な生生しさも消えてしまつて、唯、悲しい心もちばかりが、忽ち私の心を凍らせてしまふ。私は夫の爲に死ぬのではない。私は私の爲に死なうとする。私の心を傷けられた口惜しさと、私の體を汚された恨めしさと、その二つの爲に死なうとする。ああ、私は生き甲斐がなかつたばかりではない。死に甲斐さへもなかつたのだ。

しかしその死に甲斐のない死に方でさへ、生きてゐるよりは、どの位望ましいかわからない。私は悲しいのを無理にほほ笑みながら、繰返し

はあの人と夫を殺す約束をした、忌はしいあの人は、[illegible]私の[illegible]から、も一度約束をしなかつた時には、どんなことを私にしでかすか、大方察しのついた事であらう。して見れば、誓言までしたあの人が、忍んで來ないと云ふ筈はない――あれは風の音であらうか――あの日以來の苦しい思が、今夜でやつと盡きるかと思へば、流石に氣の緩むやうな心もちもする。明日の日は、必、首のない私の死骸の上に、うすら寒い光を落すだらう。それを見たら、夫は――いや、夫の事は思ふまい。夫は私を愛してゐる。けれど、私にはその愛を、どうしようと云ふ力もない。昔から私にはたつた一人の男しか愛せなかつた。さうしてその一人の男が、今夜私を殺しに來るのだ。この燈臺の光でさへさう云ふ私には晴れがましい。しかもその戀人に、虐まれ果ててゐる私には。」

袈裟は、燈臺の火を吹き消してしまふ。程なく、暗の中でかすかに蔀を開く音。それと共にうすい月の光がさす。

（大正七年三月作）

詩集

彼の詩集の本屋に出たのは三年ばかり前のことだつた。彼はその假綴ぢの處女詩集に「夢みつつ」と言ふ名前をつけた。それは卷頭の抒情詩の名前を詩集の名前に用ひたものだつた。

夢みつつ、夢みつつ、
日もすがら、夢みつつ……

彼はこの詩の一節ごとにかう云ふリフレエンを用ひてゐた。

彼の詩集は何冊も本屋の店に並んでゐた。が、誰も買ふものはなかつた。誰も？――いや、必しも「誰も」ではない。彼の詩集は一二冊神田の古本屋にも並んでゐた。しかし「定價一圓」と言ふ奧附のあるのにも關らず、古本屋の値段は三十錢乃至二十五錢だつた。

一年ばかりたつた後、彼の詩集は新らしいまま、銀座の露店に並ぶやうになつた。今度は「引ナシ三十錢」だつた。行人は時時紙表紙をあけ、卷頭の抒情詩に目を通した。（彼の詩集は幸か不幸か紙の切つてない裝幀だつた。）けれども滅多に賣れたことはなかつた。そのうちにだんだん紙も古び、[illegible]中にた[illegible]で行つた。

夢みつつ、夢みつつ、
日もすがら、夢みつつ……

三年ばかりたつた後、汽車は薄煙を殘しながら、九百八十六部の「夢みつつ」を北海道へ運んで行つた。

九百八十六部の「夢みつつ」は札幌の或物置小屋の砂埃の中に積み上げてあつた。が、それは暫くだつた。彼の詩集は女たちの手に無數の紙袋に變り出した。紙袋は彼の抒情詩を横だの逆樣だのに印刷してゐた。

夢みつつ、夢みつつ、
日もすがら、夢みつつ……

半月ばかりたつた後、是等の紙袋は點點と林檎畑の葉かげにかかり出した。それからもう何日になることであらう。林檎畑を綴つた無數の林檎は今は是等の紙袋の中に、――紙袋を透かした日の光の中におのづから甘みを加へてゐる、青あをとかすかに匂ひながら。

夢みつつ、夢みつつ、
日もすがら、夢みつつ……

（「梅・馬・鶯」の「小品第一」より）

或日の大石内藏之助

立てきつた障子にはうららかな日の光がさして、嵯峨たる老木の梅の影が何間かの明みを、右の端から左の端まで畫の如く鮮に領してゐる。元淺野内匠頭家來、當時細川家に御預り中の大石内藏之助良雄は、その障子を後にして、端然と膝を重ねた儘、さつきから書見に餘念がない。書物は恐らく、細川家の家臣の一人が借してくれた三國誌の中の一册であらう。

九人一つ座敷にゐる中で、片岡源五右衛門は、今し方厠へ立つた。早水藤左衛門は、下の間へ話しに行つて、未だにここへ歸らない。あとには、吉田忠左衛門、原惣右衛門、間瀬久太夫、小野寺十内、堀部彌兵衛、間喜兵衛の六人が、障子にさしてゐる日影も忘れたやうに、或は書見に耽つたり、或は消息を認めたりしてゐる。その六人が六人とも、五十歳以上の老人ばかり揃つてゐたせゐか、まだ春の淺い座敷の中は、肌寒いばかりにもの靜かである。時たま、しはぶきの聲をさせるものがあつても、それは、僅に漂つてゐる墨の匂を動かす程の音さへ立てない。

内藏之助は、ふと眼を三國誌からはなして、遠い所を見るやうな眼をしながら、靜に手を傍の火鉢の上にかざした。金網をかけた火鉢の中には、いけてある炭の底に、うつくしい赤いものが、かんかんと灰を照らしてゐる。その火氣を感じると、内藏之助の心には、安らかな滿足の情が、今更のやうにあふれて來た。丁度、去年の極月十五日に、亡君の讐を復して、泉岳寺へ引上げた時、彼自ら「あらたのし思ひははるる身はすつる、うきよの月にかかる雲なし」と詠じた、その時の滿足が歸つて來たのである。

赤穗の城を退去して以來、二年に近い月日を、如何に彼は焦慮と苦慮との中に、費した事であらう。動もすればはやり勝ちな、一黨の客氣を控制して、徐に機の熟するのを待つただけでも、並大抵な骨折りではない。しかも讐家の放つた細作は、絶えず彼の身邊を窺つてゐる。彼は放埒を裝つて、これらの細作の眼を欺くと共に、併せて又、その放埒に欺かれた同志の疑惑をも解かなければならなかつた。山科や圓山の謀議の昔を思ひ返せば、當時の苦衷が再、心の中によみ返つて來る。——しかし、もうすべては行く處へ行きついた。

もし、まだ片のつかないものがあるとすれば、それは一黨四十七人に對する公儀の御沙汰だけである。が、その御沙汰があるのも、いづれ遠い事ではないのに違ひない。さうだ。すべては行く處へ行きついた。それも單に、復讐の擧が成就したと云ふばかりではない。すべてが、彼の道德上の要求と、殆、完全に一致するやうな形式で成就した。彼は、事業を完成した滿足を味つたばかりでなく、道德を體現した滿足をも、同時に味ふ事が出來たのである。しかも、その滿足は、復讐の目的から考へても、手段から考へても、良心の疚しさに曇らされる所は少しもない。彼として、これ以上の滿足があり得ようか。……

かう思ひながら、内藏之助は眉をのべて、これも書見に倦んだのか、書物を伏せた膝の上へ、指で手習ひをしてゐた吉田忠左衛門に、火鉢のこちらから聲をかけた。

「今日は餘程暖いやうですな。」

「さやうでございます。かうして居りまして

も、どうかすると、あまり暖いので、睡氣がさしさうでなりません。」

内藏之助は微笑した。この正月の元旦に、富森助右衛門が、三杯の屠蘇に醉つて、「今日も春恥かしからぬ寝武士かな」と吟じた、その句がふと念頭に浮んだからである。句意も、良雄が今感じてゐる滿足と變りはない。

「やはり本意を遂げたと云ふ、氣のゆるみがあるのでございませう。」

「さやうさ。それもありませう。」

忠左衛門は、手もとの煙管をとり上げて、つつましく一服の煙を味つた。煙は、早春の午後をわづかにくゆらせながら、明い靜かさの中に、うす青く消えてしまふ。

「かう云ふのどかな日を送る事があらうとは、お互に思ひがけなかつた事ですからな。」

「さやうでございます。手前も二度と、春に逢はうなどとは、夢にも存じませんでした。」

「我我は、よくよく運のよいものと見えますな。」

二人は、滿足さうに、眼で笑ひ合つた。――もしこの時、良雄の後の障子に、影法師が一つ映らなかつたなら、さうして、その影法師が、障子の引手へ手をかけると共に消えて、その代りに、早水藤左衛門の逞しい姿が、座敷の中へはひつて來なかつたなら、良雄は何時までも、快い春の日の暖さを、その誇らかな滿足の情と共に、味ふ事が出來たのであらう。が、現實は、血色の好い藤左衛門の兩頬に浮んでゐる、ゆたかな微笑と共に、遠慮なく二人の間へはひつて來た。が、彼等は、勿論それには氣がつかない。

「大分下の間は、賑かなやうですな。」

忠左衛門は、かう云ひながら、又煙草を一服吸ひつけた。

「今日の當番は、傳右衛門殿ですから、それで餘計話がはずむのでせう。片岡なども、今し方あちらへ參つて、その儘坐りこんでしまひました。」

「道理こそ、遅いと思ひました。」

忠左衛門は、煙にむせて、苦しさうに笑つた。すると、頻りに筆を走らせてゐた小野寺十内が、何かと思つた氣色で、ちよいと顔をあげたが、すぐ又眼を紙へ落して、せつせとあとを書き始める。これは恐らく、京都の妻女へ送る消息でも、認めてゐたものであらう。――内藏之助も、眦の皺を深くして、笑ひながら、

「何か面白い話でもありましたか。」

「いえ、不相變の無駄話ばかりでございます。尤も先刻、近松が甚三郎の話を致した時には、傳右衛門殿なぞも、眼に涙をためて、聞いて居られましたが、その外は――いや、さうさう、面白い話がございました。我我が吉良殿を討取つて以來、江戸中に何かと仇討じみた事が流行るさうでございます。」

「ははあ、それは思ひもよりませんな。」

忠左衛門は、けげんな顔をして、藤左衛門を見た。相手は、この話をして聞かせるのが、何故か非常に得意らしい。

「今も似よりの話を二つ三つ聞いて來ましたが、中でも可笑しかつたのは、南八丁堀の湊町邊にあつた話です。何でも事の起りは、あの界隈の米屋の亭主が風呂屋で、隣同志の紺屋の職人と喧嘩をしたのですな。どうせ起りは、湯がはねかつたとか何とか云ふ、つまらない事からなのでせう。さうして、その揚句に米屋の亭主の方が、紺屋の職人に手桶で散々撲られたのださうです。すると米屋の丁稚が一人、それを遺恨に思つて、暮方その職人の外へ出る所を待伏せて、いきなり鉤を向うの肩へ打ちこんだと云ふぢやありませんか。それも主人の讐、思ひ知れと云ひながら、やつたのださうです。

藤左衛門は、手眞似をしながら、笑ひ笑ひ、から云つた

「それは又亂暴至極ですな。」

「職人の方は、大怪我をしたやうです。それでも、近所の評判は、その丁稚の方が好いと云ふのだから、不思議でせう。その外まだ其通町三丁目にも一つ、新麹町の二丁目にも一つ、それから、もう一つは何處でしたかな。兎に角、諸方にあるさうです それが皆、我我の眞似ださうだから、可笑しいぢやありませんか。」

藤左衛門と忠左衛門とは、顏を見合せて、笑つた。復讐の擧が江戸の人心に與へた影響を耳にするのは、どんな些事にしても、快いに相違ない。唯一人内藏之助だけは、僅に額へ手を加へた儘、つまらなさうな顏をして、默つてゐる。――藤左衛門の話は、彼の心の滿足に、かすかながら妙な曇りを落させた。と云つても、勿論彼が、彼のした行爲のあらゆる結果に、責任を持つ氣でゐた譯ではない。彼等が復讐の擧を果して以來、江戸中に仇討が流行した所で、それはもとより彼の良心と風馬牛なのが當然である。しかし、それにも關らず、彼の心からは、今までの春の温もりが、幾分か減却したやうな感じがあつた。

事實を云へば、その時の彼は、單に自分たちのした事の影響が、意外な所まで波動したのに、聊驚いただけなのである。が、ふだんの彼なら、藤左衛門や忠左衛門と共に、笑つてすませてる筈のこの事實が、其時の滿足しきつた彼の心には、ふと不快な種を蒔く事になつた。これは恐らく、彼の滿足が、暗暗の裡に論理と背馳して、彼の行爲とその結果のすべてとを肯定する程、蟲の好い性質を帶びてゐたからであらう。勿論當時の彼の心には、かう云ふ解剖的な考へは、少しもはひつて來なかつた。彼は唯、春風の底に一脈の氷冷の氣を感じて、何となく不愉快になつただけである

しかし、内藏之助の笑はなかつたのは、格別二人の注意を惹かなかつたらしい。いや、人の好い藤左衛門の如きは、彼自身にとつてこの話が興味あるやうに内藏之助にとつても興味があるものと確信して疑はなかつたのであらう。それでなければ、彼は、更に自身下の間へ赴いて、當日の當直だつた細川家の家來、堀内傳右衛門を、わざわざこちらへつれて來などはしなかつたのに相違ない。所が、萬事にまめな彼は、忠左衛門を顧て、「傳右衛門殿をよんで來ませう。」とか何とか云ふと、早速隔ての襖をあけて、氣輕く下の間へ出向いて行つた。さうして、程なく、見た所から無骨らしい傳右衛門を伴つて、不相變の微笑をたたへながら、得得として歸つて來た。

「いや、これは、とんだ御足勞を願つて恐縮でございますな。」

忠左衛門は、傳右衛門の姿を見ると、良雄に代つて微笑しながら、かう云つた。傳右衛門の素朴で、眞率な性格は、お預けになつて以來、夙に彼と彼等との間を、故舊のやうな温情でつないでゐたからである。

「早水氏が是非こちらへ參れと云はれるので、御邪魔とは思ひながら、罷り出ました。」

傳右衛門は、座につくと、太い眉毛を動かしながら、日にやけた頰の筋肉を、今にも笑ひ出しさうに動かして、萬遍なく一座を見廻した。これにつれて、書物を讀んでゐたのも、筆を動かしてゐたのも、皆それぞれ挨拶をする。内藏之助もやはり、慇懃に會釋をした。唯その中で聊、滑稽の觀があつたのは、讀みかけた太平記を前に置いて、眼鏡をかけた儘、居眠りをしてゐた堀部彌兵衛が、眼をさますが早いか、慌ててその眼鏡をはづして、丁寧に頭を下げた容子である。これには流石な間喜兵衛も、よくよく可笑しかつ

たちの方を見て、傍の[illegible]の方を向きながら、苦しさうな顔をして笑をこらへてゐた。

「傳右衛門殿も老人はお嫌ひだと見えて、兎角こちらへはお出になりませんな。」

内藏之助は、何時に似合はない、滑な調子で、かう云つた。幾分か亂されはしたものの、まだ彼の胸底には、さつきの滿足の情が、暖く流れてゐたからであらう。

「いや、さう云ふ譯ではございませんが、何かとあちらの方方に引とめられて、ついその儘、話しこんでしまふのでございます。」

「今も承れば、大分面白い話が出たさうでございますな。」

忠左衛門も、傍から口を挾んだ。

「面白い話――と申しますと……」

「江戸中で仇討の眞似事が流行ると云ふ、あの話でございます。」

藤左衛門は、かう云つて、傳右衛門と内藏之助とを、にこにこしながら、等分に見比べた。

「はあ、いや、あの話でございますか。人情と云ふものは、實に妙なものでございます。御一同の忠義に感じると、町人百姓までさう云ふ眞似がして見たくなるのでございませう。これで、どの位じだらくした上下の風俗が、改まるかわかりません。やれ淨瑠璃の、やれ歌舞伎のと、見たくもないものばかり流行つてゐる時でございますから、丁度よろしうございます。」

會話の進行は、又内藏之助にとつて、面白くない方向へ進むらしい。そこで、彼は、わざと重重しい調子で、卑下の辭を述べながら、巧にその方向を轉換しようとした。

「手前たちの忠義をお褒め下さるのは難有いが、手前一人の量見では、お恥しい方が先に立ちます。」

かう云つて、一座を眺めながら、

「何故かと申しますと、赤穂一藩に人も多い中で、御覽の通りここに居りまするものは、皆小身者ばかりでございます。尤も最初は、奥野將監などと申す番頭も、何かと相談にのつたものでございますが、中ごろから量見を變へ、遂に同盟を脱しましたのは、心外と申すより外はございません。その外、進藤源四郎、河村傳兵衛、小山源五右衛門などは、原惣右衛門より上席でございますし、佐佐木小左衛門なども、吉田忠左衛門より身分は上でございますが、皆一擧が近づくにつれて、變心致しました。その中には、手前の親族の者もございます。して見ればお恥しい氣のするのも無理はございますまい。」

一座の空氣は、内藏之助のこの語と共に、今まで陽氣さをなくして、急に眞面目な調子を帯びた。この意味で、會話は、彼の意圖通り、方向を轉換したと云つてもさしつかへない。が、轉換した方向が、果して内藏之助にとつて、愉快なものだつたかどうかは、自ら又別な問題である。

彼の述懷を聞くと、先早水藤左衛門は、兩手にこしらへてゐる拳骨を、二三度膝の上にこすりながら、

「彼奴等は、皆揃つて人畜生ばかりですな。一人として、武士の風上にも置けるやうな奴は居りません。」

「さやうさ。それも高田群兵衛などになると、畜生より劣つてゐますて。」

忠左衛門は、眉をあげて、賛同を求めるやうに、堀部彌兵衛を見た。慷慨家の彌兵衛は、もとより默つてゐない。

「引上げの朝、彼奴に遇つた時には、唾を吐きかけても飽き足らぬと思ひました。何しろのめのめと我我の前へ面をさらした上に、御本望を遂げられ、大慶の至りなどと云ふのですからな。」

「高田も高田ぢやが、小山田庄左衛門などもしようのないたはけ者ぢや。」

間瀬久太夫が、誰に云ふともなく、かう云ふと、原惣右衛門や小野寺十内も、やはり口を齊しくして、背盟の徒を罵りはじめた。寡黙な間喜兵衛でさへ、口こそきかないが、白髪頭をうなづかせて、一同の意見に賛同の意を表した事は、度度ある。

「何に致せ、御一同のやうな忠臣と、一つ御藩に、さやうな輩が居らうとは、考へられも致しませんな。さればこそ、武士はもとより、町人百姓まで、犬侍の禄盗人のと悪口を申して居るやうでございます。岡林杢之助殿なども、昨年切腹こそ致されたが、やはり親類縁者が申し合せて、詰腹を斬らせたのだなどと云ふ風評がございました。又よしんばさうでないにしても、かやうな場合に立ち至つて見れば、その汚名も受けずには居られますまい。まして、余人は猶更の事でございます。これは仇討の眞似事を致す輩、義に勇みやすい江戸の事と申し、且はかねがね御一同の御憤りもある事と申し、さやうな輩を斬つてすてるものが出ないとも、限りませんな。」

傳右衛門は、他人事とは思はないやうな容子で、昂然とかう云ひ放つた。この分では、誰よりも彼自身が、その斬り捨ての任に當り兼ねない勢である。これに煽動された吉田、原、早水、堀部などは、皆一種の興奮を感じたやうに、愈手ひどく、亂臣賊子を罵殺しにかかつた。——が、その中に唯一人、大石内藏之助だけは、両手を膝の上にのせた儘、愈つまらなさうな顔をして、だんだん口数をへらしながら、ぼんやり火鉢の中を眺めてゐる。

彼は、彼の轉換した方面へ會話が進行した結果、變心した故朋輩の代償で、彼等の忠義が益褒めそやされてゐると云ふ、新しい事實を發見した。さうして、それと共に、彼の胸間を吹いてゐた春風は、再、幾分の温もりを減却した。勿論彼が背盟の徒の爲に惜んだのは、單に會話の方向を轉じたかつた爲ばかりではない。彼としては、實際彼等の變心を遺憾とも不快とも思つてゐた。が、彼はそれらの不忠の侍をも、憐みこそすれ、憎いとは思つてゐない。人情の向背も、世故の轉變も、つぶさに味つて來た彼の眼から見れば、彼等の變心の多くは、自然すぎる程自然であつた。もし眞率と云ふ語が許されるとすれば、氣の毒な位眞率であつた。從つて、彼は彼等に對しても、終始寛容の態度を改めなかつた。まして、復讐の事の成つた今になつて見れば、彼等に與ふ可きものは、唯憫笑が殘つてゐるだけである。それを世間は、殺しても猶飽き足らないやうに、思つてゐるらしい。何故我我を忠義の士とする爲には、彼等を人畜生としなければならないのであらう。我我と彼等との差は、存外大きなものではない。——江戸の町人に與へた妙な影響を、前に快からず思つた内藏之助は、それとは稍ちがつた意味で、今度は背盟の徒が蒙つた影響を、傳右衛門によつて代表された、天下の公論の中に看取した。彼が苦い顔をしたのも、決して偶然ではない。

しかし、内藏之助の不快は、まだ、この上に、最後の仕上げを受ける運命を持つてゐた。

彼の無言でゐるのを見た傳右衛門は、大方それを彼らしい謙譲な心もちの結果とでも、推測したのであらう。愈、彼の人柄に敬服した、この朴直な肥後侍は、無理に話頭を一轉すると、忽ち内藏之助の忠義に對する盛な歎賞の辭をならべはじめた。

「過日もさる物識りから承りましたが、唐土の何とやら申す侍は、炭を呑んで唖になつてまでも、主人の仇をつけ狙つたさうでございますな。しかし、それは内藏之助殿のやうに、心

にもない放埒をつくされるよりは、まだまだ苦しくない方ではございますまいか。」

傳右衛門は、かう云ふ前置きをして、それから、内藏之助が濫行を盡した一年前の逸聞を、長々としやべり出した。高尾や愛宕の紅葉狩も、佯狂の彼には、どの位つらかつた事であらう。島原や祇園の花見の宴も、苦肉の計に耽つてゐる彼には、苦しかつたのに相違ない。……

「承れば、その頃京都では、大石かるくて張拔石などと申す唄も、流行りました由を聞き及びました。それほどまでに、天下を欺き了せるのは、よくよくの事でなければ出來ますまい。先頃天野彌左衛門樣が、沈勇だと御賞美になつたのも、至極道理な事でございます。」

「いや、それ程何も、大した事ではございません。」内藏之助は、不承不承に答へた。

その人に傚らない態度が、傳右衛門にとつては、物足りないと同時に、一層の奥床しさを感じさせたと見えて、今まで内藏之助の方を向いてゐた彼は、永年京都勤番をつとめてゐた小野寺十内の方へ向きを換へると、益〻熱心に推服の意を洩し始めた。その子供らしい熱心さが、一黨の中でも通人の名の高い十内には、可笑しいと同時に、可愛かつたのであらう。彼は、素直に傳右衛門の意をむかへて、當時内藏之助が仇家の細作を欺く爲に、法衣をまとつて升屋の夕霧のもとへ通ひつめた話を、事明細に話して聞かせた。

「あの通り眞面目な顏をしてゐる内藏之助が、當時は里げしきと申す唄を作つた事もございました。それが又、中中評判で、廓中どこでもうたはなかつた所はなかつた位でございます。そこへ、當時の内藏之助の風俗が、墨染の法衣姿で、あの祇園の櫻がちる中を、浮さま浮さまとそやされながら、醉つて歩くと云ふのでございませう。里げしきの唄が流行つたり、内藏之助の濫行も名高くなつたりしたのは、少しも無理はございません。何しろ夕霧と云ひ、浮橋と云ひ、島原や撞木町の名高い太夫たちでも、内藏之助と云へば、下にも置かないやうに扱ふと云ふ騷ぎでございましたから。」

内藏之助は、かう云ふ十内の話を、殆、侮蔑されたやうな心もちで、苦々しく聞いてゐた。と同時に又、昔の放埒の記憶を、思ひ出すともなく思ひ出した。それは、彼にとつては、不思議な位色彩の鮮な記憶である。彼はその思ひ出の中に、長蝋燭の光を見、伽羅の油の匂を嗅ぎ、加賀節の三味線の音を聞いた。いや、今十内が云つた里げしきの、さすが涙のばらばら袖に、こぼれて袖に、露のよすがのうきつとめと云ふ文句さへ、春宵の中から拔け出したやうに、歷歷と心中に浮んで來た。如何に彼は、その記憶の中に出沒するあらゆる放埒の生活を、思ひ切つて受用した事であらう。さうして又、如何にその放埒の生活の中に、復讐の擧を全然忘却した駘蕩たる瞬間を、味つた事であらう。彼は己を欺いて、この事實を否定するには、餘りに正直な人間であつた。勿論この事實が不道徳なものだなどと云ふ事も、人間性に明な彼にとつて、夢想さへ出來ない所である。從つて、彼の放埒のすべてを、彼の忠義を盡す手段として激賞されるのは、不快であると共に、うしろめたい。

かう考へてゐる内藏之助が、その所謂佯狂苦肉の計を褒められて、苦い顏をしたのに不思議はない。彼は、再度の打擊をうけて僅に殘つてゐた胸間の春風が、見る見る中に吹きつくしてしまつた事を意識した。あとに殘つてゐるのは、一切の誤解に對する反感と、その誤解を豫想しなかつた彼自身の愚に對する反感とが、うすら寒く影をひろげてゐるばかりである。彼の

復讐の擧も、彼の同志も、最後に又彼自身も、多分この儘、勝手な賞讚の聲と共に、後代まで傳へられる事であらう。――から云ふ不快な事實と向ひあひながら、彼は火の氣のうすくなつた火鉢に手をかざすと　傳右衞門の眼をさけて、情無ささうにため息をした。――

それから何分かの後である。厠へ行くのにかこつけて、座をはづして來た大石内藏之助は、獨り緣側の柱によりかかつて、寒梅の老木が、古庭の苔と石との間に、的皪たる花をつけたのを眺めてゐた。日の色はもううすれ切つて、植込の竹のかげからは、早くも黃昏がひろがらうとするらしい。が、障子の中では、不相變面白さうな話聲がつづいてゐる。彼はそれを聞いてゐる中に、自らな一味の哀情が、徐に彼をつつんで來るのを意識した。このかすかな梅の匂につれて、冴返る心の底へしみ透つて來る寂しさは、この云ひやうのない寂しさは、一體どこから來るのであらう。――内藏之助は、青空に象嵌をしたやうな、堅く冷い花を仰ぎながら、何時までもぢつと佇んでゐた。

（大正六年八月作）

春の日のさした往來をぶらぶら一人步いてゐる

春の日のさした往來をぶらぶら一人步いてゐる。向うから來るのは屋根屋の親かた。屋根屋の親かたもこの節は紺の背廣に中折帽をかぶり、ゴムか何かの長靴をはいてゐる。それにしても大きい長靴だなあ。膝――どころではない。腿も半分がたは隱れてゐる。ああ云ふ長靴をはいた時には、長靴をはいたと云ふよりも何かの拍子に長靴の中へ落つこつたやうな氣がするだらうなあ。

顏馴染の道具屋を覗いて見る。正面の紅木の棚の上に蟲明けらしい德利が一本。あの德利の口などは妙に猥褻に出來上つてゐる。さうさう、いつか見た古備前の德利の口もちよいと接吻位したかつたつけ。鼻の先に染めつけの皿が一枚。藍色の柳の枝垂れた下にやはり藍色の人が一人、莫迦に長い釣竿を伸ばしてゐる。誰かと思つて覗きこんで見たら、金澤にゐる室生犀星！

又ぶらぶら步きはじめる。八百屋の店に慈姑がすこし。慈姑の皮の色は上品だなあ。古い泥七寶の靑に似てゐる。あの慈姑を買はうかしら。譃をつけ。買ふ氣のないことは知つてゐる癖に。だが一體どう云ふものだらう、自分にも譃をつきたい氣のするのは。今度は小鳥屋。どこもかしこも鳥籠だらけだなあ。おや、御亭主も氣樂さうに山雀の籠の中に坐つてゐる！

「つまり馬に乘つた時と同じなのさ。」

「カントの論文に祟られたんだね。」

後ろからさつさと通りぬける制服制帽の大學生が二人。ちよいと聞いた他人の會話と云ふものは氣違ひの會話に似てゐるなあ。この邊そろそろ上り坂。もうあの家の椿などは落ちて茶色に變つてゐる。尤も崖側の竹藪は不相變黃ばんだままなのだが……おつと向うから馬が來たぞ。馬の目玉は大きいなあ。竹藪も椿も己の顏もみんな目玉の中に映つてゐる。馬のあとからはモンジロ蝶。

「生ミタテ玉子アリマス。」

アア、サウデスカ？　ワタシハ玉子ハ入リマセン。――春の日のさした往來をぶらぶら一人步いてゐる。

（『百艸』の「野人生計事」より）

首が落ちた話

上

何小二は軍刀を抛り出すと、夢中で馬の頭にしがみついた。確かに頸を斬られたと思ふ――いや、これはしがみついた後で、さう思つたのかも知れない。唯、何か頸へずん、と音を立てて、はひつたと思ふ――それと同時に、しがみついたのである。すると馬も創を受けたのであらう。何小二が鞍の前輪へつつぷすが早いか、一声高く嘶いて、鼻づらを急に空へ向けると、忽ち敵味方のごつたになつた中をつきぬけて、満目の高粱畑をまつしぐらに走り出した。二三発、銃声が後から響いたやうに思はれるが、それも彼の耳には、夢のやうにしか聞えない。

人の身の丈よりも高い高粱は、無二無三に駈けてゆく馬に踏みしだかれて、波のやうに起伏する。それが右からも左からも、或は彼の辮髪を掃つたり、或は彼の軍服を叩いたり、或は又彼の頸から流れてゐる、どす黒い血を拭つたりした。が、彼の頭には、それを一々意識するだけの余裕がない。唯、斬られたと云ふ簡単な事実だけが、苦しい程はつきり、脳味噌に焦げついてゐる。斬られた。斬られた。――かう心の中に繰返しながら、彼は全く機械的に、汗みづくになつた馬の腹を何度も靴の踵で蹴つた。

――

十分程前、何小二は仲間の騎兵と一しよに、味方の陣地から川一つ隔てた、小さな村の方へ偵察に行く途中、黄いろくなりかけた高粱の畑の中で、突然一隊の日本騎兵と遭遇した。それが余り突然すぎたので、敵も味方も小銃を発射する暇がない。少くとも味方は、赤い筋のはひつた軍帽と、やはり赤い肋骨のある軍服とが見えると同時に、誰からともなく一度に軍刀をひき抜いて、咄嗟に馬の頭をその方へ立て直した。勿論その時は、万一自分が殺されるかも知れないなどと云ふことは、誰の頭にもはひつて来ない。そこにあるのは、唯敵である。或は敵を殺す事である。だから彼等は馬の頭を立て直すと、いづれも犬のやうに歯をむき出しながら、猛然として日本騎兵のゐる方へ殺到した。すると敵も彼等と同じ衝動に支配されてゐたのであらう。一瞬の後には、やはり歯をむき出した、彼等の顔を鏡に映したやうな顔が、幾つも彼等の左右に出没し始めた。さうしてその顔と共に、何本かの軍刀が、忙しく彼等の周囲に、風を切る音を起し始めた。

それから後の事は、どうも時間の観念が明瞭でない。丈の高い高粱が、まるで暴風雨にでも遇つたやうにゆすぶれたり、そのゆすぶれてゐる穂の先に、銅のやうな太陽が懸つてゐたりした事は、不思議な位はつきり覚えてゐる。が、その騒ぎがどの位つづいたか、その間にどんな事件がどんな順序で起つたか、かう云ふ点になると、殆、何一つはつきりしない。兎に角その間中何小二は自分にもまるで意味を成さない事を、気違ひのやうな大声で喚きながら、無暗に軍刀をふりまはしてゐた。一度その軍刀が赤くなつた事もあるやうに思ふが、どうも手答へはしなかつたらしい。その中に、ふりまはしてゐる軍刀の柄が、だんだん脂汗でぬめつて来る。さうしてそれにつれて、妙に口の中が渇いて来る。そこへ殆、眼球が飛び出しさうに眼を見開いた、血相の変つてゐる日本騎兵の顔が、

大きな口を開きながら、突然彼の馬の前に跳り出した。赤い筋のある軍帽が、半ば裂けた間からは、いが栗坊主の頭が覗いてゐる。何小二はそれを見ると、いきなり軍刀をふり上げて、力一ぱいその帽子の上へ斬り下した。が、こつちの軍刀に觸れたのは、相手の軍帽でもなければ、その下にある頭でもない。それを下から刎ね上げた、向うの軍刀の鋼である。その音が煮えくり返るやうな周圍の騷ぎの中に、恐しくかんと冴え渡つて、磨いた鐵の冷かな臭を、一度に鋭く鼻の孔の中へ送りこんだ。さうしてそれと共に、眩く日を反射した、幅の廣い向うの軍刀が、頭の眞上へ來て、くるりと大きな輪を描いた。――と思つた時、何小二の頸のつけ根へは、何とも云へない、つめたい物が、ずんと音を立てて、はひつたのである。

馬は、創の痛みで唸つてゐる何小二を乘せた儘、高粱畑の中を無二無三に駈けて行つた。どこまで駈けても、高粱は盡きる容子もなく茂つてゐる。人馬の聲や軍刀の斬り合ふ音は、もう何時の間にか消えてしまつた。日の光も秋は、遼東と日本と變りがない。

繰返して云ふが、何小二は馬の背に搖られながら、創の痛みで唸つてゐた。が、彼の食ひしばつた歯の間を洩れる聲には、唯唸り聲と云ふ以上に、もう少し複雜な意味がある。と云ふのは、彼は獨り肉體的の苦痛の爲にのみ、呻吟してゐたのではない。精神的な苦痛の爲に――死の恐怖を中心として、目まぐるしい感情の變化の爲に、泣き喚いてゐたのである。

彼は永久にこの世界と別れるのが、たまらなく悲しかつた。それから彼をこの世界と別れさせるやうにした、あらゆる人間や事件が恨めしかつた。それからどうしてもこの世界と別れなければならない彼自身が腹立しかつた。それから――こんな種種雜多の感情は、それからそれへと緣を引いて際限なく彼を虐みに來る。だから彼はこれらの感情が往來するのに從つて、「死ぬ。死ぬ。」と叫んで見たり、父や母の名を呼んで見たり、或は又日本騎兵の惡口を云つて見たりした。が、不幸にしてそれが一度彼の口を出ると、何の意味も持つてゐない、嗄れた唸り聲に變つてしまふ。それほども彼は弱つてでもゐたのであらう。

「私ほどの不幸な人間はない。この若さにこんな所まで戰に來て、しかも犬のやうに譯もなく殺されてしまふ。それには第一に、私を斬つた日本人が憎い。その次には私たちを偵察に出した、私の隊の上官が憎い。最後にこんな戰爭を始めた、日本國と清國とが憎い。いや憎いものはまだ外にもある。私を兵卒にした事情に幾分でも關係のある人間が、皆私には敵と變りがない。私はさう云ふいろいろの人間のおかげで、したい事の澤山あるこの世の中と、今の今別れてしまふ。ああ、さう云ふ人間や事情のするなりにさせて置いた私は、何と云ふ莫迦だらう。」

何小二はその唸り聲の中にこんな意味を含めながら、馬の平首にかじりついて、何處までも高粱の中を走つて行つた。その勢に驚いて、時時鶉の群が慌しくそこここから飛び立つたが、馬は元よりそんな事には頓着しない。背中に乘せてゐる主人が、時時ずり落ちさうになるのにもかまはずに、泡を吐き吐き駈けつづけてゐる。

だからもし運命が許したら、何小二はこの不斷の呻吟の中に、自分の不幸を上天に訴へながら、あの銅のやうな太陽が西の空に傾くまで、一日馬の上でゆられ通したのに相違ない。が、この平地が次第に緩い斜面をつくつて、高粱と高粱との間を流れてゐる、幅の狭い濁り

川か、行手に明く開けた時、運命は二三本の川楊の木になつて、もう落ちかかつた葉を低い梢に集めながら、寂しく川のふちに立つてゐた。さうして、何小二の馬がその間を通りぬけるが早いか、いきなりその茂つた枝の中に、彼の體を抱き上げて、水際の柔な泥の上へまつさかさまに抛り出した。

その途端に何小二は、どう云ふ聯想の關係で、空に燃えてゐる鮮な黄いろい炎が眼に見えた。子供の時に彼の家の廚房で、大きな竈の下に燃えてゐるのを見た、鮮な黄いろい炎である。「ああ火が燃えてゐる。」と思ふ――その次の瞬間には彼はもう何時か正氣を失つてゐた。……

中

馬の上から轉げ落ちた何小二は、全然正氣を失つたのであらうか。成程創の疼みは、何時か殆、しなくなつた。が、彼は土と血とにまみれて、人氣のない川のふちに横はりながら、川楊の葉が撫でてゐる、高い蒼空を見上げた覺えがある。その空は、彼が今まで見たどの空よりも、奥深く蒼く見えた。丁度大きな藍の瓶をさかさまにして、それを下から覗いたやうな心もちである。しかもその瓶の底には、泡の集つたやうな雲がどこからか生れて來て、又どこかへ倏然と消えてしまふ。それが丁度絶えず動いてゐる川楊の葉に、かき消されて行くやうにも思はれる。

では、何小二は全然正氣を失はずにゐたのであらうか。しかし彼の眼と蒼空との間には實際そこになかつた色色な物が、影のやうに幾つとなく去來した。第一に現はれたのは、彼の母親のうすよごれた裙子である。子供の時の彼には、嬉しい時でも、悲しい時でも、何度この裙子にすがつたかわからない。が、これは思はず彼が手を伸ばして、捉へようとする間もなく、眼界から消えてしまつた。消える時に見ると、裙子は紗のやうに薄くなつて、その向うにある雲の塊を、雲母のやうに透かせてゐる。

その後からは、彼の生まれた家の後にある、だだつ廣い胡麻畑が、辷るやうに流れて來た。さびしい花が日の暮を待つやうに咲いてゐる、眞夏の胡麻畑である。何小二はその胡麻の中に立つてゐる、自分や兄弟たちの姿を探して見た。が、そこに人らしいものの影は一つもない。唯色の薄い花と葉とが、ひつそりと一つになつて、薄い日の光に浴してゐる。これは空間を斜に横ぎつて、吊り上げられたやうにすつと消えた。

するとその次には妙なものが空をのたくつて來た。よく見ると、燈夜に街をかついで歩く、あの大きな龍燈である。長さは四五間もあらうか。竹で造つた骨組みの上へ、紙を張つて、それに毒々しく青と赤との畫の具で、派手な彩色が施してある。形は畫で見る龍と、少しも變りがない。それが晝間だのに、中へ蠟燭らしい火をともして、彷彿と蒼空へ現れた。その上不思議な事には、其の龍燈が、どうも生きてゐるやうな心もちがする。現に長い鬚などは、ひとりでに左右へ動くらしい。――と思ふ中にそれもだんだん視野の外へ泳いで行つて、そこから急に消えてしまつた。

それが見えなくなると、今度は華奢な女の足が突然空へ現れた。纏足をした足だから、細さは漸く三寸あまりしかない。しなやかにまがつた指の先には、うす白い爪が柔く肉の色を隔ててゐる。何小二の心にはその足を見た時の記憶が夢の中で食はれた蚤のやうに、ぼんやり遠い悲しさを運んで來た。もう一度あの足にさはる事が出來たなら、――しかしそれは勿論もう出來ないのに相違ない。こことあの足を見た所と

の間は、何百里と云ふ道程がある。さう思つてゐる中に、足は見る見る透明になつて、自然と雲の影に吸はれてしまつた。
その足が消えた時である。何小二は心の底から、今までに一度も感じた事のない、不思議な寂しさに襲はれた。彼の頭の上には、大きな蒼空が音もなく蔽ひかかつてゐる。人間はいやでもこの空の下で、そこから落ちて來る風に吹かれながら、みじめな生存を續けて行かなければならない。これは何と云ふ寂しさであらう。さうしてその寂しさを今まで自分が知らなかつたと云ふ事は、何と云ふ又不思議な事であらう。何小二は思はず長いため息をついた。
この時、彼の眼と空との中には、赤い筋のある軍帽をかぶつた日本騎兵の一隊が、今までのどれよりも早い速力で、慌しく進んで來た。さうして又同じやうな速力で、慌しくどこかへ消えてしまつた。ああ、あの騎兵たちも、寂しさはやはり自分と變らないのであらう。もし彼等が幻でなかつたなら、自分は彼等と互に慰め合つて、せめて一時でもこの寂しさを忘れたい。しかしそれはもう、今になつては遅かつた。
何小二の眼には、とめどもなく涙があふれて來た。その涙に濡れた眼でふり返つた時、彼の今までの生活が、如何に醜いものに滿ちてゐたか、それは今更云ふ必要はない。彼は誰にでも謝りたかつた。さうして又、誰をでも赦したかつた。
「もし私がここで助かつたら、私はどんな事をしても、この過去を償ふのだが。」
彼は泣きながら、心の底でかう呟いた。が、限りなく深い、限りなく蒼い空は、まるでそれが耳へはひらないやうに、一尺づつ或は一寸づつ、徐徐として彼の胸の上へ下つて來る。その蒼い灝氣の中に、點點としてかすかにきらめくものは、大方晝見える星であらう。もう今はあの影のやうなものも、二度と眸底は横ぎらない。何小二はもう一度歎息して、それから急に脣をふるはせて、最後にだんだん眼をつぶつて行つた。

下

日清兩國の間の和が講ぜられてから、一年ばかり經つた、或早春の午前である。北京にある日本公使館内の一室では、公使館附武官の木村陸軍少佐と、折から官命で内地から視察に來た農商務省技師の山川理學士とが、一つテエブルを圍みながら、一碗の珈琲と一本の葉卷とに忙しさを忘れて、のどかな雜談に耽つてゐた。早春とは云ひながら、大きなカミンに火が焚いてあるので、室の中はどうかすると汗がにじむ程暖い。そこへテエブルの上へのせた鉢植ゑの紅梅が時時支那めいた匂を送つて來る。
二人の間の話題は、暫く西太后で持ち切つてゐたが、やがてそれが一轉して日清戰爭當時の追憶になると、木村少佐は何を思つたか急に立ち上つて、室の隅に置いてあつた神州日報の綴ぢこみを、こつちのテエブルへ持つて來た。さうして、その中の一枚を山川技師の眼の前へひろげると、指で或箇所をさしながら、讀み給へと云ふ眼つきをした。それがあまり唐突だつたので、技師はちよいと驚いたが、相手の少佐が軍人に似合はない、洒脱な人間だと云ふ事は日頃からよく心得てゐる。そこで咄嗟に、戰爭に關係した奇拔な逸話を豫想しながら、その紙面へ眼をやると、果してそこには、日本の新聞口調に直すとこんな記事が、四角な字ばかりで物物しく揭げてあつた。
——街の剃頭店主人、何小二なる者は、日清戰爭に出征して、屢、勳功を顯したる勇士なれど、凱旋後兎角素行修らず、酒と女とに身を持崩してゐたが、去る—日、某

酒樓にて飲み仲間の某と口論し、遂に擲み合ひの喧嘩となりたる末、頸部に重傷を負ひ即刻絶命したり。ことに不思議なるは同人の頸部なる創にして、これはその際兇器にて傷けられたるものにあらず、全く日清戰爭中戰場にて負ひたる創口が、再、破れたるものにして、實見者の談によれば、格鬪中同人が卓子と共に顛倒するや否や、首は俄然喉の皮一枚を殘して、鮮血と共に床上に轉び落ちたりと云ふ。但、當局は、その眞相を疑ひ、目下犯人嚴探中の由なれども、諸城の某甲が首の落ちたる事は、載せて聊齋志異にもあれば、該何小二の如きも、その事なしとは云ふ可らざるか。云云。」

山川技師は讀み了ると共に、呆れた顏をして、「何だい、これは。」と云つた。すると木村少佐は、ゆつくり葉卷の煙を吐きながら、鷹揚に微笑つて、

「面白いだらう。こんな事は支那でなくつては、ありはしない。」

「さうどこにでもあつて、たまるものか。」

山川技師もにやにやしながら、長くなつた葉卷の灰を灰皿の中へはたき落した。

「しかも更に面白い事は――」

少佐は妙に眞面目な顏をして、ちよいと語を切つた。

「僕はその何小二と云ふやつを知つてゐるのだ。」

「知つてゐる？　これは驚いた。まさかアッタッシェの癖に、新聞記者と一しよになつて、いい加減な噓を捏造するのではあるまいね。」

「誰がそんなくだらない事をするものか。僕はあの頃――屯の戰で負傷した時に、その何小二と云ふやつも、やはり我軍の野戰病院へ收容されてゐたので、支那語の稽古かたがた二三度話をした事があるのだ。頸に創があると云ふのだから、十中八九あの男に違ひない。何でも偵察か何かに出た所が、我軍の騎兵と衝突して頸へ一つ日本刀をお見舞申されたと云つてゐた。」

「へえ、妙な縁だね。だがそいつはこの新聞で見ると、無頼漢だと書いてあるではないか。そんなやつは一層その時に死んでしまつた方が、どの位世間でも助かつたか知れないのだらう。」

「それがあの頃は、極正直な、人の好い人間で、捕虜の中にも、あんな柔順なやつは珍らしい位だつたのだ。だから軍醫官でも何でも、妙にあいつが可愛かつたと見えて、特別によく療治をしてやつたらしい。あいつは又身の上話をしても、中中面白い事を云つてゐた。殊にあいつが頸に重傷を負つて、馬から落ちた時の心もちを僕に話して聞かせたのは、今でもちやんと覺えてゐる。或川のふちの泥の中にころがりながら、川楊の木の空を見てゐると、母親の裙子だの、女の素足だの、花の咲いた胡麻畑だのが、はつきりその空へ見えたと云ふのだが。」

木村少佐は葉卷を捨てて、珈琲茶碗を唇へあてながら、テエブルの上の紅梅へ眼をやつて、獨り語のやうに語を次いだ。

「あいつはそれを見た時に、しみじみ今までの自分の生活が淺ましくなつて來たと云つてゐたつけ。」

「それが戰爭がすむと、すぐに無頼漢になつたのか。だから人間はあてにならない。」

山川技師は椅子の背へ頭をつけながら、足をのばして、皮肉に葉卷の煙を天井へ吐いた。

「あてにならないと云ふのは、あいつが猫をかぶつてゐたと云ふ意味か。」

「さうさ。」

「いや、僕はさう思はない。少くともあの時は、あいつも眞面目にさう感じてゐたのだらうと思

ふ。恐らくは今度も亦、首が落ちると同時に（新聞の話をその儘使へば）やはりさう感じたらう。僕はそれをこんな風に想像する。あいつは喧嘩をしてゐる中に、酔つてゐたから、譯なく卓子と一しよに抛り出された。さうしてその拍子に、創口が開いて、長い辮髪をぶらさげた首が、ごろりと床の上へころげ落ちた。あいつが前に見た母親の裙子とか、女の素足とか、或は又花のさいてゐる胡麻畑とか云ふものは、やはりそれと同時にあいつの眼の前を、彷彿として往來した事だらう。或は屋根があるのにも關らず、あいつは深い蒼空を、遙か向うに望んだかも知れない。あいつはその時、しみじみ又今までの自分の生活が淺ましくなつた。が、今度はもう間に合はない。前には正氣を失つてゐる所を、日本の看護卒が見つけて介抱してやつた。今は喧嘩の相手が、そこをつけこんで打つたり蹴つたりする。そこであいつは後悔した上にも後悔しながら息をひきとつてしまつたのだ。」

山川技師は肩をゆすつて笑つた。

「君は立派な空想家だ。だが、それならどうしてあいつは、一度さう云ふ日に遇ひながら、無頼漢なんぞになつたのだらう。」

「それは君の云ふのとちがつた意味で、人間はあてにならないからだ。」

木村少佐は新しい葉卷に火をつけてから、殆、得意に近い程晴晴した調子で、微笑しながらかう云つた。

「我我は我我自身のあてにならない事を、痛切に知つて置く必要がある。實際それを知つてゐるもののみが、幾分でもあてになるのだ。さうしないと、何小二の首が落ちたやうに、我我の人格も、何時どんな時首が落ちるかわからない。——すべて支那の新聞と云ふものは、こんな風に讀まなくてはいけないのだ。」

（大正六年十二月作）

眼

——中華第一の名庖丁張爾臣の談——

眼をね、今日は眼を御馳走しようと思つたのです。何の眼？　無論人間の眼をですよ。そりや眼を召上がらなければ、人間を召上つたとは云はれませんや。眼と云ふやつはうまいものですぜ。脂があつて、歯ぎれがよくつて、——え、何にする？　まあ、湯へ入れるんですね。丁度鳩の卵のやうに、白眼と黒眼とはつきりしたやつが、ふはふは浮いてゐやうと云ふんです。どうです？　惡くはありますまい。私なんぞは話してゐても、自然と唾氣がたまつて來ますぜ。そりや清湯燕窩だとか清湯鴿蛋だとかは、比べものにも何にもなりませんや。所が今日その眼を抜いて見ると、——これにや私も驚きましたね。まるで使ひものにやならないんです。何、男か女か？　男ですよ。男も男も、髭の生えた、フロック・コートを著てゐる男ですがね。御覧なさい。此處に名刺があります。Herr Stu[illegible]enpfff。ちつとは有名な男ですか？　成程ね、つまりその新聞や何かに、議論を書いてゐる人間なんでせう。そいつの眼玉がこれぢやありませんか？　そら壁へ叩きつけても、容易な事ぢや破れませんや。驚いたでせう。二つともこの通り入れ眼ですよ。硝子細工の入れ眼ですよ。

（『點心』の「LOS CAPRICHOS」より）

戲作三昧

一

天保二年九月の或午前である。神田同朋町の銭湯松の湯では、朝から不相變客が多かつた。式亭三馬が何年か前に出版した滑稽本の中で、「神祇、釋教、戀、無常、みないりごみの浮世風呂」と云つた光景は、今もその頃と變りはない。風呂の中で歌祭文を唄つてゐる嚊たばね、上り場で手拭をしぼつてゐるちよん髷本多、文身の背中を流させてゐる丸額の大銀杏、さつきから顔ばかり洗つてゐる由兵衞奴、水槽の前に腰を据ゑて、しきりに水をかぶつてゐる坊主頭、竹の手桶と燒物の金魚とで、餘念なく遊んでゐる虻蜂蜻蛉、――狹い流しにはさう云ふ種種雜多な人間がいづれも濡れた體を滑かに光らせながら、濛濛と立上る湯煙と窓からさす朝日の光との中に、模糊として動いてゐる。その又騷ぎが、一通りではない。第一に湯を使ふ音や桶を動かす音がする。それから話聲や唄の聲がする。最後に時時番臺で鳴らす拍子木の音がする。だから石榴口の內外は、すべてがまるで戰場のやうに騷騷しい。そこへ暖簾をくぐつて、商人が來る。物貰ひが來る。客の出入りは勿論あつた。その混雜の中に――

つつましく隅へ寄つて、その混雜の中に、靜に垢を落してゐる、六十あまりの老人が一人あつた。年の頃は六十を越してゐよう。鬢の毛が見苦しく黃ばんだ上に、眼も少し惡いらしい。が、瘦せてはゐるものの骨組のしつかりした、寧、いかついと云ふ體格で、皮のたるんだ手や足にも、どこかまだ老年に抵抗する底力が殘つてゐる。これは顔でも同じ事で、下顎骨の張つた頬のあたりや、稍大きい口の周圍に、旺盛な動物的精力が、恐ろしい閃きを見せてゐる事は、殆、壯年の昔と變りがない。

老人は丁寧に上半身の垢を落してしまふと、止め桶の湯も浴びずに、今度は下半身を洗ひはじめた。が、黑い垢すりの甲斐絹が何度となく上をこすつても、脂氣の拔けた、小皺の多い皮膚からは、垢と云ふ程の垢も出て來ない。それがふと秋らしい寂しい氣を起させたのであらう。老人は片片の足を洗つたばかりで、急に力がぬけたやうに手拭の手を止めてしまつた。さうして、濁つた止め桶の湯に、鮮かに映つてゐる窓の外の空へ眼を落した。そこには又赤い柿の實が、瓦屋根の一角を下に見ながら、疎に透いた枝を綴つてゐる。

老人の心には、この時「死」の影がさしたのである。が、その「死」は、曾て彼を脅したそれのやうに、忌はしい何物をも藏してゐない。云はばこの桶の中の空のやうに、靜ながら慕はしい、安らかな寂滅の意識であつた。一切の塵勞を脫して、その「死」の中に眠る事が出來たならば――無心の子供のやうに夢もなく眠る事が出來たならば、どんなに悅ばしい事であらう。自分は生活に疲れてゐるばかりではない。何十年來、絕え間ない創作の苦しみにも、疲れてゐる……

老人は憮然として、眼を擧げた。あたりではやはり賑な談笑の聲につれて、大ぜいの裸の人間が、目まぐるしく湯氣の中に動いてゐる。石榴口の中の歌祭文にも、めりやすやよしこのの聲が加はつた。ここには勿論、今彼の心に影を落した悠久なものの姿は、微塵もない。

「いや、先生、こりやとんだ所で御眼にかかりますな。どうも曲亭先生が朝湯にお出でにならうなんぞとは手前夢にも思ひませんでした。」

老人は、突然かう呼びかける聲に驚かされた。見ると彼の傍には、血色のいい、中背の細銀杏が、止め桶を前に控へながら、濡れ手拭を肩へかけて、元氣よく笑つてゐる。これは風呂から出て、丁度上り湯を使はうとした所らしい。

「不相變御機嫌で結構だね。」

馬琴瀧澤瑣吉は、微笑しながら、稍、皮肉にかう答へた。

二

「どう致しまして、一向結構ぢやございません。結構と云や、先生、八犬傳は愈出でて、愈奇なり、結構なお出來でございますな。」

細銀杏は肩の手拭を桶の中へ入れながら、一調子張上げて辯じ出した。

「船蟲が瞽婦に身をやつして、小文吾を殺さうとする。それが一旦つかまつて拷問された擧句に、荘介に助けられる。あの段どりが實に何とも申されません。さうしてそれが又、荘介小文吾再會の楔線になるのでございますからな。不肖ぢやございますが、この近江屋平吉も、小間物屋こそ致して居りますが、讀本にかけちや一かど通のつもりでございます。その手前でさへ、先生の八犬傳には、何とも批の打ちやうがございません。いや全く恐れ入りました。」

馬琴は默つて又、足を洗ひ出した。彼は勿論彼の著作の愛讀者に對しては、昔からそれ相當な好意を持つてゐる。しかしその好意の爲に、相手の人物に對する評價が、變化するなどと云ふ事は少しもない。これは聰明な彼にとつて、當然すぎる程當然な事である、が、不思議な事には逆にその評價が彼の好意に影響すると云ふ事も亦、殆ない。だから彼は場合によつて、輕蔑と好意とを、完く同一人に對して同時に感ずる事が出來た。この近江屋平吉の如きは、正にさう云ふ愛讀者の一人である。

「何しろあれだけのものをお書きになるんぢや、並大抵なお骨折ぢやございますまい。先づ當今では、先生がさしづめ日本の羅貫中と云ふ所でございますな——いや、これはとんだ失禮を申上げました。」

平吉は又大きな聲をあげて笑つた。その聲に驚かされたのであらう。側で湯を浴びてゐた小柄な、色の黒い、眇の細銀杏が、振返つて平吉と馬琴とを見比べると、妙な顏をして流しへ痰を吐いた。

「貴公は不相變發句にお凝りかね。」

馬琴は巧に話頭を轉換した。が、これは何も眇の表情を氣にした譯ではない。彼の視力は幸福な事に(?)もうそれがはつきりとは見えない程、衰弱してゐたのである。

「これはお尋ねに預つて恐縮至極でございますな。手前のはほんの下手の横好きで今日も運座、明日も運座、と、所所方方へ臆面もなくしやしやり出ますが、どう云ふものか、句の方は一向頭を出してくれません。時に先生は、如何でございますな、歌とか發句とか申すものは、格別お好みになりませんか。」

「いや私は、どうもああ云ふものにかけると、とんと無器用でね。尤も一時はやつた事もあるが。」

「そりや御冗談で。」

「いや、完く性に合はないと見えて、未だにとんと眼くらの垣覗きさ。」

馬琴は、「性に合はない」と云ふ語に、殊に力を入れてから云つた。彼は歌や發句が作れないとは思つてゐない。だから勿論その方面の理解にも、乏しくないと云ふ自信がある。が、彼はさう云ふ種類の藝術には、昔から一種の輕蔑を持つ

てゐた。何故かと云ふと、歌にしても、發句にしても、彼の全部をその中に注ぎこむ爲には、餘りに形式が小さすぎる。だから如何に巧に詠みこなしてあつても、一句一首の中に表現されたものは、抒情なり敍景なり、僅に彼の作品の何行かを充す丈の資格しかない。さう云ふ藝術は、彼にとつて、第二流の藝術である。

三

彼が「性に合はない」と云ふ語に力を入れた後には、かう云ふ輕蔑が潛んでゐた。が、不幸にして近江屋平吉には、全然さう云ふ意味が通じなかつたものらしい。

「はゝあ、やつぱりさう云ふものでございますかな。手前などの量見では、先生のやうな大家なら、何でも自由にお作りになれるだらうと存じて居りましたが――いや、天二物を與へずとは、よく申したものでございます。」

平吉はしぼつた手拭で、皮膚が赤くなる程、ごしごし體をこすりながら、稍、遠慮するやうな調子で、かう云つた。が、自尊心の強い馬琴には、彼の謙辭をその儘語通り受取られたと云ふ事が先づ何よりも不滿である。その上平吉の遠慮するやうな調子が、愈、又氣に入らない。そこで彼は手拭と垢すりとを流しへ抛り出すと半ば身を起しながら、苦い顏をして、こんな氣焔をあげた。

「尤も、當節の歌よみや宗匠位には行くつもりだがね。」

しかし、かう云ふと共に、彼は急に自分の子供らしい自尊心が恥づかしく感ぜられた。自分はさつき平吉が、最上級の語を使つて八犬傳を褒めた時にも、格別嬉しかつたとは思つてゐない。さうして見れば、今その反對に、自分が歌や發句を作る事の出來ない人間と見られたにしても、それを不滿に思ふのは、明に矛盾である。咄嗟にかう云ふ自省を動かした彼は、恰も内心の赤面を隱さうとするやうに、慌しく止め桶の湯を肩から浴びた。

「でございませう。さうなくつちや、とてもあゝ云ふ傑作は、お出來になりますまい。して見ますと、先生は歌も發句もお作りになると、かう睨んだ手前の眼光は、やつぱり大したものでございますな。これはとんだ手前味噌になりました。」

平吉は又大きな聲を立てて、笑つた。さつきの眇はもう側にゐない。痰も馬琴の浴びた湯に、流されてしまつた。が、馬琴がさつきにも増して恐縮したのは勿論の事である。

「いや、うつかり話しこんでしまつた。どれ私も一風呂、浴びて來ようか。」

妙に間の惡くなつた彼は、かう云ふ挨拶と共に、自分に對する一種の腹立しさを感じながら、とうとうこの好人物の愛讀者の前を退却すべく、徐に立上つた。が、平吉は彼の氣焔によつて寧ろ愛讀者たる彼自身まで、肩身が廣くなつたやうに、感じたらしい。

「では先生、その中に一つ歌か發句かを書いて頂きたいものでございますな。よろしうございますか、お忘れになつちやいけませんぜ。ぢや手前も、これで失禮致しませう。お忙しうもございませうが、お通りすがりの節は、ちと御立ち寄りを。手前も亦、お邪魔に上ります。」

平吉は追ひかけるやうに、かう云つた。さうして、もう一度手拭を洗ひ出しながら、石榴口の方へ歩いて行く馬琴の後姿を見送つて、これから家へ歸つた時に、曲亭先生に遇つたと云ふ事を、どんな調子で女房に話して聞かせようかと考へた。

四

石榴口の中は、夕方のやうにうす暗い。それ

に湯氣が、霧よりも深くこめてゐる。眼の惡い馬琴は、その中にゐる人人の間を、あぶなさうに押しわけながら、どうにか風呂の隅をさぐり當てると、やつとそこへ皺だらけな體を浸した。

湯加減は少し熱い位である。彼はその熱い湯が爪の先にしみこむのを感じながら、長い呼吸をして、徐に風呂の中を見廻した。うす暗い中に浮んでゐる頭の數は、七つ八つもあらうか。それが皆話をしたり、唄をうたつたりしてゐるまはりには、人間の脂を溶した、滑な湯の面が、石榴口からさす濁つた光に反射して、退屈さうにたぶたぶと動いてゐる。そこへ胸の惡い「洗湯の匂」がむんと人の鼻を衝いた。

馬琴の空想には、昔から羅曼的な傾向がある。彼はこの風呂の湯氣の中に、彼が描かうとする小說の場景の一つを、思ひ浮べるともなく思ひ浮べた。そこには重い舟日覆がある。日覆の外の海は、日の暮と共に風が出たらしい。舷をうつ浪の音が、まるで油を搖るやうに、重苦しく聞えて來る。その音と共に、日覆をはためかすのは、大方蝙蝠の羽音であらう。舟子の一人はそれを氣にするやうに、そつと舷から外を覗いて見た。霧の下りた海の上には、赤い三日月が陰陰と空に懸つてゐる。すると……

彼の空想は、ここまで來て、急に破られた。同じ石榴口の中で、誰か彼の讀本の批評をしてゐるのが、ふと彼の耳へはひつたからである。しかも、それは聲と云ひ、話樣と云ひ、殊更彼に聞かせようとして、しやべり立ててゐるらしい。馬琴は一旦風呂を出ようとしたが、やめて、ぢつとその批評を聞き澄ました。

「曲亭先生の、著作堂主人のと、大きな事を云つたつて、馬琴なんぞの書くものは、みんなありや燒直しでげす。早い話が八犬傳は、手もなく水滸傳の引寫しぢやげえせんか。が、そりやまあ大目に見ても、いい筋がありやす。何しろ先が唐の物でげせう。そこで、まづそれを讀んだと云ふ丈でも、一手柄さ。所がそこへ又づぶ京傳の二番煎じと來ちや、呆れ返つて腹も立ちやせん。」

馬琴はかすむ眼で、この惡口を云つてゐる男の方を透して見た。湯氣に遮られて、はつきりとは見えないが、どうもさつき側にゐた眇の小銀杏でもあるらしい。さうとすればこの男は、さつき平吉が八犬傳を褒めたのに業を煮やして、わざと馬琴に當りちらしてゐるのであらう。

「第一馬琴の書くものは、ほんの筆先一點張りでげす。まるで腹には、何にもありやせん。あればまづ寺子屋の師匠でも云ひさうな、四書五經の講釋だけでげせう。だから又當世の事は、とんと御存じなしさ。それが證據にや、昔の事でなけりや、書いたと云ふためしはとんとげえせん。お染久松がお染久松ぢや書けねえもんだから、そら松染情史秋七草さ。こんな事は、馬琴大人の口眞似をすれば、そのためしさはに多かりでげす。」

憎惡の感情は、どつちか優越の意識を持つてゐる以上、起したくも起されない。馬琴も相手の云ひぐさが癪にさはりながら、妙にその相手が憎めなかつた。その代りに彼自身の輕蔑を、表白してやりたいと云ふ欲望がある。それが實行に移されなかつたのは、恐らく年齡が齒止めをかけたせゐであらう。

「そこへ行くと、一九や三馬は大したものでげす。あの手合ひの書くものには天然自然の人間が出てゐやす。決して小手先の器用や生嚙りの學問で、捏ちあげたものぢやげえせん。そこが大きに蓑笠軒隱者なんぞとは、ちがふ所さ。」

馬琴の經驗によると、自分の讀本の惡評を聞くと云ふ事は、單に不快であるばかりでな

く「危險も亦少くない。」と云ふのは、その惡評を是認する爲に、勇氣が沮喪すると云ふ意味ではなく、それを否認する爲に、その後の創作的動機に、反動的なものが加はると云ふ意味である。さうしてさう云ふ不純な動機から出發する結果、屢畸形な藝術を創造する惧があると云ふ意味である。時好に投ずることのみを目的としてゐる作者は別として、少しでも氣魄のある作者なら、この危險には存外陷り易い。だから馬琴は、この年まで自分の讀本に對する惡評は、成る可く讀まないやうに心がけて來た。が、さう思ひながらも亦、一方には、その惡評を讀んで見たいと云ふ誘惑がないでもない。今、この風呂で、この小銀杏の惡口を聞くやうになつたのも、半はその誘惑に陷つたからである。

かう氣のついた彼は、すぐに便便とまだ湯に浸つてゐる自分の愚を責めた。さうして、癇高い小銀杏の聲を聞き流しながら、石榴口を外へ勢ひよく跨いで出た。外には、湯氣の間に窓の青空が見え、その青空には暖く日を浴びた柹が見える。馬琴は水槽の前へ來て、心靜に上り湯を使つた。

「兎に角、馬琴は食はせ物でげす。日本の羅貫中もよく出來やした。」

しかし風呂の中ではさつきの男が、まだ馬琴がゐるとでも思ふのか、依然として猛烈なフィリッピクスを發しつづけてゐる。事によると、これはその眇に災されて、彼の石榴口を跨いで出る姿が、見えなかつたからかも知れない。

五

しかし、洗湯を出た時の馬琴の氣分は、沈んでゐた。眇の毒舌は、少くともこれだけの範圍で、確に豫期した成功を收め得たのである。彼は秋晴れの江戸の町を歩きながら、風呂の中で聞いた惡評を、一一彼の批評眼にかけて、綿密に點檢した。さうして、それが、如何なる點から考へて見ても、一顧の價のない愚論だと云ふ事實を、卽座に證明する事が出來た。が、それにも關らず、一度亂された彼の氣分は、容易に元通り、落着きさうもない。

彼は不快な眼を擧げて、兩側の町家を眺めた。町家のものは、彼の氣分とは沒交涉に、皆その日の生計を勵んでゐる。だから「諸國銘葉」の柿色の暖簾、「本黃楊」の黃いろい櫛形の招牌、「駕籠」の掛行燈、「卜筮」の算木の旗――さう云ふものが、無意味な一列を作つて、唯雜然と彼の眼底を通りすぎた。

「どうして己は、己の輕蔑してゐる惡評に、かう煩されるのだらう。」

馬琴は又、考へつづけた。

「己を不快にするのは、第一にあの眇が己に惡意を持つてゐると云ふ事實だ。人に惡意を持たれると云ふ事は、その理由の如何に關らず、それ丈で己には不快なのだから、仕方がない。」

彼は、かう思つて、自分の氣の弱いのを恥ぢた。實際彼の如く傲岸無人な態度に出る人が少かつたやうに、彼の如く他人の惡意に對して、敏感な人間も亦少かつたのである。さうして、この行爲の上では全く反對に思はれる二つの結果が、實は同じ原因――同じ神經作用から來てゐると云ふ事實にも、勿論彼はとうから氣がついてゐた。

「しかし、己を不快にするものは、まだ外にもある。それは己があの眇と、對抗するやうな位置に置かれたと云ふ事だ。己は昔からさう云ふ位置に身を置く事を好まない。勝負事をやらないのも、その爲だ。」

ここまで分析して來た彼の頭は、更に一歩を進めると同時に、思ひもよらない變化を、氣分の上に起させた。それは緊くむすんでゐた彼の

辱が、この時急に弛んだのを見ても、知れる事であらう。
最後に、さう云ふ位置へ己を置いた相手が、あの眇だと云ふ事實も、確に己を不快にしてゐる。もしあれがもう少し高等な相手だつたら、己はこの不快を反撥する丈の、反抗心を起してゐたのに相違ない。何にしても、あの眇が相手では、いくら己でも閉口する筈だ。」
馬琴は苦笑しながら、高い空を仰いだ。その空からは、朗かな鳶の聲が、日の光と共に、雨の如く落ちて來る。彼は今まで沈んでゐた氣分が次第に輕くなつて來る事を意識した。
「しかし、眇がどんな惡評を立てようとも、それは精々、己を不快にさせる位だ。いくら鳶が鳴いたからと云つて、天日の歩みが止まるものではない。己の八犬傳は必ず完成するだらう。さうしてその時は、日本が古今に比倫のない大傳奇を持つ時だ。」
彼は恢復した自信を劬りながら、細い小路を靜に家の方へ曲つて行つた。

六

內へ歸つて見ると、うす暗い玄關の沓脫ぎの上に、見慣れたばら緒の雪駄が一足のつてゐる。馬琴はそれを見ると、すぐにその客ののつぺりした顏が、眼に浮んだ。さうして又、時間をつぶされる迷惑を、苦苦しく心に思ひ起した。
「今日も朝の中はつぶされるな。」
かう思ひながら、彼が式臺へ上ると、慌しく出迎へた下女の杉が、手をついた儘、下から彼の顏を見上げるやうにして、
「和泉屋さんが、御居間でお歸りをお待ちでございます。」と云つた。
彼は頷きながら、ぬれ手拭を杉の手に渡した。が、どうもすぐに書齋へは通りたくない。
「お百は。」
「御佛參にお出でになりました。」
「お路も一しよか。」
「はい。坊ちやんと御一しよに。」
「伜は。」
「山本樣へいらつしやいました。」
家内は皆、留守である。彼はちよいと、失望に似た感じを味つた。さうして仕方なく、玄關の隣にある書齋の襖を開けた。
開けて見ると、そこには、色の白い、顏のてらてら光つてゐる、どこか妙に取り澄ました男が、細い銀の煙管を銜へながら、端然と座敷のまん中に控へてゐる。彼の書齋には石刷を貼つた屏風と床にかけた紅楓黃菊の雙幅との外に、裝飾らしい裝飾は一つもない。壁に沿うては、五十に餘る本箱が、唯古びた桐の色を、一面に寂しく竝べてゐる。障子の紙も貼つてから、一冬はもう越えたのであらう。切り貼りの點點として白い上には、秋の日に照された破芭蕉の大きな影が、婆娑として斜に映つてゐる。それだけにこの客のぞろりとした服裝が、一層又周圍と釣り合はない。
「いや、先生、ようこそお歸り。」
客は、襖があくと共に、滑な調子でかう云ひながら、恭しく頭を下げた。これが、當時八犬傳に次いで世評の高い金瓶梅の版元を引受けてゐた、和泉屋市兵衛と云ふ本屋である。
「大分にお待ちなすつたらう。めづらしく今朝は、朝湯に行つたのでね。」
馬琴は、本能的にちよいと顏をしかめながら、何時もの通り、禮儀正しく座についた。
「へへえ、朝湯に。成程。」
市兵衛は、大に感服したやうな聲を出した。如何な瑣末な事件にも、この男の如く容易に感服する人間は、滅多にない。いや、感服したやうな顏をする人間は、稀である。馬琴は徐に一服吸ひつけながら、何時もの通り、早速話を

用談の方へ持つていつた。彼は特に、和泉屋のこの饒舌を好まないのである。

「そこで今日は何か御用かね。」

「へえ、なに又一つ原稿を頂戴に上りましたんで。」

市兵衛は煙管を一つ指の先でくるりとまはして見せながら、女のやうに柔しい聲を出した。この男は不思議な性格を持つてゐる。と云ふのは、外面の行爲と内面の心意とが、大抵な場合は一致しない。しない所か、何時でも正反對になつて現れる。だから、彼は大に強硬な意志を持つてゐると、必ずそれに反比例する、如何にも柔しい聲を出した。

馬琴はこの聲を聞くと、再び本能的に顏をしかめた。

「原稿と云つたつて、それは無理だ。」

「へへえ、何か御差支でもございますので。」

「差支へる所ぢやない。今年は讀本を大分引受けたので、とても合卷の方へは手が出せさうもない。」

「成程それは御多忙で。」

と云つたかと思ふと、市兵衛は煙管で灰吹きを叩いたのが相圖のやうに、今までの話はすつかり忘れたと云ふ顏をして、突然鼠小僧次郎太夫の話をしやべり出した。

七

鼠小僧次郎太夫は、今年五月の上旬に召捕られて、八月の中旬に獄門になつた、評判の高い大賊である。それが大名屋敷へばかり忍び込んで、盗んだ金は窮民へ施したと云ふ所から、當時は義賊とか云ふ妙な名前が、一般にこの盗人の代名詞になつて、どこでも盛に持て囃されてゐた。

「何しろ先生、盗みにはひつた大名屋敷が七十六軒、盗んだ金が三千百八十三兩二分だと云ふのだから驚きます。盗人ぢやございますが、中中唯の人間に出來る事ぢやございません。」

馬琴は思はず好奇心を動かした。市兵衛がかう云ふ話をする後には、何時も作者に材料を與へてやると云ふ己惚れがひそんでゐる。その己惚れは勿論、よく馬琴の癇にさはつた。が、癇にさはりながらも、やつぱり好奇心には動かされる。藝術家としての天分を多量に持つてゐた彼は、殊にこの點では、誘惑に陷り易かつたからであらう。

「ふむ。それは成程えらいものだね。私もいろいろ噂には聞いてゐたが、まさかそれ程とは思はずにゐた。」

「つまりまづ賊中の豪なるものでございませうな。何でも以前は荒尾但馬守様の御供押しか何かを勤めた事があるさうで、お屋敷方の案内に明いのは、そのせゐださうでございます。引廻しを見たものの話を聞きますと、でつぷりした、愛嬌のある男ださうで、その時は紺の越後縮の帷子に、下へは白練の單衣を著てゐたと申しますが、とんと先生のお書きになるものの中へでも出て來さうぢやございませんか。」

馬琴は生返事をしながら、又一服吸ひつけた。が、市兵衛は元より、生返事位に驚くやうな男ではない。

「如何でございませう。そこで合卷の方へ、この次郎太夫を持ちこんで、御執筆を願ふやうな譯には參りますまいか。それはもう手前も、お忙しいのは重重承知致して居ります。が、そこをどうか枉げて、一つ御承諾を。」

鼠小僧はここに至つて、忽ち又元の原稿の催促へ舞戻つた。が、この慣用手段に慣れてゐる馬琴は依然として承知しない。のみならず、彼は前よりも一層機嫌が惡くなつた。これは一時でも市兵衛の計に乘つて、幾分の好奇心を動

かしたのが、彼自身莫迦莫迦しくなつたからである、彼はまづさうに煙草を吸ひながら、とうとうこんな理窟を云ひ出した。
「第一私が無理に書いたつて、どうせ碌なものは出來やしない。それぢや賣れ行きに關るのは云ふまでもない事なのだから、貴公の方だつてつまらなからう。して見ると、これは私の無理を通させる方が、結局兩方の爲になるだらうと思ふが。」
「でございませうが、そこを一つ御奮發願ひたいので。如何なものでございませう。」
市兵衛は、かう云ひながら、視線で彼の顏を「撫で廻した」。（これは馬琴が和泉屋の或眼つきを形容した語である。）さうして、煙草の煙をとぎれとぎれに鼻から出した。
「とても、書けないね。書きたくも、暇がないんだから、仕方がない。」
「それは手前、困却致しますな。」
と言つたが、今度は突然、當時の作者仲間の事を話し出した。やつぱり細い銀の煙管を、うすい唇の間に銜へながら。

八

「又種彦の何か新版物が、出るさうでございますな。いづれ優美第一の、哀れつぽいものでございませう。あの仁の書くものは、種彦でなくては書けないと云ふ所があるやうで。」
市兵衛は、どう云ふ氣か、すべて作者の名前を呼びすてにする習慣がある。馬琴はそれを聞く度に、自分も亦蔭では「馬琴が」と云はれる事だらうと思つた。この輕薄な、作者を自家の職人だと心得てゐる男の口から、呼びすてにされてまでも、原稿を書いてやる必要がどこにある？——癇の昂ぶつた時時には、かう思つて腹を立てた事も、稀ではない。今日も彼は種彦と云ふ名を耳にすると、苦い顏を愈、苦くせずにはゐられなかつた。が、市兵衛には、少しもそんな事は氣にならないらしい。
「それから手前どもでも、春水を出さうかと存じて居ります。先生はお嫌ひでございますが、やはり俗物にはあの邊が向きますやうでございますな。」
「ははあ、左樣かね。」
馬琴の記憶には、何時か見かけた事のある春水の顏が、卑しく誇張されて浮んで來た。「私は作者ぢやない。お客樣のお望みに從つて、艶物を書いてお目にかける手間取りだ。」——かう春水が稱してゐると云ふ噂は、馬琴も夙に聞いてゐた所である。だから、勿論彼はこの作者らしくない作者を、心の底から輕蔑してゐた。が、それにも關らず、今市兵衛が呼びすてにするのを聞くと、依然として不快の情を禁ずる事が出來ない。
「兎に角あれで、艶つぽい事にかけては、達者なものでございますからな。それは名代の健筆で。」
かう云ひながら、市兵衛はちよいと馬琴の顏を見て、それから又すぐに口に銜へてゐる銀の煙管へ眼をやつた。その咄嗟の表情には、恐る可く下等な何物かがある。少くとも、馬琴はさう感じた。
「あれだけのものを書きますに、すらすら筆が走りつづけて、二三回分位なら、紙からはなれないさうでございます。時に先生なぞは、やはりお早い方でございますか。」
馬琴は不快を感じると共に、脅されるやうな心もちになつた。彼の筆の早さを春水や種彦のそれと比較されると云ふ事は、自尊心の旺盛な彼にとつて、勿論好ましい事ではない。しかも彼は遲筆の方である。彼はそれが自分の無能力に裏書をするやうに思はれて、寂しくなつた事もよくあつた。が、一方又それが自分の藝

倫理的良心を満足させる作品として、讀みたいと思つた事もある。が、それを偉人の事業にまで[illegible]るのは、彼がそんな心もちであらうとも、[illegible]して許さうとは思はない。そこで彼は、眼を[illegible]の方へやりながら、[illegible]を出すやうにかう云つた。

「時と場合ですね。早い時もあれば、又遲い時もある。」

「はあ、時と場合ですね。成程。」

市兵衛は三度感服した。が、これが感服それ自身に了る感服でない事は、云ふまでもない。彼はこの後で、すぐに又、切りこんだ。

「でございますが、度度申し上げた原稿の方は、一つ御承諾下さいませんでせうか。春水なんぞも、——」

「私と爲永さんとは違ふ。」

馬琴は腹を立てると、下脣を左の方へまげる癖がある。この時、それが恐しい勢で左へまがつた。

「まあ私は御免蒙らう。——杉、杉、和泉屋さんのお履物を直して置いたか。」

九

和泉屋市兵衛を逐ひ歸すと、馬琴は獨り縁側の柱へよりかかつて、狹い庭の景色を眺めながら、まだをさまらない腹の蟲を、無理にをさめようとして、骨を折つた。

日の光を一ぱいに浴びた庭先には、葉の裂けた芭蕉や、坊主になりかかつた梧桐が、槙や竹の綠と一しよになつて、暖く何坪かの秋を領してゐる。こつちの手水鉢の側にある芙蓉は、もう花が疎になつたが、向うの袖垣の外に植ゑた木犀は、まだその甘い匂が衰へない。そこへ例の鳶の聲が遙な青空の向うから、時時笛を吹くやうに落ちて來た。

彼は、この自然と對照させて、今更のやうに世間の下等さを思出した。下等な世間に住む人間の不幸は、その下等さに煩はされて、自分も亦下等な言動を餘儀なくさせられる所にある。現に今自分は、和泉屋市兵衛を逐ひ拂つた。逐ひ拂ふと云ふ事は、勿論高等な事でも何でもない。が、自分は相手の下等さによつて、自分も亦その下等な事を、しなくてはならない所まで押しつめられたのである。さうして、した。したと云ふ意味は市兵衛と同じ程度まで、自分を卑くしたと云ふのに外ならない。つまり自分は、それ丈墮落させられた譯である。

ここまで考へた時に、彼はそれと同じやうな出來事を、近い過去の記憶に發見した。それは去年の春、彼の所へ弟子入りをしたいと云つて手紙をよこした、相州朽木上新田とかの長島政兵衛と云ふ男である。この男はその手紙によると二十一の年に聾になつて以來、二十四の今日まで文筆を以て天下に知られたいと云ふ決心で、專ら讀本の著作に精を出した。八犬傳や巡島記の愛讀者である事は云ふまでもない。就いてはかう云ふ田舍にゐては、何かと修行の妨になる。だから、あなたの所へ、食客に置いて貰ふ譯には行くまいか。それから又、自分は六冊物の讀本の原稿を持つてゐる。これも貴方の筆削を受けて、然るべき本屋から出版したい。——大體こんな事を書いてよこした。向うの要求は、勿論皆馬琴にとつて、餘りに蟲のいい事ばかりである。が、耳の遠いと云ふ事が、眼の惡いのを苦にしてゐる彼にとつて、幾分の同情を繋ぐ楔子になつたのであらう。折角だが御依賴通りになり兼ねると云ふ彼の返事は、寧ろ彼としては、鄭重を極めてゐた。すると、折返して來た手紙には、始から仕舞まで猛烈な非難の文句の外に、何一つ書いてない。

自分はあなたの八犬傳と云ひ、巡島記と云ひ、あんな長たらしい、拙劣な讀本を根氣よく讀ん

であげたが、あなたは私のたつた五冊物の讀本に眼を通すのさへ拒まれた。以てあなたの人格の下等さがわかるではないか。――手紙はかう云ふ文句ではじまつて、先輩として後輩を食客に置かないのは、鄙吝の爲す所だと云ふ攻擊で、僅に局を結んでゐる。馬琴は腹が立つたから、すぐに返事を書いた。さうしてその中に、自分の讀本が貴公のやうな輕薄兒に讀まれるのは、一生の恥辱だと云ふ文句を入れた。その後杳として消息を聞かないが、彼はまだ今まで、讀本の稿を起してゐるだらうか。さうして、それが何時か日本中の人間に讀まれる事を、夢想してゐるだらうか。……

馬琴はこの記憶の中に、長島政兵衞なるものに對する情無さと、彼自身に對する情無さとを同時に感ぜざるを得なかつた。さうしてそれは又彼を、云ひやうのない寂しさに導いた。が、日は無心に木犀の匂を融かしてゐる。芭蕉や梧桐も、ひつそりとして葉を動かさない。鳶の聲さへ以前の通り朗である。この自然とあの人間と――十分の後、下女の杉が晝飯の支度の出來た事を知らせに來た時まで、彼はまるで夢でも見てゐるやうに、ぼんやり緣側の柱に倚りつづけてゐた。

十

獨りで寂しい晝飯をすませた彼は、漸く書齋へひきとると、何となく落著がない、不快な心もちを鎭める爲に、久しぶりで水滸傳を開いて見た。偶然開いた所は豹子頭林冲が、風雪の夜に山廟で、草秣場の燒けるのを望見する件である。彼はその戲曲的な場景に、何時もの感興を催す事が出來た。が、それが或所まで續くと反つて妙に不安になつた。

佛參に行つた家族のものは、まだ歸つて來ない。内の中は森としてゐる。彼は陰氣な顏を片づけて、水滸傳を前にしながら、うまくもない煙草を吸つた。さうしてその煙の中に、ふだんから頭の中に持つてゐる、或疑問を髣髴した。

それは、道德家としての彼と藝術家としての彼との間に、何時も纏綿する疑問である。彼は昔から「先王の道」を疑はなかつた。彼の小說は彼自身公言した如く、正に「先王の道」の藝術的表現である。だから、そこに矛盾はない。が、その「先王の道」が藝術に與へようとする價値と、彼の心情が藝術に與へる價値との間には、存外大きな懸隔がある。從つて彼の中にある道德家が前者を肯定すると共に、彼の中にある藝術家は、當然又後者を肯定した。勿論此矛盾を切拔ける安價な妥協的思想もない事はない。實際彼は公衆に向つて此煮切らない調和說の背後に、彼の藝術に對する曖昧な態度を隱さうとした事もある。

しかし公衆は欺かれても、彼自身は欺かれない。彼は戲作の價値を否定して「勸懲の具」と稱しながら、常に彼の中に磅礴する藝術的感興に遭遇すると、忽ち不安を感じ出した。――水滸傳の一節が、偶、彼の氣分の上に、豫想外の結果を及ぼしたのにも、實はこんな理由があつたのである。

この點に於て、思想的に臆病だつた馬琴は、默然として煙草をふかしながら、强ひて思量を留守にしてゐる家族の方へ押し流さうとした。が、彼の前には水滸傳がある。不安はそれを中心にして、容易に念頭を離れない。そこへ折よく久しぶりで、崋山渡邊登が尋ねて來た。袴羽織に紫の風呂敷包を小脇にしてゐる所では、これは大方借りてゐた書物でも返しに來たのであらう。

馬琴は喜んで、この親友をわざわざ玄關まで、迎へに出た。

「今日は拜借した書物を御返却旁、御目に

かけたいものがあつて、參上しました。」
　崋山は書齋に通ると、果してから云つた。見れば風呂敷包みの外にも紙に卷いた繪絹らしいものを持つてゐる。
「御暇なら一つ御覽を願ひませうかな。」
「おお、早速、拜見しませう。」
　崋山は或興奮に似た感情を隱すやうに、稍わざとらしく微笑しながら、紙の中の繪絹を披いて見せた。繪は蕭索とした裸の樹を、遠近と疎に描いて、その中に掌を拊つて談笑する二人の男を立たせてゐる。林間に散つてゐる黄葉と、林梢に群つてゐる亂鴉と、――畫面のどこを眺めても、うそ寒い秋の氣が動いてゐない所はない。
　馬琴の眼は、この淡彩の寒山拾得に落ちると、次第にやさしい潤ひを帶びて輝き出した。
「何時もながら、結構な御出來ですな。私は王摩詰を思ひ出します。食隨二鳴磬一巢烏下、行踏二空林一落葉聲と云ふ所でせう。」

十一

「これは昨日描き上げたのですが、私には氣に入つたから、御老人さへよければ差上げようと思つて持つて來ました。」
　崋山は、鬚の痕の青い顋を撫でながら、滿足さうにから云つた。
「勿論氣に入つたと云つても、今まで描いたものの中ではと云ふ位な所ですが――とても思ふ通りには、何時になつても、描けはしません。」
「それは難有い。何時も頂戴ばかりしてゐて恐縮ですが。」
　馬琴は、繪を眺めながら、呟くやうに禮を云つた。未完成の儘になつてゐる彼の仕事の事が、この時彼の心の底に、何故かふと閃いたからである。が、崋山は崋山で、やはり彼の繪の事を考へつづけてゐるらしい。
「古人の繪を見る度に、私は何時もどうしてから描けるだらうと思ひますな。木でも石でも人物でも、皆その木なり石なり人物なりに成り切つて、しかもその中に描いた古人の心もちが、悠悠として生きてゐる。あれだけは實に大したものです。まだ私などは、そこへ行くと、子供程にも出來て居ません。」
「古人は後生恐るべしと云ひましたがな。」
　馬琴は崋山が自分の繪の事ばかり考へてゐるのを、妬ましいやうな心もちで眺めながら、何時になくこんな諧謔を弄した。
「それは後生も恐ろしい。だから私どもは唯、古人と後生との間に挾まつて、身動きもならずに、押され押され進むのです。尤もこれは私どもばかりではありますまい。古人もさうだつたし、後生もさうでせう。」
「如何にも進まなければ、すぐに押し倒される。するとまづ一足でも進む工夫が、肝腎らしいやうですな。」
「さやう、それが何よりも肝腎です。」
　主人と客とは、彼等自身の話に動かされて、暫くの間口をとざした。さうして二人とも、秋の日の靜な物音に耳をすませた。
「八犬傳は不相變、捗がお行きですか。」
　やがて崋山が話題を別な方面に開いた。
「いや、一向捗らんで仕方がありません。これも古人には及ばないやうです。」
「御老人がそんな事を云つては、困りますな。」
「困るのなら、私の方が誰よりも困つてゐます。併しどうしても、之で行ける所迄行くより外はない。さう思つて、私は此頃八犬傳と討死の覺悟をしました。」
　から云つて、馬琴は自ら恥づるもののやうに、苦笑した。
「たかが戲作だと思つても、さうは行かない事が多いのでね。」

「それは私の繪でも同じ事です。どうせやり出したからには、私も行ける所までは行き切りたいと思つてゐます。」

「御互に討死ですかな。」

二人は聲を立てて、笑つた。が、その笑ひ聲の中には、二人だけにしかわからない或寂しさが流れてゐる。と同時に又、主人と客とは、ひとしくこの寂しさから、一種の力強い興奮を感じた。

「しかし繪の方は羨ましいやうですな。公儀の御咎めを受けるなどと云ふ事がないのは何よりも結構です。」

今度は馬琴が、話頭を一轉した。

十二

「それはないが——御老人の書かれるものも、さう云ふ心配はありますまい。」

「いや、大にありますよ。」

馬琴は改名主の圖書檢閲が、陋を極めてゐる例として、自作の小說の一節が役人が賄賂をとる箇條のあつた爲に、改作を命ぜられた事實を擧げた。さうして、それにこんな批評をつけ加へた。

「改名主など云ふものは、咎め立てをすればする程、尻尾の出るのが面白いぢやありませんか。自分たちが賄賂をとるものだから、賄賂の事を書かれると、嫌がつて改作させる。又自分たちが猥雜な心もちに囚はれ易いものだから、男女の情さへ書いてあれば、どんな書物でも、すぐ誨淫の書にしてしまふ。それで自分たちの道德心が、作者より高い氣でゐるから、傍痛い次第です。云はばあれは、猿が鏡を見て、齒をむき出してゐるやうなものでせう。自分で自分の下等なのに腹を立ててゐるのですからな。」

崋山は馬琴の比喩が餘り熱心なので、思はず失笑しながら、

「それは大きにさう云ふ所もありませう。しかし改作させられても、それは御老人の恥辱になる譯ではありますまい。改名主などが何と云はうとも、立派な著述なら、必ずそれだけの事はある筈です。」

「それにしても、ちと橫暴すぎる事が多いのでね。さうさう、一度などは獄屋へ衣食を送る件を書いたので、やはり五六行削られた事がありました。」

馬琴自身もかう云ひながら、崋山と一しよにくすくす笑ひ出した。

「しかしこの後五十年か百年經つたら、改名主の方はゐなくなつて、八犬傳だけが殘る事になりませう。」

「八犬傳が殘るにしろ、殘らないにしろ、改名主の方は、存外何時までもゐさうな氣がしますよ。」

「さうですかな。私にはさうも思はれませんが。」

「いや、改名主はゐなくなつても、改名主のやうな人間は、何時の世にも絕えた事はありません。焚書坑儒が昔だけあつたと思ふと、大きに違ひます。」

「御老人は、この頃心細い事ばかり云はれますな。」

「私が心細いのではない。改名主どものはびこる世の中が、心細いのです。」

「では、益々働かれたら好いでせう。」

「兎に角、それより外はないやうですな。」

「そこで又、御同樣に討死ですか。」

今度は二人とも笑はなかつた。笑はなかつたばかりでない。馬琴はちよいと顏を堅くして、崋山を見た。それ程崋山のこの冗談のやうな語には、妙な鋭さがあつたのである。

「しかしまづ若い者は、生きのこる分別をする事です。討死は何時でも出來ますからな。」

程を經て、馬琴がから云つた。崋山の政治上の意見を知つてゐる彼には、この時ふと一種の不安が感ぜられたからであらう。が、崋山は微笑したぎり、それには答へようともしなかつた。

十三

崋山が歸つた後で、馬琴はまだ殘つてゐる興奮を力に、八犬傳の稿をつぐべく、何時ものやうに机へ向つた。先を書きつづける前に、昨日書いた所を一通り讀み返すのが、彼の昔からの習慣である。そこで彼は今日も、細い行の間へぺた一面に朱を入れた、何枚かの原稿を、氣をつけてゆつくり讀み返した。

すると、何故か書いてある事が、自分の心もちとぴつたり來ない。字と字との間に、不純な雜音が潛んでゐて、それが全體の調和を至る所で破つてゐる。彼は最初それを、彼の癇が昂ぶつてゐるからだと解釋した。

「今の己の心もちが惡いのだ。書いてある事は、どうにか書き切れる所まで、書き切つてゐる筈だから。」

さう思つて、彼はもう一度讀み返した。が、調子の狂つてゐる事は前と一向變りはない。彼は老人とは思はれない程、心の中で狼狽し出した。

「このもう一つ前はどうだらう。」

彼はその前に書いた所へ眼を通した。すると、これも亦徒らに粗雜な文句ばかりが、糅然としてちらかつてゐる。彼は更にその前を讀んだ。さうして又その前の前を讀んだ。

しかし讀むに從つて拙劣な布置と亂脈な文章とは、次第に眼の前に展開して來る。そこには何等の映像をも與へない敍景があつた。何等の感激をも含まない詠歎があつた。さうして又、何等の理路を辿らない論辯があつた。彼が數日を費して書き上げた何回分かの原稿は、今の彼の眼から見ると、悉く無用の饒舌としか思はれない。彼は急に、心を刺されるやうな苦痛を感じた。

「これは始めから、書き直すより外はない。」

彼は心の中でかう叫びながら、忌々しさうに原稿を向うへつきやると、片肘ついてごろりと横になつた。が、それでもまだ氣になるのか、眼は机の上を離れない。彼はこの机の上で、弓張月を書き、南柯夢を書き、さうして今は八犬傳を書いた。この上にある端渓の硯、蹲螭の文鎭、蟇の形をした銅の水差し、獅子と牡丹とを浮かせた青磁の硯屏、それから蘭を刻んだ孟宗の根竹の筆立て――さう云ふ一切の文房具は、皆彼の創作の苦しみに、久しい以前から親しんでゐる。それらの物を見るにつけても、彼は自ら今の失敗が、彼の一生の勞作に、暗い影を投げるやうな――彼自身の實力が根本的に怪しいやうな、忌はしい不安を禁じる事が出來ない。

「自分はさつきまで、本朝に比倫を絶した大作を書くつもりでゐた。が、それもやはり事によると、人並に己惚れの一つだつたかも知れない。」

かう云ふ不安は、彼の上に、何よりも堪へ難い、落莫たる孤獨の情を齎した。彼は彼の尊敬する和漢の天才の前には、常に謙遜である事を忘れるものではない。が、それ丈に又、同時代の屑々たる作者輩に對しては、傲慢であると共に飽迄も不遜である。その彼が、結局自分も彼等と同じ能力の所有者だつたと云ふ事を、さうして更に厭ふ可き遼東の豕だつたと云ふ事は、どうして安安と認められよう。しかも彼の強大な「我」は「悟り」と「諦め」とに避難するには餘りに情熱に溢れてゐる。

彼は机の前に身を横へた儘、親船の沈むのを見る、難破した船長の眼で、失敗した原稿を

眺めながら、靜に絶望の威力と戰ひつづけた。

もしこの時、彼の後の襖が、けたたましく開け放されなかつたら、さうして「お祖父樣唯今。」と云ふ聲と共に、柔かい小さな手が、彼の頸へ抱きつかなかつたら、彼は恐らくこの憂鬱な氣分の中に、何時までも鎖されてゐた事であらう。が、孫の太郎は襖を開けるや否や、子供のみが持つてゐる大膽と率直とを以て、いきなり馬琴の膝の上へ勢よくとび上つた。

「お祖父樣唯今。」

「おお、よく早く歸つて來たな。」

この語と共に、八犬傳の著者の皺だらけな顏には、別人のやうな悦びが輝いた。

十四

茶の間の方では、癇高い妻のお百の聲や內氣らしい嫁のお路の聲が賑に聞えてゐる。時時太い男の聲がまじるのは、折から倅の宗伯も歸り合せたらしい。太郎は祖父の膝に跨りながら、それを聞きすましでもするやうに、わざと眞面目な顏をして天井を眺めた。外氣にさらされた頰が赤くなつて、小さな鼻の穴のまはりが、息をする度に動いてゐる。

「あのね、お祖父樣はね。」

栗梅の小さな紋附を著た太郎は、突然かう云ひ出した。考へようとする努力と、笑ひたいのを耐へようとする努力とで、靨が何度も消えたり出來たりする。――それが馬琴には、自ら微笑を誘ふやうな氣がした。

「よく毎日。」

「うん、よく毎日？」

「御勉强なさい。」

馬琴はとうとう噴き出した。が、笑の中ですぐ又語をつぎながら、

「それから？」

「それから――ええと――癇癪を起しちやいけませんつて。」

「おやおや、それつきりかい。」

「まだあるの。」

太郎はかう云つて、絲鬢奴の頭を仰向けながら自分も亦笑ひ出した。眼を細くして、白い齒を出して、小さな靨をよせて、笑つてゐるのを見ると、これが大きくなつて、世間の人間のやうな憐れむべき顏にならうとは、どうしても思はれない。馬琴は幸福の意識に溺れながら、こんな事を考へた。さうしてそれが、更に又彼の心を擽つた。

「まだ何かあるかい？」

「まだね。いろんな事があるの。」

「どんな事が――」

「ええと――お祖父樣はね。今にもつとえらくなりますからね。」

「えらくなりますから？」

「ですからね。よくね。辛抱おしなさいつて。」

「辛抱してゐるよ。」馬琴は思はず眞面目な聲を出した。

「もつと、もつとようく辛抱なさいつて。」

「誰がそんな事を云つたのだい。」

「それはね。」

太郎は惡戲さうに、ちよいと彼の顏を見た。さうして笑つた。

「だあれだ？」

「さうさな。今日は御佛參に行つたのだから、お寺の坊さんに聞いて來たのだらう。」

「違ふ。」

斷然として首を振つた太郎は、馬琴の膝から、半分腰を擡げながら、顋を少し前へ出すやうにして、

「あのね。」

「うん。」

「淺草の觀音樣がさう云つたの。」

かう云ふと共に、この子供は、家內中に聞え

さうな聲で、嬉しさうに笑ひながら、馬琴につかまるのを恐れるやうに、急いで彼の側から飛び退いた。さうしてうまく祖父をかついだ面白さに小さな手を叩きながら、ころげるやうにして茶の間の方へ逃げて行つた。

馬琴の心に、嚴肅な何物かが刹那に閃いたのは、この時である。彼の脣には幸福な微笑が浮んだ。それと共に彼の眼には、何時か涙が一ぱいになつた。この冗談は太郎が考へ出したのか、或は又母が教へてやつたのか、それは彼の問ふ所ではない。この時、この孫の口から、かう云ふ語を聞いたのが、不思議なのである。

「觀音樣がさう云つたか。勉强しろ。癇癪を起すな。さうしてもつとよく辛抱しろ。」

六十何歲かの老藝術家は、淚の中に笑ひながら、子供のやうに頷いた。

十五

その夜の事である。

馬琴は薄暗い圓行燈の光の下で、八犬傳の稿をつぎ始めた。執筆中は家内のものも、この書齋へははひつて來ない。ひつそりした部屋の中では、燈心の油を吸ふ音が、蟋蟀の聲と共に、空しく夜長の寂しさを語つてゐる。

始め筆を下した時、彼の頭の中には、かすかな光のやうなものが動いてゐた。が、十行二十行と、筆が進むのに從つて、その光のやうなものは、次第に大きさを增して來る。經驗上、その何であるかを知つてゐた馬琴は、注意に注意をして、筆を運んで行つた。神來の興は火と少しも變りがない。起す事を知らなければ、一度燃えても、すぐに又消えてしまふ。……

「あせるな。さうして出來る丈、深く考へろ。」

馬琴はややもすれば走りさうな筆を警めながら、何度もかう自分に囁いた。が、頭の中にはもうさつきの星を碎いたやうなものが、川よりも早く流れてゐる。さうしてそれが刻刻に力を加へて來て、否應なしに彼を押しやつてしまふ。

彼の耳には何時か、蟋蟀の聲が聞えなくなつた。彼の眼にも、圓行燈のかすかな光が、今は少しも苦にならない。筆は自ら勢を生じて、一氣に紙の上を辷りはじめる。彼は神人と相搏つやうな態度で、殆、必死に書きつづけた。

頭の中の流は、丁度空を走る銀河のやうに、滾滾として何處からか溢れて來る。彼はその凄じい勢を恐れながら、自分の肉體の力が萬一それに耐へられなくなる場合を氣づかつた。さうして、緊く筆を握りながら、何度もかう自分に呼びかけた。

「根かぎり書きつづけろ。今己が書いてゐる事は、今でなければ書けない事かも知れないぞ。」

しかし光の靄に似た流は、少しもその速力を緩めない。反つて目まぐるしい飛躍の中に、あらゆるものを溺らせながら、澎湃として彼を襲つて來る。彼は遂に全くその虜になつた。さうして一切を忘れながら、その流の方向に、嵐のやうな勢で筆を驅つた。

この時彼の王者のやうな眼に映つてゐたものは、利害でもなければ、愛憎でもない。まして毀譽に煩はされる心などは、とうに眼底を掃つて消えてしまつた。あるのは、唯不可思議な悅びである。或は恍惚たる悲壯の感激である。この感激を知らないものに、どうして戲作三昧の心境が味到されよう。どうして戲作者の嚴かな魂が理解されよう。ここにこそ「人生」は、あらゆるその殘滓を洗つて、まるで新しい鑛石のやうに、美しく作者の前に、輝いてゐるではないか。……

* * * * *

その間も茶の間の行燈のまはりでは、姑のお百と、嫁のお路とが、向ひ合つて縫物を續け

てゐる。太郎はもう寝かせたのであらう。少し離れた所には尫弱らしい宗伯が、さつきから丸薬をまろめるのに忙しい。

「お父様はまだ寝ないかねえ。」

やがてお百は、針へ髪の油をつけながら、不服らしく呟いた。

「きつと又お書きもので、夢中になつていらつしやるのでせう。」

お路は眼を針から離さずに、返事をした。

「困り者だよ。碌なお金にもならないのにさ。」

お百はかう云つて、伜と嫁とを見た。宗伯は聞えないふりをして、答へない。お路も默つて針を運びつづけた。蟋蟀はここでも、書齋でも、變りなく秋を鳴きつくしてゐる。

（大正六年十一月作）

知己料

僕等は當時「新思潮」といふ同人雜誌に楯こもつてゐた。「新思潮」以外の雜誌にも時時作品を發表するのは久米正雄一人ぎりだつた。そこへ「希望」といふ雜誌社から、突然僕へ宛てた手紙が來た。手紙には、五月號に間に合ふやうに短篇を一つお願ひしたい。御都合は如何と書いてあつた。僕は勿論快諾した。

僕は一週間たたない内に「虱」といふ短篇を希望社へおくつた。それから――原稿料の屆くのを待つた、最初の原稿料を待つ氣もちは貧文の經驗のない人には、ちよいと想像が出來ないかも知れない。僕も少し誇張すれば、直侍を待つ三千歳のやうに、振替の來る日を待ちくらしたのである。

原稿料は容易に屆かなかつた。僕はたびたび久米正雄と、希望社は僕の短篇にいくら拂ふかを論じ合つた。

「一圓は拂ふね。一圓ならば十二枚十二圓か。そんなことはないな。一圓五十錢は大丈夫拂ふよ。」

久米はかういふ豫測を下した。何だかさういはれて見れば、僕も一圓五十錢は拂つてもらはれさうな心もちになつた。

「一圓五十錢拂つたら、八圓だけおごれよ。」

僕はおごると約束した。

「一圓でも、五圓はおごる義務があるな。」

久米はまたかういつた。僕はその義務を認めなかつた。しかし五圓だけ割愛することには格別異存も持たなかつた。

その内に「希望」の五月號が出、同時に原稿料も手にはひつた。僕はそれをふところにしたまま、久米の下宿へ出かけて行つた。

「いくら來た？　一圓か？　一圓五十錢か？」

久米は僕の顏を見ると、彼自身のことのやうに熱心にたづねた。僕は何ともこたへずに、振替の紙を出して見せた。振替の紙には殘酷にも三圓六十錢と書いてあつた。

「三十錢か。三十錢はひどいな。」

久米もさすがになさけない顏をした。僕はなほ更佛頂づらをしてゐた。が、僕等はしばらくすると、同時ににやにや笑ひ出した。久米はいはゆる微苦笑をうかべ、僕は手がるに苦笑したのである。

「三十錢は知己料をさしひいたんだらう。一圓五十錢マイナス三十錢――一圓二十錢の知己料は高いな。」

久米はこんなことをいひながら、振替の紙を僕にかへした。しかしこの間のやうに、おごれとか何とかはいはなかつた。

（「百艸」の「續野人生計事」より）

地獄變

一

堀川の大殿樣のやうな方は、これまでは固より、後の世には恐らく二人とはいらつしやいますまい。噂に聞きますと、あの方の御誕生になる前には、大威德明王の御姿が御母君の夢枕にお立ちになつたとか申す事でございますが、兎に角御生れつきから、並並の人間とは御違ひになつてゐたやうでございます。でございますから、あの方の爲さいました事には、一つとして私どもの意表に出てゐないものはございません。早い話が堀川のお邸の御規模を拜見致しましても、壯大と申しませうか、豪放と申しませうか、到底私どもの凡慮には及ばない、思ひ切つた所があるやうでございます。中にはまた、そこを色色とあげつらつて大殿樣の御性行を始皇帝や煬帝に比べるものもございますが、それは諺に云ふ群盲の象を撫でるやうなものでもございませうか。あの方の御思召は、決してそのやうに御自分ばかり、榮耀榮華をなさらうと申すのではございません。それよりはもつと下下の事まで御考へになる、云はば天下と共に樂しむとでも申しさうな、大腹中の御器量がございました。

それでございますから、二條大宮の百鬼夜行に御遇ひになつても、格別御障りがなかつたのでございませう。又陸奧の鹽竈の景色を寫したので名高いあの東三條の河原院に、夜な夜な現はれると云ふ噂のあつた融の左大臣の靈でさへ、大殿樣のお叱りを受けては、姿を消したのに相違ございますまい。かやうな御威光でございますから、その頃洛中の老若男女が、大殿樣と申しますと、まるで權者の再來のやうに尊み合ひましたも、決して無理ではございません。何時ぞや、内の梅花の宴からの御歸りに御車の牛が放れて、折から通りかかつた老人に怪我をさせました時でさへ、その老人は手を合せて、大殿樣の牛にかけられた事を、難有がつたと申す事でございます。

さやうな次第でございますから、大殿樣御一代の間には、後後までも語り草になりますやうな事が、隨分澤山にございました。大饗の引出物に白馬ばかりを三十頭、賜つたこともございますし、長良の橋の橋柱に御寵愛の童を立てた事もございますし、それから又華陀の術を傳へた震旦の僧に、御腿の瘡を御切らせになつた事もございますし、――一一數へ立てて居りましては、とても際限がございません。が、その數多い御逸事の中でも、今では御家の重寶になつて居ります地獄變の屛風の由來程、恐ろしい話はございますまい。日頃は物に御騷ぎにならない大殿樣でさへ、あの時ばかりは、流石に御驚きになつたやうでございました。まして御側に仕へてゐた私どもが、魂も消えるばかりに思つたのは、申し上げるまでもございません。中でもこの私なぞは、大殿樣にも二十年來御奉公申して居りましたが、それでさへ、あのやうな凄じい見物に出遇つた事は、つひぞ又となかつた位でございます。

しかし、その御話を致しますには、豫め先づ、あの地獄變の屛風を描きました、良秀と申す畫師の事を申し上げて置く必要がございませう。

二

良秀と申しましたら、或は唯今でも猶、あの

男の事を覺えていらつしやる方がございませう。その頃繪筆をとりましては、良秀の右に出るものは一人もあるまいと申された位、高名な繪師でございます。あの時の事がございました時には、彼是もう五十の坂に、手がとどいて居りましたらうか。見た所は唯、背の低い、骨と皮ばかりに痩せた、意地の惡さうな老人でございました。それが大殿樣の御邸へ參ります時には、よく丁字染の狩衣に揉烏帽子をかけて居りましたが、人がらは至つて卑しい方で、何故か年よりらしくもなく、脣の目立つて赤いのが、その上に又氣味の惡い、如何にも獸めいた心もちを起させたものでございます。中にはあれは繪筆を舐めるので紅がつくのだと申した人も居りましたが、どう云ふものでございませうか。尤もそれより口の惡い誰彼は、良秀の立居振舞が猿のやうだとか申しまして、猿秀と云ふ諢名までつけた事がございました。

いや猿秀と申せば、かやうな御話もございます。その頃大殿樣の御邸には、十五になる良秀の一人娘が、小女房に上つて居りましたが、これは又生みの親には似もつかない、愛嬌のある娘でございました。その上早く女親に別れましたせゐか、思ひやりの深い、年よりはませた、悧巧な生れつきで、年の若いのにも似ず、何かとよく氣がつくものでございますから、御臺樣を始め外の女房たちにも、可愛がられて居たやうでございます。

すると何かの折に、丹波の國から人馴れた猿を一匹、獻上したものがございまして、それに丁度惡戯盛りの若殿樣が、良秀と云ふ名を御つけになりました。唯でさへその猿の容子が可笑しい所へ、かやうな名がついたのでございますから、御邸中誰一人笑はないものはございません。それも笑ふばかりならよろしうございますが、面白半分に皆のものが、やれ御庭の松に上つたの、やれ曹司の疊をよごしたのと、その度毎に、良秀良秀と呼び立てては、兎に角いぢめたがるのでございます。

所が或日の事、前に申しました良秀の娘が、御文を結んだ寒紅梅の枝を持つて、長い御廊下を通りかかりますと、遠くの遣戸の向うから、例の小猿の良秀が、大方足でも挫いたのでございませう、何時ものやうに柱へ駈け上る元氣もなく、跛を引き引き、一散に、逃げて參るのでございます。しかもその後からは楚をふり上げた若殿樣が、「柑子盜人め、待て。待て。」と仰有りながら、追ひかけていらつしやるのではございませんか。良秀の娘はこれを見ますと、ちよいとの間ためらつたやうでございますが、丁度その時逃げて來た猿が、袴の裾にすがりながら、哀れな聲を出して啼き立てました――と、急に可哀さうだと思ふ心が、抑へ切れなくなつたのでございませう。片手に梅の枝をかざした儘片手に紫匂の袿の袖を輕さうにはらりと開きますと、やさしくその猿を抱き上げて、若殿樣の御前に小腰をかがめながら「恐れながら畜生でございます。どうか御勘辨遊ばしまし。」と、涼しい聲で申し上げました。

が、若殿樣の方は、氣負つて駈けてお出でになつた所でございますから、むづかしい御顏をなすつて、二三度御み足を御踏鳴しになりながら、

「何でかばふ。その猿は柑子盜人だぞ。」

「畜生でございますから、……」

娘はもう一度から繰返しましたが、やがて寂しさうにほほ笑みますと、

「それに良秀と申しますと、父が御折檻を受けますやうで、どうも唯見ては居られませぬ。」と思ひ切つたやうに申すのでございます。これには流石の若殿樣も、我を御折りになつたのでございませう。

「さうか。父親の命乞なら、枉げて赦してとらすとしよう。」
不承不承にかう仰有ると、猿をそこへ御捨てになつて、元いらしつた遣戸の方へ、その儘御歸りになつてしまひました。

三

良秀の娘とこの小猿との仲がよくなつたのは、それからの事でございます。娘は御姫様から頂戴した黄金の鈴を、美しい眞紅の紐に下げて、それを猿の頭へ懸けてやりますし、猿は又どんな事がございましても、滅多に娘の身のまはりを離れません。或時娘の風邪の心地で、床に就きました時なども、小猿はちやんとその枕もとに坐りこんで、氣のせゐか心細さうな顔をしながら、頻に爪を噛んで居りました。
かうなると又妙なもので、誰も今までのやうにこの小猿を、いぢめるものはございません。いや、反つてだんだん可愛がり始めて、しまひには若殿様でさへ、時時柿や栗を投げて御やりになつたばかりか、侍の誰やらがこの猿を足蹴にした時なぞは、大層御立腹にもなつたさうでございます。その後大殿様がわざわざ良秀の娘に猿を抱いて、御前へ出るやうと御沙汰になつたのも、この若殿様の御腹立になつた話を、御聞きになつてからだとか申しました。その序に自然と娘の猿を可愛がる所由も御耳にはひつたのでございませう。
「孝行な奴ぢや。褒めてとらすぞ。」
かやうな御意で、娘はその時、紅の袙を御褒美に頂きました。所がこの袙を又見やう見眞似に、猿が恭しく押頂きましたので、大殿様の御機嫌は、一入よろしかつたさうでございます。でございますから、大殿様が良秀の娘を御贔屓になつたのは、全くこの猿を可愛がつた、孝行恩愛の情を御賞美なすつたので、決して世間で兎や角申しますやうに、色を御好みになつた譯ではございません。尤もかやうな噂の立ちました起りも、無理のない所がございますが、それは又後になつて、ゆつくり御話し致しませう。ここでは唯大殿様が、如何に美しいにした所で、繪師風情の娘などに、想ひを御懸けになる方ではないと云ふ事を、申し上げて置けは、よろしうございます。
さて良秀の娘は、面目を施して御前を下りましたが、元より悧巧な女でございますから、はしたない外の女房たちの妬を受けるやうな事もございません。反つてそれ以來、猿と一しよに何かといとしがられまして、取分け御姫様の御側からは御離れ申した事がないと云つてもよろしい位、物見車の御供にもついぞ缺けた事はございませんでした。
が、娘の事は一先づ措きまして、これから又親の良秀の事を申し上げませう。成程猿の方は、かやうに間もなく、皆のものに可愛がられるやうになりましたが、肝腎の良秀はやはり誰にでも嫌はれて、不相變陰へまはつては、猿秀呼はりをされて居りました。しかもそれが又、御邸の中ばかりではございません。現に横川の僧都様も、良秀と申しますと、魔障にでも御遇ひになつたやうに、顔の色を變へて、御憎み遊ばしました。（尤もこれは良秀が僧都様の御行状を戯畫に描いたからだなどと申しますが、何分下ざまの噂でございますから、確に左様とは申されますまい。）兎に角、あの男の不評判は、どちらの方に伺ひましてもさう云ふ調子ばかりでございます。もし惡く云はないものがあつたと致しますと、それは二三人の繪師仲間か、或は又、あの男の繪を知つてるだけで、あの男の人間は知らないものばかりでございませう。
しかし實際、良秀には、見た所が卑しかつたばかりでなく、もつと人に嫌がられる惡い癖

があつたのでございますから、それも全く自業自得とでもなすより外に、致し方はございません。

四

その癖と申しますのは、吝嗇で、慳貪で、恥知らずで、怠けもので、強慾で――いやその中でも取分け甚しいのは、横柄で高慢で、何時も本朝第一の繪師と申す事を、鼻の先へぶら下げてゐる事でございませう。それも畫道の上ばかりならまだしもでございますが、あの男の負け惜しみになりますと、世間の習慣とか慣例とか申すやうなものまで、すべて莫迦に致さずには置かないのでございます。これは永年良秀の弟子になつてゐた男の話でございますが、或日さる方の御邸で名高い檜垣の巫女に御靈が憑いて、恐しい御託宣があつた時も、あの男は空耳を走らせながら、有合せた筆と墨とで、その巫女の物凄い顔を、丁寧に寫して居つたとか申しました。大方御靈の御祟りも、あの男の眼から見ましたなら、子供欺し位にしか思はれないのでございませう。

さやうな男でございますから、吉祥天を描く時は、卑しい傀儡の顔を寫しましたり、不動明王を描く時は、無頼の放免の姿を像りましたり、いろいろの勿體ない眞似を致しましたが、それでも當人を詰りますと、「良秀の描いた神佛がその良秀に冥罰を當てられるとは、異な事を聞くものぢや。」と空嘯いてゐるではございませんか。これには流石の弟子たちも呆れ返つて、中には未來の恐ろしさに、匆匆暇をとつたものも、少くなかつたやうに見うけました。――先づ一口に申しましたなら、慢業重疊とでも名づけませうか。兎に角當時天が下で、自分程の偉い人間はないと思つてゐた男でございます。

從つて良秀がどの位畫道でも、高く止つて居りましたかは、申し上げるまでもございますまい。尤もその繪でさへ、あの男のは筆使ひでも彩色でも、まるで外の繪師とは違つて居りましたから、仲の惡い繪師仲間では、山師だなどと申す評判も、大分あつたやうでございます。その連中の申しますには、川成とか金岡とか、その外昔の名匠の筆になつた物と申しますと、やれ板戸の梅の花が、月の夜毎に匂つたの、やれ屏風の大宮人が、笛を吹く音さへ聞えたのと、優美な噂が立つてゐるものでございますが、良秀の繪になりますと、何時でも必ず氣味の惡い、妙な評判だけしか傳はりません。譬へばあの男が龍蓋寺の門へ描きました、五趣生死の繪に致しましても、夜更けて門の下を通りますと、天人の嘆息をつく音や啜り泣きをする聲が、聞えたと申す事でございます。いや、中には死人の腐つて行く臭氣を、嗅いだと申すものさへございました。それから大殿樣の御云ひつけで描いた、女房たちの似繪なども、その繪に寫されただけの人間は、三年とたたない中に、皆魂の拔けたやうな病氣になつて、死んだと申すではございませんか。惡く云ふものに申させますと、それが良秀の繪の邪道に落ちてゐる、何よりの證據ださうでございます。

が、何分前にも申し上げました通り、横紙破りな男でございますから、それが反つて良秀は大自慢で、何時ぞや大殿樣が御冗談に、「その方は兎角醜いものが好きと見える。」と仰有つた時も、あの年に似ず赤い脣でにやりと氣味惡く笑ひながら、「さやうでござりまする。かいなで繪師には總じて醜いものの美しさなどと申す事は、わからう筈がございませぬ。」と、横柄に御答へ申し上げました。如何に本朝第一の繪師に致せ、よくも大殿樣の御前へ出て、そのやうな高言が吐けたものでございます、先刻引合に出しました弟子が、内内師匠に「智羅永壽」と

云ふ諢名をつけて、増長慢を譏つて居りましたが、それも無理はございません。御承知でもございませうが、「智羅永壽」と申しますのは、昔、震旦から渡つて參りました天狗の名でございます。

しかしこの良秀にさへ――この何とも云ひやうのない、横道者の良秀にさへ、たつた一つ人間らしい、情愛のある所がございました。

五

と申しますのは、良秀が、あの一人娘の小女房をまるで氣違ひのやうに可愛がつてゐた事でございます。先刻申し上げました通り、娘も至つて氣のやさしい、親思ひの女でございましたが、あの男の子煩惱は、決してそれにも劣りますまい。何しろ娘の着る物とか、髪飾とかの事と申しますと、どこの御寺の勸進にも喜捨をした事のないあの男が、金錢には更に惜し氣もなく、整へてやると云ふのでございますから、譃のやうな氣が致すではございませんか。

が、良秀の娘を可愛がるのは、唯可愛がるだけで、やがてよい婿をとらうなどと申す事は、夢にも考へて居りません。それ所か、あの娘へ惡く云ひ寄るものでもございましたら、反つて辻冠者ばらでも驅り集めて、暗打位は喰はせ兼ねない量見でございます。でございますから、あの娘が大殿樣の御聲がかりで小女房に上りました時も、老爺の方は大不服で、當座の間は御前へ出ても、苦り切つてばかり居りました。大殿樣が娘の美しいのに御心を惹かされて、親の不承知なのもかまはずに、召し上げたなどと申す噂は、大方かやうな容子を見たものの當推量から出たのでございませう。

尤も其噂は譃でございましても、子煩惱の一心から、良秀が始終娘の下るやうに祈つて居りましたのは確でございます。或時大殿樣の御云ひつけで、稚兒文殊を描きました時も、御寵愛の童の顔を寫しまして、見事な出來でございましたから、大殿樣も至極御滿足で、

「褒美には望みの物を取らせるぞ。遠慮なく望め。」と云ふ難有い御言が下りました。すると良秀は畏まつて、何を申すかと思ひますと、

「何卒私の娘をば御下げ下さいまするやうに。」と臆面もなく申し上げました。外のお邸ならば兎も角も、堀河の大殿樣の御側に仕へてゐるのを、如何に可愛いからと申しまして、かやうに無躾に御暇を願ひますものが、どこの國に居りませう。これには大腹中の大殿樣も聊か御機嫌を損じたと見えまして、暫くは唯默つて良秀の顔を眺めて御出でになりましたが、やがて、

「それはならぬ。」と吐出すやうに仰有ると、急にその儘御立ちになつてしまひました。かやうな事が、前後四五遍もございましたらうか。今になつて考へて見ますと、大殿樣の良秀を御覽になる眼は、その都度にだんだんと冷やかになつていらしつたやうでございます。すると又、それにつけても、娘の方は父親の身が案じられるせゐでもございますか、曹司へ下つてゐる時などは、よく袿の袖を嚙んで、しくしく泣いて居りました。そこで大殿樣が良秀の娘に懸想なすつたなどと申す噂が、愈擴がるやうになつたのでございませう。中には地獄變の屏風の由來も、實は娘が大殿樣の御意に從はなかつたからだなどと申すものも居りますが、元よりさやうな事がある筈はございません。

私どもの眼から見ますと、大殿樣が良秀の娘を御下げにならなかつたのは、全く娘の身の上を哀れに思召したからで、あのやうに頑な親の側へやるよりは御邸に置いて、何不自由なく暮させてやらうと云ふ難有い御考へだつたやうでございます。それは元より氣立ての優し

いあの娘を、御贔屓になつたのは間違ひございません。が、色を御好みになつたと申しますのは、恐らく牽強附會の說でございませう。いや、跡方もない譃と申した方が、宜しい位でございます。

それは兎も角もと致しまして、かやうに娘の事から良秀の御覺えが大分惡くなつて來た時でございます。どう思召したか、大殿樣は突然良秀を御召になつて、地獄變の屛風を描くやうにと、御云ひつけなさいました。

六

地獄變の屛風と申しますと、私はもうあの恐ろしい畫面の景色が、ありありと眼の前へ浮んで來るやうな氣が致します。

同じ地獄變と申しましても、良秀の描きましたのは、外の繪師のに比べますと、第一圖取りから似て居りません。それは一帖の屛風の片隅へ、小さく十王を始め眷屬たちの姿を描いて、あとは一面に紅蓮大紅蓮の猛火が劍山刀樹も爛れるかと思ふ程渦を卷いて居りました。でございますから、唐めいた冥官たちの衣裳が、點點と黃や藍を綴つて居ります外は、どこを見ても烈烈とした火焰の色で、その中をまるで卍のやうに、墨を飛ばした黑烟と金粉を煽つた火の粉とが、舞ひ狂つて居るのでございます。

こればかりでも、隨分人の目を驚かす筆勢でございますが、その上に又、業火に燒かれて、轉轉と苦しんで居ります罪人も、殆ど一人として通例の地獄繪にあるものはございません。何故かと申しますと良秀は、この多くの罪人の中に、上は月卿雲客から下は乞食非人まで、あらゆる身分の人間を寫して來たからでございます。束帶のいかめしい殿上人、五つ衣のなまめかしい青女房、珠數をかけた念佛僧、高足駄を穿いた侍學生、細長を著た女の童、幣をかざした陰陽師――一一數へ立てて居りましたら、とても際限はございますまい。兎に角さう云ふいろいろの人間が、火と煙とが逆捲く中を、牛頭馬頭の獄卒に虐まれて、大風に吹き散らされる落葉のやうに、紛紛と四方八方へ逃げ迷つてゐるのでございます。鋼叉に髮をからまれて、蜘蛛よりも手足を縮めてゐる女は、神巫の類ででもございませうか。手矛に胸を刺し通されて、蝙蝠のやうに逆になつた男は、生受領か何かに相違ございますまい。その外或は鐵の笞に打たれるもの、或は千曳の磐石に押されるもの、或は怪鳥の嘴にかけられるもの、或は又毒龍の顎に噛まれるもの――、呵責も亦罪人の數に應じて、幾通りあるかわかりません。

が、その中でも殊に一つ目立つて凄じく見えるのは、まるで獸の牙のやうな刀樹の頂きを半ばかすめて（その刀樹の梢にも、多くの亡者が纍纍と、五體を貫かれて居りましたが）中空から落ちて來る一輛の牛車でございませう。地獄の風に吹き上げられた、その車の簾の中には、女御、更衣にもまがふばかり、綺羅びやかに裝つた女房が、丈の黑髮を炎の中になびかせて、白い頸を反らせながら、悶え苦しんで居りますが、その女房の姿と申し、又燃えしきつてゐる牛車と申し、何一つとして炎熱地獄の責苦を偲ばせないものはございません。云はば廣い畫面の恐ろしさが、この一人の人物に湊つてゐるとでも申しませうか。これを見るものの耳の底には、自然と物凄い叫喚の聲が傳はつて來るかと疑ふ程、入神の出來映えでございました。

ああ、これでございます、これを描く爲に、あの恐ろしい出來事が起つたのでございます。又さもなければ如何に良秀でも、どうしてかやうに生生と奈落の苦患が畫かれませう。あの男

はこの屏風の繪を仕上げた代りに、命さへも捨てるやうな、無慘な目に出遇ひました。云はばこの繪の地獄は、本朝第一の繪師良秀が、自分で何時か墜ちて行く地獄だつたのでございます。……

私はあの珍しい地獄變の屏風の事を申上げますのを急いだあまりに、或は御話の順序を顚倒致したかも知れません。が、これからは又引き續いて、大殿樣から地獄繪を描けと申す仰せを受けた良秀の事に移りませう。

七

良秀はそれから五六箇月の間、まるで御邸へも伺はないで、屏風の繪にばかりかかつて居りました。あれ程の子煩惱がいざ繪を描くと云ふ段になりますと、娘の顔を見る氣もなくなると申すのでございますから、不思議なものではございませんか。先刻申し上げました弟子の話では、何でもあの男は仕事にとりかかりますと、まるで狐でも憑いたやうになるらしうございます。いや實際當時の風評に、良秀が畫道で名を成したのは、福德の大神に祈誓をかけたからで、その證據にはあの男が繪を描いてゐる所を、そつと物陰から覗いて見ると、必ず陰陰として靈狐の姿が、一匹ならず前後左右に、群つてゐるのが見えるなどと申す者もございました。その位でございますから、いざ繪筆を取るとなると、その繪を描き上げると云ふより外は、何も彼も忘れてしまふのでございませう。晝も夜も一間に閉じこもつたきりで、滅多に日の目も見た事はございません。――殊に地獄變の屏風を描いた時には、かう云ふ夢中になり方が、甚しかつたやうでございます。

と申しますのは何もあの男が、晝も蔀を下した部屋の中で、結燈臺の火の下に、祕密の繪の具を合せたり、或は弟子たちを、水干やら狩衣やら、さまざまに着飾らせて、その姿を、一人づつ丁寧に寫したり、――さう云ふ事ではございません。それ位の變つた事なら、別にあの地獄變の屏風を描かなくとも、仕事にかかつてゐる時とさへ申しますと、何時でもやり兼ねない男なのでございます。いや、現に龍蓋寺の五趣生死の圖を描きました時などは、當り前の人間なら、わざと眼を外らせてゆくあの往來の死骸の前へ、悠々と腰を下して、半ば腐れかかつた顔や手足を、髮の毛一すぢも違へずに、寫して參つた事がございました。では、その甚しい夢中になり方とは、一體どう云ふ事を申すのか、流石に御わかりにならない方もいらつしやいませう。それは唯今詳しい事は申し上げてゐる暇もございませんが、主な話を御耳に入れますと、大體先、かやうな次第なのでございます。

良秀の弟子の一人が、これもやはり、前に申した男でございますが、或日繪の具を溶いて居りますと、急に師匠が參りまして、

「己は少し午睡をしようと思ふ。がどうもこの頃は夢見が惡い。」とかう申すのでございます。別にこれは珍らしい事でも何でもございませんから、弟子は手を休めずに、唯、

「さやうでございますか。」と一通りの挨拶を致しました。所が、良秀は、何時になく寂しさうな顔をして、

「就いては、己が午睡をしてゐる間中、枕もとに坐つてゐて貰ひたいのだが。」と、遠慮がましく頼むではございませんか。弟子は何時になく、師匠が夢なぞを氣にするのは、不思議だと思ひましたが、それも別に造作のない事でございますから、

「よろしうございます。」と申しますと、師匠はまだ心配さうに、

「では直に奥へ來てくれ。尤も後で外の弟子が來ても、己の睡つてゐる所へは入れないやう

に。」と、ためらひながら云ひつけました。奥と申しますのは、あの男が晝を描きます部屋で、その日も夜のやうに戸を立て切つた中に、ぼんやりと灯をともしながら、まだ焼筆で圖取りだけしか出來てゐない屛風が、ぐるりと立て廻してあつたさうでございます。さてここへ參りますと、良秀は肘を枕にして、まるで疲れ切つた人間のやうに、すやすや、睡入つてしまひましたが、ものの半時とたちません中に、枕もとに居ります弟子の耳には、何とも彼とも申しやうのない、氣味の惡い聲がはひり始めました。

八

それが始めは唯、聲でございましたが、暫くしますと、次第に切れ切れな語になつて、云はば溺れかかつた人間が水の中で呻るやうに、かやうな事を申すのでございます。

「なに、己に來いと云ふのだな。――どこへ――どこへ來いと？　奈落へ來い。炎熱地獄へ來い。――誰だ。さう云ふ貴樣は。――貴樣は誰だ。――誰だと思つたら―」

弟子は思はず繪の具を溶く手をやめて、恐る恐る師匠の顔を、覗くやうにして透して見ますと、皺だらけな顔が白くなつた上に大粒な汗を滲ませながら、脣の干いた、歯の疎な口を喘ぐやうに大きく開けて居ります。さうしてその口の中で、何か絲でもつけて引張つてゐるかと疑ふ程、目まぐるしく動くものがあると思ひますと、それがあの男の舌だつたと申すではございませんか。切れ切れな語は元より、その舌から出て來るのでございます。

「誰だと思つたら――うん、貴樣だな。己も貴樣だらうと思つてゐた。なに、迎へに來たと？　だから來い。奈落へ來い。奈落には――奈落には己の娘が待つてゐる。」

その時、弟子の眼には、朦朧とした異形の影が、屛風の面をかすめてむらむらと下りて來るやうに見えた程、氣味の惡い心もちが致したさうでございます。勿論弟子はすぐに良秀に手をかけて、力のあらん限り搖り起しましたが、師匠は猶夢現に獨り語を云ひつづけて、容易に眼のさめる氣色はございません。そこで弟子は思ひ切つて、側にあつた筆洗の水を、ざぶりとあの男の顔へ浴びせかけました。

「待つてゐるから、この車へ乘つて來い――この車へ乘つて、奈落へ來い――」と云ふ語がそれと同時に、喉をしめられるやうな呻き聲に變つたと、思ひますと、やつと良秀は眼を開いて、針で刺されたよりも慌しく、矢庭にそこへ刎ね起きましたが、まだ夢の中の異類異形が、眶の後を去らないのでございませう。暫くは唯恐ろしさうな眼つきをして、やはり大きく口を開きながら、空を見つめて居りましたが、やがて我に返つた容子で、

「もう好いから、あちらへ行つてくれ。」と、今度は如何にも素つ氣なく、云ひつけるのでございます。弟子はかう云ふ時に逆ふと、何時でも大小言を云はれるので、匆匆師匠の部屋から出て參りましたが、まだ明い外の日の光を見た時には、まるで自分が惡夢から覺めた樣な、ほつとした氣が致したとか申して居りました。

しかしこれなぞはまだよい方なので、その後一月ばかりたつてから、今度は又別の弟子が、わざわざ奥へ呼ばれますと、良秀はやはりうす暗い油火の の中で、繪筆を嚙んで居りましたが、いきなり弟子の方へ向き直つて、

「御苦勞だが、又裸になつて貰はうか。」と申すのでございます。これはその時までにも、どうかすると師匠が云ひつけた事でございますから、弟子は早速衣類をぬぎすてて、赤裸になりますと、あの男は妙に顔をしかめながら、

「わしは鎖で縛られた人間が見たいと思ふのだ

が、氣の毒でも暫くの間、わしのする通りになつてゐてはくれまいか。」と、その癖少しも氣の毒らしい容子などは見せずに、冷然とから申しました。元來この弟子は繪筆などを握るよりも、太刀でも持つた方が好ささうな、逞しい若者でございましたが、これには流石に驚いたと見えて、後後までもその時の話を致しますと、「これは師匠が氣が違つて、私を殺すのではないかと思ひました。」と繰返して申したさうでございます。が、良秀の方では、相手の愚圖愚圖してゐるのが、燥つたくなつて參つたのでございませう。どこから出したか、細い鐵の鎖をざらざらと手繰りながら、殆ど飛びつくやうな勢ひで、弟子の背中へ乘りかかりますと、否應なしにその儘兩腕を捻ぢあげて、ぐるぐる卷きに致してしまひました。さうして又その鎖の端を邪慳にぐいと引きましたからたまりません。弟子の體ははずみを食つて、勢よく床を鳴らしながら、ごろりとそこへ横倒しに倒れてしまつたのでございます。

九

その時の弟子の恰好は、まるで酒甕を轉がしたやうだとでも申しませうか。何しろ手も足も慘たらしく折り曲げられて居りますから、動くのは唯首ばかりでございます。そこへ肥つた體中の血が、鎖に循環を止められたので、顏と云はず胴と云はず、一面に皮膚の色が赤み走つて參るではございませんか。が、良秀にはそれも格別氣にならないと見えまして、その酒甕のやうな體のまはりを、あちこちと廻つて眺めながら、同じやうな寫眞の圖を何枚となく描いて居ります。その間、縛られてゐる弟子の身が、どの位苦しかつたかと云ふ事は、何もわざわざ取り立てて申し上げるまでもございますまい。

が、もし何事も起らなかつたと致しましたら、この苦しみは恐らくまだその上にも、つづけられた事でございませう。幸（と申しますより、或は不幸にと申した方がよろしいかも知れません。）暫く致しますと、部屋の隅にある壺の陰から、まるで黒い油のやうなものが、一すぢ細くうねりながら、流れ出して參りました。それが始の中は餘程粘り氣のあるもののやうに、ゆつくり動いて居りましたが、だんだん滑らかに辷り始めて、やがてちらちら光りながら、鼻の先まで流れ著いたのを眺めますと、弟子は思はず、息を引いて、

「蛇が――蛇が。」と喚きました。その時は全く體中の血が一時に凍るかと思つたと申しますが、それも無理はございません。蛇は實際もう少しで、鎖の食ひこんでゐる頸の肉へ、その冷い舌の先を觸れようとしてゐたのでございます。この思ひもよらない出來事には、いくら横道な良秀でも、ぎよつと致したのでございませう。慌てて繪筆を投げ棄てながら、咄嗟に身をかがめたと思ふと、素早く蛇の尾をつかまへて、ぶらりと逆に吊り下げました。蛇は吊り下げられながらも、頭を上げて、きりきりと自分の體へ卷きつきましたが、どうしてもあの男の手の所まではとどきません。

「おのれ故に、あつたら一筆を仕損じたぞ。」

良秀は忌忌しさうにかう呟くと、蛇はその儘部屋の隅の壺の中へ抛りこんで、それからさも不承不承に、弟子の體へかかつてゐる鎖を解いてくれました。それも唯解いてくれたと云ふ丈で、肝腎の弟子の方へは、優しい言葉一つかけてはやりません。大方弟子が蛇に嚙まれるよりも、寫眞の一筆を誤つたのが、業腹だつたのでございませう。――後で聞きますと、この蛇もやはり姿を寫す爲にわざわざあの男が飼つてゐたのださうでございます。

これだけの事を御聞きになつたのでも、良秀

ら氣違ひじみた、薄氣味の惡い夢中になり方が、略御わかりになつた事でございませう。所が最後に一人、今度はまだ十三四の弟子が、やはり地獄變の屏風の御かげで、云はば命にも關り兼ねない、恐ろしい目に出遇ひました。その弟子は生れつき色の白い女のやうな男でございましたが、或夜の事、何氣なく師匠の部屋へ呼ばれて參りますと、良秀は燈臺の火の下で掌に何やら腥い肉をのせながら、見慣れない一羽の鳥を養つてゐるのでございます。大きさは先、世の常の猫ほどもございませうか。さう云へば、耳のやうに兩方へつき出た羽毛と云ひ、琥珀のやうな色をした、大きな圓い眼と云ひ、見た所も何となく猫に似て居りました。

十

元來良秀と云ふ男は、何でも自分のしてゐる事に嘴を入れられるのが大嫌ひで、先刻申し上げた蛇などもさうでございますが、自分の部屋の中に何があるか、一切さう云ふ事は弟子たちにも知らせた事がございません。でございますから、或時は机の上に髑髏がのつてゐたり、或時は又、銀の椀や蒔繪の高坏が並んでゐたり、その時描いてゐる畫次第で、隨分思ひもよらない物が出て居りました。が、ふだんはかやうな品を、一體どこにしまつて置くのか、それは又誰にもわからなかつたさうでございます。あの男が福德の大神の冥助を受けてゐるなどと申す噂も、一つは確にさう云ふ事が起りになつてゐたのでございませう。

そこで弟子は、机の上のその異樣な鳥も、やはり地獄變の屏風を描くのに入用なのに違ひないと、かう獨り考へながら、師匠の前へ畏まつて、「何か御用でございますか。」と、恭しく申しますと、良秀はまるでそれが聞えないやうにあの赤い唇へ舌なめずりをして、

「どうだ。よく馴れてゐるではないか。」と、鳥の方へ頤をやります。

「これは何と云ふものでございませう。私はつひぞまだ、見た事がございませんが。」

弟子はかう申しながら、この耳のある、猫のやうな鳥を、氣味惡さうにじろじろ眺めますと、良秀は不相變何時もの嘲笑ふやうな調子で、

「なに、見た事がない？　都育ちの人間はそれだから困る。これは二三日前に鞍馬の獵師がわしにくれた耳木兎と云ふ鳥だ。唯、こんなに馴れてゐるのは、澤山あるまい。」

かう云ひながらあの男は、徐に手をあげて、丁度餌を食べてしまつた耳木兎の背中の毛を、そつと下から撫で上げました。するとその途端でございます。鳥は急に鋭い聲で、短く一聲啼いたと思ふと、忽ち机の上から飛び上つて、兩脚の爪を張りながら、いきなり弟子の顏へとびかかりました。もしその時、弟子が袖をかざして、慌てて顏を隱さなかつたら、きつともう疵の一つや二つは負はされて居りましたらう。あつと云ひながら、その袖を振つて、逐ひ拂はうとする所を、耳木兎は蓋にかかつて、嘴を鳴らしながら、又一突き——弟子は師匠の前も忘れて、立つては防ぎ、坐つては逐ひ、思はず狹い部屋の中を、あちらこちらと逃げ惑ひました。怪鳥も元よりそれにつれて、高く低く翔りながら、隙さへあれば驀地に眼を目がけて飛んで來ます。その度にばさばさと、凄じく翼を鳴すのが、落葉の匂だか、瀧の水沫とも或は又猿酒の饐えたいきれだか何やら怪しげなもののけはひを誘つて、氣味の惡さと云つたらございません。さう云へばその弟子も、うす暗い油火の光さへ朧げな月明りかと思はれて、師匠の部屋がその儘遠い山奥の、妖氣に閉された谷のやうな、心細い氣がしたとか申したさうでございます。

の身のまはりへは、成る可く近づかない算段をして居りましたから。

十二

從つてその間の事に就いては、別に取り立てて申し上げる程の御話もございません。もし強ひて申し上げると致しましたら、それはあの強情な老爺が、何故か妙に涙脆くなつて、人のゐない所では時々獨りで泣いてゐたと云ふ御話位なものでございませう。殊に或日、何かの用で弟子の一人が、庭先へ參りました時なぞは廊下に立つてぼんやり春の近い空を眺めてゐる師匠の眼が、涙で一ぱいになつてゐたさうでございます。弟子はそれを見ますと、反つてこちらが恥しいやうな氣がしたので、默つてこそこそ引き返したと申す事でございますが、五趣生死の圖を描く爲には、道ばたの死骸さへ寫したと云ふ、傲慢なあの男が、屏風の畫が思ふやうに描けない位の事で、子供らしく泣き出すなどと申すのは隨分異なものでございませんか。

所が一方良秀がこのやうに、まるで正氣の人間とは思はれない程夢中になつて、屏風の繪を描いて居ります中に、又一方ではあの娘が、何故かだんだん氣鬱になつて、私どもにさへ涙を堪へてゐる容子が、眼に立つて參りました。それが元來愁顏の、色の白い、つつましやかな女だけに、かうなると何だか睫毛が重くなつて、眼のまはりに隈がかかつたやうな、餘計寂しい氣が致すのでございます。初はやれ父思ひのせゐだの、やれ戀煩ひをしてゐるからだの、いろいろ臆測を致したものがございますが、中頃から、なにあれは大殿樣が御意に從はせようとしていらつしやるのだと云ふ評判が立ち始めて、夫からは誰も忘れた樣に、ぱつたりあの娘の噂をしなくなつて了ひました。

丁度その頃の事でございませう。或夜、更が闌けてから、私が獨り御廊下を通りかかりますと、あの猿の良秀がいきなりどこからか飛んで參りまして、私の袴の裾を頻りにひつぱるのでございます、確、もう梅の匂でも致しさうな、うすい月の光のさしてゐる、暖い夜でございましたが、其明りですかして見ますと、猿はまつ白な齒をむき出しながら、鼻の先へ皺をよせて、氣が違はないばかりにけたたましく啼き立ててゐるではございませんか。私は氣味の惡いのが三分と、新しい袴をひつぱられる腹立たしさが七分とで、最初は猿を蹴放して、その儘通りすぎようかとも思ひましたが、又思ひ返して見ますと、前にこの猿を折檻して、若殿樣の御不興を受けた侍の例もございます。それに猿の振舞が、どうも唯事とは思はれません。そこでとうとう私も思ひ切つて、そのひつぱる方へ五六間歩くともなく歩いて參りました。

すると御廊下が一曲り曲つて、夜目にもうす白い御池の水が枝ぶりのやさしい松の向うにひろびろと見渡せる、丁度そこ迄參つた時の事でございます。どこか近くの部屋の中で人の爭つてゐるらしいけはひが、慌しく、又妙にひつそりと私の耳を脅しました。あたりはどこも森と靜まり返つて、月明りとも靄ともつかないものの中で、魚の跳る音がする外は、話し聲一つ聞えません。そこへこの物音でございますから、私は思はず立止つて、もし狼藉者でもあつたなら、目にもの見せてくれようと、そつとその遣戸の外へ、息をひそめながら身をよせました。

十三

所が猿は私のやり方がまだるかつたのでございませう。良秀はさもさももどかしさうに、二三度私の足のまはりを駈けまはつたと思ひ

から格別御意に入つてゐたからでございませう。誰にでも容易に御会ひになつた事のない大殿様が、その日も快く御承知になつて、早速御前近くへ御召しになりました。あの男は例の通り、香染めの狩衣に萎えた烏帽子を頂いて、何時もより一層気むづかしさうな顔をしながら、恭しく御前へ平伏致しましたが、やがて嗄れた声で申しますには、

「兼ね兼ね御言ひつけになりました地獄変の屏風でございますが、私も日夜に丹誠を抽んでて、筆を執りました甲斐が見えまして、もはやあらましは出来上つたのも同前でございまする。」

「それは目出度い。予も満足ぢや。」

しかしかう仰有る大殿様の御声には、何故か妙に力の無い、張合のぬけた所がございました。

「いえ、それが一向目出度くはございませぬ。」良秀は、稍腹立しさうな容子で、ぢつと眼を伏せながら、「あらましは出来上りましたが、唯一つ、今以て私には描けぬ所がございまする。」

「なに、描けぬ所がある？」

「さやうでございまする。私は総じて、見たものでなければ描けませぬ。よし描けても、得心が参りませぬ。それでは描けぬも同じ事でございませぬか。」

これを御聞きになると、大殿様の御顔には、嘲るやうな御微笑が浮びました。

「では地獄変の屏風を描かうとすれば、地獄を見なければなるまいな。」

「さやうでございまする。が、私は先年大火事がございました時に、炎熱地獄の猛火にもまがふ火の手を、眼のあたりに眺めました。『よぢり不動』の火焔を描きましたのも、実はあの火事に遇つたからでございまする。御前もあの絵は御承知でございませう。」

「しかし罪人はどうぢや。獄卒は見た事があるまいな。」大殿様はまるで良秀の申す事が御耳にはひらなかつたやうな御容子で、から畳みかけて御尋ねになりました。

「私は鉄の鎖に縛られたものを見た事がございまする。怪鳥に悩まされるものの姿も、具さに写しとりました。されば罪人の呵責に苦しむ様も知らぬと申されませぬ。又獄卒は――」と云つて、良秀は気味の悪い苦笑を洩しながら、「又獄卒は、夢現に何度となく、私の眼に映りました。或は牛頭、或は馬頭、或は三面六臂の鬼の形が、音のせぬ手を拍き、声の出ぬ口を開いて、私を虐みに参りますのは、殆ど毎日毎夜のことと申してもよろしうございませう。――私の描かうとして描けぬのは、そのやうなものではございませぬ。」

それには大殿様も、流石に御驚きになつたでございませう。暫くは唯苛立たしさうに、良秀の顔を睨めて御出でになりましたが、やがて眉を険しく御動かしになりながら、

「では何が描けぬと申すのぢや。」と打捨るやうに仰有いました。

十五

「私は屏風の唯中に、檳榔毛の車が一輛空から落ちて来る所を描かうと思つて居りまする。」良秀はかう云つて、始めて鋭く大殿様の御顔を眺めました。あの男は画の事と云ふと、気違ひ同様になるとは聞いて居りましたが、その時の眼のくばりには確にさやうな恐ろしさがあつたやうでございます。

「その車の中には、一人のあでやかな上臈が、猛火の中に黒髪を乱しながら、悶え苦しんでゐるのでございまする。顔は煙に咽びながら、眉を顰めて、空ざまに車蓋を仰いで居りませう。手は下簾を引きちぎつて、降りかかる火の粉の

雨を防がうとして居るかも知れませぬ。さうしてそのまはりには、怪しげな鷙鳥が十羽となく、二十羽となく、嘴を鳴らして紛々と飛び繞つてゐるのでございまする。――ああ、それが、牛車の中の上﨟が、どうしても私には描けませぬ。」

「さうして――どうぢや。」

大殿様はどう云ふ訳か、妙に悦ばしさうな御気色で、かう良秀を御促しになりました。が、良秀は例の赤い唇を熱でも出た時のやうに震はせながら、夢を見てゐるのかと思ふ調子で、

「それが私には描けませぬ。」と、もう一度繰返しましたが、突然噛みつくやうな勢ひになつて、

「どうか檳榔毛の車を一輛、私の見てゐる前で、火をかけて頂きたうございまする。さうしてもし出来まするならば――」

大殿様は御顔を暗くなすつたかと思ふと、突然けたたましく御笑ひになりました。さうしてその御笑ひ声に息をつまらせながら、仰有いますには、

「おお、万事その方が申す通りに致し遣はさう。出来る出来ぬの詮議は無益の沙汰ぢや。」

私はその御言を伺ひますと、虫の知らせか、何となく凄じい気が致しました。実際又大殿様の御容子も、御口の端には白く泡がたまつて居りますし、御眉のあたりにはびくびくと電が走つて居りますし、まるで良秀のもの狂ひに御染みなすつたのかと思ふ程、唯ならなかつたのでございます。それがちよいと言を御切りになると、すぐ又何かが爆ぜたやうな勢で、止めどなく喉を鳴らして御笑ひになりながら、

「檳榔毛の車にも火をかけよう。又その中にはあでやかな女を一人、上﨟の装をさせて乗せて遣はさう。炎と黒煙とに攻められて、車の中の女が、悶え死をする――それを描かうと思ひついたのは、流石に天下第一の絵師ぢや。褒めてとらす。おお、褒めてとらすぞ。」

大殿様の御言葉を聞きますと、良秀は急に色を失つて喘ぐやうに唯、唇ばかり動かして居りましたが、やがて体中の筋が緩んだやうに、べたりと畳へ両手をつくと、

「難有い仕合でございまする。」と、聞えるか聞えないかわからない程低い声で、丁寧に御礼を申し上げました。これは大方自分の考へてゐた目ろみの恐ろしさが、大殿様の御言葉につれてありありと目の前へ浮んで来たからでございませうか。私は一生の中に唯一度、この時だけは良秀が、気の毒な人間に思はれました。

十六

それから二三日した夜の事でございます。大殿様は御約束通り、良秀を御召しになつて、檳榔毛の車の焼ける所を、目近く見せて御やりになりました。尤もこれは堀河の御邸であつた事ではございません。俗に雪解の御所と云ふ、昔大殿様の妹君がいらしつた洛外の山荘で、御焼きになつたのでございます。

この雪解の御所と申しますのは、久しくどなたにも御住ひにはならなかつた所で、広い御庭も荒れ放題荒れ果てて居りましたが、大方この人気のない御容子を拝見した者の当推量でございませう。ここで御歿くなりになつた妹君の御身の上にも、兎角の噂が立ちまして、中には又月のない夜毎夜毎に、今でも怪しい御袴の緋の色が、地にもつかず御廊下を歩むなどと云ふ取沙汰を致すものもございました。――それも無理ではございません。昼でさへ寂しいこの御所は、一度日が暮れたとなりますと、遣水の音が一際陰に響いて、星明りに飛ぶ五位鷺も、怪形の物かと思ふ程、気味が悪いのでございますから。

丁度その夜はやはり月のない、まつ暗な晩でございましたが、大殿油の灯影で眺めますと、縁に近く座を御占めになつた大殿樣は、淺黄の直衣に濃い紫の浮紋の指貫を御召になつて、白地の錦の縁をとつた圓座に、高々とあぐらを組んでいらつしやいました。その前後左右に御側の者どもが五六人、恭しく居並んで居りましたのは、別に取り立てて申し上げるまでもございますまい。が、中に一人、眼だつて事ありげに見えたのは、先年陸奥の戰ひに餓ゑて人の肉を食つて以來、鹿の生角さへ裂くやうになつたと云ふ強力の侍が、下に腹卷を着こんだ容子で、太刀を鷗尻に佩き反らせながら、御縁の下に嚴しくつくばつてゐた事でございます。――それが皆、夜風に靡く灯の光で、或は明るく或は暗く、殆ど夢現を分たない氣色で、何故かもの凄く見え渡つて居りました。

その上に又、御庭に引き据ゑた檳榔毛の車が、高い車蓋にのつしりと暗を抑へて、牛はつけず黑い轅を斜に榻へかけながら、金物の黃金を星のやうに、ちらちら光らせてゐるのを眺めますと、春とは云ふものの何となく肌寒い氣が致します。尤もその車の内は、浮線綾の縁をとつた青い簾が、重く封じこめて居りますから、輿には何がはひつてゐるか判りません。さうしてそのまはりには仕丁たちが、手ん手に燃えさかる松明を執つて、煙が御縁の方へ靡くのを氣にしながら、仔細らしく控へて居ります。

當の良秀は稍離れて、丁度御縁の眞向に、跪いて居りましたが、これは何時もの香染めらしい狩衣に萎えた揉烏帽子を頂いて、星空の重みに壓されたかと思ふ位、何時もよりは猶小さく、見すぼらしげに見えました。その後に又一人同じやうな烏帽子狩衣の蹲つたのは、多分召し連れた弟子の一人でもございませうか。それが丁度二人とも、遠いうす暗がりの中に蹲つて居りますので、私のゐた御縁の下からは、狩衣の色さへ定かにはわかりません。

十七

時刻は彼是眞夜中にも近かつたでございませう。林泉をつつんだ暗がひつそりと聲を呑んで、一同のする息を窺つてゐると思ふ中には、唯かすかな夜風の渡る音がして、松明の煙がその度に煤臭い匂を送つて參ります。大殿樣は暫く默つて、この不思議な景色をぢつと眺めていらつしやいましたが、やがて膝を御進めになりますと、

「良秀。」と、鋭く御呼びかけになりました。

良秀は何やら御返事を致したやうでございますが、私の耳には唯、唸るやうな聲しか聞えて參りません。

「良秀。今宵はその方の望み通り、車に火をかけて見せて遣はさう。」

大殿樣はかう仰有つて、御側の者たちの方を流し眄に御覽になりました。その時何か大殿樣と御側の誰彼との間には、意味ありげな微笑が交されたやうにも見うけましたが、これは或は私の氣のせゐかも分りません。すると良秀は畏る畏る頭を擧げて御縁の上を仰いだらしうございますが、やはり何も申し上げずに控へて居ります。

「よう見い。それは予が日頃乘る車ぢや。その方も覺えがあらう。――予はその車にこれから火をかけて、目のあたりに炎熱地獄を現ぜさせる心算ぢやが。」

大殿樣は又言を御止めになつて、御側の者たちに眴をなさいました。それから急に苦々しい御調子で、「その内には罪人の女房が一人、縛めた儘、乘せてある。されば車に火をかけたら、必定その女めは肉を燒き骨を焦して、四苦八苦の最期を遂げるであらう。その方が屏

屏風を仕上げるには、又とないよい手本ぢや。雪のやうな肌が燃え爛れるのを見のがすな。黒髪が火の粉になつて、舞ひ上るさまもよう見て置け。」

大殿様は三度口を御噤みになりましたが、何を御思ひになつたのか、今度は唯肩を揺つて、声も立てずに御笑ひなさりながら、

「末代までもない観物ぢや。予もここで見物しよう。それそれ、簾を揚げて、良秀に中の女を見せて遣さぬか。」

仰を聞くと仕丁の一人は、片手に松明の火を高くかざしながら、つかつかと車に近づくと、矢庭に片手をさし伸ばして、簾をさらりと揚げて見せました。けたたましく音を立てて燃える松明の光は、一しきり赤くゆらぎながら、忽ち狭い輫の中を鮮かに照し出しましたが、輫の上に惨らしく、鎖にかけられた女房は——あゝ、誰か見違へを致しませう。きらびやかな繡のある桜の唐衣にすべらかし黒髪が艶やかに垂れて、うちかたむいた黄金の釵子も美しく輝いて見えましたが、身なりこそ違へ、小造りな体つきは、色の白い頸のあたりは、さうしてあの寂しい位つつましやかな横顔は、良秀の娘に相違ございません。私は危く叫び声を立てようと致しました。

その時でございます。私と向ひあつてゐた侍は、慌しく身を起して、柄頭を片手に抑へながら、屹と良秀の方を睨みました。それに驚いて眺めますと、あの男はこの景色に、半ば正気を失つたのでございませう。今まで下に蹲つてゐたのが、急に飛び立つたと思ひますと、両手を前へ伸した儘、車の方へ思はず知らず走りかからうと致しました。唯生憎前にも申しました通り、遠い影の中に居りますので、顔貌ははつきりと分りません。しかしさう思つたのはほんの一瞬間で、色を失つた良秀の顔は、いや、まるで何か目に見えない力が、宙へ吊り上げたやうな良秀の姿は、忽ちうす暗がりを切り抜いてありありと眼前へ浮び上りました。娘を乗せた檳榔毛の車が、この時、「火をかけい。」と云ふ大殿様の御言と共に、仕丁たちが投げる松明の火を浴びて、炎々と燃え上つたのでございます。

十八

火は見る見る中に、車蓋をつつみました。庇についた紫の流蘇が、煽られたやうにさつと靡くと、その下から濛々と夜目にも白い煙が渦を巻いて、或は簾、或は袖、或は棟の金物が、一時に砕けて飛んだかと思ふ程、火の粉が雨のやうに舞ひ上る——その凄じさと云つたらございません。いや、それよりもめらめらと舌を吐いて袖格子に搦みながら、半空までも立ち昇る烈々とした炎の色は、まるで日輪が地に落ちて、天火が迸つたやうだとでも申しませうか。前に危く叫ばうとした私も、今は全く魂を消して、唯茫然と口を開きながら、この恐ろしい光景を見守るより外はございませんでした。しかし親の良秀は——

良秀のその時の顔つきは、今でも私は忘れません。思はず知らず車の方へ駆け寄らうとしたあの男は、火が燃え上ると同時に、足を止めて、やはり手をさし伸した儘、食ひ入るばかりの眼つきをして、車をつつむ焔煙を吸ひつけられたやうに眺めて居りましたが、満身に浴びた火の光で、皺だらけな醜い顔は、髭の先までもよく見えます。が、その大きく見開いた眼の中と云ひ、引き歪めた脣のあたりと云ひ、或は又絶えず引き攣つてゐる頬の肉の震へと云ひ、良秀の心に交々往来する恐れと悲しみと驚きとは、歴々と顔に描かれました。首を刎ねられる前の盗人でも、乃至は十王の庁へ引き出された、

十逆五悪の罪人でもあすこまで苦しさうな顔は致しますまい。これには流石にあの強力の侍でさへ、思はず色を変へて、畏る畏る大殿様の御顔を仰ぎました。

が、大殿様は緊く唇を御噛みになりながら、時時気味悪く御笑ひになつて、眼もはなさずぢつと車の方を御見つめになつていらつしやいます。さうしてその車の中には――ああ、私はその時、その車にどんな娘の姿を眺めたか、それを詳しく申し上げる勇気は、到底あらうとも思はれません。あの煙に咽んで仰向けた顔の白さ、焔を掃つてふり乱れた髪の長さ、それから又見る間に火と変つて行く、桜の唐衣の美しさ、――何と云ふ惨たらしい景色でございましたらう。殊に夜風が一下しして、煙が向うへ靡いた時、赤い上に金粉を撒いたやうな、焔の中から浮き上つて、髪を口に噛みながら、縛の鎖も切れるばかり身悶えをした有様は、地獄の業苦を目のあたりへ写し出したかと疑はれて、私始め強力の侍までおのづと身の毛がよだちました。

するとその夜風が又一渡り、御庭の木木の梢にさつと通ふ――と誰でも、思ひましたらう。さう云ふ音が暗い空を、どことも知らず走つたと思ふと、忽ち何か黒いものが、地にもつかず宙にも飛ばず、鞠のやうに躍りながら、御所の屋根から火の燃えさかる車の中へ、一文字にとびこみました。さうして朱塗のやうな袖格子が、ばらばらと焼け落ちる中に、のけ反つた娘の肩を抱いて、帛を裂くやうな鋭い声を、何とも云へず苦しさうに、長く煙の外へ飛ばせました。続いて又、二声三声――私たちは我知らず、あつと同音に叫びました。壁代のやうな焔を後にして、娘の肩に縋つてゐるのは、堀河の御邸に繋いであつた、あの良秀と諢名のある、猿だつたのでございますから。その猿が何処をどうしてこの御所まで、忍んで来たか、それは勿論誰にもわかりません。が、日頃可愛がつてくれた娘なればこそ、猿も一しよに火の中へはひつたのでございませう。

十九

が、猿の姿が見えたのは、ほんの一瞬間でございました。金梨子地のやうな火の粉が一しきり、ぱつと空へ上つたかと思ふ中に、猿は元より娘の姿も、黒煙の底に隠されて、御庭のまん中には唯、一輛の火の車が凄じい音を立てながら、燃え沸つてゐるばかりでございます。いや、火の車と云ふよりも、或は火の柱と云つた方が、あの星空を衝いて煮え返る、恐ろしい火焔の有様にはふさはしいかも知れません。

その火の柱を前にして、凝り固まつたやうに立つてゐる良秀は、――何と云ふ不思議な事でございませう。あのさつきまで地獄の責苦に悩んでゐたやうな良秀は、今は云ひやうのない輝きを、さながら恍惚とした法悦の輝きを、皺だらけな満面に浮べながら、大殿様の御前も忘れたのか、両腕をしつかり胸に組んで、佇んでゐるではございませんか。それがどうもあの男の眼の中には、娘の悶え死ぬ有様が映つてゐないやうなのでございます。唯美しい火焔の色と、その中に苦しむ女人の姿とが、限りなく心を悦ばせる――さう云ふ景色に見えました。

しかも不思議なのは、何もあの男が一人娘の断末魔を嬉しさうに眺めてゐた、そればかりではございません。その時の良秀には、何故か人間とは思はれない、夢に見る獅子王の怒りに似た、怪しげな厳さがございました。でございますから不意の火の手に驚いて、啼き騒ぎながら飛びまはる数の知れない夜鳥でさへ、気のせゐか良秀の揉烏帽子のまはりへは、近づかなかつたやうでございます。恐らくは無心の鳥

眼にも、あの男の上に、円光の如く懸つてゐる、不可思議な威厳が見えたのでございませう。

鳥でさへ、さうでございます。まして私たちは仕丁までも、皆息をひそめながら、身の内も震へるばかり、異様な随喜の心に充ち満ちて、まるで開眼の仏でも見るやうに、眼も離さず、良秀を見つめました。空一面に鳴り渡る車の火とそれに魂を奪はれて、立ちすくんでゐる良秀と――何と云ふ荘厳、何と云ふ歓喜でございませう。が、その中でたつた一人、御縁の上の大殿様だけは、まるで別人かと思はれる程、御顔の色も青ざめて、口元に泡を御ためになりながら、紫の指貫の膝を両手にしつかり御つかみになつて、丁度喉の渇いた獣のやうに喘ぎつづけていらつしやいました。……

二十

その夜雪解の御所で、大殿様が車を御焚きになつた事は、誰の口からともなく世上へ洩れましたが、それに就いては随分いろいろな批判を致すものも居つたやうでございます。先第一に何故大殿様が良秀の娘を御焼き殺しなすつたか、――これは、かなはぬ恋の恨みからなすつたのだと云ふ噂が、一番多うございました。が、大殿様の思召しは、全く車を焼き人を殺してまでも、屏風の画を描かうとする絵師根性の曲なのを懲らす御心算だつたのに相違ございません。現に私は、大殿様が御口づからさう仰有るのを伺つた事さへございます。

それからあの良秀が、目前で娘を焼き殺されながら、それでも屏風の画を描きたいと云ふその木石のやうな心もちが、やはり何かとあげつらはれたやうでございます。中にはあの男を罵つて、画の為には親子の情愛も忘れてしまふ、人面獣心の曲者だなどと申すものもございました。あの横川の僧都様などは、かう云ふ考へに味方をなすつた御一人で、如何に一芸一能に秀でようとも、人として五常を弁へねば、地獄に墮ちる外はない。」などと、よく仰有つたものでございます。

所がその後一月ばかり経つて、愈々地獄変の屏風が出来上りますと、良秀は早速それを御邸へ持つて出て、恭しく大殿様の御覧に供へました。丁度その時は僧都様も御居合はせになりました、が屏風の画を一目御覧になりますと、流石にあの一帖の天地に吹き荒んでゐる火の嵐の恐しさに御驚きなすつたのでございませう。それまでは苦い顔をなさりながら、良秀の方をじろじろ睨めつけていらしつたのが、思はず知らず膝を打つて、「出かし居つた。」と仰有いました。この言を御聞きになつて、大殿様が苦笑なすつた時の御容子も、未だに私は忘れません。

それ以来あの男を悪く云ふものは、少くとも御邸の中だけでは、殆ど一人もゐなくなりました。誰でもあの屏風を見るものは、如何に日頃良秀を憎く思つてゐるにせよ、不思議に厳かな心もちに打たれて、炎熱地獄の大苦艱を如実に感じるからでもございませうか。

しかしさうなつた時分には、良秀はもうこの世に無い人の数にはいつて居りました。それも屏風の出来上つた次の夜に、自分の部屋の梁へ縄をかけて、縊れ死んだのでございます。一人娘を先立てたあの男は、恐らく安閑として生きながらへるのに堪へなかつたのでございませう。死骸は今でもあの男の家の跡に埋まつて居ります。尤も小さな標の石は、その後何十年かの雨風に曝されて、とうの昔誰の墓とも知れないやうに、苔蒸してゐるにちがひございません。

（大正七年四月作）

西郷隆盛

これは自分より二三年前に、大學の史學科を卒業した本間さんの話である。本間さんが維新史に關する、二三興味ある論文の著者だと云ふ事は、知つてゐる人も多いであらう。僕は昨年の冬鎌倉へ轉居する、丁度一週間ばかり前に、本間さんと一しよに飯を食ひに行つて、偶然この話を聞いた。

それがどう云ふものか、この頃になつても、僕の頭を離れない。そこで僕は今、この話を書く事によつて、新小說の編輯者に對する僕の寄稿の責を完らしようと思ふ。尤も後になつて聞けば、これは「本間さんの西郷隆盛」と云つて、友人間には有名な話の一つださうである。して見ればこの話も或社會には存外もう知れてゐる事かも知れない。

本間さんはこの話をした時に、「眞僞の判斷は聞く人の自由です」と云つた。本間さんさへ主張しないものを、僕は勿論主張する必要がない。まして讀者は唯、古い新聞の記事を讀むやうに、漫然と行を逐つて、讀み下してさへくれれば、よいのである。

彼是七八年も前にもならうか。丁度三月の下旬で、もうそろそろ淸水の一重櫻が咲きさうな――と云つても、まだ霙まじりの雨がふる、或寒さのきびしい夜の事である。當時大學の學生だつた本間さんは、午後九時何分かに京都を發して急行の上り列車の食堂で、白葡萄酒のコップを前にしながら、ぼんやりM・C・Cの煙をふかしてゐた。さつき米原を通り越したから、もう岐阜縣の境に近づいてゐるのに相違ない。硝子窓から外を見ると、どこも一面にまつ暗である。時時小さい火の光が流れるやうに通りすぎるが、それも遠くの家の明りだか、汽車の煙突から出る火花だか判然しない。その中で唯、窓をたたく、凍りかかつた雨の音が、騷騷しい車輪の音に單調な響を交してゐる。

本間さんは、一週間ばかり前から春期休暇を利用して、維新前後の史料を研究かたがた、獨りで京都へ遊びに來た。が、來て見ると、調べたい事もふえて來れば、行つて見たい所もいろいろある。そこで何かと忙しい思をしてゐる中に、何時か休暇も殘少なになつた。新學期の講義の始まるのにも、もうあまり時間はない。さう思ふと、いくら都踊りや保津川下りに未練があつても、便便と東山を眺めて、日を暮してゐるのは、氣が咎める。本間さんはとうとう思ひ切つて、雨が降るのに荷拵へが出來ると、俥屋の玄關から車を驅つて、制服制帽の甲斐甲斐しい姿を、七條の停車場へ運ばせる事にした。

所が乘つて見ると、二等列車の中は身動きも出來ない程こんでゐる。ボイが心配してくれたので、やつと腰を下す空地が見つかつたが、そこではどうも眠れさうもない。さうかと云つて寢臺は、勿論皆賣切れてゐる。本間さんは暫く、腰の廣さ十圍に餘る酒臭い陸軍將校と、眠りながら齒ぎしりをするどこかの令夫人との間に挾まつて、出來るだけ肩をすぼめながら、靑年らしい、とりとめのない空想に耽つてゐた。が、その中に追追空想も種切れになつてしまふ。それから強隣の壓迫も、次第に甚しくなつて來るらしい。そこで本間さんは已むを得ず、立つた後の空地へ、制帽を置いて、一つ前に連結し

[illegible]い折目に、黒のネクタイをして、所所すりきれたチヨッキの胸に太い時計の銀鎖を、物物しくぶらさげてゐる。が、この服裝のみすぼらしいのは、決して貧乏でさうしてゐるのではないらしい。その證據には、襟でもシャツの袖口でも、皆新しい白い色を、つめたく肉の上に硬ばらしてゐる。恐らく學者とか何とか云ふ階級に屬する人なので、完く身なりなどには無頓著なのであらう。

「アルマナックメエカア。正にそれにちがひない。いや僕の考へる所では、それさへ甚だ疑問ですね。しかしそんな事は、どうでもよろしい。それより君の特に研究しようとしてゐるのは何ですか。」

「維新史です。」

「すると卒業論文の題目も、やはりその範圍内にある譯ですね。」

本間さんは何だか、口頭試驗でもうけてゐるやうな心もちになつた。この相手の口吻には、妙に人を追窮するやうな所があつて、それが結局自分を飛んでもない所へ陷れさうな豫感が、この時ぼんやりながらしたからである。そこで本間さんは思ひ出したやうに、白葡萄酒の杯をとりあげながら、わざと簡單に、「西南戰爭を問題にするつもりです」と、かう答へた。

すると老紳士は、自分も急に口ざみしくなつたと見えて、體を半分後の方へ捩ぢまげると、怒鳴りつけるやうな聲を出して、「おい、ウヰスキイを一杯」と命令した。さうしてそれが來るのを待つまでもなく、本間さんの方へ向き直つて、鼻眼鏡の後に一種の嘲笑の色を浮べながら、こんな事をしやべり出した。

「西南戰爭ですか、それは面白い。僕も叔父があの時賊軍に加はつて、討死をしたから、そんな興味で少しは事實の穿鑿をやつて見た事がある。君はどう云ふ史料に從つて、研究されるか、知らないが、あの戰爭に就いては隨分誤傳が澤山あつて、しかもその誤傳が又立派に精確な史料で通つてゐます。だから餘程史料の取捨を愼まないと、思ひもよらない誤謬を犯すやうな事になる。君も第一に先づ、そこへ氣をつけた方が好いでせう。」

本間さんは向うの態度や口ぶりから推して、どうもこの忠告も感謝して然る可きものか、どうか判然しないやうな氣がしたから、白葡萄酒を嘗め嘗め、「ええ」とか何とか、至極曖昧な返事をした。が、老紳士は少しも、こつちの返事などには、注意しない。折からウヱエタアが持つて來たウヰスキイで、ちよいと喉を沾すと、ポケットから瀨戶物のパイプを出して、それへ煙草をつめながら、

「尤も氣をつけても、あぶないかも知れない。かう申すと失禮のやうだが、それ程あの戰爭の史料には、怪しいものが、多いのですね。」

「さうでせうか。」

老紳士は默つて頷きながら、燐寸をすつてパイプに火をつけた。西洋人じみた顏が、下から赤い火に照らされると、濃い煙が疎な髭をかすめて、埃及の匂をぷんとさせる。本間さんはそれを見ると何故か急にこの老紳士が、小面憎く感じ出した。醉つてゐるのは勿論、承知してゐる。が、いい加減な駄法螺を聞かせられて、それで默つて恐れ入つては、制服の金釦に對しても、面目が立たない。

「しかし私には、それ程特に警戒する必要があるとは思はれませんが――あなたはどう云ふ理由で、さうお考へなのですか。」

「理由？　理由はないが、事實がある。僕は唯西南戰爭の史料を一一綿密に調べて見た。さうしてその中から、多くの誤傳を發見した。それだけです。が、それだけでも、十分さう云はれはしないですか。」

「それは勿論、さう云はれます。では一つ、その御發見になつた事實を伺ひたいものですね。私なぞにも大に參考になりさうですから。」

老紳士はパイプを銜へた儘、暫く口を噤んだ。さうして眼を硝子窓の外へやりながら、妙にちよいと顏をしかめた。その眼の前を横ぎつて、數人の旅客の佇んでゐる停車場が、くら暗と雨との中をうす明く飛びすぎる。本間さんは向うの氣色を窺ひながら、腹の中でざまを見ろと呟きたくなつた。

「政治上の差障りさへなければ、僕も喜んで話しますが——萬一秘密の洩れた事が、山縣公にでも知れて見給へ、それこそ僕一人の迷惑ではありませんからね。」

老紳士は考へ考へ、徐にかう云つた。それから鼻眼鏡の位置を直して、本間さんの顏を探るやうな眼で眺めたが、そこに浮んでゐる侮蔑の表情が、早くもその眼に映つたのであらう。殘つてゐるウヰスキイを勢よく、ぐいと飲み干すと、急に鬚だらけな顏を近づけて、本間さんの耳もとへ酒臭い口を寄せながら、殆ど嚙みつきでもしさうな調子で、囁いた。

「もし君が他言しないと云ふ約束さへすれば、その中の一つ位は洩らしてあげませう。」

今度は本間さんの方で顏をしかめた。こいつは氣違ひかも知れないと云ふ氣が、その時咄嗟に頭をかすめたからである。が、それと同時に、ここ迄追窮して置きながら、見す見すその事實なるものを逸してしまふのが惜しいやうな、心もちもした。そこへ又、これ位な嚇しに乘せられて、尻込みするやうな自分ではないと云ふ、子供じみた負けぬ氣も、幾分かは働いたのであらう。本間さんは短くなつたM・C・Cを、灰皿の中へ抛りこみながら、頸をまつすぐにのばして、はつきりとかう云つた。

「では他言しませんから、その事實と云ふのを伺はせて下さい。」

「よろしい。」

老紳士は一しきり濃い煙をパイプからあげながら、小さな眼でぢつと本間さんの顏を見た。今まで氣がつかずにゐたが、これは氣違ひの眼ではない。さうかと云つて、世間一般の平凡な眼とも違ふ。聰明な、それでゐてやさしみのある、始終何かに微笑を送つてゐるやうな、朗然とした眼である。本間さんは默つて相手と向ひ合ひながら、この眼と向うの言動との間にある、不思議な矛盾を感ぜずにはゐられなかつた。が、勿論老紳士は少しもそんな事には氣がつかない。青い煙草の煙が、鼻眼鏡を繞つて消えてしまふと、その煙の行方を見送るやうに、靜に眼を本間さんから離して、遠い空間へ注ぎながら、頭を稍後へ反らせて、殆ど獨り言のやうに、こんな途方もない事を云ひ出した。

「細かい事實の相違を擧げてゐては、際限がない。だから一番大きな誤傳を話しませう。それは西鄕隆盛が、城山の戰では死ななかつたと云ふ事です。」

これを聞くと本間さんは、急におかしくなつて來た。そこでその笑を紛せる爲に、新しいM・C・Cへ火をつけながら、强ひて眞面目な聲を出して、「さうですか」と調子を合せた。もうその先を尋ねるまでもない。あらゆる正確な史料が認めてゐる西鄕隆盛の城山戰死を、無造作に誤傳の中へ數へようとする——それだけで、この老人の所謂事實も、略正體が分つてゐる。成程これは氣違ひでも何でもない。唯、義經と鐵木眞とを同一人にしたり、秀吉を御落胤にしたりする、無責任な好事家の一人だつたのである。かう思つた本間さんは、可笑しさと腹立たしさと、それから一種の失望とを同時に心の中で感じながら、この上は出來るだけ早く、老人との問答を切り上げようと決心した。

「しかもあの時、城山で死ななかつたばかりではない。西郷隆盛は今日までも生きてゐます。」

老紳士はから云つて、寧ろ昂然と本間さんを一瞥した。本間さんがこれにも、「はあ」と云ふ気のない返事を応じた事は、勿論である。すると相手は、嘲るやうな微笑をちらりと脣頭に浮べながら、今度は静な口ぶりで、わざとらしく問かけた。

「君は僕の云ふ事を信ぜられない。いや、弁解しなくつても、信ぜられないと云ふ事はわかつてゐる。しかし――しかしですね。何故君は西郷隆盛が、今日まで生きてゐると云ふ事を疑はれるのですか。」

「あなたは御自分でも西南戦争に興味を御持ちになつて、事實の穿鑿をなすつたさうですが、それならこんな事は、恐らく私から申上げるまでもないのでせう。が、さう御尋ねになる以上は、私も知つてゐるだけの事は、申上げたいと思ひます。」

本間さんは先方の悪く落着いた態度が忌々しくなつたのと、それから一刀両断に早くこの喜劇の結末をつけたいのとで、大人気ないと思ひながら、から云ふ前置きをして置いて、口早やに城山戦死説を弁じ出した。僕はそれを今、詳しくここへ書く必要はない。唯、本間さんの議論が、いつもの通り引證の正確な、如何にも論理の徹底してゐる、決定的なものだつたと云ふ事を書きさへすれば、それでもう十分である。が、瀬戸物のパイプを銜へた儘、煙を吹き吹き、その議論に耳を傾けてゐた老紳士は、一向辟易したらしい気色を現さない。鐵縁の鼻眼鏡の後には、不相變小さな眼が、柔な光をたたへながら、アイロニカルな微笑を浮べてゐる。その眼が又、妙に本間さんの論鋒を鈍らせた。

「成程、或假定の上に立つて云へば、君の說は正しいでせう。」

本間さんの議論が一段落を告げると、老人は悠然とから云つた。

「さうしてその假定と云ふのは、今君が擧げた加治木常樹城山籠城調査筆記とか、市来四郎日記とか云ふものの記事を、間違のない事實だとする事です。だからさう云ふ史料を始めから否定してゐる僕にとつては、折角の君の名論も、徹頭徹尾ノンセンスと云ふより外はない。まあ待ち給へ。それは君にさう云ふ史料の正確な事を、いろいろの方面から辯護する事が出來るでせう。しかし僕はあらゆる辯護を超越した、確な實證を持つてゐる。君はそれを何だと思ひますか。」

本間さんは、聊か煙に捲かれて、ちよいと返事に躊躇した。

「それは西郷隆盛が僕と一しよに、今この汽車に乗つてゐると云ふ事です。」

老紳士は、殆ど厳粛に近い調子で、のしかかるやうに云ひ切つた。日頃から物に驚かない本間さんが、流石に愕然としたのはこの時である。が、理性は一度脅されても、この位な事でその權威を失墜しはしない。思はず、M.C.C.の手を口からはなした本間さんは、又その煙をゆつくり吸ひかへしながら、怪しいと云ふ眼つきをして、無言の儘、相手のつんと高い鼻のあたりを眺めた。

「から云ふ事實に比べたら、君の史料の如きは何ですか。すべてが一片の故紙に過ぎなくなつてしまふでせう。西郷隆盛は城山で死ななかつた。其證據には、今此上り急行列車の一等室に乗り合せてゐる。此位確な事實はありますまい。それとも、やはり君は生きてゐる人間より、紙に書いた文字の方を信頼しますか。」

「さあ――生きてゐると云つても、私が見たのでなければ、信じられません。」

「見たのでなければ?」

老紳士は昂然とした調子で、本間さんの言を一蹴した。さうして徐にパイプの灰をはき出した。

「さうです。見たのでなければ。」

本間さんは又勢を盛返して、わざと冷かに前へ反問をつきつけた。が、老人にとつては、この疑問も、格別、痛痒を与へなかつたらしい。彼はそれを聞くと、依然として得意な微笑を持しながら、故らに声をひそめて見せた。

「同じ汽車に乗つてゐるのだから、君さへ見ようと云へば、今でも見られます。尤も南洲先生はもう眠てしまつたかも知れないが。なに、この一つ前の一等室だから、無駄足をしても大した損ではない。」

老紳士はかう云ふと、瀬戸物のパイプをポケットへしまひながら、眼で本間さんに「来給へ」と云ふ合図をして、大儀さうに立ち上つた。かうなつては、本間さんも兎に角一しよに、立たざるを得ない。そこで[illegible]た儘、両手をズボンのポケットに入れて、不承不承に席を離れた、さうして蹌踉たる老紳士の後から、二列に並んでゐるテエブルの間を、大股に戸口の方へ歩いて行つた。後には唯、白葡萄酒のコップとウヰスキイのコップとが、白いテエブル・クロオスの上へ、うすい半透明な影を落して、列車を襲ひかかる雨の音の中に、寂しくその影をふるはせてゐる。

それから十分ばかりたつた後の事である。白葡萄酒のコップとウヰスキイのコップとは、再無愛想なウエエタアの手で、琥珀色の液体がその中に充された。いや、そればかりではない。二つのコップを囲んでは、鉄縁の眼鏡をかけた老紳士と、大学の制服を着た本間さんとが、又前のやうに腰を下してゐる。その一つ向うのテエブルには、さつき二人と入れちがひにはひつて来た、著流しの肥つた男と、芸者らしい女とが、これは海老のフライか何かを突ついてでもゐるらしい。滑かな上方辯の会話が、纏綿として進行する間に、かちやかちやと云ふフォオクの音が、しきりなく耳にはひつて来た。

が、幸本間さんには、少しもそれが気にならない。何故かと云ふと、本間さんの頭には、今見て来た驚くべき光景が、一ぱいになつて拡がつてゐる。一等室の緑色の窓掛けと、さうしてその間に居睡りをしてゐる、山のやうな白頭の肥大漢と、――ああ、その堂々たる相貌に、南洲先生の風骨を認めたのは果して自分の見ちがひであつたらうか。あすこの電燈は、気のせゐか、ここよりも明くない。が、あの特色のある眼もとや口もとは、側へ寄るまでもなくよく見えた。さうしてそれはどうしても、子供の時から見慣れてゐる西郷隆盛の顔であつた。……

「どうですね。これでもまだ、君は城山戦死説を主張しますか。」

老紳士は赤くなつた顔に、晴晴した微笑を浮べて、本間さんの答を促した。

――…………――

本間さんは当惑した。自分はどちらを信ずればよいのであらう。先人に正確だと認められてゐる無数の史料か、或は今見て来た魁偉な老紳士か。前者を疑ふのは自分の頭を疑ふのである。後者を疑ふのは自分の眼を疑ふのである。本間さんが当惑したのは、少しも偶然ではない。

「君は今現に、南洲先生を眼のあたりに見ながら、しかも猶史料を信じたがつてゐる。」

老紳士はウヰスキイの杯を取り上げ乍ら、講義でもするやうな調子で語を次いだ。

「しかし、一体君の信じたがつてゐる史料とは

何か、それから先考へて見給へ。城山戰死説は暫く問題外にしても、凡そ歷史上の判斷を下すに足る程、正確な史料などと云ふものは、どこにだつてありはしないです。誰でも或事實の記錄をするには自然と自分でディテエルの取捨選擇をしながら、書いてゆく。これはしないつもりでも、事實としてするのだから仕方がない。と云ふ意味は、それだけもう客觀的の事實から遠ざかると云ふ事です。さうでせう。だから一見當になりさうで、實は甚當にならない。ウォルタア・テレエが一旦起した世界史の稿を廢した話なぞは、よくこの間の消息を語つてゐる。あれは君も知つてゐるでせう。實際我我には目前の事さへわからない。」

本間さんは實を云ふと、そんな事は少しも知らなかつた。が、默つてゐる中に、老紳士の方で知つてゐるときめてしまつたらしい。

「そこで城山戰死説だが、ある記錄にしても、疑ひを挾む餘地は澤山ある。成程西郷隆盛が明治十九年九月二十四日に、城山の戰で、死んだと云ふ事だけはどの史料も一致してゐませう。しかしそれは唯、西郷隆盛と信ぜられる人間が、死んだと云ふのにすぎないのです。その人間が實際西郷隆盛かどうかは、自ら又問題が違つて來る。ましてその首や首のない死體を發見した事實になると、さつきも君が云つた通り、異説も決して少くない。そこも疑へば、疑へる筈です。一方さう云ふ疑ひがある所へ、君は今この汽車の中で西郷隆盛――と云ひたくなければ、少くとも西郷隆盛に酷似してゐる人間に遇つた。それでも君には史料なるものの方が信ぜられますか。」

「しかしですね。西郷隆盛の死體は確かにあつたのでせう。さうすると――」

「似てゐる人間は、天下にいくらもゐます。右腕に古い刀創があるとか何とか云ふのも一人に限つた事ではない。君は狄青が濃智高の屍を檢した話を知つてゐますか。」

本間さんは、今度は正直に知らないと白狀した。實はさつきから、相手の妙な論理と、いろいろな事をよく知つてゐるのとに、惱まされて、追追この鼻眼鏡の前に一種の敬意に似たものを感じかかつてゐたのである。老紳士はこの間に、ポケットから、又例の瀬戸物のパイプを出して、ゆつくり埃及の煙をくゆらせながら、

「狄青が五十里を追うて大理に入つた時、敵の死體を見ると、中に金龍の衣を著てゐるものがある。衆は皆これを智高だと云つたが、狄青は獨り聞かなかつた。『安んぞその詐りにあらざるを知らんや。寧ろ智高を失ふとも、敢て朝廷を誣いて功を貪らじ。』これは道德的に立派なばかりではない。眞理に對する態度としても、望ましい　でせう。所が遺憾ながら、西南戰爭當時、官軍を指揮した諸將軍は、これ程周密な思慮を缺いてゐた。そこで歷史までも『かも知れぬ』を『である』に置き換へてしまつたのです。」

愈どうにも口が出せなくなつた本間さんは、そこで苦しまぎれに、子供らしい最後の反駁を試みた。

「しかし、そんなによく似てゐる人間がゐるでせうか。」

すると老紳士は、どう云ふ譯か、急に瀬戸物のパイプを口から離して、煙草の煙にむせながら、大きな聲で笑ひ出した。その聲があまり大きかつたせゐか、向うのテエブルにゐた藝者が、わざわざふり返つて、怪訝な顏をしながら、こつちを見た。が、老紳士は容易に、笑ひやまない。片手に鼻眼鏡が落ちさうになるのをおさへながら、片手に火のついたパイプを持つて、咽を鳴らし鳴らし、笑つてゐる。本間さんは何だか譯がわからないので、白葡萄酒の杯を前に置いた

僕、茫然と唯、相手の顔を眺めてゐた。

「それはゐます。」老人は暫くしてから、やっと口をつきながら、かう云った。

「今君が向うで居眠りをしてゐるのを見たでせう。あの男なぞは、あんなによく西郷隆盛に似てゐるではないですか。」

「ではあれは――あの人は何なのです。」

「あれですか。あれは僕の友人ですよ。本職は醫者で、傍南畫を描く男ですが――」

「西郷隆盛ではないのですね。」

本間さんは眞面目な聲でかう云って、それから急に顏を赤らめた。今まで自分のつとめてゐた滑稽な役まはりが、この時忽然として新しい光に照される事になったからである。

「もし氣に障ったら、堪忍し給へ。僕は君と話してゐる中に、あんまり君が青年らしい正直な考を持ってゐたから、ちよいと惡戲をする氣になったのです。しかしした事は惡戲でも、云った事は冗談ではない。――僕はかう云ふ人間です。」

老紳士はポケットをさぐって、一枚の名刺を本間さんの前へ出して見せた。名刺には肩書きも何も、刷ってはない。が、本間さんはそれを見て、始めて、この老紳士の顏をどこで見たか、やっと思ひ出す事が出來たのである。――老紳士は本間さんの顏を眺めながら、滿足さうに微笑した。

「先生とは實際夢にも思ひませんでした。私こそいろいろ失禮な事を申し上げて、恐縮です。」

「いやさっきの城山戰死説なぞは、中中傑作だった。君の卒業論文もああ云ふ調子なら面白いものが出來るでせう。僕の方の大學にも、今年は一人維新史を專攻した學生がゐる。――まあそんな事より、大に一つ飲み給へ。」

霙まじりの雨も、小止みになったと見えて、もう窓に音がしなくなった。女連れの客が立った後には、硝子瓶にさした菜の花ばかりが、冴え返る食堂車の中にかすかな匂を漂はせてゐる。本間さんは白葡萄酒の杯を勢よく飲み干すと、色の出た頬をおさへながら、突然、

「先生はスケプティックですね。」と云った。

老紳士は鼻眼鏡の後から、眼でちよいと頷いた。あの始終何かに微笑を迎へてゐるやうな、朗然とした眼で頷いたのである。

「僕はピルロンの弟子で澤山だ。我我は何も知らない、いや、さう云ふ我我自身の事さへも知らない。まして西郷隆盛の生死をやです。だから、僕は歴史を書くにしても、嘘のない歴史なぞを書かうとは思はない。唯如何にもありさうな、美しい歴史さへ書ければ、それで滿足する。僕は若い時に、小説家にならうと思った事がある。なったらやっぱり、さう云ふ小説を書いてゐたでせう。或はその方が今よりよかったかも知れない。兎に角僕はスケプティックで澤山だ。君はさう思はないですか。」

（大正六年十二月作）

懷疑主義

懷疑主義も一つの信念の上に、――疑ふことは疑はぬと言ふ信念の上に立つものである。成程それは矛盾かも知れない。しかし懷疑主義は同時に又少しも信念の上に立たぬ哲學のあることをも疑ふものである。

（『侏儒の言葉』より）

蜜柑

或曇つた冬の日暮である。私は横須賀發上り二等客車の隅に腰を下して、ぼんやり發車の笛を待つてゐた。とうに電燈のついた客車の中には、珍らしく私の外に一人も乘客はゐなかつた。外を覗くと、うす暗いプラットフォオムにも、今日は珍らしく見送りの人影さへ跡を絶つて、唯、檻に入れられた小犬が一匹、時時悲しさうに、吠え立ててゐた。これらはその時の私の心もちと、不思議な位似つかはしい景色だつた。私の頭の中には云ひやうのない疲勞と倦怠とが、まるで雪曇りの空のやうなどんよりした影を落してゐた。私は外套のポケットへぢつと兩手をつつこんだ儘、そこにはひつてゐる夕刊を出して見ようと云ふ元氣さへ起らなかつた。

が、やがて發車の笛が鳴つた。私はかすかな心の寛ぎを感じながら、後の窓枠へ頭をもたせて、眼の前の停車場がずるずると後ずさりを始めるのを待つともなく待ちかまへてゐた。所がそれよりも先にけたたましい日和下駄の音が、改札口の方から聞え出したと思ふと、間もなく車掌の何か云ひ罵る聲と共に、私の乘つてゐる二等室の戸ががらりと開いて十三四の小娘が一人、慌しく中へはひつて來た、と同時に一つづしりと揺れて、徐に汽車は動き出した。一本づつ眼をくぎつて行くプラットフォオムの柱、置き忘れたやうな運水車、それから車內の誰かに祝儀の禮を云つてゐる赤帽——さう云ふすべては、窓へ吹きつける煤煙の中に、未練がましく後へ倒れて行つた。私は漸くほつとした心もちになつて、卷煙草に火をつけながら、始て懶い睚をあげて、前の席に腰を下してゐた小娘の顏を一瞥した。

それは油氣のない髮をひつつめの銀杏返しに結つて、横なでの痕のある皸だらけの兩頰を氣持の惡い程赤く火照らせた、如何にも田舍者らしい娘だつた。しかも垢じみた萌黄色の毛絲の襟卷がだらりと垂れ下つた膝の上には、大きな風呂敷包みがあつた。その又包みを抱いた霜燒けの手の中には、三等の赤切符が大事さうにしつかり握られてゐた。私はこの小娘の下品な顏だちを好まなかつた。それから彼女の服裝が不潔なのもやはり不快だつた。最後にその二等と三等との區別さへも辨へない愚鈍な心が腹立たしかつた。だから卷煙草に火をつけた私は、一つにはこの小娘の存在を忘れたいと云ふ心もちもあつて、今度はポケットの夕刊を漫然と膝の上へひろげて見た。すると其時夕刊の紙面に落ちてゐた外光が、突然電燈の光に變つて、刷の惡い何欄かの活字が意外な位鮮に私の眼の前へ浮んで來た。云ふ迄もなく汽車は今、横須賀線に多い隧道の最初のそれへはひつたのである。

しかしその電燈の光に照らされた夕刊の紙面を見渡しても、やはり私の憂鬱を慰むべく世間は餘りに平凡な出來事ばかりで持ち切つてゐた。講和問題、新婦、新郎、瀆職事件、死亡廣告——私は隧道へはひつた一瞬間、汽車の走つてゐる方向が逆になつたやうな錯覺を感じながら、それらの索漠とした記事から記事へ殆機械的に眼を通した。が、その間も勿論あの小娘が、恰も卑俗な現實を人間にしたやうな面もちで、私の前に坐つてゐる事を絶えず意識せずにはゐられなかつた。この隧道の中の汽車

と、この田舍者の小娘と、さうして又この平凡な記事に埋つてゐる夕刊と、——これが象徴でなくて何であらう。不可解な、下等な、退屈な人生の象徴でなくて何であらう。私は一切がくだらなくなつて、讀みかけた夕刊を拋り出すと、又窓枠に頭を靠せながら、死んだやうに眼をつぶつて、うつらうつらし始めた。

それから幾分か過ぎた後であつた。ふと何かに脅されたやうな心もちがして、思はずあたりを見まはすと、何時の間にか例の小娘が、向う側から席を私の隣へ移して、頻に窓を開けようとしてゐる。が、重い硝子戸は中中思ふやうにあがらないらしい。あの皸だらけの頰は愈、赤くなつて、時時鼻洟をすすりこむ音が、小さな息の切れる聲と一しよに、せはしなく耳へはひつて來る。これは勿論私にも、幾分ながら同情を惹くに足るものには相違なかつた。しかし汽車が今將に隧道の口へさしかからうとしてゐる事は、暮色の中に枯草ばかり明い兩側の山腹が、間近く窓側に迫つて來たのでも、すぐに合點の行く事であつた。にも關らずこの小娘は、わざわざしめてある窓の戸を下さうとする、——その理由が私には呑みこめなかつた。いや、それが、私には、單にこの小娘の氣まぐれだとしか考へられなかつた。だから私は腹の底に依然として險しい感情を蓄へながら、あの霜燒けの手が硝子戸を擡げようとして惡戰苦鬪する容子を、まるでそれが永久に成功しない事でも祈るやうな冷酷な眼で眺めてゐた。すると間もなく凄じい音をはためかせて、汽車が隧道へなだれこむと同時に、小娘の開けようとした硝子戸は、とうとうばたりと下へ落ちた。さうしてその四角な穴の中から、煤を溶したやうなどす黒い空氣が、俄に息苦しい煙になつて濛濛と車内へ漲り出した。元來咽喉を害してゐた私は、手巾を顏に當てる暇さへなく、この煙を滿面に浴びせられたおかげで、殆、息もつけない程咳きこまなければならなかつた。が、小娘は私に頓着する氣色も見えず、窓から外へ首をのばして、闇を吹く風に銀杏返しの鬢の毛を戰がせながら、ぢつと汽車の進む方向を見やつてゐる。その姿を煤煙と電燈の光との中に眺めた時、もう窓の外が見る見る明くなつて、そこから土の匂や枯草の匂や水の匂が冷かに流れこんで來なかつたなら、漸、咳きやんだ私は、この見知らない小娘を頭ごなしに叱りつけてでも、又元の通り窓の戸をしめさせたのに相違なかつたのである。

しかし汽車はその時分には、もう安安と隧道を辷りぬけて、枯草の山と山との間に挾まれた、或貧しい町はづれの踏切りに通りかかつてゐた。踏切りの近くには、いづれも見すぼらしい藁屋根や瓦屋根がごみごみと狹苦しく建てこんで、踏切り番が振るのであらう、唯一旒のうす白い旗が懶げに暮色を搖つてゐた。やつと隧道を出たと思ふ——その時その蕭索とした踏切りの柵の向うに、私は頰の赤い三人の男の子が、目白押しに並んで立つてゐるのを見た。彼等は皆、この曇天に押しすくめられたかと思ふ程、揃つて背が低かつた。さうして又この町はづれの陰慘たる風物と同じやうな色の着物を着てゐた。それが汽車の通るのを仰ぎ見ながら、一齊に手を擧げるが早いか、いたいけな喉を高く反らせて、何とも意味の分らない喊聲を一生懸命に迸らせた。するとその瞬間である。窓から半身を乘り出してゐた例の娘が、あの霜燒けの手をつとのばして、勢よく左右に振つたと思ふと、忽ち心を躍らすばかり暖な日の色に染まつてゐる蜜柑が凡そ五つ六つ、汽車を見送つた子供たちの上へばらばらと空から降つて來た。私は思はず息を呑んだ。さうして刹那に一切を了解した。小娘は、恐らくは

これから奉公先へ赴かうとしてゐる小娘は、その懐に蔵してゐた幾顆の蜜柑を窓から投げて、わざわざ踏切りまで見送りに来た弟たちの労に報いたのである。

暮色を帯びた町はづれの踏切りと、小鳥のやうに声を挙げた三人の子供たちと、さうしてその上に乱落する鮮な蜜柑の色と――すべては汽車の窓の外に、瞬く暇もなく通り過ぎた。が、私の心の上には、切ない程はつきりと、この光景が焼きつけられた。さうしてそこから、或得体の知れない朗な心もちが湧き上つて来るのを意識した。私は昂然と頭を挙げて、まるで別人を見るやうにあの小娘を注視した。小娘は何時かもう私の前の席に返つて、不相変皸だらけの頬を萌黄色の毛糸の襟巻に埋めながら、大きな風呂敷包みを抱へた手に、しつかりと三等切符を握つてゐる。……

私はこの時始めて、云ひやうのない疲労と倦怠とを、さうして又不可解な、下等な、退屈な人生を僅に忘れる事が出来たのである。

（大正八年四月作）

コレラ

コレラが流行るので思ひ出すのは、漱石先生の話である。先生の子供の時分にも、コレラが流行つたことがある。その時、先生は豆を沢山食つて、水を沢山飲んで、それから先生のお父さんと一緒に、蚊帳の中に寝てゐたさうである。さうして、その明け方に、蚊帳の中で、いきなり吐瀉を始めたさうである。すると、先生のお父さんは「そら、コレラだ」と言つて、蚊帳を飛び出したさうである。蚊帳を飛び出して、どうするかと思ふと、何もすることがないものだから、まだ星が出てゐるのに庭を箒で掃き始めたさうである。勿論、先生の吐瀉したのは、豆と水とに祟られたので、コレラではなかつたが、この事があつたために、先生は人間の父たるもののエゴイズムを知つたと話してゐた。

コレラの小説では何があるか。紅葉の「青葡萄」とかいふのが、多分、コレラの話だつたらう。Lmotte といふ人の短篇に、日本のコレラを書いたのがある。何も際立つた事件はないが、魚河岸の暇になつたり、何かするところをなかなか器用に書いてある。

僕はコレラでは死にたくはない。へどを吐いたり下痢をしたりする不風流な往生は厭やである。ショウペンハウエルがコレラを恐がつて、逃げて歩いたことを読んだ時は、甚だ彼に同情した。ことに依ると、彼の哲学よりも、もつと、同情したかも知れない。しかし、ショウペンハウエル時代には、まだコレラは食物から伝染するといふことがわからなかつたのである。が、僕は現代に生れた難有さに、それをちやんと心得てゐるから、煮たものばかり食つたり、塩酸レモナーデを服んだり、悠悠と予防を講じてゐる。この間、臆病すぎると言つて笑はれたが、病は文明人のみの持つてゐる美徳である。臆病でない人間が偉ければ、ホッテントットの王様に三拝九拝するがいい。

（『百艸』の「野人生計事」より）

沼地

　或雨の降る日の午後であつた。私は或繪畫展覽會場の一室で、小さな油繪を一枚發見した。發見――と云ふと大袈裟だが、實際さう云つても差支へない程、この畫だけは思ひ切つて採光の惡い片隅に、それも恐しく貧弱な額縁へはひつて、忘れられたやうに懸かつてゐたのである。畫は確か、「沼地」とか云ふので、畫家は、知名の人でも何でもなかつた。又畫そのものも唯濁つた水と、濕つた土と、さうしてその土に繁茂する草木とを描いただけだから、恐らく尋常の見物からは、文字通り一顧さへも受けなかつた事であらう。

　その上不思議な事にこの畫家は、蓊鬱たる草木を描きながら、一刷毛も緑の色を使つてゐない。蘆や白楊や無花果を彩るものは、どこを見ても濁つた黄色である。まるで濡れた壁土のやうな、重苦しい黄色である。この畫家には草木の色が實際さう見えたのであらうか。それとも別に好む所があつて、故意こんな誇張を加へたのであらうか。――私はこの畫の前に立つて、それから受ける感じを味ふと共に、かう云ふ疑問も亦挾まずにはゐられなかつたのである。

　しかしその畫の中に恐しい力が潜んでゐる事は、見てゐるに從つて分つて來た。殊に前景の土の描きに、そこを踏む時の足の心もちまでもまざまざと感じさせる程それ程、的確に描いてあつた。踏むとぶすりと音をさせて踝が隱れるやうな、滑な淤泥の心もちである。私はこの小さな油畫の中に、鋭く自然を摑まうとしてゐる、傷しい藝術家の姿を見出した。さうしてあらゆる優れた藝術品から受ける樣に、この黄いろい沼地の草木からも恍惚たる悲壯の感激を受けた。實際同じ會場に懸かつてゐる大小さまざまな畫の中で、この一枚に拮抗し得る程力強い畫は、どこにも見出す事が出來なかつたのである。

「大へんに感心してゐますね。」

　かう云ふ言と共に肩を叩かれた私は、恰も何かが心から振ひ落されたやうな氣もちがして、卒然と後をふり返つた。

「どうです、これは。」

　相手は無頓着にかう云ひながら、剃刀を當てたばかりの顋で、沼地の畫をさし示した。流行の茶の背廣を著た、恰幅の好い、消息通を以て自ら任じてゐる、――新聞の美術記者である。私はこの記者から前にも一二度不快な印象を受けた覺えがあるので、不承不承に返事をした。

「傑作です。」

「傑作――ですか。これは面白い。」

　記者は腹を揺つて笑つた。その聲に驚かされたのであらう。近くで畫を見てゐた二三人の見物が皆云ひ合せたやうにこちらを見た。私は愈不快になつた。

「これは面白い。元來この畫はね、會員の畫ぢやないのです。が、何しろ當人が口癖のやうにここへ出す出すと云つてゐたものですから、遺族が審査員へ頼んで、やつとこの隅へ懸ける事になつたのです。」

「遺族？　ぢやこの畫を描いた人は死んでゐるのですか。」

「死んでゐるのです。尤も生きてゐる中から、死んだやうなものでしたが。」

　私の好奇心は何時か私の不快な感情より強

くなつてゐた。
「どうして？」
「この畫描きは餘程前から氣が違つてゐたのです。」
「この畫を描いた時もですか。」
「勿論でよ。氣違ひでもなければ、誰がこんな色の畫を描くものですか。それをあなたは傑作だと云つて感心してお出でなさる。そこが大に面白いですね。」
記者は又得意さうに、聲を擧げて笑つた。彼は私が私の不明を恥ぢるだらうと豫測してゐたのであらう。或は一歩進めて、鑑賞上に於ける彼自身の優越を私に印象させようと思つてゐたのかも知れない。しかし彼の期待は二つとも無駄になつた。彼の話を聞くと共に、殆ど嚴肅にも近い感情が私の全精神に云ひやうのない波動を與へたからである。私は悚然として再びこの沼池の畫を凝視した。さうして再びこの小さなカンヴァスの中に、恐しい焦燥と不安とに虐まれてゐる傷しい藝術家の姿を見出した。
「尤も畫が思ふやうに描けないと云ふので、氣が違つたらしいのですがね。その點だけはまあ買へば買つてやれるのです。」
記者は晴々した顏をして、殆ど嬉しさうに微笑した。これが無名の藝術家が——我我の一人が、その生命を犧牲にして僅に世間から購ひ得た唯一の報酬だつたのである。私は全身に異樣な戰慄を感じて、三度この憂鬱な油畫を覗いて見た。そこにはうす暗い空と水との間に、濡れた黄土の色をした蘆が、白楊が、無花果が、自然それ自身を見るやうな凄じい勢で生きてゐる。……
「傑作です。」
私は記者の顏をまともに見つめながら、昂然としてかう繰返した。

(大正八年四月作)

澄江堂日錄

六月六日
蒲原君に枇杷を貰ふ。午後、永日莊にペルシヤの古陶を觀る。價高うして購ふべからず。
六月七日
午前、香取先生、鹿島氏と共に來訪、澄江堂の印を贈らる。鹿島氏、大雅書と稱する一軸を示さる。「一衆芳搖落獨鮮妍」とあり。落款は九霞山樵。黑木欽堂氏の極めあり。但し何の爲の極めなるかを明かにせず。
六月八日
「サンデイ毎日」の小說を起稿す。多加志、消化不良の氣味あり。夜下島先生、往診せらる。又藤澤氏來訪。
六月九日
菅忠雄氏と「エキジリエル・デス・トイフエルス」を讀む。第一章はおほむね面白からず。事件も不自然に過ぎ、姉妹オイフエミイの性格も透明に過ぎたるものの如し。多加志の病よろしからず。下島先生、診斷せらるること三度。
六月十日
午前、多加志を宇津野病院に入院せしむ。室生、伊藤、池田、田沼、和田、成瀨、渡邊の諸氏來訪。夜、宇津野博士を訪ふ。多加志の命、必ずしも絶望すべからざるが如し。「サンデイ毎日」の小說を斷念す。
六月十一日
早朝、多加志の容態稍よろしとの電話あり。薄暮、病院に至る。又一游亭を訪ふ。座に古原草君あり、話熟、深更に及ぶ、再び病院に至れば門既に閉ぢたり。唯多加志の病室の燈火を見しのみ。

(「百艸」の「日錄抄」より)

きりしとほろ上人傳

小序

これは予が嘗て三田文學紙上に掲載した「奉教人の死」と同じく、予が所藏の切支丹版「れげんだ・あうれあ」の一章に、多少の潤色を加へたものである。但し「奉教人の死」は本邦西教徒の逸事であつたが、「きりしとほろ上人傳」は古來洽く歐洲天主教國に流布した聖人行狀記の一種であるから、予の「れげんだ・あうれあ」の紹介も、彼是相俟つて始めて全豹を彷彿する事が出來るかも知れない。

傳中殆ど滑稽に近い時代錯誤や場所錯誤が續出するが、予は原文の時代色を損ふまいとした結果、わざと何等の筆削をも施さない事にした。大方の諸君子にして、予が常識の有無を疑はれなければ幸甚である。

一　山ずまひのこと

遠い昔のことでおぢやる。「しりあ」の國の山奥に、「れぷろぼす」と申す山男がおぢやつた。その頃「れぷろぼす」ほどな大男は、御主の日輪の照らさせ給ふ天が下はひろしと云へ、絶えて一人もおりなかつたと申す。まづ身の丈は三丈あまりもおぢやらうか。葡萄蔓かとも見ゆる髮の中には、いたいけな四十雀が何羽とも知れず巣食うて居つた。まいて手足はさながら深山の松檜にまがうて、足音は七つの谷々にも谺するばかりでおぢやる。さればその日の糧を獵らうにも、鹿熊なんどのたぐひをとりひしぐは、指の先の一ひねりぢや。又は折ふし海べに下り立つて、すなどらうと思ふ時も、海松房ほどな髯の垂れた頤をひたと砂につけて、ある程の水を一吸ひ吸へば、鯛も鰹も尾鰭をふるうて、ざわざわと口へ流れこんだ。ぢやによつて沖を通る廻船さへ、時ならぬ潮のさしひきに漂はされて、水夫楫取の慌てふためく事もおぢやつたと申し傳へた。

なれど「れぷろぼす」は、性得心根のやさしいものでおぢやれば、山ずまひの杣獵夫は元より、往來の旅人にも害を加へたと申す事はおりない。反つて杣の伐りあぐんだ樹は推し倒し、獵夫の追ひ失うた毛物はとつておさへ、旅人の負ひなやんだ荷は肩にかけて、なにかと親切をつくいたれば、遠近の山里でもこの山男を憎まうずものは、一人もおりなかつた。中にもとある一村では、羊飼のわらんべが行き方知れずになつた折から、夜さりそのわらんべの親の家の引き窓を推し開くものがあつたれば、驚きまどうて上を見たに、箕ほどな「れぷろぼす」の掌が、よく眠入つたわらんべをかいのせて、星空の下から悠悠と下りて來たこともおぢやると申す。何と山男にも似合ふまじい、殊勝な心映ではおぢやるまいか。

されば山賤たちも「れぷろぼす」に出遇へば、餅や酒などをふるまうて、へだてなく語らふことも度度おぢやつた。さるほどにある日のこと、樵の一むれが樹を伐らうずとて、檜山ふかくわけ入つたに、この山男がのさのさと熊笹の奥から現れたれば、もてなし心に落葉を焚いて、徳利の酒を暖めてとらせた。その滴ほど

な徳利の酒さへ、「れぷろぼす」は大きに悦んだけしきで、頭の中に巣食うた四十雀にも、樵たちの食み残いた飯をばらまいてとらせながら、大あぐらをかいて申したは、

「それがしも人間と生れたれば、あつぱれ功名手がらをも致いて、末は大名ともならずる。」と云へば、樵たちも打ち興じて、

「道理かな。おぬしほどな力量あれば、城の二つ三つも攻め落さうは、片手業にも足るまじい。」と云うた。その時「れぷろぼす」が、ちともの案ずる體で申すやうは、

「なれどここに一つ、難儀なことがおぢやる。それがしは日頃山ずまひのみ致いて居れば、どの殿の旗下に立つて、合戦を仕らうやら、とんと分別を致さうやうもござない。就いては當今天下無雙の強者と申すは、いづくの國の大将でござらうぞ。誰にもあれそれがしは、その殿の馬前に馳せ参じて、忠節をつくさうずる。」と問うたれば、

「さればその事でおぢやる。まづわれらが料簡にては、今天が下に、「あんちおきや」の帝ほど、武勇に富んだ大将もおぢやるまい。」と答へた。山男はそれを聞いて、斜ならず悦びながら、

「さらばすぐさま、打ち立たうず。」とて、小山のやうな身を起いたが、ここに不思議がおぢやつたと申すは、頭の中に巣食うた四十雀が、一時にけたたましい羽音を残いて、空に網を張つた森の梢へ、雛も餘さず飛び立つてしまつた事ぢや。それが斜に枝を延いた檜のうらに上つたれば、とんとその樹は四十雀が實のつたやうぢやとも申さうず。「れぷろぼす」はこの四十雀のふるまひを、訝しげな眼で眺めて居つたが、やがて又初一念を思ひ起いた顔色で、足もとにつどうた樵たちにねんごろな別をつげてから、再び森の熊笹を踏み開いて、元来たやうにのしのしと、山奥へ獨り往んでしまうた。

されば、「れぷろぼす」が大名にならうず願望がことは、間もなく遠近の山里にも知れ渡つたが、ほど經て又かやうな噂が、風のたよりに傳はつて参つた。と申すは國ざかひの湖で、大ぜいの漁夫たちが泥に吸はれた大船をひきなづんで居つた所に、怪しげな山男がどこからか現れて、その船の帆柱をむずとつかんだと見てあれば、苦もなく岸へひきよせて一同の驚き惘れるひまに、早くも姿をかくしたと云ふ噂ぢや。おやによつて、「れぷろぼす」を見知つたほどの山賤たちは、皆この情ぶかい山男が、愈「しりあ」の國中から退散したことを悟つたれば、西空に屏風を立てまはいた山山の峯を仰ぐ毎に、限りない名殘りが惜しまれて、自らため息がもれたと申す。まいてあの羊飼のわらんべなどは、夕日が山かげに沈まうず時は、必村はづれの一本杉にたかだかとよぢのぼつて、下につどうた羊のむれも忘れたやうに、「れぷろぼす」戀しや、山を越えてどち行つたと、かなしげな聲で呼びつづけた。さてその後「れぷろぼす」が、如何なる仕合せにめぐり合うたか、右の一條を知らうず方方はまづ次のくだりを讀ませられい。

二　俄大名のこと

さるほどに「れぷろぼす」は、難なく「あんちおきや」の城裏に参つたが、田舎の山里とはこと變り、この「あんちおきや」の都と申すは、この頃天が下に竝びない繁華の土地がらゆゑ、山男が巷へはひるや否や、見物の男女夥しうむらがつて、はては通行することも出來まじいと思はれた。されば「れぷろぼす」もとんと行からず方角を失うて、人波に腰を揉まれながら、とある大名小路の辻に立ちすくんでしまうたに、折よくそこへ來かかつたは、帝の御輦をとりまいた、侍たちの行列ぢや。見物の群集はこれに先追はれて、山男を一人殘いた儘、見る見る四方へ

遁のいてしまうた。ぢやによつて「れぷろぼす」は、大象の足にもまがはうずしたたかな手を大地について、御輦の前に頭を下げながら、
「これは「れぷろぼす」と申す山男でござるが、唯今「あんちおきや」の帝は、天下無雙の大將と承り、御奉公申さうずとて、はるばるこれまでまかり上つた。」と申し入れた。これよりさき、帝の同勢も「れぷろぼす」の姿に膽をけして、先手は既に槍薙刀の鞘をも拂はうずけしきであつたが、この殊勝な言を聞いて、異心もあるまじいものと思ひつらう、とりあへず行列をそこに止めて、供頭の口からその趣をしかじかと帝へ奏聞した。帝はこれを聞し召されて、
「かほどの大男のことなれば、一定武勇も人に超えつらう。召し抱へてとらせい。」と、仰せられたれば、格別の詮議とあつて、すぐさま同勢の内へ加へられた「れぷろぼす」の悦びは申すまでもあるまじい。ぢやによつて帝の行列の後から、三十人の力士もえ舁くまじい長櫃十棹の宰領を承つて、ほど近い御所の門まで、鼻たかだかと御供仕つた。まことこの時の「れぷろぼす」が、山ほどな長櫃を肩にかけて、行列の人馬を目の下に見下しながら、大手をふつてまかり通つた異形奇體の姿こそ、目ざましいものでおぢやつたらう。

さてこれより「れぷろぼす」は、漆紋の麻裃に朱鞘の長刀を横たへて、朝夕「あんちおきや」の帝の御所を守護する役者の身となつたが、幸ここに功名手がらを[illegible]さうず時節が到來したと申すは、ほどなく隣國の大軍がこの都を攻めとらうと、一度に押し寄せて參つたことぢや。元來この隣國の大將は、獅子王をも手打ちにすると聞えた、萬夫不當の剛の者でおぢやれば、「あんちおきや」の帝とても、なほざりの合戰はなるまじい。ぢやによつて今度の先手は、今まゐりながら「れぷろぼす」に仰せつけられ、帝は御自ら本陣に御輦をすすめて、號令を司られることとなつた。この采配を承つた「れぷろぼす」が、悦び身にあまりて、足の踏みども覺えなんだは、毛頭無理もおぢやるまい。

やがて味方も整へば、帝は「れぷろぼす」をまつさきに、陣鉦陣太鼓の音も勇しう、國ざかひの野原に繰り出された。かくと見た敵の軍勢は、元より望むところの合戰ぢやによつて、なじかは寸刻もためらはう。野原を蔽うた旗差物が、俄に波立つたと見てあれば、一度にどつと鬨をつくつて、今にも懸け合はうずけしきに見えた。この時「あんちおきや」の人數の中より、一人悠々と進み出いたは、別人でもない「れぷろぼす」ぢや。山男がこの日の出で立ちは、水牛の兜に南蠻鐵の鎧を着下いて、刃渡り七尺の大薙刀を柄みじかにおつとつたれば、さながら城の天主に魂が宿つて、大地も狹しと揺ぎ出いた如くでおぢやる。さるほどに「れぷろぼす」は兩軍の唯中に立ちはだかると、その大薙刀をさしかざいて、遙に敵勢を招きながら、雷のやうな聲で呼はつたは、
「遠からんものは音にも聞け、近くばよつて目にも見よ。これは「あんちおきや」の帝が陣中に、さるものありと知られたる、『れぷろぼす』と申す剛の者ぢや。辱くも今日お先手の大將を承り、ここに軍を出いたれば、われと思はうずるものどもは、近う寄つて勝負せよやつ。」
と申した。その武者ぶりの凄じさは、昔「ぺりしで」の豪傑に、ごりあてと聞えたが、[illegible]の大鎧に[illegible]の矛を提げて、百萬の大軍を叱咤したにも、劣るまじいと見えたれば、さすが隣國の精兵たちも、しばしがほどは鳴を靜めて、出で合はうずものもおりなかつた。ぢやによつて敵の大將も、この山男を討たいでは、かなふまじいと思ひつらう。美美しい物の具に三尺の太刀をぬきかざいて、駿馬に泡を食ませながら、

これも大音に名乗りをあげて、まつしぐらに「れぷろぼす」へ打つてかかつた。なれどもこなたはものともせいで、大薙刀をとりのべながら、二太刀三太刀あしらうたが、やがて得物をからりと捨てて、猿臂をのばいたと見るほどに、早くも敵の大将を鞍壺からひきぬいて、目もはるかな大空へ、礫の如く投げ飛ばいた。その敵の大将がきりきりと宙に舞ひながら、味方の陣中へどうと落ちて、亂離骨灰になつたのと、「あんちおきや」の同勢が鯨波の聲を轟かいて、帝の御輦を中にとりこめ、雪崩の如く攻めかかつたのとが、間に髪をも入れまじい、殆、同時の働きぢや。されば隣國の軍勢は、一たまりもなく浮き足立つて、武具馬具のたぐひをなげ捨てながら、四分五裂に落ち失せてしまうた。まことや「あんちおきや」の帝がこの日の大勝利は、味方の手にとつた兜首の數ばかりも、一年の日數よりは多かつたと申すことでおぢやる。ぢやによつて帝は御悦び斜ならず、目でたく凱歌の裡に軍をめぐらされたが、やがて「れぷろぼす」には大名の位を加へられ、その上諸臣にも一一勝利の宴を賜つて、ねんごろに勲功をねぎらはれた。その勝利の宴を賜つた夜のことと思召されい。當時國國の形儀とあつて、その夜も高名な琵琶法師が、大燭臺の火の下に節面白う絃を調じて、今昔の合戰のありさまを、手にとる如く物語つた。この時「れぷろぼす」は、かねての大願が成就したことでおぢやれば、涎も垂れようずばかり笑み傾いて、餘念もなく珍陀の酒を酌みかはいてあつた所に、ふと酔うた眼にもとまつたは、錦の幔幕を張り渡いた正面の御座におはせられる帝の異な御ふるまひぢや。何故と申せば、撿挍のうたふ物語の中に、惡魔と云ふ言がおぢやると思へば、帝はあわただしう御手をあげて、必十字の印を切らせられた。その御ふるまひが怪しからずものものしげに見えたれば、「れぷろぼす」は同席の侍に、

「何として帝は、あのやうに十字の印を切らせられるぞ。」と、率爾ながら尋ねて見た。處がその侍の答へたは、

「總じて惡魔と申すものは、天が下の人間をも掌にのせて弄ぶ、大力量のものでおぢやる。ぢやによつて帝も、惡魔の障礙を拂はうずと思召され、再三十字の印を切つて、御身を守らせ給ふのぢや。」と申した。「れぷろぼす」はこれを聞いて、迂論げに又問ひ返したは、

「なれど今「あんちおきや」の帝は、天が下に並びない大剛の大将と承つた。されば惡魔も帝の御身には、一指をだに加へまじい。」と申したが、侍は首をふつて、

「いや、いや、帝も、惡魔ほどの御威勢はおぢやるまい。」と答へた。山男はこの答を聞くや否や、大いに憤つて申したは、

「それがしが帝に隨身し奉つたは、天下無雙の強者は帝ぢやと承つた故でおぢやる。しかるにその帝さへ、惡魔には腰を曲げられるとあるなれば、それがしはこれよりまかり出でて、惡魔の臣下と相成らうず。」と喚きながら、ただちに珍陀の盃を抛つて、立ち上らうと致いたれば、一座の侍はさらいでも、「れぷろぼす」が今度の功名を妬ましう思うて居つたによつて、

「すは、山男が謀叛するわ。」と、異口同音に罵り騒いで、やにはに四方八方から搦めとらうと競ひ立つた。もとより「れぷろぼす」も日頃ならば、さうなくこの侍だちに組みとめられう筈もあるまじい。なれどもその夜は珍陀の酔に前後も不覺の體ぢやによつて、しばしがほどこそ多勢を相手に、組んづほぐれつ、揉み合うても居つたが、やがて足をふみすべらいて、思はずどうとまろんだれば、えたりやおうと侍だちは、いやが上にも折り重つて、怒り狂ふ「れぷ

ろぼす」を高手小手に括り上げた。帝もことの體たらくを始終殘らず御覽ぜられ、
「恩を讐で返すにつくいやつめ、引つ立て土の牢へ投げ入れい。」と、大いに逆鱗あつたによつて、あはれや「れぷろぼす」はその夜の内に、見るもいぶせい地の底の牢舍へ、禁獄せられる身の上となつた。さてこの「あんちおきや」の牢内に囚はれとなつた、「れぷろぼす」が、その後如何なる仕合せにめぐり合うたか、右の一條を知らず方方は、まづ次のくだりを讀ませられい。

三　魔往來のこと

さるほどに、「れぷろぼす」は、未だ繩目もゆるされいで、土の牢の闇の底へ、投げ入れられたことでおぢやれば、しばしがほどは赤子のやうに、唯おうおうと聲を上げて、泣き喚くより外はおりなかつた。その時いづくよりとも知らず、緋の袍をまとうた學匠が、忽然と姿を現いて、やさしげに問ひかけたは、
「如何に「れぷろぼす」、おぬしは何とて、かやうな所に居るぞ。」とあつたれば、山男は今更ながら、瀧のやうに涙を流いて、
「それがしは、帝に背き奉つて、惡魔に仕へようずと申したれば、かやうに牢舍致されたのでおぢやる。おう、おう、おう。」と歎き立てた。學匠はこれを聞いて、再やさしげに尋ねたは、
「さらばおぬしは、今もなほ惡魔に仕へようず望がおりやるか。」と申すに、「れぷろぼす」は頭を縱に動かいて、
「今もなほ、仕へようずる。」と答へた。學匠は大いにこの返事を悦んで、土の牢も鳴りどよむばかり、からからと笑ひ興じたが、やがて三度やさしげに申したは、
「おぬしの所望は、近頃殊勝千萬ぢやによつて、これよりただちに牢舍を赦いてとらさうずる。」とあつて、身にまとうた緋の袍を、「れぷろぼす」が上に蔽うたれば、不思議や總身の縛めは、悉くはらりと切れてしまうた。山男の驚きは申すまでもあるまじい。されば恐る恐る身を起いて、學匠の顏を見上げながら、慇懃に禮を爲いて申したは、
「それがしが繩目を赦いてたまはつた御恩は、生生世世忘却つかまつるまじい。なれどもこの土の牢をば、何として忍び出で申さうずる。」と云うた。學匠はこの時又えせ笑ひをして、
「かうすべいに、なじかは難からう。」と申しも果ず、やにはに緋の袍の袖をひらいて、「れぷろぼす」を小脇に抱いたれば、見る見る足下が暗うなつて、もの狂ほしい一陣の風が吹き起つたと思ふほどに、二人は何時か宙を踏んで、牢舍を後に飄飄と、「あんちおきや」の都の夜空へ、火花を散いて舞ひあがつた。まことやその時は學匠の姿も、折から沈まうず月を背負うて、さながら怪しげな大蝙蝠が、黑雲の翼を一文字に飛行する如く見えたと申す。
されば「れぷろぼす」は愈、膽を消いて、學匠もろとも中空を射る矢のやうに翔りながら、戰く聲で尋ねたは、
「そもそもごへんは、何人でおぢやらうぞ。ごへんほどな大神通の博士は、世にも又とあるまじいと覺ゆる。」と申したに、學匠は忽ち底氣味惡いほくそ笑を洩しながら、わざとさりげない聲で答へたは、
「何を隱さう。われらは、天が下の人間を、掌にのせて弄ぶ、大力量の靈の者ぢや。」とあつたによつて、「れぷろぼす」は始めて學匠の本性が、惡魔ぢやと申すことに合點が參つた。さるほどに惡魔はこの問答の間さへ、妖靈星の流れる如く、ひた走りに宙を走つたれば、「あんちおきや」の都の燈火も、今ははるかな闇の底に沈みはてて、やがて足もとに浮んで參つたは、音に聞く「えじつと」の絕漠でおぢやらう。幾百

里とも知れまじい砂の原が、有明の月の光の中に、夜目にも白白と見え渡つた。この時學匠は爪長な指をのべて、下界をゆびさしながら申したは、

「かしこの苫家には、さる有驗の隱者が住居致いて居ると聞いた。まづあの屋根の上に下らうずる。」とあつて、「れぷろぼす」を小脇に抱いた儘、とある沙山陰のあばら家の棟へ、ひらひらと空から舞ひ下つた。

こなたはそのあばら家に行ひすまいて居つた隱者の翁ぢや。折から夜のふけたのも知らず、油火のかすかな光の下で、御經を讀誦し奉つて居つたが、忽ちえならぬ香風が吹き渡つて、雪にも紛はうず櫻の花が紛紛と飜り出いたと思へば、いづくよりともなく一人の傾城が、鼈甲の櫛笄を圓光の如くさしないて、地獄繪を縫うた襠の裾を長長とひきはえながら、天女のやうな媚を凝して、夢かとばかり眼の前へ現れた。翁はさながら、えじつと」の沙漠が、片時の内に室神崎の廓に變つたとも思ひつらう。あまりの不思議さに我を忘れて、しばしがほどは惚惚と傾城の姿を見守つて居つたに、相手はやがて花吹雪を身に浴びながら、につこと微笑んで申したは、

「これは「あんちおきや」の都に隱れもない遊びでおぢやる。近ごろ御僧のつれづれを慰めまゐらせうと存じたれば、はるばるこれまでまかり下つた。」とあつた。その聲ざまの美しさは、極樂に棲むとやら承つた迦陵頻伽にも劣るまじい。さればさすがに有驗の隱者もうかとその手に乘らうとしたが、思へばこの眞夜中に幾百里とも知らぬ「あんちおきや」の都から、傾城などの來よう筈もおぢやらぬ。

さては又しても惡魔めの惡巧みであらうずと心づいたによつて、ひたと御經に眼を曝しながら、專念に陀羅尼を誦し奉つて居つたに、傾城はかまへてこの隱者の翁を落さうと心にきはめつらう。蘭麝の薰を漂はせた綺羅の袂を弄びながら、嫋嫋としたさまで、さも恨めしげに歎いたは、

「如何に遊びの身とは申せ、千里の山河も厭はいで、この沙漠までまかり下つたを、さりとは曲もない御方かな。」と申した。その姿の妙にも美しい事は、散りしく櫻の花の色さへ消えようずると思はれたが、隱者の翁は遍身に汗を流いて、降魔の呪文を讀みかけ讀みかけ、かつふつその惡魔の申す事に耳を貸さうず氣色すらおりない。されば傾城もかくてはなるまじいと氣を苛つたか、つと地獄繪の裳を飜して、斜に隱者の膝へとすがつたと思へば、

「何としてさほどつれないぞ。」と、よよとばかりに泣い口說いた。と見るや否や隱者の翁は、蝎に刺されたやうに躍り上つたが、早くも肌身につけた十字架をかざいて、雷霆の如く罵つたは、

「業畜、御主「ぜす・きりしと」の下部に向つて無禮あるまじいぞ。」と申しも果てず、ちやうと傾城の面を打つた。打たれて傾城は落花の中に、なよなよと伏しまろんだが、忽ちその姿は見えずなつて、唯一むらの黑雲が湧き起つたと思ふほどに、怪しげな火花の雨が礫の如く亂れ飛んで、

「あら、痛や。又しても十字架に打たれたわ。」と唸く聲が、次第に家の棟にのぼつて消えた。もとより隱者はかうあらうと心に期して居つたによつて、この間も祕密の眞言を絶えず聲高に誦し奉つたに、見る見る黑雲も薄れれば、櫻の花も降らずなつて、あばら家の中には又もとの如く、油火ばかりが殘つたと申す。

なれど隱者は惡魔の障礙が猶もあるべいと思うたれば、夜もすがら御經の力にすがり奉つて、目蓋も合はさいで明いたに、やがてしら

しら明と覺しい頃、誰やら柴の扉をおとづれるものがあつたによつて、十字架を片手に立出でて見たれば、これは又何ぞや、藁家の前に蹲つて、恭しげに時儀を致いて居つたは、天から降つたか、地から湧いたか、小山のやうな大男ぢや。それが早くも朱を流いた空を黒黒と肩にかぎつて、隱者の前に頭を下げると、恐る恐る申したは、

「それがしは『れぷろぼす』と申す『しりあ』の國の山男でおぢやる。ちかごろふつと惡魔の下部と相成つて、はるばるこの『えじつと』の沙漠まで參つたれど、惡魔も御主『ぜす・きりしと』とやらんの御威光には叶ひ難く、それがし一人を殘し置いて、いづくともなく逐電致いた。自體それがしは今天が下に竝びない大剛の者を尋ね出いて、その身内に仕へようずる志がおぢやるによつて、何とぞこれより後は不束ながら、御主『ぜす・きりしと』の下部の數へ御加へ下されい。」と云うた。隱者の翁はこれを聞くと、あばら家の門に佇みながら、俄に眉をひそめて答へたは、

「はてさて、せんない仕儀になられたものかな。總じて惡魔の下部となつたものは、枯木に薔薇の花が咲かうずるまで、御主『ぜす・きりしと』に知遇し奉る時はござない。」とあつたに、「れぷろぼす」は又ねんごろに頭を下げて、

「たとへ幾千歳を經ようずるとも、それがしは初一念を貫かうずと決定致いた。さればまづ御主『ぜす・きりしと』の御意に叶ふべい仕業の段段を教へられい。」と申した。所で隱者の翁と山男との間には、かやうな問答がしかつめらしうとり交されたと申す事でおぢやる。

「ごへんは御經の文句を心得られたか。」

「生憎一字半句の心得もござない。」

「ならば斷食は出來申さうず。」

「如何なこと、それがしは聞えた大飯喰ひでおぢやる。中中斷食などはなるまじい。」

「難儀かな。夜もすがら眠らいで居る事は如何あらう。」

「如何なこと、それがしは聞えた大寢坊でおぢやる。中中眠らいでは居られまじい。」

それにはさすがの隱者の翁も、ほとほと言のつぎ穗さへおぢやらなんだが、やがて掌をはたと打つて、したり顏に申したは、

「ここを南に去ること一里がほどに、流沙河と申す大河がおぢやる。この河は水嵩も多く、流れも矢を射る如くぢやによつて、日頃から人馬の渡りに難儀致すとか承つた。なれどごへんほどの大男には、容易う徒渉りさへなろうずる。さればごへんはこれよりこの河の渡し守となつて、往來の諸人を渡させられい。おのれ人に篤ければ、天主も亦おのれに篤からう道理ぢや。」

とあつたに、大男は大いに勇み立つて、

「如何にも、その流沙河とやらの渡し守になり申さうずる。」と云うた。ぢやによつて隱者の翁も、「れぷろぼす」が殊勝な志をことの外悅んで、

「然らば唯今、御水を授け申さうずる。」とあつて、おのれは水瓶をかい抱きながら、もそもそと藁家の棟へ這ひ上つて、漸く山男の頭の上へその水瓶の水を注ぎ下いた。ここに不思議がおぢやつたと申すは、得度の御儀式が終りも果てず、折からさし上つた日輪の爛爛と輝いた眞唯中から、何やら雲氣がたなびいたかと思へば、忽ちそれが數限りもない四十雀の群となつて、空に聳えた「れぷろぼす」が叢ほどな頭の上へ、ばらばらと舞ひ下つたことぢや。この不思議を見た隱者の翁は、思はず、御水を授けようず方角さへも忘れはてて、うつとりと朝日を仰いで居つたが、やがて恭しく天上を伏し拜むと、家の棟から「れぷろぼす」をさし招いて、

「勿體なくも御水を頂かれた上からは、向後「れ

ぷろぼす」を改めて、「きりしとほろ」と名のらせられい。」思ふに天主もごへんの信心を深う嘉させ給ふと見えたれば、萬一勤行に懈怠あるまじいに於ては、必定遠からず御主「ぜす・きりしと」の御尊體をも拜み奉らうずる。と云うた。さて「きりしとほろ」と名を改めた「れぷろぼす」が、その後如何なる仕合せにめぐり合つたか、右の一條を知らず方方はまづ次のくだりを讀ませられい。

四　往生のこと

さるほどに「きりしとほろ」は隱者の翁に別れを告げて、流沙河のほとりに參つたれば、まことに濁流滾滾として、岸べの青蘆を戰がせながら、百里の波を湛すありさまは、容易く舟さへ通ふまじい。なれど山男は身の丈凡そ三丈あまりもおぢやるほどに、河の眞唯中を越す時さへ、水は僅に臍のあたりを渦卷きながら流れるばかりぢや。されば「きりしとほろ」はこの河べに、ささやかながら庵を結んで、時折渡りに難むと見えた旅人の影が眼に觸れれば、すぐさまそのほとりへ歩み寄つて、「これはこの流沙河の渡し守でおぢやる。」と申し入れた。もとより並の旅人は、山男の恐しげな姿を見ると、如何なる大魔波旬かと始は膽も消いて逃げのいたが、やがてその心根のやさしさもとくと合點行つて、「然らば御世話に相成らうず。」と、おづおづ「きりしとほろ」の背にのぼるが常ぢや。處で「きりしとほろ」は旅人を肩へゆすり上げると、毎時も汀の柳を根こぎにしたしたたかな杖をつき立てながら、逆卷く流れをことともせず、ざんざざんざと水を分けて、難なく向うの岸へ渡いた。しかもあの四十雀は、その間さへ何羽となく、さながら楊花の飛びちるやうに、絶えず「きりしとほろ」の頭をめぐつて、嬉しげに囀り交いたと申す。まことや「きりしとほろ」が信心の辱さには、無心の小鳥も隨喜の思に堪へなんだのでおぢやらうず。

かやう致いて「きりしとほろ」は、雨風も厭はず三年が間、渡し守の役目を勤めて居つたが、渡りを尋ねる旅人の數は多うても、御主「ぜす・きりしと」らしい御姿には、絶えて一度も知遇せなんだ。が、その三年目の或夜のこと、折から凄じい嵐があつて、神鳴りさへおどろと鳴り渡つたに、山男は四十雀と庵を守つて、すぎこし方のことどもを夢のやうに思ひめぐらいて居つたれば、忽ち車軸を流す雨を壓して、いたいけな聲が響いたは、

「如何に渡し守はおりやるまいか。その河一つ渡して給はれい。」と、聞え渡つた。されば「きりしとほろ」は身を起いて、外の闇夜へ搖ぎ出いたに、如何なこと、河のほとりには、年の頃もまだ十には足るまじい、みめ清らかな白衣のわらんべが、空をつんざいて飛ぶ稻妻の中に、頭を低れて唯ひとり、佇んで居つたではおぢやるまいか。山男は稀有の思をないて、千引の巖にも劣るまじい大の體をかがめながら、慰めるやうに問ひ尋ねたは、

「おぬしは何としてかやうな夜更けにひとり歩くぞ。」と申したに、わらんべは悲しげな瞳をあげて、

「われらが父のもとへ、歸らうとて。」と、もの思はしげな聲で返答した。もとより「きりしとほろ」はこの答を聞いても、一向不審は晴れなんだが、何やらその渡りを急ぐ樣子があはれにやさしく覺えたによつて、

「然らば念無う渡さうずる。」と、雙手にわらんべをかい抱いて、日頃の如く肩へのせると、例の太杖をちやうとついて、岸べの青蘆を押し分けながら、嵐に狂ふ夜河の中へ、膽太くもざんぶと身を浸いた。が、風は黒雲を卷き落いて、息もつかすまじいと吹きどよもす。雨も川面を

射白まいて、空にも溢らうずばかり降り注いだ。時折川をかい渡る稲妻の光に見てあれば、浪は一面に湧き立ち返つて、宙に舞上る水煙りも、さながら無數の天使たちが雪の翼をはためかいて、飛びしきるかとも思ふばかりぢや。さればさすがのきりしとほろも、今宵はほとほと渡りなやんで、太杖にしかとすがりながら、礎の朽ちた塔のやうに、何度もゆらゆらと立ちすくんだが、雨風よりも更に難儀だつたは、怪からず肩のわらんべが次第に重うなつたことでおぢやる。始はそれもさばかりに、え堪へまじいとは覺えなんだが、やがて河の眞唯中へさしかかつたと思ふほどに、白衣のわらんべが重みは愈増いて、今は恰も大磐石を負ひないてゐるかと疑はれた。迚で遂にはきりしとほろも、あまりの重さに壓し伏されて、所詮はこの流沙河に命を殞すべいと覺悟したが、ふと耳にはひつて來たは、例の聞き慣れた四十雀の囀ぢや。はてこの闇夜に何として、小鳥が飛ばうぞと訝りながら、頭を擡げて空を見たれば、不思議やわらんべの面をめぐつて、三日月ほどなる金光が燦爛と圓く輝いたに、四十雀はみな嵐をものともせず、その金光のほとりに近く、紛紛と躍り狂つて居つた。これを見た山男は、小鳥さへかくは雄雄しいに、おのれは人間と生れながら、なじかは三年の勤行を一夜に捨つべいと思ひつらう。あの葡萄蔓にも紛はうず髪をさつさつと空に吹き靡いて、寄せては返す荒浪に乳のあたりまで洗はせながら、太杖も折れよといき閉めて、必死に目ざす岸へと急いだ。

それが凡そ一時あまり、四苦八苦の内に續いたでおぢやらう。「きりしとほろ」は漸く向うの岸へ、戰ひ疲れた獅子王のけしきで、喘ぎ喘ぎよろめき上ると、柳の太杖を砂にさいて、肩のわらんべを抱き下しながら、吐息をついて申したは、

「はてさて、おぬしと云ふわらんべの重さは、海山量り知れまじいぞ。」とあつたに、わらんべはにつこと微笑んで、頭上の金光を嵐の中に一きは燦然ときらめかいながら、山男の顔を仰ぎ見て、さも懐しげに答へたは、

「さもあらうず。おぬしは今宵と云ふ今宵こそ、世界の苦しみを身に荷うた「えす・きりしと」を負ひないたのぢや。」と、鈴を振るやうな聲で申した。……

〰〰〰〰

その夜この方流沙河のほとりには、あの渡し守の山男がむくつけい姿を見せずなつた。唯後に殘つたは、向うの岸の砂にさいた、したたかな柳の太杖で、これには枯れ枯れな幹のまはりに、不思議や麗しい紅の薔薇の花が、薫しく咲き誇つて居つたと申す。されば馬太の御經にも記いた如く「心の貧しいものは仕合せぢや。一定天國はその人のものとならうずる」

（大正八年三月作）

懺悔

古人は神の前に懺悔した。今人は社會の前に懺悔してゐる。すると阿呆や惡黨を除けば、何びとも何かに懺悔せずには娑婆苦に堪へることは出來ないのかも知れない。

又

しかしどちらの懺悔にしても、どの位信用出來るかと云ふことはおのづから又別問題である。

（侏儒の言葉より）

龍

一

宇治大納言隆國「やれ、やれ、晝寢の夢が覺めて見れば、今日は又一段と暑いやうぢや。あの松が枝の藤の花さへ、ゆさりとさせる程の風も吹かぬ。何時もは涼しう聞える泉の音も、どうやら油蟬の聲にまぎれて、却つて暑苦しうなつてしまうた。どれ、又童部たちに扇いででも貰はうか。

「何、往來のものどもが集つた？ ではそちらへ參ると致さう。童部たちもその大團扇を忘れずに後からかついで參れ。

「やあ、皆のもの、予が隆國ぢや。大肌ぬぎの無禮は赦してくれい。

「さて今日はその方どもにちと頼みたい事があつて、わざと、この宇治の亭へ足を止めて貰うたのぢや。と申すはこの頃ふとここへ參つて、予も人並に雙紙を一つ綴らうと思ひ立つたが、つらつら獨り考へて見れば、生憎予はこれと云うて、筆にする程の話も知らぬ。さりながらあだ面倒な趣向などを凝らすのも、予のやうな怠けものには、何より億劫千萬ぢや。就いては今日から往來のその方どもに、今は昔の物語を一つづつ聞かせて貰うて、それを雙紙に編みなさうと思ふ。さすれば內裡の內外ばかりうろついて居る予などには、思ひもよらぬ逸事奇聞が、舟にも載せ車にも積む程、四方から集つて參るに相違あるまい。何と、皆のもの、迷惑ながらこの所望を叶へてくれる譯には行くまいか。

「何、叶へてくれる？ それは重疊。では早速一同の話を順順にこれで聞くと致さう。

「こりや童部たち、一座へ風が通ふやうに、その大團扇で扇いでくれい。それで少しは涼しくもならうと申すものぢや。鑄物師も陶器造も遠慮は入らぬ。二人ともずつとこの机のほとりへ參れ。鮓賣の女も日が近くば、桶はその緣の隅へ置いたが好いぞ。わ法師も金鼓を外したらどうぢや。そこな侍も山伏も簟を敷いたらうな。

「よいか、支度が整うたら、まづ第一に年かさな陶器造の翁から、何なりとも話してくれい。」

二

翁「これは、これは、御丁寧な御挨拶で、下賤な私どもの申し上げます話を、一一雙紙に書いてやらうと仰有います――そればかりでも、私の身にとりまして、どの位恐多いかわかりません。が、御辭退申しましては却つて御意に逆ふ道理でございますから、御免を蒙つて一通り、たわいもない昔話を申し上げると致しませう。どうか御退屈でも暫くの間、御耳を御貸し下さいまし。

「私どものまだ年若な時分、奈良に藏人得業惠印と申しまして、途方もなく鼻の大きい法師が一人居りました。しかもその鼻の先が、まるで蜂にでも刺されたかと思ふ位、年が年中恐しくまつ赤なのでございます。そこで奈良の町のものが、これに諢名をつけまして、鼻藏――と申しますのは、元來大鼻の藏人得業と呼ばれたのでございますが、それではちと長すぎると申しますので、やがて誰云ふとなく鼻藏人と申し囃しました。が、暫く致しますと、それでもまだ長いと申しますので、さてこそ鼻藏鼻藏と、謠はれるやうになつたのでございます。現に私

も一兩度、その頃奈良の興福寺の寺内で見かけた事がございますが、いかさま鼻藏とでも譏られさうな、世にも見事な赤鼻の天狗鼻でございました。その鼻藏の、鼻藏人の、大鼻の藏人得業の惠印法師が、或夜の事、弟子もつれずに唯一人そつと猿澤の池のほとりへ參りまして、あの采女柳の前の堤へ、「三月三日この池より龍昇らんずるなり」と筆太に書いた建札を、高高と一本打ちました。けれども惠印は實の處、猿澤の池に龍などがほんたうに住んでゐたかどうか、心得てゐた譯ではございません。ましてその龍が三月三日に天上すると申す事は、全く口から出まかせの法螺なのでございます。いや、どちらかと申しましたら、天上しないと申す方がまだ確だつたでございませう。ではどうしてそんな入らざる眞似を致したかと申しますと、惠印は日頃から奈良の僧俗が何かにつけて自分の鼻を笑ひものにするのが不平なので、今度こそこの鼻藏人がうまく一番かついだ擧句、さんざん笑ひ返してやらうと、かう云ふ魂膽で惡戲にとりかかつたのでございます。御前などが御聞きになりましたら、嘸笑止な事と思召しませうが、何分今は昔の御話で、その頃はかやうな惡戲を致しますものが、兎角どこにもあり勝ちでございました。

「さてあくる日、第一にこの建札を見つけましたのは、毎朝興福寺の如來樣を拜みに參ります婆さんで、これが珠數をかけた手に竹杖をせつせとつき立てながら、まだ靄のかかつてゐる池のほとりへ來かかりますと、昨日までなかつた建札が、采女柳の下に立つて居ります。はて法會の建札にしては妙な所に立つてゐるなと不審には思つたのでございますが、何分文字が讀めませんので、その儘通りすぎようと致しました時、折よく向うから偏衫を著た法師が一人、通りかかつたものでございますから、頼んで讀んで貰ひますと、何しろ『三月三日この池より龍昇らんずるなり』で、――誰でもこれには驚いたでございませう。其婆さんも呆氣にとられて、曲つた腰をのしながら、『此池に龍などが居りませうかいな。』と、とぼんと法師の顏を見上げますと、法師は却つて落ち著き拂つて、『昔、唐の或學者が眉の上に瘤が出來て、痒うてたまらなんだ事があるが、或日一天俄かに掻き曇つて、雷雨車軸の如く降り注いだと見てあれば、忽ちその瘤がふつつと裂けて、中から一匹の黑龍が雲を捲いて一文字に昇天したと云ふ話もござる。瘤の中にさへ龍が居たなら、ましてこれ程の池の底には、何十匹となく蛟龍毒蛇が蟠つて居ようも知れぬ道理ぢや。』と、說法したさうでございます。何しろ出家に妄語はないと日頃から思ひこんだ婆さんの事でございますから、これを聞いて肝を消しますまい事か、『成程さう承りますれば、どうやらあの邊の水の色が怪しいやうに見えますわいな。』と、まだ三月三日にもなりませんのに、法師を獨り後に殘して、喘ぎ喘ぎ念佛を申しながら、竹杖をつく間もまだるこしさうに急いで逃げてしまひました。後で人目がございませんでしたら、腹を抱へたかつたのは此法師で――これはさうでございませう。實はあの發頭人の得業惠印、諢名は鼻藏が、もう昨夜建てた高札にひつかかつた鳥がありさうだ位な、甚怪しからん料簡で、樣子を見ながら、池のほとりを、歩いて居つたのでございますから。が、婆さんの行つた後には、もう早立ちの旅人と見えて、伴の下人に荷を負はせた蟲の垂衣の女が一人、市女笠の下から建札を讀んで居るのでございます。そこで惠印は大事をとつて、一所懸命笑を嚙み殺しながら、自分の建札の前に立つて一應讀むやうなふりをすると、あの大鼻の赤鼻をさも不思議さうに鳴らして見せて、それからのそのそ興福寺の方へ引返して

參りました。

「すると興福寺の南大門の前で、思ひがけなく顔を合せましたのは、同じ坊に住んで居つた恵門と申す法師でございます。それが恵印に出合ひますと、ふだんから片意地なげじげじ眉をちよいとひそめて、「御坊には珍しい早起きでござるな。これは天氣が變るかも知れませぬぞ」と申しますから、こちらは得たり賢しと鼻を一ぱいにやつきながら、「如何にも天氣位は變るかも知れませぬて。聞けばあの猿澤の池から三月三日には、龍が天上するとか申すではござらぬか」と、したり顔に答へました。これを聞いた恵門は疑はしさうに、じろりと恵印の顔を睨めましたが、すぐに喉を鳴らしながら、せせら笑つて、「御坊は善い夢を見られたな。いやさ、龍の天上するなどと申す夢は吉兆ぢやとか聞いた事がござる」と、鉢の開いた頭を聳かせた儘、行きすぎようと致しましたが恵印がまるで獨り言のやうに、「はてさて、緣無き衆生は度し難しぢや」と、呟いた聲でも聞えたのでございませう。麻緒の足駄の齒を扭つて、憎憎しげにふり返りますと、まるで法論でもしかけさうな勢で、「それとも何か龍が天上すると申す、しかとした證據がござるかな」と問ひ詰るのでございます。そこで恵印はわざと悠悠と、もう朝日の光がさし始めた池の方を指さしまして、「愚僧の申す事が疑はしければ、あの釆女柳の前にある建札を讀まれたがよろしうござらう」と、見下すやうに答へました。これにはさすがに片意地な恵門も、少しは鋒先を挫がれたのか、眩しさうな瞬きを一つすると、「はあ、そのやうな建札が建ちましたか」と氣のない聲で云ひ捨てながら、又てくてくと歩き出しましたが、今度は鉢の開いた頭を傾けて、何やら考へて行くらしいのでございます。その後姿を見送つた鼻藏人の可笑しさは、大抵御推察が參りませう。恵印はどうやら赤鼻の奥がむづ痒いやうな心もちがして、しかつめらしく南大門の石段を上つて行く中にも、思はず吹き出さずには居られませんでした。

「その朝でさへ『三月三日この池より龍昇らんずるなり』の建札は、これ程の利き目がございましたから、まして一日二日と經つて見ますと、奈良の町中どこへ行つても、この猿澤の池の龍の噂が出ない所はございません。元より中には『あの建札も誰かの惡戲であらう』など申すものもございましたが、折から京では神泉苑の龍が天上致したなどと申す評判もございましたので、さう云ふものさへ内心では半信半疑と申しませうか、事によるとそんな大變があるかも知れない位な氣にはなつて居つたのでございます。するとここに又思ひもよらない不思議が起つたと申しますのは、春日の御社に仕へて居ります或禰宜の一人娘で、とつて九つになりますのが、その後十日と經たない中に或夜母の膝を枕にしてうとうと致して居りますと、天から一匹の黑龍が雲のやうに降つて來て、『わしは愈三月三日に天上する事になつたが、決してお前たち町のものに迷惑はかけない心算だから、どうか安心してゐてくれい』と人語を放つて申しました。そこで娘は目がさめるとすぐにこれこれかうかうと母親に話しましたので、さては猿澤の池の龍が夢枕に立つたのだと、忽ち又それが町中の大評判になつたではございませんか。かうなると話にも尾鰭がついて、やれあすこの稚兒にも龍が憑いて歌を詠んだの、やれここの巫女にも龍が現れて託宣をしたのと、まるでその猿澤の池の龍が今にもあの水の上へ、首でも出しさうな騷ぎでございます。いや、首までは出しも致しますまいが、その中に龍の正體を、眼のあたりにしかと見とどけたと申す男さへ出て參りました。これは毎朝川魚を市へ賣

りに出ます老爺で、その日もまだうす暗いのに猿澤の池へかかりますと、あの采女柳の枝垂れたあたり、建札のある堤の下に漫漫と湛へた天明前の水が、そこだけほんのりとうす明く見えたさうでございます。何分にも龍の噂がやかましい時分でございますから、「さては龍神の御出ましか」と、嬉しいともつかず、恐しいともつかず、唯ぶるぶる胴震ひをしながら、川魚の荷をそこへ置くなり、ぬき足にそつと忍び寄ると、采女柳につかまつて、透かすやうに、池を覗ひました。するとそのほの明い水の底に、黒金の鎖を卷いたやうな何とも知れない怪しい物が、ぢつと蟠つて居りましたが、忽ち人音に驚いたのか、ずるりとそのとぐろをほどきますと、見る見る池の面に水脈が立つて、怪しい物の姿はどことも知れず消え失せてしまつたさうでございます。が、これを見ました老爺は、やがて總身に汗をかいて、荷を下した所へ來て見ますと、何時の間にか鯉鮒合せて二十匹もゐた商賣物がなくなつてゐたさうでございますから、「大方劫を經た獺にでも欺されたのであらう」など嗤ふものもございました。けれども中には、『龍王が鎮護遊ばすあの池に獺の棲まう筈もないから、それはきつと龍王が魚鱗の命を御憫みになつて、御自分のいらつしやる池の中へ御召し寄せなすつたのに相違ない』と申すものも、思ひの外多かつたやうでございます。

「こちらは鼻藏の惠印法師で、「三月三日この池より龍昇らんずるなり」の建札が大評判になるのにつけ、内内あの大鼻をうごめかしては、にやにや笑つて居りましたが、やがて三月三日も四五日の中に迫つて參りますと、驚いた事には攝津の國櫻井にゐる叔母の尼が、是非その龍の昇天を見物したいと申すので、遠い路をはるばると上つて參つたではございませんか。これには惠印も當惑して、嚇すやら、賺すやら、いろいろ手を盡して櫻井へ歸つて貰はうと致しましたが、叔母は『わしもこの年ぢやで、龍王の御姿をたつた一目拜みさへすれば、もう往生しても本望ぢや』と、強情にも腰を据ゑて、甥の申す事などには耳を假さうとも致しません。と申してあの建札は自分が惡戲に建てたのだとも、今更白狀する譯には參りませんから、惠印もとうとう我を折つて、三月三日まではその叔母の世話を引き受けたばかりでなく、當日は一しよに龍神の天上する所を見に行くと云ふ約束までもさせられました。さてからなつて考へますと、叔母の尼さへ龍の事を聞き傳へたのでございますから、大和の國内は申すまでもなく、攝津の國、和泉の國、河内の國を始めとして、事によると播磨の國、山城の國、近江の國、丹波の國のあたりまでも、もう此噂が一圓に廣まつてゐるのでございませう。つまり奈良の老若をかつがうと思つてした惡戲が、思ひもよらず四方の國國で何萬人とも知れない人間を瞞す事になつてしまつたのでございます。惠印はさう思ひますと、可笑しいよりは何となく空恐しい氣が先に立つて、朝夕叔母の尼の案内がてら、つれ立つて奈良の寺寺を見物して歩いて居ります間も、とんと檢非違使の眼を偸んで、身を隱してゐる罪人のやうな後めたい思ひがして居りました。が、時時往來のものの話などで、あの建札へこの頃は香花が手向けてあると云ふ噂を聞く事でもございますと、やはり氣味の惡い一方では、一かど大手柄でも立てたやうな嬉しい氣が致すのでございます。

「其内に追ひ追ひ日數が經つて、とうとう龍の天上する三月三日になつてしまひました。そこで惠印は約束の手前、今更外に致し方もございませんから、澁澁叔母の尼の伴をして、猿澤の池が一目に見えるあの興福寺の南大門の石段の上へ參りました。丁度その日は空もほがら

かに晴れ渡つて、門の風鐸を鳴らす程の風さへ吹く氣色はございませんでしたが、それでも今日と云ふ今日を待ち兼ねてゐた見物は、奈良の町は申すに及ばず、河内、和泉、攝津、播磨、山城、近江、丹波の國々からも押し寄せて參つたのでございませう。石段の上に立つて眺めますと、見渡す限り西も東も一面の人の海で、それが又末はほのぼのと霞をかけた二條の大路の、はてのはてまで、ありとあらゆる烏帽子の波をざわめかせて居るのでございます。と思ふとそのところどころには、青絲毛だの、赤絲毛だの、或は又栴檀庇だのの數寄を凝らした牛車が、のつしりとあたりの人波を抑へて、屋形に打つた金銀の金具を折からうららかな春の日ざしに、眩くきらめかせて居りました。その外、日傘をかざすもの、平張を空に張り渡すもの、或は又仰々しく棧敷を路に連ねるもの――まるで目の下の池のまはりは時ならない加茂の祭でも渡りさうな景色でございます。これを見た惠印法師はまさかあの建札を立てたばかりで、これ程の大騷ぎが始まらうとは夢にも思はずに居りましたから、さも惘れ返つたやうに叔母の尼の方をふり向きますと、「いやはや、飛んでもない人出でございるな。」と情けない聲で申したきり、さすがに今日は大鼻を鳴らすだけの元氣も出ないと見えて、その儘南大門の柱の根がたへ意氣地なく蹲つてしまひました。

―けれども元より叔母の尼には、惠印のそんな腹の底が呑みこめる譯もございませんから、こちらは頭巾もずり落ちる程一所懸命首を延ばして、あちらこちらを見渡しながら、成程龍神の御棲まひになる池の景色は格別だの、これ程の人出がした上からは、きつと龍神も御姿を御現はしなさるだらうのと、何かと惠印をつかまへては話しかけるのでございます。そこでこちらも柱の根がたに坐つてばかりは居られませんので、嫌々腰を擡げて見ますと、ここにも揉烏帽子や侍烏帽子が人山を築いて居りましたが、その中に交つてあの惠門法師も、不相變鉢の開いた頭を一きは高く聳やかせながら、鵜の目もふらず池の方を眺めて居るではございませんか。惠印は急に今までの情けない氣もちも忘れてしまつて、唯この男さへかついでやつたと云ふ可笑しさに獨り擽られながら、『御坊』と一つ聲をかけて、其から、『御坊も龍の天上を御覽かな。』とからかふやうに申しましたが、惠門は横柄にふりかへると、思ひの外眞面目な顏で、『さやうでござる。御同様大分待ち遠い思ひをしますな』と、例のげじげじ眉も動かさずに答へるのでございます。これはちと薬が利きすぎた――と思ふと、浮いた聲も自然に出なくなつてしまひましたから、惠印は又元の通り世にも心細さうな顏をして、ぼんやり人の海の向うにある猿澤の池を見下しました。が、池はもう温んだらしい底光りのする水の面に、堤をめぐつた櫻や柳を鮮にぢつと映した儘、何時になつても龍などを天上させる氣色はございません。殊にそのまはり何里四方が、隙き間もなく見物の人數で埋まつてでもゐるせゐか、今日は池の廣さが日頃より一層狹く見えるやうで、第一ここに龍が居ると云ふそれが抑も途方もない譃のやうな氣が致すのでございます。

「が、一時一時と時の移つて行くのも知らないやうに、見物は皆固唾を飲んで、氣永に龍の天上を待ちかまへて居るのでございませう。門の下の人の海は益廣がつて行くばかりで、暫くする内には牛車の數も、處によつては車の軸が互に押し合ひへし合ふ程、多くなつて參りました。それを見た惠印の情けなさは、大概前からの行きがかりでも、御推察が參るでございませう。が、ここに妙な事が起つたと申しますのは、どう云ふものか、惠印の心にもほんたらに龍が

昇りさうな――それも始はどちらかと申すと、昇らない事もなささうな氣がし出した事でございます。惠印は元よりあの建札を打つた當人でございますから、そんな莫迦げた氣のすることはありさうもないものでございますが、目の下で寄せつ返しつしてゐる烏帽子の波を見て居りますと、どうもそんな大變が起りさうな氣が致してなりません。これは見物の人數の心もちが何時となく鼻藏にも乘り移つたのでございませうか。それともあの建札を建てたばかりに、こんな騷ぎが始まつたと思ふと、何となく氣が咎めるので、知らず識らずほんたうに龍が昇つてくれれば好いと念じ出したのでございませうか。その邊の事情は兎も角も、あの建札の文句を書いたものは自分だと重重承知しながら、それでも惠印は次第次第に情けない氣もちが薄くなつて、自分も叔母の尼と同じやうに飽かず池の面を眺め始めました。又成程さう云ふ氣が起りでも致しませんでしたら、昇る氣づかひのない龍を待つて、如何に不承不承とは申すものの、南大門の下に小一日も立つて居る譯には參りますまい。

「けれども猿澤の池は前の通り、漣も立てずに春の日ざしを照り返して居るばかりでございます。空もやはりほがらかに晴れ渡つて、拳程の雲の影さへ漂つて居る樣子はございません。が、見物は不相變、日傘の陰にも、平張の下にも、或は又棧敷の欄干の後にも、簇簇と重なり重なつて、朝から午へ、午から夕へ日影が移るのも忘れたやうに、龍王が姿を現すのを今か今かと待つて居りました。

「すると惠印がそこへ來てから、やがて半日もすぎた時分、まるで線香の煙のやうな一すぢの雲が中空にたなびいたと思ひますと、見る間にそれが大きくなつて、今までのどかに晴れてゐた空が、俄にうす暗く變りました。その途端に一陣の風がさつと、猿澤の池に落ちて、鏡のやうに見えた水の面に無數の波を描きましたが、さすがに覺悟はしてゐながら慌てまどつた見物が、あれよあれよと申す間もなく、天を傾けてまつ白にどつと雨が降り出したではございませんか。のみならず神鳴も急に凄じく鳴りはためいて、絕えず稻妻が梭のやうに飛びちがふのでございます。それが一度鍵の手に群る雲を引つ裂いて、餘る勢に池の水を柱の如く捲き起したやうでございましたが、惠印の眼にはその刹那、その水煙と雲との間に、金色の爪を閃かせて一文字に空へ昇つて行く十丈あまりの黑龍が、朦朧として映りました。が、それは瞬く暇で、後は唯風雨の中に、池をめぐつた櫻の花がまつ暗な空へ飛ぶのばかり見えたと申す事でございます――度を失つた見物が右往左往に逃げ惑つて、池にも劣らない人波を稻妻の下で打たせた事は、今更別にくだくだしく申し上げるまでもございますまい。

「さてその内に豪雨もやんで、青空が雲間に見え出しますと、惠印は鼻の大きいのも忘れたやうな顏色で、きよろきよろあたりを見廻しました。一體今見た龍の姿は眼のせゐではなかつたらうか――さう思ふと、自分が建札を打つた當人だけに、どうも龍の天上するなどと申す事は、なささうな氣も致して參ります。と申して、見た事は確に見たのでございますから、考へれば考へる程益不審でたまりません。そこで側の柱の下に死んだやうになつて坐つてゐた叔母の尼を抱き起しますと、妙にてれた樣子も隱しきれないで、「龍を御覽じられたかな。」と臆病らしく尋ねました。すると叔母も大息をついて、暫くは口もきけないのか、唯何度となく恐ろしさうに頷くばかりでございましたが、やがてまた震へ聲で、「見たとも、見たとも、金色の爪ばかり閃いた、一面にまつ黑な龍神ぢやろが」

と答へるのでございます。して見ますと龍を見たのは、何も鼻藏人の得業惠印の眼のせゐばかりではなかつたのでございませう。いや、後で世間の評判を聞きますと、その日そこに居合せた老若男女は、大抵皆雲の中に黒龍の天へ昇る姿を見たと申す事でございました。

「その後惠印は何かの拍子に、實はあの建札は自分の惡戲だつたと申す事を白狀してしまひましたが、惠門を始め仲間の法師は一人もその白狀をほんたうとは思はなかつたさうでございます。これで一體あの建札の惡戲は圖星に中つたのでございませうか。それとも的を外れたのでございませうか。鼻藏の、鼻藏人の、大鼻の藏人得業の惠印法師に尋ねましても、恐らくこの返答ばかりは致し兼ねるのに相違ございますまい……」

三

宇治大納言隆國「成程此は面妖な話ぢや。昔はあの猿澤池にも、龍が棲んで居つたと見えるな。何、昔もゐたかどうか分らぬ。いや、昔は棲んで居つたに相違あるまい。昔は天が下の人間も皆心から水底には龍が住むと思うて居つた。さすれば龍もおのづから天地の間に飛行して、神の如く折折は不思議な姿を現した筈ぢや。が、予に談議を致させるよりは、その方どもの話を聞かせてくれい。次は行脚の法師の番ぢやな。

「何、その方の物語は、池の尾の禪智内供とか申す鼻の長い法師の事ぢや？　これは又鼻藏の後だけに、一段と面白からう。では早速話してくれい。――」

（大正八年五月作）

×

樹の枝にゐる一匹の毛蟲は、氣溫、天候、鳥類等の敵の爲に、絶えず生命の危險に迫られてゐる。藝術家もその生命を保つて行く爲に、この毛蟲の通りの危險を凌がなければならぬ。就中恐る可きものは停滯だ。いや、藝術の境に停滯と云ふ事はない。進歩しなければ必退歩するのだ。藝術家が退歩する時、常に一種の自動作用が始まる、と云ふ意味は、同じ樣な作品ばかり書く事だ。自動作用が始まつたら、それは藝術家としての死に瀕したものと思はなければならぬ。僕自身「龍」を書いた時は、明にこの種の死に瀕してゐた。

（『點心』の「藝術その他」より）

むし

私は「龍」と云ふ小説を書いた時、「蟲の垂衣をした女が一人、建札の前に立つてゐる」と書いた。その後或人の注意によると、蟲の垂衣が行はれたのは、鎌倉時代以後ださうである。その證據には源氏の初瀨詣の條にも、蟲の垂衣の事は見えぬさうである。私はその人の注意に感謝した。が、私が蟲の垂衣云云の事を書いたのは、「信貴山縁起」「粉河寺縁起」などの畫卷物によつてゐたのである。だからさう云ふ注意を受けても、剛情に自說は改めなかつた。その後何かの次手から、宮本勢助氏にこの事を話すと、蟲の垂衣は今昔物語にも出てゐると云ふ事を教へられた。それから早速今昔を見ると、本朝の部卷六、從鎭西上人依觀音助遁賊難持命語の中に、「轉て思すらむ。然れども蓋牟子を風の吹き開きたりつるより見奉るに、更に物不レ思罪免し給へ云云」とある。私は心の舒びるのを感じた。同時に自說は曲げずにゐても、矢張文獻に證據のないのが、今までは多少寂しかつたのを知つた。

（『點心』より）

世之助の話

上

友だち　處でね、一つ承りたい事があるんだが。
世之助　何だい。馬鹿に改まつて。
友だち　それがさ。今日はふだんとちがつて、君が近近に伊豆の何とか云ふ港から船を出して、女護ヶ島へ渡らうと云ふ、その名殘りの酒宴だらう。
世之助　さうさ。
友だち　だから、こんな事を云ひ出すのは、何だか一座の興を殺ぐやうな氣がして、太夫の手前も、聊恐縮なんだがね。
世之助　そんならよせばいいぢやないか。
友だち　處が、よせないね。よせる位なら、始から云ひ出しはしない。
世之助　ぢや話すさ。
友だち　それがさ、さう中中簡單には行かない譯がある。
世之助　何故？
友だち　尋く方も、尋かれる方も、あんまり難有い事ぢやないからね。尤も君が愈いいと云へば、私も度胸を据ゑて、承る事にするが。
世之助　何だい、一體。
友だち　まあさ、君は何だと思ふ。
世之助　ぢれつたい男だな。何だつて云へば。
友だち　いや、さう開き直られると、却つて云ひ出しにくいがね。つまり何さ。――この頃西鶴が書いた本で見ると、君は七つの時から女を知つて……
世之助　おい、おい、まさか意見をする氣ぢやあるまいね。
友だち　大丈夫、叔父さんがまだ若すぎる。――そこで、六十歲の今日まで、三千七百四十二人の女に戲れ……
世之助　こいつはちと手きびしいな。
友だち　まあさ、三千七百四十二人の女に戲れ、七百二十五人の少人を弄んだと云ふ事だが、あれは君、ほんたうかい。
世之助　ほんたうだよ。ほんたうだが、精精お手柔かに願ひたいな。
友だち　それが、どうも私には少し眞にうけられないんだね。いくら何だつて君、三千七百四十二人は多すぎるよ。
世之助　成程ね。
友だち　いくら君を尊敬した上でもだよ。
世之助　ぢや勝手に割引して置くさ。――太夫が笑つてゐるぜ。
友だち　いくら太夫が笑つてゐても、この儘にはすまされない。白狀すればよし、さもなければ、――
世之助　盛りつぶすか。そいつは御免を蒙らう。何もそんなにむづかしい事ぢやない。唯、私の算盤が、君のと少しちがつてゐるだけなんだ。
友だち　ははあ、すると一桁狂つたと云ふ次第かい。
世之助　いいえ。
友だち　ぢや――おい、どつちがぢれつたい男だつけ。
世之助　だが君も亦、つまらない事を氣にしたもんだ。
友だち　氣にするつて譯ぢやないが、私だつて

男だらうぢやないか。何割引くか判然しない中は首を切られても、引きさがらない。

世之助　困つた男だな。それならお名殘りに一つ、私の算盤のとり方を話さうか。――おい、加賀節はしばらく見合せだ。その祐善の繪のある扇をこつちへよこしてくれ。それから、誰か蠟燭の心を切つて貰ひたいな。

友だち　いやに大袈裟だぜ――かう靜になつて見ると、何だか櫻もさむいやうだ。

世之助　ぢや、始めるがね。勿論唯一例を話すだけなんだから、どうかそのつもりに願ひたい。

中

もう彼是三十年ばかり昔の事だ。私が始めて江戸へ下つた時に、たしか吉原のかへりだつたと思ふが、太鼓を二人ばかりつれて、隅田川の渡しを渡つた事がある。どこの渡しだつたか、それも今では覺えてゐない。どこへ行くつもりだつたか、それももう忘れてしまつた。が、その時の樣子だけは、かう云ふ中にも、朧げながら眼の前へ浮んで來る。……

何でも花曇りの午すぎで、川すぢ一帶、どこを見ても、煮え切らない、退屈な景色だつた。水も生ぬるさうに光つてゐれば、向う河岸の家並も、うつらうつら夢を見てゐるやうに思はれる。後をふり返ると、土手の松にまじつて、半開の櫻が、べつたり泥繪具をなすつてゐた。その又やけに白いのが、何時になく重くるしい。その上少し時候はづれの暖さで、體さへ動かせば、すぐじつとりと汗がにじむ。勿論さう云ふ陽氣だから、水の上にも、吐息程の風さへない。

乘合は三人で、一人は國姓爺の人形芝居からぬけ出して來たやうな、耳の垢取り、一人は二十七八の、眉をおとした町家の女房、もう一人はその伜らしい、洟をたらした丁稚だつた。それが互に膝をつき合せて凡まん中どころに蹲つたが、何分舟が小さいので、窮屈な事夥しい。そこへ又人が多すぎたせゐか、ともすれば、舷が水にひたりさうになる。が、船頭は一向平氣なもので、無愛想な老爺の、竹の小笠をかぶつたのが、器用に右左へ棹を使ふ。おまけにその棹の雫が、時時乘合の袖にかかるが、船頭はこれにも頓著する樣子がない。――いや、平氣なのは、まだ外にもある。それは例の甘輝字は耳の垢とりで、怪しげな唐裝束に鳥の羽毛のついた帽子をかぶりながら、言上げの幟を肩に、獅子ケ城の櫓へ上つたと云ふ形で、舳の先へ陣どつたのが、舟の出た時から、つけ髯をしごいては、しきりに鼻唄をうたつてゐる。眉のうすい、うけ脣の、高慢な顏を、仔細らしくしやくりながら、「さん谷土手下にぬしのない子がすててある」と、そそるのだから、これには私ばかりか、太鼓たちも聊たじろいだらしい。

「唐人のすててん節は、はじめてでげす。」

一人が、扇をぱちつかせながら、情けない聲を出して、かう云つた。すると、それが聞えたのだらう。私と向ひあつてゐた女房が、ちよいと耳の垢とりの方を見ると、すぐその眼を私にかへして、鐵漿をつけた齒を見せながら、愛想よく微笑した。黑い、つやつやした齒が、ちらりと脣を洩れたかと思ふと、右の頰にあさく靨が出來る。脣には紅がぬつてあるらしい。――それを見ると、私は妙にへどもどして、惡い事でも見つけられた時のやうな、一種の羞恥に襲はれてしまつた。

が、かう云つたばかりでは、唐突すぎる。曰くは、この舟へ乘つたそもそもからあつたのだから。――と云ふのは、最初土手を下りて、あぶなつかしい杭を力に、やつと舟へ乘つたと思

ふと、足のふみどころが惡かつたので、舷が水をあふると同時に、大きく一つぐらりとゆれる。その拍子に、伽羅の油のにほひが、ぷんと私の鼻を打つた。簾の中に、女がゐる。――その位な事は、土手の上から川を見下した時に、知つてゐた。が、唯女がゐると云ふだけで、「廓のかへりではあるし」それが格別痛切にさう思つてゐた譯でも何でもない。だから、伽羅の油のにほひを嗅ぐと、私は、まづ意外な感じがした。さうしてその意外の感じの後には、すぐに一種の刺戟を感じた。

唯にほひだからと云つても、決して馬鹿にしたものではない。少くとも私にとつては、大抵な事が妙に嗅覺と關係を持つてゐる。早い話が子供の時の心もちだ。手習に行くと、よくいたづらつ子にいぢめられる。それも、師匠に云ひつければ、後の祟が恐ろしい。そこで、涙をのみこんで、一生懸命に又、草紙をよごして行く。さう云ふ時のさびしい、たよりのない心もちは、成人になるにつれて、忘れてしまふ。或は思ひ出さうとしても、容易に思ひ出し惡い。それが腐つた灰墨のにほひを嗅ぐと、何時でも私には、そんな心もちがかへつて來る。さうして、子供の時の喜びと悲しみとが、もう一度私を甘やかしてくれる。――が、これは餘事だ。私は唯、伽羅の油のにほひが、急にこの女房の方へ、私の注意を持つて行つた事さへ話せばよい。

さて、氣がついて、相手を見ると、黒羽二重の小袖に襟取の紅うらをやさしく出した、小肥りな女だつた。が、唐織寄縞の帶を前でむすんだ處と云ひ、投島田に平元結をかけて對のさし櫛をした處と云ひ、素人とは思はれない位な、なまめかしさだ。顏はあの西鶴の、「當世の顏はすこしまろく、色はうすはな櫻にて」と云ふやつだが、「面道具の四つ不足なく揃ひて」はちと覺束ない。白粉にかくれてはゐるが、雀斑も少少ある。口もとや鼻つきは、稍下品だつた。が、幸生際がいいので、さう云ふ難も、大して目に立たない。――私はまだ殘つてゐた昨夜の醉が、急にさめたやうな心もちがして、その女の側へ腰を下した。その下した時に又、曰くがある。

曰くといふのは、私の膝が、先方の膝にさはつたのだ。私は卵色縮緬の小袖を著てゐる。下は多分肌著に、隱し紐無垢だつたらう。それでも、私には、向うの膝がわかつた。著物を著た膝ではない。體の膝がわかつたのだ。柔な圓みの上に、かすかなくぼみが、うすく脂肪をためてゐる。――その膝がわかつたのだ。

私は、膝と膝とを合せたまま、太鼓を相手に氣のない冗談を云ひながら、何かを待設けるやうな心もちで、ぢつと身動きもしないでゐた。勿論その間も、伽羅の油のにほひと、京おしろひのにほひとは、絶えず私の鼻を襲つて來る。そこへ、少したつ中には、今度は向うの體溫が、こちらの膝へ傳はつて來た。それを感じた時のむづ痒いやうな一種の戰慄は、到底形容する語がない。私は唯、それを私自身の動作に翻譯する事が出來るだけだ。――私は、眼を輕くつぶりながら、鼻の穴を大きくして、深くゆるやかな呼吸をした。それで君に、すべてを察して貰ふより外はない。

が、さう云ふ感覺的な心もちは、すぐにもう少し智的な欲望をよび起した。先方も私と同じ心もちでゐるだらうか。同じ感覺的な快さを感じてゐるだらうか。――それはかう云ふ疑問だつた。そこで私は、顏をあげて、わざと、平氣を裝ひながら、ぢつと向うの顏を見た。が、そのつけやきばの平氣は、すぐに裏切られるやうな運命を持つてゐた。何故かと云ふと、相手の女房は、その稍汗ばんだ顏の筋肉のゆるみ

方と、吸ふものをさがしてゐるやうな、かすかな脣のふるへ方とで、私の疑問を明かに肯定してくれたから、さうして、その上に、私自身の心もちを知つてゐて、その知つてゐる事に、或滿足を感じてゐる事さへも、わからせてくれたから――私は聊か恐縮しながら、てれがくしに太鼓の方をふりむいた。

「唐人のすててん節は始てでげす。」

太鼓がから云つたのは、丁度その時だつた。私が思はず眼を見合せて、一種の羞恥を感じたのは、偶然耳の垢とりの鼻唄を笑つた女房と、私が思はず眼を見合せて、一種の羞恥を感じたのは、偶然でない。が、その羞恥は、當時、女房に對して感じた羞恥のやうな氣がしてゐたが、後になつて考へて見ると、實は女房以外の人間に對して感じた羞恥だつた。いや、さう云つては、まだ語弊がある。人間がさう云ふ場合、一切の他人（この場合なら、女房も入れて）に對して感じる羞恥だつた。これは當時の私が、さう云ふ羞恥を感じながら、女房に對しては、次第により大膽になれたのも、わかりはしないだらうか。

私は全身のあらゆる感覺を出來る丈鋭くしながら、香を品する人のやうな態度で、相手の女房を、鑑賞した。これは私が、殆すべての女に對してする事だから、大方君にも以前に話した事があるだらう。――私は稍汗ばんだ女の額の皮膚と、その皮膚の放散するにほひとを味つた。それから、感覺と感情との微妙な交錯に反應する、みづみづしい眼の使ひを味つた。それから、血色のいい頰の上で、かすかに動いてゐる睫毛の影を味つた。それから、膝へのせた手の、うるほひのある、しなやかな、指のくみ方を味つた。それから、膝と腰とにわたる、むつちりした、彈力のある、ゆたかな肉づきを味つた。それから――から話して行けば、際限がないから、やめにするが、兎に角私はその女房の體を、あらゆる點から味つた。敢て、あらゆる點と云つても、差支へはない。私は感官の力の足りない所を、想像の働きで補つた。或は、その上に又、推理の裏打さへも施した。私の視覺、聽覺、嗅覺、觸覺、溫覺、壓覺、――どれ一つとして、この女房が滿足させてくれなかつたものはない。いや實に、それ以上のものにさへ滿足を與へてくれた。…………

……………………………………

……………………………………

……………………………………

……………………………………

「忘れものをおしでないよ。」

それからから云ふ聲を聞いた。さうしてそれと同時に、今まで見えなかつた、女の細い喉が見えた。その蓮葉な、鼻にかかつた聲と、白粉の少しむらになつた、肉のうすい喉とが、私に幾分の刺戟を與へるのは云ふまでもない。が、それよりも寧、私を動かしたのは、丁稚の方へふりむいた時の動作が、私の膝へ傳へてくれる、相手の膝の動き方であつた。私は前に、向うの膝がわかつたと云つた。が、今はそれだけではない。向うの膝のすべてが――それをつくつてゐる筋肉と關節とが、九年母の實と核とを舌の先にさぐるやうに、一つ一つ私には感じられた。黑羽二重の小袖は、私にとつてないにひとしかつたと云つても、過言ではない。これは、すぐ次に起つた最後の曰くを知つたなら、君も認めない譯には行かないだらう。

やがて、舟は棧橋についた。舳がとんと杭にあたると、耳の垢とりは、一番に向うへとび上る。その途端に私は、わざと舟のあふりを食つたやうに裝つて、（乘る時にも、さうだつたので、これは至極自然に見えるだらうと思つてゐた）よろけながら、手を舷の上にある女房の手にかけた。さうして、太鼓に腰を支へられながら「これは失禮」と聲をかけた。君はその時、

私がどんな心もちだつたと思ふ？　私は、この接觸から來る可也強い刺戟を豫想してゐた。恐らく私の今までの經驗は、最後の仕上げを受ける事だらうとさへも思つてゐた。が、この豫想は見事に、外れてしまつたのではないか。私は勿論、滑な、寧つめたい皮膚の手ざはりと、柔かい、しかも力のある筋肉の抵抗とを感じた。しかし、それらは、結局今までの經驗の反復にすぎない。同じ刺戟は、回數と共に力を減じて來る。ましてこの時は豫想が大きい。私は索漠とした心もちで、靜に私の手をはなさなければならなかつた。もし私の今までの經驗が、完全にこの女房の體を鑑賞したのでなかつたなら、かう云ふ失望はどうして、說明する事が出來るだらう。私はこの女を、感覺的に知りつくした。――どうしても、かう考へるより外はない。

これは、またかう云ふ事から考へて見ても、わかるだらう。それは私が昨日なじんだ吉原の太夫と、今の女房とを、私の心もちの上でくらべて見るとする。成程一人は一夜中一しよに語りあかした。一人は僅の時間だけ、一つ舟に乘つてゐたのに過ぎない。が、その差別は廊下一寸でなくなつてしまふ。どちらが私に、より多く滿足を與へたか、それは殆どわからない。從つて、私が持つて居る愛惜も、もしさう云ふものがあるとすれば）全く同じやうなものである。私は右の耳に江戸淸掻きの音を聞き、左の耳に角田川の水の音を聞いてゐるやうな心もちがした。さうしてそれが兩方とも、同じ調子を出してゐるやうな心もちがした。

これは、私には兎も角も發見だつた。が、總じて發見位、人間をさみしくするものはない。私は花曇りの下を、丁稚を伴につれて、その眉のあとの靑い女房が、一ぬきあし中びねりのあるきかたで、耳の垢とりの後から、棧橋を渡るのを見た時には、何とも云へずさびしかつた。勿論惚れた譯でも何でもない。唯向うでも大體私と同じやうな心もちでゐたと云ふ事は、私のさはつた手を動かさずにゐたのでも、わかるだらう。……

なに吉原の太夫？　太夫はまるでそれと反對な、小さい、人形のやうな、女だつた。

下

世之助　まづざつと、こんなものだつた。そこで、それ以來、その女のやうなものを關係した中へ勘定したから、合せて男女四千四百六十七人に戲れた事になると云ふ次第さ。

友だち　成程、さう聞けば尤もらしい。だが……

世之助　だが、何だい。

友だち　だが、物騷な話ぢやないか。さうなると、女房や娘はうつかり外へも出されない譯だからね。

世之助　物騷でも、それがほんたうなのだから、仕方がない。

友だち　して見ると、今にお上から、男女同席御法度の御布令でも出かねなからう。

世之助　この頃のやうぢや、その中に出るかも知れないね。が、出る時分には、私はもう女護ケ島へ行つてゐる。

友だち　妬せるぜ。

世之助　なに女護ケ島へ行つたつて、ここにゐたつて、大してかはりはしない。

友だち　今の算盤のとり方にすれば、さうだらう。

世之助　どうせ何でも泡沫夢幻だからね。さあ改めて、加賀節でも承らう。

（大正六年四月作）

あの頃の自分の事

以下は小說と呼ぶ種類のものではないかも知れない。さうかと云つて、何と呼ぶべきかは自分も亦不案内である。自分は唯、四五年前の自分とその周圍とを、出來る丈こだはらずに、ありのまま書いて見た。從つて自分、或は自分たちの生活やその心もちに興味のない讀者には、面白くあるまいと云ふ懸念もある。が、この懸念はそれを押しつめて行けば、結局どの小說も同じ事だから、そこに意を安んじて、發表する事にした。序ながらありのままと云つても、事實の配列は必しもありのままではない。唯事實そのものだけが、大抵ありのままだと云ふ事をつけ加へて置く。

一

十一月の或晴れた朝である。久しぶりに窮屈な制服を著て、學校へ行つたら、正門前でやはり制服を著た成瀬に遇つた。こつちで「やあ」と云ふと、向うでも「やあ」と云つた。一しよに角帽を並べて、法文科の古い煉瓦造の中へはひつたら、玄關の揭示場の前に、又和服の松岡がゐた。我我はもう一度「やあ」と云つた。

立ちながら三人で、近近出さうとしてゐる同人雜誌「新思潮」の話をした。それから松岡がこの間、珍しく學校へ出て來て、西洋哲學史か何かの敎室へはひつたが、何時まで待つても、先生は勿論學生も來る樣子がない。妙だと思つて、外へ出て小使に尋いて見たら、休日だつたと云ふ話をした。彼は電車へ乘る心算で、十錢持つて步きながら、途中で氣が變つて、煙草屋へはひると、平然として「往復を一つ」と云つた人間だから、こんな事は家常茶飯である。その中に、傴僂のやうな小使が朝の時間を知らせる鐘を振つて、大急ぎで玄關を通りすぎた。

朝の時間はもう故人になつたロオレンス先生の「マクベス」の講義である。松岡と別れて、成瀨と二階の敎室へ行くと、もう大ぜい學生が集つて、ノオトを讀み合せたり、むだ話をしたりしてゐた。我我も隅の方の机に就いて、「新思潮」へ書かうとしてゐる我我の小說の話をした。我我の頭の上の壁には、禁煙と云ふ札が貼つてあつた。が、我我は話しながら、ポケットから敷島を出して吸ひ始めた。勿論我我の外の學生も、皆平氣で煙草をふかしてゐた。すると急にロオレンス先生が鞄をかかへて、はひつて來た。自分は敷島を一本完全に吸つてしまつて、殼も窓からすてた後だつたから、更に恐れる所なく、ノオトを開いた。しかし成瀬はまだ煙草を銜へてゐたから、すぐにそれを下へ捨てると、慌てて靴で踏み消した。幸、ロオレンス先生は我我の机の間から立昇る、縷縷とした一條の煙に氣がつかなかつた。だから出席簿をつけてしまふと、早速每時もの通り講義にとりかかつた。

講義のつまらない事は、當時定評があつた。が、その朝は殊につまらなかつた。始からのべつ幕なしに、梗概ばかり聽かされる。それも一一 Act I, Scene 2 と云ふ調子で、一くさりづつやるのだから、その退屈さは人間以上だつた。自分は以前はかう云ふ時に、よく何の因果で大學へなんぞはひつたんだらうと思ひ思ひした。が、今ではそんな事も考へない程、この非凡な講義を聽く可く餘儀なくされた運命に、すつかり默從し切つてゐた。だからその時間も、機械

的にペンを動かして、帝劇の筋書の英譯のやうなものを根氣よく筆記した。が、その中に教室に通つてゐるスティイムの加減で、だんだん眠くなつて來た。そこで勿論、眠る事にした。

うとうとして、ノオトに一頁ばかりブランクが出來た時分、ロオレンス先生が、何だか異樣な聲を出したので、眼がさめた。始はちよいと居睡りが見つかつて、叱られたかと思つたが、見ると先生は、「マクベス」の本をふり廻しながら、得意になつて、門番の聲色を使つてゐる。自分もあの門番の類だなと思つたら、急に可笑しくなつて、すつかり眠氣がさめてしまつた。隣では成瀨がノオトをとりながら、時時自分の方を見て、くすくす獨りで笑つてゐた。それから又、二三頁ノオトをよごしたらやつと時間の鐘が鳴つた。さうして自分たちは、ロオレンス先生の後から、ぞろぞろ教室の外の廊下へ溢れ出した。

廊下へ出て、黄いろい葉を垂らした庭の樹木を見下してゐると、豐田實君が來て、「ちよいとノオトを見せてくれ給へ」と云つた。それからノオトを開けて見せると、豐田君の見たがつてゐる所は、丁度自分の居眠りをした所だつたので、流石に少し恐縮した。豐田君は「ぢやようござんす」と云つて、悠然と向うへ行つてしまつた。悠然と云ふのは、決して好い加減な形容ぢやない。實際君は何時でも、悠然と歩いてゐた。豐田君は今どこで何をしてゐるか、判然とした事は承知しないが、ロオレンス先生に好意を持ち、若しくはロオレンス先生が好意を持つた學生の中で、我我――と云つて惡ければ、少くとも自分が、常に或程度の親しみを感じてゐた、たつた一人の人間である。自分はこれを書いてゐる今でも、君の悠然とした歩き方を思ひ出すと、もう一度君と大學の廊下に立つて、平凡な時候の挨拶でも交換したいやうな氣がしないでもない。

その中に又、鐘が鳴つて、我我は二人とも下の教室へ行く事になつた。今度は藤岡勝二博士の言語學の講義である。外の連中は皆先へ行つて、ちやんと前の方の席をとつて置くが、なまけ者の我我は、何時でも後からはひつて行つて、一番隅の机を占領した。その朝もやはりかう云ふ傳で、愈鐘が鳴る間際まで、見晴しの好い二階の廊下に低徊してゐたのである。藤岡博士の言語學の講義は、その朗朗たる音吐とグロテスクな諧謔とを聞くだけでも、存在の權利のあるものだつた。尤も自分の如く、生來言語學的な頭腦に乏しい人間にとつては、それだけで存在の權利があつたと云ひ直しても別に差支へはない。だから今日も、ノオトをとつたりやめたりしながら、半分はさう云ふ興味で、マックミュラアがどうとかしたとか云ふ講義を面白がつて聽いてゐた。すると自分の前の席に、髮の毛の長い學生が坐つてゐて、その人の髮の毛が、時時自分のノオトの上を、掃くやうにさらさら通りすぎた。自分は相手が名前も知らない人の事だから、どう云ふ料簡であんな長髮を蓄へてゐるのだか、つい今日に至るまで問ひ質す機會を失つてしまつたが、兎に角それが彼自身の實的要求には合してゐても、他人の實際的要求と矛盾し得る事を發見したのは、正にこの言語學の講義を聞いてゐた時間である。しかし幸、その講義を聽かうと云ふ、自分の實際的要求がそれ程痛切でなかつたから、髮の毛が邪魔になつた所だけは、ノオトをとらずに捨てて置いた。その中には邪魔にならない所でも、ノオトの代りに畫を描く事にした。處が向うに坐つてゐる、何とか云ふ恐しくハイカラな學生の横顏を、半分がた描いた處で運惡く鐘が鳴つた。講義の終を知らせると同時に、午になつた事を知らせる鐘である。

我我は一しよに大學前の一白舍の二階へ行つて、曹達水に二十錢の辨當を食つた。食ひながらいろんな事を辯じ合つた。自分と成瀨との間には、可也懸隔てのない友情が通つてゐた。その上その頃は思想の上でも、一致する點が少くなかつた。殊に二人とも、偶然同時に「ジアン・クリストフ」を讀み出して、同時にそれに感激してゐた。だからかう云ふ時になると、毎日のやうに額を合せてゐる癖に、やはり話がはずみがちだつた。すると二人のゐる所へ、給仕の谷がやつて來て、相場の話をし始めた。それも一まかり間違つたら、これになる覺悟でなくつちや駄目ですね、と、手を後へまはして見せたのだから盛である。成瀨は、「馬鹿だな」と云つて、取合はなかつたが、當時「財布」と云ふ小說を考へてゐた自分は、さまざまな意味で面白かつたから、食事をしまふまで谷の相手になつた。さうして妙な相場の熟語を、十ばかり一度に教へられた。

午後は講義がなかつたから、一白舍を出ると二人で、近所の宮裏に下宿してゐる久米の所へ遊びに行つた。久米は我我以上のなまけ者だから、大抵は教室へも出ずに、下宿で小說や芝居を書いてゐたのである。行つて見ると、やはり机の側に置炬燵を据ゑて、「カラマゾフ兄弟」か何か讀んでゐた。あたれと云ふから、我我もその置炬燵へはひつたら、掛蒲團の脂臭い匂が、火臭い匂と一しよに鼻を打つた。久米は今、彼の幼年時代に自殺した阿父さんの事を短篇にして書いてゐると云つた。小說はこれが處女作同樣だから、見當がつかなくて困るとも云つた。が、不相變元氣の好ささうな顏をして、餘り困つてゐるらしい樣子もなかつた。その後で「君はどうした」と訊くから、「やつと『鼻』を半分ばかり書いた」と答へた。成瀨も今年の夏、日本アルプスへ行つた時の話を書きかけてゐると云ふ事だつた。それから三人で久米の拵へた珈琲を飲みながら、創作上の長い話を聞いた。久米は文壇的閱歷の上から云つて、ずつと我我より先輩だつた。同時に又表現上の手腕から云つても、やはり我我に比べると、一日の長がある事は事實だつた。特に自分はこの點で、久米が三幕物や一幕物を容易にしかも短い時間で、書き上げる技倆に驚嘆してゐた。だから我我の中で久米だけは、彼自身の占めてゐる、或は占めんとする、文壇的地位に相當な自信を持つてゐた。さうしてその自信が又一方では、絕えず眼高手低の歎を抱いてゐる我我に、我我自身の自信を呼び起す力としても働いてゐた。實際自分の如きは、もし久米と友人でなかつたなら、即ち彼の煽動によつて、人工的にインスピレエションを製造する機會がなかつたなら、生涯一介の讀書子たるに滿足して、小說なぞは書かなかつたかも知れない。さう云ふ次第だから創作上の話になると、——と云ふより文壇に關係した話になると、勢何時も我我の中では、久米が牛耳を執る形があつた。その日も彼が音頭とりで、大分議論を上下したが、何かの關係で田山花袋氏が度度問題に上つたやうに記憶する。

今になつて公平に考へれば、自然主義運動があれ丈大きな波動を文壇に與へたのも、全く一つは田山氏の人格の力が然らしめたのに相違ない。その限りに於て田山氏は、氏の「妻」や「田舍教師」が如何に退屈であるにしても、乃至又氏の平面描寫論が如何に幼稚であるにしても、確に我我後輩の敬意——とまで行かなければ、少くとも興味位は惹くに足る人物だつた。が、遺憾ながら當時の我我は、まだこの情熱に富んだ氏の人格を、評價するだけの雅量に乏しかつた。だから我我は氏の小說を一貫して、月光と性慾とを除いては、何ものも發見する事は出來なかつた。と同時に氏の感想や評論も、その

怪しげなà la Huysmans の入信生活を聞かされる度に、先 Durtal と田山花袋氏との滑稽な對照を思ひ出させて、徒に我我の冷笑を買ふばかりだつた。では我我は氏を目して、全然ハムバッグとしてゐたかと云ふと必しも亦さうぢやない。成程小說家としての氏や思想家としての氏は、更に本質的なものだとは思はなかつたが、それらに先立つて我我は、紀行文家としての田山氏を認めてゐた。Sentimental Landiscape-pinter——これが當時の自分が、田山氏へ冠らせてゐた諢名だつた。實際氏は、小說や評論を書く合ひ間に、根氣よく紀行文を書いてゐた。いや少し誇張して云へば、小說の多くも紀行文で、その中に Venus Libentin の信者たる男女を點出したものに過ぎなかつた。さうしてその紀行文を書いてゐる時の氏は、自由で、快活で、正直で、如何にも靑草を得た驢馬のやうに、純眞無垢な所があつた。從つてそれだけの領域では、田山氏はユニイクだと云はうが何だらうが差支へない。が、氏を自然主義の小說家たり、且思想家たる文壇の泰斗と考へる事け、今よりも更に出來惱かつた。遠慮のない所を云ふと、自然主義運動に於ける氏の功績の如きも、「何しろ時代が時代だつたからね」なぞと輕蔑してゐたものである。

大體こんなやうな氣焰をあげてから、又成瀨と二人で、久米の下宿を出た。出た時分には、短い冬の日脚が、もう往來へ長い影を落してゐた。我我は我我のよく知つてゐる、しかも常になつかしい興奮を感じながら、本郷三丁目の角まで歩いて行つて、それから別別の電車へ乘つた。

二

三四日たつた、これも好い天氣の日の事である。自分は午前の講義に出席してから、成瀨と二人で久米の下宿へ行つて、そこで一しよに晝飯を食つた。久米は京都の菊池が、今朝送つてよこしたと云ふ戲曲の原稿を見せた。それは「坂田藤十郎の戀」と云ふ、徳川時代の名高い役者を主人公にした一幕物だつた。讀めと云ふから讀んで見ると、テエマが面白いのにも關らず、無暗に友染縮緬のやうな臺辭が多くつて、どうも永井荷風氏や谷崎潤一郞氏の糟粕を嘗めてゐるやうな觀があつた。だから自分は言下に惡作だとけなしつけた。成瀨も讀んで見て、やはり同感は出來ないと云つた。久米も我我の批評を聞いて「僕も感服出來ないんだ。一體に少し高等學校情調がありすぎるよ」と、同意を表した。それから久米が我我一同を代表して、菊池の所へその意味の批評を、手紙で書いてやる事にした。そこへ幸、松岡も遊びに來た。松岡は我我三人が英文科に籍を置いてゐるのにも關らず、獨り哲學科へはひつてゐた。が、勿論我我と同じやうに、創作もする心算だつた。彼は我我の中で、一番久米と親しかつた。一しきりは二人で、同じ家に下宿してゐた事もあつた。それは砲兵工廠の裏にある、職工服を造る家だつた。

實生活上のロマンティケルだつた久米は、今にあの靑い職工服を著て、アトリエのやうな書齋へ西洋机を据ゑて、その書齋を久米正雄工房と名づけたいなどと云ふ、途方もない夢をよく見てゐた。自分は彼等をその下宿に訪問すると、毎時もかう云ふ久米の夢を思ひ出したものだつた。が、松岡はその時分から、飾り職工服とは緣のない思想なり心もちなりを持つてゐるらしかつた。まだ感傷癖こそ脫しなかつたが、彼の中には宗教の匂のするものが、もうふんだんに磅礴してゐた。彼はその東洋とも西洋ともつかないイエルサレムの建設をもくろみながらキエルケガアドを愛讀したり、怪しげな水彩畫を描いて見たりした。當時彼の描いた水彩畫の

一つに、さかさまにした方が遥に晝らしくなるもののあつたのは、今でもよく覺えてゐる。その後松岡は久米が宮裏へ移ると共に、本郷五丁目へ下宿を移した。さうして今でもそこにゐて、釋迦傳から材料を取つた三幕物の戯曲を書いてゐた。

我我四人は、又久米の手製の珈琲を啜りながら、煙草の煙の濛濛とたなびく中で、盛にいろんな問題をしやべり合つた。その頃は丁度武者小路實篤氏が、將にパルナサスの頂上へ立たうとしてゐる頃だつた。從つて我我の間でも、屢氏の作品やその主張が話題に上つた。我我は大抵、武者小路氏が文壇の天窓を開け放つて、爽な空氣を入れた事を愉快に感じてゐるものだつた。恐らくこの愉快は、氏の踵に接して來た我我の時代、或は我我以後の時代の青年のみが、特に痛感した心もちだらう。だから我我以前と我我以後とでは、文壇及それ以外の鑑賞家の氏に對する評價の大小に、徑庭があつたのは已むを得ない。これは丁度我我以前と我我以後とで、田山花袋氏に對する評價が、相違するのと同じ事である。唯、その相違の程度が、武者小路氏と田山氏とで、どちらが眞に近いかは疑問である。念の爲に斷つて置くが、自分が同じ事だと云ふのは、程度まで含んでゐる心算ぢやない）が、當時の我我も、武者小路氏に文壇のメシヤを見はしなかつた。作家としての氏を見る眼と、思想家としての氏を見る眼と——この二つの間には、又自らな相違があつた。作家としての武者小路氏には、作品の完成を期する上に、偶に性急な嫌があつた。形式と内容との不即不離な關係は、屢氏自身が「雜感」の中で書いてゐるのにも關らず、忍耐よりも興奮に依頼した氏は、屢實際の創作の上では、この微妙な關係を等閑に附して顧みなかつた。だから氏には從來等閑に見てゐた形式は、その「妹」以後一作毎に、徐徐として氏に謀叛を始めた。さうして氏の脚本からは、次第にその秀拔な戯曲的要素が失はれて、（全くとは云はない。一部の批評家が戯曲でないやうに云ふ「或青年の夢」でさへ、一齣一齣の上で云へばやはり戯曲的に力強い表現を得た個所がある。）氏自身のみを語る役割が、己自身を語る性格の代りに續續としてそこへはひつて來た。しかもそこに語られた思想なり感情なりは、必然性に乏しい戯曲的な表現を借りてゐるだけ、それだけ一層氏の雜感に書かれたものより稀薄だつた。「或家庭」の昔から氏の作品に親しんでゐた我我は、その頃の——「その妹」の以後のかう云ふ氏の傾向には、慊らない所が多かつた。が、それと同時に、又氏の雜感の多くの中には、我我の中に燃えてゐた理想主義の火を吹いて、一時に光焔を放たしめるだけの大風のやうな雄雄しい力が潛んでゐる事も事實だつた。往往にして一部の批評家は、氏の雜感を支持すべき論理の缺陷を指摘する。が、論理を待つて確められたもののみが、眞理である事を認めるには、餘りに我我は人間的な素質を多量に持ちすぎてゐる。いや何よりもその人間的な素質の前に眞面目であれと云ふ、それこそ氏の闡明した、大いなる眞理の一つだつた。久しく自然主義の淤泥にまみれて、本來の面目を失してゐた人道が、あのエマオのクリストの如く、日昃きて暮に及んだ文壇に再び姿を現した時、如何に我我は氏と共に、「われらが心燃え」し事を感じたらう。現に自分の如く世間からは、氏と全然反對の傾向にある作家の一人に數へられてゐる人間でさへ、今日も猶氏の雜感を讀み返すと、常に昔の澎湃とした興奮が、一種のなつかしさと共に還つて來る。我我は——少くとも自分は氏によつて、「驢馬の子に乘り偕に來る」人道を迎へる爲に、その衣を途に布き或は樹の枝を伐りて途に布

く、先例を示して貰つたのである。

さんざん話をした後で、我我は皆一しよに、久米の下宿を出た。それから本郷三丁目で成瀬と松岡とに別れた。久米と自分とは電車で銀座へ行つて、カッフェ・ライオンで少し早い晩飯をすませてから、ちよいと歌舞伎座の立見へはひつた。はひると新狂言の二番目もので、勿論外題さへ、更に不案内なものだつた。舞臺には惡く納つた茶室があつて、造花の白梅が處處に、貝殼細工のやうな花を綴つてゐた。さうしてその茶屋の縁側で、今の中車の侍が、歌右衛門の娘を口說いてゐた。東京の下町に育ちながら、更に江戸趣味なるものに興味のない自分は、芝居に對しても同樣に、滅多にドラマティック・イリュウジョンは起す事が出來ない程、冷淡に出來上つた人間だつた。（或は冷淡にならされた人間かも知れない。芝居を見る事は二歲位の頃から、よく家のものと一しよに見た。）だから芝居よりも役者の藝が、役者の藝よりも土間棧敷の見物が、餘程自分には面白かつた。その時も自分の隣にゐた、どこかの御店者らしい、鳥打帽をかぶつた男が、甘栗を食ひながら、熱心に舞臺を見てゐる方が、天下の名優よりも興味があつた。この男に熱心に舞臺を見てゐると云つたが、同時に又甘栗もやはり熱心に食つてゐた。それが懷へ手を入れたかと思ふと、甘栗を一つつまみ出して、割るが早いか口へ入れる。口へ入れたと思ふと、又懷へ手を入れて、つまみ出すが早いか割つて食ふ。しかもその間中、眼は終始一貫して、寸分も舞臺を離れない。自分はこの視覺と味覺との敏捷な使ひ分けに感心して、暫くはその男の横顏ばかり眺めてゐたが、とうとうしまひに彼自身はどちらを眞劍にやつてゐる心算だか、尋いて見たいやうな氣がして來た。するとその時、自分の側で、久米がいきなり「橘屋あ」と、無鐵砲に大きな聲を出した。自分はびつくりして、思はず眼を舞臺の方へやつた。見ると成程、女をたらすより外には何等の能もなささうな羽左衛門の若侍が、從容として庭傳ひに歩いて來る所だつた。が、隣の御店者に、久米の「橘屋」も耳にはひらないやうに、依然として甘栗を食ひながら、食ひつくやうな眼で舞臺を眺めてゐる。自分も今度はその滑稽さが、笑ふには餘りに眞劍すぎるやうな氣がして來た。さうして又そこに小說めいた心もちも感じられた。しかし舞臺の上の芝居は、折角その「橘屋」がお出でになつても、池田輝方氏の畫以上に俗惡だつた。自分はとうとう一幕見てゐられなくなつて、舞臺が廻つたのを機に、久米をひつぱつて外へ出た。

星月夜の往來へ出てから「あんな聲を出して、馬鹿だな」と云つたが、久米は「何、あれだつて中中好い聲だよ」と自慢して容易にその非を認めなかつた。今でもあの時の事を考へると、我我はカッフェ・ライオンで飲んだウヰスキイに祟られてゐたものとしか思はれない。

三

「一體大學の純文學科などと云ふものは、頗怪しげな代物だよ。ああやつて、國漢英佛獨の文學科はあるけれども、あれは皆何をやつてゐるんだと思ふ？　實は何をやつてゐるか、僕にもはつきりとはわからないんだ。成程研究してゐるものは、各國の文學に違ひなからう。さうしてその文學なるものは、まあ藝術の一部門とか何とか云へるにや違ひない。しかしその文學を研究する學問だね、あれは一體學問だらうか（或は獨立した學問だらうかと云つても好いが）。もし學問とすれば、——むづかしく云へばWissenschaftとして成立するのに必要な條件を具へるとすればだね。さうすれば美學と同じも

のになつちまふぢやないか。いや、美學ばかりぢやない。文學史なんぞは、始めから史學と同じものだらうと思ふんだ。そりや成程今純文學科でやつてゐる講義にや、美學や史學と縁のないものだつて、澤山ある。が、その澤山あるものは、義理にも學問だとは思はれないぢやないか。あれはまあよく云へば先生の感想を述べたもので、惡く云へば出たらめだからね、だから僕は大學の純文學科なんぞは、廢止しちまつた方がほんたうだと思ふんだ。文學概論や何かは美學と一しよにする。文學史は史學へ片づけてしまふ。さうしてあとに殘つた講義は、要するに出たらめだから、大學外へ驅逐しちまふんだ。出たらめだからと云つて惡ければ、餘りに高尚で、大學のやうな學問の研究を目的にする所には、不釣合だと云つても好い。これは確に目下の急務だよ。さもないと同じ出たらめでも、新聞や雜誌へ出た評論より、大學でやる講義の方が、上等のやうな誤解を天下に與へ易いからね。それも實は新聞や雜誌へ出る方は、世間を相手にしてゐるんだが、大學でやる方は學生だけを相手にしてゐるんだから、それだけ馬脚が露れずにすんでゐるんだらう。その安全なる出たらめが、一層箔をつけてゐるのは、どう考へたつて不公平だ。實際僕なんぞは無責任に、圖書館の本を讀まう位な料簡で、大學にはひつてゐるんだから好いが、眞面目に研究心でも起したら、一體どうすれば文學の研究になるんだか、途方にくれちまふのに違ひない。それや市河三喜さんのやうに言語學的に英文學を研究するんなら、立派に徹底してゐると思ふんだ。けれどもさうすると、シェクスピイアだらうが、ミルトンだらうが、詩でも芝居でもなくなつて、唯の英語の行列だからね。それぢや僕はやる氣もないし、やつたつて到底ものにはなりさうもないだらう。勿論出たらめで滿足してゐれや好いが、それなら御苦勞にも大學へはひらずともの事だ。又美學なり史學なりの立ち場から研究しようと云ふんなら、外の科へ籍を置いた方がどの位氣が利いてゐるかわからない。から考へて來ると、純文學科のレエゾン・デエトルは、まあ精精便宜的位な所だね。が、いくら便宜でも、有害の方が多くつちや、勿論ないのに劣つてゐると云ふもんだ。劣つてゐる以上は、廢止した方が正當だよ。——何、あれは中學の教師を養成する爲に必要だ? 僕は皮肉を云つてゐるんぢやない。これでも大眞面目な議論なんだ。中學の教師を養成するんなら、ちやんと高等師範と云ふものがある。高等師範を廢止しろなんと云ふのは、それこそ冠履顛倒だ。その理窟で行つても廢止さるべきものは大學の純文學科の方で、高等師範は一日も早くあれを合併してしまふが好い。」

その頃の淺川、古本屋ばかり並んでゐる神田通りを歩きながら、自分は成瀨をつかまへて、こんな議論をふつかけた事がある。

四

十一月もそろそろ末にならうとしてゐる或晩、成瀨と二人で帝劇のフィル・ハアモニィ會を聞きに行つた。行つたら、向うで我我と同じく制服を着た久米に遇つた。その頃自分は、我我の中で一番音樂通だつた。と云ふのは自分が一番音樂通だつた程、それ程我我は音樂に縁が遠い人間だつたのである。が、その自分も無暗に音樂會を聞いて歩いただけで、鑑賞は元より、了解する事も頗怪しかつた。先一番よくわかるものは、リストに止めをさしてゐた。何時か帝國ホテルで、あのペッツォルド夫人と云ふお婆さんが、リストの der heilige Antonius gehreitend auf den Wellen(だと思ふ。ちがつたら御免なさい)を彈いた時も、そのピアノの

音の一つ一つは、寸刻も流動して止らない、しかも不思議に確な畫面を、ありありと眼の前へ浮ばせてくれた。その畫面の中には、どこを見ても、際限なく波が動いてゐた。それからその波の上には、一足毎に波紋を作る人間の足が動いてゐた。最後にその波と足との上に、煌煌たる光があつて、それが風の中の太陽のやうに、眩く空中で動いてゐた。この明るい幻を息もつかずに眺めてゐた自分は、演奏が終つて拍手の聲が起つた時に、音樂の波動が消えてしまつた、空虚な周圍の寂しさをしみじみ情なく感じられた。が、こんな事は前にも云つた通り、リストが精精行きどまりで、ベエトオフェンなどと云ふ代物は、好いと思へば好いやうだし、惡いと思へば惡いやうだし、更に見當がつかなかつた。だからフィル・ハアモニイ會を聞くと云つても、一向藝術家らしくない、怪しげな耳をそばだてて、樂器の森から吹いて來るオオケストラの風の音を、漫然と聞いてゐるのである。

當夜は閑院宮殿下も御臨場になつたので、帝劇のボックスや我我のゐるオオケストラ・ストオルには、模様を著た奥さんや御孃さんが大分方方に並んでゐた。現に自分の隣なぞにも、白粉をつけた骨と皮ばかりの老夫人が、金の指環をはめて金の時計の鎖を下げて、金の帯留の金物をして、その上にもまだ慊らず、齒にも一面に金を入れて（これは欠伸をした時に見えたのである）端然として控へてゐた。が、前に歌舞伎座の立見をした時とは異なつて、今夜は見物の紳士淑女より、ショパンやシュウベルトの方が面白かつたから、それ以上自分はこの自然物と金とに埋つてゐる老夫人に、注意を[illegible]にならなかつた。尤も彼女自身は、自分に唾をかけた、ディスイリュウジョンそれ自身のやうな容貌だつたと見えて、舞臺の上で指揮杖を振つてゐる山田耕作氏には眼もくれず、頻に周圍ばかりを見廻してゐた。

その中に山田夫人の獨唱か何かで、途中の休憩時間になると、我我は三人揃つて二階の喫煙室へ出かけて行つた。すると、そこの入口に、黒い背廣の下へ赤いチョッキを著た、背の低い人が佇んで、袴羽織の連れと一しよに金口の煙草を喫つてゐた。久米はその人の姿を見ると、我我の耳へ口をつけるやうにして、「谷崎潤一郎だぜ」と教へてくれた。自分と成瀬とはその人の前を通りながら、この有名な耽美主義の作家の顔を、偸むやうにそつと見た。それは動物的な口と、精神的な眼とが、互に我を張り合つてゐるやうな、特色のある顔だつた。我我は喫煙室の長椅子に腰を下して、一[illegible]び合ひながら、谷崎潤一郎論を少しやつた。當時谷崎氏は、在來氏が開拓して來た、耽美主義の畠に、「お艶殺し」の如き、或は又「お才と巳之介」の如き、文字通り底氣味の惡い Fleurs du Mal を育ててゐた。が、その斑猫のやうな色をした、美しい惡の花は、氏の傾倒してゐるポオやボオドレエルと、同じ莊嚴な腐敗の香を放ちながら、或一點では彼等のそれと、全く趣を異にしてゐた。彼等の病的な耽美主義は、その背景に恐る可き冷酷な心を控へてゐる。彼等はこのこはれた舟のやうな心を抱いた因果に、嫌でも道徳を捨てなければならなかつた。嫌でも神を捨てなければならなかつた。さうして又嫌でも戀愛を捨てなければならなかつた。が、彼等はデカダンスの古沼に身を沈めながら、それでも猶この始末に了へない心と―― une vieille gabare sans mâts sur une mer monstrueuse et sans bords の心と睨み合つてゐなければならなかつた。だから彼等の耽美主義は、この心に劫かされた彼等の魂のどん底から、やむを得ずとび立つた蛾の一群だつた。從つて彼等の作品には、常に

Ah! Seigneur, donnez-moi la force et le courage/ De contempler mon coeur et mon corps sans dégoût と云ふせつぱつまつた嘆聲が、瘴氣の如く纏綿してゐた。我我が彼等の耽美主義から、嚴肅な感激を浴びせられるのは、實にこの「地獄のドン・ジュアン」のやうな冷酷な心の苦しみを見せつけられるからである。しかし谷崎氏の耽美主義には、この動きのとれない息苦しさの代りに、餘りに享樂的な餘裕があり過ぎた。氏は罪惡の夜光蟲が明滅する海の上を、まるでエル・ドラドでも搜して行くやうな意氣込みで、悠悠と船を進めて行つた。その點が氏は我我に、氏の輕蔑するゴオティエを髣髴させる所以だつた。ゴオティエの病的傾向は、ボオドレエルのそれとひとしく世紀末の色彩は帶びてゐても、云はば活力に滿ちた病的傾向だつた。更に洒落れて形容すれば、寶石の重みを苦にしてゐる、肥滿したサルタンの病的傾向だつた。だから彼には谷崎氏と共に、ボオやボオドレエルに共通する切迫した感じが缺けてゐた。が、その代りに感覺的な美を敍述する事にかけては、滾滾として百里の波を瀉す河のやうな、驚く可き雄辯を備へてゐた。最近廣津和郎氏が谷崎氏を評して、餘り健康なのを憾とすると云つたのは、この活力に滿ちた病的傾向を指摘したものだらうと思ふ。が、如何に活力に溢れてゐても、脂肪過多症の患者が存在し得る限り、やはり氏のそれは病的傾向に相違ない。）さうして此の耽美主義に慊らなかつた我我も、流石にその非凡な力を認めない譯に行かなかつたのは、この浩浩たる氏の雄辯である。氏はありとあらゆる日本語や漢語を選び出して、ありとあらゆる感覺的な美を（或は醜）を「刺青」以後の氏の作品に螺鈿の如く鏤めて行つた。しかもその氏の Les Emaux et Camées は、朗朗たるリヅムの緣で始から終まで、見事にずつと貫かれてゐた。自分は今日でも猶、氏の作品を讀む機會があると、一字一句の意味よりも、寧その流れて盡きない文章のリヅムから、半ば生理的な快感を感じる事が度度ある。ここに至るとその頃も、氏はやはり今の如く、比類ない語の織物師だつた。たとひ氏は暗澹たる文壇の空に「恐怖の星」はともさなかつたにしても、氏の培つた斑猫色の花の下には、時ならない日本の魔女のサバトが開かれたのである。——

やがて又演奏の始りを知らせる相圖のベルと共に、我我は谷崎潤一郎論を切り上げて、下の我我の席へ歸つた。歸る途中で久米が、「一體君は音樂がわかるのかい」と云ふから、「隣の金と骨と皮と白粉とよりはわかりさうだ」と答へた。それから又その老夫人の隣へ腰を下して、ショルツ氏のピアノを聞いた。確、ショパンのノクチュルヌとか何とか云ふものだつたと思ふ。（シモンズと云ふ男は、子供の時にショパンの葬式の進行曲を聞いて、ちやんとわかつたと廣告して居るが、自分はショルツ氏の器用に動く指を眺めながら、年齡の差を勘定に入れないでも、この點ではシモンズに到底及ばないと觀念した。そのあとは何があつたか、もう今は覺えてゐない。が、會が終つて外へ出たら、車寄せのまはりに馬車や自動車が、通りぬけられない程澤山並んでゐた。さうしてその中の一つの自動車には、あの金と白粉との老夫人が毛皮に顏を埋めながら、乘らうとしてゐる所だつた。我我は外套の襟を立てて、その間をやつと風の寒い、往來へ出た。ふと見ると、我我の前には、警視廳の殺風景な建物が、黑く空を衝いて聳えてゐた。自分は歩きながら、何だかそこに警視廳のある事が不安になつた。で、思はず「妙だな」と云つたら、成瀨が「何が？」と聞き咎めた。自分はいやとか何とか云つて、好い加減に返事

をごまかした。その時分にも我我の左右を、馬車や自動車が盛んに通りすぎてゐた。

五

フィル・ハアモニイ會へ行つたあくる日、午前の大塚博士の講義──當日はリッケルトの哲學だつた。これが自分が聞いた中では最も啓發される所の多かつた講義である──をすまさせた後で、又成瀬と風の吹く中を、わざわざ一白舍へ二十錢の辨當を食ひに行つたら、彼が突然自分に、「君は昨夜僕等の後にゐた女の人を知つてゐるかい」と尋ねた。「知らない。知つてゐるのは隣の金と皮と骨と白粉だけだ。」──「金と皮と──何だい、それは。」「何でも好い。兎に角、後にゐた女の人ぢやない事は確だ。さうして君は又その女の人に惚れでもしたのかい。」「惚れる處か、僕も知らなかつたんだ。」「何だ、つまらない。そんな人間なら、ゐたつてゐなくたつて、同じ事ぢやないか。」「處がね。家へ歸つたらムッタアが後の女の人を見たかと云ふんだ。つまりその人が僕の細君の候補者だつたんださうだね。」「ぢや見合ひか。」「見合ひ程まだ進歩したものぢやないんだらう。」──「だつて見たかつて云へば、見合ひぢやないか。君のムッタアも又、迂遠だな。見たい心算なら、前へすわりや好いのに。後にゐるものが見える位なら、こんな二十錢の辨當なんぞ食つてゐやしない。」成瀬は親孝行な男だから、自分がかう云ふと、ちよいと妙な顏をした。が、すぐに又、「しかし向うの女の人を本位にして云へば、僕等が前にゐた事になるんだからな。」──「成程、あすこぢや兩方で向ひ合つてゐようと思つたら、どつちか一方が舞臺へ上らなくつちやならない譯だ。──譯だが、それで君は何つて返事をしたんだい。」「見なかつたつて云つたあね。實際見なかつたんだから仕方がないぢやないか。」「さう今になつて、僕に鬱憤を洩したつて駄目だよ。だが惜しい事をしたな。一體あれは音樂會だつたから、いけないんだ。芝居なら僕が頼まれなくつたつて、帝劇中の見物をのこらず物色をしてやるんだのに。」──成瀬と自分とはこんな話をしながら、大笑ひに笑ひ合つた。

その日は午後には、獨逸語の時間があつた。が、當時我我はアイアムビックに出席するとか何とか云つて、成瀬が出れば自分が休み、自分が出れば成瀬が休んでゐた。さうして一つ教科書に代る代る二人で假名をつけて、試驗前には一しよにその教科書を讀んで間に合せてゐた。丁度その午後の獨逸語は成瀬が出席する番に當つてゐたから、自分は食事をしまふと、成瀬に教科書を引渡して、獨りで一白舍の外へ出た。出ると外は風が、砂埃を往來の空に捲き上げてゐた。黄いろい並木の銀杏の落葉も、その中でくるくる舞ひながら、大學前の古本屋の店の奧まで吹かれて行つた。自分はふと松岡を訪ねて見ようと云ふ氣になつた。松岡は自分と（恐らくは大抵な人と）違つて大風の吹く日が一番落著いて好いと稱してゐた。だからその日などは殊に落著いてゐるだらうと思つて、何度も帽子を飛ばせさうにしながら、やつと本郷五丁目の彼の下宿まで辿りつくと、下宿のお婆さんが入口で、「松岡さんはまだ御休みになつていらつしやいますが」と、氣の毒さうな顏をして云つた。「まだ寢てゐる？ 恐ろしく寢坊だな。」「いえ、昨夜徹夜なすつて、ついさつきまで起きていらしつたんですがね、今し方寢るからつて、床へおはひりになつたんでございますよ。」「ぢや、まだ眼がさめてゐるかも知れない。兎に角ちよいと上つて見ませう。寢てゐればすぐに下りて來ます。」自分は松岡のゐる二階へ、足音を偸みながら、そつと上つた。上つてとつつきの襖をあけると、二三枚戸を立てた、うす暗い部屋の

まん中に、松岡の床がとつてあつた。枕もとには怪しげな一閑張の机があつて、その上には原稿用紙が亂雜に重なり合つてゐた。と思ふと机の下には、古新聞を敷いた上に、夥しい南京豆の皮が、杉形に高々と盛り上つてゐた。自分はすぐに、松岡が書くと云つてゐる三幕の戯曲の事を思ひ出した。「やつてゐるな。」――ふだんならかう云つて、自分はその机の前へ坐りながら、出來ただけの原稿を讀ませて貰ふ所だつたが、生憎その需に應ずべき松岡は、髭ののびた顎を括り枕の上にのせて、死んだやうに寢入つてゐた。勿論自分は、折角徹夜の疲を癒してゐる彼を起さうなどと云ふ考はなかつた。しかし又この儘歸つてしまふのも、何となく殘り惜しかつた。そこで自分は彼の枕元に坐りながら、机の上の原稿を、暫くあつちこつち讀んで見た。その間も凩はこの二階を搖ぶつてしきりなく通りすぎた。が、松岡は依然として、靜な寢息ばかり洩してゐた。自分はやがて、かうしてゐても仕方がないと思つたから、物足りない腰をやつと上げて、靜に枕元を離れようとした。その時ふと松岡の顏を見ると、彼は眠りながら睫毛の間へ、涙を一ぱいためてゐた。いや、さう云へば頰の上にも、涙の流れた痕が殘つてゐた。自分はこの思ひもよらない松岡の顏に氣がつくと、さつきの「やつてゐるな」と云ふ元氣の好い心もちは、一時にどこかへ消えてしまつた。さうしてその代りに、自分も夜通し苦しんで、原稿でもせつせと書いたやうな、やり切れない心細さが、俄に胸へこみ上げて來た。「馬鹿な奴だな。寢ながら泣く程苦しい仕事なんぞをするなよ。體でも毀したら、どうするんだ。」――自分はその心細さの中で、かう松岡を叱りたかつた。が、叱りたいその裏では、やつぱり「よくそれ程苦しんだな」と、內證で褒めてやりたかつた。さう思つたら、自分まで何時の間にか涙ぐんでゐた。

それから又跫音を偸んで、梯子段を下りて來ると、下宿の御婆さんが心配さうに、「御休みなすつていらつしやいますか」と尋いた。自分は「よく寢てゐます」とぶつきらぼうな返事をして、泣顏を見られるのが嫌だつたから、匆々凩の往來へ出た。往來は不相變、砂煙が空へ舞ひ上つてゐた。さうしてその空で、凄じく何か唸るものがあつた。氣になつたから上を見ると、唯、小さな太陽が、白く天心に動いてゐた。自分はアスファルトの往來に立つた儘、どつちへ行かうかなと考へた。（大正七年十二月作）

蕗

夏になつた路の土が、砥の粉のやうに乾いてゐる。寂しい山間の町だから、路には石塊も少くない。兩側には古いこけら葺の家が、ひつそりと日光を浴びてゐる。僕等二人の中學生は、その路をせかせか上つて行つた。すると赤ん坊を背負つた少女が一人、濃い影を足もとに落しながら、靜に坂を下つて來た。少女は袖のまくれた手に、蕗の長い莖をかざしてゐる。何の爲かと思つたら、それは眞夏の日光が、すやすや寢入つた赤ん坊の顏へ、當らぬ爲の蕗であつた。僕等二人のすれ違ふ時に、そつと微笑を交換した。が、少女はそれも知らないやうに、やはり靜に通りすぎた。かすかに頰が日に燒けた、大様の顏だちの少女である。その顏が未にどうかすると、はつきり記憶に浮ぶ事がある。里見君の所謂一目惚れとは、こんな心もちを云ふのかも知れない。

（點心より）

葱

おれは締切日を明日に控へた今夜、一気呵成にこの小説を書かうと思ふ。いや、書かうと思ふのではない。書かなければならなくなつてしまつたのである。では何を書くかと云ふと、――それは次の本文を読んで頂くより外に仕方はない。

神田神保町辺の或カッフェに、お君さんと云ふ女給仕がある。年は十五とか十六とか云ふが、見た所はもつと大人らしい。何しろ色が白くつて、眼が涼しいから、鼻の先が少し上を向いてゐても、兎に角一通りの美人である。それが髪をまん中から割つて、忘れな草の簪をさして、白いエプロンをかけて、自動ピアノの前に立つてゐる所は、とんと竹久夢二君の画中の人物が抜け出したやうだ。――とか何とか云ふ理由から、このカッフェの定連の間には、夙に通俗小説と云ふ渾名が出来てゐるらしい。尤も渾名にはまだまだいろいろある。簪の花が花だからわすれた草。活動写真に出る亜米利加の女優に似てゐるから、ミス・メリイ・ピックフォオド。このカッフェに缺くべからざるものだから、角砂糖。ETC. ETC.

この店にはお君さんの外にも、もう一人年上の女給仕がある。これはお松さんと云つて、器量は到底お君さんの敵ではない。まづ白麺麭と黒麺麭程の相違がある。だから一つカッフェに勤めてゐても、お君さんとお松さんとでは、祝儀の収入が非常に違ふ。お松さんは勿論、この収入の差に平かなるを得ない。その不平が高じた所から、邪推もこの頃廻すやうになつてゐる。

或夏の午後、お松さんの持ち場の卓子にゐた外国語学校の生徒らしいのが、巻煙草を一本啣へながら、燐寸の火をその先へ移さうとした。所が生憎その隣の卓子では、煽風機が勢よく廻つてゐるものだから、燐寸の火は其処まで届かない内に、何時も風に消されてしまふ。そこでその卓子の側を通りかかつたお君さんは、暫くの間風をふせぐ為に、客と煽風機との間へ足を止めた。その暇に巻煙草へ火を移した学生が、日に焼けた頬へ微笑を浮べながら、「難有う。」と云つた所を見ると、お君さんのこの親切が先方にも通じたのは勿論である。所がお松さんが、丁度其処へ持つて行く筈の、アイスクリイムの皿を取り上げると、お君さんの顔をじろりと見て、「あなた持つていらつしやいよ。」と、嬌嗔を発したらしい声を出した。――

こんな葛藤が一週間に何度もある。従つてお君さんは、滅多にお松さんには口をきかない。何時も自動ピアノの前に立つては、場所がらだけに多い学生の客に、無言の愛嬌を売つてゐる。或は業腹らしいお松さんに無言ののろけを買はせてゐる。

が、お君さんとお松さんとの仲が悪いのは、何もお松さんが嫉妬をするせゐばかりではない。お君さんも内心、お松さんの趣味の低いのを軽蔑してゐる。あれは全く尋常小学校を出てから、浪花節を聴いたり、蜜豆を食べたり、男を追つかけたりばかりしてゐた、そのせゐに違ひない。かうお君さんは確信してゐる。では、そのお君さんの趣味と云ふのが、どんな種類のものかと思つたら、暫くこの賑かなカッフェを去

つて、近所の路地の奥にある、或女髪結の二階を覗いて見るが好い。何故と云へば、お君さんは、その女髪結の二階に間借をして、カッフェへ勤めてゐる間の外は、始終其處に起臥してゐるからである。

二階は天井の低い六疊で、西日のさす窓から外を見ても、瓦屋根の外は何も見えない。その窓際の壁へよせて、更紗の布をかけた机がある。尤もこれは便宜上、假に机と呼んで置くが、實は古色を帶びた茶ぶ臺に過ぎない。その茶ぶ――机の上には、これも餘り新しくない西洋綴の書物が並んでゐる。「不如歸」「藤村詩集」「松井須磨子の一生」「新朝顏日記」「カルメン」「高い山から谷底見れば」――あとは婦人雜誌が七八冊あるばかりで、殘念ながらおれの小說集などは、唯の一册も見當らない。それからその机の側にある、とうにニスの剝げた茶箪笥の上には、頸の細い硝子の花立てがあつて、花びらの一つとれた造花の百合が、手際よくその中にさしてある。察する所この百合は、花びらさへまだ無事でゐたら、今でもあのカッフェの卓子に飾られてゐたのに相違あるまい。最後にその茶箪笥の上の壁には、いづれも雜誌の口繪らしいのが、ピンで三四枚とめてある。一番まん中なのは、鏑木清方君の元祿女で、その下に小さくなつてゐるのは、ラファエルのマドンナか何からしい。と思ふとその元祿女の上には、北村四海君の彫刻の女が御隣に控へたベエトオフェンへ滴る如き秋波を送つてゐる。但しこのベエトオフェンは、唯お君さんがベエトオフェンだと思つてゐるだけで、實は亞米利加の大統領ウッドロオ・ウィルソンなのだから、北村四海君に對しても、何とも御氣の毒の至に堪へない。――

から云へばお君さんの趣味生活が、如何に藝術的色彩に富んでゐるか、問はずして既に明かであらうと思ふ。又實際お君さんは、毎晩遲くカッフェから歸つて來ると、必このベエトオフェン alias ウィルソンの肖像の下に、「不如歸」を讀んだり、造花の百合を眺めたりしながら、新派悲劇の活動寫眞の月夜の場面よりもサンティマンタアルな、藝術的感激に耽るのである。

櫻頃の或夜、お君さんはひとり机に向つて、殆一番鷄が啼く頃まで、桃色をしたレタア・ペエパアにせつせとペンを走らせ續けた。が、その書き上げた手紙の一枚が、机の下に落ちてゐた事は、朝になつてカッフェへ出て行つた後も、遂にお君さんには氣がつかなかつたらしい。すると窓から流れこんだ春風が、その一枚のレタア・ペエパアを飜して、鬱金木綿の蔽ひをかけた鏡が二つ並んでゐる梯子段の下まで吹き落してしまつた。下にゐる女髪結は、頻頻としてお君さんの手に落ちる艶書のある事を心得てゐる。だからこの桃色をした紙も、恐らくはその一枚だらうと思つて、好奇心からわざわざ眼を通して見た。すると意外にもこれは、お君さんの手蹟らしい。ではお君さんが誰かの艶書に返事を認めたのかと思ふと、「武男さんに御別れなすつた時の事を考へると、私は涙で胸が張り裂けるやうでございます。」と書いてある。果然お君さんは殆徹夜をして、浪子夫人に與ふべき慰問の手紙を作つたのであつた。――

おれはこの插話を書きながら、お君さんのサンティマンタリズムに微笑を禁じ得ないのは事實である。が、おれの微笑の中には、寸毫も惡意は含まれてゐない。お君さんのゐる二階には、造花の百合や、「藤村詩集」や、ラファエルのマドンナの寫眞の外にも、自炊生活に必要な、臺所道具が並んでゐる。その臺所道具の象徴する、世智辛い東京の實生活は、何度今日までにお君さんへ迫害を加へたか知れなかつた。が、落莫たる人生も、涙の靄を透して見る時は、美しい世界を展開する。お君さんはその實

生活の羈絆を逃れる爲に、この藝術的感激の涙の中へ身を隱した。其處には一月六圓の間代もなければ、一升七十錢の米代もない。カルメンは電燈代の心配もなく、氣樂にカスタネットを鳴らしてゐる。浪子夫人も苦勞はするが、藥代の工面が出來ない次第ではない。一言にして云へばこの涙は、人間苦の黃昏のおぼろめく中に、人間愛の燈火をつつましやかにともしてくれる。ああ、東京の町の音も全く何處へか消えてしまふ眞夜中、涙に濡れた眼を擧けながら、うす暗い十燭の電燈の下に、たつた一人逗子の海風とコルドヴァの夾竹桃とを夢みてゐた、お君さんの姿を想像——畜生、惡意がない所か、うつかりしてゐるとおれまでも、サンティマンタアルになり兼ねないぞ。元來世間の批評家には情味がないと云はれてゐる、頗理智的なおれなのだが。

そのお君さんが或冬の夜、遲くなつてカッフェから歸つて來ると、始は例の如く机に向つて、「松井須磨子の一生」か何か讀んでゐたが、まだ一頁と行かない内に、どう云ふ譯かその書物に忽ち愛想をつかした如く、邪慳に疊の上へ抛り出してしまつた。と思ふと今度は横坐りに坐つた儘、机の上に頬杖をついて、壁の上のウィル——ベエトオフェンの肖像を冷淡にぼんやり眺め出した。これは勿論唯事ではない。お君さんはあのカッフェを解傭される事になつたのであらうか。さもなければお松さんのいぢめ方が一層猛烈になつたのであらうか。或は又さもなければ齲齒でも痛み出して來たのであらうか。いや、お君さんの心を支配してゐるのは、さう云ふ俗臭を帶びた事件ではない。お君さんは浪子夫人の如く、或は又松井須磨子の如く、戀愛に苦しんでゐるのである。では、お君さんは誰に心を寄せてゐるかと云ふと——幸、お君さんは壁の上のベエトオフェンを眺めた儘、暫くは身動きもしさうはないから、その間におれに大急ぎで、ちよいとこの光榮ある戀愛の相手を紹介しよう。

お君さんの相手は田中君と云つて、無名の——まあ藝術家である。何故かと云ふと田中君は、詩も作る、ヴァイオリンも彈く、油繪の具も使ふ、役者も勤める、歌骨牌も巧い、薩摩琵琶も出來ると云ふ才人だから、どれが本職でどれが道樂だか、鑑定の出來るものは一人もゐない。從つて又人物も、顏は役者の如くのつぺりしてゐて、髮は油繪の具の如くてらてらしてゐて、聲はヴァイオリンの如く優しくつて、言葉は詩の如く氣が利いてゐて、女を口說く事は歌骨牌をとる如く敏捷で、金を借り倒す事は薩摩琵琶をうたふ如く勇壯活潑を極めてゐる。それが黑い鍔廣の帽子をかぶつて、安物らしい獵服を着用して、葡萄色のボヘミアン・ネクタイを結んで——と云へば大抵わかりさうなものだ。思ふにこの田中君の如きは既に一種のタイプなのだから、神田本鄕邊のバアやカッフェ、靑年會館や音樂學校の音樂會（但し一番の安い切符の席に限るが）兜屋や三會堂の展覽會などへ行くと、必ず二三人はこの連中が、傲然と俗衆を睥睨してゐる。だからこの上明瞭な田中君の肖像が欲しければ、さう云ふ場所へ行つて見るが好い。おれが書くのはもう眞平御免だ。第一おれが田中君の紹介の勞を執つてゐる間に、お君さんは何時か立上つて、障子を開けた窓の外の寒い月夜を眺めてゐるのだから。

瓦屋根の上の月の光は、頸の細い硝子の花立てにさした造花の百合を照らしてゐる。壁に貼つたラファエルの小さなマドンナを照らしてゐる。さうして又お君さんの上を向いた鼻を照らしてゐる。が、お君さんの涼しい眼には、月の光も映つてゐない。霜の下りたらしい瓦屋根も、存在しないのと同じ事である。田中君は

今夜カッフェから、お君さんを此處まで送つて來た。さうして明日の晩は二人で、樂しく暮さうと云ふ約束までした。明日は丁度一月に一度あるお君さんの休日だから、午後六時に小川町の電車停留場で落合つて、それから芝浦にかかつてゐる伊太利人のサアカスを見に行かうと云ふのである。お君さんは今日までに、未嘗男と二人で遊びに出かけた覺えなどはない。だから明日の晩田中君と、世間の戀人同士のやうに、つれ立つて夜の曲馬を見に行く事を考へると、今更のやうに心臟の鼓動が高くなつて來る。お君さんにとつて田中君は、寶窟の扉を開くべき秘密の呪文を心得てゐるアリ・ババと更に違ひはない。その呪文が唱へられた時、如何なる未知の歡樂境がお君さんの前に出現するか。――さつきから月を眺めて月を眺めないお君さんが、風に煽られた海の如く、或は又將に走らんとする乘合自動車のモオタアの如く、轟く胸の中に描いてゐるのは、實にこの來るべき不可思議の世界の幻であつた。其處には薔薇の花の咲き亂れた路に、養殖眞珠の指環だの翡翠まがひの帶止めだのが、數限りもなく散亂してゐる。夜鶯の優しい聲も、既に三越の旗の上から、蜜を滴すやうに聞え始めた。橄欖の花の匂の中に大理石を畳んだ宮殿では、今やミスタア・ダグラス・フェアバンクスと森律子孃との舞踏が、愈佳境に入らうとしてゐるらしい。……

が、おれはお君さんの名譽の爲につけ加へる。その時お君さんの描いた幻の中には、時時暗い雲の影が、一切の幸福を脅すやうに、底氣味惡く去來してゐた。成程お君さんは田中君を戀してゐるのに違ひない。しかしその田中君は、實はお君さんの藝術的感激が圓光を頂かせた田中君である。詩も作る、ヴァイオリンも弾く、油繪の具も使ふ、役者も勤める、歌骨牌も巧い、薩摩琵琶も出來るサア・ランスロットである。だからお君さんの中にある處女の新鮮な直觀性は、どうかするとこのランスロットの頗怪しげな正體を感ずる事がないでもない。暗い不安の雲の影は、から云ふ時にお君さんの幻の中を通りすぎる。が、遺憾ながらその雲の影は、現れるが早いか消えてしまふ。お君さんはいくら大人じみてゐても、十六とか十七とか云ふ少女である。しかも藝術的感激に充ち滿ちてゐる少女である。著物を雨で濡らす心配があるか、ライン河の入日の畫端書に感歎の聲を洩らす時の外は、滅多に雲の影などへ心を止めないのも不思議ではない。況や今は薔薇の花の咲き亂れてゐる路に、養殖眞珠の指輪だの翡翠まがひの帶止めだのが――以下は前に書いた通りだから、其處を讀み返して頂きたい。

お君さんは長い間、シャヴァンヌの聖・ジュヌヴィヴの如く、月の光に照らされた瓦屋根を眺めて立つてゐたが、やがて嚔を一つすると、窓の障子をばたりとしめて、又元の机の際へ横坐りに坐つてしまつた。それから翌日の午後六時までお君さんが何をしてゐたか、その間の詳しい消息は、殘念ながらおれも知つてゐない。何故作者たるおれが知つてゐないかと云ふと――正直に云つてしまへ。おれは今夜中にこの小說を書き上げなければならないからである。

翌日の午後六時、お君さんは怪しげな紫紺の御召のコオトの上にクリイム色の肩掛をして、何時もよりはそはそはと、もう夕暗に包まれた小川町の電車停留場へ行つた。行くと既に田中君は、例の如く鍔廣の黒い帽子を目深くかぶつて、洋銀の握りのついた細い杖をかいこみながら、縞の荒い半オオヴァの襟を立てて、赤い電燈のともつた下に、ちゃんと佇んで待つてゐる。色の白い顔が何時もより一層又磨きがかか

つて、かすかに香水の匂ひを漂はせてゐる容子では、今夜は格別身じまひに注意を拂つてゐるらしい。

「御待たせして？」

お君さんは田中君の顔を見上げると、息のはずんでゐるやうな聲を出した。

「なあに。」

田中君は大様な返事をしながら、何とも判然しない微笑を含んだ眼で、ぢつとお君さんの顔を眺めた。それから急に身ぶるひを一つして、

「歩かう、少し。」

とつけ加へた。いや、つけ加へたばかりではない。田中君はもうこの時には、アアク燈に照らされた人通りの多い往來を、須田町の方へ向つて歩き出した。サアカスがあるのは芝浦である。歩くにしても此處からは、神田橋の方へ向つて行かなければならない。お君さんはまだ立ち止つた儘、埃風に飜るクリイム色の肩掛へ手をやつて、

「そつち？」

と不思議さうに聲をかけた。が、田中君は肩越しに、

「ああ。」

と輕く答へたぎり、依然として須田町の方へ歩いて行く。そこでお君さんも外に仕方がないから、すぐに田中君へ追ひつくと、葉を振つた柳の並樹の下を一しよにいそいそと歩き出した。すると又田中君は、あの何とも判然しない微笑を眼の中に漂はせて、お君さんの横顔を覗きながら、

「お君さんには御氣の毒だけれどもね、芝浦のサアカスは、もう昨夜でおしまひなんださうだ。だから今夜は僕の知つてゐる家へ行つて、一しよに御飯でも食べようぢやないか。」

「さう、私どつちでも好いわ。」

お君さんは田中君の手が、そつと自分の手を捉へたのを感じながら、希望と恐怖とにふるへてゐる、かすかな聲でかう云つた。と同時に又お君さんの眼にはまるで「不如歸」を讀んだ時のやうな、感動の涙が浮かんで來た。この感動の涙を透して見た、小川町、淡路町、須田町の往來が、如何に美しかつたかは問ふを待たない。歳暮大賣出しの樂隊の音、目まぐるしい仁丹の廣告電燈、クリスマスを祝ふ杉の葉の飾、蜘蛛手に張つた萬國國旗、飾窓の中のサンタ・クロス、露店に並んだ畫端書や日暦——すべてのものがお君さんの眼には、壯大な戀愛の歡喜を謳ひながら、世界のはてまでも燦びやかに續いてゐるかと思はれる。今夜に限つて天上の星の光も冷たくない。時時吹きつける埃風も、コオトの裾を捲くかと思ふと、忽ち春が返つたやうな爽い空氣に化つてしまふ。幸福、幸福、幸福、……

その内にふとお君さんが氣がつくと、二人は何時か横町を曲つたと見えて、路幅の狹い町を歩いてゐる。さうしてその町の右側に、一軒の小さな八百屋があつて、明く瓦斯の燃えた下に、大根、人參、漬け菜、葱、小蕪、慈姑、牛蒡、八つ頭、小松菜、獨活、蓮根、里芋、林檎、蜜柑の類が堆く店に積み上げてある。その八百屋の前を通つた時、お君さんの視線は何かの拍子に、葱の山の中に立つてゐる、竹に燭奴を挾んだ札の上へ落ちた。札には墨黑く下手な字で、一束四錢と書いてある。あらゆる物價が暴騰した今日、一束四錢と云ふ葱は滅多にない。この至廉な札を眺めると共に、今まで戀愛と藝術とに醉つてゐた、お君さんの幸福な心の中には、其處に潛んでゐた實生活が、突如としてその惰眠から覺めた。間髪を入れずとは正にこの謂である。薔薇と指環と夜鶯と三越の旗とは、刹那に眼底を拂つて消えてしまつた。その代り間代、米代、電燈代、炭代、肴代、醤油代、

新聞代、化粧代、電車賃――その外ありとあらゆる生活費が、過去の苦しい經驗と一しよに、恰も火取蟲の火に集る如く、お君さんの小さな胸の中に、四方八方から群つて來る。お君さんは思はずその八百屋の前へ足を止めた。それから呆氣にとられてゐる田中君を一人後に殘して、鮮な瓦斯の光を浴びた青物の中へ足を入れた。しかも遂にはその華奢な指を伸べて、一束四錢の札が立つてゐる葱の山を指すと、「さすらひ」の歌でもうたふやうな聲で、

「あれを二束下さいな。」

と云つた。

埃風の吹く往來には、黑い鍔廣の帽子をかぶつて、縞の荒い半オオヴァの襟を立てた田中君が、洋銀の握りのある細い杖をかいこみながら、孤影悄然として立つてゐる。田中君の想像には、さつきからこの町のはづれにある、格子戸造の家が浮んでゐた。軒に松の家と云ふ電燈の出た、沓脱ぎの石が濡れてゐる、安普請らしい二階家である。が、かうして往來に立つてゐると、その小ぢんまりした二階家の影が、妙にだんだん薄くなつてしまふ。さうしてその後には徐に一束四錢の札を打つた葱の山が浮んで來る。と思ふと忽ち想像が破れて、一陣の埃風が過ぎると共に、實生活の如く辛辣な、眼に滲む如き葱の匂が實際田中君の鼻を打つた。

「御待ち遠さま。」

憐むべき田中君は、世にも情無い眼つきをして、まるで別人でも見るやうに、じろじろお君さんの顏を眺めた。髮を綺麗にまん中から割つて、忘れな草の簪をさした、鼻の少し上を向いてゐるお君さんは、クリイム色の肩掛をちよいと顋でおさへた儘、片手に二束八錢の葱を下げて立つてゐる。あの涼しい眼の中に嬉しさうな微笑を躍らせながら。

とうとうどうにか書き上げたぞ。もう夜が明けるのも間はあるまい。外では寒さうな鷄の聲がしてゐるが、折角これを書き上げても、いやに氣のふさぐのはどうしたものだ。お君さんはその晩何事もなく、又あの女髮結の二階へ歸つて來たが、カッフェの女給仕をやめない限り、その後も田中君と二人で遊びに出る事がないとは云へまい。その時の事を考へると、――いや、その時は又その時の事だ。おれが今いくら心配した所で、どうにもなる譯のものではない。まあこの儘でペンを擱かう。左樣なら。お君さん、では今夜もあの晩のやうに、此處からいそいそ出て行つて、勇ましく――批評家に退治されて來給へ。

（大正八年十二月作）

女の顏

女は情熱に驅られると、不思議にも少女らしい顏をするものである。尤もその情熱なるものはパラソルに對する情熱でも差支へない。

女人

健全なる理性は命令してゐる。――「爾、女人に近づく勿れ。」

しかし健全なる本能は全然反對に命令してゐる。――「爾、女人を避くる勿れ。」

又

女人は我我男子には正に人生そのものである。即ち諸惡の根源である。

（『侏儒の言葉』より）

秋

一

信子は女子大學にゐた時から、才媛の名聲を擔つてゐた。彼女が早晩作家として文壇に打つて出る事は、殆 誰も疑はなかつた。中には彼女が在學中、既に三百何枚かの自叙傳體小說を書き上げたなどと吹聽して步くものもあつた。が、學校を卒業して見ると、まだ女學校も出てゐない妹の照子と彼女とを抱へて、後家を立て通して來た母の手前も、さうは我儘を云はれない、複雜な事情もないではなかつた。そこで彼女は創作を始める前に、まづ世間の習慣通り、緣談からきめてかかるべく餘儀なくされた。

彼女には俊吉と云ふ從兄があつた。彼は當時まだ大學の文科に籍を置いてゐたが、やはり將來は作家仲間に身を投ずる意志があるらしかつた。信子はこの從兄の大學生と、昔から親しく往來してゐた。それが互に文學と云ふ共通の話題が出來てからは、愈親しみが增した。唯、彼は信子と違つて、當世流行のトルストイズムなどには一向敬意を表さなかつた。さうして始終フランス仕込みの皮肉や警句ばかり並べてゐた。から云ふ俊吉の冷笑的な態度は、時時萬事眞面目な信子を怒らせてしまふ事があつた。が、彼女は怒りながらも俊吉の皮肉や警句の中に、何か輕蔑出來ないものを感じない譯には行かなかつた。

だから彼女は在學中も、彼と一しよに展覽會や音樂會へ行く事が稀ではなかつた。尤も大抵そんな時には、妹の照子も同伴であつた。彼等三人は往きも返りも、氣兼ねなく笑つたり話したりした。が、妹の照子だけは、時時話の圈外へ置きざりにされる事もあつた。それでも照子は子供らしく、飾窓の中のパラソルや絹のショオルを覗き步いて、格別閑却された事を不平に思つてもゐないらしかつた。信子はしかしそれに氣がつくと、必話頭を轉換して、すぐに又元の通り妹にも口をきかせようとした。その癖まづ照子を忘れるものは、何時も信子自身であつた。俊吉はすべてに無頓著なのか、不相變[illegible]、目まぐるしい往來の人通りの中を、大股にゆつくり步いて行つた。

信子と從兄との間がらは、勿論誰の目に見ても、來るべき彼等の結婚を豫想させるのに十分であつた。同窓たちは彼女の未來をてんでに羨んだり妬んだりした。殊に俊吉を知らないものは、(滑稽と云ふより外はないが、)一層これが甚しかつた。信子も亦一方では彼等の推測を打ち消しながら、他方ではその確な事をそれとなく故意に仄かせたりした。從つて同窓たちの頭の中には、彼等が學校を出るまでの間に、何時か彼女と俊吉との姿が、恰も新婦新郎の寫眞の如く、一しよにはつきり燒きつけられてゐた。

所が學校を卒業すると、信子は彼等の豫期に反して、大阪の或商事會社へ近頃勤務する事になつた、高商出身の青年と、突然結婚してしまつた。さうして式後二三日してから、新夫と一しよに勤め先きの大阪へ向けて立つてしまつた。その時中央停車場へ見送りに行つたものの話によると、信子は何時もと變りなく、晴れ晴れした微笑を浮べながら、ともすれば涙を落し勝ちな妹の照子をいろいろと慰めてゐたと云ふ事であつた。

同志たちは皆不思議がつた。その不思議がる心の中には、妙に嬉しい感情と、前とは全然違つた意味で妬ましい感情とが交つてゐた。或者は彼女を信頼して、すべてを母親の意志に歸した。又或ものは彼女を疑つて、心がはりがしたとも云ひふらした。が、それらの解釋が結局想像に過ぎない事は、彼等自身さへ知らない譯ではなかつた。彼女はなぜ俊吉と結婚しなかつたか？　彼等はその後暫くの間、よるとさはると重大らしく、必この疑問を話題にした。さうして彼是二月ばかり經つと――全く信子を忘れてしまつた。勿論彼女が書く筈だつた長篇小說の噂なぞも。

信子はその間に大阪の郊外へ、幸福なるべき新家庭をつくつた。彼等の家はその界隈でも、最も閑靜な松林にあつた。松脂の匂と日の光と、――それが何時でも夫の留守は、二階建の新しい借家の中に、活き活きした沈默を領してゐた。信子はさう云ふ寂しい午後、時時理由もなく氣が沈むと、きつと針箱の引出しを開けては、その底に疊んでしまつてある桃色の書簡箋をひろげて見た。書簡箋の上にはこんな事が、細細とペンで書いてあつた。

「――もう今日かぎり御姉樣と御一しよにゐる事が出來ないと思ふと、これを書いてゐる間でさへ、止め度なく涙が溢れて來ます。御姉樣、どうか、どうか私を御赦し下さい。照子は勿體ない御姉樣の犧牲の前に、何と申し上げて好いかもわからずに居ります。

「御姉樣は私の爲に、今度の御縁談を御きめになりました。さうではないと仰有つても、私にはよくわかつて居ります。何時ぞや御一しよに帝劇を見物した晩、御姉樣は私に俊さんは好きかと御尋きになりました。それから又好きならば、御姉樣はきつと骨を折るから俊さんの所へ行けとも仰有いました。あの時もう御姉樣は、私が俊さんに差上げる筈の手紙を讀んでいらしつたのでせう。あの手紙がなくなつた時ほんたうに私は御姉樣を御恨めしく思ひました。（御免遊ばせ。この事だけでも私はどの位申し譯がないかわかりません。）ですからその晩も私には、御姉樣の親切な御言葉も、皮肉のやうな氣さへ致しました。私が怒つて御返事らしい御返事も碌に致さなかつた事は、もちろん御忘れになりもなさりますまい。けれどもあれから二三日經つて、御姉樣の御縁談が急にきまつてしまつた時、私はそれこそ死んででも、御詫びをしようかと思ひました。御姉樣も俊さんが御好きなのでございますもの。（御隱しになつてはいや。私はよく存じて居りましてよ。）私の事さへ御かまひにならなければ、きつと御自分が俊さんの所へいらしつたのに違ひございません。それでも御姉樣は私に、俊さんなぞは思つてゐないと、何度も繰返して仰有いました。さうしてとうとう心にもない御結婚をなすつて御しまひになりました。私の大事な御姉樣。私が今日鷄を抱いて來て、大阪へいらつしやる御姉樣に、御挨拶をなさいと申した事をまだ覺えていらしつて？　私は飼つてゐる鷄にも、私と一しよに御姉樣へ御詫びを申して貰ひたかつたの。さうしたら、何にも御存知ない御母樣まで御泣きになりましたのね。

「御姉樣。もう明日は大阪へいらしつて御しまひなさるでせう。けれどもどうか何時までも、御姉樣の照子を見捨てずに頂戴、照子は每朝鷄に餌をやりながら、御姉樣の事を思ひ出して、誰にも知れず泣いてゐます。……」

信子はこの少女らしい手紙を讀む每に、必涙が滲んで來た。殊に中央停車場から汽車に乘らうとする間際、そつとこの手紙を彼女に渡した照子の姿を思ひ出すと、何とも云はれずにい

らしかつた。が、彼女の結婚は果して妹の想像通り、全然犠牲的なそれであらうか。さう疑を挾む事は、涙の後の彼女の心へ、重苦しい氣もちを擴げ勝ちであつた。信子はこの重苦しさを避ける爲に、大抵はぢつと快い感傷の中に浸つてゐた。そのうちに外の松林へ一面に當つた日の光が、だんだん黄ばんだ暮方の色に變つて行くのを眺めながら。

二

結婚後彼是三月ばかりは、あらゆる新婚の夫婦の如く、彼等も亦幸福な日を送つた。

夫は何處か女性的な、口數を利かない人物であつた。それが毎日會社から歸つて來ると、必晩飯後の何時間かは、信子と一しよに過す事にしてゐた。信子は編物の針を動かしながら、近頃世間に騷がれてゐる小說や戲曲の話などもした。その話の中には時によると、基督教の匂のする女子大學趣味の人生觀が織りこまれてゐる事もあつた。夫は晩酌の頰を赤らめた儘、讀みかけた夕刊を膝へのせて、珍しさうに耳を傾けてゐた。が、彼自身の意見らしいものは、一言も加へた事がなかつた。

彼等は又殆日曜毎に、大阪やその近郊の遊覽地へ氣散じな一日を暮しに行つた。信子は汽車電車へ乘る度に、何處でも飮食する事を憚らない關西人が皆卑しく見えた。それだけおとなしい夫の態度が、格段に上品なのを嬉しく感じた。實際身綺麗な夫の姿は、さう云ふ人中に交つてゐると、帽子からも、背廣からも、或は又赤皮の編上げからも、化粧石鹸の匂に似た、一種清新な雰圍氣を放散させてゐるやうであつた。殊に夏の休暇中、舞子まで足を延した時には、同じ茶屋に來合せた夫の同僚たちに比べて見て、一層誇りがましいやうな心もちがせずにはゐられなかつた。が、夫はその下卑た同僚たちに、存外親しみを持つてゐるらしかつた。

その内に信子は長い間、捨ててあつた創作を思ひ出した。そこで夫の留守の内だけ、一二時間づつ机に向ふ事にした。夫はその話を聞くと、「愈女流作家になるかね。」と云つて、やさしい口もとに薄笑ひを見せた。しかし机には向ふにしても、思ひの外ペンは進まなかつた。彼女はぼんやり頰杖をついて、炎天の松林の蟬の聲に、我知れず耳を傾けてゐる彼女自身を見出し勝ちであつた。

所が殘暑が初秋へ振り變らうとする時分、夫は或日會社の出がけに、汗じみた襟を取變へようとした。が、生憎襟は一本殘らず洗濯屋の手に渡つてゐた。夫は日頃身綺麗なだけに、不快らしく顏を曇らせた。さうしてズボン吊を掛けながら、「小說ばかり書いてゐちや困る。」と何時になく厭味を云つた。信子は默つて眼を伏せて、上衣の埃を拂つてゐた。

それから二三日過ぎた或夜、夫は夕刊に出てゐた食糧問題から、月月の經費をもう少し輕減出來ないものかと云ひ出した。「お前だつて何時までも女學生ぢやあるまいし。」——そんな事も口へ出した。信子は氣のない返事をしながら、夫の襟飾の絹刺しをしてゐた。すると夫は意外な位執拗に、「その襟飾にしてもさ、買ふ方が反つて安くつくぢやないか。」と、やはりねちねちした調子で云つた。彼女は猶更口が利けなくなつた。夫もしまひには白けた顏をして、つまらなさうに商賣向きの雜誌か何かばかり讀んでゐた。が、寢室の電燈を消してから、信子は夫に背を向けた儘、「もう小說なんぞ書きません。」と、囁くやうな聲で云つた。夫はそれでも默つてゐた。暫くして彼女は、同じ言葉を前よりもかすかに繰返した。それから間もなく泣く聲が洩れた。夫は二言三言彼女を叱つた。その後でも彼女の啜泣きは、まだ絶え絶え

に聞えてゐた。が、信子は何時の間にか、しつかりと夫にすがつてゐた。……

翌日彼等は又元の通り、仲の好い夫婦に返つてゐた。

と思ふと今度は十二時過ぎても、まだ夫が會社から歸つて來ない晩があつた。しかも漸く歸つて來ると、雨外套も一人では脫げない程、酒臭い匂を呼吸してゐた。信子は眉をひそめながら、甲斐甲斐しく夫に著換へさせた。夫はそれにも關らず、まはらない舌で皮肉さへ云つた。「今夜は僕が歸らなかつたから、餘つ程小說が捗取つたらう。」――さう云ふ言葉が、何度となく女のやうな口から出た。彼女はその晩床にはひると、思はず涙がほろほろ落ちた。こんな處を照子が見たら、どんなに一しよに泣いてくれるであらう。照子、照子。私が便りに思ふのは、たつたお前一人ぎりだ。――信子は度度心の中でから妹に呼びかけながら、夫の酒臭い寢息に苦しまされて、殆夜中まんじりともせずに、寢返りばかり打つてゐた。

が、それも翌日になると、自然と仲直りが出來上つてゐた。

そんな事が何度か繰返される内に、だんだん秋が深くなつて來た。信子は何時か机に向つて、ペンを執る事が稀になつた。その時にはもう夫の方も、前程彼女の文學談を珍しがらないやうになつてゐた。彼等は夜毎に長火鉢を隔てて、瑣末な家庭の經濟の話に時間を殺す事を覺え出した。その上又かう云ふ話題は、少くとも晩酌後の夫にとつて、最も興味があるらしかつた。それでも信子は氣の毒さうに、時時夫の顏色を窺つて見る事があつた。が、彼は何も知らず、近頃延した髭を嚙みながら、何時もより餘程快活に、「これで子供でも出來て見ると――」なぞと、考へ考へ話してゐた。

するとその頃から月月の雜誌に、從兄の名前が見えるやうになつた。信子は結婚後忘れたやうに、俊吉との文通を絕つてゐた。唯、彼の動靜は、――大學の文科を卒業したとか、同人雜誌を始めたとか云ふ事は、妹から手紙で知るだけであつた。又それ以上彼の事を知りたいと云ふ氣も起さなかつた。が、彼の小說が雜誌に載つてゐるのを見ると、懷しさは昔と同じであつた。彼女はその頁をはぐりながら、何度も獨り微笑を洩らした。俊吉はやはり小說の中でも、冷笑と諧謔との二つの武器を宮本武藏のやうに使つてゐた。彼女にはしかし氣のせゐか、その輕快な皮肉の後に、何か今までの從兄にはない、寂しさうな捨鉢の調子が潜んでゐるやうに思はれた。と同時にさう思ふ事が、後めたいやうな氣もしないではなかつた。

信子はそれ以來夫に對して、一層優しく振舞ふやうになつた。夫は夜寒の長火鉢の向うに、何時も晴れ晴れと微笑してゐる彼女の顏を見出した。その顏は以前より若若しく、化粧をしてゐるのが常であつた。彼女は針仕事の店を擴げながら、彼等が東京で式を擧げた當時の記憶なぞも話したりした。夫にはその記憶の細かいのが、意外でもあり、嬉しさうでもあつた。「お前はよくそんな事まで覺えてゐるね。」――夫にかう調戲はれると、信子は必無言の儘、眼にだけ媚のある返事を見せた。が、何故それ程忘れずにゐるか、彼女自身も心の内では、不思議に思ふ事が度度あつた。

それから程なく、母の手紙が、信子に妹の結納が濟んだと云ふ事を報じて來た。その手紙の中には又、俊吉が照子を迎へる爲に、山の手の或郊外へ新居を設けた事もつけ加へてあつた。彼女は早速母と妹とへ、長い祝ひの手紙を書いた。「何分當方は無人故、式には不本意ながら參りかね候へども……」――そんな文句を書いてゐる内に、彼女には何故かわからなかつた

か、言の濁る事も再三あつた。すると彼女は眼を擧げて、窓外の松林を眺めた。松は初冬の空の下に、簇簇と蒼黒く茂つてゐた。

その晩信子と夫とは、照子の結婚を話題にした。夫は何時もの薄笑ひを浮べながら、彼女が妹の口眞似をするのを、面白さうに聞いてゐた。が、彼女には何となく、彼女自身に照子の事を話してゐるやうな心もちがした。「どれ、寝るかな。」——二三時間の後、夫は柔な髭を撫でながら、大儀さうに長火鉢の前を離れた。信子はまた妹へ祝つてやる品を決し兼ねて、火箸で灰文字を書いてゐたが、この時急に顏を擧げて、「でも妙なものね。私にも弟が一人出來るのだと思ふと。」と云つた。「當り前ぢやないか、妹もゐるんだから。」——彼女は夫にかう云はれても、考深い眼つきをした儘何とも返事をしなかつた。

照子と俊吉とは、師走の中旬に式を擧げた。當日は午少し前から、ちらちら白い物が落ち始めた。信子は獨り午の食事をすませた後、何時までもその時の魚の匂が、口について離れなかつた。「東京も雪が降つてゐるかしら。」——こんな事を考へながら、信子はぢつとうす暗い茶の間の長火鉢にもたれてゐた。雪は愈烈しくなつた。が、口中の生臭さは、やはり執念く消えなかつた。……

三

信子はその翌年の秋、社命を帯びた夫と一しよに、久しぶりで東京の土を踏んだ。が、短い日限内に、果すべき用向きの多かつた夫は、唯彼女の母親の所へ、匆匆顔を出した時の外は、殆一日も彼女をつれて、外出する機會を見出さなかつた。彼女はそこで妹夫婦の郊外の新居を尋ねる時も、新開地じみた電車の終點から、たつた一人車に揺られて行つた。

彼等の家は、町並が葱畑に移る近くにあつた。しかし隣近所には、いづれも借家らしい新築が、せせこましく軒を並べてゐた。のき打ちの門、要もちの垣、それから竿に干した洗濯物、——すべてがどの家も變りはなかつた。この平凡な住居の容子は、多少信子を失望させた。

が、彼女が案内を求めた時、聲に應じて出て來たのは、意外にも從兄の方であつた。俊吉は以前と同じやうに、この珍客の顏を見ると、「やあ。」と快活な聲を上げた。彼女は彼が何時の間にか、いが栗頭でなくなつたのを見た。「暫く。」「さあ、御上り。生憎僕一人だが。」——「照子は？」「留守？」「使に行つた。女中も。」——信子は妙に恥しさを感じながら、派手な裏のついた上衣をそつと玄關の隅に脱いだ。

俊吉は彼女を書齋兼客間の八疊へ坐らせた。座敷の中には何處を見ても、本ばかり亂雜に積んであつた。殊に午後の日の當つた障子際の、小さな紫檀の机のまはりには、新聞雜誌や原稿用紙が、手のつけやうもない程散らかつてゐた。その中に若い細君の存在を語つてゐるものは、唯床の間の壁に立てかけた、新しい一面の琴だけであつた。信子はかう云ふ周圍から、暫く物珍しい眼を離さなかつた。

「來る事は手紙で知つてゐたけれど、今日來ようとは思はなかつた。」——俊吉は卷煙草へ火をつけると、さすがに懷しさうな眼つきをした。「どうです、大阪の御生活は？」「俊さんこそ如何？幸福？」——信子も亦二言三言話す内に、やはり昔のやうな懷しさが、よみ返つて來るのを意識した。文通さへ碌にしなかつた、彼是二年越しの氣まづい記憶は、思つたより彼女を煩さなかつた。

彼等は一つ火鉢に手をかざしながら、いろいろな事を話し合つた。俊吉の小説だの、共通な知人の噂だの、東京と大阪との比較だの、話

題はいくら話しても、盡きない位澤山あつた。が、二人とも云ひ合せたやうに全然暮し向きの問題には觸れなかつた。それが信子には一層從兄と、話してゐると云ふ感じを强くさせた。

時時はしかし沈默が、二人の間に來る事もあつた。その度に彼女は微笑した儘、眼を火鉢の灰に落した。其處には待つとは云へない程、かすかに何かを待つ心もちがあつた。すると故意か偶然か、俊吉はすぐに話題を見つけて、何時もその心もちを打ち破つた。彼女は次第に從兄の顏を窺はずにはゐられなくなつた。が、彼は平然と卷煙草の煙を呼吸しながら、格別不自然な表情を裝つてゐる氣色も見えなかつた。

その内に照子が歸つて來た。彼女は姉の顏を見ると、手をとり合はないばかりに嬉しがつた。信子も脣は笑ひながら、眼には何時かもう涙があつた。二人は暫くは俊吉も忘れて、去年以來の生活を互に尋ねたり尋ねられたりしてゐた。殊に照子は活き活きと、血の色を頰に透かせながら、今でも飼つてゐる鷄の事まで、話して聞かせる事を忘れなかつた。俊吉は卷煙草を銜へた儘、滿足さうに二人を眺めて、不相變にやにやと笑つてゐた。

其處へ女中も歸つて來た。俊吉はその女中の手から、何枚かの端書を受取ると、早速側の机へ向つて、せつせとペンを動かし始めた。照子は女中も留守だつた事が、意外らしい氣色を見せた。「ぢや御姉様がいらしつた時には、誰も家にゐなかつたの。」「ええ、俊さんだけ。」――信子はかう答へる事が、平氣を强ひるやうな心もちがした。すると俊吉が向うを向いたなり、「旦那樣に感謝しろ。その茶も僕が入れたんだ。」と云つた。照子は姉と眼を見合せて、惡戲さうにくすりと笑つた。が、夫にはわざとらしく、何とも返事をしなかつた。

間もなく信子は、妹夫婦と一しよに、晩飯の食卓を圍む事になつた。照子の說明する所によると、膳に上つた玉子は皆、家の鷄が産んだものであつた。俊吉は信子に葡萄酒をすすめながら、「人間の生活は掠奪で持つてゐるんだね。小はこの玉子から――」なぞと社會主義じみた理窟を並べたりした。その癖此處にゐる三人の中で、一番玉子に愛著のあるのは俊吉自身に違ひなかつた。照子はそれが可笑しいと云つて、子供のやうな笑ひ聲を立てた。信子はかう云ふ食卓の空氣にも、遠い松林の中にある、寂しい茶の間の暮方を思ひ出さずにはゐられなかつた。

話は食後の果物を荒した後も盡きなかつた。微醉を帶びた俊吉は、夜長の電燈の下にあぐらをかいて、盛に彼一流の詭辯を弄した。その談論風發が、もう一度信子を若返らせた。彼女は熱のある眼つきをして、「私も小說を書き出さうかしら。」と云つた。すると從兄は返事をする代りに、グウルモンの警句を抛りつけた。それは「ミユウズたちは女だから、彼等を自由に虜にするものは、男だけだ。」と云ふ言葉であつた。信子と照子とは同盟して、グウルモンの權威を認めなかつた。「ぢや女でなけりや、音樂家になれなくつて？　アポロは男ぢやありませんか。」――照子は眞面目にこんな事まで云つた。

その暇に夜が更けた。信子はとうとう泊る事になつた。

寢る前に俊吉は、緣側の雨戸を一枚開けて、寢間著の儘狹い庭へ下りた。それから誰を呼ぶともなく、「ちよいと出て御覽。好い月だから。」と聲をかけた。信子は獨り彼の後から、沓脫ぎの庭下駄へ足を下した。足袋を脫いだ彼女の足には、冷たい露の感じがあつた。

月は庭の隅にある、瘦せがれた檜の梢にあつた。從兄はその檜の下に立つて、うす明い夜空を眺めてゐた。「大へん草が生えてゐるの

ね。」――信子は荒れた庭を氣味惡さうに、怯づ怯づ彼のゐる方へ歩み寄つた。が、彼はやはり空を見ながら、「十三夜かな。」と呟いただけであつた。

暫く沈黙が續いた後、俊吉は靜に眼を返して、「鶏小屋へ行つて見ようか。」と云つた。信子は黙つて頷いた。鶏小屋は丁度檜とは反對の庭の隅にあつた。二人は肩を並べながら、ゆつくり其處まで歩いて行つた。しかし蓆囲ひの内には、唯鶏の匂のする、朧げな光と影ばかりがあつた。俊吉はその小屋を覗いて見て、殆ど獨り言かと思ふやうに、「寝てゐる。」と彼女に囁いた。「玉子を人に取られた鶏が。」――信子は草の中に佇んだ儘、さう考へずにはゐられなかつた。……

二人が庭から返つて來ると、照子は夫の机の前に、ぼんやり電燈を眺めてゐた。青い横ばいがたつた一つ、笠に這つてゐる電燈を。

四

翌朝俊吉は一張羅の背廣を著て、食後匆匆玄關へ行つた。何でも亡友の一周忌の墓參をするのだとか云ふ事であつた。「好いかい。待つてゐるんだぜ。午頃までにやきつと歸つて來るから。」――彼は外套をひつかけながら、かう信子に念を押した。が、彼女は華奢な手に彼の中折を持つた儘、黙つて微笑したばかりであつた。

照子は夫を送り出すと、姉を長火鉢の向うに招じて、まめまめしく茶をすすめなどした。隣の奥さんの話、訪問記者の話、それから俊吉と見に行つた或外國の歌劇團の話、――その外愉快なるべき話題が、彼女にはまだいろいろあるらしかつた。が、信子の心は沈んでゐた。彼女はふと氣がつくと、何時も好い加減な返事ばかりしてゐる彼女自身が其處にあつた。それがとうとうしまひには、照子の眼にさへ止るやうになつた。妹は心配さうに彼女の顔を覗きこんで、「どうして?」と尋ねてくれたりした。しかし信子にもどうしたのだか、はつきりした事はわからなかつた。

柱時計が十時を打つた時、信子は懶さうな眼を擧げて、「俊さんは中中歸りさうもないわね。」と云つた。照子も姉の言葉につれて、ちよいと時計を仰いだが、これは存外冷淡に、「まだ――」とだけしか答へなかつた。信子にはその言葉の中に、夫の愛に飽き足りてゐる新妻の心があるやうな氣がした。さう思ふと愈彼女の氣もちは、憂鬱に傾かずにはゐられなかつた。

「照さんは幸福ね。」――信子は顎を半襟に埋めながら、冗談のやうにかう云つた。が、自然と其處へ忍びこんだ、眞面目な羨望の調子だけは、どうする事も出來なかつた。照子はしかし無邪氣らしく、やはり活き活きと微笑しながら、「覺えていらつしやい。」と睨む眞似をした。それからすぐに又「御姉様だつて幸福の癖に。」と、甘えるやうにつけ加へた。その言葉がぴしりと信子を打つた。

彼女は心もち眶を上げて、「さう思つて?」と問ひ返した。問ひ返して、すぐに後悔した。照子は一瞬間妙な顔をして、姉と眼を見合せた。その顔にも亦蔽ひ難い後悔の色が動いてゐた。信子は強ひて微笑した。――「さう思はれるだけでも幸福ね。」

二人の間には沈黙が來た。彼等は柱時計の時を刻む下に、長火鉢の鐵瓶がたぎる音を聞くともなく聞き澄ませてゐた。

「でも御兄様は御優しくはなくつて?」――やがて照子は小さな聲で、恐る恐るかう尋ねた。その聲の中には明かに、氣の毒さうな響が籠つてゐた。が、この場合信子の心は、何よりも憐憫を反撥した。彼女は新聞を膝の上へのせて、それに眼を落したなり、わざと何とも答へなかつた。

つた。新聞には大阪と同じやうに、米價問題が掲げてあつた。

　その内に靜な茶の間の中には、かすかに人の泣くけはひが聞え出した。信子は新聞から眼を離して、袂を顏に當てた妹を長火鉢の向うに見出した。「泣かなくつたつて好いのよ。」――照子は姉にさう慰められても、容易に泣き止まうとはしなかつた。信子は殘酷な喜びを感じながら、暫くは妹の震へる肩へ無言の視線を注いでゐた。それから女中の耳を憚るやうに、照子の方へ顏をやりながら、「惡かつたら、私があやまるわ。私は照さんさへ幸福なら、何より難有いと思つてるの。ほんたうよ。俊さんが照さんを愛してゐてくれれば――」と、低い聲で云ひ續けた。云ひ續ける内に、彼女の聲も、彼女自身の言葉に動かされて、だんだん感傷的になり始めた。すると突然照子は袖を落して、涙に濡れてゐる顏を擧げた。彼女の眼の中には、意外な事に、悲しみも怒りも見えなかつた。が、唯、抑へ切れない嫉妬の情が、燃えるやうに瞳を火照らせてゐた。「ぢや御姉樣は――御姉樣は何故昨夜も――」照子は皆まで云はない内に、又顏を袖に埋めて、發作的に烈しく泣き始めた。……

　二三時間の後、信子は電車の終點に急ぐべく、幌俥の上に搖られてゐた。彼女の眼にはひる外の世界は、前部の幌を切りぬいた、四角なセルロイドの窓だけであつた。其處には場末らしい家と色づいた雜木の梢とが、徐にしかも絶え間なく、後へ後へと流れて行つた。もしその中に一つでも動かないものがあれば、それは薄雲を漂はせた、冷やかな秋の空だけであつた。

　彼女の心は靜かであつた。が、その靜かさを支配するものは、寂しい諦めに外ならなかつた。照子の發作が終つた後、和解は新しい涙と共に、容易く二人を元の通り仲の好い姉妹に返してゐた。しかし事實は事實として、今でも信子の心を離れなかつた。彼女は從兄の歸りも待たず、この俥上に身を託した時、既に妹とは永久に他人になつたやうな心もちが、意地惡く彼女の胸の中に氷を張らせてゐたのであつた。――

　信子はふと眼を擧げた。その時セルロイドの窓の中には、ごみごみした町を歩いて來る、杖を抱へた從兄の姿が見えた。彼女の心は動搖した。俥を止めようか。それともこの儘行き違はうか。彼女は動悸を抑へながら、暫くは唯幌の下に、空しい逡巡を重ねてゐた。が、俊吉と彼女との距離は、見る見る内に近くなつて來た。彼は薄日の光を浴びて、水溜りの多い往來にゆつくりと靴を運んでゐた。

「俊さん。」――さう云ふ聲が一瞬間、信子の唇から洩れようとした。實際俊吉はその時もう、彼女の俥のすぐ側に、見慣れた姿を現してゐた。が、彼女は又ためらつた。その暇に何も知らない彼は、とうとうこの幌俥とすれ違つた。薄濁つた空、疎な屋並、高い木木の梢、――後には不相變人通りの少い場末の町があるばかりであつた。

「秋――」

　信子はうすら寒い幌の下に、全身で寂しさを感じながら、しみじみかう思はずにはゐられなかつた。

（大正八年三月作）

忍從

忍從はロマンティックな卑屈である。

（『侏儒の言葉』より）

黒衣聖母

——この涙の谷に呻き泣きて、御身に願ひをかけ奉る。……御身の憐みの御眼をわれらに廻らせ給へ。……深く御柔軟、深く御哀憐、すぐれて甘くましますびるぜん、さんたさりや様——

——和譯「けれんど」——

「どうです、これは。」

田代君はかう云ひながら、一體の麻利耶觀音を卓子の上へ載せて見せた。

麻利耶觀音と稱するのは、切支丹宗門禁制時代の天主教徒が、屢、聖母麻利耶の代りに禮拜した、多くは白磁の觀音像である。が、今田代君が見せてくれたのは、その麻利耶觀音の中でも、博物館の陳列室や世間普通の蒐集家のキャビネットにあるやうなものではない。第一これは顏を除いて、他は悉く黒檀を刻んだ、一尺ばかりの立像である。のみならず頸のまはりへ懸けた十字架形の瓔珞も、金と青貝とを象嵌した、極めて精巧な細工らしい。その上顏は美しい牙彫りで、しかも脣には珊瑚のやうな、一點の朱まで加へてある。……

私は黙つて腕を組んだ儘、暫くはこの黒衣聖母の美しい顏を眺めてゐたが、眺めてゐる内に、何か怪しい表情が、象牙の顏の何處だかに、漂つてゐるやうな心もちがした。いや、怪しいと云つたのでは物足りない。私にはその顏全體が、或惡意を帶びた嘲笑を漲らしてゐるやうな氣さへしたのである。

「どうです、これは。」

田代君はあらゆる蒐集家に共通な矜誇の微笑を浮べながら、卓子の上の麻利耶觀音と私の顏とを見比べて、もう一度かう繰返した。

「これは珍品ですね。が、何だかこの顏は、無氣味な所があるやうぢやありませんか。」

「圓滿具足の相好とは行きませんかな。さう云へばこの麻利耶觀音には、妙な傳説が附隨してゐるのです。」

「妙な傳説？」

私は眼を麻利耶觀音から、思はず田代君の顏に移した。田代君は存外眞面目な表情を浮べながら、ちよいとその麻利耶觀音を卓上から取り上げたが、すぐに又元の位置に戻して、

「ええ、これは禍を轉じて福とする代りに、福を轉じて禍とする、縁起の惡い聖母だと云ふ事ですよ。」

「まさか。」

「處が實際さう云ふ事實が、持ち主にあつたと云ふのです。」

田代君は椅子に腰を下すと、殆、物思はしげなとも形容すべき、陰鬱な眼つきになりながら、私にも卓子の向うの椅子へ、かけろと云ふ手眞似をして見せた。

「ほんたうですか。」

私は椅子へかけると同時に、我知らず怪しい聲を出した。田代君は私より一二年前に大學を卒業した、秀才の聞えの高い法學士である。且又私の知つてゐる限り、所謂超自然的現象には寸毫の信用も置いてゐない、教養に富んだ新思想家である。その田代君がこんな事を云ひ出す以上、まさかその妙な傳説と云ふのも、荒唐無稽な怪談ではあるまい。——

「ほんたうですか。」

私が再から念を押すと、田代君は燐寸の火を徐にパイプへ移しながら、

「さあ、それはあなた自身の御判斷に任せるより外はありますまい。が、兎も角もこの麻利耶觀音には、氣味の悪い因縁があるのださうです。御退屈でなければ、御話しますが。――」

この麻利耶觀音は、私の手にはひる以前、新潟縣の或町の稻見と云ふ素封家にあつたのです。勿論骨董としてあつたのではなく、一家の繁榮を祈るべき宗門神としてあつたのですが。

その稻見の當主と云ふのは、丁度私と同期の法學士で、これが會社にも關係すれば、銀行にも手を出してゐると云ふ、まあ中中の事業家なのです。そんな關係上、私も一二度稻見の爲に、或便宜を計つてやつた事がありました。その禮心だつたのでせう。稻見は或年上京した序に、この家重代の麻利耶觀音を私にくれて行つたのです。

私の所謂妙な傳說と云ふのも、その時稻見の口から聞いたのですが、彼自身は勿論さう云ふ不思議を信じてゐる譯でも何でもありません。ただ、母親から聞かされた通り、この聖母の謂はれ因縁をざつと說明しただけだつたのです。

何でも稻見の母親が十か十一の秋だつたさうです。年代にすると、黒船が浦賀の港を擾がせた嘉永の末年にでも當りますか――その母親の弟になる、茂作と云ふ八ツばかりの男の子が、重い痲疹に罹りました。稻見の母親はお榮と云つて、二三年前の疫病に父母共世を去つて以來、この茂作と姉弟二人、もう七十を越した祖母の手に育てられて來たのださうです。ですから茂作が重病になると、稻見には曾祖母に當る、その切髮の隱居の心配と云ふものは、一通りや二通りではありません。が、いくら醫者が手を盡しても、茂作の病氣は重くなるばかりで、殆、一週間と經たない内に、もう今日か明日かと云ふ容態になつてしまひました。

すると或夜の事、お榮のよく寢入つてゐる部屋へ、突然祖母がはひつて來て、眠がるのを無理に抱き起してから、人手も借りず甲斐甲斐しく、ちやんと着物を着換へさせたさうです。お榮はまだ夢でも見てゐるやうな、ぼんやりした心もちでゐましたが、祖母はすぐにその手を引いて、うす暗い雪洞に人氣のない廊下を照らしながら、晝でも滅多にはひつた事のない土藏へお榮をつれて行きました。

土藏の奥には昔から、火伏せの稻荷が祀つてあると云ふ、白木の御宮がありました。祖母は帶の間から鍵を出して、その御宮の扉を開けましたが、今雪洞の光に透かして見ると、古びた錦の御戸帳の後に、端然と立つてゐる御神體は、外でもない、この麻利耶觀音なのです。お榮はそれを見ると同時に、急に蟋蟀の聲さへしない眞夜中の土藏が怖くなつて、思はず祖母の膝に縋りついた儘、しくしく泣き出してしまひました。が、祖母は何時もと違つて、お榮の泣くのにも頓着せず、その麻利耶觀音の御宮の前に坐りながら、恭しく額に十字を切つて、何かお榮にわからない御祈禱をあげ始めたさうです。

それが凡そ十分あまりも續いてから、祖母は靜に孫娘を抱き起すと、怖がるのを頻りになだめなだめ、自分の隣に坐らせました。さうして今度はお榮にもわかるやうに、この黒檀の麻利耶觀音へ、こんな願をかけ始めました。

「童貞聖麻利耶樣、私が天にも地にも、杖柱と賴んで居りますのは、當年八歳の孫の茂作と、此處につれて參りました姉のお榮ばかりでございます。お榮もまだ御覽の通り、壻をとる程の年でもございません。もし唯今茂作の身に萬一

の事でもございましたら、稲見の家は明日が日にも世嗣ぎが絶えてしまふのでございます。そのやうな不祥がございませんやうに、どうか茂作の一命を御守りなすつて下さいまし。それも私風情の信心には及ばない事でございましたら、せめては私の息のございます限り、茂作の命を御助け下さいまし。私もとる年でございますし、靈魂を天主に御捧け申すのも、長い事ではございますまい。しかし、それまでには孫のお榮も、不慮の災難でもございませなんだら、大方年頃になるでございませう。何卒私が目をつぶりますまでよろしうございますから、死の天使の御劍が茂作の體に觸れませんやうに、御慈悲を御垂れ下さいまし。」

　祖母は切髪の頭を下げて、熱心にかう祈りました。するとその言葉が終つた時、恐る恐る顔を擡げたお榮の眼には、氣のせゐか麻利耶觀音が微笑したやうに見えたと云ふのです。お榮は勿論小さな聲をあげて、又祖母の膝に縋りつきました。が、祖母は反つて滿足さうに、孫娘の背をさすりながら、

「さあ、もうあちらへ行きませう。麻利耶様は難有い事に、この御婆さんの御祈りを御聞き入れになつて下すつたからね。」

と、何度も繰り返して云つたさうです。

　さて明くる日になつて見ると、成程祖母の願がかなつたか、茂作は昨日よりも熱が下つて、今まではまるで夢中だつたのが、次第に正氣さへついて來ました。この容子を見た祖母の喜びは、中中口には盡せません。何でも稲見の母親は、その時祖母が笑ひながら、涙をこぼしてゐた顔が、未に忘れられないとか云つてゐるさうです。その内に祖母は病氣の孫がすやすや眠り出したのを見て、自分も連夜の看病疲れを暫く休める心算だつたのでせう。病間の隣へ床をとらせて、珍らしく其處へ横になりました。

　その時お榮は御彈きをしながら、祖母の枕もとに坐つてゐましたが、隱居は精根も盡きる程、疲れ果ててゐたと見えて、まるで死んだ人のやうに、すぐに寢入つてしまつたとか云ふ事です。處が彼是一時間ばかりすると、茂作の介抱をしてゐた年輩の女中が、そつと次の間の襖を開けて、「御孃様ちよいと御隱居様を御起し下さいまし。」と、慌てたやうな聲で云ひました。そこでお榮は子供の事ですから、早速祖母の側へ行つて、「御婆さん、御婆さん。」と二三度搔卷きの袖を引いたさうです。が、どうしたのかふだんは眼さとい祖母が、今日に限つていくら呼んでも返事をする氣色さへ見えません。その内に女中も不審さうに、病間からこちらへはひつて來ましたが、これは祖母の顔を見ると、氣でも違つたかと思ふ程、いきなり隱居の搔卷きに縋りついて、「御隱居様、御隱居様。」と、必死の涙聲を擧げ始めました。けれども祖母は眼のまはりにかすかな紫の色を止めた儘、やはり身動きもせずに眠つてゐます。と間もなくもう一人の女中が、慌しく襖を開けたと思ふとこれも、色を失つた顔を見せて、「御隱居様、――坊ちやんが――御隱居様。」と、震へ聲で呼び立てました。勿論この女中の「坊ちやんが――」は、お榮の目にも明に、茂作の容態の變つた事を知らせる力があつたのです。が、祖母は依然として、今は枕もとに泣き伏した女中の聲も聞えないやうに、ぢつと眼をつぶつてゐるのでした。……

　茂作もそれから十分ばかりの内に、とうとう息を引き取りました。麻利耶觀音は約束通り、祖母の命のある間は、茂作を殺さずに置いたのです。

　田代君はかう話し終ると、又陰鬱な眼を擧げて、ぢつと私の顔を眺めた。

「どうです。あなたにはこの傳說が、ほんたうにあつたとは思はれませんか。」

私はためらつた。

「さあ――しかし――どうでせう。」

田代君は暫く默つてゐた。が、やがて煙の消えたパイプへもう一度火を移すと、

「私はほんたうにあつたかとも思ふのです。唯、それが稻見家の聖母のせゐだつたかどうかは、疑問ですが、――さう云へば、まだあなたはこの麻利耶觀音の臺座の銘を御讀みにならなかつたでせう。御覽なさい。此處に刻んである横文字を。――DESINE FATA DEUM FLECTI SPERARE PRECANDO……。」（汝の祈禱、神々の定め給ふ所を動かすべしと望む勿れ）

私はこの運命それ自身のやうな麻利耶觀音へ、思はず無氣味な眼を移した。聖母は黑檀の衣を纏つたまま、やはりその美しい象牙の顏に、或惡意を帶びた嘲笑を、永久に冷然と湛へてゐる。――

煙草

煙草の世に行はれしは、亞米利加發見以後の事なり。埃及、亞剌比亞、羅馬などにも、喫煙の俗ありしと云ふは、靑盲者流のひが言のみ。亞米利加土人の烟を嗜みしは、コロムブスが新世界に至りし時、既に葉卷あり、刻みあり、嗅煙草ありしを見て知るべし。タバコの名も實は植物の名稱ならで、刻みの煙を味ふべきパイプの意なりしぞ滑稽なる。されば歐洲の白色人種が喫煙に新機軸を出したるは、僅に一個輕便なるシガレットの案出ありしのみ。和漢三才圖會によれば、南蠻紅毛の甲比丹がまづ日本に舶載したるも、このシガレットなりしものの如し。村田の煙管未だ世に出でざりし時、われらが祖先は既にシガレットを口にしつつ、春日煦煦たる山口の街頭、天主會堂の十字架を仰いで、西洋機巧の文明に讚嘆の辭を惜まざりしならん。

（「點心」の「骨董羹」より）

ニコチン夫人

ボオドレエルがパイプの詩は元より、Lyra Nicotiana を繙すも、西洋詩人の喫煙を愛づるは、東洋詩人の點茶を悅ぶと好一對なりと云ふを得べし。小說にてはバリイが「ニコチン夫人」最も人口に膾炙したり。されど唯輕妙の筆、容易に讀者を微笑せしむるのみ。ニコチンの名、もと佛蘭西人ジアン・ニコットより出づ。十六世紀の中葉、ニコット大使の職を帶びて西班牙に派遣せらるるや、フロリダ渡來の葉煙草を得て、その醫療に效あるを知り、鼓吹大いに努めしかば、一時は佛人煙草を呼んでニコチアナと云ふに至りしとぞ。デ・クインシイが「阿片喫煙者の懺悔」は、さきに佐藤春夫氏をして「指紋」の奇文を成さしめたり。誰か又バリイを拔く事數等なる、恰もハヴァナのマニラに於ける如き煙草小說を書かんものぞ。

（「點心」の「骨董羹」より）

山鴫

千八百八十年五月何日かの日暮れ方である。二年ぶりにヤスナヤ・ポリヤナを訪れた Ivan Turgenyef は、主の Leo Tolstoi 伯爵と一しよに、ヴァロンカ川の向うの雑木林へ、山鴫を打ちに出かけて行つた。

鴫打ちの一行には、この二人の翁の外にも、まだ若若しさの失せないトルストイ夫人や、犬をつれて子供たちが加はつてゐた。

ヴァロンカ川へ出るまでの路は、大抵麦畑の中を通つてゐた。日沒と共に生じた微風は、その麦の葉を渡りながら、靜に土の匂を運んで來た。トルストイは銃を肩にしながら、誰よりも先に歩いて行つた。さうして時時後を向いては、トルストイ夫人と歩いてゐるトゥルゲネフに話しかけた。その度に「父と子と」の作家は、やや驚いたやうに眼を擧げながら、嬉しさうに滑らかな返事をした。時によると又幅の廣い肩を搖すつて、嗄れた笑ひ聲を洩す事もあつた。それは無骨なトルストイに比べると、上品な趣があると同時に、何處か女らしい答ぶりだつた。

路がだらだら坂になつた時、兄弟らしい村の子供が、向うから二人走つて來た。彼等はトルストイの顏を見ると、一度に足を止めて目禮をした。それから又元のやうに、はだしの足の裏を見せながら、勢よく坂を駈け上つて行つた。トルストイの子供たちの中には、後から彼等へ何事か、大聲に呼びかけるものもあつた。が、二人はそれも聞えないやうに、見る見る麦畑の向うに隱れてしまつた。

「村の子供たちは面白いよ。」

トルストイは殘照を顏に受けながら、トゥルゲネフの方を振返つた。

「ああ云ふ連中の言葉を聞いてゐると、我我には思ひもつかない、直截な云ひまはしを教へられる事がある。」

トゥルゲネフは微笑した。今の彼は昔の彼ではない。昔の彼はトルストイの言葉に、子供らしい感激を感じると、我知らず皮肉に出勝ちだつた。……

「この間もああ云ふ連中を教へてゐると、——」

トルストイは話し續けた。

「いきなり一人、教室を飛び出さうとする子供があるのだね。そこで何處へ行くのだと訊いたら、白墨を食ひ缺きに行くのですと云ふのだ。貰ひに行くとも云はなければ、折つて來るとも云ふのではない。食ひ缺きに行くと云ふのだね。かう云ふ言葉が使へるのは、現に白墨を噛つてゐる露西亞の子供があるばかりだ。我我大人には到底出來ない。」

「成程、これは露西亞の子供に限りさうだ。その上僕などはそんな話を聞かされると、しみじみ露西亞へ歸つて來たと云ふ心持がする。」

トゥルゲネフは今更のやうに、麦畑へ眼を漂はせた。

「さうだらう。佛蘭西などでは子供までが、卷煙草位は吸ひ兼ねない。」

「さう云へばあなたもこの頃は、さつぱり煙草を召し上らないやうでございますね。」

トルストイ夫人は夫の惡謔から、巧妙に客を救ひ出した。

「ええ、すつかり煙草はやめにしました。巴里に二人美人がゐましてね、その人たちは私が煙草臭いと、接吻させないと云ふものですから。」

今度はトルストイが苦笑した。

その内に一行はヴァロンカ川を渡つて、鴫打ちの場所へ辿り著いた。其處は川から遠くない、雜木林が疎になつた、濕氣の多い草地だつた。

トルストイはトゥルゲネフに、最も好い打ち場を讓つた。そして彼自身はその打ち場から、百五十歩ばかり遠のいた、草地の一隅に位置を定めた。それからトルストイ夫人はトゥルゲネフの側に、子供たちは彼等のずつと後に、各各分れてゐる事になつた。

空はまだ赤らんでゐた。その空を絡つた木木の梢が、一面にぼんやり煙つてゐるのは、もう匂の高い若芽が、簇つてゐるのに違ひなかつた。トゥルゲネフは銃を提げたなり、透かすやうに木木の間を眺めた。薄明い林の中からは、時時風とは云へぬ程の風が、氣輕さうな囀りを漂はせて來た。

「駒鳥や鶸が啼いて居ります。」

トルストイ夫人は首を傾けながら、獨り語のやうにかう云つた。

徐に沈默の半時間が過ぎた。

その間に空は水のやうになつた。同時に遠近の樺の幹が、それだけ白白と見えるやうになつた。駒鳥や鶸の聲の代りに、今は唯五十雀が、稀に鳴き聲を送つて來る、――トゥルゲネフはもう一度、疎な木木の中を透かして見た。が、今度は林の奧も、あら方夕暗に沈んでゐた。

この時一發の銃聲が、突然林間に響き渡つた。後に待つてゐた子供たちは、その反響がまだ消えない内に、犬と先を爭ひながら、獲物を拾ひに駈けて行つた。

「御主人に先を越されました。」

トゥルゲネフは微笑しながら、トルストイ夫人を振り返つた。

やがて二男のイリアが母の所へ、草の中を走つて來た。さうしてトルストイの射止めたのは、山鴫だと云ふ報告をした。

トゥルゲネフは口を挾んだ。

「誰が見つけました？」

「ドオラ（犬の名）が見つけたのです。――見つけた時は、まだ生きてゐましたよ。」

イリアは又母の方を向くと、健康さうな頰を火照らせながら、その山鴫が見つかつた時の一部始終を話して聞かせた。

トゥルゲネフの空想には、「獵人日記」の一章のやうな、小品の光景がちらりと浮んだ。

イリアが歸つて行つた後は、又元の通り靜かになつた。薄暗い林の奧からは、春らしい若芽の匂だの濕つた土の匂だのが、しつとりとあたりへ溢れて來た。その中に何か眠さうな鳥が、時たま遠くに啼く聲がした。

「あれは、――？」

「縞蒿雀です。」

トゥルゲネフはすぐに返事をした。

縞蒿雀は忽ち啼きやんだ。それぎり少時は夕影の木木に、ぱつたり囀りが途絶えてしまつた。空は、――微風さへ全然落ちた空は、その生氣のない林の上に、だんだん蒼い色を沈めて來る、――と思ふと鳧が一羽、寂しい聲を飛ばせながら、頭の上を翔けて通つた。

再び一發の銃聲が、林間の寂寞を破つたのは、それから一時間程後の事だつた。

「リョフ・ニコラエヰッチは鴫打ちでも、やはり私を負かしさうです。」

トゥルゲネフは眼だけ笑ひながら、ちよいと肩を聳かせた。

子供たちが皆駈けだした音、ドオラが時時吠え立てる聲、――それがもう一度靜まつた時には、既に冷かな星の光が、點點と空に散らばつてゐた。林も今は見渡す限り、ひつそりと夜を封じた儘、梢一つ動かす氣色もなかつた。二十分、三十分、――退屈な時が過ぎると共に、こ

の暮れ盡した濕地の上には、何處か薄明い春の靄が、ぼんやり足もとへ這ひ寄り始めた。が、彼等のゐまはりへは、未に一羽も鳴らしい鳥は、現れるけはひが見えなかつた。

「今日はどう致しましたかしら。」

トルストイ夫人の呟きには、氣の毒さうな調子も交つてゐた。

「こんなことは滅多にないのでございますけれども、――」

「奥さん、お聞きなさい。夜鶯が啼いてゐます。」

トゥルゲネフは殊更に、縁のない方面へ話題を移した。

暗い林の奥からは、實際もう夜鶯が、朗かな聲を漂はせて來た。二人は少時默然と、別別の事を考へながら、ぢつとその聲に聞き入つてゐた。……

すると急に、――トゥルゲネフ自身の言葉を借りれば、「しかしこの急にがわかるものは、唯獵人ばかりである。」――急に向うの草の中から、紛れやうのない啼き聲と共に、一羽の山鴫が舞上つた。山鴫は枝垂れた木木の間に、薄白い羽裏を閃かせながら、すぐに宵へ消えようとする、――トゥルゲネフはその瞬間、銃を肩に當てるが早いか、器用にぐいと引き金を引いた。

一抹の煙と短い火と、――銃聲は靜な林の奥へ、長い反響を轟かせた。

「中つたかね？」

トルストイはこちらへ歩み寄りながら、聲高に彼へ問ひかけた。

「中つたとも。石のやうに落ちて來た。」

子供たちはもう犬と一しよに、トゥルゲネフの周圍へ集まつてゐた。

「探して御出で。」

トルストイは彼等に云ひつけた。

子供たちはドオラを先に、其處此處と獲物を探し歩いた。が、いくら探して見ても、山鴫の死骸は見つからなかつた。ドオラも遮二無二駈け廻つては、時時草の中へ佇んだ儘、不足さうに唸るばかりだつた。

しまひには、トルストイやトゥルゲネフも、子供たちへ助力を與へに來た。しかし山鴫は何處へ行つたか、やはり羽根さへも見當らなかつた。

「ゐないやうだね。」

二十分の後トルストイは、暗い木木の間に佇みながら、トゥルゲネフの方へ言葉をかけた。

「ゐない事があるものか？ 石のやうに落ちるのを見たのだから、――」

トゥルゲネフはかう云ひながらも、あたりの草むらを見廻してゐた。

「中つた事は中つても、羽根へ中つただけだつたかも知れない。それなら落ちてからも逃げられる筈だ。」

「いや、羽根へ中つただけではない。確に僕は仕止めたのだ。」

トルストイは當惑さうに、ちよいと太い眉をひそめた。

「では犬が見つけさうなものだ。ドオラは仕止めた鳥と云へば、きつと銜へて來るのだから、――」

「しかし實際仕止めたのだから仕方がない。」

トゥルゲネフは銃を抱へた儘、苛立たしさうな手眞似をした。

「仕止めたか仕止めないか、その位な區別は子供にもわかる。僕はちやんと見てゐたのだ。」

トルストイは嘲笑ふやうに、じろりと相手の顔を眺めた。

「それでは犬はどうしたのだ？」

「犬なぞ――僕の知つた事ではない。僕は唯見た通りを云ふのだ。何しろ石のやうに落ちて來た

のだから、――」

トゥルゲネフはトルストイの眼に、挑戰的な光を見ると、思はずかう金切聲を出した。

「Il est tombé comme pierre, je t'assure !」

「しかしドオラが見つけない筈はない。」

この時幸ひトルストイ夫人が、二人の翁に笑顏を見せながら、さりげない仲裁を試みに來た。夫人は明朝もう一度、子供たちを探しによこすから、今夜この儘トルストイの屋敷へ、引き上げた方が好からうと云つた。トゥルゲネフはすぐに贊成した。

「ではさう願ふ事にしませう。明日になればきつとわかります。」

「さうだね、明日になればきつとわかるだらう。」

トルストイはまだ不服さうに、意地の惡い反語を投げつけると、突然トゥルゲネフへ背を見せながら、さつさと林の外へ歩き出した。……

トゥルゲネフが寢室へ退いたのは、その夜十一時前後だつた。彼はやつと獨りになると、どつかり椅子へ坐つた儘、茫然とあたりを眺め廻した。

寢室は平生トルストイが、書齋に定めてゐる一室だつた。大きな書架、龕の中の半身像、三四枚の肖像の額、壁にとりつけた牡鹿の頭、――彼の周圍にはそれらの物が、蠟燭の光に照らされながら、少しも派手な色彩のない、冷かな空氣をつくつてゐた。が、それにも關らず、單に獨りになつたと云ふ事が、兎に角今夜のトゥルゲネフには、不思議な程嬉しい氣がするのだつた。

――彼が寢室へ退く前、主客は一家の男女と共に、茶の卓子を圍みながら、雜談に夜を更かしてゐた。トゥルゲネフは出來得る限り、快活に笑つたり話したりした。しかしトルストイはその間でも、不相變浮かない顏をしたり、滅多に口も開かなかつた。それが始終トゥルゲネフには、面憎くもあれば無氣味でもあつた。だから彼は一家の男女に、ふだんよりも愛嬌を振り撒いては、わざと主人の沈默を無視するやうに振舞はうとした。

一家の男女はトゥルゲネフが、輕妙な諧謔を弄する度に、何れも愉快さうな笑ひ聲を立てた。殊に彼が子供たちに、ハムブルグの動物園の象の聲だの、巴里のガルソンの身ぶりだのを巧みに眞似て見せる時は、一層その笑ひ聲が高くなつた。が、一座が陽氣になればなる程、トゥルゲネフ自身の心もちは、愈妙にぎごちない息苦しさを感ずるばかりだつた。

「君はこの頃有望な新進作家が出たのを知つてゐるか？」

話題が佛蘭西の文藝に移つた時、とうとう不自然な社交家ぶりに、堪へられなくなつたトゥルゲネフは、突然トルストイを顧みながら、わざと氣輕さうに聲をかけた。

「知らない。何と云ふ作家だ？」

「ド・モオパスサン。――ギイ・ド・モオパスサンと云ふ作家だがね。少くとも外に眞似手のない、犀利な觀察眼を具へた作家だ。――丁度今僕の鞄の中には、La Maison Tellier と云ふ小說集がはひつてゐる。暇があつたら讀んで見給へ。」

「ド・モオパスサン？」

トルストイは疑はしさうに、ちよいと相手の顏を眺めた。が、それぎり小說の事は、讀むとも讀まないとも答へずにしまつた。トゥルゲネフは幼い時分、意地の惡い年上の子供にいぢめられた覺えがある。――丁度そんな情無さが、この時も胸へこみ上げて來た。

「――新進作家と云へばこちらへも、珍しい方が一

人お見えになりましたよ。」
彼の當惑を察したトルストイ夫人は、早速或風變りな訪問客の話をし始めた。――一月ばかり前の或暮れ方、餘り身なりの好くない青年が、是非主人に會ひたいと云ふから、兎に角奥へ通して見ると、初對面の主人に向つて、「取りあへずあなたに聞きたいのは、火酒と鰊の尻尾です。」と云ふ。そればかりでも既に驚かされたが、この又異様な青年が、既に多少は名聲のある、新しい作家の一人だつたのには、愈驚かずにはゐられなかつた。……

「それがガルシンと云ふ方でした。」

トゥルゲネフはこの名を聞くと、もう一度雜談の圏内へ、トルストイを誘つて見る氣になつた。と云ふのは相手の打ち融けないのが、益不快になつた外にも、嘗て彼はトルストイに、始めてガルシンの作物を紹介した緣故があるからだつた。

「ガルシンでしたか？――あの男の小説も惡くはあるまい。君はその後、何を讀んだか知らないが、――」

「惡くはないやうだ。」

それでもトルストイは冷然と、好い加減な返事をしただけだつた。――

トゥルゲネフはやつと身を起すと、白髪の頭を振りながら、靜に書齋の中を歩き出した。小さな卓の上の蠟燭の火は、彼が行つたり來たりする度に、壁へ映つた彼の影を大小さまざまに變化させた。が、彼は默然と、両手を後に組んだ儘、懶さうな眼は何時までも、裸の床を離れなかつた。

トゥルゲネフの心には、彼がトルストイと親しくしてゐた、二十餘年以前の追憶が、一つ一つ鮮に浮んで來た、放蕩に放蕩を重ねては、ペテルブルグの彼の家へ、屢眠りに歸つて來た、將校時代のトルストイ、――ネクラゾフの客間の一つに、傲然と彼を眺めながら、ヂオルヂュ・サンドの攻撃に一切を忘れてゐたトルストイ、――スハスコイエの林間に、彼と散歩の足を止めては、夏の雲の美しさに感歎の聲を洩らしてゐた、二人の輕騎兵時代のトルストイ、――それから最後にはフェットの家で、二人とも拳を握つた儘、一生の惡罵を相手の額へ投けつけた時のトルストイ、――それらの追憶のどれを見ても、我執の強いトルストイは、徹頭徹尾他人の中に、眞實を認めない人間だつた。常に他人のする事には、虚僞を感ずる人間だつた。これは他人のする事が、何も彼のする事と矛盾してゐる時のみではない。たとひ彼と同じやうに、放蕩をしてゐたものがあつても、彼は、彼自身を恕すやうに他人を恕す事が出來なかつた。彼には他人が彼のやうに、夏の雲の美しさを感じてゐると云ふ事すら、すぐに信用は出來ないのである。彼がサンドを憎んだのも、やはり彼女の眞實に疑を抱いたからだつた。一時彼がトゥルゲネフと、絶交するやうになつたのも、――いや、現に彼はトゥルゲネフが、山鴫を射落したと云ふ事にも、不相變譃を嗅ぎつけてゐる。……

トゥルゲネフは大きな息をしながら、ふと龕の前に足を止めた。龕の中には大理石の像が、遠い蠟燭の光を受けた、覺束ない影に浮き出してゐる、――それはリョフには長兄に當る、ニコライ・トルストイの半身像だつた。思へば彼とも親しかつた、この情愛の厚いニコライが、故人の數にはひつて以來、二十年あまりの日月は、何時の間にか過ぎてしまつた。もしニコライの半分でも、リョフに他人の感情を思ひやる事が出來たなら、――トゥルゲネフは長い間、春の夜の更けるのも知らないやうに、この仄暗い龕の中の像へ、寂しさうな眼を注いでゐた。……

翌朝トゥルゲネフはやや早めに、特にこの家では食堂に定められた、二階の客間へ出かけて行つた。客間の壁には先祖の肖像畫が、何枚も壁に並んでゐる。——その肖像畫の一つの下に、トルストイは卓へ向ひながら、郵便物に眼を通してゐた。が、彼の外にはまだ子供たちも、誰一人姿は見せなかつた。

二人の文豪は挨拶をした。

その間もトゥルゲネフは、相手の顏色を窺ひながら、少しでも其處に好意が見えれば、すぐに和睦する心算だつた。がトルストイはまだ氣むづかしさうに、二言三言話した後は、以前のやうに默默と、郵便物の調べにとりかかつた。

トゥルゲネフはやむを得ず、手近の椅子を一つ引き寄せると、これもやはり無言の儘、卓の上の新聞を讀み始めた。

陰氣な客間は少時の間、湯沸のたぎる音の外には、何の物音も聞えなかつた。

「昨夜はよく眠られたかね？」

郵便物に眼を通してしまふと、トルストイは何と思つたか、かうトゥルゲネフへ聲をかけた。

「よく眠られた。」

トゥルゲネフは新聞を下した。さうしてもう一度トルストイが、話しかける時を待つてゐた。が、主人は銀の手のついたコップへ、湯沸の茶を落しながら、それぎり何とも口を利かなかつた。

かう云ふ事が二三度續いた後、トゥルゲネフは丁度昨夜のやうに、不機嫌なトルストイの顏を見てゐるのが、だんだん苦しくなり始めた。殊に今朝は餘人がゐないだけ、一層彼には心のやり場が、何處にもないやうな氣がするのだつた。

せめてトルストイ夫人でもゐてくれたら、——彼は苛立たしい肚の中に、何度となくかう思つた。が、この客間へはどうしたものか、未に人のはひつて來るけはひさへも見えなかつた。

五分、十分、——トゥルゲネフはとうとうたまり兼ねたやうに、新聞を其處へ拋り出すと、踉蹌と椅子から立ち上つた。

その時客間の戸の外には、突然大勢の話し聲や靴の音が聞え出した。それが皆先を爭ふやうに、どやどや階段を駈け上つて來る——と思ふと次の瞬間には、亂暴に戸が開かれるが早いか、五六人の男女の子供たちが、口口に何かしやべりながら、一度に部屋の中へ飛びこんで來た。

「お父樣、ありましたよ。」

先に立つたイリアは得意さうに、手に下げた物を振つて見せた。

「私が始め見つけたのよ。」

母によく似たタティアナも、弟に負けない聲を擧げた。

「落ちる時にひつかかつたのでせう。白楊の枝にぶら下つてゐました。」

最後にかう說明したのは、一番年嵩のセルゲイだつた。

トルストイは呆氣にとられたやうに、子供たちの顏を見廻してゐた。が、昨日の山鴫が無事に見つかつた事を知ると、忽ち彼の髯深い顏には、晴れ晴れした微笑が浮んで來た。

「さうか？　木の枝にひつかかつてゐたのか？　それでは犬にも見つからなかつた筈だ。」

彼は椅子を離れながら、子供たちにまじつたトゥルゲネフの前へ、逞しい右手をさし出した。

「イヴァン・セルゲエヰッチ。これで僕も安心が出來る。僕は譃をつくやうな人間ではない。この鳥も下に落ちてゐれば、きつとドオラが拾つて來たのだ。」

トゥルゲネフは殆ど恥しさうに、しつかり

トルストイの手を握つた。見つかつたのは山鴫か、それとも「アンナ・カレニナ」の作家か、――「父と子と」の作家の胸には、その判断にも迷ふ位、泣きたいやうな喜ばしさが、何時か一ぱいになつてゐたのだつた。

「僕だつて嘘をつくやうな人間ではない。見給へ。あの通りちやんと仕止めてあるではないか？ 何しろ銃が鳴ると同時に、石のやうに落ちて来たのだから、――」

二人の[illegible]顔を見合せると、云ひ合せたやうに哄笑した。

トルストイ

ビュルコフのトルストイ伝を読めば、トルストイの「わが懺悔」や「わが宗教」の嘘だつたことは明らかである。しかしこの嘘を話しつづけたトルストイの心ほど傷ましいものはない。彼の嘘は偉人の真実よりもはるかに紅血を滴らしてゐる。

（「侏儒の言葉」より）

大作

嘗て[illegible]エッケルマンのゲエテ語録の中に、少壮の士の大作を成すは労多くして功少きを戒めてやまざる一段あり。蓋しゲエテ自身ファウストなどを書かんとして、懲り懲りしたる故なるべし。思へばトルストイも「戦争と平和」や「アンナ・カレンナ」の大作に没頭せしかば、遂には[illegible]九十年代の芸術がわからずなりしならん。勿論他人の芸術がわからずとも、トルストイのやうに堂堂たる自家の芸術を持つてゐれば、毛頭差支へはなきやうなり。されどわかるわからぬの上より云へば、トルストイは、寧ろ憐むべき鑑賞眼の所有者たりし事は疑ひなし。まして我我下根の衆生は、好い加減な野心に煽動されて、柄にもない大作にとりかかつたが最期、虻蜂とらずの歎を招くは、わかり切つた事かも知れず。とは云ふものの自分なぞは、一旦大作を企つべき機縁が熟したと思つたら、ゲエテの忠告も聞えぬやうに、忽ちいきり立つてしまひさうな気がする。

（「點心」の「雑筆」より）

理解

一時は放蕩さへ働けば、一かど芸術がわかるやうに思ひ上つた連中がある。この頃は道義と宗教とを談ずれば、芭蕉もレオナルド・ダ・ヴィンチも一呑みに呑みこみ顔をする連中がある。ヴィンチは兎も角も、芭蕉さへ一通り偉さがわかるやうになるのは、やはり相当の苦労を積まねばならぬ。ことによると末世の我我には、死身に思ひを潜めた後でも、まだ會得されない芭蕉の偉さが残つてゐるかも知れぬ位だ。ジァン・クリストフの中に、クリストフと同じやうにベエトオフエンがわかると思つてゐる俗物を書いた一節がある。わかると云ふ事は世間が考へる程、無造作に出来る事ではない。何事も真剣に志したからは、わかつた上にもわからうとする心がけが肝腎なやうだ。さもないと野狐に堕してしまふ。偶俳諧文庫所載の諸家の芭蕉論の中に、二三孟浪杜撰の説を見出した故、不平のあまり書きとどめる。

（「點心」の「雑筆」より）

舞踏會

一

明治十九年十一月三日の夜であつた。當時十七歳だつた――家の令孃明子は、頭の禿げた父親と一しよに、今夜の舞踏會が催さるべき鹿鳴館の階段を上つて行つた。明い瓦斯の光に照らされた、幅の廣い階段の兩側には、殆人工に近い大輪の菊の花が、三重の籬を造つてゐた。菊は一番奥のがうす紅、中程のが濃い黄色、一番前のがまつ白な花びらを流蘇の如く亂してゐるのであつた。さうしてその菊の籬の盡きるあたり、階段の上の舞踏室からは、もう陽氣な管絃樂の音が、抑へ難い幸福の吐息のやうに、休みなく溢れて來るのであつた。

明子は夙に佛蘭西語と舞踏との教育を受けてゐた。が、正式の舞踏會に臨むのは、今夜がまだ生まれて始めてであつた。だから彼女は馬車の中でも、折折話しかける父親に、上の空の返事ばかり與へてゐた。それ程、彼女の胸の中には、愉快なる不安とでも形容すべき、一種の落着かない心もちが根を張つてゐたのであつた。彼女は馬車が鹿鳴館の前に止るまで、何度いら立たしい眼を擧げて、窓の外に流れて行く東京の町の乏しい燈火を、見つめた事だか知れなかつた。

が、鹿鳴館の中へはひると、間もなく彼女はその不安を忘れるやうな事件に遭遇した。と云ふのは階段の丁度中程まで來かかつた時、二人は一足先に上つて行く支那の大官に追ひついた。すると大官は肥滿した體を開いて、二人を先へ通らせながら、呆れたやうな視線を明子へ投げた。初初しい薔薇色の舞踏服、品好く頸へかけた水色のリボン、それから濃い髪に匂つてゐるたつた一輪の薔薇の花――實際その夜の明子の姿は、この長い辮髪を垂れた支那の大官の眼を驚かすべく、開化の日本の少女の美を遺憾なく具へてゐたのであつた。と思ふと又階段を急ぎ足に下りて來た、若い燕尾服の日本人も、途中で二人にすれ違ひながら、反射的にちよいと振り返つて、やはり呆れたやうな一瞥を明子の後姿に浴せかけた。それから何故か思ひついたやうに、白い襟飾へ手をやつて見て、又菊の中を忙しく玄關の方へ下りて行つた。

二人が階段を上り切ると、二階の舞踏室の入口には、半白の頬鬚を蓄へた主人役の伯爵が、胸間に幾つかの勳章を帶びて、路易十五世式の裝ひを凝らした年上の伯爵夫人と一しよに、大様に客を迎へてゐた。明子はこの伯爵でさへ、彼女の姿を見た時には、その老獪らしい顔の何處かに、一瞬間無邪氣な驚嘆の色が去來したのを見のがさなかつた。人の好い明子の父親は、嬉しさうな微笑を浮べながら、伯爵とその夫人とへ手短に娘を紹介した。彼女は羞恥と得意とを交る交る味つた。が、その暇にも權高な伯爵夫人の顔だちに、一點下品な氣があるのを感づくだけの餘裕があつた。

舞踏室の中にも至る所に、菊の花が美しく咲き亂れてゐた。さうして又至る所に、相手を待つてゐる婦人たちのレエスや花や象牙の扇が、爽かな香水の匂の中に、音のない波の如く動いてゐた。明子はすぐに父親と分れて、その綺羅びやかな婦人たちの或一團と一しよになつた。それは皆同じやうな水色や薔薇色の舞踏服を着た、同年輩らしい少女であつた。彼等は彼女を

迎へると、小鳥のやうにさざめき立つて、口口に今夜の彼女の姿が美しい事を褒め立てたりした。

が、彼女がその仲間へはひるや否や、見知らない佛蘭西の海軍將校が、何處からか靜に歩み寄つた。さうして兩腕を垂れた儘、丁寧に日本風の會釋をした。明子はかすかながら血の色が、頰に上つて來るのを意識した。しかしその會釋が何を意味するかは、問ふまでもなく明かだつた。だから彼女は手にしてゐた扇を預つて貰ふべく、隣に立つてゐる水色の舞踏服の令孃をふり返つた。と同時に意外にも、その佛蘭西の海軍將校は、ちらりと頰に微笑を浮べながら、異樣なアクサンを帶びた日本語で、はつきりと彼女にかう云つた。

「一しよに踊つては下さいませんか。」

間もなく明子は、その佛蘭西の海軍將校と、「美しく青きダニウブ」のヴアルスを踊つてゐた。相手の將校は、頰の日に燒けた、眼鼻立ちの鮮な、濃い口髭のある男であつた。彼女はその相手の軍服の左の肩に、長い手袋を嵌めた手を預くべく、餘りに背が低かつた。が、場馴れてゐる海軍將校は、巧に彼女をあしらつて、輕輕と群集の中を舞ひ歩いた。さうして時時彼女の耳に、愛想の好い佛蘭西語の御世辭さへも囁いた。

彼女はその優しい言葉に、恥しさうな微笑を酬いながら、時時彼等が踊つてゐる舞蹈室の周圍へ眼を投げた。皇室の御紋章を染め拔いた紫縮緬の幔幕や、爪を張つた蒼龍が身をうねらせてゐる支那の國旗の下には、花瓶花瓶の菊の花が、或は輕快な銀色を、或は陰鬱な金色を、人波の間にちらつかせてゐた。しかもその人波は、三鞭酒のやうに湧き立つて來る、花花しい獨逸管絃樂の旋律の風に煽られて、暫くも目まぐるしい動搖を止めなかつた。明子はやはり踊つてゐる友達の一人と眼を合はすと、互に愉快さうな頷きを忙しい中に送り合つた。が、その瞬間には、もう違つた踊り手が、まるで大きな蛾が狂ふやうに、何處からか其處へ現れてゐた。

しかし明子はその間にも、相手の佛蘭西の海軍將校の眼が、彼女の一擧一動に注意してゐるのを知つてゐた。それは全くこの日本に慣れない外國人が、如何に彼女の快活な舞蹈ぶりに、興味があつたかを語るものであつた。こんな美しい令孃も、やはり紙と竹との家の中に、人形の如く住んでゐるのであらうか。さうして細い金屬の箸で、青い花の描いてある手のひら程の茶碗から、米粒を挾んで食べてゐるのであらうか。——彼の眼の中にはかう云ふ疑問が、何度も人懷しい微笑と共に往來するやうであつた。明子にはそれが可笑しくもあれば、同時に又誇らしくもあつた。だから彼女の華奢な薔薇色の踊り靴は、物珍しさうな相手の視線が折折足もとへ落ちる度に、一層身輕く滑な床の上を辷つて行くのであつた。

が、やがて相手の將校は、この兒猫のやうな令孃の疲れたらしいのに氣がついたと見えて、劬るやうに顏を覗きこみながら、

「もつと續けて踊りませうか。」

「ノン・メルシイ。」

明子は息をはずませながら、今度ははつきりとかう答へた。

するとその佛蘭西の海軍將校は、まだヴアルスの歩みを續けながら、前後左右に動いてゐるレエスや花の波を縫つて、壁側の花瓶の菊の方へ、悠悠と彼女を連れて行つた。さうして最後の一廻轉の後、其處にあつた椅子の上へ、鮮に彼女を掛けさせると、自分は一旦軍服の胸を張つて、それから又前のやうに恭しく日本風

の會釋をした。

その後又ポルカやマズユルカを踊つてから、明子はこの佛蘭西の海軍將校と腕を組んで、白と黄とうす紅と三重の菊の籬の間を、階下の廣い部屋へ下りて行つた。

此處には燕尾服や白い肩がしつきりなく去來する中に、銀や硝子の食器類に蔽はれた幾つかの食卓が、或は肉と松露との山を盛り上げたり、或はサンドウィッチとアイスクリイムとの塔を聳立てたり、或は又石榴と無花果との三角塔を築いたりしてゐた。殊に菊の花が埋め殘した、部屋の一方の壁上には、巧な人工の葡萄蔓が青青とからみついてゐる、美しい金色の格子があつた。さうしてその葡萄の葉の間には、蜂の巣のやうな葡萄の房が、累累と紫に下つてゐた。明子はその金色の格子の前に、頭の禿げた彼女の父親が、同年輩の紳士と並んで、葉卷きを銜へてゐるのに遇つた。父親は明子の姿を見ると、滿足さうにちよいと頷いたが、それぎり連れの方を向いて、又葉卷きを燻らせ始めた。

佛蘭西の海軍將校は、明子と食卓の一つへ行つて、一しよにアイスクリイムの匙を取つた。

彼女はその間も相手の眼が、折折彼女の手や髮や水色のリボンを掛けた頸へ注がれてゐるのに氣がついた。それは勿論彼女にとつて、不快な事でも何でもなかつた。が、或刹那には女らしい疑ひも閃かずにはゐられなかつた。そこで黑い天鵞絨の胸に赤い椿の花をつけた、獨逸人らしい若い女が二人の傍を通つた時、彼女はこの疑ひを仄かせる爲に、かう云ふ感歎の言葉を發明した。

「西洋の女の方はほんたうに御美しうございますこと。」

海軍將校はこの言葉を聞くと、思ひの外眞面目に首を振つた。

「日本の女の方も美しいです。殊にあなたなぞは――」

「そんな事はございませんわ。」

「いえ、御世辭ではありません。その儘すぐに巴里の舞踏會へも出られます。さうしたら皆が驚くでせう。ワットオの畫の中の御姫樣のやうですから。」

明子はワットオを知らなかつた。だから海軍將校の言葉が呼び起した、美しい過去の幻も――仄暗い森の噴水と凋れて行く薔薇との幻も、一瞬の後には名殘りなく消え失せてしまはなければならなかつた。が、人一倍感じの鋭い彼女は、アイスクリイムの匙を動かしながら、僅にもう一つ殘つてゐる話題に縋る事を忘れなかつた。

「私も巴里の舞踏會へ參つて見たうございますわ。」

「いえ、巴里の舞踏會も全くこれと同じ事です。」

海軍將校はかう云ひながら、二人の食卓を繞つてゐる人波と菊の花とを見廻したが、忽ち皮肉な微笑の波が瞳の底に動いたと思ふと、アイスクリイムの匙を止めて、

「巴里ばかりではありません。舞踏會は何處でも同じ事です。」と半ば獨り語のやうにつけ加へた。

一時間の後、明子と佛蘭西の海軍將校とは、やはり腕を組んだ儘、大勢の日本人や外國人と一しよに、舞踏室の外にある星月夜の露臺に佇んでゐた。

欄干一つ隔てた露臺の向うには、廣い庭園を埋めた針葉樹が、ひつそりと枝を交し合つて、その梢に點點と鬼灯提灯の火を透かしてゐた。しかも冷かな空氣の底には、下の庭園から上つ

て來る苔の匂や落葉の匂が、かすかに寂しい秋の呼吸を漂はせてゐるやうであつた。が、すぐ後の舞踏室では、やはりレエスや花の波が、十六菊を染め抜いた紫縮緬の幕の下に、休みない動搖を續けてゐた。さうして又調子の高い管絃樂のつむじ風が、不相變その人間の海の上へ、容赦もなく鞭を加へてゐた。

勿論この露臺の上からも、絶えず賑な話し聲や笑ひ聲が夜氣を搖つてゐた。まして暗い針葉樹の空に美しい花火が揚る時には、殆人どよめきにも近い音が、一同の口から洩れた事もあつた。その中に交つて立つてゐた明子も、其處にゐた懇意の令孃たちとは、さつきから氣輕な雜談を交換してゐた。が、やがて氣がついて見ると、あの佛蘭西の海軍將校は、明子に腕を借した儘、庭園の上の星月夜へ默然と眼を注いでゐた。彼女にはそれが何となく、郷愁でも感じてゐるやうに見えた。そこで明子は彼の顏をそつと下から覗きこんで、

「御國の事を思つていらつしやるのでせう。」と半ば甘えるやうに尋ねて見た。

すると海軍將校は不相變微笑を含んだ眼で、靜に明子の方へ振り返つた。さうして「ノン」と答へる代りに、子供のやうに首を振つて見せた。

「でも何か考へていらつしやるやうでございますわ。」

「何だか當てて御覽なさい。」

その時露臺に集つてゐた人人の間には、又一しきり風のやうなざわめく音が起り出した。明子と海軍將校とは云ひ合せたやうに話をやめて、庭園の針葉樹を壓してゐる夜空の方へ眼をやつた。其處には丁度赤と青との花火が、蜘蛛手に闇を彈きながら、將に消えようとする所であつた。明子には何故かその花火が、殆悲しい氣を起させる程それ程美しく思はれた。

「私は花火の事を考へてゐたのです。我我の生のやうな花火の事を。」

暫くして佛蘭西の海軍將校は、優しく明子の顏を見下しながら、教へるやうな調子でかう云つた。

二

大正七年の秋であつた。當年の明子は鎌倉の別莊へ赴く途中、一面識のある青年の小説家と、偶然汽車の中で一しよになつた。青年はその時網棚の上に、鎌倉の知人へ贈るべき菊の花束を載せて置いた。すると當年の明子——今のH老夫人は、菊の花を見る度に思ひ出す話があると云つて、詳しく彼に鹿鳴館の舞踏會の思ひ出を話して聞かせた。青年はこの人自身の口からかう云ふ思出を聞く事に、多大の興味を感ぜずにはゐられなかつた。

その話が終つた時、青年はH老夫人に何氣なくかう云ふ質問をした。

「奧樣はその佛蘭西の海軍將校の名を御存知ではございませんか。」

するとH老夫人は思ひがけない返事をした。

「存じて居りますとも。Julien Viaud と仰有る方でございました。」

「では Loti だつたのでございますね。あの『お菊夫人』を書いたピエル・ロティだつたのでございますね。」

青年は愉快な興奮を感じた。が、H老夫人は不思議さうに青年の顏を見ながら何度もかう呟くばかりであつた。

「いえ、ロティと仰有る方ではございませんよ。ジュリアン・ヴィオと仰有る方でございますよ。」

（大正八年十二月）

南京の基督

一

或秋の夜半であつた。南京奇望街の或家の一室には、色の蒼ざめた支那の少女が一人、古びた卓の上に頬杖をついて、盆に入れた西瓜の種を退屈さうに噛み破つてゐた。

卓の上には置きランプが、うす暗い光を放つてゐた。その光は部屋の中を明くすると云ふよりも、寧ろ一層陰鬱な效果を與へるのに力があつた。壁紙の剥げかかつた部屋の隅には、毛布のはみ出した籐の寢臺が、埃臭さうな帷を垂らしてゐた。それから卓の向うには、これも古びた椅子が一脚、まるで忘れられたやうに置き捨ててあつた。が、その外は何處を見ても、装飾らしい家具の類なぞは何一つ見當らなかつた。

少女はそれにも關らず、西瓜の種を噛みやめては、時々涼しい眼を擧げて、卓の一方に面した壁を眺めやる事があつた。見ると成程その壁には、すぐ鼻の先の折れ釘に、小さな真鍮の十字架がつつましやかに懸つてゐた。さうしてその十字架の上には、稚拙な受難の基督が、高々と兩腕を廣げながら、手ずれた浮き彫の輪廓を影のやうにぼんやり浮べてゐた。少女の眼はこの耶蘇を見る毎に、長い睫毛の後の寂しい色が、一瞬間何處かへ見えなくなつて、その代りに無邪氣な希望の光が、生き生きとよみ返つて來るらしかつた。が、すぐに又視線が移ると、彼女は必吐息を洩らして、光澤のない黒繻子の上衣の肩を所在なささうに落しながら、もう一度盆の西瓜の種をぽつりぽつり噛み出すのであつた。

少女は名を宋金花と云つて、貧しい家計を助ける爲に、夜々その部屋に客を迎へる、當年十五歳の私窩子であつた。秦淮に多い私窩子の中には、金花程の容貌の持ち主なら、何人でもゐるのに違ひなかつた。が、金花程氣立ての優しい少女が、二人とこの土地にゐるかどうか、それは少くとも疑問であつた。彼女は朋輩の賣笑婦と違つて、嘘もつかなければ我儘も張らず、夜毎に愉快さうな微笑を浮べて、この陰鬱な部屋を訪れる、さまざまな客と戯れてゐた。さうして彼等の払つて行く金が、稀に約束の額より多かつた時は、たつた一人の父親に、一杯でも余計好きな酒を飲ませてやる事を樂しみにしてゐた。

かう云ふ金花の行状は、勿論彼女が生れつきにも、具つてゐるものに違ひなかつた。しかしまだその外に何か理由があるとしたら、それは金花が子供の時から、壁の上の十字架が示す通り、歿くなつた母親に教へられた、羅馬加特力教の信仰をずつと持ち續けてゐるからであつた。

——さう云へば今年の春、上海の競馬を見物かたがた、南部支那の風光を探りに來た、若い日本の旅行家が、金花の部屋に物好きな一夜を明かした事があつた。その時彼は葉卷を銜へて、洋服の膝に軽々と小さな金花を抱いてゐたが、ふと壁の上の十字架を見ると、不審らしい顏をしながら、

——お前は耶蘇教徒かい。——と、覺束ない支那語で話しかけた。

——ええ、五つの時に洗禮を受けました。——

——さうしてこんな商賣をしてゐるのかい。——

彼の聲にはこの瞬間、皮肉な調子が交つたやうであつた。が、金花は彼の腕に、鴉髻の頭を

澄せながら、何時もの通り晴れ晴れと、絲切齒の見える笑ひを洩らした。
「この商賣をしなければ、阿父樣も私も餓ゑ死をしてしまひますから。」
「お前の父親は老人なのかい。」
「ええ――もう腰も立たないのです。」
「しかし――しかしこんな稼業をしてゐたのでは、天國に行かれないと思やしないか。」
「いいえ。」
金花はちよいと十字架を眺めながら、考へ深さうな眼つきになつた。
「天國にいらつしやる基督樣は、きつと私の心もちを汲みとつて下さると思ひますから。――それでなければ基督樣は姚家巷の警察署の御役人も同じ事ですもの。」
若い日本の旅行家は微笑した。さうして上衣の隱しを探ると、翡翠の耳環を一雙出して、手づから彼女の耳へ下げてやつた。
「これはさつき、日本へ土産に買つた耳環だが、今夜の記念にお前にやるよ。――」
金花は始めて客をとつた夜から、實際かう云ふ確信に自ら安んじてゐたのであつた。
所が彼是一月ばかり前から、この敬虔な私窩子は不幸にも、惡性の楊梅瘡を病む體になつた。これを聞いた朋輩の陳山茶は、痛みを止めるのに好いと云つて、鴉片酒を飮む事を敎へてくれた。その後又やはり朋輩の毛迎春は、彼女自身が服用した汞藍丸や迦路米の殘りを、親切にもわざわざ持つて來てくれた。が、金花の病はどうしたものか、客をとらずに引き籠つてゐても、一向快方には向はなかつた。
すると或日陳山茶が、金花の部屋へ遊びに來た時に、こんな迷信じみた療法を尤もらしく話して聞かせた。
「あなたの病氣は御客から移つたのだから、早く誰かに移し返しておしまひなさいよ。さうすればきつと二三日中に、よくなつてしまふのに違ひないわ。」
金花は頰杖をついた儘、浮かない顏色を改めなかつた。が、山茶の言葉には多少の好奇心を動かしたと見えて、
「ほんたう？」と、輕く訊き返した。
「ええ、ほんたうだわ。私の姊さんもあなたのやうに、どうしても病氣が癒らなかつたのよ。それでも御客に移し返したら、ぢきによくなつてしまつたわ。」
「その御客はどうして？」
「御客はそれは可哀さうよ。おかげで目までつぶれたつて云ふわ。」
山茶が部屋を去つた後、金花は獨り壁に懸けた十字架の前に跪いて、受難の基督を仰ぎ見ながら、熱心にかう云ふ祈禱を捧げた。
「天國にいらつしやる基督樣。私は阿父樣を養ふ爲に、賤しい商賣を致して居ります。しかし私の商賣は、私一人を汚す外には、誰にも迷惑はかけて居りません。ですから私はこの儘死んでも、必天國に行かれると思つて居りました。けれども唯今の私は、御客にこの病を移さない限り、今までのやうな商賣を致して參る事は出來ません。して見ればたとひ餓ゑ死をしても、――さうすればこの病も、癒るさうでございますが、――御客と一つ寢臺に寢ないやうに、心がけねばなるまいと存じます。さもなければ私は、私どもの仕合せの爲に、怨みもない他人を不仕合せに致す事になりますから。しかし何と申しても、私は女でございます。いつ何時どんな誘惑に陷らないものでもございません。天國にいらつしやる基督樣、どうか私を御守り下さいまし。私はあなた御一人の外に、たよるもののない女でございますから。」
かう決心した宋金花は、その後山茶や朋輩に、いくら商賣を勸められても、頑固に客をとら

ずにゐた。又時時彼女の部屋へ、なじみの客が遊びに來ても、一しよに煙草でも吸ひ合ふ外に、決して客の意に從はなかつた。

「私は恐しい病氣を持つてゐるのです。傍へいらつしやると、あなたにも移りますよ。」

それでも客が醉つてでもゐて、無理に彼女を自由にしようとすると、金花は何時もかう云つて、實際彼女の病んでゐる證據を示す事さへ憚らなかつた。だから、客は彼女の部屋には、おひおひ遊びに來ないやうになつた、と同時に又彼女の家計も、一日毎に苦しくなつて行つた。

今夜も彼女はこの卓に凭つて、長い間ぼんやり坐つてゐた。が、不相變彼女の部屋へは、客の來るけはひも見えなかつた。その內に夜は遠慮なく更け渡つて、彼女の耳にはひる音と云つては、唯何處かで鳴いてゐる蟋蟀の聲ばかりになつた。のみならず火の氣のない部屋の寒さは、床に敷きつめた石の上から、次第に彼女の鼠繻子の靴を、その靴の中の華奢な足を、水のやうに襲つて來るのであつた。

金花はうす暗いランプの火に、さつきからうつとり見入つてゐたが、やがて身震ひを一つすると翡翠の環の下つた耳を搔いて、小さな欠伸を嚙み殺した。すると殆その途端に、ペンキ塗りの戶が勢よく開いて、見慣れない一人の外國人が、よろめくやうに外からはひつて來た。その勢が烈しかつたからであらう。卓の上のランプの火は、一しきりぱつと燃え上つて、妙に赤赤と煤けた光を狹い部屋の中に漲らせた。客はその光をまともに浴びて、一度は卓の方へのめりかかつたが、すぐに又立ち直ると、今度は後へたぢろいで、今し方しまつたペンキ塗りの戶へ、どしりと背を凭せてしまつた。

金花は思はず立ち上つて、この見慣れない外國人の姿へ、呆氣にとられた視線を投げた。客は年頃三十五六でもあらうか、縞目のある茶の背廣に、同じ布地の鳥打帽をかぶつた、眼の大きい、顋鬚のある、頰の日に燒けた男であつた。が、唯一つ合點の行かない事には、外國人には違ひないにしても、西洋人か東洋人か、奇體にその見分けがつかなかつた。それが黑い髮の毛を帽の下からはみ出させて、火の消えたパイプを銜へながら、戶口に立ち塞がつてゐる有樣は、どう見ても泥醉した通行人が戶まどひでもしたらしく思はれるのであつた。

「何か御用ですか。」

金花は稍無氣味な感じに襲はれながら、やはり卓の前に立ちすくんだ儘、詰るやうにかう尋ねて見た。すると相手は首を振つて、支那語はわからないと云ふ相圖をした。それから橫銜へにしたパイプを離して、何やら意味のわからない滑な外國語を一言洩らした。が、今度は金花の方が、卓の上のランプの光に、耳環の翡翠をちらつかせながら、首を振つて見せるより外に仕方がなかつた。

客は彼女が當惑らしく、美しい眉をひそめたのを見ると、突然大聲に笑ひながら、無造作に鳥打帽を脫ぎ捨てて、よろよろこちらへ步み寄つた。さうして卓の向うの椅子へ、腰が拔けたやうに尻を下した。金花はこの時この外國人の顏が、何時何處と云ふ記憶はないにしても、確に見覺えがあるやうな、一種の親しみを感じ出した。客は無遠慮に盆の上の西瓜の種をつまみながら、と云つてそれを嚙むでもなく、じろじろ金花を眺めてゐたが、やがて又妙な手眞似まじりに、何か外國語をしやべり出した。その意味も彼女にはわからなかつたが、唯この外國人が彼女の商賣に、多少の理解を持つてゐる事は、朧げながら推測がついた。

支那語を知らない外國人と、長い一夜を明す事も、金花には珍しい事ではなかつた。そこで

彼女は椅子にかけると、殆ど習慣になつてゐる、愛想の好い微笑を見せながら、相手には全然通じない冗談なぞを云ひ始めた。が、客はその冗談がわかるのではないかと疑はれる程、一言か二言聞く度に、上機嫌の笑ひ声を挙げながら、前よりも更に目まぐるしく、いろいろな手真似を使ひ出した。

客の吐く息は酒臭かつた。しかしその陶然と赤くなつた顔は、この索寞とした部屋の空気が、明くなるかと思ふ程、男らしい活力に溢れてゐた。少くともそれは金花にとつては、日頃見慣れてゐる南京の同国人は云ふまでもなく、今まで彼女が見た事のあるどんな東洋西洋の外国人よりも立派であつた。が、それにも関らず、前にも一度この顔を見た覚えのあると云ふ、さつき感じた心もちだけは、どうしても打ち消す事が出来なかつた。金花は客の額に懸つた、黒い捲き毛を眺めながら、気軽さうに愛嬌を振り撒く内にも、この顔に始めて遇つた時の記憶を、一生懸命に喚び起さうとした。

「この間肥つた奥さんと一しよに、画舫に乗つてゐた人かしら。いやいや、あの人は髪の色が、もつとずつと赤かつた。では秦淮の孔子様の廟へ、写真機を向けてゐた人かも知れない。しかしあの人はこの御客よりも、年をとつてゐたやうな気がする。さうさう、何時か利渉橋の側の飯屋の前に、人だかりがしてゐると思つたら、丁度この御客によく似た人が、太い籐の杖を振り上げて、人力車夫の背中を打つてゐたつけ。事によると、――が、どうもあの人の眼は、もつと瞳が青かつたやうだ。……」

金花がこんな事を考へてゐる内に、不相変愉快さうな外国人は、何時かパイプに煙草をつめて、匂の好い煙を吐き出してゐた。それが急に又何とか云つて、今度はおとなしくにやにや笑ふと、片手の指を二本延ばして、金花の眼の前へ突き出しながら、？と云ふ意味の身ぶりをした。指二本が二弗と云ふ金額を示してゐる事は、勿論誰の眼にも明かであつた。が、客を泊めない金花は、器用に西瓜の種を鳴らして、否と云ふ印に二度ばかり、これも笑ひ顔を振つて見せた。すると客は卓の上に横柄な両肘を凭せた儘、うす暗いランプの光の中に、近近と酔顔をさし延ばして、ぢつと彼女を見守つたが、やがて又指を三本出して、答を待つやうな眼つきをした。

金花はちよいと椅子をずらせて、西瓜の種を含んだ儘、当惑らしい顔になつた。客は確に二弗の金では、彼女が体を任せないと云ふやうに思つてゐるらしかつた。と云つて言葉の通じない彼に、立ち入つた事情を呑みこませる事は、誰にも出来さうには思はれなかつた。そこで金花は今更のやうに、彼女の軽率を後悔しながら、涼しい視線を外へ転じて、仕方なく更にきつぱりと、もう一度頭を振つて見せた。

所が相手の外国人は、暫くうす笑ひを浮べながら、ためらふやうな気色を示した後、四本の指をさし延ばして、何か又外国語をしやべつて聞かせた。途方に暮れた金花は頬を抑へて、微笑する気力もなくなつてゐたが、咄嗟にもうかうなつた上は、何時までも首を振り続けて、相手が思ひ切る時を待つ外はないと決心した。が、さう思ふ内にも客の手は、何か眼に見えないものでも捉へるやうに、とうとう五指とも開いてしまつた。

それから二人は長い間、手真似と身ぶりとの入り交つた押し問答を続けてゐた。その間に客は根気よく、一本づつ指の数を増した挙句、しまひには十弗の金を出しても、惜しくないと云ふ意気ごみを示すやうになつた。が、私窩子には大金の十弗も、金花の決心は動かせなかつた。彼女はさつきから椅子を離れて、斜に卓の

の前へ、佇んでゐたが、相手が兩手の指を見せると、苛立たしさうに足踏みをして、何度も續けさまに頭を振つた。その途端にどうかした拍子か、釘に懸つてゐた十字架がはづれて、かすかな金屬の音を立てながら、足もとの敷石の上に落ちた。

彼女は慌しい手を延べて、大切な十字架を拾ひ上げた。その時何氣なく十字架に彫られた、受難の基督の顔を見ると、不思議にもそれが卓の向うの、外國人の顔と生き寫しであつた。

「何でも何處かで見たやうだと思つたのは、この基督樣の御顔だつたのだ。

金花は黒繻子の上衣の胸に、眞鍮の十字架を押し當てた儘、卓を隔てた客の顔へ、思はず驚きの視線を投げた。客はやはりランプの光に、酒氣を帶びた顔を火照らせながら、時時パイプの煙を吐いては、意味ありげな微笑を浮べてゐた。しかもその眼は、彼女の姿へ、——恐らくは白い頸すぢから、翡翠の環を下げた耳のあたりへ、絶えずさまよつてゐるらしかつた。しかしかう云ふ客の容子も、金花には優しい一種の威嚴に、充ち滿ちてゐるかのやうな心もちがした。

やがて客はパイプを止めると、わざとらしく小首を傾けて、何やら笑聲の言葉をかけた、それが金花の心には、殆巧妙な催眠術師が、被術者の耳に囁き聞かせる、暗示のやうな作用を起した。彼女はあの健氣な決心も、全く忘れてしまつたのか、そつとほほ笑んだ眼を伏せて、眞鍮の十字架を手まさぐりながら、この怪しい外國人の側へ、羞しさうに歩み寄つた。

客はズボンの隱しを探つて、じやらじやら銀の音をさせながら、依然とうす笑ひを浮べた眼に、暫くは金花の立ち姿を好ましさうに眺めてゐた。が、その眼の中のうす笑ひが、熱のあるやうな光に變つたと思ふと、いきなり椅子から飛び上つて、酒の匂のする背廣の腕に、力一ぱい金花を抱きすくめた。金花はまるで喪心したやうに、翡翠の耳環の下がつた頭をぐつたりと後へ仰向けた儘、しかし蒼白い頰の底には、鮮な血の色を仄めかせて、鼻の先に迫つた彼の顔へ、恍惚としたうす眼を注いでゐた。この不思議な外國人に、彼女の體を自由にさせるか、それとも病を移さない爲に、彼の接吻を刎ねつけるか、そんな思慮をめぐらす餘裕は、勿論何處にも見當らなかつた。金花は髯だらけな客の口に、彼女の口を任せながら、唯燃えるやうな戀愛の歡喜が、始めて知つた戀愛の歡喜が、激しく彼女の胸もとへ、突き上げて來るのを知るばかりであつた。……

二

數時間の後、ランプの消えた部屋の中には、唯かすかな蟋蟀の聲が、寢臺を洩れる二人の寢息に、寂しい秋意を加へてゐた。しかしその間に金花の夢は、埃じみた寢臺の帷から、屋根の上にある星月夜へ、煙のやうに高高と昇つて行つた。

＊　　＊　　＊

——金花は紫檀の椅子に坐つて、卓の上に並んでゐる、さまざまな料理に箸をつけてゐた。燕の巣、鮫の鰭、蒸した卵、燻した鯉、豚の丸煮、海參の羮、——料理はいくら數へても、到底數へ盡されなかつた。しかもその食器が悉く、べた一面に靑い蓮華や金の鳳凰を描き立てた、立派な皿小鉢ばかりであつた。

彼女の椅子の後には、絳紗の帷を垂れた窓があつて、その又窓の外には川があるのか、靜な水の音や櫂の音が、絶えず此處まで聞えて來た。それがどうも彼女には、幼少の時から見慣れてゐる、秦淮らしい心もちがした。しかし彼女が今居る所は、確に天國の町にある、基督の家

に違ひなかつた。

金花は暫く箸をやめて、卓の周圍を眺めまはした。が、窄い部屋の中には、雕刻のある柱だの、大きな寝台だの、料理の湯氣に灰めいてある外は、一人も人影は見えなかつた。

それにも關らず卓の上には、食器が一つからになると、忽ち何處からか新しい料理が、馥郁な香氣を漲らせて、彼女の眼の前へ運ばれて來た。と思ふと又箸をつけない内に、丸燒きの雉なぞが羽搏きをして、紹興酒の瓶を倒しながら、部屋の天井へぱたぱたと、舞ひ上つてしまふ事もあつた。

その内に金花は誰か一人、音もなく彼女の椅子の後へ、歩み寄つたのに心づいた。そこで箸を持つた儘、そつと後を振り返つて見た。すると其處にはどう云ふ訣か、あると思つた窓がなくて、緞子の蒲團を敷いた紫檀の椅子に、見慣れない一人の外國人が、眞鍮の水煙管を銜へながら、悠悠と腰を下してゐた。

金花はその男を一目見ると、それが今夜彼女の部屋へ、泊りに來た男だと云ふ事がわかつた。が、唯一つ彼と違ふ事には、丁度三日月のやうな光の環が、この外國人の頭の上、一尺ばかりの空に懸つてゐる。

その時又金花の眼の前には、何だか湯氣の立つ大皿が一つ、まるで卓から湧いたやうに、突然旨さうな料理を運んで來た。彼女はすぐに箸を擧げて、皿の中の珍味を挾まうとしたが、ふと彼女の後にゐる外國人の事を思ひ出して、肩越しに彼を見返りながら、

「あなたも此處へいらつしやいませんか。」と、遠慮がましい聲をかけた。

「まあ、お前だけお食べ。それを食べるとお前の病氣が、今夜の内によくなるから。」

圓光を頂いた外國人は、やはり水煙管を銜へた儘、無限の愛を含んだ微笑を洩らした。

「ではあなたは召上らないのでございますか。」

「私かい。私は支那料理は嫌ひだよ。お前はまだ私を知らないのかい。耶蘇基督はまだ一度も、支那料理を食べた事はないのだよ。」

南京の基督はかう云つたと思ふと、徐に紫檀の椅子を離れて、呆氣にとられた金花の頬へ、後から優しい接吻を與へた。

＊　＊　＊　＊

天國の夢がさめたのは、既に秋の明け方の光が、狹い部屋中にうすら寒く擴がり出した頃であつた。が、埃じみた帳を垂れた、小舟のやうな寝台の中には、まだかすかにまた生暖い仄かな闇が殘つてゐた。そのうす暗がりに漂つてゐるのは、半ば仰向いた金花の顔に、色もわからない古毛布に、眠い括り頤を埋めた儘、未だに眠い眼を開かなかつた。しかも血色の惡い頬には、昨夜の汗にくつついたのか、べつたり油じみた髪が亂れて、心もち開いた唇の間にも、糯米のやうに細い歯が、かすかに白々と覗いてゐた。

金花は眠がさめた今でも、菊の花や、水の音や、雉の丸燒や、耶蘇基督や、その外いろいろな夢の記憶に、うとうと心をさまよはせてゐた。が、その内に寝台の中が、だんだん明るくなつて來ると、彼女の快い夢見心にも、傍若無人な現實が、昨夜不思議な外國人と一しよに、この籐の寝台へ上つた事が、はつきりと意識に浸みこんで來た。

「もしあの人に病氣でも移したら、――」

金花はさう考へると、急に心が暗くなつて、今朝は再彼の顔を見るに堪へないやうな心もちがした。が、一度眼がさめた以上、なつかしい彼の日に燒けた顔を何時までも見ずにゐる事は、猶更彼女には堪へられなかつた。そこで暫くためらつた後、彼女は怯づ怯づ眼を開いて、今はもう明くなつた寝台の中を見まはした。しかし其處には思ひもよらず、毛布に包まれた彼

女の外は、十字架の耶蘇に似た彼は勿論、人の影さへも見えなかつた。

「ではあれも夢だつたかしら。」

金花は垢じみた毛布を剥ねのけるが早いか、寝台の上に起き直つた。さうして両手に眼を擦つてから、重さうに下つた帳を揚げて、まだ渋い視線を部屋の中へ投げた。

部屋は冷かな朝の空気に、残酷な位歴々と、あらゆる物の輪廓を描いてゐた。古びた卓、火の消えたランプ、それから一脚は床に倒れ、一脚は壁に向つてゐる椅子、――すべてが昨夜の儘であつた。それぱかりか現に卓の上には、西瓜の種の散らばつた中に、小さな真鍮の十字架さへ、鈍い光を放つてゐた。金花は眩い眼をしばたたいて、茫然とあたりを見まはしながら、暫くは取り乱した寝台の上に、寒さうな横坐りを改めなかつた。

「やつぱり夢ではなかつたのだ。」

金花はかう呟きながら、さまざまにあの外国人の不可解な行く方を思ひやつた。勿論考へるまでもなく、彼は彼女が眠つてゐる暇に、そつと部屋を抜け出して、帰つたかも知れないと云ふ気はあつた。しかしあれ程彼女を愛撫した彼が、一言も別れを惜まずに、行つてしまつたと云ふ事は、信じられないと云ふよりも、寧ろ信じるに忍びなかつた。その上彼女はあの怪しい外国人から、まだ約束の十弗の金さへ、貰ふ事を忘れてゐたのであつた。

「それとも本当に帰つたのかしら。」

彼女は重い胸を抱きながら、毛布の上に脱ぎ捨てた黒繻子の上衣を、ひつかけようとした。が、突然その手を止めると、彼女の顔には見る見る内に、生き生きした血の色が拡がり始めた。それはペンキ塗りの戸の向うに、あの怪しい外国人の足音でも聞えた為であらうか。或は又枕や毛布にしみた、酒臭い彼の移り香が、偶然恥しい昨夜の記憶を喚びさました為であらうか。いや、金花はこの瞬間、彼女の体に起つた奇蹟が、一夜の中に跡方もなく、悪性を極めた楊梅瘡を癒した事に気づいたのであつた。

「ではあの人が基督様だつたのだ。」

彼女は思はず襦衣の儘、転ぶやうに寝台を這ひ下りると、冷たい敷石の上に跪いて、再生の主と言葉を交はした、美しいマグダラのマリアのやうに、熱心な祈祷を捧げ出した。……

三

翌年の春の或夜、宋金花を訪れた、若い日本の旅行家は、又薄暗いランプの下に、彼女と卓を挟んでゐた。

「まだ十字架がかけてあるぢやないか。」

その夜彼が何かの拍子に、ひやかすやうにかういふと、金花は急に真面目になつて、一夜南京に降つた基督が、彼女の病を癒したと云ふ、不思議な話を聞かせ始めた。

その話を聞きながら、若い日本の旅行家は、こんな事を独り考へてゐた。――

「おれはその外国人を知つてゐる。あいつは日本人と亜米利加人との混血児だ。名前は確か George Murry とか云つたつけ。あいつはおれの知り合ひの路透電報局の通信員に、基督教を信じてゐる、南京の私窩子を一晩買つて、その女がすやすや眠つてゐる間に、そつと逃げて来たと云ふ話を得意らしく話したさうだ。おれがこの前に来た時には、丁度あいつもおれと同じ上海のホテルに泊つてゐたから、顔だけは今でも覚えてゐる。何でもやはり英字新聞の通信員だと称してゐたが、男振りに似合はない、人の悪るさうな人間だつた。あいつがその後悪性な梅毒から、とうとう発狂してしまつたのは、事によるとこの女の病気が伝染したのかも知れない。しかしこの女は今になつても、ああ云ふ無頼な

鼠小僧次郎吉

一

或初秋の日暮であつた。汐留の船宿、伊豆屋の表二階には、遊び人らしい二人の男が、さつきから差し向ひで、頻に献酬を重ねてゐた。

一人は色の淺黑い、小肥りに肥つた男で、形の如く結城の單衣物に、八反の平ぐけを締めたのが、上に羽織つた古渡り唐棧の半天と一しよに、その苦みばしつた男ぶりを、一層いなせに見せてゐる趣があつた。もう一人は色の白い、どちらかと云へば小柄な男だが、手首まで彫つてある剳青が目立つせゐか、襟の落ちた小辨慶の單衣物に算盤珠の三尺をぐるぐる卷きつけたのも、意氣と云ふよりは寧ろ凄味のある、自墮落な心もちしか起させなかつた。のみならずこの男は、役者が二三枚落ちると見えて、相手の男を呼びかける時にも、始終親分と云ふ名を用ひてゐた。が、年輩は彼是同じ位らしく、それだけ又世間の親分子分よりも、打ち融けた交情が通つてゐる事は、互に差しつ抑へつする盃の間にも明らかだつた。

初秋の日暮とは云ひながら、向うに見える唐津樣の海鼠壁には、まだ赤赤と入日がさして、その日を浴びた一株の柳が、こんもりと葉かげを蒸してゐるのも、去つて間がない殘暑の思ひ出を新しくするのに十分だつた。だからこの船宿の表二階にも、葭戸こそもう唐紙に變つてゐたが、江戸に未練の殘つてゐる夏は、手すりに下つてゐる伊豫簾や、何時からか床に掛け殘された墨繪の瀧の掛物や、或は又二人の間に並べてある膳の水貝や洗ひなどに、まざまざと盡きない名殘りを示してゐた。實際往來を一つ隔ててゐる堀割の明るい水の上から、時たま此處へ流れて來るそよ風も、微醺を帶びた二人の男には、刷毛先を少し左へ曲げた水髮の鬢を吹かれる度に、涼しいとは感じられるにした所が、毛頭秋らしいうそ寒さを覺えさせるやうな事はないのである。殊に色の白い男の方になると、こればかりは冷たさうな掛守りの銀鎖もちらつく程、思ひ入れ小辨慶の胸をひろげてゐた。

二人は女中まで遠ざけて、暫くは何やら密談に耽つてゐたが、やがてそれも一段落ついたと見えて、色の淺黑い、小肥りに肥つた男は、無造作に猪口を相手に返すと、膝の下の煙草入をとり上げながら、

「と云ふ譯での、おれもやつと三年ぶりに、又江戸へ歸つて來たのよ。」

「道理でちつと御歸りが、遲すぎると思つてゐやしたよ。だがまあ、かうして歸つて來ておくんなさりや、子分子方のものばかりぢや無え、江戸つ子一統が喜びやすぜ。」

「さう云つてくれるのは、手前だけよ。」

「へへ、御有つたものだぜ。」

色の白い、小柄な男は、わざと相手を睨めると、人が惡さうににやりと笑つて、

「小花姐さんにも聞いて御覽なせえまし。」

「そりや無え。」

親分と呼ばれた男は、如心形の煙管を銜へた儘、僅に苦笑の色を漂はせたが、すぐに又眞面目な調子になつて、

「だがの、おれが三年見無え間に、江戸もめつきり變つたやうだ。」

「いや、變つたの、變ら無えの、岡場所なんぞ

の寂れ方と来ちや、まるで嘘のやうでござえます。」
「かうなると、年よりの云ひぐさぢや無えが、やつぱり昔が戀しいの。」
「變らねえのは私ばかりさ。へへ、何時になつてもひつてんだ。」
小辨慶の浴衣を着た男は、受けた盃をぐいとやると、その手ですぐに口の端の滴を拂つて、自ら嘲るやうに眉を動かしたが、
「今から思ひや、十年前は、まるでこの世の極樂さね。ねえ、親分、お前さんが江戸を御賣んなすつた時分にや、盗つ人にせえあの鼠小僧のやうな、石川五右衛門とは行かねえまでも、ちつとは睨みの利いた野郎があつたものぢやござえませんか。」
「飛んだ事を云ふぜ。何處の國におれと盗つ人とを一つ扱ひにする奴があるものだ。」
唐棧の半天をひつかけた男は、煙草の煙にむせながら、思はず又苦笑を洩らしたが、鐵火な相手はそんな事に頓着する氣色もなく、手酌でもう一杯ひつかけると、
「そいつがこの頃は御覧なせえ。けちな稼ぎをする奴は、箒で掃く程ゐやすけれど、あの位な大泥坊は、つひぞ聞かねえぢやござえませんか。」
「聞かねえだつて、好いぢや無えか。國に盗賊、家に鼠だ。大泥坊なんぞは無え方が好い。」
「そりや居無え方が好いにや違えござえませんがね。」
色の白い、小柄な男は、愛嬌のある眉を延べて、親分へ猪口を差しながら、
「あの時分の事を考へると、へへ、妙なもので盗つ人せえ、懐しくなつて来やすのさ。先刻御承知にや違え無えが、あの鼠小僧と云ふ野郎は、小意氣な事が嬉しいや。ねえ、親分。」
「論は無え、盗つ人の尻押しにや、こりや博奕打ちが持つて来いだ。」
「へへ、こいつは一番おそれべか。」
と云つて、ちよいと小辨慶の肩を落したが、こちらは忽ち又元氣な聲になつて、
「私だつて何も盗つ人の肩を持つにや當らねえけれど、あいつは懐の暖え大名屋敷へ忍びこんぢや、御手許金と云ふやつを掠攫つて、その日に追はれる貧乏人へ恵んでやるのだと云ひやすぜ。成程善惡にや二つは無えが、どうせ盗みをするからにや、惡黨冥利にこの位な陰徳は積んで置き度えとね、まあ、私なんぞは思つてゐやすのさ。」
「さうか[illegible]、鼠小僧と云ふ野郎も、改代町の若松屋で[illegible]こんなにまでは、夢にも思つちや居無えだらう。思へば冥加な盗つ人だ。」
色の淺黒い、小肥りに肥つた男は、相手に猪口を返しながら、思ひ出し笑ひをしながらかう云つたが、やがて何か思ひついたらしく、大様に膝を進めると、急に晴晴しく微笑を浮べて、
「おぢや聞きねえ。おれもその鼠小僧ぢや、とんだ御若衆を見た事があつての、今でも思ひ出す度に、腹の皮がよれてならねえのよ。」
親分と呼ばれた男は、かう云ふ前置きを聞かせてから、又悠悠と煙管を銜へて、夕日の中に消えて行く煙草の煙の輪と一しよに、次のやうな話をし始めた。

二

丁度今から三年前、おれが盆茣蓙の上の達て引きから、江戸を賣つた時の事だ。東海道にやちつと差しがあつて、路は惡いが甲州街道を身延まで出にやなら無えから、忘れもし無え、極月の十一日、四谷の荒木町を振り出しに、とうとう旅鴉に身をやつしたが、なりは手前も知つてた通り、結城紬の二枚重ねに一

本獨鈷の博多の帶、道中差をぶつこんでの、革色の半合羽に菅笠をかぶつてゐたと思ひねえ。元より振分けの行李の外にや、道づれも無え獨り旅だ。脚絆草鞋の足拵へは、見てくればかり輕さうだが、當分は御膝許の日の目せえ、拜まれ無え事を考へりや、實は氣も滅入つての、古風ぢやあるが一足毎に、後髪を引かれるやうな心もちよ。

その日が又意地悪く、底冷えのする雪曇りでの、まして甲州街道は、何處の山だか知ら無えが、一面の雲のかかつたやつが、枯つ葉一つがさつか無え桑畑の上に屏風を立ててよ、その桑の枝を摑んだ鴉も、寒さに咽喉を痛めたのか、聲も立て無えやうな凍て方だ。おまけに時時身を切るやうな、小佛颪のからつ風がやけにざつと吹きまくつて、横なぐれに合羽を煽りやがる。かうなつちやいくら威張つても、旅慣れ無え江戸つ子は形無しよ。おれは菅笠の緣に手をかけちや、今朝四谷から新宿と踏み出して來た江戸の方を、何度振り返つて見たか知れやし無え。

するとおれの旅慣れ無えのが、通りがかりの人目にも、氣の毒たらしかつたのに違え無え。府中の宿をはづれると、堅氣らしい若え男が、後からおれに追ひついて、口まめに話しかけやがる。見りや紺の合羽に菅笠は、こりや御定りの旅支度だが、色の褪めた唐棧の風呂敷包を頸へかけの、洗ひざらした木綿縞に剝げつちよろけの小倉の帶、右の小鬢に禿があつて、顋の惡くしやくれたのせえ、よしんば風にや吹かれ無えでも、懷の寒さうな御人體だ。だがの、見かけよりや人は好いと見えて、親切さうに道中の名所古蹟なんぞを教へてくれる。こつちは元より相手欲しやだ。

「御前さんは何處まで行きなさる。」

「私は甲府まで參りやす。旦那は又どちらへ。」

「私は何、身延詣りさ。」

「時に旦那は江戸でございやせう。江戸はどの邊へ御住ひなせえます。」

「茅場町の植木店さ。お前さんも江戸かい。」

「へえ、私は深川の六間堀で、これでも越後屋重吉と云ふ小間物渡世でございやす。」

とまあ、云つた調子での、同じ江戸懷しい話をしながら、互に好い道づれを見つけた氣でよ、一しよに路を急いで行くと、追つけ日野宿へかからうと云ふ時分に、ちらちら白い物が降り出しやがつた。獨り旅であつて見ねえ、時刻も彼是七つ下りぢやあるし、この雪空を見上げちや、川千鳥の聲も身に滲みるやうで、今夜はどうでも日野泊りと、出かけ無けりやなら無え所だが、いくら懷は寒さうでも、其處は越後屋重吉と云ふ道づれのある御かけ樣だ。

「旦那え、この雪ぢや明日の路は、とても捗が參りやせんから、今日の中に八王子までのして置かうぢやござりやせんか。」

と云はれて見りや、その氣になつての、雪の中を八王子まで、辿りついたと思ひねえ。もう空はまつ暗で、とうに白くなつた兩側の屋根が、夜目にも跡の見える街道へ、押つかぶさるやうに重なり合つた、その下に所所、掛行燈が赤く火を入れて、歸り遅れた馬の鈴が、だんだん近くなつて來るなんぞは、手もなく浮世畫の雪景色よ。するとその越後屋重吉と云ふ野郎が、先に立つて雪を踏みながら、

「旦那え、今夜はどうか御一しよに願ひたうござりやす。」

と何度もうるさく頼みやがるから、おれも異存がある譯ぢやなし、

「そりやさう願へれば、私も寂しくなくつて好い。だが私は生憎と、始めて來た八王子だ。何處も旅籠を知ら無えが。」

「何に、あすこの山甚と云ふのが、私の定宿でござりやす。」

と云つておれをつれこんだのは、やつぱり掛行燈のともつてゐる、新見世だとか云ふ旅籠屋だから、入口の土間を奧へとつて、その奧はすぐに臺所へ續くやうな構へだつたらしい。おれたち二人が中へ這入ると、帳場の前の銅壺火鉢へ噛りついてゐた番頭か、また御濯ぎを、とも云は無え内に、意地のきたねえそうだけれど、飯の匂と汁の匂が、湯氣や火の氣と一つになつて、むんと鼻へ來やがつた。それから早速草鞋を脱ぎの、行燈を下げた婢と一しよに、二階座敷へせり上つたが、まづ一風呂暖まつて、何はともあれ寒さ凌ぎと、熱燗で二三杯きめ出すと、その越後屋重吉と云ふ野郎が、始末に了へ無え殊勝上戸で、唯でさへ目のまゐなやつが、大方碌な事なぞ無え。

「旦那え、この酒なら御口に合ひやせう。これから甲州路へかかつて御覽なさいやし、とてもかう云ふ酒は飲めませんや。へへ、古い洒落だが與右衛門の女房で、私ばかりかさねがさね——」

などと云つてゐる内は、まだ好かつたが、銚子が二三本も竝ぶやうになると、目尻を下げて、鼻の脂を光らせて、しやくんだ顋を乙に振つて、

「酒に根が數數ござるつてれ、私なんぞも旦那の前だが、茶屋酒のちいつとまはり過ぎたのが、祟んだ身の仇になりやした。あ、あだな潮來で迷はせるつ。」

とふるへ聲で唄ひ始めやがる。おれは實に持て餘しこの、何でもこいつは寢かすより外に仕方が無えと思つたから、潮さきを見て飯にすると、

「さあ、明日が早えから、寢なせえ。寢なせえ。」

とせき立てての、まだ德利に未練のあるやつを、やつと横にならせたが、御方便なものぢや無えか、あれ程はしやいでゐた野郎が、枕へ頭をつけたとなると、酒臭え欠伸を一つして、

「ああ、あだな潮來で迷はせるつ。」

ともう一度、氣味の惡い聲を出しやがつたが、それつきり後は鼾になつて、いくら鼠が騷がうが、寢返り一つ打ちやがら無え。

が、こつちや災難だ。何を云ふにも江戸を立つて、今夜が始めての泊りぢやあるし、その鼾が耳へついて、あたりが靜になりやなる程、反つて妙に寢つかれ無え。外はまだ雪が止ま無えと見えて、時時雨戸へさらさらと吹つかける音もするやうだ。隣に寢てゐる極道人は、夢の中でも鼻唄を唄つてゐるかも知ら無えが、江戸にやおれがゐ無えばかりに、一人や二人は夜の目も寢無えで、案じてゐてくれるものもあるだらうと、——これさ、のつけから無えと云ふ前に、——つまらねえ事を考へもし、寢つ事おれは又冴えてゐ、早く夜明けになりや好いと、そればつかり思つてゐた。

そんなこんなで九つも聞きの、八つを打つたのも知つてゐたが、その内に眠むけがさしたと見えて、何時からうとうとしたやうだつたが、やがてふと眼がさめると、鼠が燈心でも引きやがつたか、枕もとの行燈が消えてゐる。その上隣に寢てゐる野郎が、さつきまでは鼾をかいてゐた癖に、今はまるで死んだやうに寢息一つさせやがら無え。はてな、何だか可笑しな容子だぞと、かう思ふか思は無え内に、今度はおれの夜具の中へ、人間の手が這入つて來やがつた。それもがたがたふるへながら、胴卷の結び目を探しやがるのよ。成程、人は見かけによら無えものだ。あのでれ助が胡麻の蠅とは、こいつはちいつと出來すぎたわい。——と思つたら、すんでの事に、おれは吹き出す所だつたが、その胡麻の蠅と今が今まで、一しよに酒を飲んでゐたと思や、忌忌しくなつて來ての、あの野郎の手が胴卷の結び目をほどきにかかりやがると、いきなり逆にひつ攫んで、捻り上げたと思ひね

ねえ。胡麻の蠅のなあ、驚きやがるめえ事か、慌てて振り放さうとする所を、夜具を頭から押つかぶせての、まんまとおれがその上へ馬乗りになつてしまつたのよ。するとあの意氣地なしめ、無理無體に夜具の下から、面だけ外へ出したと思ふと、ひ、ひ、ひ、人殺しーと、烏骨鷄が時でもつくりやしめえし、奇體な聲を立てやがつた。手前が盗みをして置きながら、手前で人を呼びや世話は無え、馬鹿とは始めから知つちやゐるが、とりとは呆らしくも無え野郎だと、おれは急に腹が立つたから、其處にあつた枕をひつ攫んで、ほかほかその面をぶちのめしたぢや無えか。

さあ、その騒ぎが聞えての、隣近所の客も眼をさましや、宿の亭主や奉公人も、何事が起つたと云ふ顔色で、手燭の火を先立ちに、どかどか二階へ上つて來やがつた。來て見りやおれの股ぐらから、あの野郎がもう片息になつて、面妖な面を出してゐやがる始末よ。こりや誰が見ても大笑ひだ。

「おい、御亭主、飛んだ蚤にたかられての、人騒がせをして濟まなかつた。外の客人にやお前から、よく詫びを云つておくんなせえ。」

それつきりよ。もう後は譯を話すも話さ無えも無え。奉公人がすぐにあの野郎を、ぐるぐる巻にふん縛つて、まるで生捕りました河童のやうに、寄つてたかつて二階から、引きずり下してしまやがつた。

さてその後で山甚の亭主が、おれの前へ手をついての、

「いや、どうも以ての外の御災難で、さぞまあ、御驚きでございましたらう。が、御路用その外別に御紛失物もなかつたのは、せめてもの御仕合せでございます。追つてはあの野郎も夜の明け次第、早速役所へ引渡す事に致しますから、どうか手前どもの届きません所は、幾重にも御勘辨下さいますやうに。」

と何度も頭を下げるから、

「何、胡麻の蠅とも知ら無えで、道づれになつたのが私の落度だ。それを何も御前さんが、あやまんなさる事は無えのさ。こりやほんの僅ばかりだが、世話になつた若え衆たちに、暖けえ蕎麥の一杯も振舞つてやつておくんなせえ。」

と祝儀をやつて返したが、つくづく一人になつて考へりや、宿場女郎にでも振られやしめえし、何時までも床に倚つかかつて、腕組みをしてゐるのも智慧が無え。と云つてこれから寝られやせず、何かと云ふ中にや六つだらうから、こりやいつそ今の内に、ちつとは路が暗くつても、早立ちをするのが上分別だと、かう思案がきまつたから、早速身支度にとりかかりの、勘定は帳場へ拂つて行かうと、外の客の邪魔にならねえやうに、そつと梯子口まで來て見ると、下ぢやまだ奉公人たちが、皆起きてゐると見えて、何やら話し聲も聞えてゐる。するとその中にどう云ふ譯か、度度さつき手前の話した、鼠小僧と云ふ名が出るぢや無えか。おれは妙だと思つての、雨掛の行李を下げた儘、梯子口から下を覗いて見ると、廣い土間のまん中にや、あの越後屋重吉と云ふ木念仁が、繩尻は柱に括られながら、大あぐらをかいてゐやがる。そのまはりにや又若え者が、番頭も一しよに三人ばかり、八間の明りに照らされながら、腕まくりをしてゐるぢや無えか。中でもその番頭が、片手に算盤をひつ攫みの、薬罐頭から湯氣を立てて、忌忌しさうに何か云ふのを聞きや、

「ほんによ、こんな胡麻の蠅も、今に甲羅を經て見さつし、鼠小僧なんぞはそこのけの大泥坊になるかも知れ無え。ほんによ、さうなつた日にやこいつの御蔭で、街道筋の旅籠屋が、みんな暖簾に瑕がつくわな。その事を思や今の内に、ぶつ殺した方が人助けよ。」

と云ふ側から、おちむさく髭の伸びた馬子半天が、じろじろ胡麻の蠅の面を覗きこんで、

「番頭どんともあらうものが、いやはや又當て事も無え事を云つたものだ。何でこんな間抜野郎に、鼠小僧の役が勤まるべい。大方胡麻の蠅も氣が強えと云つたら、面を見たばかりでも知れべいわさ。」

「違え無え。高高鼬小僧位な所だらう。」——

こりや火吹竹を得物にした、宿の若え者が云つた事だ。

「ほんによ。さう云やこの野猿坊は、人の胴卷もまだ盜まねえ内に、うぬが褌を先へ盜まれさうな面だ。」

「下手な道中稼ぎなんぞするよりや、棒つ切の先へ鶏をつけの、子供と一しよに賽錢箱のびた錢でもくすねてゐりや好い。」

「何、それよりや案山子代りに、おらが後の粟畑へ、突つ立つてゐるが好かんべい。」

から皆がなぶり物にすると、あの越後屋重吉め、ちつとの間は口惜しさうに眼ばかりぱちつかせてゐやがつたが、やがて宿の若え者が、火吹竹を顎の下へやつて、ぐいと面を擡けさせると、急に卷き舌になりやがつて、

「やい、やい、やい、こいつらは飛んだ奴ぢやねえかえ。誰だと思つて啖呵をつきやがる。かう見えても、この御兄さんはな、日本中を股にかけた、ちつとは面の賣れてゐる胡麻の蠅だ。無面目にも程があらあ。うぬが土百姓の分在で、利いた風な御託を竝べやがる。」

これにや皆驚いたのに違え無え。實は梯子を下りかけたおれも、あんまりあの野郎の權幕が御大そうなものだから、又中段に足を止めて、もう少し下の成行きを眺めてゐる氣になつたのよ。まして人の好ささうな番頭なんぞは、算盤まで持ち出したのも忘れたやうに、呆れてあの野郎を見つめやがつた。が、氣が強えのは馬子半天での、こいつだけはまだ髭を撫でながら、

「何處を風が吹くと云ふ面で、——何が胡麻の蠅がえらかんべい。三年前の大夕立に雷獸樣を手捕りにした、横山宿の勘太とはおらが事だ。おらが身もんでえを一つすりや、うぬがやうな胡麻の蠅は、踏み殺されると云ふ事を知ん無えか。」

と嵩にかかつて嚇したが、胡麻の蠅の奴はせせら笑つて、

「へん、こけが六十六部に立山の話でも聞きやしめえし、頭からおどかしを食つてたまるものかえ。これやい、眠む氣ざましにや勿體無えが、おれの素性を洗つてやるから、耳の穴を掻つぽじつて聞きやがれ。」

と聲色にしちや語呂の惡い、啖呵を切り出した所は豪勢だが、面を見りや寒いと見えて、水つ洟が鼻の下に光つてゐる。おまけにおれのなぐつた所か、小鬢の禿から顋へかけて、まるで面が歪んだやうに、腫れ上つてゐようと云ふものだ。が、それでも田舍者にや、あの野郎のぼんぼん云ふ事が、ちつとは效き目があつたのだらう。あいつが乙に反り身になつて、餓鬼の時から惡事を覺えた行き立てを饒舌つてゐる内にや、雷獸を手捕りにしたとか云ふ、髭のちちむせえ馬子半天も、追追あの胡麻の蠅を胴突かなくなつて來たぢや無えか。それを見るとあの野郎め、愈しやくんだ顋を振りの、三人の奴らをねめまはして、

「へん、このごつぽう人めら、手前たちを怖がるやうな、よいよいだとでも思やがつたか。いんにやさ。唯の胡麻の蠅だと思ふと、相手が違ふぞ。手前たちも覺えてゐるだらうが、去年の秋の嵐の晩に、この宿の庄屋へ忍びこみの、有り金を殘らず掻つ攫つたのは、誰でも無えこのおれだ。」

「うぬが、あの庄屋樣へ、——」

から云つたのは、番頭ばかりぢや無え。火吹竹を持つた若え者も、さすがに肝をつぶしたと見えて、思はず大きな聲を出しながら、二足三足後へ下りやがつた。

「さうよ。そんな仕事に驚くやうぢや、手前たちはまだ甘えものだ。かう、よく聞けよ。ついこの中も小佛峠で、金飛脚が二人殺されたのは、誰の仕業だと思やがる。」

　あの野郎は水つ洟をすすりこんぢや、やれ府中で土藏を破つたの、やれ日野宿でつけ火をしたの、やれ厚木街道の山の中で巡禮の女をなぐさんだの、だんだん途方も無え惡事を饒舌り立てたが、妙な事にやそれにつれて、番頭始め二人の野郎が、何時の間にかあの木念仁へ慇懃になつて來やがつた。中でも圖體の大きな馬子半天が、莫迦力のありさうな腕を組んで、まじまじあの野郎の面を眺めながら、

「お前さんと云ふ人は、何たる又惡黨だんべい。」

　と唸るやうな聲を出した時にや、おれは可笑しさがこみ上げての、あぶなく吹き出す所だつた。ましてあの胡麻の蠅が、もう醉もさめたのだらう、如何にも寒さうな顔色で、歯の根も合は無え程ふるへながら、口先ばかりや勢よく、

「何と、ちつとは性根がついたか。だがおれの官祿は、まだまだそんな事ぢや無え。今度江戸をづらかつたのは、臍繰金が欲しいばかりに二人と無え御袋を、おれの手にかけて絞め殺した、その化の皮が剝げたからよ。」

　と大きな見得を切つた時にや、三人ともあつと息を引いての、千兩役者でも出て來はしめえし、小鬢から脹れ上つたあいつの面を、難有さうに見つめやがつた。おれはあんまり莫迦らしいから、もう見てゐるがものは無えと思つて、二三段梯子を下りかけたが、その途端に番頭の藥鑵頭め、何と思やがつたか横手を打つて、

「や、讀めたぞ。讀めたぞ。あの鼠小僧と云ふのは、さてはおぬしの諢名だな。」

　と頓狂な聲を出しやがつたから、おれはふと又氣が變つて、あいつが何とぬかしやがるか、それが聞きたさにもう一度、うすつ暗え梯子の中段へ足を止めたと思ひねえ。するとあの胡麻の蠅め、じろりと番頭を睨みながら、

「圖星を指されちや仕方が無え。如何にも江戸で噂の高え、鼠小僧とはおれの事だ。」

　と横柄にせせら笑やがつた。が、さう云ふか云は無え内に、胴震ひを一つしたと思ふと、二つ三つ續けさまに色氣の無え嚔をしやがつたから、折角の睨みも臺無しよ。それでも三人の野郎たちは、勝角力の名乘りでも聞きやしめえし、あの重吉の間拔野郎を煽ぎ立て無えばかりにして、

「おらもさうだらうと思つてゐた。三年前の大夕立に雷獸樣を手捕りにした、横山宿の勘太と云つちや、泣く兒も默るおらだんべい。それをおらの前へ出て、びくともする容子が見え無えだ。」

「違え無え。さう云やどこか眼の中に、すすどい所があるやうだ。」

「ほんによ、だからおれは始から、何でもこの人は一つぱしの大泥坊になると云つてゐたわな。」

ほんによ。今夜け弘法にも筆の誤り、上手の手からも水が漏るす。漏つたが、これが漏ら無えで見ねえ、二階中の客は裸にされるぜ。」

　と繩こそ解かうとはし無えけれど、口口にちやほやしやがるのよ。すると又あの胡麻の蠅め、大方威張る事ぢや無え。

「かう、番頭さん、鼠小僧の御宿をしたのは、お前の家の旦那が運が好いのだ。さう云ふおれの口を干しちや、旅籠屋冥利が盡きるだらうぜ、桝で好いから五合ばかり、酒をつけてくん

ねえな。」

　かう云ふ野郎も圖圖しいが、それを又正直に聞いてやる番頭も間抜けぢや無えか。おれは八間の明りの下で、藥罐頭の番頭が、あの飲んだくれの胡麻の蠅に、樽の酒を飲ませてゐるのを見たら、何もこの山越の奉公人ばかりとは限ら無え、世間の奴等の莫迦莫迦しさが、可笑しくつて、可笑しくつて、こてえられ無かつた。何故と云ひねえ。同じ惡黨とは云ひながら、押込みよりや掻拂ひ、火つけよりや巾著切が、まだしも罪は輕いぢや無えか。それなら世間もそのやうに、大盜つ人よりや、小盜つ人に憐みをかけてくれさうなものだ。所が人はさうぢや無え。三下野郎にやむごくつても、金箔つきの惡黨にや向うから頭を下げやがる。鼠小僧と云や酒も飲ますが、唯の胡麻の蠅と云や張り倒すのだ。思やおれも盜つ人だつたら、小盜つ人にやなりたく無え。――とまあ、おれは考へたが、さて何時までも便便と、こんな茶番も見ちやゐられ無えから、わざと音をさせて梯子を下りの、上り口へ荷物を抛り出して、

「おい、番頭さん、私は早立ちと出かけるから、ちよいと勘定をしておくんなせえ。」

　と聲をかけると、いや、番頭の藥罐頭め、てれまい事か、慌てて樽を馬子半太に渡しながら、何度も小鬢へ手をやつて、

「これは又御早い御立ちで――ええ、何とぞ御腹立ちになりやせんやうに――又先程は、ええ、手前どもにもわざわざ御心づけを頂きまして――尤も好い鹽梅に雪も晴れたさうでげすが――」

　などと譯のわからねえ事を並べやがるから、おれは可笑しさも可笑しくなつて、

「今下りしなに小耳へ挾んだが、この胡麻の蠅は、評判の鼠小僧とか云ふ野郎ださうだの。」

「へい、さやうださうで、――おい、早く御草鞋を持つて來さつし。御笠に御合羽は此處にありと――どうも大した盜つ人ださうでげすな。――へい、唯今御勘定を致しやす。」

　番頭のやつはてれ隱しに、若え者を叱りながら、そこそこ帳場の格子の中へ這入ると、仔細らしく帳へ筆で算盤をぱちぱちやり出しやがつた。おれはその間に草鞋をはいて、さて一服吸ひつけたが、見りやあの胡麻の蠅は、もう御神酒がまはつたと見えて、小鬢の禿まで赤くしながら、さすがにちつとは恥しいのか、なるべくおれの方を見無えやうに、横眼ばかり使つてゐやがる。そのみすぼらしい容子を見ると、おれは今更のやうにあの野郎が、可哀さうにもなつて來たから、

「おい、越後屋さん。いやさ、重吉さん。つまら無え冗談は云はねえものだ。御前が鼠小僧だなどと云ふと、人の好い田舍者は本當にするぜ。それぢや宿が惡からうぜ。」

　と頭切つくに云つてやりや、あの阿呆の合天井め、まだ芝居かし足り無えのか、

「何だと。おれが鼠小僧ぢや無えと？　飛んだ御前は物知りだの。から、旦那旦那と立ててゐりや――」

「これさ。そんな啖呵が切りたけりや、此處にゐる馬子や若え衆が、丁度御前にや好い相手だ。だがそれもさつきからおぢや、もう大抵切り飽きたらう。第一御前が紛れも無え日本一の大泥坊なら、何もすき好んでべらべらと、爲にもなら無え舊惡を並べ立てる筈が無えわな。これさ、まあ默つて聞きねえと云ふ事に。そりや御前が何でも彼でも、鼠小僧だと強情を張りや、役人始め眞實御前が鼠小僧だと思ふかも知れ無え。が、その時にや輕くて獄門、重くて磔に遭はれ無えぜ。それでも御前は鼠小僧か、――と云はれたら、どうする氣だ。」

　とかう一本突つこむと、あの意氣地なしめ、

見る見る内に、侍の色まで變へやがつて、

「へい、何とも申し譯はございやせん。實は鼠小僧でも何でも無え、唯の胡麻の蠅でございやす。」

「さうだらう。さうなくつちや、なら無え筈だ。だが火つけ押込みまでさんざんしたと云ふからにや、御前も好い惡黨だ。どうせ笠の臺は飛ぶだらうぜ。」

と框で煙管をはたきながら、大眞面目におれがひやかすと、あいつは醉もさめたと見えて、又水つ洟をすすりこみの、泣かねえばかりの聲を出して、

「何、あれもみんな嘘でございやす。私は旦那に申し上げた通り、越後屋重吉と云ふ小間物渡世で、年にきつと一二度はこの街道を上下しやすから、善かれ惡しかれいろいろな噂を知つて居りやすので、つい口から出まかせに、何でも彼でもぼんぼんと——」

「おい、おい、お前は今胡麻の蠅だと云つたぢやねえか。胡麻の蠅が小間物を賣るとは、御入國以來聞かねえ事だの。」

「いえ、人樣の物に手をかけたのは、今夜がまだ始めてでございやす。この秋女房に逃げられやして、それから引き續き不手まはりな事ばかり多うございやしたから、貧すりや鈍するとか申す通り、ふとした一時の出來心から、飛んだ失禮な眞似を致しやした。」

おれはいくらとんちきでも、兎に角胡麻の蠅だとは思つてゐたから、かう云ふ話を聞かされた時にや、煙管へ煙草をつめかけた儘、呆れて物も云へなかつた。が、おれは呆れただけだつたが、馬子半大と云へ者とは、腹を立てたの立て無えのぢやねえ。おれが止めようと思ふ内に、いきなりあの野郎を引きずり倒しの、

「うぬ、よくも人を馬鹿にしやがつたな。」

「その頰桁を張りのめしてくれべい。」

と喚き立てる聲の下から、火吹竹が飛ぶ、桝が降るよ。可哀さうに越後屋重吉は、あんなに横つ面を腫らした上へ、頭まで瘤だらけになりやがつた。……

三

「話と云ふのはこれきりよ。」

色の淺黑い、小肥りに肥つた男は、かう一部始終を語り終ると、今まで閑却されてゐた、膳の上の猪口を取り上げた。

向うに見える唐津樣の海鼠壁には、何時か入日の光がささなくなつて、堀割に臨んだ一株の葉柳にも、そろそろ暮色が濃くなつて來た。と思ふと三絃の音が、靜に潮の匂のする欄外の空氣を搖りながら、今更のやうに暦の秋を二人の客の胸にしみ渡らせた。風に動いてゐる伊豫簾、御濱御殿の森の鴉の聲、それから二人の間にある盃洗の水の冷たい光——女中の運ぶ燭臺の火が、赤く火先を靡かせながら、梯子段の下から現れるのも、もう程がないのに相違あるまい。

小辨慶の單衣を著た男は、相手が猪口をとり上げたのを見ると、早速徳利の尻をおさへながら、

「いや、はや、飛んでも無えたはけがあるものだ。日本の盗人の守り本尊、私の贔屓の鼠小僧を何だと思つてゐやがる。親分なら知ら無え事、私だつたらその野郎をきつと張り倒してゐやしたぜ。」

「何もそれ程に業を煮やす事は無え、あんな間拔な野郎でも、鼠小僧と名乘つたばかりに、大きな面が出來た事を思や、鼠小僧もさぞ本望だらう。」

「だつとつて御前さん、そんな駈け出しの胡麻の蠅に鼠小僧の名をかたられちや——」

刺青のある、小柄な男は、まだ云ひ爭ひた

い褐色を見せた、色の淺黒い、唐棧の半天を羽織つた男は、悠悠と微笑を含みながら、

「はて、このおれが云ふのだから、本望に違え無えぢや無えか。手前にやまだ明さなかつたが、十三年前に鼠小僧と江戸で噂が高かつたのは――

と云ふと、猪口を控へた儘、鋭くあたりへ眼をくばつて、

「この和泉屋の次郎吉の事だ。」

二人の友

僕は一高へはひつた時、福間先生に獨逸語を學んだ。福間先生は鷗外先生の「二人の友」の中のF君である。「二人の友」は當時はまだ活字になつてはゐなかつたであらう。少くとも僕などのそんなことを全然知らなかつたのは確かである。

福間先生は常人よりも寧ろ脊は低かつたであらう。何でも金縁の近眼鏡をかけ、可成長い口髭を蓄へてゐられたやうに覺えてゐる。僕等は皆福間先生に或親しみを抱いてゐた。それは先生も青年のやうに諧謔を好んでゐられたからである。先生は一學期の或時間に久米正雄にかう言はれた。

「君にはこの言葉の意味がクメとれないんですか？」

久米も亦忽ち洒落を以て酬いた。

「ええ、ちよつとわかりません。どう言ふ意味がクメつてゐるか――」

福間先生は二學期からいきなり僕等にゲラアデ、アウスと云ふキズキイの警句集を教へられた。僕等の新單語に惱まされたことは言ふを待たないのに違ひない。僕は未だにその本にあつた、シュクアツ、ヘモロイダリウスと云ふ、不可思議な言葉を記憶してゐる。この言葉は恐らくは一生の間、薄暗い僕の腦味噌のどこかに木の子のやうに生えてゐるであらう。僕はそんなことを考へると、いつも何か可笑しい中に儚い心もちも感じるのである。

福間先生の死なれたのは僕等の二年生になつた時か、それとも三年生になつた時か、生憎はつきりと覺えてゐない。が、その一週間か二週間か前に今の恒藤恭――當時の井川恭と一しよにお見舞に行つたことは覺えてゐる。先生はベッドに仰臥されたまま、たつた一言「大分好い」と言はれた。しかし實際は「大分好い」よりも寧ろ大分惡かつたのであらう。現に先生の奥さんなどは愁はしい顏をしてゐられたものである。

或曇つた冬の日の午後、僕等は皆福間先生の柩を谷中のお寺へ送つて行つた。お葬式の導師になつたのはやはり鷗外先生の「二人の友」の中の「安國寺さん」である。安國寺さんは式をすませた後、本堂の前に並んだ僕等に寂滅爲樂の法を說かれた。「一井邨山頭一片の烟となり、」――僕は度たび安國寺さんのそんなことを言はれたのを覺えてゐる。同時に又丁度その最中に霰の降り出したのも覺えてゐる。

僕はこの短い文章に「二人の友」と云ふ題をつけた。それは勿論鷗外先生の「二人の友」を借用したのである。けれども今讀み返して見ると、僕も亦偶然この文章の中に二人の友だちの名を舉げてゐた。福間先生にからかはれたのは必しも久米に限つたことではない。先生はむづかしい顏をされながら、井川にもやはりかう言はれた。

「そんな言葉がわからなくてはイカン。」

（「梅・馬・鶯」小品第一より）

秋山圖

「――黄大癡と云へば、大癡の秋山圖を御覽になつた事がありますか？」

或秋の夜、甌香閣を訪ねた王石谷は、主人の惲南田と茶を啜りながら、話の次手にこんな問を發した。

「いや、見た事はありません。あなたは御覽になつたのですか？」

大癡老人黄公望は、梅道人や黄鶴山樵と共に、元朝の畫の神手である。惲南田はかう云ひながら、嘗て見た沙磧圖や富春卷が、髣髴と眼底に浮ぶやうな氣がした。

「さあ、それが見たと云つて好いか、見ないと云つて好いか、不思議な事になつてゐるのですが、――」

「見たと云つて好いか、見ないと云つて好いか、――」

惲南田は訝しさうに、王石谷の顏へ眼をやつた。

「模本でも御覽になつたのですか？」

「いや、模本を見たのでもないのです。兎に角眞蹟は見たのですが、――それも私ばかりではありません。この秋山圖の事に就いては、煙客先生（王時敏）や廉州先生（王鑑）も、それぞれ因緣が御有りなのです。」

王石谷は又茶を啜つた後、考へ深さうに微笑した。

「御退屈でなければ話しませうか？」

「どうぞ。」

惲南田は銅檠の火を掻き立ててから、慇懃に客を促した。

* * * * *

元宰先生（董其昌）が在世中の事です。或年の秋先生は、煙客翁と畫論をしてゐる内に、ふと翁に、黄一峯の秋山圖を見たかと尋ねました。翁は御承知の通り畫事の上では、大癡を宗としてゐた人です。ですから大癡の畫と云ふ畫は苟くも人間にある限り、看盡したと云つてもかまひません。が、その秋山圖と云ふ畫ばかりは、終に見た事がないのです。

「いや、見る所か、名を聞いた事もない位です。」

煙客翁はさう答へながら、妙に恥しいやうな氣がしたさうです。

「では機會のあり次第、是非一度は見て御置きなさい。夏山圖や浮嵐圖に比べると、又一段と出色の作です。恐らくは大癡老人の諸本の中でも、白眉ではないかと思ひますよ。」

「そんな傑作ですか？　それは是非見たいものですが、一體誰が持つてゐるのです？」

「潤州の張氏の家にあるのです。金山寺へでも行つた時に、門を叩いて御覽なさい。私が紹介狀を書いて上げます。」

煙客翁は先生の手簡を貰ふと、すぐに潤州へ出かけて行きました。何しろさう云ふ妙畫を藏してゐる家ですから、其處へ行けば黄一峯の外にも、まだいろいろ歷代の墨妙を見る事が出來るに違ひない。――かう思つた煙客翁は、もう一刻も西園の書房に、じつとしてゐる事は出來ないやうな、落着かない氣もちになつてゐたのです。

所が潤州へ來て觀ると、樂みにしてゐた張氏の家と云ふのは、成程構へは廣さうですが、如何にも荒れ果ててゐるのです。墻には蔦が絡

んでゐるし、庭には草が茂つてゐる。その中に鷄や家鴨なぞが、客の來たのを珍しさうに眺めてゐると云ふ始末ですから、さすがの翁もこんな家に、大癡の名畫があるのだらうかと、一時は元宰先生の言葉が疑ひたくなつた位でした。しかしわざわざ尋ねて來ながら、刺も通ぜずに歸るのは、勿論本望ではありません。そこで取次ぎに出て來た小厮に、兎も角も、黄一峯の秋山圖が拜見したいと云ふ、遠來の意を傳へた後、思白先生が書いてくれた紹介狀を渡しました。

すると間もなく煙客翁は、廳堂へ案内されました。此處も紫檀の椅子机が、淸らかに並べてありながら、冷たい埃の臭ひがする、――やはり荒廢の氣が鋪甎の上に、漂つてゐるとでも云ひさうなのです。しかし幸ひ出て來た主人は、病弱らしい顏はしてゐても、人がらの惡い人ではありません。いや、寧ろその蒼白い顏や華奢な手の恰好なぞに、貴族らしい品格が見えるやうな人物なのです。翁はこの主人に一通り、初對面の挨拶をすませると、早速名高い黄一峯を見せて頂きたいと云ひ出しました。何でも翁の話では、その名畫がどう云ふ譯か、今の内に急いで見て置かないと、霧のやうに消えてしまひさうな、迷信じみた氣もちがしたのださうです。

主人はすぐに快諾しました。さうしてその廳堂の素壁へ、一幀の畫幅を懸けさせました。

「これが御望みの秋山圖です。」

煙客翁はその畫を一目見ると、思はず驚嘆の聲を洩らしました。

畫は靑綠の設色です。溪の水が委蛇と流れた處に、村落や小橋が散在してゐる、――その上に起した主峯の腹には、悠悠とした秋の雲が、蛤粉の濃淡を重ねてゐます。山は高房山の橫點を重ねた、新雨を經たやうな翠黛ですが、それが又硃を點じた、所所の叢林の紅葉を映發してゐる美しさは、殆何と形容して好いか、言葉の著けやうさへありません。かう云ふと、唯華麗な畫のやうですが、布置も雄大を盡してゐれば、筆墨も渾厚を極めてゐる、――云はば爛然とした色彩の中に、空靈澹蕩の古趣が自ら漲つてゐるやうな畫なのです。

煙客翁はまるで放心したやうに、何時までもこの畫に見入つてゐました。が、畫は見てゐれば見てゐる程、益神妙を加へて行きます。

「如何です？ 御氣に入りましたか？」

主人は微笑を含みながら、斜に翁の顏を眺めました。

「神品です。元宰先生の絕賞は、たとひ及ばない事があつても、過ぎてゐるとは云はれません。實際この圖に比べれば、私が今までに見た諸名蹟は、悉下風にある位です。」

煙客翁はかう云ふ間にも、秋山圖から眼を放しませんでした。

「さうですか？ ほんたうにそんな傑作ですか？」

翁は思はず主人の方へ、驚いた眼を轉じました。

「何故又それが御不審なのです？」

「いや、別に不審と云ふ譯ではないのですが、實は、――」

主人は殆處子のやうに、當惑さうな顏を赤めました。が、やつと寂しい微笑を洩すと、怯づ怯づ壁上の名畫を見ながら、かう言葉を續けるのです。

「實はあの畫を眺める度に、私は何だか眼を明いた儘、夢でも見てゐるやうな氣がするのです。成程秋山は美しい。しかしその美しさは、私だけに見える美しさではないか？ 私以外の人間には、平凡な畫圖に過ぎないのではないか？ ――何故かさう云ふ疑ひが、始終私を惱ませ

るのです。これは私の氣の迷ひか、或はあの畫が世の中にあるには、餘り美し過ぎるからか、どちらが原因だかわかりません。が、兎に角妙な氣がしますから、ついあなたの御賞鑑に、念を押すやうな事になつたのです。」

しかしその時の煙客翁は、かう云ふ主人の話にも、格別心は止めなかつたさうです。それは何も秋山圖に、見惚れてゐたばかりではありません。翁には主人が徹頭徹尾、鑑識に疎いのを隱したさに、胡亂の言を並べるとしか、受け取れなかつたからなのです。

翁はそれから少時の後、この廢宅同樣な張氏の家を辭しました。

が、どうしても忘れられないのは、あの眼も覺めるやうな秋山圖です。實際大癡の法燈を繼いだ煙客翁の身になつて見れば、何を捨ててもあれだけは、手に入れたいと思つたでせう。のみならず翁は蒐集家です。しかし家藏の墨妙の中でも、黃金二十鎰に換へたと云ふ、李營丘の山陰泛雪圖でさへ、秋山圖の神趣に比べると、遜色のあるのを免れません。ですから翁は蒐集家としても、この稀代の黃一峯が欲しくてたまらなくなつたのです。

そこで潤州にゐる間に、翁は人を張氏に遣はして、秋山圖を讓つて貰ひたいと、何度も交渉して見ました。が、張氏はどうしても、翁の相談に應じません。あの顏色の蒼白い主人は、使に立つたものの話によると、それ程この畫が御氣に入つたのなら、喜んで先生に御貸し申さう。しかし手離す事だけは御免蒙りたい。」と云つたさうです。それが又氣を負つた煙客翁には、多少癪にも障りました。何、今貸して貰はなくても、何時かはきつと手に入れて見せる。――翁はさう心に期しながら、とうとう秋山圖を殘したなり、潤州を去る事になりました。

それから又一年ばかりの後、煙客翁は潤州へ來た次手に、張氏の家を訪れて見ました。すると墻に絡んだ蔦や庭に茂つた草の色は、以前と更に變りません。が、取次ぎの小廝に聞けば、主人は不在だと云ふ事です。翁は主人に會はないにしろ、もう一度あの秋山圖を見せて貰ふやうに賴みました。しかし何度賴んで見ても、小廝は主人の留守を楯に、頑として奧へ通しません。いや、しまひには門を鎖した儘、返事さへ碌にしないのです。そこで翁はやむを得ず、この荒れ果てた家の何處かに、藏してある名畫を想ひながら、惆悵と獨り歸つて來ました。

所がその後元宰先生に會ふと、先生は翁に張氏の家には、大癡の秋山圖があるばかりか、沈石田の雨夜止宿圖や自壽圖のやうな傑作も、殘つてゐると云ふ事を告げました。

「前に御話するのを忘れたが、この二つは秋山圖同樣、繪苑の奇觀とも云ふべき作です。もう一度私が手紙を書くから、是非これを見て置きなさい。」

煙客翁はすぐに張氏の家へ、急の使を立てました。使は元宰先生の手札の外にも、それらの名畫を購ふべき槖金を授けられてゐたのです。しかし張氏は前の通り、どうしても黃一峯だけは、手離す事を背じません。翁は終に秋山圖には意を絶つより外はなくなりました。

* * * * *

王石谷はちよいと口を噤んだ。

「これまでは私が煙客先生から、聞かせられた話なのです。」

「では煙客先生だけは、確に秋山圖を見られたのですか?」

惲南田は髯を撫しながら、念を押すやうに王石谷を見た。

「先生は見たと云はれるのです。が、確に見られたのかどうか、それは誰にもわかりません。」

「しかし御話の御容子では、――」

「まあ先を御聽き下さい。しまひまで御聽き下されば、又自ら私とは違つた御考が出るかも知れません。」

王石谷は今度は茶も啜らずに、娓娓と話を續け出した。

＊　＊　＊　＊　＊

煙客翁が私にこの話を聽かせたのは、始めて秋山圖を見た時から、既に五十年近い星霜を經過した後だつたのです。この時は元宰先生も、とうに物故してゐましたし、張氏の家でも何時の間にか、三度まで代が變つてゐました。ですからあの秋山圖も、今は誰の家に藏されてゐるか、いや、未に龜玉の毀れもないか、それさへ我我にはわかりません。煙客翁は手にとるやうに、秋山圖の靈妙を話してから、殘念さうにかう云つたものです。

「あの黃一峯は公孫大孃の劍器のやうなものでしたよ。筆墨はあつても、筆墨は見えない。唯何とも云へない神氣が、直ちに心に迫つて來るのです。――丁度龍翔の看はあつても、人や劍が我我に見えないのと同じ事ですよ。」

それから一月ばかりの後、そろそろ春風が動き出したのを潮に、私は獨り南方へ、旅をする事になりました。そこで翁にその話をすると、

「では丁度好い機會だから、秋山を尋ねて御覽なさい。あれがもう一度世に出れば、畫苑の慶事ですよ。」と云ふのです。

私も勿論望む所ですから、早速翁を煩はせて、手紙を一本書いて貰ひました。が、さて遊歷の途に上つて見ると、何かと行く所も多いものですから、容易に潤州の張氏の家を訪れる暇がありません。私は翁の書を袖にしたなり、とうとう子規が啼くやうになるまで、秋山を尋ねずにしまひました。

その内にふと耳にはひつたのは、貴戚の王氏が秋山圖を手に入れたと云ふ噂です。さう云へば私が遊歷中、煙客翁の書を見せた人には、王氏を知つてゐるものも交つてゐました。王氏はさう云ふ人からでも、あの秋山圖が、張氏の家に藏してある事を知つたのでせう。何でも坊間の說によれば、張氏の孫は王氏の使を受けると、傳家の彝鼎や法書と共に、すぐさま大癡の秋山圖を獻じに來たとか云ふ事です。さうして王氏は喜びの餘り、張氏の孫を上座に招じて、家姬を出したり、音樂を奏したり、盛な饗宴を催した擧句、千金を壽にしたとか云ふ事です。私は殆雀躍しました。滄桑五十載を閱した後でも、秋山圖はやはり無事だつたのです。のみならず私も面識がある、王氏の手中に入つたのです。昔は煙客翁がいくら苦心をしても、この圖を再び看る事は、鬼神が惡むのかと思ふ位、悉失敗に終りました。が、今は王氏の焦慮も待たず、自然とこの圖が我我の前へ、蜃氣樓のやうに現れたのです。これこそ實際天緣が、熟したと云ふ外はありません。私は取る物も取りあへず、金閶にある王氏の第宅へ、秋山を見に出かけて行きました。

今でもはつきり覺えてゐますが、それは王氏の庭の牡丹が、玉欄の外に咲き誇つた、風のない初夏の午過ぎです。私は王氏の顏を見ると、揖もすますかすまさない内に、思はず笑ひ出してしまひました。

「もう秋山圖はこちらの物です。煙客先生もあの圖では、隨分苦勞をされたものですが、今度こそは御安心なさるでせう。さう思ふだけでも愉快です。」

王氏も得意滿面でした。

「今日は煙客先生や廉州先生も來られる筈です。が、まあ、御出でになつた順に、あなたから見て貰ひませう。」

王氏は早速側の壁に、あの秋山圖を懸けさせました。水に臨んだ紅葉の村、谷を埋めてゐる白雲の群、それから遠近に側立つた、屏風のやうな數峯の靑、——忽ち私の眼の前には、大癡老人が造り出した、天地よりも更に靈妙な小天地が浮び上つたのです。私は胸を躍らせながら、ぢつと壁上の繪を眺めました。

この雲煙邱壑は、紛れもない黄一峯です。癡翁を除いては何人も、これ程皴點を加へながら、しかも墨を活かす事は——これ程設色を重くしながら、しかも筆が隱れない事は、出來ないのに違ひありません。しかし——しかしこの秋山圖は、昔一たび煙客翁が張氏の家に見たといふ圖と、確に別な黄一峯です。さうしてその秋山圖よりも、恐らくは下位にある黄一峯です。

私の周圍には王氏を始め、座に居合せた食客たちが、私の顏色を窺つてゐました。ですから私は失望の色が、寸分も顏へ露れないやうに、氣を使ふ必要があつたのです。が、いくら努めて見ても、何處か不服な表情が、我知らず外へ出たのでせう。王氏は少時たつてから、心配さうに私へ聲をかけました。

「どうです？」

私は言下に答へました。

「神品です。成程これでは煙客先生が、驚倒されたのも不思議はありません。」

王氏はやや顏色を直しました。が、それでもまだ眉の間には、幾分か私の賞讚に、不滿らしい氣色が見えたものです。

其處へ丁度來合せたのは、私に秋山の神趣を說いた、あの煙客先生です。翁は王氏に會釋をする間も、嬉しさうな微笑を浮べてゐました。

「五十年前に秋山圖を見たのは、荒れ果てた張氏の家でしたが、今日は又かういふ富貴の御宅に、再びこの圖とめぐり合ひました。眞に意外な因緣です。」

煙客翁はかう云ひながら、壁上の大癡を仰ぎ見ました。この秋山が嘗て翁の見た秋山かどうか、それは勿論誰よりも翁自身が明かに知つてゐる筈です。ですから私も王氏同樣、翁がこの圖を眺める容子に、注意深い眼を注いでゐました。すると果然翁の顏も、見る見る曇つたではありませんか。

少時沈默が續いた後、王氏は愈不安さうに、怯づ怯づ翁へ聲をかけました。

「如何です？今も石谷先生は、大層褒めてくれましたが、——」

私は正直な煙客翁が、有體な返事をしはしないかと、內心冷や冷やしてゐました。しかし王氏を失望させるのは、さすがに翁も氣の毒だつたのでせう。翁は秋山を見終ると、丁寧に王氏へ答へました。

「これが御手にはひつたのは、あなたの御運が好いのです。御家藏の諸寶もこの後は、一段と光彩を添へる事でせう。」

しかし王氏はこの言葉を聞いても、やはり顏の憂色が、益深くなるばかりです。

その時もし廉州先生が、遲れ馳せにでも來なかつたなら、我我は更に氣まづい思ひをさせられたに違ひありません。しかし先生は幸ひにも、煙客翁の賞讚が澁り勝ちになつた時、快活に一座へ加はりました。

「これが御話の秋山圖ですか？」

先生は無造作な挨拶をしてから、黄一峯の畫に對しました。さうして少時は默然と、口髭ばかり嚙んでゐました。

「煙客先生は五十年前にも、一度この圖を御覽になつたさうです。」

王氏は一層氣づかはしさうに、かう說明を加へました。廉州先生はまだ翁から、一度も秋山の神逸を聞かされた事がなかつたのです。

「どうでせう？ あなたの御鑑識は。――」
先生は歎息を洩らしたきり、不相變畫を眺めてゐました。
「御遠慮のない所を伺ひたいのですが、――」
王氏は無理に微笑しながら、再び先生を促しました
「これですか？ これは――」
廉州先生は又口を噤みました。
「これは？」
「これは痴翁第一の名作でせう。――この雲煙の濃淡を御覧なさい。元氣淋漓ぢやありませんか。林木なぞの設色も、當に天造とも稱すべきものです。あすこに遠峯が一つ見えませう。全體の布局があの爲に、どの位活きてゐるかわかりません。」
今まで黙つてゐた廉州先生は、王氏の方を顧ると、一々畫の佳所を指さしながら、盛に感歎の聲を擧げ始めました。その言葉と共に王氏の顔が、だんだん晴れやかになり出したのは、申し上げるまでもありますまい。
私はその間に煙客翁と、ひそかに顔を見合せました。
「先生、これがあの秋山圖ですか？」
私が小聲にかう云ふと、煙客翁は頭を振りながら、妙な瞬きを一つしました。
「まるで萬事が夢のやうです。事によるとあの張家の主人は、狐仙か何かだつたかも知れませんよ。」

* * * * *

「秋山圖の話はこれだけです」
王石谷は語り終ると、徐に一碗の茶を啜つた。
「成程、不思議な話です。」
惲南田はさつきから、銅檠の焰を眺めてゐた。
「その後王氏も熱心に、いろいろ尋ねて見たさうですが、やはり痴翁の秋山圖と云へば、あれ以外に張氏も知らなかつたさうです。ですから、昔煙客先生が見られたと云ふ秋山圖は、今でも何處かに隱れてゐるか、或はそれが先生の記憶の間違ひに過ぎないのか、どちらとも私にはわかりません。まさか先生が張氏の家へ、秋山圖を見に行かれた事が、全體幻でもありますまいし、――」
「しかし煙客先生の心の中には、その怪しい秋山圖が、はつきり殘つてゐるのでせう。それからあなたの心の中にも、――」
「山石の青綠だの紅葉の硃の色だのは、今でもありあり見えるやうです。」
「では秋山圖がないにしても、憾む所はないではありませんか？」
惲王の兩大家は、掌を拊つて一笑した。

（大正九年十二月作）

大雅

東海の畫人多しとは云へ、九霞山樵の如き大器又あるべしとも思はれず。されどその大雅すら、年三十に及びし時、意の如く技の進まざるを憂ひて、教を祇南海に請ひし事あり。畫性大雅に過ぐるもの、何ぞ進歩の遲遲たるに焦燥の念無きを得可けんや。唯、返す返すも學ぶべきは、聖胎長養の機を誤らざりし九霞山樵の工夫なるべし。

（『點心』の「骨董羹」より）

將軍

一　白襷隊

明治三十七年十一月二十六日の未明だつた。第×師團第×聯隊の白襷隊は、松樹山の補備砲臺を奪取する爲に、九十三高地の北麓を出發した。

路は山陰に沿うてゐたから、隊形も今日は特別に、四列側面の行進だつた。その草もない薄闇の路に、銃身を並べた一隊の兵が、白襷ばかり仄かせながら、靜かに靴を鳴らして行くのは、悲壯な光景に違ひなかつた。現に指揮官のM大尉なぞは、この隊の先頭に立つた時から、別人のやうに口數の少ない、沈んだ顏色をしてゐるのだつた。が、兵は皆思ひの外、平生の元氣を失はなかつた。それは一つには日本魂の力、二つには酒の力だつた。

少時行進を續けた後、隊は石の多い山陰から、風當りの強い河原へ出た。

「おい、後を見ろ。」

紙屋だつたと云ふ田口一等卒は、同じ中隊から選拔された、これは大工だつたと云ふ、堀尾一等卒に話しかけた。

「みんなこつちへ敬禮してゐるぜ。」

堀尾一等卒は振り返つた。成程さう云はれて見ると、黑黑と盛り上つた高地の上には、聯隊長始め何人かの將校たちが、やや赤らんだ空を後に、この死地に向ふ一隊の士卒へ、最後の敬禮を送つてゐた。

「どうだい？　大したものぢやないか？　白襷隊になるのも名譽だな。」

「何が名譽だ？」

堀尾一等卒は苦苦しさうに、肩の上の銃を揺り上げた。

「こちとらはみんな死に行くのだぜ。して見ればあれは××××××××××××××さうつて云ふのだ。こんな安上りな事はなからうぢやねえか？」

「それはいけない。そんな事を云つては×××すまない。」

「べらぼうめ！　すむもすまねえもあるものか！　酒保の酒を一合買ふのでも、敬禮だけでは賣りはしめえ。」

田口一等卒は口を噤んだ。それは酒氣さへ帶びてゐれば、皮肉な事ばかり並べたがる、相手の癖に慣れてゐるからだつた。しかし堀尾一等卒は、執拗にまだ話し續けた。

「――それは敬禮で買ふとは云はねえ。やれ×××××とか、やれ×××××だとか、いろんな勿體をつけやがるだらう。だがそんな事は譃つ八だ。なあ、兄弟。さうぢやねえか？」

堀尾一等卒にかう云はれたのは、これも同じ中隊にゐた、小學校の教師だつたと云ふ、おとなしい江木上等兵だつた。が、そのおとなしい上等兵が、この時だけはどう云ふ譯か、急に噛みつきさうな權幕を見せた。さうして酒臭い相手の顏へ、惡辣な返答を抛りつけた。

「――莫迦野郎！　おれたちは死ぬのが役目ぢやないか？」

その時もう白襷隊は、河原の向うへ上つてゐた。其處には泥を塗り固めた、支那人の民家が七八軒、ひつそりと曉を迎へてゐる、――その家家の屋根の上には、石油色に襞をなぞつた、寒い茶褐色の松樹山が、目の前に迫つて見えるのだつた。隊はこの村を離れると、四列側面

の隊形を併いた。のみならずいづれも武裝した儘、幾條かの交通路に腹這ひながら、じりじり敵前へ向ふ事になつた。

勿論江木上等兵も、その中に四つ這ひを續けて行つた。「酒保の酒を一合買ふのでも、敬禮だけでは賣りはしめえ。」——さう云ふ堀尾一等卒の言葉は、同時に又彼の腹の底だつた。しかし口數の少ない彼は、おつとその考へを持ちこたへてゐた。それだけに、一層戰友の言葉は、丁度傷痕にでも觸れられたやうな、腹立たしい悲しみを與へたのだつた。彼は凍えついた交通路を、獸のやうに這ひ續けながら、戰爭と云ふ事を考へたり、死と云ふ事を考へたりした。が、さう云ふ考へからは、寸毫の光明も得られなかつた。死は××××にしても、所詮は呪ふべき怪物だつた。戰爭は、——彼は殆戰爭は、罪惡と云ふ氣さへしなかつた。罪惡は戰爭に比べると、個人の情熱に根ざしてゐるだけ、××××××出來る點があつた。しかし××××××××××外ならなかつた。しかも彼は、——いや、彼ばかりでもない。各師團から選拔された、二千人餘りの白襷隊は、その大なる××にも、厭でも死なければならないのだつた。……

「來た。來た。お前は何處の聯隊だ？」

江木上等兵はあたりを見た。隊は何時か松樹山の麓の、窪合地へ著いてゐるのだつた。其處にはもうカアキイ服に、古めかしい襷をあてがつた、各師團の兵が集まつてゐる、——彼に聲をかけたのも、さう云ふ連中の一人だつた。その兵は石に腰をかけながら、うつすり流れ出した朝日の光に、片頬の面皰をつぶしてゐた。

「第×聯隊だ。」

「パン聯隊だな。」

江木上等兵は暗い顏をした儘、何ともその冗談に答へなかつた。

何時間かの後、この歩兵陣地の上には、もう彼我の砲彈が、凄まじい唸りを飛ばせてゐた。目の前に聳えた松樹山の山腹にも、李家屯の我海軍砲は、幾たびか黄色い土煙を揚げた。その土煙の舞ひ上る合間に、薄紫の光が迸るのも、晝だけに、一層悲壯だつた。しかし二千人の白襷隊は、かう云ふ砲撃の中に機を待ちながら、やはり平生の元氣を失はなかつた。又恐怖に挫がれない爲には、出來るだけ陽氣に振舞ふ外、仕樣のない事も事實だつた。

「べらぼうに撃ちやがるな。」

堀尾一等卒は空を見上げた。その拍子に長い叫び聲が、もう一度頭上の空氣を裂いた。彼は思はず首を縮めながら、砂煙の立つのを避ける爲か、手巾に鼻を掩つてゐた、田口一等卒に聲をかけた。

「今のは二十八珊だぜ。」

田口一等卒は笑つて見せた。さうして相手が氣のつかないやうに、そつとポケツトへ、手巾をしまつた。それは彼が出征する時、馴染の藝者に貰つて來た、緣に繡のある手巾だつた。

「音が違ふな、二十八珊は。」——

田口一等卒はかう云ふと、狼狽したやうに姿勢を正した。同時に大勢の兵たちも、聲のない號令でもかかつたやうに、次から次へと立ち直り始めた。それはこの時彼等の間へ、軍司令官のN將軍が、何人かの幕僚を從へながら、嚴然と歩いて來たからだつた。

「こら、騷いではいかん。騷ぐではない。」

將軍は陣地を見渡しながら、やや錆のある聲を傳へた。

「かう云ふ狹隘な所だから、敬禮も何もせなくとも好い。お前達は何聯隊の白襷隊かや？」

田口一等卒は將軍の眼が、彼の顏へ、ぢつと注がれるのを感じた。その眼は殆處女のやうに、彼をはにかませるのに足るものだつた。

「はい、歩兵第×聯隊であります。」

「さうか。大元氣にやつてくれ。」

將軍は彼の手を握つた。それから堀尾一等卒へ、じろりとその眼を轉ずると、やはり右手をさし伸べながら、もう一度同じ事を繰返した。

「お前も大元氣にやつてくれ。」

かう云はれた堀尾一等卒は、全身の筋肉が硬化したやうに、直立不動の姿勢になつた。幅の廣い肩、大きな手、頬骨の高い赭ら顔。――さう云ふ彼の特色は、少くともこの老將軍には、帝國軍人の模範らしい、好印象を與へた容子だつた。將軍は其處に立ち止まつた儘、熱心になほ話し續けた。

「今打つてゐる砲臺があるな。今夜お前たちはあの砲臺を、こつちの物にしてしまふのぢや。さうすると豫備隊は、お前たちの行つた跡から、あの界隈の砲臺をみんな手に入れてしまふのぢや。何でも一遍にあの砲臺へ、飛びつく心にならなければいかん。――」

さう云ふ内に將軍の聲には、何時か多少戲曲的な、感激の調子がはひつて來た。

「好いか？　決して途中に立ち止まつて、射撃なぞをするぢやないぞ。五尺の體を砲彈だと思つて、いきなりあれへ飛びこむのぢや。頼んだぞ。どうか、しつかりやつてくれ。」

將軍は「しつかり」の意味を傳へるやうに、堀尾一等卒の手を握つた。さうして其處を通り過ぎた。

「嬉しくもねえな。――」

堀尾一等卒は狡猾さうに、將軍の跡を見送りながら、田口一等卒へ目交せをした。

「え、おい。あんな爺さんに手を握られたのぢや。」

田口一等卒は苦笑した。それを見るとどう云ふ譯か、堀尾一等卒の心の中には、何かに濟まない氣が起つた。と同時に相手の苦笑が、面憎いやうな心もちにもなつた。其處へ江木上等兵が、突然横合ひから聲をかけた。

「どうだい、握手で×××のは？」

「いけねえ。いけねえ。人眞似をしちや。」

今度は堀尾一等卒が、苦笑せずにはゐられなかつた。

「××れると思ふから腹が立つのだ。おれは捨ててやると思つてゐる。」

江木上等兵がかう云ふと、田口一等卒も口を出した。

「さうだ。みんな御國の爲に捨てる命だ。」

「おれは何の爲だか知らないが、唯捨ててやるつもりなのだ。××××××でも向けられて見ろ。何でも持つて行けと云ふ氣になるだらう。」

江木上等兵の眉の間には、薄暗い興奮が動いてゐた。

「丁度あんな心もちだ。强盜は金さへ卷き上げれば、×××××××云ひはしまい。が、おれたちはどつち道死ぬのだ。××××××××××××××××××たのだ。どうせ死なずにすまないのなら、綺麗に×××やつた方が好いぢやないか？」

かう云ふ言葉を聞いてゐる内に、まだ酒氣が消えてゐない、堀尾一等卒の眼の中には、この溫厚な戰友に對する、侮蔑の光が加はつて來た。「何だ、命を捨てる位？――」――彼は内心さう思ひながら、うつとり空へ眼をあげた。さうして今夜は人後に落ちず、將軍の握手に報いる爲、肉彈にならうと決心した。……

その夜の八時何分か過ぎ、手擲彈に中つた江木上等兵は、全身黑焦になつた儘、松樹山の山腹に倒れてゐた。其處へ白襷の兵が一人、何か切れ切れに叫びながら、鐵條網の中を走つて來た。彼は戰友の死骸を見ると、その胸に片足かけるが早いか、突然大聲に笑ひ出した。大聲に、

支那語の出來る副官は、血色の惡い支那人の顏へ、ちらりと意地の惡い眼を送つた。

「いや、用はあるのです。今も申し上げた通り、私たちは新民屯へ、紙幣を取り換へに出かけて來たのです。御覽下さい。此處に紙幣もあります。」

鬚のある男は平然と、將校たちの顏を眺め廻した。參謀はちよいと鼻を鳴らした。彼は副官のたじろいだのが、內心好い氣味に思はれたのだ。……

「紙幣を取り換へる？　命がけでか？」

副官は負惜みの冷笑を洩らした。

「兎に角裸にして見よう。」

參謀の言葉が通譯されると、彼等はやはり惡びれずに、早速赤裸になつて見せた。

「まだ腹卷をしてゐるぢやないか？　それをこつちへとつて見せろ。」

通譯が腹卷を受けとる時、その白木綿に體溫のあるのが、何だか不潔に感じられた。腹卷の中には三寸ばかりの、太い針がはひつてゐた。旅團參謀は窓明りに、何度もその針を檢べて見た。が、それも平たい頭に、梅花の模樣がついてゐる外、何も變つた所はなかつた。

「何か、これは？」

「私は鍼醫です。」

鬚のある男はためらはずに、悠然と參謀の問に答へた。

「序に靴も脫いで見ろ。」

彼等は殆無表情に、隱すべき所も隱さうとせず、檢査の結果を眺めてゐた。が、ズボンや上著は勿論、靴や靴下を檢べて見ても、證據になる品は見當らなかつた。この上は靴を壞して見るより外はない。――さう思つた副官は、參謀にその旨を話さうとした。

その時突然次の部屋から、軍司令官を先頭に、軍司令部の幕僚や、旅團長などがはひつて來た。將軍は副官や軍參謀と、丁度何かの打ち合せの爲、旅團長を尋ねて來てゐたのだつた。

「露探か？」

將軍はかう尋ねた儘、支那人の前に足を止めた。さうして彼等の裸姿へ、ぢつと鋭い眼を注いだ。後に或亞米利加人が、この有名な將軍の眼には、Monomania じみた所があると、無遠慮な批評を下した事がある。――そのモノメニアックな眼の色が、殊にかう云ふ場合には、氣味の惡い輝きを加へるのだつた。

旅團參謀は將軍に、ざつと事件の顚末を話した。が、將軍は思ひ出したやうに、時時頷いて見せるばかりだつた。

「この上はもうぶん擲つてでも、白狀させるより外はないのですが、――」

參謀がかう云ひかけた時、將軍は地圖を持つた手に、床の上にある支那靴を指した。

「あの靴を壞して見給へ。」

靴は見る見る底をまくられた。すると其處に縫ひこまれた、四五枚の地圖と祕密書類が、忽ちばらばらと床の上に落ちた。二人の支那人はそれを見ると、さすがに顏の色を失つてしまつた。が、やはり押し默つた儘、剛情に敷瓦を見つめてゐた。

「そんな事だらうと思つてゐた。」

將軍は旅團長を顧みながら、得意さうに微笑を洩した。

「しかし靴とは又考へたものですね。――おい、もうその連中には著物を著せてやれ。――こんな間諜は始めてです。」

「軍司令官閣下の烱眼には驚きました。」

旅團副官は旅團長へ、間諜の證據品を渡しながら、愛嬌の好い笑顏を見せた。――恰も靴に目をつけたのは、將軍よりも彼自身が、先だつた事を忘れたやうに。

「だが裸にしてもないとすれば、靴より外に隱

せないぢやないか？」

將軍はまだ上機嫌だつた。

「わしはすぐに粃と睨んだ。」

「どうもこの邊の住民はいけません。我我が此處へ來た時も、日の丸の旗を出したですが、その癖家の中を檢べて見れば、大抵露西亞の旗を持つてゐるのです。」

「つまり奸佞邪智なのぢやね。」

旅團長も何か浮き浮きしてゐた。

「さうです。煮ても燒いても食へないのです。」

こんな會話が續いてゐる内、旅團參謀はまだ通譯と、二人の支那人を檢べてゐた。それが急に田口一等卒へ、機嫌の惡い顏を向けると、吐き出すやうにかう命じた。

「おい歩兵！　この間諜はお前が掴まへて來たのだから、次手にお前が殺して來い。」

二十分の後、村の南端の路ばたには、この二人の支那人が、互に辮髮を結ばれた儘、枯柳の根がたに坐つてゐた。

田口一等卒は銃劍をつけると、まづ辮髮を解き放した。それから銃を構へた儘、年下の男の後に立つた。が、彼等を突殺す前に、殺すと云ふ事だけは告けたいと思つた。

「儞、———」

彼はさう云つて見たが、「殺す」と云ふ支那語を知らなかつた。

「儞、殺すぞ！」

二人の支那人は云ひ合せたやうに、じろりと彼を振り返つた。しかし驚いたけはひも見せず、それぎり別別の方角へ、何度も叩頭を續け出した。「故郷へ別れを告げてゐるのだ。」——田口一等卒は身構へながら、かうその叩頭を解釋した。

叩頭が一通り濟んでしまふと、彼等は覺悟をきめたやうに、冷然と首をさし伸した。田口一等卒は銃をかざした。が、神妙な彼等を見ると、どうしても銃劍が突き刺せなかつた。

「儞、殺すぞ！」

彼はやむを得ず繰返した。するとそこへ村の方から、馬に跨つた騎兵が一人、蹄に砂埃を捲き揚げて來た。

「歩兵！」

騎兵は——近づいたのを見れば曹長だつた。それが二人の支那人を見ると、馬の歩みを緩めながら、傲然と彼に聲をかけた。

「露探か？　露探だらう。おれにも一人斬らせてくれ。」

田口一等卒は苦笑した。

「何、二人とも上げます。」

「さうか？　それは氣前が好いな。」

騎兵は身輕に馬を下りた。さうして支那人の後にまはると、腰の日本刀を拔き放した。その時又村の方から、勇しい馬蹄の響と共に、三人の將校が近づいて來た。騎兵はそれに頓著せず、まつ向に刀を振り上げた。と、まだその刀を下さない内に、三人の將校は悠悠と、彼等の側へ通りかかつた。軍司令官！　騎兵は田口一等卒と一しよに、馬上の將軍を見上げながら、正しい擧手の禮をした。

「露探だな。」

將軍の眼には一瞬間、モノメニアの光が輝いた。

「斬れ！　斬れ！」

騎兵は言下に刀をかざすと、一打に若い支那人を斬つた。支那人の頭は躍るやうに、枯柳の根もとに轉げ落ちた。血は見る見る黃ばんだ土に、大きい斑點を擴げ出した。

「よし。見事だ。」

將軍は愉快さうに頷きながら、それなり馬を歩ませて行つた。

騎兵は將軍を見送ると、血に染んだ刀を提げた儘、もう一人の支那人の後に立つた。その

態度は將軍以上に、殺戮を喜ぶ氣色があつた。
「この×××らはおれにも殺せる。」――田口一等卒はさう思ひながら、枯柳の根もとに腰を下した。騎兵は又刀を振り上げた。が、鬚のある支那人は、默然と首を伸ばしたぎり、睫毛一つ動かさなかつた。……

將軍に從つた軍參謀の一人、――穗積中佐は鞍の上に、春寒の曠野を眺めて行つた。が、遠い枯木立や、路ばたに倒れた石敢當も、中佐の眼には映らなかつた。それは彼の頭には、一時愛讀したスタンダアルの言葉が、絶えず漂つて來るからであつた。

「私は勳章に埋つた人間を見ると、あれだけの勳章を手に入れるには、どの位××な事ばかりしたか、それが氣になつて仕方がない。……」

――ふと氣がつけば彼の馬は、ずつと將軍に遲れてゐた。中佐は輕い身震をすると、すぐに馬を急がせ出した。丁度當り出した薄日の光に、飾緒の金をきらめかせながら。

三　陣中の芝居

明治三十八年五月四日の午後、阿吉牛堡に駐つてゐた、第×軍司令部では、午前に招魂祭を行つた後、餘興の演藝會を催す事になつた。會場は支那の村落に多い、野天の戲臺を應用した、急拵への舞臺の前に、天幕を張り渡したに過ぎなかつた。が、その蓆敷きの會場には、もう一時の定刻前に、大勢の兵卒が集つてゐた。この薄汚いカアキイ服に、銃劍を下げた兵卒の群は、殆看客と呼ぶのさへも、皮肉な感じを起させる程、みじめな看客に違ひなかつた。が、それだけ又彼等の顏に、晴れ晴れした微笑が漂つてゐるのは、一層可憐な氣がするのだつた。

將軍を始め軍司令部や、兵站監部の將校たちは、外國の從軍武官たちと、その後の小高い土地に、ずらりと椅子を竝べてゐた。此處には參謀肩章だの、副官の襷だのが見えるだけでも、一般兵卒の看客席より、遙かに空氣が花やかだつた。殊に外國の從軍武官は、愚物の名の高い一人でさへも、この花やかさを扶ける爲には、軍司令官以上の效果があつた。

將軍は今日も上機嫌だつた。何か副官の一人と話しながら、時時番付を開いて見てゐる――その眼にも始終日光のやうに、人懷つこい微笑が浮んでゐた。

その内に定刻の一時になつた。櫻の花や日の出をとり合せた、手際のよい幕の後では、何度か鳴りの惡い拍子木が響いた。と思ふとその幕は、餘興掛の少尉の手に、するすると一方へ引かれて行つた。

舞臺は日本の室内だつた。それが米屋の店と云ふ事は、一隅に積まれた米俵が、僅かに暗示を與へてゐた。其處へ前垂掛けの米屋の主人が、「お鍋や、お鍋や。」と手を打ちながら、彼自身よりも脊の高い、銀杏返しの下女を呼び出して來た。それから、――筋は話すにも足りない、一場の俄が始まつた。

舞臺の惡ふざけが加はる度に、蓆敷の上の看客からは、何度か高聲が立ち上つた。いや、その後の將校たちは、大部分は笑を浮べてゐた。が、俄はその笑を競ふやうに、益滑稽を重ねて行つた。さうしてとうとうしまひには、越中褌一つの主人が、赤い湯もじ一つの下女と相撲をとり始める所になつた。

笑聲は更に高まつた。兵站監部の或大尉なぞは、この滑稽を迎へる爲、殆拍手さへしようとした。丁度その途端だつた。突然烈しい叱咤の聲は、湧き返つてゐる笑の上へ、鞭を加へるやうに響き渡つた。

「何だ、その醜態は？　幕を引け！　幕を！」

聲の主は將軍だつた。將軍は太い軍刀の欛に、手袋の兩手を重ねた儘、嚴然と舞臺を睨

んで居た。
　幕引きの少尉は命令通り、呆氣にとられた役者たちの前へ、倉皇とさつきの幕を引いた。同時に桟敷の看客も、かすかなどよめきの聲の外は、ひつそりと靜まり返つてしまつた。
　外國の從軍武官たちと、一つ席にゐた穗積中佐は、この沈默を氣の毒に思つた。勿論彼の心には、微笑さへも浮ばせなかつた。しかし彼は看客の興味に、同情を持つだけの餘裕はあつた。では外國武官たちに、裸の相撲を見せても好いか？――さう云ふ體面を重んずるには、何年か歐洲に留學した彼は、餘りに外國人を知り過ぎてゐた。
「どうしたのですか？」
　佛蘭西の將校は驚いたやうに、穗積中佐をふりかへつた。
「將軍が中止を命じたのです。」
「なぜ？」
「下品ですから、――將軍は下品な事は嫌ひなのです。」
　さう云ふ内にもう一度、舞臺の拍子木が鳴り始めた。靜まり返つてゐた兵卒たちは、この音に元氣を取り直したのか、其處此處から拍手を送り出した。穗積中佐もほつとしながら、彼の周圍を眺め廻した。周圍に居並んだ將校たちは、いづれも多少氣づまりさうに、舞臺を見たり見なかつたりしてゐる、――その中にたつた一人、やはり軍刀へ手をのせた儘、丁度幕の開き出した舞臺へ、ぢつと眼を注いでゐた。
　次の幕は前と反對に、人情がかつた舊劇だつた。舞臺には唯屏風の外に、火のともつた行燈が置いてあつた。其處に頬骨の高い年增が一人、猪首の町人と酒を飲んでゐた。年增は時時金切聲に、この若旦那と相手の町人を呼んだ。さうして、――穗積中佐は舞臺を見ずに、彼自身の記憶に浸り出した。柳盛座の二階の手すりには、十二三の少年が倚りかかつてゐる。舞臺には櫻の釣り枝がある。火影の多い町の書割がある。その中に二錢の團洲と呼ばれた、和光の不破伴左衛門が、編笠を片手に見得をしてゐる。少年は舞臺に見入つた儘、殆息さへもつかうとしない。彼にもそんな時代があつた。……
「餘興やめ！　幕を引かんか？　幕！　幕！」
　將軍の聲は爆彈のやうに、中佐の追憶を打ち碎いた。中佐は舞臺へ眼を返した。舞臺には既に狼狽した少尉が、幕と共に走つてゐた。その間にちらりと屏風の上へ、男女の帶の懸つてゐるのが見えた。
　中佐は思はず苦笑した。「餘興掛も氣が利かない、男女の相撲さへ禁じてゐる將軍が、濡れ場を默つて見てゐる筈がない。」――そんな事を考へながら、叱聲の起つた席を見ると、將軍はまだ不機嫌さうに、餘興掛りの一等主計と、何か問答を重ねてゐた。
　その時ふと中佐の耳は、口の惡い亞米利加の武官が、隣に坐つた佛蘭西の武官へ、かう話しかける聲を捉へた。
「將軍Ｎも樂ぢやない、軍司令官兼檢閲官だから、――」
　やつと三幕目が始まつたのは、それから十分の後だつた。今度は木がはひつても、兵卒たちは拍手を送らなかつた。
「可哀さうに。監視されながら、芝居を見てゐるやうだ。」――穗積中佐は憐むやうに、殆大きな話聲も立てない、カアキイ服の群を見渡した。
　三幕目の舞臺は黒幕の前に、柳の木が一本立ててあつた。それは何處から伐つて來たか、生生しい實際の葉柳だつた。其處に警部らしい髯だらけの男が、年の若い巡査をいぢめてゐた。穗積中佐は番附の上へ、不審さうに眼を落した。すると番附には「ピストル强盗淸水定吉、

大川端捕物の場」と書いてあつた。

年の若い巡査は警部が去ると、大仰に天を仰ぎながら、長長と清歎の獨白を述べた。何でもその意味は長い間、ピストル强盜をつけ廻してゐるが、逮捕出來ないとか云ふのだつた。それから人影でも認めたのか、彼は相手に見つからない爲、一まづ大川の水の中へ姿を隱さうと決心した。さうして後の黑幕の外へ、頭からさきに這ひこんでしまつた。その恰好は贔屓眼に見ても、大川の水へ沒するよりは、蚊帳へはひるのに適當してゐた。

空虛の舞臺には少時の間、波の音を思はせるらしい、大太鼓の音がするだけだつた。と、忽ち一方から、盲人が一人歩いて來た。盲人は杖をつき立てながら、その儘向うへはひらうとする、その途端に黑幕の外から、さつきの巡査が飛び出して來た。「ピストル强盜、淸水定吉、御用だ！」——彼はさう叫ぶが早いか、いきなり盲人へ躍りかかつた。盲人は咄嗟に身構へをした。と思ふと眼がぱつちりあいた。「憾むらくは眼が小さ過ぎる。」——中佐は微笑を浮べながら、内心大人氣ない批評を下した。

舞臺では立ち廻りが始まつてゐた。ピストル强盜は評名通り、ちやんとピストルを用意してゐた。二發、三發、——ピストルは續けさまに火を吐いた。しかし巡査は勇敢に、とうとう僞目くらに繩をかけた。兵卒たちはさすがにどよめいた。が、彼等の間からは、やはり聲一つかからなかつた。

中佐は將軍へ眼をやつた。將軍は今度も熱心に、ぢつと舞臺を眺めてゐた。しかしその顏は以前よりも、遙かに柔しみを湛へてゐた。

其處へ舞臺には一方から、署長とその部下とが駈けつけて來た。が、僞目くらと格鬪中、ピストルの彈丸に中つた巡査は、もう昏昏と倒れてゐた。署長はすぐに活を入れた。その間に部下はいち早く、ピストル强盜の繩尻を捉へた。その後は署長と巡査との、新劇めいた愁歎場になつた。署長は昔の名奉行のやうに、何か云ひ遺す事はないかと云ふ。巡査は故鄕に母がある、と云ふ。署長は又母の事は心配するな、何かその外にも末期の際に、心遺しはないかと云ふ。巡査は何も云ふ事はない、ピストル强盜を捉へたのは、この上もない滿足だと云ふ。

——その時ひつそりした場内に、三度將軍の聲が響いた。が、今度は叱聲の代りに、深い感激の歎聲だつた。

「偉い奴ぢや。それでこそ日本男兒ぢや。」

穗積中佐はもう一度、そつと將軍へ眼を注いだ。すると日に燒けた將軍の頰には、淚の痕が光つてゐた。「將軍は善人だ。」——中佐は輕い侮蔑の中に、明るい好意をも感じ出した。

その時幕は悠悠と、盛んな喝采を浴びながら、舞臺の前に引かれて行つた。穗積中佐はその機會に、ひとり椅子から立ち上ると、會場の外へ歩み去つた。

三十分の後、中佐は紙卷を銜へながら、やはり同參謀の中村少佐と、村はづれの空地を步いてゐた。

「第×師團の餘興は大成功だね。N閣下は非常に喜んでゐられた。」

中村少佐はかう云ふ間も、カイゼル髭の端をひねつてゐた。

「第×師團の餘興？　ああ、あのピストル强盜か？」

「ピストル强盜ばかりぢやない。閣下はあれから餘興掛を呼んで、もう一幕臨時にやれと云はれた。今度は赤垣源藏だつたがね。何と云ふのかな、あれは？　德利の別れか？」

穗積中佐は微笑した眼に、廣い野原を眺めまはした。もう高粱の靑んだ土には、かすかに陽炎が動いてゐた。

「それも亦大成功さ。──」
中村少佐は話し續けた。
「閣下に今夜も亡時から、第×師團の餘興掛に、寄席的な事をやらせるさうだぜ。」
「寄席的？ 落語でもやらせるのかね？」
「何、講談ださうだ。水戸黄門諸國めぐり──」
穗積中佐は苦笑した。が、相手は無頓着に、元氣のよい口調を續けて行つた。
「閣下は水戸黄門が好きなのださうだ。わしは人臣としては、水戸黄門と加藤清正とに、最も敬意を拂つてゐる。──そんな事を云つてゐられた。」
穗積中佐は返事をせずに、頭の上の空を見上げた。空には柳の枝の間に、細い雲母雲が吹かれてゐた。中佐はほつと息を吐いた。
「春だね。いくら滿洲でも。」
「内地はもう給を著てゐるだらう。」
中村少佐は東京を思つた。料理の上手な細君を思つた。小學校へ行つてゐる子供を思つた。さうして──かすかに憂鬱になつた。
「向うに杏が咲いてゐる。」
穗積中佐は嬉しさうに、遠い土塀に簇つた、赤い花の塊りを指した。Econte-moi, Madelin:……──中佐の心には何時の間にか、ユウゴオの歌が浮んでゐた。

四　父と子と

大正七年十月の或夜、中村少將、──當時の軍參謀中村少佐は、西洋風の應接室に、火のついたハヴァナを銜へながら、ぼんやり安樂椅子によりかかつてゐた。
二十年餘りの閑日月は、少將を愛すべき老人にしてゐた。殊に今夜は和服のせゐか、禿上つた額の邊や、肉のたるんだ口のまはりには、一層好人物じみた氣色があつた。少將は椅子の背に靠れた儘、ゆつくり周圍を眺め廻した。それから、──急にため息を洩した。
室の壁には何處を見ても、西洋の畫の複製らしい、寫眞版の額が懸けてあつた。その或物は窓に倚つた、寂しい少女の肖像だつた。又或物は絲杉の間に、太陽の見える風景だつた。それらは皆電燈の光に、この古めかしい應接室へ、何か妙に薄ら寒い、嚴肅な空氣を與へてゐた。が、その空氣はどう云ふ譯か、少將には愉快でないらしかつた。
無言の何分かが過ぎ去つた後、突然少將は室外に、かすかなノックの音を聞いた。
「おはひり。」
その聲と同時に室の中へは、大學の制服を著た青年が一人、背の高い姿を現した。青年は少將の前に立つと、其處にあつた椅子に手をやりながら、ぶつきらぼうにかう云つた。
「何か御用ですか？ お父さん。」
「うん。まあ、其處におかけ。」
青年は素直に腰を下した。
「何です？」
少將は返事をする爲に、青年の胸の金鈕へ、不審らしい眼をやつた。
「今日は？」
「今日は河合の──お父さんは御存知ないでせう。──僕と同じ文科の學生です。──河合の追悼會があつたものですから、今歸つたばかりなのです。」
少將はちよいと頷いた後、濃いハヴァナの煙を吐いた。それからやつと大儀さうに、肝腎の用向きを話し始めた。
「この壁にある畫だね。これはお前が懸け換へたのかい？」
「ええ、まだ申し上げませんでしたが、今朝僕が懸け換へたのです。いけませんか？」
「いけなくはない。いけなくはないがね、N閣下の額だけは懸けて置きたい、と思ふ。」

「この中へですか」
青年は思はず微笑した。
「この中へ懸けてはいけないかね？」
「いけないと云ふ事もありませんが、――しかしそれは可笑しいでせう。」
「肖像畫はあすこにもあるやうぢやないか！」
少將は爐の上の壁を指した。その壁には額緣の中に、五十幾歳かのレムブラントが、悠悠と少將を見下してゐた。
「あれは別です。N將軍と一しよにはなりません。」
「さうか？ぢや仕方がない。」
少將は容易に斷念した。が、又葉卷の煙を吐きながら、靜かにかう話を續けた。
「お前は、――と云ふよりもお前の年輩のものは、閣下をどう思つてゐるね？」
「別にどうも思つてはゐません。まあ、偉い軍人でせう。」
青年は老いた父の眼に、晩酌の醉を感じてゐた。
「それは偉い軍人だがね。閣下は又實に長者らしい、人懷つこい性格も持つてゐられた。……」
少將は殆、感傷的に、將軍の逸話を話し出した。――それは日露戰役後、少將が那須野の別莊に、將軍を訪れた時の事だつた。其の日別莊へ行つて見ると、將軍夫妻は今し方、裏山へ散歩にお出かけになつた、――さう云ふ別莊番の話だつた。少將は案内を知つてゐたから、早速裏山へ出かける事にした。すると二三町行つた所に、綿服を纏つた將軍が、夫人と一しよに佇んでゐた。少將はこの老夫妻と、少時の間立ち話をした。が、將軍は何時までたつても、其處を立ち去らうとしなかつた。『何か此處に用でもおありですか？』――かう少將が尋ねると、將軍は急に笑ひ出した。『實はね、今妻が憚りへ行きたいといふものだから、わしたちについて來た學生たちが、場所を探しに行つてくれた所ぢや。』丁度今頃――もう路ばたに毬栗などが、轉がつてゐる時分だつた。
少將は眼を細くした儘、嬉しさうに獨り微笑した。――其處へ色づいた林の中から、勢の好い中學生が、四五人同時に飛び出して來た。彼等は少將に頓著せず、將軍夫妻をとり圍むと、口口に彼等が夫人の爲に、見つけて來た場所を報告した。その上それぞれ自分の場所へ、夫人に來て貰ふやうに、無邪氣な競爭さへ始めるのだつた。「ぢやあなた方に籤を引いて貰はう。」――將軍はかう云つてから、もう一度少將に笑顏を見せた。……
「それは罪のない話ですね。だが西洋人には聞かされないな。」
青年も笑はずにはゐられなかつた。
「まあそんな調子でね。十二三の中學生でも、N閣下と云ひさへすれば、叔父さんのやうに懷いてゐたものだ。閣下はお前がたの思ふやうに、決して一介の武弁ぢやない。」
少將は樂しさうに話し終ると、又爐の上のレムブラントを眺めた。
「あれもやはり人格者かい？」
「ええ、偉い畫描きです。」
「N閣下などとはどうだらう？」
青年の顏には當惑の色が浮んだ。
「どうと云つても困りますが、――まあ、N將軍などよりも僕等に近い氣もちのある人です。」
「閣下のお前がたに遠いと云ふのは？」
「何と云へば好いですか？――まあ、こんな點ですね。たとへば今日追悼會のあつた、河合と云ふ男などは、やはり自殺してゐるのです。が、自殺する前に――」
青年は眞面目に父の顏を見た。
「寫眞をとる餘裕はなかつたやうです。」
今度は機嫌の好い少將の眼に、ちらりと當惑

の色が浮んだ。

「寫眞をとつても好いぢやないか？　最後の記念と云ふ意味もあるし、――」

「誰の爲にですか？」

「誰と云ふ事もないが、――我我始めN閣下の最後の顔は見たいぢやないか？」

「それに少くともN將軍は、考ふべき事ではないと思ふのです。僕は將軍の自殺した氣もちは、幾分かわかるやうな氣がします。しかし寫眞をとつたのはわかりません。まさか死後その寫眞が、何處の店頭にも飾られる事を、――」

少將は殆、憤然と、青年の言葉を遮つた。

「それは酷だ。閣下はそんな俗人ぢやない。徹頭徹尾至誠の人だ。」

しかし青年は不相變、顔色も聲も落著いてゐた。

「無論俗人ぢやなかつたでせう。至誠の人だつた事も想像出來ます。唯その至誠が僕等には、どうもはつきりのみこめないのです。僕等より後の人間には、猶更通じるとは思はれません。……」

父と子とは少時の間、氣まづい沈默を續けてゐた。

「時代の違ひだね。」少將はやつとつけ加へた。

「ええ、まあ、――」

青年はかう云ひかけたなり、一寸窓の外のけはひに耳を傾けるやうな眼つきになつた。

「雨ですね。お父さん。」

「雨？」

少將は足を伸ばした儘、嬉しさうに話頭を轉換した。

「又榲桲が落ちなければ好いが。……」

（大正十年十二月作）

長井代助（「點心」より）

我我と前後した年齡の人人には、漱石先生の「それから」に動かされたものが多いらしい。その動かされたと云ふ中でも、自分が此處に書きたいのは、あの小說の主人公長井代助の性格に惚れこんだ所から、自ら代助を氣取つた人も、少くなかつた事と思ふ。しかしあの主人公は、我我の周圍を見廻しても、滅多にゐなさうな人間である。「それから」が發表された當時、世間にはやつてゐた自然派の小說には、我我の周圍にも大勢ゐさうな、その意味では人生に忠實な性格描寫が多かつた筈である。しかし自然派の小說中、「それから」のやうに主人公の模倣者さへ生んだものは見えぬ。これは獨り「それから」には限らず、ウェルテルでもルネでも同じ事である。彼等はいづれも一代を動搖させた性格である。が、如何に西洋でも、彼等のやうな人間は滅多にゐぬのに相違ない。滅多にゐぬやうな人間が、反つて模倣者さへ生んだのは、滅多にゐぬからではあるまいか。無論滅多にゐぬと云ふ事は、何處にもゐぬと云ふ意味ではない。何處にもゐるとは云へぬかも知れぬ、が、何處かにはゐさうだ位の心もちを含んだ言葉である。人人はその主人公が、手近に住んで居らぬ所に、惝怳の意味を見出すのであらう。さうして又その主人公が、何處かに住んでゐさうな所に、惝怳の可能性を見出すのであらう。だから小說が人生に、人間の意欲に働きかける爲には、この手近に住んでゐない、しかも何處かに住んでゐさうな性格を創造せねばならぬ。これが通俗に云ふ意味では、理想主義的な小說家が負はねばならぬ大任である。カラマゾフを書いたドストエフスキイは、立派にこの大任を果してゐる。今後の日本では抑誰が、かう云ふ性格を造り出すであらう。

六の宮の姫君

一

六の宮の姫君の父は、古い宮腹の生れだつた。が、時勢にも遅れ勝ちな、昔氣質の人だつたから、官も兵部大輔より昇らなかつた。姫君はさう云ふ父母と一しよに、六の宮のほとりにある、木高い屋形に住まつてゐた。六の宮の姫君と云ふのは、その土地の名前に據つたのだつた。

父母は姫君を寵愛した。しかしやはり昔風に、進んでは誰にもめあはせなかつた。誰か云ひ寄る人があればと、心待ちに待つばかりだつた。姫君も父母の敎へ通り、つつましい朝夕を送つてゐた。それは悲しみも知らないと同時に、喜びも知らない生涯だつた。が、世間見ずの姫君は、格別不滿も感じなかつた。「父母さへ達者でゐてくれれば好い。」――姫君はさう思つてゐた。

古い池に枝垂れた櫻は、年毎に乏しい花を開いた。その内に姫君も何時の間にか、大人寂びた美しさを具へ出した。が、頼みに思つた父は、年頃酒を過ごした爲に、突然故人になつてしまつた。のみならず母も半年ほどの内に、返らない歎きを重ねた擧句、とうとう父の跡を追つて行つた。姫君は悲しいと云ふよりも、途方に暮れずにはゐられなかつた。實際ふところ子の姫君にはたつた一人の乳母の外に、たよるものは何もないのだつた。

乳母はけなげにも姫君の爲に、骨身を惜まず働き續けた。が、家に持ち傳へた螺鈿の手筥や白がねの香爐は、何時か一つづつ失はれて行つた。と同時に召使ひの男女も、誰からか暇をとり始めた。姫君にも暮らしの辛い事は、だんだんはつきりわかるやうになつた。しかしそれをどうする事も、姫君の力には及ばなかつた。姫君は寂しい屋形の對に、やはり昔と少しも變らず、琴を引いたり歌を詠んだり、單調な遊びを繰返してゐた。

すると或秋の夕ぐれ、乳母は姫君の前へ出ると、考へ考へこんな事を云つた。

「甥の法師の頼みますには、丹波の前司なにがしの殿が、あなた樣に會はせて頂きたいとか申して居るさうでございます。前司はかたちも美しい上、心ばへも善いさうでございますし、前司の父も受領とは申せ、近い上達部の子でもございますから、お會ひになつては如何でございませう？　かやうに心細い暮しをなさいますよりも、少しは益しかと存じますが……」

姫君は忍び音に泣き初めた。その男に肌身を任せるのは、不如意な暮しを扶ける爲に、體を賣るのも同樣だつた。勿論それも世の中には多いと云ふ事は承知してゐた。が、現在さうなつて見ると、悲しさは又格別だつた。姫君は乳母と向き合つた儘、葛の葉を吹き返す風の中に、何時までも袖を顏にしてゐた。……

二

しかし姫君は何時の間にか、夜毎に男と會ふやうになつた。男は乳母の言葉通りやさしい心の持ち主だつた。顏かたちもさすがにみやびてゐた。その上姫君の美しさに、何も彼も忘れてゐる事は、殆ど誰の目にも明らかだつた。姫君も勿論この男に、惡い心は持たなかつた。時には頼もしいと思ふ事もあつた。が、蝶鳥の几帳を立てた陰に、燈臺の光を眩しがりながら、

男と二人むつびあふ時にも、嬉しいとは一夜も思はなかつた。

その内に屋形は少しづつ、花やかな空氣を加へ初めた。黒棚や簾も新たになり、召使ひの數も殖えたのだつた。乳母は勿論以前よりも、活き活きと暮しを取り賄つた。しかし姫君はさう云ふ變化も、寂しさうに見てゐるばかりだつた。

或時雨の渡つた夜、男は姫君と酒を酌みながら、丹波の國にあつたと云ふ、氣味の惡い話をした。出雲路へ下る旅人が大江山の麓に宿を借りた。宿の妻は丁度その夜、無事に女の子を産み落した。すると旅人は生家の中から、何とも知れぬ大男が、急ぎ足に外へ出て來るのを見た。大男は唯「年は八歳、命は自害」と云ひ捨てたなり、忽ち何處かへ消えてしまつた。旅人はそれから九年目に、今度は京へ上る途中、同じ家に宿つて見た。所が實際女の子は、八つの年に横死してゐた。しかも木から落ちた拍子に、鎌を喉へ突き立ててゐた。――話は大體かう云ふのだつた。姫君はそれを聞いた時に、宿命のせんなさに脅かされた。その女の子に比べれば、この男を頼みに暮してゐるのは、まだしも仕合せに違ひなかつた。「なりゆきに任せる外はない」姫君はさう思ひながら、顏だけはあでやかにほほ笑んでゐた。

屋形の軒に當つた松は、何度も雪に枝を折られた。姫君は晝は昔のやうに、琴を引いたり雙六を打つたりした。夜は男と一つ褥に、水鳥の池に下りる音を聞いた。それは悲しみも少いと同時に、喜びも少い朝夕だつた。が、姫君は不相變、この懶い安らかさの中に、はかない滿足を見出してゐた。

しかしその安らかさも、思ひの外急に盡きる時が來た。やつと春の返つた或夜、男は姫君と二人になると、「そなたに會ふのも今宵ぎりぢや」と云ひ惡さうに口を切つた。男の父は今度の除目に、陸奧の守に任ぜられた。男もその爲に雪の深い奧へ、一しよに下らねばならなかつた。勿論姫君と別れるのは、何よりも男には悲しかつた。が、姫君を妻にしたのは、父にも隱してゐたのだから、今更打ち明ける事は出來惡かつた。男はため息をつきながら、長長とさう云ふ事情を話した。

「しかし五年たてば任終ぢや。その時を樂しみに待つてたもれ。」

姫君はもう泣き伏してゐた。たとひ戀しいとは思はぬまでも、頼みにした男と別れるのは、言葉には盡せない悲しさだつた。男は姫君の背を撫でては、いろいろ慰めたり励ましたりした。が、これも二言目には、涙に声を曇らせるのだつた。

其處へ何も知らない乳母は、年の若い女房たちと、銚子や高坏を運んで來た。古い池に枝垂れた櫻も、蕾を持つた事を話しながら。……

三

六年目の春は返つて來た。が、奧へ下つた男は遂に都へは歸らなかつた。その間に召使ひは一人も殘らず、ちりぢりに何處かへ立ち退いてしまふし、姫君の住んでゐた東の對も或年の大風に倒れてしまつた。姫君はそれ以來乳母と一しよに侍の廊を住居にしてゐた。其處は住居とは云ふものの、手狹でもあれば住み荒してもあり、僅に雨露の凌げるだけだつた。乳母はこの廊へ移つた當座、いたはしい姫君の姿を見ると、涙を落さずにはゐられなかつた。が、又或時は理由もないのに、腹ばかり立ててゐる事があつた。

暮しのつらいのは勿論だつた。棚の厨子はとうの昔、米や青菜に變つてゐた。今では姫君の袿や袴も身についてゐる外は殘らなかつた。乳

母は焚き物に事を缺けば、立ち腐れになつた寢殿へ、板を剝ぎに出かける位だつた。しかし姫君は昔の通り、琴や歌に氣を晴らしながら、ぢつと男を待ち續けてゐた。

するとその年の秋の月夜、乳母は姫君の前へ出ると、考へ考へこんな事を云つた。

「殿はもう御歸りにはなりますまい。あなた樣も殿の事は、お忘れになつては如何でございませう。就てはこの頃或典藥之助が、あなた樣にお會はせ申せと、責め立てて居るのでございますが。……」

姫君はその話を聞きながら、六年以前の事を思ひ出した。六年以前には、いくら泣いても、泣き足りない程悲しかつた。が、今は體も心も餘りにそれには疲れてゐた。「唯靜かに老い朽ちたい。」……その外は何も考へなかつた。姫君は話を聞き終ると、白い月を眺めたなり、懶げにやつれた顏を振つた。

「わたしはもう何も入らぬ。生きようとも死なうとも一つ事ぢや。……」

* * * * *

丁度これと同じ時刻、男は遠い常陸の國の屋形に、新しい妻と酒を酌んでゐた。妻は父の目がねにかなつた、この國の守の娘だつた。

「あの音は何ぢや？」

男はふと驚いたやうに、靜かな月明りの軒を見上げた。その時なぜか男の胸には、はつきり姫君の姿が浮んでゐた。

「栗の實が落ちたのでございませう。」

常陸の妻はさう答へながら、ふつつかに銚子の酒をさした。

四

男が京へ歸つたのは、丁度九年目の晩秋だつた。男と常陸の妻の族と、――彼等は京へはひる途中、日がらの惡いのを避ける爲に、三四日粟津に滯在した。それから京へはひる時も、晝の人目に立たないやうに、わざと日の暮を選ぶ事にした。男は鄙にゐる間も、二三度京の妻のもとへ、懇ろな消息をことづけてやつた。が、使が歸らなかつたり、幸ひ歸つて來たと思へば、姫君の屋形がわからなかつたり、一度も返事は手に入らなかつた。それだけに京へはひつたとなると、戀しさも亦一層だつた。男は妻の父の屋形へ無事に妻を送りこむが早いか、旅支度も解かずに六の宮へ行つた。

六の宮へ行つて見ると、昔あつた四足の門も、檜皮葺きの寢殿や對も、悉く今はなくなつてゐた。その中に唯殘つてゐるのは、崩れ殘りの築土だけだつた。男は草の中に佇んだ儘、茫然と庭の跡を眺めまはした。其處には半ば埋もれた池に、水葱が少し作つてあつた。水葱はかすかな新月の光に、ひつそりと葉を簇らせてゐた。

男は政所と覺しいあたりに、傾いた板屋のあるのを見つけた。板屋の中には近寄つて見ると、誰か人影もあるらしかつた。男は闇を透かしながら、そつとその人影に聲をかけた。すると月明りによろぼひ出たのは、何處か見覺えのある老尼だつた。

尼は男に名のられると、何も云はずに泣き續けた。その後やつと途切れ途切れに、姫君の身の上を話し出した。

「御見忘れでもございませうが、手前は御內に仕へて居つた、はした女の母でございます。殿がお下りになつてからも、娘はまだ五年ばかり、御奉公致して居りました。が、その內に夫と共々、但馬へ下る事になりましたから、手前もその節娘と一しよに、御暇を頂いたのでございます。所がこの頃姫君の事が、何かと心にかかりますので、手前一人京へ上つて見ますと、御覽の通り御屋形も何もなくなつて居るのでご

ざいませんか？　姫君も何處へいらつしやつた事やら、――實は手前も此頃から、途方に暮れて居るのでございます。殿は御存知もございますまいが、娘が御奉公申して居つた間も、姫君のお暮しのおいたはしさは、申しやうもない位でございました。……」

　男は一部始終を聞いた後、この腰の曲つた尼に、下の衣を一枚脱いで渡した。それから頭を垂れた儘、默然と草の中を歩み去つた。

五

　男は翌日から姫君を探しに、洛中を方方歩きまはつた。が、何處へどうしたのか、容易に行き方はわからなかつた。

　すると何日か後の夕ぐれ、男はむら雨を避ける爲に、朱雀門の前にある、西の曲殿の軒下に立つた。其處にはまだ男の外にも、物乞ひらしい法師が一人、やはり雨止みを待ちわびてゐた。雨は丹塗りの門の空に、寂しい音を立て續けた。男は法師を尻目にしながら、苛立たしい思ひを紛らせたさに、あちこち石疊みを歩いてゐた。その内にふと男の耳は、薄暗い窓の櫺子の中に、人のゐるらしいけはひを捉へた。男は殆ど何の氣なしに、ちらりと窓を覗いて見た。

　窓の中には尼が一人、破れた莚をまとひながら、病人らしい女を介抱してゐた。女は夕ぐれの薄明りにも、無氣味な程瘦せ枯れてゐるらしかつた。しかしその姫君に違ひない事は、一目見ただけでも十分だつた。男は聲をかけようとした。が、淺ましい姫君の姿を見ると、なぜかその聲が出せなかつた。姫君は男のゐるのも知らず、破れ莚の上に寢反りを打つと、苦しさうにこんな歌を詠んだ。

　「たまくらのすきまの風もさむかりき、身はならはしのものにざりける」

　男はこの聲を聞いた時、思はず姫君の名前を呼んだ。姫君はさすがに枕を起した。が、男を見るが早いか、何かかすかに叫んだきり、又莚の上に俯伏してしまつた。尼は、――あの忠實な乳母は、其處へ飛びこんだ男と一しよに、慌てて姫君を抱き起した。しかし抱き起した顏を見ると、乳母は勿論男さへも、一層慌てずにはゐられなかつた。

　乳母はまるで氣の狂つたやうに、乞食法師のもとへ走り寄つた。さうして、臨終の姫君の爲に何なりとも經を讀んでくれと云つた。法師は乳母の望み通り、姫君の枕もとへ座を占めた。が、經文を讀誦する代りに、姫君へかう言葉をかけた。

「往生は人手に出來るものではござらぬ。唯御自身怠らずに、阿彌陀佛の御名をお唱へなされ。」

　姫君は男に抱かれた儘、細ぼそと佛名を唱へ出した。と思ふと恐しさうに、ぢつと門の天井を見つめた。

「あれ、あそこに火の燃える車が。……」

「そのやうな物にお恐れなさるな。御佛さへ念ずればよろしうござる。」

　法師はやや聲を勵ました。すると姫君は少時の後、又夢うつつのやうに呟き出した。

「金色の蓮華が見えまする。天蓋のやうに大きい蓮華が。……」

　法師は何か云はうとした。が、今度はそれよりもさきに、姫君が切れ切れに口を開いた。

「蓮華はもう見えませぬ。跡には唯暗い中に、風ばかり吹いて居りまする。」

「一心に佛名を御唱へなされ。なぜ一心に御唱へなさらぬ？」

　法師は殆ど叱るやうに云つた。が、姫君は絶え入りさうに、同じ事を繰り返すばかりだつた。

「何も、――何も見えませぬ、暗い中に風ばか

り、――冷たい風ばかり吹いて參りまする。」

男や乳母は涙を呑みながら、口の内に彌陀を念じ續けた。法師も勿論合掌した儘、姫君の念佛を扶けてゐた。さう云ふ聲の雨に交る中に、破れ莚を敷いた姫君は、だんだん死に顏に變つて行つた。……

六

それから何日か後の月夜、姫君に念佛を勸めた法師は、やはり朱雀門の前の曲殿に、破れ衣の膝を抱へてゐた。すると其處へ侍が一人、悠悠と何か歌ひながら、月明りの大路を歩いて來た。侍は法師の姿を見ると、草履の足を止めたなり、さりげないやうに聲をかけた。

「この頃この朱雀門のほとりに、女の泣き聲がするさうではないか？」

法師は石疊みに蹲まつた儘、たつた一言返事をした。

「お聞きなされ。」

侍はちよいと耳を澄ませた。が、かすかな蟲の音の外は、何一つ聞えるものもなかつた。あたりには唯松の匂が、夜氣に漂つてゐるだけだつた。侍は口を動かさうとした。しかしまだ何も云はない内に、突然何處からか女の聲が、細そぼそと歎きを送つて來た。

侍は太刀に手をかけた。が、聲は曲殿の空に、一しきり長い尾を引いた後、だんだん又何處かへ消えて行つた

「御佛を念じておやりなされ。――」

法師は月光に顏を擡げた。

「あれは極樂も地獄も知らぬ、腑甲斐ない女の魂でござる。御佛を念じておやりなされ。」

しかし侍は返事もせずに、法師の顏を覗きこんだ。と思ふと驚いたやうに、その前へいきなり兩手をついた。

「内記の上人ではございませんか？ どうして、又このやうな所に――」

在俗の名は慶滋の保胤、世に内記の上人と云ふのは、空也上人の弟子の中にも、やん事ない高徳の沙門だつた。

妖婆

英語に Witch と唱ふるもの、大むね妖婆と翻譯すれど、年少美貌のウイッチ亦決して少しとは云ふべからず。メレジュコウスキイが「先驅者」ダンスンツィオが「ジョリオの娘」或は遙に品下れどクロオフォオドが Witch of Prague など、顏玉の如きウイッチを描きしもの、尋ぬれば猶多かるべし。されど白髮蒼顏のウイッチの如く、活躍せる性格少きは否み難き事實ならんか。スコット、ホオソオンが昔は問はず、近代の英米文學中、妖婆を描きて出色なるものは、キップリングが The Courting of Dinah Shadd の如き或は隨一とも稱すべき乎。ハアホディが小說にも、妖婆に材を取る事珍しからず。名高き Under the Greenwood の中なる、エリザベス・エンダアフィルドもこの類なり。日本にては山姥鬼婆共に　然たるウイッチならず。支那にてはかの夜譚隨錄載する所の夜星子なるもの、略妖婆たるに近かるべし。

（『點心』の「骨董羹」より）

トロッコ

小田原熱海間に、輕便鐵道敷設の工事が始まつたのは、良平の八つの年だつた。良平は毎日村外れへ、その工事を見物に行つた。工事を——といつた所が、唯トロッコで土を運搬する——それが面白さに見に行つたのである。

トロッコの上には土工が二人、土を積んだ後に佇んでゐる。トロッコは山を下るのだから、人手を借りずに走つて來る。煽るやうに車臺が動いたり、土工の半纏の裾がひらついたり、細い線路がしなつたり——良平はそんなけしきを眺めながら、土工になりたいと思ふ事がある。せめては一度でも土工と一しよに、トロッコへ乘りたいと思ふ事もある。トロッコは村外れの平地へ來ると、自然と其處に止まつてしまふ。と同時に土工たちは、身輕にトロッコを飛び降りるが早いか、その線路の終點へ車の土をぶちまける。それから今度はトロッコを押し押し、もと來た山の方へ登り始める。良平はその時乘れないまでも、押す事さへ出來たらと思ふのである。

或夕方、——それは二月の初旬だつた。良平は二つ下の弟や、弟と同じ年の隣の子供と、トロッコの置いてある村外れへ行つた。トロッコは泥だらけになつた儘、薄明るい中に並んでゐる。が、その外は何處を見ても、土工たちの姿は見えなかつた。三人の子供は恐る恐る、一番端にあるトロッコを押した。トロッコは三人の力が揃ふと、突然ごろりと車輪をまはした。良平はこの音にひやりとした。しかし二度目の車輪の音は、もう彼を驚かさなかつた。ごろり、ごろり、——トロッコはさう云ふ音と共に、三人の手に押されながら、そろそろ線路を登つて行つた。

その内に彼是十間程來ると、線路の勾配が急になり出した。トロッコも三人の力では、いくら押しても動かなくなつた。どうかすれば車と一しよに、押し戻されさうにもなる事がある。良平はもう好いと思つたから、年下の二人に相圖をした。

「さあ、乘らう？」

彼等は一度に手をはなすと、トロッコの上へ飛び乘つた。トロッコは最初徐ろに、それから見る見る勢よく、一息に線路を下り出した。その途端につき當りの風景は、忽ち兩側へ分かれるやうに、ずんずん目の前へ展開して來る。顏に當る薄暮の風、足の下に躍るトロッコの動搖——良平は殆ど有頂天になつた。

しかしトロッコは二三分の後、もともとの終點に止まつてゐた。

「さあ、もう一度押すぢやあ。」

良平は年下の二人と一しよに、又トロッコを押し上げにかかつた。が、まだ車輪も動かない内に、突然彼等の後には、誰かの足音が聞え出した。のみならずそれは聞え出したと思ふと、急にかう云ふ怒鳴り聲に變つた。

「この野郎？　誰に斷つてトロに觸つた？」

其處には古い印半纏に、季節外れの麥藁帽をかぶつた、背の高い土工が佇んでゐる。——さう云ふ姿が目にはひつた時、良平は年下の二人と一しよに、もう五六間逃げ出してゐた。——それぎり良平は使の歸りに、人氣のない工事場のトロッコを見ても、二度と乘つて見ようと思つた事はない。唯その時の土工の姿は、今でも良平の頭の何處かに、はつきりし

た記憶を殘してゐる。薄明りの中に仄めいた、小さい黄色い麥藁帽、——しかしその記憶さへも、年毎に色彩は薄れるらしい。

　その後十日餘りたつてから、良平は又たつた一人、午過ぎの工事場に佇みながら、トロッコの來るのを眺めてゐた。すると土を積んだトロッコの外に、枕木を積んだトロッコが一輛、これは本線になる筈の、太い線路を登つて來た。このトロッコを押してゐるのは、二人とも若い男だつた。良平は彼等を見た時から、何だか親しみ易いやうな氣がした。「この人たちならば叱られない。」——彼はさう思ひながら、トロッコの側へ駈けて行つた。

「をぢさん。押してやらうか？」

　その中の一人、——縞のシャツを著てゐる男は、俯向きにトロッコを押した儘、思つた通り快い返事をした。

「おお、押してくよう。」

　良平は二人の間にはひると、力一杯押し始めた。

「われは中中力があるな。」

　他の一人、——耳に卷煙草を挾んだ男も、かう良平を褒めてくれた。

　その内に線路の勾配は、だんだん樂になり始めた。「もう押さなくとも好い。」——良平は今にも云はれるかと内心氣がかりでならなかつた。が、若い二人の土工は、前よりも腰を起したぎり、默默と車を押し續けてゐた。良平はとうとうこらへ切れずに、怯づ怯づこんな事を尋ねて見た。

「何時までも押してゐて好い？」

「好いとも。」

　二人は同時に返事をした。良平は「優しい人たちだ。」と思つた。

　五六町餘り押し續けたら、線路はもう一度急勾配になつた。其處には兩側の蜜柑畑に、黄色い實がいくつも日を受けてゐる。

「登り路の方が好い、何時までも押させてくれるから。」——良平はそんな事を考へながら、全身でトロッコを押すやうにした。

　蜜柑畑の間を登りつめると、急に線路は下りになつた。縞のシャツを著てゐる男は、良平に「やい、乘れ。」と云つた。良平は直に飛び乘つた。トロッコは三人が乘り移ると同時に、蜜柑畑の匂を煽りながら、ひた辷りに線路を走り出した。「押すよりも乘る方がずつと好い。」——良平は羽織に風を孕ませながら、當り前の事を考へた。「行きに押す所が多ければ、歸りに又乘る所が多い。」——さうも考へたりした。

　竹藪のある所へ來ると、トロッコは靜かに走るのを止めた。三人は又前のやうに、重いトロッコを押し始めた。竹藪は何時か雜木林になつた。爪先上りの所所には、赤錆の線路も見えない程、落葉のたまつてゐる場所もあつた。その路をやつと登り切つたら、今度は高い崖の向うに、廣廣と薄ら寒い海が開けた。と同時に良平の頭には、餘り遠く來過ぎた事が、急にはつきりと感じられた。

　三人は又トロッコへ乘つた。車は海を右にしながら、雜木の枝の下を走つて行つた。しかし良平はさつきのやうに、面白い氣もちにはなれなかつた。「もう歸つてくれれば好い。」——彼はさうも念じて見た。が、行く所まで行きつかなければ、トロッコも彼等も歸れない事は、勿論彼にもわかり切つてゐた。

　その次に車の止まつたのは、切崩した山を背負つてゐる、藁屋根の茶店の前だつた。二人の土工はその店へはひると、乳呑兒をおぶつた上さんを相手に悠悠と茶などを飲み始めた。良平は獨りいらいらしながら、トロッコのまはりをまはつて見た。トロッコには頑丈な車臺の板に、跳ねかへつた泥が乾いてゐた。

少時の後茶店を出て來しなに、卷煙草を耳に挾んだ男は、（その時はもう挾んでゐなかつたが）トロッコの側にゐる良平に新聞紙に包んだ駄菓子をくれた。良平は冷淡に「難有う」と云つた。が、直に冷淡にしては、相手にすまないと思ひ直した。彼はその冷淡さを取り繕ふやうに、包み菓子の一つを口へ入れた。菓子には新聞紙にあつたらしい、石油の匂がしみついてゐた。

三人はトロッコを押しながら緩い傾斜を登つて行つた。良平は車に手をかけてゐても、心は外の事を考へてゐた。

その坂を向うへ下り切ると、又同じやうな茶店があつた。土工たちがその中へはひつた後、良平はトロッコに腰をかけながら、歸る事ばかり氣にしてゐた。茶店の前には花のさいた梅に、西日の光が消えかかつてゐる。「もう日が暮れる。」――彼はさう考へると、ぼんやり腰かけてもゐられなかつた。トロッコの車輪を蹴つて見たり、一人では動かないのを承知しながらうんうんそれを押して見たり、――そんな事に氣もちを紛らせてゐた。

所が土工たちは出て來ると、車の上の枕木に手をかけながら、無造作に彼にかう云つた。

「われはもう歸んな。おれたちは今日は向う泊りだから。」

「あんまり歸りが遲くなるとわれの家でも心配するずら。」

良平は一瞬間呆氣にとられた。もう彼是暗くなる事、去年の暮母と岩村まで來たが、今日の途はその三四倍ある事、それを今からたつた一人、歩いて歸らなければならない事、――さう云ふ事が一時にわかつたのである。良平は殆ど泣きさうになつた。が、泣いても仕方がないと思つた。泣いてゐる場合ではないとも思つた。彼は若い二人の土工に、取つて附けたやうな御時宜をすると、どんどん線路傳ひに走り出した。

良平は少時無我夢中に線路の側を走り續けた。その内に懷の菓子包みが、邪魔になる事に氣がついたから、それを路側へ拋り出す次手に、板草履も其處へ脱ぎ捨ててしまつた。すると薄い足袋の裏へぢかに小石が食ひこんだが、足だけは遙かに輕くなつた。彼は左に海を感じながら、急な坂路を駈け登つた。時時涙がこみ上げて來ると、自然に顏が歪んで來る。――それは無理に我慢しても、鼻だけは絶えずくうくう鳴つた。

竹藪の側を駈け拔けると、夕燒けのした日金山の空も、もう火照りが消えかかつてゐた。良平は、愈氣が氣でなかつた。往きと返りと變るせゐか、景色の違ふのも不安だつた。すると今度は着物までも、汗の濡れ通つたのが氣になつたから、やはり必死に駈け續けたなり、羽織を路側へ脱いで捨てた。

蜜柑畑へ來る頃には、あたりは暗くなる一方だつた。「命さへ助かれば――」良平はさう思ひながら、辷つてもつまづいても走つて行つた。

やつと遠い夕闇の中に、村外れの工事場が見えた時、良平は一思ひに泣きたくなつた。しかしその時もべそはかいたが、とうとう泣かずに駈け續けた。

彼の村へはひつて見ると、もう兩側の家家には、電燈の光がさし合つてゐた。良平はその電燈の光に、頭から汗の湯氣の立つのが、彼自身にもはつきりわかつた。井戸端に水を汲んでゐる女衆や、畑から歸つて來る男衆は、良平が喘ぎ喘ぎ走るのを見ては、「おいどうしたね？」などと聲をかけた。が、彼は無言の儘、雜貨屋だの床屋だの、明るい家の前を走り過ぎた。

彼の家の門口へ駈けこんだ時、良平はとうと

ら大きに、わつと泣き出さずにはゐられなかつた。その泣き聲は彼の周圍へ、一時に父や母を集らせた。殊に母は何とか云ひながら、良平の體を抱へるやうにした。が、良平は手足をもがきながら、啜り上げ啜り上げ泣き續けた。それが餘り激しかつたせゐか、近所の女衆も三四人、薄暗い門口へ集つて來た。父母は勿論その人たちは、口口に彼の泣く譯を尋ねた。しかし彼は何と云はれても泣き立てるより外に仕方がなかつた。あの遠い路を驅け通して來た、今までの心細さをふり返ると、いくら大聲に泣き續けても、足りない氣もちに迫られながら。……

良平は二十六の年、妻子と一しよに東京へ出て來た。今では或雜誌社の二階に、校正の朱筆を握つてゐる。が、彼はどうかすると、全然何の理由もないのに、その時の彼を思ひ出す事がある。全然何の理由もないのに？――塵勞に疲れた彼の前には今でもやはりその時のやうに、薄暗い藪や坂のある路が、細細と一すぢ斷續してゐる。……

雪

或冬曇りの午後、わたしは中央線の汽車の窓に一列の山脈を眺めてゐた。山脈は勿論まつ白だつた。が、それは雪と言ふよりも山脈の皮膚に近い色をしてゐた。わたしはかう言ふ山脈を見ながら、ふと或小事件を思ひ出した。――

もう四五年以前になつた、やはり或冬曇りの午後、わたしは或友だちのアトリエに、――見すぼらしい鑄物のストオヴの前に彼やそのモデルと話してゐた。アトリエには彼自身の油畫の外に何も裝飾になるものはなかつた。卷煙草を銜へた斷髮のモデルも、――彼女は成程混血兒じみた一種の美しさを具へてゐた。しかしどう言ふ量見か、天然自然に生えた睫毛を一本殘らず拔きとつてゐた。……

話はいつかその頃の寒氣の嚴しさに移つてゐた。彼は如何に庭の土の季節を感ずるかと言ふことを話した。就中如何に庭の土の冬を感ずるかと言ふことを話した。

「つまり土も生きてゐると言ふ感じだね。」

彼はパイプに煙草をつめつめ、我我の顏を眺めまはした。わたしは何とも返事をせずに匂のない珈琲を啜つてゐた。けれどもそれは斷髮のモデルに何か感銘を與へたらしかつた。彼女は赤い臉を擡げ、彼女の吐いた煙の輪にぢつと目を注いでゐた。それからやはり空中を見たまま、誰にともなしにこんなことを言つた。――

「それは肌も同じだわね。あたしもこの商賣を始めてから、すつかり肌を荒してしまつたもの。……」

或冬曇りの午後、わたしは中央線の汽車の窓に一列の山脈を眺めてゐた。山脈は勿論まつ白だつた。が、それは雪と言ふよりも人間の鮫肌に近い色をしてゐた。わたしはかう言ふ山脈を見ながら、ふとあのモデルを思ひ出した。あの一本も睫毛のない、混血兒じみた日本の娘さんを。

（「梅・馬・鶯」小品中より）

お富の貞操

一

明治元年五月十四日の午過ぎだつた。「官軍は明日夜の明け次第、東叡山彰義隊を攻撃する。上野界隈の町家のものは匆々何処へでも立ち退いてしまへ。」――さう云ふ達しのあつた午過ぎだつた。下谷町二丁目の小間物店、古河屋政兵衛の立ち退いた跡には、台所の隅の鮑貝の前に大きい牡の三毛猫が一匹静かに香箱をつくつてゐた。

戸をしめ切つた家の中は勿論午過ぎでもまつ暗だつた。人音も全然聞えなかつた。唯耳にはひるものは連日の雨の音ばかりだつた。雨は見えない屋根の上へ時々急に降り注いでは、何時か又中空へ遠のいて行つた。猫はその音の高まる度に、琥珀色の眼をまん円にした。竈さへわからない台所にも、この時だけは無気味な燐光が見えた。が、ざあつと云ふ雨音以外に何も変化のない事を知ると、猫はやはり身動きもせずもう一度眼を糸のやうにした。

そんな事が何度か繰り返される内に、猫はとうとう眠つたのか、眼を明ける事もしなくなつた。しかし雨は不相変急になつたり静まつたりした。八つ、八つ半、――時はこの雨音の中にだんだん日の暮へ移つて行つた。

すると七つに迫つた時、猫は何かに驚いたやうに突然眼を大きくした。同時に耳も立てたらしかつた。が、雨は今までよりも遥かに小降りになつてゐた。往来を馳せ過ぎる駕籠舁きの声、――その外には何も聞えなかつた。しかし数秒の沈黙の後、まつ暗だつた台所は何時の間にかぼんやり明るみ始めた。狭い板の間を塞いだ竈、蓋のない水瓶の水光り、荒神の松、引き窓の綱、――そんな物も順々に見えるやうになつた。猫は愈不安さうに、戸の開いた水口を睨みながら、のそりと大きい体を起した。

この時この水口の戸を開いたのは、――いや、戸を開いたばかりではない、腰障子もしまひに明けたのは、濡れ鼠になつた乞食だつた。彼は古い手拭をかぶつた首だけ前へ伸ばしたなり、少時は静かな家のけはひにぢつと耳を澄ませてゐた。が、人音のないのを見定めると、これだけは真新しい酒筵に鮮かな濡れ色を見せた儘、そつと台所へ上つて来た。猫は耳を平めながら、二三歩跡ずさりをした。しかし乞食は驚きもせず後手に障子をしめてから、徐ろに顔の手拭をとつた。顔は髭に埋まつた上、膏薬も二三個所貼つてあつた。しかし垢にはまみれてゐても眼鼻立ちは寧ろ尋常だつた。

「三毛。三毛。」

乞食は髪の水を切つたり、顔の滴を拭つたりしながら、小声に猫の名前を呼んだ。猫はその声に聞き覚えがあるのか、平めてゐた耳をもとに戻した。が、まだ其処に佇んだなり、時々はじろじろ彼の顔へ、疑深い眼を注いでゐた。その間に酒筵を脱いだ乞食は脛の色も見えない泥足のまま、猫の前へどつかりあぐらをかいた。

「三毛公。どうした？――誰もゐない所を見ると、貴様だけ置き去りを食はされたな。」

乞食は独り笑ひながら、大きい手に猫の頭を撫でた。猫はちよいと逃げ腰になつた。が、それぎり飛び退きもせず、反つて其処へ坐つたなり、だんだん眼さへ細め出した。乞食は猫を撫でやめると、今度は古湯帷子の懐から、油光り

ろから短銃を出した。さうして丁寧な、薄明りの中に、引き金の具合を檢べ出した。いまだに戰の空氣の漂つた、人氣のない家の臺所に短銃をいぢつてゐる一人の乞食――それは確かに小說じみた、物珍らしい光景に違ひなかつた。しかし薄眼になつた猫はやはり背中を圓くした儘、一切の祕密を知つてゐるやうに、冷然と坐つてゐるばかりだつた。

「明日になるとな、三毛公、この界隈へも雨のやうに鐵砲の玉が降つて來るぞ。そいつに中ると死んぢまふから、明日はどんな騷ぎがあつても、一日緣の下に隱れてゐろよ。……」

乞食は短銃を檢べながら、時時猫に話しかけた。

「お前とも永い御馴染だな。が、今日が御別れだぞ。明日はお前にも大厄日だ。おれも明日は死ぬかも知れない。よし又死なずにすんだ所が、この先二度とお前と一しよに掃溜めあさりはしないつもりだ。さうすればお前は大喜びだらう。」

その內に雨は又一きり、騷がしい音を立て始めた。雲も棟瓦を煙らせる程、近近と屋根に押し迫つたのであらう。臺所に漂つた薄明りは、前よりも一層かすかになつた。が、乞食は顏も擧げず、やつと檢べ終つた短銃へ、丹念に彈藥を裝塡してゐた。

「――それとも名殘りだけは惜しんでくれるか？いや、猫と云ふやつは三年の恩も忘れると云ふから、お前も當てにはならなさうだな。――が、まあ、そんな事はどうでも好いや。唯おれもゐないとすると、――」

乞食は急に口を噤んだ。途端に誰か水口の外へ歩み寄つたらしい、けはひがした。短銃をしまふのと振り返るのと、乞食にはそれが同時だつた。いやその外に水口の障子ががらりと明けられたのも同時だつた。乞食は咄嗟に身構へながら、まともに闖入者と眼を合せた。

すると障子を明けた誰かは乞食の姿を見るが早いか、反つて不意を打たれたやうに「あつ」とかすかな叫び聲を洩らした。それは素足に大黑傘を下げた、まだ年の若い女だつた。彼女は殆ど衝動的に、もと來た雨の中へ飛び出さうとした。が、最初の驚きから、やつと勇氣を恢復すると、臺所の薄明りに透かしながら、ぢつと乞食の顏を覗きこんだ。

乞食は呆氣にとられたのか、古湯帷子の片膝を立てた儘、まじまじ相手を見守つてゐた。もうその眼にもさつきのやうに、油斷のない氣色は見えなかつた。二人は默然と少時の間、互に眼と眼を見合せてゐた。

「何だい、お前は新公ぢやないか？」

彼女は少し落ち着いたやうに、かう乞食へ聲をかけた。乞食はにやにや笑ひながら、二三度彼女へ頭を下げた。

「どうも相濟みません。あんまり降りが強いもんだから、つい御留守へはひこみましたがね――何、格別明き巢狙ひに宗旨を變へた譯でもないんです。」

「驚かせるよ、ほんたうに――いくら明き巢狙ひぢやないと云つたつて、圖圖しいにも程があるぢやないか？」

彼女は傘の滴を切り切り、腹立たしさうにつけ加へた。

「さあこつちへ出ておくれよ。わたしは家へはひるんだから。」

「へえ、出ます。出ろと仰有らないでも出ますがね。姐さんはまだ立ち退かなかつたんですかい？」

「立ち退いたのさ。立ち退いたんだけれども、――そんな事はどうでも好いぢやないか？」

「すると何か忘れ物でもしたんですね。――まあ、こつちへおはひんなさい。其處では雨がか

かりますぜ。」
　彼女はまだ聾やうに、乞食の言葉には返事もせず、水口の板の間へ腰を下した。それから流しへ泥足を伸ばすと、ざあざあ水をかけ始めた。平然とあぐらをかいた乞食は鬚だらけの顋をさすりながら、じろじろその姿を眺めてゐた。彼女は色の淺黒い、鼻のあたりに雀斑のある、田舎者らしい小女だつた。なりも召使ひに相應な手織木綿の一重物に、小倉の帶しかしてゐなかつた。が、活き活きした眼鼻立ちや、堅肥りの體つきには、何處か新しい桃や梨を聯想させる美しさがあつた。
「この騷ぎの中を取りに返るのぢや、何か大事の物を忘れたんですね。何です、その忘れ物は？ え、姐さん。——お富さん。」
　新公は又尋ね續けた。
「何だつて好いぢやないか？ それよりさつさと出て行つておくれよ。」
　お富の返事は突慳貪だつた。が、ふと何か思ひついたやうに、新公の顔を見上げると、眞面目にこんな事を尋ね出した。
「新公、お前、家の三毛を知らないかい？」
「三毛？ 三毛は今此處に、——おや、何處へ行きやがつたらう？」
　乞食はあたりを見廻した。すると猫は何時の間にか、棚の擂鉢や鐵鍋の間に、ちやんと香箱をつくつてゐた。その姿は新公と同時に、忽ちお富にも見つかつたのであらう。彼女は柄杓を捨てるが早いか、乞食の存在も忘れたやうに、板の間の上に立ち上つた。さうして晴れ晴れと微笑しながら、棚の上の猫を呼ぶやうにした。
　新公は薄暗い棚の上の猫から、不思議さうにお富へ眼を移した。
「猫ですかい、姐さん、忘れ物と云ふのは？」
「猫ぢや惡いのかい？——三毛、三毛、さあ、下りて御出で。」
　新公は突然笑ひ出した。その聲は雨音の鳴り渡る中に、殆ど氣味の惡い反響を起した。と、お富はもう一度、腹立たしさに頬を火照らせながら、いきなり新公に怒鳴りつけた。
「何が可笑しいんだい？ 家のお上さんは三毛を忘れて來たつて、氣違ひの樣になつてゐるんぢやないか？ 三毛が殺されたらどうしようつて、泣き通しに泣いてゐるんぢやないか？ わたしもそれが可哀さうだから、雨の中をわざわざ歸つて來たんぢやないか？——」
「ようござんすよ、もう笑ひはしませんよ。」
　新公はそれでも笑ひ笑ひ、お富の言葉を遮つた。
「もう笑ひはしませんがね。まあ、考へて御覽なさい。明日にも「いくさ」が始まらうと云ふのに、高が猫の一匹や二匹——これはどう考へたつて、可笑しいのに違ひありませんや。お前さんの前だけれども、一體此處のお上さん位、わからずやのしみつたれはありませんぜ。第一あの三毛公を探しに、……」
「お默りよ！ お上さんの讒訴なぞは聞きたくないよ！」
　お富は殆ど地だんだを踏んだ。が、乞食は思ひの外彼女の權幕には驚かなかつた。のみならずしげしげ彼女の姿に無遠慮な視線を注いでゐた。實際その時の彼女の姿は野蠻な美しさそのものだつた。雨に濡れた著物や湯卷、——それらは何處を眺めても、ぴつたり肌についてゐるだけ、露はに肉體を語つてゐた、しかも一目に處女を感ずる、若若しい肉體を語つてゐた。新公は彼女に目を据ゑたなり、やはり笑ひ聲に話し續けた。
「第一あの三毛公を探しに、お前さんをよこすのでもわかつてゐまさあ。ねえ、さうぢやありませんか？ 今ぢやもう上野界隈、立ち退かない家はありませんや。して見れば町家は並ん

てゐても、人のゐない町家と同じ事だ。まさか狼も出まいけれども、どんな危い目に遇ふかも知れない。——と、まづ云つたものぢやありませんか？」
「そんな余計な心配をするより、さつさと猫をとつておくれよ。——これがいくさでも始まりやしまいし、何が危い事があるものかね。」
「冗談云つちやいけません。若い女の一人歩きが、かう云ふ時に危くなけりや、危いと云ふ事はありませんや。早い話が此処にゐるのは、お前さんとわたしと二人つきりだ。万一わたしが妙な気でも出したら、姐さん、お前さんはどうーなさるね？」
新公はだんだん冗談だか、真面目だか、わからない口調になつた。しかし澄んだお富の目には、恐怖らしい影さへ見えなかつた。唯その頬には、さつきよりも、一層血の色がさしたらしかつた。
「何だい、新公——お前はわたしを嚇かさうつて云ふのかい？」
お富は彼女自身嚇かすやうに、一足新公の側へ寄つた。
「嚇かすえ？　嚇かすだけならば好いぢやありませんか？　肩に錦切れなんぞくつけてゐたつて、風の悪いやつらも多い世の中だ。ましてわたしは乞食ですぜ。嚇かすばかりとは限りませんや。もしほんたうに妙な気を出したら、……」
新公は残らず云はない内に、したたか頭を打ちのめされた。お富は何時か彼の前に、大黒傘をふり上げてゐたのだつた。
「生意気な事をお云ひでない。」
お富は又新公の頭へ、力一ぱい傘を打ち下した。新公は咄嗟に身を躱さうとした。が、傘はその途端に、古湯帷子の肩を打ち据ゑてゐた。この騒ぎに驚いた猫は、鉄瓶を一つ蹴落しながら、荒神の棚へ飛び移つた。と同時に荒神の松や油光りのする燈明皿も、新公の上へ転げ落ちた。新公はやつと飛び起きる前に、まだ何度もお富の傘に、打ちのめされずにはすまなかつた。
「こん畜生！　こん畜生！」
お富は傘を揮ひ続けた。が、新公は打たれながらも、とうとう傘を引つたくつた。のみならず傘を投げ出すが早いか猛然とお富に飛びかかつた。二人は狭い板の間の上に、少時の間掴み合つた。この立ち廻りの最中に、雨は又台所の屋根へ、凄まじい音を湊め出した。光も雨音の高まるのと一しよに、見る見る薄暗さを加へて行つた。新公は打たれても、引つ掻かれても、遮二無二お富を捩ぢ伏せようとした。しかし何度か仕損じた後、やつと彼女に組み付いたと思ふと、突然又弾かれたやうに、水口の方へ飛びすさつた。
「この阿魔あ！……」
新公は障子を後ろにしたなり、ぢつとお富を睨みつけた。何時か髪も壊れたお富は、べつたり板の間に坐りながら、帯の間に挟んで来たらしい剃刀を逆手に握つてゐた。それは殺気を帯びてもゐれば、同時に又妙に艶めかしい、云はば荒神の棚の上に、脊を高めた猫と似たものだつた。二人はちよいと無言の儘、相手の目の中を窺ひ合つた。が、新公は一瞬の後、わざとらしい冷笑を見せると、懐からさつきの短銃を出した。
「さあ、いくらでもぢたばたして見ろ。」
短銃の先は徐ろに、お富の胸のあたりへ向つた。それでも彼女は口惜しさうに、新公の顔を見つめたきり、何とも口を開かなかつた。新公は彼女が騒がないのを見ると、今度は何か思ひついたやうに、短銃の先を上に向けた。その先には薄暗い中に、琥珀色の猫の目が仄めいて

「好いかい？　お富さん。——」
新公は相手をじらすやうに、笑ひを含んだ聲を出した。
「この短銃がどんと云ふと、あの猫が逆樣に轉げ落ちるんだ。お前さんにしても同じ事だぜ、そら好いかい？」
引き金はすんでに落ちようとした。
「新公！」
突然お富は聲を立てた。
「いけないよ。打つちやいけない。」
新公はお富へ目を移した。しかしまだ短銃の先は、三毛猫に狙ひを定めてゐた。
「いけないのは知れた事だ。」
「打つちや可哀さうだよ。三毛だけは助けておくれ。」
お富は今までとは打つて變つた、心配さうな目つきをしながら、心もち震へる脣の間に、細かい齒並みを覗かせてゐた。新公は半ば嘲るやうに、又半ば訝るやうに、彼女の顏を眺めたなり、やつと短銃の先を下げた。と同時にお富の顏には、ほつとした色が浮んで來た。
「ぢや猫は助けてやらう。その代り、——」
新公は横柄に云ひ放つた。
「その代りお前さんの體を借りるぜ。」
お富はちよいと目を外らせた。一瞬間彼女の心の中には、憎しみ、怒り、嫌惡、悲哀、その外いろいろの感情がごつたに燃え立つて來たらしかつた。新公はさう云ふ彼女の變化に注意深い目を配りながら、横歩きに彼女の後ろへ廻ると、茶の間の障子を明け放つた。茶の間は臺所に比べれば、勿論一層薄暗かつた。が、立ち退いた跡と云ふ條、取り殘した茶簞笥や長火鉢は、その中にもはつきり見る事が出來た。新公は其處に佇んだ儘、かすかに汗ばんでゐるらしい、お富の襟もとへ目を落した。するとそれを感じたのか、お富は體を捻るやうに、後ろにゐる新公の顏を見上げた。彼女の顏にはもう何時の間にか、さつきと少しも變らない、活き活きした色が返つてゐた。しかし新公は狼狽したやうに、妙な瞬きを一つしながら、いきなり又猫へ短銃を向けた。
「いけないよ。いけないつてば。——」
お富は彼を止めると同時に、手の中の剃刀を板の間へ落した。
「いけなけりやあすこへお行きなさいな。」
新公は薄笑ひを浮べてゐた。
「いけ好かない！」
お富は忌忌しさうに呟いた。が、突然立ち上ると、ふて腐れた女のするやうに、さつさと茶の間へはひつて行つた。新公は彼女の諦めの好いのに、多少驚いた容子だつた。雨はもうその時には、ずつと音をかすめてゐた。おまけに雲の間には、夕日の光でもさし出したのか、薄暗かつた臺所も、だんだん明るさを加へて行つた。新公はその中に佇みながら、茶の間のけはひに聞き入つてゐた。小倉の帶の解かれる音、疊の上へ寢たらしい音、——それぎり茶の間はしんとしてしまつた。
新公はちよいとためらつた後、薄明るい茶の間へ足を入れた。茶の間のまん中にはお富が一人、袖に顏を蔽つた儘、ぢつと仰向けに横たはつてゐた。（四十一字缺）新公はその姿を見るが早いか、逃げるやうに臺所へ引き返した。彼の顏には形容の出來ない、妙な表情が漲つてゐた。それは嫌惡のやうにも見えれば、恥ぢたやうにも見える色だつた。彼は板の間へ出たと思ふと、まだ茶の間へ背を向けたなり、突然苦しさうに笑ひ出した。
「冗談だ。お富さん。冗談だよ。もうこつちへ出て來ておくんなさい。……」
——何分かの後、懷に猫を入れたお富は、

もう鋏を片手にしながら、破れ莚を敷いた新公と、氣輕に何か話してゐた。

「お富さん。わたしは少しお前さんに、訊きたい事があるんですがね。——」

新公はまだ間が惡さうに、お富の顏を見ないやうにしてゐた。

「何をさ！」

「何つて事もないんですがね。——まあ肌身を任せると云へば、女の一生ぢや大變な事だ。それをお富さん、お前さんは、その猫の命と懸け替に、——こいつはどうもお前さんにしちや、亂暴すぎるぢやありませんか？」

新公はちよいと口を噤んだ。が、お富は頰笑んだぎり、懷の猫を劬つてゐた。

「そんなにその猫が可愛いんですかい？」

「そりや三毛も可愛いしね。——」

お富は煮え切らない返事をした。

「それとも又お前さんは、近所でも評判の主人思ひだ。三毛が殺されたとなつた日にや、この家の上さんに申し譯がない。——と云ふ心配でもあつたんですかい？」

「ああ、三毛も可愛いしね。お上さんも大事にや違ひないんだよ。けれどもただわたしはね。——」

お富は小猫を懷けながら、遠い所でも見るやうな目をした。

「何と云へば好いんだらう？　唯あの時はああしないと、何だかすまない氣がしたのさ。」

——更に又何分かの後、一人になつた新公は、古湯帷子の膝を抱いた儘、ぼんやり臺所に坐つてゐた。暮色は疎らな雨の音の中に、だんだん此處へも迫つて來た。引き窓の綱、流し元の水瓶、——そんな物も一つづつ見えなくなつた。と思ふと上野の鐘が、一杵づつ雨雲にこもりながら、重苦しい音を撥げ始めた。新公はその音に驚いたやうに、ひつそりしたあたりを見廻した。それから手さぐりに流し元へ下りると、柄杓になみなみと水を酌んだ。

「村上新三郎源の繁光、今日だけは一本やられたな。」

彼はさう呟きざま、うまさうに黄昏の水を飲んだ。……

* * * * *

明治二十三年三月二十六日、お富は夫や三人の子供と、上野の廣小路を歩いてゐた。

その日は丁度竹の臺に、第三回內國博覽會の開會式が催される當日だつた。おまけに櫻も黑門のあたりは、もう大抵開いてゐた。だから廣小路の人通りは、殆ど押し返さないばかりだつた。其處へ上野の方からは、開會式の歸りらしい馬車や人力車の行列が、しつきりなしに流れて來た。前田正名、田口卯吉、澁澤榮一、辻新次、岡倉覺三、下條正雄——その馬車や人力車の客には、さう云ふ人人も交つてゐた。

五つになる次男を抱いた夫は、袂に長男を縋らせた儘、目まぐるしい往來の人通りをよけては、時時ちよいと心配さうに、後ろのお富を振り返つた。お富は長女の手をひきながら、その度に晴れやかな微笑を見せた。勿論二十年の歲月は、彼女にも老を齎してゐた。しかし目の中に冴えた光は昔と餘り變らなかつた。彼女は明治四五年頃に、古河屋政兵衞の甥に當る、今の夫と結婚した。夫はその頃は橫濱に、今は銀座の何丁目かに、小さい時計屋の店を出してゐた。……

お富はふと目を擧げた。その時丁度さしかかつた、二頭立ちの馬車の中には、新公が悠悠と坐つてゐた。新公が、——尤も今の新公の體は、駝鳥の羽根の前立だの、嚴めしい金モオルの飾緒だの、大小幾つかの勳章だの、いろいろの名譽の標章に埋まつてゐるやうなものだつた。しかし半白の髯の間に、こちらを見てゐる

[illegible]顔は、往年の乞食に違ひなかつた。お富は思はず足を緩めた。が、不思議にも驚かなかつた。新公は唯の乞食ではない。——そんな事はなぜかわかつてゐた。顔のせゐか、言葉のせゐか、それとも持つてゐた短銃のせゐか、兎に角わかつてはゐたのだつた。お富は眉も動かさずに、じつと新公の顔を眺めた。新公も故意か偶然か、彼女の顔を見守つてゐた。二十年以前の雨の日の記憶は、この瞬間お富の心に、切ない程はつきり浮んで來た。彼女はあの日無分別にも、一匹の猫を救ふ爲に、新公に體を任さうとした。その動機は何だつたか、——彼女はそれを知らなかつた。新公も亦さう云ふ羽目にも、彼女が投げ出した體には、指さへ觸れる事を肯じなかつた。その動機は何だつたか、——それも彼女は知らなかつた。が、知らないのにも關らず、それは皆お富には、當然すぎる程當然だつた。彼女は馬車とすれ違ひながら、何か心の伸びるやうな氣がした。

新公の馬車の通り過ぎた時、夫は人ごみの間から、又お富を振り返つた。彼女はやはりその顔を見ると、何事もないやうに微笑んで見せた。活き活きと嬉しさうに。……

（大正十一年一月作）

暗合

「お富の貞操」と云ふ小説を書いた時、お富は某氏夫人ではないかと尋ねられた人が三人ある。又あの小説の中に村上新三郎と云ふ乞食が出て來る。幕末に村上新三郎と云ふ奇傑がゐたが同一人かと尋ねられた人もある。しかしあの小説は架空の談だから、謂ふ所のモデルを用ゐたのではない。「お富の貞操」の登場人物はお富と乞食と二人だけである。その二人とも實在の人物に似てゐると云ふのは珍らしい暗合に違ひない。僕は以前藤野古白の句に「傀儡師日暮れて歸る羅生門」と云ふのを見、「傀儡師」「羅生門」共に僕の小説集の名だから、暗合の妙に驚いたことがある。然るに今又この暗合に出合つた。僕には暗合が祟つてゐるらしい。

（『百艸』の「野人生計事」より）

白雨禪

狩野芳涯常に諸弟子に教へて曰、「畫の神理、唯當に悟得すべきのみ、師授によるべからず」と。一日芳涯病んで臥す。偶白雨天を傾けて來り、深巷寂として行人を絶つ。師弟共に默して雨聲を聞くもの多時、忽ち一人あり。高歌して門外を過ぐ。芳涯莞爾として、諸弟子を顧みて曰、「會せりや」と。句下殺人の意あり。吾家の吹毛劍、單于千金に賭ひ、[illegible]太陰に泣く。一道の寒光、君看取せよ。

（『點心』の「[illegible]」より）

井月

信州伊那の俳人に井月と云ふ乞食あり。拓落たる道情、良寛に劣らず。下島空谷氏近來その句を蒐集してゐる。「朝顔に急がぬ[illegible]や殘り客」「ひそひそと何料理るやら梢明り」「初秋の心づかひや味噌醤油」「大事がる馬の尾づつや秋の風」「落葉の座をさだむるや窪たまり」（初めて伊那に來て）「鬼灯の色にゆるむや畑の繩」等、何も天保前後の人にしては、思ひの外好い。辭世は「何處やらで鶴の聲する霞かな」と云ふ由。憾むらくはその傳を詳にせず。唯犬が嫌ひだつたさうだ。

（『點心』の「雜筆」より）

庭

上

昔はこの宿の本陣だつた、中村と云ふ舊家の庭である。

庭は御維新後十年ばかりの間は、どうにか舊態を保つてゐた。瓢簞なりの池も澄んでゐれば、築山の松の枝もしだれてゐた。栖鶴軒、洗心亭、――さう云ふ四阿も殘つてゐた。池の窮まる裏山の崖には、白白と瀧も落ち續けてゐた。和の宮樣御下向の時、名を賜はつたと云ふ石燈籠も、やはり年年に擴がり勝ちな山吹の中に立つてゐた。しかしその何處かにある荒廢の感じは隱せなかつた。殊に春さき、――庭の內外の木木の梢に、一度に若芽の萌え立つ頃には、この明媚な人工の景色の背後に、何か人間を不安にする、野蠻な力の迫つて來た事が、一層露骨に感ぜられるのだつた。

中村家の隱居――傳法肌の老人は、その庭に面した母屋の炬燵に、頭瘡を病んだ老妻と、碁を打つたり花合せをしたり、屈託のない日を暮してゐた。それでも時時は立て續けに、五六番老妻に勝ち越されると、むきになつて怒り出す事もあつた。家督を繼いだ長男は、從兄妹同志の新妻と、廊下續きになつてゐる、手狹い離れに住んでゐた。長男は表德を文室と云ふ、癇癖の強い男だつた。病身な妻や弟たちは勿論、隱居さへ彼には憚かつてゐた。唯その頃この宿にゐた、乞食宗匠の井月ばかりは、度度彼の所へ遊びに來た。長男も不思議に井月にだけは、酒を飲ませたり字を書かせたり、機嫌の好い顏を見せてゐた。「山はまだ花の香もあり時鳥、井月。ところどころに瀧のほのめく、文室」――そんな附合も殘つてゐる。その外にまだ弟が二人、――次男は緣家の穀屋へ養子に行き、三男は五六里離れた町の、大きい造り酒屋に勤めてゐた。彼等は二人とも云ひ合せたやうに、滅多に本家には近づかなかつた。三男は居どころが遠い上に、もともと當主とは氣が合はなかつたから。次男は放蕩に身を持ち崩した結果、養家にも殆、歸らなかつたから。

庭は二年三年と、だんだん荒廢を加へて行つた。池には南京藻が浮び始め、植込みには枯木が交るやうになつた。その內に隱居の老人は、或旱りの烈しい夏、腦溢血の爲に頓死した。頓死する四五日前、彼が燒酎を飲んでゐると、池の向うにある洗心亭へ、白い裝束をした公卿が、一人、何度も出たりはひつたりしてゐた。少くとも彼には晝日なか、そんな幻が見えたのだつた。翌年は次男が春の末に、養家の金をさらつたなり、酌婦と一しよに驅落ちをした。その又秋には長男の妻が、月足らずの男子を產み落した。

長男は父の死んだ後、母と母屋に住まつてゐた。その跡の離れを借りたのは、土地の小學校の校長だつた。校長は福澤諭吉翁の實利の說を奉じてゐたから、庭にも果樹を植ゑるやうに、何時か長男を說き伏せてゐた。爾來庭には春になると、見慣れた松や柳の間に、桃だの杏だの李だの、雜色の花を盛るやうになつた。校長は時時長男と、新しい果樹園を步きながら、「この通り立派に花見も出來る。一擧兩得ですね。」と批評したりした。しかし築山や池や四阿は、それだけに又以前よりは、一層影が薄れ出した。云はば自然の荒廢の外に、人工の荒

庭を賑はつたのだつた。

その秋は又裏の山に、近年にない山火事があつた。それ以來池に落ちてゐた瀧は、ぱつたり水が絶えてしまつた、と思ふと雪の降る頃から、今度は當主が煩ひ出した。醫者の見立てでは昔の癆痎、今の肺病とか云ふ事だつた。彼は寢たり起きたりしながら、だんだん癇ばかり昂らせて行つた。現に翌年の正月には、年始に來た三男と激論の末、手炙りを投げつけた事さへあつた。三男はその時歸つたぎり、兄の死に目にも會はずにしまつた。當主はそれから一年餘り後、夜伽の妻に守られながら、蚊帳の中に息をひきとつた。「蛙が鳴いてゐるな。井月はどうしつら?」——これが最期の言葉だつた。が、もう井月はとうの昔、この邊の風景にも倦きたのか、さつぱり乞食にも來なくなつてゐた。

三男は當主の一周忌をすますと、主人の末娘と結婚した。さうして離れを借りてゐた小學校長の轉任を幸ひ、新妻と其處へ移つて來た。離れには黑塗の簞笥が來たり、紅白の綿が飾られたりした。しかし母家ではその間に、當主の妻が煩ひ出した。病名は夫と同じだつた。父に別れた一粒種の子供——廉一も母が血を吐いてからは、毎晩祖母と寢かせられた。祖母は床へはひる前に、必、頭に手拭をかぶつた。それでも頭瘡の臭氣をたよりに、夜更には鼠が近寄つて來た。勿論手拭を忘れでもすれば、鼠に頭を嚙まれる事もあつた。同じ年の暮に當主の妻は油火の消えるやうに死んで行つた。その又野邊送りの翌日には、築山の陰の棕櫚が、大雪の爲につぶされてしまつた。

もう一度春がめぐつて來た時、庭は唯濁つた池のほとりに、洗心亭の茅屋根を殘した、雜木原の木の芽に變つたのである。

中

或雪曇りの日の暮方、駈落ちをしてから十年目に、次男は父の家へ歸つて來た。父の家——と云つてもそれは事實上、三男の家と同樣だつた。三男は格別嫌な顏もせず、と云つて又格別喜びもせず、云はば何事もなかつたやうに、道樂者の兄を迎へ入れた。

爾來次男は母家の佛間に、惡疾のある體を橫たへたなり、ぢつと爐を守つてゐた。佛間には大きい佛壇に、父や兄の位牌が並んでゐた。彼はその位牌の見えないやうに、佛壇の障子をしめ切つて置いた。まして母や弟夫婦とは、三度の食事を共にする外は、殆、顏も合せなかつた。唯、みなし兒の廉一だけは、時々佛間へ、[illegible]に行つた。彼は廉一の石盤に、山や船を描いてやつた。「向島花ざかり、お茶屋の姐さんちよいとお出で。」——どうかすると、そんな中の[illegible]が、覺束ない[illegible]た。

その内に又春になつた。庭には[illegible]木の中に、乏しい桃や杏が花を[illegible]光りをさせた池にも、洗心亭の[illegible]。しかし次男は不相變、たつた一人佛間に閉ぢこもつたぎり、晝でも大抵はうとうとしてゐた。すると或日彼の耳には、かすかな三味線の[illegible]傳はつて來た。と同時に唄の[illegible]聞え始めた。「この度[illegible]の戰ひに、松本身内の吉江樣、大砲固めにおはします。……」次男は横になつた儘、心もち首を擡げて見た。と、唄も三味線も、茶の間にゐる母に違ひなかつた。「その日の出で立ち花やかに、勇み進みし働きは、天つ晴勇士と見えにける。……」母は孫にでも聞かせてゐるのか、大津繪の[illegible]唄を唄ひ續けた。しかしそれは傳法肌の隱居か、何處かの花魁に習つたと云ふ、二三十年以前の流行唄だつた。「敵の大玉身に受けて、是非もなや、惜しき命を豐橋に、草葉の露と消えぬとも、末世末代

名はれる　次男は無精髭の伸びた顔に、何時か長い煩い欲を輝かせてゐた。

それから二三日たつた後、三男は苔の多い築山の陰に、土を掘つてゐる兄を発見した。次男は息を切らせながら、不自由さうに鍬を揮つてゐた。その姿は何処か滑稽な中に、真剣な意気組みもあるものだつた。「あに様、何をしてゐるだ？」——三男は巻煙草を銜へたなり、後から兄へ声をかけた。「おれか？」——次男は眩しさうに弟を見上げた。「こけへ今せんげ（小流れ）を造らうと思ふ。」「せんげを造つて何しるだ？」「庭をもとのやうにしつと思ふだ。」——三男はにやにや笑つたぎり、何ともその先は尋ねなかつた。

次男は毎日鍬を持つては、熱心にせんげを造りにかかつた。が、病に弱つた彼には、それだけでも容易な仕事ではなかつた。彼は第一に疲れ易かつた。その上慣れない仕事だけに、豆を拵へたり、生爪を剥いだり、何かと不自由も起り勝ちだつた。彼は時時鍬を捨てると、死んだやうに其処へ横になつた。彼のまはりには何時になつても、庭を覆つた陽炎の中に、花や若葉が煙つてゐた。しかし静かな何分かの後、彼は又蹌踉と立ち上ると、執拗に鍬を使ひ出すのだつた。

しかし庭は幾日たつても、格別変化を示さなかつた。池には不相変草が茂り、植込みにも雑木が枝を張つてゐた。殊に果樹の花の散つた後は、前よりも荒れたかと思ふ位だつた。のみならず一家の老若も、次男の仕事には同情がなかつた。山気に富んだ三男は、米相場や蚕に没頭してゐた。三男の妻は次男の病に、女らしい嫌悪を感じてゐた。母も、——母は彼の体の為に、土いぢりの過ぎるのを惧れてゐた。次男はそれでも剛情に、人間と自然とへ背を向けながら、少しづつ庭を造り変へて行つた。

その内に或雨上りの朝、彼は庭へ出かけて見ると、蕗の垂れかかつたせんげの縁に、石を並べてゐる廉一を見つけた。「叔父さん。」——廉一は嬉しさうに彼を見上げた。「おれにも今日から手伝はせておくりや。」「うん、手伝つてくりや。」次男もこの時は久しぶりに、晴れ晴れした微笑を浮べてゐた。それ以来廉一は、外へも出ずにせつせと叔父の手伝ひをし出した。——次男は又甥を慰める為に、木かげに息を入れる時には、海とか東京とか鉄道とか、廉一の知らない話をして聞かせた。廉一は青梅を噛りながら、まるで催眠術にでもかかつたやうに、ぢつとその話に聞き入つてゐた。

その年の梅雨は空梅雨だつた。彼等、——年とつた病人と童子とは、烈しい日光や草いきれにもめげず、池を掘つたり木を伐つたり、だんだん仕事を拡げて行つた。が、外界の障碍には、どうにかかうにか打ち克つて行つても、内面の障碍だけは仕方がなかつた。次男は殆幻のやうに、昔の庭を見る事が出来た。しかし庭木の配りとか、或は径のつけ方とか、細かい部分の記憶になると、はつきりした事はわからなかつた。彼は時時仕事の最中、突然鍬を杖にしたまま、ぼんやりあたりを見廻す事があつた。「何しただい？」——廉一は必ず叔父の顔へ、不安らしい目付きを向けるのだつた。「此処はもとどうなつてゐつらなあ？」——汗になつた叔父はうろうろしながら、何時も独り語を洩すのだつた。「この楓は此処にはなかつつらと思ふがなあ。」廉一は唯泥まみれの手に、蟻でも殺すより外はなかつた。

内面の障碍はそればかりではなかつた。次第に夏も深まつて来ると、次男は絶え間ない過労の為か、頭も何時か混乱して来た。一度掘つた池を埋めたり、松を抜いた跡へ松を植ゑたり、——さう云ふ事も度度あつた。殊に廉一を怒らせたのは、池の杭を造る為に、水際の柳を伐つた事だつ

た。」この[illegible]の間抜けたばつかだに。」——廉一は叔父を睨みつけたやうだつたがなあ、おれには何だかわからなくなつてしまつた。」——叔父は[illegible]な目をしながら、目の前の池を見つめてゐる。……

それでも秋が來た時には、草や木の茂かつた中から、朧げに庭が浮き上つて來た。勿論昔に比べれば、[illegible]も見えなかつたし、瀧の水も落ちてはゐなかつた。いや、名高い庭師の造つた、優美な昔の趣は、殆、何處にも見えなかつた。しかし「庭」は其處にあつた。池はもう一度澄んだ水に、圓い築山を映してゐた。松ももう一度洗心亭の前に、悠悠と枝をさしのべてゐた。が、庭が出來ると同時に、次男は床につき切りになつた。熱も毎日下らなければ、體の節節も痛むのだつた。「あんまり無理ばつかしるせゐぢや。」——枕もとに坐つた母は、何度も同じ愚痴を繰り返した。しかし次男は幸福だつた。庭には勿論何箇所でも、直したい所が殘つてゐた。が、それは仕方がなかつた。兎に角骨を折つた甲斐だけはある。其處に彼は滿足してゐた。十年の苦勞は諦めを教へ、諦めは彼を救つたのだつた。

その秋の末、次男は誰も氣づかない内に何時か息を引きとつてゐた。それを見つけたのは廉一だつた。彼は大聲を擧げながら、縁續きの離れへ走つて行つた。一家は直に死人のまはりへ、驚いた顔を集めてゐた。「見ましよ。兄様は笑つてゐるやうだに。」——三男は母をふり返つた。「おや、今日は佛樣の障子が明いてゐる。」——三男の妻は死人を見ずに、大きい佛壇を氣にしてゐた。

次男の野邊送りをすませた後、廉一はひとり洗心亭に、坐つてゐる事が多くなつた。何時も途方に暮れたやうに、晩秋の水や木を見ながら、……

下

昔はこの宿の本陣だつた、中村といふ舊家の庭である。それが舊に復した後、まだ十年とたたない内に、今度は家ぐるみ破壞された。破壞された跡には停車場が建ち、停車場の前には小料理屋が出來た。

中村の本家はもうその頃、誰も殘つてゐなかつた。母は勿論とうの昔、亡い人の數にはひつてゐた。三男も事業に失敗した揚句、大阪へ行つたとかいふ事だつた。

汽車は毎日停車場へ來ては、又停車場を去つて行つた。停車場には若い驛長が一人、大きい机に向つてゐた。彼は閑散な事務の合ひ間に、青い山山を眺めやつたり、土地者の驛員と話したりした。しかしその話の中にも、中村家の噂は上らなかつた。況や彼等の立つてゐる所に、築山や四阿のあつた事は、誰一人考へもしないのだつた。

が、その間に廉一は、東京赤坂の洋畫研究所に、油畫の畫架に向つてゐた。天窓の光、油繪の具の匂、桃割に結つたモデルの娘、——研究所の雰圍氣は故郷の家庭と、何の連絡もないものだつた。しかしブラッシュを動かしてゐると、時時彼の心に浮ぶ、寂しい老人の顔があつた。その顔は又微笑しながら、不斷の製作に疲れた彼へ、きつとかう聲をかけるのだつた。「お前はまた子供の時に、おれの仕事を手傳つてくれた。今度はおれに手傳はせてくれ。」……

廉一は、今でも貧しい中に、毎日油畫を描き續けてゐる。三男の噂は誰も聞かない。

藪の中

検非違使に問はれたる 木樵りの物語

さやうでございます。あの死骸を見つけたのは、わたしに違ひございません。わたしは今朝何時もの通り、裏山の杉を伐りに参りました。すると山陰の藪の中に、あの死骸があつたのでございます。あつた所でございますか？ それは山科の驛路からは、四五町程隔たつて居りませう。竹の中に痩せ杉の交つた、人氣のない所でございます。

死骸は縹の水干に、都風のさび烏帽子をかぶつた儘、仰向けに倒れて居りました。何しろ一刀とは申すものの、胸もとの突き傷でございますから、死骸のまはりの竹の落葉は、蘇芳に滲みたやうでございます。いえ、血はもう流れては居りません。傷口も乾いて居つたやうでございます。おまけに其處には、馬蝿が一匹、わたしの足音も聞えないやうに、べつたり食ひついて居りましたつけ。

太刀か何かは見えなかつたか？ いえ、何もございません。唯その側の杉の根がたに、繩が一筋落ちて居りました。それから、——さうさう、繩の外にも櫛が一つございました。死骸のまはりにあつたものは、この二つぎりでございます。が、草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、きつとあの男は殺される前に、餘程手痛い働きでも致したのに違ひございません。何、馬はゐなかつたか？ あそこは一體馬なぞには、はひれない所でございます。何しろ馬の通ふ路とは、藪一つ隔たつて居りますから。

検非違使に問はれたる 旅法師の物語

あの死骸の男には、確かに昨日遇つて居ります。昨日の、——さあ、午頃でございませう。場所は關山から山科へ、参らうと云ふ途中でございます。あの男は馬に乗つた女と一しよに、關山の方へ歩いて参りました。女は牟子を垂れて居りましたから、顔はわたしにはわかりません。見えたのは唯萩重ねらしい、衣の色ばかりでございます。馬は月毛の、——確か法師髪の馬のやうでございました。丈でございますか？ 丈は四寸もございましたか？ ——何しろ沙門の事でございますから、その邊ははつきり存じません。男は、——いえ、太刀も帯びて居れば、弓矢も携へて居りました。殊に黒い塗り箙へ、二十あまり征矢をさしたのは、唯今でもはつきり覺えて居ります。

あの男がかやうにならうとは、夢にも思はずに居りましたが、まことに人間の命なぞは、如露亦如電に違ひございません。やれやれ、何とも申しやうのない、氣の毒な事を致しました。

検非違使に問はれたる 放免の物語

わたしが搦め取つた男でございますか？ これは確かに多襄丸と云ふ、名高い盗人でございます。尤もわたしが搦め取つた時には、馬から落ちたのでございませう。粟田口の石橋の上

に、うんうん呻つて居りました。時刻でございますか？　時刻は昨夜の初更頃でございます。何時ぞやわたしが捉へ損じた時にも、やはりこの紺の水干に、打出しの太刀を佩いて居りました。唯今はその外にも御覧の通り、弓矢の類さへ携へて居ります。さやうでございますか？　あの死骸の男が持つてゐたのも、——では人殺しを働いたのは、この多襄丸に違ひございません。革を巻いた弓、黒塗りの箙、鷹の羽の征矢が十七本、——これは皆、あの男が持つてゐたものでございませう。はい。馬も仰有る通り、法師髪の月毛でございます。その畜生に落されるとは、何かの因縁に違ひございません。それは石橋の少し先に、長い端綱を引いた儘、路ばたの青芒を食つて居りました

　この多襄丸と云ふやつは、洛中に徘徊する盗人の中でも、女好きのやつでございます。昨年の秋鳥部寺の賓頭盧の後の山に、物詣でに来たらしい女房が一人、女の童と一しよに殺されてゐたのは、こいつの仕業だとか申して居りました。その月毛に乗つてゐた女も、こいつがあの男を殺したとなれば、何処へどうしたかわかりません。差出がましうございますが、それも御詮議下さいまし。

検非違使に問はれたる媼の物語

　はい、あの死骸は手前の娘が、片附いた男でございます。が、都のものではございません。若狭の国府の侍でございます。名は金沢の武弘、年は二十六歳でございました。いえ、優しい気立てでございますから、遺恨なぞ受ける筈はございません。

　娘でございますか？　娘の名は真砂、年は十九歳でございます。これは男にも劣らぬ位、勝気の女でございますが、まだ一度も武弘の外には、男を持つた事はございません。顔は色の浅黒い、左の眼尻に黒子のある、小さい瓜実顔でございます。

　武弘は昨日娘と一しよに、若狭へ立つたのでございますが、こんな事になりますとは、何と云ふ因果でございませう。しかし娘はどうなりましたやら、婿の事はあきらめましても、これだけは心配でなりません。どうかこの姥が一生のお願ひでございますから、たとひ草木を分けましても、娘の行方をお尋ね下さいまし。何に致せ憎いのは、その多襄丸とか何とか申す、盗人のやつでございます。婿ばかりか、娘までも、……（跡は泣き入りて言葉なし。）

多襄丸の白状

　あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。では何処へ行つたのか？　それはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問にかけられても、知らない事は申されますまい。その上わたしもかうなれば、卑怯な隠し立てはしないつもりです。

　わたしは昨日の午少し過ぎ、あの夫婦に出会ひました。その時風の吹いた拍子に、牟子の垂絹が上つたものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、——見えたと思ふ瞬間には、もう見えなくなつたのですが、一つにはその為もあつたのでせう、わたしにはあの女の顔が、女菩薩のやうに見えたのです。わたしはその咄嗟の間に、たとひ男は殺しても、女は奪はうと決心しました。

　何、男を殺すなぞは、あなた方の思つてゐるやうに、大した事ではありません。どうせ女を奪ふとなれば、必、男は殺されるのです。唯わたしは殺す時に、腰の太刀を使ふのですが、

あなた方は太刀を使はない、唯權力で殺す、金で殺す。どうかするとお爲ごかしの言葉だけでも殺すでせう。成程血は流れない、男は立派に生きてゐる、——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考へて見れば、あなた方が惡いか、わたしが惡いか、どちらが惡いかわかりません。（皮肉な微笑）

しかし男を殺さずとも、女を奪ふ事が出來れば、別に不足はない譯です。いや、その時の心もちでは、出來るだけ男を殺さずに、女を奪はうと決心したのです。が、あの山科の驛路では、とてもそんな事は出來ません。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫をしました。

これも造作はありません。わたしはあの夫婦と途づれになると、向うの山には古塚がある、その古塚を發いて見たら、鏡や太刀が澤山出た、わたしは誰も知らないやうに、山の陰の藪の中へ、さう云ふ物を埋めてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に賣り渡したい、——と云ふ話をしたのです。男は何時かわたしの話に、だんだん心を動かし初めました。それから、——どうです、慾と云ふものは、恐しいではありませんか？ それから半時もたたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路へ馬を向けてゐたのです。

わたしは藪の前へ來ると、寶はこの中に埋めてある、見に來てくれと云ひました。男は慾に渇いてゐますから、異存のある筈はありません。が、女は馬も下りずに、待つてゐると云ふのです。又あの藪の茂つてゐるのを見ては、さう云ふのも無理はありますまい。わたしはこれも實を云へば、思ふ壺にはまつたのですから、女一人を殘した儘、男と藪の中へはひりました。

藪は少時の間は竹ばかりです。が、半町程行つた所に、やや開いた杉むらがある、——わたしの仕事を仕遂げるのには、これ程都合の好い場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、寶は杉の下に埋めてあると、尤もらしい譃をつきました。男はわたしにさう云はれると、もう痩せ杉が透いて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎らになると、何本も杉が並んでゐる、——わたしは其處へ來るが早いか、いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩いてゐるだけに、力は相當にあつたやうですが、不意を打たれてはたまりません。忽ち一本の杉の根がたへ、括りつけられてしまひました。繩ですか？ 繩は盜人の難有さに、何時塀を越えるかわかりませんから、ちやんと腰につけてゐたのです。勿論聲を出させない爲にも、竹の落葉を頰張らせれば、外に面倒はありません。

わたしは男を片附けてしまふと、今度は又女の所へ、男が急病を起したらしいから、見に來てくれと云ひに行きました。これも圖星に當つたのは、申し上げるまでもありますまい。女は市女笠を脱いだ儘、わたしに手をとられながら、藪の奧へはひつて來ました。所が其處へ來て見ると、男は杉の根に縛られてゐる、——女はそれを一目見るなり、何時の間に懷から出してゐたか、きらりと小刀を引き拔きました。わたしはまだ今までに、あの位氣性の烈しい女は、一人も見た事がありません。もしその時でも油斷してゐたらば、一突きに脾腹を突かれたでせう。いや、それは身を躱した所が、無二無三に斬り立てられる内には、どんな怪我も仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多襄丸ですから、どうにかかうにか太刀も拔かずに、とうとう小刀を打ち落しました。いくら氣の勝つた女でも、得物がなければ仕方がありません。わたしはとうとう思ひ通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出來たのです。

男の命は取らずとも。——さうです。わたし

はその上にも、男を殺すつもりはなかつたのです。所が泣き伏した女を後に、藪の外へ逃げようとすると、女は突然わたしの腕へ、氣違ひのやうに縋りつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらいと云ふのです。いや、その内どちらにしろ、生き殘つた男につれ添ひたい、――さう喘ぎ喘ぎ云ふのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい氣になりました。（陰鬱なる興奮）

こんな事を申し上げると、きつとわたしはあなた方より、殘酷な人間に見えるでせう。しかしそれはあなた方が、あの女の顏を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるやうな瞳を見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとひ神鳴に打ち殺されても、この女を妻にしたいと思ひました。妻にしたい、――わたしの念頭にあつたのは、唯かう云ふ一事だけです。これはあなた方の思ふやうに、卑しい色慾ではありません。もしその時色慾の外に、何も望みがなかつたとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きつと逃げてしまつたでせう。男もさうすればわたしの太刀に、血を塗る事にはならなかつたのです。が、薄暗い藪の中に、ぢつと女の顏を見た刹那、わたしは男を殺さない限り、此處は去るまいと覺悟しました。

しかし男を殺すにしても、卑怯な殺し方はしたくありません。わたしは男の繩を解いた上、太刀打ちをしろと云ひました。（杉の根がたに落ちてゐたのは、その時捨て忘れた繩なのです。）男は血相を變へた儘、太い太刀を引き抜きました。と思ふと口も利かずに、憤然とわたしへ飛びかかりました。――その太刀打ちがどうなつたかは、申し上げるまでもありますまい。わたしの太刀は二十三合目に、相手の胸を貫きました。二十三合目に、――どうかそれを忘れずに下さい。わたしは今でもこの事だけは、感心だと思つてゐるのです。わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけですから。（快活なる微笑）

わたしは男が倒れると同時に、血に染まつた刀を下げたなり、女の方を振り返りました。すると、――どうです、あの女は何處にもゐないではありませんか？ わたしは女がどちらへ逃げたか、杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡も殘つてゐません。又耳を澄ませて見ても、聞えるのは唯男の喉に、斷末魔の音がするだけです。

事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早いか、人の助けでも呼ぶ爲に、藪をくぐつて逃げたのかも知れない。――わたしはさう考へると、今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を奪つたなり、すぐに又もとの山路へ出ました。其處にはまだ女の馬が、靜かに草を食つてゐます。その後の事は申し上げるだけ、無用の口數に過ぎますまい。唯、都へはひる前に、太刀だけはもう手放してゐました。――わたしの白狀はこれだけです。どうせ一度は樗の梢に、懸ける首と思つてゐますから、どうか極刑に遇はせて下さい。（昂然たる態度）

淸水寺に來れる女の懺悔

――その紺の水干を着た男は、わたしを手ごめにしてしまふと、縛られた夫を眺めながら、嘲るやうに笑ひました。夫はどんなに無念だつたでせう。が、いくら身悶えをしても、體中にかかつた繩目は、一層ひしひしと食ひ入るだけです。わたしは思はず夫の側へ、轉ぶやうに走り寄りました。いえ、走り寄らうとしたので

す。しかし男は咄嗟の間に、わたしを其處へ蹴倒しました。丁度その途端です。わたしは夫の眼の中に、何とも云ひやうのない輝きが、宿つてゐるのを覺りました。何とも云ひやうのない、――わたしはあの眼を思ひ出すと、今でも身震ひが出ずにはゐられません。口さへ一言も利けない夫は、その刹那の眼の中に、一切の心を傳へたのです。しかも其處に閃いてゐたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、――唯わたしを蔑んだ、冷たい光だつたではありませんか？　わたしは男に蹴られたよりも、その眼の色に打たれたやうに、我知らず何か叫んだぎり、とうとう氣を失つてしまひました。

その内にやつと氣がついて見ると、あの紺の水干の男は、もう何處かへ行つてゐました。跡には唯杉の根がたに、夫が縛られてゐるだけです。わたしは竹の落葉の上に、やつと體を起したなり、夫の顏を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと變りません。やはり冷たい蔑みの底に、憎しみの色を見せてゐるのです。恥しさ、悲しさ、腹立たしさ、――その時のわたしの心の中は、何と云へば好いかわかりません。わたしはよろよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りました。

「あなた。もうかうなつた上は、あなたと御一しよには居られません。わたしは一思ひに死ぬ覺悟です。しかし、――しかしあなたもお死になすつて下さい。あなたはわたしの恥を御覽になりました。わたしはこの儘あなた一人、お殘し申す譯には參りません。」

わたしは一生懸命に、これだけの事を云ひました。それでも夫は忌はしさうに、わたしを見つめてゐるばかりなのです。わたしは裂けさうな胸を抑へながら、夫の太刀を探しました。が、あの盜人に奪はれたのでせう、太刀は勿論弓矢さへも、藪の中には見當りません。しかし幸ひ小刀だけは、わたしの足もとに落ちてゐるのです。わたしはその小刀を振り上げると、もう一度夫にかう云ひました。

「ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します。」

夫はこの言葉を聞いた時、やつと唇を動かしました。勿論口には笹の落葉が、一ぱいにつまつてゐますから、聲は少しも聞えません。が、わたしはそれを見ると、忽ちその言葉を覺りました。夫はわたしを蔑んだ儘、「殺せ。」と一言云つたのです。わたしは殆、夢うつつの内に、夫の縹の水干の胸へ、ずぶりと小刀を刺し通しました。

わたしは又この時も、氣を失つてしまつたのでせう。やつとあたりを見まはした時には、夫はもう縛られた儘、とうに息が絶えてゐました。その蒼ざめた顏の上には、竹に交つた杉むらの空から、西日が一すぢ落ちてゐるのです。わたしは泣き聲を呑みながら、死骸の縄を解き捨てました。さうして、――さうしてわたしがどうなつたか？　それだけはもうわたしには、申し上げる力もありません。兎に角わたしはどうしても、死に切る力がなかつたのです。小刀を喉に突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにかうしてゐる限り、これも自慢にはなりますまい。（寂しき微笑）わたしのやうに腑甲斐ないものは、大慈大悲の觀世音菩薩も、お見放しなすつたものかも知れません。しかし夫を殺したわたしは、盜人の手ごめに遇つたわたしは、一體どうすれば好いのでせう？　一體わたしは、――わたしは、――（突然烈しき歔欷）

巫女の口を借りたる死靈の物語

――盜人は妻を手ごめにすると、其處へ腰を

下した儘、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利けない。体も杉の根に縛られてゐる。が、おれはその間に、何度も妻へ目くばせをした。この男の云ふ事を真に受けるな、何を云つても嘘と思へ、――おれはそんな意味を傳へたいと思つた。しかし妻は悄然と笹の落葉に坐つたなり、じつと膝へ目をやつてゐる。それがどうも盗人の言葉に、聞き入つてゐるやうに見えるではないか？ おれは妬しさに身悶えをした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めてゐる。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合ふまい。そんな夫に連れ添つてゐるより、自分の妻になる気はないか？ 自分はいとしいと思へばこそ、大それた真似も働いたのだ。――盗人はとうとう大膽にも、さう云ふ話さへ持ち出した。

盗人にかう云はれると、妻はうつとりと顔を擡げた。おれはまだあの時程、美しい妻を見た事がない。しかしその美しい妻は、現在縛られたおれを前に、何と盗人に返事をしたか？ おれは中有に迷つてゐても、妻の返事を思ひ出す毎に、嗔恚に燃えなかつたためしはない。妻は確かにかう云つた、――「では何處へでもつれて行つて下さい。」（長き沈黙）

妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの闇の中に、今程おれも苦しみはしまい。しかし妻は夢のやうに、盗人に手をとられながら、藪の外へ行かうとすると、忽ち顔色を失つたなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きてゐては、あなたと一しよにはゐられません。」――妻は氣が狂つたやうに、何度もかう叫び立てた。「あの人を殺して下さい。」――この言葉は嵐のやうに、今でも遠い闇の底へ、まつ逆様におれを吹き落さうとする。一度でもこの位憎むべき言葉が、人間の口を出た事があらうか？ 一度でもこの位呪はしい言葉が、人間の耳に觸れた事があらうか？ 一度でもこの位、――（突然迸る如き嘲笑）その言葉を聞いた時は、盗人さへ色を失つてしまつた。「あの人を殺して下さい。」――妻はさう叫びながら、盗人の腕に縋つてゐる。盗人はぢつと妻を見た儘、殺すとも殺さぬとも返事をしない。――と思ふか思はない内に、妻は竹の落葉の上へ、唯、一蹴りに蹴倒された、（再、迸る如き嘲笑）盗人は静かに両腕を組むと、おれの姿へ眼をやつた。「あの女はどうするつもりだ？ 殺すか、それとも助けてやるか？ 返事は唯頷けば好い。殺すか？」――おれはこの言葉だけでも、盗人の罪は赦してやりたい。（再、長き沈黙）

妻はおれがためらふ内に、何か一声叫ぶが早いか、忽ち藪の奥へ走り出した。盗人も咄嗟に飛びかかつたが、これは袖さへ捉へなかつたらしい。おれは唯、幻のやうに、さう云ふ景色を眺めてゐた。

盗人は妻が逃げ去つた後、太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの縄を切つた。「今度はおれの身の上だ。」――おれは盗人が藪の外へ、姿を隠してしまふ時、かう呟いたのを覚えてゐる。その跡は何處も静かだつた。いや、まだ誰かの泣く声がする。おれは縄を解きながら、ぢつと耳を澄ませて見た。が、その声も氣がついて見れば、おれ自身の泣いてゐる声だつたではないか？（三度、長き沈黙）

おれはやつと杉の根から、疲れ果てた体を起した。おれの前には妻が落した、小刀が一つ光つてゐる。おれはそれを手にとると、一突きにおれの胸へ刺した。何か腥い塊がおれの口へこみ上げて来る。が、苦しみは少しもない。唯胸が冷たくなると、一層あたりがしんとしてしまつた。ああ、何と云ふ静かさだらう。この山陰の藪の空には、小鳥一羽囀りに来ない。唯

杉や竹の杪に、寂しい日影が漂つてゐる。日影が、——それも次第に薄れて来る。もう杉や竹も見えない。おれは其処に倒れた儘、深い静かさに包まれてゐる。

その時誰か忍び足に、おれの側へ来たものがある。おれはそちらを見ようとした。が、おれのまはりには、何時か薄闇が立ちこめてゐる。誰か、——その誰かは見えない手に、そつと胸の小刀を抜いた。同時におれの口の中には、もう一度血潮が溢れて来る。おれはそれぎり永久に、中有の闇へ沈んでしまつた。……

(大正十年十二月作)

鼻

クレオパトラの鼻が曲つてゐたとすれば、世界の歷史はその為に一変してゐたかも知れないとは名高いパスカルの警句である。しかし恋人と云ふものは滅多に實相を見るものではない。いや、我我の自己欺瞞は一たび恋愛に陥つたが最後、最も完全に行はれるのである。

アントニイもさう云ふ例に洩れず、クレオパトラの鼻が曲つてゐたとすれば、努めてそれを見まいとしたであらう。又見ずにはゐられない場合もその短所を補ふべき何か他の長所を探したであらう。何か他の長所と云へば、天下に我我の恋人位、無数の長所を具へた女性は一人もゐないのに相違ない。アントニイもきつと我我同様、クレオパトラの眼とか唇とかに、あり余る償ひを見出したであらう。その上又例の「彼女の心」！ 實際我我の愛する女性は古往今来飽き飽きする程、素ばらしい心の持ち主である。のみならず彼女の服装とか、或は彼女の財産とか、或は又彼女の社会的地位とか、——それらも長所にならないことはない。更に甚しい場合を挙げれば、以前或名士に愛されたと云ふ事實乃至風評さへ、長所の一つに数へられるのである。しかもあのクレオパトラは豪奢と神秘とに充ち満ちたエジプトの最後の女王ではないか？ 香の煙の立ち昇る中に、冠の珠玉でも光らせながら、蓮の花か何か弄んでゐれば、多少の鼻の曲りなどは何人の眼にも触れなかつたであらう。況やアントニイの眼をやである。

かう云ふ我我の自己欺瞞はひとり恋愛に限つたことではない。我我は多少の相違さへ除けば、大抵我我の欲するままに、いろいろ實相を塗り変へてゐる。たとへば歯科医の看板にしても、それが我我の眼にはひるのは看板の存在そのものよりも、看板のあることを欲する心、——引いては我我の歯痛ではないか？ 勿論我我の歯痛などは世界の歷史には没交渉であらう。しかしかう云ふ自己欺瞞は民心を知りたがる政治家にも、敵状を知りたがる軍人にも、或は又財況を知りたがる實業家にも同じやうにきつと起るのである。わたしはこれを修正すべき理智の存在を否みはしない。同時に又百般の人事を統べる「偶然」の存在も認めるものである。が、あらゆる熱情は理性の存在を忘れ易い。「偶然」は云はば神意である。すると我我の自己欺瞞は世界の歷史を左右すべき、最も永久な力かも知れない。

つまり二千余年の歷史は眇たる一クレオパトラの鼻の如何に依つたのではない。寧ろ地上に遍満した我我の愚昧に依つたのである。哂ふべき、——しかし荘厳な我我の愚昧に依つたのである。

(「侏儒の言葉」より)

母

一

部屋の隅に据ゑた姿見には、西洋風に壁を塗つた、しかも日本風の襖がある、――上海特有の旅館の二階が、一部分はつきり映つてゐる。まづつきあたりに空色の壁、それから眞新しい何疊かの疊、最後にこちらへ後を見せた、西洋髪の女が一人、――それが皆冷やかな光の中に切ない程はつきり映つてゐる。女は其處にさつきから、縫物か何かしてゐるらしい。

尤も後は向いたと云ふ條、地味な銘仙の羽織の肩には、崩れかかつた前髪のはづれに、蒼白い横顔が少し見える。勿論肉の薄い耳に、ほんのり光が透いたのも見える。やや長めな揉み上げの毛が、かすかに耳の根をぼかしたのも見える。

この姿見のある部屋には、隣室の赤兒の啼き聲の外に、何一つ沈默を破るものはない。未に降り止まない雨の音さへ、此處では一層その沈默に、單調な氣もちを添へるだけである。

「あなた。」

さう云ふ何分かが過ぎ去つた後、女は仕事を續けながら、突然、しかし覺束なささうに、かう誰かへ聲をかけた。

誰か、――部屋の中には女の外にも、丹前を羽織つた男が一人、ずつと離れた疊の上に、英字新聞をひろげた儘、長長と腹這ひになつてゐる。が、その聲が聞えないのか、男は手近の灰皿へ、卷煙草の灰を落したきり、新聞から眼さへ擧げようとしない。

「あなた。」

女はもう一度聲をかけた。その癖女自身の眼もぢつと針の上に止まつてゐる。

「何だい。」

男は幾分うるささうに、丸丸と肥つた、口髭の短い、活動家らしい頭を擡げた。

「この部屋ね、――この部屋は變へちやいけなくつて？」

「部屋を變へる？ だつて此處へはやつと昨夜、引つ越して來たばかりぢやないか？」

男の顏はけげんさうだつた。

「引つ越して來たばかりでも。――前の部屋ならば明いてゐるでせう？」

男は彼是二週間ばかり、彼等が窮屈な思ひをして來た、日當りの惡い三階の部屋が、一瞬間眼の前に見えるやうな氣がした。――塗りの剝げた窓側の壁には、色の褪つた疊の上に更紗の窓掛けが垂れ下つてゐる。その窓には何時水をやつたか、花の乏しい天竺葵が、薄い埃をかぶつてゐる。おまけに窓の外を見ると、始終ごみごみした横町に、麥藁帽をかぶつた支那の車夫が、所在なささうにうろついてゐる。……

「だがお前はあの部屋にゐるのは、嫌だと云つてゐたぢやないか？」

「ええ、それでも此處へ來て見たら、急に又この部屋が嫌になつたんですもの。」

女は針の手をやめると、もの憂さうに顏を擧げて見せた。眉の迫つた、眼の切れの長い、感じの鋭さうな顏だちである。が、眼のまはりの暈を見ても、何か苦勞を堪へてゐる事は多少想像が出來ないでもない。さう云へば病的な氣がする位、米噛みにも靜脈が浮き出してゐる。

「ね、好いでせう。……いけなくつて？」

「しかし前の部屋よりは、廣くもあるし居心も

好いし、不足を云ふ理由はないんだから、――それとも何か嫌な事があるのかい？」

「何って事はないんですけれど。……」

女はちよいとためらつたものの、それ以上立ち入つては答へなかつた。が、もう一度念を押すやうに、同じ言葉を繰り返した。

「いけなくつて、どうしても？」

今度は男が新聞の上へ煙草の煙を吹きかけたぎり、好いとも悪いとも答へなかつた。

部屋の中は又ひつそりになつた。唯外では不相變、休みのない雨の音がしてゐる。

「春雨やか、――」

男は少時たつた後、ごろりと仰向きに寝轉ぶと、獨り言のやうにから云つた。

「蕪湖住みをするやうになつたら、發句でも一つ始めるかな。」

女は何とも返事をせずに、縫物の手を動かしてゐる。

「蕪湖もそんなに悪い所ぢやないぜ。第一社宅は大きいし、庭も相當に廣いしするから、草花なぞ作るには持つて來いだ。何でも元は雍家花園とか云つてね、――」

男は突然口を噤んだ。何時か森とした部屋の中には、かすかに人の泣くけはひがしてゐる。

「おい。」

泣き聲は急に聞えなくなつた。と思ふとすぐに又、途切れ途切れに續き出した。

「おい。敏子。」

半ば體を起した男は、疊に片肘靠せた儘、當惑らしい眼つきを見せた。

「お前は己と約束したぢやないか？　もう愚癡はこぼすまい。もう涙は見せない事にしよう。もう、――」

男はちよいと瞼を擧げた。

「それとも何かあの事以外に悲しい事でもあるのかい？　たとへば日本へ歸りたいとか支那でも田舎へは行きたくないとか、――」

「いいえ。――いいえ。そんな事ぢやなくつてよ。」

敏子は涙を落し落し、意外な程烈しい打消し方をした。

「私はあなたのいらつしやる所なら、何處へでも行く氣でゐるんです。ですけれども、――」

敏子は伏目になつたなり、溢れて來る涙を抑へようとするのか、ぢつと薄い下唇を嚙んだ。見れば蒼白い頬の底にも、眼に見えない炎のやうな、切迫した何物かが燃え立つてゐる。震へる肩、濡れた睫毛、――男はそれらを見守りながら、現在の氣もちとは没交渉に、一瞬間妻の美しさを感じた。

「ですけれども、――この部屋は嫌なんですもの。」

「だからさ、だからさつきもさう云つたぢやないか？　何故この部屋がそんなに嫌だか、それさへはつきり云つてくれれば、――」

男は此處まで云ひかけると、敏子の眼がぢつと彼の顔へ、注がれてゐるのに氣がついた。その眼には涙の漂つた底に、殆、敵意にも紛ひ兼ねない、悲しさうな光が閃いてゐる。何故この部屋が嫌になつたか？――それは獨り男自身の疑問だつたばかりではない、同時に又敏子が無言の内に、男へ突きつけた反問である。男は敏子と眼を合はせながら、二の句を次ぐのに躊躇した。

しかし言葉が途切れたのは、ほんの數秒の間である。男の顔には見る見る内に、了解の色が漲つて來た。

「あれか？」

男は感動を蔽ふやうに、妙に素つ氣のない聲を出した。

「あれは己も氣になつてゐたんだ。」

敏子は男にから云はれると、ぼろぼろ膝の上

へ涙を落した。

窓の外には何時の間にか、日の莖が雨を洩らせてゐる。その雨の音を刎ねのけるやうに、空色の窓の向うでは、今も赤兒が泣き續けてゐる。……

二

二階の出窓には鮮かに、朝日の光が當つてゐる。その向うには三階建の、赤煉瓦にかすかな苔の生えた、逆光線の家が聳えてゐる。薄暗いこちらの廊下にゐると、出窓はこの家を背景にした、大きい一枚の畫のやうに見える。頑丈な樫の窓枠が、丁度額縁を嵌めたやうに見えるから。その畫のまん中には一人の女が、こちらへ横顔を向けながら、小さな靴足袋を編んでゐる。

女は敏子よりも若いらしい。雨に洗はれた朝日の光は、その肉附きの豐かな肩へ、――派手な大島の羽織の肩へ、はつきり大幅に流れてゐる。それがやや俯向きになつた、血色の好い頬に反射してゐる。心もち厚い脣の上の、かすかな生ぶ毛にも反射してゐる。

午前十時と十一時との間、――旅館では今が一日中でも一番閑かな時刻である。商賣に來たのも、見物に來たのも、泊り客は大抵外へ出てしまふ。下宿してゐる勤め人たちも勿論午後までは歸つて來ない。その跡には唯長い廊下に、時時上草履を響かせる、女中の足音だけが殘つてゐる。

この時もそれが遠くから、だんだんこちらへ近づいて來ると、出窓に面した廊下には、四十恰好の女中が一人、紅茶の道具を運びながら、影繪のやうに通りかかつた。女中は何とも云はれなかつたら、女のゐる事も氣がつかずに、その儘通りすぎてしまつたかも知れない。が、女は女中の姿を見ると、心安さうに聲をかけた。

「お清さん。」

女中はちよいと會釋してから、出窓の方へ歩み寄つた。

「まあ、御精が出ますこと。――坊ちやんはどうなさいました？」

「うちの若樣？　若樣は今お休み中。」

女は編物を休めた儘、子供のやうに微笑した。

「時にね、お清さん。」

「何でございます？　眞面目さうに。」

女中も出窓の日の光に、前掛だけくつきり照らさせながら、淺黒い眼もとに微笑を見せた。

「隣の野村さん、――野村さんでせう、あの奥さんは？――」

「ええ、野村敏子さん。」

「敏子さん？　ぢや私と同じ名だわね。あの方はもう御立ちになつたの？」

「いいえ、まだ五六日は御滯在でございませう。それから何でも蕪湖とかへ、――」

「だつてさつき前を通つたら、御隣にはどなたもいらつしやらなかつたわよ。」

「ええ、昨晩急に又、三階へ御部屋が變りましたから、――」

「さう。」

女は何か考へるやうに、丸丸した顔を傾けて見せた。

「あの方でせう？　此處へ御出でになると、その日に御子さんをなくなしたのは？」

「ええ、御氣の毒でございますわね。すぐに病院へも御入れになつたんですけれど。」

「ぢや病院で御なくなりなすつたの？　道理で何にも知らなかつた。」

女は前髮を割つた額に、かすかな憂鬱の色を浮べた。が、すぐに又元の通り、快活な微笑を取り戻すと、惡戲さうな眼つきになつた。

「もうそれで御用ずみ。どうかあちらへいらしつて下さい。」

「まあ、隨分でございますね。」

女中は思はず笑ひ出した。

「そんな邪慳な事を仰有ると、蔦の家から電話がかかつて來ても、内證で檀那樣へ取次ぎますよ。」

「好いわよ　早くいらつしやいつてば。紅茶がさめてしまふぢやないの？」

女中が出窓にゐなくなると、女は又編物を取り上げながら、小聲に歌をうたひ出した。

午前十時と十一時との間、——旅館では今が一日中でも、一番靜かな時刻である。部屋毎の花瓶に素胡れた花は、この間に女中が取り捨ててしまふ。二階三階の眞鍮の手すりもこの間に下男が磨くらしい。さう云ふ沈默が擴がつた中に、唯往來のざわめきだけが、硝子戸を開け放した諸方の窓から、日の光と一しよにはひつて來る。

その内にふと女の膝から、毛糸の球が轉げ落ちた。球はとんと彈むが早いか、一筋の赤を引きずりながら、ころころ廊下へ出ようとする、——と思ふと誰か一人、丁度其處へ來かかつたのが、靜かにそれを拾ひ上げた。

「どうも難有うございました。」

女は籐椅子を離れながら、恥しさうに會釋をした。見れば球を拾つたのは、今し方女中と噂をした、痩せぎすな隣室の夫人である。

「いいえ。」

毛糸の球は細い指から、脂よりも白い括り指へ移つた。

「此處は暖かでございますね。」

敏子は出窓へ歩み出ると、眩しさうにやや眼を細めた。

「ええ、かうやつて居りましても、居睡りが出る位でございますわ。」

二人の母は佇んだ儘、幸福さうに微笑し合つた。

「まあ、御可愛いゝたあたですこと。」

敏子の聲はさりげなかつた。が、女はその言葉に、思はずそつと目を外らせた。

「二年ぶりに編針を持つて見ましたの。——あんまり暇なもんですから。」

「私なぞはいくら暇でも、怠けてばかり居りますわ。」

女は籐椅子へ編物を捨てると、仕方がなささうに微笑した。敏子の言葉は無心の内に、もう一度女を打つたのである。

「お宅の坊ちやんは、——坊ちやんでございましたわね？　何時御生れになりましたの？」

敏子は髮へ手をやりながら、ちらりと女の顏を眺めた。昨日は泣き聲を聞いてゐるのも堪へられない氣がした隣室の赤兒、——それが今では何物よりも、敏子の興味を動かすのである。しかもその興味を滿足させれば、反つて苦しみを新たにするのも、はつきりわかつてはゐるのである。これは小さな動物が、コブラの前では動けないやうに、敏子の心も何時の間にか、苦しみそのものの催眠作用に捉はれてしまつた結果であらうか？　それとも又手傷を負つた兵士が、わざわざ傷口を開いてまでも、一時の快を貪るやうに、いやが上にも苦しまねばならない、病的な心理の一例であらうか？

「この御正月でございました。」

女はかう答へてから、ちよいとためらふ氣色を見せた。しかしすぐ眼を擧げると、氣の毒さうにつけ加へた。

「御宅ではとんだ事でございましたねえ。」

敏子は沾んだ眼の中に、無理な微笑を漂はせた。

「ええ、肺炎になりましたものですから、——ほんたうに夢のやうでございました。」

「それも御出て匆匆にねえ。何と申し上げて好いかわかりませんわ。」

女の眼には何時の間にか、かすかに涙が光つ

てゐる。
「私なぞはそんな日にあつたら、まあ、どうするでございませう？」
「一時は隨分悲しうございましたけれども、――もうあきらめてしまひましたわ。」
二人の母は佇んだ儘、寂しさうに朝日の光を眺めた。
「こちらは惡い風が流行りますの。」
女は考へ深さうに、途切れてゐた話を續け出した。
「内地はよろしうございますわね。氣候もこちら程不順ではなし、――」
「參りたてはよくわかりませんけれども、大へん雨の多い所でございますね。」
「今年は餘計――あら、泣いて居りますわ。」
女は耳を傾けた儘、別人のやうな微笑を浮べた。
「ちよいと御免下さいまし。」
しかしその言葉が終らない内に、もう其處へはさつきの女中が、ばたばたと上草履を鳴らせながら、泣き立てる赤兒を抱きそやして來た。赤兒を、――美しいメリンスの著物の中に、しかめた顔ばかり出した赤兒を、――敏子が内心見まいとしてゐた、丈夫さうに顋の括れた赤兒を！
「私が窓を拭きに參りますとね、すぐにもう眼を御覺ましなすつて。」
「どうも憚り樣。」
女はまだ慣れなさうに、そつと赤兒を胸に取つた。
「まあ、御可愛い。」
敏子は顔を寄せながら、鋭い乳の臭ひを感じた。
「おお、おお、よく肥つていらつしやる。」
やや上氣した女の顔には、絶え間ない微笑が滿ち渡つた。女は敏子の心もちに、同情が出來ない譯ではない。しかし、――しかしその乳房の下から、――張り切つた母の乳房の下から、汪然と湧いて來る得意の情は、どうする事も出來なかつたのである。

三

雍家花園の槐や柳は、午過ぎの微風に戰ぎながら、庭の草や土の上へ、日の光と影とをふり撒いてゐる。いや、草や土ばかりではない。その槐に張り渡した、この庭には似合はない、水色のハムモックにもふり撒いてゐる。ハムモックの中に仰向けになつた、夏のズボンに胴衣しかつけない、小肥りの男にもふり撒いてゐる。
男は葉卷に火をつけた儘、槐の枝に吊り下げた、支那風の鳥籠を眺めてゐる。鳥は文鳥か何からしい。これも明暗の斑點の中に、止り木をあちこち傳はつては、時時さも不思議さうに籠の下の男を眺めてゐる。男はその度にほほ笑みながら、葉卷を口へ運ぶ事もある。或は又人と話すやうに、「こら」とか「どうした？」とか云ふ事もある。
あたりは庭木の戰ぎの中に、かすかな草の香を蒸らせてゐる。一度ずつと遠い空に汽船の笛の響いたぎり、今はもう人音も何もしない。あの汽船もとうに去つたであらう。赤濁りに濁つた長江の水に、眩い水脈を引いたなり、西か東かへ去つたであらう。その水の見える波止場には、裸も同樣な乞食が一人、西瓜の皮を嚙つてゐる。其處には又仔豚の群も、長長と横たはつた親豚の腹に、乳房を爭つてゐるかも知れない。――小鳥を見るのにも倦きた男は、そんな空想に浸つたなり、何時からとうと眠りさうになつた。
「あなた。」
男は大きい眼を明いた。ハムモックの側に立つてゐるのは、上海の旅館にゐた時より、やや血色の好い敏子である。髪にも、夏帶にも、中形

の湯帷子にも、やはり明暗の斑點を浴びた、白粉をつけない敏子である。男は妻の顏を見た儘、無遠慮に大きい欠伸をした。それからさも大儀さうに、ハムモックの上へ體を起した。
「郵便よ、あなた。」
敏子は眼だけ笑ひながら、何本か手紙を男へ渡した。と同時に湯帷子の胸から、桃色の封筒にはひつてゐる、小さい手紙を拔いて見せた。
「今日は私にも來てゐるのよ。」
男はハムモックに腰かけたなり、もう短い葉卷を嚙み嚙み、無造作に手紙を讀み始めた。敏子も其處へ佇んだ儘、封筒と同じ桃色の紙へ、ぢつと眼を落してゐる。
隣家花園の槐や柳は、午過ぎの微風に戰ぎながら、この平和な二人の上へ、日の光と影とをふり撒いてゐる。文鳥は殆、囀らない。何か唸る蟲が一匹、男の肩へ舞ひ下りたが、直にそれも飛び去つてしまつた。
かう云ふ少時の沈默の後、敏子は伏せた眼も擧げずに、突然かすかな叫び聲を出した。
「あら、お隣の赤さんも死んだんですつて。」
「お隣り？」
男はちよいと聞き耳を立てた。
「お隣とは何處だい？」
「お隣よ。ほら、あの上海の××館の、――」
「ああ、あの子供か？　そりや氣の毒だな。」
「あんなに丈夫さうな赤さんがねえ。……」
「何だい、病氣は？」
「やつぱり風邪ですつて。始は寢冷え位の事と思ひ居り候ところ、――ですつて。」
敏子はやや興奮したやうに、口早に手紙を讀み續けた。
「病院に入れ候時には、もはや手遲れと相成り、――ね、よく似てゐるでせう？　注射を致すやら、酸素吸入を致すやら、いろいろ手を盡し候へども、――それから何と讀むのかしら？　泣き聲だわ。泣き聲も次第に細るばかり、その夜の十一時五分程前には、遂に息を引き取り候。その時の私の悲しさ、重重御察し下され度、……」
「氣の毒だな。」
男はもう一度ハムモックに、ゆらりと仰向けになりながら、同じ言葉を繰返した。男の頭の何處かには、未に瀕死の赤兒が一度、小さい喘ぎを續けてゐる。と思ふとその喘ぎは、何時か又泣き聲に變つてしまふ。雨の音の間を縫つた、健康な赤兒の泣き聲に。――男はさう云ふ幻の中にも、妻の讀む手紙に聽き入つてゐた。
「重重御察し下され度、それにつけても何時ぞや御許樣に御眼にかかりし事など思ひ出され、あの頃はさぞかし御許樣にも、――ああ、いや、いや、ほんたうに世の中はいやになつてしまふ。」
敏子は憂鬱な眼を擧げると、神經的に濃い眉をひそめた。が、一瞬の無言の後、鳥籠の文鳥を見るが早いか、嬉しさうに華奢な兩手を拍つた。
「ああ、好い事を思ひついた！　あの文鳥を放してやれば好いわ。」
「放してやる？　あのお前の大事の鳥をか？」
「ええ、ええ、大事の鳥でもかまはなくつてよ。お隣の赤さんのお追善ですもの。ほら、放鳥つて云ふでせう。あの放鳥をして上げるんだわ。文鳥だつてきつと喜んでよ。――私には手がとどかないかしら？　とどかなかつたら、あなた取つて頂戴。」
槐の根もとに走り寄つた敏子は、空氣草履を爪立てながら、出來るだけ腕を伸ばして見た。しかし籠を吊した枝には、容易に指さへとどかうとしない。文鳥は氣でも違つたやうに、小さい翼をばたばたやる。その拍子に又餌壺の粟も、鳥籠の外に撒亂する。が、男は面白さうに、

唯敏子を眺めてゐた。反らせた喉、膨んだ胸、爪先に重みを支へた足、――さう云ふ妻の姿を眺めてゐた。

「取れないかしら？――取れないわ。――」

敏子は足を爪立てた儘、くるりと夫の方へ向いた。

「取つて頂戴よ。よう。――」

「取れるものか？ 踏み臺でもすれば格別だが、――何も又放すにしても、今直には限らないぢやないか？」

「だつて今直に放したいんですもの、よう。取つて頂戴よう。取つて下さらなければいぢめるわよ。よくつて？ ハムモックを解いてしまふわよ。――」

敏子は男を睨むやうにした。が、眼にも唇にも、漲つてゐるものは微笑である。しかも殆、平靜を失した、烈しい幸福の微笑である。男はこの時妻の微笑に、何か酷薄なものさへ感じた。日の光に蒸された草木の奥に、何時も人間を見守つてゐる、氣味の惡い力に似たものさへ。

「莫迦な事をするなよ。――」

男は葉卷を投げ捨てながら、冗談のやうに妻を叱つた。

「第一あの何とか云つた、お隣の奥さんにもすまないぢやないか？ あつちぢや子供が死んだと云ふのに、こつちぢや笑つたり騒いだり、……――」

すると敏子はどうしたのか、突然蒼白い顔になつた。その上拗ねた子供のやうに、睫毛の長い眼を伏せると、別に何と云ふ事もなしに、桃色の手紙を破り出した。男はちよいと苦い顔をした。が、氣まづさを押しのける爲か、急に又快活に話し續けた。

「だがまあ、かうしてゐられるのは、兎に角仕合せには違ひないね。上海にゐた時には弱つたからな。病院にゐれば氣ばかりあせるし、ゐなければ又心配するし、――」

男はふと口を噤んだ。敏子は足もとに眼をやつたなり、影になつた頬の上に、何時か涙を光らせてゐる。しかし男は當惑さうに、短い口髭を引張つたきり、何ともその事は云はなかつた。

「あなた。」

息苦しい沈默の續いた後、かう云ふ聲が聞えた時も、敏子はまだ夫の前に、色の惡い顔を背けてゐた。

「何だい？」

「私は、――私は惡いんでせうか？ あの赤さんのなくなつたのが、――」

敏子は急に夫の顔へ、妙に熱のある眼を注いだ。

「なくなつたのが嬉しいんです。御氣の毒だとは思ふんですけれども、――それでも私は嬉しいんです。嬉しくつては惡いんでせうか？ 惡いんでせうか？ あなた。」

敏子の聲には今までにない、荒荒しい力がこもつてゐる。男はワイシャツの肩や胴衣に、今は一ぱいにさし始めた、眩い日の光を鍍金しながら、何ともその問に答へなかつた。何か人力に及ばないものが、嚴然と前へでも塞がつたやうに。

上海

うす曇るちまたを見つつ暗緑の玉子食ひをれば風吹きにけり

好色

平中といふ色ごのみにて、宮仕人はさらなり、人の女など忍びて見ぬはなかりけり。

宇治拾遺物語

何でかこの人に不會ては止まむと思ひ迷ける程に、平中病付にけり。然て惱ける程に死にけり。

今昔物語

色を好むといふは、かやうのふるまひなり。

十訓抄

一　畫姿

泰平の時代にふさはしい、優美なきらめき烏帽子の下には、下ぶくれの顏がこちらを見てゐる。そのふつくりと肥つた頰に、鮮かな赤みがさしてゐるのは、何も臙脂をぼかしたのではない。男には珍しい餅肌が、自然と血の色を透かせたのである。髭は品の好い鼻の下に、——と云ふよりも薄い脣の左右に、丁度薄墨を刷いたやうに、僅ばかりしか殘つてゐない。しかしつややかな鬢の上には、霞も立たない空の色さへ、ほんのりと青みを映してゐる。耳はその鬢のはづれに、ちよいと上つた耳たぶだけ見えてゐる。それが蛤の貝のやうな、暖かい色をしてゐるのは、かすかな光の加減らしい。眼は人よりも細い中に、絶えず微笑が漂つてゐる。殆その瞳の底には、何時でも咲き匂つた櫻の枝が、浮んでゐるのかと思ふ位、晴れ晴れした微笑が漂つてゐる。が、多少注意をすれば、其處には必しも幸福のみが住まつてゐない事がわかるかも知れない。これは遠い何物かに、憧憬を持つた微笑である。同時に又手近い一切に、輕蔑を抱いた微笑である。頸は顏に比べると、寧ろ華奢すぎると評しても好い。その頸には白い汗衫の襟が、かすかに香を焚きしめた、菜の花色の水干の襟と、細い一線を畫いてゐる。顏の後にほのめいてゐるのは、鶴を織り出した几帳であらうか？　それとものどかな山の裾に、女松を描いた障子であらうか？　兎に角曇つた銀のやうな、薄白い明みが擴がつてゐる。

これが古い物語の中から、わたしの前に浮んで來た天が下の色好み平の貞文の似顏である。平の好風に子が三人ある、丁度その次男に生まれたから、平中と諢名を呼ばれたと云ふ、わたしのDon Juanの似顏である。

二　櫻

平中は柱によりかかりながら、漫然と櫻を眺めてゐる。近近と軒に迫つた櫻は、もう盛りが過ぎたらしい。そのやや赤みの褪せた花には、永い暮過ぎの日の光が、さし交した枝の向き向きに、複雜な影を投げ合つてゐる。が、平中の眼は櫻にあつても、平中の心は櫻にない。彼はさつきから漫然と、侍從の事を考へてゐる。

「始めて侍從を見かけたのは、——」

平中はかう思ひ續けた。

「始めて侍從を見かけたのは、——あれは何時の事だつたかな？　さうさう、何でも稻荷詣でに出かけると云つてゐたのだから、初午の朝だつたのに違ひない。あの女が車へ乘らうとする、おれが其處へ通りかかる、——と云ふのが抑抑の廻りだつた。顏は扇をかざした陰にちらりと見えただけだつたが、紅梅や萌黄を重ねた上へ、紫の袿をひつかけてゐる、——その

容子が何とも云へなかつた。おまけに階へはひる所だから、片手に裾をつまんだ儘、心もち頭をかがめ加減にした、――その又恰好もたまらなかつたつけ。本院の大臣の御屋形には、ずゐぶん女房も澤山ゐるが、まづあの位なのは一人もないな。あれなら平中が惚れたと云つても、――

　平中はちよいと眞顔になつた。

一だが本當に惚れてゐるかしら？　惚れてゐると云へば、惚れてゐるやうでもあるし、惚れてゐないと云へば、惚れて、――一體こんな事は考へてゐると、だんだんわからなくなるものだが、まあ一通りは惚れてゐるな。尤もおれの事だから、いくら侍從に惚れたと云つても、眼さきまで昏んでしまひはしない。何時かあの範實のやつと、侍從の噂をしてゐたら、憾むらくは髮が薄すぎると、聞いた風な事を云つたつけ、あんな事は一目見た時にもうちやんと氣がついてゐたのだ。範實などと云ふ男は、篳篥こそちつとは吹けるだらうが、好色の話となつた日には、――まあ、あいつはあいつとして置け。差向きおれが考へたいのは、侍從一人の事なのだから、――所でもう少し慾を云へば、顔もあれぢや寂しすぎるな。それも寂しすぎると云ふだけなら、何處か古い畫卷じみた、上品な所がある位だが、寂しい顔には有勝らしい、妙に落着いた所があるのは、どう考へても感心もしくない。女でもああ云ふ顔をしたのは、存外、人を食つてゐるものだ。その上色も白い方ぢやない、淺黑いとまでは行かなくつても、琥珀色位な所はあるな。しかし何時見てもあの女は、何だかかう水際立つた、震ひつきたいやうな風をしてゐる。あれは確かにどの女も、眞似の出來ない藝當だらう。……―

　平中は袴の膝を立てながら、うつとりと軒の空を見上げた。空は簇つた花の間に、薄青い色をなごませてゐる。

「それにしてもこの間から、いくら文を持たせてやつても、返事一つよこさないのは、剛情にも程があるぢやないか？　まあおれが文をつけた女は、大抵は三度目に靡いてしまふ。たまに堅い女があつても、五度と文をやつた事はない。あの惠眼と云ふ佛師の娘なぞは、一首の歌だけに落ちたものだ。それもおれの作つた歌ぢやない。誰かが、――さうさう、義輔が作つた歌だつけ。義輔はその歌を書いてやつても、とんと先方の青女房にも相手にされなかつたとか云ふ話だが、同じ歌でもおれが書けば――尤も侍從はおれが書いても、やつぱり返事はくれなかつたから、あんまり自慢は出來ないかも知れない。しかし兎に角おれの文には必ず女の返事が來る、返事が來れば逢ふ事になる。逢ふ事になれば大騷ぎをされる。大騷ぎをされれば――ぢきに又それが鼻についてしまふ。かう云ふ相場がきまつてゐたものだ。所が侍從には一月ばかりに、ざつと二十通も文を書いたが、何とも便りがないのだからな。おれの艶書の文體にしても、さう無際限にある譯ぢやなし、そろそろもう跡が續かなくなつた。だが今日やつた文の中には、「せめては唯見つとばかりの、二文字だに見せ給へ」と書いてやつたから、何とか今度こそ返事があるだらう。ないかな？　もし今日も來ないとすれば、――ああ、ああ、おれもついこの間までは、こんな事に氣骨を折る程意氣地のない人間ぢやなかつたのだがな。何でも豐樂院の古狐は、女に化けると云ふ事だが、きつとあの狐に化かされたのは、こんな氣がするのに違ひない。同じ狐でも奈良坂の狐は、三抱へもあらうと云ふ杉の木に化ける。嵯峨の狐は牛車に化ける。高陽川の狐は女の童に化ける。桃薗の狐は大池に化け――狐の事なぞはどうでも好い。ええと、何を考へてゐたのだ

つけ？」

　平中は空を見上げた儘、そつと欠伸を嚙殺した。花に埋まつた軒先からは、傾きかけた日の光の中に、時時白いものが飜つて來る。何處かに鳩も啼いてゐるらしい。

「兎に角あの女には根負けがする。たとひ逢ふと云はないまでも、おれと一度話さへすれば、きつと手に入れて見せるのだがな。まして一晚逢ひでもすれば、――あの攝津でも小中將でも、まだおれを知らない内は、男嫌ひで通してゐたものだ。それがおれの手にかかると、あの通り好きものになるぢやないか？　侍從にした所が金佛ぢやなし、有頂天にならない筈はあるまい。しかしあの女はいざとなつても、小中將のやうには恥しがるまい。と云つて又攝津のやうに、妙にとりすます柄でもあるまい。きつと袖を口へやると、眼だけにつこり笑ひながら、――」

「殿樣。」

「どうせ夜の事だから、切り燈臺か何かがともつてゐる。その火の光があの女の髮へ、――」

「殿樣。」

　平中はやや慌てたやうに、烏帽子の頭を後へ向けた。後には何時か童が一人、ぢつと伏し眼になりながら、一通の文をさし出してゐる。何でもこれは一心に、笑ふのをこらへてゐたものらしい。

「消息か？」

「はい、侍從樣から、――」

　童はかう云ひ終ると、匆匆主人の前を下つた。

「侍從樣から？　本當かしら？」

　平中は殆恐る恐る、青い薄葉の文を開いた。

「範實や義輔の惡戲ぢやないか？　あいつ等はみんなこんな事が、何よりも好きな閑人だから、――おや、これは侍從の文だ。侍從の文には違ひないが、――この文は、これは、何と云ふ文だい？」

　平中は文を抛り出した、文には、唯見つとばかりの、「二文字だに見せ給へ」と書いてやつた。その「見つ」と云ふ二文字だけが、――しかも平中の送つた文から、この二文字だけ切り拔いたのが、薄葉に貼りつけてあつたのである。

「ああ、ああ、天が下の色好みとか云はれるおれも、この位莫迦にされれば世話はないな。それにしても侍從と云ふやつは、小面の憎い女ぢやないか？　今にどうするか覺えてゐろよ。……」

　平中は膝を抱へた儘、茫然と櫻の梢を見上げた。青い薄葉の飜つた上には、もう風に吹かれた落花が、點點と幾ひらもこぼれてゐる。

三　雨夜

　それから二月程たつた後である。或長雨の續いた夜、平中は一人本院の侍從の局へ忍んで行つた。雨は夜空が溶け落ちるやうに、凄まじい響を立ててゐる。路は泥濘と云ふよりも、大水が出たのと變りはない。こんな晚にわざわざ出かけて行けば、いくらつれない侍從でも、憐れに思ふのは當然である、――から考へた平中は、局の口へ窺ひよると、銀を張つた扇を鳴らしながら、案内を請ふやうに咳ばらひをした。

　すると十五六の女の童が、すぐに其處へ姿を見せた。ませた顏に白粉をつけた、さすがに睡むさうな女の童である。平中は顏を近づけながら、小聲に侍從へ取次を賴んだ。

　一度引きこんだ女の童は、局の口へ歸つて來ると、やはり小聲にこんな返事をした。

「どうかこちらに御待ち下さいまし。今に皆樣が御休みになれば、御逢ひになるさうでございますから。」

　平中は思はず微笑した。さうして女の童の案內通り、侍從の居間の隣らしい、遣戶の側に

[illegible]を下した。
「やつぱりおれは嫌はれたな。」
女の童が何処かへ退いた後、平中は独りにやにやしてゐた。
「さすがの侍従も今度と云ふ今度は、とうとう心が折れたと見える。兎角女と云ふやつはものの哀れを感じ易いからな。其処へ親切気を見せさへすれば、すぐにころりと落ちてしまふ。かう云ふ呼吸を知らないから、義輔や範実は何と云つても、――待てよ。だが今夜逢へると云ふのは、何だか話が旨すぎるやうだぞ。――」
平中はそろそろ不安になつた。
「しかし逢ひもしないものが、逢ふと云ふ訣もなささうなものだ。するとおれのひがみかな? 何しろざつと六十通ばかり、のべつに文を持たせてやつても、返事一つ貰へなかつたのだから、ひがみの起るのも尤もな話だ。が、ひがみではないとしたら、――又つくづく考へると、ひがみではない気もしない事はない。いくら親切に絆されても、今までは見向きもしなかつた侍従が、――と云つても相手がおれだからな。この平中に思はれたとなれば、急に心も融けるかも知れない。」
平中は衣紋を直しながら、怯づ怯づあたりを透かして見た。が、彼のまはりには、くら闇の外に何も見えない。その中に雨の音が、檜皮葺の屋根をどよませてゐる。
「ひがみだと思へば、ひがみのやうだし、ひがみでないと、――いや、ひがみだと思つてゐれば、ひがみでも何でもなくなるし、ひがみでないと思つてゐれば、案外ひがみですみさうな気がする。一体運などと云ふやつは、皮肉に出来てゐるものだからな。して見れば何でも一心に、ひがみでないと思ふ事だ。さうすると今にもあの女が、――おや、もうみんな寝鎮めたらしいぞ。」
平中は耳を欹立てた。成程ふと気がついて見れば、不相変小止みない雨声と一しよに、御前へ詰めてゐた女房たちが、局局に帰るらしい、人ざわめきも聞えて来る。
「此処が辛抱のし所だな。もう半時もたちさへすれば、おれは何の造作もなく、日頃の思ひが晴らされるのだ。が、まだ何だか肚の底には、安心の出来ない気もちもあるぞ。さうさう、これが好いのだつけ。逢はれないものだと思つてゐれば、不思議に逢ふ事が出来るものだ。しかし皮肉な運のやつは、さう云ふおれの胸算用も見透かしてしまふかも知れないな。ぢや、逢はれると考へようか? それにしても勘定づくだから、やつぱりこちらの思ふやうには、――ああ、胸が焦れて来た。一そ何か侍従なぞとは、縁のない事を考へよう。大分どの局もひつそりしたな。聞えるのは雨の音ばかりだ。ぢや早速眼をつぶつて、雨の事でも考へるとしよう。春雨、五月雨、夕立、秋雨、……秋雨と云ふ語があるかしら? 秋の雨、冬の雨、雨だり、雨漏り、雨傘、雨乞ひ、雨竜、雨蛙、雨革、雨宿り、……」
こんな事を思つてゐる内に、思ひがけない物の音が、平中の耳を驚かせた。いや、驚かせたばかりではない、この音を聞いた平中の顔は、突然弥陀の来迎を拝した、信心深い法師よりも、もつと歓喜に溢れてゐた。何故と云へば妻戸の向うに、誰か懸け金を外した音が、はつきり耳に響いたのである。
平中は妻戸を引いて見た。戸は彼の思つた通り、するりと閾の上を辷つた。その向うには不思議な程、空焚の匂が立ち罩めた、一面の闇が拡がつてゐる。平中は静かに戸をしめると、そろそろ膝で這ひながら、手探りに奥へ進み寄つた。が、この艶いた闇の中には、天井の雨の音の外に、何一つ物のけはひもしない。たまた

手がさはつたと思へば、衣桁や鏡臺にかかりである。平中はだんだん胸の動悸が、高まるやうな氣がし出した。

「ゐないのかな？　ゐれば何とか云ひさうなものだ。」

かう彼が思つた時、平中の手は、偶然にも女の手にさはつた。それからずつと探りまはすと、絹らしい打衣の袖にさはる。その衣の下の乳房にさはる。圓圓した頰や頤にさはる。氷よりも冷たい髮にさはる。――平中はとうとう暗の中に、ぢつと獨り横になつた、戀しい侍從を探り當てた。

これは夢でも幻でもない。侍從は平中の鼻の先に、打衣一つかけた儘、しどけない姿を横たへてゐる。彼は其處にゐすくんだなり、我知らずわなわな震へ出した。が、侍從は不相變、身動きをする氣色さへ見えない。こんな事は確か何かの草紙に、書いてあつたやうな心もちがする。それともあれは何年か以前、大殿油の火影に見た何かの畫卷にあつたのかも知れない。

「忝ない。忝ない。今まではつれないと思つてゐたが、もう向後は御佛よりも、お前に身命を捧げるつもりだ。」

平中は侍從を引き寄せながら、からその耳に囁かうとした。が、いくら氣は急いても、舌は上顎に引つ付いた儘、聲らしいものは口へ出ない。その内に侍從の髮の匂や、妙に暖い肌の匂は、無遠慮に彼を包んで來る、――と思ふと彼の顏へは、かすかな侍從の息がかかつた。

一瞬間、――その一瞬間が過ぎてしまへば、彼等は必ず愛欲の嵐に、雨の音も、空焚きの匂も、本院の大臣も、女の童も忘却してしまつたに相違ない。しかしこの際どい刹那に侍從は半ば身を起すと、平中の顏に顏を寄せながら、恥しさうな聲を出した。

「お待ちなさいまし。まだあちらの障子には、懸金が下してございませんから、あれをかけて參ります。」

平中は唯頷いた。侍從は二人の褥の上に、匂の好い暖みを殘した儘、そつと其處を立つて行つた。

春雨、侍從、彌陀如來、雨宿り、雨だり、侍從、侍從、……

平中はちやんと眼を開いたなり、彼自身にも判然しない、いろいろな事を考へてゐる。すると向うのくら闇に、かちりと懸金を下す音がした。

「雨龍、香爐、雨夜のしなさだめ、ぬば玉の闇のうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり、夢にだに、――どうしたのだらう？　懸金はもう下りたと思つたが、――」

平中は頭を擡げて見た。が、あたりにはさつきの通り、空焚の匂が漂つた、床しい闇があるばかりである。侍從は何處へ行つたものか、衣ずれの音も聞えて來ない。

「まさか、――いや、事によると、――」

平中は褥を這ひ出すと、又元のやうに手探りをしながら、向うの障子へ辿りついた。すると障子には部屋の外から、嚴重に懸金が下してある。その上耳を澄ませて見ても、足音一つさせるものはない。局局は大雨の中に、いづれもひつそりと寢靜まつてゐる。

「平中、平中、お前はもう天が下の色好みでも何でもない。――」

平中は障子に寄りかかつた儘、失心したやうに呟いた。

「お前の容色も衰へた。お前の才も元のやうぢやない。お前は範實や義輔よりも、見下げ果てた意氣地なしだ。」

四　好色問答

これは平中の二人の友達――義輔と範實との

間に交換された、或無駄話の一節である。

義輔「あの侍從と云ふ女には、さすがの平中もかなはないさうだね。」

範實「さう云ふ噂だね。」

義輔「あいつには好い見せしめだよ。あいつは女御更衣でなければ、どんな女にでも手を出す男だ。ちつとは懲らしてやる方が好い。」

範實「へええ、君も孔子の御弟子か？」

義輔「孔子の教なぞは知らないがね。どの位女が平中の爲に、泣かされたか位は知つてゐるのだ。もう一言次手につけ加へれば、どの位苦しんだ夫があるか、どの位怨んだ家來があるか、どの位腹を立てた親があるか、それもまんざら知らないぢやない。さう云ふ迷惑をかける男は當然鼓を鳴らして責むべき者だ。君はさうは考へないかね？」

範實「さうばかりも行かないからね。成程平中一人の爲に、世間は迷惑してゐるかも知れない。しかしその罪は平中一人が、負ふべきものでもなからうぢやないか？」

義輔「ぢや又外は誰が負ふのだね？」

範實「それは女に負はせるのさ。」

義輔「女に負はせるのは可哀さうだよ。」

範實「平中に負はせるのも可哀さうぢやないか？」

義輔「しかし平中が口說いたのだからな。」

範實「男は戰場に太刀打ちをするが、女は寢首しか搔かないのだ。人殺しの罪は變るものか。」

義輔「妙に平中の肩を持つな。だがこれだけは確かだらう？　我我は世間を苦しませないが、平中は世間を苦しませてゐる。」

範實「それもどうだかわからないね。一體我我人間は、如何なる因果か知らないが、互に傷け合はないでは、一刻も生きてはゐられないものだよ。唯平中は我我よりも、餘計に世間を苦しませてゐる。この點は、ああ云ふ天才には、やむを得ない運命だね。」

義輔「冗談ぢやないぜ。平中が天才と一しよになるなら、この池の鯰も龍になるだらう。」

範實「平中は確かに天才だよ。あの男の顏に氣をつけ給へ、あの男の聲を聞き給へ、あの男の文を讀んで見給へ。もし君が女だつたら、あの男と一晚逢つて見給へ。あの男は空海上人だとか小野道風だとかと同じやうに、母の胎內を離れた時から、非凡な能力を授かつて來たのだ。あれが天才でないと云へば、天下に天才は一人もゐない。その點では我我二人の如きも、到底平中の僕ぢやないよ。」

義輔「しかしだね。しかし天才は君の云ふやうに、罪ばかり作つてはゐないぢやないか？　たとへば道風の書を見れば、微妙な筆力に動かされるとか、空海上人の誦經を聞けば——」

範實「僕は何も天才は、罪ばかり作ると云ひはしない。罪も作ると云つてゐるのだ。」

義輔「ぢや平中とは違ふぢやないか？　あいつの作るのは罪ばかりだぜ。」

範實「それは我我にはわからない筈だ。假名も碌に書けないものには、道風の書もつまらないぢやないか？　信心氣のちつともないものには、空海上人の誦經よりも、傀儡の歌の方が面白いかも知れない。天才の功德がわかる爲には、こちらにも相當の資格が入るさ。」

義輔「それは君の云ふ通りだがね、平中尊者の功德なぞは、——」

範實「平中の場合も同じぢやないか？　ああ云ふ好色の天才の功德は、女だけが知つてゐる

る筈だ。君はさつきどの位女が平中の爲に泣かされたかと云つたが、僕は反對にかう云ひたいね。どの位女が平中の爲に、無上の歡喜を味つたか、どの位女が平中の爲に、しみじみ生き甲斐を感じたか、どの位女が平中の爲に、犧牲の尊さを教へられたか、どの位女が平中の爲に、――」

義輔「いや、もうその位で澤山だよ。君のやうに理窟をつければ、案山子も鎧武者になつてしまふ。」

範實「君のやうに嫉妬深いと、鎧武者も案山子と思つてしまふぜ。」

義輔「嫉妬深い？　へええ、これは意外だね。」

範實「君は平中を責める程、淫奔な女を責めないぢやないか？　たとひ口では責めてゐても、肚の底で責めてゐまい。それはお互に男だから、何時か嫉妬が加はるのだ。我我はみんな多少にしろ、もし平中になれるものなら、平中になつて見たいと云ふ、人知れない野心を持つてゐる。その爲に平中は謀叛人よりも、一層我我に憎まれるのだ。考へて見れば可哀さうだよ。」

義輔「ぢや君も平中になりたいかね？」

範實「僕か？　僕はあまりなりたくない。だから僕が平中を見るのは、君が見るのよりも公平なのだ。平中は女が一人出來ると、忽ちその女に飽きてしまふ。さうして誰か外の女に、可笑しい程夢中になつてしまふ。あれは平中の心の中には、何時も巫山の神女のやうな、人倫を絶した美人の姿が、髣髴と浮んでゐるからだよ。平中は何時も世間の女に、さう云ふ美しさを見ようとしてゐる。實際惚れてゐる時には、見る事が出來たと思つてゐるのだ。が、勿論二三度逢へば、さう云ふ蜃氣樓は壞れてしまふ。その爲にあいつは女から女へ、轉轉と憂き身をやつしに行くのだ。しかも末法の世の中に、そんな美人のゐる筈はないから、結局平中の一生は、不幸に終るより仕方がない。その點では君や僕の方が、遙かに仕合だと云ふものさ。しかし平中の不幸なのは、云はば天才なればこそだね。あれは平中一人ぢやない。空海上人や小野の道風も、きつとあいつと似てゐたらう。兎に角仕合になる爲には、御同樣凡人が一番だよ。……」

平中は獨り寂しさうに、本院の侍從の局に近い、人氣のない廊下に佇んでゐる。その廊下の欄にさした、油のやうな日の色を見ても、又今日は暑さが加はるらしい。が、庇の外の空には、簇簇と枝を抽いた松が、靜かに涼しさを守つてゐる。

「侍從はおれを相手にしない。おれももう侍從は思ひ切つた。――」

平中は蒼白い顏をした儘、ぼんやりこんな事を思つてゐる。

「しかしいくら思ひ切つても、侍從の姿は幻のやうに、必ず眼前に浮んで來る。おれは何時かの雨夜以來、唯この姿を忘れたいばかりに、どの位四方の神佛へ、祈願を凝らしたかわからない。が、加茂の御社へ行けば、御鏡の中にありありと、侍從の顏が映つて見える。清水の御寺の内陣にはひれば、觀世音菩薩の御姿さへ、その儘侍從に變つてしまふ。もしこの姿が何時までも、おれの心を立ち去らなければ、おれはきつと焦れ死に、死んでしまふのに相違ない。――」

平中は長い息をついた。

「だがその姿を忘れるには、――たつた一つしか手段はない。それは何でもあの女の淺間しい所を見つける事だ。侍從もまさか天人ではなし、不淨もいろいろ藏してゐるだらう。其處を

一つ見つけさへすれば、丁度女房に化けた狐が、尾のある事を知られたやうに、侍從の幻も崩れてしまふ。おれの命はその刹那に、やつとおれのものになるのだ。が、何處が淺間しいか、何處が不淨を藏してゐるか、それは誰も敎へてくれない。ああ、大慈大悲の觀世音菩薩、どうか其處を御示し下さい。侍從が河原の女乞食と、實は少しも變らない證據を。……」

平中はかう考へながら、ふと懶い視線を擧げた。

「おや、あすこへ來かかつたのは、侍從の局の女の童ではないか？」

あの利口さうな女の童は、撫子重ねの薄物の袙に、色の濃い袴を引きながら、丁度こつちへ歩いて來る。それが赤紙の畫扇の陰に、何か筥を隱してゐるのは、きつと侍從のした糞を捨てに行く所に相違ない。その姿を一目見ると、突然平中の心の中には、或大膽な決心が、稻妻のやうに閃き渡つた。

平中は眼の色を變へたなり、女の童の行く手に立ち塞がつた。そしてその筥をひつたくるや否や、廊下の向うに一つ見える、人のゐない部屋へ飛んで行つた。不意を打たれた女の童は、勿論泣き聲を出しながら、ばたばた彼を追ひかけて來る。が、その部屋へ躍りこむと、平中は、遣戸を立てきるが早いか、手早く懸金を下してしまつた。

「さうだ。この中を見れば間違ひない。百年の戀も一瞬の間に、煙よりもはかなく消えてしまふ。……」

平中はわなわな震へる手に、ふはりと筥の上へかけた、香染の薄物を掲げて見た。筥は意外にも精巧を極めた、まだ眞新しい蒔繪である。

「この中に侍從の糞がある。同時におれの命もある。……」

平中は其處に佇んだ儘、ぢつと美しい筥を眺めた。局の外には忍び忍びに、女の童の泣き聲が續いてゐる。が、それも何時の間にか、重苦しい沈默に呑まれてしまふ。と思ふと遣戸や障子も、だんだん霧のやうに消え始める。いや、もう今では晝か夜か、それさへ平中には判然しない。唯彼の眼の前には、時鳥を描いた筥が一つ、はつきり空中に浮き出してゐる。……――おれの命の助かるのも、侍從と一生の別れをするのも、皆この筥に懸つてゐる。この筥の蓋を取りさへすれば、――いや、それは考へものだぞ。侍從を忘れてしまふのが好いか、甲斐のない命を長らへるのが好いか、おれにはどちらとも返答出來ない。たとひ焦がれ死をするにもせよ、この筥の蓋だけは取らずに置かうか？……」

平中は窶れた頰の上に、涙の痕を光らせながら、今更のやうに思ひ惑つた。しかし少時沈吟した後、急に眼を輝かせると、今度はかう心の中に一生懸命の叫び聲を擧げた。

「平中！ 平中！ お前は何と云ふ意氣地なしだ？ あの雨夜を忘れたのか？ 侍從は今もお前の戀を嘲笑つてゐるかも知れないのだぞ。生きろ！ 立派に生きて見せろ！ 侍從の糞を見さへすれば、必お前は勝ち誇れるのだ。……」

平中は殆氣違ひのやうに、とうとう筥の蓋を取つた。筥には薄い香色の水が、たつぷり半分程はひつた中に、これは濃い香色の物が、二つ三つ底へ沈んでゐる。と思ふと夢のやうに、丁字の匂が鼻を打つた。これが侍從の糞であらうか？ いや、吉祥天女にしてもこんな糞はする筈がない。平中は眉をひそめながら、一番上に浮いてゐた、二寸程の物をつまみ上げた。さうして髭にも觸れる位、何度も匂を嗅ぎ直して見た。匂は確かに紛れもない、飛び切りの沈の匂である。

「これはどうだ！ この水もやはり匂ふやうだ

が、――

平中は首を傾けながら、そつと水を啜つて見た。水は丁字を煮返した、上澄みの汁に相違ない。

「するとこいつも香木かな？」

平中は今つまみ上げた、二寸程の物を噛みしめて見た。すると歯にも透る位、苦味の交つた甘さがある。その上彼の口の中には、忽ち橘の花よりも涼しい、微妙な匂が一ぱいになつた。侍従は何処から推量したか、平中のたくみを破る為に、香細工の糞をつくつたのである。

「侍従！ お前は平中を殺したぞ！」

平中はから呻きながら、ばたりと蒔絵の筥を落した。さうして其処の床の上へ、仏倒しに倒れてしまつた。その半死の瞳の中には、紫摩金の円光にとりまかれた儘、嫣然と彼にほほ笑みかけた侍従の姿を浮べながら。……

しかしその時の侍従の姿は、何時か髪も豊かになれば、顔も殆玉のやうに変つてゐた事は事実である。

好悪

わたしは古い酒を愛するやうに、古い快楽説を愛するものである。我我の行為を決するものは善でもなければ悪でもない。唯我我の好悪である。或は我我の快不快である。さうとしかわたしには考へられない。

ではなぜ我我は極寒の天にも、将に溺れんとする幼児を見る時、進んで水に入るのであるか？ 救ふことを快とするからである。では水に入る不快を避け、幼児を救ふ快を取るのは何の尺度に依つたのであらう？ より大きい快を選んだのである。しかし肉体的快不快と精神的快不快とは同一の尺度に依らぬ筈である。いや、この二つの快不快は全然相容れぬものではない。寧ろ鹹水と淡水とのやうに、一つに融け合つてゐるものである。現に精神的教養を受けない京阪辺の紳士諸君はすつぽんの汁を啜つた後、鰻を菜に飯を食ふさへ、無上の快に数へてゐるではないか？ 且又水や寒気などにも肉体的享楽の存することは寒中水泳の示すところである。なほこの間の消息を疑ふものはマソヒズムの場合を考へるが好い。あの呪ふべきマソヒズムはかう云ふ肉体的快不快の外見上の倒錯に常習的傾向の加はつたものである。わたしの信ずるところによれば、或は柱頭の苦行を喜び、或は火裏の殉教を愛した基督教の聖人たちは大抵マソヒズムに罹つてゐたらしい。

我我の行為を決するものは昔の希臘人の云つた通り、好悪の外にないのである。我我は人生の泉から、最大の味を汲み取らねばならぬ。「パリサイの徒の如く、悲しき面もちをなすこと勿れ。」耶蘇さへ既にさう云つたではないか。賢人とは畢竟荊棘の路にも、薔薇の花を咲かせるもののことである。

（『侏儒の言葉』より）

多忙

我我を恋愛から救ふものは理性よりも寧ろ多忙である。恋愛も亦完全に行はれる為には何よりも時間を持たなければならぬ。ウェルテル、ロミオ、トリスタン――古来の恋人を考へて見ても、彼等は皆閑人ばかりである。

（『侏儒の言葉』より）

報恩記

阿媽港甚内の話

わたしは甚内と云ふものです。苗字は――さあ、世間ではずつと前から、阿媽港甚内と云つてゐるやうです。阿媽港甚内、――あなたもこの名は知つてゐますか？ いや、驚くには及びません。わたしはあなたの知つてゐる通り、評判の高い盗人です。しかし今夜参つたのは、盗みにはひつたのではありません。どうかそれだけは安心して下さい。

あなたは日本にゐる伴天連の中でも、道徳の高い人だと聞いてゐます。して見れば盗人と名のついたものと、少時でも一しよにゐると云ふ事は、愉快ではないかも知れません。が、わたしも思ひの外、盗みばかりしてもゐないのです。何時ぞや聚楽の御殿へ召された呂宋助左衛門の手代の一人も、確か甚内と名乗つてゐました。又利休居士の珍重してゐた「赤がしら」と称へる水さしも、それを贈つた連歌師の本名は、甚内とか云つたと聞いてゐます。さう云へばつい二三年以前、阿媽港日記と云ふ本を書いた、大村あたりの通辞の名前も、甚内と云ふのではなかつたでせうか？ その外三条河原の喧嘩に、甲比丹「まるどなど」を救つた虚無僧、堺の妙国寺門前に、南蛮の薬を売つてゐた商人、――さう云ふものも名前を明かせば、何がし甚内だつたのに違ひありません。いや、それよりも大事なのは、去年この「さん・ふらんしすこ」の御寺へ、おん母「まりや」の爪を収めた、黄金の舎利塔を献じてゐるのも、やはり甚内と云ふ信徒だつた筈です。

しかし今夜は残念ながら、一一さう云ふ行状を話してゐる暇はありません。唯どうか阿媽港甚内は、世間一般の人間と余り変りのない事を信じて下さい。さうですか？ では出来るだけ手短かに、わたしの用向きを述べる事にしませう。わたしは或男の魂の為に、「みさ」の御祈りを願ひに来たのです。いや、わたしの血縁のものではありません。と云つても亦わたしの刃に血を塗つたものでもないのです。名前ですか？ 名前は、――さあ、それを明かして好いかどうか、わたしにも判断はつきません。或男の魂の為に、――或は「ぽうろ」と云ふ日本人の為に、冥福を祈つてやりたいのです。いけませんか？ ――成程阿媽港甚内に、かう云ふ事を頼まれたのでは、手軽に受合ふ気にもなれますまい。では兎に角一通り、事情だけは話して見る事にしませう。しかしそれには生死を問はず、他言しない約束が必要です。あなたはその胸の十字架に懸けても、きつと約束を守りますか？ いや――、失礼は赦して下さい。（微笑）伴天連のあなたを疑ふのは、盗人のわたしには僭上でせう。しかしこの約束を守らなければ、（突然真面目に）「いんへるの」の猛火に焼かれずとも、現世に罰が下る筈です。

もう二年あまり以前の話ですが、丁度或凩の真夜中です。わたしは雲水に姿を変へながら、京の町中をうろついてゐました。京の町中をうろついたのは、その夜に始まつたのではありません。もう彼是五日ばかり、何時も初更を過ぎさへすれば、必人目に立たないやうに、そつと家家を窺つたのです。勿論何の為だつたかは、註を入れるにも及びますまい。殊にその頃は摩利伽へでも、一時渡つてゐるつもりでし

たから、御詫に鐘の入用もあつたのです。町は勿論とうの昔に人通りを絶つてゐましたが、星ばかりきらめいた空中には、小やみもない風の音がどよめいてゐます。わたしは暗い軒通ひに、小川通りを下つて來ると、ふと辻を一つ曲つた所に、大きい角屋敷のあるのを見つけました。これは京でも名を知られた、北條屋彌三右衞門の本宅です。同じ渡海を渡世にしてゐても、北條屋は到底角倉などと肩を竝べる事は出來ますまい。しかし兎に角沙室や呂宋へ、船の一二艘も出してゐるのですから、一かどの分限者には違ひありません。わたしは何もこの家を目當に、うろついてゐたのではないのですが、丁度其處へ來合せたのを幸ひ、一稼ぎする氣を起しました。その上前にも云つた通り、夜は深いし風も出てゐる、――わたしの商賣にとりかかるのには、萬事持つて來いの寸法です。わたしは路ばたの天水桶の後に、網代の笠や杖を隱した上、忽ち高塀を乘り越えました。

世間の噂を聞いて御覽なさい。阿媽港甚内は忍術を使ふ、――誰でも皆さう云つてゐます。しかしあなたは俗人のやうに、そんな事は本當と思ひますまい。わたしは忍術も使はなければ、惡魔も味方にはしてゐないのです。唯阿媽港にゐた時分、葡萄牙の船の醫者に、究理の學問を敎はりました。それを實地に役立てさへすれば、大きい錠前を捻ぢ切つたり、重い閂を外したりするのは、格別むづかしい事ではありません。（微笑）今までにない盜みの仕方、――それも日本と云ふ未開の土地は、十字架や鐵砲の渡來と同樣、やはり西洋に敎はつたのです。

わたしは一ときとたたない内に、北條屋の家の中にはひつてゐました。が、暗い廊下をつき當ると、驚いた事にはこの夜更けにも、まだ火影のさしてゐるばかりか、話し聲のする小座敷があります。それがあたりの容子では、どうしても茶室に違ひありません。「風の茶か？」――わたしはさう苦笑しながら、そつと其處へ忍び寄りました。實際その時は人聲のするのに、仕事の邪魔を思ふよりも、數寄を凝らした圍ひの中に、この家の主人や客に來た仲間が、どんな風流を樂しんでゐるか、――そんな事に心が惹かれたのです。

襖の外に身を寄せるが早いか、わたしの耳には思つた通り、釜のたぎりがはひりました。が、その音がすると同時に、意外にも誰か話をしては泣いてゐる聲が聞えるのです。誰か、――と云ふよりもそれは二度と聞かずに、女だと云ふ事さへわかりました。かう云ふ大家の茶座敷に、眞夜中女の泣いてゐると云ふのは、どうせ唯事ではありません。わたしは息をひそめた儘、幸ひ明いてゐた襖の隙から、茶室の中を覗きこみました。

行燈の光に照された、古色紙らしい床の懸け物、懸け花入の寒菊の花、――圍ひの中には御約束通り、物寂びた趣が漂つてゐました。その床の前に、――丁度わたしの眞正面に坐つた老人は、主人の彌三右衞門でせう、何か細かい唐草の羽織に、ぢつと兩腕を組んだ儘、殆よそ眼に見たのでは、釜のたぎる音でも聞いてゐるやうです。彌三右衞門の下座には、品の好い笄髷の老女が一人、これは横顏を見せた儘、時時淚を拭つてゐました。

「いくら不自由がないやうでも、やはり苦勞だけはあると見える。」――わたしはさう思ひながら、自然と微笑を洩らしたものです。微笑を、――かう云つてもそれは北條屋夫婦に、惡意があつたのではありません。わたしのやうに四十年間、惡名ばかり負つてゐるものには、他人の、――殊に幸福らしい他人の不幸は、自然と微笑を浮ばせるのです。（殘酷な表情）その時もわたしは夫婦の歎きが、歌舞伎を見るやうに愉快

ありません。わたしはその時聲もかけずに、境の襖を明けたのですから。——しかもわたしの身なりと云へば、雲水に姿をやつした上、網代の笠を脫いだ代りに、南蠻頭巾をかぶつてゐたのですから。

「誰だ、おぬしは？」

彌三右衞門は年はとつてゐても、咄嗟に膝を起しました。

「いや、御驚きになるには及びません。わたしは阿媽港甚内と云ふものです。——まあ、御靜かになすつて下さい。阿媽港甚内は盜人ですが、今夜突然參上したのは、少し外にも譯があるのです。——」

わたしは頭巾を脫ぎながら、彌三右衞門の前に坐りました。

その後の事は話さずとも、あなたには推察出來るでせう。わたしは北條屋の危急を救ふ爲に、三日と云ふ日限を一日も違へず、六千貫の金を調達する、恩返しの約束を結んだのです。——おや、誰か戶の外に、足音が聞えるではありませんか？ では今夜は御免下さい。いづれ明日か明後日の夜、もう一度此處へ忍んで來ます。あの大十字架の星の光は阿媽港の空には輝いてゐても、日本の空には見られません。わたしも丁度ああ云ふやうに日本では姿を晦ませてゐないと、今夜みさを願ひに來た、「ぽうろ」の魂の爲にすまないのです。

何、わたしの逃げ途ですか？ そんな事は心配に及びません。この高い天窓からでも、あの大きい暖爐からでも、自由自在に出て行かれます。就いてはどうか吳々も、恩人「ぽうろ」の魂の爲に、一切他言は愼んで下さい。

北條屋彌三右衞門の話

伴天連樣、どうかわたしの懺悔を御聞き下さい。御承知でも御座いませうが、この頃世上に噂の高い、阿媽港甚内と云ふ盜人がございます。根來寺の塔に住んでゐたのも、殺生關白の太刀を盜んだのも、又遠い海の外では、呂宋の太守を襲つたのも、皆あの男だとか聞き及びました。それがとうとう搦めとられた上、今度一條戾り橋のほとりに、曝し首になつたと云ふ事も、或は御耳にはひつて居りませう。わたしはあの阿媽港甚内に一方ならぬ大恩を蒙りました。が、又大恩を蒙つただけに、唯今では何とも申しやうのない、悲しい目にも遇つたのでございます。どうかその仔細を御聞きの上、罪びと北條屋彌三右衞門にも、天帝の御愛憐を御祈り下さい。

丁度今から二年ばかり以前の、冬の事でございます。ずつと時化ばかり續いた爲に、持ち船の北條丸は沈みますし、抛げ銀は皆倒れますし、——それやこれやの重なつた擧句、北條屋一家は分散の外に、仕方のない羽目になつてしまひました。御承知の通り町人には取引き先はございましても、友だちと申すものはございません。かうなればもう我我の家業は、うづ潮に吸はれた大船も同樣、まつ逆樣に奈落の底へ、落ちこむばかりなのでございます。すると或夜、——今でもこの夜の事は忘れません。或凩の烈しい夜でございましたが、わたし共夫婦は御存知の圍ひに、夜の更けるのも知らず話して居りました。其處へ突然はひつて參つたのは、雲水の姿に南蠻頭巾をかぶつた、あの阿媽港甚内でございます。わたしは勿論驚きもすれば、又怒りも致しました。が、甚内の話を聞いて見ますと、あの男はやはり盜みを働きに、わたしの宅へ忍びこみましたが、茶室には未に火影ばかりか、人の話し聲が聞えてゐる、そこで襖越しに、覗いて見ると、この北條屋彌三右衞門は、甚内の命を助けた事のある、二十年以前の恩人だつた

と、から云ふ次第ではございませんか？
成程さう云はれて見れば、彼是二十年にもなりませうか、まだわたしが阿媽港通ひの「ふすた」船の船頭を致してゐた頃、あそこへ船がかりをしてゐる内に、髭さへ碌にない日本人を一人、助けてやつた事がございます、何でもその時の話では、ふとした酒の上の喧嘩から、唐人を一人殺した爲に、追手がかかつたとか申して居りました。して見ればそれが今日では、あの阿媽港甚内と云ふ、名代の盜人になつたのでございませう。わたしは兎に角甚内の言葉も譃ではない事がわかりましたから、一家のものの寢てゐるのを幸ひ、まづその用向きを尋ねて見ました。

すると甚内の申しますには、あの男の力に及ぶ事なら、二十年以前の恩返しに、北條屋の危急を救つてやりたい、差當り入用の金子の高は、どの位だと尋ねるのでございます。わたしは思はず苦笑致しました。盜人に金を調達して貰ふ、――それが可笑しいばかりではございません。如何に阿媽港甚内でも、さう云ふ金がある位ならば、何もわざわざわたしの宅へ、盜みにはひるにも當りますまい。しかしその金高を申しますと、甚内は小首を傾けながら、今夜の内にはむづかしいが、三日も待てば調達しようと、無造作に引き受けたのでございます。が、何しろ入用なのは、六千貫と云ふ大金でございますから、きつと調達出來るかどうか、當になるものではございません。いや、わたしの量見では、まづ賽の目をたのむよりも、覺束ないと覺悟をきめてゐました。

甚内はその夜わたしの家内に、悠悠と茶なぞ立てさせた上、凩の中を歸つて行きました。が、その翌日になつて見ても、約束の金は屆きません。二日目も同樣でございました。三日目は、――この日は雪になりましたが、やはり夜に入つてしまつた後も、何一つ便りはありません。わたしは前に甚内の約束は、當にして居らぬと申し上げました。が、店のものにも暇を出さず、成行きに任せてゐた所を見ると、それでも幾分か心待ちには、待つてゐたのでございませう。又實際三日目の夜には、圍ひの行燈に向つてゐても、雪折れの音のする度每に、聞き耳ばかり立てて居りました。

所が三更も過ぎた時分、突然茶室の外の庭に、何か人の組み合ふらしい物音が聞えるではございませんか？　わたしの心に閃いたのは、勿論甚内の身の上でございます。もしや捕り手でもかかつたのではないか？――わたしは咄嗟にかう思ひましたから、庭に向いた障子を明けるが早いか、行燈の火を揭げて見ました。雪の深い茶室の前には、大明竹の垂れ伏したあたりに、誰か二人摑み合つてゐる――と思ふとその一人は、飛びかかる相手を突き放したなり、庭木の蔭をくぐるやうに、忽ち塀の方へ逃げ出しました。雪のはだれる音、塀に攀ぢ登る音、――それぎりひつそりしてしまつたのは、もう何處か塀の外へ、無事に落ち延びたのでございませう。が、突き放された相手の一人は、格別跡を追はうともせず、體の雪を拂ひながら、靜かにわたしの前へ歩み寄りました。

「わたしです。阿媽港甚内ですよ。」

わたしは呆氣にとられた儘、甚内の姿を見守りました。甚内は今夜も南蠻頭巾に、袈裟法衣を著てゐるのでございます。

「いや、とんだ騷ぎをしました。誰もあの組打ちの音に、眼を覺さねば仕合せですが。」

甚内は閒へはひると同時に、ちらりと苦笑を洩らしました。

「何、わたしが忍んで來ると、丁度誰かこの床の下へ、這ひこまうとするものがあるのです。そこで一つ手捕りにした上、顏を見てやらうと思つたのですが、とうとう逃げられてしまひま

した。」

わたしはまださきの通り、捕り手の心配がございましたから、役人ではないかと尋ねて見ました。が、甚内は役人所か、盗人だと申すのでございます。盗人が盗人を捉へようとした、――この位珍しい事はございますまい。今度は甚内よりもわたしの顔に、自然と苦笑が浮びました。しかしそれは兎も角も、調達の成否を聞かない内は、わたしの心も安まりません。すると甚内は云はない先に、わたしの心を讀んだのでございませう、悠悠と胴巻きをほどきながら、爐の前へ金包みを並べました。

「御安心なさい。六千貫の工面はつきましたから。――實はもう昨日の内に、大抵調達したのですが、まだ二百貫程不足でしたから、今夜はそれを持つて來ました。どうかこの包みを受取つて下さい。又昨日までに集めた金は、あなた方御夫婦も知らない内に、この茶室の床下へ隱して置きました。大方今夜の盗人のやつも、その金を嗅ぎつけて來たのでせう。」

わたしは夢でも見てゐるやうに、さう云ふ言葉を聞いてゐました。盗人に金を施して貰ふ、――それはあなたに伺はないでも、確かに善い事ではございますまい。しかし調達が出來るかどうか、半信半疑の境にゐた時は、善惡も考へずに居りましたし、又今となつて見れば、むげに受け取らぬとも申されません。しかもその金を受け取らないとなれば、わたしばかりか一家のものも、路頭に迷ふのでございます。どうかこの心もちに、せめては御憐憫を御加へ下さい。わたしは何時か甚内の前に、恭しく兩手をついた儘、何も申さずに泣いて居りました。

その後わたしは二年の間、甚内の噂を聞かずに居りました。が、とうとう分散もせずに恙ないその日を送られるのは、皆甚内の御蔭でございますから、何時でもあの男の仕合せの爲に、人知れずおん母「まりや」様へも、祈願をこめてゐたのでございます。所がどうでございませう。この頃往來の話を聞けば、阿媽港甚内は御召捕りの上、戻り橋に首を曝してゐると、かう申すではございませんか？　わたしは驚きも致しました。人知れず涙も落しました。しかし積惡の報と思へば、これも致し方はございますまい。いや、寧ろこの永年、天罰も受けずに居りましたのは、不思議だつた位でございます。が、せめてもの恩返しに、蔭ながら回向をしてやりたい。――かう思つたものでございますから、わたしは今日伴もつれずに、早速一條戻り橋へ、その曝し首を見に參りました。

戻り橋のほとりへ參りますと、もうその首を曝した前には、大勢人がたかつて居ります。罪狀を記した白木の札、首の番をする下役人、――それは何時もと變りません。が、三本組み合せた、青竹の上に載せてある首は、――ああ、そのむごたらしい血まみれの首は、どうしたと云ふのでございませう？　わたしは騷騷しい人だかりの中に、蒼ざめた首を見るが早いか、思はず立ちすくんでしまひました。この首はあの男ではございません。阿媽港甚内の首ではございません。この太い眉、この突き出た頬、この眉間の刀創、――何一つ甚内には似て居りません。しかし、――わたしは突然日の光も、わたしのまはりの人だかりも、竹の上に載せた曝し首も、皆何處か遠い世界へ、流れてしまつたかと思ふ位、烈しい驚きに襲はれました。この首は甚内ではございません。わたしの首でございます。二十年以前のわたし、――丁度甚内の命を助けた、その頃のわたしでございます。「彌三郎」――わたしは舌さへ動かせたなら、かう叫んでゐたかも知れません。が、聲を揚げる所か、わたしの體は瘧を病んだやうに、震へてゐるばかりでございました。

彌三郎。わたしは[illegible]に、倅の曝し首を眺めました。首はやや仰向いた儘、[illegible]いた髪の下から、ぢつとわたしを見守つて居ります。これはどうした訣でございませう？　倅は何かの間違ひから、甚内と思はれたのでございませうか？　さう云ふ間違ひは起りますまい。それとも阿媽港甚内といふのは、倅だつたのでございませうか？　わたしの宅へ來た贋雲水は、誰か甚内の名前を假りた、別人だつたのでございませうか？　いや、そんな筈はございません。三日と云ふ日限を一日も違へず、六千貫の金を工面するものは、この廣い日本の國にも、甚内の外に誰が居りませう？　して見ると、——その時わたしの心の中には、二年以前雪の降つた夜、甚内と庭に話してゐた、誰とも知らぬ男の姿が、急にはつきり浮んで參りました。あの男は誰だつたのでございませう？　もしや倅ではございますまいか？　さう云へばあの男の姿かたちは、ちらりと一眼見ただけでも、どうやら倅の彌三郎に、似てゐたやうでもございます。しかしこれはわたし一人の、心の迷ひでございませうか？　もし倅だつたとすれば、——わたしは夢の覺めたやうに、しげしげ首を眺めました。するとその紫ばんだ、妙に[illegible]た唇には、何か微笑に近い物が、ほんのり殘つてゐるのでございます。

曝し首に微笑が殘つてゐる、——あなたはそんな事をお聞きになると、御嗤ひになるかも知れません。わたしさへそれに氣のついた時には、眼のせゐかとも思ひました。が、何度見直しても、その干からびた唇には、確かに微笑らしい明みが、漂つてゐるのでございます。わたしはこの不思議な微笑に、永い間見入つて居りました。と、何時かわたしの顏にも、やはり微笑が浮んで參りました。しかし微笑が浮ぶと同時に、眼には自然と熱い涙も、にじみ出して來たのでございます。

その微笑は無言の内に、かう申してゐたのでございます。

「お父さん、堪忍して下さい。——」

「お父さん。不孝の罪は堪忍して下さい、わたしは二年以前の雪の夜、勘當の御詫びがしたいばかりに、そつと家へ忍んで行きました。晝間は店のものに見られるのさへ、恥しいなりをしてゐましたから、わざわざ夜の更けるのを待つた上、お父さんの寢間の戸を叩いても、御眼にかかるつもりでゐたのです。所がふと囲ひの障子、人影のさしてゐるのを幸ひ、[illegible]行きかけると、いきなり何者か、言葉もかけずに組みつきました。

「お父さん。それから先はどうなつたか、あなたの知つてゐる通りです。わたしは餘り不意だつた爲、お父さんの姿を見るが早いか、相手の曲者を突き放したなり、高塀の外へ逃げてしまひました。が、雪明りに見た相手の姿は、不思議にも雲水のやうでしたから、誰も追ふ者のないのを確めた後、もう一度あの茶室の外へ、大膽にも忍んで行つたのです。わたしは囲ひの障子越しに、一切の話を立ち聞きしました。

「お父さん。北條屋を救つた甚内は、わたしたち一家の恩人です。わたしは甚内の身に危急があれば、たとひ命は抛つても、恩に報いたいと決心しました。又この恩を返す事は、勘當を受けた浮浪人のわたしでなければ出來ますまい。わたしはこの二年間、さう云ふ機會を待つてゐました。さうして、——その機會が來たのです。どうか不孝の罪は堪忍して下さい。わたしは極道に生れましたが、一家の大恩だけは返しました。それがせめてもの心やりです。……

わたしは宅へ歸る途中も、同時に泣いたり笑つたりしながら、倅のけなげさを褒めてやりま

した。あなたは御存知になりますまいが、倅の彌三郎もわたしと同樣、御宗門に歸依して居りましたから、「ぽうろ」と云ふ名前さへも、頂いて居つたものでございます。しかし、──しかし倅も不運なやつでございました。いや、倅ばかりではございません。わたしもあの阿媽港甚內に一家の沒落さへ救はれなければ、こんな嘆きは致しますまいに。いくら未練だと思ひましても、これぱかりは切なうございます。分散せずにゐた方が好いか、倅を殺さずに置いた方が好いか、──（突然苦しさうに）どうかわたしを御救ひ下さい。わたしはこの儘生きてゐれば、大恩人の甚內を憎むやうになるかも知れません。……（永い間の歔欷）

「ぽうろ」彌三郎の話

ああ、おん母「まりや」樣！　わたしは夜が明け次第、首を打たれる事になつてゐます。わたしの首は地に落ちても、わたしの魂は小鳥のやうに、あなたの御側へ飛んで行くでせう。いや、惡事ばかり働いたわたしは、「はらいそ」（天國）の莊嚴を拜する代りに、恐しい「いんへるの」（地獄）の猛火の底へ、逆落しになるかも知れません。しかしわたしは滿足です。わたしの心には二十年來、この位嬉しい心もちは、宿つた事がないのです。

わたしは北條屋彌三郎です。が、わたしの曝し首は、阿媽港甚內と呼ばれるでせう。わたしがあの阿媽港甚內、──これ程愉快な事があるでせうか？　阿媽港甚內、──どうです？　好い名前ではありませんか？　わたしはその名前を口にするだけでも、この暗い牢の中さへ、天上の薔薇や百合の花に、滿ち渡るやうな心もちがします。

忘れもしない二年前の冬、丁度或大雪の夜です、わたしは博奕の元手が欲しさに、父の本宅へ忍びこみました。所がまだ圍ひの障子に、火影がさしてゐましたから、そつと其處を窺はうとすると、いきなり誰か言葉もかけず、わたしの襟上を捉へたものがあります。振り拂ふ、又掴みかかる、──相手は誰だか知らないのですが、その力の逞しい事は、到底唯ものとは思はれません。のみならず二三度揉み合ふ內に、茶室の障子が明いたと思ふと、庭へ行燈をさし出したのは、紛れもない父の彌三右衞門です。わたしは一生懸命に、掴まれた胸倉を振り切りながら、高塀の外へ逃げ出しました。

しかし半町程逃げ延びると、わたしは或軒下に隱れながら、往來の前後を見廻しました。往來には夜目にも白白と、時時雪煙りが揚る外には、何處にも動いてゐるものは見えません。相手は諦めてしまつたのか、もう追ひかけても來ないやうです。が、あの男は何ものでせう？　咄嗟の間に見た所では、確かに僧形をしてゐました。が、さつきの腕の強さを見れば、──殊に兵法にも精しいのを見れば、世の常の坊主ではありますまい。第一かう云ふ大雪の夜に、庭先へ誰か坊主が來てゐる、──それが不思議ではありませんか？　わたしは少時思案した後、たとひ危い藝當にしても、兎に角もう一度茶室の外へ、忍び寄る事に決心しました。

それから一時ばかりたつた頃です。あの怪しい行脚の坊主は、丁度雪の止んだのを幸ひ小川通りを下つて行きました。これが阿媽港甚內なのです。侍、連歌師、町人、虛無僧、──何にでも姿を變へると云ふ、洛中に名高い盜人なのです。わたしは後から見え隱れに甚內の跡をつけて行きました。その時程妙に嬉しかつた事は、一度もなかつたのに違ひありません。阿媽港甚內！　阿媽港甚內！　わたしはどの位夢の中にも、あの男の姿を慕つてゐたでせう。

殺生關白の太刀を盜んだのも甚内です。沙室屋の珊瑚樹を詐つたのも甚内です。備前宰相の伽羅を切つたのも、甲比丹「ぺれいら」の時計を奪つたのも、一夜に五つの土藏を破つたのも、八人の三河侍を斬り倒したのも、――その外末代にも傳はるやうな、稀有の惡事を働いたのは、何時でも阿媽港甚内です。その甚内は今わたしの前に、網代の笠を傾けながら、薄明るい雪路を歩いてゐる。――かう云ふ姿を眺められるのは、それだけでも仕合せではありませんか？が、わたしはこの上にも、もつと仕合せになりたかつたのです。

わたしは淨嚴寺の裏へ來ると、一散に甚内へ追ひつきました。此處はずつと町家のない土塀續きになつてゐますから、たとひ晝でも人目を避けるには、一番御誂への場所なのですが、甚内はわたしを見ても、格別驚いた氣色は見せず、靜かに其處へ足を止めました。しかも杖をついたなり、わたしの言葉を待つやうに、一言も口を利かないのです。わたしは實際恐る恐る、甚内の前に手をつきました。しかしその落著いた顏を見ると、思ふやうに聲さへ出て來ません。

「どうか失禮は御免下さい。わたしは北條屋彌三右衛門の倅彌三郎と申すものです。――」

わたしは顏を火照らせながら、やつとかう口を切りました。

「實は少し御願ひがあつて、あなたの跡を慕つて來たのですが、……」

甚内は唯頷きました。それだけでも氣の小さいわたしには、どの位難有い氣がしたでせう。わたしは勇氣も出て來ましたから、やはり雪の中に手をついたなり、父の勘當を受けてゐる事、今はあぶれものの仲間にはひつてゐる事、今夜父の家へ盜みにはひつた所が、計らず甚内にめぐり合つた事、なほ又父と甚内との密談も一つ殘らず聞いた事、――そんな事を手短に話しました。が、甚内は不相變、默然と口を噤んだ儘、冷やかにわたしを見てゐるのです。わたしはその話をしてしまふと、一層膝を進ませながら、甚内の顏を覗きこみました。

「北條一家の蒙つた恩は、わたしにも亦かかつてゐます。わたしはその恩を忘れないしるしに、あなたの手下になる決心をしました。どうかわたしを使つて下さい。わたしは盜みも知つてゐます。火をつける術も知つてゐます。その外一通りの惡事だけは、人に劣らず知つてゐます。――」

しかし甚内は默つてゐます。わたしは胸を躍らせながら、愈熱心に説き立てました。

「どうかわたしを使つて下さい。わたしは必働きます。京、伏見、堺、大阪、――わたしの知らない土地はありません。わたしは一日に十五里歩きます。力も四斗俵は片手に擧ります。人も二三人は殺して見ました。どうかわたしを使つて下さい。わたしはあなたの爲ならば、どんな仕事でもして見せます。伏見の城の白孔雀も、盜めと云へば、盜んで來ます。さん・ふらんしすこの寺の鐘樓も、燒けと云へば燒いて來ます。右大臣家の姫君も、拐せと云へば拐して來ます。奉行の首も取れと云へば、――」

わたしはかう云ひかけた時、いきなり雪の中へ蹴倒されました。

「莫迦め！」

甚内は一聲叱つた儘、元の通り歩いて行きさうにします。わたしは殆ど氣違ひのやうに、法衣の裾へ縋りつきました。

「どうかわたしを使つて下さい。わたしはどんな場合にも、きつとあなたを離れません。あなたの爲には水火にも入ります。あの「えそぽ」の話の獅子王さへ、鼠に救はれるではありませんか？　わたしはその鼠になります。わたしは、――」

「黙れ。甚内は貴様なぞの恩は受けぬ。」

甚内はわたしを振り放すと、もう一度其處へ蹴倒しました。

「白癩めが！　親孝行でもしろ！」

わたしは二度目に蹴倒された時、急に口惜しさがこみ上げて來ました。

「よし！　きつと恩になるな！……」

しかし甚内は見返りもせず、さつさと雪路を急いで行きます。何時かさし始めた月の光に網代の笠を仄めかせながら、……それぎりわたしは二年の間、ずつと甚内を見ずにゐるのです。（突然笑ふ）「甚内は貴様なぞの恩は受けぬ」……あの男はかう云ひました。しかしわたしは夜の明け次第、甚内の代りに殺されるのです。

ああ、おん母「まりや」様！　わたしはこの二年間、甚内の恩を返したさに、どの位苦しんだか知れません。恩を返したさに？――いや、恩と云ふよりも、寧ろ恨を返したさにです。しかし甚内は何處にゐるか？　甚内は何をしてゐるか？――誰にそれがわかりませう？　第一甚内はどんな男か？――それさへ知つてゐるものはありません。わたしが遇つた甚内は四十前後の小男です。が、柳町の廓にゐたのは、まだ三十を越えてゐない、赭ら顔に鬚の生えた、浪人だと云ふではありませんか？　歌舞伎の小屋を擾がしたと云ふ、腰の曲つた紅毛人、妙國寺の財寶を掠めたと云ふ、前髪の垂れた若侍、――さう云ふのを皆甚内とすれば、あの男の正體を見分ける事さへ、到底人力には及ばない筈です。其處へわたしは去年の末から、吐血の病に罹つてしまひました。

どうか恨みを返してやりたい、――わたしは日毎に痩せ細りながら、その事ばかりを考へてゐました。すると或夜わたしの心に、突然閃いた一策があります。「まりや」様！　「まりや」様！　この一策を御教へ下すつたのは、あなたの御恵みに違ひありません。唯わたしの體を捨てる、吐血の病に衰へ果てた、骨と皮ばかりの體を捨てる、――それだけの覺悟をしさへすれば、わたしの本望は遂げられるのです。わたしはその夜嬉しさの餘り、何時までも獨り笑ひながら、同じ言葉を繰返してゐました。「甚内の身代りに首を打たれる。甚内の身代りに首を打たれる。……」

甚内の身代りに首を打たれる――何とすばらしい事ではありませんか？　さうすれば勿論わたしと一しよに、甚内の罪も亡んでしまふ。――甚内は廣い日本國中、何處でも大威張りに歩けるのです。その代り（再び笑ふ）――その代りわたしは一夜の内に、稀代の大賊になれるのです。呂宋助左衛門の手代だつたのも、備前宰相の伽羅を切つたのも、利休居士の友だちになつたのも、沙室屋の珊瑚樹を詐つたのも、伏見の城の金蔵を破つたのも、八人の三河侍を斬り倒したのも、――ありとあらゆる甚内の名譽は、悉わたしに奪はれるのです。（三度笑ふ）云はば甚内を助けると同時に、甚内の名前を殺してしまふ。一家の恩を返すと同時に、わたしの恨みも返してしまふ、――この位愉快な返報はありません。わたしがその夜嬉しさの餘り、笑ひ續けたのも當然です。今でも、――この牢の中でも、これが笑はずにゐられるでせうか？

わたしはこの策を思ひついた後、内裏へ盗みにはひりました。宵闇の夜の淺い内ですから御簾越しに火影がちらついたり、松の中に花だけ仄めいたり、――そんな事も見たやうに覺えてゐます。が、長い廻廊の屋根から、人氣のない庭へ飛び下りると、忽ち四五人の警護の侍に、望みの通り搦められました。その時です。わたしを組み伏せた鬚侍は、一生懸命に縄をかけながら、「今度こそは甚内を手捕りにしたぞ。」と、呟いてゐたではありませんか？　さう

老いたる素戔嗚尊

一

高志の大蛇を退治した素戔嗚は、櫛名田姫を娶ると同時に、足名椎が治めてゐた部落の長となる事になつた。

足名椎は彼等夫婦の爲に、出雲の須賀へ、八廣殿を建てた。宮は千木が天雲に隱れる程大きな建築であつた。

彼は新しい妻と共に、靜な朝夕を送り始めた。風の聲も、浪の水沫も、或は夜空の星の光も、今は再彼を誘つて廣漠とした太古の天地に、さまよはせる事は出來なくなつた。既に父とならうとしてゐた彼は、この宮の太い棟木の下に、――赤と白とに綺の圖を描いた、彼の部屋の四壁の内に、高天原の國が與へなかつた爐邊を幸福に見出したのであつた

彼等は一しよに食事をしたり、未來の計畫を話し合つたりした。時時は宮のまはりにある、柏の林に歩みを運んで、その小さな花房の地に落ちたのを踏みながら、夢のやうな小鳥の啼く聲に、耳を傾ける事もあつた。彼は妻に優しかつた。聲にも、身ぶりにも、眼の中にも、昔のやうな荒荒しさは、二度と影さへも現さなかつた。

しかし稀に夢の中では、暗黑に蠢く怪物や、見えない手の揮ふ劍の光が、もう一度彼を殺伐な爭鬪の心につれて行つた。が、何時も眼がさめると、彼はすぐ妻の事や部落の事を思ひ出す程、綺麗にその夢を忘れてゐた。

間もなく彼等は父母になつた。彼はその生れた男の子に、八島士奴美と云ふ名を與へた。八島士奴美は彼よりも、女親の櫛名田姫に似て、氣立ての美しい男であつた。

月日は川のやうに流れて行つた。

その間に彼は何人かの妻を娶つて、更に多くの子の父になつた。それらの子は皆人となると、彼の命ずる儘に兵士を率ゐて、國國の部落を從へに行つた。

彼の名は子孫の殖えると共に、次第に遠くまで傳はつて行つた。國國の部落は彼のもとへ、貢を奉りに來た。それらの貢を運ぶ舟は、絹や毛革や玉と共に、須賀の宮を仰ぎに來る國國の民をも乘せてゐた。

或日彼はさう云ふ民の中に、高天原の國から來た三人の若者を發見した。彼等は皆當年の彼のやうな筋骨の逞しい男であつた。彼は彼等を宮に召して、手づから酒を飮ませてやつた。それは今まで何人も、この勇猛な部落の長から、受けたことのない待遇であつた。若者たちは始の内は、彼の意圖を量りかねて、多少の畏怖を抱いたらしかつた。しかし酒がまはり出すと、彼の所望する通り、瓮の底を打ち鳴らして、高天原の國の歌を唱つた。

彼等が宮を下る時、彼は一振の劍を取つて、

「これはおれが高志の大蛇を斬つた時、その尾の中にあつた劍だ。これをお前たちに預けるから、お前たちの故郷の女君に渡してくれい。」

と云ひつけた。

若者たちはその劍を捧げて、彼の前に跪きながら、死んでも彼の命令に背かないと云ふ誓ひを立てた。

彼はそれから獨り海邊へ行つて、彼等を乘せた舟の帆が、だんだん荒い波の向うに、遠くなつて行くのを見送つた。帆は霧を破る日の光を

そして、丁度中空を行くやうに、たつた一つ閃いてゐた。

二

しかし死は素戔嗚夫婦をも赦さなかつた。

八島士奴美がおとなしい若者になつた時、櫛名田姫はふと病に罹つて、一月ばかりの後に命を殞した。何人かの妻があつたとは云へ、彼が彼自身のやうに愛してゐたのは、やはり彼女一人だけであつた。だから彼は喪屋が出来ると、まだ美しい妻の死骸の前に、七日七晩坐つた儘、黙然と涙を流してゐた。

宮の中はその間、慟哭の声に溢れてゐた。殊に幼い須世理姫が、しつきりなく歎き悲しむ声は、宮の外を通るものさへ、涙を落さずにはゐられなかつた。彼女は――この八島士奴美のたつた一人の妹は、兄が母に似てゐる通り、情熱の烈しい父に似た、男まさりの娘であつた。

やがて櫛名田姫の亡骸は、生前彼女が用ひてゐた、玉や鏡や衣服と共に、須賀の宮から遠くない、小山の腹に埋められた。が、素戔嗚はその上に、黄泉路の彼女を慰むべく、今まで妻に仕へてゐた十一人の女たちをも、埋め殺す事を忘れなかつた。女たちは皆、装ひを凝らして、いそいそと死に急いで行つた。するとそれを見た部落の老人たちは、いづれも眉をひそめながら、私に素戔嗚の暴挙を非難し合つた。

「十一人！　尊は部落の慣習に全然無頓着で御出でなさる。第一の妃が御なくなりなすつたのに、十一人しか黄泉の御供を御させ申さないと云ふ法があらうか？　たつた皆で十一人！」

葬りが全く終つた後、素戔嗚は急に思ひ立つて、八島士奴美に世を譲つた。さうして彼自身は須世理姫と共に、遠い海の向うにある根堅洲国へ移り住んだ。

其処は彼が流浪中に、最も風土の美しいのを愛した、四面海の無人島であつた。彼はこの島の南の小山に、茅葺の宮を営ませて、安らかな余生を送る事にした。

彼は既に髪の毛が、麻のやうな色に変つてゐた。が、老年もまだ彼の力を奪ひ去る事が出来ない事は、時時彼の眼に去来する、精悍な光にも明かであつた。いや、彼の顔はどうかすると、須賀の宮にゐた時より、更に野蛮な精彩を加へる事もないではなかつた。彼は彼自身気づかなかつたが、この島に移り住んで以来、今まで彼の中に眠つてゐた野性が、何時か又眼をさまして来たのであつた。

彼は娘の須世理姫と共に、蜂や蛇を飼ひ馴らした。蜂は勿論蜜を取る為、蛇は征矢の鏃に塗るべき、劇烈な毒を得る為であつた。それから狩や漁の暇に、彼は彼の学んだ武芸や魔術を、一一須世理姫に教へ聞かせた。須世理姫はかう云ふ生活の中に、だんだん男にも負けないやうな、雄雄しい女になつて行つた。しかし姿だけは依然として、櫛名田姫の面影を止めた、気高い美しさを失はなかつた。

宮のまはりにある椋の林は、何度となく芽を吹いて、何度となく又葉を落した。其度に彼は髯だらけの顔に、愈皺の数を加へ、須世理姫は始終微笑んだ瞳に、益涼しさを加へて行つた。

三

或日素戔嗚が宮の前の、椋の木の下に坐りながら、大きな牡鹿の皮を剥いでゐると、海へ水を浴びに行つた須世理姫が、見慣れない若者と一しよに帰つて来た。

「御父様、この方に唯今御目にかかりましたから、此処まで御伴して参りました。」

須世理姫はかう云つて、やつと身を起した素

篝火に、遠い國の若者を引き合はせた。

若者は眉目の描いたやうな、肩幅の廣い男であつた。それが赤や青の頸珠を飾つて、太い高麗劒を佩いてゐる容子は、殆ど年少時代そのものが目前に現れたやうに見えた。

素戔嗚は恭しく若者の會釋を受けながら、「御前の名は何と云ふ？」と、無躾な問を抛りつけた。

「葦原醜男と申します。」

「どうしてこの島へやつて來た？」

「食物や水が欲しかつたものですから、わざわざ舟をつけたのです。」

若者は惡びれた顏もせずに、一一はつきり返事をした。

「さうか。ではあちらへ行つて、勝手に食事をするが好い。須世理姫、案内はお前に任せるから。」

二人が宮の中にはひつた時、素戔嗚は又椋の木かげに、器用に刀子を動かしながら、牡鹿の皮を剥ぎ始めた。が、彼の心は何時の間にか、妙な動搖を感じてゐた。それは丁度晴天の海に似た、今までの靜な生活の空に、嵐を先觸れる雲の影が、動からうとするやうな心もちであつた。

鹿の皮を剥ぎ終つた彼が、宮の中に歸つたのは、もう薄暗い時分であつた。彼は廣い階段を上ると、何時もの通り何氣なく、大廣間の戶口に垂れてゐる、白い帷を揭げて見た。すると須世理姫と葦原醜男とが、まるで塒を荒された、二羽の睦じい小鳥のやうに、倉皇と菅疊から身を起した。彼は苦い顏をしながら、のそのそ部屋の中へ歩を運んだが、やがて葦原醜男の顏へ、じろりと忌忌しさうな視線をやると、

「お前は今夜此處へ泊つて、舟旅の疲れを休めて行くが好い。」と、半ば命令的な言葉をかけた。

葦原醜男は彼の言葉に嬉しさうな會釋を返したが、それでもまだ何となく、間の惡げな氣色は隱せなかつた。

「ではすぐにあちらへ行つて、遠慮なく横になつてくれい。須世理姫——」

素戔嗚は娘を振り返ると、突然嘲るやうな聲を出した。

「この男を早速蜂の室へつれて行つてやるが好い。」

須世理姫は一瞬間、色を失つたやうであつた。

「早くしないか！」

父親は彼女がためらふのを見ると、荒熊のやうに唸り出した。

「はい、ではあなた、どうかこちらへ。」

葦原醜男はもう一度、丁寧に素戔嗚へ禮をすると、須世理姫の後を追つて、いそいそと大廣間を出て行つた。

四

大廣間の外へ出ると、須世理姫は肩にかけた領巾を取つて、葦原醜男の手に渡しながら囁くやうにかう云つた。

「蜂の室へ御はひりになつたら、これを三遍御振りなさいまし。さうすると蜂が刺しませんから。」

葦原醜男は何の事だか、相手の言葉がのみこめなかつた。が、問ひ返す暇もなく、須世理姫は小さな扉を開いて、室の中へ案内した。

室の中はもうまつ暗であつた。葦原醜男は其處へはひると、手さぐりに彼女を捉へようとした。が、手は僅に彼女の髮へ、指の先が觸れたばかりであつた。さうしてその次の瞬間には、慌しく扉を閉ぢる音が聞えた。

彼は領巾をたまさぐりながら、茫然と室の中に佇んでゐた。すると眼が慣れたせゐか、だんだんあたりが思つたより、薄明く見えるやうに

なつた。
その微光に透して見ると、室の天井からは何時となく、大樽程の蜂の巣が下つてゐた。しかもその巣のまはりには、彼の腰に下げた高麗劍より、更に一かさ大きい蜂が、何匹も悠悠と這ひまはつてゐた。
彼は思はず身を飜して、扉の方へ飛んで行つた。が、いくら推しても引いても、扉は開きさうな氣色さへなかつた。のみならずその時一匹の蜂は、斜に床の上へ舞ひ下ると、鈍い翅音を起しながら、次第に彼の方へ這ひ寄つて來た。
餘りの事に度を失つた彼は、まだ蜂が足もとまで來ない內に、倉皇とそれを踏み殺さうとした。しかし蜂は其途端に、一層翅音を高くしながら、彼の頭上へ舞上つた。と同時に多くの蜂も、人のけはひに腹を立てたと見えて、まるで風を迎へた火矢のやうに、ばらばらと彼の上へ落ちかかつて來た。……
須世理姫は廣間へ歸つて來ると、壁に差した松明へ火をともした。火の光は赤赤と、菅疊の上に寢ころんだ素戔嗚の姿を照らし出した。
「確に蜂の室へ入れて來たらうな？」
素戔嗚は眼を娘の顏に注ぎながら、また忌忌しさうな聲を出した。
「私は御父樣の御云ひつけに背いた事はございません。」
須世理姫は父親の眼を避けて、廣間の隅へ席を占めた。
「さうか？ では勿論これからも、おれの云ひつけは背くまいな？」
素戔嗚のから云ふ言葉の中には、皮肉な調子が交つてゐた。須世理姫は頸珠を氣にしながら、背くとも背かないとも答へなかつた。
「默つてゐるのは背く氣か？」
「いいえ。――御父樣はどうしてそんな――」
「背かない氣ならば、云ひ渡す事がある。おれはお前があの若者の妻になる事を許さないぞ。素戔嗚の娘は素戔嗚の目がねにかなつた夫を持たねばならぬ。好いか？ これだけの事を忘れるな。」
夜が既に更けた後、素戔嗚は鼾をかいてゐたが、須世理姫は獨り悄然と、廣間の窓に倚りかかりながら、赤い月が音もなく海に沈むのを見守つてゐた。

五

翌朝素戔嗚は何時もの通り、岩の多い海へ泳ぎに行つた。すると其處へ葦原醜男が、意外にも彼の後を追つて、勢よく宮の方から下つて來た。
彼は素戔嗚の姿を見ると、愉快さうな微笑を浮べながら、
「御早うございます。」と、會釋をした。
「どうだな、昨夜はよく眠られたかな？」
素戔嗚は岩角に佇んだ儘、迂散らしく相手の顏を見やつた。實際この元氣の好い若者がどうして室の蜂に殺されなかつたか？ それは全然彼自身の推測を超越してゐたのであつた。
「ええ、御かげでよく眠られました。」
葦原醜男はから答へながら、足もとに落ちてゐた岩のかけを拾つて、力一ぱい海の上へ抛り投げた。岩は長い弧線を描いて、雲の赤い空へ飛んで行つた。さうして素戔嗚が投げたにしても、屆くまいと思はれる程、遠い沖の波の中に落ちた。
素戔嗚は脣を嚙みながら、ぢつとその岩の行く方を見つめてゐた。
二人が海から歸つて來て、朝餉の膳に向つた時、素戔嗚は苦い顏をして、鹿の片腿を嚼りながら、彼と向ひ合つた葦原醜男に、
「この宮が氣に入つたら、何日でも泊つて行くが好い。」と云つた。

傍にゐた須世理姫は、この怪しい親切を辭せしむべく、そつと葦原醜男の方へ、意味ありげな瞬きを送つて見せた。が、彼は丁度その時、盤の魚に箸をつけてゐたせゐか、彼女の相圖には氣もつかずに、

「難有うございます。ではもう二三日、御厄介になりませうか。」と、嬉しさうな返事してしまつた。

しかし幸ひ午後になると、素戔嗚が晝寢をしてゐる暇に、二人の戀人は宮を拔け出て彼の獨木舟が繋いである、寂しい海邊の岩の間に、慌しい幸福を偸む事が出來た。須世理姫は香りの好い海草の上に横はりながら、暫くは唯夢のやうに、葦原醜男の顏を仰いでゐたが、やがて彼の腕を引き離すと、

「今夜も此處に御泊りなすつては、あなたの御命が危うございます。私の事なぞは御かまひなく、一刻も早く御逃げ下さいまし。」と、心配さうに促し立てた。

しかし葦原醜男は笑ひながら、子供のやうに首を振つて見せた。

「あなたが此處にゐる間は、殺されても此處を去らない心算です。」

「それでもあなたの御體に、萬一の事でもあつた日には――」

「ではすぐにも私と一しよに、この島を逃げてくれますか?」

須世理姫はためらつた。

「さもなければ私は何時までも、此處にゐる覺悟をきめてゐます。」

葦原醜男はもう一度、無理に彼女を抱きよせようとした。が、彼女は彼を突きのけると急に海草の上から身を起して、

「御父樣が呼んでゐます。」と、氣づかはしさうな聲を出した。さうして咄嗟に岩の間を、若い鹿よりも身輕さうに、宮の方へ上つて行つた。

後に殘つた葦原醜男は、まだ微笑を浮べながら、須世理姫の姿を見送つた。と、彼女の寢てゐた所には、昨夜彼が貰つたやうな、領巾がもう一枚落ちてゐた。

六

その夜素戔嗚は人手を借らず、蜂の室と向ひ合つた、もう一つの室の中に、葦原醜男を抛りこんだ。

室の中は昨日の通り、もう暗黑が擴がつてゐた。が、唯一つ昨日と違つて、その暗黑の其處此處には、まるで地の底に埋もれた無數の寶石の光のやうに、點々ときらめく物があつた。

葦原醜男は心の中に、この光物の正體を怪しみながら、暫くは眼が暗黑に慣れる時の來るのを待つてゐた。すると間もなく彼の周圍が、次第にうす明くなるにつれて、その星のやうな光物が、殆ど馬さへ吞みさうな、凄じい大蛇の眼に變つた。しかも大蛇は何匹となく、或は梁に卷きついたり、或は桁を傳はつたり、或は又床にとぐろを卷いたり、室一ぱいに氣味惡く、蠢き合つてゐるのであつた。

彼は思はず腰に下げた劍の柄に手をかけた。が、たとひ劍を拔いた所が、彼が一匹斬る内には、もう一匹が造作なく彼を卷き殺すのに違ひなかつた。いや、現に一匹の大蛇が、彼の顏を下から覗きこむと、それより更に大きい一匹は、梁に尾をからんだ儘、ずるりと宙に吊り下つて、丁度彼の肩の上へ、鎌首をさしのべてゐるのであつた。

室の扉は勿論開かなかつた。のみならずその後には、あの白髮の素戔嗚が、皮肉な微笑を浮べながら、ぢつと扉の向うの容子に耳を傾けてゐるらしかつた。葦原醜男は懸命に劍の柄を握りながら、暫時は眼ばかり動かせてゐた。その内に彼の足もとの大蛇は、徐に山のやうな

とぐろを解くと、一度に鎌首を擧げて、今にも猛然と彼の喉へ嚙みつきさうなけはひを示し出した。

この時彼の心の中には、突然光がさしたやうな氣がした。彼は昨夜蜜の蜂が、彼のまはりへ群つて來た時、須世理姫に貰つた領巾を振つて、危い命を救ふ事が出來た。して見ればさつき須世理姫が、海邊の岩の上に殘して行つた領巾にも、同じやうな奇特があるかも知れぬ。——さう思つた彼は咄嗟の間に、拾つて置いた領巾を取出して、三度ひらひらと振り廻して見た。……

翌朝素戔嗚は又石の多い海のほとりで、愈元氣の好ささうな葦原醜男と顏を合せた。

「どうだな。昨夜はよく眠られましたかな？」

「ええ、御かげでよく眠られました。」

素戔嗚は顏中に不快さうな色を漲らせて、じろりと相手を睨みつけたが、どう思つたかもう一度、何時もの冷靜な調子に返つて、

「さうか。それはよかつた。ではこれからおれと一しよに、一泳ぎ水を浴びるが好い。」と隔意なささうな聲をかけた。

二人はすぐに裸になつて、波の荒い明け方の海を、沖へ沖へと泳ぎ出した。素戔嗚は高天原の國にゐた時から、並ぶもののない泳ぎ手であつた。が、葦原醜男は彼にも增して、殆ど海豚にも劣らない程、自由自在に泳ぐ事が出來た。だから二人のみづらの頭は、黑白二羽の鷗のやうに、岩の屏風を立てた岸から、見る見る内に隔たつてしまつた。

七

海は絶えず湧き上つて、雪のやうな波の水沫を二人のまはりへ漲らせた。素戔嗚はその水沫の中に、時時葦原醜男の方へ意地惡さうな視線を投げた。が、相手は悠悠とどんなに高い波が來ても、乘り越え乘り越え進んでゐた。

それが暫く續く内に、葦原醜男は少しづつ素戔嗚より先へ進み出した。素戔嗚は私に牙を嚙んで、一尺でも彼に遲れまいとした。しかし相手は大きな波が、二三度泡を撒き散らす間に、苦もなく素戔嗚を拔いてしまつた。さうして重なる波の向うに、何時の間にか姿を隱してしまつた。

「今度こそあの男を海に沈めて、邪魔を拂はうと思つたのだが、——」

さう思ふと素戔嗚は、愈彼を殺さない内は、腹が癒えないやうな心もちになつた。

「畜生！ あんな忌忌しい浮浪人は、鱶にでも食はれてしまふが好い。」

しかし程なく葦原醜男は、彼自身がまるで鰐のやうに、樂樂とこちらへ返つて來た。

「もつと御泳ぎになりますか？」

彼は波に搖られながら、日頃に變らない微笑を浮べて、遙に素戔嗚へ聲をかけた。素戔嗚は如何に剛情を張つても、この上泳がうと云ふ氣にはなれなかつた。……

その日の午後素戔嗚は、更に葦原醜男をつれて、島の西に開いた荒野へ、狐や兎を狩りに行つた。

二人は荒野のはづれにある、小高い大岩の上へ登つた。荒野は目の及ぶ限り、二人の後から吹下す風に、枯草の波を靡かせてゐた。素戔嗚は少時默然と、さう云ふ景色を見守つた後、弓に矢を番へながら、葦原醜男を振り返つた。

「風があつては都合が惡いが、兎に角どちらの矢が遠く行くか、お前と弓勢を比べて見よう。」

「ええ、比べて見ませう。」

葦原醜男は弓矢を執つても、自信のあるらしい容子であつた。

「好いか？ 同時に射るのだぞ。」

二人は肩を並べながら、力一ぱい弓を引き絞

つて、さうして同時に切つて離した。矢は波立つた荒野の上へ、一文字に遠く飛んで行つた。が、どちらが先へ行つたともなく、唯一度日の光にきらりと矢羽根が光つた儘、忽ち風下の空に紛れて、二本とも一しよに消えてしまつた。

「勝負があつたか？」

「いいえ。──もう一度やつて見ませうか？」

素戔嗚は眉をひそめながら、苛立たしさうに頭を振つた。

「何度やつても同じ事だ。それより面倒でも一走り、おれの矢を探しに行つてくれい。あれは高天原の國から來た、おれの大事な丹塗の矢だ。」

葦原醜男は云ひつかつた通り、風に鳴る荒野へ飛びこんで行つた。すると素戔嗚はその後姿が、高い茅草に隱れるや否や、腰に下げた袋の中から、手早く火打鎌と石とを出して、岩の下の枯茨へ火を放つた。

八

色のない焰は瞬く内に、濛濛と黑煙を擧げ始めた。と同時にその煙の下から、茨や小篠の燒ける音が、けたたましく耳を彈き出した。

「今度こそあの男を片づけたぞ。」

素戔嗚は高い岩の上に、ぢつと弓杖をつきながら、兇猛な微笑を浮べてゐた。

火は益燃え擴がつた。鳥は苦しさうに鳴きながら、何羽も赤黑い空へ舞ひ上つた。が、すぐに又煙に卷かれて、紛紛と火の中へ落ちて行つた。それがまるで遠くからは、嵐に振はれた無數の木の實が、しつきりなくこぼれ飛ぶやうに見えた。

「今度こそあの男を片づけたぞ。」

素戔嗚はかう心の中に、もう一度凱歌の吐息を洩らすと、何故か云ひやうのない寂しさがかすかに湧いて來るやうな心もちがした。……

その日の薄暮、勝ち誇つた彼は腕を組んで、宮の門に佇みながら、まだ煙の迷つてゐる荒野の空を眺めてゐた。すると其處へ須世理姫が、夕餉の支度の出來たことを氣がなささうに報じに來た。彼女は近親の喪を弔ふやうに、何時の間にかまつ白な裳を夕明りの中に引きずつてゐた。

素戔嗚はその姿を見ると、急に彼女の悲しさを踏みにじりたいやうな氣がし出した。

「あの空を見ろ。葦原醜男は今時分──」

「存じて居ります。」

須世理姫は眼を伏せてゐたが、思ひの外はつきりと、父親の言葉を遮つた。

「さうか？ではさぞかし悲しからうな？」

「悲しうございます。よしんば御父樣が御歿くなりなすつても、これ程悲しくはございますまい。」

素戔嗚は色を變へて、須世理姫の顏を睨みつけた。が、それ以上彼女を懲らす事は、どう云ふものか出來なかつた。

「悲しければ、勝手に泣くが好い。」

彼は須世理姫に背を向けて、荒荒しく門の内へはひつて行つた。さうして宮の階段を上りながら、忌忌しさうに舌を打つた。

「何時ものおれなら口も利かずに、打ちのめしてやる所なのだが……」

須世理姫は彼の去つた後も、暫くは、暗く火照つた空へ、涙ぐんだ眼を擧げてゐたが、やがて頭を垂れながら、悄然と宮へ歸つて行つた。

その夜素戔嗚は何時までも、眠に就く事が出來なかつた。それは葦原醜男を殺した事が何となく彼の心の底へ毒をさしたやうな氣がするからであつた。

「おれは今までにもあの男を何度殺さうと思つたかわからない。しかしまだ今夜のやうに妙な

氣のした事はないのだが……」

彼はこんな事を考へながら、靑い匂のする菅疊の上に、幾度となく寢返りを打つた。眠はそれでも彼の上へ、容易に下らうとはしなかつた。

その間に寂しい曉は早くも暗い海の向うに、うすら寒い色を擴げ出した。

九

翌朝もう朝日の光が、海一ぱいに當つてゐる頃であつた、まだ寢の足りない素戔嗚は眩しさうに眉をひそめながら、のそのそ宮の戸口へ出かけて來た。すると其處の階段の上には、驚くまい事か、葦原醜男が、須世理姫と一しよに腰をかけて、何事か嬉しさうに話し合つてゐた。

二人も素戔嗚の姿を見ると、吃驚したらしい容子であつた。が、すぐに葦原醜男は變相不快活に身を起して、一筋の丹塗矢をさし出しながら、

「幸ひ矢も見つかりました。」と、云つた。

素戔嗚はまだ驚きが止まなかつた。しかしその中にも何となく、無事な若者の顏を見るのが、悦ばしいやうな心もちもした。

「よく怪我をしなかつたな？」

「ええ。全く偶然助かりました。あの火事が燃えて來たのは、丁度私がこの丹塗矢を拾ひ上げた時だつたのです。私は煙の中をくぐりながら、兎も角火のつかない方へ、一生懸命に逃げて行きましたが、いくらあせつて見た所が、到底西風に煽られる火よりも早くは走られません。……」

葦原醜男はちよいと言葉を切つて、彼の話に聞き入つてゐる親子の顏へ微笑を送つた。

「そこでもう今度は燒け死ぬに違ひないと、覺悟をきめた時でした。走つてゐる内にどうしたはずみか、急に足もとの土が崩れると、大きな穴の中へ落ちこんだのです。穴の中は最初まつ暗でしたが、緣の枯草が燃えるやうになると、忽ち底まで明くなりました。見ると私のまはりには、何百匹とも知れない野鼠が、土の色も見えない程ひしめき合つてゐるのです。……」

「まあ、野鼠でよろしうございました。それが蝮でもございましたら……」

須世理姫の眼の中には、涙と笑とが剎那の間、同時に動いたやうであつた。

「いや、野鼠でも莫迦にはなりません。この丹塗矢に羽根のないのは、その時みんな食はれたのです。が、仕合せと火事は何事もなく、穴の外を燒き通つてしまひました。」

素戔嗚はこの話を聞いてゐる内に、だんだん又この幸運な若者を憎む心が動いて來た。のみならず、一度殺さうと思つた以上、どうしてもその目的を遂げない中は、昔から挫折した覺えない意力の誇りが滿足しなかつた。

「さうか。それは運が好かつたな。が、運と云ふものは、何時風向きが變るかわからないものだ。……が、そんな事はどうでも好い。兎に角命が助つたのなら、おれと一しよにこちらへ來て、頭の虱をとつてくれい。」

葦原醜男と須世理姫とは、仕方なく彼の後について、朝日の光のさしこんでゐる、大廣間の白い帷をくぐつた。

素戔嗚は廣間のまん中に、不機嫌らしい大あぐらを組むと、みづらに結んだ髮を解いて無造作に床の上に垂らした。素枯れた蘆の色をした髮は、殆ど川のやうに長かつた。

「おれの虱はちと手強いぞ。」

かう云ふ彼の言葉を聞き流しながら、葦原醜男はその白髮を分けて、見つけ次第虱を捻らうとした。が、髮の根に蠢いてゐるのは、小さな虱と思ひの外、銅色の、毒毒しい、大きな百足ばかりであつた。

十

葦原醜男はためらつた。すると側にゐた須世理姫が、何時の間に忍ばせて持つて來たか一握りの椋の實と赤土とをそつと彼の手へ渡した。彼はそこで齒を鳴らして、その椋の實を嚙みつぶしながら、赤土も一しよに口へ含んで、さも百足をとつてゐるらしく、床の上へ吐き出し始めた。

その内に素戔嗚は、昨夕寢なかつた疲れが出て、我知らずにうとうと眠にはひつた。

……高天原の國を逐はれた素戔嗚は、爪を剝がれた足に岩を踏んで、嶮しい山路を登つてゐた。岩むらの羊齒、鴉の聲、それから冷たい鋼色の空、――彼の眼に入る限りの風物は、悉く荒涼それ自身であつた。

「おれに何の罪があるか？　おれは彼等よりも強かつた。が、強かつた事は罪ではない。罪は寧ろ彼等にある。嫉妬心の深い、陰險な、男らしくもない彼等にある。」

彼はかう憤りながら、暫く苦しい歩みを續けて行つた。と、路を遮つた、龜の背のやうな大岩の上に、六つの鈴のついてゐる、白銅鏡が一面のせてあつた。彼はその岩の前に足をとめると、何氣なく鏡へ眼を落した。鏡は冴え渡つた面の上に、ありありと年若い顏を映した。が、それは彼の顏ではなく、彼が何度も殺さうとした、葦原醜男の顏であつた。……さう思ふと、急に夢がさめた。

彼は大きな眼を開いて、廣間の中を見廻した。廣間には唯朝日の光が、うららかにさしてゐるばかりで、葦原醜男も須世理姫も、どうしたか姿が見えなかつた。のみならずふと氣がついて見ると、彼の長い髮は三つに分けて、天井の椽に括りつけてあつた。

「卑怯ものめ！」

咄嗟に一切を悟つた彼は、稜威の雄たけびを發しながら、力一ぱい頭を振つた。すると忽ち宮の屋根には、雷よりも凄まじい響が起つた。それは髮を括りつけた、三本の椽が三本とも一時にひしげ飛んだ響であつた。しかし素戔嗚は耳にもかけず、まづ右手をさし伸べて太い天の鹿兒弓を取つた。それから左手をさし伸べて、天の羽羽矢の靫を取つた。最後に兩足へ力を入れて、うんと一息に立ち上ると、三本の椽を引きずりながら、雲の峰の崩れるやうに、傲然と宮の外へ搖ぎ出した。

宮のまはりの椋の林は、彼の足音に鳴りどよんだ。それは梢に巣食つた栗鼠も、ばらばらと大地へ落ちる程であつた。彼はその椋の木の間を、嵐のやうに通り拔けた。林の外は切り岸の上、切り岸の下は海であつた。彼は其處に立ちはだかると、眉の上に手をやりながら、廣い海を睨め渡した。海は高い浪の向うに、日輪さへかすかに蒼ませてゐた。そのまた浪の重なつた中には、見覺えのある獨木舟が一艘、沖へ沖へと出る所だつた。

素戔嗚は弓杖をついたなり、ぢつとこの舟へ眼を注いだ。舟は彼を嘲るやうに、小さい筵帆を光らせながら、輕輕と浪を乘り越えて行つた。のみならず艫には葦原醜男、舳には須世理姫の乘つてゐる容子も手にとるやうに見る事が出來た。

素戔嗚は天の鹿兒弓に、しづしづと天の羽羽矢を番へた。弓は見る見る引き絞られ、鏃は日の下の獨木舟に向つた。が、矢は一文字に保たれた儘、容易に弦を離れなかつた。その内に何時か彼の眼には、微笑に似たものが浮び出した。微笑に似た、――しかし其處には同時に又、涙に似たものもないではなかつた。彼は肩を聳やかせた後、無造作に弓矢を抛り出した。それから、――さも堪へ兼ねたやうに、瀧よりも大きい笑

ひ声を放つた。

—おれはお前たちを祝ぐぞ！—

素戔嗚は高い切り岸の上から、遙かに二人をさし招いだ。

「おれよりももつと手力を養へ。おれよりももつと智慧を磨け。おれよりももつと、……」

素戔嗚はちよいとためらつた後、底力のある声に祝ぎ続けた。

「おれよりももつと仕合せになれ！—

彼の言葉は風と共に、海原の上へ響き渡つた。この時わが素戔嗚は、大日孁貴と争つた時より、高天原の国を逐はれた時より、高志の大蛇を斬つた時より、ずつと天上の神々に近い、悠悠たる威厳に充ち満ちてゐた。

×

藝術活動はどんな天才でも、意識的なものなのだ。と云ふ意味は、倪雲林が石上の松を描く時に、その松の枝を悉く途方もなく一方へ伸したとする。その時その松の枝を伸した事が、どうして或効果を画面に與へるか、それは雲林も知つてゐたかどうか分らない。が、伸した為に或効果が生ずる事は、百も承知してゐたのだ。もし承知してゐなかつたとしたら、雲林は、天才でも何でもない。唯、一種の自働偶人なのだ。

×

無意識的藝術活動とは、燕の子安貝の異名に過ぎぬ。だからこそロダンはアンスピラシオンを軽蔑したのだ。

×

昔セザンヌは、ドラクロアが好い加減な所に花を描いたと云ふ批評を聞いて、むきになつて反対した事がある。セザンヌは唯、ドラクロアを論じるつもりだつたかも知れぬ。が、その反対の中にはセザンヌ自身の面目が、明明白地に顕れてゐる。藝術的感激を論ずべき或必然の方則を捉へる為なら、白汗百回するのも辞せなかつた、あの恐るべきセザンヌの面目が。

×

この必然の方則を活用する事が、即ち謂ふ所の技巧なのだ。だから技巧を軽蔑するものは、始から藝術が分らないか、さもなければ技巧と云ふ言葉を悪い意味に使つてゐるか、この二者の外に出でぬと思ふ。悪い意味に使つて置いて、いかんいかんと威張つてゐるのは、菜食を吝嗇の別名だと思つて、天下の菜食論者を悉しみつたれ呼はりするのと同じ事だ。そんな軽蔑が往往になる。凡て藝術家はいやが上にも技巧を磨くべきものだ。前の倪雲林の例で云へば、或効果を生ずる為に松の枝を一方に伸すと云ふこつを、いやが上にも呑みこむべきものだ。霊魂で書く、生命で書く。——さう云ふ金箔ばかりけばけばしい言葉は、中學生にのみ向つて説教するが好い。

×

危険なのは技巧ではない。技巧を駆使する小器用さなのだ。小器用さは真面目さの足りない所を胡麻化し易い。恥しいが僕の作品の中にはさう云ふ器用さだけの作品も交つてゐる。これは恐らく如何なる僕の敵と雖も、喜んで認める真理だらう。だが——

×

僕の安住したがる性質は、上品に納り返つてゐるとその儘僕を風流の魔子に堕落させる惧がある。この性質が吹き切らない限り、僕は人にも僕自身にも僕の信ずる所をはつきりさせて、自他に対する意地づくからも、僕の出来る事を塞がねばならぬ。僕がこんな饒舌を弄する気になつたのもその為だ。追追僕も一生懸命にならないと浮ばれない時が近づくらしい。

（『點心』の「藝術その他」より）

一塊の土

お住の倅に死別れたのは茶摘みのはじまる時候だつた。倅の仁太郎は足かけ八年、腰ぬけ同様に床に就いてゐた。かう云ふ倅の死んだことは「後生よし」と云はれるお住にも、悲しいとばかりは限らなかつた。お住は仁太郎の棺の前へ一本線香を手向けた時には、兎に角朝比奈の切通しか何かをやつと通り拔けたやうな氣がしてゐた。

仁太郎の葬式をすました後、まづ問題になつたものは嫁のお民の身の上だつた。お民には男の子が一人あつた。その上寢てゐる仁太郎の代りに野良仕事も大抵は引受けてゐた。それを今出すとすれば、子供の世話に困るのは勿論、暮しさへ到底立ちさうにはなかつた。かたがたお住は四十九日でもすんだら、お民に壻を當がつた上、倅のゐた時と同じやうに働いて貰はうと思つてゐた。壻には仁太郎の從弟に當る與吉を貰へばとも思つてゐた。

それだけに丁度初七日の翌朝、お民の片づけものをし出した時には、お住の驚いたのも格別だつた。お住はその時孫の廣次を奥部屋の縁側に遊ばせてゐた。遊ばせる玩具は學校のを盗んだ花盛りの櫻の一枝だつた。

「なう、お民、おらあけふまで默つてゐたのは惡いけんど、お前はよう、この子とおらとを置いたまんま、はえ、出て行つてしまふのかよう？」

お住は詰ると云ふよりは訴へるやうに聲をかけた。が、お民は見向きもせずに、「何を云ふぢやあ、おばあさん」と笑ひ聲を出したばかりだつた。それでもお住はどの位ほつとしたことだか知れなかつた。

「さうずらなう。まさかそんなことをしやしめえなう。……」

お住はなほくどくどと愚癡まじりの歎願を繰り返した。同時に又彼女自身の言葉にだんだん感傷を催し出した。しまひには涙も幾すぢか皺だらけの頰を傳はりはじめた。

「はいさね。わしもお前さんさへ好けりや、いつまでもこの家にゐる氣だわね。――かう云ふ子供もあるだものう、すき好んで外へ行くもんぢやよう。」

お民もいつか涙ぐみながら、廣次を膝の上へ抱き上げたりした。廣次は妙に恥しさうに、奥部屋の古疊へ投げ出された櫻の枝ばかり氣にしてゐた。……

お民は仁太郎の在世中と少しも變らずに働きつづけた。しかし壻をとる話は思つたよりも容易に片づかなかつた。お民は全然この話に何の興味もないらしかつた。お住は勿論機會さへあれば、そつとお民の氣を引いて見たり、あらはに相談を持ちかけたりした。けれどもお民はその度ごとに、「はいさね、いづれ來年にでもなつたら」と好い加減な返事をするばかりだつた。これはお住には心配でもあれば、嬉しくもあるのに違ひなかつた。お住は世間に氣を兼ねながら、兎に角嫁の云ふなり次第に年の變るのでも待つことにした。

けれどもお民は翌年になつても、やはり野良へ出かける外には何の考へもないらしかつた。お住はもう一度去年よりは一層願にかけたやうに壻をとる話を勸め出した。それは一つには親戚には叱られ、世間にはかげ口をきかれるのを

苦に病んでゐたこともあるのだつた。
「だがなう、お民、お前今の若さでさ、男なしにやゐられるもんぢやなえよ。」
「ゐられなえたつて、仕かたがなえぢや。この中へ他人でも入れて見なせえ、廣も可哀さうだし、お前さんも氣兼だし、第一わしの氣骨の折れることせつたら、ちつとやそつとぢやなからうわね。」
「だからよ、與吉を貰ふことにしなよ。あいつもお前この頃ぢや、ばつたり博奕を打たねえと云ふぢやあ。」
「そりやおばあさんには身内でもよ、わしにややつぱし他人だわね。何、わしさへ我慢すりや……」
「でもよ、その我慢がさあ、一年や二年ぢやなえからよう。」
「好いわね。廣の爲だものう。わしが今苦しんどきや、此處の家の田地は二つにならずに そつくり廣の手へ渡るだものう。」
「だがなう、お民、（お住はいつも此處へ來ると、眞面目に膝を進めるのだつた。何しろはたの口がうるせえからなう。お前今おらの前で云つたことはそつくり他人にも聞かせてくんなよ。……」

かう云ふ問答は二人の間に何度出たことだかわからなかつた。しかしお民の決心はその爲に强まることはあつても、弱まることはないらしかつた。實際又お民は男手も借りずに、芋を植ゑたり麥を刈つたり、以前よりも仕事に精を出してゐた。のみならず夏には牝牛を飼ひ、雨の日でも草刈りに出かけたりした。この烈しい働きぶりは今更他人を入れることに對する、それ自身力強い抗議だつた。お住もとうとうしまひには壻を取る話を斷念した。尤も斷念することだけは必しも彼女には不愉快ではなかつた。

お民は女の手一つに一家の暮しを支へつづけた。それには勿論「廣の爲」と云ふ一念もあるのに違ひなかつた。しかし又一つには彼女の心に深い根さしを下ろしてゐた遺傳の力もあるらしかつた。お民は不毛の山國からこの界隈へ移住して來た所謂「渡りもの」の娘だつた。「お前さんとこのお民さんは顔に似合はなえ力があるねえ。この間も陸稻の大束を四把づつも背負つて通つたぢやなえかね。」お住は隣の婆さんなどからそんなことを聞かされるのも度たびだつた。

お住は又お民に對する感謝を僅かの仕事に表はさうとした。孫を遊ばせたり、牛の世話をしたり、飯を炊いたり、洗濯をしたり、隣へ水を汲みに行つたり、——家の中の仕事も少くはなかつた。しかしお住は腰を曲げたまま、何かと樂しさうに働いてゐた。

或秋も暮れかかつた夜、お民は松葉束を抱へながら、やつと家へ歸つて來た。お住は廣次をおぶつたなり、丁度狹苦しい土間の隅に据風呂の下を焚きつけてゐた。
「寒かつつらなう。晩かつたぢやあ？」
「けふはちつといつもよりや、餘計な仕事をしてゐたぢやあ。」
お民は松葉束を流しもとへ投げ出し、それから泥だらけの草鞋も脱がずに、大きい爐側へ上りこんだ。爐の中には櫟の根つこが一つ、赤あかと炎を動かしてゐた。お住は直に立ち上らうとした。が、廣次をおぶつた腰は風呂桶の縁につかまらない限り、容易に上げることも出來ないのだつた。
「直と風呂へはえんなよ。」
「風呂よりもわしは腹が減つてるよ。どら、さきに藷でも食ふべえ。——煮てあるらねえ？

「おばあさん。」
　お住はよちよち流し元へ行き、惣菜に煮た薩摩薯を鍋ごと爐側へぶら下げて來た。
「とうに煮て待つてたせえにの、はえ、冷たくなつてるよう。」
　二人は薯を竹串へ突き刺し、一しよに爐の火へかざし出した。
「廣はよく眠つてるぢや。床の中へ轉かして置きや好いに。」
「なあん、けふは莫迦寒いから、下ぢやとても寢つかなえよう。」
　お民はかう云ふ間にも煙の出る薯を頬張りはじめた。それは一日の勞働に疲れた農夫だけの知つてゐる食ひかただつた。薯は竹串を拔かれる側から、一口にお民に頬張られて行つた。お住は小さい鼾を立てる廣次の重みを感じながら、せつせと薯を炙りつづけた。
「何しろお前のやうに働くんぢや　人一倍腹も減るらなあ。」
　お住は時時嫁の顏へ感歎に滿ちた目を注いだ。しかしお民は無言のまま、煤けた榾火の光りの中にがつがつ薩摩薯を頬張つてゐた。

　お民は愈骨身を惜しまず、男の仕事を奪ひつづけた。時には夜もカンテラの光りに菜などをうろ拔いて廻ることもあつた。お住はかう云ふ男まさりの嫁にいつも敬意を感じてゐた。いや、敬意と云ふよりも寧ろ畏怖を感じてゐた。お民は野や山の仕事の外は何でもお住に押しつけ切りだつた。この頃ではもう彼女自身の腰卷さへ滅多に洗つたことはなかつた。お住はそれでも苦情を云はずに、曲つた腰を伸ばし伸ばし、一生懸命に働いてゐた。のみならず隣の婆さんにでも遇へば、「何しろお民があ云ふ風だから、はえ、わたしはいつ死んでも、家に苦勞は入らなえよう」と、眞顏に嫁のことを褒めちぎつてゐた。
　しかしお民の「稼ぎ病」は容易に滿足しないらしかつた。お民は又一つ年を越すと、今度は川向うの桑畑へも手を擴げると云ひはじめた、何でもお民の言葉によれば、あの五段歩に近い畑を十圓ばかりの小作に出　てゐるのはどう考へても莫迦莫迦しい。それよりもあそこに桑を作り、養蠶を片手間にやるとすれば、繭相場に變動の起らない限り、きつと年に百五十圓は手取りに出來るとか云ふことだつた。けれども金は欲しいにもしろ、この上忙しい思ひをすることは到底お住には堪へられなかつた。殊に手間のかかる養蠶などには出來ない相談も度を越してゐた。お住はとうとう愚癡まじりにかうお民に反抗した。
「好いかの、お民。おらだつて逃げる譯ぢやなえ。逃げる譯ぢやねえけどもの、男手はなえし、泣きつ兒はあるし、今のまんまでせえ荷が過ぎてらあの。それをお前飛んでもなえ、何で養蠶が出來るもんぢや？　ちつとはお前おらのことも考へて見てくんなよう。」
　お民は姑に泣かれて見ると、それでもとは云はれた義理ではなかつた。しかし養蠶は斷念したものの、桑畑を作ることだけは強情に我意を張り通した。「好いわね。どうせ畑へはわし一人出りやすむんだから。」――お民は不服さうにお住を見ながら、こんな當つこすりも呟いたりした。
　お住は又この時以來、壻を取る話を考へ出した。以前にも暮しを心配したり、世間を兼ねたりした爲に、壻をと思つたことは度たびあつた。しかし今度は片時でも留守居役の苦しみを逃れたさに、壻をと思ひはじめたのだつた。それだけに以前に比べれば、今度の壻を取りたさはどの位痛切だか知れなかつた。

丁度裏の蠶豆畑が一ぱいに花をつける頃、ランプの前に陣取つたお住は大きい夜なべの眼鏡越しに、そろそろこの話を持ち出して見た。しかし爐側に胡坐をかいたお民は鹽豌豆を嚙みながら、「又婿話かね、わしは知らねえよう」と相手になる氣色も見せなかつた。以前のお住ならばこれだけでも、大抵あきらめてしまふ所だつた。が、今度は今度だけに、お住もねちねち口說き出した。

「でもの、さうばかり云つちやゐられなえぢやや。あしたの宮下の葬式にやの、丁度今度はおら等の家もお墓の穴掘り役に當つてるがの。かう云ふ時に男手のなえのは、……」

「好いわね。掘り役にやわしが出るわね。」

「まさか、お前、女の癖に、――」

お住はわざと笑はうとした。が、お民の顏を見ると、うつかり笑ふのも考へものだつた。

「おばあさん、お前さん隱居でもしたくなつたんぢやあるまえね？」

お民は胡坐の膝を抱いたなり、冷かにかう釘を刺した。突然急所を衝かれたお住は思はず大きい眼鏡を外した。しかし何の爲に外したかは彼女自身にもわからなかつた。

「なあん、お前、そんなことを！」

「お前さん廣次のお父さんの死んだ時に、自分でも云つたことを忘れやしまえね？　此處の家の田地を二つにしちや、御先祖樣にもすまなえつて、……」

「ああさ。そりやさう云つたぢやや。でもの、まあ考へて見ば。時世時節と云ふこともあるら。こりやどうにも仕かたのなえこんだの。……」

お住は一生懸命に男手の入ることを辯じつづけた。が、兎に角お住の意見は彼女自身の耳にさへ尤もらしい響を傳へなかつた。それは第一に彼女の本音、――つまり彼女の樂になりたさを持ち出すことの出來ない爲だつた。お民は又其處を見つけ所に、不相變鹽からい豌豆を嚙み嚙み、ぴしぴし姑をきめつけにかかつた。のみならずこれにはお住の知らない天性の口達者も手傳つてゐた。

「お前さんはそれでも好からうさ。先に死んでしまふだから。――だがね、おばあさん、わしの身になりや、さう云つてふて腐つちやゐられなえぢやあ。わしだつて何も晴れや自慢で、後家を通してる譯ぢやなえよ。骨節が痛んで寢られなえ晩なんか、莫迦意地を張つたつて仕かたがなえと、しみじみ思ふこともなえぢやなえ。そりやなえぢやなえけんどね。これもみんな家の爲だ、廣の爲だと考へ直して、やつぱし泣き泣きやつてるだあよ。……」

お住は唯茫然と嫁の顏ばかり眺めてゐた。そのうちにいつか彼女の心ははつきりと或事實を捉へ出した。それは如何にあがいて見ても、到底目をつぶるまでは樂は出來ないと云ふ事實だつた。お住は嫁のしやべりやんだ後、もう一度大きい眼鏡をかけた。それから半ば獨語のやうにかう話の結末をつけた。

「だがの、お民、中中お前世の中のことは理窟ばつかしぢや行かなえせえに、とつくりお前も考へて見てくんなよ。おらはもう何とも云はなえからの。」

二十分の後、誰か村の若衆が一人、中音に唄をうたひながら、靜にこの家の前を通りすぎた。「若い叔母さんけふは草刈りか。草よ靡けよ。鎌切れろ。」――唄の聲の遠のいた時、お住はもう一度眼鏡越しに、ちらりとお民の顏を眺めた。が、お民はランプの向うに長ながと足を伸ばしたまま、生欠伸をしてゐるばかりだつた。

「どら、寢べえ。朝か早えに。」

お民はやつとかう云つたと思ふと、鹽豌豆を一摑みさらつた後、大儀さうに爐側を立ち上つた。……

お住はその後三四年の間、默默と苦しみに堪へつづけた。それは云はばはやり切つた馬と同じ軛を背負はされた老馬の經驗する苦しみだつた。お民は不相變家を外にせつせと野良仕事にかかつてゐた。お住もはた目には不相變小まめに留守居役を勤めてゐた。しかし見えない鞭の影は絶えず彼女を脅やかしてゐた。或時は風呂を焚かなかつた爲に、或時は籾を干し忘れた爲に、或時は牛の放れた爲に、お住はいつも氣の強いお民に當てこすりや小言を云はれ勝ちだつた。が、彼女は言葉も返さず、ぢつと苦しみに堪へつづけた。それは一つには忍從に慣れた精神を持つてゐたからだつた。又二つには孫の廣次が母よりも寧ろ祖母の彼女に餘計なついてゐたからだつた。

　お住は實際はた目には殆ど以前に變らなかつた。もし少しでも變つたとすれば、それは唯以前のやうに嫁のことを褒めないばかりだつた。けれどもかう云ふ些細の變化に格別人目を引かなかつた。少くとも隣のばあさんなどにはいつも「後生よし」のお住だつた。

　或夏の日の照りつけた眞晝、お住は納屋の前を覆つた葡萄棚の葉の蔭に隣のばあさんと話してゐた。あたりは牛部屋の蠅の聲の外に何の物音も聞えなかつた。隣のばあさんは話をしながら、短い卷煙草を吸つたりした。それは倅の吸ひ殼を丹念に集めて來たものだつた。

「お民さんはえ？　ふうん、干し草刈りにの？　若えのにまあ、何でもするなう。」

「なあん、女にや外へ出るよか、内の仕事が一番好いだよう。」

「いいや、畠仕事の好きなのは何よりだよう。わしの嫁なんか祝言から、はえ、これもう七年が間、畠へはおろか草むしりせえ、唯の一日も出たことはなえわね。子供の物の洗濯だあの、自分の物の仕直しだあのって、毎日永の日を暮らしてらあね。」

「そりやその方が好いだよう。子供のなりも見好くしたり、自分も小綺麗になつたりするはやつぱし浮世の飾りだよう。」

「でもさあ、今の若え者は一體に野良仕事が嫌ひだよう。——おや、何ずら、今の音は？」

「今の音はえ？　ありやお前さん、牛の屁だわね。」

「牛の屁かえ？　ふんたうにまあ。——尤も炎天に甲羅を干し干し、粟の草取りをするのなんか、若え時にや辛いからね。」

　二人の老婆はかう云ふ風に大抵平和に話し合ふのだつた。

　仁太郎の死後八年餘り、お民は女の手一つに一家の暮らしを支へつづけた。同時に又いつかお民の名は一村の外へも弘がり出した。お民はもう「稼ぎ病」に夜も日も明けない若後家ではなかつた。況や村の若い衆などの「若い小母さん」ではなほ更なかつた。その代りに嫁の手本だつた。今の世の貞女の鑑だつた。「澤向うのお民さんを見ろ。」——さう云ふ言葉は小言と一しよに誰の口からも出る位だつた。お住は彼女の苦しみを隣の婆さんにさへ訴へなかつた。訴へたいとも亦思はなかつた。しかし彼女の心の底に、はつきり意識しなかつたにしろ、何處か天道を當にしてゐた。その賴みもとうとう水の泡になつた。今はもう孫の廣次より外に賴みになるものは一つもなかつた。お住は十二三になつた孫へ必死の愛を傾けかけた。けれどももとの最後の賴みも途絶えさうになることは度たびだつた。

　或秋晴のつづいた午後、本包みを抱へた孫の

廣次は、あたふた學校から歸つて來た。お住は丁度納屋の前に器用に庖丁を動かしながら、蜂屋柿を吊し柿に拵へてゐた。廣次は栗の粒を干した筵を身輕に一枚飛び越えたと思ふと、ちやんと兩足を揃へたまま、ちよつと祖母に擧手の禮をした。それから何の次穗もなしに、から眞面目に尋ねかけた。

「ねえ、おばあさん。おらのお母さんはうんと偉い人かい？」

「なぜや？」

お住は庖丁の手を休めるなり、孫の顏を見つめずにはゐられなかつた。

「だつて先生がの、修身の時間にさう云つたぜ。廣次のお母さんはこの近在に二人とない偉い人だつて。」

「先生がの？」

「うん、先生が。譃だなう？」

お住はまづ狼狽した。孫さへ學校の先生などにそんな大譃を敎へられてゐる、――實際お住にはこの位意外な出來事はないのだつた。が、一瞬の狼狽の後、發作的の怒に襲はれたお住は別人のやうにお民を罵り出した。

「おお、譃だとも、譃の皮だわ。お前のお母さんと云ふ人はな、外でばつか働くせえに、人前は偉く好いけれどな、心はうんと惡な人だわ。おばあさんばつか追ひ廻してな、氣ばつか無暗と強くつてな、……」

廣次は唯驚いたやうに、色を變へた祖母を眺めてゐた。そのうちにお住は反動の來たのか、忽ち又涙をこぼしはじめた。

「だからな、このおばあさんは、われ一人を賴みに生きてゐるだぞ。わりやそれを忘れるぢやなえぞ。われもやがて十七になつたら、すぐに嫁を貰つてな、おばあさんに息をさせるやうにするんだぞ。お母さんは徵兵がすむまぢやあなんか、氣の長えことを云つてるがな、どうしてどうして待てるもんか！ 好いか？ わりやおばあさんにお父さんと二人分孝行するだぞ。さうすりやおばあさんも惡いやうにやしなえ。何でもわれにくれてやるからな。……」

「この柿も熟んだら、おらにくれる？」

廣次はもうもの欲しさうに籠の中の柿をいぢつてゐた。

「おおさえ。くれなえで。わりや年は行かねえでも、何でもよくわかつてる。いつまでもその氣をなくなすぢやなえぞ。」

お住は涙を流し流し、吃逆をするやうに笑ひ出した。……

から云ふ小事件のあつた翌晩、お住はとうとうちよつとしたことから、お民とも烈しいいさかひをした。ちよつとしたこととはお民の食ふ藷をお住の食つたとか云ふことだけだつた。しかしだんだん云ひ募るうちに、お民は冷笑を浮べながら、「お前さん働くのが厭になつたら、死ぬより外はなえよ」と云つた。するとお住は日頃に似合はず、氣違ひのやうに吼り出した。丁度この時孫の廣次は祖母の膝を枕にしたまま、とうにすやすや寢入つてゐた。が、お住はその孫さへ、「廣、から、起きろ」と搖すり起した上、いつまでもかう罵りつづけた。

「廣、から、起きろ。廣、から、起きて、お母さんの云ひ草を聞いてくよう。お母さんはおらに死ねつて云つてゐるぞ。な、よく聞け。そりやお母さんの代になつて、錢は少しは殖えつらけんど、一町三段の畠は、ありやみんなおぢいさんとおばあさんとの開墾したもんだぞ。そりようどうだ？ お母さんは樂がしたけりや死ねつて云つてるぞ。――お民、おらは死ぬべえよう。何の死ぬことが怖いもんぢや。いいや、手前の指圖なんか受けなえ。おらは死ぬだ。どうあつても死ぬだ。死んで手前にとつ著いてやるだ。……」

お住は大聲に罵り罵り、泣き出した孫と抱き

合つてゐた。が、お民は不相變ごろりと爐側へ寢ころんだなり、そら耳を走らせてゐるばかりだつた。

けれどもお住は死ななかつた。その代りに翌年の土用明け前、丈夫自慢のお民は腸チブスに罹り、發病後八日目に死んでしまつた。尤も當時腸チブス患者はこの小さい一村の中にも何人出たかわからなかつた。しかもお民は發病する前に、やはりチブスの爲に倒れた鍛冶屋の葬式の穴掘り役に行つた。鍛冶屋にはまだ葬式の日にやつと避病院へ送られる弟子の小僧も殘つてゐた。「あの時にきつと傳染つたずら」――お住は醫者の歸つた後、顏をまつ赤にした患者のお民にかう非難を仄かせたりした。

お民の葬式の日は雨降りだつた。しかし村のものは村長を始め、一人も殘らず會葬した。會葬したものは又一人も殘らず若死したお民を惜しんだり、大事の稼ぎ人を失つた廣次やお住を憐んだりした。殊に村の總代役は郡でも近近にお民の勤勞を表彰する筈だつたと云ふことを話した。お住は唯さう云ふ言葉に頭を下げるより外はなかつた。「まあ運だとあきらめるだよ。わし等もお民さんの表彰に就いちや、去年から郡役所へ願ひ狀を出すしさ、村長さんやわしは汽車賃を使つて五度も郡長さんに會ひに行くしさ、やさしい骨を折つたことぢやなえ。だがの、わし等もあきらめるだから、お前さんも一つあきらめるだ。」――人の好い禿げ頭の總代役はかう常談などもつけ加へた。それを又若い小學教員は不快さうにじろじろ眺めたりした。

お民の葬式をすました夜、お住は佛壇のある奧部屋の隅に廣次と一つ蚊帳へはひつてゐた。ふだんは勿論二人ともまつ暗にした中に眠るのだつた。が、今夜は佛壇にはまだ燈明もともつてゐた。その上妙な消毒藥の匂も古疊にしみこんでゐるらしかつた。お住はそんなこんなのせゐか、いつまでも容易に寢つかれなかつた。お民の死は確かに彼女の上へ大きい幸福を齎してゐた。彼女はもう働かずとも好かつた。小言を云はれる心配もなかつた。其處へ貯金は三千圓もあり、畑は一町三段ばかりあつた。これからは毎日孫と一しよに米の飯を食ふのも勝手だつた。日頃好物の鹽鱒を俵で取るのも亦勝手だつた。お住はまだ一生のうちにこの位ほつとした覺えはなかつた。この位ほつとした？――しかし記憶ははつきりと九年前の或夜を呼び起した。あの夜も一息ついたことを云へば、殆ど今夜に變らなかつた。あれは現在血をわけた倅の葬式のすんだ夜だつた。今夜は？――今夜も一人の孫を產んだ嫁の葬式のすんだばかりだつた。

お住は思はず目を開いた。孫は彼女のすぐ隣に多愛のない寢顏を仰向けてゐた。お住はその寢顏を見てゐるうちにだんだんかう云ふ彼女自身を情ない人間に感じ出した。同時に又彼女と惡緣を結んだ倅の仁太郎や嫁のお民も情ない人間に感じ出した。その變化は見る見る九年間の憎しみや怒りを押し流した。いや、彼女を慰めてゐた將來の幸福さへ押し流した。彼等親子は三人とも悉く情ない人間だつた。が、その中にたつた一人生恥を曝した彼女自身は最も情ない人間だつた。「お民、お前なぜ死んでしまつただ？」――お住は我知らず口のうちにかう新佛へ話しかけた。すると急にとめどもなしにぼたぼた淚がこぼれはじめた。……

お住は四時を聞いた後、やつと疲勞した眠りにはひつた。しかしもうその時にはこの一家の茅屋根の空も冷やかに曉を迎へ出してゐた。……

不思議な島

僕は籐の長椅子にぼんやり横になつてゐる。目の前に欄干のあるところをみると、どうも船の甲板らしい。欄干の向うには灰色の浪に飛び魚か何か閃いてゐる。が、何の爲に船へ乘つたか、不思議にもそれは覺えてゐない。つれがあるのか、一人なのか、その邊も同じやうに曖昧である。

曖昧と云へば浪の向うも靄のおりてゐるせゐか、甚だ曖昧を極めてゐる。僕は長椅子に寢ころんだまま、その朦朧と煙つた奧に何かあるのか見たいと思つた。すると念力の通じたやうに、見る見る島の影が浮び出した。中央に一座の山の聳えた、圓錐に近い島の影である。しかし大體の輪郭の外は生憎何もはつきりとは見えない。僕は前に味をしめてゐたから、もう一度見たいと念じて見た。けれども薄い島の影は依然として薄いばかりである。念力も今度は無效だつたらしい。

この時僕は右隣に忽ち誰かの笑ふのを聞いた。「はははははは、駄目ですね。今度は念力もきかないやうですね。はははははは。」

右隣の籐椅子に坐つてゐるのは英吉利人らしい老人である。顏は皺こそ多いものの、まづ好男子と評しても好い。しかし服裝はホオガスの畫にみた十八世紀の流行である。Cocked hat と云ふのであらう、銀の縁のある帽子をかぶり、刺繍のある胴衣を著、膝ぎりしかないズボンをはいてゐる。おまけに肩へ垂れてゐるのは天然自然の髮の毛ではない。何か妙な粉をふりかけた鼠色の縮れ毛の鬘である。僕は呆氣にとられながら、返事をすることも忘れてゐた。

「わたしの望遠鏡をお使ひなさい。これを覗けばはつきり見えます。」

老人は人の惡い笑ひ顏をしたまま、僕の手に古い望遠鏡を渡した。いつか何處かの博物館に竝んでゐたやうな望遠鏡である。

「オオ、サンクス。」

僕は思はず英吉利語を使つた。しかし老人は無頓著に島の影を指さしながら、巧みに日本語をしやべりつづけた。その指さした袖の先にも泡のやうにレエスがはみ出してゐる。

「あの島はサッサンラップと云ふのですがね。綴りですか? 綴りはSUSSANRAPです。一見の價値のある島ですよ。この船も五六日は碇泊しますから、是非見物にお出かけなさい。大學もあれば伽藍もあります。殊に市の立つ日は壯觀ですよ。何しろ近海の島々から無數の人が集まりますからね。……」

僕は老人のしやべつてゐる間に望遠鏡を覗いて見た。丁度鏡面に映つてゐるのはこの島の海岸の市街であらう。小綺麗な家々の竝んだのが見える。並木の梢に風のあるのが見える。伽藍の塔の聳えたのが見える。靄などは少しもかかつてゐない。何も彼も悉くはつきり見える。僕は大いに感心しながら、市街の上へ望遠鏡を移した。と同時に僕の口はあつと云ふ聲を洩らしさうになつた。

鏡面には雲一つ見えない空に不二に似た山が聳えてゐる。それは不思議でも何でもない。けれどもその山は見上げる限り、一面に野菜に蔽はれてゐる。玉菜、赤茄子、葱、玉葱、大根、蕪、人參、牛蒡、南瓜、冬瓜、胡瓜、馬鈴薯、蓮根、慈姑、生姜、三つ葉――あらゆる野菜に蔽はれてゐる。蔽はれてゐる? 蔽は――さら

ではない。これは野菜を積み上げたのである。驚くべき野菜のピラミッドである！

「あれは——あれはどうしたのです？」

僕は望遠鏡を手にしたまま、右隣の老人をふり返つた。が、老人はもう其處にゐない。唯籐の長椅子の上に新聞が一枚抛り出してある。僕はあつと思つた拍子に腦貧血か何か起したのであらう。いつか又妙に息苦しい無意識の中に沈んでしまつた。……

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「どうです、見物はすみましたか？」

老人は氣味の惡い微笑をしながら、僕の側へ腰をおろした。

此處はホテルのサロンであらう。セセッション式の家具を竝べた、妙にだだつ廣い西洋室である。が、人影は何處にも見えない。ずつと奥に見えるリフトも昇つたり降つたりしてゐる癖に、一人も客は出て來ないやうである。よくよくはやらないホテルらしい。

僕はこのサロンの隅の長椅子に上等のハヴァナを銜へてゐる。頭の上に蔓を垂らしてゐるのは[illegible]の南瓜に違ひない。廣い葉の鉢を隠したかげに黄いろい花の開いたのも見える。

「ええ、ざつと見物しました。——どうです、葉卷は？——」

しかし老人は子供のやうにちよいと首を振つたなり、古風な象牙の嗅煙草入れを出した。これも何處かの博物館に竝んでゐたのを見た通りである。かういふ老人は日本は勿論、西洋にも今は一人もあるまい。佐藤春夫にでも紹介してやつたら、さぞ珍重することであらう。僕は老人に話しかけた。

「町の外へ一足出ると、見渡す通り野菜畑ですね。」

「サッサンラップ島の住民は大部分野菜を作るのです。男でも女でも野菜を作るのです。」

「そんなに需要があるものでせうか？」

「近海の島島へ賣れるのです。が、勿論賣れ殘らずにはゐません。賣れ殘つたのはやむを得ず積み上げて置くのです。船の上から見えたでせう、ざつと二萬呎も積み上つてゐるのが？」

「あれがみんな賣れ殘つたのですか？ あの野菜のピラミッドが？——」

僕は老人の顏を見たり、目ばかりぱちぱちやる外はなかつた。が、老人は不相變面白さうにひとり微笑してゐる。

「ええ、みんな賣れ殘つたのです。しかもたつた三年の間にあれだけの嵩になるのですからね。古來の賣れ殘りを集めたとしたら、太平洋も野菜に埋まる位ですよ。しかしサッサンラップ島の住民は未に野菜を作つてゐるのです。晝も夜も作つてゐるのです。はははははは、我我のかうして話してゐる間も一生懸命に作つてゐるのです。はははははは。はははははは。」

老人は苦しさうに笑ひ笑ひ、茉莉花の匂のするハンカチイフを出した。これは唯の笑ひではない。人間の愚を嘲弄する惡魔の笑ひに似たものである。僕は顏をしかめながら、新しい話題を持ち出すことにした。

僕「市はいつ立つのですか？」

老人「毎月必ず月はじめに立ちます。しかしそれは普通の市ですね。臨時の大市は一年に三度、——一月と四月と九月とに立ちます。殊に一月は書入れの市ですよ。」

僕「ぢや大市の前は大騷ぎですね？」

老人「大騷ぎですとも。誰でも大市に間に合ふやうに思ひ思ひの野菜を育てるのですからね。燐酸肥料をやる、油滓をやる、温室へ入れる、電流を通じる——とてもお話にはなりません。中には又一刻も早く育てようとあせつた擧句、折角大事にしてゐる野菜を枯らしてしまふ

ものもある位です。」

僕「あゝ、さう云へば野菜畑に[illegible]男が一人、氣違ひのやうな[illegible]したまゝ、間に合はない、間に合はないと駈けまはつてゐました。」

老人「それはさもありさうですね、萬年の大市も近ですから。——町にゐる商人も一人殘らず血眼になつてゐるでせう。」

僕「町にゐる商人と云ふと？——」

老人「野菜の賣買をする商人です。商人は田舍の男女の育てた野菜畑の野菜を買ふ、近海の島島から來た男女はその又商人の野菜を買ふ、——と云ふ順序になつてゐるのです。」

僕「成程、その商人でせう、これは肥つた男が一人、黑い鞄をかかへながら、『困る、困る』と云つてゐるのを見ました。——おや一番賣れるのはどう云ふ種類の野菜ですか？」

老人「それは神の意志ですね。どう云ふものとも云はれません、年年少しづつ違ふやうですし、又その違ふ譯もわからないやうです。」

僕「しかし善いものならば賣れるでせう？」

老人「さあ、それもどうですかね。一體野菜の善惡は片輪のきめることになつてゐるのですが、……」

僕「どうして又片輪などがきめるのです？」

老人「片輪は野菜畑へ出られないでせう。從つて又野菜も作れない、それだけに野菜の善惡を見る目は自他の別を超越する、公平の態度をとることが出來る、——つまり日本の諺を使へば岡目八目になる譯ですね。」

僕「ああ、その片輪の一人ですね。さつき擘の生えた盲が一人、泥だらけの八つ頭を撫でまはしながら、『この野菜の色は何とも云はれない。薔薇の花の色と大空の色とを一つにしたやうだ』と云つてゐましたよ。」

老人「さうでせう。盲などは勿論立派なものです。が、最も理想的なのはこの上もない片輪ですね。目の見えない、耳の聞えない、鼻の利かない、手足のない、齒や舌のない片輪ですね。さう云ふ片輪さへ出現すれば、一代の Arbiter elegantiarum になれます。現在人氣者の片輪などは大抵この資格を具へてゐますがね、唯鼻だけきいてゐるのです。何でもこの間はその鼻の穴へゴムを溶かしたのをつぎこんださうですが、やはり少しは匂がするさうですよ。」

僕「ところでその片輪のきめた野菜の善惡はどうなるのです？」

老人「それがどうにもならないのです。いくら片輪に[illegible]、賣れ[illegible]ずん賣れてしまふのです。」

僕「おや商人の好みによるのでせう？」

老人「商人は賣れる見こみのある野菜ばかり買ふのでせう。すると善い野菜が賣れるかどうか……」

僕「お待ちなさいよ。それならばまづ片輪のきめた善惡を疑ふ必要がありますね。」

老人「それは野菜を作る連中は大抵疑つてゐるのですがね。おやさう云ふ連中に野菜の善惡を聞いて見ると、やはりはつきりしないのですよ。たとへば或連中によれば『善惡は滋養の有無なり』と云ふのです。が、又ほかの連中によれば『善惡は味に外ならず』と云ふのです。それだけならばまだしも簡單ですが……」

僕「へええ、もつと複雜なのですか？」

老人「その味なり滋養なりにそれぞれ又説が分れるのです。たとへばヴィタミンのないのは滋養がないとか、脂肪のあるのは滋養があるとか、人參の味は駄目だとか、大根の味に限るとか……」

僕「するとまづ標準は滋養と味と二つある。その二つの標準に種種樣樣のヴアリエシヨンがある、——大體かう云ふことになるのです

か？」

老人「皆中々たもんぢやありません。たとへばまだかう云ふのもあります。或連中に云はせると、色の上に標準もあるのです。あの實學の入門などに云ふ色の上の要點ですね。この連中は赤とか黄とか温い色の野菜ならば、何でも及第させるのです。が、青とか緑とか寒い色の野菜は見むきもしません。何しろこの連中のモットオは、野菜をして悉く赤茄子たらしめよ。然らずんば我等に死を與へよと云ふのですからね。」

僕「成程シャツ一枚の豪傑が一人、自作の野菜を積み上げた前にそんな演説をしてゐましたよ。」

老人「ああ、それがさうですよ。その温い色をした野菜をプロレタリアの野菜と云ふのです。」

僕「しかし積み上げてあつた野菜は胡瓜や眞桑瓜ばかりでしたが、……」

老人「それはきつと色盲ですよ。自分だけは赤いつもりなのですよ。」

僕「寒い色の野菜はどうなのです？」

老人「これも寒い色の野菜でなければ野菜ではないと云ふ連中がゐます。尤もこの連中は冷笑はしても、演説などはしないやうですかね。世の中では負けず劣らず温い色の野菜を嫌つてゐるやうですよ。」

僕「するとつまり卑怯なのですか？」

老人「何、演説をしたがらないよりも演説をすることが出来ないのです。大抵酒毒か黴毒かの爲に舌が腐つてゐるやうですからね。」

僕「ああ、あれがさうなのでせう。シャツ一枚の豪傑の向うに細いズボンをはいた才子が一人、せつせと南瓜をもぎりながら、『へん、演説か』と云つてゐましたつけ。」

老人「まだ青い南瓜をでせう。ああ云ふ色の寒いのをブルジョアの野菜と云ふのです。」

僕「すると結局どうなるのです？ 野菜を作る連中によれば、……」

老人「野菜を作る連中によれば、自作の野菜に似たものは悉く善い野菜ですが、自作の野菜に似ないものは悉く惡い野菜なのです。これだけは兎に角確かですよ。」

僕「しかし大學もあるのでせう？ 大學の教授は野菜學の講義をしてゐるさうですから、野菜の善惡を見分ける位は何でもないと思ひますが、……」

老人「ところが大學の教授などはサッサンラップ島の野菜になると、實物も鑑定も見わからないのです。尤も一世紀より前の野菜だけは講義の中にもはひりますがね。」

僕「ぢや何處の野菜のことを知つてゐるのです？」

老人「英吉利の野菜、佛蘭西の野菜、獨逸の野菜、伊太利の野菜、露西亞の野菜、――一番學生に人氣のあるのは露西亞の野菜學の講義ださうです。是非一度大學を見にお出でなさい。わたしのこの前參觀した時には鼻眼鏡をかけた教授が、一人瓶の中のアルコオルに漬けた露西亞の古胡瓜を見せながら、『サッサンラップ島の胡瓜を見給へ。悉く青い色をしてゐる。しかし偉大なる露西亞の胡瓜はさう云ふ淺薄な色ではない。この通り人生そのものに似た、捕捉すべからざる色をしてゐる。ああ、偉大なる露西亞の胡瓜は……』と懸河の辯を振つてゐました。わたしは當時感動のあまり、二週間ばかり床に就いたものです。」

僕「すると――するとですね、やはりあなたの云ふやうに野菜の賣れるか賣れないかは神の意志に從ふとでも考へる外はないのですか？」

老人「まあ、その外はありますまい。又實際

この島の住民は大抵バツブラツプベエダを信仰してゐますよ。」

僕「何です、そのバツブラツプ何とか云ふのは？」

老人「バツブラツプベエダです。BABRABBADAと綴りますがね。まだあなたは見ないのですか？　あの伽藍の中にある……」

僕「ああ、あの豚の頭をした、大きい蜥蜴の偶像ですか？」

老人「あれは蜥蜴ではありません。天地を主宰するカメレオンですよ。けふもあの偶像の前に大勢お時儀をしてゐたでせう。ああ云ふ連中は野菜の賣れる祈禱の言葉を唱へてゐるのです。何しろ最近の新聞によると、紐育あたりのデパアトメント・ストアアは悉くあのカメレオンの神託の下るのを待つた後、シイズンの支度にかかるさうですからね。もう世界の信仰はエホバでもなければ、アラアでもない。カメレオンに歸したとも云はれる位です。」

僕「あの伽藍の祭壇の前にも野菜が澤山積んでありましたが、……」

老人「あれはみんな牲ですよ。サッサンラップ島のカメレオンには去年賣れた野菜を牲にするのですよ。」

僕「しかしまだ日本には……」

老人「おや、誰か呼んでゐますよ。」

僕は耳を澄まして見た。成程僕を呼んでゐるらしい。しかもこの頃蓄膿症の爲に鼻のつまつた甥の聲である。僕はしぶしぶ立ち上りながら、老人の前へ手を伸ばした。

「ぢやけふは失禮します。」

「さうですか。ぢや又話しに來て下さい。わたしはかう云ふものですから。」

老人は僕と握手した後、悠然と一枚の名刺を出した。名刺のまん中には鮮かにLemuel Gulliverと印刷をしてある！　僕は思はず口をあいたまま、茫然と老人の顔を見つめた。麻色の髪の毛に圍まれた、目鼻だちの正しい老人の顔は永遠の冷笑を浮かべてゐる、——と思つたのはほんの一瞬間に過ぎない。その顔はいつか惡戯らしい十五歳の甥の顔に變つてゐる。

「原稿ですつてさ。お起きなさいよ。原稿をとりに來たのですつてさ。」

甥は僕を搖すぶつた。僕は置火燵に當つたまま、三十分ばかり晝寢をしたらしい。置火燵の上に載つてゐるのは讀みかけたGulliver's Travelである。

「原稿をとりに來た？　何處の原稿を？」

「隨筆のをですつてさ。」

「隨筆？」

僕は我知らず口笛を吹いた。

「サッサンラップ島の青物市には、こんな原稿の類も賣れると見える。」

鑑　賞

藝術の鑑賞は藝術家自身と鑑賞家との協力である。云はば鑑賞家は一つの作品を課題に彼自身の創作を試みるのに過ぎない。この故に如何なる時代にも名聲を失はない作品は必ず種種の鑑賞を可能にする特色を具へてゐる。しかし種種の鑑賞を可能にすると云ふ意味はアナトオル・フランスの云ふやうに、何處か曖昧に出來てゐる爲、どう云ふ解釋を加へるのもたやすいと云ふ意味ではあるまい。寧ろ廬山の峯峯のやうに、種種の立場から鑑賞され得る多面性を具へてゐるのであらう。

（侏儒の言葉より）

雛

箱を出る顔忘れめや雛二對　蕪村

これは或老女の話である。

……横濱の或亞米利加人へ雛を賣る約束の出來たのは十一月頃のことでございます。紀の國屋と申したわたしの家は親代代諸大名のお金御用を勤めて居りましたし、殊に紫竹とか申した祖父は大通の一人にもなつて居りましたから、雛もわたしのではございますが、中中見事に出來て居りました。まあ、申さば、內裏雛は女雛の冠の瓔珞にも珊瑚がはひつて居りますとか、男雛の鹽瀨の石帶にも定紋と替へ紋とが互違ひに繡ひになつて居りますとか、――さう云ふ雛だつたのでございます。

それさへ賣らうと申すのでございますから、わたしの父、――十二代目の紀の國屋伊兵衞はどの位手もとが苦しかつたか、大抵御推量にもなれるでございませう。何しろ德川家の御瓦解以來、御用金を下げて下すつたのは加州樣ばかりでございます。それも三千兩の御用金の中、百兩しか下げては下さいません。因州樣などになりますと、四百兩ばかりの御用金のかたに赤間が石の硯を一つ下すつただけでございました。その上火事には二度も遇ひますし、蝙蝠傘屋などをやりましたのも皆手違ひになりますし、當時はもう目ぼしい道具もあらかた一家の口すごしに賣り拂つてゐたのでございます。

其處へ雛でも賣つたらと父へ勸めてくれましたのは丸佐と云ふ骨董屋の、……もう故人になりましたが、禿げ頭の主人でございます。この丸佐の禿げ頭位、可笑しかつたものはございません。と申すのは頭のまん中に丁度按摩膏を貼つた位、入れ墨がしてあるのでございます。これは何でも若い時分、ちよいと禿げを隱す爲に彫らせたのださうでございますが、生憎その後頭の方は遠慮なしに禿げてしまひましたから、この腦天の入れ墨だけ取り殘されることになつたのだとか、當人自身申して居りました。

……さう云ふことは兎に角も、父はまだ十五のわたしを可哀さうに思つたのでございませう、度度丸佐に勸められても、雛を手放すことだけはためらつてゐたやうでございます。

それをとうとう賣らせたのは英吉と申すわたしの兄、……やはり故人になりましたが、その頃まだ十八だつた、癇の強い兄でございます。兄は開化人とでも申しませうか、英語の讀本を離したことのない政治好きの靑年でございました。これが雛の話になると、雛祭などは舊弊だとか、あんな實用にならない物は取つて置いても仕方がないとか、いろいろけなすのでございます。その爲に兄は昔風の母とも何度口論をしたかわかりません。しかし雛を手放しさへすれば、この大歳の凌ぎだけはつけられるのに違ひございませんから、母も苦しい父の手前、さう强いことばかりも申されなかつたのでございませう。雛は前にも申しました通り、十一月の中旬にはとうとう横濱の亞米利加人へ賣り渡すことになつてしまひました。何、わたしでございますか？　それは駄駄もこねましたが、お轉婆だつたせゐでございませう、その割にはあまり悲しいとも思はなかつたものでございます。父は雛を賣りさへすれば、紫繻子の帶を一本買

この涙でございませう？ わたしは悲しいと思ふよりも、取りつき端に困つてしまひましたから、出來るだけ母を見ないやうに、兄のゐる側へ坐りました。すると急に眼を擧げたのは兄の英吉でございます。兄はちよいとけげんさうに母とわたしとを見比べましたが、忽ち妙な笑ひ方をすると、又横文字を讀み始めました。わたしはまだこの時位、開化を鼻にかける兄を憎んだことはございません。お母さんを莫迦にしてゐる、――一圖にさう思つたのでございます。わたしはいきなり力一ぱい、兄の背中をぶつてやりました。

「何をする？」

兄はわたしを睨みつけました。

「ぶつてやる！ ぶつてやる！」

わたしは泣き聲を出しながら、もう一度兄をぶたうとしました。その時にはもう何時の間にか、兄の癇癪の強いことも忘れてしまつたのでございます。が、まだ擧げた手を下さない中に、兄はわたしの横鬢へぴしやりと平手を飛ばせました。

「わからず屋！」

わたしは勿論泣き出しました。と同時に兄の上にも物差しが降つたのでございませう。兄は直と皮肉に母へ食つてかかりました。母もかうなれば承知しません。低い聲を震はせながら、さんざと兄と云ひ合ひました。

さう云ふ口論の間中、わたしは唯悔し泣きに泣き續けてゐたのでございます。丸佐の主人を送り出した父が無盡燈を持つた儘、見世からこちらへはひつて來る迄は、……いえ、わたしばかりではございません。兄も父の顔を見ると、急に默つてしまひました。口數を利かない父位、わたしはもとより當時の兄にも、恐しかつたものはございませんから。……

その噺は今月の末、殘りの半金を受け取ると同時に、あの横濱の亞米利加人へ渡してしまふことにきまりました。何、賣り價でございますか？ 今になつて考へますと、莫迦莫迦しいやうでございますが、確か三十圓とか申して居りました。それでも當時の諸式にすると、ずゐぶん高價には違ひございません。

その内に雛を手放す日はだんだん近づいて參りました。わたしは前にも申しました通り、格別それを悲しいとは思はなかつたものでございます。ところが一日一日と約束の日が迫つて來ると、何時か雛と別れるのはつらいやうに思ひ出しました。しかし如何に子供とは申せ、一旦手放すときまつた雛を手放さずにすまうとは思ひません。唯人手に渡す前に、もう一度よく見て置きたい。内裏雛、五人囃し、左近の櫻、右近の橘、雪洞、屏風、蒔繪の道具、――もう一度この土藏の中にさう云ふ物を飾つて見たい、――と申すのが心願でございました。が、性來一徹な父は何度わたしにせがまれても、これだけのことを許しません。「一度手附けをとつたら、何處にあらうが人樣のものだ。人樣のものはいぢるもんぢやあない。」――かう申すのでございます。

するともう月末に近い、大風の吹いた日でございます。母は風邪に罹つたせゐか、それとも又下唇に出來た粟粒程の腫物のせゐか、氣もちが惡いと申したぎり、朝の御飯も頂きません。わたしと臺所を片づけた後は片手に額を抑へながら、唯ぢつと長火鉢の前に俯向いてゐるのでございます。ところが彼是お午時分、ふと顏を擡げたのを見ると、腫物のあつた下唇だけ、丁度赤いお藥のやうに腫れ上つてゐるではございませんか？ しかも熱の高いことは妙に輝いた眼の色だけでも、直とわかるのでございます。これを見たわたしの驚きは申す迄もございません。わたしは殆ど無我夢中に、父のゐる見世へ

飛んで行きました。

「お父さん！　お父さん！　お母さんが大變ですよ」

　父は、……それから其處にゐた兄も父と一しよに奧へ來ましたが、恐しい母の顏には呆氣にとられたのでございませう。ふだんは物に騷がない父さへ、この時だけは茫然としたなり、口も少時は利かずに居りました。しかし母はさう云ふ中にも、一生懸命に微笑しながら、こんなことを申すのでございます。

「何、大したことはありますまい。唯ちよいとこのお出來に爪をかけただけなのですから、……今御飯の支度をします。」

「無理をしちやあいけない。御飯の支度なんぞはお鶴にも出來る。」

　父は半ば叱るやうに、母の言葉を遮りました。

「英吉！　本間さんを呼んで來い！」

　兄はもうさう云はれた時には、一散に大風の見世の外へ飛び出して居つたのでございます。

　本間さんと申す漢法醫、――兄は始終藪醫者などと莫迦にした人でございますが、その醫者も母を見た時には、當惑さうに腕組みをしました。聞けば母の腫物は面疔だと申すのでございますから。……もとより面疔も手術さへ出來れば、恐しい病氣ではございますまい。が、當時の悲しさには手術どころの騷ぎではございません。唯煎藥を飮ませたり、蛭に血を吸はせたり、――そんなことをするだけでございます。父は毎日枕もとに、本間さんの藥を煎じました。兄も毎日十五錢づつ、蛭を買ひに出かけました。わたしも、……わたしは兄に知れないやうに、つい近所のお稻荷樣へお百度を踏みに通ひました。――さう云ふ始末でございますから、雛のことも申してはゐられません。いえ、一時はわたしを始め、誰もあの壁側に積んだ三十ばかりの總桐の箱には眼もやらなかつたのでございます。

　ところが十一月の二十九日、――愈雛と別れると申す一日前のことでございます。わたしは雛と一しよにゐるのも、今日が最後だと考へると、殆ど矢も楯もたまらない位、もう一度箱が明けたくなりました。が、どんなにせがんだにしろ、父は不承知に違ひありません。すると母に話して貰ふ、――わたしは直にさう思ひましたが、何しろその後母の病氣は前よりも一層重つて居ります。食べ物もおも湯を啜る外は一切喉を通りません。殊にこの頃は口中へも、絶えず血の色に交つた膿がたまるやうになつたのでございます。かう云ふ母の姿を見ると、如何に十五の小娘にもせよ、わざわざ雛を飾りたいなぞとは口へ出す勇氣も起りません。わたしは朝から枕もとに、母の機嫌を伺ひ伺ひ、とうとうお八つになる頃迄は何も云ひ出さずにしまひました。

　しかしわたしの眼の前には、金網を張つた窓の下に、例の總桐の雛の箱が積み上げてあるのでございます。さうしてその雛の箱は今夜一晩過ごしたが最後、遠い横濱の異人屋敷へ、……ことによれば亞米利加へも行つてしまふのでございます。そんなことを考へると、愈我慢は出來ますまい。わたしは母の眠つたのを幸ひ、そつと見世へ出かけました。見世は日當りこそ惡いものの、土藏の中に比べれば、往來の人通りが見えるだけでも、まだしも陽氣でございます。其處には父は帳合ひを檢べ、兄はせつせと片隅の藥研に甘草か何かを下して居りました。

「ねえ、お父さん。後生一生のお願ひだから、……」

　わたしは父の顏を覗きこみながら、何時もの頼みを持ちかけました。が、父は承知するどころか、相手になる氣色もございません。

「そんなことはこの間も云つたぢやあないか？

「……ない、英吉！ お前、今日は明るい内に、ちよいと丸佐へ行つて來てくれ。」

「丸佐へ？……來てくれと云ふんですか？」

「何、ランプを一つ持つて來て貰ふんだが、……お前、歸りに買つて來ても好い。」

「だつて丸佐にランプはないでせう？」

父はわたしをそつちのけに、珍しい笑ひ顏を見せました。

「燭臺か何かぢやあるまいし、……ランプは買つてくれつて賴んであるんだ。わたしが買ふよりやあ確だから。」

「ぢやあもう無盡燈はお廢止ですか？」

「あれももうお暇の出し時だらう。」

「古いものはどしどし止めることです。第一お母さんもランプになりやあ、ちつとは氣も晴れるでせうから。」

父はそれぎり元のやうに、又算盤を彈き出しました。が、わたしの念願は相手にされなければされないだけ、強くなるばかりでございます。わたしはもう一度後ろから父の肩を搖すぶりました。

「よう。お父さんつてば。よう。」

「うるさい！」

父は後ろを振り向きもせずに、いきなりわたしを叱りつけました。のみならず見るも意地惡さうに、わたしの顏を睨めて居ります。わたしはすつかり悄氣返つた儘、そつと奥へ歸つて來ました。すると母は何時の間にか、熱のある眼を擧げながら、額の上にかざした手の平を眺めてゐるのでございます。それがわたしの姿を見ると、思ひの外はつきりから申しました。

「お前、何をお父さんに叱られたのだえ？」

わたしは返事に困りましたから、枕もとの羽根楊枝をいぢつて居りました。

「又何か無理を云つたのだらう？……」

母はぢつとわたしを見たなり、今度は苦しさうに言葉を繼ぎました。

「わたしはこの通りの體だしね、何も彼もお父さんがなさるのだから、おとなしくしなけりやあいけませんよ。そりやあお隣の娘さんは芝居へも始終お出でなさるさ。……」

「芝居なんぞ見たくはないんだけれど……」

「いえ、芝居に限らずさ。簪だとか半襟だとか、お前にやあ欲しいものだらけでもね、……」

わたしはそれを聞いてゐる中に、悔やしいのだか悲しいのだか、とうとう涙をこぼしてしまひました。

「あのねえ、お母さん。……わたしはねえ、……何も欲しいものはないんだけれどねえ、唯あのお雛樣を賣る前にねえ、……」

「お雛樣かえ？ お雛樣を賣る前に？」

母は一層大きい眼にわたしの顏を見つめました。

「お雛樣を賣る前にねえ、……」

わたしはちよいと云ひ澁りました。その途端にふと氣がついて見ると、何時の間にか後ろに立つてゐるのは兄の英吉でございます。兄はわたしを見下しながら、不相變慳貪にから申しました。

「わからず屋！ 又お雛樣のことだらう？ お父さんに叱られたのを忘れたのか？」

「まあ、好いぢやあないか？ そんなにがみがみ云はないでも。」

母はうるささうに眼を閉ぢました。が、兄はそれも聞えぬやうに叱り續けるのでございます。

「十五にもなつてゐる癖に、ちつとは理窟もわかりさうなもんだ？ 高があんなお雛樣位！ 惜しがりなんぞするやつがあるもんか？」

「お世話燒きぢや！ 兄さんのお雛ぢやあないぢやあないか？」

わたしも負けずに云ひ返しました。その先は

その時見に歩いた景色などは申し上げる必要もございますまい。唯今でも話に出るのは徳藏の不平でございます。徳藏はわたしを乘せた儘、煉瓦の大通りにさしかかるが早いか、西洋の婦人を乘せた馬車とまともに衝突しかかりました。それはやつと助かりましたが、忌忌しさうに舌打ちをすると、こんなことを申すのでございます。

「どうもいけねえ。お孃さんはあんまり輕過ぎるから、肝腎の足が踏ん止らねえ。……お孃さん。乘せる車屋が可哀さうだから、二十前にやあ車へお乘んなさんなよ。」

人力車は煉瓦の大通りから、家の方へ横町を曲りました。すると忽ち出遇つたのは兄の英吉でございます。兄は煤竹の柄のついた置きランプを一臺さげた儘、急ぎ足に其處を歩いて居りました。それがわたしの姿を見ると、「待て」と申す相圖でございませう、ランプをさし擧げるのでございます。が、もうその前に徳藏はぐるりと梶棒をまはしながら、兄の方へ車を寄せて居りました。

「御苦勞だね、徳さん。何處へ行つたんだい？」

「へえ、何、今日はお孃さんの江戸見物です。」

兄は苦笑を洩らしながら、人力車の側へ歩み寄りました。

「お鶴、お前、先へこのランプを持つて行つてくれ。わたしは油屋へ寄つて行くから。」

わたしはさつきの喧嘩の手前、わざと何とも返事をせずに、唯ランプだけ受け取りました。兄はそれなり歩きかけましたが、急に又こちらへ向き變へると、人力車の泥除けに手をかけながら、「お鶴」と申すのでございます。

「お鶴、お前、又お父さんにお雛樣のことなんぞ云ふんぢやあないぞ。」

わたしはそれでも默つて居りました。あんなにわたしをいぢめた癖に、又かと思つたのでございます。しかし兄は頓着せずに、小聲の言葉を續けました。

「お父さんが見ちやあいけないと云ふのは手附けをとつたからばかりぢやあないぞ。見りやあみんなに未練が出る、――其處も考へてゐるんだぞ。好いか？　わかつたか？　わかつたら、もうさつきのやうに見たいの何のと云ふんぢやあないぞ。」

わたしは兄の聲の中に何時にない情あひを感じました。が、兄の英吉位、妙な人間はございません。優しい聲を出したかと思ふと、今度には又ふだんの通り、突然わたしを嚇すやうにかう申すのでございます。

「そりやあ云ひたけりやあ云つても好い。その代り痛い目に遇はされると思へ。」

兄は憎體に云ひ放つたなり、徳藏にも挨拶も何もせずに、さつさと何處かへ行つてしまひました。

その晩のことでございます。わたしたち四人は土藏の中に、夕飯の膳を圍みました。尤も母は枕の上に顏を擡げただけでございますから、圍んだものの數にははひりません。しかしその晩の夕飯は何時もより花やかな氣がしました。それは申す迄もございません。あの薄暗い無盡燈の代りに、今夜は新しいランプの光が輝いてゐるからでございます。兄やわたしは食事のあひ間も、時時ランプを眺めました。石油を透かした硝子の壺、動かない焔を守つた火屋、――さう云ふものの美しさに滿ちた珍しいランプを眺めました。

「明るいな。晝のやうだな。」

父も母をかへり見ながら、滿足さうに申しました。

「眩し過ぎる位ですね。」

かう申した母の顏には、殆ど不安に近い色が浮んでゐたものでございます。

そりやあ無盡燈に慣れてゐたから……だが一度ランプをつけちやあ、もう無盡燈はつけられない。」

「何でも始は眩し過ぎるんですよ。ランプでも、西洋の學問でも、……」

兄は誰よりもはしやいで居りました。

「それでも慣れりやあ同じことですよ。今にきつとこのランプも暗いと云ふ時が來るんです。」

「大きにそんなものかも知れない。……お鶴。お前、お母さんのおも湯はどうしたんだ？」

「お母さんは今夜は澤山なんですつて。」

わたしは母の云つた通り、何の氣もなしに返事をしました。

「困つたな。ちつとも食氣がないのかい？」

母は父に尋ねられると、仕方がなささうに溜息をしました。

「ええ、何だかこの石油の匂が、……舊弊人の證據ですね。」

それぎりわたしたちは言葉少なに、箸ばかり動かし續けました。しかし母は思ひ出したやうに、時時ランプの明るいことを褒めてゐたやうでございます。あの腫れ上つた唇の上にも微笑らしいものさへ浮べながら。

その晩も皆休んだのは十一時過ぎでございます。しかしわたしは眼をつぶつても、容易に寢つくことは出來ません。兄はわたしに[illegible]つて[illegible]は二度と云ふなと申しました。わたしも雛を出して見るのは出來ない相談とあきらめて居ります。が、出して見たいことはさつきと少しも變りません。雛は明日になつたが最後、遠いところへ行つてしまふ、——さう思へばつぶつた眼の中にも、自然と涙がたまつて來ます。一そみんなの寢てゐる中に、そつと一人出して見ようか？——さうもわたしは考へて見ました。それともあの中の一つだけ、何處か外へ隱して置かうか？——さうも亦わたしは考へて見ました。しかしどちらも見つかつたら、——と思ふとさすがにひるんでしまひます。わたしは正直にその晩位、いろいろ恐しいことばかり考へた覺えはございません、今夜もう一度火事があれば好い。さうすれば人手に渡らぬ前に、すつかり雛も燒けてしまふ。さもなければ亞米利加人も頭の禿げた丸佐の主人もコレラになつてしまへば好い。さうすれば雛は何處へもやらずに、この儘大事にすることが出來る。——そんな空想も浮んで參ります、が、まだ何と申しても、其處は子供でございますから、一時間たつかたたない中に、何時かもう眠つてしまひました。

それからどの位たちましたか、ふと眼がさめて見ますと、薄暗い行燈をともした土藏に誰か人の起きてゐるらしい物音が聞えるでございます。鼠かしら、泥坊かしら、又はもう夜明けになつたのかしら？——わたしはどちらかと迷ひながら、怯づ怯づ細眼を明いて見ました。するとわたしの枕もとには、寢間著の儘の父が一人、こちらへ横顏を向けながら、坐つてゐるのでございます。父が！……しかしわたしを驚かせたのは父ばかりではございません。父の前にはわたしの雛が、——お節句以來見なかつた雛が並べ立ててあるのでございます。

夢かと思ふと申すのはああ云ふ時でございませう。わたしは殆ど息もつかずに、この不思議を見守りました。覺束ない行燈の光の中に、象牙の笏をかまへた男雛を、冠の瓔珞を垂れた女雛を、右近の橘を、左近の櫻を、柄の長い日傘を擔いだ仕丁を、眼八分に高坏を捧げた官女を、小さい蒔繪の鏡臺や簞笥を、貝殼盡しの雛屏風を、膳椀を、畫雪洞を、色絲の手毬を、さうして又父の横顏を、……

夢かと思ふと申すのは、……ああ、それはもう前に申し上げました。が、ほんたうにあの晩の雛は夢だつたのでございませうか？一圖に

雛を見たがつた餘り、知らず識らず造り出した幻ではなかつたのでございませうか？　わたしは未にどうかすると、わたし自身にもほんたうかどうか、返答に困るのでございます。

しかしわたしはあの夜更けに、獨り雛を眺めてゐる、年とつた父を見かけました。これだけは確かでございます。さうすればたとひ夢にしても、別段悔やしいとは思ひません。兎に角わたしは眼のあたりに、わたしと少しも變らない父を見たのでございますから、女々しい、……その癖おごそかな父を見たのでございますから。

「雛」の話を書きかけたのは何年か前のことである。それを今書き上げたのは瀧田氏の勸めによるのみではない。同時に又四五日前、横濱の或英吉利人の客間に、古雛の首を玩具にしてゐる紅毛の童女に遇つたからである。今はこの話に出て來る雛も、鉛の兵隊やゴムの人形と一つ玩具箱に投げこまれながら、同じ憂きめを見てゐるのかも知れない。

文學好きの家庭から

私の家は代代御奧坊主だつたのですが、父も母も甚特徴のない平凡な人間です。父には一中節、圍碁、盆栽、俳句などの道樂がありますが、いづれもものになつてゐさうもありません。母は津藤の姪で、昔の話を澤山知つてゐます。その外に伯母が一人ゐて、それが特に私の面倒を見てくれました。今でも見てくれてゐます。家中で顔が一番私に似てゐるのもこの伯母なら、心もちの上で共通點の一番多いのもこの伯母です。伯母がゐなかつたら、今日のやうな私が出來たかどうかわかりません。

文學をやる事は、誰も全然反對しませんでした。父母をはじめ伯母も可成文學好きだからです。その代り實業家になるとか、工學士になるとか云つたら反つて反對されたかも知れません。

芝居や小説は隨分小さい時から見ました。先代の團十郎、菊五郎、秀調なぞも覺えてゐます。私が始めて芝居を見たのは、團十郎が齋藤内藏之助をやつた時ださうですが、これはよく覺えてゐません。何でもこの時は内藏之助が花道へかかると、桟敷の後で母におぶさつてゐた私が、嬉しがつて、大きな聲で「ああうまえん」と云つたさうです。二つか三つ位の時でせう。小説らしい小説は、泉鏡花氏の「化銀杏」が始めだつたかと思ひます。尤もその前に「倭文庫」や「妙妙車」のやうなものは卒業してゐました。これはもう高等小學校へ入つてからです。（「文章倶樂部」より）

行儀

昔わたしの家に出入りした男まさりの女髪結は娘を一人持つてゐた。わたしは未だに蒼白い顔をした十二三の娘を覺えてゐる。女髪結はこの娘に行儀を敎へるのにやかましかつた。殊に枕をはづすことにはその都度折檻を加へてゐたらしい。が、近頃ふと聞いた話によれば、娘はもう震災前に藝者になつたとか云ふことである。わたしはこの話を聞いた時、ちよつともの哀れに感じたものの、微笑しない訣には行かなかつた。彼女は定めし藝者になつても、嚴格な母親の躾通り、枕だけははづすまいと思つてゐるであらう。

（「侏儒の言葉」より）

糸女覚え書

秀林院様（細川越中守忠興の夫人、秀林院殿華屋宗玉大姉はその法諡なり）のお果てなされ候次第のこと。

一、石田治部少の乱の年、即ち慶長五年七月十日、わたくし父魚屋清左衛門、大阪玉造のお屋敷へ参り、「かなりや」十羽、秀林院様へ献上仕り候。秀林院様はよろづ南蛮渡りをお好み遊ばされ候間、おん悦び斜めならず、わたくしも面目を施し候。尤も御所持の御什器のうちには贋物も数かず有之、この「かなりや」ほど確かなる品は一つも御所持御座なく候。その節父の申し候は、涼風の立ち次第秀林院様へお暇を願ひ、嫁入り致させ候べしとのことに御座候。わたくしももはや三年あまり、御奉公致し居り候へども、秀林院様は少しもお優しきところ無之、賢女ぶらるることを第一となされ候へば、お側に居り候ても、浮きたる話などは相成らず、兎角気のつまるばかりに候間、父の言葉を聞きし時は天へも昇る心地致し候。この日も秀林院様の仰せられ候は、日本国の女の智慧浅きは横文字の本を読まぬゆゑのよし、来世は必ず南蛮国の大名へお輿入れなさるべしと存じ上げ候。

二、十一日、澄見と申す比丘尼、秀林院様へお目通り致し候。この比丘尼は唯今城内へも取り入り、中中きけ者のよしに候へども、以前は京の糸屋の後家にて、夫を六人も取り換へたるいたづら女とのことに御座候。わたくしは澄見の顔さへ見れば、虫唾の走るほど厭になり候へども、秀林院様はさのみお嫌ひも遊ばされず、時には彼是小半日もお話し相手になさること有之、その度にわたくしども奥女中はいづれも難儀仕り候。これはまつたく秀林院様のお世辞を好まるる為に御座候。たとへば澄見は秀林院様に、「いつもお美しいことでおりやる。一定どこの殿御の目にも二十あまりに見えようず」などと、まことしやかに御器量を褒め上げ候。なれども秀林院様の御器量はさのみ御美麗と申すほどにても無之、殊にお鼻はちと高すぎ、雀斑も少少お有りなされ候。のみならずお年は三十八なれば、如何に夜目遠目とは申せ、二十あまりにはお見えなさらず候。

三、澄見のこの日参り候は、内内治部少にたのまれ候よしにて、秀林院様のおん身を城内へお移し遊ばされ候やう、お勧め申す為に御座候。秀林院様は御思案の上、御返事なされ候べしと、澄見には御返事なされ候へども、中中しかとせる御決心もつきかね候さうに見上げ候。然れば澄見の下り候後は、まりや様の御画像の前に、凡そ一刻に一度づつは「おらつしよ」と申すお祈りを一心にお捧げ遊ばされ候。何も序ゆゑ申し上げ候へども、秀林院様の「おらつしよ」は日本国の言葉にては無之、羅甸とやら申す南蛮国の言葉のよし、わたくしどもの耳には唯「のす、のす」と聞え候間、その可笑しさをこらふること、一かたならぬ苦しみに御座候。

四、十二日は別に変りたることも無之、唯朝より秀林院様の御機嫌、よろしからざるやうに見上げ候。総じて御機嫌のよろしからざる時には、わたくしどもへはもとより、与一郎様（忠隆）の奥様へも、お小言やらお厭味やら仰せられ候間、誰もみな滅多にお側へは近づかぬことと致し居り候。けふも亦与一郎様の奥様

へはお化粧のあまり濃すぎぬやう、それに付話とやらの中の孔雀の話を引き合ひに出され、上たかぶと御意有之候よし。みなみなお氣の毒に存じ上げ候。この奧様はお隣屋敷浮田中納言様の奧様の妹御に當らせられ、御利發とは少少申し兼ね候へども、御器量は如何なる名作の繪にも見劣らぬほどに御座候。

五、十三日、小笠原少齋（秀清）河北石見（一孝）兩人、お臺所まで參られ候。細川家にては男はもとより、子供にても奧へ參ることはかなはさる御家法に候間、表の役人はお臺所へ參られ、何ごとによらずわたくしどもに奧への取次を賴まるること、久しきならはしと相成り居り候。これはみな三齋様（忠興）秀林院様、お二かたのお焼餅より起りしことにて、黒田家の森太兵衞などにも、さてこそ不自由なる御家法も候ものかなと笑はれしよしに御座候。なれども亦奥には裏と申すことも有之、さほど不自由は致し居らず候。

六、少齋、石見の兩人、霜と申す女房を召し出され、こまごまと申され候は、この度急に治部少より東へお立ちなされ候大名衆の人質をとられ候よし、專ら風聞仕り候へども、如何仕るべく候や、秀林院様のお思召しのほども承りたしとのことに有之候。その節、霜のわたくしに申し候は、「お留守居役の衆も手ぬるいことでおりやる。そのやうなことは澄見からをとつひの内に言上されたものを。やれやれお取次御苦勞な」とのことに御座候。尤もこれは珍しきことにても無之、いつも世上の噂などはお留守居役の耳よりも、わたくしどもの耳へ先に入り候。少齋は律義なる老人、石見は武道一偏のわかい人に候間、さもあるべき儀とは存じ候へども、兎角たび重なり候へば、わたくしどもを始め奧のものは、「世上に隱れない」と申す代りに「お留守居役さへ知つておりやる」と申すことに相成り居り候。

七、霜は即ちその旨を秀林院へ申し上げ候ところ、秀林院様の御意なされ候は、治部少と三齋様とは兼ねがねおん仲惡しく候まま、定めし人質のとりはじめにはこの方へ參るならん、萬一さもなき節は他家の並もあるべきか、もし又一番に申し來り候はば、御返答如何遊ばされ候べきぞ。少齋石見の兩人、分別致し候やうにとのことに御座候。少齋石見の兩人も分別致しかね候へばこそ、御意をも伺ひし次第に候へば、秀林院様のお言葉は見當違ひには御座候へども、霜も御主人の御威光には勝たれず、その通り兩人へ申し渡し候。霜のお臺所へ下がり候後、秀林院様は又またまりや様の畫像の前に、のす、のすをお唱へ遊ばされ、梅と申す新參の女房、思はず笑ひ出し候へば、以ての外のことなりとさんざん御折檻を蒙り候。

八、少齋石見の兩人は秀林院様の御意を伺ひ、いづれも當惑仕り候へども、やがて霜に申され候は、治部少かたより右の次第を申し來り候とも、與一郎様與五郎様（忠興の子、興秋）のお二かたは東へお立ちなされたり、内記様（同上、忠利）も亦唯今は江戸人質に御座候間、人質に出で候はん人、當お屋敷には一人も無之候へば、所詮は出し申すこととなるまじくと返答仕るべし、なほ又是非ともと申し候はば、田邊の城（幽齋）へ申し遣はし、幽齋様（忠興の父、藤孝）より御指圖を仰ぎ候まま、それ迄待ち候へと挨拶仕るべし、この儀は如何候べきと申され候。秀林院様の仰せには分別致し候やうにと申し渡され候へども、少齋石見兩人の言葉に申すほどの分別も有之候や。まづ老功の侍とは申さず、人並みの分別ある侍ならば、たとひ田邊の城へなりとも秀林院

様をお落し申し、その次には又わたくしどもに
も思ひ思ひに姿を隠させ、最後に両人のお留
守居役たち覚悟仕るべき場合に御座候。然
るに人質に出で候はゞ人、一人も無之候へは、
出し申すことなるまじくなどとは一も二もなき
喧嘩腰にて、側杖を打たるるわたくしどもこそ
迷惑千萬に存じ候。

九、霜は又右の次第を秀林院様へ申し上げ
候ところ、秀林院様は御返事も遊ばされず、
唯お口のうちに「のす、のす」とのみお唱へなさ
れ居り候へども、漸くさりげなきおん氣色に
直られ、一段然るべしと御意なされ候。如何
さまただお留守居役よりお落し奉らんとも申
されぬうちに、落せと仰せられ候譯には参り
兼ね候儀ゆゑ、さだめし御心中には少齋石見
の無分別なる申し條をお恨み遊ばされしことと
存じ上げ候。且は御機嫌もこの時より引きつ
づき甚だよろしからず、ことごとにわたくしど
もをお叱りなされ、又お叱りなさるる度に、えそ
ぽ物語とやらをお讀み聞かせ下され、誰はこ
の蛙、彼はこの狼などと仰せられ候間、
みなみな人質に参るよりも難儀なる思ひを致し
候。殊にわたくしは蝸牛にも、鴉にも、豚に
にも、亀の子にも、棕櫚にも、犬にも、蝮に
も、野牛にも、病人にも似かよひ候よし、く
やしきお小言を蒙り候こと、末代迄も忘れ難
く候。

十、十四日には又澄見参り、人質の儀に申し
出し候。秀林院様御意なされ候へば、三齋様
のお許し無之うちは、如何やうのこと候とも、
人質に出で候儀には同心仕るまじくと仰せ
られ候。然れば澄見申し候は、成程三齋様
の御意見を重んぜられ候こと、尤も賢女には
候べし。なれどもこれは細川家のおん大事に
つき、たとひ城内へはお出なされずとも、お隣
屋敷浮田中納言様迄入らせらるべきか、浮田中
納言様の奥様は與一郎様と御姉妹の間がらゆ
ゑ、その分のことは三齋様にもよもやお咎め
なさるまじく、左様遊ばされ候へとのことに御
座候。澄見はわたくし大嫌ひの狸婆には候
へども、澄見の申し候ことは一理ありと存
じ候。お隣屋敷浮田中納言様へお移り遊ばさ
れ候はば、第一に世間の名聞もよろしく、第
二にわたくしどもの命も無事にて、この上の
案は有之まじく候。

十一、然るに秀林院様御意なされ候は、如
何にも浮田中納言殿は御一門のうちには候へど
も、これも治部少と一味のよし、兼ねがね承は
り居り候間、それへ参り候ことも人質
に候へば、同心致しがたくと仰せられ候。澄
見はなほも押し返し、いろいろ口説き立て候
へども、一向に御承引遊ばされず、遂に澄見の
妙案も水の泡と相果て申し候。その節も亦
秀林院様は孔子とやら、[illegible]とやら、[illegible]
姫とやら、さりすとてれすとやら、和漢はもとより
南蠻國の物語さへも仰せ聞かされ、さすがの澄
見も御能辯にはしみじみ恐れ入りしやうに見受
け候。

十二、この日の大凶時、霜は御庭前の松の梢
へ金色の十字架の天降るさまを夢のやうに眺め
候よし、如何なる不吉の前兆にやと案じけれ
わたくしへ話し申し候。されど霜は近眼の上、
日頃みなみなになぶらるる臆病者に御座候
間、明星を十字架とも見違へ候や、覚束な
き限りと存じ候。

十三、十六日には又々澄見参り、きのふと同じ
ことを申し上げ候。秀林院様御意なされ候
は、たとひ何度申され候とも、覚悟は變る
まじくと仰せられ候。然れば澄見も立腹致し
候や、御前を退き候みぎり、御心情のほ
どもさぞかしでおぢやらう。とうやらお年も四
十あまりに見ゆるなど申し候。秀林院様にも一

かたならず御立腹遊ばされ、以後は澄見に目通り無用と達し候へと仰せられ候。なほ又この日も一刻置きに「おらつしよ」をお唱へ遊ばされ候へども、內證にてのお掛合ひも愈手切と相成り候間、みなみな安き心もなく、梅さへ笑はずに控へ居り候。

十四、この日は又河北石見、稲富伊賀(祐直)と口論致され候よし、伊賀は砲術の上手につき、他家にも弟子の衆少からず、何かと評判よろしく候まま、少齋石見などは嫉きことに思はれ、兎角口論も致され勝ちとのことに御座候。

十五、この日の夜半、霜は夢に打手のかかるを見、肝を冷やし候よし、大聲に何か呼ばはりながら、お廊下を四五間走りまはり候。

十六、十六日巳の刻頃、少齋石見の兩人、再び霜に申され候は、唯今治部少かたより表向きの使參り、是非とも秀林院樣をおん渡し候へ、もしおん渡し候はずば、押し掛けて取り候はんと申し候間、さりとは我儘なる申し條も候ものかな、この上は我等腹を切り候とも、おん渡し仕るまじくと申し遣はし候、然れば秀林院樣にも御覺悟遊ばされたくとのことに有之候。その節、生憎少齋は拔け齒を煩はれ居り候まま、石見に口上を賴まれ候よし、又石見は立腹の餘り、霜をも打ち果すかと見えられ候よし、いづれも霜の物語に御座候。

十七、秀林院樣は霜より仔細を聞こし召され、直ちに與一郎樣の奧樣とお內談に相成り候。後に承り候へば、與一郎樣の奧樣にも御生害をお勸めに相成り候よし、何ともお傷しく存じ上げ候。總じてこの度の大變はやむを得ぬ仕儀とは申しながら、第一にはお留守居役の無分別よりことを破り、第二には又秀林院樣御自身のお氣性より御最期を早められ候も同然の儀に御座候。然るに與一郎樣の奧樣にも御生害をお勸め遊ばされ候上は、わたくしどもにさへお伴を仕るやう、御意なされ候やも計り難く、愈迷惑に存じ居り候ところ、みなみな御前へ召され候間、如何なる仰せを蒙ることかと一かたならず案じ申し候。

十八、やがて御前へ參り候へば、秀林院樣御意なされ候は、愈「はらいそ」と申す極樂へ參り候はん時節も近づき、一段悅ばしく候と仰せられ候。なれどもおん顏の色は靑ざめ、お聲もやや震へ居られ候間、もとよりこれはおん僞と存じ上げ候。秀林院樣又御意なされ候は、唯黃泉路の障りとなるはその方どもの未來なり、その方どもは心得惡しく、切支丹の御宗門にも歸依し奉らず候まま、未來は「いんへるの」と申す地獄に墮ち、惡魔の餌食とも成り果て候べし。就いては今日より心を改め、天主のおん敎へを守らせ候へ。もし又さもなく候はば、みなみな生害の伴を仕り、われらと共に穢土を去り候へ。その節はわれらより「あるかんじよ」(大天使)へ賴み、「あるかんじよ」より又おん主えす・きりすとへ賴み奉り、一同に「はらいそ」の莊嚴を拜し候べしと仰せられ候。然ればわたくしどもは感淚に咽び、みなみな卽座に切支丹の御宗門に歸依し奉る旨、同音に申し上げ候間、秀林院樣にも御機嫌よろしく、これにて黃泉路の障りも無之、安堵いたし候まま、伴は無用と御意なされ候。

十九、なほ又秀林院樣は三齋樣與一郎樣へお書置きをなされ、二通とも霜へお渡し遊ばされ候。その後京の「ぐれごり屋」と申す伴天連へも何やら橫文字のお書置きをなされ、これはわたくしへお渡し遊ばされ候。この橫文字のお書置きは五六行には候へども、秀林院樣のお書き遊ばされ候には一刻あまりもおかかりなされ候。これも序ゆゑ申し上げ候へども、

このお書置きをぐれごり屋へ渡し候節、日本人のいるまん役僧一人、厳かに申し候は、総じて自害は切支丹宗門の禁ずるところに御座候間、秀林院様もはらいそへはお昇り遊ばさるることかなふまじく候、但し「みさ」と申す祈祷を奉られ候はば、その功徳広大にして、悪趣を免れさせ候べし。もし「みさ」を修せられ候はんには、銀一枚賜り候へとのことに御座候。

二十、打手のかかり候は亥の刻頃と存じ候。お屋敷の表は河北石見預り、裏の御門は稲富伊賀預り、奥は小笠原少斎預りと定まり居り候。敵寄すると承り候へば、秀林院様は梅を遣はされ、與一郎様の奥様をお召し遊ばされ候へども、はやいづこへかお落ちなされ候や、お部屋は藻ぬけのからと相成り居り候よし、わたくしどもみなみなおん悔み申し上げ候。わたくしどもに御意なされ候は、生まれては山崎の合戦に太閤殿下と天下を争はれし惟任将軍光秀を父とたのみ、死してははらいそにおはします「まりや」様を母とたのまんわれらに、末期の恥辱を與へ候こと、かへすがへすも奇怪なる平大名の娘と仰せられ候。その節のおんありさまはしたなさ、今も目に見ゆる心地致し候。

二十一、程なく小笠原少斎、紺絲の具足に小薙刀を提げ、お次迄御介錯に参られ候。未だ抜け歯の痛み甚しく候よし、左の頬先腫れ上られ、武者ぶりも聊はかなげに見うけ候。少斎申され候は、お居間の敷居を越え候はんも恐れ多く候間、敷居越しに御介錯仕り、追ひ腹切らんとのことに御座候。御先途見とどけの役は霜とわたくしとに定まり居り候へば、この頃にはみなみないづこへか落ち失せ、わたくしどもばかり残り居り候。秀林院様は少斎を御覧ぜられ、介錯大儀と仰せられ候。細川家へお輿入れ遊ばされ候以来、御夫婦御親子のかたがたは格別に候へども、男の顔を御覧遊ばされ候は今日この少斎をはじめと致され候よし、後に霜より承り及び候。少斎はお次に両手をつかれ、御最期の時参り候と申し上げ候。尤も片頬腫れ上られ居り候へば、言舌も甚ださだかならず、秀林院様にも御當惑遊ばされ、大聲に申候へと御意なされ候。

二十二、その時誰やら若き衆一人、萌葱絲の具足に大太刀を提げ、お次へ駆けつけ候や否や、稲富伊賀逆心仕り敵は裏門よりなだれ入り候間、速に御覚悟なされたくと申され候。秀林院様は右のおん手にお髪をきりりと巻き上げられ、御覚悟の體に見上げ候へども、若き衆の姿を御覧遊ばされ、羞しと思召され候や、忽ちおん顔を耳の根迄赤あかとお染め遊ばされ候。わたくし一生にこの時ほど、秀林院様の御器量をお美しく存じ上げ候こと、一度も覚え申さず候。

二十三、わたくしどもの御門を出で候節は、もはやお屋敷に火の手あがり、御門の外にも人人大勢、火の光の中に集まり居り候。尤もこれは敵にては無之、火事を見に集まりたる人人のよし、又敵は伊賀を引きつれ、御最期以前に引きあげ候よし、いづれも後に承り申し候。まづは秀林院様お果てなされ候次第のこと、あらあらと申し上げたる通りに御座候。

子供の病氣

——一游亭に——

夏目先生は書の幅を見ると、獨り語のやうに「旭窓だね」と云つた。落款は成程旭窓外史だつた。自分は先生にかう云つた。「旭窓は淡窓の孫でせう。淡窓の子は何と云ひましたかしら？」先生は即座に「夢窓だらう」と答へた。

——すると急に目がさめた。蚊帳の中には次の間にともした電燈の光がさしこんでゐた。妻は二つになる男の子のおむつを取り換へてゐるらしかつた。子供は勿論泣きつづけてゐた。自分はそちらに背を向けながら、もう一度眠りにはひらうとした。すると妻がかう云つた。「いやよ。多加ちやん。又病氣になつちやあ。」自分は妻に聲をかけた。「どうかしたのか？」「ええ、お腹が少し惡いやうなんです。」この子供は長男に比べると、何かに病氣をし勝ちだつた。それだけに不安も感じれば、反對に又馴れつこのやうに等閑にする氣味もないではなかつた。「あした、Sさんに見て頂けよ。」「ええ、今夜見て頂かうと思つたんですけれども。」自分は子供の泣きやんだ後、もとのやうにぐつすり寢入つてしまつた。

翌朝目をさました時にも、夢のことははつきり覺えてゐた。淡窓は廣瀨淡窓の氣だつた。しかし旭窓だの夢窓だのと云ふのは全然架空の人物らしかつた。さう云へば確か講釋師に南窓と云ふのがあつたなどと思つた。しかし子供の病氣のことは餘り心にもかからなかつた。それが多少氣になり出したのでSさんから歸つて來た妻の言葉を聞いた時だつた。「やつぱり消化不良ですつて。先生も後ほどいらつしやいますつて。」妻は子供を横抱きにしたまま、怒つたやうにものを云つた。「熱は？」「七度六分ばかり、——ゆうべはちつともなかつたんですけれども。」自分は二階の書齋へこもり、毎日の仕事にとりかかつた。仕事は不相變捗どらなかつた。が、それは必しも子供の病氣のせゐばかりではなかつた。その中に、庭木を鳴らしながら、蒸暑い雨が降り出した。自分は書きかけの小說を前に、何本も敷島へ火を移した。

Sさんは午前に一度、日の暮に一度診察に見えた。日の暮には多加志の浣腸をした。多加志は浣腸されながら、まじまじ電燈の火を眺めてゐた。浣腸の液は少時すると、淡黑い粘液をさらひ出した。自分は病を見たやうに感じた。「どうでせう？　先生。」「何、大したことはありません。唯氷を絶やさずに十分頭を冷やして下さい。——ああ、それから餘りおあやしにならんやうに。」先生はさう云つて歸つて行つた。

自分は夜も仕事をつづけ、一時ごろやつと床へはひつた。その前に後架から出て來ると、誰かまつ暗な臺所に、こつこつ音をさせてゐるものがあつた。「誰？」「わたしだよ。」返事をしたのは母の聲だつた。「何をしてゐるんです？」「氷を壞してゐるんだよ。」自分は迂濶を恥ぢながら、「電燈をつければ好いのに。」と云つた。「大丈夫だよ。手探りでも。」自分はかまはずに電燈をつけた。細帶一つになつた母は無器用に金槌を使つてゐた。その姿は何だか家庭に見るには、餘りにみすぼらしい氣のするものだつた。氷も水に洗はれた角には、きらりと電燈の光を反射してゐた。

けれども翌朝の多加志の熱は九度よりも少し

高い位だつた。Sさんは又午前中に見え、ゆうべの浣腸を繰り返した。自分はその手傳ひをしながら、けふは粘液の少ないやうにと思つた。しかし便器を拔いて見ると、粘液はゆうべよりもずつと多かつた。それを見た妻は誰にともなしに、「あんなにあります。」と聲を擧げた。その聲は年の七つも若い女學生になつたかと思ふ位、はしたない調子を帶びたものだつた。自分は思はずSさんの顏を見た。「疫痢ではないでせうか？」「いや、疫痢ぢやありません。疫痢は乳離れをしない内には、——」Sさんは案外落ち着いてゐた。

自分はSさんの歸つた後、毎日の仕事にとりかかつた。それは「サンデイ毎日」の特別號に載せる小說だつた。しかも原稿の締切りはあしたの朝に迫つてゐた。自分は氣乘りのしないのを、無理にペンだけ動かしつづけた。けれども多加志の泣き聲は兎角神經にさはり勝ちだつた。のみならず多加志が泣きやんだと思ふと、今度は二つ年上の比呂志も思ひ切り、大聲に泣き出したりした。

神經にさはることはそればかりではなかつた。午後には見知らない靑年が一人、金の工面を頼みに來た。「僕は筋肉勞働者ですが、C先生から先生に紹介狀を貰ひましたから。」靑年は無愛想にかう云つた。自分は現在蟇口に二三圓しかなかつたから、不用の書物を二册渡し、これを金に換へ給へと云つた。靑年は書物を受け取ると、丹念に奧附を檢べ出した。「この本は非賣品と書いてありますね。非賣品でも金になりますか？」自分は情ない心もちになつた。が、兎に角賣れる筈だと答へた。「さうですか？おや失敬します。」靑年はただ疑はしさうに、難有うとも何とも云はずに歸つて行つた。

Sさんは日の暮にも浣腸をした。今度は粘液もずつと減つてゐた。「ああ、今晚は少なうございますね。」手洗ひの湯をすすめに來た母は殆ど手柄顏にかう云つた。自分も安心はしなかつたにしろ、安心に近い寛ぎを感じた。それに粘液の多少の外にも、多加志の顏色や擧動などのふだんに變らないせゐもあつたのだつた。

「あしたは多分熱が下るでせう。幸ひ吐き氣も來ないやうですから。」Sさんは母に答へながら、滿足さうに手を洗つてゐた。

翌朝自分の眼をさました時、伯母はもう次の間に自分の蚊帳を疊んでゐた。それが蚊帳の環を鳴らしながら、「多加ちやんが」何とか云つたらしかつた。まだ頭のぼんやりしてゐた自分は、「多加志が？」と好い加減に問ひ返した。「多加ちやんが惡いんだよ。入院させなければならないんだとさ。」自分は床の上に起き直つた。きのふのけふだけに意外な氣がした。「Sさんは？」「先生ももう來ていらつしやるんだよ。さあ、早くお起きなさい。」伯母は感情を抑へるやうに、妙にかたくなな顏をしてゐた。自分はすぐに顏を洗ひに行つた。不相變雲のかぶさつた、氣色の惡い天氣だつた。風呂場の手桶には山百合が二本、無造作に抛りこんであつた。何だかその勻や褐色の花粉がべたべた皮膚にくつつきさうな氣がした。

多加志はたつた一晚のうちに、すつかり眼が窪んでゐた。今朝妻が抱き起さうとすると、頭を仰向けに垂らしたまま、白い物を吐いたとか云ふことだつた。欠伸ばかりしてゐるのもいけないらしかつた。自分は急にいぢらしい氣がした。同時に又無氣味な心もちもした。Sさんは子供の枕もとに默然と敷島を啣へてゐた。それが自分の顏を見ると、「ちとお話したいことがありますから。」と云つた。自分はSさんを二階に招じ、火のない火鉢をさし挾んで坐つた。「生命に危險はないと思ひますが。」Sさんはさう口を切つた。多加志はSさんの言葉によれば、

すつかり胃腸を壞してゐた。この上は唯二三日の間、斷食をさせる外に仕かたはなかつた。「それには入院おさせになつた方が便利ではないかと思ふんです。」自分は多加志の容態はSさんの云つてゐるよりも、ずつと危いのではないかと思つた。或はもう入院させても、手遲れなのではないかとも思つた。しかしもとよりそんなことにこだはつてゐるべき場合ではなかつた。自分は早速Sさんに入院の運びを願ふことにした。「ぢやU病院にしませう。近いだけでも便利ですから。」Sさんはすすめられた茶も飲まずに、U病院へ電話をかけに行つた。自分はその間に妻を呼び、伯母にも病院へ行つて貰ふことにした。

その日は客に會ふ日だつた。客は朝から四人ばかりあつた。自分は客と話しながら、入院の支度を急いでゐる妻や伯母を意識してゐた。すると何か舌の先に、砂粒に似たものを感じ出した。自分はこのごろ蟲齒につめたセメントがとれたのではないかと思つた。けれども指先に出して見ると、ほんたうの齒の缺けたのだつた。自分は少し迷信的になつた。しかし客とは煙草をのみのみ、賣り物に出たとか噂のある抱一の三味線の話などをしてゐた。

其處へ又自ら勞働者と稱する昨日の青年も面會に來た。青年は玄關に立つたまま、昨日貰つた二冊の本は一圓二十錢にしかならなかつたから、もう四五圓くれないかと云ふ掛け合ひをはじめた。のみならず如何に斷つても、容易に歸るけしきを見せなかつた。自分はとうとう落着きを失ひ、「そんなことを聞いてゐる時間はない。歸つて貰はう。」と怒鳴りつけた。青年はまだ不服さうに、「ぢや電車賃だけ下さい。五十錢貰へば好いんです。」などと、さもしいことを並べてゐた。が、その手も利かないのを見ると、手荒に玄關の格子戸をしめ、やつと門外に退散した。自分はこの時かう云ふ寄附には今後斷然應ずまいと思つた。

四人の客は五人になつた。五人目の客は年の若い佛蘭西文學の研究者だつた。自分はこの客と入れちがひに、茶の間の容子を窺ひに行つた。するともう支度の出來た伯母は着膨れた子供を抱きながら、縁側をあちこち歩いてゐた。自分は色の惡い多加志の額へ、そつと脣を押しつけて見た。額は可也火照つてゐた。しほむきもぴくぴく動いてゐた。「車は？」自分は小聲に外のことを云つた。「車？　車はもう來てゐます。」伯母はなぜか他人のやうに、丁寧な言葉を使つてゐた。其處へ着物を更めた妻も羽根布團やバスケットを運んで來た。「では行つて參ります。」妻は自分の前に兩手をつき、妙に眞面目な聲を出した。自分は唯多加志の帽子を新しいやつに換へてやれと云つた。それはつい四五日前、自分の買つて來た夏帽子だつた。「もう新しいのに換へて置きました。」妻はさう答へた後、簞笥の上の鏡を覗き、ちよいと襟もとを掻き合せた。自分は彼等を見送らずに、もう一度二階へ引き返した。

自分は新に來た客とジョルジュ・サンドの話などをしてゐた。その時庭木の若葉の間に二つの車の幌が見えた。幌は塀の上にゆらめきながら、忽ち目の前を通り過ぎた。「大體十九世紀の前半の作家はバルザックにしろサンドにしろ、後半の作家よりは偉いですね。」客は――自分ははつきり覺えてゐる、客は熱心にかう云つてゐた。

午後にも客は絶えなかつた。自分はやつと日の暮に病院へ出かける時間を得た。曇天は何時か雨になつてゐた。自分は著物を著換へながら、女中に足駄を出すやうにと云つた。其處へ大阪のN君が原稿を貰ひに顏を出した。N君は泥まみれの長靴をはき、外套に雨の痕を光らせ

てゐた。自分は玄關に出迎へたまま、これこれの事情のあつた爲に、何も書けなかつたと云ふ斷りを述べた。N君は自分に同情した。「おやおや今度にあきらめます。」とも云つた。自分は何だかN君の同情を強ひたやうな心もちがした。同時に體の好い口實に瀕死の子供を使つたやうな氣がした。

　N君の歸つたか歸らないのに、伯母も病院から歸つて來た。多加志は伯母の話によれば、其の後も二度ばかり乳を吐いた。しかし幸ひ腦にだけは異狀も來ずにゐるらしかつた。伯母はまだこの外に看護婦は氣立ての善ささうなこと、今夜は病院へ妻の母が泊りに來てくれることなどを話した。「多加ちやんがあすこへはひると直に、日曜學校の生徒からだつて、花を一束貰つたでせう。まあ、お花だけにいやな氣がしてね。」そんなことも話してゐた。自分はけさ話をしてゐる内に、齒の缺けたことを思ひ出した。が、何とも云はなかつた。

　家を出た時はまつ暗だつた。その中に細かい雨が降つてゐた。自分は門を出ると同時に、日和下駄をはいてゐるのに心づいた。しかもその日和下駄は左の前鼻緒がゆるんでゐた。自分は何だかこの鼻緒が切れると、子供の命も終りさうな氣がした。しかしはき換へに歸るのは到底苛立たしさに堪へなかつた。自分は足駄を出さなかつた女中の愚を怒りながら、うつかり下駄を踏み返さないやうに、氣をつけ氣をつけ歩いて行つた。

　病院へ著いたのは九時過ぎだつた。成程多加志の病室の外には姫百合や撫子が五六本、洗面器の水に浸されてゐた。病室の中の電燈の玉に風呂敷か何か懸つてゐたから、顏も見えない程薄暗かつた。其處に妻や妻の母は多加志を中に挾んだまま、帶も解かずに横になつてゐた。多加志は妻の母の腕を枕に、すやすや寢入つてゐるらしかつた。妻は自分の來たのを知ると一人だけ布團の上に坐り、小聲に「どうも御苦勞さま。」と云つた。妻の母もやはり同じことを云つた。それは豫期してゐたよりも、氣輕い調子を帶びたものだつた。自分は幾分かほつとした氣になり、彼等の枕もとに腰を下した。妻に乳を飲ませられぬ爲に、多加志は泣くし、乳は張るし、「二重に苦しい思ひをする」と云つた。「とてもゴムの乳つ首位ぢや駄目なんですもの。しまひには舌を吸はせましたわ。」「今はわたしの乳を飲んでゐるんですよ。」妻の母は笑ひながら、萎びた乳首を出して見せた。「一生懸命に吸ふんでね。こんなにまつ赤になつてしまつた。」自分も何時か笑つてゐた。「しかし存外好ささうですね。僕はもう今ごろは絶望かと思つた。」「多加ちやん？多加ちやんはもう大丈夫ですとも。なあに、只のお腹下しなんですよ。あしたはきつと熱が下りますよ。」「御祖師樣の御利益ででせう？」妻は母をひやかした。しかし法華經信者の母は妻の言葉も聞えないやうに、惡い熱をさますつもりか、一生懸命に口を尖らせ、ふうふう多加志の頭を吹いた。……

* * * * *

　多加志はやつと死なずにすんだ。自分は彼の小康を得た時、入院前後の消息を小品にしたいと思つたことがある。けれどももうつかりさう云ふものを作ると、又病氣がぶり返しさうな、迷信じみた心もちがした。その爲にとうとう書かずにしまつた。今は多加志も庭木に吊つたハムモックの中に眠つてゐる。自分は原稿を頼まれたのを機會に、とりあへずこの話を書いて見ることにした。讀者には寧ろ迷惑かも知れない。

寒さ

或る雪上りの午前だつた。保吉は物理の教官室の椅子にストオヴの火を眺めてゐた。ストオヴの火は息をするやうに、とろとろと黄色に燃え上つたり、どす黑い灰燼に沈んだりした。それは室内に漂ふ寒さと戰ひつづけてゐる證據だつた。保吉はふと地球の外の宇宙的寒冷を想像しながら、赤あかと熱した石炭に何か同情に近いものを感じた。

「堀川君。」

保吉はストオヴの前に立つた宮本と云ふ理學士の顏を見上げた。近眼鏡をかけた宮本はズボンのポケツトへ手を入れたまま、口髭の薄い唇に人の好い微笑を浮べてゐた。

「堀川君。君は女も物體だと云ふことを知つてゐるかい？」

「動物だと云ふことは知つてゐるが。」

「動物ぢやない。物體だよ。――こいつは僕も苦心の結果、最近發見した眞理なんだがね。」

「堀川さん、宮本さんの云ふことなどを眞面目に聞いてはいけませんよ。」

これはもう一人の物理の教官、――長谷川と云ふ理學士の言葉だつた。保吉は彼をふり返つた。長谷川は保吉の後ろの机に試驗の答案を調べかけたなり、額の禿げ上つた顏中に當惑さうな薄笑ひを漲らせてゐた。

「こりや怪しからん。僕の發見は長谷川君を大いに幸福にしてゐる筈ぢやないか？――堀川君、君は傳熱作用の法則を知つてゐるかい？」

「デンネツ？　電氣の熱か何かかい？」

「困るなあ、文學者は。」

宮本はさう云ふ間にも、火の氣の映つたストオヴの口へ一杯の石炭を浚ひこんだ。

「溫度の異なる二つの物體を互に接觸せしめるとだね、熱は高溫度の物體から低溫度の物體へ、兩者の溫度の等しくなる迄、ずつと移動をつづけるんだ。」

「當り前ぢやないか、そんなことは？」

「それを傳熱作用の法則と云ふんだよ。扨女を物體とするね。好いかい？　もし女を物體とすれば、男も勿論物體だらう。すると戀愛は熱に當る譯だね。今この男女を接觸せしめると、戀愛の傳はるのも電熱のやうに、より逆上した男からより逆上してゐない女へ、兩者の戀愛の等しくなる迄、ずつと移動をつづける筈だらう。長谷川君の場合などは正にさうだね。……」

「そうら、はじまつた。」

長谷川は寧ろ嬉しさうに、擽られる時に似た笑ひ聲を出した。

「今Sなる面積を通し、T時間内に移る熱量をEとするね。すると――好いかい？　Hは溫度、Xは熱傳導の方面に計つた距離、Kは物質により一定されたる熱傳導率だよ。すると長谷川君の場合はだね。……」

宮本は小さい黑板へ公式らしいものを書きはじめた。が、突然ふり返ると、さもがつかりしたやうに白墨の缺を抛り出した。

「どうも素人の堀川君を相手ぢや、折角の發見の自慢も出來ない。――兎に角長谷川君の許嫁なる人は公式通りにのぼせ出したやうだ。」

「實際さう云ふ公式がありや、世の中は餘つ程樂になるんだが。」

保吉は長ながと足をのばし、ぼんやり窓の外の雪景色を眺めた。この物理の教官室は二階

の前に當つてゐる爲、體操器械のあるグラウンドや、グラウンドの向うの並松や、その又向うの赤煉瓦の建物を一目に見渡すのも容易だつた。海も——海は建物と建物との間に薄暗い波を煙らせてゐた。

「その代りに文學者は上つたりだぜ。——どうだい、この間出した本の賣れ口は？」

「不相變ちつとも賣れないね。作者と讀者との間には傳熱作用も起らないやうだ。——時に長谷川君の結婚はまだなんですか？」

「ええ、もう一月ばかりになつてゐるんですが、——その用もいろいろあるものですから、勉強の出來ないのに弱つてゐます。」

「勉強も出來ないほど待ち遠しいかね。」

「宮本さんぢやあるまいし、第一家を持つとしても、借家のないのに弱つてゐるんです。現にこの前の日曜などにはあらかた市中を歩いて見ました。けれどもたまに明いてゐたと思ふと、ちやんともう約定濟みになつてゐるんですからね。」

「僕の方ぢやいけないですか？　毎日學校へ通ふのに汽車へ乘るのさへかまはなければ。」

「あなたの方ぢや少し遠すぎるんです。あの邊は借家もあるさうですね、家内はあの邊を希望してゐるんですが——おや、堀川さん。靴が焦げやしませんか？」

保吉の靴はいつの間にかストオヴの胴に觸れてゐたと見え、革の焦げる臭氣と共にもやもや水蒸氣を昇らせてゐた。

「それも君、やつぱり傳熱作用だよ。」

宮本は眼鏡を拭ひながら、覺束ない近眼の額ごしににやりと保吉へ笑ひかけた。

＊　＊　＊　＊　＊

それから四五日たつた後、——或霜曇りの朝だつた。保吉は汽車を捉へる爲、或避暑地の町はづれを一生懸命に急いでゐた。路の右は麥畑、左は汽車の線路のある二間ばかりの堤だつた。人つ子一人ゐない麥畑はかすかな物音に充ち滿ちてゐた。それは誰か麥の間を歩いてゐる音としか思はれなかつた、しかし事實は打ち返された土の下にある霜柱のおのづから崩れる音らしかつた。

その内に八時の上り列車は長い汽笛を鳴らしながら、餘り速力を早めずに堤の上を通り越した。保吉の捉へる下り列車はこれよりも半時間遲い筈だつた。彼は時計を出して見た。しかし時計はどうしたのか、八時十五分になりかかつてゐた。彼はこの時計の相違を時計の罪だと解釋した。けふは乘り遲れる心配はない。——そんなことも勿論思つたりした。路に隣つた麥畑はだんだん生垣に變り出した。保吉は「朝日」を一本つけ、前よりも氣樂に歩いて行つた。

石炭殼などを敷いた路は爪先上りに踏切りへ出る、——其處へ何氣なしに來た時だつた。保吉は踏切りの兩側に人だかりのしてゐるのを發見した。轢死だなと忽ち考へもした。幸ひ踏切りの柵の側に、荷をつけた自轉車を止めてゐるのは知り合ひの肉屋の小僧だつた。保吉は巻煙草を持つた手に、後ろから小僧の肩を叩いた。

「おい、どうしたんだい？」

「轢かれたんです。今の上りに轢かれたんです。」

小僧は早口にかう云つた。兎の皮の耳袋をした顏も妙に生き生きと赫いてゐた。

「誰が轢かれたんだい？」

「踏切り番です。學校の生徒の轢かれさうになつたのを助けようと思つて轢かれたんです。ほら、八幡前に永井つて本屋があるでせう？　あすこの女の子が轢かれる所だつたんです。」

「その子供は助かつたんだね？」

「ええ、あすこに泣いてゐるのがさうです。」

「あすこ」といふのは踏切りの向う側にゐる人だかりだつた。成程其處には女の子が一人、巡査に何か尋ねられてゐた。その側には助役らしい男も時時巡査と話したりしてゐた。踏切り番は――保吉は踏切り番の小屋の前に莚をかけた死骸を發見した。それは嫌惡を感じさせると同時に好奇心を感じさせるのも事實だつた。莚の下からは遠目にも兩足の靴だけ見えるらしかつた。

「死骸はあの人たちが持つて行つたんです。」

こちら側のシグナルの柱の下には鐵道工夫が二三人、小さい焚火を圍んでゐた。黄いろい炎をあげた焚火は光も煙も放たなかつた。それだけに如何にも寒さうだつた。工夫の一人はその焚火に半ズボンの尻を炙つてゐた。

保吉は踏切りを通り越しにかかつた。線路は停車場に近い爲、何本も踏切りを横ぎつてゐた。彼はその線路を越える度に、踏切り番の轢かれたのはどの線路だつたらうと思ひ思ひした。が、どの線路だつたかは直に彼の目にも明らかになつた。血はまだ一條の線路の上に二三分前の悲劇を語つてゐた。彼は殆ど反射的に踏切の向う側へ目を移した。しかしそれは無效だつた。冷やかに光つた鐵の面にどろりと赤いもののたまつてゐる光景はつと思ふ瞬間に、鮮かに心へ燒きついてしまつた。のみならずその血は線路の上から薄うすと蒸氣さへ昇らせてゐた。……

十分の後、保吉は停車場のプラットフォオムに落着かない歩みをつづけてゐた。彼の頭は今しがた見た、氣味の惡い光景に一ぱいだつた。殊に血から立ち昇つてゐる水蒸氣ははつきり目についてゐた。彼はこの間話し合つた傳熱作用のことを思ひ出した。血の中に宿つてゐる生命の熱は宮本の敎へた法則通り、一分一厘の狂ひもなしに刻薄に線路へ傳はつてゐる。その又生命は誰のでも好い、職に殉じた踏切り番でも重罪犯人でも同じやうにやはり刻薄に傳はつてゐる。――さういふ考への意味のないことは彼にも勿論わかつてゐた。孝子でも水には溺れなければならぬ、節婦でも火には燒かれる筈である。――彼はかう心の中に何度も彼自身を說得しようとした。しかし目のあたりに見た事實は容易にその論理を許さぬほど、重苦しい感銘を殘してゐた。

けれどもプラットフォオムの人人は彼の氣もちとは沒交涉に、いづれも、幸福らしい顏をしてゐた。保吉はそれにも苛立たしさを感じた。就中海軍の將校たちの大聲に何か話してゐるのは肉體的に不快だつた。彼は二本目の「朝日」に火をつけ、プラットフォオムの先へ步いて行つた。其處は線路の二三町先にあの踏切りの見える場所だつた。踏切りの兩側の人だかりもあらかた今は散じたらしかつた。唯シグナルの柱の下には鐵道工夫の焚火が一點、黄いろい炎を動かしてゐた。

保吉はその遠い焚火に何か同情に似たものを感じた。が、踏切りの見えることはやはり不安には違ひなかつた。彼はそちらに背中を向けると、もう一度人ごみの中へ歸り出した。しかしまだ十步と步かないうちに、ふと赤革の手袋を一つ落してゐることを發見した。手袋は卷煙草に火をつける時、右の手ばかりを脫いだのを持つて步いてゐたのだつた。彼は後ろをふり返つた。すると手袋はプラットフォオムの先に、手のひらを上に轉がつてゐた。それは丁度無言のまま、彼を呼びとめてゐるやうだつた。

保吉は霜曇りの空の下に、たつた一つ取り殘された赤革の手袋の心を感じた。同時に薄ら寒い世界の中にも、いつか溫い日の光のほそぼそとさして來ることを感じた。

あばばばば

保吉はずつと以前からこの店の主人を見知つてゐる。

ずつと以前から、——或はあの海軍の學校へ赴任した當日だつたかも知れない。彼はふとこの店へマッチを一つ買ひにはひつた。店には小さい飾り窓があり、窓の中には大將旗を掲げた軍艦三笠の模型のまはりにキュラソオの壜だのココアの罐だの乾し葡萄の箱だのが並べてある。が、軒先に「たばこ」と抜いた赤塗りの看板が出てゐるから、勿論マッチも賣らない筈はない。彼は店を覗きこみながら、「マッチを一つくれ給へ。」と云つた。店先には高い勘定臺の後ろに若い眇の男が一人、つまらなさうに佇んでゐる。それが彼の顔を見ると、算盤を竪に構へたまま、にこりともせずに返事をした。

「これをお持ちなさい。生憎マッチを切らしましたから。」

お持ちなさいと云ふのは煙草に添へる一番小型のマッチである。

「貰ふのは氣の毒だ。ぢや朝日を一つくれ給へ。」

「何、かまひません。お持ちなさい。」

「いや、まあ朝日をくれ給へ。」

「お持ちなさい。これでよろしけりや、——入らぬ物をお買ひになるには及ばないです。」

眇の男の云ふことは親切づくなのには違ひない。が、その聲や顔色は如何にも無愛想を極めてゐる。素直に貰ふのは忌いましい。と云つて店を飛び出すのは多少相手に氣の毒である。保吉はやむを得ず勘定臺の上へ一錢の銅貨を一枚出した。

「ぢやそのマッチを二つくれ給へ。」

「二つでも三つでもお持ちなさい。ですが代は入りません。」

其處へ幸ひ戸口に下げた金線サイダアのポスタアの蔭から、小僧が一人首を出した。これは表情の朦朧とした、面皰だらけの小僧である。

「檀那、マッチは此處にありますぜ。」

保吉は内心凱歌を擧げながら、大型のマッチを一箱買つた。代は勿論一錢である。しかし彼はこの時ほど、マッチの美しさを感じたことはない。殊に三角の波の上に帆前船を浮べた商標は額縁へ入れても好い位である。彼はズボンのポケットの底へちやんとそのマッチを落した後、得得とこの店を後ろにした。……

保吉は爾來半年ばかり、學校へ通ふ往復に度たびこの店へ買ひ物に寄つた。もう今では目をつぶつても、はつきりこの店を思ひ出すことが出來る。天井の梁からぶら下つたのは鎌倉のハムに違ひない。欄間の色硝子は漆喰塗りの壁へ緑色の日の光を映してゐる。板張りの床に散らかつたのはコンデンスド・ミルクの廣告であらう。正面の柱には時計の下に大きい日暦がかかつてゐる。その外飾り窓の中の軍艦三笠も、金線サイダアのポスタアも、椅子も、電話も、自轉車も、スコットランドのウイスキイも、アメリカの乾し葡萄も、マニラの葉卷も、エジプトの紙卷も、燻製の鰊も、牛肉の大和煮も、殆ど見覺えのないものはない。殊に高い勘定臺の後ろに佛頂面を曝した主人は飽き飽きするほど見慣れてゐる。いや、見慣れてゐるばかりではない。彼は如何に咳をするか、如何に小僧に命令をするか、ココアを一罐買ふにしても、「Fry よりはこちらになさい。これはオランダの Droste

です。などと、如何に客を憫ませるか、——主人の一擧一動さへ悉くとうに心得てゐる。心得てゐるのは悪いことではない。しかし退屈なことは事實である。保吉は時時この店へ來ると、妙に教師をしてゐるのも久しいものだなと考へたりした。（その癖前にも云つた通り、彼の教師の生活はまだ一年にもならなかつたのである！）

　けれども萬法を支配する變化はやはりこの店にも起らずにはすまない。保吉は或初夏の朝、この店へ煙草を買ひにはひつた。店の中はふだんの通りである。水を撒つた床の上にコンデンスド・ミルクの廣告の散らかつてゐることも變りはない。が、あの眇の主人の代りに勘定臺の後ろに坐つてゐるのは西洋髮に結つた女である。年はやつと十九位であらう。En face に見た顔は猫に似てゐる。日の光にずつと目を細めた、一筋もまじり毛のない白猫に似てゐる。保吉はおやおやと思ひながら、勘定臺の前へ歩み寄つた。

「朝日を二つくれ給へ。」

「はい。」

　女の返事は羞かしさうである。のみならず出したのも朝日ではない。二つとも箱の裏側に旭日旗を描いた三笠である。保吉は思はず煙草から女の顔へ目を移した。同時に又女の鼻の下に長い猫の髭を想像した

「朝日を、——こりや朝日ぢやない。」

「あら、ほんたうに。——どうもすみません。」

　猫——いや、女は赤い顔をした。この瞬間の感情の變化は正眞正銘に娘じみてゐる。それも當世のお孃さんではない。五六年來跡を絶つた硯友社趣味の娘である。保吉はばら錢を探りながら、「たけくらべ」、乙鳥口の風呂敷包み、燕子花、兩國、鏑木清方、——その外いろいろのものを思ひ出した。女は勿論この間も勘定臺の下を覗きこんだなり、一生懸命に朝日を捜してゐる。

　すると奥から出て來たのは例の眇の主人である。三笠を一目見ると、大抵様子を察したらしい。けふも不相變苦り切つたまま、勘定臺の下へ手を入れるが早いか、朝日を二つ保吉へ渡した。しかしその目にはかすかにもしろ、頬笑みらしいものが動いてゐる。

「マッチは？」

　女は目も赤猫とすれば、喉を鳴らしさうに媚を帶びてゐる。主人は返事をする代りにちよいと唯點頭した。女は咄嗟に（！）勘定臺の上へ小型のマッチを一つ出した。それから——もう一度羞しさうに笑つた。

「どうもすみません。」

　すまないのは何も朝日を出さずに三笠を出したばかりではない。保吉は二人を見比べながら、彼自身もいつか微笑したのを感じた。

　女はその後いつ來て見ても、勘定臺の後ろに坐つてゐる。尤も今では最初のやうに西洋髮などには結つてゐない。ちやんと赤い手絡をかけた、大きい圓髷に變つてゐる。しかし客に對する態度は不相變妙にうひうひしい。應對はつかへる。品物は間違へる。おまけに時時は赤い顔をする。——全然お上さんらしい面影は見えない。保吉はだんだんこの女に或好意を感じ出した。と云つても戀愛に落ちた譯ではない。唯如何にも人慣れない所に氣輕い懐しみを感じ出したのである。

　或殘暑の厳しい午後、保吉は學校の歸りがけにこの店へココアを買ひにはひつた。女はけふも勘定臺の後ろに講談倶樂部か何かを讀んでゐる。保吉は面皰の多い小僧に Van Houthen はないかと尋ねた。

「唯今あるのはこればかりですが。」

　小僧の渡したのは Fry である。保吉は店を

見渡した。すると果物の罐詰めの間に西洋の尼さんの商標をつけたFryも一罐まじつてゐる。
「あすこにFryもあるぢやないか？」
小僧はちよいとそちらを見たきり、やはり漠然とした顔をしてゐる。
「ええ、あれもココアです。」
「ぢやこればかりぢやないぢやないか？」
「ええ、でもまあこれだけなんです。――お上さん、ココアはこれだけですね？」
保吉は女をふり返つた。心もち目を細めた女は美しい緑色の顔をしてゐる。尤もこれは不思議ではない。全然欄間の色硝子を透かした午後の日の光の作用である。女は雑誌を肘の下にしたまま、例の通りためらひ勝ちな返事をした。
「はあ、それだけだつたと思ふけれども。」
「實は、このFryのココアの中には時々蟲が湧いてゐるんだが、――」
保吉は眞面目に話しかけた。しかし實際蟲の湧いたココアに出會つた覺えのある譯ではない。唯何でもかう云ひさへすれば、Van Houten の有無を確かめさせる上に效能のあることを信じたからである。
「それもずゐぶん大きいやつがゐるもんだからね。丁度この小指位ある、……」
女は聊か驚いたやうに勘定臺の上へ半身をのばした。
「そつちにもまだありやしないかい？　ああ、その後ろの戸棚の中にも。」
「赤いのばかりです。此處にあるのも。」
「ぢやこつちには？」
女は吾妻下駄を突かけると、心配さうに店へ捜しに來た。ぼんやりした小僧もやむを得ず罐詰めの間などを覗いて見てゐる。保吉は煙草へ火をつけた後、彼等へ拍車を加へるやうに考へ考へしやべりつづけた。
「蟲の湧いたやつを飮ませると、子供などは腹を痛めるしね。（彼は或避暑地の貸し間にたつた一人暮らしてゐる。）いや、子供ばかりぢやない。家内も一度ひどい目に遇つたことがある。（勿論妻などを持つたことはない。）何しろ用心に越したことはないんだから。……」
保吉はふと口をとざした。女は前掛けに手を拭きながら、當惑さうに彼を眺めてゐる。
「どうも見えないやうでございますが。」
女の目はおどおどしてゐる。口もとも無理に微笑してゐる。殊に滑稽に見えたのは鼻も赤つぷつぷ汗をかいてゐる。保吉は女と目を合せた刹那に突然惡魔の乘り移るのを感じた。この女は云はば含羞草である。一定の刺戟を與へさへすれば、必ず彼の思ふ通りの反應を呈するのに違ひない。しかし刺戟は簡單である。ぢつと顏を見つめても好い。或は又指先にさはつても好い。女はきつとその刺戟に保吉の暗示を受けとるであらう。受けとつた暗示をどうするかは勿論未知の問題である。しかし幸ひに反撥しなければ、――いや、猫は飼つても好い。が、猫に似た女の爲に魂を惡魔に賣り渡すのはどうも少し考へものである。保吉は吸ひかけた煙草と一しよに、乘り移つた惡魔を抛り出した。不意を食つた惡魔はとんぼ返る拍子に小僧の鼻の穴へ飛びこんだのであらう。小僧は首を縮めるが早いか、つづけさまに大きい嚏をした。
「ぢや仕かたがない。Droste を一つくれ給へ。」
保吉は苦笑を浮かべたまま、ポケットのばら錢を探り出した。
その後も彼はこの女と度たび同じやうな交渉を重ねた。が、惡魔に乘り移られた記憶は仕合せと外には持つてゐない。いや、一度などはふとしたはずみに天使の來たのを感じたことさへ

ある。
或秋も深まつた午後、保吉は煙草を買つた次手にこの店の電話を借用した。主人は日の當つた店の前に空氣ポンプを動かしながら、自轉車の修繕に取りかかつてゐる。小僧もけふは使ひに出たらしい。女は不相變勘定臺の前に受取りか何か整理してゐる。かう云ふ店の光景はいつ見ても惡いものではない。何處か阿蘭陀の風俗畫じみた、もの靜かな幸福に溢れてゐる。保吉は女のすぐ後ろに受話器を耳へ當てたまま、彼の愛藏する寫眞版の De Hooghe の一枚を思ひ出した。

しかし電話はいつになつても、容易に先方へ通じないらしい。のみならず交換手もどうしたのか、一二度「何番へ？」を繰り返した後は全然沈默を守つてゐる。保吉は何度もベルを鳴らした。が受話器は彼の耳へぶつぶつ云ふ音を傳へるだけである。かうなればもう De Hooghe などを思ひ出してゐる場合ではない。保吉はまづポケットから Spargo の「社會主義早わかり」を出した。幸ひ電話には見臺のやうに蓋のなぞへになつた箱もついてゐる。彼はその箱に本を載せると、目は活字を拾ひながら、手は出來るだけゆつくりと强情にベルを鳴らし出した。これは横着な交換手に對する彼の戰法の一つである。いつか銀座尾張町の自働電話へはひつた時にはやはりベルを鳴らし鳴らし、とうとう「佐橋甚五郎」を完全に一篇讀んでしまつた。けふも交換手の出ない中は斷じてベルの手をやめないつもりである。

さんざん交換手と喧嘩した擧句、やつと電話をかけ終つたのは二十分ばかりの後である。保吉は禮を云ふ爲に後ろの勘定臺をふり返つた。すると其處には誰もゐない。女はいつか店の戸口に何か主人と話してゐる。主人はまだ秋の日向に自轉車の修繕をつづけてゐるらしい。保吉はそちらへ歩き出さうとした。が、思はず足を止めた。女は彼に背を向けたまま、こんなことを主人に尋ねてゐる。

「さつきね、あなた、ゼンマイ珈琲とかつてお客があつたんですがね、ゼンマイ珈琲つてあるんですか？」

「ゼンマイ珈琲？」

主人の聲は細君にも客に對するやうな無愛想である。

「玄米珈琲の聞き違へだらう。」

「ゲンマイ珈琲？ ああ、玄米から拵へた珈琲。――何だか可笑しいと思つてゐた。ゼンマイつて八百屋にあるものでせう？」

保吉は二人の後ろ姿を眺めた。同時に又天使の來てゐるのを感じた。天使はハムのぶら下つた天井のあたりを飛揚したまま、何にも知らぬ二人の上へ祝福を授けてゐるのに違ひない。尤も燻製の鯡の匂に顏だけはちよいとしかめてゐる。――保吉は突然燻製の鯡を買ひ忘れたことを思ひ出した。鯡は彼の鼻の先に淺ましい形骸を重ねてゐる。

「おい、君、この鯡をくれ給へ。」

女は忽ち振り返つた。振り返つたのは丁度ゼンマイの八百屋にあることを察した時である。女は勿論その話を聞かれたと思つたのに違ひない。猫に似た顏は目を擧げたと思ふと見る見る羞かしさうに染まり出した。保吉は前にも言ふ通り、女が顏を赤めるのには今までにも度たび出會つてゐる。けれどもまだこの時ほど、まつ赤になつたのを見たことはない。

「は、鯡を？」

女は小聲に問ひ返した。

「ええ、鯡を。」

保吉も前後にこの時だけは甚だ殊勝に返事をした。

かう云ふ出來事のあつた後、二月ばかりたつ

たからであらう、確か翌年の正月のことである。女は何處へどうしたのか、ぱつたり姿を隱してしまつた。それも三日や五日ではない。いつ買ひ物にはひつて見ても、古いストオヴを据ゑた店には例の眇の主人が一人、退屈さうに坐つてゐるばかりである。保吉はちよいともの足らなさを感じた。又女の見えない理由にいろいろ想像を加へなどもした。が、わざわざ無愛想な主人に、「お上さんは？」と尋ねる心もちにもならない。又實際主人は勿論あのはにかみ屋の女にも、「何々をくれ給へ。」と云ふ外には挨拶さへ交したことはなかつたのである。

その内に冬ざれた路の上にも、たまに一日か二日づつ暖い日かげがさすやうになつた。けれども女は顏を見せない。店はやはり主人のまはりに荒涼とした空氣を漂はせてゐる。保吉はいつか少しづつ女のゐないことを忘れ出した。……

すると二月の末の或夜、學校の英吉利語講演會をやつと切り上げた保吉は生暖い南風に吹かれながら、格別買ひ物をする氣もなしにふとこの店の前を通りかかつた。店には電燈のともつた中に西洋酒の罎や罐詰めなどがきらびやかに並んでゐる。これは勿論不思議ではない。しかしふと氣がついて見ると、店の前には女が一人、兩手に赤子を抱へたまま、多愛もないことをしやべつてゐる。保吉は店から往來へさした、幅の廣い電燈の光りに忽ちその若い母の誰であるかを發見した。

「あばばばばば、ばあ！」

女は店の前を歩き歩き、面白さうに赤子をあやしてゐる。それが赤子を搖り上げる拍子に偶然保吉と目を合はした。保吉は咄嗟に女の目の逡巡する樣子を想像した。それから夜目にも女の顏の赤くなる樣子を想像した。しかし女は澄ましてゐる。目も靜かに頬笑んでゐれば、顏も嬌羞などは浮べてゐない。のみならず意外な一瞬間の後、搖り上げた赤子へ目を落すと、人前も羞ぢずに繰り返した。

「あばばばばば、ばあ！」

保吉は女を後ろにしながら、我知らずにやにや笑ひ出した。女はもう「あの女」ではない。度胸の好い母の一人である。一たび子の爲になつたが最後、古來如何なる惡事をも犯した、恐ろしい「母」の一人である。この變化は勿論女の爲にはあらゆる祝福を與へても好い。しかし娘じみた細君の代りに圖圖しい母を見出したのは、……保吉は歩みつづけたまま、茫然と家家の空を見上げた。空には南風の渡る中に圓い春の月が一つ、白じろとかすかにかかつてゐる。……

親子

親は子供を養育するのに適してゐるかどうかは疑問である。成程牛馬は親の爲に養育されるのに違ひない。しかし自然の名のもとにこの舊習の辯護するのは確かに親の我儘である。若し自然の名のもとに如何なる舊習も辯護出來るならば、まづ我我は未開人種の掠奪結婚を辯護しなければならぬ。

又

子供に對する母親の愛は最も利己心のない愛である。が、利己心のない愛は必ずしも子供の養育に最も適したものではない。この愛の子供に與へる影響は——少くとも影響の大半は暴君にするか、弱者にするかである。

又

人生の悲劇の第一幕は親子となつたことにはじまつてゐる。

（『侏儒の言葉』より）

保吉の手帳から

わん

或冬の日の暮、保吉は薄汚いレストランの二階に脂臭い燒パンを齧つてゐた。彼のテエブルの前にあるのは龜裂の入つた白壁だつた。其處には又斜かひに「ホット（あたたかい）サンドウヰッチもあります」と書いた、細長い紙が貼りつけてあつた。（これを彼の同僚の一人は「ほつと暖いサンドウヰッチ」と讀み、眞面目に不思議がつたものである。）それから左は下へ降りる階段、右は直ぐ硝子窓だつた。彼は燒パンを齧りながら、時時ぼんやり窓の外を眺めた。窓の外には往來の向うに亞鉛屋根の古著屋が一軒、職工用の青服だのカアキ色のマントだのをぶら下げてゐた。

その夜學校には六時半から、英語會が開かれる筈になつてゐた。それへ出席する義務のあつた彼はこの町に住んでゐない關係上、厭でも放課後六時半迄はこんなところにゐるより仕かたはなかつた。確か土岐哀果氏の歌に、――間違つたならば御免なさい。――「遠く來てこの糞のよなビフテキをかじらねばならず妻よ妻よ戀し」と云ふのがある。彼は此處へ來る度に、必ずこの歌を思ひ出した。尤も戀しがる筈の妻はまだ貰つてはゐなかつた。しかし古著屋の店を眺め、脂臭い燒パンをかじり、「ホット（あたたかい）サンドウヰッチ」を見ると、「妻よ妻よ戀し」と云ふ言葉はおのづから脣に上つて來るのだつた。

保吉はこの間も彼の後ろに、若い海軍の武官が二人、麥酒を飲んでゐるのに氣がついてゐた。その中の一人は見覺えのある同じ學校の主計官だつた。武官に馴染みの薄い彼はこの人の名前を知らなかつた。いや、名前ばかりではない。少尉級か中尉級かも知らなかつた。唯彼の知つてゐるのは月月の給金を貰ふ時に、この人の手を經ると云ふことだけだつた。もう一人は全然知らなかつた。二人は麥酒の代りをする度に、「こら」とか「おい」とか云ふ言葉を使つた。女中はそれでも厭な顏をせずに、兩手にコップを持ちながら、まめに階段を上り下りした。その癖保吉のテエブルへは紅茶を一杯頼んでも容易に持つて來てはくれなかつた。これは此處に限つたことではない。この町のカフエやレストランは何處へ行つても同じことだつた。

二人は麥酒を飲みながら、何か大聲に話してゐた。保吉は勿論その話に耳を貸してゐた譯ではなかつた。が、ふと彼を驚かしたのは「わんと云へ。」と云ふ言葉だつた。彼は犬を好まなかつた。犬を好まない文學者にゲエテとストリントベルグとを數へることを愉快に思つてゐる一人だつた。だからこの言葉を耳にした時、彼はこんなところに飼つてゐ勝ちな、大きい西洋犬を想像した。同時にそれが彼の後ろにうろついてゐさうな無氣味さを感じた。

彼はそつと後ろを見た。が、其處には仕合せと犬らしいものは見えなかつた。唯あの主計官が窓の外を見ながら、にやにや笑つてゐるばかりだつた。保吉は多分犬のゐるのは窓の下だらうと推察した。しかし何だか變な氣がした。すると主計官はもう一度、「わんと云へ。おい、わんと云へ。」と云つた。保吉は少し體を扭ぢ曲げ、向うの窓の下を覗いて見た。まづ彼の目にはひつたのは何とか正宗の廣告を兼ねた、まだ

火のともらない軒燈だつた。それから巻いてある日除けだつた。それから麦酒樽の天水桶の上に乾し忘れた儘の爪革だつた。それから、往来の水たまりだつた。それから、――あとは何だつたにせよ、何處にも犬の影は見えなかつた。その代りに十二三の乞食が一人、二階の窓を見上げながら、寒さうに立つてゐる姿を見えた。

「わんと云へ。わんと云はんか！」

主計官は又かう呼びかけた。その言葉には何か乞食の心を支配する力があるらしかつた。乞食は殆、夢遊病者のやうに、目はやはり上を見た儘、一二歩窓の下へ歩み寄つた。保吉はやつと人の悪い主計官の悪戯を發見した。悪戯？――或は悪戯ではなかつたかも知れない。なかつたとすれば實驗である。人間は何處迄口腹の爲に、自己の尊嚴を犠牲にするか？――と云ふことに關する實驗である。保吉自身の考へによると、これは何も今更のやうに實驗などすべき問題ではない。エサウは焼肉の爲に長子權を抛ち、保吉はパンの爲に教師になつた。かう云ふ事實を見れば足りることである。が、あの實驗心理學者は中中こんなこと位では研究心の滿足を感ぜぬのであらう。それならば今日生徒に教へた、De gustibus non est disputandum である。蓼食ふ蟲も好き好きである。實驗したければして見るが好い。――保吉はさう思ひながら、窓の下の乞食を眺めてゐた。

主計官は少時黙つてゐた。すると乞食は落著かなさうに、往来の前後を見まはし始めた。犬の眞似をすることには格別異存はないにしても、さすがにあたりの人目だけは憚つてゐるのに違ひなかつた。が、その目の定まらない内に、主計官は窓の外へ赤い顔を出しながら、今度は何か振つて見せた。

「わんと云へ。わんと云へばこれをやるぞ。」

乞食の顔は一瞬間、物欲しさに燃え立つたやうだつた。保吉は時時乞食と云ふものにロマンティックな興味を感じてゐた。が、憐憫とか同情とかは一度も感じたことはなかつた。もし感じたと云ふものがあれば、莫迦か譃つきかだとも信じてゐた。しかし今その子供の乞食が頸を少し反らせた儘、目を輝かせてゐるのを見ると、ちよいといぢらしい心もちがした。但しこの「ちよいと」と云ふのは懸け値のないちよいとである。保吉はいぢらしいと思ふよりも、寧ろさう云ふ乞食の姿にレムブラント風の效果を愛してゐた。

「云はんか？　おい、わんと云ふんだ。」

乞食は顔をしかめるやうにした。

「わん。」

聲は如何にもかすかだつた。

「もつと大きく。」

「わん。わん。」

乞食はとうとう二聲鳴いた。と思ふと窓の外へネエベル・オレンヂが一つ落ちた。――その先はもう書かずとも好い。乞食は勿論オレンヂに飛びつき、主計官は勿論笑つたのである。

それから一週間はかりたつた後、保吉は又月給日に主計部へ月給を貰ひに行つた。あの主計官は忙しさうにあちらの帳簿を開いたり、こちらの書類を擴げたりしてゐた。それが彼の顔を見ると、「俸給ですね。」と一言云つた。彼も「さうです。」と一言答へた。が、主計官は用が多いのか、容易に月給を渡さなかつた。のみならずしまひには彼の前へ軍服の尻を向けた儘、何時までも算盤を彈いてゐた。

「主計官。」

保吉は少時待たされた後、懇願するやうにかう云つた。主計官は肩越しにこちらを向いた。その唇には明らかに「直です」と云ふ言葉が出かかつてゐた。しかし彼はそれよりも先に、ちやんと仕上げをした言葉を繼いだ。

一主計官。わんと云ひませうか？　え、主計官。」

保吉の信ずるところによれば、さう云つた時の彼の聲は天使よりも優しい位だつた。

西洋人

この學校へは西洋人が二人、會話や英作文を教へに來てゐた。一人はタウンゼンドと云ふ英吉利人、もう一人はスタアレットと云ふ亞米利加人だつた。

タウンゼンド氏は頭の禿げた、日本語の旨い好好爺だつた。由來西洋人の教師と云ふものは如何なる俗物にも關らずシエクスピイアとかゲエテとかを喋喋してやまないものである。しかし幸ひにタウンゼンド氏は文藝の文の字もわかつたとは云はない。何時かウァアズワアスの話が出たら、「詩と云ふものは全然わからぬ。ウァアズワアスなども何處が好いのだらう。」と云つた。

保吉はこのタウンゼンド氏と同じ避暑地に住んでゐたから、學校の往復にも同じ汽車に乘つた。汽車は彼是三十分ばかりかかる。二人はその汽車の中にグラスゴオのパイプを銜へながら、煙草の話だの學校の話だの幽靈の話だのを交換した。セオソフイストたるタウンゼンド氏はハムレットに興味を持たないにしても、ハムレットの親父の幽靈には興味を持つてゐたからである。しかし魔術とか錬金術とか、occult sciences の話になると、氏は必ずもの悲しさうに頭とパイプとを一しよに振りながら、「神祕の扉は俗人の思ふ程、開き難いものではない。寧ろその恐しい所以は容易に閉ぢ難いところにある。ああ云ふものには手を觸れぬが好い。」と云つた。

もう一人のスタアレット氏はずつと若い洒落者だつた。冬は暗緑色のオオヴア・コオトに赤い襟卷などを卷きつけて來た。この人はタウンゼンド氏に比べると、時時は新刊書も覗いて見るらしい。現に學校の英語會に「最近の亞米利加の小說家」と云ふ大講演をやつたこともある。尤もその講演によれば、最近の亞米利加の大小說家はロバート・ルイズ・スティヴンソンかオオ・ヘンリイだと云ふことだつた！

スタアレット氏も同じ避暑地ではないが、やはり沿線の或町にゐたから、汽車を共にすることは度たびあつた。保吉は氏とどんな話をしたか、殆、記憶に殘つてゐない。唯一つ覺えてゐるのは、待合室の煖爐の前に汽車を待つてゐた時のことである。保吉はその時欠伸まじりに、教師と云ふ職業の退屈さを話した。すると縁無しの眼鏡をかけた、男ぶりの好いスタアレット氏はちよいと妙な顏をしながら、「教師になるのは職業ではない。寧ろ天職と呼ぶべきだと思ふ。You know, Socrates and Plato are two great teachers.....Etc.」と云つた。

ロバアト・ルイズ・スティヴンソンはヤンキイでも何でも差支へない。が、ソクラテスとプレトオをも教師だつたなどと云ふのは、——保吉は爾來スタアレット氏に慇懃なる友情を盡すことにした。

午休み

——或空想——

保吉は二階の食堂を出た。文官教官は午飯の後は大抵隣の喫煙室へはひる。彼は今日は其處へ行かずに、庭へ出る階段を降ることにした。すると下から下士が一人、一飛びに階段を三段づつ蝗のやうに登つて來た。それが彼の顏を見ると、突然嚴格に擧手の禮をした。するが早いか一躍りに保吉の頭を躍り越えた。彼は誰もゐない空間へちよいと會釋を返しながら、悠悠と階段を降り續けた。

庭には槇や榧の間に、木蘭が花を開いてゐる。木蘭はなぜか日の當る南へ、折角の花を向けないらしい。が、辛夷は似てゐる癖に、きつと南へ花を向けてゐる。保吉は卷煙草に火をつけながら、木蘭の個性を祝福した。其處へ石を落したやうに、鶺鴒が一羽舞ひ下つて來た。鶺鴒も彼には他人ではない。あの小さい尻尾を振るのは彼を案内する信號である。

「こつち！　こつち！　そつちぢやありませんよ、こつち！　こつち！

彼は鶺鴒の云ふなり次第に、砂利を敷いた小徑を歩いて行つた。が、鶺鴒はどう思つたか、突然又空へ躍り上つた。その代り脊の高い機關兵が一人、小徑をこちらへ歩いて來た。保吉はこの機關兵の顏に何處か見覺えのある心もちがした。機關兵はやはり敬禮した後、さつさと彼の側を通り拔けた。彼は煙草の煙を吹きながら、誰だつたかしらと考へ續けた。二歩、三歩、五歩、――十歩目に保吉は發見した。あれはポオル・ゴオギャンである。或はゴオギャンの轉生である。今にきつとシャヴルの代りに畫筆を握るのに相違ない。その又揚句に氣違ひの友だちの後ろからピストルを射かけられるのである。可哀さうだが、どうも仕方がない。

保吉はとうとう小徑傳ひに玄關の前の廣場へ出た。其處には戰利品の大砲が二門、松や篠の中に並んでゐる。ちよいと砲身に耳を當てて見たら、何だか息の通る音がした。大砲も欠伸をするかも知れない。彼は大砲の下に腰を下した。それから二本目の卷煙草へ火をつけた。もう車廻しの砂利の上には蜥蜴が一匹光つてゐる。人間は足を切られたが最後、再び足は製造出來ない。しかし蜥蜴は尻尾を切られると、直に又尻尾を製造する。保吉は煙草を銜へた儘、蜥蜴はきつとラマルクよりもラマルキアンに違ひないと思つた。が、少時眺めてゐると、蜥蜴は何時か砂利に垂れた一すぢの重油に變つてしまつた。

保吉はやつと立ち上つた。ペンキ塗りの校舍に沿ひながら、もう一度庭を向うへ拔けると、海に面する運動場へ出た。土の赤いテニス・コオトには武官教官が何人か、熱心に勝負を爭つてゐる。コオトの上の空間は絶えず何かを破裂させる。同時にネットの右や左へ薄白い直線を迸らせる。あれは球の飛ぶのではない。目に見えぬ三鞭酒を拔いてゐるのである。その又三鞭酒をワイシャツの神神が旨さうに飲んでゐるのである。保吉は神神を讚美しながら、今度は校舍の裏庭へまはつた。

裏庭には薔薇が澤山ある。尤も花はまだ一輪もない。彼は其處を歩きながら、徑へさし出た薔薇の枝に毛蟲を一匹發見した。と思ふと又一匹、隣の葉の上にも這つてゐるのがあつた。毛蟲は互に頷き頷き、彼のことか何か話してゐるらしい。保吉はそつと立ち聞きすることにした。

第一の毛蟲　この教官は何時蝶になるのだらう？　我我の曾曾曾祖父の代から、地面の上ばかり這ひまはつてゐる。

第二の毛蟲　人間は蝶にならないのかも知れない。

第一の毛蟲　いや、なることはなるらしい。あすこにも現在飛んでゐるから。

第二の毛蟲　成程、飛んでゐるのがある。しかし何と云ふ醜さだらう！　美意識さへ人間にはないと見える。

保吉は額へ手をかざしながら、頭の上へ來た飛行機を仰いだ。

其處に同僚に化けた惡魔が一人、何か愉快さうに歩いて來た。昔は鍊金術を教へた惡魔も今は生徒に應用化學を教へてゐる。それがにやにや笑ひながら、かう保吉に話しかけた。

「おい、今夜つき合はんか?」

保吉は惡魔の微笑の中にありありとファウストの二行を感じた。――「一切の理論は灰色だが、緑なのは黄金なす生活の樹だ!」

彼は惡魔に別れた後、校舎の中へ靴を移した。教室は皆がらんとしてゐる。通りすがりに覗いて見たら、唯或教室の黒板の上に幾何の圖が一つ描き忘れてあつた。幾何の圖は彼が覗いたのを知ると、消されると思つたのに違ひない。忽ち伸びたり縮んだりしながら「次の時間に入用なのです」と云つた。

保吉はもと降りた階段を登り、語學と數學との教官室へはひつた。教官室には頭の禿げたタウンゼンド氏の外に誰もゐない。しかもこの老教師は退屈まぎれに口笛を吹き吹き、一人ダンスを試みてゐる。保吉はちよいと苦笑した儘、洗面臺の前へ手を洗ひに行つた。その時ふと鏡を見ると、驚いたことにタウンゼンド氏は何時の間にか美少年に變り、保吉自身は腰の曲つた白頭の老人に變つてゐた。

恥

保吉は教室へ出る前に、必ず教科書の下調べをした。それは月給を貰つてゐるから、出たらめなことは出來ないと云ふ義務心によつたばかりではない。教科書には學校の性質上海上用語が澤山出て來る。それをちやんと檢べて置かないと、とんでもない誤譯をやりかねない。たとへば Cat's paw と云ふから、猫の足かと思つてゐれば、そよ風だつたりするたぐひである。

或時彼は二年級の生徒に、やはり航海のことを書いた、何とか云ふ小品を教へてゐた。それは恐るべき惡文だつた。マストに風が唸つたり、ハッチへ浪が打ちこんだりしても、その浪なり風なりは少しも文字の上へ浮ばなかつた。彼は生徒に譯讀をさせながら、彼自身先に退屈し出した。かう云ふ時程生徒を相手に、思想問題とか時事問題とかを辯じたい興味に驅られることはない。元來教師と云ふものは學科以外の何ものかを教へたがるものである。道徳、趣味、人生觀、――何と名づけても差支へない。兎に角教科書や黒板よりも教師自身の心臟に近い何ものかを教へたがるものである。しかし生憎生徒と云ふものは學科以外の何ものをも教はりたがらないものである。いや、教はりたがらないのではない。絶對に教はることを嫌惡するものである。保吉はさう信じてゐたから、この場合も退屈し切つた儘、譯讀を進めるより仕かたなかつた。

しかし生徒の譯讀に一應耳を傾けた上、綿密に誤を直したりするのは退屈しない時でさへ、可也保吉には面倒だつた。彼は一時間の授業時間を三十分ばかり過した後、とうとう譯讀を中止させた。その代りに今度は彼自身一節づつ讀んでは譯し出した。教科書の中の航海は不相變退屈を極めてゐた。同時に又彼の教へぶりも負けずに退屈を極めてゐた。彼は無風帶を横ぎる帆船のやうに、動詞のテンスを見落したり關係代名詞を間違へたり、行き惱み行き惱み進んで行つた。

その中にふと氣がついて見ると、彼の下檢べをして來たところはもうたつた四五行しかなかつた。其處を一つ通り越せば、海上用語の暗礁に滿ちた、油斷のならない荒海だつた。彼は横目で時計を見た。時間は休みの喇叭迄にたつぷり二十分は殘つてゐた。彼は出來るだけ丁寧に、下檢べの出來てゐる四五行を譯した。が、譯してしまつて見ると、時計の針はその間にまだ三分しか動いてゐなかつた。

保吉は絶體絶命になつた。この場合唯一の血路になるものは、生徒の質問に應ずることだつた。それでもまだ時間が餘れば、早じまひを宣

してしまふことだつた。彼は教科書を置きながら、「質問は――」と口を切らうとした。と、突然まつ赤になつた。なぜそんなにまつ赤になつたか？――それは彼自身にも說明出來ない。兎に角生徒を護摩かす位は何とも思はぬ筈の彼がその時だけはまつ赤になつたのである。生徒は勿論何も知らずにまじまじ彼の顏を眺めてゐた。彼はもう一度時計を見た。それから、――教科書を取り上げるが早いか、無茶苦茶に先を讀み始めた。

教科書の中の航海はその後も退屈なものだつたかも知れない。しかし彼の教へぶりは、――保吉は未に確信してゐる。タイフウンと鬪ふ帆船よりも、もつと壯烈を極めたものだつた。

勇ましい守衛

秋の末か冬の初か、その邊の記憶ははつきりしない。兎に角學校へ通ふのにオオヴァ・コオトをひつかける時分だつた。午飯のテエブルに就いた時、或若い武官教官が隣に坐つてゐる保吉にかう云ふ最近の椿事を話した。――つい二三日前の深更、鐵盜人が二三人學校の裏手へ舟を著けた。それを發見した夜警中の守衛は單身彼等を逮捕しようとした。ところが烈しい格鬪の末、あべこべに海へ抛りこまれた。守衛は濡れ鼠になりながら、やつと岸へ這ひ上つた。が勿論盜人の舟はその間にもう沖の闇へ姿を隱してゐたのである。

「大浦と云ふ守衛ですがね、莫迦莫迦しい目に遇つたですよ。」

武官はパンを頰張つたなり、苦しさうに笑つてゐた。

大浦は保吉も知つてゐた。守衛は何人か交替に門側の詰め所に控へてゐる。さうして武官と文官とを問はず、教官の出入を見る度に、擧手の禮をすることになつてゐる。保吉は敬禮されるのも敬禮に答へるのも好まなかつたから、敬禮する暇を與へぬやうに、詰め所の前を通る時は特に足を早めることにした。が、この大浦と云ふ守衛だけは容易に目つぶしを食はされない。第一詰め所に坐つた儘、門の內外五六間の距離へ絕えず目を注いでゐる。だから保吉の影が見えると、まだその前へ來ない內に、ちやんともう敬禮の姿勢をしてゐる。かうなれば宿命と思ふ外はない。保吉はとうとう觀念した。いや、觀念したばかりではない。この頃は大浦を見つけるが早いか、響尾蛇に狙はれた兎のやうに、こちらから帽さへとつてゐたのである。

それが今聞けば盜人の爲に、海へ投げこまれたと云ふのである。保吉はちよいと同情しながら、やはり笑はずにはゐられなかつた。

すると五六日たつてから、保吉は停車場の待合室に偶然大浦を發見した。大浦は彼の顏を見ると、さう云ふ場所にも關らず、ぴたりと姿勢を正した上、不相變嚴格に擧手の禮をした。保吉ははつきり彼の後ろに詰め所の入口が見えるやうな氣がした。

「君はこの間――」

少時沈默が續いた後、保吉はかう話しかけた。

「ええ、泥坊を摑まへ損じまして、――」

「ひどい目に遇つたですね。」

「幸ひ怪我はせずにすみましたが、――」

大浦は苦笑を浮べた儘、自ら嘲るやうに話し續けた。

「何、無理にも摑まへようと思へば、一人位は摑まへられたのです。しかし摑まへて見たところが、それつきりの話ですし、――」

「それつきりと云ふのは？」

「賞與も何も貰へないのです。さう云ふ場合、どうなると云ふ明文は守衛規則にありませんから、――」

「職に殉じても？」

「職に殉じてでもです。」

保吉はちよいと大浦を見た。大浦自身の言葉によれば、彼は必しも勇士のやうに、一死を賭してかかつたのではない。賞與を打算に加へた上、捉ふべき盗人を逸したのである。しかし――保吉は卷煙草をとり出しながら、出來るだけ快活に頷いて見せた。

「成程それぢや莫迦莫迦しい、危險を冒すだけ損の譯ですね。」

大浦は「はあ」とか何とか云つた。その癖變に浮かなさうだつた。

「だが賞與さへ出るとなれば、――」

保吉はやや憂鬱に云つた。

「だが、賞與さへ出るとなれば、誰でも危險を冒すかどうか?――そいつも亦少し疑問ですね。」

大浦は今度は默つてゐた。が、保吉が煙草を銜へると、急に彼自身のマッチを擦り、その火を保吉の前へ出した。保吉は赤あかと靡いた焰を煙草の先に移しながら、思はず口もとに動いた微笑を悟られないやうに嚙み殺した。

「難有う。」

「いや、どうしまして。」

大浦はさりげない言葉と共に、マッチの箱をポケットへ返した。しかし保吉は今日もなほこの勇ましい守衛の祕密を看破したことと信じてゐる。あの一點のマッチの火は、保吉の爲にばかり擦られたのではない。實に大浦の武士道を冥冥の裡に照覽し給ふ神神の爲に擦られたのである。

「人間らしさ」

わたしは不幸にも「人間らしさ」に禮拜する勇氣は持つてゐない。いや、屢「人間らしさ」に輕蔑を感ずることは事實である。しかし又常に「人間らしさ」に愛を感ずることも事實である。愛を?――或は愛よりも憐憫かも知れない。が、兎に角「人間らしさ」にも動かされぬやうになつたとすれば、人生は到底住するに堪へない精神病院に變りさうである。Swift の畢に發狂したのも當然の結果と云ふ外はない。

スゥイフトは發狂する少し前に、梢だけ枯れた木を見ながら、「おれはあの木とよく似てゐる。頭から先に參るのだ」と呟いたことがあるさうである。この逸話は思ひ出す度にいつも戰慄を傳へずには置かない。わたしはスウイフトほど頭の好い一代の鬼才に生れなかつたことをひそかに幸福に思つてゐる。

瑣事

人生を幸福にする爲には、日常の瑣事を愛さなければならぬ。雲の光り、竹の戰ぎ、群雀の聲、行人の顏、――あらゆる日常の瑣事の中に無上の甘露味を感じなければならぬ。

人生を幸福にする爲には?――しかし瑣事を愛するものは瑣事の爲に苦しまなければならぬ。庭前の古池に飛び込んだ蛙は百年の愁を破つたであらう。が、古池を飛び出した蛙は百年の愁を與へたかも知れない。いや、芭蕉の一生は享樂の一生であると共に、誰の目にも受苦の一生である。我我も微妙に樂しむ爲には、やはり又微妙に苦しまなければならぬ。

人生を幸福にする爲には、日常の瑣事に苦しまなければならぬ。雲の光り、竹の戰ぎ、群雀の聲、行人の顏、――あらゆる日常の瑣事の中に墮地獄の苦痛を感じなければならぬ。

(「侏儒の言葉」より)

お時儀

保吉は三十になつたばかりである。その上あらゆる賣文業者のやうに、目まぐるしい生活を營んでゐる。だから「明日」は考へても、「昨日」は滅多に考へない。しかし往來を歩いてゐたり、原稿用紙に向つてゐたり、電車に乘つてゐたりする間にふと過去の一情景を鮮かに思ひ浮べることがある。それは從來の經驗によると、大抵嗅覺の刺戟から聯想を生ずる結果らしい。その又嗅覺の刺戟なるものも都會に住んでゐる悲しさには惡臭と呼ばれる匂ばかりである。たとへば汽車の煤煙の匂は何人も嗅ぎたいと思ふ筈はない。けれども或お孃さんの記憶、——五六年前に顏を合せた或お孃さんの記憶などはあの匂を嗅ぎさへすれば、煙突から迸る火花のやうに忽ちよみがへつて來るのである。

このお孃さんに遇つたのは或避暑地の停車場である。或はもつと嚴密に云へば、あの停車場のプラットフォオムである。當時その避暑地に住んでゐた彼は、雨が降つても、風が吹いても、午前は八時發の下り列車に乘り、午後は四時二十分着の上り列車を降りるのを常としてゐた。なぜ又毎日汽車に乘つたかと云へば、——そんなことは何でも差支へない。しかし毎日汽車になど乘れば、一ダズン位の顏馴染みは忽ちの内に出來てしまふ。お孃さんもその中の一人である。けれども午後には七草から三月の二十何日か迄、一度も遇つたと云ふ記憶はない。午前もお孃さんの乘る汽車は保吉には緣のない上り列車である。

お孃さんは十六か十七であらう。いつも銀鼠の洋服に銀鼠の帽子をかぶつてゐる。背は寧ろ低い方かも知れない。けれども見たところはすらりとしてゐる。殊に脚は、——やはり銀鼠の靴下に踵の高い靴をはいた脚は鹿の脚のやうにすらりとしてゐる。顏は美人と云ふほどではない。しかし、——保吉はまだ東西を論ぜず、近代の小説の女主人公に無條件の美人を見たことはない。作者は女性の描寫になると、大抵彼女は美人ではない。しかし……とか何とか斷つてゐる。按ずるに無條件の美人を認めるのは近代人の面目に關るらしい。だから保吉もこのお孃さんに「しかし」と云ふ條件を加へるのである。——念の爲にもう一度繰り返すと、顏は美人と云ふほどではない。しかしちよいと鼻の先の上つた愛敬の多い圓顏である。

お孃さんは騷がしい人ごみの中にぼんやり立つてゐることがある。人ごみを離れたベンチの上に雜誌などを讀んでゐることがある。或は又長いプラットフォオムの緣をぶらぶら歩いてゐることもある。

保吉はお孃さんの姿を見ても、戀愛小説に書いてあるやうな動悸などの高ぶつた覺えはない。唯やはり顏馴染みの鎭守府司令長官や賣店の猫を見た時の通り、「ゐるな。」と考へるばかりである。しかし兎に角顏馴染みに對する親しみだけは抱いてゐた。だから時たまプラットフォオムにお孃さんの姿を見ないことがあると、何か失望に似たものを感じた。何か失望に似たものを、——それさへ痛切には感じた譯ではない。保吉は現に賣店の猫が二三日行くへを晦ました時にも、全然變りのない寂しさを感じた。もし鎭守府司令長官でも頓死か何か遂げたとすれば、——この場合は聊か疑問かも知れない。が、まづ猫ほどではないにもしろ、勝手

の違ふ氣だけは違つた筈である。

　ところが三月の二十何日か、生暖い曇天の午後のことである。保吉はその日も勤め先から四時二十分着の上り列車に乘つた。何でもかすかな記憶によれば、調べ仕事に疲れてゐたせゐか、汽車の中でもふだんのやうに本を讀みなどはしなかつたらしい。唯窓べりによりかかりながら、春めいた山だの畠だのを眺めてゐたやうに覺えてゐる。いつか讀んだ横文字の小説に平地を走る汽車の音を「Tratata tratata tratata」と寫し、鐵橋を渡る汽車の音を「Trararach trararach」と寫したのがある。成程ぼんやり耳を借してゐると、ああ云ふ風にも聞えないことはない。——そんなことを考へたのも覺えてゐる。

　保吉は物憂い三十分の後、やつとあの避暑地の停車場へ降りた。プラットフォオムには少し前に着いた下り列車も止まつてゐる。彼は人ごみに交りながら、ふとその汽車を降りる人を眺めた。すると——意外にもお孃さんだつた。保吉は前にも書いたやうに、午後にはまだこのお孃さんと一度も顔を合せたことはない。それが今不意に目の前へ、日の光りを透かした雲のやうな、或は猫柳の花のやうな銀鼠の姿を現したのである。彼は勿論「おや」と思つた。お孃ささんも確にその瞬間、保吉の顔を見たらしかつた。と同時に保吉は思はずお孃さんへお時儀をしてしまつた。

　お時儀をされたお孃さんはびつくりしたのに相違あるまい。が、どう云ふ顔をしたか、生憎もう今では忘れてゐる。いや、當時もそんなことは見定める餘裕を持たなかつたのであらう。彼は「しまつた。」と思ふが早いか、忽ち耳の火照り出すのを感じた。けれどもこれだけは覺えてゐる。——お孃さんも彼に會釋をした！

　やつと停車場の外へ出た彼は彼自身の愚に憤りを感じた。なぜ又お時儀などをしてしまつたのであらう？　あのお時儀は全然反射的である。ぴかりと稻妻の光る途端に瞬きをするのも同じことである。すると意志の自由にはならない。意志の自由にならない行爲は責任を負はずとも好い筈である。けれどもお孃さんは何と思つたであらう？　成程お孃さんも會釋をした。しかしあれは驚いた拍子にやはり反射的にしたのかも知れない。今ごろはずゐぶん保吉を不良少年と思つてゐるさうである。一そ「しまつた。」と思つた時に無躾を詫びてしまへば好かつた。さう云ふことにも氣づかなかつたと云ふのは：：：

　保吉は下宿へ歸らずに、人影の見えない砂濱へ行つた。これは珍らしいことではない。彼は一月五圓の貸間と一食五十錢の辨當とにしみじみ世の中が厭になると、必ずこの砂の上へグラスゴオのパイプをふかしに來る。この日も曇天の海を見ながら、まづパイプへマッチの火を移した。今日のことはもう仕方がない。けれども又明日になれば、必ずお孃さんと顔を合せる。お孃さんはその時どうするであらう？　彼は不良少年と思つてゐれば、一瞥を與へないのは當然である。しかし不良少年と思つてゐなければ、明日も亦今日のやうに彼のお時儀に答へるかも知れない。彼のお時儀に？　彼は——堀川保吉はもう一度あのお孃さんに恬然とお時儀をする氣であらうか？　いや、お時儀をする氣はない。けれども一度お時儀をした以上、何かの機會にお孃さんも彼も會釋をし合ふことはありさうである。もし會釋をし合ふとすれば、：：：保吉はふとお孃さんの眉の美しかつたことを思ひ出した。

　爾來七八年を經過した今日、その時の海の靜かさだけは妙に鮮かに覺えてゐる。保吉はかう云ふ海を前に、いつまでも唯茫然と火の消えた

パイプを銜へてゐた。尤も彼の考へはお孃さんの上にばかりあつた譯ではない。たとへば近近とりかかる筈の小説のことも思ひ浮かべた。その小説の主人公は革命的精神に燃え立つた、或英吉利語の教師である。鯁骨の名の高い彼の頸は如何なる權威にも屈することを知らない。但し前後にたつた一度、或顔馴染みのお孃さんへうつかりお時儀をしてしまつたことがある。お孃さんは脊は低い方かも知れない。けれども見たところはすらりとしてゐる。殊に銀鼠の靴下に踵の高い靴をはいた脚は――兎に角自然とお孃さんのことを考へ勝ちだつたのは事實かも知れない……

翌朝の八時五分前である。保吉は人のこみ合つたプラットフォオムを歩いてゐた。彼の心はお孃さんと出會つた時の期待に張りつめてゐる。出會はずにすましたい氣もしないではない。が、出會はずにすませるのは不本意のことも確かである。云はば彼の心もちは強敵との試合を目前に控へた拳闘家の氣組みと變りはない。しかしそれよりも忘れられないのはお孃さんと顔を合せた途端に、何か常識を超越した、莫迦莫迦しいことをしはしないかと云ふ、妙に病的な不安である。昔、ジァン・リシュパンは通りがかりのサラア・ベルナアルへ傍若無人の接吻をした。日本人に生れた保吉はまさか接吻はしないかも知れないけれどもいきなり舌を出すとか、あかんべいをするとかはしさうである。彼は内心冷ひやしながら、捜すやうに捜さないやうにあたりの人人を見まはしてゐた。

すると忽ち彼の目は、悠悠とこちらへ歩いて來るお孃さんの姿を發見した。彼は宿命を迎へるやうに、まつ直に歩みをつづけて行つた。二人は見る見る接近した。十歩、五歩、三歩――お孃さんは今目の前に立つた。保吉は頭を擡げたまま、まともにお孃さんの顔を眺めた。お孃さんもぢつと彼の顔へ落着いた目を注いでゐる。二人は顔を見合せたなり、何ごともなしに行き違はうとした。

丁度その刹那だつた。彼は突然お孃さんの目に何か動搖に似たものを感じた。同時に又殆ど體中にお時儀をしたい衝動を感じた。けれどもそれは懸け値なしに、一瞬の間の出來事だつた。お孃さんははつとした彼を後ろにしづしづともう通り過ぎた。日の光りを透かした雲のやうに、或は花をつけた猫柳のやうに。……

二十分ばかりたつた後、保吉は汽車に搖られながら、グラスゴオのパイプを銜へてゐた。お孃さんは何も眉毛ばかり美しかつた譯ではない。目も亦涼しい黒瞳勝ちだつた。心もち上を向いた鼻も、……しかしこんなことを考へるのはやはり戀愛と云ふのであらうか？――彼はその問にどう答へたか、これも亦記憶には殘つてゐない。唯保吉の覺えてゐるのは、いつか彼を襲ひ出した、薄明るい憂鬱ばかりである。彼はパイプから立ち昇る一すぢの煙を見守つたまま、少時はこの憂鬱の中にお孃さんのことばかり考へつづけた。汽車は勿論さう云ふ間も半面に朝日の光りを浴びた山山の峽を走つてゐる。

「Tratata tratatata tratata trararach.」

男子

男子は由來戀愛よりも仕事を尊重するものである。若しこの事實を疑ふならば、バルザックの手紙を讀んで見るが好い。バルザックはハンスカ伯爵夫人に「この手紙も原稿料に換算すれば、何フランを越えてゐる」と書いてゐる。

（侏儒の言葉より）

湖南の扇

廣東に生れた孫逸仙等を除けば、目ぼしい支那の革命家は、——黄興、蔡鍔、宋教仁等はいづれも湖南に生れてゐる。これは勿論曾國藩や張之洞の感化にもよつたのであらう。しかしその感化を說明する爲にはやはり湖南の民自身の負けぬ氣の強いことも考へなければならぬ。僕は湖南へ旅行した時、偶然ちよつと小說じみた下の小事件に遭遇した。この小事件もことによると、情熱に富んだ湖南の民の面目を示すことになるのかも知れない。……

* * * * *

大正十年五月十六日の午後四時頃、僕の乘つてゐた沅江丸は長沙の棧橋へ橫著けになつた。

僕はその何分か前に甲板の欄干へ凭りかかつたまま、だんだん左舷へ迫つて來る湖南の府城を眺めてゐた。高い曇天の山の前に白壁や瓦屋根を積み上げた長沙は豫想以上に見すぼらしかつた。殊に狹苦しい埠頭のあたりは新しい赤煉瓦の西洋家屋や葉柳なども見えるだけに殆ど飯田河岸と變らなかつた。僕は當時長江に沿うた大抵の都會に幻滅してゐたから、長沙にも勿論豚の外に見るもののないことを覺悟してゐた。しかしかう言ふ見すぼらしさはやはり僕には失望に近い感情を與へたのに違ひなかつた。

沅江丸は運命に從ふやうにじりじり棧橋へ近づいて行つた。同時に又若い湘江の水もじりじり幅を縮めて行つた。すると薄汚い支那人が一人、提籃か何かをぶら下げたなり、突然僕の目の下からひらりと棧橋へ飛び移つた。それは實際人間よりも、蝗に近い早業だつた。が、あつと思ふうちに今度は天秤棒を橫たへたのが見事に又水を跳り越えた。續いて二人、五人、八人、——見る見る僕の目の下はのべつに棧橋へ飛び移る無數の支那人で埋まつてしまつた。と思ふと船はいつの間にかもう赤煉瓦の西洋家屋や葉柳などの竝んだ前にどつしりと橫著けに聳えてゐた。

僕はやつと欄干を離れ、同じ「社」のBさんを物色し出した。長沙に六年もゐるBさんはけふも特に沅江丸へ出迎ひに來てくれる筈になつてゐた。が、Bさんらしい姿は容易に僕には見つからなかつた。のみならず舷梯を上下するのは老若の支那人ばかりだつた。彼等は互に押し合ひへし合ひ、口口に何か騷いでゐた。殊に一人の老紳士などは舷梯を下りざまにふり返りながら、後にゐる苦力を擲つたりしてゐた。それは長江を溯つて來た僕には決して珍しい見ものではなかつた。けれども亦格別見慣れたことを長江に感謝したい見ものでもなかつた。

僕はだんだん苛立たしさを感じ、もう一度欄干によりかかりながら、やはり人波の去來する埠頭の前後を眺めまはした。そこには肝腎のBさんは勿論、日本人は一人も見當らなかつた。しかし僕は棧橋の向うに、——枝のつまつた葉柳の下に一人の支那美人を發見した。彼女は水色の夏衣裳の胸にメダルか何かをぶら下げた、如何にも子供らしい女だつた。僕の目は或はそれだけでも彼女に惹かれたかも知れなかつた。が、彼女はその上に高い甲板を見上げたまま、紅の濃い口もとに微笑を浮かべ、誰かに合圖でもするやうに半開きの扇をかざしてゐた。……

「おい、君。」

僕は驚いてふり返つた。僕の後ろにはいつの間にか鼠色の大掛兒を著た支那人が一人、額中に愛嬌を漲らせてゐた。僕はちよつとこの支那人の誰であるかがわからなかつた。けれども忽ち彼の顔に、――就中彼の薄い眉毛に舊友の一人を思ひ出した。

「やあ、君か。さうさう、君は湖南の産だつたつけね。」

「うん、ここに開業してゐる。」

譚永年は僕と同期に一高から東大の醫科へはひつた留學生中の才人だつた。

「けふは誰かの出迎ひかい？」

「うん、誰かの、――誰だと思ふ？」

「僕の出迎ひぢやないだらう？」

譚はちよつと口をすぼめ、ひよつとこに近い笑ひ顔をした。

「ところが君の出迎ひなんだよ。Bさんは生憎五六日前からマラリア熱に罹つてゐる。」

「ぢやBさんに頼まれたんだね？」

「頼まれないでも來るつもりだつた。」

僕は彼の昔から愛想の好いのを思ひ出した。譚は僕等の寄宿舍生活中、誰にも惡感を與へたことはなかつた。若し又多少でも僕等の間に不評判になつてゐたとすれば、それはやはり同室だつた菊池寛の言つたやうに餘りに誰にもこれと言ふほどの惡感を與へてゐないことだつた。

「だが君の厄介になるのは氣の毒だな。僕は實は宿のこともBさんに任かせつきりになつてゐるんだが、……」

「宿は日本人倶樂部に話してある。半月でも一月でも差支へない。」

「一月でも？　常談言つちやいけない。僕は三晩泊めて貰へりや好いんだ。」

譚は驚いたと言ふよりも急に愛嬌のない顔になつた。

「たつた三晩しか泊らないのか？」

「さあ、土匪の斬罪か何か見物でも出來りや格別だが、……」

僕はかう答へながら、内心長沙の人譚永年の顔をしかめるのを豫想してゐた。しかし彼はもう一度愛想の好い顔に返つたぎり、少しもこだはらずに返事をした。

「ぢやもう一週間前に來りや好いのに。あすこに少し空き地が見えるね。――」

それは赤煉瓦の西洋家屋の前、――丁度あの枝のつまつた葉柳のある處に當つてゐた。が、さつきの支那美人はいつかもうそこには見えなくなつてゐた。

「あすこでこの間五人ばかり一時に首を斬られたんだがね。そら、あの犬の歩いてゐる處で、――」

「そりや惜しいことをしたな。」

「斬罪だけは日本ぢや見る譯に行かない。」

譚は大聲に笑つた後、ちよつと眞面目になつたと思ふと、無造作に話頭を一轉した。

「ぢやそろそろ出かけようか？　車ももうあすこに待たせてあるんだ。」

＊　　＊　　＊

僕は翌翌十八日の午後、折角の譚の勸めに從ひ、湘江を隔てた嶽麓へ麓山寺や愛晩亭を見物に出かけた。

僕等を乘せたモオタア・ボオトは在留日本人の「中の島」と呼ぶ三角洲を左にしながら、二時前後の湘江を走つて行つた。からりと晴れ上つた五月の天氣は兩岸の風景を鮮かにしてゐた。僕等の右に連つた長沙も白壁や瓦屋根の光つてゐるだけにきのふほど憂鬱には見えなかつた。そして柑類の木の茂つた、石垣の長い三角洲はところどころに小ぢんまりした西洋家屋を覗かせたり、その又西洋家屋の間に綱に吊つた洗濯ものを閃かせたり、如何にも活き活きと

横たはつてゐた。

譚は若い船頭に命令を與へる必要上、ボオトの艫に陣どつてゐた。が、命令を與へるよりものべつに僕に話しかけてゐた。

「あれが日本領事館だ。――このオペラ・グラスを使ひ給へ。……その右にあるのは日清汽船會社。」

僕は卷煙草を銜へたまま、舟ばたの外へ片手を下ろし、時時僕の指先に當る湘江の水勢を樂しんでゐた。譚の言葉は僕の耳に唯一つづりの騷音だつた。しかし彼の指さす通り、兩岸の風景へ目をやるのは勿論僕にも不快ではなかつた。

「この三角洲は橘洲と言つてね。……」

「ああ、鳶が鳴いてゐる。」

「鳶が？　うん、鳶も澤山ゐる。そら、いつか張繼堯と譚延闓との戰爭があつた時だね、あの時にや張の部下の死骸がいくつもこの川へ流れて來たもんだ。すると又鳶が一人の死骸へ二羽も三羽も下りて來てね……」

丁度譚のかう言ひかけた時、僕等の乘つてゐたモオタア・ボオトはやはり一艘のモオタア・ボオトと五六間隔ててすれ違つた。それは支那服の青年の外にも見事に粧つた支那美人を二三人乘せたボオトだつた。僕はこれ等の支那美人よりも寧ろそのボオトの大辷りに浪を越えるのを見守つてゐた。けれども譚は話半ばに彼等の姿を見るが早いか、殆ど仇にでも遇つたやうに倉皇と僕にオペラ・グラスを渡した。

「あの女を見給へ。あの艫に坐つてゐる女を。」

僕は誰にでも急つつかれると、一層何かとこだはり易い親讓りの片意地を持合せてゐた。のみならずそのボオトの殘した浪はこちらの舟ばたを洗ひながら、僕の手をカフスまでずぶ濡れにしてゐた。

「なぜ？」

「まあ、なぜでも好いから、あの女を見給へ。」

「美人かい？」

「ああ、美人だ。美人だ。」

彼等を乘せたモオタア・ボオトはいつかもう十間ほど離れてゐた。僕はやつと體を扭ぢまげ、オペラ・グラスの度を調節した。同時に又突然向うのボオトのぐいと後ずさりをする錯覺を感じた。「あの女」は圓い風景の中にちよつと額を横にしたまま、誰かの話を聞いてゐると見え、時時微笑を洩らしてゐた。顋の四角い彼女の顏は唯目の大きいと言ふ以外に格別美しいとは思はれなかつた。が、彼女の前髮や薄い黄色の夏衣裳の川風に波を打つてゐるのは遠目にも綺麗に違ひなかつた。

「見えたか？」

「うん、睫毛まで見える。しかしあんまり美人ぢやないな。」

僕は何か得意らしい譚ともう一度顏を向ひ合せた。

「あの女がどうかしたのかい？」

譚はふだんのおしやべりにも似ず、悠悠と卷煙草に火をつけてから、あべこべに僕に問ひ返した。

「きのふ僕はさう言つたね、――あの桟橋の前の空き地で五人ばかり土匪の首を斬つたつて？」

「うん、それは覺えてゐる。」

「その仲間の頭目は黄六一と言つてね。――ああ、そいつも斬られたんだ。――これが又右の手には小銃を持ち、左の手にはピストルを持つて一時に二人射殺すと言ふ、湖南でも評判の惡黨だつたんだがね。……」

譚は忽ち黄六一の一生の惡業を話し出した。彼の話は大部分新聞記事の受け賣りらしかつた。しかし幸ひ血の匂よりもロマンティックな色彩に富んだものだつた。黄の平生密輸入者

たちに黄老爺と呼ばれてゐた話、又湘潭の或商人から三千元を強請した話、又腿に彈丸を受けた樊阿七と言ふ副頭目を肩に蘆林潭を泳ぎ越した話、又岳州の或山道に十二人の步兵を射倒した話、——譚は殆ど黄六一を崇拜してゐるのかと思ふ位、熱心にそんなことを話しつづけた。
「何しろ君、そいつは殺人擄人百十七件と言ふんだからね。」
彼は時時話の合ひ間にかう言ふ註釋も加へたりした。僕も勿論僕自身に何の損害も受けない限り、決して土匪は嫌ひではなかつた。が、いづれも大差のない武勇談ばかり聞かせられるのには多少の退屈を感じ出した。
「そこであの女はどうしたんだね？」
譚はやつとにやにやしながら、內心僕の豫想したのと餘り變らない返事をした。
「あの女は黄の情婦だつたんだよ。」
僕は彼の註文通り、驚嘆する訣には行かなかつた。けれども浮かない顏をしたまま、葉卷を銜へてゐるのも氣の毒だつた。
「ふん、土匪も洒落れたもんだね。」
「何、黄などは知れたものさ。何しろ前淸の末年にゐた強盜蔡などと言ふやつは月收一萬元を越してゐたんだからね。こいつは上海の租界の外に堂堂たる洋館を構へてゐたもんだ。細君は勿論、妾までも、……」
「ぢやあの女は藝者か何かかい？」
「うん、玉蘭と言ふ藝者でね、あれでも黄の生きてゐた時には中中幅を利かしてゐたもんだよ。……」
譚は何か思ひ出したやうに少時口を噤んだまま、薄笑ひばかり浮かべてゐた。が、やがて卷煙草を投げると、眞面目にかう言ふ相談をしかけた。
「嶽麓には湘南工業學校と言ふ學校も一つあるんだがね。そいつをまづ先に參觀しようぢやないか？」
「うん、見ても差支へない。」
僕は煮え切らない返事をした。それはついきのふの朝、或女學校を參觀に出かけ、存外烈しい排日的空氣に不快を感じてゐた爲だつた。しかし僕等を乘せたボオトは僕の氣もちなどには頓著せず、「中の島」の鼻を大まはりに不相變晴やかな水の上をまつ直に嶽麓へ近づいて行つた。……

* * * * *

僕はやはり同じ日の晩、或妓館の梯子段を譚と一しよに上つて行つた。
僕等の通つた二階の部屋は中央に据ゑたテエブルは勿論、椅子も、唾壺も、衣裳箪笥も、上海や漢口の妓館にあるのと殆ど變りは見えなかつた。が、この部屋の天井の隅には針金細工の鳥籠が一つ、硝子窓の側にぶら下げてあつた。その又籠の中には栗鼠が二匹、全然何の音も立てずに止まり木を上つたり下つたりしてゐた。それは窓や戸口に下げた、赤い更紗の布と一しよに珍しい見ものに違ひなかつた。しかし少くとも僕の目には氣味の惡い見ものにも違ひなかつた。
この部屋に僕等を迎へたのは小肥りに肥つた鴇婦だつた。譚は彼女を見るが早いか、雄辯に何か話し出した。彼女も愛嬌そのもののやうに滑かに彼と應對してゐた。が、彼等の話してゐる言葉は一言も僕にはわからなかつた。（これは勿論僕自身の支那語に通じてゐない爲である。しかし元來長沙の言葉は北京官話に通じてゐる耳にも決して容易にはわからないらしい。）
譚は鴇婦と話した後、大きい紅木のテエブルへ譚と差向ひに腰を下ろした。それから彼女の運んで來た活版刷の局票の上へ藝者の名前を書きはじめた。張湘娥、王巧雲、含芳、醉玉

樓、愛媛媛、——それ等はいづれも旅行者の僕には支那小說の女主人公にふさはしい名前ばかりだつた。

「玉蘭も呼ばうか？」

僕は返事をしたいにもしろ、生憎鴇婦の火を擦つてくれる卷煙草の一本を吸ひつけてゐた。が、譚はテエブル越しにちよつと僕の顏を見たぎり、無頓著に筆を揮つたらしかつた。

そこへ濶達にはひつて來たのは細い金緣の眼鏡をかけた、血色の好い圓顏の藝者だつた。彼女は白い夏衣裳にダイアモンドを幾つも輝かせてゐた。のみならずテニスか水泳かの選手らしい體格も具へてゐた。僕はかう言ふ彼女の姿に美醜や好惡を感ずるよりも妙に痛切な矛盾を感じた。彼女は實際この部屋の空氣と、——殊に鳥籠の中の栗鼠とは釣り合はない存在に違ひなかつた。

彼女はちよつと目禮したぎり、躍るやうに譚の側へ歩み寄つた。しかも彼の鄰に坐ると、片手を彼の膝の上に置き、宛囀と何かしやべり出した。譚も、——譚は勿論得意さうに是了是了などと答へてゐた。

「これはこの家にゐる藝者でね、林大嬌と言ふ人だよ。」

僕は譚にかう言はれた時、おのづから彼の長沙にも少い金持の子だつたのを思ひ出した。

それから十分ばかりたつた後、僕等はやはり向ひ合つたまま、木の子だの鷄だの白菜だのの多い四川料理の晩飯をはじめてゐた。藝者はもう林大嬌の外にも大勢僕等をとり卷いてゐた。のみならず彼等の後ろには鳥打帽子などをかぶつた男も五六人胡弓を構へてゐた。藝者は時時坐つたなり、丁度胡弓の音に吊られるやうに甲高い唄をうたひ出した。それは僕にも必ずしも全然面白味のないものではなかつた。しかし僕は京調の蕩馬や西皮調の汾河灣よりも僕の左に坐つた藝者に遙かに興味を感じてゐた。

僕の左に坐つたのは僕のをととひ沅江丸の上から僅かに一瞥した支那美人だつた。彼女は水色の夏衣裳の胸に不相變メダルをぶら下げてゐた。が、間近に來たのを見ると、たとひ病的な弱弱しさはあつても、存外うひうひしい處はなかつた。僕は彼女の横顏を見ながら、いつか日かげの土に育つた、小さい球根を考へたりしてゐた。

「おい、君の鄰に坐つてゐるのはね、——」

譚は老酒に赤らんだ顏に人懷こい微笑を浮かべたまま、蝦を盛り上げた皿越しに突然僕へ聲をかけた。

「それは含芳と言ふ人だよ。」

僕は譚の顏を見ると、なぜか彼にはをととひのことを打ち明ける心もちを失つてしまつた。

「この人の言葉は綺麗だね。Rの音などは佛蘭西人のやうだ。」

「うん、その人は北京生れだから。」

僕等の話題になつたことは含芳自身にもわかつたらしかつた。彼女は現に僕の顏へ時時素早い目をやりながら、早口に譚と問答をし出した。けれども啞に變らない僕はこの時もやはりいつもの通り、唯二人の顏色を見比べてゐるより外はなかつた。

「君はいつ長沙へ來たと尋くからね、をととひ來たばかりだと返事をすると、その人もをととひは誰かの出迎ひに埠頭まで行つたと言つてゐるんだ。」

譚はかう言ふ通譯をした後、もう一度含芳へ話しかけた。が、彼女は頰笑んだきり、子供のやうにいやいやをしてゐた。

「ふん、どうしても白狀しない。誰の出迎ひに行つたと尋いてゐるんだが。……」

すると突然林大嬌は持つてゐた卷煙草に含芳を指さし、嘲るやうに何か言ひ放つた。含芳は

確かにはつとしたと見え、いきなり僕の膝を抑へるやうにした。しかしやつと微笑したと思ふと、すぐに又――と言ひ澄した。僕は勿論この芝居に、――或はこの芝居のかけになつた、存外深いらしい彼等の敵意に好奇心を感ぜずにはゐられなかつた。

「おい、何と言つたんだい？」

「その人は誰の出迎ひでもない、お母さんの出迎ひに行つたんだと言ふんだ。何、今ここにゐる先生がね、×××と言ふ長沙の役者の出迎ひか何かだらうと言つたもんだから。」

僕は生憎その名前だけはノオトにとる訳に行かなかつた。

「お母さん？」

「お母さんと言ふのは義理のお母さんだよ。つまりその人だの玉蘭だのを抱へてゐる家の鴇婦のことだね。」

譚は僕の問を片づけると、老酒を一杯煽つてから、急に滔滔と弁じ出した。それは僕には這箇の外には一こともわからない話だつた。が、芸者や鴇婦などの熱心に聞いてゐるだけでも、何か興味のあることらしかつた。のみならず時々僕の顔へ彼等の目をやる所を見ると、少くとも幾分かは僕自身にも関係を持つたことらしかつた。僕は人目には平然と巻煙草を銜へてゐたものの、だんだん苛立たしさを感じはじめた。

「莫迦！　何を話してゐるんだ？」

「何、けふ嶽麓へ出かける途中、玉蘭に遇つたことを話してゐるんだ。それから……」

譚は上唇を嘗めながら、前よりも上機嫌につけ加へた。

「それから君は斬罪と言ふものを見たがつてゐることを話してゐるんだ。」

「何だ、つまらない。」

僕はかう言ふ説明を聞いても、未だに顔を見せない玉蘭は勿論、彼女の友だちの含芳にも格別気の毒とは思はなかつた。けれども含芳の顔を見た時、理智的には彼女の心もちを可也はつきりと了解した。彼女は耳環を震はせながら、テエブルのかげになつた膝の上に手巾を結んだり解いたりしてゐた。

「ぢやこれもつまらないか？」

譚は後にゐた鴇婦の手から小さい紙包みを一つ受け取り、得得とそれをひろげだした。その又紙の中には煎餅位大きい、チョコレエトの色に干からびた、妙なものが一枚包んであつた。

「何だ、それは？」

「これか？　これは唯のビスケットだがね。……そら、さつき黄六一と云ふ土匪の頭目の話をしたらう？　あの黄の首の血をしみこませてあるんだ。これこそ日本ぢや見ることは出来ない。」

「そんなものを又何にするんだ？」

「何にするもんか？　食ふだけだよ。この辺ぢや未だにこれを食へば、無病息災になると思つてゐるんだ。」

譚は晴れ晴れと微笑したまま、丁度この時テエブルを離れた二三人の芸者に挨拶した。が、含芳の立ちかかるのを見ると、殆ど憐みを乞ふやうに何か笑つたりしやべつたりした。のみならずしまひには片手を挙げ、正面の僕を指さしたりした。含芳はちよつとためらつた後、もう一度やつと微笑を浮かべ、テエブルの前に腰を下した。僕は大いに可愛かつたから、一座の人目に触れないやうにそつと彼女の手を握つてゐてやつた。

「こんな迷信こそ国辱だね。僕などは医者と言ふ職業上、ずゐぶんやかましくも言つてゐるんだが。……」

「それは斬罪があるからだけさ。脳味噌の黒焼きなどは日本でも嚥んでゐる。」

「まさか。」

「いや、まさかぢやない。僕も嚥んだ。尤も子供のうちだつたが。……」

僕はかう言ふ話の中に玉蘭の來たのに氣づいてゐた。彼女は鴇婦と立ち話をした後、含芳の隣に腰を下ろした。

譚は玉蘭の來たのを見ると、又僕をそつちのけに彼女に愛嬌をふりまき出した。彼女は外光に眺めるよりも幾分かは美しいのに違ひなかつた。少くとも彼女の笑ふ度にエナメルのやうに齒の光るのは見事だつたのに違ひなかつた。しかし僕はその齒並みにおのづから栗鼠を思ひ出した。栗鼠は今でも不相變、赤い更紗の布を下げた硝子窓に近い鳥籠の中に二匹とも滑らかに上下してゐた。

「ぢや一つこれをどうだ?」

譚はビスケットを折つて見せた。ビスケットは折り口も同じ色だつた。

「莫迦を言へ。」

僕は勿論首を振つた。譚は大聲に笑つてから、今度は鄰の林大嬌へビスケットの一片を勸めようとした。林大嬌はちよつと顏をしかめ、斜めに彼の手を押し戻した。彼は同じ常談を何人かの藝者と繰り返した。が、そのうちにいつの間にか、やはり愛想の好い顏をしたまま、身動きもしない玉蘭の前へ褐色の一片を突きつけてゐた。

僕はちよつとそのビスケットの匂だけ嗅いで見たい誘惑を感じた。

「おい、僕にもそれを見せてくれ。」

「うん、こつちにまだ半分ある。」

譚は殆ど左利きのやうに殘りの一片を投げてよこした。僕は小皿や箸の間からその一片を拾ひ上げた。けれども折角拾ひ上げると、急に嗅いで見る氣もなくなつたから、默つてテエブルの下へ落してしまつた。

すると玉蘭は譚の顏を見つめ、二こと三こと問答をした。それからビスケットを受け取つた後、彼女を見守つた一座を相手に早口に何かしやべり出した。

「どうだ、通譯しようか?」

譚はテエブルに頰杖をつき、そろそろ呂律の怪しい舌にかう僕へ話しかけた。

「うん、通譯してくれ。」

「好いか? 逐語譯だよ。わたしは喜んでわたしの愛する……黃老爺の血を味ひます。……」

僕は體の震へるのを感じた。それは僕の膝を抑へた含芳の手の震へるのだつた。

「あなたがたもどうかわたしのやうに、……あなたがたの愛する人を、……」

玉蘭は譚の言葉の中にいつかもう美しい齒にビスケットの一片を嚙みはじめてゐた。……

* * * * *

僕は三泊の豫定通り、五月十九日の午後五時頃、前と同じ沅江丸の甲板の欄干によりかかつてゐた。白壁や瓦屋根を積み上げた長沙は何か僕には無氣味だつた。それは次第に迫つて來る暮色の影響に違ひなかつた。僕は葉卷を銜へたまま、何度もあの愛嬌の好い譚永年の顏を思ひ出した。が、譚は何の爲か、僕の見送りには立たなかつた。

沅江丸の長沙を發したのは確か七時か七時半だつた。僕は食事をすませた後、薄暗い船室の電燈の下に僕の滯在費を計算し出した。僕の目の前には扇が一本、二尺に足りない机の外へ桃色の流蘇を垂らしてゐた。この扇は僕のここへ來る前に誰かの置き忘れて行つたものだつた。僕は鉛筆を動かしながら、時時又譚の顏を思ひ出した。彼の玉蘭を苦しめた理由ははつきりとは僕にもわからなかつた。しかし僕の滯在費は——僕は未だに覺えてゐる、日本の金に換算すると、丁度十二圓五十錢だつた。

(大正十四年一月作)

年末の一日

……僕は何でも雜木の生えた、寂しい崖の上を歩いて行つた。崖の下はすぐに沼になつてゐた。その又沼の岸寄りには水鳥が二羽泳いでゐた。どちらも薄い苔の生えた石の色に近い水鳥だつた。僕は格別その水鳥に珍しい感じは持たなかつた。が、餘り翼などの鮮かに見えるのは無氣味だつた。――

――僕はかう言ふ夢の中からがたがた言ふ音に目をさました。それは書齋と鍵の手になつた座敷の硝子戸の音らしかつた。僕は新年號の仕事中、書齋に寢床をとらせてゐた。三軒の雜誌社に約束した仕事は三篇とも僕には不滿足だつた。しかし兎に角最後の仕事はけふの夜明け前に片づいてゐた。

寢床の裾の障子には竹の影もちらちら映つてゐた。僕は思ひ切つて起き上り、一まづ後架へ小便をしに行つた。近頃この位小便から水蒸氣の盛んに立つたことはなかつた。僕は便器に向ひながら、今日はふだんよりも寒いぞと思つた。

伯母や妻は座敷の縁側にせつせと硝子戸を磨いてゐた。がたがた言ふのはこの音だつた。袖無しの上へ襷をかけた伯母はバケツの雜巾を絞りながら、多少僕にからかふやうに、「お前、もう十二時ですよ。」と言つた。成程十二時に違ひなかつた。廊下を拔けた茶の間にはいつか古い長火鉢の前に晝飯の支度も出來上つてゐた。のみならず母は次男の多加志に牛乳やトオストを養つてゐた。しかし僕は習慣上朝らしい氣もちを持つたまま、人氣のない臺所へ顏を洗ひに行つた。

朝飯兼晝飯をすませた後、僕は書齋の置き炬燵へはひり、二三種の新聞を讀みはじめた。新聞の記事は諸會社のボオナスや羽子板の賣れ行きで持ち切つてゐた。けれども僕の心もちは少しも陽氣にはならなかつた。僕は仕事をすませる度に妙に弱るのを常としてゐた。それは房後の疲勞のやうにどうすることも出來ないものだつた。……

K君の來たのは二時前だつた。僕はK君を置き炬燵に請じ、差し當りの用談をすませることにした。縞の背廣を着たK君はもとは奉天の特派員、――今は本社詰めの新聞記者だつた。

「どうです？　暇ならば出ませんか？」

僕は用談をすませた頃、ぢつと家にとぢこもつてゐるのはやり切れない氣もちになつてゐた。

「ええ、四時頃までならば。……どこかお出かけになる先はおきまりになつてゐるんですか。」

K君は遠慮勝ちに問ひ返した。

「いいえ、どこでも好いんです。」

「お墓はけふは駄目でせうか？」

K君のお墓と言つたのは夏目先生のお墓だつた。僕はもう半年ほど前に先生の愛讀者のK君にお墓を教へる約束をしてゐた。年の暮にお墓參りをする、――それは僕の心もちにも必ずしもぴつたりしないものではなかつた。

「ぢやお墓へ行きませう。」

僕は早速外套をひつかけ、K君と一しよに家を出ることにした。

天氣は寒いなりに晴れ上つてゐた。狹苦しい動坂の往來もふだんよりは人あしが多いらしかつた。門に立てる松や竹も田端青年團詰め所とか言ふ板葺きの小屋の側に寄せかけてあつた。

僕もから言ふ町に見た時、幾分か僕の少年時代に抱いた師走の心もちのよみ返るのを感じた。

僕等は少時待つた後、護國寺前行の電車に乘つた。電車は割り合ひにこまなかつた。K君は外套の襟を立てたまま、この頃先生の短尺を一枚やつと手に入れた話などをしてゐた。

すると富士前を通り越した頃、電車の中ほどの電球が一つ、偶然拔け落ちてこなごなになつた。そこには顏も身なりも惡い二十四五の女が一人、片手に大きい包を持ち、片手に吊り革につかまつてゐた。電球は床へ落ちる途端に彼女の前髮をかすめたらしかつた。彼女は妙な顏をしたなり、電車中の人人を眺めまはした。それは人人の同情を、——少くとも人人の注意だけは惹かうとする顏に違ひなかつた。が、誰も言ひ合せたやうに全然彼女には冷淡だつた。僕はK君と話しながら、何か拍子拔けのした彼女の顏に可笑しさよりも寧ろはかなさを感じた。

僕等は終點で電車を下り、注連飾りの店など出來た町を雜司ヶ谷の墓地へ歩いて行つた。

大銀杏の葉の落ち盡した墓地は不相變けふもひつそりしてゐた。幅の廣い中央の砂利道にも墓參りの人さへ見えなかつた。僕はK君の先に立つたまま、右側の小みちへ曲つて行つた。小みちは要冬青の生け垣や赤錆のふいた鐵柵の中に大小の墓を並べてゐた。が、いくら先へ行つても、先生のお墓は見當らなかつた。

「もう一つ先の道ぢやありませんか？」

「さうだつたかも知れませんね。」

僕はその小みちを引き返しながら、毎年十二月九日には新年號の仕事に追はれる爲、滅多に先生のお墓參りをしなかつたことを思ひ出した。しかし何度か來ないにしても、お墓の所在のわからないことは僕自身にも信じられなかつた。

その次の稍廣い小みちもお墓のないことは同じだつた。僕等は今度は引き返す代りに生け垣の間を左へ曲つた。けれどもお墓は見當らなかつた。のみならず僕の見覺えてゐた幾つかの空き地さへ見當らなかつた。

「聞いて見る人もなし、……困りましたね。」

僕はから言ふK君の言葉にはつきり冷笑に近いものを感じた。しかし教へると言つた手前、腹を立てる訣にも行かなかつた。

僕等はやむを得ず大銀杏を目當てにもう一度橫みちへはひつて行つた。が、そこにもお墓はなかつた。僕は勿論苛ら苛らして來た。しかしその底に潛んでゐるのは妙に侘しい心もちだつた。僕はいつか外套の下に僕自身の體温を感じながら、前にもから言ふ心もちを知つてゐたことを思ひ出した。それは僕の少年時代の或餓鬼大將にいぢめられ、しかも泣かずに我慢して家へ歸つた時の心もちだつた。

何度も同じ小みちに出入した後、僕は古樒を焚いてゐた墓地掃除の女に途を教はり、大きい先生のお墓の前へやつとK君をつれて行つた。

お墓はこの前に見た時よりもずつと古びを加へてゐた。おまけにお墓のまはりの土もずつと霜に荒されてゐた。それは九日に手向けたらしい寒菊や南天の束の外に何か親しみの持てないものだつた。K君はわざわざ外套を脫ぎ、丁寧にお墓へお時儀をした。しかし僕はどう考へても、今更恬然とK君と一しよにお時儀をする勇氣は出惡かつた。

「もう何年になりますかね？」

「丁度九年になる訣です。」

僕等はそんな話をしながら、護國寺前の終點へ引き返して行つた。

僕はK君と一しよに電車に乘り、僕だけ一人富士前で下りた。それから東洋文庫にゐる或友だちを尋ねた後、日の暮に動坂へ歸り着いた。

動坂の往來は時刻がらだけに前よりも一層混

響いてゐた。が、東中堂を通り過ぎると、人通りもだんだん減りはじめた。僕は受け身になりきつたまま、爪先ばかり見るやうに風立つた路を歩いて行つた。

すると墓地裏の八幡坂の下に箱車を引いた男が一人、楫棒に手をかけて休んでゐた。箱車はちよつと眺めた所、肉屋の車に近いものだつた。が、側へ寄つて見ると、横に廣いあと口に東京胞衣會社と書いたものだつた。僕は後から聲をかけた後、ぐんぐんその車を押してやつた。それは多少押してやるのに穢い氣もしたのに違ひなかつた。しかし力を出すだけでも助かる氣もしたのに違ひなかつた。

北風は長い坂の上から時時まつ直に吹き下ろして來た。墓地の樹木もその度にさあつと葉の落ちた梢を鳴らした。僕はかう言ふ薄暗がりの中に妙な興奮を感じながら、まるで僕自身と闘ふやうに一心に箱車を押しつづけて行つた。

（大正十四年十二月八日作）

地上樂園

地上樂園の光景は屡詩歌にもうたはれてゐる。が、わたしはまだ殘念ながら、さう云ふ詩人の地上樂園に住みたいと思つた覺えはない。基督教徒の地上樂園は畢竟退屈なるパノラマである。黄老の學者の地上樂園もつまりは索漠とした支那料理屋に過ぎない。況んや近代のユウトピアなどは――ウイルヤム・ジエエムスの戰慄したことは何びとも記憶してゐることであらう。

わたしの夢みてゐる地上樂園はさう云ふ天然の溫室ではない。同時に又さう云ふ學校を兼ねた食糧や衣服の配給所でもない。唯此處に住んでゐれば、兩親は子供の成人と共に必ず息を引取るのである。それから男女の兄弟はたとひ惡人に生まれるにもしろ、莫迦には決して生まれない結果、少しも迷惑をかけ合はないのである。それから女は妻となるや否や、家畜の魂を宿す爲に從順そのものに變るのである。それから子供は男女を問はず、兩親の意志や感情通りに、一日のうちに何回でも聾と啞と腰拔けと盲目とになることが出來るのである。それから甲の友人は乙の友人よりも貧乏にならず、同時に又乙の友人は甲の友人よりも金持ちにならず、互に相手を褒め合ふことに無上の滿足を感ずるのである。それから――ざつとかう云ふ處を思へば好い。

これは何もわたし一人の地上樂園たるばかりではない。同時に又天下に充滿した善男善女の地上樂園である。唯古來の詩人や學者はその金色の瞑想の中にかう云ふ光景を夢みなかつた。夢みなかつたのは別に不思議ではない。かう云ふ光景は夢みるにさへ、餘りに眞實の幸福に溢れすぎてゐるからである。

附記　わたしの甥はレムブラントの肖像畫を買ふことを夢みてゐる。しかし彼の小遣ひを十圓貰ふことは夢みてゐない。これも十圓の小遣ひは餘りに眞實の幸福に溢れすぎてゐるからである。

人生

人生は一箱のマツチに似てゐる。重大に扱ふのは莫迦々々しい。重大に扱はなければ危險である。

（侏儒の言葉より）

蜃氣樓

——或は「續海のほとり」——

一

或秋の午頃、僕は東京から遊びに來た大學生のK君と一しよに蜃氣樓を見に出かけて行つた。鵠沼の海岸に蜃氣樓の見えることは誰でももう知つてゐるであらう。現に僕の家の女中などは逆まに舟の映つたのを見、「この間の新聞に出てゐた寫眞とそつくりですよ。」などと感心してゐた。

僕等は東家の横を曲り、次手にO君も誘ふことにした。不相變赤シャツを著たO君は午飯の支度でもしてゐたのか、垣越しに見える井戸端にせつせとポンプを動かしてゐた。僕は秦皮樹のステッキを擧げ、O君にちよつと合圖をした。

「そつちから上つて下さい。——やあ、君も來てゐたのか？」

O君は僕がK君と一しよに遊びに來たものと思つたらしかつた。

「僕等は蜃氣樓を見に出て來たんだよ。君も一しよに行かないか？」

「蜃氣樓か？——」

O君は急に笑ひ出した。

「どうもこの頃は蜃氣樓ばやりだな。」

五分ばかりたつた後、僕等はもうO君と一しよに砂の深い路を歩いて行つた。路の左は砂原だつた。そこに牛車の轍が二すぢ、黑ぐろと斜めに通つてゐた。僕はこの深い轍に何か壓迫に近いものを感じた。逞しい天才の仕事の痕、——そんな氣も迫つて來ないのではなかつた。

「まだ僕は健全ぢやないね。ああ云ふ車の痕を見てさへ、妙に參つてしまふんだから。」

O君は眉をひそめたまま、何とも僕の言葉に答へなかつた。が、僕の心もちはO君にははつきり通じたらしかつた。

そのうちに僕等は松の間を、——疎らに低い松の間を通り、引地川の岸を歩いて行つた。海は廣い砂濱の向うに深い藍色に晴れ渡つてゐた。が、繪の島は家家や樹木も何か憂鬱に曇つてゐた。

「新時代ですね？」

K君の言葉は唐突だつた。のみならず微笑を含んでゐた。新時代？——しかも僕は咄嗟の間にK君の「新時代」を發見した。それは砂止めの笹垣を後ろに海を眺めてゐる男女だつた。尤も薄いインバネスに中折帽をかぶつた男は新時代と呼ぶには當らなかつた。しかし女の斷髮は勿論、パラソルや踵の低い靴さへ確に新時代に出來上つてゐた。

「幸福らしいね。」

「君なんぞは羨しい仲間だらう。」

O君はK君をからかつたりした。

蜃氣樓の見える場所は彼等から一町ほど隔つてゐた。僕等はいづれも腹這ひになり、陽炎の立つた砂濱を川越しに透かして眺めたりした。砂濱の上には青いものが一すぢ、リボンほどの幅にゆらめいてゐた。それはどうしても海の色が陽炎に映つてゐるらしかつた。が、その外には砂濱にある船の影も何も見えなかつた。

「あれを蜃氣樓と云ふんですかね？」

K君は顋を砂だらけにしたなり、失望したやうにかう言つてゐた。そこへどこからか鴉が一

羽、二三町隔つた砂濱の上を、藍色にゆらめいたものの上をかすめ、更に又向うへ舞ひ下つた。と同時に鴉の影はその陽炎の帶の上へちらりと逆まに映つて行つた。

「これでもけふは上等の方だな。」

僕等はO君の言葉と一しよに砂の上から立ち上つた。するといつか僕等の前には僕等の殘して來た「新時代」が二人、こちらへ向いて歩いてゐた。

僕はちよつとびつくりし、僕等の後ろをふり返つた。しかし彼等は不相變一町ほど向うの笹垣を後ろに何か話してゐるらしかつた。僕等は、——殊にO君は拍子抜けのしたやうに笑ひ出した。

「この方が反つて蜃氣樓ぢやないか?」

僕等の前にゐる「新時代」は勿論彼等とは別人だつた。が、女の斷髪や男の中折帽をかぶつた姿は彼等と殆ど變らなかつた。

「僕は何だか氣味が惡かつた。」

「僕もいつの間に來たのかと思ひましたよ。」

僕等はこんなことを話しながら、今度は引地川の岸に沿はずに低い砂山を越えて行つた。砂山は砂止めの笹垣の裾にやはり低い松を黄ばませてゐた。O君はそこを通る時に「どつこいしよ」と云ふやうに腰をかがめ、砂の上の何かを拾ひ上げた。それは瀝青らしい黒枠の中に横文字を並べた木札だつた。

「何だい、それは? Sr. H. Tsuji.... Unua.... Aprilo.... Jaro.... 1906....」

「何かしら? dua.... Majesta.... ですか? 1926としてありますね。」

「これは、ほれ、水葬した死骸についてゐたんぢやないか?」

O君はかう云ふ推測を下した。

「だつて死骸を水葬する時には帆布か何かに包むだけだらう?」

「だからそれへこの札をつけてさ。——ほれ、ここに釘が打つてある。これはもとは十字架の形をしてゐたんだな。」

僕等はもうその時には別莊らしい篠垣や松林の間を歩いてゐた。木札はどうもO君の推測に近いものらしかつた。僕は又何か日の光の中に感じる筈のない無氣味さを感じた。

「縁起でもないものを拾つたな。」

「何、僕はマスコットにするよ。……しかし1906から1926とすると、二十位で死んだんだな。二十位と——」

「男ですかしら? 女ですかしら?」

「さあね。……しかし兎に角この人は混血兒だつたかも知れないね。」

僕はK君に返事をしながら、船の中に死んで行つた混血兒の青年を想像した。彼は僕の想像によれば、日本人の母のある筈だつた。

「蜃氣樓か。」

O君はまつ直に前を見たまま、急にかう獨り語を言つた。それは或は何げなしに言つた言葉かも知れなかつた。が、僕の心もちには何か幽かに觸れるものだつた。

「ちよつと紅茶でも飲んで行くかな。」

僕等はいつか家の多い本通りの角に佇んでゐた。家の多い?——しかし砂の乾いた道には殆ど人通りは見えなかつた。

「K君はどうするの?」

「僕はどうでも、……」

そこへ眞白い犬が一匹、向うからぼんやり尾を垂れて來た。

二

K君の東京へ歸つた後、僕は又O君や妻と一しよに引地川の橋を渡つて行つた。今度は午後の七時頃、——夕飯をすませたばかりだつた。

その晩は星も見えなかつた。僕等は餘り話もせずに

せずに人げのない砂濱を歩いて行つた。砂濱には引地川の川口のあたりに火かげが一つ動いてゐた。それは沖へ漁に行つた船の目じるしになるものらしかつた。

浪の音は勿論絶えなかつた。が、浪打ち際へ近づくにつれ、だんだん磯臭さも強まり出した。それは海そのものよりも僕等の足もとに打ち上げられた海艸や汐木の匂らしかつた。僕はなぜかこの匂を鼻の外にも皮膚の上に感じた。

僕等は暫く浪打ち際に立ち、浪がしらの仄くのを眺めてゐた。海はどこを見てもまつ暗だつた。僕は彼是十年前、上總の或海岸に滯在してゐたことを思ひ出した。同時に又そこに一しよにゐた或友だちのことを思ひ出した。彼は彼自身の勉強の外にも「芋粥」と云ふ僕の短篇の校正刷を讀んでくれたりした。……

そのうちにいつかO君は浪打ち際にしやがんだまま、一本のマッチをともしてゐた。

「何をしてゐるの？」

「何つてことはないけれど、……ちよつとかう火をつけただけでも、いろんなものが見えるでせう？」

O君は肩越しに僕等を見上げ、半ばは妻に話しかけたりした。成程一本のマッチの火は海松ふさや心太艸の散らかつた中にさまざまの貝殼を照らし出してゐた。O君はその火が消えてしまふと、又新たにマッチを摺り、そろそろ浪打ち際を歩いて行つた。

「やあ、氣味が惡いなあ。土左衞門の足かと思つた。」

それは半ば砂に埋まつた遊泳靴の片つぽだつた。そこには又海艸の中に大きい海綿もころがつてゐた。しかしその火も消えてしまふと、あたりは前よりも暗くなつてしまつた。

「晝間ほどの獲物はなかつた訣だね。」

「獲物？　ああ、あの札か？　あんなものはざらにありはしない。」

僕等は絶え間ない浪の音を後に廣い砂濱を引き返すことにした。僕等の足は砂の外にも時々海艸を踏んだりした。

「ここいらにもいろんなものがあるんだらうなあ。」

「もう一度マッチをつけて見ようか？」

「好いよ。……おや、鈴の音がするね。」

僕はちよつと耳を澄ました。それはこの頃の僕に多い錯覺かと思つた爲だつた。が、實際鈴の音はどこかにしてゐるのに違ひなかつた。僕はもう一度O君にも聞えるかどうか尋ねようとした。すると二三歩遅れてゐた妻は笑ひ聲に僕等へ話しかけた。

「あたしの木履の鈴が鳴るでせう。――」

しかし妻は振り返らずとも、草履をはいてゐるのに違ひなかつた。

「あたしは今夜は子供になつて木履をはいて歩いてゐるんです。」

「奧さんの袂の中で鳴つてゐるんだから、――ああ、Yちやんのおもちやだよ。鈴のついたセルロイドのおもちやだよ。」

O君もかう言つて笑ひ出した。そのうちに妻は僕等に追ひつき、三人一列になつて歩いて行つた。僕等は妻の常談を機會に前よりも元氣に話し出した。

僕はO君にゆうべの夢を話した。それは或文化住宅の前にトラック自動車の運轉手と話をしてゐる夢だつた。僕はその夢の中にも確かにこの運轉手には會つたことがあると思つてゐた。が、どこで會つたものかは目の醒めた後もわからなかつた。

「それがふと思ひ出して見ると、三四年前にたつた一度談話筆記に來た婦人記者なんだがね。」

「ぢや女の運轉手だつたの？」

「いや、勿論男なんだよ。顏だけは唯その人に

なつてゐるんだ。やつぱり一度見たものは頭のどこかに殘つてゐるのかな。」

「さうだらうなあ。顏でも印象の強いやつは、……」

「けれども僕はその人の顏に興味も何もなかつたんだがね。それだけに反つて氣味が惡いんだ。何だか意識の閾の外にもいろんなものがあるやうな氣がして。……」

「つまりマッチへ火をつけて見ると、いろんなものが見えるやうなものだ。」

僕はこんなことを話しながら、偶然僕等の顏だけははつきり見えるのを發見した。しかし星明りさへ見えないことは前と少しも變らなかつた。僕は又何か無氣味になり、何度も空を仰いで見たりした。すると妻も氣づいたと見え、まだ何とも言はないうちに僕の疑問に返事をした。

「砂のせゐですね。さうでせう？」

妻は兩袖を合せるやうにし、廣い砂濱をふり返つてゐた。

「さうらしいね。」

「砂と云ふやつは惡戯ものだな。蜃氣樓もこいつが拵へるんだから。……奥さんはまだ蜃氣樓を見ないの？」

「いいえ、この間一度、——何だか青いものが見えたばかりですけれども。……」

「それだけですよ。けふ僕たちの見たのも。」

僕等は引地川の橋を渡り、東家の土手の外を歩いて行つた。松は皆いつか起り出した風にこうこうと梢を鳴らしてゐた。そこへ背の低い男が一人、足早にこちらへ來るらしかつた。僕はふとこの夏見た或錯覺を思ひ出した。それはやはりかう云ふ晩にポプラアの枝にかかつた紙がヘルメット帽のやうに見えたのだつた。が、その男は錯覺ではなかつた。のみならず互に近づくのにつれ、ワイシャツの胸なども見えるやうになつた。

「何だらう、あのネクタイ・ピンは？」

僕は小聲にかう言つた後、忽ちピンだと思つたのは卷煙草の火だつたのを發見した。すると妻は袂を銜へ、誰よりも先に忍び笑ひをし出した。が、その男はわき目もふらずにさつさと僕等とすれ違つて行つた。

「ぢやおやすみなさい。」

「おやすみなさいまし。」

僕等は氣輕にＯ君に別れ、松風の音の中を步いて行つた。その又松風の音の中には蟲の聲もかすかにまじつてゐた。

「おぢいさんの金婚式はいつになるんでせう？」

「おぢいさん」と云ふのは父のことだつた。

「いつになるかな。……東京からバタはとどいてゐるね？」

「バタはまた。とどいてゐるのはソウセエヂだけ。」

そのうちに僕等は門の前へ——半開きになつた門の前へ來てゐた。

（昭和二年二月作）

火星

火星の住民の有無を問ふことは我我の五感に感ずることの出來る住民の有無を問ふことである。しかし生命は必ずしも我我の五感に感ずることの出來る條件を具へるとは限つてゐない。もし火星の住民も我我の五感を超越した存在を保つてゐるとすれば、彼等の一群は今夜も亦篠懸を黃ばませる秋風と共に銀座へ來てゐるかも知れないのである。

（「侏儒の言葉」より）

點鬼簿

一

僕の母は狂人だつた。僕は一度も僕の母に母らしい親しみを感じたことはない。僕の母は髪を櫛卷きにし、いつも芝の實家にたつた一人坐りながら、長煙管ですぱすぱ煙草を吸つてゐる。顏も小さければ體も小さい。その又顏はどう云ふ譯か、少しも生氣のない灰色をしてゐる。僕はいつか西廂記を讀み、土口氣泥臭味の語に出會つた時に忽ち僕の母の顏を、――瘦せ細つた横顏を思ひ出した。

かう云ふ僕は僕の母に全然面倒を見て貰つたことはない。何でも一度僕の養母とわざわざ二階へ挨拶に行つたら、いきなり頭を長煙管で打たれたことを覺えてゐる。しかし大體僕の母は如何にももの靜かな狂人だつた。僕や僕の姉などに畫を描いてくれと迫られると、四つ折の半紙に畫を描いてくれる。畫は墨を使ふばかりではない。僕の姉の水繪の具を行樂の子女の衣服だの草木の花だのになすつてくれる。唯それ等の畫中の人物はいづれも狐の顏をしてゐた。

僕の母の死んだのは僕の十一の秋である。それは病の爲よりも衰弱の爲に死んだのであらう。その死の前後の記憶だけは割り合にはつきりと殘つてゐる。

危篤の電報でも來た爲であらう。僕は或風のない深夜、僕の養母と人力車に乘り、本所から芝まで駈けつけて行つた。僕はまだ今日でも襟卷と云ふものを用ひたことはない。が、特にこの夜だけは南畫の山水か何かを描いた、薄い絹の手巾をまきつけてゐたことを覺えてゐる。それからその手巾には「アヤメ香水」と云ふ香水の匂のしてゐたことも覺えてゐる。

僕の母は二階の眞下の八疊の座敷に横たはつてゐた。僕は四つ違ひの僕の姉と僕の母の枕もとに坐り、二人とも絶えず聲を立てて泣いた。殊に誰か僕の後ろで「御臨終御臨終。」と言つた時には一層切なさのこみ上げるのを感じた。しかし今まで瞑目してゐた、死人にひとしい僕の母は突然目をあいて何か言つた。僕等は皆悲しい中にも小聲でくすくす笑ひ出した。

僕はその次の晩も僕の母の枕もとに夜明け近くまで坐つてゐた。が、なぜかゆうべのやうに少しも涙は流れなかつた。僕は殆ど泣き聲を絶たない僕の姉の手前を恥ぢ、一生懸命に泣く眞似をしてゐた。同時に又僕の泣かれない以上、僕の母の死ぬことは必ずないと信じてゐた。

僕の母は三日目の晩に殆ど苦しまずに死んで行つた。死ぬ前には正氣に返つたと見え、僕等の顏を眺めてはとめ度なしにぼろぼろ涙を落した。が、やはりふだんのやうに何とも口は利かなかつた。

僕は納棺を終つた後にも時時泣かずにはゐられなかつた。すると「王子の叔母さん」と云ふ或遠縁のお婆さんが一人「ほんたうに御感心でございますね。」と言つた。しかし僕は妙なことに感心する人だと思つただけだつた。

僕の母の葬式の出た日、僕の姉は位牌を持ち、僕はその後ろに香爐を持ち、二人とも人力車に乘つて行つた。僕は時時居眠りをし、はつと思つて目を醒ます拍子に危く香爐を落しさうにする。けれども谷中へは中中來ない。可也長い葬列はいつも秋晴れの東京の町をしづしづと練つてゐるのである。

僕の母の命日は十一月二十八日である。又戒名は歸命院妙乘日進大姉である。僕はその癖に僕の實父の命日や戒名を覺えてゐない。それは多分十一の僕には命日や戒名を覺えることも誇りの一つだつた爲であらう。

二

僕は一人の姉を持つてゐる。しかしこれは病身ながらも二人の子供の母になつてゐる。僕の「點鬼簿」に加へたいのは勿論この姉のことではない。丁度僕の生まれる前に突然夭折した姉のことである。僕等三人の姉弟の中でも一番賢かつたと云ふ姉のことである。

この姉を初子と云つたのは長女に生まれた爲だつたであらう。僕の家の佛壇には未だに「初ちやん」の寫眞が一枚小さい額縁の中にはひつてゐる。初ちやんは少しも弱さうではない。小さい笑窪のある兩頬なども熟した杏のやうにまるまるしてゐる。……

僕の父や母の愛を一番餘計に受けたものは何と云つても「初ちやん」である。「初ちやん」は芝の新錢座からわざわざ築地のサンマアズ夫人の幼稚園か何かへ通つてゐた。が、土曜から日曜へかけては必ず僕の母の家へ、——本所の芥川家へ泊りに行つた。「初ちやん」はかう云ふ外出の時にはまだ明治二十年代でも今めかしい洋服を著てゐたのであらう。僕は小學校へ通つてゐた頃、「初ちやん」の著物の端巾を貰ひ、ゴム人形に著せたのを覺えてゐる。その又端巾は言ひ合せたやうに細かい花や樂器を散らした舶來のキャラコばかりだつた。

或春先の日曜の午後、「初ちやん」は庭を歩きながら、座敷にゐる伯母に聲をかけた。（僕は勿論この時の姉も洋服を著てゐたやうに想像してゐる。）

「伯母さん、これは何と云ふ樹？」

「どの樹？」

「この莟のある樹。」

僕の母の實家の庭には背の低い木瓜の樹が一株、古井戸へ枝を垂らしてゐた。髪をお下げにした「初ちやん」は恐らくは大きい目をしたまま、この枝のとげとげしい木瓜の樹を見つめてゐたことであらう。

「これはお前と同じ名前の樹。」

伯母の洒落は生憎通じなかつた。

「ぢや莫迦の樹と云ふ樹なのね。」

伯母は「初ちやん」の話さへ出れば、未だにこの問答を繰り返してゐる。實際又「初ちやん」の話と云つてはその外に何も殘つてゐない。「初ちやん」はそれから幾日もたたずに柩にはひつてしまつたのであらう。僕は小さい位牌に彫つた「初ちやん」の戒名は覺えてゐない。が、「初ちやん」の命日が四月五日であることだけは妙にはつきりと覺えてゐる。

僕はなぜかこの姉に、——全然僕の見知らない姉に或親しみを感じてゐる。「初ちやん」は今も存命するとすれば、四十を越してゐることであらう。四十を越した「初ちやん」の顔は或は芝の實家の二階に茫然と煙草をふかしてゐた僕の母の顔に似てゐるかも知れない。僕は時々幻のやうに僕の母とも姉ともつかない四十恰好の女人が一人、どこかから僕の一生を見守つてゐるやうに感じてゐる。これは珈琲や煙草に疲れた僕の神經の仕業であらうか？　それとも又何かの機會に實在の世界へも面かげを見せる超自然の力の仕業であらうか？

三

僕は母の發狂した爲に生まれるが早いか養家に來たから、（養家は母がたの伯父の家だつた。）僕の父にも冷淡だつた。僕の父は牛乳屋であり、小さい成功者の一人らしかつた。僕に當

時稀らしかつた果物や飲料を教へたのは悉く僕の父である。バナナ、アイスクリイム、パイナアップル、ラム酒、——まだその外にもあつたかも知れない。僕は當時新宿にあつた牧場の外の槲の葉かげにラム酒を飲んだことを覺えてゐる。ラム酒は非常にアルコオル分の少ない、橙黄色を帶びた飲料だつた。

僕の父は幼い僕にかう云ふ珍らしいものを勸め、養家から僕を取り戻さうとした。僕は一夜大森の魚榮でアイスクリイムを勸められながら、露骨に實家へ逃げて來いと口説かれたことを覺えてゐる。僕の父はかう云ふ時には頗る巧言令色を弄した。が、生憎その勸誘は一度も效を奏さなかつた。それは僕が養家の父母を、——殊に伯母を愛してゐたからだつた。

僕の父は又短氣だつたから、度度誰とでも喧嘩をした。僕は中學の三年生の時に僕の父と相撲をとり、僕の得意の大外刈りを使つて見事に僕の父を投げ倒した。僕の父は起き上つたと思ふと、「もう一番。」と言つて僕に向つて來た。僕は又造作もなく投げ倒した。僕の父は三度目には「もう一番。」と言ひながら、血相を變へて飛びかかつて來た。この相撲を見てゐた僕の叔母——僕の母の妹であり、僕の父の後妻だつた叔母は二三度僕に目くばせをした。僕は僕の父と揉み合つた後、わざと仰向けに倒れてしまつた。が、もしあの時に負けなかつたとすれば、僕の父は必ず僕にも摑みかからずにはゐなかつたであらう。

僕は二十八になつた時、——まだ教師をしてゐた時に「チチニウイン」の電報を受けとり、倉皇と鎌倉から東京へ向つた。僕の父はインフルエンザの爲に東京病院にはひつてゐた。僕は彼是三日ばかり、養家の伯母や實家の叔母と病室の隅に寢泊りしてゐた。そのうちにそろそろ退屈し出した。そこへ僕の懇意にしてゐた或愛蘭土の新聞記者が一人、築地の或待合へ飯を食ひに來ないかと云ふ電話をかけた。僕はその新聞記者が近く渡米するのを口實にし、垂死の僕の父を殘したまま、築地の或待合へ出かけて行つた。

僕等は四五人の藝者と一しよに愉快に日本風の食事をした。食事は確か十時頃に終つた。僕はその新聞記者を殘したまま、狹い段梯子を下つて行つた。すると誰か後ろから「ああさん。」と僕に聲をかけた。僕は中段に足をとめながら、段梯子の上をふり返つた。そこには來合せてゐた藝者が一人、ぢつと僕を見下ろしてゐた。僕は默つて段梯子を下り、玄關の外のタクシイに乘つた。タクシイはすぐに動き出した。が、僕は僕の父よりも水水しい西洋髮に結つた彼女の顏を、——殊に彼女の目を考へてゐた。

僕が病院へ歸つて來ると、僕の父は僕を待ち兼ねてゐた。のみならず二枚折の屛風の外に悉く餘人を引き下らせ、僕の手を握つたり撫でたりしながら、僕の知らない昔のことを、——僕の母と結婚した當時のことを話し出した。それは僕の母と二人で簞笥を買ひに出かけたとか、鮨をとつて食つたとか云ふ、瑣末な話に過ぎなかつた。しかし僕はその話のうちにいつか瞼が熱くなつてゐた。僕の父も肉の落ちた頰にやはり涙を流してゐた。

僕の父はその次の朝に餘り苦しまずに死んで行つた。死ぬ前には頭が狂つたと見え、「あんなに旗を立てた軍艦が來た。みんな萬歲を唱へろ。」などと言つた。僕は僕の父の葬式がどんなものだつたか覺えてゐない。唯僕の父の死骸を病院から實家へ運ぶ時、大きい春の月が一つ、僕の父の柩車の上を照らしてゐたことを覺えてゐる。

四

僕は今年の三月の半ばにまだ懷爐を入れたま

ま、久しぶりに妻と墓參りをした。久しぶりに、——しかし小さい墓は勿論、墓の上に枝を伸ばした一株の赤松も變らなかつた。「點鬼簿」に加へた三人は皆この谷中の墓地の隅に、——しかも同じ石塔の下に彼等の骨を埋めてゐる。僕はこの墓の下へ靜かに僕の母の柩が下された時のことを思ひ出した。これは又「初ちやん」も同じだつたであらう。唯僕の父だけは、——僕は僕の父の骨が白じらと細かに碎けた中に金齒の交つてゐたのを覺えてゐる。……

僕は墓參りを好んではゐない。若し忘れてゐられるとすれば、僕の兩親や姉のことも忘れてゐたいと思つてゐる。が、特にその日だけは肉體的に弱つてゐたせゐか、春先の午後の日の光の中に黑ずんだ石塔を眺めながら、一體彼等三人の中では誰が幸福だつたらうと考へたりした。

かげろふや塚より外に住むばかり

僕は實際この時ほど、かう云ふ丈艸の心もちが押し迫つて來るのを感じたことはなかつた。

（大正十五年九月作）

佛陀

悉達多は王城を忍び出た後六年の間苦行した。六年の間苦行した所以は勿論王城の生活の豪奢を極めてゐた祟りであらう。その證據にはナザレの大工の子は、四十日の斷食しかしなかつたやうである。

又

悉達多は車匿に馬轡を執らせ、潛かに王城を後ろにした。が、彼の思辨癖は屢彼をメランコリアに沈ましめたと云ふことである。すると王城を忍び出た後、ほつと一息ついたものは實際將來の釋迦無二佛だつたか、それとも彼の妻の耶輸陀羅だつたか、容易に斷定は出來ないかも知れない。

又

悉達多は六年の苦行の後、菩提樹下に正覺に達した。彼の成道の傳說は如何に物質の精神を支配するかを語るものである。彼はまづ水浴してゐる。それから乳糜を食してゐる。最後に難陀婆羅と傳へられる牧牛の少女と話してゐる。

創作

藝術家は何時も意識的に彼の作品を作るのかも知れない。しかし作品そのものを見れば、作品の美醜の一半は藝術家の意識を超越した神秘の世界に存してゐる。一半？　或は大半と云つても好い。

我我は妙に問ふに落ちず、語るに落ちるものである。我我の魂はおのづから作品に露るることを免れない。一刀一拜した古人の用意はこの無意識の境に對する畏怖を語つてはゐないであらうか？

創作は常に冒險である。所詮は人力を盡した後、天命に委せるより仕方はない。

少時學語苦難圓　唯道工夫半未全
到老始知非力取　三分人事七分天

趙甌北の「論詩」の七絶はこの間の消息を傳へたものであらう。藝術は妙に底の知れない凄みを帶びてゐるものである。我我も金を欲しがらなければ、又名聞を好まなければ、最後に殆ど病的な創作熱に苦しまなければ、この無意味な藝術などと格鬪する勇氣は起らなかつたかも知れない。

（「侏儒の言葉」より）

玄鶴山房

一

……それは小ぢんまりと出來上つた、奧床しい門構への家だつた。尤もこの界隈にはかう云ふ家も珍しくはなかつた。が、「玄鶴山房」の額や塀越しに見える庭木などはどの家よりも數寄を凝らしてゐた。

この家の主人、堀越玄鶴は畫家としても多少は知られてゐた。しかし資産を作つたのはゴム印の特許を受けた爲だつた。或はゴム印の特許を受けてから地所の賣買をした爲だつた。現に彼が持つてゐた郊外の或地面などは生姜さへ碌に出來ないらしかつた。けれども今はもう赤瓦の家や青瓦の家の立ち並んだ所謂「文化村」に變つてゐた。……

しかし「玄鶴山房」は兎に角小ぢんまりと出來上つた、奧床しい門構への家だつた。殊に近頃は見越しの松に雪よけの繩がかかつたり、玄關の前に敷いた枯れ松葉に藪柑子の實が赤らんだり、一層風流に見えるのだつた。のみならずこの家のある横町も殆ど人通りと云ふものはなかつた。豆腐屋さへそこを通る時には荷を大通りへおろしたなり、喇叭を吹いて通るだけだつた。

「玄鶴山房――玄鶴と云ふのは何だらう？」

たまたまこの家の前を通りかかつた、髪の毛の長い畫學生は細長い繪の具箱を小脇にしたまま、同じ金鈕の制服を著たもう一人の畫學生にかう言つたりした。

「何だかな、まさか嚴格と云ふ洒落でもあるまい。」

彼等は二人とも笑ひながら、氣輕にこの家の前を通つて行つた。そのあとには唯凍て切つた道に彼等のどちらかが捨てて行つた「ゴルデン・バット」の吸ひ殼が一本、かすかに青い一すぢの煙を細ぼそと立ててゐるばかりだつた。……

二

重吉は玄鶴の婿になる前から或銀行へ勤めてゐた。從つて家に歸つて來るのはいつも電燈のともる頃だつた。彼はこの數日以來、門の内へはひるが早いか、忽ち妙な臭氣を感じた。それは老人には珍しい肺結核の床に就いてゐる玄鶴の息の匂だつた。が、勿論家の外にはそんな匂の出る筈はなかつた。冬の外套の腋の下に折鞄を抱へた重吉は玄關前の踏み石を歩きながら、かういふ彼の神經を怪まない譯には行かなかつた。

玄鶴は「離れ」に床をとり、横になつてゐない時には夜著の山によりかかつてゐた。重吉は外套や帽子をとると、必ずこの「離れ」へ顏を出し、「唯今」とか「けふは如何ですか」とか言葉をかけるのを常としてゐた。しかし「離れ」の閾の内へは滅多に足も入れたことはなかつた。それは舅の肺結核に感染するのを怖れる爲でもあり、又一つには息の匂を不快に思ふ爲でもあつた。玄鶴は彼の顏を見る度にいつも唯「ああ」とか「お歸り」とか答へた。その聲は又力の無い、聲よりも息に近いものだつた。重吉は舅にかう言はれると、時時彼の不人情に後ろめたい思ひもしない譯ではなかつた。けれども「離れ」へはひることはどうも彼には無氣味だつた。

それから重吉は茶の間の隣にやはり床に就いてゐる姑のお鳥を見舞ふのだつた。お鳥は玄鶴の寢こまない前から、――七八年前から腰拔けになり、便所へも通へない體になつてゐた。

「これは兄が旦那様に差し上げてくれと申しましたから。」

お芳は愈気後れのしたやうに古い新聞紙の包みを一つ、茶の間へ膝を入れる前にそつと台所の隅へ出した。折から洗ひものをしてゐたお松はせつせと手を動かしながら、水水しい銀杏返しに結つたお芳を時時尻目に覗つたりしてゐた。が、この新聞紙の包みを見ると、更に悪意のある表情をした。それは又実際文化竈や華奢な皿小鉢と調和しない、悪臭を放つてゐるのに違ひなかつた。お芳はお松を見なかつたものの、少くともお鈴の顔色に妙なけはひを感じたと見え、「これは、あの、大蒜でございます」と説明した。それから指を噛んでゐた子供に「さあ、坊ちやん、お時宜なさい」と声をかけた。男の子は勿論玄鶴がお芳に生ませた文太郎だつた。その子供をお芳が「坊ちやん」と呼ぶのはお鈴には如何にも気の毒だつた。けれども彼女の常識はすぐにそれもかう云ふ女には仕かたがないことと思ひ返した。お鈴はさりげない顔をしたまま、茶の間の隅に坐つた親子に有り合せの菓子や茶などをすすめ、玄鶴の容態を話したり、文太郎の機嫌をとつたりし出した。……

玄鶴はお芳を囲ひ出した後、省線電車の乗り換へも苦にせず、一週間に一二度づつは必ず妾宅へ通つて行つた。お鈴はかう云ふ父の気もちに始めのうちは嫌悪を感じてゐた。「ちつとはお母さんの手前も考へれば善いのに。」——そんなことも度たび考へたりした。尤もお鳥は何ごとも諦め切つてゐるらしかつた。しかしお鈴はそれだけ一層母を気の毒に思ひ、父が妾宅へ出かけた後でも母には「けふは詩の会ですつて」などと白白しい譃をついたりしてゐた。その譃が役に立たないことは彼女自身も知らないのではなかつた。が、時時母の顔に冷笑に近い表情を見ると、譃をついたことを後悔する、——と云ふよりも寧ろ彼女の心も汲み分けてくれない腰ぬけの母に何か情無さを感じ勝ちだつた。

お鈴は父を送り出した後、一家のことを考へる為にミシンの手をやめるのも度たびだつた。玄鶴はお芳を囲ひ出さない前にも彼女には「立派なお父さん」ではなかつた。しかし勿論そんなことは気の優しい彼女にはどちらでも善かつた。唯彼女に気がかりだつたのは父が書画骨董までもずんずん妾宅へ運ぶことだつた。お鈴はお芳が女中だつた時から、彼女を悪人と思つたことはなかつた。いや、寧ろ人並みよりも内気な女と思つてゐた。が、東京の或場末に肴屋をしてゐるお芳の兄は何をたくらんでゐるかわからなかつた。実際又彼は彼女の目には妙に悪賢い男らしかつた。お鈴は時時重吉をつかまへ、彼女の心配を打ち明けたりした。けれども彼は取り合はなかつた。「僕からお父さんに言ふ訣には行かない。」——お鈴は彼にかう言はれて見ると、黙つてしまふより外はなかつた。

「まさかお父さんも羅両峰の画がお芳にわかるとも思つてゐないんでせうが。」

重吉も時たまお鳥にはそれとなしにこんなことも話したりしてゐた。が、お鳥は重吉を見上げ、いつも唯苦笑してかう言ふのだつた。

「あれがお父さんの性分なのさ。何しろお父さんはあたしにさへ「この硯はどうだ？」などと言ふ人なんだからね。」

しかしそんなことも今になつて見れば、誰にも莫迦莫迦しい心配だつた。玄鶴は今年の冬以来、どつと病の重つた為に妾宅通ひも出来なくなると、重吉が持ち出した手切れ話に（尤もその話の条件などは事実上彼よりもお鳥やお鈴が拵へたと言ふのに近いものだつた）存外素直に承諾した。それは又お鈴が恐れてゐたお芳の兄も同じことだつた。お芳は千円の手切れ金を貰ひ、上総の或海岸にある両親の家へ帰つた

上、月々文太郎の養育料として若干の金を送つて貰ふ、――彼はかう云ふ條件に少しも異存を唱へなかつた。のみならず妾宅に置いてあつた玄鶴の秘藏の煎茶道具なども催促されぬうちに運んで來た。お鈴は前に疑つてゐただけに一層彼に好意を感じた。

「就きましては妹のやつが若しお手でも足りませんやうなら、御看病に上りたいと申してをりますんですが。」

お鈴はこの頼みに應じる前に腰ぬけの母に相談した。それは彼女の失策と云つても差し支へないものに違ひなかつた。お鳥は彼女の相談を受けると、あしたにもお芳に文太郎をつれて來て貰ふやうに勸め出した。お鈴は母の氣もちの外にも一家の空氣の擾されるのを惧れ、何度も母に考へ直させようとした。（その癖又一面には父の玄鶴とお芳の兄との中間に立つてゐる關係上、いつか素氣なく先方の頼みを斷れない氣もちにも落ちこんでゐた。）が、お鳥は彼女の言葉をどうしても素直には取り上げなかつた。

「これがまだあたしの耳へはひらない前ならば格別だけれども――お芳の手前も羞しいやね。」

お鈴はやむを得ずお芳の兄にお芳の來ることを承諾した。それも亦或は世間を知らない彼女の失策だつたかも知れなかつた。現に重吉は銀行から歸り、お鈴にこの話を聞いた時、女のやうに優しい眉の間にちよつと不快らしい表情を示した。「そりや人手が殖えることは難有いにも違ひないがね。……」「お父さんにも一應話して見れば善いのに。お前にも責任のない訣なんだから。」――そんなことも口に出して言つたりした。お鈴はいつになく鬱ぎこんだまま、「さうだつたわねえ」などと返事をしてゐた。しかし玄鶴に相談することは、――お芳に勿論未練のある瀕死の父に相談することは彼女には今になつて見ても出來ない相談に違ひなかつた。

……お鈴はお芳親子の相手をしながら、かう云ふ曲折を思ひ出したりした。お芳は長火鉢に手もかざさず、途絶え勝ちに彼女の兄のことや文太郎のことを話してゐた。彼女の言葉は四五年前のやうに「それは」を「そりや」と發音する田舍訛りを改めなかつた。お鈴にはこの田舍訛りにいつか彼女の心もちも或氣安さを持ち出したのを感じた。同時に又襖一重向うに咳一つしずにゐる母のお鳥に何か漠然とした不安も感じた。

「ぢや一週間位はゐてくれられるの？」

「はい、こちら樣さへお差支へございませんければ。」

「でも着換へ位なくつちやいけないでせう？」

「それは兄が晩にでも屆けると申してをりましたから。」

お芳はかう答へながら、退屈らしい文太郎に懷のキヤラメルを出してやつたりした。

「ぢやお父さんにさう言つて來ませう。お父さんもすつかり弱つてしまつてね。障子の方へ向つてゐる耳だけ霜燒けが出來たりしてゐるのよ。」

お鈴は長火鉢の前を離れる前に何となしに鐵瓶をかけ直した。

「お母さん。」

お鳥は何か返事をした。それはやつと彼女の聲に目を醒ましたらしい粘り聲だつた。

「お母さん。お芳さんが見えましたよ。」

お鈴はほつとした氣もちになり、お芳の顏を見ないやうに早速長火鉢の前を立ち上つた。それから次の間を通りしなにもう一度「お芳さん」と聲をかけた。お鳥は横になつたまま、夜着の襟に口もとを埋めてゐた。が、彼女を見上げると、目だけに微笑に近いものを浮かべ、「おや、まあ、よく早く」と返事をした。お鈴ははつきりと彼女の背中にお芳の來ることを感じながら、

雪のある庭に向つた廊下をそはそは「離れ」へ急いで行つた。

「離れ」は明るい廊下から突然はひつて來たお鈴の目には實際以上に薄暗かつた。玄鶴は丁度起き直つたまま、甲野に新聞を讀ませてゐた。が、お鈴の顏を見ると、いきなり「お芳か？」と聲をかけた。それは妙に切迫した、詰問に近い嗄れ聲だつた。お鈴は襖側に佇んだなり、反射的に「ええ」と返事をした。それから、――誰も口を利かなかつた。

「すぐにここへよこしますから。」

「うん。……お芳一人かい？」

「いいえ。……」

玄鶴は默つて頷いてゐた。

「ぢや甲野さん、ちよつとこちらへ。」

お鈴は甲野よりも一足先に小走りに廊下を急いで行つた。丁度雪の殘つた棕櫚の葉の上には鶺鴒が一羽尾を振つてゐた。しかし彼女はそんなことよりも病人臭い「離れ」の中から何か氣味の惡いものがついて來るやうに感じてならなかつた。

四

お芳が泊りこむやうになつてから、一家の空氣は目に見えて險惡になるばかりだつた。それはまづ武夫が文太郎をいぢめることから始まつてゐた。文太郎は父の玄鶴よりも母のお芳に似た子供だつた。しかも氣の弱い所まで母のお芳に似た子供だつた。お鈴も勿論かう云ふ子供に同情しない訣ではないらしかつた。が時時は文太郎を意氣地なしと思ふこともあるらしかつた。

看護婦の甲野は職業がら、冷やかにこのありふれた家庭的悲劇を眺めてゐた、――と云ふよりも寧ろ享樂してゐた。彼女の過去は暗いものだつた。彼女は病家の主人だの病院の醫者だのとの關係上、何度一塊の青酸加里を嚥まうとしたことだか知れなかつた。この過去はいつか彼女の心に他人の苦痛を享樂する病的な興味を植ゑつけてゐた。彼女は堀越家へはひつて來た時、腰ぬけのお鳥が便をする度に手を洗はないのを發見した。「この家のお嫁さんは氣が利いてゐる。あたしたちにも氣づかないやうに水を持つて行つてやるやうだから。」――そんなことも一時は疑深い彼女の心に影を落した。が、四五日ゐるうちにそれは全然お孃樣育ちのお鈴の手落ちだつたのを發見した。彼女はこの發見に何か滿足に近いものを感じ、お鳥の便をする度に洗面器の水を運んでやつた。

「甲野さん、あなたのおかげさまで人間並みに手が洗へます。」

お鳥は手を合せて涙をこぼした。甲野はお鳥の喜びには少しも心を動かさなかつた。しかしそれ以來三度に一度は水を持つて行かなければならぬお鈴を見ることは愉快だつた。從つてかう云ふ彼女には子供たちの喧嘩も不快ではなかつた。彼女は玄鶴にはお芳親子に同情のあるらしい素振りを示した。同時に又お鳥にはお芳親子に惡意のあるらしい素振りを示した。それはたとひ徐ろにもせよ、確實に效果を與へるものだつた。

お芳が泊つてから一週間ほどの後、武夫は又文太郎と喧嘩をした。喧嘩は唯豚の尻つ尾は柿の蔕に似てゐるとか似てゐないとか云ふことから始まつてゐた。武夫は彼の勉強部屋の隅に、――玄關の隣の四疊半の隅に華奢な文太郎を押しつけた上、さんざん打つたり蹴つたりした。そこへ丁度來合せたお芳は泣き聲も出ない文太郎を抱き上げ、かう武夫をたしなめにかかつた。

「坊ちやん、弱いものいぢめをなすつてはいけません。」

それは内氣な彼女には珍らしい棘のある言葉

だつた。武夫はお芳の親子に飽き、今度は彼自身泣きながら、お鈴のゐる茶の間へ逃げこもつた。するとお鈴もかつとしたとみえ、手ミシンの仕事をやりかけたまま、お芳親子のゐる所へ無理に武夫を引きずつて行つた。

「お前が我儘なんです。さあ、お芳さんにおあやまりなさい、ちやんと手をついておあやまりなさい。」

お芳はかう云ふお鈴の前に文太郎と一しよに涙を流し、平あやまりにあやまる外はなかつた。その又仲裁役を勤めるものは必ず看護婦の甲野だつた。甲野は顏を赤めたお鈴を一生懸命に押し戻しながら、いつももう一人の人間の、――ぢつとこの騷ぎを聞いてゐる玄鶴の心もちを想像し、内心には冷笑を浮かべてゐた。が、勿論そんな素ぶりは決して顏色にも見せたことはなかつた。

けれども一家を不安にしたものは必しも子供の喧嘩ばかりではなかつた。お芳は又いつの間にか何ごともあきらめ切つたらしいお鳥の嫉妬を煽つてゐた。尤もお鳥はお芳自身には一度も怨みなどを言つたことはなかつた。（これは又五六年前、お芳がまだ女中部屋に寢起きしてゐた頃も同じだつた。）が、全然關係のない重吉に何かと當り勝ちだつた。重吉は勿論取り合はなかつた。お鈴はそれを氣の毒に思ひ、時々母の代りに詫びたりした。しかし彼は苦笑したぎり、「お前までヒステリーになつては困る」と話を反らせるのを常としてゐた。

甲野はお鳥の嫉妬にもやはり興味を感じてゐた。お鳥の嫉妬それ自身は勿論、彼女が重吉に當る氣もちも甲野にははつきりとわかつてゐた。のみならず彼女はいつの間にか彼女自身も重吉夫婦に嫉妬に近いものを感じてゐた。お鈴は彼女には「お孃樣」だつた。重吉も――重吉は兎に角世間竝みに出來上つた男に違ひなかつた。が、彼女の輕蔑する一匹の雄にも違ひなかつた。かう云ふ彼等の幸福は彼女には殆ど不正だつた。彼女はこの不正を矯める爲に（！）重吉に馴れ馴れしい素振りを示した。これは或は重吉には何ともないものかも知れなかつた。けれどもお鳥を苛立たせるには絶好の機會を與へるものだつた。お鳥は膝頭も露はにしたまま、「重吉、お前はあたしの娘では――腰ぬけの娘では不足なのかい？」と毒々しい口をきいたりした。

しかしお鈴だけはその爲に重吉を疑つたりはしないらしかつた。いや、實際甲野にも氣の毒に思つてゐるらしかつた。甲野はそこに不滿を持つたばかりか、今更のやうに人の善いお鈴を輕蔑せずにはゐられなかつた。が、いつか重吉が彼女を避け出したのは愉快だつた。のみならず彼女を避けてゐるうちに反つて彼女に男らしい好奇心を持ち出したのは愉快だつた。彼は前には甲野がゐる時でも、臺所の側の風呂へはひる爲に裸になることをかまはなかつた。けれども近頃ではそんな姿を一度も甲野に見せないやうになつた。それは羽根を拔いた雄鷄に近い彼の體を恥ぢてゐる爲に違ひなかつた。甲野はかう云ふ彼を見ながら、（彼の顏も亦雀斑だらけだつた。）一體彼はお鈴以外の誰に惚れられるつもりだらうなどと私かに彼を嘲つたりしてゐた。

或霜曇りに曇つた朝、甲野は彼女の部屋になつた玄關の三疊に鏡を据ゑ、いつも彼女が結びつけたオオル・バックに髮を結びかけてゐた。それは丁度愈お芳が田舍へ歸らうと言ふ前日だつた。お芳がこの家を去ることは重吉夫婦には嬉しいらしかつた。が、反つてお鳥には一層苛立たしさを與へるらしかつた。甲野は髮を結びながら、甲高いお鳥の聲を聞き、いつか彼女の友だちが話した或女のことを思ひ出した。彼女はパリに住んでゐるうちにだんだん烈しい懷郷病に落ちこみ、夫の友だちが歸朝するのを

幸ひ、一しよに船へ乗りこむことにした。長い航海も彼女には存外苦痛ではないらしかつた。しかし彼女は紀州沖へかかると、急になぜか興奮しはじめ、とうとう海へ身を投げてしまつた。日本へ近づけば近づくほど、懐郷病も逆に昂ぶつて来る、――甲野は静かに油つ手を拭き、腰ぬけのお鳥の嫉妬は勿論、彼女自身の嫉妬にもやはりかう云ふ神秘な力が働いてゐることを考へたりしてゐた。

「まあ、お母さん、どうしたんです？　こんな所まで這ひ出して来て。お母さんつたら、――甲野さん、ちよつと来て下さい。」

お鈴の声は「離れ」に近い縁側から響いて来るらしかつた。甲野はこの声を聞いた時、澄み渡つた鏡に向つたまま、始めてにやりと冷笑を洩らした。それからさも驚いたやうに「はい唯今」と返事をした。

五

玄鶴はだんだん衰弱して行つた。彼の永年の病苦は勿論、彼の背中から腰へかけた床ずれの痛みも烈しかつた。彼は時時唸り声を挙げ、僅かに苦しみを紛らせてゐた。しかし彼を悩ませたものは必しも肉体的苦痛ばかりではなかつた。彼はお芳の泊つてゐる間は多少の慰みを受けた代りにお鳥の嫉妬や子供たちの喧嘩にしつきりない苦しみを感じてゐた。けれどもそれはまだ善かつた。玄鶴はお芳の去つた後は恐しい孤独を感じた上、長い彼の一生と向ひ合はない訣には行かなかつた。

玄鶴の一生はかう云ふ彼には如何にも浅ましい一生だつた。成程ゴム印の特許を受けた当座は比較的彼の一生でも明るい時代には違ひなかつた。しかしそこにも儕輩の嫉妬や彼の利益を失ふまいとする彼自身の焦燥の念は絶えず彼を苦しめてゐた。ましてお芳を囲ひ出した後は、――彼は家庭のいざこざの外にも彼等の知らない金の工面にいつも重荷を背負ひつづけだつた。しかも更に浅ましいことには年の若いお芳に惹かれてゐたものの、少くともこの一二年は何度内心にお芳親子を死んでしまへと思つたか知れなかつた。

「浅ましい？――しかしそれも考へて見れば、格別わしだけに限つたことではない。」

彼は夜などはかう考へ、彼の親戚や知人のことを一一細かに思ひ出したりした。彼の婿の父親は唯「憲政を擁護する為に」彼よりも腕の利かない敵を何人も社会的に殺してゐた。それから彼に一番親しい或年輩の骨董屋は先妻の娘に通じてゐた。それから或弁護士は供託金を費消してゐた。それから或篆刻家は、――しかし彼等の犯した罪は不思議にも彼の苦しみに何の変化も与へなかつた。のみならず逆に生そのものにも暗い影を拡げるばかりだつた。

「何、この苦しみも長いことはない。お目出度くなつてしまひさへすれば……」

これは玄鶴にも残つてゐたたつた一つの慰めだつた。彼は心身に食ひこんで来るいろいろの苦しみを紛らす為に楽しい記憶を思ひ起さうとした。けれども彼の一生は前にも言つたやうに浅ましかつた。若しそこに少しでも明るい一面があるとすれば、それは唯何も知らない幼年時代の記憶だけだつた。彼は度たび夢うつつの間に彼の両親の住んでゐた信州の或山峡の村を、――殊に石を置いた板葺き屋根や蚕臭い桑ボヤを思ひ出した。が、その記憶もつづかなかつた。彼は時時唸り声の間に観音経を唱へて見たり、昔のはやり唄をうたつて見たりした。しかも「妙音観世音、梵音海潮音、勝彼世間音」を唱へた後、「かつぽれ、かつぽれ」をうたふことは滑稽にも彼には勿体ない気がした。

「寝るが極楽。寝るが極楽……」

玄鶴は何も彼も忘れる爲に唯ぐつすり眠りたかつた。實際又甲野は彼の爲に催眠薬を與へる外にもヘロインなどを注射してゐた。けれども彼には眠りさへいつも安らかには限らなかつた。彼は時時夢の中にお芳や文太郎に出會つたりした。それは彼には、——夢の中の彼には明るい心もちのするものだつた。（彼は或夜の夢の中にはまだ新しい花札の「櫻の二十」と話してゐた。しかもその又「櫻の二十」は四五年前のお芳の顔をしてゐた。）しかしそれだけに目の醒めた後は一層彼を見じめにした。玄鶴はいつか眠ることにも恐怖に近い不安を感ずるやうになつた。

大晦日もそろそろ近づいた或午後、玄鶴は仰向けに横たはつたなり、枕もとの甲野へ聲をかけた。

「甲野さん、わしはな、久しく褌をしめたことがないから、晒し木綿を六尺買はせて下さい。」

晒し木綿を手に入れることはわざわざ近所の呉服屋へお松を買ひにやるまでもなかつた。

「しめるのはわしが自分でしめます。ここへ疊んで置いて行つて下さい。」

玄鶴はこの褌を便りに、——この褌に縊れ死ぬことを便りにやつと短い半日を暮した。しかし床の上に起き直ることさへ人手を借りなければならぬ彼には容易にその機會も得られなかつた。のみならず死はいざとなつて見ると、玄鶴にもやはり恐しかつた。彼は薄暗い電燈の光に黄檗の一行ものを眺めたまま、未だに生を貪らずにはゐられぬ彼自身を嘲つたりした。

「甲野さん、ちよつと起して下さい。」

それはもう夜の十時頃だつた。

「わしはな、これからひと眠りします。あなたも御遠慮なくお休みなすつて下さい。」

甲野は妙に玄鶴を見つめ、かう素つ氣ない返事をした。

「いえ、わたくしは起きてをります。これがわたくしの勤めでございますから。」

玄鶴は彼の計畫も甲野の爲に看破られたのを感じた。が、ちよつと頷いたぎり、何も言はずに狸寢入りをした。甲野は彼の枕もとに婦人雜誌の新年號をひろげ、何か讀み耽つてゐるらしかつた。玄鶴はやはり蒲團の側の褌のことを考へながら、薄目に甲野を見守つてゐた。すると——急に可笑しさを感じた。

「甲野さん。」

甲野も玄鶴の顔を見た時はさすがにぎよつとしたらしかつた。玄鶴は夜著によりかかつたまま、いつかとめどなしに笑つてゐた。

「なんでございます？」

「いや、何でもない。何にも可笑しいことはありません。——」

玄鶴はまだ笑ひながら、細い右手を振つて見せたりした。

「今度は……なぜかかう可笑しうなつてな。……今度はどうか横にして下さい。」

一時間ばかりたつた後、玄鶴はいつか眠つてゐた。その晩は夢も恐しかつた。彼は樹木の茂つた中に立ち、腰の高い障子の隙から茶室めいた部屋を覗いてゐた。そこには又まる裸の子供が一人、こちらへ顔を向けて横になつてゐた。それは子供とは云ふものの、老人のやうに皺くちやだつた。玄鶴は聲を擧げようとし、寢汗だらけになつて目を醒ました。……

「離れ」には誰も來てゐなかつた。のみならずまだ薄暗かつた。まだ？——しかし玄鶴は置き時計を見、彼是正午に近いことを知つた。彼の心は一瞬間、ほつとしただけに明るかつた。けれども又いつものやうに忽ち陰鬱になつて行つた。彼は仰向けになつたまま、彼自身の呼吸を數へてゐた。それは丁度何ものかに「今だぞ」とせかれてゐる氣もちだつた。玄鶴はそつと褌を

を引き寄せ、彼の頭に巻きつけると、両手にぐつと引つぱるやうにした。

そこへ丁度顔を出したのはまるまると著膨れた武夫だつた。

「やあ、お爺さんがあんなことをしてゐらあ。」

武夫はかう囃しながら、一散に茶の間へ走つて行つた。

六

一週間ばかりたつた後、玄鶴は家族たちに圍まれたまま、肺結核の爲に絶命した。彼の告別式は盛大だつた。（唯、腰ぬけのお鳥だけはその式にも出る訣には行かなかつた。）彼の家に集まつた人人は重吉夫婦に悔みを述べた上、白い綸子に蔽はれた彼の柩の前に燒香した。が、門を出る時には大抵彼のことを忘れてゐた。尤も彼の故朋輩だけは例外だつたのに違ひなかつた。「あの爺さんも本望だつたらう。若い妾も持つてゐれば、小金もためてゐたんだから。」――彼等は誰も同じやうにこんなことばかり話し合つてゐた。

彼の柩をのせた葬用馬車は一輛の馬車を從へたまま、日の光も落ちない師走の町を或火葬場へ走つて行つた。薄汚い後の馬車に乘つてゐるのは重吉や彼の從弟だつた。彼の從弟の大學生は馬車の動搖を氣にしながら、重吉と餘り話もせずに小型の本に讀み耽つてゐた。それはLiebknecht の追憶錄の英譯本だつた。が、重吉は通夜疲れの爲にうとうと居睡りをしてゐなければ、窓の外の新開町を眺め、「この邊もすつかり變つたな」などと氣のない獨り語を洩らしてゐた。

二輛の馬車は霜どけの道をやつと火葬場へ辿り著いた。しかし豫め電話をかけて打ち合せて置いたのにも關らず、一等の竈は滿員になり、二等だけ殘つてゐると云ふことだつた。それは彼等にはどちらでも善かつた。が、重吉は舅よりも寧ろお鈴の思惑を考へ、半月形の窓越しに熱心に事務員と交渉した。「實は手遲れになつた病人だしするから、せめて火葬にする時だけは一等にしたいと思ふんですがね。」――そんな譃もついて見たりした。それは彼の豫期したよりも效果の多い譃らしかつた。

「ではかうしませう。一等はもう滿員ですから、特別に一等の料金で特等で燒いて上げることにしませう。」

重吉は幾分か間の惡さを感じ、何度も事務員に禮を言つた。事務員は眞鍮の眼鏡をかけた好人物らしい老人だつた。

「いえ、何、お禮には及びません。」

彼等は竈に封印した後、薄汚い馬車に乘つて火葬場の門を出ようとした。すると意外にもお芳が一人、煉瓦塀の前に佇んだまま、彼等の馬車に目禮してゐた。重吉はちよつと狼狽し、彼の帽を上げようとした。しかし彼等を乘せた馬車はその時にはもう傾きながら、ポプラアの枯れた道を走つてゐた。

「あれですね？」

「うん、……俺たちの來た時もあすこにゐたかしら。」

「さあ、乞食ばかりゐたやうに思ひますがね。……あの女はこの先どうするでせう？」

重吉は一本の敷島に火をつけ、出來るだけ冷淡に返事をした。

「さあ、どう云ふことになるか。……」

彼の從弟は默つてゐた。が、彼の想像は上總の或海岸の漁師町を描いてゐた。それからその漁師町に住まなければならぬお芳親子も。――彼は急に險しい顏をし、いつかさしはじめた日の光の中にもう一度リイプクネヒトを讀みはじめた。

（昭和二年一月作）

河童

どうか Kappa と発音して下さい。

序

これは或精神病院の患者、――第二十三号が誰にでもしやべる話である。彼はもう三十を越してゐるであらう。が、一見した所は如何にも若々しい狂人である。彼の半生の経験は、――いや、そんなことはどうでも善い。彼は唯ぢつと両膝をかかへ、時々窓の外へ目をやりながら、（鉄格子をはめた窓の外には枯れ葉さへ見えない樫の木が一本、雪曇りの空に枝を張つてゐた。）院長のS博士や僕を相手に長々とこの話をしやべりつづけた。尤も身ぶりはしなかつた訣ではない。彼はたとへば「驚いた」と言ふ時には急に顔をのけ反らせたりした。……

僕はかう云ふ彼の話を可なり正確に写したつもりである。若し又誰か僕の筆記に飽き足りない人があるとすれば、東京市外××村のS精神病院を尋ねて見るが善い。年よりも若い第二十三号はまづ丁寧に頭を下げ、蒲団のない椅子を指さすであらう。それから憂鬱な微笑を浮かべ、静かにこの話を繰り返すであらう。最後に、――僕はこの話を終つた時の彼の顔色を覚えてゐる。彼は最後に身を起すが早いか、忽ち拳骨をふりまはしながら、誰にでもかう怒鳴りつけるであらう。――「出て行け！　この悪党めが！　貴様も莫迦な、嫉妬深い、猥褻な、図々しい、うぬ惚れきつた、残酷な、虫の善い動物なんだらう。出て行け！　この悪党めが！」――

一

三年前の夏のことです。僕は人並みにリュック・サックを背負ひ、あの上高地の温泉宿から穂高山へ登らうとしました。穂高山へ登るのには御承知の通り梓川を溯る外はありません。僕は前に穂高山は勿論、槍ケ岳にも登つてゐましたから、朝霧の下りた梓川の谷を案内者もつれずに登つて行きました。朝霧の下りた梓川の谷を――しかしその霧はいつまでたつても晴れる景色は見えません。のみならず反つて深くなるのです。僕は一時間ばかり歩いた後、一度は上高地の温泉宿へ引き返すことにしようかと思ひました。けれども上高地へ引き返すにしても、兎に角霧の晴れるのを待つた上にしなければなりません。と言つて霧は一刻毎にずんずん深くなるばかりなのです。「ええ、一そ登つてしまへ。」――僕はかう考へましたから、梓川の谷を離れないやうに熊笹の中を分けて行きました。

しかし僕の目を遮るものはやはり深い霧ばかりです。尤も時々霧の中から太い毛生欅や樅の枝が青あをと葉を垂らしたのも見えなかつた訣ではありません。それから又放牧の馬や牛も突然僕の前へ顔を出しました。けれどもそれ等は見えたと思ふと、忽ち又濛々とした霧の中に隠れてしまふのです。そのうちに足もくたびれて来れば、腹もだんだん減りはじめる、――おまけに霧に濡れ透つた登山服や毛布なども並み大抵の重さではありません。僕はとうとう我を折りましたから、岩にせかれてゐる水の音を便りに梓川の谷へ下りることにしました。

僕は水ぎはの岩に腰かけ、とりあへず食事にとりかかりました。コオンド・ビイフの罐を切

つたり、枯れ枝を集めて火をつけたり、――そんなことをしてゐるうちに彼是十分はたつたでせう。その間にどこまでも意地の惡い霧はいつかほのぼのと晴れかかりました。僕はパンを嚙りながら、ちよつと腕時計を覗いて見ました。時刻はもう一時二十分過ぎです。が、それよりも驚いたのは何か氣味の惡い顏が一つ、圓い腕時計の硝子の上へちらりと影を落したことです。僕は驚いてふり返りました。すると、――僕が河童と云ふものを見たのは實にこの時が始めてだつたのです。僕の後ろにある岩の上には畫にある通りの河童が一匹、片手は白樺の幹を抱へ、片手は目の上にかざしたなり、珍らしさうに僕を見おろしてゐました。

僕は呆つ氣にとられたまま、暫くは身動きもしずにゐました。河童もやはり驚いたと見え、目の上の手さへ動かしません。そのうちに僕は飛び立つが早いか、岩の上の河童へ躍りかかりました。同時に又河童も逃げ出しました。いや、恐らくは逃げ出したのでせう。實はひらりと身を反したと思ふと、忽ちどこかへ消えてしまつたのです。僕は愈驚きながら、熊笹の中を見まはしました。すると河童は逃げ腰をしたなり、二三メエトル隔つた向うに僕を振り返つて見てゐるのです。それは不思議でも何でもありません。しかし僕に意外だつたのは河童の體の色のことです。岩の上に僕を見てゐた河童は一面に灰色を帶びてゐました。けれども今は體中すつかり綠いろに變つてゐるのです。僕は「畜生！」とおほ聲を擧げ、もう一度河童へ飛びかかりました。河童が逃げ出したのは勿論です。それから僕は三十分ばかり、熊笹を突きぬけ、岩を飛び越え、遮二無二河童を追ひつづけました。

河童も亦足の早いことは決して猿などに劣りません。僕は夢中になつて追ひかける間に何度もその姿を見失はうとしました。のみならず足を辷らして轉がつたことも度たびです。が、大きい橡の木が一本、太ぶとと枝を張つた下へ來ると、幸ひにも放牧の牛が一匹、河童の往く先へ立ち塞がりました。しかもそれは角の太い、目を血走らせた牡牛なのです。河童はこの牡牛を見ると、何か悲鳴を擧げながら、一きは高い熊笹の中へもんどりを打つやうに飛び込みました。僕は、――僕も「しめた」と思ひましたから、いきなりそのあとへ追ひすがりました。するとそこには僕の知らない穴でもあいてゐたのでせう。僕は滑かな河童の背中にやつと指先がさはつたと思ふと、忽ち深い闇の中へまつ逆さまに轉げ落ちました。が、我我人間の心はかう云ふ危機一髮の際にも途方もないことを考へるものです。僕は「あつ」と思ふ拍子にあの上高地の溫泉宿の側に「河童橋」と云ふ橋があるのを思ひ出しました。それから、――それから先のことは覺えてゐません。僕は唯目の前に稻妻に似たものを感じたぎり、いつの間にか正氣を失つてゐました。

二

そのうちにやつと氣がついて見ると、僕は仰向けに倒れたまま、大勢の河童にとり圍まれてゐました。のみならず太い嘴の上に鼻眼鏡をかけた河童が一匹、僕の側へ跪きながら、僕の胸へ聽診器を當ててゐました。その河童は僕が目をあいたのを見ると、僕に「靜かに」と云ふ手眞似をし、それから誰か後ろにゐる河童へ Quax quax と聲をかけました。するとどこからか河童が二匹、擔架を持つて歩いて來ました。僕はこの擔架にのせられたまま、大勢の河童の群がつた中を靜かに何町か進んで行きました。僕の兩側に竝んでゐる町は少しも銀座通りと違ひありません。やはり毛生欅の竝み木のかげ

にいろいろの店が日除けを並べ、その又並み木に挾まれた道を自動車が何臺も走つてゐるのです。

やがて僕を載せた擔架は細い横町を曲つたと思ふと、或家の中へ舁ぎこまれました。それは後に知つた所によれば、あの鼻眼鏡をかけた河童の家、――チャックと云ふ醫者の家だつたのです。チャックは僕を小綺麗なベッドの上へ寢かせました。それから何か透明な水藥を一杯飲ませました。僕はベッドの上に横たはつたなり、チャックのするままになつてゐました。實際又僕の體は碌に身動きも出來ないほど、節節が痛んでゐたのですから。

チャックは一日に二三度は必ず僕を診察に來ました。又三日に一度位は僕の最初に見かけた河童、――バッグと云ふ漁師も尋ねに來ました。河童は我我人間が河童のことを知つてゐるよりも遙かに人間のことを知つてゐます。それは我我人間が河童を捕獲することよりもずつと河童が人間を捕獲することが多い爲でせう。捕獲と云ふのは當らないまでも、我我人間は僕の前にも度度河童の國へ來てゐるのです。のみならず一生河童の國に住んでゐたものも多かつたのです。なぜと言つて御覽なさい。僕等は唯河童ではない、人間であると云ふ特權の爲に働かずに食つてゐられるのです。現にバッグの話によれば、或若い道路工夫などはやはり偶然この國へ來た後、雌の河童を妻に娶り、死ぬまで住んでゐたと云ふことです。尤もその又雌の河童はこの國第一の美人だつた上、夫の道路工夫を護摩化すのにも妙を極めてゐたと云ふことです。

僕は一週間ばかりたつた後、この國の法律の定める所により、特別保護住民としてチャックの隣に住むことになりました。僕の家は小さい割に如何にも瀟洒と出來上つてゐました。勿論この國の文明は我我人間の國の文明――少くとも日本の文明などと餘り大差はありません。往來に面した客間の隅には小さいピアノが一臺あり、それから又壁には額縁へ入れたエッティングなども懸つてゐました。唯肝腎の家をはじめ、テエブルや椅子の寸法も河童の身長に合はせてありますから、子供の部屋に入れられたやうにそれだけは不便に思ひました。

僕はいつも日暮れがたになると、この部屋にチャックやバッグを迎へ、河童の言葉を習ひました。いや、彼等ばかりではありません。特別保護住民だつた僕に誰も皆好奇心を持つてゐましたから、毎日血壓を調べて貰ひに、わざわざチャックを呼び寄せるゲエルと云ふ硝子會社の社長なども顏を出したものです。しかし最初の半月ほどの間に一番僕と親しくしたのはやはりあのバッグと云ふ漁夫だつたのです。

或生暖かい日の暮です。僕はこの部屋のテエブルを中に漁夫のバッグと向ひ合つてゐました。するとバッグはどう思つたか、急に默つてしまつた上、大きい目を一層大きくしてぢつと僕を見つめました。僕は勿論妙に思ひましたから、「Quax, Bag, quo quel quan?」と言ひました。これは日本語に飜譯すれば、「おい、バッグ、どうしたんだ」と云ふことです。が、バッグは返事をしません。のみならずいきなり立ち上ると、べろりと舌を出したなり、丁度蛙の跳ねるやうに飛びかかる氣色さへ示しました。僕は愈無氣味になり、そつと椅子から立ち上ると、一足飛びに戸口へ飛び出さうとしました。丁度そこへ顏を出したのは幸ひにも醫者のチャックです。

「こら、バッグ、何をしてゐるのだ?」

チャックは鼻眼鏡をかけたまま、から云ふバッグを睨みつけました。するとバッグは恐れ入つたと見え、何度も頭へ手をやりながら、か

う言つてチャックにあやまるのです。

「どうもまことに相すみません。實はこの旦那の氣味惡がるのが面白かつたものですから、つい調子に乘つて惡戲をしたのです。どうか旦那も堪忍して下さい。」

三

僕はこの先を話す前にちよつと河童と云ふものを說明して置かなければなりません。河童は未だに實在するかどうかも疑問になつてゐる動物です。が、それは僕自身が彼等の間に住んでゐた以上、少しも疑ふ餘地はない筈です。では又どう云ふ動物かと云へば、頭に短い毛のあるのは勿論、手足に水搔きのついてゐることも「水虎考略」などに出てゐるのと著しい違ひはありません。身長もざつと一メエトルを越えるか越えぬ位でせう。體重は醫者のチャックによれば、二十ポンドから三十ポンドまで、——稀には五十何ポンド位の大河童もゐると言つてゐました。それから頭のまん中には楕圓形の皿があり、その又皿は年齡により、だんだん固さを加へるやうです。現に年をとつたバッグの皿は若いチャックの皿などとは全然手ざはりも違ふのです。しかし一番不思議なのは河童の皮膚の色のことでせう。河童は我我人間のやうに一定の皮膚の色を持つてゐません。何でもその周圍の色と同じ色に變つてしまふ、——たとへば草の中にゐる時には草のやうに綠色に變り、岩の上にゐる時には岩のやうに灰色に變るのです。これは勿論河童に限らず、カメレオンにもあることです。或は河童は皮膚組織の上に何かカメレオンに近い所を持つてゐるのかも知れません。僕はこの事實を發見した時、西國の河童は綠色であり、東北の河童は赤いと云ふ民俗學上の記錄を思ひ出しました。のみならずバッグを追ひかける時、突然どこへ行つたのか、見えなくなつたことを思ひ出しました。しかも河童は皮膚の下に餘程厚い脂肪を持つてゐると見え、この地下の國の溫度は比較的低いのにも關らず、（平均華氏五十度前後です。）着物と云ふものを知らずにゐるのです。勿論どの河童も眼鏡をかけたり、卷煙草の箱を携へたり、金入れを持つたりはしてゐるでせう。しかし河童はカンガルウのやうに腹に袋を持つてゐますから、それ等のものをしまふ時にも格別不便はしないのです。唯僕に可笑しかつたのは腰のまはりさへ蔽はないことです。僕は或時この習慣をなぜかとバッグに尋ねて見ました。するとバッグはのけぞつたまま、いつまでもげらげら笑つてゐました。おまけに「わたしはお前さんの隱してゐるのが可笑しい。」と返事をしました。

四

僕はだんだん河童の使ふ日常の言葉を覺えて來ました。從つて河童の風俗や習慣ものみこめるやうになつて來ました。その中でも一番不思議だつたのは河童は我我人間の眞面目に思ふことを可笑しがる、同時に我我人間の可笑しがることを眞面目に思ふ——かう云ふとんちんかんな習慣です。たとへば我我人間は正義とか人道とか云ふことを眞面目に思ふ、しかし河童はそんなことを聞くと、腹をかかへて笑ひ出すのです。つまり彼等の滑稽と云ふ觀念は我我の滑稽と云ふ觀念と全然標準を異にしてゐるのでせう。僕は或時醫者のチャックと産兒制限の話をしてゐました。するとチャックは大口をあいて、鼻眼鏡が落ちるほど笑ひ出しました。僕は勿論腹が立ちましたから、何が可笑しいかと詰問しました。何でもチャックの返答は大體かうだつたやうに覺えてゐます。尤も多少細かい所は間違つてゐるかも知れません。何しろまだその頃は僕も河童の使ふ言葉をすつかり理解し

てゐなかつたのですから。

「しかし兩親の都合ばかり考へてゐるのは可笑しいですからね。どうも餘り手前勝手ですからね。」

その代りに我我人間から見れば、實際又河童のお産位、可笑しいものはありません。現に僕は暫くたつてから、バッグの細君のお産をする所をバッグの小屋へ見物に行きました。河童もお産をする時には我我人間と同じことです。やはり醫者や産婆などの助けを借りてお産をするのです。けれどもお産をするとなると、父親は電話でもかけるやうに母親の××××××をつけ、「お前はこの世界へ生れて來るかどうか、よく考へた上で返事をしろ。」と大きな聲で尋ねるのです。バッグもやはり膝をつきながら、何度も繰り返してかう言ひました。それからテエブルの上にあつた消毒用の水藥で嗽ひをしました。すると細君の腹の中の子は多少氣兼でもしてゐると見え、かう小聲に返事をしました。

「僕は生れたくはありません。第一僕のお父さんの遺傳は精神病だけでも大へんです。その上僕は河童的存在を惡いと信じてゐますから。」

バッグはこの返事を聞いた時、てれたやうに頭を掻いてゐました。が、そこにゐ合せた産婆は忽ち細君の××へ太い硝子の管を突きこみ、何か液體を注射しました。すると細君はほつとしたやうに太い息を洩らしました。同時に又今まで大きかつた腹は水素瓦斯を抜いた風船のやうにへたへたと縮んでしまひました。

かう云ふ返事をする位ですから、河童の子供は生れるが早いか、勿論歩いたりしやべつたりするのです。何でもチャックの話では出産後二十六日目に神の有無に就いて講演をした子供もあつたとか云ふことです。尤もその子供は二月目には死んでしまつたと云ふことですが。

お産の話をした次手ですから、僕がこの國へ來た三月目に偶然或街の角で見かけた、大きいポスタアの話をしませう。その大きいポスタアの下には喇叭を吹いてゐる河童だの劍を持つてゐる河童だのが十二三匹描いてありました。それから又上には河童の使ふ、丁度時計のゼンマイに似た螺旋文字が一面に並べてありました。この螺旋文字を飜譯すると、大體かう云ふ意味になるのです。これも或は細かい所は間違つてゐるかも知れません。が、兎に角僕としては僕と一しよに步いてゐた、ラップと云ふ河童の學生が大聲に讀み上げてくれる言葉を一一ノオトにとつて置いたのです。

遺傳的義勇隊を募る!!!
健全なる男女の河童よ!!!
惡遺傳を撲滅する爲に
不健全なる男女の河童と結婚せよ!!!

僕は勿論その時にもそんなことの行はれないことをラップに話して聞かせました。するとラップばかりではない、ポスタアの近所にゐた河童は悉くげらげら笑ひ出しました。

「行はれない？　だつてあなたの話ではあなたがたもやはり我我のやうに行つてゐると思ひますがね。あなたは令息が女中に惚れたり、令孃が運轉手に惚れたりするのは何の爲だと思つてゐるのです？　あれは皆無意識的に惡遺傳を撲滅してゐるのですよ。第一この間あなたの話したあなたがた人間の義勇隊よりも、――一本の鐵道を奪ふ爲に互に殺し合ふ義勇隊ですね、――ああ云ふ義勇隊に比べれば、ずつと僕たちの義勇隊は高尚ではないかと思ひますがね。」

ラップは眞面目にかう言ひながら、しかも太い腹だけは可笑しさうに絶えず浪立たせてゐました。が、僕は笑ふどころか、慌てて或河童を

掴まへようとしました。それは僕の油斷を見すまし、その河童が僕の萬年筆を盗んだことに氣がついたからです。しかし皮膚の滑かな河童は容易に我我には掴まりません。その河童もぬらりと辷り抜けるが早いか一散に逃げ出してしまひました。丁度蚊のやうに痩せた體を倒れるかと思ふ位のめらせながら。

五

僕はこのラップと云ふ河童にバッグにも劣らぬ世話になりました。が、その中でも忘れられないのはトックと云ふ河童に紹介されたことです。トックは河童仲間の詩人です。詩人が髪を長くしてゐることは我我人間と變りません。僕は時時トックの家へ退屈凌ぎに遊びに行きました。トックはいつも狭い部屋に高山植物の鉢植ゑを並べ、詩を書いたり煙草をのんだり、如何にも氣樂さうに暮らしてゐました。その又部屋の隅には雌の河童が一匹、（トックは自由戀愛家ですから、細君と云ふものは持たないのです。）編み物か何かしてゐました。トックは僕の顔を見ると、いつも微笑してから言ふのです。（尤も河童の微笑するのは餘り好いものではありません。少くとも僕は最初のうちは寧ろ無氣味に感じたものです。）

「やあ、よく來たね。さあ、その椅子にかけ給へ。」

トックはよく河童の生活だの河童の藝術だのの話をしました。トックの信ずる所によれば、當り前の河童の生活位、莫迦げてゐるものはありません。親子夫婦兄弟などと云ふのは悉く互に苦しめ合ふことを唯一の樂しみにして暮らしてゐるのです。殊に家族制度と云ふものは莫迦げてゐる以上にも莫迦げてゐるのです。トックは或時窓の外を指さし、「見給へ。あの莫迦げさ加減を！」と吐き出すやうに言ひました。窓の外の往來にはまだ年の若い河童が一匹、兩親らしい河童を始め、七八匹の雌雄の河童を頸のまはりへぶら下げながら、息も絶え絶えに歩いてゐました。しかし僕は年の若い河童の犠牲的精神に感心しましたから、反つてその健氣さを褒め立てました。

「ふん、君はこの國でも市民になる資格を持つてゐる。……時に君は社會主義者かね？」

僕は勿論 qua（これは河童の使ふ言葉では「然り」と云ふ意味を現すのです。）と答へました。

「では百人の凡人の爲に甘んじて一人の天才を犠牲にすることも顧みない筈だ。」

「では君は何主義者だ？　誰かトック君の信條は無政府主義だと言つてゐたが、……」

「僕か？　僕は超人（直譯すれば超河童です。）だ。」

トックは昂然と言ひ放ちました。かう云ふトックは藝術の上にも獨特な考へを持つてゐます。トックの信ずる所によれば、藝術は何ものの支配をも受けない、藝術の爲の藝術である、從つて藝術家たるものは何よりも先に善惡を絶した超人でなければならぬと云ふのです。尤もこれは必しもトック一匹の意見ではありません。トックの仲間の詩人たちは大抵同意見を持つてゐるやうです。現に僕はトックと一しよに度たび超人倶樂部へ遊びに行きました。超人倶樂部に集まつて來るのは詩人、小説家、戯曲家、批評家、畫家、音樂家、彫刻家、藝術上の素人等です。しかしいづれも超人です。彼等は電燈の明るいサロンにいつも快活に話し合つてゐました。のみならず時には得得と彼等の超人ぶりを示し合つてゐました。たとへば或彫刻家などは大きい鬼羊齒の鉢植ゑの間に年の若い河童をつかまへながら、頻に××を弄んでゐました。又或雌の小説家などはテエブル

ンターに立ち上つたなり、アブサントを六十本飲んで見せました。尤もこれは六十本目にテエブルの下へ轉げ落ちるが早いか、忽ち往生してしまひましたが。

僕は或月の好い晩、詩人のトックと肘を組んだまま、超人倶樂部から歸つて來ました。トックはいつになく沈みこんで一ことも口を利かずにゐました。そのうちに僕等は火かげのさした、小さい窓の前を通りかかりました。その又窓の向うには夫婦らしい雌雄の河童が二匹、三匹の子供の河童といつしよに晩餐のテエブルに向つてゐるのです。するとトックはため息をしながら、突然かう僕に話しかけました。

「僕は超人的戀愛家だと思つてゐるがね、ああ云ふ家庭の容子を見ると、やはり羨しさを感じるんだよ。」

「しかしそれはどう考へても、矛盾してゐるとは思はないかね？」

けれどもトックは月明りの下にぢつと腕を組んだまま、あの小さい窓の向うを、――平和な五匹の河童たちの晩餐のテエブルを見守つてゐました。それから暫くしてかう答へました。

「あすこにある玉子燒は何と言つても、戀愛などよりも衞生的だからね。」

六

實際又河童の戀愛は我我人間の戀愛とは餘程趣を異にしてゐます。雌の河童はこれぞと云ふ雄の河童を見つけるが早いか、雄の河童を捉へるのに如何なる手段も顧みません。一番正直な雌の河童は遮二無二雄の河童を追ひかけるのです。現に僕は氣違ひのやうに雄の河童を追ひかけてゐる雌の河童を見かけました。いや、そればかりではありません。若い雌の河童は勿論、その河童の兩親や兄弟まで一しよになつて追ひかけるのです。雄の河童こそみじめです。何しろさんざん逃げまはつた擧句、運好くつかまらずにすんだとしても、二三箇月は床についてしまふのですから。僕は或時僕の家にトックの詩集を讀んでゐました。するとそこへ駈けこんで來たのはあのラップと云ふ學生です。ラップは僕の家へ轉げこむと、床の上へ倒れたなり、息も切れ切れにかう言ふのです。

「大變だ！　とうとう僕は抱きつかれてしまつた！」

僕は咄嗟に詩集を投げ出し、戸口の錠をおろしてしまひました。しかし鍵穴から覗いて見ると、硫黄の粉末を顏に塗つた、脊の低い雌の河童が一匹、まだ戸口にうろついてゐるのです。ラップはその日から何週間か僕の床の上に寝てゐました。のみならずいつかラップの嘴はすつかり腐つて落ちてしまひました。

尤も又時には雌の河童を一生懸命に追ひかける雄の河童もないではありません。しかしそれもほんたうの所は追ひかけずにはゐられないやうに雌の河童が仕向けるのです。僕はやはり氣違ひのやうに雌の河童を追ひかけてゐる雄の河童も見かけました。雌の河童は逃げて行くうちにも、時時わざと立ち止まつて見たり、四つん這ひになつたりして見せるのです。おまけに丁度好い時分になると、さもがつかりしたやうに樂樂とつかまつてしまふのです。僕の見かけた雄の河童は雌の河童を抱いたなり、暫くそこに轉がつてゐました。が、やつと起き上つたのを見ると、失望と云ふか、後悔と云ふか、兎に角何とも形容出來ない、氣の毒な顏をしてゐました。しかしそれはまだ好いのです。これも僕の見かけた中に小さい雄の河童が一匹、雌の河童を追ひかけてゐました。雌の河童は例の通り、誘惑的遁走をしてゐるのです。するとそこへ向うの街から大きい雄の河童が一匹、鼻息を鳴らせて歩いて來ました。雌の河童は何かの拍子に

「ふとこの雌の河童を見ると、大變です！ 助けて下さい！ あの河童はわたしを殺さうとするのです！」と金切り聲を出して叫びました。勿論大きい雌の河童は忽ち小さい河童をつかまへ、往來のまん中へねぢ伏せました。小さい河童は水搔きのある手に二三度空を摑んだなり、とうとう死んでしまひました。けれどももうその時には雌の河童はにやにやしながら、大きい河童の頸つ玉へしつかりしがみついてしまつてゐたのです。

僕の知つてゐた雄の河童は誰も皆言ひ合はせたやうに雌の河童に追ひかけられました。勿論妻子を持つてゐるバツグでもやはり追ひかけられたのです。のみならず二三度はつかまつたのです。唯マツグと云ふ哲學者だけは（これはあのトツクと云ふ詩人の隣にゐる河童です。）一度もつかまつたことはありません。これは一つにはマツグ位、醜い河童も少ない爲でせう。しかし又一つにはマツグだけは餘り往來へ顏を出さずに家にばかりゐる爲です。僕はこのマツグの家へも時時話しに出かけました。マツグはいつも薄暗い部屋に七色の色硝子のランタアンをともし、脚の高い机に向ひながら、厚い本ばかり讀んでゐるのです。僕は或時かういふマツグと河童の戀愛を論じ合ひました。

「なぜ政府は雌の河童が雄の河童を追ひかけるのをもつと嚴重に取り締らないのです？」

「それは一つには官吏の中に雌の河童の少い爲ですよ。雌の河童は雄の河童よりも一層嫉妬心は強いものですからね、雌の河童の官吏さへ殖えれば、きつと今よりも雄の河童は追ひかけられずに暮せるでせう。しかしその效力も知れたものですね。なぜと言つて御覽なさい。官吏同志でも雌の河童は雄の河童を追ひかけますからね。」

「ぢやあなたのやうに暮してゐるのは一番幸福な訣ですね。」

するとマツグは椅子を離れ、僕の兩手を握つたまま、ため息と一しよにかう言ひました。

「あなたは我我河童ではありませんから、おわかりにならないのも尤もです。しかしわたしもどうかすると、あの恐ろしい雌の河童に追ひかけられたい氣も起るのですよ。」

七

僕は又詩人のトツクと度たび音樂會へも出かけました。が、未だに忘れられないのは三度目に聽きに行つた音樂會のことです。尤も會場の容子などは餘り日本と變つてゐません。やはりだんだんせり上つた席に雌雄の河童が三四百匹、いづれもプログラムを手にしながら、一心に耳を澄ませてゐるのです。僕はこの三度目の音樂會の時にはトツクやトツクの雌の河童の外にも哲學者のマツグと一しよになり、一番前の席に坐つてゐました。するとセロの獨奏が終つた後、妙に目の細い河童が一匹、無造作に譜本を抱へたまま、壇の上へ上つて來ました。この河童はプログラムの敎へる通り、名高いクラバツクと云ふ作曲家です。プログラムの敎へる通り、――いや、プログラムを見るまでもありません。クラバツクはトツクが屬してゐる超人俱樂部の會員ですから、僕も亦顏だけは知つてゐるのです。

「Lied――Craback」（この國のプログラムも大抵は獨逸語を竝べてゐました。）

クラバツクは盛んな拍手の中にちよつと我我へ一禮した後、靜にピアノの前へ步み寄りました。それからやはり無造作に自作のリイドを彈きはじめました。クラバツクはトツクの言葉によれば、この國の生んだ音樂家中、前後に比類のない天才ださうです。僕はクラバツクの音樂は勿論、その又餘技の抒情詩にも興味を持つ

てゐましたから、大きい蛇なりのピアノの音に熱心に耳を傾けてゐました。トックやマッグも恍惚としてゐたことは或は僕よりも勝つてゐたでせう。が、あの美しい（少くとも河童たちの話によれば）雌の河童だけはしつかりプログラムを握つたなり、時時さも苛立たしさうに長い舌をべろべろ出してゐました。これはマッグの話によれば、何でも彼是十年前にクラバックを掴まへそこなつたものですから、未だにこの音楽家を目の敵にしてゐるのだとか云ふことです。

クラバックは全身に情熱をこめ、戦ふやうにピアノを弾きつづけました。すると突然会場の中に神鳴りのやうに響渡つたのは「演奏禁止」と云ふ声です。僕はこの声にびつくりし、思はず後をふり返りました。声の主は紛れもない、一番後の席にゐる身の丈抜群の巡査です。巡査は僕がふり向いた時、悠然と腰をおろしたまま、もう一度前よりもおほ声に「演奏禁止」と怒鳴りました。それから、――

それから先は大混乱です。「警官横暴！」「クラバック、弾け！　弾け！」「莫迦！」「畜生！」「ひつこめ！」「負けるな！」――かう云ふ声の湧き上つた中に椅子は倒れる、プログラムは飛ぶ、おまけに誰が投げるのか、サイダアの空罎や石ころや噛りかけの胡瓜さへ降つて来るのです。僕は呆つ気にとられましたから、トックにその理由を尋ねようとしました。が、トックも興奮したと見え、椅子の上に突つ立ちながら、「クラバック、弾け！　弾け！」と喚きつづけてゐます。のみならずトックの雌の河童もいつの間に敵意を忘れたのか、「警官横暴」と叫んでゐることは少しもトックに変りません。僕はやむを得ずマッグに向ひ、「どうしたのです？」と尋ねて見ました。

「これですか？　これはこの国ではよくあることですよ。元来画だの文芸だのは……」

マッグは何か飛んで来る度にちよつと頸を縮めながら、不相変静かに説明しました。

「元来画だの文芸だのは誰の目にも何を表はしてゐるかは兎に角ちやんとわかる筈ですから、この国では決して発売禁止や展覧禁止は行はれません。その代りにあるのが演奏禁止です。何しろ音楽と云ふものだけはどんなに風俗を壊乱する曲でも、耳のない河童にはわかりませんからね。」

「しかしあの巡査は耳があるのですか？」

「さあ、それは疑問ですね。多分今の旋律を聞いてゐるうちに細君と一しよに寝てゐる時の心臓の鼓動でも思ひ出したのでせう。」

かう云ふ間にも大騒ぎは愈盛んになるばかりです。クラバックはピアノに向つたまま、傲然と僕等をふり返つてゐました。が、いくら傲然としてゐても、いろいろのものの飛んで来るのはよけない訣に行きません。従つてつまり二三秒置きに折角の態度も変つた訣です。しかし兎に角大体としては大音楽家の威厳を保ちながら、細い目を凄まじく赫かせてゐました。僕は――僕も勿論危険を避ける為にトックを小楯にとつてゐたものです。が、やはり好奇心に駆られ、熱心にマッグと話しつづけました。

「そんな検閲は乱暴ぢやありませんか？」

「何、どの国の検閲よりも却つて進歩してゐる位ですよ。たとへば××を御覧なさい。現につい一月ばかり前にも、……」

丁度かう言ひかけた途端です。マッグは生憎脳天に空罎が落ちたものですから、quack（これは唯間投詞です）と一声叫んだぎり、とうとう気を失つてしまひました。

八

僕は硝子会社の社長のゲエルに不思議にも

好意を持つてゐました。ゲエルは資本家中の資本家です。恐らくはこの國の河童の中でも、ゲエルほど大きい腹をした河童は一匹もゐなかつたのに違ひありません。しかし茘枝に似た細君や胡瓜に似た子供を左右にしながら、安樂椅子に坐つてゐる所は殆ど幸福そのものです。僕は時時裁判官のペップやチャックにつれられてゲエル家の晩餐へ出かけました。又ゲエルの紹介狀を持つてゲエルやゲエルの友人たちが多少の關係を持つてゐるいろいろの工場も見て歩きました。そのいろいろの工場の中でも殊に僕に面白かつたのは書籍製造會社の工場です。僕は年の若い河童の技師とこの工場の中へはひり、水力電氣を動力にした、大きい機械を眺めた時、今更のやうに河童の國の機械工業の進歩に驚嘆しました。何でもそこでは一年間に七百萬部の本を製造するさうです。が、僕を驚かしたのは本の部數ではありません。それだけの本を製造するのに少しも手數のかからないことです。何しろこの國では本を造るのに唯機械の漏斗形の口へ紙とインクと灰色をした粉末とを入れるだけなのですから。それ等の原料は機械の中へはひると、殆ど五分とたたないうちに菊版、四六版、菊半截版などの無數の本になつて出て來るのです。僕は瀑のやうに流れ落ちるいろいろの本を眺めながら、反り身になつた河童の技師にその灰色の粉末は何と云ふものかと尋ねて見ました。すると技師は黒光りに光つた機械の前に佇んだまま、つまらなさうにかう返事をしました。

「これですか？　これは驢馬の腦髓ですよ。ええ、一度乾燥させてから、ざつと粉末にしただけのものです。時價は一噸二三錢ですがね。」

勿論かう云ふ工業上の奇蹟は書籍製造會社にばかり起つてゐる訣ではありません。繪畫製造會社にも、音樂製造會社にも、同じやうに起つてゐるのです。實際又ゲエルの話によれば、この國では平均一箇月に七八百種の機械が新案され、何でもずんずん人手を待たずに大量生産が行はれるさうです、從つて又職工の解雇されるのも四五萬匹を下らないさうです。その癖まだこの國では每朝新聞を讀んでゐても、一度も罷業と云ふ字に出會ひません。僕はこれを妙に思ひましたから、或時又ペップやチャックとゲエル家の晩餐に招かれた機會にこのことをなぜかと尋ねて見ました。

「それはみんな食つてしまふのですよ。」

食後の葉卷を銜へたゲエルは如何にも無造作にかう言ひました。しかし、食つてしまふ」と云ふのは何のことだかわかりません。すると鼻眼鏡をかけたチャックは僕の不審を察したと見え、横あひから說明を加へてくれました。

「その職工をみんな殺してしまつて、肉を食料に使ふのです。ここにある新聞を御覽なさい。今月は丁度六萬四千七百六十九匹の職工が解雇されましたから、それだけ肉の値段も下つた訣ですよ？」

「職工は默つて殺されるのですか？」

「それは騷いでも仕かたはありません。職工屠殺法があるのですから。」

これは山桃の鉢植ゑを後に苦い顏をしてゐたペップの言葉です。僕は勿論不快を感じました。しかし主人公のゲエルは勿論、ペップやチャックもそんなことは當然と思つてゐるらしいのです。現にチャックは笑ひながら、嘲るやうに僕に話しかけました。

「つまり餓死したり自殺したりする手數を國家的に省略してやるのですね。ちよつと有毒瓦斯を嗅がせるだけですから、大した苦痛はありませんよ。」

「けれどもその肉を食ふと云ふのは、……」

「常談を言つてはいけません。あのマッグに聞

かせたら、さぞ大笑ひに笑ふでせう。あなたの國でも第四階級の娘たちは賣笑婦になつてゐるではありませんか？　職工の肉を食ふことなどに憤慨したりするのは感傷主義ですよ。」

から云ふ問答を聞いてゐたゲエルは手近いテエブルの上にあつたサンドウイッチの皿を勸めながら、恬然と僕にかう言ひました。

「どうです？　一つとりませんか？　これも職工の肉ですがね。」

僕は勿論辟易しました。いや、そればかりではありません。ペップやチャックの笑ひ聲を後にゲエル家の客間を飛び出しました。それは丁度家家の空に星明りも見えない荒れ模樣の夜です。僕はその闇の中を僕の住居へ歸りながら、のべつ幕なしに嘔吐を吐きました。夜目にも白じらと流れる嘔吐を。

九

しかし硝子會社の社長のゲエルは人懷こい河童だつたのに違ひません。僕は度たびゲエルと一しよにゲエルの屬してゐる倶樂部へ行き、愉快に一晩を暮らしました。それは一つにはその倶樂部はトックの屬してゐる超人倶樂部よりも遙かに居心の善かつた爲です。のみならず又ゲエルの話は哲學者のマッグの話のやうに深みを持つてゐなかつたにせよ、僕には全然新しい世界を、——廣い世界を覗かせました。ゲエルはいつも純金の匙に珈琲の茶碗をかきまはしながら、快活にいろいろの話をしたものです。

何でも或霧の深い晩、僕は冬薔薇を盛つた花瓶を中にゲエルの話を聞いてゐました。それは確か部屋全體は勿論、椅子やテエブルも白い上に細い金の縁をとつたセセッション風の部屋だつたやうに覺えてゐます。ゲエルはふだんよりも得意さうに顏中に微笑を漲らせたまま、丁度その頃天下を取つてゐた Quorax 黨内閣のことなどを話しました。クオラックスと云ふ言葉は唯意味のない間投詞ですから、「おや」とでも譯す外はありません。が、兎に角何よりも先に「河童全體の利益」と云ふことを標榜してゐた政黨だつたのです。

「クオラックス黨を支配してゐるものは名高い政治家のロッペです。「正直は最良の外交である」とはビスマルクの言つた言葉でせう。しかしロッペは正直を内治の上にも及ぼしてゐるのです。……」

「けれどもロッペの演説は……」

「まあ。わたしの言ふことをお聞きなさい。あの演説は勿論悉く譃です。が、譃と云ふことは誰でも知つてゐますから、畢竟正直と變らないでせう。それを一概に譃と云ふのはあなたがただけの偏見ですよ。我我河童はあなたがたのやうに、……しかしそれはどうでもよろしい。わたしの話したいのはロッペのことです。ロッペはクオラックス黨を支配してゐる、その又ロッペを支配してゐるものは Pou-Fou 新聞の（この『プウ・フウ』と云ふ言葉もやはり意味のない間投詞です。若し強ひて譯すれば、『ああ』とでも云ふ外はありません。）社長のクイクイです。が、クイクイも彼自身の主人と云ふ譯には行きません。クイクイを支配してゐるものはあなたの前にゐるゲエルです。」

「けれども——これは失禮かも知れませんけれども、プウ・フウ新聞は勞働者の味かたをする新聞でせう。その社長のクイクイもあなたの支配を受けてゐると云ふのは、……」

「プウ・フウ新聞の記者たちは勿論勞働者の味かたです。しかし記者たちを支配するものはクイクイの外はありますまい。しかもクイクイはこのゲエルの後援を受けずにはゐられないのです。」

ゲエルは不相變微笑しながら、純金の匙を

おもちやにしてゐます。」僕はかう言ふゲエルを見ると、ゲエル自身を憎むよりも、プウ・フウ新聞の記者たちに同情の起るのを感じました。するとゲエルは僕の無言に忽ちこの同情を感じたと見え、大きい腹を膨ませてかう言ふのです。

「何、プウ・フウ新聞の記者たちも全部勞働者の味かたではありませんよ。少くとも我我河童と云ふものは誰の味かたをするよりも先に我我自身の味かたをしますからね。……しかし更に厄介なことにはこのゲエル自身さへやはり他人の支配を受けてゐるのです。あなたはそれを誰だと思ひますか？　それはわたしの妻ですよ。美しいゲエル夫人ですよ。」

ゲエルはおほ聲に笑ひました。

「それは寧ろ仕合せでせう。」

「兎に角わたしは滿足してゐます。しかしこれもあなたの前だけに、――河童でないあなたの前だけに手放しで吹聽出來るのです。」

「するとつまりクオラックス内閣はゲエル夫人が支配してゐるのですね。」

「さあ、さうも言はれますかね。……しかし七年前の戰爭などは確かに或雌の河童の爲に始まつたものに違ひありません。」

「戰爭？　この國にも戰爭はあつたのですか？」

「ありましたとも。將來もいつあるかわかりません。何しろ隣國のある限りは、……」

僕は實際この時始めて河童の國も國家的に孤立してゐないことを知りました。ゲエルの説明する所によれば、河童はいつも獺を假設敵にしてゐると云ふことです。しかも獺は河童に負けない軍備を具へてゐると云ふことです。僕はこの獺を相手に河童の戰爭した話に少からず興味を感じました。（何しろ河童の強敵に獺のゐるなどといふことは「水虎考略」の著者は勿論、「山島民譚志」の著者柳田國男さんさへ知らずにゐたらしい新事實ですから。）

「あの戰爭の起る前には勿論兩國とも油斷せずにぢつと相手を窺つてゐました。と云ふのはどちらも同じやうに相手を恐怖してゐたからです。そこへこの國にゐた獺が一匹、或河童の夫婦を訪問しました。その又雌の河童と云ふのは亭主を殺すつもりでゐたのです。何しろ亭主は道樂者でしたからね。おまけに生命保險のついてゐたことも多少の誘惑になつたかも知れません。」

「あなたはその夫婦を御存じですか？」

「ええ、――いや、雄の河童だけは知つてゐます。わたしの妻などはこの河童を惡人のやうに言つてゐますがね。しかしわたしに言はせれば、惡人よりも寧ろ雌の河童に攫まることを恐れてゐる被害妄想の多い狂人です。……そこでその雌の河童は亭主のココアの茶碗の中へ青化加里を入れて置いたのです。それを又どう間違へたか、客の獺に飲ませてしまつたのです。獺は勿論死んでしまひました。それから……」

「それから戰爭になつたのですか？」

「ええ、生憎その獺は勳章を持つてゐた　のですからね。」

「戰爭はどちらの勝になつたのですか？」

「勿論この國の勝になつたのです。三十六萬九千五百匹の河童たちはその爲に健氣にも戰死しました。しかし敵國に比べれば、その位の損害は何ともありません。この國にある毛皮と云ふ毛皮は大抵獺の毛皮です。わたしもあの戰爭の時には硝子を製造する外にも石炭殼を戰地へ送りました。」

「石炭殼を何にするのですか？」

「勿論食糧にするのです。我我河童は腹さへ減れば、何でも食ふのにきまつてゐますからね。」

「それは――どうか怒らずに下さい。それは戰

地にゐる河童たちには……我我の國では檢閲ですがね。」
「この國でも檢閲には違ひありませんよ。しかしわたし自身から言つてゐれば、誰も檢閲にはしないものです。哲學者のマッグも言つてゐるではありませんか?「汝の惡は汝自ら言へ。惡はおのづから消滅すべし。」……しかもわたしは利益の外にも愛國心に燃え立つてゐたのですからね。」

丁度そこへはひつて來たのは、この倶樂部の給仕です。給仕はゲエルにお時宜した後、朗讀でもするやうにかう言ひました。
「お宅のお隣に火事がございます。」
「火──火事!」
ゲエルは驚いて立上りました。僕も立上つたのは勿論です。が、給仕は落ち着き拂つて次の言葉をつけ加へました。
「しかしもう消し止めました。」
ゲエルは給仕を見送りながら、泣き笑ひに近い表情をしました。僕はかういふ顏を見ると、いつかこの硝子會社の社長を憎んでゐたことに氣づきました。が、ゲエルはもう今では大資本家でも何でもない唯の河童になつて立つてゐるのです。僕は花瓶の中の冬薔薇の花を拔き、ゲエルの手へ渡しました。
「しかし火事は消えたと云つても、奧さんはさぞお驚きでせう。さあ、これを持つてお歸りなさい。」
「難有う。」
ゲエルは僕の手を握りました。それから急ににやりと笑ひ、小聲にかう僕に話しかけました。
「隣はわたしの家作ですからね。火災保險の金だけはとれるのですよ。」
僕はこの時のゲエルの微笑を──輕蔑することも出來なければ、憎惡することも出來ないゲエルの微笑を未だにありありと覺えてゐます。

十

「どうしたね? けふは又妙にふさいでゐるぢやないか。」
その火事のあつた翌日です。僕は卷煙草を啣へながら、僕の客間の椅子に腰をおろした學生のラップにかう言ひました。實際又ラップは右の脚の上へ左の脚をのせたまま、腐つた嘴も見えないほど、ぼんやり床の上ばかり見てゐたのです。
「ラップ君、どうしたねと言へば。」
「いや、何、つまらないことなのですよ。──」
ラップはやつと頭を擧げ、悲しい鼻聲を出しました。
「僕はけふ窓の外を見ながら、「おや蟲取り菫が咲いた。」と何氣なしに呟いたのです。すると僕の妹は急に顏色を變へたと思ふと、「どうせわたしは蟲取り菫よ。」と當り散らすぢやありませんか? おまけに又僕のおふくろも大の妹贔屓ですから、やはり僕に食つてかかるのです。」
「蟲取り菫が咲いたといふことはどうして妹さんには不快なのだね?」
「さあ、多分雄の河童を捕へるといふ意味にでもとつたのでせう。そこへおふくろと仲の惡い叔母も喧嘩の仲間入りをしたのですから、愈大騷動になつてしまひました。しかも年中醉つ拂つてゐるおやぢはこの喧嘩を聞きつけると、誰彼の差別なしに毆り出したのです。それだけでも始末のつかない所へ僕の弟はその間におふくろの財布を盜むが早いか、キネマか何かを見に行つてしまひました。僕は……ほんたうに僕はもう、……」
ラップは兩手に顏を埋め、何も言はずに泣いてしまひました。僕の同情したのは勿論です。同時に又家族制度に對する詩人のトックの輕蔑を思ひ出したのも勿論です。僕はラップの肩を

叩き、一生懸命に慰めました。

「そんなことはどこでもあり勝ちだよ。まあ勇氣を出し給へ。」

「しかし……しかし僕でも腐つてゐなければ、……」

「それはあきらめる外はないさ。さあ、トック君の家へでも行かう。」

「トックさんは僕を輕蔑してゐます。僕はトックさんのやうに大膽に家族を捨てることは出來ませんから。」

「ぢやクラバック君の家へ行かう。」

僕はあの音樂會以來、クラバックにも友だちになつてゐましたから、兎に角この大音樂家の家へラップをつれ出すことにしました。クラバックはトックに比べれば、遙かに贅澤に暮らしてゐます。と云ふのは資本家のゲエルのやうに暮らしてゐると云ふ意味ではありません。唯いろいろの骨董を、――タナグラの人形やペルシアの陶器を部屋一ぱいに並べた中にトルコ風の長椅子を据ゑ、クラバック自身の肖像畫の下にいつも子供たちと遊んでゐるのです。が、けふはどうしたのか兩腕を胸へ組んだまま、苦い顏をして坐つてゐました。のみならずその又足もとには紙屑が一面に散らばつてゐました。

ラップも詩人トックと一しよに度たびクラバックには會つてゐる筈です。しかしこの容子に恐れたと見え、けふは丁寧にお時宜をしたなり、默つて部屋の隅に腰をおろしました。

「どうしたね？　クラバック君。」

僕は殆ど挨拶の代りにかう大音樂家へ問ひかけました。

「どうするものか？　批評家の阿呆め！　僕の抒情詩はトックの抒情詩と比べものにならないと言やがるんだ。」

「しかし君は音樂家だし、……」

「それだけならば我慢も出來る。僕はロックに比べれば、音樂家の名に價しないと言やがるぢやないか？」

ロックと云ふのはクラバックと度たび比べられる音樂家です。が、生憎超人倶樂部の會員になつてゐない關係上、僕は一度も話したことはありません。尤も嘴の反り上つた、一癖あるらしい顏だけは度たび寫眞でも見かけてゐました。

「ロックも天才には違ひない。しかしロックの音樂は君の音樂に溢れてゐる近代的情熱を持つてゐない。」

「君は本當にさう思ふか？」

「さう思ふとも。」

するとクラバックは立ち上るが早いか、タナグラの人形をひつ攫み、いきなり床の上に叩きつけました。ラップは餘程驚いたと見え、何か聲を擧げて逃げようとしました。が、クラバックはラップや僕にはちよつと「驚くな」と云ふ手眞似をした上、今度は冷やかにかう言ふのです。

「それは君も亦俗人のやうに耳を持つてゐないからだ。僕はロックを恐れてゐる。……」

「君が？　謙遜家を氣どるのはやめ給へ。」

「誰が謙遜家を氣どるものか？　第一君たちに氣どつて見せる位ならば、批評家たちの前に氣どつて見せてゐる。僕は――クラバックは天才だ。その點ではロックを恐れてゐない。」

「では何を恐れてゐるのだ？」

「何か正體の知れないものを、――言はばロックを支配してゐる星を。」

「どうも僕には腑に落ちないがね。」

「ではかう言へばわかるだらう。ロックは僕の影響を受けない。が、僕はいつの間にかロックの影響を受けてしまふのだ。」

「それは君の感受性の……」

「まあ、聞き給へ。感受性などの問題ではない。

ロックはいつも安心してあいつだけに出来る仕事をしてゐる。しかし僕は苛ら苛らするのだ。それはロックの目から見れば、或は一歩の差かも知れない。けれども僕には十哩も違ふのだ。」

「しかし先生の英雄曲は……」

クラバックは細い目を一層細め、忌々しさうにラップを睨みつけました。

「黙り給へ。君などに何がわかる？　僕はロックを知つてゐるのだ。ロックに平身低頭する犬どもよりもロックを知つてゐるのだ。」

「まあ少し静かにし給へ。」

「若し静かにしてゐられるならば、……僕はいつもかう思つてゐる。——僕等の知らない何ものかは僕を、——クラバックを嘲る為にロックを僕の前に立たせたのだ。哲学者のマッグはかう云ふことも何も彼も承知してゐる。いつもあの色硝子のランタアンの下に古ぼけた本ばかり読んでゐる癖に。」

「どうして？」

「この近頃マッグの書いた『阿呆の言葉』と云ふ本を見給へ。——」

クラバックは僕に一冊の本を渡す——と云ふよりも投げつけました。それから又腕を組んだまま、突けんどんにかう言ひ放ちました。

「ぢやけふは失敬しよう。」

僕は悄気返つたラップと一しよにもう一度往来へ出ることにしました。人通りの多い往来は不相変毛生欅の並み木のかげにいろいろの店を並べてゐます。僕等は何と云ふこともなしに黙つて歩いて行きました。するとそこへ通りかかつたのは髪の長い詩人のトックです。トックは僕等の顔を見ると、腹の袋から手巾を出し、何度も額を拭ひました。

「やあ、暫らく会はなかつたね。僕はけふは久しぶりにクラバックを尋ねようと思ふのだが、……」

僕はこの芸術家たちを喧嘩させては悪いと思ひ、クラバックの如何にも不機嫌だつたことを婉曲にトックに話しました。

「さうか。ぢややめにしよう。何しろクラバックは神経衰弱だからね。……僕もこの二三週間は眠られないのに弱つてゐるのだ。」

「どうだね、僕等と一しよに散歩をしては？」

「いや、けふはやめにしよう。おや！」

トックはかう叫ぶが早いか、しつかり僕の腕を摑みました。しかもいつか体中に冷や汗を流してゐるのです。

「どうしたのだ？」

「どうしたのです？」

「何あの自動車の窓の中から緑いろの猿が一匹首を出したやうに見えたのだよ。」

僕は多少心配になり、兎に角あの医者のチャックに診察して貰ふやうに勧めました。しかしトックは何と言つても、承知する気色さへ見せません。のみならず何か疑はしさうに僕等の顔を見比べながら、こんなことさへ言ひ出すのです。

「僕は決して無政府主義者ではないよ。それだけはきつと忘れずにゐてくれ給へ。——ではさやうなら。チャックなどは真平御免だ。」

僕等はぼんやり佇んだまま、トックの後ろ姿を見送つてゐました。僕等は——いや、「僕等」ではありません。学生のラップはいつの間にか往来のまん中に脚をひろげ、しつきりない自動車や人通りを股眼鏡に覗いてゐるのです。僕はこの河童も発狂したかと思ひ、驚いてラップを引き起しました。

「常談ぢやない。何をしてゐる？」

しかしラップは目をこすりながら、意外にも落ち着いて返事をしました。

「いえ、余り憂鬱ですから、逆さまに世の中を眺

めて見たのです。けれどもやはり同じことですね。」

十一

これは哲學者のマッグの書いた「阿呆の言葉」の中の何章かです。——

×

阿呆はいつも彼以外のものを阿呆であると信じてゐる。

×

我我の自然を愛するのは自然は我我を憎んだり嫉妬したりしない爲もないことはない。

×

最も賢い生活は一時代の習慣を輕蔑しながら、しかもその又習慣を少しも破らないやうに暮らすことである。

×

我我の最も誇りたいものは我我の持つてゐないものだけである。

×

何びとも偶像を破壞することに異存を持つてゐるものはない。同時に又何びとも偶像になることに異存を持つてゐるものはない。しかし偶像の臺座の上に安んじて坐つてゐられるものは最も神神に惠まれたもの、——阿呆か、惡人か、英雄かである。(クラバックはこの章の上へ爪の痕をつけてゐました。)

×

我我の生活に必要な思想は三千年前に盡きたかも知れない。我我は唯古い薪に新らしい炎を加へるだけであらう。

×

我我の特色は我我自身の意識を超越するのを常としてゐる。

×

幸福は苦痛を伴ひ、平和は倦怠を伴ふとすれば、——？

×

自己を辯護することは他人を辯護することよりも困難である。疑ふものは辯護士を見よ。

×

矜誇、愛慾、疑惑——あらゆる罪は三千年來、この三者から發してゐる。同時に又恐らくはあらゆる德も。

×

物質的欲望を減ずることは必しも平和を齎さない。我我は平和を得る爲には精神的欲望も減じなければならぬ。(クラバックはこの章の上にも爪の痕を殘してゐました。)

×

我我は人間よりも不幸である。人間は河童ほど進化してゐない。(僕はこの章を讀んだ時思はず笑つてしまひました。)

×

成すことは成し得ることであり、成し得ることは成すことである。畢竟我我の生活はかう云ふ循環論法を脱することは出來ない。——即ち不合理に終始してゐる。

×

ボオドレエルは白痴になつた後、彼の人生觀をたつた一語に、——女陰の一語に表白した。しかし彼自身を語るものは必しもかう言つたことではない。寧ろ彼の天才に、——彼の生活を維持するに足る詩的天才に信頼した爲に胃袋の一語を忘れたことである。(この章にもやはりクラバックの爪の痕は殘つてゐました。)

×

若し理性に終始するとすれば、我我は當然我我自身の存在を否定しなければならぬ。理性を神にしたヴォルテエルの幸福に一生を了つたのは即ち人間の河童よりも進化してゐないことを示すものである。

らね。」

「しかし僕は一月ばかり前に、……」

僕は委細を話した後、例の刑法千二百八十五條のことを尋ねて見ました。

「ふむ、それはかう云ふのです。――『如何なる犯罪を行ひたりと雖も、該犯罪を行はしめたる事情の消失したる後は該犯罪者を處罰することを得ず』つまりあなたの場合で言へば、その河童は嘗ては親だつたのですが、今はもう親ではありませんから、犯罪も自然と消滅するのです。」

「それはどうも不合理ですね。」

「常談を言つてはいけません。親だつた河童も親である河童も同一に見るのこそ不合理です。さうさう、日本の法律では同一に見ることになつてゐるのですね。それはどうも我我には滑稽です。ふふふふふふふふふふ。」

ペップは卷煙草を抛り出しながら、氣のない薄笑ひを洩らしてゐました。そこへ口を出したのは法律には緣の遠いチャックです。チャックはちよつと鼻眼鏡を直し、かう僕に質問しました。

「日本にも死刑はありますか？」

「ありますとも。日本では絞罪です。」

僕は冷然と構へこんだペップに多少反感を感じてゐましたから、この機會に皮肉を浴せてやりました。

「この國の死刑は日本よりも文明的に出來てゐるでせうね？」

「それは勿論文明的です。」

ペップはやはり落ち著いてゐました。

「この國では絞罪などは用ひません。稀には電氣を用ひることもあります。しかし大抵は電氣も用ひません。唯その犯罪の名を言つて聞かせるだけです。」

「それだけで河童は死ぬのですか？」

「死にますとも。我我河童の神經作用はあなたがたのよりも微妙ですからね。」

「それは死刑ばかりではありません。殺人にもその手を使ふのがあります――」

社長のゲエルは色硝子の光に顏中紫に染りながら、人懷つこい笑顏をして見せました。

「わたしはこの間も或社會主義者に『貴樣は盜人だ』と言はれた爲に心臟痲痺を起しかかつたものです。」

「それは案外多いやうですね。わたしの知つてゐた或辯護士などはやはりその爲に死んでしまつたのですからね。」

僕はかう口を入れた河童、――哲學者のマッグをふりかへりました。マッグはやはりいつものやうに皮肉な微笑を浮かべたまま、誰の顏も見ずにしやべつてゐるのです。

「その河童は誰かに蛙だと言はれ、――勿論あなたも御承知でせう、この國で蛙だと言はれるのは人非人と云ふ意味になること位は。――己は蛙かな？　蛙ではないかな？　と毎日考へてゐるうちにとうとう死んでしまつたものです。」

「それはつまり自殺ですね。」

「尤もその河童を蛙だと言つたやつは殺すつもりで言つたのですがね。あなたがたの目から見れば、やはりそれも自殺と云ふ……」

丁度マッグがかう言つた時です。突然その部屋の壁の向うに、――確かに詩人のトックの家に鋭いピストルの音が一發、空氣を反ね返すやうに響き渡りました。

十三

僕等はトックの家へ駈けつけました。トックは右の手にピストルを握り、頭の皿から血を出したまま、高山植物の鉢植ゑの中に仰向けになつて倒れてゐました。その又側には雌の河童が

一匹、トックの胸に顔を埋め、大聲を擧げて泣いてゐました。僕は雌の河童を抱き起しながら、（一體僕はぬらぬらする河童の皮膚に手を觸れることを餘り好んではゐないのですが。）「どうしたのです？」と尋ねました。
「どうしたのだか、わかりません。唯何か書いてゐたと思ふと、いきなりピストルで頭を打つたのです。ああ、わたしはどうしませう？ qur-r-r-r-r, qur-r-r-r-r.」（これは河童の泣き聲です。）
「何しろトック君は我儘だつたからね。」
硝子會社の社長のゲエルは悲しさうに頭を振りながら、裁判官のペップにかう言ひました。しかしペップは何とも言はずに金口の卷煙草に火をつけてゐました。すると今まで跪いて、トックの創口などを調べてゐたチャックは如何にも醫者らしい態度をしたまま、僕等五人に宣言しました。（實は一人と四匹とです。）
「もう駄目です。トック君は元來胃病でしたから、それだけでも憂鬱になり易かつたのです。」
「何か書いてゐたと云ふことですが。」
哲學者のマッグは辯解するやうにかう獨り語を洩らしながら、机の上の紙をとり上げました。僕等は皆頸をのばし、（尤も僕だけは例外です。）幅の廣いマッグの肩越しに一枚の紙を覗きこみました。
「いざ、立ちて行かん。娑婆界を隔つる谷へ。
岩むらはこごしく、やま水は清く、
藥草の花はにほへる谷へ。」
マッグは僕等をふり返りながら、微苦笑と一しよにかう言ひました。
「これはゲエテの『ミニヨンの歌』の剽竊ですよ。するとトック君の自殺したのは詩人としても疲れてゐたのですね。」
そこへ偶然自動車を乗りつけたのはあの音樂家のクラバックです。クラバックはかう云ふ光景を見ると、暫く戸口に佇んでゐました。が、僕等の前へ歩み寄ると、怒鳴りつけるやうにマッグに話しかけました。
「それはトックの遺言狀ですか？」
「いや、最後に書いてゐた詩です。」
「詩？」
やはり少しも騒がないマッグは髪を逆立てたクラバックにトックの詩稿を渡しました。クラバックはあたりには目もやらずに熱心にその詩稿を讀み出しました。しかもマッグの言葉には殆ど返事さへしないのです。
「あなたはトック君の死をどう思ひますか？」
「いざ、立ちて、……僕も亦いつ死ぬかわかりません。……娑婆界を隔つる谷へ。……」
「しかしあなたはトック君とはやはり親友の一人だつたのでせう？」
「親友？ トックはいつも孤獨だつたのです。……娑婆界を隔つる谷へ、……唯トックは不幸にも、……岩むらはこごしく……」
「不幸にも？」
「やま水は清く、……あなたがたは幸福です。……岩むらはこごしく。……」
僕は未だに泣き聲を絶たない雌の河童に同情しましたから、そつと肩を抱へるやうにし、部屋の隅の長椅子へつれて行きました。そこには二歳か三歳かの河童が一匹、何も知らずに笑つてゐるのです。僕は雌の河童の代りに子供の河童をあやしてやりました。するといつか僕の目にも涙のたまるのを感じました。僕が河童の國に住んでゐるうちに涙と云ふものをこぼしたのは前にも後にもこの時だけです。
「しかしかう云ふ我儘な河童と一しよになつた家族は氣の毒ですね。」
「何しろあとのことも考へないのですから。」
裁判官のペップは、不相變、新しい卷煙草に

火をつけながら、資本家のゲエルに返事をしてゐました。すると僕等を驚かせたのは音樂家のクラバックのおほ聲です。クラバックは詩稿を握つたまま、誰にもとなしに呼びかけました。

「しめた！　すばらしい葬送曲が出來るぞ。」

　クラバックは細い目を赫やかせたまま、ちよつとマッグの手を握ると、いきなり戸口へ飛んで行きました。勿論もうこの時には隣近所の河童が大勢、トックの家の戸口に集まり、珍らしさうに家の中を覗いてゐるのです。しかしクラバックはこの河童たちを遮二無二左右へ押しのけるが早いか、ひらりと自動車へ飛び乘りました。同時に又自動車は爆音を立てて忽ちどこかへ行つてしまひました。

「こら、こら、さう覗いてはいかん。」

　裁判官のペップは巡査の代りに大勢の河童を押し出した後、トックの家の戸をしめてしまひました。部屋の中はそのせゐか急にひつそりなつたものです。僕等はかう云ふ靜かさの中に――高山植物の花の香に交つたトックの血の匂の中に後始末のことなどを相談しました。しかしあの哲學者のマッグだけはトックの死骸を眺めたまま、ぼんやり何か考へてゐます。僕はマッグの肩を叩き、「何を考へてゐるのです？」と尋ねました。

「河童の生活と云ふものをね。」

「河童の生活がどうなるのです？」

「我我河童は何と云つても、河童の生活を完うする爲には、……」

　マッグは多少羞しさうにかう小聲でつけ加へました。

「兎に角我我河童以外の何ものかの力を信ずることですね。」

十四

　僕に宗教と云ふものを思ひ出させたのはかう云ふマッグの言葉です。僕は勿論物質主義者ですから、眞面目に宗教を考へたことは一度もなかつたのに違ひありません。が、この時はトックの死に或感動を受けてゐた爲に一體河童の宗教は何であるかと考へ出したのです。僕は早速學生のラップにこの問題を尋ねて見ました。

「それは基督教、佛教、モハメット教、拜火教なども行はれてゐます。まづ一番勢力のあるものは何と言つても近代教でせう。生活教とも言ひますがね。」（「生活教」と云ふ譯語は當つてゐないかも知れません。この原語は Quemoocha です。cha は英吉利語の ism と云ふ意味に當るでせう。quemoo の原形 quemal の譯は單に「生きる」と云ふよりも「飯を食つたり、酒を飲んだり、……を行つたりする」意味です。）

「ぢやこの國にも敎會だの寺院だのはある訣なのだね？」

「常談を言つてはいけません。近代教の大寺院などはこの國第一の大建築ですよ。どうです、ちよつと見物に行つては？」

　或生温い曇天の午後、ラップは得得と僕と一しよにこの大寺院へ出かけました。成程それはニコライ堂の十倍もある大建築です。のみならずあらゆる建築樣式を一つに組み上げた大建築です。僕はこの大寺院の前に立ち、高い塔や圓屋根を眺めた時、何か無氣味にさへ感じました。實際それ等は天に向つて伸びた無數の觸手のやうに見えたものです。僕等は玄關の前に佇んだまま、（その又玄關に比べて見ても、どの位僕等は小さかつたのでせう！）暫らくこの建築よりも寧ろ途方もない怪物に近い稀代の大寺院を見上げてゐました。

　大寺院の内部も亦廣大です。そのコリント風の圓柱の立つた中には參詣人が何人も歩いてゐました。しかしそれ等は僕等のやうに非常に小さく見えたものです。そのうちに僕等は腰の

腰の曲つた一匹の河童が出て來ました。するとラップはこの河童にちよつと頭を下げた上、丁寧にかう話しかけました。

「長老、御達者なのは何よりもです。」

相手の河童もお辭儀をした後、やはり丁寧に返事をしました。

「これはラップさんですか？ あなたも不相變、——（と言ひかけながら、ちよつと言葉をつがなかつたのはラップの嘴の腐つてゐるのにやつと氣がついた爲だつたでせう。）——ああ、兎に角御丈夫らしいやうですね。が、けふはどうして又……」

「けふはこの方のお伴をして來たのです。この方は多分御承知の通り、——」

それからラップは滔滔と僕のことを話しました。どうも又それはこの大寺院へラップが滅多に來ないことの辯解にもなつてゐたらしいのです。

「就いてはどうかこの方の御案内を願ひたいと思ふのですが。」

長老は大樣に微笑しながら、まづ僕に挨拶をし、靜かに正面の祭壇を指さしました。

「御案内と申しても、何も御役に立つことは出來ません。我我信徒の禮拜するのは正面の祭壇にある「生命の樹」です。「生命の樹」には御覽の通り、金と綠との果がなつてゐます。あの金の果を「善の果」と云ひ、あの綠の果を「惡の果」と云ひます。……」

僕はかう云ふ說明のうちにもう退屈を感じ出しました。それは折角の長老の言葉も古い比喩のやうに聞えたからです。僕は勿論熱心に聞いてゐる容子を裝つてゐました。が、時時は大寺院の內部へそつと目をやるのを忘れずにゐました。

コリント風の柱、ゴシック風の穹窿、アラビアじみた市松模樣の床、セセッション紛ひの祈禱机、——かう云ふものの作つてゐる調和は妙に野蠻な美を具へてゐました。しかし僕の目を惹いたのは何よりも兩側の龕の中にある大理石の半身像です。僕は何かそれ等の像を見知つてゐるやうに思ひました。それも亦不思議ではありません。あの腰の曲つた河童は「生命の樹」の說明を了ると、今度は僕やラップと一しよに右側の龕の前へ步み寄り、その龕の中の半身像にかう云ふ說明を加へ出しました。

「これは我我の聖徒の一人、——あらゆるものに反逆した聖徒ストリントベリイです。この聖徒はさんざん苦しんだ擧句、スウエデンボルグの哲學の爲に救はれたやうに言はれてゐます。が、實は救はれなかつたのです。この聖徒は唯我我のやうに生活教を信じてゐました。——と云ふよりも信じる外はなかつたのでせう。この聖徒の我我に殘した「傳說」と云ふ本を讀んで御覽なさい。この聖徒も自殺未遂者だつたことは聖徒自身告白してゐます。」

僕はちよつと憂鬱になり、次の龕へ目をやりました。次の龕にある半身像は口髭の太い獨逸人です。

「これはツアラトストラの詩人ニイチェです。その聖徒は聖徒自身の造つた超人に救ひを求めました。が、やはり救はれずに氣違ひになつてしまつたのです。若し氣違ひにならなかつたとすれば、或は聖徒の數へはひることも出來なかつたかも知れません。……」

長老はちよつと默つた後、第三の龕の前へ案內しました。

「三番目にあるのはトルストイです。この聖徒は誰よりも苦行をしました。それは元來貴族だつた爲に好奇心の多い公衆に苦しみを見せることを嫌つたからです。この聖徒は事實上信ぜられない基督を信じようと努力しました。いや、信じてゐるやうにさへ公言したこともあ

つたのです。しかしとうとう晩年には悲壮な嘘つきだつたことに堪へられないやうになりました。この聖徒も時時薔薇の梁に恐怖を感じたのは有名です。けれども聖徒の數にはいつてゐる位ですから、勿論自殺したのではありません。」

第四の龕の中の半身像は我我日本人の一人です。僕はこの日本人の顔を見た時、さすがに懷しさを感じました。

「これは國木田獨歩です。轢死する人足の心もちをはつきり知つてゐた詩人です。しかしそれ以上の說明はあなたには不必要に違ひありません。では五番目の龕の中を御覽下さい。」

「これはワグネルではありませんか？」

「さうです。國王の友だちだつた革命家です。聖徒ワグネルは晩年には食前の祈禱さへしてゐました。しかし勿論基督敎よりも生活敎の信徒の一人だつたのです。ワグネルの殘した手紙によれば、娑婆苦は何度この聖徒を死の前に驅りやつたかわかりません。」

僕等はもうその時には第六の龕の前に立つてゐました。

「これは聖徒ストリントベリイの友だちです。子供の大勢ある細君の代りに十三四のタイティの女を娶つた商賣人上りの佛蘭西の畫家です。この聖徒は太い血管の中に水夫の血を流してゐました。が、脣を御覽なさい。砒素か何かの痕が殘つてゐます。第七の龕の中にあるのは……もうあなたはお疲れでせう。ではどうかこちらへお出で下さい。」

僕は實際疲れてゐましたから、ラップと一しよに長老に從ひ、香の匂のする廊下傳ひに或部屋へはひりました。その又小さい部屋の隅には黑いヴェヌスの像の下に山葡萄が一ふさ獻じてあるのです。僕は何の裝飾もない僧房を想像してゐただけにちよつと意外に感じました。すると長老は僕の容子にかう云ふ氣もちを感じたと見え、僕等に椅子を薦める前に半ば氣の毒さうに說明しました。

「どうか我我の宗敎の生活敎であることを忘れずに下さい。我我の神、……『生命の樹』の敎へは『旺盛に生きよ』と云ふのですから。……ラップさん、あなたはこのかたに我我の聖書を御覽に入れましたか？」

「いえ、……實はわたし自身も殆ど讀んだことはないのです。」

ラップは頭の皿を掻きながら、正直にかう返事をしました。が、長老は不相變靜かに微笑して話しつづけました。

「それではおわかりになりますまい。我我の神は一日のうちにこの世界を造りました。（『生命の樹』は樹と云ふものの、成し能はないことはないのです。）のみならず雌の河童を造りました。すると雌の河童は退屈の餘り、雄の河童を求めました。我我の神はこの歎きを憐み、雌の河童の腦髓を取り、雄の河童を造りました。我我の神はこの二匹の河童に『食へよ、……せよ、旺盛に生きよ』と云ふ祝福を與へました。……」

僕は長老の言葉のうちに詩人のトックを思ひ出しました。詩人のトックは不幸にも僕のやうに無神論者です。僕は河童ではありませんから、生活敎を知らなかつたのも無理はありません。けれども河童の國に生まれたトックは勿論「生命の樹」を知つてゐた筈です。僕はこの敎へに從はなかつたトックの最後を憐みましたから、長老の言葉を遮るやうにトックのことを話し出しました。

「ああ、あの氣の毒な詩人ですね。」

長老は僕の話を聞き、深い息を洩らしました。

「我我の運命を定めるものは信仰と境遇と偶然とだけです。（尤もあなたがたはその外に遺傳

をお献げ、たさるでせう。トックさんは不幸にも信仰をお持ちにならなかつたのです。」
「トックはあなたを羨んでゐたでせう。いや、僕も羨んでゐます。ラップ君などは年も若いし、……」
「僕も嘴さへちやんとしてゐれば或は樂天的だつたかも知れません。」
長老に僕等にかう言はれると、もう一度深い息を洩らしました。しかもその目は涙ぐんだまま、ぢつと黒いヴェヌスを見つめてゐるのです。
「わたしも實は、——これはわたしの祕密ですから、どうか誰にも仰有らずに下さい。——わたしも實は我我の神を信ずる譯に行かないのです。しかしいつかわたしの祈禱は、——」
丁度長老のかう言つた時です。突然部屋の戸があいたと思ふと、大きい雌の河童が一匹、いきなり長老へ飛びかかりました。僕等がこの雌の河童を抱きとめようとしたのは勿論です。が、雌の河童は咄嗟の間に床の上へ長老を投げ倒しました。
「この爺め！ けふも又わたしの財布から一杯やる金を盗んで行つたな！」
十分ばかりたつた後、僕等は實際逃げ出さないばかりに長老夫婦をあとに殘し、大寺院の玄關を下りて行きました。
「あれではあの長老も『生命の樹』を信じない筈ですね。」
暫く默つて歩いた後、ラップは僕にかう言ひました。が、僕は返事をするよりも思はず大寺院を振り返りました。大寺院はどんより曇つた空にやはり高い塔や圓屋根を無數の觸手のやうに伸ばしてゐます。何か沙漠の空に見える蜃氣樓の無氣味さを漂はせたまま。……

十五

それから彼是一週間の後、僕はふと醫者のチャックに珍らしい話を聞きました。と云ふのはあのトックの家に幽靈の出ると云ふ話なのです。その頃にはもう雌の河童はどこか外へ行つてしまひ、僕等の友だちの詩人の家も寫眞師のステュディオに變つてゐました。何でもチャックの話によれば、このステュディオでは寫眞を撮ると、トックの姿もいつの間にか必ず朦朧と客の後ろに映つてゐるとか云ふことです。尤もチャックは物質主義者ですから、死後の生命などを信じてゐません。現にその話をした時にも惡意のある微笑を浮べながら、「やはり靈魂と云ふものも物質的存在と見えますね。」などと註釋めいたことをつけ加へてゐました。僕も幽靈を信じないことはチャックと餘り變りません。けれども詩人のトックには親しみを感じてゐましたから、早速本屋の店へ駈けつけ、トックの幽靈に關する記事やトックの幽靈の寫眞の出てゐる新聞や雜誌を買つて來ました。成程それ等の寫眞を見ると、どこかトックらしい河童が一匹、老若男女の河童の後ろにぼんやりと姿を現してゐました。しかし僕を驚かせたのはトックの幽靈の寫眞よりもトックの幽靈に關する記事、——殊にトックの幽靈に關する心靈學協會の報告です。僕は可也逐語的にその報告を譯して置きましたから、下に大略を掲げることにしませう。但し括弧の中にあるのは僕自身の加へた註釋なのです。——

詩人トック君の幽靈に關する報告。（心靈學協會雜誌第八千二百七十四號所載）

わが心靈學協會は先般自殺したる詩人トック君の舊居にして現在は××寫眞師のステュディオなる□□街第二百五十一號に臨時調査會を開催せり。列席せる會員は下の如し。（氏名を略す）

我等十七名の會員は心靈協會會長ペック

氏と共に九月十七日午前十時三十分、我等の最も信賴するメディアム、ホップ夫人を同伴し、該ステュディオの一室に參集せり。ホップ夫人は該ステュディオに入るや、既に心靈的空氣を感じ、全身に痙攣を催しつつ、嘔吐すること數回に及べり。夫人の語る所によれば、こは詩人トック君の強烈なる煙草を愛したる結果、その心靈的空氣も亦ニコティンを含有する爲なりと云ふ。

我等會員はホップ夫人と共に圓卓を繞りて默坐したり。夫人は三分二十五秒の後、極めて急劇なる夢遊狀態に陷り、且詩人トック君の心靈の憑依する所となれり。我等會員は年齡順に從ひ、夫人に憑依せるトック君の心靈と左の如き問答を開始したり。

問　君は何故に幽靈に出づるか？

答　死後の名聲を知らんが爲なり。

問　君——或は心靈諸君は死後も尚名聲を欲するや？

答　少くとも予は欲せざる能はず。然れども予の邂逅したる日本の一詩人の如きは死後の名聲を輕蔑し居たり。

問　君はその詩人の姓名を知れりや？

答　予は不幸にも忘れたり。唯彼の好んで作れる十七字詩の一章を記憶するのみ。

問　その詩は如何？

答　「古池や蛙飛びこむ水の音。」

問　君はその詩を佳作なりと做すや？

答　予は必しも惡作なりと做さず。唯「蛙」を「河童」とせん乎、更に光彩陸離たるべし。

問　然らばその理由は如何？

答　我等河童は如何なる藝術にも河童を求むること痛切なればなり。

會長ペック氏はこの時に當り、我等十七名の會員にこは心靈學協會の臨時調査會にして合評會にあらざるを注意したり。

問　心靈諸君の生活は如何？

答　諸君の生活と異ること無し。

問　然らば君は君自身の自殺せしを後悔するや？

答　必しも後悔せず。予は心靈的生活に倦まば、更にピストルを取りて自活すべし。

問　自活するは容易なりや否や？

トック君の心靈はこの問に答ふるに更に問を以てしたり。こはトック君を知れるものには頗る自然なる應酬なるべし。

答　自殺するは容易なりや否や？

問　諸君の生命は永遠なりや？

答　我等の生命に關しては諸說紛々として信ずべからず。幸ひに我等の間にも基督教、佛教、モハメット教、拜火教等の諸宗あることを忘るる勿れ。

問　君自身の信ずる所は？

答　予は常に懷疑主義者なり。

問　然れども君は少くとも心靈の存在を疑はざるべし？

答　諸君の如く確信する能はず。

問　君の交友の多少は如何？

答　予の交友は古今東西に亙り、三百人を下らざるべし。その著名なるものを擧ぐれば、クライスト、マイレンデル、ワイニンゲル、……

問　君の交友は自殺者のみなりや？

答　必しも然りとせず。自殺を辯護せるモンテェニュの如きは予が畏友の一人なり。唯予は自殺せざりし厭世主義者、——ショオペンハウエルの輩とは交際せず。

問　ショオペンハウエルは健在なりや？

答　彼は目下心靈的厭世主義を樹立し、自活する可否を論じつつあり。然れどもコレラも黴菌病なりしを知り、頗る安堵せるものの如し。

我等會員は相次いでナポレオン、孔子、ドストエフスキイ、ダアウィン、クレオパトラ、釋

一、デモステネス、ダンテ、千の利休等の心靈の消息を質問したり。然れどもトック君は不幸にも詳細に答ふることを做さず、反つてトック君自身に關する種々のゴシツプを質問したり。

問　予の死後の名聲は如何？

答　或批評家は群小詩人の一人と言へり。

問　彼は予が詩集を贈らざりしに怨恨を含める一人なるべし。予の全集は出版せられしや？

答　君の全集は出版せられたれども、賣行甚だ振はざるが如し。

問　予の全集は三百年の後、――卽ち著作權の失はれたる後、萬人の購ふ所となるべし。予の同棲せる女友だちは如何？

答　彼女は書肆ラツク君の夫人となれり。

問　彼女は未だ不幸にもラツクの義眼なるを知らざるなるべし。予が子は如何？

答　國立孤兒院にありと聞けり。

トツク君は暫く沈默せる後、新たに質問を開始したり。

問　予が家は如何？

答　某寫眞師のステユディオとなれり。

問　予の机は如何になれるか？

答　如何なれるかを知るものなし。

問　予は予の机の抽斗に予の秘藏せる一束の手紙を――然れどもこは幸ひにも多忙なる諸君の關知する所にあらず。今やわが心靈界は徐に薄暮に沈まんとす。予は諸君と決別すべし。さらば。諸君。さらば。わが善良なる諸君。

ホツプ夫人は最後の言葉と共に再び急激に覺醒したり。我等十七名の會員はこの問答の眞なりしことを上天の神に誓つて保證せんとす。（なほ又我等の信賴するホツプ夫人に對する報酬は嘗て夫人が女優たりし時の日當に從ひて支辨したり。）

十六

僕はかう云ふ記事を讀んだ後、だんだんこの國にゐることも憂鬱になつて來ましたから、どうか我々人間の國へ歸ることにしたいと思ひました。しかしいくら探して歩いても、僕の落ちた穴は見つかりません。そのうちにあのバツグと云ふ漁夫の河童の話には、何でもこの國の街はづれに或年をとつた河童が一匹、本を讀んだり、笛を吹いたり、靜かに暮らしてゐると云ふことです。僕はこの河童に尋ねて見れば、或はこの國を逃げ出す途もわかりはしないかと思ひましたから、早速街はづれへ出かけて行きました。しかしそこへ行つて見ると、如何にも小さい家の中に年をとつた河童どころか、頭の皿も固まらない、やつと十二三の河童が一匹、悠々と笛を吹いてゐました。僕は勿論間違つた家へはひつたではないかと思ひました。が、念の爲に名をきいて見ると、やはりバツグの敎へてくれた年よりの河童に違ひないのです。

「しかしあなたは子供のやうですが……」

「お前さんはまだ知らないのかい？　わたしはどう云ふ運命か、母親の腹を出た時には白髮頭をしてゐたのだよ。それからだんだん年が若くなり、今ではこんな子供になつたのだよ。けれども年を勘定すれば、生まれる前を六十としても、彼是百十五六にはなるかも知れない。」

僕は部屋の中を見まはしました。そこには僕の氣のせゐか、質素な椅子やテエブルの間に何か淸らかな幸福が漂つてゐるやうに見えるのです。

「あなたはどうもほかの河童よりも仕合せに暮らしてゐるやうですね？」

「さあ、それはさうかも知れない。わたしは若い時は年よりだつたし、年をとつた時は若いものになつてゐる。從つて年よりのやうに慾にも渴かず、若いもののやうに色にも溺れない。兎に角わたしの生涯はたとひ仕合せではないに

もしろ、安らかだつたのには違ひあるまい。」
「成程それでは安らかでせう。」
「いや、まだそれだけでは安らかにはならない。わたしは體も丈夫だつたし、一生食ふに困らぬ位の財産を持つてゐたのだよ。しかし一番仕合せだつたのはやはり生まれて來た時に年よりだつたことだと思つてゐる。」
僕は暫くこの河童と自殺したトックの話だの毎日醫者に見て貰つてゐるゲエルの話だのをしてゐました。が、なぜか年をとつた河童は餘り僕の話などに興味のないやうな顔をしてゐました。
「ではあなたはほかの河童のやうに格別生きてゐることに執着を持つてはゐないのですね？」
年をとつた河童は僕の顔を見ながら、静かにかう返事をしました。
「わたしもほかの河童のやうにこの國へ生まれて來るかどうか、一應父親に尋ねられてから母親の胎内を離れたのだよ。」
「しかし僕はふとした拍子に、この國へ轉げ落ちてしまつたのです。どうか僕にこの國から出て行かれる路を教へて下さい。」
「出て行かれる路は一つしかない。」
「と云ふのは？」
「それはお前さんのここへ來た路だ。」
僕はこの答を聞いた時になぜか身の毛がよだちました。
「その路が生憎見つからないのです。」
年をとつた河童は水水しい目にぢつと僕の顔を見つめました。それからやつと體を起し、部屋の隅へ歩み寄ると、天井からそこに下つてゐた一本の綱を引きました。すると今まで氣のつかなかつた天窓が一つ開きました。その又圓い天窓の外には松や檜が枝を張つた向うに大空が青あをと晴れ渡つてゐます。いや、大きい鏃に似た槍ケ嶽の峯も聳えてゐます。僕は飛行機を見た子供のやうに實際飛び上つて喜びました。
「さあ、あすこから出て行くが好い。」
年をとつた河童はかう言ひながら、さつきの綱を指さしました。今まで僕の綱と思つてゐたのは實は綱梯子に出來てゐたのです。
「ではあすこから出さして貰ひます。」
「唯わたしは前以て言ふがね。出て行つて後悔しないやうに。」
「大丈夫です。僕は後悔などはしません。」
僕はかう返事をするが早いか、もう綱梯子を攀ぢ登つてゐました。年をとつた河童の頭の皿を遙か下に眺めながら。

十七

僕は河童の國から歸つて來た後、暫くは我我人間の皮膚の匂に閉口しました。我我人間に比べれば、河童は實に清潔なものです。のみならず我我人間の頭は河童ばかり見てゐた僕には如何にも氣味の惡いものに見えました。これは或はあなたにはおわかりにならないかも知れません。しかし目や口は兎も角、この鼻と云ふものは妙に恐しい氣を起させるものです。僕は勿論出來るだけ、誰にも會はない算段をしました。が、我我人間にもいつか次第に慣れ出したと見え、半年ばかりたつうちにどこへでも出るやうになりました。唯それでも困つたことは何か話をしてゐるうちにうつかり河童の國の言葉を口に出してしまふことです。
「君はあしたは家にゐるかね？」
「Qua.」
「何だつて？」
「いや、ゐると云ふことだよ。」
大體かう云ふ調子だつたものです。
しかし河童の國から歸つて來た後、丁度一年ほどたつた時、僕は或る事業の失敗した爲に……

（S博士は彼がかう言つた時、「その話はおよしなさい」と注意をした。何でも博士の話によれば、彼はこの話をする度に看護人の手にも了へない位、亂暴になるとか云ふことである。）

ではその話はやめませう。しかし或事業の失敗した爲に僕は又河童の國へ歸りたいと思ひ出しました。さうです。「行きたい」ではありません。「歸りたい」と思ひ出したのです。河童の國は當時の僕には故郷のやうに感ぜられましたから。

僕はそつと家を脱け出し、中央線の汽車へ乘らうとしました。そこを生憎巡査につかまり、とうとう病院へ入れられたのです。僕はこの病院へはひつた當座も河童の國のことを想ひつづけました。醫者のチャックはどうしてゐるでせう？ 哲學者のマッグも不相變七色の色硝子のランタアンの下に何か考へてゐるかも知れません。殊に僕の親友だつた、嘴の腐つた學生のラップは、——或けふのやうに曇つた午後です。こんな追憶に耽つてゐた僕は思はず聲を擧げようとしました。それにいつの間にはひつて來たか、バッグと云ふ漁師の河童が一匹、僕の前に佇みながら、何度も頭を下げてゐたからです。僕は心をとり直した後、——泣いたか笑つたかも覺えてゐません。が、兎に角久しぶりに河童の國の言葉を使ふことに感動してゐたことは確かです。

「おい、バッグ、どうして來た？」

「へい、お見舞ひに上つたのです。何でも御病氣だと云ふことですから。」

「どうしてそんなことを知つてゐる？」

「ラディオのニウスで知つたのです。」

バッグは得意さうに笑つてゐるのです。

「それにしてもよく來られたね？」

「何、造作はありません。東京の川や堀割りは河童には往來も同樣ですから。」

僕は河童も蛙のやうに水陸兩棲の動物だつたことに今更のやうに氣がつきました。

「しかしこの邊には川はないがね。」

「いえ、こちらへ上つたのは水道の鐵管を拔けて來たのです。それからちよつと消火栓をあけて……」

「消火栓をあけて？」

「檀那はお忘れなすつたのですか？ 河童にも機械屋のゐると云ふことを。」

それから僕は二三日毎にいろいろの河童の訪問を受けました。僕の病はS博士によれば早發性癡呆症と云ふことです。しかしあの醫者のチャックは（これは甚だあなたにも失禮に當るのに違ひありません。）僕は早發性癡呆症患者ではない。早發性癡呆症患者はS博士を始め、あなたがた自身だと言つてゐました。醫者のチャックも來る位ですから、學生のラップや哲學者のマッグの見舞ひに來たことは勿論です。が、あの漁師のバッグの外に晝間は誰も尋ねて來ません。殊に二三匹一しよに來るのは夜、——それも月のある夜です。僕はゆうべも月明りの中に硝子會社の社長のゲエルや哲學者のマッグと話をしました。のみならず音樂家のクラバックにもヴァイオリンを一曲彈いて貰ひました。そら、向うの机の上に黑百合の花束がのつてゐるでせう？ あれもゆうべクラバックが土産に持つて來てくれたものです。……

（僕は後を振り返つてみた。が、勿論机の上には花束も何ものつてゐなかつた。）

それからこの本も哲學者のマッグがわざわざ持つて來てくれたものです。ちよつと最初の詩を讀んで御覽なさい。いや、あなたは河童の國の言葉を御存知になる筈はありません。では代りに讀んで見せませう。これは近頃出版になつたトックの全集の一册です。——

（彼は古い電話帳をひろげ、）かう云ふ詩をお

ほ聲に讀みはじめた。

椰子の花や竹の中に
佛陀はとうに眠つてゐる。
路ばたに枯れた無花果と一しよに
基督ももう死んだらしい

しかし我我は休まなければならぬ
たとひ芝居の背景の前にも。

（その又背景の裏を見れば、繼ぎはぎだらけのカンヴァスばかりだ？）

けれども僕はこの詩人のやうに厭世的ではありません。河童たちの時時來てくれる限りは、——ああ、このことは忘れてゐました。あなたは僕の友だちだつた裁判官のペップを覺えてゐるでせう。あの河童は職を失つた後、ほんたうに發狂してしまひました。何でも今は河童の國の精神病院にゐると云ふことです。僕はS博士さへ承知してくれれば、見舞ひに行つてやりたいのですがね。……

（昭和二年二月十一日作）

侏儒の祈り

わたしはこの綵衣を纏ひ、この筋斗の戲を獻じ、この太平を樂しんでゐれば不足のない侏儒でございます。どうかわたしの願ひをおかなへ下さいまし。

どうか一粒の米すらない程、貧乏にして下さいますな。どうか又熊掌にさへ、飽き足りる程、富裕にもして下さいますな。

どうか採桑の農婦すら嫌ふやうにして下さいますな。どうか又後宮の麗人さへ愛するやうにもして下さいますな。

どうか菽麥すら辨ぜぬ程、愚昧にして下さいますな。どうか又雲氣さへ察する程、聰明にもして下さいますな。

とりわけどうか勇ましい英雄にして下さいますな。わたしは現に時とすると、攀ぢ難い峯の頂を窮め、越え難い海の浪を渡り——云はば不可能を可能にする夢を見ることがございます。さう云ふ夢を見てゐる時程、空恐しいことはございません。わたしは龍と鬪ふやうに、この夢と鬪ふのに苦しんで居ります。どうか英雄とならぬやうに——英雄の志を起さぬやうに力のないわたしをお守り下さいまし。

わたしはこの春酒に醉ひ、この金縷の歌を誦し、この好日を喜んでゐれば不足のない侏儒でございます。

小兒

軍人は小兒に近いものである。英雄らしい身振を喜んだり、所謂光榮を好んだりするのは今更此處に云ふ必要はない。機械的訓練を貴んだり、動物的勇氣を重んじたりするのも小學校にのみ見得る現象である。殺戮を何とも思はぬなどは一層小兒と選ぶところはない。殊に小兒と似てゐるのは喇叭や軍歌に鼓舞されれば、何の爲に戰ふかも問はず、欣然と敵に當ることである。

この故に軍人の誇りとするものは必ず小兒の玩具に似てゐる。緋縅の鎧や鍬形の兜は成人の趣味にかなつた者ではない。勳章も——わたしには實際不思議である。なぜ軍人は酒にも醉はずに、勳章を下げて歩かれるのであらう？

（侏儒の言葉より）

齒車

一　レエン・コオト

僕は或知り人の結婚披露式につらなる爲に鞄を一つ下げたまま、東海道の或停車場へその奥の避暑地から自動車を飛ばした。自動車の走る道の兩側は大抵松ばかり茂つてゐた。上り列車に間に合ふかどうかは可也怪しいのに違ひなかつた。自動車には丁度僕の外に或理髪店の主人も乘り合せてゐた。彼は棗のやうにまるまると肥つた、短い顋髯の持ち主だつた。僕は時間を氣にしながら、時時彼と話をした。

「妙なこともありますね。××さんの屋敷には晝間でも幽靈が出るつて云ふんですが。」

「晝間でもね。」

僕は冬の西日の當つた向うの松山を眺めながら、善い加減に調子を合せてゐた。

「尤も天氣の善い日には出ないさうです。一番多いのは雨のふる日だつて云ふんですが。」

「雨のふる日に濡れに來るんぢやないか？」

「御常談で。・・・しかしレエン・コオトを著た幽靈だつて云ふんです。』

自動車はラッパを鳴らしながら、或停車場へ橫着けになつた。僕は或理髪店の主人に別れ、停車場の中へはひつて行つた。すると果して上り列車は二三分前に出たばかりだつた。待合室のベンチにはレエン・コオトを著た男が一人ぼんやり外を眺めてゐた。僕は今聞いたばかりの幽靈の話を思ひ出した。が、ちよつと苦笑したぎり、兎に角次の列車を待つ爲に停車場前のカッフェへはひることにした。

それはカッフェと云ふ名を與へるのも考へものに近いカッフェだつた。僕は隅のテエブルに坐り、ココアを一杯註文した。テエブルにかけたオイル・クロオスは白地に細い青の線を荒い格子に引いたものだつた。しかしもう隅隅には薄汚いカンヴァスを露してゐた。僕は膠臭いココアを飲みながら、人げのないカッフェの中を見まはした。埃じみたカッフェの壁には「親子丼」だの「カツレツ」だのと云ふ紙札が何枚も貼つてあつた。

「地玉子、オムレツ」

僕はかう云ふ紙札に東海道線に近い田舍を感じた。それは麥畑やキャベツ畑の間に電氣機關車の通る田舍だつた。・・・

次の上り列車に乘つたのはもう日暮に近い頃だつた。僕はいつも二等に乘つてゐた。が、何かの都合上、その時は三等に乘ることにした。

汽車の中は可也こみ合つてゐた。しかも僕の前後にゐるのは大磯かどこかへ遠足に行つたらしい小學校の女生徒ばかりだつた。僕は卷煙草に火をつけながら、かう云ふ女生徒の群れを眺めてゐた。彼等はいづれも快活だつた。のみならず殆どしやべり續けだつた。

「寫眞屋さん、ラブ・シインつて何？」

やはり遠足について來たらしい、僕の前にゐた「寫眞屋さん」は何とかお茶を濁してゐた。しかし十四五の女生徒の一人はまだいろいろのことを問ひかけてゐた。僕はふと彼女の鼻に蓄膿症のあることを感じ、何か頰笑まずにはゐられなかつた。それから又僕の隣にゐた十二三の女生徒の一人は若い女教師の膝の上に坐り、片手に彼女の頸をまきながら、片手に彼女の頰をさすつてゐた。しかも誰かと話す合間に時々かう女教師に話しかけてゐた。

一可愛いわね、先生は。可愛い目をしていらつしやるわね。」

彼等は僕には女生徒よりも一人前の女と云ふ感じを與へた。林檎を皮ごと齧つてゐたり、キャラメルの紙を剝いてゐることを除けば。……しかし年かさらしい女生徒の一人は僕の側を通る時に誰かの足を踏んだと見え、「御免なさいまし」と聲をかけた。彼女だけは彼等よりもませてゐるだけに反つて僕には女生徒らしかつた。僕は卷煙草を啣へたまま、この矛盾を感じた僕自身を冷笑しない譯には行かなかつた。

いつか電燈をともした汽車はやつと或郊外の停車場へ著いた。僕は風の寒いプラットフォオムへ下り、一度橋を渡つた上、省線電車の來るのを待つことにした。すると偶然顏を合せたのは或會社にゐるT君だつた。僕等は電車を待つてゐる間に不景氣のことなどを話し合つた。T君は勿論僕などよりもかう云ふ問題に通じてゐた。が、逞しい彼の指には餘り不景氣には緣のない土耳古石の指環も嵌まつてゐた。

「大したものを嵌めてゐるね。」

「これか？ これはハルピンへ商賣に行つてゐた友だちの指環を買はされたんだよ。そいつも今は往生してゐる。コオペラティヴと取引きが出來なくなつたものだから。」

僕等の乘つた省線電車は幸ひにも汽車ほどこんでゐなかつた。僕等は並んで腰をおろし、いろいろのことを話してゐた。T君はついこの春に巴里にある勤め先から東京へ歸つたばかりだつた。從つて僕等の間には巴里の話も出勝ちだつた。カイヨオ夫人の話、蟹料理の話、御外遊中の或殿下の話、……

「佛蘭西は存外困つてはゐないよ。唯元來佛蘭西人と云ふやつは稅を出したがらない國民だから、內閣はいつも倒れるがね。」

「だつてフランは暴落するしさ。」

「それは新聞を讀んでゐればね。しかし向うにゐて見給へ。新聞紙上の日本なるものはのべつに大地震や大洪水があるから。」

するとレエン・コオトを著た男が一人僕等の向うへ來て腰をおろした。僕はちよつと無氣味になり、何か前に聞いた幽靈の話をT君に話したい心もちを感じた。が、T君はその前に杖の柄をくるりと左へ向け、顏は前を向いたまま、小聲に僕に話しかけた。

「あすこに女が一人ゐるだらう？ 鼠色の毛絲のショオルをした。……」

「あの西洋髮を結つた女か？」

「うん、風呂敷包みを抱へてゐる女さ。あいつはこの夏は輕井澤にゐたよ。ちよつと洒落れた洋裝などをしてね。」

しかし彼女は誰の目にも見すぼらしいなりをしてゐるのに違ひなかつた。僕はT君と話しながら、そつと彼女を眺めてゐた。彼女はどこか眉の間に氣違ひらしい感じのする顏をしてゐた。しかもその又風呂敷包みの中から豹に似た海綿をはみ出させてゐた。

「輕井澤にゐた時には若い亞米利加人と踊つたりしてゐたつけ。モダアン……何と云ふやつかね。」

レエン・コオトを著た男は僕のT君と別れる時にはいつかそこにゐなくなつてゐた。僕は省線電車の或停車場からやはり鞄をぶら下げたまま、或ホテルへ歩いて行つた。往來の兩側に立つてゐるのは大抵大きいビルディングだつた。僕はそこを歩いてゐるうちにふと松林を思ひ出したのみならず僕の視野のうちに妙なものを見つけ出した。妙なものを？――と云ふのは絕えずまはつてゐる半透明の齒車だつた。僕はかう云ふ經驗を前にも何度か持ち合せてゐた。齒車は次第に數をふやし、半ば僕の視野を塞いでしまふが、それも長いことではない、暫らくの

後には消え失せる代りに今度は頭痛を感じはじめる、――それはいつも同じことだつた。眼科の医者はこの錯覚（？）の為に度々僕に節煙を命じた。しかしかう云ふ歯車は僕の煙草に親まない二十前にも見えないことはなかつた。僕は又はじまつたなと思ひ、左の目の視力をためす為に片手に右の目を塞いで見た。左の目は果して何ともなかつた。しかし右の目の瞼の裏には歯車が幾つもまはつてゐた。僕は右側のビルディングの次第に消えてしまふのを見ながら、せつせと往来を歩いて行つた。

ホテルの玄関へはひつた時には歯車ももう消え失せてゐた。が、頭痛はまだ残つてゐた。僕は外套や帽子を預ける次手に部屋を一つとつて貰ふことにした。それから或雑誌社へ電話をかけて金のことを相談した。

結婚披露式の晩餐はとうに始まつてゐたらしかつた。僕はテエブルの隅に坐り、ナイフやフォオクを動かし出した。正面の新郎や新婦をはじめ、白い凹字形のテエブルに就いた五十人あまりの人々は勿論いづれも陽気だつたが、僕の心もちは明るい電燈の光の下にだんだん憂鬱になるばかりだつた。僕はこの心もちを遁れる為に隣にゐた客に話しかけた。彼は丁度獅子のやうに白い頬髯を伸ばした老人だつた。のみならず僕も名を知つてゐた或名高い漢学者だつた。従つて又僕等の話はいつか古典の上へ落ちて行つた。

「麒麟はつまり一角獣ですね。それから鳳凰もフェニックスと云ふ鳥の、……」

この名高い漢学者はかう云ふ僕の話にも興味を感じてゐるらしかつた。僕は機械的にしやべつてゐるうちにだんだん病的な破壊慾を感じ、堯舜を架空の人物にしたのは勿論、「春秋」の著者もずつと後の漢代の人だつたことを話し出した。するとこの漢学者は露骨に不快な表情を示し、少しも僕の顔を見ずに殆ど虎の唸るやうに僕の話を截り離した。

「もし堯舜もゐなかつたとすれば、孔子は譃をつかれたことになる。聖人の譃をつかれる筈はない。」

僕は勿論黙つてしまつた。それから又皿の上の肉へナイフやフォオクを加へようとした。すると小さい蛆が一匹静かに肉の縁に蠢いてゐた。蛆は僕の頭の中に Worm と云ふ英語を呼び起した。それは又麒麟や鳳凰のやうに或伝説的動物を意味してゐる言葉にも違ひなかつた。僕はナイフやフォオクを置き、いつか僕の杯にシャンパアニュのつがれるのを眺めてゐた。

やつと晩餐のすんだ後、僕は前にとつて置いた僕の部屋へこもる為に人気のない廊下を歩いて行つた。廊下は僕にはホテルよりも監獄らしい感じを与へるものだつた。しかし幸ひにも頭痛だけはいつの間にか薄らいでゐた。

僕の部屋には鞄は勿論、帽子や外套も持つて来てあつた。僕は壁にかけた外套に僕自身の立ち姿を感じ、急いでそれを部屋の隅の衣裳戸棚の中へ抛りこんだ。それから鏡台の前へ行き、ぢつと鏡に僕の顔を映した。鏡に映つた僕の顔は皮膚の下の骨組みを露はしてゐた。蛆はかう云ふ僕の記憶に忽ちはつきり浮び出した。

僕は戸をあけて廊下へ出、どこと云ふことなしに歩いて行つた。するとロッビイへ出る隅に緑いろの笠をかけた、背の高いスタンドの電燈が一つ硝子戸に鮮かに映つてゐた。それは何か僕の心に平和な感じを与へるものだつた。僕はその前の椅子に坐り、いろいろのことを考へてゐた。が、そこにも五分とは坐つてゐる訳に行かなかつた。レエン・コオトは今度も亦僕の横にあつた長椅子の背中に如何にもだらりと脱ぎかけてあつた。

「しかも今は寒中だと云ふのに。」

僕はこんなことを考へながら、もう一度廊下を引き返して行つた。廊下の隅の給仕だまりには一人も給仕は見えなかつた。しかし彼等の話し聲はちよつと僕の耳をかすめて行つた。それは何とか言はれたのに答へた All right と云ふ英語だつた。「オオル・ライト」？――僕はいつかこの對話の意味を正確に摑まうとあせつてゐた。「オオル・ライト」？「オオル・ライト」？何が一體オオル・ライトなのだらう？

僕の部屋は勿論ひつそりしてゐた。が、戸をあけてはひることは妙に僕には無氣味だつた。僕はちよつとためらつた後、思ひ切つて部屋の中へはひつて行つた。それから鏡を見ないやうにし、机の前の椅子に腰をおろした。椅子は蜥蜴の皮に近い、青い、マロツク皮の安樂椅子だつた。僕は鞄をあけて原稿用紙を出し、或短篇を續けようとした。けれどもインクをつけたペンはいつまでたつても動かなかつた。のみならずやつと動いたと思ふと、同じ言葉ばかり書きつづけてゐた。All right...All right...All right sir... All right.

そこへ突然鳴り出したのはベッドの側にある電話だつた。僕は驚いて立ち上り、受話器を耳へやつて返事をした。

「どなた？」

「あたしです。あたし……」

相手は僕の姉の娘だつた。

「何だい？どうかしたのかい？」

「ええ、あの大へんなことが起つたんです。ですから、……大へんなことが起つたもんですから、今叔母さんにも電話をかけたんです。」

「大へんなこと？」

「ええ、ですからすぐに來て下さい。すぐにですよ。」

電話はそれぎり切れてしまつた。僕はもとのやうに受話器をかけ、反射的にベルの紐を押した。しかし僕の手の震へてゐることは僕自身はつきり意識してゐた。給仕は容易にやつて來なかつた。僕は苛立たしさよりも苦しさを感じ、何度もベルの紐を押した。やつと運命の僕に敎へた「オオル・ライト」と云ふ言葉を了解しながら。

僕の姉の夫はその日の午後、東京から餘り離れてゐない或田舎に轢死してゐた。しかも季節に緣のないレエン・コオトをひつかけてゐた。僕はいまもそのホテルの部屋に前の短篇を書きつづけてゐる。眞夜中の廊下には誰も通らない。が、時時戸の外に翼の音の聞えることもある。どこかに鳥でも飼つてあるのかも知れない。

（昭和二年三月二十三日作）

二　復讐

僕はこのホテルの部屋に午前八時頃に目を醒ました。が、ベッドをおりようとすると、スリッパアは不思議にも片つぽしかなかつた。それはこの一二年の間、いつも僕に恐怖だの不安だのを與へる現象だつた。のみならずサンダアルを片つぽだけはいた希臘神話の中の王子を思ひ出させる現象だつた。僕はベルを押して給仕を呼び、スリッパアの片つぽを探して貰ふことにした。給仕はけげんな顏をしながら、狹い部屋の中を探しまはつた。

「ここにありました。このバスの部屋の中に。」

「どうして又そんな所へ行つてゐたのだらう？」

「さあ、鼠かも知れません。」

僕は給仕の退いた後、牛乳を入れない珈琲を飲み、前の小説を仕上げにかかつた。凝灰岩を四角に組んだ窓は雪のある庭に向つてゐた。僕はペンを休める度にぼんやりとこの雪を眺めたりした。雪は莟を持つた沈丁花の下に都會

の煤煙によごれてゐた。それは何か僕の心に傷ましさを與へる眺めだつた。僕は卷煙草をふかしながら、いつかペンを動かさずにいろいろのことを考へてゐた。妻のことを、子供たちのことを、就中姉の夫のことを。……

姉の夫は自殺する前に放火の嫌疑を蒙つてゐた。それも亦實際仕かたはなかつた。彼は家の燒ける前に家の價格に二倍する火災保險に加入してゐた。しかも僞證罪を犯した爲に執行猶豫中の體になつてゐた。けれども僕を不安にしたのは彼の自殺したことよりも僕の東京へ歸る度に必ず火の燃えるのを見たことだつた。僕は或は汽車の中から山を燒いてゐる火を見たり、或は又自動車の中から(その時は妻子とも一しよだつた。)常磐橋界隈の火事を見たりしてゐた。それは彼の家の燒けない前にもおのづから僕に火事のある豫感を與へない譯には行かなかつた。

「今年は家が火事になるかも知れないぜ。」

「そんな縁起の惡いことを。……それでも火事になつたら大變ですね。保險は碌についてゐないし、……」

僕等はそんなことを話し合つたりした。しかし僕の家は燒けずに、——僕は努めて妄想を押しのけ、もう一度ペンを動かさうとした。が、ペンはどうしても一行とは樂に動かなかつた。僕はとうとう机の前を離れ、ベッドの上に轉がつたまま、トルストイの Polikouchka を讀みはじめた。この小説の主人公は虚榮心や病的傾向や名譽心の入り交つた、複雜な性格の持ち主だつた。しかも彼の一生の悲喜劇は多少の修正を加へさへすれば、僕の一生のカリカチュアだつた。殊に彼の悲喜劇の中に運命の冷笑を感じるのは次第に僕を無氣味にし出した。僕は一時間とたたないうちにベッドの上から飛び起きるが早いか窓かけの垂れた部屋の隅へ力一ぱい本を抛りつけた。

「くたばつてしまへ!」

すると大きな鼠が一匹窓かけの下からバスの部屋へ斜めに床の上を走つて行つた。僕は一足飛びにバスの部屋へ行き、戸をあけて中を探しまはつた。が、白いタッブのかげにも鼠らしいものは見えなかつた。僕は急に無氣味になり、慌ててスリッパアを靴に換へると、人氣のない廊下を歩いて行つた。

廊下はけふも不相變牢獄のやうに憂鬱だつた。僕は頭を垂れたまま、階段を上つたり下りたりしてゐるうちにいつかコック部屋へはひつてゐた。コック部屋は存外明るかつた。が、片側に並んだ竈は幾つも炎を動かしてゐた。僕はそこを通りぬけながら、白い帽をかぶつたコックたちの冷やかに僕を見てゐるのを感じた。同時に又僕の墮ちた地獄を感じた。「神よ、我を罰し給へ。怒り給ふこと勿れ。恐らくは我れ滅びん。」——かう云ふ祈禱もこの瞬間にはおのづから僕の脣にのぼらない訣には行かなかつた。

僕はこのホテルの外へ出ると、青ぞらの映つた雪解けの道をせつせと姉の家へ歩いて行つた。道に沿うた公園の樹木は皆枝や葉を黑ませてゐた。のみならずどれも一本ごとに丁度僕等人間のやうに前や後ろを具へてゐた。それも亦僕には不快よりも恐怖に近いものを運んで來た。僕はダンテの地獄の中にある、樹木になつた魂を思ひ出し、ビルディングばかり並んでゐる電車線路の向うを歩くことにした。しかしそこも一町とは無事に歩くことは出來なかつた。

「ちよつと通りがかりに失禮ですが、……」

それは金鈕の制服を著た二十二三の青年だつた。僕は默つてこの青年を見つめ、彼の鼻の左の側に黑子のあることを發見した。彼は帽を脫

じだま、怯づ怯づから僕に話しかけた。
「Aさんではいらつしやいませんか？」
「さうです。」
「どうもそんな氣持がしたもんですから、……」
「何か御用ですか？」
「いえ、唯お目にかかりたかつただけです。僕も先生の愛讀者の……」
僕はもうその時にはちよつと帽をとつたぎり、彼を後ろに歩き出してゐた。先生、A先生、――それは僕にはこの頃では最も不快な言葉だつた。僕はあらゆる罪惡を犯してゐることを信じてゐた。しかも彼等は何かの機會に僕を先生と呼びつづけてゐた。僕はそこに僕を嘲る何ものかを感ぜずにはゐられなかつた。何ものかを？――しかし僕の物質主義は神秘主義を拒絶せずにはゐられなかつた。僕はつい二三箇月前にも或小さい同人雜誌にかう云ふ言葉を發表してゐた。――「僕は藝術的良心を始め、どう云ふ良心も持つてゐない。僕の持つてゐるのは神經だけである。……」
姉は三人の子供たちと一しよに露地の奧のバラツクに避難してゐた。褐色の紙を貼つたバラツクの中は外よりも寒いくらゐだつた。僕等は火鉢に手をかざしながら、いろいろのことを話し合つた。體の逞しい姉の夫は人一倍痩せ細つた僕を本能的に輕蔑してゐた。のみならず僕の作品の不道德であることを公言してゐた。僕はいつも冷やかにかう云ふ彼を見おろしたまま、一度も打ちとけて話したことはなかつた。しかし姉と話してゐるうちにだんだん彼も僕のやうに地獄に墮ちてゐたことを悟り出した。彼は現に寢臺車の中に幽靈を見たとか云ふことだつた。が、僕は卷煙草に火をつけ、努めて金のことばかり話しつづけた。
「何しろかう云ふ際だしするから、何も彼も賣つてしまはうと思ふの。」
「それはさうだ。タイプライタアなどは幾らかになるだらう。」
「ええ、それから畫などもあるし。」
「次手にNさん(姉の夫)の肖像畫も賣るか？しかしあれは……」
僕はバラツクの壁にかけた、額縁のない一枚のコンテ畫を見ると、迂闊に常談も言はれないのを感じた。轢死した彼は汽車の爲に顏もすつかり肉塊になり、僅かに唯口髭だけ殘つてゐたとか云ふことだつた。この話は勿論話自身も薄氣味惡いのに違ひなかつた。しかし彼の肖像畫はどこも完全に描いてあるものの、口髭だけはなぜかぼんやりしてゐた。僕は光線の加減かと思ひ、この一枚のコンテ畫をいろいろの位置から眺めるやうにした。
「何をしてゐるの？」
「何でもないよ。……唯あの肖像畫は口のまはりだけ……」
姉はちよつと振り返りながら、何も氣づかないやうに返事をした。
「髭だけ妙に薄いやうでせう。」
僕の見たものは錯覺ではなかつた。しかし錯覺ではないとすれば、――僕は午飯の世話にならないうちに姉の家を出ることにした。
「まあ、善いでせう。」
「又あしたでも、……けふは青山まで出かけるのだから。」
「ああ、あすこ？まだ體の具合は惡いの？」
「やつぱり藥ばかり嚥んでゐる。催眠藥だけでも大變だよ。ヴェロナアル、ノイロナアル、トリオナアル、ヌマアル……」
三十分ばかりたつた後、僕は或ビルディングへはひり、昇降機に乘つて三階へのぼつた。それから或レストオランの硝子戸を押してはひらうとした。が、硝子戸は動かなかつた。のみならずそこには「定休日」を書いた漆塗りの札も

下つてゐた。僕は愈不快になり、硝子戸の向うのテエブルの上に林檎やバナナを盛つたのを見たまま、もう一度往來へ出ることにした。すると會社員らしい男が二人何か快活にしやべりながらこのビルディングへはひる爲に僕の肩をこすつて行つた。彼等の一人はその拍子に「イライラしてね、」と言つたらしかつた

僕は往來に佇んだなり、タクシイの通るのを待ち合せてゐた。タクシイは容易に通らなかつた。のみならずたまに通つたのは必ず黄いろい車だつた。（この黄いろいタクシイはなぜか僕に交通事故の面倒をかけるのを常としてゐた。）そのうちに僕は緣起の好い綠いろの車を見つけ、兎に角青山の墓地に近い精神病院へ出かけることにした。

「イライラする。――Tantalizing――Tantalus――Inferno……」

タンタルスは實際硝子戸越しに果物を眺めた僕自身だつた。僕は二度も僕の目に浮かんだダンテの地獄を呪ひながらぢつと運轉手の背中を眺めてゐた。そのうちに又あらゆるものの譃であることを感じ出した。政治、實業、藝術、科學、――いづれも皆かう云ふ僕にはこの恐ろしい人生を隱した雜色のエナメルに外ならなかつた。

僕はだんだん息苦しさを感じ、タクシイの窓をあけ放つたりした。が、何か心臟をしめられる感じは去らなかつた。

綠いろのタクシイはやつと神宮前へ走りかかつた。そこには或精神病院へ曲る橫町が一つある筈だつた。しかしそれもけふだけはなぜか僕にはわからなかつた。僕は電車の線路に沿ひ何度もタクシイを往復させた後、とうとうあきらめておりることにした。

僕はやつとその橫町を見つけ、ぬかるみの多い道を曲つて行つた。するといつか道を間違へ、青山齋場の前へ出てしまつた。それは彼是十年前にあつた夏目先生の告別式以來、一度も僕は門の前さへ通つたことのない建物だつた。十年前の僕も幸福ではなかつた。しかし少くとも平和だつた。僕は砂利を敷いた門の中を眺め、「漱石山房」の芭蕉を思ひ出しながら、何か僕の一生も一段落のついたことを感じない訣には行かなかつた。のみならずこの墓地の前へ十年目に僕をつれて來た何ものかを感じない訣にも行かなかつた。

或精神病院の門を出た後、僕は又自動車に乘り、前のホテルへ歸ることにした。が、このホテルの玄關へおりると、レエン・コオトを著た男が一人何か給仕と喧嘩をしてゐた。給仕と？――いや、それは給仕ではない、綠いろの服を著た自動車掛りだつた。僕はこのホテルへはひることに何か不吉な心もちを感じ、さつさともとの道を引き返して行つた。

僕の銀座通りへ出た時には彼是日の暮も近づいてゐた。僕は兩側に並んだ店や目まぐるしい人通りに一層憂鬱にならずにはゐられなかつた。殊に往來の人人の罪などと云ふものを知らないやうに輕快に歩いてゐるのは不快だつた。僕は薄明るい外光に電燈の光のまじつた中をどこまでも北へ歩いて行つた。そのうちに僕の目を捉へたのは雜誌などを積み上げた本屋だつた。僕はこの本屋の店へはひり、ぼんやりと何段かの書棚を見上げた。それから「希臘神話」と云ふ一冊の本へ目を通すことにした。黄いろい表紙をした「希臘神話」は子供の爲に書かれたものらしかつた。けれども偶然僕の讀んだ一行は忽ち僕を打ちのめした。「一番偉いツォイスの神でも復讐の神にはかなひません。……」

僕はこの本屋の店を後ろに人ごみの中を歩いて行つた。いつか曲り出した僕の背中に絶えず僕をつけ狙つてゐる復讐の神を感じながら。……

三　夜

僕は丸善の二階の書棚にストリントベルグの「傳說」を見つけ、二三頁づつ目を通した。それは僕の經驗と大差のないことを書いたものだつた。のみならず黃いろい表紙をしてゐた。僕は「傳說」を書棚へ戾し、今度は殆ど手當り次第に厚い本を一册引きずり出した。しかしこの本も插し畫の一枚に僕等人間と變りのない、目鼻のある齒車ばかり並べてゐた。（それは或獨逸人の集めた精神病者の畫集だつた。）僕はいつか憂鬱の中に反抗精神の起るのを感じ、やぶれかぶれになつた賭博狂のやうにいろいろの本を開いて行つた。が、なぜかどの本も必ず文章か插し畫かの中に多少の針を隱してゐた。どの本も？——僕は何度も讀み返した「マダム・ボヴァリイ」を手にとつた時さへ、畢竟僕自身も中產階級のムッシウ・ボヴァリイに外ならないのを感じた。……

日の暮に近い丸善の二階には僕の外に客もないらしかつた。僕は電燈の光の中に書棚の間をさまよつて行つた。それから「宗教」と云ふ札を掲げた書棚の前へ足を休め、綠いろの表紙をした一册の本へ目を通した。この本は目次の第幾章かに「恐しい四つの敵、——疑惑、恐怖、驕慢、官能的欲望」と云ふ言葉を並べてゐた。僕はかう云ふ言葉を見るが早いか一層反抗的精神の起るのを感じた。それ等の敵と呼ばれるものは少くとも僕には感受性や理智の異名に外ならなかつた。が、傳統的精神もやはり近代的精神のやうにやはり僕を不幸にするのは愈僕にはたまらなかつた　僕はこの本を手にしたまま、ふといつかペン　ネエムに用ひた「壽陵余子」と云ふ言葉を用ひ出した。それは邯鄲の步みを學ばないうちに壽陵の步みを忘れてしまひ、蛇行匍匐して歸鄕したと云ふ「韓非子」の中の靑年だつた。今日の僕は誰の目にも「壽陵余子」であるのに違ひなかつた。しかしまだ地獄へ墮ちなかつた僕もこのペン・ネエムを用ひてゐたことは、——僕は大きい書棚を後ろに努めて妄想を拂ふやうにし、丁度僕の向うにあつたポスタアの展覽室へはひつて行つた。がそこにも一枚のポスタアの中には聖ジョオヂらしい騎士が一人翼のある龍を刺し殺してゐた。しかもその騎士は兜の下に僕の敵の一人に近いしかめ面を半ば露してゐた。僕は又「韓非子」の中の屠龍の技の話を思ひ出し、展覽室へ通りぬけずに幅の廣い階段を下つて行つた。

僕はもう夜になつた日本橋通りを歩きながら、「屠龍」と云ふ言葉を考へつづけた。それは又僕の持つてゐる硯の銘にも違ひなかつた。この硯を僕に贈つたのは或若い實業家だつた。彼はいろいろの事業に失敗した揚句、とうとう去年の暮に破產してしまつた。僕は高い空を見上げ、無數の星の光の中にどのくらゐこの地球の小さいかと云ふことを、——從つてどのくらゐ僕自身の小さいかと云ふことを考へようとした。しかし晝間は晴れてゐた空もいつかもうすつかり曇つてゐた。僕は突然何ものかの僕に敵意を持つてゐるのを感じ、電車線路の向うにある或カッフェへ避難することにした。

それは「避難」に違ひなかつた。僕はこのカッフェの薔薇色の壁に何か平和に近いものを感じ、一番奧のテエブルの前にやつと樂々と腰をおろした。そこには幸ひ僕の外に二三人の客のあるだけだつた。僕は一杯のココアを啜り、ふだんのやうに卷煙草をふかし出した。卷煙草の煙は薔薇色の壁へかすかに靑い煙を立ちのぼらせて行つた。この優しい色の調和もやはり僕には愉快だつた。けれども僕は暫らくの後、僕の左の壁にかけたナポレオンの肖像を見つけ、そろそろ又不安を感じ出した。ナポレオンはまだ學

生だつた時、彼の地理のノオト・ブックの最後に「セエント・ヘレナ、小さい島」と記してゐた。それは或は僕等の言ふやうに偶然だつたかも知れなかつた。しかしナポレオン自身にさへ恐怖を呼び起したのは確かだつた。……

僕はナポレオンを見つめたまま、僕自身の作品を考へ出した。するとまづ記憶に浮かんだのは「侏儒の言葉」の中のアフォリズムだつた。（殊に「人生は地獄よりも地獄的である」と云ふ言葉だつた。）それから「地獄變」の主人公――良秀と云ふ畫師の運命だつた。それから……僕は卷煙草をふかしながら、かう云ふ記憶から逃れる爲にこのカッフェの中を眺めまはした。僕のここへ避難したのは五分もたたない前のことだつた。しかしこのカッフェは短時間の間にすつかり容子を改めてゐた。就中僕を不快にしたのはマホガニイまがひの椅子やテエブルの少しもあたりの薔薇色の壁と調和を保つてゐないことだつた。僕はもう一度人目に見えない苦しみの中に落ちこむのを恐れ、銀貨を一枚投げ出すが早いか、匆匆このカッフェを出ようとした。

「もし、もし、二十錢頂きますが……」

僕の投げ出したのは銅貨だつた。

僕は屈辱を感じながら、ひとり往來を歩いてゐるうちにふと遠い松林の中にある僕の家を思ひ出した。それは或る郊外にある僕の養父母の家ではない、唯僕を中心にした家族の爲に借りた家だつた。僕は彼是十年前にもかう云ふ家に暮してゐた。しかし或事情の爲に輕卒にも父母と同居し出した。同時に又奴隷に、暴君に、力のない利己主義者に變り出した。……

前のホテルに歸つたのはもう彼是十時だつた。ずつと長い途を歩いて來た僕は僕の部屋へ歸る力を失ひ、太い丸太の火を燃やした爐の前の椅子に腰をおろした。それから僕の計畫してゐた長篇のことを考へ出した。それは推古から明治に至る各時代の民を主人公にし、大體三十餘りの短篇を時代順に連ねた長篇だつた。僕は火の粉の舞ひ上るのを見ながら、ふと宮城の前にある或銅像を思ひ出した。この銅像は甲冑を著、忠義の心そのもののやうに高だかと馬の上に跨つてゐた。しかし彼の敵だつたのは、――

「譃！」

僕は又遠い過去から目近い現代へすべり落ちた。そこへ幸ひにも來合せたのは或先輩の彫刻家だつた。彼は不相變天鵞絨の服を著、短い山羊髯を反らせてゐた。僕は椅子から立ち上り、彼のさし出した手を握つた。（それは僕の習慣ではない、ハリやベルリンに半生を送つた彼の習慣に從つたものだつた。）が、彼の手は不思議にも爬蟲類の皮膚のやうに濕つてゐた。

「君はここに泊つてゐるのですか？」

「ええ、……」

「仕事をしに？」

「ええ、仕事もしてゐるのです。」

彼はぢつと僕の顏を見つめた。僕は彼の目の中に探偵に近い表情を感じた。

「どうです、僕の部屋へ話しに來ては？」

僕は挑戰的に話しかけた。（この勇氣に乏しい癖に忽ち挑戰的態度をとるのは僕の惡癖の一つだつた。）すると彼は微笑しながら、「どこ、君の部屋は？」と尋ね返した。

僕等は親友のやうに肩を並べ、靜かに話してゐる外國人たちの中を僕の部屋へ歸つて行つた。彼は僕の部屋へ來ると、鏡を後ろにして腰をおろした。それからいろいろのことを話し出した。いろいろのことを？――しかし大抵は女の話だつた。僕は罪を犯した爲に地獄に墮ちた一人に違ひなかつた。が、それだけに惡德の話は愈僕を憂鬱にした。僕は一時的清教徒に

なり、それ等の女を嘲り出した。

「S子さんの脣を見給へ。あれは何人もの接吻の爲に……」

僕はふと口を噤み、鏡の中の彼の後ろ姿を見つめた。彼は丁度耳の下に黄いろい膏藥を貼りつけてゐた。

「何人もの接吻の爲に？」

「そんな人のやうに思ひますがね。」

彼は微笑して頷いてゐた。僕は彼の内心では僕の祕密を知る爲に絶えず僕を注意してゐるのを感じた。けれどもやはり僕等の話は女のことを離れなかつた。僕は彼を憎むよりも僕自身の氣の弱いのを恥ぢ、愈憂鬱にならずにはゐられなかつた。

やつと彼の歸つた後、僕はベッドの上に轉がつたまま、「暗夜行路」を讀みはじめた。主人公の精神的鬪爭は一一僕には痛切だつた。僕はこの主人公に比べると、どのくらゐ僕の阿呆だつたかを感じ、いつか涙を流してゐた。同時に又涙は僕の氣もちにいつか平和を與へてゐた。が、それも長いことではなかつた。僕の右の目はもう一度半透明の齒車を感じ出した。齒車はやはりまはりながら、次第に數を殖やして行つた。僕は頭痛のはじまることを恐れ、枕もとに本を置いたまま、〇・八グラムのヴェロナアルを嚥み、兎に角ぐつすりと眠ることにした。

けれども僕は夢の中に或プウルを眺めてゐた。そこには又男女の子供たちが何人も泳いだりもぐつたりしてゐた。僕はこのプウルを後ろに向うの松林へ歩いて行つた。すると誰か後ろから「おとうさん」と僕に聲をかけた。僕はちよつとふり返り、プウルの前に立つた妻を見つけた。同時に又烈しい後悔を感じた。

「おとうさん、タオルは？」

「タオルは入らない。子供たちに氣をつけるのだよ。」

僕は又歩みをつづけ出した。が、僕の歩いてゐるのはいつかプラットフオオムに變つてゐた。それは田舍の停車場だつたと見え、長い生け垣のあるプラットフオオムだつた。そこには又Hと云ふ大學生や年をとつた女も佇んでゐた。彼等は僕の顏を見ると、僕の前へ歩み寄り、口口に僕へ話しかけた。

「大火事でしたわね。」

「僕もやつと逃げて來たの。」

僕はこの年をとつた女に何か見覺えのあるやうに感じた。のみならず彼女と話してゐることに或愉快な興奮を感じた。そこへ汽車は煙をあげながら、靜かにプラットフオオムへ横づけになつた。僕はひとりこの汽車に乘り、兩側に白い布を垂らした寢臺の間を歩いて行つた。すると或寢臺の上にミイラに近い裸體の女が一人こちらを向いて横になつてゐた。それは又僕の復讐の神、――或狂人の娘に違ひなかつた。

……

僕は目を醒ますが早いか、思はずベッドを飛び下りてゐた。僕の部屋は不相變電燈の光に明るかつた。が、どこかに翼の音や鼠のきしる音も聞えてゐた。僕は戸をあけて廊下へ出、前の爐の前へ急いで行つた。それから椅子に腰をおろしたまま、覺束ない炎を眺め出した。そこへ白い服を着た給仕が一人焚き木を加へに歩み寄つた。

「何時？」

「三時半ぐらゐでございます。」

しかし向うのロッビイの隅には亞米利加人らしい女が一人何か本を讀みつづけてゐた。彼女の著てゐるのは遠目に見ても綠いろのドレッスに違ひなかつた。僕は何か救はれたのを感じ、ぢつと夜のあけるのを待つことにした。長年の病苦に惱み拔いた擧句、靜かに死を待つてゐる老人のやうに。

（昭和二年三月作）

四　まだ？

僕はこのホテルの部屋にやつと前の短篇を書き上げ、或雜誌に送ることにした。尤も僕の原稿料は一週間の滯在費にも足りないものだつた。が、僕は僕の仕事を片づけたことに滿足し、何か精神的強壯劑を求める爲に銀座の或本屋へ出かけることにした。

冬の日の當つたアスファルトの上には紙屑が幾つもころがつてゐた。それ等の紙屑は光の加減か、いづれも薔薇の花にそつくりだつた。僕は何ものかの好意を感じ、その本屋の店へはひつて行つた。そこも亦ふだんよりも小綺麗だつた。唯眼鏡をかけた小娘が一人何か店員と話してゐたのは僕には氣がかりにならないこともなかつた。けれども僕は往來に落ちた紙屑の薔薇の花を思ひ出し、「アナトオル・フランスの對話集」や「メリメエの書簡集」を買ふことにした。

僕は二冊の本を抱へ、或カッフェへはひつて行つた。それから一番奧のテエブルの前に珈琲の來るのを待つことにした。僕の向うには親子らしい男女が二人坐つてゐた。その息子は僕よりも若かつたものの、殆ど僕にそつくりだつた。のみならず彼等は戀人同志のやうに顏を近づけて話し合つてゐた。僕は彼等を見てゐるうちに少くとも息子は性的にも母親に慰めを與へてゐることを意識してゐるのに氣づき出した。それは僕にも覺えのある親和力の一例に違ひなかつた。同時に又現世を地獄にする或意志の一例にも違ひなかつた。しかし、——僕は又苦しみに陷るのを恐れ、丁度珈琲の來たのを幸ひ、「メリメエの書簡集」を讀みはじめた。彼はこの書簡集の中にも彼の小說の中のやうに鋭いアフォリズムを閃かせてゐた。それ等のアフォリズムは僕の氣もちをいつか鐵のやうに巖疊にし出した。（この影響を受け易いことも僕の弱點の一つだつた。）僕は一杯の珈琲を飲み了つた後、「何でも來い」と云ふ氣になり、さつさとこのカッフェを後ろにして行つた。

僕は往來を歩きながら、いろいろの飾り窓を覗いて行つた。或額緣屋の飾り窓はベエトオヴェンの肖像畫を掲げてゐた。それは髮を逆立てた天才そのものらしい肖像畫だつた。僕はこのベエトオヴェンを滑稽に感ぜずにはゐられなかつた。……

そのうちにふと出會つたのは高等學校以來の舊友だつた。この應用化學の大學教授は大きい中折れ鞄を抱へ、片目だけまつ赤に血を流してゐた。

「どうした、君の目は？」

「これか？　これは唯の結膜炎さ。」

僕はふと十四五年以來、いつも親和力を感じる度に僕の目も彼の目のやうに結膜炎を起すのを思ひ出した。が、何とも言はなかつた。彼は僕の肩を叩き、僕等の友だちのことを話し出した。それから話をつづけたまま、或カッフェへ僕をつれて行つた。

「久しぶりだなあ。朱舜水の建碑式以來だらう。」

彼は葉卷に火をつけた後、大理石のテエブル越しにかう僕に話しかけた。

「さうだ。あのシュシュン……」

僕はなぜか朱舜水と云ふ言葉を正確に發音出來なかつた。それは日本語だつただけにちよつと僕を不安にした。しかし彼は無頓着にいろいろのことを話して行つた。Kと云ふ小說家のことを、彼の買つたブル・ドッグのことを、リウイサイトと云ふ毒瓦斯のことを。……

「君はちつとも書かないやうだね。『點鬼簿』と云ふのは讀んだけれども。……あれは君の自敍傳かい？」

「うん、僕の自敍傳だ。」

「あれはちよつと病的だつたぜ。この頃は體は善いのかい？」
「不相變藥ばかり嚥んでゐる始末だ。」
「僕もこの頃は不眠症だがね。」
「僕も？――どうして君は『僕も』と言ふのだ？」
「だつて君も不眠症だつて言ふぢやないか？不眠症は危險だぜ。……」
　彼は左だけ充血した目に微笑に近いものを浮かべてゐた。僕は返事をする前に「不眠症」のシヤウの發音を正確に出來ないのを感じ出した。
「氣違ひの息子には當り前だ。」
　僕は十分とたたないうちにひとり又往來を步いて行つた。アスファルトの上に落ちた紙屑の時時僕等人間の顏のやうにも見えないことはなかつた。すると向うから斷髮にした女が一人通りかかつた。彼女は遠目には美しかつた。けれども目の前へ來たのを見ると、小皺のある上に醜い顏をしてゐた。のみならず妊娠してゐるらしかつた。僕は思はず顏をそむけ、廣い橫町を曲つて行つた。が、暫らく步いてゐるうちに痔の痛みを感じ出した。それは僕には坐浴より外に癒すことの出來ない痛みだつた。
「坐浴――ベエトオヴェンもやはり坐浴をしてゐた。……」
　坐浴に使ふ硫黃の匂は忽ち僕の鼻を襲ひ出した。しかし勿論往來にはどこにも硫黃は見えなかつた。僕はもう一度紙屑の薔薇の花を思ひ出しながら、努めてしつかりと步いて行つた。
　一時間ばかりたつた後、僕は僕の部屋にとぢこもつたまま、窓の前の机に向ひ、新らしい小說にとりかかつてゐた。ペンは僕にも不思議だつたくらゐ、ずんずん原稿用紙の上を走つて行つた。しかしそれも二三時間の後には誰か僕の目に見えないものに抑へられたやうにとまつてしまつた。僕はやむを得ず机の前を離れ、あちこちと部屋の中を步きまはつた。僕の誇大妄想はかう云ふ時に最も著しかつた。僕は野蠻な歡びの中に僕には兩親もなければ妻子もない、唯僕のペンから流れ出した命だけあると云ふ氣になつてゐた。
　けれども僕は四五分の後、電話に向はなければならなかつた。電話は何度返事をしても、唯何か曖昧な言葉を繰り返して傳へるばかりだつた。が、それに兎も角もモオルと聞えたのに違ひなかつた。僕はとうとう電話を離れ、もう一度部屋の中を步き出した。しかしモオルと云ふ言葉だけは妙に氣になつてならなかつた。
「モオル――Mole……」
　モオルは鼹鼠と云ふ英語だつた。この聯想も僕には愉快ではなかつた。が、僕は二三秒の後、Mole la mort に綴り直した。ラ・モルは、――死と云ふ佛蘭西語は忽ち僕を不安にした。死は姉の夫に迫つてゐたやうに僕にも迫つてゐるらしかつた。けれども僕は不安の中にも何か可笑しさを感じてゐた。のみならずいつか微笑してゐた。この可笑しさは何の爲に起るか？――それは僕自身にもわからなかつた。僕は久しぶりに鏡の前に立ち、まともに僕の影と向ひ合つた。僕の影も勿論微笑してゐた。僕はこの影を見つめてゐるうちに第二の僕のことを思ひ出した。第二の、獨逸人の所謂 Doppelgaenger は仕合せにも僕自身に見えたことはなかつた。しかし亞米利加の映畫俳優になつたK君の夫人は第二の僕を帝劇の廊下に見かけてゐた。（僕は突然K君の夫人に「先達はつい御挨拶もしませんで」と言はれ、當惑したことを覺えてゐる。）それからもう故人になつた或隻脚の飜譯家もやはり銀座の或煙草屋に第二の僕を見かけてゐた。死は或は僕よりも第二の僕に來るのかも知れなかつた。若し又僕に來たとしても、――僕は鏡に後ろを向け、窓の前の机へ歸つて行つた。

四角に凝灰岩を組んだ窓は枯芝や池を覗かせてゐた。僕はこの庭を眺めながら、遠い松林の中に燒いた何冊かのノオトブックや未完成の戲曲を思ひ出した。それからペンをとり上げると、もう一度新らしい小説を書きはじめた。

（昭和二年二月二十九日作）

五　赤光

日の光は僕を苦しめ出した。僕は實際鼴鼠のやうに窓の前へカアテンをおろし、晝間も電燈をともしたまま、せつせと前の小説をつづけて行つた。それから仕事に疲れると、テエヌの英吉利文學史をひろげ、詩人たちの生涯に目を通した。彼等はいづれも不幸だつた。エリザベス朝の巨人たちさへ、——一代の學者だつたベン・ジョンソンさへ彼の足の親指の上に羅馬とカルセエヂとの軍勢の戰ひを始めるのを眺めたほど神經的疲勞に陷つてゐた。僕はかう云ふ彼等の不幸に、殘酷な惡意に充ち滿ちた歡びを感じずにはゐられなかつた。

或東かぜの強い夜、（それは僕には善い徵だつた。）僕は地下室を拔けて往來へ出、或老人を尋ねることにした。彼は或聖書會社の屋根裏にたつた一人小使ひをしながら、祈禱や讀書に精進してゐた。僕等は火鉢に手をかざしながら、壁にかけた十字架の下にいろいろのことを話し合つた。なぜ僕の母は發狂したか？　なぜ僕の父の事業は失敗したか？　なぜ又僕は罰せられたか？——それ等の祕密を知つてゐる彼は妙に嚴かな微笑を浮かべ、いつまでも僕の相手をした。のみならず時時短い言葉に人生のカリカチュアを描いたりした。僕はこの屋根裏の隱者を尊敬しない訣には行かなかつた。しかし彼と話してゐるうちに彼も亦親和力の爲に動かされてゐることを發見した。——

「その植木屋の娘と云ふのは器量も善いし、氣立も善いし、——それはわたしに優しくしてくれるのです。」

「いくつ？」

「ことしで十八です。」

それは彼には父らしい愛であるかも知れなかつた。しかし僕は彼の目の中に情熱を感じずにはゐられなかつた。のみならず彼の勸めた林檎はいつか黄ばんだ皮の上へ一角獸の姿を現してゐた。（僕は木目や珈琲茶碗の龜裂に度たび神話的動物を發見してゐた。）一角獸は麒麟に違ひなかつた。僕は或敵意のある批評家の僕を「九百十年代の麒麟兒」と呼んだのを思ひ出し、この十字架のかかつた屋根裏も安全地帶ではないことを感じた。

「如何ですか、この頃は？」

「不相變神經ばかり苛苛してね。」

「それは藥では駄目ですよ。信者になる氣はありませんか？」

「若し僕でもなれるものなら……」

「何もむづかしいことはないのです。唯神を信じ、神の子の基督を信じ、基督の行つた奇蹟を信じさへすれば……」

「惡魔を信じることは出來ますがね。……」

「ではなぜ神を信じないのです？　若し影を信じるならば、光も信じずにはゐられないでせう？」

「しかし光のない暗もあるでせう。」

「光のない暗とは？」

僕は默るより外はなかつた。彼も亦僕のやうに暗の中を歩いてゐた。が、暗のある以上は光もあると信じてゐた。僕等の論理の異るのは唯かう云ふ一點だけだつた。しかしそれは少くとも僕には越えられない溝に違ひなかつた。……

「けれども光は必ずあるのです。その證據には奇蹟があるのですから。……奇蹟などと云ふ

ものは今でも度たび起つてゐるのですよ。」
「それは惡魔の行ふ奇蹟は、……」
「どうして又惡魔などと云ふのです？」
僕はこの一二年の間、僕自身の經驗したことを彼に話したい誘惑を感じた。が、彼から妻子に傳はり、僕も亦母のやうに精神病院にはひることを恐れない訣にも行かなかつた。
「あすこにあるのは？」
この逞しい老人は古い書棚をふり返り、何か牧羊神らしい表情を示した。
「ドストエフスキイ全集です。『罪と罰』はお讀みですか？」
僕は勿論十年前にも四五册のドストエフスキイに親しんでゐた。が、偶然（？）彼の言つた「罪と罰」と云ふ言葉に感動し、この本を貸して貰つた上、前のホテルへ歸ることにした。電燈の光に輝いた、人通りの多い往來はやはり僕には不快だつた。殊に知り人に遇ふことは到底堪へられないのに違ひなかつた。僕は努めて暗い往來を選び、盗人のやうに歩いて行つた。
しかし僕は暫らくの後、いつか胃の痛みを感じ出した。この痛みを止めるものは一杯のウイスキイのあるだけだつた。僕は或バアを見つけ、その戸を押してはひらうとした。けれども狹いバアの中には煙草の煙の立ちこめた中に藝術家らしい青年たちが何人も群がつて酒を飲んでゐた。のみならず彼等のまん中には耳隱しに結つた女が一人熱心にマンドリンを彈きつづけてゐた。僕は忽ち當惑を感じ、戸の中へはひらずに引き返した。するといつか僕の影の左右に搖られてゐるのを發見した。しかも僕を照らしてゐるのは無氣味にも赤い光だつた。僕は往來に立ちどまつた。けれども僕の影は前のやうに絶えず左右に動いてゐた。僕は怯づ怯づふり返り、やつとこのバアの軒に吊つた色硝子のランタアンを發見した。ランタアンは烈しい風の爲に徐ろに空中に動いてゐた。……
僕の次にはひつたのは或地下室のレストオランだつた。僕はそこのバアの前に立ち、ウイスキイを一杯註文した。
「ウイスキイを？ Black and white ばかりでございますが……」
僕は曹達水の中にウイスキイを入れ、默つて一口づつ飲みはじめた。僕の隣には新聞記者らしい三十前後の男が二人何か小聲に話してゐた。のみならず佛蘭西語を使つてゐた。僕は彼等に背中を向けたまま、全身に彼等の視線を感じた。それは實際電波のやうに僕の體にこたへるものだつた。彼等は確かに僕の名を知り、僕の噂をしてゐるらしかつた。
「Bien……très mauvais……pour quoi？……」
「Pour quoi？……le diable est mort！……」
「Oui, oui……d'enfe……」
僕は銀貨を一枚投げ出し、（それは僕の持つてゐる最後の一枚の銀貨だつた。）この地下室の外へのがれることにした。夜風の吹き渡る往來は多少胃の痛みの薄らいだ僕の神經を丈夫にした。僕はラスコルニコフを思ひ出し、何ごとも懺悔したい欲望を感じた。が、それは僕自身の外にも、――いや、僕の家族の外にも悲劇を生じるのに違ひなかつた。のみならずこの欲望さへ眞實かどうかは疑はしかつた。若し僕の神經さへ常人のやうに丈夫になれば、――けれども僕はその爲にはどこかへ行かなければならなかつた。マドリッドへ、リオへ、サマルカンドへ、……
そのうちに或店の軒に吊つた、白い小型の看板は突然僕を不安にした。それは自動車のタイアに翼のある商標を描いたものだつた。僕はこの商標に人工の翼を手よりにした古代の希臘人を思ひ出した。彼は空中に舞ひ上つた擧句、太陽の光に翼を燒かれ、とうとう海中に

溺死してゐた。マドリッドへ、リオへ、サマルカンドへ、――僕はかう云ふ僕の夢を嘲笑はない訣には行かなかつた。同時に又復讐の神に追はれたオレステスを考へない訣にも行かなかつた。

僕は運河に沿ひながら、暗い往來を歩いて行つた。そのうちに或郊外にある養父母の家を思ひ出した。養父母は勿論僕の歸るのを待ち暮らしてゐるのに違ひなかつた。恐らくは僕の子供たちも、――しかし僕はそこへ歸ると、おのづから僕を束縛してしまふ或力を恐れずにはゐられなかつた。運河は波立つた水の上に達磨船を一艘横づけにしてゐた。その又達磨船は船の底から薄い光を洩らしてゐた。そこにも何人かの男女の家族は生活してゐるのに違ひなかつた。やはり愛し合ふ爲に憎み合ひながら。……が、僕はもう一度戰闘的精神を呼び起し、ウイスキイの醉ひを感じたまま、前のホテルへ歸ることにした。

僕は又机に向ひ「メリメエの書簡集」を讀みつづけた。それは又いつの間にか僕に生活力を與へてゐた。しかし僕は晩年のメリメエの新教徒になつてゐたことを知ると、俄かに假面のかげにあるメリメエの顏を感じ出した。彼も亦やはり僕等のやうに暗の中を歩いてゐる一人だつた。暗の中を？――「暗夜行路」はかう云ふ僕には恐しい本に變りはじめた。僕は憂鬱を忘れる爲に「アナトオル・フランスの對話集」を讀みはじめた。が、この近代の牧羊神もやはり十字架を荷つてゐた。……

一時間ばかりたつた後、給仕は一束の郵便物を渡しに顏を出した。それ等の一つはライプツィッヒの本屋から僕に「近代の日本の女」と云ふ小論文を書けと云ふものだつた。なぜ彼等は特に僕にかう云ふ小論文を書かせるのであらう？　のみならずこの英語の手紙は「我我は丁度日本畫のやうに黑と白の外に色彩のない女の肖像畫でも滿足である」と云ふ肉筆のP・Sを加へてゐた。僕はかう云ふ一行にBlack and White と云ふウイスキイの名を思ひ出し、ずたずたにこの手紙を破つてしまつた。それから今度は手當り次第に一つの手紙の封を切り、黃いろい書簡箋に目を通した。この手紙を書いたのは僕らの知らない青年だつた。しかし二三行も讀まないうちに「あなたの『地獄變』は……」と云ふ言葉は僕を苛立たせずには措かなかつた。三番目に封を切つた手紙は僕の甥から來たものだつた。僕はやつと一息つき、家事上の問題などを讀んで行つた。けれどもそれさへ最後へ來ると、いきなり僕を打ちのめした。

「歌集『赤光』の再版を送りますから……」

赤光！　僕は何ものかの冷笑を感じ、僕の部屋の外へ避難することにした。廊下には誰も人かげはなかつた。僕は片手に壁を抑へ、やつとロッビイへ歩いて行つた。それから椅子に腰をおろし、兎に角卷煙草に火を移すことにした。卷煙草はなぜかエア・シップだつた。（僕はこのホテルへ落ち着いてから、いつもスタアばかり吸ふことにしてゐた。）人工の翼はもう一度僕の目の前へ浮かび出した。僕は向うにゐる給仕を呼び、スタアを二箱貰ふことにした。しかし給仕を信用すれば、スタアだけは生憎品切れだつた。

「エア・シップならばございますが、……」

僕は頭を振つたまま、廣いロッビイを眺めまはした。僕の向うには外國人が四五人テエブルを圍んで話してゐた。しかも彼等の中の一人――赤いワン・ピイスを着た女は小聲に彼等と話しながら、時時僕を見てゐるらしかつた。

「Mrs. Townshead……」

何か僕の目に見えないものはかう僕に囁いて行つた。ミセス・タウンスヘッドなどと云ふ名

は勿論僕の知らないものだつた。たとひ向うにゐる女の名にしても、——僕は又椅子から立ち上り、發狂することを恐れながら、僕の部屋へ歸ることにした。

僕は僕の部屋へ歸ると、すぐに或精神病院へ電話をかけるつもりだつた。が、そこへはひることは死ぬことに變らなかつた。僕はさんざんためらつた後、この恐怖を紛らす爲に「罪と罰」を讀みはじめた。しかし偶然開いた頁は「カラマゾフ兄弟」の一節だつた。僕は本を間違へたのかと思ひ、本の表紙へ目を落した。「罪と罰」——本は「罪と罰」に違ひなかつた。僕はこの製本屋の綴じ違へに、——その又綴じ違へた頁を開いたことに運命の指の動いてゐるのを感じ、やむを得ずそこを讀んで行つた。けれども一頁も讀まないうちに全身の震へるのを感じ出した。そこは惡魔に苦しめられるイヴアンを描いた一節だつた。イヴアンを、ストリントベルグを、モオパスサンを、或はこの部屋にゐる僕自身を。……

かう云ふ僕を救ふものは唯眠りのあるだけだつた。しかし催眠劑はいつの間にか一包みも殘らずになくなつてゐた。僕は到底眠らずに苦しみつづけるに堪へなかつた。が、絕望的な勇氣を生じ、珈琲を持つて來て貰つた上、死にもの狂ひにペンを動かすことにした。二枚、五枚、七枚、十枚、——原稿は見る見る出來上つて行つた。僕はこの小說の世界を超自然の動物に滿たしてゐた。のみならずその動物の一匹に僕自身の肖像畫を描いてゐた。けれども疲勞は徐ろに僕の頭を曇らせはじめた。僕はとうとう机の前を離れ、ベッドの上へ仰向けになつた。それから四五十分は眠つたらしかつた。しかし又誰か僕の耳にかう云ふ言葉を囁いたのを感じ、忽ち目を醒まして立ち上つた。

「Lo dablo est mort.」

凝灰岩の窓の外はいつか冷えびえと明けかかつてゐた。僕は丁度戶の前に佇み、誰もゐない部屋の中を眺めまはした。すると向うの窓硝子は斑らに外氣に曇つた上に小さい風景を現してゐた。それは黃ばんだ松林の向うに海のある風景に違ひなかつた。僕は怯づ怯づ窓の前へ近づき、この風景を造つてゐるものは實は庭の枯芝や池だつたことを發見した。けれども僕の錯覺はいつか僕の家に對する鄕愁に近いものを呼び起してゐた。

僕は九時にでもなり次第、或雜誌社へ電話をかけ、兎に角金の都合をした上、僕の家へ歸る決心をした。机の上に置いた鞄の中へ本や原稿を押しこみながら。

（昭和二年三月三十日作）

六　飛行機

僕は東海道線の或停車場からその奧の或避暑地へ自動車を飛ばした。運轉手はなぜかこの寒さに古いレエン・コオトをひつかけてゐた。僕は暗合を無氣味に思ひ、努めて彼を見ないやうに窓の外へ目をやることにした。すると低い松の生えた向うに、——恐らくは古い街道に葬式が一列通るのを見つけた。白張りの提灯や龍燈はその中に加はつてはゐないらしかつた。が、金銀の造花の蓮は靜かに輿の前後に搖いで行つた。

やつと僕の家へ歸つた後、僕は妻子や催眠藥の力により、二三日は可也平和に暮らした。僕の二階は松林の上にかすかに海を覗かせてゐた。僕はこの二階の机に向ひ、鳩の聲を聞きながら、午前だけ仕事をすることにした。鳥は鳩や鴉の外に雀も緣側へ舞ひこんだりした。それも亦僕には愉快だつた。「喜雀堂に入る。」——僕はペンを持つたまま、その度にこんな言葉を思ひ出した。

或生暖かい曇天の午後、僕は或雜貨店へイン

クを買ひに出かけて行つた。するとその店に並んでゐるのはセピア色のインクばかりだつた。セピア色のインクはどのインクよりも僕を不快にするのを常としてゐた。僕はやむを得ずこの店を出、人通りの少ない往來をぶらぶらひとり歩いて行つた。そこへ向うから近眼らしい四十前後の外國人が一人肩を聳かせて通りかかつた。彼はここに住んでゐる被害妄想狂の瑞典人だつた。しかも彼の名はストリントベルグだつた。僕は彼とすれ違ふ時、肉體的に何かこたへるのを感じた。

この往來は確かに二三町だつた。が、その二三町を通るうちに丁度半面だけ黒い犬は四度も僕の側を通つて行つた。僕は横町を曲りながら、ブラック・アンド・ホワイトのウイスキイを思ひ出した。のみならず今のストリントベルグのタイも黑と白だつたのを思ひ出した。それは僕にはどうしても偶然であるとは考へられなかつた。若し偶然でないとすれば、――僕は頭だけ歩いてゐるやうに感じ、ちよつと往來に立ち止つた。道ばたには針金の柵の中にかすかに虹の色を帶びた硝子の鉢が一つ捨ててあつた。この鉢は又底のまはりに翼らしい模樣を浮き上らせてゐた。そこへ松の梢から雀が何羽も舞ひ下つて來た。が、この鉢のあたりへ來ると、どの雀も皆言ひ合はせたやうに一度に空中へ逃げのぼつて行つた。……

僕は妻の實家へ行き、庭先の籐椅子に腰をおろした。庭の隅の金網には白いレグホン種の鷄が何羽も靜かに歩いてゐた。それから又僕の足もとには黑犬も一匹横になつてゐた。僕は誰にもわからない疑問を解かうとあせりながら、兎に角外見だけは冷やかに妻の母や弟と世間話をした。

「靜かですね、ここへ來ると。」

「それはまだ東京よりもね。」

「ここでもうるさいことはあるのですか？」

「だつてここも世の中ですもの。」

妻の母はかう言つて笑つてゐた。實際この避暑地も亦「世の中」であるのに違ひなかつた。僕は靜かに一年ばかりの間にどのくらゐここにも罪惡や悲劇の行はれてゐるかを知り悉してゐた。徐ろに患者を毒殺しようとした醫者、養子夫婦の家に放火した老婆、妹の資産を奪はうとした辯護士、――それ等の人人の家を見ることは僕にはいつも人生の中に地獄を見ることに異らなかつた。

「この町には氣違ひが一人ゐますね。」

「Ｈちやんでせう。あれは氣違ひぢやないんですよ。莫迦になつてしまつたのですよ。」

「早發性癡呆と云ふやつですね。僕はあいつを見る度に氣味が惡くつてたまりません。あいつはこの間もどう云ふ量見か、馬頭觀世音の前にお時宜をしてゐましたよ。」

「氣味が惡くなるなんて、……もつと強くならなければ駄目ですよ。」

「兄さんは僕などよりも強いのだけれども、――」

不精髭を伸ばした妻の弟も寢床の上に起き直つたまま、いつもの通り遠慮勝ちに僕等の話に加はり出した。

「強い中に弱いところもあるから。……」

「おやおや、それは困りましたね。」

僕はかう言つた妻の母を見、苦笑しない訣には行かなかつた。すると弟も微笑しながら、遠い垣の外の松林を眺め、何かうつとりと話しつづけた。（この若い病後の弟は時時僕には肉體を脱した精神そのもののやうに見えるのだつた。）

「妙に人間離れをしてゐるかと思へば、人間的欲望もずゐぶん烈しいし……」

「善人かと思へば、惡人でもあるしさ。」

「いや、善惡と云ふよりも何かもつと反對なもの、……」
「ぢや大人の中に子供もあるのだらう。」
「さうでもない。僕にははつきりと言へないけれど、……電氣の兩極に似てゐるのかな。何しろ反對なものを一しよに持つてゐる。」
そこへ僕等を驚かしたのは烈しい飛行機の響きだつた。僕は思はず空を見上げ、松の梢に觸れないばかりに舞ひ上つた飛行機を發見した。それは翼を黄いろに塗つた、珍らしい單葉の飛行機だつた。鷄や犬はこの響きに驚き、それぞれ八方へ逃げまはつた。殊に犬は吠え立てながら、尾を捲いて緣の下へはひつてしまつた。
「あの飛行機は落ちはしないか？」
「大丈夫。……兄さんは飛行機病と云ふ病氣を知つてゐる？」
僕は卷煙草に火をつけながら、「いや」と云ふ代りに頭を振つた。
「ああ云ふ飛行機に乘つてゐる人は高空の空氣ばかり吸つてゐるものだから、だんだんこの地面の上の空氣に堪へられないやうになつてしまふのだつて。……」
姉の母の家を後ろにした後、僕は枝一つ動かさない松林の中を歩きながら、ぢりぢり憂鬱になつて行つた。なぜあの飛行機はほかへ行かずに僕の頭の上を通つたのであらう？ なぜ又あのホテルは卷煙草のエエア・シツプばかり賣つてゐたのであらう？ 僕はいろいろの疑問に苦しみ、人氣のない道を選つて歩いて行つた。
海は低い砂山の向うに一面に灰色に曇つてゐた。その又砂山にはブランコのないブランコ臺が一つ突つ立つてゐた。僕はこのブランコ臺を眺め、忽ち絞首臺を思ひ出した。實際又ブランコ臺の上には鴉が二三羽とまつてゐた。鴉は皆僕を見ても、飛び立つ氣色さへ示さなかつた。のみならずまん中にとまつてゐた鴉は大きい嘴を空へ擧げながら、確かに四たび聲を出した。
僕は芝の枯れた砂土手に沿ひ、別莊の多い小みちを曲ることにした。この小みちの右側にはやはり高い松の中に二階のある木造の西洋家屋が一軒白じらと立つてゐる筈だつた。（僕の親友はこの家のことを「春のゐる家」と稱してゐた。）が、この家の前へ通りかかると、そこにはコンクリイトの土臺の上にバス・タツブが一つあるだけだつた。火事――僕はすぐにかう考へ、そちらを見ないやうに歩いて行つた。すると自轉車に乘つた男が一人まつすぐに向うから近づき出した。彼は焦茶いろの鳥打帽をかぶり、妙にぢつと目を据ゑたまま、ハンドルの上へ身をかがめてゐた。僕はふと彼の顔に姉の夫の顔を感じ、彼の目の前へ來ないうちに横の小みちへはひることにした。しかしこの小みちのまん中にも腐つた鼹鼠の死骸が一つ腹を上にして轉がつてゐた。
何ものかの僕を狙つてゐることは一足毎に僕を不安にし出した。そこへ半透明な齒車も一つづつ僕の視野を遮り出した。僕は愈最後の時の近づいたことを恐れながら、頸すぢをまつ直にして歩いて行つた。齒車は數の殖えるのにつれ、だんだん急にまはりはじめた。同時に又右の松林はひつそりと枝をかはしたまま、丁度細かい切子硝子を透かして見るやうになりはじめた。僕は動悸の高まるのを感じ、何度も道ばたに立ち止まらうとした。けれども誰かに押されるやうに立ち止まることさへ容易ではなかつた。……
三十分ばかりたつた後、僕は僕の二階に仰向けになり、ぢつと目をつぶつたまま、烈しい頭痛をこらへてゐた。すると僕の瞼の裏に銀色の羽根を鱗のやうに疊んだ翼が一つ見えはじめた。それは實際網膜の上にはつきりと映つてゐる

或阿呆の一生

僕はこの原稿を發表する可否は勿論、發表する時や機關も君に一任したいと思つてゐる。

君はこの原稿の中に出て來る大抵の人物を知つてゐるだらう。しかし僕は發表するとしても、インデキスをつけずに貰ひたいと思つてゐる。

僕は今最も不幸な幸福の中に暮らしてゐる。しかし不思議にも後悔してゐない。唯僕の如き惡夫、惡子、惡親をもつたものたちを如何にも氣の毒に感じてゐる。ではさやうなら。僕はこの原稿の中では少くとも意識的には自己辯護をしなかつたつもりだ。

最後に僕のこの原稿を特に君に託するのは君の恐らくは誰よりも僕を知つてゐると思ふからだ。(都會人と云ふ僕の皮を剝ぎさへすれば。)どうかこの原稿の中に僕の阿呆さ加減を笑つてくれ給へ。

昭和二年六月二十日　芥川龍之介

久米正雄君

一　時代

それは或本屋の二階だつた。二十歳の彼は書棚にかけた西洋風の梯子に登り、新らしい本を探してゐた。モオパスサン、ボオドレエル、ストリントベリイ、イブセン、シヨオ、トルストイ、……

そのうちに日の暮は迫り出した。しかし彼は熱心に本の背文字を讀みつづけた。そこに並んでゐるのは本と言ふよりも寧ろ世紀末それ自身だつた。ニイチエ、ヴエルレエン、ゴンクウル兄弟、ダスタエフスキイ、ハウプトマン、フロオベエル、……

彼は薄暗がりと戰ひながら、彼等の名前を數へて行つた。が、本はおのづからもの憂い影の中に沈みはじめた。彼はとうとう根氣も盡き、西洋風の梯子を下りようとした。すると傘のない電燈が一つ、丁度彼の額の上に突然ぽかりと火をともした。彼は梯子の上に佇んだまま、本の間に動いてゐる店員や客を見下した。彼等は妙に小さかつた。のみならず如何にも見すぼらしかつた。

「人生は一行のボオドレエルにも若かない。」

彼は暫く梯子の上からかう云ふ彼等を見渡してゐた。……

二　母

狂人たちは皆同じやうに鼠色の著物を著せられてゐた。廣い部屋はその爲に一層憂鬱に見えるらしかつた。彼等の一人はオルガンに向ひ、熱心に讚美歌を彈きつづけてゐた。同時に又彼等の一人は丁度部屋のまん中に立ち、踊ると云ふよりも跳ねまはつてゐた。

彼は血色の善い醫者と一しよにかう云ふ光景を眺めてゐた。彼の母も十年前には少しも彼等と變らなかつた。少しも、――彼は實際彼等の臭氣に彼の母の臭氣を感じた。

「ぢや行かうか？」

醫者は彼の先に立ちながら、廊下傳ひに或部屋へ行つた。その部屋の隅にはアルコオルを滿した、大きい硝子の壺の中に腦髓が幾つも漬つてゐた。彼は或腦髓の上にかすかに白いものを

ゴオグの畫集は寫眞版だつたのに違ひなかつた。が、彼は寫眞版の中にも鮮かに浮かび上る自然を感じた。

この畫に對する情熱は彼の視野を新たにした。彼はいつか木の枝のうねりや女の頬の膨らみに絶え間ない注意を配り出した。

或雨を持つた秋の日の暮、彼は或郊外のガアドの下を通りかかつた。ガアドの向うの土手の下には荷馬車が一臺止まつてゐた。彼はそこを通りながら、誰か前にこの道を通つたもののあるのを感じ出した。誰か？——それは彼自身に今更問ひかける必要もなかつた。二十三歳の彼の心の中には耳を切つた和蘭人が一人、長いパイプを啣へたまま、この憂鬱な風景畫の上へぢつと鋭い目を注いでゐた。

……………

八 火花

彼は雨に濡れたまま、アスファルトの上を踏んで行つた。雨は可也烈しかつた。彼は水沫の滿ちた中にゴム引の外套の匂を感じた。

すると目の前の架空線が一本、紫いろの火花を發してゐた。彼は妙に感動した。彼の上着のポケットは彼等の同人雜誌へ發表する彼の原稿を隱してゐた。彼は雨の中を歩きながら、もう一度後ろの架空線を見上げた。

架空線は不相變鋭い火花を放つてゐた。彼は人生を見渡しても、何も特に欲しいものはなかつた。が、この紫色の火花だけは、——凄まじい空中の火花だけは命と取り換へてもつかまへたかつた。

九 死體

死體は皆親指に針金のついた札をぶら下げてゐた。その又札は名前だの年齡だのを記してゐた。彼の友だちは腰をかがめ、器用にメスを動かしながら、或死體の顏の皮を××はじめた。皮の下に廣がつてゐるのは美しい黄色の脂肪だつた。

彼はその死體を眺めてゐた。それは彼には或短篇を、——王朝時代に背景を求めた或短篇を仕上げる爲に必要だつたのに違ひなかつた。が、腐敗した杏の匂に近い死體の臭氣は不快だつた。彼の友だちは眉間をひそめ、靜かにメスを動かして行つた。

「この頃は死體も不足してね。」

彼の友だちはかう言つてゐた。すると彼はいつの間にか彼の答を用意してゐた。——「己は死體に不足すれば、何の惡意もなしに××しをするがね。」しかし勿論彼の答は心の中にあつただけだつた。

十 先生

彼は大きい檞の木の下に先生の本を讀んでゐた。檞の木は秋の日の光の中に一枚の葉さへ動さなかつた。どこか遠い空中に硝子の皿を垂れた秤が一つ、丁度平衡を保つてゐる。——彼は先生の本を讀みながら、かう云ふ光景を感じてゐた。……

十一 夜明け

夜は次第に明けて行つた。彼はいつか或町の角に廣い市場を見渡してゐた。市場に群つた人々や車はいづれも薔薇色に染まり出した。

彼は一本の卷煙草に火をつけ、靜かに市場の中へ進んで行つた。するとか細い黒犬が一匹、いきなり彼に吠えかかつた。が、彼は驚かなかつた。のみならずその犬さへ愛してゐた。

市場のまん中には篠懸が一本、四方へ枝をひろげてゐた。彼はその根もとに立ち、枝越しに高い空を見上げた。空には丁度彼の眞上に星が一つ輝いてゐた。

それは彼の二十五の年――先生に會つて三月目だつた。

十二　軍港

軍艦の内部は薄暗かつた。彼は前後左右を蔽つた機械の中に體をかがめ、小さい眼鏡を覗いてゐた。その又眼鏡に映つてゐるのは明るい軍港の風景だつた。

「あすこに金剛も見えるでせう。」

或海軍將校はかう彼に話しかけたりした。彼は四角いレンズの上に小さい軍艦を眺めながら、なぜかふと阿蘭陀芹を思ひ出した。一人前三十錢のビイフ・ステエクの上にもかすかに匂つてゐる阿蘭陀芹を。

十三　先生の死

彼は雨上りの風の中に或新らしい停車場のプラットフォオムを歩いてゐた。空はまだ薄暗かつた。プラットフォオムの向うには鐵道工夫が三四人、一齊に鶴嘴を上下させながら、何か高い聲にうたつてゐた。

雨上りの風は工夫の唄や彼の感情を吹きちぎつた。彼は卷煙草に火もつけずに歡びに近い苦しみを感じてゐた。「センセイキトク」の電報を外套のポケットへ押しこんだまま。……

そこへ向うの松山のかげから午前六時の上り列車が一列、薄い煙を靡かせながら、うねるやうにこちらへ近づきはじめた。

十四　結婚

彼は結婚した翌日に「來匆々無駄費ひをしては困る」と彼の妻に小言を言つた。しかしそれは彼の小言よりも彼の伯母の「言へ」と云ふ小言だつた。彼の妻は彼自身には勿論、彼の伯母にも詫びを言つてゐた。彼の爲に買つて來た黄水仙の鉢を前にしたまま。……

十五　彼等

彼等は平和に生活した。大きい芭蕉の葉の廣がつたかげに。――彼等の家は東京から汽車でもたつぷり一時間かかる或海岸の町にあつたから。

十六　枕

彼は薔薇の葉の匂のする懷疑主義を枕にしながら、アナトオル・フランスの本を讀んでゐた。が、いつかその枕の中にも半身半馬神のゐることには氣づかなかつた。

十七　蝶

藻の匂の滿ちた風の中に蝶が一羽ひらめいてゐた。彼はほんの一瞬間、乾いた彼の唇の上へこの蝶の翅の觸れるのを感じた。が、彼の唇の上へいつか捺つて行つた翅の粉だけは數年後にもまだきらめいてゐた。

十八　月

彼は或ホテルの階段の途中に偶然彼女に遭遇した。彼女の顏はかう云ふ晝にも月の光りの中にゐるやうだつた。彼は彼女を見送りながら、（彼等は一面識もない間がらだつた。）今まで知らなかつた寂しさを感じた。

十九　人工の翼

彼はアナトオル・フランスから十八世紀の哲學者たちに移つて行つた。が、ルッソオには近づかなかつた。それは或は彼自身の一面、――情熱に驅られ易い一面のルッソオに近い爲かも知れなかつた。彼は彼自身の他の一面、――冷かな理智に富んだ一面に近い「カンディイド」の哲學者に近づいて行つた。

人生は二十九歳の彼にはもう少しも明るくは

たかのやうに、ヴォルテェルはかう云ふ彼に人工の翼を供給した。

彼はこの人工の翼をひろげ、易やすと空へ舞ひ上つた。同時に又理智の光を浴びた人生の歡びや悲しみは彼の目の下へ沈んで行つた。彼は見すぼらしい町々の上へ反語や微笑を落しながら、遮るもののない空中をまつ直に太陽へ登つて行つた。丁度かう云ふ人工の翼を太陽の光に燒かれた爲にとうとう海へ落ちて死んだ昔の希臘人も忘れたやうに。……

二十　械

彼等夫婦は彼の養父母と一つ家に住むことになつた。それは彼が或新聞社に入社することになつた爲だつた。彼は黄いろい紙に書いた一枚の契約書を力にしてゐた。が、その契約書は後になつて見ると、新聞社は何の義務も負はずに彼ばかり義務を負ふものだつた。

二十一　狂人の娘

二臺の人力車は人氣のない曇天の田舍道を走つて行つた。その道の海に向つてゐることは潮風の來るのでも明らかだつた。後の人力車に乘つてゐた彼は少しもこのラン・デ・ブウに興味のないことを怪みながら、彼自身をここへ導いたものの何であるかを考へてゐた。それは決して戀愛ではなかつた。若し戀愛でないとすれば、――彼はこの答を避ける爲に「兎に角我等は對等だ」と考へない譯には行かなかつた。

前の人力車に乘つてゐるのは或狂人の娘だつた。のみならず彼女の妹は嫉妬の爲に自殺してゐた。

「もうどうにも仕かたはない。」

彼はもうこの狂人の娘に、――動物的本能ばかり強い彼女に或憎惡を感じてゐた。

二臺の人力車はその間に磯臭い墓地の外へ通りかかつた。蠣殼のついた粗朶垣の中には石塔が幾つも黑んでゐた。彼はそれ等の石塔の向うにかすかにかがやいた海を眺め、何か急に彼女の夫を――彼女の心を捉へてゐない彼女の夫を輕蔑し出した。……

二十二　或畫家

それは或雜誌の插し畫だつた。が、一羽の雄鷄の墨畫は著しい個性を示してゐた。彼は或友だちにこの畫家のことを尋ねたりした。

一週間ばかりたつた後、この畫家は彼を訪問した。それは彼の一生のうちでも特に著しい事件だつた。彼はこの畫家の中に誰も知らない彼を發見した。のみならず彼自身も知らずにゐた彼の魂を發見した。

或薄ら寒い秋の日の暮、彼は一本の唐黍に忽ちこの畫家を思ひ出した。丈の高い唐黍は荒あらしい葉をよろつたまま、盛り土の上には神經のやうに細ぼそと根を露してゐた。それは又勿論傷き易い彼の自畫像にも違ひなかつた。しかしかう云ふ發見は彼を憂鬱にするだけだつた。

「もう遲い。しかしいざとなつた時には……」

二十三　彼女

或廣場の前は暮れかかつてゐた。彼はやや熱のある體にこの廣場を歩いて行つた。大きいビルディングは幾棟もかすかに銀色に澄んだ空に窓々の電燈をきらめかせてゐた。

彼は道ばたに足を止め、彼女の來るのを待つことにした。五分ばかりたつた後、彼女は何かやつれたやうに彼の方へ歩み寄つた。が、彼の顏を見ると、「疲れたわ」と言つて微笑んだりした。彼等は肩を並べながら、薄明い廣場を歩いて行つた。それは彼等には始めてだつた。彼は彼女と一しよにゐる爲には何を捨てても善い氣もちだつた。

彼等の自動車に乘つた後、彼女はぢつと彼の顔を見つめ、「あなたは後悔なさらない？」と言つた。彼はきつぱり「後悔しない」と答へた。彼女は彼の手を抑へ、「あたしは後悔しないけれども」と言つた。彼女の顔はかう云ふ時にも月の光の中にゐるやうだつた。

二十四　出產

彼は襖側に佇んだまま、白い手術著を著た產婆が一人、赤兒を洗ふのを見下してゐた。赤兒は石鹸の目にしみる度にいぢらしい顰め顔を繰り返した。のみならず高い聲に啼きつづけた。彼は何か鼠の仔に近い赤兒の匂を感じながら、しみじみかう思はずにはゐられなかつた。——

「何の爲にこいつも生れて來たのだらう？　この娑婆苦の充ち滿ちた世界へ。——何の爲に又こいつも己のやうなものを父にする運命を荷つたのだらう？」

しかもそれは彼の妻が最初に出產した男の子だつた。

二十五　ストリントベリイ

彼は部屋の戶口に立ち、石榴の花のさいた月明りの中に薄汚い支那人が何人か、麻雀戲をしてゐるのを眺めてゐた。それから部屋の中にひき返すと、背の低いランプの下に「痴人の告白」を讀みはじめた。が、二頁も讀まないうちにいつか苦笑を洩らしてゐた。——ストリントベリイも亦情人だつた伯爵夫人へ送る手紙の中に彼と大差のない譃を書いてゐる。……

二十六　古代

彩色の剝げた佛たちや天人や馬や蓮の華は殆ど彼を壓倒した。彼はそれ等を見上げたまま、あらゆることを忘れてゐた。狂人の娘の手を脫した彼自身の幸運さへ。……

二十七　スパルタ式訓練

彼は彼の友だちと或裏町を步いてゐた。そこへ幌をかけた人力車が一臺、まつ直に向うから近づいて來た。しかもその上に乘つてゐるのは意外にも昨夜の彼女だつた。彼女の顔はかう云ふ晝にも月の光の中にゐるやうだつた。彼等は彼の友だちの手前、勿論挨拶さへ交さなかつた。

「美人ですね。」

彼の友だちはこんなことを言つた。彼は往來の突き當りにある春の山を眺めたまま、少しもためらはずに返事をした。

「ええ、中中美人ですね。」

二十八　殺人

田舍道は日の光りの中に牛の糞の臭氣を漂はせてゐた。彼は汗を拭ひながら、爪先き上りの道を登つて行つた。道の兩側に熟した麥は香ばしい匂を放つてゐた。

「殺せ、殺せ。……」

彼はいつか口の中にかう云ふ言葉を繰り返してゐた。誰を？——それは彼には明らかだつた。彼は如何にも卑屈らしい五分刈の男を思ひ出してゐた。

すると黄ばんだ麥の向うに羅馬カトリツク敎の伽藍が一宇、いつの間にか圓屋根を現し出した。……

二十九　形

それは鐵の銚子だつた。彼はこの糸目のついた銚子にいつか「形」の美を敎へられてゐた。

三十　雨

彼は大きいベツドの上に彼女といろいろの話

ところだつた。彼等の寢室の外は雨ふりだつた。濱木綿の花はこの雨の中にいつか腐つて行くらしかつた。彼女の顏は不相變月の光の中にゐるやうだつた。が、彼女と話してゐることは彼には退屈でないこともなかつた。彼は腹這ひになつたまま、靜かに一本の卷煙草に火をつけ、彼女と一しよに日を暮らすのも七年になつてゐることを思ひ出した。

「おれはこの女を愛してゐるだらうか？」

彼は彼自身にかう質問した。その答は彼自身を見守りつけた彼自身にも意外だつた。

「おれは未だに愛してゐる。」

三十一　大地震

それはどこか熟し切つた杏の匂に近いものだつた。彼は燒けあとを歩きながら、かすかにこの匂を感じ、炎天に腐つた死骸の匂も存外惡くないと思つたりした。が、死骸の重なり重なつた池の前に立つて見ると、「酸鼻」と云ふ言葉も感覺的に決して誇張でないことを發見した。殊に彼を動かしたのは十二三歳の子供の死骸だつた。彼はその死骸を眺め、何か羨ましさに近いものを感じた。「神々に愛せらるるものは夭折す」――かう云ふ言葉なども思ひ出した。彼の姉や異母弟はいづれも家を燒かれてゐた。しかし彼の姉の夫は僞證罪を犯した爲に執行猶豫中の體だつた。……

「誰も彼も死んでしまへば善い。」

彼は燒け跡に佇んだまま、しみじみかう思はずにはゐられなかつた。

三十二　喧嘩

彼は彼の異母弟と取り組み合ひの喧嘩をした。彼の弟は彼の爲に壓迫を受け易いのに違ひなかつた。同時に又彼も彼の弟の爲に自由を失つてゐるのに違ひなかつた。彼の親戚は彼の弟に「彼を見慣へ」と言ひつづけてゐた。しかしそれは彼自身には手足を縛られるのも同じことだつた。彼等は取り組み合つたまま、とうとう縁先へ轉げて行つた。縁先の庭には百日紅が一本、――彼は未だに覺えてゐる。――雨を持つた空の下に赤光に花を盛り上げてゐた。

三十三　英雄

彼はヴォルテエルの家の窓からいつか高い山を見上げてゐた。氷河の懸つた山の上には禿鷹の影さへ見えなかつた。が、背の低い露西亞人が一人、執拗に山道を登りつづけてゐた。

ヴォルテエルの家も夜になつた後、彼は明るいランプの下にかう云ふ傾向詩を書いたりした。あの山道を登つて行つた露西亞人の姿を思ひ出しながら。……

――誰よりも十戒を守つた君は
誰よりも十戒を破つた君だ。

誰よりも民衆を愛した君は
誰よりも民衆を輕蔑した君だ。

誰よりも理想に燃え上つた君は
誰よりも現實を知つてゐた君だ。

君は僕等の東洋が生んだ
草花の匂のする電氣機關車だ。――

三十四　色彩

三十歳の彼はいつの間にか或空き地を愛してゐた。そこには唯苔の生えた上に煉瓦や瓦の缺片などが幾つも散らかつてゐるだけだつた。が、それは彼の目にはセザンヌの風景畫と變りはなかつた。

彼はふと二十年前の彼の情熱を思ひ出した。同時に又彼の二十年前には色彩を知らなかつたのを発見した。

三十五　道化人形

彼はいつ死んでも悔いないやうに烈しい生活をするつもりだつた。が、不相変養父母や伯母に遠慮勝ちな生活をつづけてゐた。それは彼の生活に明暗の両面を造り出した。彼は或洋服屋の店に道化人形の立つてゐるのを見、どの位彼も道化人形に近いかと云ふことを考へたりした。が、意識の外の彼自身は、――言はば第二の彼自身はとうにかう云ふ心もちを或短篇の中に盛りこんでゐた。

三十六　倦怠

彼は或大学生と芒原の中を歩いてゐた。

「君たちはまだ生活慾を盛に持つてゐるだらうね？」

「ええ、――だつてあなたでも……」

「ところが僕は持つてゐないんだよ。制作慾だけは持つてゐるけれども。」

それは彼の真情だつた。彼は実際いつの間にか生活に興味を失つてゐた。

「制作慾もやつぱり生活慾でせう。」

彼は何とも答へなかつた。芒原はいつか赤い穂の上にはつきりと噴火山を露し出した。彼はこの噴火山に何か羨望に近いものを感じた。しかしそれは彼自身にもなぜと云ふことはわからなかつた。……

三十七　越し人

彼は彼と才力の上にも格闘出来る女に遭遇した。が、「越し人」等の抒情詩を作り、僅かにこの危機を脱出した。それは何か木の幹に凍つた、かがやかしい雪を落すやうに切ない心もちのするものだつた。

風に舞ひたるすげ笠の
何かは道に落ちざらん
わが名はいかで惜しむべき
惜しむは君が名のみとよ。

三十八　復讐

それは木の芽の中にある或ホテルの露台だつた。彼はそこに画を描きながら、一人の少年を遊ばせてゐた。七年前に絶縁した狂人の娘の一人息子を。

狂人の娘は巻煙草に火をつけ、彼等の遊ぶのを眺めてゐた。彼は重苦しい心もちの中に汽車や飛行機を描きつづけた。少年は幸ひにも彼の子ではなかつた。が、彼を「をぢさん」と呼ぶのは彼には何よりも苦しかつた。

少年のどこかへ行つた後、狂人の娘は巻煙草を吸ひながら、媚びるやうに彼に話しかけた。

「あの子はあなたに似てゐやしない？」

「似てゐません。第一……」

「だつて胎教と云ふこともあるでせう。」

彼は黙つて目を反らした。が、彼の心の底にはかう云ふ彼女を絞め殺したい、残虐な欲望さへない訣ではなかつた。

三十九　鏡

彼は或カツフェの隅に彼の友だちと話してゐた。彼の友だちは焼林檎を食ひ、この頃の寒さの話などをした。彼はかう云ふ話の中に急に矛盾を感じ出した。

「君はまだ独身だつたね。」

「いや、もう来月結婚する。」

彼は思はず黙つてしまつた。カツフェの壁に嵌めこんだ鏡は無数の彼自身を映してゐた。冷えびえと、何か脅すやうに。……

四十　問答

なぜお前は現代の社会制度を攻撃するか？

資本主義の生んだ悪を見てゐるから。

悪を？　おれはお前は善悪の差を認めてゐないと思つてゐた。ではお前の生活は？

――彼はかう天使と問答した。尤も誰にも恥づる所のないシルクハツトをかぶつた天使と。……

四十一　病

彼は不眠症に襲はれ出した。のみならず体力も衰へはじめた。何人かの医者は彼の病にそれぞれ二三の診断を下した。――胃酸過多、胃アトニイ、乾性肋膜炎、神経衰弱、慢性結膜炎、脳疲労、……

しかし彼は彼自身彼の病源を承知してゐた。それは彼自身を恥ぢると共に彼等を恐れる心もちだつた。彼等を、――彼の軽蔑してゐた社会を！

或雪曇りに曇つた午後、彼は或カツフエの隅に火のついた葉巻を啣へたまま、向うの蓄音機から流れて来る音楽に耳を傾けてゐた。それは彼の心もちに妙にしみ渡る音楽だつた。彼はその音楽の了るのを待ち、蓄音機の前へ歩み寄つてレコオドの貼り札を検べることにした。

Magic Flute ― Mozart

彼は咄嗟に了解した。十戒を破つたモツアルトはやはり苦しんだのに違ひなかつた。しかしよもや彼のやうに、……彼は頭を垂れたまま、静かに彼の卓子へ帰つて行つた。

四十二　神々の笑ひ声

三十五歳の彼は春の日の当つた松林の中を歩いてゐた。二三年前に彼自身の書いた「神々は不幸にも我々のやうに自殺出来ない」と云ふ言葉を出しながら。……

四十三　夜

夜はもう一度迫り出した。荒れ模様の海は薄明りの中に絶えず水沫を打ち上げてゐた。彼はかう云ふ空の下に彼の妻と二度目の結婚をした。それは彼等には歓びだつた。が、同時に又苦しみだつた。三人の子は彼等と一しよに沖の稲妻を眺めてゐた。彼の妻は一人の子を抱き、涙をこらへてゐるらしかつた。

「あすこに船が一つ見えるね？」

「ええ。」

「檣の二つに折れた船が。」

四十四　死

彼はひとり寝てゐるのを幸ひ、窓格子に帯をかけて縊死しようとした。が、帯に頸を入れて見ると、俄かに死を恐れ出した。それは何も死ぬ刹那の苦しみの為に恐れたのではなかつた。彼は二度目には懐中時計を持ち、試みに縊死を計ることにした。するとちよつと苦しかつた後、何も彼もぼんやりなりはじめた。そこを一度通り越しさへすれば、死にはひつてしまふのに違ひなかつた。彼は時計の針を検べ、彼の苦しみを感じたのは一分二十何秒かだつたのを発見した。窓格子の外はまつ暗だつた。しかしその暗の中に荒あらしい鶏の声もしてゐた。

四十五　Divan

Divan はもう一度彼の心に新しい力を与へようとした。それは彼の知らずにゐた「東洋的なゲエテ」だつた。彼はあらゆる善悪の彼岸に悠々と立つてゐるゲエテを見、絶望に近い羨ましさを感じた。詩人ゲエテは彼の目には詩人のクリストよりも偉大だつた。この詩人の心の中にはアクロポリスやゴルゴタの外にアラビアの薔薇

彼は「或阿呆の一生」を書き上げた後、偶然或古道具屋の店に剝製の白鳥のあるのを見つけた。それは頸を挙げて立つてゐたものの、黄ばんだ羽根さへ虫に食はれてゐた。彼は彼の一生を思ひ、涙や冷笑のこみ上げるのを感じた。彼の前にあるものは唯発狂か自殺かだけだつた。彼は日の暮の往来をたつた一人歩きながら、徐ろに彼を滅しに来る運命を待つことに決心した。

五十　俘

彼の友だちの一人は発狂した。彼はこの友だちにいつも或親しみを感じてゐた。それは彼にはこの友だちの孤独の、――軽快な仮面の下にある孤独の人一倍身にしみてわかる為だつた。彼はこの友だちの発狂した後、二三度この友だちを訪問した。

「君や僕は悪鬼につかれてゐるんだね。世紀末の悪鬼と云ふやつにねえ。」

この友だちは声をひそめながら、こんなことを彼に話したりした。が、それから二三日後には或温泉宿へ出かける途中、薔薇の花さへ食つてゐたと云ふことだつた。彼はこの友だちの入院した後、いつか彼のこの友だちに贈つたテラコツタの半身像を思ひ出した。それはこの友だちの愛した検察官の作者の半身像だつた。彼はゴオゴリイも狂死したのを思ひ、何か彼等を支配してゐる力を感ぜずにはゐられなかつた。

彼はすつかり疲れ切つた揚句、ふとラディゲの臨終の言葉を読み、もう一度神々の笑ひ声を感じた。それは「神の兵卒たちは己をつかまへに来る」と云ふ言葉だつた。彼は彼の迷信や彼の感傷主義と闘はうとした。しかしどう云ふ闘ひも肉体的に彼には不可能だつた。「世紀末の悪鬼」は実際彼を虐んでゐるのに違ひなかつた。彼は神を力にした中世紀の人人に羨しさを感じた。しかし神を信ずることは――神の愛を信ずることは到底彼には出来なかつた。あのコクトオさへ信じた神を！

五十一　敗北

彼はペンを執る手も震へ出した。のみならず涎さへ流れ出した。彼の頭は〇・八のヴエロナアルを用ひて覚めた後の外は一度もはつきりしたことはなかつた。しかもはつきりしてゐるのはやつと半時間か一時間だつた。彼は唯薄暗い中にその日暮らしの生活をしてゐた。言はば刃のこぼれてしまつた、細い剣を杖にしながら。

わたし

わたしは二十にならぬ前に或女を愛してゐた。その女は或時わたしに言つた。――「あなたの奥さんにすまない。」わたしは格別わたしの妻に済まないと思つてゐた訣ではなかつた。が、妙にこの言葉はわたしの心に滲み渡つた。わたしは正直にかう思つた。――「或はこの女にもすまないのかも知れない。」わたしは未だにこの女にだけは優しい心もちを感じてゐる。

又

わたしは金銭には冷淡だつた。勿論食ふだけには困らなかつたから。

又

わたしは両親には孝行だつた。両親はいづれも年をとつてゐたから。

又

わたしは二三の友だちにはたとひ真実を言はないにもせよ、嘘をついたことは一度もなかつた。彼等も亦嘘をつかなかつたから。

（侏儒の言葉より）

西方の人

1　この人を見よ

わたしはかれこれ十年ばかり前に藝術的にクリスト教を、――殊にカトリツク教を愛してゐた。長崎の「日本の聖母の寺」は未だに私の記憶に殘つてゐる。かう云ふわたしは北原白秋氏や木下杢太郎氏の播いた種をせつせと拾つてゐた鴉に過ぎない。それから又何年か前にはクリスト教の爲に殉じたクリスト教徒たちに或興味を感じてゐた。殉教者の心理はわたしにはやつとこの頃になつて四人の傳記作者のわたしたちに傳へたクリストと云ふ人を愛し出した。クリストは今日のわたしには行路の人のやうに見ることは出來ない。それは或は紅毛人たちは勿論、今日の青年たちには笑はれるであらう。しかし十九世紀の末に生まれたわたしは彼等のもう見るのに倦きた、――寧ろ倒すことをためらはない十字架に目を注ぎ出したのである。日本に生まれた「わたしのクリスト」は必しもガリラヤの湖を眺めてゐない。赤あかと實のつた柿の木の下に長崎の入江も見えてゐるのである。從つてわたしは歴史的事實や地理的事實を顧みないであらう。（それは少くともジャアナリスティックには困難を避ける爲ではない。若し眞面目に構へようとすれば、五六冊のクリスト傳は容易にこの役をはたしてくれるのである。）それからクリストの一言一行を忠實に擧げてゐる餘裕もない。わたしは唯わたしの感じた通りに「わたしのクリスト」を記すのである。嚴しい日本のクリスト教徒も賣文の徒の書いたクリストだけは恐らくは大目に見てくれるであらう。

2　マリア

マリアは唯の女人だつた。が、或夜聖靈に感じて忽ちクリストを生み落した。我我はあらゆる女人の中に多少のマリアを感じるであらう。同時に又あらゆる男子の中にも――。いや、我我は爐に燃える火や畠の野菜や素燒きの瓶や巖疊に出來た腰かけの中にも多少のマリアを感ずるであらう。マリアは「永遠に女性なるもの」ではない。唯「永遠に守らんとするもの」である。クリストの母、マリアの一生もやはり「涙の谷」の中に通つてゐた。が、マリアは忍耐を重ねてこの一生を歩いて行つた。世間智と愚と美徳とは彼女の一生の中に一つに住んでゐる。ニイチェの叛逆はクリストに對するよりもマリアに對する叛逆だつた。

3　聖靈

我我は風や旗の中にも多少の聖靈を感じるであらう。聖靈は必ずしも「聖なるもの」ではない。唯「永遠に超えんとするもの」である。ゲエテはいつも聖靈に Daemon の名を與へてゐた。のみならずいつもこの聖靈に捉はれないやうに警戒してゐた。が、聖靈の子供たちは――あらゆるクリストたちは聖靈の爲にいつか捉はれる危險を持つてゐる。聖靈は惡魔や天使ではない。勿論、神とも異るものである。我我は時時善惡の彼岸に聖靈の歩いてゐるのを見るであらう。善惡の彼岸に、――しかしロムブロゾオは幸か不幸か精神病者の腦髓の上に聖靈の歩いてゐるのを發見してゐた。

4 ヨセフ

クリストの父、大工のヨセフは實はマリア自身だつた。彼のマリアほど尊まれないのはかう云ふ事實に基いてゐる。ヨセフはどう贔屓目に見ても、畢竟餘計ものの第一人だつた。

5 エリザベツ

マリアはエリザベツと友だちだつた。バプテズマのヨハネを生んだものはこのエリザベツである。麥の中に芥子の花の咲いたのは畢竟偶然と云ふ外はない。我我の一生を支配する力はやはりそこにも動いてゐるのである。

6 羊飼ひたち

マリアの聖靈に感じて孕んだことは羊飼ひたちを騷がせるほど、醜聞だつたことは確かである。クリストの母、美しいマリアはこの時から人間苦の途に上り出した。

7 博士たち

東の國の博士たちはクリストの星の現はれたのを見、黄金や乳香や沒藥を寶の盒に入れて捧げに行つた。が、彼等は博士たちの中でも僅かに二人か三人だつた。他の博士たちはクリストの星の現はれたことに氣づかなかつた。のみならず氣づいた博士たちの一人は高い臺の上に佇みながら、（彼は誰よりも年よりだつた）きららかにかかつた星を見上げ、はるかにクリストを憐んでゐた。

「又か！」

8 ヘロデ

ヘロデは或大きい機械だつた。かう云ふ機械は暴力により、多少の手數を省く爲にいつも我我には必要である。彼はクリストを恐れる爲にベツレヘムの幼な兒を皆殺しにした。勿論クリスト以外のクリストも彼等の中にはまじつてゐたであらう。ヘロデの兩手は彼等の血の爲にまつ赤になつてゐたかも知れない。我我は恐らくこの兩手の前に不快を感じずにはゐられないであらう。しかしそれは何世紀か前のギロテインに對する不快である。我我はヘロデを憎むことは勿論、輕蔑することも出來るものではない。いや、寧ろ彼の爲に憐みを感じるばかりである。ヘロデはいつも玉座の上に憂鬱な顏をまともにしたまま、橄欖や無花果の中にあるベツレヘムの國を見おろしてゐた。一行の詩さへ殘したことなしに。……

9 ボヘミア的精神

幼いクリストはエヂプトへ行つたり、更に又「ガリラヤのうちに避け、ナザレと云へる邑」に止まつたりしてゐる。我我はかう云ふ幼な兒を佐世保や横須賀に轉任する海軍將校の家庭にも見出すであらう。クリストのボヘミア的精神は彼自身の性格の前にかう云ふ境遇にも潛んでゐたかも知れない。

10 父

クリストはナザレに住んだ後、ヨセフの子供でないことを知つたであらう。或は聖靈の子供であることを。——しかしそれは前者よりも決して重大な事件ではない。「人の子」クリストはこの時から正に二度目の誕生をした。「女中の子」ストリントベリイはまづ彼の家族に反叛した。それは彼の不幸であり、同時に又彼の幸福だつた。クリストも恐らくは同じことだつたであらう。彼はかう云ふ孤獨の中に仕合せにも彼の前に生まれたクリスト——バプテズマのヨハ

14 聖靈の子供

クリストは古代のジヤアナリストになつた。同時に又古代のボヘミアンになつた。彼の天才は飛躍をつづけ、彼の生活は一時代の社會的約束を踏みにじつた。彼を理解しない弟子たちの中に時時ヒステリイを起しながら。――しかしそれは彼自身には大體歡喜に滿ち渡つてゐた。クリストは彼の詩の中にどの位情熱を感じてゐたであらう。「山上の教へ」は二十何歲かの彼の感激に滿ちた產物である。彼はどう云ふ前人も彼に若かないのを感じてゐた。この海のやうに高まつた彼の天才的ジヤアナリズムは勿論敵を招いたであらう。が、彼等はクリストを恐れない訣には行かなかつた。それは實に彼等には――クリストよりも人生を知り、從つて又人生に對する恐怖を抱いてゐる彼等にはこの天才の量見の呑みこめない爲に外ならなかつた。

15 女人

大勢の女人たちはクリストを愛した。就中マグダラのマリアなどは一度彼に會つた爲に七つの惡鬼に攻められるのを忘れ、彼女の職業を超越した詩的戀愛さへ感じ出した。クリストの命の終つた後、彼女のまつ先に彼を見たのはかう云ふ戀愛の力である。クリストも亦大勢の女人たちを、――就中マグダラのマリアを愛した。彼等の詩的戀愛は未だに燕子花のやうに匂やかである。クリストは度たび彼女を見ることに彼の寂しさを慰めたであらう。後代は、――或は後代の男子たちは彼等の詩的戀愛に冷淡だつた。（尤も藝術的主題以外には）しかし後代の女人たちはいつもこのマリアを嫉妬してゐた。

「なぜクリスト樣は誰よりも先にお母さんのマリア樣に再生をお示しにならなかつたのかしら？」――

それは彼女等の洩らして來た、最も僞善的な歎息だつた。

16 奇蹟

クリストは時時奇蹟を行つた。が、それは彼自身には一つの比喩を作るよりも容易だつた。彼はその爲にも奇蹟に對する嫌惡の情を抱いてゐた。その爲にも――クリストの使命を感じてゐたのは彼の道を敎へることだつた。彼の奇蹟を行ふことは後代にルツソオの吼り立つた通り、彼の道を敎へるのには不便を與へるのに違ひなかつた。しかし彼の「小羊たち」はいつも奇蹟を望んでゐた。クリストも亦三度に一度はこの願に從はずにはゐられなかつた。彼の人間的な、餘りに人間的な性格はかう云ふ一面にも露はれてゐる。が、クリストは奇蹟を行ふ度に必ず責任を回避してゐた。

「お前の信仰はお前を癒した。」

しかしそれは同時に又科學的眞理にも違ひなかつた。クリストは又或時はやむを得ず奇蹟を行つた爲に、――或長病に苦しんだ女の彼の衣にさはつた爲に彼の力の脫けるのを感じた。彼の奇蹟を行ふことにいつも多少ためらつたのはかう云ふ實感にも明らかである。クリストは後代のクリスト教徒は勿論、彼の十二人の弟子たちよりもはるかに鋭い理智主義者だつた。

17 背德者

クリストの母、美しいマリアはクリストには必しも母ではなかつた。彼の最も愛したものは彼の道に從ふものだつた。クリストは又情熱に燃え立つたまま、大勢の人人の集つた前に大膽にもかう云ふ彼の氣もちを言ひ放すことさへ憚らなかつた。マリアは定めし戶の外に彼の言葉を聞きながら、悄然と立つてゐたことであらう。我我は我我自身の中にマリアの苦しみを

健全である。たとひ我我自身の中にクリストの情熱を感じてゐるとしても、——しかしクリスト自身も時時はマリアを憐んだであらう。かがやかしい天國の門を見ずにありのままのイエルサレムを眺めた時には。……

18　クリスト教

クリスト教はクリスト自身も實行することの出來なかつた、逆說の多い詩的宗教である。彼は彼の天才の爲に人生さへ笑つて投げ棄ててしまつた。ワイルドの彼にロマン主義者の第一人を發見したのは當り前である。彼の教へた所によれば、ソロモンの榮華の極みの時にだにその裝ひは風に吹かれる一本の百合の花に若かなかつた。彼の道は唯詩的に——あすの日を思ひ煩はずに生活しろと云ふことに存してゐる。何の爲に？——それは勿論ユダヤ人たちの天國へはひる爲に違ひなかつた。しかしあらゆる天國も流轉せずにはゐることは出來ない。石鹸の匂のする薔薇の花に滿ちたクリスト教の天國はいつか空中に消えてしまつた。が、我我はその代りに幾つかの天國を造り出してゐる。クリストは我我に天國に對する憧憬を呼び起した第一人だつた。更に又彼の逆說は後代に無數の神學者や神秘主義者を生じてゐる。彼等の議論はクリストを茫然とさせずには措かなかつたであらう。しかし彼等の或者はクリストよりも更にクリスト教的である。クリストは兎に角我我に現世の向うにあるものを指し示した。我我はいつもクリストの中に我我の求めてゐるものを、——我我を無限の道へ驅りやる喇叭の聲を感じるであらう。同時に又いつもクリストの中に我我を虐んでやまないものを、——近代のやつと表現した世界苦を感じずにはゐられないであらう。

19　ジヤアナリスト

我我は唯我我自身に近いものの外は見ることは出來ない。少くとも我我に迫つて來るものは我我自身に近いものだけである。クリストはあらゆるジヤアナリストのやうにこの事實を直覺してゐた。花嫁、葡萄園、驢馬、工人——彼の教へは目のあたりにあるものを一度も利用せずにすましたことはない。「善いサマリア人」や「放蕩息子の歸宅」はかう云ふ彼の詩の傑作である。抽象的な言葉ばかり使つてゐる後代のクリスト教的ジヤアナリスト——牧師たちは一度もこのクリストのジヤアナリズムの效果を考へなかつたのであらう。彼は彼等に比べれば勿論、近代のクリストたちに比べても、決して遜色のあるジヤアナリストではない。彼のジヤアナリズムはその爲に西方の古典と肩を竝べてゐる。彼は實に古い炎に新らしい薪を加へるジヤアナリストだつた。

20　エホバ

クリストの度たび說いたのは勿論天上の神である。「我我を造つたものは神ではない、神こそ我我の造つたものである。」——かう云ふ唯物主義者グウルモンの言葉は我我の心を喜ばせるであらう。それは我我の腰に垂れた鎖を截りはなす言葉である。が、同時に又我我の腰に新らしい鎖を加へる言葉である。のみならずこの新らしい鎖も古い鎖よりも強いかも知れない。神は大きい雲の中から細かい神經系統の中に下り出した。しかもあらゆる名のもとにやはりそこに位してゐる。クリストは勿論目のあたりに度たびこの神を見たであらう。（神に會はなかつたクリストの惡魔に會つたことは考へられない。）彼の神も亦あらゆる神のやうに社會的色彩の強いものである。しかし兎に角我我と共に生まれた「主なる神」だつたのに違ひない。クリストはこ

の神の爲に――詩的正義の爲に戰ひつづけた。あらゆる彼の逆說はそこに源を發してゐる。後代の神學はそれ等の逆說を最も詩の外に解釋しようとした。それから、――誰も讀んだことのない、退屈な無數の本を殘した。ヴォルテエルは今日では滑稽なほど「神學」の神を殺す爲に彼の劍を揮つてゐる。しかし「主なる神」は死なかつた。同時に又クリストも死なかつた。神はコンクリイトの壁に苔の生える限り、いつも我我の上に臨んでゐるであらう。ダンテはフランチェスカを地獄に墮した。が、いつかこの女人を炎の中から救つてゐた。一度でも悔い改めたものは――美しい一瞬間を持つたものはいつも「限りなき命」に入つてゐる。感傷主義の神と呼ばれ易いのも恐らくはかう云ふ事實の爲であらう。

21 故鄕

「豫言者は故鄕に入れられず。」――それは或はクリストには第一の十字架だつたかも知れない。彼は畢に全ユダヤを故鄕としなければならなかつた。汽車や自動車や汽船や飛行機は今日ではあらゆるクリストは世界中を故鄕にしてゐる。勿論又あらゆるクリストは故鄕に入れられなかつたのに違ひない。現にポオを入れたものはアメリカではないフランスだつた。

22 詩人

クリストは一本の百合の花を「ソロモンの榮華の極みの時」よりも更に美しいと感じてゐる。（尤も彼の弟子たちの中にも彼ほど百合の花の美しさに恍惚としたものはなかつたのであらう。）しかし弟子たちと話し合ふ時には會話上の禮節を破つても、野蠻なことを言ふのを憚らなかつた。――「凡そ外より人に入るものの人を汚し能はざる事を知らざる乎。そは心に入らず、腹に入りて厠に遺す。すなはち食ふ所のもの潔れり。」……

23 ラザロ

クリストはラザロの死を聞いた時、今までにない涙を流した。今までにない――或は今まで見せずにゐた涙を。ラザロの死から生き返つたのはかう云ふ彼の感傷主義の爲である。母のマリアを顧みなかつた彼はなぜラザロの姉妹たち、――マルタやマリアの前に涙を流したのであらう？ この矛盾を理解するものはクリストの、――或はあらゆるクリストの天才的利己主義を理解するものである。

24 カナの饗宴

クリストは女人を愛したものの、女人と交はることを顧みなかつた。それはモハメットの四人の女人たちと交ることを許したのと同じことである。彼等はいづれも一時代を、――或は社會を越えられなかつた。しかしそこには何ものよりも自由を愛する彼の心も動いてゐたことは確かである。後代の超人は犬たちの中に假面をかぶることを必要とした。しかしクリストは假面をかぶることも不自由のうちに數へてゐた。所謂「爐邊の幸福」の譃は勿論彼には明らかだつたであらう。アメリカのクリスト、――ホヰットマンはやはりこの自由を選んだ一人である。我我は彼の詩の中に度たびクリストを感ずるであらう。クリストは未だに大笑ひをしたまま、踊り子や花束や樂器に滿ちたカナの饗宴を見おろしてゐる。しかし勿論その代りにそこには彼の贖はなければならぬ多少の寂しさはあつたことであらう。

25 天に近い山の上の問答

クリストは高い山の上に彼の前に生まれたク

クリストたち——モオゼやエリヤと話をした。それは悪魔と戦つたよりも更に意味の深い出来事である。彼はその何日か前に彼の弟子たちにイエルサレムへ行き、十字架にかかることを予言してゐる。彼のモオゼやエリヤと会つたのは彼の英雄的危機に佇んでゐた証拠である。彼の顔は日の光のやうに輝き、彼の衣は白く光つたのも必しもモオゼやエリヤの彼の前に下つた為ばかりではない。彼は彼の一生の中でも最もこの時に厳粛だつた。彼の伝記作者は彼等の間の問答を記録に残してゐない。しかし彼の投げつけた問は「我等は如何に生くべき乎」である。クリストの一生は短かつたであらう。が、彼はこの時に、——やつと三十歳に及んだ時に彼の一生の総決算をしなければならない苦しみを嘗めてゐた。モオゼはナポレオンも言つたやうに戦略に長じた将軍である。エリヤも亦クリストよりも政治的天才に富んでゐたであらう。のみならず今日は昨日ではない。今日ではもう紅海の波も壁のやうに立たなければ、炎の車も天上から来ないのである。クリストは彼等と問答しながら、愈彼の見苦しい死の近づいたのを感じずにはゐられなかつた。天に近い山の上には氷のやうに澄んだ日の光の中に岩むらの聳えてゐるだけである。しかし深い谷の底には柘榴や無花果も匂つてゐたであらう。そこには又家家の煙もかすかに立ち昇つてゐたかも知れない。クリストも亦恐らくはかう云ふ下界の人生に懐しさを感じずにはゐなかつたであらう。しかし彼の道は嫌でも応でも人気のない天に向つてゐる。彼の誕生を告げた星は——或は彼を生んだ聖霊は彼に平和を与へようとしない。「山を降る時イエス彼等（ペテロ、ヤコブ、その兄弟のヨハネ）に命じて人の子の死より甦るまでは汝等の見し事を人に告ぐべからずと言へり。」——天に近い山の上にクリストの彼に先立つた「大いなる死者たち」と話をしたのは実に彼の日記にだけそつと残したいと思ふことだつた。

26 幼な児の如く

クリストの教へた逆説の一つは「我まことに汝等に告げん。若し改まりて幼な児の如くならずば天国に入ることを得じ」である。この言葉は少しも感傷主義的ではない。クリストはこの言葉の中に彼自身の誰よりも幼な児に近いことを現してゐる。同時に又聖霊の子供だつた彼自身の立ち場を明らかにしてゐる。ゲエテは彼の「タッソオ」の中にやはり聖霊の子供だつた彼自身の苦しみを歌ひ上げた。「幼な児の如くある」ことは幼稚園時代に還へることである。クリストの言葉に従へば、誰かの保護を受けなければ、人生に堪へないものの外は黄金の門に入ることは出来ない。そこには又世間智に対する彼の軽蔑も忍びこんでゐる。彼の弟子たちに正直に幼な児を前にしたクリストは我我に不快を与へるのは後代の感傷主義の為である。彼の前に立つた幼な児に驚かない訳には行かなかつたであらう。

27 イエルサレムへ

クリストは一代の預言者になつた。同時に又彼自身の中の預言者は、——或は彼を生んだ聖霊はおのづから彼を飜弄し出した。我我は蠟燭の火に焼かれる蛾の中にも彼を感じるであらう。蛾は唯蛾の一匹に生まれた為に蠟燭の火に焼かれるのである。クリストも亦蛾と変ることはない。ショウは十字架に懸けられる為にイエルサレムへ行つたクリストに彼の冷笑を与へてゐる。しかしクリストはイエルサレムへ驢馬を駆つてはひる前に彼の十字架を背負つてゐた。それは彼にはどうすることも出来ない運命に近いものだつたであらう。彼はそこでも天才

だつたと共にやはり畢に人の子だつた。のみならずこの事實は數世紀を重ねた「メシア」と云ふ言葉のクリストを支配してゐたことを敎へてゐる。樹の枝を敷いた道の上に「ホザナよ、ホザナよ」の聲に打たれながら、驢馬を走らせて行つたクリストは彼自身だつたと共にあらゆるイスラエルの豫言者たちだつた。彼の後に生まれたクリストの一人は遠いロオマの道の上に再生したクリストに「どこへ行く？」と詰られたことを傳へてゐる。クリストも亦イエルサレムへ行かなかつたとすれば、やはり誰か豫言者たちの一人に「どこへ行く？」と詰られたことであらう。

28 イエルサレム

クリストはイエルサレムへはひつた後、彼の最後の戰ひをした。それは水水しさを缺いてゐたものの、何か烈しさに滿ちたものである。彼は道ばたの無花果を呪つた。しかもそれは無花果の彼の豫期を裏切つて一つも實をつけてゐない爲だつた。あらゆるものを慈んだ彼もここでは半ばヒステリツクに彼の破壞力を揮つてゐる。

「カイゼルのものはカイゼルに返せ。」

それはもう情熱に燃えた靑年クリストの言葉ではない。彼に復讐し出した人生に對する彼は勿論人生よりも天國を重んじた詩人だつた。老成人クリストの言葉である。そこに潛んでゐるものは必しも彼の世間智ばかりではない。彼はモオゼの昔以來、少しも變らない人間愚に愛想を盡かしてゐたことであらう。が、彼の苛立たしさは彼にエホバの「殿」に入りてその中にをる賣買する者を殿より逐出し、兌銀者の案、鴿を賣者の椅子を倒させてゐる。

「この殿も今に壞れてしまふぞ。」

或女人はかう云ふ彼の爲に彼の額へ香油を注いだりした。クリストは彼の弟子たちにこの女人を咎めないことを命じた。それから――十字架と向ひ合つたクリストの氣もちは彼を理解しない彼等に對する、優しい言葉の中に忍びこんでゐる。彼は香油を勺はせたまま、（それは土埃りにまみれ勝ちな彼には珍らしい出來事の一つに違ひなかつた。）靜かに彼等に話しかけた。

「この女人はわたしを葬る爲にわたしに香油を注いだのだ。わたしはいつもお前たちと一しよにゐることの出來るものではない。」

ゲッセマネの橄欖はゴルゴタの十字架よりも悲壯である。クリストは死力を揮ひながら、そこに彼自身とも、――彼自身の中の聖靈とも戰はうとした。ゴルゴタの十字架は彼の上に次第に影を落さうとしてゐる。彼はこの事實を知り悉して居た。が、彼の弟子たちは、――ペテロさへ彼の心もちを理解することは出來なかつた。クリストの祈りは今日でも我我に迫る力を持つてゐる。――

「わが父よ、若し出來るものならば、この杯をわたしからお離し下さい。けれども仕かたはないと仰有るならば、どうか御心のままになすつて下さい。」

あらゆるクリストは人氣のない夜中に必ずかう祈つてゐる。同時に又あらゆるクリストの弟子たちは「いたく憂て死ぬばかり」な彼の心もちを理解せずに橄欖の下に眠つてゐる。……

29 ユダ

後代はいつかユダの上にも惡の圓光を輝かせてゐる。しかしユダは必しも十二人の弟子たちの中でも特に惡かつた訣ではない。ペテロさへ庭鳥の聲を擧げる度に三度クリストを知らないと言つてゐる。ユダのクリストを賣つたのはやはり今日の政治家たちの彼等の首領を賣るのと同じことだつたであらう。ハピニも亦ユダのクリストを賣つたのを大きい謎に數へてゐる。

て、クリストは明らかに誰にでも賣られる危機に立つてゐた。祭司の長たちはユダの外にも何人かのユダを數へてゐた筈である。唯ユダはこの道具になるいろいろの條件を具へてゐた。勿論それ等の條件の外に偶然も加はつてゐたことであらう。後代はクリストを神の子にした。それは又同時にユダ自身の中に惡魔を發見することになつたのである。しかしユダはクリストを賣つた後、白楊の木に縊死してしまつた。彼のクリストの弟子だつたことは――神の聲を聞いたものだつたことは或はそこにも見られるかも知れない。ユダは誰よりも彼自身を憎んだ。十字架に懸つたクリストも勿論彼を責めたであらう。しかし彼を利用した祭司の長たちの冷笑もやはり彼を憤らせたであらう。

「お前のしたいことをはたすが善い。」

かう云ふユダに對するクリストの言葉は輕蔑と憐憫とに溢れてゐる。「人の子」クリストは彼自身の中にも或ユダを感じてゐたかも知れない。しかしユダは不幸にもクリストのアイロニイを理解しなかつた。

30　ピラト

ピラトはクリストの一生には唯偶然に現れたものである。彼は畢に代名詞に過ぎない。後代も亦この官吏に傳說的色彩を與へてゐる。しかしアナトオル・フランスだけはかう云ふ色彩に欺かれなかつた。

31　クリストよりもバラバを

クリストよりもバラバを――それは今日でも同じことである。バラバは叛逆を企てたであらう。同時に又人を殺したであらう。しかし彼等はおのづから彼の所業を理解してゐる。ニイチエは後代のバラバたちを街頭の犬に比へたりした。彼等は勿論バラバの所業に憎しみや怒りを感じてゐたであらう。が、クリストの所業には、――恐らくは何も感じなかつたであらう。若し何か感じてゐたとすれば、それは彼等の社會的に感じなければならぬと思つたものである。彼等の精神的奴隸たちは、――肉體だけ逞しい兵卒たちはクリストに荊の冠をかむらせ、紫の袍をまとはせた上、「ユダヤの王安かれ」と叫んだりした。クリストの悲劇はかう云ふ喜劇のただ中にあるだけに見じめである。クリストは正に精神的にユダヤの王だつたのに違ひない。が、天才を信じない犬たちは――いや、天才を發見することは手易いと信じてゐる犬たちはユダヤの王の名のもとに眞のユダヤの王を嘲つてゐる。「方伯のいと奇しとするまでにイエスは一言も答へせざりき。」――クリストは傳記作者の記した通り、彼等の訊問や嘲笑には何の答へもしなかつたであらう。のみならず何の答へをすることも出來なかつたことは確かである。しかしバラバは頭を擧げて何ごとも明らかに答へたであらう。バラバは唯彼の敵に叛逆してゐる。が、クリストは彼自身に、――彼自身の中のマリヤに叛逆してゐる。それはバラバの叛逆よりも更に根本的な叛逆だつた。同時に又人間的な、餘りに人間的な叛逆だつた。

32　ゴルゴタ

十字架の上のクリストは畢に「人の子」に外ならなかつた。

「わが神、わが神、どうしてわたしをお捨てなさる？」――

勿論英雄崇拜者たちは彼の言葉を冷笑するであらう。況や聖靈の子供たちでないものは唯彼の言葉の中に「自業自得」を見出すだけである。「エリ、エリ、ラマサバクタニ」は事實上クリストの悲鳴に過ぎない。しかしクリストはこの悲鳴の爲に一層我我に近づいたのである。のみな

らず彼の一生の悲劇を一層現實的に数へてくれたのである。

33　ピエタ

クリストの母、年をとつたマリアはクリストの死骸の前に歎いてゐる。——から云ふ圖のPietà と呼ばれるのは必しも感傷主義的と言ふことは出來ない。唯ピエタを描かうとする書家たちはマリア一人だけを描かなければならぬ。

34　クリストの友だち

クリストは十二人の弟子たちを持つてゐた。が、一人も友だちは持たずにゐた。若し一人でも持つてゐたとすれば、それはアリマタヤのヨセフである。「日暮るる時尊き議員なるアリマタヤのヨセフと云へる者來れり。この人は神の國を望めるものなり。彼ははばからずピラトに往きてイエスの屍を乞ひたり。——マタイよりも古いと傳へられるマコは彼のクリストの傳記の中にから云ふ意味の深い一節を殘した。この一節はクリストの弟子たちを「これに從ひつかへしものどもなり」と云ふ言葉と全然趣を異にしてゐる。ヨセフは恐らくはクリストよりも更に世間智に富んだクリストだつたであらう。彼は「はばからずピラトに往きイエスの屍を乞」つたことはクリストに對する彼の同情のどの位深かつたかを示してゐる。教養を積んだ議員のヨセフはこの時には率直そのものだつた。後代はピラトやユダよりもはるかに彼には冷淡である。しかし彼は十二人の弟子たちよりも或は彼を知つてゐたであらう。ヨハネの首を皿にのせたものは殘酷にも美しいサロメである。が、クリストは命を終つた後、彼を葬る人人のうちにアリマタヤのヨセフを數へてゐた。彼はそこにヨハネよりもまだしも幸福を見出してゐる。ヨセフも亦議員にならなかつたとしたらば、——それはあらゆる「若し……ならば」のやうに畢竟問はないでも善いことかも知れない。けれども彼は無花果の下や象嵌をした杯の前に時時彼の友だちのクリストを思ひ出してゐたことであらう。

35　復活

ルナンはクリストの復活を見たのをマグダレナのマリアの想像力の爲にした。想像力の爲に、——しかし彼女の想像力に飛躍を與へたものはクリストである。彼女の子供を失つた母は度たび彼の復活を——彼の何かに生まれ變つたのを見てゐる。彼は或は大名になつたり、或は池の上の鴨になつたり、或は又蓮華になつたりした。けれどもクリストはマリアの外にも死後の彼自身を示してゐる。この事實はクリストを愛した人人のどの位多かつたかを現すものであらう。彼は三日の後に復活した。が、肉體を失つた彼の世界中を動かすには更に長い年月を必要とした。その爲に最も力のあつたのはクリストの天才を全身に感じたジャアナリストのパウロである。クリストを十字架にかけた彼等は何世紀かの流れ去るのにつれ、シェクスピイアの復活を認めるやうにクリストの復活を認め出した。が、死後のクリストも流轉を閲したことは確かである。あらゆるものを支配する流行はやはりクリストも支配して行つた。クララの愛したクリストはパスカルの尊んだクリストではない。が、クリストの復活した後、犬たちの彼を偶像とすることは、——その又クリストの名のもとに横暴を振ふことは變らなかつた。クリストの後に生れたクリストたちの彼の敵になつたのはこの爲である。しかし彼等も同じやうにダマスカスへ向ふ途の上に必ず彼等の敵の中に聖靈を見ずにはゐられなかつた。

「サウロよ、サウロよ、何の爲にわたしを苦しめるのか？　棘のある轍を蹴ることは決して手易いものではない。

我我は唯茫茫とした人生の中に佇んでゐる。我我に平和を與へるものは眠りの外にある訣はない。あらゆる自然主義者は外科醫のやうに殘酷にこの事實を解剖してゐる。しかし聖靈の子供たちはいつもかう云ふ人生の上に何か美しいものを殘して行つた。何か「永遠に超えようとするもの」を。

36　クリストの一生

勿論クリストの一生はあらゆる天才の一生のやうに情熱に燃えた一生である。彼は母のマリアよりも父の聖靈の支配を受けてゐた。彼の十字架の上の悲劇は實にそこに存してゐる。彼の後に生まれたクリストたちの一人、——ゲエテは「徐ろに老いるよりもさつさと地獄へ行きたい」と願つたりした。が、徐ろに老いて行つた上、ストリントベリイの言つたやうに晩年には神秘主義者になつたりした。聖靈はこの詩人の中にマリアと吊り合ひを取つて住まつてゐる。彼の「大いなる異教徒」の名は必しも當つてゐないことはない。彼は實に人生の上にはクリストよりも更に大きかつた。況や他のクリストたちよりも大きかつたことは勿論である。彼の誕生を知らせる星はクリストの誕生を知らせる星よりも圓まるとかがやいてゐたことであらう。しかし我我のゲエテを愛するのはマリアの子供だつた爲ではない。マリアの子供たちは麥畠の中や長椅子の上にも充ち滿ちてゐる。いや、兵營や工場や監獄の中にも多いことであらう。我我のゲエテを愛するのは唯聖靈の子供だつた爲である。我我は我我の一生の中にいつかクリストと一しよにゐるであらう。ゲエテも亦彼の詩の中に度たびクリストの糞を拔いてゐる。クリストの一生は見じめだつた。が、彼の後に生まれた聖靈の子供たちの一生を象徴してゐた。（ゲエテさへも實はこの例に洩れない。）クリスト教は或は滅びるであらう。少くとも絶えず變化してゐる。けれどもクリストの一生はいつも我我を動かすであらう。それは天上から地上へ登る爲に無殘にも折れた梯子である。薄暗い空から叩きつける土砂降りの雨の中に傾いたまま。……

37　東方の人

ニイチェは宗教を、衞生學と呼んだ。それは宗教ばかりではない。道徳や經濟も衞生學である。それ等は我我におのづから死ぬまで健康を保たせるであらう。「東方の人」はこの「衞生學」を大抵涅槃の上に立てようとした。老子は時時無何有の郷に佛陀と挨拶をかはせてゐる。しかし我我は皮膚の色のやうにはつきりと東西を分つてゐない。クリストの、——或はクリストたちの一生の我我を動かすのはこの爲である。「古來英雄の士、悉く山阿に歸す」の歌はいつも我我に傳はりつづけた。が、「天國は近づけり」の聲もやはり我我を立たせずにはゐない。老子はそこに年少の孔子と、——或は支那のクリストと問答してゐる。野蠻な人生はクリストたちをいつも多少は苦しませるであらう。太平の艸木となることを願つた「東方の人」たちもこの例に洩れない。クリストは「狐は穴あり。空の鳥は巣あり。然れども人の子は枕する所なし」と言つた。彼の言葉は恐らくは彼自身も意識しなかつた、恐しい事實を孕んでゐる。我我は狐や鳥になる外は容易に塒の見つかるものではない。

（昭和二年七月十日作）

續西方の人

1 再びこの人を見よ

クリストは「萬人の鏡」である。「萬人の鏡」と云ふ意味は萬人のクリストに倣へと云ふのではない。たつた一人のクリストの中に萬人の彼等自身を發見するからである。わたしはわたしのクリストを描き、雜誌の締め切り日の迫つた爲にペンを抛たなければならなかつた。今は多少の閑のある爲にもう一度わたしのクリストを描き加へたいと思つてゐる。誰もわたしの書いたものなどに、――殊にクリストを描いたものなどに興味を感ずるものはないであらう。しかしわたしは四福音書の中にまざまざとわたしに呼びかけてゐるクリストの姿を感じてゐる。わたしのクリストを描き加へるもわたし自身にはやめることは出來ない。

2 彼の傳記作者

ヨハネはクリストの傳記作者中、最も彼自身に媚びてゐるものである。野蠻な美しさにかがやいたマタイやマルコに比べれば、――いや、巧みにクリストの一生を話してくれるルカに比べてさへ、近代に生まれた我我には人工の甘露味を味へずには措かない。しかしヨハネもクリストの一生の意味の多い事實を傳へてゐる。我我は、ヨハネのクリストの傳記に或苛立たしさを感じるであらう。けれども三人の傳記作者たちに或魅力も感じられるであらう。人生に失敗したクリストは獨特の色彩を加へない限り、容易に「神の子」となることは出來ない、ヨハネはこの色彩を加へるのに少くとも最も當代には、up to date の手段をとつてゐる。ヨハネの傳へたクリストはマコやマタイの傳へたクリストのやうに天才的飛躍を具へてゐない。が、莊嚴にも優しいことは確かである。クリストの一生を傳へるのに何よりも簡古を重んじたマコは恐らく彼の傳記作者中、最もクリストを知つてゐたであらう。マコの傳へたクリストは現實主義的に生き生きしてゐる。我我はそこにクリストと握手し、クリストを抱き、――更に多少の誇張さへすれば、クリストの髯の匂を感じるであらう。しかし莊嚴に勦はりの深いヨハネのクリストも斥けることは出來ない。兎に角彼等の傳へたクリストに比べれば、後代の傳へたクリストは、――殊に彼をデカダンとした或ロシア人のクリストは徒らに彼を斥けるだけである。クリストは一時代の社會的約束を蹂躪することを顧みなかつた。（賣笑婦や稅吏や癩病人はいつも彼の話し相手である。）しかし天國を見なかつたのではない。クリストを l'enfant に描いた畫家たちはおのづからかう云ふクリストに憐みに近いものを感じてゐたであらう。（それは母胎を離れた後、「唯我獨尊」の獅子吼をした佛陀よりもはるかに手よりのないものである。）けれども幼兒だつたクリストに對する彼等の憐みは多少にもしろ、デカダンだつたクリストに對する彼の同情より勝つてゐる。クリストは如何に葡萄酒に醉つても、何か彼自身の中にあるものは天國を見せずには措かなかつた。彼の悲劇はその爲に、――單にその爲に起つてゐる。或るロシア人は或時のクリストの如何に神に近かつたかを知つてゐない。が、四人の傳記作者たちはいづれもこの事實に注目してゐた。

3 共産主義者

クリストはあらゆるクリストたちのやうに共産主義的精神を持つてゐる。若し共産主義者の目から見るとすれば、クリストの言葉は悉く共産主義的宣言に変るであらう。彼に先立つたヨハネさへ「二つの衣服を持てる者は持たぬ者に分け與へよ」と叫んでゐる。しかしクリストは無政府主義者ではない。我我人間は彼の前におのづから本音を露してゐる。（尤も彼は我我人間を操縦することは出来なかつた。――或は我我人間に操縦されることは出来なかつた。それは彼のヨセフではない、聖霊の子供だつた所以である。）しかしクリストの中にあつた共産主義者を論ずることはスチルネルに近い日本では少くとも不便を伴つてゐる。少くともクリスト教徒たちの為に。

4 無抵抗主義者

クリストは無抵抗主義者だつた。それは彼の同志さへ信用しなかつた為である。近代では丁度トルストイの他人の真実を疑つたやうに。――しかしクリストの無抵抗主義は何か更に柔かである。静かに眠つてゐる雪のやうに冷かではあつても柔かである。……

5 生活者

クリストは最速度の生活者である。仏陀は成道する為に何年かを雪山の中に暮らした。しかしクリストは洗礼を受けると、四十日の断食の後、忽ち古代のジヤアナリストになつた。彼はみづから燃え尽きようとする一本の蝋燭にそつくりである。彼の所業やジヤアナリズムは即ちこの蝋燭の蝋涙だつた。

6 ジヤアナリズム至上主義者

クリストの最も愛したのは目ざましい彼のジヤアナリズムである。若し他のものを愛したとすれば、彼の大きい無花果のかげに年をとつた預言者になつてゐたであらう。平和はその時にはクリストの上にも下つて来たのに相違ない。彼はもうその時には丁度古代の賢人のやうにあらゆる妥協のもとに微笑してゐたであらう。しかし運命は幸か不幸か彼にかう云ふ安らかな晩年を與へてくれなかつた。それは受難の名を與へられてゐても、正に彼の悲劇だつたであらう。けれどもクリストはこの悲劇の為に永久に若若しい顔をしてゐるのである。

7 クリストの財布

かう云ふクリストの収入は恐らくはジヤアナリズムによつてゐたのであらう。が、彼は「明日のことを考へるな」と云ふほどのボヘミアンだつた。ボヘミアン？――我我はここにもクリストの中の共産主義者を見ることは困難ではない。しかし彼は兎も角も彼の天才の飛躍するまま、明日のことを顧みなかつた。「ヨブ記」を書いたジヤアナリストは或は彼よりも雄大だつたかも知れない。しかし彼は「ヨブ記」にない優しさを忍びこます手腕を持つてゐた。この手腕は少からず彼の収入を扶けたことであらう。彼のジヤアナリズムは十字架にかかる前に正に最高の市価を占めてゐた。しかし彼の死後に比べれば、――現にアメリカ聖書会社は神聖にも年年に利益を占めてゐる。……

8 或時のマリア

クリストはもう十二歳の時に彼の天才を示してゐた。彼の伝記作者の一人、――ルカの語る所によれば、「其子イエルサレムに留りぬ。然るにヨセフと母これを知らず、三日の後殿にて遇ふ。彼教師の中に坐し、聴き且問ひゐたり。聞く

者皆其知惠と其應對とを奇しとせり。それは論理學を學ばずに論理に長じた學生時代のスウィフトと同じことである。かう云ふ早熟の天才の父母は勿論世界中に稀ではない。クリストの父母は彼を見つけ、「さんざんお前を探してゐた」と言つた。すると彼は存外平氣に「どうしてわたしを尋ねるのです？　わたしはわたしのお父さんのことを務めなければなりません」と答へた。「されど兩親は其語れる事を曉らず」と云ふのも恐らくは事實に近かつたであらう。けれども我我を動かすのは「其母これらの凡の事を心に藏めぬ」と云ふ一節である。美しいマリアはクリストの聖靈の子供であることを承知してゐた。この時のマリアの心もちはいぢらしいと共に哀れである。マリアはクリストの言葉の爲にヨセフに恥ぢなければならなかつたであらう。それから彼女自身の過去も考へなければならなかつたであらう。最後に——或は人氣のない夜中に突然彼女を驚かした聖靈の姿も思ひ出したかも知れない。「人の皆無、仕事は全部」と云ふフロオベルの氣もちは幼いクリストの中にも漲つてゐる。しかし大工の妻だつたマリアはこの時も薄暗い「淚の谷」に向ひ合はなければならなかつたであらう。

9　クリストの確信

クリストは彼のジャアナリズムのいつか大勢の讀者の爲に持て囃されることを確信してゐた。彼のジャアナリズムに威力のあつたのはかう云ふ確信のあつた爲である。從つて彼は最後の審判の、——卽ち彼のジャアナリズムの勝ち誇ることも確信してゐた。尤もかう云ふ確信も時時は動かずにゐなかつたであらう。しかし大體はこの確信のもとに自由に彼のジャアナリズムを公けにした。「一人の外に善者はなし、卽ち神なり」——それは彼の心の中を正直に語つたものだつたであらう。しかしクリストは彼自身も「善き者」でないことを知りながら、「詩的正義」の爲に戰ひつづけた。この確信は事實となつたものの、勿論彼の虛榮心である。クリストも亦あらゆるクリストたちのやうにいつも未來を夢みてゐた超阿呆の一人だつた。若し超人と云ふ言葉に對して超阿呆と云ふ言葉を造るとすれば、……

10　ヨハネの言葉

「世の罪を負ふ神の仔羊を觀よ。我に後れ來らん者は我よりも優れる者なり。」——バプテズマのヨハネはクリストを見、彼のまはりにゐた人人にかう話したと傳へられてゐる。壁の上にストリントベリイの肖像を掲げ、「ここにわたしよりも優れたものがゐる」と言つた、逞しいイブセンの心もちはヨハネの心もちに近かつたであらう。そこに茨に近い嫉妬よりも寧ろ薔薇の花に似た理解の美しさを感じるばかりである。かう云ふ年少のクリストのどの位天才的だつたは言はずとも善い。しかしヨハネもこの時にはやはり最も天才的だつたであらう。丁度丈の高いヨルダンの蘆のゆららかに星を撫でてゐるやうに。……

11　或町のクリスト

クリストは十字架にかかる前に彼の弟子たちの足を洗つてやつた。「ソロモンよりも大いなるもの」を以てみづから任じてゐたクリストのかう云ふ謙遜を示したのは我我を動かさずには措かないのである。それは彼の弟子たちに教訓を與へる爲ではない。彼も彼等と變らない「人の子」だつたことを感じた爲におのづからかう云ふ所業をしたのであらう。それはヨハネのクリストを見て「神の仔羊を觀よ」と言つたのよりも莊嚴である。平和に至る道は何びともクリス

トよりもマリアに學ばなければならぬ。マリアは唯この現世を忍耐して歩いて行つた女人である。(カトリツク教はクリストに達する爲にマリアを通じるのを常としてゐる。それは必しも偶然ではない。直ちにクリストに達しようとするのは人生ではいつも危險である。)或はクリストの母だつたと云ふ以外に所謂ニウス・ヴアリユウのない女人である。弟子たちの足さへ洗つてやつたクリストは勿論マリアの足もとにひれ伏したかつたことであらう。しかし彼の弟子たちはこの時も彼を理解しなかつた。

「お前たちはもう綺麗になつた。」——それは彼の謙遜の中に死後に勝ち誇る彼の希望(或は虚榮心)の一つに溶け合つた言葉である。クリストは事實上逆說的にも正にこの瞬間には彼等に劣つてゐると同時に彼等に百倍するほどまさつてゐた。

12 最大の矛盾

クリストの一生の最大の矛盾は彼の我我人間を理解してゐたにも關らず彼自身を理解出來なかつたことである。彼は庭鳥の啼く前にペテロさへ三度クリストを知らないと云ふことを承知してゐた。彼の言葉はその外にも如何に我我人間の弱いかと云ふことを教へてゐる。しかも彼は彼自身もやはり弱いことを忘れてゐた。クリストの一生を背景にしたクリスト教を理解することはこの爲に——彼の所業を「豫言者X・Y・Zの言葉に應はせん爲なり」と云ふ詭辯を用ひなければならなかつた。のみならず單にかう云ふ詭辯の古い貨幣になつた後はあらゆる哲學や自然科學の力を借りなければならなかつた。クリスト教は畢竟クリストの作つた教訓主義的な文藝に過ぎない。若し彼の(クリストの)ロマン主義的な色彩を除けば、トルストイの晩年の作品はこの古代の教訓主義的な作品に最も近い文藝であらう。

13 クリストの言葉

クリストは彼の弟子たちに「わたしは誰か?」と問ひかけてゐる。この問に答へることは困難ではない。彼はジヤアナリストであると共に、ジヤアナリズムの中の人物——或は「譬喩」と呼ばれてゐる短篇小說の作者だつたと共に「新約全書」と呼ばれてゐる小說的傳記の主人公だつたのである。我我は大勢のクリストたちの中にもかう云ふ事實を發見するであらう。クリストも彼の一生を彼の作品の索引につけずにはゐられない一人だつた。

14 孤身

「イエス……家に入りて人に知られざらん事を願ひしが隱れ得ざりき」——かう云ふマコの言葉は又他の傳記作者の言葉である。クリストは度たび隱れようとした。が、彼のジヤアナリズムや奇蹟は彼に人人を集まらせてゐた。彼のイエルサレムへ向いたのもヘロデの彼をメシアと呼んだ影響も全然ないことはない。しかしクリストは十二の弟子たちよりも或は橄欖の林だの岩の山だのを愛したであらう。しかも彼のジヤアナリズムや奇蹟を行つたのは彼の性格の力である。彼はここでも我我のやうに矛盾せずにはゐられなかつた。けれどもジヤアナリストとなつた後、彼の孤身を愛したのは疑ひのない事實である。トルストイは彼の死ぬ時に「世界中に苦しんでゐる人人は澤山ある。それをなぜわたしばかり大騷ぎをするのか?」と言つた。この名聲の高まると共に自ら安じない心もちは我我にも決してない譯ではない。クリストは名高いジヤアナリストになつた。しかし時時大工の子だつた昔を懷がつてゐたかも知れない。ゲエテはかう云ふ心もちをフアウスト自身に語

らせてゐる。ファウストの第二部の第一幕は實にこの叫び聲の作つたものと言つても善い。が、ファウストは幸ひにも薔花の咲いた路の上に佇んでゐる。……

15 クリストの歎聲

クリストは比喩を話した後、「どうしてお前たちはわからないか？」と言つた。この歎聲も亦度たび繰り返されてゐる。それは彼ほど我我人間を知り、彼ほどボヘミア的生活をつづけたものには或は滑稽に見えるであらう。しかし彼はヒステリックに時時かう叫ばずにはゐられなかつた。阿呆たちは彼を殺した後、世界中に大きい寺院を建ててゐる。が、我我はそれ等の寺院にやはり彼の歎聲を感ずるであらう。「どうしてお前たちはわからないか？」——それはクリストひとりの歎聲ではない。後代にも見じめに死んで行つた、あらゆるクリストたちの歎聲である。

16 サドカイの徒やパリサイの徒

サドカイの徒やパリサイの徒はクリストよりも事實上不滅である。この事實を指摘したのは「進化論」の著者ダアウインだつた。彼等は今後も地衣類のやうにいつまでも地上に生存するであらう。「適者生存」は彼等には正に當て嵌まる言葉である。彼等ほど地上の適者はない。彼等は何の感激もなしに油斷のない處世術を講じてゐる。マリアは恐らくはクリストの彼等の一人でなかつたことを悲しんだであらう。ゲエテをベエトホオヴェンの罵つたのは正にゲエテ自身の中にゐるサドカイの徒やパリサイの徒を罵つたのだつた。

17 カヤパ

祭司の長だつたカヤパにも後代の憎しみは集つてゐる。彼はクリストを憎んでゐたであらう。が、必ずしもこの憎しみは彼一人にあつた譯ではない。唯彼を押し立てることのクリストを憎み或は嫉んだ大勢の人人に便利だつたからである。カヤパはきららに袍を著下し、冷かにクリストを眺めてゐたであらう。現世はそこにピラトと共に意氣地のない聖靈の子供を嘲つてゐる、燃えさかる松明の光りの中に。……

18 二人の盜人たち

クリストの死の不評判だつたことは彼の十字架にかかる時にも盜人たちと一しよだつたのに明らかである。盜人たちの一人はクリストを罵ることを憚らなかつた。彼の言葉は彼自身の中にやはり人生の爲に打ち倒されたクリストを見出したことを示してゐる。しかしもう一人の盜人は彼よりも更に夢想を持つてゐた。クリストはこの盜人の言葉に彼の心を動かしたであらう。この盜人を慰めた彼の言葉は同時に又彼自身を慰めてゐる。——お前はお前の信仰の爲に必ず天國にはひるであらう。

後代はこの盜人に彼等の同情を示してゐる。が、もう一人の盜人には、——クリストを罵つた盜人には輕蔑を示してゐるのに過ぎない。それは正にクリストの教へた詩的正義の勝利を示すものであらう。が、彼等は、——サドカイの徒やパリサイの徒は今日でも私かにこの盜人に贊成してゐる。事實上天國にはひることは彼等には無花果や眞桑瓜の汁を啜るほど重大ではない。

19 兵卒たち

兵卒たちは十字架の下にクリストの衣を分ち合つた。彼等には彼の衣の外に持つてゐたものは見えなかつたのである。彼等は定めし肩幅の廣い模範的兵卒たちだつたのに違ひない。クリ

ストは定めし、彼等を見おろして彼等の所在を輕蔑したであらう。しかし又同時に是認したであらう。クリストはクリスト自身の外には我我人間を理解してゐる。彼の教へた言葉によれば、感傷主義的詠嘆は最もクリストの嫌つたものだつた。

20 受難

十字架にかかつたクリストは多少の虚榮心を持つてゐたものの、彼の肉體的苦痛と共に精神的苦痛にも襲はれたであらう。殊に十字架を見守つてゐた、マリアを眺めることは苦しかつた譯である。が、彼は、エリ、エリ、ラマサバクタニ、と云ふ必死の聲を擧げた後も、たとひそれは彼の愛する讚美歌の一節だつたにもせよ、彼の息の絶える前には何かおほ聲を發してゐた。我我はこのおほ聲の中に或は唯死に迫つた力を感ずるばかりであらう。しかしマタイの言葉によれば、「殿の幔上より下まで裂けて二つになり、又地震ひて岩裂け、墓ひらけて既に寢ねたる聖徒の身多く甦つた。」彼の死は確かに大勢の人人にから云ふショックを與へたであらう。（マリアの腦貧血を起したことを記してゐないのは新約聖書の威嚴を尊んだからである。）クリストの一言一行に永遠の正確を與へてゐるパピニさへこの事實はマタイを引いてゐるのに過ぎない。彼自身を欺いてゐるパピニの詩的情熱はそこにも亦馬脚を露してゐる。クリストの死は事實上彼の豫言者的天才を妄信した人人には——彼等自身の中にエリヤを見た人人には餘りに我我に近いものだつた、從つて火炎の車に乘つて天上に去るよりも恐しかつた。彼等は唯その爲にショックを受けずにはゐられなかつたのである。しかし年をとつた祭司たちはこのショックに欺かれはしなかつただらう。

「それ見たことか！」

彼等の言葉はイエルサレムからニウヨウクや東京へも傳つてゐる。イエルサレムを圍んだ橄欖の山山を最も散文的に飛び超えながら。

21 文化的なクリスト

クリストの弟子たちに理解されなかつたのは彼の餘りに文化人だつた爲である。（彼の天才を別にしても。）彼等は大體は少くとも彼に奇蹟を求めてゐた。哲學の盛んだつた摩伽陀國の王子のクリストよりも奇蹟を行はなかつた。それはクリストの罪よりも寧ろユダヤの罪である。彼はロオマの詩人たちにも遜らない第一流のジャアナリストだつた。同時に又彼の愛國的精神さへ抛つて顧みない文化人だつた。（ルカはクリスト傳第七章二十五以下にこの事實を記してゐる。）バプテズマのヨハネは彼の前には駱駝の毛衣や蝗や野蜜に野人の面目を露してゐる。クリストはヨハネの言つたやうに洗禮に唯聖靈を用ひてゐた。のみならず彼の洗禮(?)を受けたのは十二人の弟子たちの外にも賣笑婦や稅吏や罪人だつた。我我はから云ふ事實にもおのづから彼に柔い心臟のあつたのを見出すであらう。彼は又彼の行つた奇蹟の中に度たび細かい神經を示してゐる。文化的なクリストは十字架の上に最も野蠻な死を遂げるやうになつた。しかし野蠻なバプテズマのヨハネは文化的なサロメの爲に盆の上に頭をのせられてゐる。運命はここにも彼等の爲に逆說的な惡戲を忘れなかつた。……

22 貧しい人たちに

クリストのジャアナリズムは貧しい人たちや奴隷を慰めることになつた。それは勿論天國などに行からと思はない貴族や金持ちに都合の善かつた爲もあるであらう。しかし彼の天才は彼等を動かさずにはゐなかつたのである。いや、

彼等ばかりではない、我我も彼のジャアナリズムの中に何か美しいものを見出してゐる。何度叩いても開かれない門のあることは我我も亦知らないわけではない、狭い門からはひることもやはり我我には必しも幸福ではないことを示してゐる。しかし彼のジャアナリズムはいつも無花果のやうに甘みを持つてゐる。彼は實にイスラエルの民の生んだ、古今に珍らしいジャアナリストだつた。同時に又我我人間の生んだ、古今に珍らしい天才だつた。「豫言者」は彼以後には流行してゐない、しかし彼の一生はいつも我我を動かすであらう。彼は十字架にかかる爲に、——ジャアナリズム至上主義を推し立てる爲にあらゆるものを犧牲にした。ゲエテは婉曲にクリストに對する彼の輕蔑を示してゐる。丁度後代のクリストたちの多少はゲエテを嫉妬してゐるやうに。——我我はエマラの旅びとたちのやうに我我の心を燃え上らせるクリストを求めずにはゐられないのであらう。

天才

天才とは僅かに我我と一歩を隔てたもののことである。只この一歩を理解する爲には百里の半ばを九十九里とする超數學を知らなければならぬ。

又

天才とは僅かに我我と一歩を隔てたもののことである。同時代は常にこの一歩の千里であることを理解しない。後代は又この千里の一歩であることに盲目である。同時代はその爲に天才を殺した。後代は又その爲に天才の前に香を焚いてゐる。

又

民衆も天才を認めることに吝かであるとは信じ難い。しかしその認めかたは常に頗る滑稽である。

又

天才の悲劇は「小ぢんまりした、居心地の好い名聲」を與へられることである。

又

耶蘇「我笛吹けども、汝等踊らず。」
彼等「我等踊れども、汝足らはず。」

（「侏儒の言葉」より）

ユウゴオ

全フランスを蔽ふ一片のパン。しかもバタはどう考へても、餘りたつぷりはついてゐない。

ドストエフスキイ

ドストエフスキイの小説はあらゆる戲畫に充ち滿ちてゐる。尤もその又戲畫の大半は惡魔をも憂鬱にするに違ひない。

フロオベル

フロオベルのわたしに敎へたものは美しい退屈もあると言ふことである。

モオパスサン

モオパスサンは氷に似てゐる。尤も時には氷砂糖にも似てゐる。

ポオ

ポオはスフィンクスを作る前に解剖學を研究した。ポオの後代を震駭した祕密はこの研究に潜んでゐる。

（「侏儒の言葉」より）

或舊友へ送る手記

誰もまだ自殺者自身の心理をありのまま書いたものはない。それは自殺者の自尊心や或は彼れ自身に對する心理的興味の不足によるものであらう。僕は君に送る最後の手紙の中にはつきりこの心理を傳へたいと思つて居る。もつとも僕の自殺する動機は特に君に傳へずとも善い。レニエは彼の短篇の中に或自殺者を描いて居る。この短篇の主人公は何の爲めに自殺するかを彼自身も知つて居ない。君は新聞の三面記事のうちに生活難とか、病苦とか、或は又精神的苦痛とか、種種の自殺の動機を發見するであらう。然し僕の經驗によれば、それは動機の全部ではない。のみならず大抵は動機に至る道程を示して居るだけである。自殺者は大抵はレニエの描いた樣に何のために自殺するかを知らないであらう。それは我我の行爲する樣に複雜な動機を含んで居る。が、少くとも僕の場合は唯ぼんやりした不安である。何か僕の將來に對する唯ぼんやりした不安である。君は或は僕の言葉を信用することは出來ないであらう。然し十年間の僕の經驗は僕に近い人人の僕に近い境遇に居ない限り僕の言葉は風の中の歌の樣に消えることを教へて居る。從つて僕は君を咎めない。……

僕はこの二年ばかりの間は死ぬことばかり考へつづけた。僕のしみじみした心地になつてマインレンデルを讀んだのもこの間である。マインレンデルは抽象的の言葉に巧みに死に向ふ道程を描いて居るのに違ひない。が、僕はもつと具體的に同じことを描きたいと思つて居る。家族達に對する同情などはかう云ふ欲望の前には何でもない。これもまた君には Inhuman の言葉を與へずには措かないであらう。けれども若し非人間的とすれば、僕は一面には非人間的である。――僕は何でも正直に書かなければならぬ義務を持つて居る。僕は僕の將來に對するぼんやりとした不安も解剖した。それは僕の「阿呆の一生」の中に大體は盡して居るつもりである。ただ僕に對する社會的條件――僕の上に影を投げた封建時代の事だけは故意にその中に書かなかつた。なぜ又故意に書かなかつたかといへば我我人間は今日でも多少は封建時代の中に居るからである。僕はそこにある舞臺の外に背景や照明や登場人物の――大抵は僕の所作を書かうとした。のみならず社會的條件などは、その社會的條件の中にゐる僕自身に判然と判るかどうかも疑はない譯にはゆかないであらう。――僕の第一に考へたことはどうすれば苦まずに死ぬかと云ふことだつた。縊死は勿論この目的に最も合する手段である。が、僕は僕自身の縊死してゐる姿を想像し贅澤にも美的嫌惡を感じた。（僕は或女人を愛した時も彼女の文字の下手だつた爲に急に愛を失つたのを覺えてゐる。）溺死も亦水泳の出來る僕には到底目的を達する筈はない。のみならず萬一成就するとしても縊死よりも苦

痛は多いわけである。縊死も僕には何よりも先に美的嫌惡を與へずにはゐなかつた。ピストルやナイフを用ふる死は僕の手の震へる爲に失敗する可能性を持つてゐる。ビルディングの上から飛び下りるのもやはり見苦しいに相違ない。

僕はこれ等の事情により、藥品を用ひて死ぬことにした。藥品を用ひて死ぬことは縊死することよりも苦しいであらう。然し縊死することよりも美的嫌惡を與へない外に蘇生する危險のない利益を持つてゐる。唯この藥品を求めることは勿論僕には容易ではない。僕は內心自殺することに定め、あらゆる機會を利用してこの藥品を手に入れようとした。同時に又毒物學の知識を得ようとした。

それから僕の考へたのは僕の自殺する場所である。僕の家族たちは僕の死後には僕の遺產に手よらなければならぬ。僕の遺產は百坪の土地と僕の家と僕の著作權と僕の貯金二千圓のあるだけである。僕は僕の自殺した爲に僕の家の賣れないことを苦にした。從つて別莊の一つもあるブルヂョアたちに羨ましさを感じた。君はから云ふ僕の言葉に、ある可笑しさを感じるであらう。僕も亦今は僕自身の言葉にある可笑しさを感じてゐる。が、このことを考へた時には事實上しみじみ不便を感じた。この不便は到底避けるわけには行かない。

僕はただ家族達の外に出來るだけ死體を見られないやうに自殺したいと思つてゐる。然し僕は手段を定めた後も半ばは生に執著してゐた。從つて死に飛び入る爲のスプリング・ボオドを必要とした。（僕は紅毛人達の信ずるやうに自殺することを罪惡とは思つてゐない。佛陀は現に阿含經中に彼の弟子の自殺を肯定してゐる。曲學阿世の徒はその肯定にも「やむを得ない」場合の外はなどといふであらう。然し第三者の眼から見て「やむを得ない場合」といふのは見す見すより悲慘に死ななければならぬ非常の變の時にあるものではない。誰でも皆自殺するのは彼自身に「やむを得ない場合」だけに行ふのである。その前に敢然と自殺するものは寧ろ勇氣に富んでゐなければならぬ。）このスプリング・ボオドの役に立つものは何と言つても女人である。クライストは彼の自殺する前に度たび彼の友達に（男の）道伴れになることを勸誘した。又ラシイヌもモリエエルやボアロオと一しよにセエヌ河に投身しようとしてゐる。然し僕は不幸にもかう云ふ友だちを持つてゐない。唯僕の知つてゐる女人は僕と一緒に死なうとした。が、それは僕等の爲には出來ない相談になつてしまつた。そのうちに僕はスプリング・ボオドなしに死に得る自信を生じた。

それは誰も一しよに死ぬもののないことに絕望した爲に起つた爲ではない。寧ろ次第に感傷的になつた僕はたとひ死別するにもしろ、僕の妻を劬りたいと思つたからである。同時に又僕一人自殺することは二人一しよに自殺することよりも容易であることを知つたからである。そこには又僕の自殺する時を自由に選ぶことの出來るといふ便宜もあつたのに違ひない。

最後に僕の工夫したのは家族たちに氣づかれないやうに巧みに自殺することであ

る。これは數箇月準備した後、兎に角ある自信に到着した。（それ等の細部に亙ることは僕に好意を有つてゐる人人のために書くわけに行かない。尤もここに書いたにしろ法律上の自殺幇助罪（このくらゐ滑稽な罪名はない。若しこの法律を適用すれば、どの位犯罪人を殖すことであらう。薬局や銃砲店や剃刀屋はたとひ「知らない」と言つたにもせよ我我人間の言葉や感情に我我の意志の現れる限り、多少の嫌疑を受けねばならぬ。のみならず社會や法律はそれ等自身自殺幇助罪を構成してゐる。最後にこの犯罪人たちは大抵は如何にもの優しい心臓を持つてゐることであらう。》幇助罪を構成しないことは確かである。）

僕は冷やかにこの準備を終り、今は唯死と遊んで居る。この先の僕の心もちは大體マイレンデルの言葉に近いであらう。我我人間は人間獣である爲に動物的に死を怖れて居る。所謂生活力といふものは實は動物力の異名に過ぎない。僕も亦人間獣の一匹である。しかし食色にも倦いたところを見ると、次第に動物力を失つて居るであらう。僕の今住んでゐるのは氷の様に透み渡つた、病的な神經の世界である。僕はゆうべ或賣笑婦と一しよに彼女の賃金（！）の話をし、しみじみ「生きるために生きて居る」我我人間の哀れさを感じた。若しみづから甘んじて永久の眠りにはひることが出來れば、我我自身の爲に幸福でないまでも平和であるに違ひない。併し僕のいつ敢然と自殺出來るかは疑問である。唯自然はかういふ僕にはいつもよりも一層美しい。君は自然の美しいのを愛ししかも自殺しようとする僕の矛盾を笑ふであらう。けれども自然の美しいのは、僕の末期の眼に映るからである。僕は他人よりも見、愛し、且又理解した。それだけは苦しみを重ねた中にも多少僕には滿足である。どうかこの手紙は僕の死後にも何年かは公表せずに措いてくれ給へ。僕は或は病死のやうに自殺しないとも限らないのである。

附記　僕はエムペドクレスの傳を讀み、みづから神としたい欲望の如何に古いものかを感じた。僕の手記は意識してゐる限り、みづから神としないものである。いやみづから大凡下の一人としてゐるものである。君はあの菩提樹の下に「エトナのエムペドクレス」を論じ合つた二十年前を覺えてゐるであらう。僕はあの時代にはみづから神にしたい一人だつた。

修身

良心とは嚴肅なる趣味である。

×

良心は道徳を造るかも知れぬ。しかし道徳は未だ嘗て、良心の良の字を造つたことはない。

×

良心もあらゆる趣味のやうに、病的なる愛好者を持つてゐる。さう云ふ愛好者は十中八九聰明なる、貴族か富豪かである。

（侏儒の言葉より）

尾生の信

尾生は橋の下に佇んで、さつきから女の來るのを待つてゐる。

見上げると、高い石の橋欄には、蔦蘿が半ば這ひかかつて、時時その間を通りすぎる往來の人の白衣の裾が、鮮かな入日に照らされながら、悠悠と風に吹かれて行く。が、女は未だに來ない。

尾生はそつと口笛を鳴しながら、氣輕く橋の下の洲を見渡した。

橋の下の黄泥の洲は、二坪ばかりの廣さを剩して、すぐに水と續いてゐる。水際の蘆の間には、大方蟹の棲家であらう、いくつも圓い穴があつて、其處へ波が當る度に、たぶりと云ふかすかな音が聞えた。が、女は未だに來ない。

尾生は稍待遠しさうに水際まで歩を移して、舟一艘通らない靜な川筋を眺めまはした。

川筋には青い蘆が、隙間もなくひしひしと生えてゐる。のみならずその蘆の間には、處處に川楊が、こんもりと圓く茂つてゐる。だからその間を縫ふ水の面も、川幅の割には廣く見えない。唯、帶程の澄んだ水が、雲母のやうな雲の影をたつた一つ鍍金しながら、ひつそりと蘆の中にうねつてゐる。が、女は未だに來ない。

尾生は水際から歩をめぐらせて、今度は廣くもない洲の上を、あちらこちらと歩きながら、徐に暮色を加へて行く、あたりの靜けさに耳を傾けた。

橋の上には暫くの間、行人の跡を絶つたのであらう。沓の音も、蹄の音も、或は又車の音も、其處からはもう聞えて來ない。風の音、蘆の音、水の音、――それから何處かでけたたましく、蒼鷺の啼く聲がした。と思つて立止ると、何時か潮がさし出したと見えて、黄泥を洗ふ水の色が、さつきよりは間近に光つてゐる。が、女は未だに來ない。

尾生は險しく眉をひそめながら、橋の下のうす暗い洲を、愈足早に歩き始めた。その内に川の水は、一寸づつ、一尺づつ、次第に洲の上へ上つて來る。同時に又川から立ち昇る藻の匂や水の匂も、冷たく肌にまつはり出した。見上げると、もう橋の上には鮮かな入日の光が消えて、唯、石の橋欄ばかりが、ほのかに青んだ暮方の空を、黑黑と正しく切り拔いてゐる。が、女は未だに來ない。

尾生はとうとう立ちすくんだ。

川の水はもう沓を濡しながら、鋼鐵よりも冷やかな光を湛へて、漫漫と橋の下に擴がつてゐる。すると膝も、腹も、胸も、恐らくは頃刻を出ない内に、この酷薄な滿潮の水に隱されてしまふのに相違あるまい。いや、さう云ふ内にも水嵩は益高くなつて、今ではとうとう兩脛さへも、川波の下に沒してしまつた。が、女は未だに來ない。

尾生は水の中に立つた儘、まだ一縷の望を便りに、何度も橋の空へ眼をやつた。

腹を浸した水の上には、とうに蒼茫たる暮色が立ち罩めて、遠近に茂つた蘆や柳も、寂しい葉ずれの音ばかりを、ぼんやりした靄の中から送つて來る。と、尾生の鼻を掠めて、鱸らしい魚が一匹、ひらりと白い腹を飜した。その魚の躍つた空にも、疎ながらもう星の光が見えて、蔦蘿のからんだ橋欄の形さへ、いち早い宵暗の中に紛れてゐる。が、女は未だに來な

い。……

夜半、月の光が一川の蘆と柳とに溢れた時、川の水と微風とは静に囁を交しながら、橋の下の尾生の死骸を、やさしく海の方へ運んで行つた。が、尾生の魂は、寂しい天心の月の光に、思ひ憧れたせゐかも知れない。ひそかに死骸を抜け出すと、ほのかに明るんだ空の向うへ、まるで水の匂や藻の匂が音もなく川から立ち昇るやうに、うらうらと高く昇つて行つた。……

それから幾千年かを隔てた後、この魂は無数の流転を閲して、又生を人間に託さなければならなくなつた。それがかう云ふ私に宿つてゐる魂なのである。だから私は現代に生れはしたが、何一つ意味のある仕事が出来ない。昼も夜も漫然と夢みがちな生活を送りながら、唯、何か来るべき不可思議なものばかりを待つてゐる。丁度あの尾生が薄暮の橋の下で、永久に来ない恋人を何時までも待ち暮したやうに。

（大正七年十二月作）

「越びと」（旋頭歌二十五首）のうち

あぶら火のひかりに見つつこころ悲しも、
み雪ふる越路のひとの年ほぎのふみ。

×

むらぎものわがこころ知る人の恋しも。
み雪ふる越路のひとはわがこころ知る。

×

現し身を歎けるふみの稀になりつつ、
み雪ふる越路のひとも老いむとすあはれ。

×

うち日さす都を出でていく夜ねにけむ。
この山の硫黄の湯にもなれそめにけり。

×

みづからの体温守るははかなかりけり、
静かなる朝の小床に目をつむりつつ。

×

何しかも寂しからむと庭をあゆみつ、
ひつそりと羊歯の若葉にさす朝日はや。

×

ゑましげに君と語ろふ君がまな子を
ことわりにあらそひかねてわが目守りをり。

×

寂しさのきはまりけめやこころ揺らがず、
この宿の石菖の鉢に水やりにけり。

×

朝曇りすずしき店に来よや君が子、
玉くしげ箱根細工をわが買ふらくに。

×

池のべに立てる楓ぞいのちかなしき。
幹に手をさやるすなはち秀をふるひけり。

×

腹立たし君と語れる医者の笑顔は。
馬じもの嘶ひわらへる医者の歯ぐきは。

×

うつけたるこころをもちて街ながめをり。
日ざかりの馬糞にひかる蠅のしづけさ。

×

うしろより立ち来る人を身に感じつつ、
電燈の暗き二階をつつしみくだる。

×

たまきはるわが現し身ぞおのづからなる。
赤らひく肌をわれの思はずと言はめや。

（明星の六巻第三號より）

東洋の秋

おれは日比谷公園を歩いてゐた。

空には薄雲が重なり合つて、地平に近い樹樹の上だけ、僅にほの青い色を殘してゐる。そのせゐか秋の木の間の路はまだ夕暮が來ない內に、砂も、石も、枯草も、しつとりと濡れてゐるらしい。いや、路の右左に枝をさしかはせた篠懸にも、露に洗はれたやうな薄明りが、やはり黄色い葉の一枚毎にかすかな陰影を交へながら、懶げに漂つてゐるのである。

おれは籐の杖を小脇にして、火の消えた葉卷を銜へながら、別に何處へ行かうと云ふ當もなく、寂しい散歩を續けてゐた。

そのうそ寒い路の上には、おれ以外に誰も歩いてゐない。路をさし挾んだ篠懸も、ひつそりと黄色い葉を垂らしてゐる。仄かに霧の懸つてゐる行く手の樹樹の間からは、唯、噴水のしぶく音が、百年の昔も變らないやうに、小止みないさざめきを送つて來る。その上今日はどう云ふ譯か、公園の外の町の音も、まるで風の落ちた海の如く、蕭條とした木立の向うに靜まり返つてしまつたらしい。——と思ふと鋭い鶴の聲が、しめやかな噴水の響を壓して、遠い林の奧の池から、一二度高く空へ舉つた。

おれは散歩を續けながらも、云ひやうのない疲勞と倦怠とが、重たくおれの心の上にのしかかつてゐるのを感じてゐた。寸刻も休みない賣文生活！　おれはこの儘たつた一人、惱ましいおれの創作力の空に、空しく黄昏の近づくのを待つてゐなければならないのであらうか。

さう云ふ內にこの公園にも、次第に黄昏が近づいて來た。おれの行く路の右左には、苔の匂や落葉の匂が、濕つた土の匂と一しよに、しつとりと冷たく動いてゐる。その中にうす甘い匂のするのは、人知れず木の間に腐つて行く花や果物の香りかも知れない。と思へば路ばたの水たまりの中にも、誰が摘んで捨てたのか、青ざめた薔薇の花が一つ、土にもまみれずに匂つてゐた。もしこの秋の匂の中に、困憊を重ねたおれ自身を名殘りなく浸す事が出來たら——

おれは思はず足を止めた。

おれの行く手には二人の男が、靜に竹箒を動かしながら、路上に明く散り亂れた篠懸の落葉を掃いてゐる。その鳥の巢のやうな髮と云ひ、殆ど肌も蔽はない薄墨色の破れ衣と云ひ、或は又獸にも紛ひさうな手足の爪の長さと云ひ、云ふまでもなく二人とも、この公園を掃除をする人夫の類とは思はれない。のみならず更に不思議な事には、おれが立つて見てゐる間に、何處からか飛んで來た鴉が二三羽、さつと大きな輪を描くと、默然と箒を使つてゐる二人の肩や頭の上へ、先を爭つて舞ひ下つた。が、二人は依然として、砂上に秋を撒き散らした篠懸の落葉を掃いてゐる。

おれは徐に踵を返して、火の消えた葉卷を銜へながら、寂しい篠懸の間の路を元來た方へ歩きだした。

が、おれの心の中には、今までの疲勞と倦怠との代りに、何時か靜な悅びがしつとりと薄明く溢れてゐた。あの二人が死んだと思つたのは、憐むべきおれの迷ひたるに過ぎない。寒山拾得は生きてゐる。永劫の流轉を閲しながらも、今日猶この公園の篠懸の落葉を掃いてゐる。あの二人が生きてゐる限り、懷しい古東洋の秋の夢は、まだ全く東京の町から消え去つてゐ

ないのに違ひない。貧乏生活に疲れたおれをよみ返らせてくれる秋の夢は。

おれは籐の杖を小脇にした儘、氣輕く口笛を吹き鳴らして、篠懸の葉ばかりきらびやかな日比谷公園の門を出た。「寒山拾得は生きてゐる」と、口の内に獨り呟きながら。

（大正七年三月作）

「越びと」（旋頭歌二十五首）のうち

君をあとに君がまな子は出でて行きぬ。
たはやすく少女ごころとわれは見がたし。

×

言にいふにたへめやこころ下に息づき、
君が瞳をまともに見たり、鳶いろの瞳を。

×

秋づける夜を赤赤と天づたふ星、
東京にわが見る星のまばら寂しも。

×

わがあたま少し鈍りぬとひとり言いひ、
薄じめる蚊遣線香に火をつけてをり。

×

ひたぶるに昔くやしも、わがまかずして、
垂乳根の母となりけむ、昔くやしも。

×

たそがるる土手の下べをか行きかく行き、
寂しさにわが摘みむしる曼珠沙華はや。

×

曇り夜のたどきも知らず歩みてや來し。
火ともれる自動電話に人こもるみゆ。

×

寢も足らぬ朝日に見つついく日經にけむ。
風きほふ狹庭のもみぢ黑みけらずや。

×

小夜ふくる炬燵の上に顋をのせつつ、
つくづくと大書棚見るわれを思へよ。

×

今日もまたこころ落ちゐず黃昏るるらむ。
向うなる大き冬木は梢ゆらぎをり。

×

門のべの笹吹きすぐる夕風の音、
み雪ふる越路のひともあはれとを聞け。

（『明星』第六卷第三號より）

陶器の亭

—— Judith Gautier ——

人工の湖のなか
綠と青と、陶器の亭一つ。
かよひぢは碧玉の橋なり。
橋の反り、虎の背に似つ。

亭中に、綵衣の人ら、
涼しき酒、盃に干し、
物語り又は詩つくる、
高高と袖かかげつつ、
のけ樣に帽頂きつつ。

水のなか、
明かにうつれる橋は
碧玉の三日の月めき、
綵衣の人ら
逆樣に酒のめる見ゆ、
陶器の亭のもなかに。

（『點心』の「パテスルの龍」より）

沼

おれは沼のほとりを歩いてゐる。

晝か、夜か、それもおれにはわからない。唯、どこかで蒼鷺の啼く聲がしたと思つたら、蔦葛に掩はれた木木の梢に、薄明りの仄めく空が見えた。

沼にはおれの丈よりも高い蘆が、ひつそりと水面をとざしてゐる。水も動かない。藻も動かない。水の底に棲んでゐる魚も——魚がこの沼に棲んでゐるであらうか。

晝か、夜か、それもおれにはわからない。おれはこの五六日、この沼のほとりばかり歩いてゐた。寒い朝日の光と一しよに、水の匂や蘆の匂がおれの體を包んだ事もある。と思ふと又枝蛙の聲が、蔦葛に掩はれた木木の梢から、一つ一つかすかな星を呼びさました覺えもあつた。

おれは沼のほとりを歩いてゐる。

沼にはおれの丈よりも高い蘆が、ひつそりと水面をとざしてゐる。おれは遠い昔から、その蘆の茂つた向うに、不思議な世界のある事を知つてゐた。いや、今でもおれの耳には Invitation au Voyage の曲が、絶え絶えに其處から漂つて來る。さう云へば水の匂や蘆の匂と一しよに、あの「スマトラの忘れな草の花」も、蜜のやうな甘い匂を送つて來はしないであらうか。

晝か、夜か、それもおれにはわからない。おれはこの五六日、その不思議な世界に憧れて、蔦葛に掩はれた木木の間を、夢現のやうに歩いてゐた。が、此處に待つてゐても、唯蘆と水とばかりがひつそりと擴がつてゐる以上、おれは進んで沼の中へ、あの「スマトラの忘れな草の花」を探しに行かなければならぬ。見れば幸、蘆の中から半ば沼へさし出てゐる、年經た柳が一株ある。あすこから沼へ飛びこみさへすれば、造作なく水の底にある世界へ行かれるのに違ひない。

おれはとうとうその柳の上から、思ひ切つて沼へ身を投げた。

おれの丈よりも高い蘆が、その拍子に何かしやべり立てた。水が呟く。藻が身ぶるひをする。あの蔦葛に掩はれた、枝蛙の鳴くあたりの木木さへ、一時はさも心配さうに吐息を洩らし合つたらしい。おれは石のやうに水底へ沈みながら、數限りもない靑い焰が、目まぐるしくおれの身のまはりに飛びちがふやうな心もちがした。

晝か、夜か、それもおれにはわからない。

おれの死骸は沼の底の、滑な泥に横はつてゐる。死骸の周圍にはどこを見ても、まつ靑な水があるばかりであつた。この水の下にこそ不思議な世界があると思つたのは、やはりおれの迷だつたのであらうか。事によると Invitation au Voyage の曲も、この沼の精が惡戲に、おれの耳を欺してゐたのかも知れない。が、さう思つてゐる内に、何やら細い莖が一すぢ、おれの死骸の口の中から、すらすらと長く伸び始めた。さうしてそれが頭の上の水面へやつと屆いたと思ふと、忽ち白い睡蓮の花が、丈の高い蘆に圍まれた、藻の匂のする沼の中に、的皪と鮮な莟を破つた。

これがおれの憧れてゐた、不思議な世界だつたのだな。——おれの死骸はかう思ひながら、その玉のやうな睡蓮の花を何時までもぢつと仰ぎ見てゐた。

（大正七年三月作）

澄江堂雜記（一）

御降り

今日は御降りである。尤も歳事記を検べて見たら、二日は御降りと云はぬかも知れぬ。が、蓬萊を飾つた二階にゐれば、やはり心もちは御降りである。下では赤ん坊が泣き續けてゐる。舌に腫物が出來たと云ふが、鵞口瘡にでもならねば好い。ぢつと炬燵に當りながら、「つづらふみ」を讀んでゐても、心は何時かその泣き聲にとられてゐる事が度度ある。私の家は鶉居ではない。娑婆界の苦勞は御降りの今日も、遠慮なく私を惱ますのである。昔或御降りの座敷に、姉や妹の友達と、羽根をついて遊んだ事がある。その仲間には私の外にも、私より幾つか年上の、おとなしい少年が交つてゐた。彼は其處にゐた少女たちと、悉く仲好しの間柄だつた。だから羽根をつき落したものは、羽子板を譲る規則があつたが、自然と誰でも私より、彼へ羽子板を渡し易かつた。所がその内にどう云ふ拍子か、彼のついた金羽根が、長押の溝に落ちこんでしまつた。彼は早速勝手から、大きな踏み臺を運んで來た。さうしてその上へ乘りながら、長押の金羽根を取り出さうとした。その時私は脊の低い彼が、踏み臺の上に爪立つたのを見ると、いきなり彼の足の下から、踏み臺を外してしまつた。彼は長押に手をかけた儘、ぶらりと宙へぶら下つた。姉や姉の友だちは、さう云ふ彼を救ふ爲に、私を叱つたり賺したりした。が、私はどうしても、踏み臺を人手に渡さなかつた。彼は少時下つてゐた後、兩手の痛みに堪へ兼たのか、とうとう大聲に泣き始めた。して見れば御降りの記憶の中にも、幼いながら嫉妬なぞと云ふ娑婆界の苦勞はあつたのである。私に泣かされた少年は、その後學問の修業はせずに、或會社へ通ふ事になつた。今ではもう四人の子の父親になつてゐるさうである。私の家の御降りは、赤ん坊の泣き聲に滿たされてゐる。彼の家の御降りはどうであらう。

御降りや竹ふかぶかと町の空

池西言水

「言ひ難きを言ふは老練の上の事なれど、そは多く俗事物を詠じて、雅ならしむる者のみ。其事物如何に雅致ある者なりとも、十七字に餘りぬべき程の多量の意匠を十七字の中につづめん事は、殆んど爲し得べからざる者なれば、古來の俳人も皆之を試みざりしに似たり。然れども一二此種の句なくして可ならんや。池西言水は實に其作者なり。」これは正岡子規の言葉である。（俳諧大要。一五六頁）子規はその後に實例として、言水の句二句を揭げてゐる。それは「姨捨てん湯婆に燗せ星月夜」と「黒塚や局女のわく火鉢」との二句である。自分は言水のこれらの句が、「十七字に餘りぬべき程の多量の意匠を十七字の中につづめ」たとするには、何の苦情も持つて居らぬ。しかしこの意味では蕪村や召波も、「十七字に餘りぬべき程の多量の意匠を十七字の中につづめ」てはゐないか。「御手打の夫婦なりしを衣更へ」や「いねかしの男うれたき砧かな」も、やはり複雑な内容を十七字の形式につづめてはゐないか。しかも「燗せ」や「わく」と云ふ言葉使ひが目立たないだけに、一

屠成功してはゐないか。して見れば子規が評した言葉は、言水にも確に當て嵌まるが、言水の特色を云ひ盡すには、餘りに廣すぎる憾みはないか。から自分は思ふのである。では言水の特色は何かと云へば、それは彼が十七字の内に、萬人が知らぬ一種の鬼氣を盛りこんだ手際にあると思ふ。子規が擧げた二句を見ても、すぐに自分を動かすのは、その内に漂ふ無氣味さである。試みに言水句集を開けば、この類の句は外にも多い。

御忌の鐘皿割る罪や曉の雲
つま猫の胸の火や行く潦
夜櫻に怪しやひとり須磨の蜑
蚊柱の礎となる捨子かな
人魂は消えて梢の燈籠かな
あさましや蟲鳴く中に尼ひとり
火の影や人にて凄き網代守

句の佳否に關らず、これらの句が與へる感じは、蕪村にもなければ召波にもない。元祿でも言水唯一人である。自分は言水の作品中、必しもから云ふ鬼趣を得た句が、最も神妙なものだとは云はぬ。が、言水が他の大家と特に趣を異にするのは、此處にあると云はざるを得ないのである。言水通稱は八郎兵衛、紫藤軒と號した。享保四年歿。行年は七十三である。

貴族

貴族或は貴族主義者が思ひ切つてうぬぼれられないのは、彼等も亦われら同樣、厠に上る故なるべし。さもなければ何處の國でも、先祖は神妙のやうな顏をするかも知れず。德川時代の大諸侯は、參覲交代の途次旅宿へとまると、必大恭は砂づめの樽へ入れて、後へ殘さぬやうに心がけた由。その話を聞かされたら、彼等もこの弱點には氣づいてゐたと云ふ氣がしたり。これをもつと上品に云へば、ニイチェが「何故人は神だと思はないかと云ふと、「云云」の警句と同じになつてしまふだらう。

百日紅

自分の知れる限りにては、葉の黄ばみそむる事、櫻より早きはなし。槐これに次ぐ。その代り葉の落ち盡す事早きものは、百日紅第一なり。櫻や槐の梢にはまだ疎に殘葉があつても、百日紅ばかりは坊主になつてゐる。梧桐、芭蕉、柳など詩や句に搖落を歌はるるものは、みな思ひの外散る事遲し。一體百日紅と云ふ木、春も新緑の色洽き頃にならねば、容易に赤い芽を吹かず。長塚節氏の歌に「春雨になまめきわたる庭ぬちにおろかなりける梧桐の木か」とあれど、梧桐の芽を吹くは百日紅よりも早きやうなり。朝寢も好きなら宵寢も好きなる事、百日紅の如きは滅多になし。自分は時時この木の横著なるに、人間同樣腹を立てる事あり。

不朽

人命に限りあればとて、命を粗末にして好いとは限らず。なる可く長生をしようとするのは、人各の分別なり。藝術上の作品も何時かは亡ぶのに違ひなし。畫力は五百年、書力は八百年とは、王世貞既にこれを云ふ。されどなる可く長持ちのする作品を作らうと思ふのは、これ亦我我の隨意なり。から思へば藝術の不朽を信ぜざると、後世に作品を殘さんとするとは、格別矛盾した考へにもあらざるべし。さらば如何なる作品が、古くならずにゐるかと云ふに、書や畫の事は知らざれども、文藝上の作品にては簡潔なる文體が長持ちのする事は事實なり。勿論文體即作品と云ふ理窟なければ、文體さ

へ然らばその作品が常に新たなりとは云ふべからず。されど文體が作品の價値に影響する限り、絢爛目を奪ふ如き文體が案外古くなる事は、殆ど疑なきが如し。ゴオテイエは今日讀むべからず。然れどもメリメエは日に新たなり。これを我國の文學に見るも、鷗外先生の短篇の如き、それらと同時に發表されし冷笑、「うづまき」等の諸作に比ぶれば、今猶淸新の氣に富む事、昨日校正を濟ませたと云ふとも、差支へなき位ならずや。ゾラは嘗て文體を學ぶに、ヴオルテエルの簡を宗とせずして、ルッソオの華を宗とせしを歎き、彼自身の小說が早晩古くなるべきを豫言したる事ある由、善く己を知れりと云ふべし。されど前にも書きし通り、文體は作品のすべてにあらず。文體の如何を超越したる所に、作品の永續性を求むれば、やはりその深さに歸著するならん。「凡そ事物の能く久遠に垂るる者は、（中略）切實の處あるを要す」（芥舟學畫編）とは、文藝の上にも確論だと思ふ。

流俗

思ふに流俗なるものは、常に前代には有用なりし眞理を株守する特色あり。尤も一時代前、二時代前、或は又三時代前と、眞理の古さに從つて、いろいろの流俗なきにあらず。さらば一時代の長さは幾何かと云へば、こは時と處とにより、一概には何年と定め難し。まづ日本ならば一時代約十年とも申すべきか。而して普通流俗が學問藝術に害をなす程度は、その株守する眞理の古さと正比例するものなり。たとへば武士道主義者などが、今日子供の惡戯程も時代の進歩を害せざるは、この方則の好例なるべし。故に現在の文壇にても人道主義の陣笠連は、自然主義の陣笠連より厄介物たるを當然とす。

Butler の說

サムエル・バトラアの說に云ふ。「モリエルが無智の老婢に自作の臺本を讀み聞かせたと云ふは、何も老婢の批評を正しとしたのではない。唯自ら朗讀する間に、自ら臺本の瑕疵を見出すが爲である。かかる場合聽き手を勤むるものは、無智の老婢に若くものはあるまい」と。まことに一理ある說である。白居易などが老婢に自作の詩を讀み聽かせたと云ふのも、同じやうな心があつたのかも知れぬ。しかし自分がバトラアの說を面白しとするのは、啻に一理あるが故のみではない。この說はバトラアのやうに創作の經驗がある人でないと、道破されさうもない說だからである。成程世のつねの學者や批評家にも、モリエルの意見はわかるかも知れぬ。が、それだけでは立ちどころに、バトラアの說が書けるものではない。こんな消息に通じるには、おのれの中にモリエルその人を感じてゐなければ駄目である。其處が自分には面白い氣がする。ロダンの手記なぞが尊いのも、かう云ふ所が多い故だ。三千里外に故人の面を見ようと思つたら、どうしても自ら苦まねばならぬ。

泡鳴氏の事

何でも秋の夜更けだつた。僕は岩野泡鳴氏と一しよに、巣鴨行の電車に乘つてゐた。泡鳴氏は昂然と洋傘の柄にマントの腕をかけて、例の如く聲高に西洋草花の栽培法だの氏が自得の健胃法だのをいろいろ僕に話してくれた。

その內にどう云ふ拍子だつたか、話題が當時評判だつた或小說の賣れ行きに落ちた。すると泡鳴氏は傍若無人に、

「しかし君、新進作家とか何とか云つたつて、

そんなに本は賣れやしないだらう。僕の本は大抵、――部賣れるが、君なんぞは一體何部位賣れる？」と云つた。
　僕は聊か恐縮しながら、止むを得ず「傀儡師」の賣れ高を答へた。
「皆そんなものかね？」
　泡鳴氏は更に追求した。僕よりも著書の賣れ高の多い新進作家は大勢ある。――僕は二三の小説を舉げて、僕の仄聞する賣れ高を答へた。それらは不幸にも氏の著書より、多少は賣れ行きが好いに違ひなかつた。
「さうかね。存外好く賣れるな。」
　泡鳴氏は一瞬間、不審さうに額を曇らせた。が、それは文字通り、一瞬間に過ぎなかつた。僕がまだ何とも答へない内に、氏の眼には忽ち前のやうな潑剌たる光が還つて來た。と同時に泡鳴氏は恰も天下を憐むが如く悠然とかう云ひ放つた。
「尤も僕の小説はむづかしいからな。」
　詩人、小說家、戲曲家、評論家、――それらの資格は偉人がきめるが好い。少くとも僕の眼に映じた我岩野泡鳴氏は、殆ど莊嚴な氣がする位愛すべき樂天主義者だつた。

漱石山房の秋

　夜寒の細い往來を爪先上りに上つて行くと、古ぼけた板屋根の門の前へ出る。門には電燈がともつてゐるが、柱に揭げた標札の如きは、殆ど有無さへも判然しない。門をくぐると砂利が敷いてあつて、その又砂利の上には庭樹の落葉が紛紛として亂れてゐる。
　砂利と落葉とを踏んで玄關へ來ると、これも古ぼけた格子戶の外は、壁と云はず壁板と云はず、悉く蔦に蔽はれてゐる。だから案內を請はうと思つたら、まづその蔦の枯葉をがさつかせて、呼鈴の釦を探さねばならぬ。それでもやつと呼鈴を押すと、明りのさしてゐる障子が開いて、束髮に結つた女中が一人、すぐに格子戶の掛け金を外してくれる。玄關の東側には廊下があり、その廊下の欄干の外には、冬を知らない木賊の色が一面に庭を埋めてゐるが、客間の硝子戶を洩れる電燈の光も、今は其處までは照らしてゐない。いやその光がさしてゐるだけに、向うの軒先に吊した風鐸の影も、反つて濃くなつた宵闇の中に隱されてゐる位である。
　硝子戶から客間を覗いて見ると、雨漏りの痕と鼠の食つた穴とが、白い紙張りの天井に斑斑とまだ殘つてゐる。が、十疊の座敷には、赤い五羽鶴の毯が敷いてあるから、疊の古びだけは分明でない。この客間の西側（玄關寄り）には、更紗の唐紙が二枚あつて、その一枚の上に古色を帶びた壁懸けが一つ下つてゐる。麻の地に黃色い百合のやうな花を繡つたのは、津田青楓氏か何かの圖案らしい。この唐紙の左右の壁際には、餘り上等でない硝子戶の本箱があつて、その何段かの棚の上にはぎつしり洋書が詰まつてゐる。それから廊下に接した南側には、殺風景な鐵格子の西洋窓の前に大きな紫檀の机を据ゑて、その上に硯や筆立てが、紙鎭の類や法帖と一しよに、存外行儀よく並べてある。その窓を剩した南側の壁と向うの北側の壁とには、殆ど軸の挂かつてゐなかつた事がない。藏澤の墨竹が黃興の「文章千古事」と挨拶をしてゐる事もある。木庵の「花開萬國春」が吳昌碩の木蓮と鉢合せをしてゐる事もある。が、客間を飾つてゐる書畫は獨りこれらの軸ばかりではない。西側の壁には安井曾太郎氏の油繪の風景畫が、東側の壁には齋藤與里氏の油繪の草花が、さうして又北側の壁には明月禪師の無絃琴と云ふ草書の橫物が、いづれも額になつて挂か

つてゐる。その額の下や軸の前に、或は銅瓶に菊もどきが、或は青磁に菊の花がその時時で投げこんであるのは、無論奥さんの風流に相違あるまい。

もし先客がなかつたなら、この客間を覗いた眼を更に次の間へ轉じなければならぬ。次の間と云つても客間の東側には、唐紙も何もないのだから、實は一つ座敷も同じ事である。唯此處は板敷で、中央に擴げた方一間あまりの古絨毯の外には、一枚の疊も敷いてはない。さうして東と北と二方の壁には、新古和漢洋の書物を詰めた、無暗に大きな書棚が竝んでゐる。書物はそれでも詰まり切らないのか、ぢかに下の床の上へ積んである數も少くない。その上やはり南側の窓際に置いた机の上にも、軸だの法帖だの書集だのが雜然と堆く盛り上つてゐる。だから中央に敷いた古絨毯も、四方に竝べてある書物のおかげで、派手なるべき赤い色が僅ばかりしか見えてゐない。しかもそのまん中には小さな紫檀の机があつて、その又机の向うには壁蒲團が二枚重ねてある。銅印が一つ、石印が二つ三つ、ペン皿に代へた竹の茶箕、その中の萬年筆、それから玉の文鎭を置いた一綴りの原稿用紙——机の上にはこの外に老眼鏡が載せてある事も珍しくない。その頭上には電燈が煌煌と光を放つてゐる。傍には瀬戸火鉢の鐵瓶が蟲の啼くやうに沸つてゐる。もし夜寒が甚しければ、少し離れた瓦斯煖爐にも赤赤と火が動いてゐる。さうしてその机の後、二枚重ねた座蒲團の上には、何處か獅子を想はせる、背の低い半白の老人が、或は手紙の筆を走らせたり、或は唐本の詩集を飜したりしながら、端然と獨り坐つてゐる。……

漱石山房の秋の夜は、かう云ふ蕭條たるものであつた。

（以上『沙羅の花』より）

漱石山房の冬

わたしは年少のW君と舊友のMに案内されながら、久しぶりに先生の書齋へはひつた。

書齋は此處へ建て直つた後、すつかり日當りが惡くなつた。それから支那の五狩鶴の毯も何時の間にか大分色がさめた。最後にもとの茶の間との境、更紗の唐紙のあつた所も、今は先生の寫眞のある佛壇に形を變へてゐた。

しかしその外は不相變である。洋書のつまつた書棚もある。「無絃琴」の額もある。先生每日原稿を書いた、小さい紫檀の机もある。瓦斯煖爐もある。屏風もある。縁の外には芭蕉もある。芭蕉の軒を拂つた葉うらに、大きい花さへ腐らせてゐる。銅印もある、瀬戸の火鉢もある。天井には鼠の食ひ破つた穴も、……

わたしは天井を見上げながら、獨り言のやうにかう云つた。

「天井は張り換へなかつたのかな。」

「張り換へたんだがね。鼠のやつにはかなはないよ。」

Mは元氣さうに笑つてゐた。

十一月の或夜である。この書齋に客が三人あつた。客の一人はO君である。O君は綿抜瓢一郎と云ふ筆名のある大學生であつた。あとの二人も大學生である。しかしこれはO君が今夜先生に紹介したのである。その一人は袴をはき、他の一人は制服を着てゐる。先生はこの三人の客にこんなことを話してゐた。「自分はまだ生涯に三度しか萬歳を唱へたことはない。最初は……二度目は……三度目は……」制服を著た大學生は膝の邊りの寒い爲に、始終ぶるぶる震へてゐた。それが當時のわたしだつた。もう一人の大學生、——袴をはいたのはKであ

る。Kは或事件の爲に、先生の歿後來ないやうになつた。同時に又舊友のMとも絶交の形になつてしまつた。これは世間も周知のことであらう。

又十月の或夜である。わたしはひとりこの書齋に、先生と膝をつき合せてゐた。話題はわたしの身の上だつた。文を賣つて口を餬するのも好い。しかし買ふ方は商賣である。それを一一註文通り、引き受けてゐてはたまるものではない。貧の爲ならば兎も角も、愼むべきものは濫作である。先生はそんな話をした後、「君はまだ年が若いから、さう云ふ危險などは考へてゐまい。それを僕が君の代りに考へて見るとすればだね。」と云つた。わたくしは今でもその時の先生の微笑を覺えてゐる。いや、暗い軒先の芭蕉の戰ぎも覺えてゐる。しかし先生の訓戒には忠だつたと云ひ切る自信を持たない。

更に又十二月の或夜である。わたしはやはりこの書齋に、瓦斯煖爐の火を守つてゐた。わたしと一しよに坐つてゐたのは先生の奧さんとMとである。先生はもう物故してゐた。Mとわたしとは奧さんにいろいろ先生の話を聞いた。先生はあの小さい机に原稿のペンを動かしながら、床板を洩れる風の爲に惱まされたと云ふことである。しかし先生は傲語してゐた。「京都あたりの茶人の家と比べて見給へ。天井は穴だらけになつてゐるが、兎に角僕の書齋は雄大だからね。」穴は今でも明いた儘である。先生の歿後七年の今でも……

その時若いW君の言葉はわたしの追憶を打ち破つた。

「和本は蟲が食ひはしませんか？」

「食ひますよ。そいつにも弱つてゐるんです。」

Mは高い書棚の前へW君を案内した。

＊　＊　＊　＊　＊

三十分の後、わたしは埃風に吹かれながら、W君と町を歩いてゐた。

「あの書齋は冬は寒かつたでせうね。」

W君は太い杖を振り振り、かうわたしに話しかけた。同時にわたしは心の中にありありと其處を思ひ浮べた。あの蕭條とした先生の書齋を。

「寒かつたらう。」

わたしは何か興奮の湧き上つて來るのを意識した。が、何分かの沈默の後、W君は又話しかけた。

「あの末次平藏ですね、異國御朱印帳を檢べて見ると、慶長九年八月二十六日、又朱印を貰つてゐますが、……」

わたしは默然と歩き續けた。まともに吹きつける埃風の中にW君の輕薄を憎みながら。

（「百艸」より）

月光

——Judith Gautier——

滿月は水より出で、
海は銀の板となりぬ。

小舟には、人人盞を干し、
月明りの雲、かそけきを見る。
山の上に漂ふ雲。

人人あるひは云ふ、——
皇帝の白衣の后と、
あるひは云ふ、——
天翔る鵠のむれと。

（『點心』の「パステルの龍」より）

澄江堂雜記(二)

大雅の畫

僕は日頃大雅の畫を欲しいと思つてゐる。しかしそれは大雅でさへあれば、金を惜まないと云ふのではない。まあせいぜい五十圓位の大雅を一幅得たいのである。

大雅は偉い畫描きである。昔、高久靄厓は一文無しの窮境にあつても、一幅の大雅だけは手離さなかつた。ああ云ふ英靈漢の筆に成つた畫は何百圓と雖も高い事はない。それを五十圓に値切りたいのは、僕に餘財のない悲しさである。しかし大雅の畫品を思へば、たとへば五百萬圓を投ずるのも、僕のやうに五十圓を投ずるのも、安いと云ふ點では同じかも知れぬ。藝術品の價値も小切手や紙幣に換算出來ると考へるのは、度し難い俗物ばかりである。

Samuel Butler の書いた物によると、彼は日頃「出來の好い、ちやんと保存された 四十シリング位のレムブラント」を欲しがつてゐた。處が實際二度までも莫迦に安いレムブラントに遭遇した。一度は一磅と云ふ價の爲に買はなかつたが、二度目には友人の(十五日)に諮つた上、とうとうそれを手に入れる事が出來た。その畫はどう云ふ畫だつたか、どの位の金を拂つたか、それはどちらも明らかではない。が、買つた時は千八百八十七年、買つた場所はストランド(ロンドン)の或質店の店さきである。

かう云ふ先例もあつて見ると、五十圓の大雅を得んとするのは、必ずしも不可能事ではないかも知れぬ。何處か寂しい町の古道具屋の店に、たつた一幅賣り殘された、九霞山樵の水墨山水――僕は時時退屈すると、彌勒の出世でも待つもののやうに、こんな空想にさへ耽ける事がある。

にきび

昔「羅生門」と云ふ小説を書いた時、主人公の下人の頬には、大きい面皰のある由を書いた。當時は王朝時代の人間にも、面皰のない事はあるまいと云ふ推測をすれば當推量に據つたのであるが、その後左經記に二竹とあり、二竹又は二禁なるものは今日の面皰である事を知つた。二竹、二禁等は勿論當て字である。尤もかう云ふ發見は、僕自身に興味がある程、傍人には面白くも何ともあるまい。

將軍

官憲は僕の「將軍」と云ふ小説に、何行も抹殺を施した。處が今日の新聞を見ると生活に窮した癈兵たちは、「一隊長殿にだまされた閣下連の踏臺」とか、「後顧するなと大うそつかれ」とか、種種のポスタアをぶら下げながら、東京街頭を歩いたさうである。癈兵そのものを抹殺する事は、官憲の力にも覺束ないらしい。

又官憲は今後と雖も、○○の○○に○○の念を失はしむる物は、發賣禁止を行ふさうである。○○の念は戀愛と同樣、虚僞の上に立つ事の出來るものではない。虚僞とは過去の眞理であり、今は通用せぬ藩札の類である。官憲は虚僞を強ひながら、○○の念を失ふなと云ふ。

それは落札をつけながら、金貨に換へろと云ふのと變りはない。

無邪氣なるものは官憲である。

毛生え藥

文藝と階級問題との關係は、頭と毛生え藥との關係に似てゐる。もしちやんと毛が生えてゐれば、必しも塗る事を必要としない。又もし禿げ頭だつたとすれば、恐らくは塗つても利かないであらう。

藝術至上主義

藝術至上主義の極致はフロオベルである。彼自身の言葉によれば、「神は萬象の創造に現れてゐるが、しかも人間に姿を見せない。藝術家が創作に對する態度も、亦斯くの如くなるべきである。」この故にマダム・ボヴアリイにしても、ミクロコスモスは展開するが、我我の情意には訴へて來ない。

藝術至上主義、――少くとも小說に於ける藝術至上主義は、確かに欠伸の出易いものである。

一切不捨

何の某は帽子ばかり上等なのをかぶつてゐる、あの帽子さへなければ好いのだが、――かう云ふ言葉をなす人がある。しかしその帽子を除いたにしても、何の某の服裝なるものは、寸分も立派になる次第ではない。唯貧しげな外觀が、全體に蔓延するばかりである。

何の某の小說はセンティメンタルだとか、何の某の戲曲はインテレクチュアルだとか、それらはいづれも帽子の場合と、選ぶ所のない言葉である。帽子ばかり上等なるものは、帽子を除き去る工夫をするより、上着もズボンも外套も、上等ならしむる工夫をせねばならぬ。センティメンタルなる小說の作者は、感情を抑へる工夫をするより、理智を活かすべき工夫をせねばならぬ。

これは獨り藝術上の問題のみではない。人生に於ても同じ事である。五欲の克服のみに骨を折つた坊主は、偉い坊主になつた事を聞かない。偉い坊主になつたものは、常に五欲を克服すべき、他の熱情を抱き得た坊主である。雲照さへ坊主の羅切を聞いては、「男根は須く隆隆たるべし」と、弟子共に教へたと云ふではないか！

我等の内にある一切のものはいやが上にも伸ばさねばならぬ。それが我等に與へられた唯一成佛の道である。

赤西蠣太

或時志賀直哉氏の愛讀者と、「赤西蠣太の戀」の話をした事がある。その時僕はこんな事を云つた。「あの小說の中の人物には蝶螺とか鱒次郎とか安甲とか、大抵魚貝の名がついてゐる。志賀氏にもヒユウモラス・サイドはないのではない。」すると客は驚いたやうに、「成程さうですね。そんな事には少しも氣がつかずにゐました」と云つた。その癖客は僕なぞよりも「赤西蠣太の戀」の筋をはつきり覺えてゐたのである。

客は決して輕薄兒ではない。學問も人格も兼備した、寧ろ珍しい文藝通である。しかもこの事實に氣づかなかつたのは、志賀氏の作品の型とでも云ふか、兎に角何時か頭の中に、さう云ふ物差を拵へた上、それに囚はれてゐた爲であらう。これは獨り客のみではない。我我も氣をつけねばならぬ事である。

釣名文人

古來作家が本を出した時、その本の好評を計る爲に、新聞雜誌に載るべき評論を利用する事は稀ではない。中には手加減を加へるどころか、作者自身然るべき匿名のもとに、手前味噌の評論を書いたのもある。

ド・ロシュフウコオルは名高い格言集の作家である。處がサント・ブウブの書いたものによると、この人さへジュルナアル・デ・サヴァンに出た評論には、彼自身修正を施したらしい。しかもジュルナアル・デ・サヴァンは、當時發行された唯一の新聞であり、その評論の載つたのは、千六百六十五年三月九日だと云ふのだから、作家の評論を利用するのも、ずゐぶん淵源は古いものである。僕はロシュフウコオルの格言を思ひながら、この記事を讀んだ時、實際苦笑せずにはゐられなかつた。それを思へば日本の文壇は、新開地だけに惡風も少い。賣笑批評とか仲間褒め批評とか云つても、まづ害毒は知れたものである。

因に云ふ。この評論の筆者はマダム・ド・サブレ、評論されたのは例の格言集である。

歴史小說

歴史小說と云ふ以上、一時代の風俗なり人情なりに、多少は忠實でないものはない。しかし一時代の特色のみを、——殊に道德上の特色のみを主題としたものもあるべきである。たとへば日本の王朝時代は、男女關係の考へ方でも、現代のそれとは大分違ふ。其處を宛然作者自身も、和泉式部の友だちだつたやうに、虛心平氣に書き上げるのである。この種の歴史小說は、その現代との對照の間に、自然或暗示を與へ易い。メリメのイザベラもこれである。フランスのピラトもこれである。

しかし日本の歴史小說には、未だこの種の作品を見ない。日本のは大抵古人の心に今人の心と共通する、云はばヒュマンな閃きを捉へた、手つ取り早い作品ばかりである。誰か年少の天才の中に、上記の新機軸を出すものはゐないか？

世人

西洋雜誌の載せる所によると、二十一年の九月巴里にアナトオル・フランスの像の建つた時、彼自身その除幕式に演說を試みたと云ふ事である。この頃それを讀んでゐると、かう云ふ一節を發見した。「わたしが人生を知つたのは、人と接觸した結果ではない。本と接觸した結果である。」しかし世人は書物に親しんでも、人生はわからぬと云ふかも知れない。

ルノアルの云つた言葉に、「畫を學ばんとするものは美術館に行け」とか云ふのがある。しかし世人は古名畫を見るよりも、自然に學べと云ふかも知れない。

世人とは常にかう云ふものである。

火渡りの行者

社會主義は、理非曲直の問題ではない。單に一つの必然である。僕はこの必然を必然と感じないものは、恰も火渡りの行者を見るが如き、驚嘆の情を禁じ得ない。あの過激思想取締法案とか云ふものの如きは、正にこの好例の一つである。

俊寛

平家物語や源平盛衰記以外に、俊寛の新

解釋を試みたものは現代に始まつた事ではない。近松門左衛門の俊寛の如きは、最も著名なものの一つである。

近松の俊寛の島に殘るのは、俊寛自身の意志である。丹左衛門尉基康は、俊寛成經康頼等三人の赦免狀を携へてゐる。が、成經の妻になつた、島の女千鳥だけは、舟に乘る事を許されない。正使基康には許す氣があつても、副使の妹尾が許さぬのである。妻子の死を聞いた俊寛は、千鳥を船に乘せる爲に、妹尾太郎を殺してしまふ。「上使を斬りたる咎によつて、改めて今鬼界が島の流人となれば、上の御慈悲の筋も立ち、御上使の落度いささかなし。」この英雄的な俊寛は、成經康頼等の乘船を薦めながら、從容と又かうも云ふのである。「俊寛が乘るは弘誓の船、浮き世の船には望みなし。」

僕は以前久米正雄と、この俊寛の芝居を見た。俊寛は故人段四郎、千鳥は歌右衛門、基康は羽左衛門、——他は記憶に殘つてゐない。俊寛が乘るは云云の文句は、當時大いに久米正雄を感心させたものである。

近松の俊寛は源平盛衰記の俊寛よりも、遙かに偉い人になつてゐる。勿論舟出を見送る時にけ、嘆き悲しむのに相違ない。しかしその後は近松の俊寛も、安らかに餘生を送つたかも知れぬ。少くとも盛衰記の俊寛程、悲しい末期には遇はなかつたであらう。——さう云ふ心もちを與へる限り、「苦しまざる俊寛」を書いたものは、夙に近松にあつたと云ふべきである。

しかし近松の目ざしたのは、「苦しまざる俊寛」にのみあつたのではない。彼の俊寛は「平家女護が島」の登場人物の一人である。が、倉田、菊池兩氏の俊寛は、俊寛のみを主題としてゐる。鬼界が島に流された俊寛は如何に生活し、又如何に死を迎へたか?——これが兩氏の問題である。この問題は殊に菊池氏の場合、かう云ふ形式にも換へられるであらう。——「我等は俊寛と同じやうに、島流しの境遇に陷つた時、どう云ふ生活を營むであらうか?」

近松と兩氏との立ち場の相違は、盛衰記の記事の改めぶりにも、窺はれると云ふ事を妨げない。近松はあの俊寛を作る爲に、俊寛の悲劇の關鍵たる赦免狀の件さへも變更した。兩氏も勿論近松に劣らず、盛衰記の記事を無視してゐる。しかし兩氏とも近松のやうに、赦免狀の件は改めてゐない。與へられたる條件の内に、俊寛の解釋を試みる以上、これだけは保存せねばならぬからである。

丁度その場合と同じやうに、倉田氏と菊池氏との立ち場の相違も、やはり盛衰記の記事を變更した、その變更のし方に見えるかも知れぬ。倉田氏が俊寛の娘を死んだ事にしたり、菊池氏が島を豐沃の地にしたり、——それらは皆兩氏の俊寛、——「苦しめる俊寛」と「苦しまざる俊寛」とを描出する便だつた爲であらう。僕の俊寛もこの點では、菊池氏の俊寛の跡を追ふものである。唯菊池氏の俊寛は、寧ろ外部の生活に安住の因を見出してゐるが、僕のは必しもそればかりではない。

しかし謠や淨瑠璃にある通り、不毛の孤島に取り殘された儘、しかもなほ悠悠たる、偉い俊寛も考へられぬではない。唯この巨鱗を捉へる事は、現在の僕には出來ぬのである。

附記　盛衰記に現れた俊寛は、機智に富んだ思想家であり、鶴の前を愛する色好みである。僕は特にこの點では盛衰記の記事に忠實だつた。又俊寛の歌なるものは、康頼や成經より拙いやうである。俊寛は議論には長じてゐても、詩人肌ではなかつたらしい。僕はこの點でも盛衰記に、忠實な態度を改めなかつた。又盛衰記の鬼界が島は、たとひタイティではないにしても、滿更岩ばかりでも

なささうである。もしあの盛衰記の島の記事から、邊土に對する都會人の恐怖や嫌惡を除き去れば、存外古風土記にありさうな、愛すべき島になるかも知れない。

漢字と假名と

漢字なるものの特徴はその漢字の意味以外に漢字そのものの形にも美醜を感じさせることださうである。假名は勿論使用上、音標文字の一種たるに過ぎない。しかし「か」は「加」と云ふやうに、祖先はいづれも漢字である。のみならず、いつも漢字と共に使用される關係上、自然と漢字と同じやうに假名そのものの形にも美醜の感じを含み易い。たとへば「い」は落ち著いてゐる、「り」は如何にも鋭いなどと感ぜられるやうになり易いのである。

これは一つの可能性である。しかし事實はどうであらう？

僕は實は平假名には時時形にこだはることがある。たとへば「て」の字は出來るだけ避けたい。殊に「何何して何何」と次に續けるのは禁物である。その癖「何何してゐる。」と切れる時には苦にならない。「て」の字の次は「く」の字である。これも丁度折れ釘のやうに、上の文章の重量をちやんと受けとめる力に乏しい。片假名は平假名に比べると、「ク」の字も「ツ」の字も落ち著いてゐる。或は片假名は平假名よりも進歩した音標文字なのかも知れない。或は又平假名に慣れてゐる僕も片假名には感じの鈍いのかも知れない。

希臘末期の人

この頃エジプトの砂の中から、ヘラクレニウムの熔岩の中から、希臘人の書いたものが發見される。時代は 350 B.C. から 150 B.C. 位のものらしい。つまりアテネ時代からロオマ時代へ移らうとする中間の時代のものである。種類は論文、詩、喜劇、演說の草稿、手紙――まだ外にもあるかも知れない。作者は從來書いたものの少しは知られてゐた人もある。名前だけやつと傳はつてゐた人もある。勿論全然名前さへ傳はつてゐなかつた人もある。

しかしそれは兎も角も、さういふ斷簡零墨を近代語に譯したものを見ると、どれもこれも我我にはお馴染みの思想ばかりである。たとへば P lystratus と云ふエピクロス派の哲學者は「あらゆる虛僞と心勞とを脫し、人生を自由ならしむる爲には萬物生成の大法を知らなければならぬ」と論じてゐる。さうかと思へば Cercidas と云ふ所謂犬儒派の哲學者は「蕩兒と守錢奴とは黃白に富み、予ばかり貧乏するのは不都合である！……正義は土豚のやうに盲目なのか？「Themis（正義の女神）の明は奪はれてゐるのか？」と大いに憤慨を洩らした後、「進め、我徒は病弱を救ひ、貧寠を惠むことを任にしたい」と勇ましい信念を披露してゐる。更に又彼に先立つこと三十餘年と傳へられる Colophon の Phoenix は「何びとも金持ちには友だちである。金さへあれば神神さへ必ず君を愛するであらう。が、萬一貧しければ母親すら君を憎むであらう」と諷刺に滿ちた詩を作つてゐる。最後に Œnoanda の Diogenes は「予の所見に從へば、人類は百般の無用の事に百般の苦楚を味つてゐる。……予は既に老人である。生命の太陽も沈まうとしてゐる。予は唯予の道を教へるだけである。……天下の人は悉く互に虛僞を移し合つてゐる。丁度一群の病羊のやうに」と救拔の道を教へてゐる。

かう云ふ思想はいつの時代、どこの國にもあつたものと見える。どうやら人種の進歩などと

云ふのは蛞蝓の歩みに似てゐるらしい。

比喩

メタフォアとかシミリイとかに文章を作る人の苦勞するのは遠い西洋のことである。我我は皆せち辛い現代の日本に育つてゐる。さう云ふことに苦勞するのは勿論、兎に角意味を正確に傳へる文章を作る餘裕さへない。しかしふと目に止まつた西洋人の比喩の美しさを愛する心だけは殘つてゐる。

「ツインガレラの顏は脂粉に荒らされてゐる。しかしその皮膚の下には薄氷の下の水のやうに何かがまだかすかに仄めいてゐる。」

これはWassermannの書いた賣笑婦ツインガレラの肖像である。僕の譯文は拙いのに違ひない。けれども昔（Guy）の描いた、優しい賣笑婦の面影はありありと原文に見えるやうである。

告白

「もつと己れの生活を書け、もつと大膽に告白しろ」とは屡、諸君の勸める言葉である。僕も告白をせぬ譯ではない。僕の小說は多少にもせよ、僕の體驗の告白である。けれども諸君は承知しない。諸君の僕に勸めるのは僕自身を主人公にし、僕の身の上に起つた事件を臆面もなしに書けと云ふのである。おまけに卷末の一覽表には主人公たる僕は勿論、作中の人物の本名假名をずらりと竝べろと云ふのである。それだけは御免を蒙らざるを得ない。——

第一に僕はもの見高い諸君に僕の暮しの奧底をお目にかけるのは不快である。第二にさう云ふ告白を種に必要以上の金と名とを著服するのも不快である。たとへば僕も一茶のやうに交合記錄を書いたとする。それを又中央公論か何かの新年號に載せたとする。讀者は皆面白がる。批評家は一轉機を來したなどと褒める。友だちは愈裸になつたなどと、——考へただけでも鳥肌になる。

ストリントベルクも金さへあれば、「癡人の告白」は出さなかつたのである。又出さなければならなかつた時にも、自國語の本にする氣はなかつたのである。僕も愈食はれぬとなれば、どう云ふ活計を始めるかも知れぬ。その時はおのづからその時である。しかし今は貧乏なりに兎に角露命を繋いでゐる。且又體は多病にもせよ、精神狀態はまづノルマアルである。マゾヒスムスなどの徵候は見えない。誰が御苦勞にも恥ぢ入りたいことを告白小說などに作るものか。

チヤプリン

社會主義者と名のついたものはボルシェヴィツキたると然らざるとを問はず、悉く危險視されるやうである。殊にこの間の大地震の時にはいろいろその爲に祟られたらしい。しかし社會主義者と云へば、あのチヤアリイ・チヤプリンもやはり社會主義者の一人である。もし社會主義者を迫害するとすれば、チヤプリンも亦迫害しなければなるまい。試みに某憲兵大尉の爲にチヤプリンが殺されたことを想像して見給へ。家鴨歩きをしてゐるうちに突き殺されたことを想像して見給へ。苟くも一たびフイルムの上に彼の姿を眺めたものは義憤を發せずにはゐられないであらう。この義憤を現實に移しさへすれば、——兎に角諸君もブラック・リストの一人になることだけは確かである。

あそび

これはサンデイ毎日所載、福田雅之助君の「最

近の米國庭球界」の一節である。

「ティルデンは指を切つてから、却つて素晴らしい當りを見せる様になつた。なぜ指を切つてからの方が、以前よりうまくなつたと云ふに、一つは彼の氣が緊張してゐるからだ。彼は非常に芝居氣があつて、勝てるマッチにもたやすく勝たうとはせず、或程度まで相手をあしらつて行くらしかつたが、今年度は『指』と云ふハンディキャップの爲に、ゲエムの始めから緊張してかかるから、尚更強いのである……」

ラケットを握る指を切斷した後、一層腕を上げたティルデンはまことに偉大なる選手である。が、指の滿足だつた彼も、――同時に又相手を翻弄する「あそび」の精神に富んでゐた彼も必しも偉大でないことはない。いや、僕はティルデン自身も時時はちよつと心の底に、「あそび」の精神に富んでゐた昔をなつかしがつてゐはしないかと思つてゐる。

塵労

僕も大抵の賣文業者のやうに匆忙たる暮しを營んでゐる。勉強も中中思ふやうに出來ない。二三年前に讀みたいと思つた本も未だに讀まずにゐる始末である。僕は又かう云ふ煩ひは日本にばかりあることと思つてゐた。が、この頃ふとレミ・ド・グルモンのことを書いたものを讀んだら、グルモンはその晩年にさへ、毎日ラ・フランスに論文を一篇、二週間目にメルキュウルに對話を一篇書いてゐたらしい。すると藝術を尊重する佛蘭西に生れた文學者も甚だ清閑には乏しい譯である。日本に生れた僕などの不平を云ふのは間違ひかも知れない。

イバネス

イバネス氏も日本へ來たさうである。滯在日數も短かかつたし、まあ通り一ぺんの見物をすませただけであらう。イバネス氏の評傳には Camille Pitollet の V. Blasco-Ibáñez, ses romans et le roman de la vie などと云ふ本も流行してゐる。と云つて讀んでゐる次第ではない。唯二三年前の横文字の雜誌に紹介してあるのを讀んだだけである。

「わたしの小説を作るのは作らずにはゐられない結果である。……わたしは青年時代を監獄に暮した。少くとも三十度は入獄したであらう。わたしは囚人だつたこともある。度たび野蠻な決闘の爲に重傷を蒙つたこともある。わたしは又人間の堪へ得る限りの肉體的苦痛を嘗めてゐる。貧乏のどん底に落ちたこともある。が、一方には代議士に選擧されたこともある。土耳古のサルタンの友だちだつたこともある。宮殿に住んでゐたこともある。それからずつと巨萬の金を扱ふ實業家にもなつてゐた。亜米利加では村を一つ建設した。かう云ふことを話すのはわたしは小説を生活の上に實現出來ることを示す爲である。紙とインクとに書き上げるよりも更に數等巧妙に實現出來ることを示す爲である。」

これはピトォレエの本の中にあるイバネス氏自身の言葉だささうである。しかし僕はこれを讀んでも、文豪イバネス氏の云ふやうに、格別小説を生活の上に實現してゐると云ふ氣はしない。するのは唯小説の廣告を實現してゐると云ふ氣だけである。

船長

僕は上海へ渡る途中、筑後丸の船長と話をした。政友會の横暴とか、ロイド・ジョオジの「正義」とかそんなことばかり話したのである。

その内に船長は僕の名刺を見ながら、感心したやうに小首を傾けた。

「アクタ川と云ふのは珍らしいですね。ははあ、大阪毎日新聞社、――やはり御専門は政治經濟ですか？」

僕は好い加減に返事をした。

僕等は又少時の後、ボルシェヴィズムか何かの話をし出した。僕は丁度その月の中央公論に載つてゐた誰かの論文を引用した。が、生憎船長は中央公論の讀者ではなかつた。

「どうも中央公論も好いですが、――」

船長は苦にがしさうに話しつづけた。

「小説を餘り載せるものですから、つい買ひ澁つてしまふのです。あれだけはやめる譯に行かないものでせうか？」

僕は出來るだけ情けない顏をした。

「さうです。小説には困りますね。あれさへなければと思ふのですが。」

爾來僕は船長に格別の信用を博したやうである。

相撲

「負けまじき相撲を寢ものがたりかな」とは名高い蕪村の相撲の句である。この「負けまじき」の解釋には思ひの外異説もあるらしい。「蕪村句集講義」によれば虚子、碧梧桐兩氏、近頃は又木村架空氏も、「負けまじき」を未來の意味としてゐる。「明日の相撲は負けてはならぬ。その負けてはならぬ相撲を寢ものがたりに話してゐる。」――と云ふやうに解釋するのである。僕はずつと以前から過去の意味にばかり解釋してゐた。今もやはり過去の意味に解釋してゐる。「今日は負けてはならぬ相撲を負けた。それをしみじみ寢ものがたりにしてゐる。」と云ふやうに解釋するものである。もし將來の意味だつたとすれば、蕪村は必ず「負けまじき」と調子を張つた上五の下へ、「寢ものがたりかな」と調子の延びた止めを持つて來はしなかつたであらう。これは文法の問題ではない。唯「負けまじき」をどう感ずるかと云ふ藝術的觸角の問題である。尤も「蕪村句集講義」の中でも、子規居士と內藤鳴雪氏とはやはり過去の意味に解釋してゐる。

「とても」

「とても安い」とか「とても寒い」とか云ふ「とても」の東京の言葉になり出したのは數年以前のことである。勿論「とても」と云ふ言葉は東京にも全然なかつた譯ではない。が從來の用法は「とてもかなはない」とか「とても纏まらない」とか云ふやうに必ず否定を伴つてゐる。

肯定に伴ふ新流行の「とても」は三河の國あたりの方言であらう。現に三河の國の人のこの「とても」を用ゐた例は元祿四年に上梓された「猿蓑」の中に殘つてゐる。

秋風やとても芒はうごくはず　三河、子尹

すると「とても」は三河の國から江戶へ移住する間に二百年餘りかかつた譯である。「とても」手間どつたと云ふ外はない。

續「とても」

肯定に伴ふ「とても」は東京の言葉ではない。東京人の古來使ふのは「とても及ばない」のやうに否定に伴ふ「とても」である。從來は肯定に伴ふ「とても」も盛んに行はれるやうになつた。たとへば「とても綺麗だ」「とてもうまい」の類である。この肯定に伴ふ「とても」の「猿蓑」の中に出てゐることは「澄江堂雜記」（「隨筆集」百艸」の中）に辨じて置いた。その後島木赤彥さんに注意されて見ると、この「とても」も「とてもかくて

も「とても」である。

秋風やとても芒はうごくはず　三河、子尹

しかしこの頃又氣讀をしてゐると、「續春夏秋冬」の春の部の中にもかう言ふ「とても」を發見した。

市雛やとても數ある顏貌　化羊

元祿の子尹は肩書通り三河の國の人である。明治の化羊は何國の人であらうか。

丈艸の事

蕉門に龍象の多いことは言ふを待たない。しかし誰が最も的的と芭蕉の衣鉢を傳へたかと言へば恐らくは内藤丈艸であらう。少くとも發句は蕉門中、誰もこの俳諧の新發知ほど芭蕉の寂びを捉へたものはない。近頃野田別天樓氏の編した「丈艸集」を一讀し、殊にこの感を深うした。

前書略

木枕の垢や伊吹にのこる雪

大原や蝶の出て舞ふおぼろ月

谷風や青田を廻る庵の客

小屛風に山里涼し腹の上

電のさそひ出してや火とり蟲

草芝を出づる螢の羽音かな

鷄頭の晝をうつすやぬり枕

病人と撞木に寢たる夜寒かな

蜻蛉の來ては蠅とる笠の中

夜明けまで雨吹く中や二つ星

榾の火や暁がたの五六尺

是等の句は啻に寂びを得たと言ふばかりではない。一句一句變化に富んでゐることは作家たる力量を示すものである。凡董輩の丈艸を嗤つてゐるのは僭越も亦甚しいと思ふ。

版數

日本の版數は出たらめである。僕の聞いた風説によれば、或相當の出版業者などは内務省への獻本二册を一版に數へてゐるらしい。たとひそれは譃としても、今日のやうに出たらめでは、五十版百版と云ふ廣告を目安に本を買つてゐる天下の讀者は愚弄されてゐるのも同じことである。

尤も佛蘭西の版數さへ甚だ當てにならぬものださうである。例へばゾラの晩年の小説などは二百部を一版と號してゐたらしい。しかしこれは惡習である。何も香水やオペラ・バッグのやうに輸入する必要はないに違ひない。且又メルキュルは出版した本に一一何刷目と記したこともある。メルキュルを學ぶことは困難にしろ、一版を何部と定めた上、版數を僞らずに廣告することは當然日本の出版業組合も勵行して然るべき企てであらう。いや、かう云ふ見易いことは賢明なる出版業組合の諸君のとうに氣づいてゐる筈である。するとそれを實行しないのは「もし佳書を得んと欲せば版數の少きを選べ」と云ふ教訓を垂れてゐるのかも知れない。

放屁

アンドレエフに百姓が鼻糞をほじる描寫がある。フランスに婆さんが小便をする描寫がある。しかし屁をする描寫のある小説にはまだ一度も出あつたことはない。

出あつたことのないといふのは、西洋の小説にはと云ふ意味である。日本の小説にはない譯ではない。その一つは青木健作氏の何とかいふ女工の小説である。駈落ちをした女工が二人、干藁か何かの中に野宿する。夜明けに二人とも目がさめる。一人がぷうとおならをする。もう一人がくすくす笑ひ出す——たしかそんな筋だつ

たと思ふ。その女工の屁をする描寫は予の記憶に誤りがなければ、甚だ上品に出來上つてゐた。予は此の一段を讀んだ爲に、今日もなほ青木氏の手腕に敬意を感じてゐる位なものである。

もう一つは中戸川吉二氏の何とか云ふ不良少年の小說である。これはつい三四箇月以前、サンデイ每日に出てゐたのだから、知つてゐる讀者も多いかも知れない。不良少年に口說かれた女が際どい瞬間におならをする、その爲に折角醸されたエロチックな空氣が消滅する、女は妙につんとしてしまふ、不良少年も手が出せなくなる——大體から云ふ小說だつた。この小說も巧みに書きこなしてある。

青木氏の小說に出て來る女工は必しもおならをしないでも好い。しかし中戸川氏の小說に出て來る女は嫌でもおならをする必要がある。しなければ成り立たない。だから屁は中戸川氏を得た後始めて或重大な役目を勤めるやうになつたと云ふべきである。

しかしこれは近世のことである。宇治拾遺物語によれば、藤大納言忠家も、「いまだ殿上人におはしける時、びびしき色好みなりける女房ともの云ひて、夜更くるほどに月は晝よりもあかかりけるに」たへ兼ねてひき寄せたら、女は「あなあさまし」と云ふ拍子に大きいおならを一つした。忠家はこの屁を聞いた時に、「心うきことにも逢ひぬるかな。世にありて何かはせん。出家せん」と思ひ立つた。けれどもつらつら考へて見れば、何も女が屁をしたからと云つて、坊主にまでなるには當りさうもない。忠家は其處に氣がついたから、出家することだけは見合せたが、匆匆その場は逃げ出したさうである。すると中戸川氏の小說も文學史的に批評すれば、前人未發と云ふことは出來ない。しかし斷えたるを繼いだ功は當然同氏に屬すべきである。この功は多分中戸川氏自身の豫想しなかつたところであらう。しかし功には違ひないから、序に此處に吹聽することにした。

袈裟と盛遠

「袈裟と盛遠」と云ふ獨白體の小說を、四月の中央公論で發表した時、或大阪の人からこんな手紙を貰つた。「袈裟は亘の義理と盛遠の情とに迫られて、操を守る爲に死を決した烈女である。それを盛遠との間に情交のあつた如く書くのは、烈女袈裟に對しても氣の毒なら、國民教育の上にも面白からん結果を來すだらう。自分は君の爲にこれを取らない。」

が、當時すぐにその人へも返事を書いた通り、袈裟と盛遠との間に情交があつた事は、自分の創作でも何でもない。源平盛衰記の文覺發心の條に、「はや來て女と共に臥し居たり、狹夜も漸更け行きて云云」と、ちやんと書いてある事である。

それを世間一般は、どう云ふ量見か默殺してしまつて、あの憐む可き女主人公をさも人間ばなれのした烈女であるかの如く廣告してゐる。だから史實を勝手に改竄した罪は、あの小說を書いた自分になくして、寧ろあの小說を非難するブルヂョア自身にあつたと云つて差支へない。改竄するしないは格別大問題だとも心得てゐないが、事實としてこの機會にこれだけの事を發表して置く。勿論源平盛衰記の記事は誰だと云ふ考證家が現れたら、自分は甘んじて何時でも、改竄者の烙印を押されようとするものである。

後世

私は知己を百代の後に待たうとしてゐるも

のではない。

公衆の批判は、常に正鵠を失しやすいものである。現在の公衆は元より云ふを待たない。歴史は既にペリクレス時代のアゼンスの市民や文藝復興期のフロレンスの市民でさへ、如何に理想の公衆とは縁が遠かつたかを教へてゐる。既に今日及び昨日の公衆にして斯くの如くんば、明日の公衆の批判と雖も亦推して知るべきものがありはしないだらうか。彼等が百代の後よく砂と金とを辨じ得るかどうか、私は遺憾ながら疑ひなきを得ないのである。

よし又理想的な公衆があり得るにした所で、果して絶對美なるものが藝術の世界にあり得るであらうか。今日の私の眼は、唯今日の私の眼であつて、決して明日の私の眼ではない。と同時に又私の眼が結局日本人の眼であつて、西洋人の眼でない事も確である。それならどうして私に、時と處とを超越した美の存在など信じられよう。成程ダンテの地獄の火は、今も猶東方の豎子をして戰慄せしむるものがあるかも知れない。けれどもその火と我我との間には、十四世紀の伊太利なるものが雲霧の如くにたなびいてゐるではないか。

況んや私は尋常の文人である。後代の批判にして誤らず、普遍の美にして存するとするも、書を名山に藏する底の事は、私の爲すべき限りではない。私が知己を百代の後に待つものでない事は、問ふまでもなく明かであらうと思ふ。

時時私は二十年の後、或は五十年の後、或は更に百年の後、私の存在さへ知らない時代が來ると云ふ事を想像する。その時私の作品集は、堆い塵に埋もれて、神田あたりの古本屋の棚の隅に、空しく讀者を待つてゐる事であらう。いや、事によつたらどこかの圖書館にたつた一册殘つた儘、無殘な紙魚の餌となつて、文字さへ讀めないやうに破れ果ててゐるかも知れない。しかし——

私はしかしと思ふ。

しかし誰かが偶然私の作品集を見つけ出して、その中の短い一篇を、或は其一篇の中の何行かを讀むと云ふ事がないであらうか。更に蟲の好い望みを云へば、その一篇なり何行かなりが、私の知らない未來の讀者に、多少にもせよ美しい夢を見せるといふ事がないであらうか。

私は知己を百代の後に待たうとしてゐるものではない。だから私はかう云ふ私の想像が、如何に私の信ずる所と矛盾してゐるかも承知してゐる。

けれども私は猶想像する。落莫たる百代の後に當つて、私の作品集を手にすべき一人の讀者のある事を。さうしてその讀者の心の前へ、朧げなりとも浮び上る私の蜃氣樓のある事を。

私は私の愚を嗤笑すべき賢達の士のあるのを心得てゐる。が、私自身と雖も私の愚を笑ふ點にかけては敢て人後に落ちようとは思つてゐない。唯、私は私の愚を笑ひながら、しかもその愚に戀戀たる私自身の意氣地なさを憐れまずにはゐられないのである。私は私自身と共に意氣地ない一般人間をも憐れまずにはゐられないのである。

「昔」

僕の作品には昔の事を書いたものが多いから、そこでその昔の事を取扱ふ時の態度を話せと云ふ註文が來た。態度とか何とか云ふと、甚大袈裟に聞えるが、何もそんな大したものを持ち合せてゐる次第では決してない。まあ僕が昔の事を書く時に、どんな眼で昔を見てゐるか、云ひ換れば僕の作品の中で昔がどんな役割

を勸めてゐるか、そんな事を話して見ようかと思ふ。元來裃をつけての上の議論ではないのだから、どうかその心算でお聽きを願ひたい。

お伽噺を讀むと、日本のなら「昔　昔」とか「今は昔」とか書いてある。西洋のなら「まだ動物が口を利いてゐた時に」とか「ベルトが絲を紡いでゐた時に」とか書いてある。あれは何故であらう。どうして「今」ではいけないのであらう。それは本文に出て來るあらゆる事件に或可能性を與へる爲の前置きにちがひない。何故かと云ふと、お伽噺の中に出て來る事件は、いづれも不思議な事ばかりである。だからお伽噺の作者にとつては、どうも舞臺を今にするのは具合が惡い。絕對に今ではならんと云ふ事はないが、それよりも昔の方が便利である。昔　昔と云へば既に太古緬邈の世だから、小指ほどの一寸法師が住んでゐても、竹の中からお姬樣が生れて來ても、格別矛盾の感じが起らない。そこで豫め前へ「昔　昔」とくつ附けたのである。

所でもしこれが「昔　昔」の由來だとすれば、僕が昔から材料を採るのは大半この「昔　昔」と同じ必要から起つてゐる。と云ふ意味は、今僕が或テエマを捉へてそれを小說に書くとする。さうしてそのテエマを藝術的に最も力強く表現する爲には、或異常な事件が必要になるとする。その場合、その異常な事件なるものは、異常なだけそれだけ、今日この日本に起つた事としては書きこなし惡い、もし强て書けば、多くの場合不自然の感を讀者に起させて、その結果折角のテエマまでも犬死をさせる事になつてしまふ。所でこの困難を除く手段には「今日この日本に起つた事としては書きこなし惡い」と云ふ語が示してゐるやうに昔か（未來は稀であらう）日本以外の土地か或は昔日本以外の土地から起つた事とするより外はない。僕の昔から材料を採つた小說は大抵この必要に迫られて、不自然の障礙を避ける爲に舞臺を昔に求めたのである。

しかしお伽噺と違つて小說は小說と云ふものの要約上、どうも「昔　昔」だけ書いてすましてゐると云ふ譯には行かない。そこで略時代の制限が出來て來る。從つてその時代の社會狀態と云ふやうなものも、自然の感じを滿足させる程度に於て幾分とり入れられる事になつて來る。だから所謂歷史小說とはどんな意味に於ても「昔」の再現を目的にしてゐないと云ふ點で區別を立てる事が出來るかも知れない。――まあざつとこんなものである。

序につけ加へて置くが、さう云ふ次第だから僕は昔の事を小說に書いても、その昔なるものに大して憧憬は持つてゐない。僕は平安朝に生れるよりも、江戶時代に生れるよりも、遙に今日のこの日本に生れた事を難有く思つてゐる。

それからもう一つつけ加へて置くが、或テエマの表現に異常なる事件が必要になる事があると云つたが、あれには其外のすべて異常なる物に對して僕（我我人間と云ひたいが）の持つてゐる興味も働いてゐるだらうと思ふ。それと同じやうに或異常なる事件を不自然の感じを與へずに書きこなす必要上、昔を選ぶと云ふ事にも、さう云ふ必要以外に昔其ものの美しさが可成、影響を與へてゐるのにちがひない。しかし主として僕の作品の中で昔が勤めてゐる役割は、やはり「ベルトが絲を紡いでゐた時に」である、或は「まだ動物が口を利いてゐた時に」である。

德川末期の文藝

德川末期の文藝は不眞面目であると言はれてゐる。成程不眞面目ではあるかも知れない。し

かしそれ等の文藝の作者は果して人生を知らなかつたかどうか、それは僕には疑問である。彼等通人も肚の中では如何に人生の暗澹たるものかは心得てゐたのではないであらうか？　しかもその事實を回避する爲に（たとひ無意識的ではあつたにもせよ）洒落のめしてゐたのではないであらうか？　彼等の一人、――たとへば宮武外骨氏の山東京傳を讀んで見るが好い。ああ云ふ生涯に住しながら、しかも人生の暗澹たることに氣づかなかつたと云ふのは不可解である。

これは何も黄表紙だの洒落本だのの作者ばかりではない。僕は曲亭馬琴さへも彼の勸善懲惡主義を信じてゐなかつたと思つてゐる。馬琴は或は信じようと努力してはゐたかも知れない。が、饗庭篁村氏の編した馬琴日記抄等によれば、馬琴自身の矛盾には馬琴も氣づかずにはゐなかつた筈であらう。森鷗外先生は確か馬琴日記抄の跋に「馬琴よ、君は幸福だつた。君はまだ先王の道に信頼することが出來た」とか何とか書かれたやうに記憶してゐる。けれども僕は馬琴も亦先王の道などを信じてゐなかつたと思つてゐる。

若し譃と云ふことから言へば、彼等の作品は譃ばかりである。彼等は彼等自身と共に世間を欺いてゐたと言つても好い。しかし善や美に對する欣求は彼等の作品に殘つてゐる。殊に彼等の生きてゐた時代は佛蘭西のロココ王朝と共に實生活の隈隈にさへ美意識の行き渡つた時代だつた。從つて美しいと云ふことから言へば、彼等の作品に溢れた空氣は如何にも美しい（勿論多少頽廢した）ものであらう。

僕は所謂江戸趣味に餘り尊敬を持つてゐない。同時に又彼等の作品にも頭の下らない一人である。しかし單に「淺薄」の名のもとに彼等の作品を一笑し去るのは彼等の爲に氣の毒であらう。若し彼等の「常談」としたものを「眞面目」と考へて見るとすれば、黄表紙や洒落本もその中には幾多の問題を含んでゐる。僕等は彼等の作品に隨喜する人人にも贊成出來ない。けれども亦彼等の作品を一笑してしまふ人人にもやはり輕輕に贊成出來ない。

（以上「梅・馬・鶯」より）

夕明り

――Eunice Tietjens――

乾いた秋の木の葉の上に、雨がぱらぱら落ちるやうだ。美しい狐の娘さんたちが、小さな足音をさせて行くのは。

洒落者（同上）

彼は綠の綢の服を著ながら、さもえらさうに歩いてゐる。彼の二枚の上著には、毛皮の緣がとつてある。彼の天鵞絨の袍の上には、褂子の裾を巻きつけた、意氣な瞳が動いてゐる。ちらちらと愉快さうに。

彼の爪は非常に長い。

朱君は全然流行の鏡とも云ふべき姿である。その華奢な片手には、――これが最後の御定りだが、――竹の鳥籠がぶらついてゐる。その中には小さい茶色の鳥が、何時でも驚いたやうな顏をしてゐる。

朱君は寛潤な微笑を浮べる。流行と優しい心と、この二つを二つながら、滿足させた人の微笑である。

鳥も外出が必要ではないか。

（「點心」の「パステルの龍」より）

澄江堂雜記（三）

夏目先生の書

僕にも時時夏目先生の書を鑑定してくれろと言ふ人がある。が、僕の眼光ではどうも判然とは鑑定出來ない。唯まつ赤な贋せものだけはおのづから正體を現はしてくれる。僕は近頃その贋せものの中に決して贋せものとは思はれぬ一本の扇に遭遇した。成程この扇に書いてある句は漱石と言ふ名はついてゐても、確かに夏目先生の書いたものではない。しかし又句がらや書體から見れば、夏目先生の贋せものを作る爲に書いたのではないことも確かである。この漱石とは何ものであらうか？　太白堂三世村田桃鄰も始めの名はやはり漱石である。けれども僕の見た扇はさほど古いものとも思はれない。僕はこの贋せものならざる贋せものと呼ばれる扇の筆者を如何にも氣の毒に思つてゐる。因に言ふ、夏目先生の書にも近年はめつきり贋せものが殖えたらしい。

（大正十四年十月二十日）

霜の來る前

毎日庭を眺めてゐると、苔の最も美しいのは霜の來る前、――まづ十月一ぱいである。それから霜が來る前に「カナメモチ」や「モッコク」などの赤赤と芽をふいてゐるのは美しいよりも寧ろもの哀れでならぬ。

（同年十一月十日）

澄江堂

僕になぜ澄江堂などと號するかと尋ねる人がある。なぜと言ふほどの因縁はない。唯いつか漫然と澄江堂と號してしまつたのである。いつか佐佐木茂索君は「スミエと言ふ藝者に惚れたんですか？」と言つた。が、勿論そんな訣でもない。僕は時時本名の外に入らざる名などをつけることはよせば好かつたと思つてゐる。

（十一月十二日）

雅號

しかし雅號と言ふものはやはり作品と同じやうにその人の個性を示すものである。菱田春草は年少時代には駿走の號を用ひてゐた。年少時代の春草は定めし駿走らしかつたであらう。さう言へば正宗白鳥氏も昔は白塚と號してゐたかと思ふ。これは僕の記憶違ひかも知れない。が、若し違つてゐないとすれば、この號も兎に角年少時代の正宗氏を想はせるのに足るものであらう。僕は昔の文人たちの雅號を幾つも持つてゐたのは必ずしも道樂に拵へたのではない、彼等の趣味の進歩に應じておのづから出來たものと思つてゐる。（同前）

シルレルの頭蓋骨

シルレルの遺骸は彼の歿年、――千八百五年以來、ちやんとワイマアルの大公爵家の靈廟の中に收められてゐた。が、二十年ばかりたつた後、その靈廟を再建する際に頭蓋骨だけゲエテに贈ることになつた。ゲエテは彼の机の上にこの舊友の頭蓋骨を置き、「シルレル」と題する詩

を作つた。それぱかりではない。エエベルラインなどは御苦勞にも「シルレルの頭蓋骨を見守れるゲエテ」とか何とか言ふ半身像を作つた。けれどもこれはシルレルではない、誰か他の人の頭蓋骨だつた（ほんたうのシルレルの頭蓋骨はやつと近年テュウビンゲンの解剖學の教授に發見された。）僕はかう言ふ話を讀み、惡魔のいたづらを見たやうに感じた。他人の頭蓋骨に感激したゲエテは勿論滑稽に見えるであらう。しかしその頭蓋骨がなかつたとしたらば、ゲエテ詩集は少くとも「シルレル」の一篇を缺いてゐたのである。

（十一月二十日）

美人禍

ゲエテをワイマアルの宮廷から退かせたのはフオン・ハイゲンドルフ夫人である。しかも又ショオペンハウエルに一世一代の戀歌を作らせたのもやはりこのフオン・ハイゲンドルフ夫人である。前者に反感を抱いた女性は彼女の外になかつたらしい。後者に好感を與へたのは勿論彼女一人である。兎に角兩天才を惱ませただけでも、ただの女ではなかつたのであらう。現に寫眞に徴すると、目の大きい、鼻の尖つた、如何にも一癖ありげな美人である。（二十一日）

放心

僕は教師をしてゐた頃、ネクタイをするのを忘れたまま、澄まして往來を歩いてゐた。それを幸ひにも見つけてくれたのは當年の菅忠雄君である。しかしその後學校へ行つたら、今度は物理の教官が一人、カラアをつけるのを忘れたと見え、ネクタイだけシャツにぶら下げてゐた。どちらがはた目には可笑しかつたかしら。

（二十二日）

同上

僕は菊池と長崎へ行つた時、汽車中大いに文藝論をした。そのうちにふと氣がついて見ると、菊池はいつか兩手の間にパラソルを一本まはしてゐる。僕は勿論「おい、君」と言つた。すると菊池は苦笑しながら、隣にゐた奥さんにパラソルを返した。僕は早速文藝論の代りに菊池の放心を攻撃した。菊池の降參したのはこの時だけである。が、長崎を立つ段になると、僕自身うつかり上野屋へ雨外套を忘れて來てしまつた。菊池の嬉しがるまいことか、忌忌しくも大笑ひをして曰「君も亦細心は誇れないね。」（同上）

（以上「侏儒の言葉」より）

蝶の舌ゼンマイに似る暑さかな

木がらしや東京の日のありどころ

暖かや蕊に蠟塗る造り花

癆咳の頰美しや冬帽子

夏山や山も空なる夕明り

竹林の夜寒のみちの右ひだり

霜どけの葉を垂らしたり大八つ手

木がらしや目刺にのこる海のいろ

臘梅や枝まばらなる時雨ぞら

一游亭に

草の家の柱半ばに春日かな

（「澄江堂句集」より）

槍ヶ嶽紀行

一

——島島と云ふ町の宿屋へ著いたのは、午過ぎ——もう夕方に近い頃であつた。宿屋の上り框には、三十恰好の浴衣の男が、青竹の笛を鳴らしてゐた。

私はその癇高い音を聞きながら、埃にまみれた草鞋の紐を解いた。其處へ婢が淺い盥に洗足の水を汲んで來た。水は冷たく澄んだ底に、粗い砂を沈めてゐた。

二階の緣側の日除けには、日の光が强く殘つてゐた。そのせゐか疊も襖も、殘酷な程むさくるしく見えた。夏服を浴衣に著換へた私は、括り枕を出して貰つて、長長と仰向けに寢ころんだ儘、昨日東京を立つ時に買つた講談玉菊燈籠を少し讀んだ。讀みながら、浴衣の糊の臭ひが、始終氣になつて仕方がなかつた。

日がかげるとさつきの婢が、塗りの剝げた高盆に湯札を一枚のせて來た。さうして湯屋は向う側にあるから、一風呂浴びて來てくれと云つた。

それから繩の緒の下駄をはいて、石高な路の向うにある、小さな錢湯へはひりに行つた。湯屋は著物を脫ぐ所が、やつと二疊ばかりしかなかつた。

客は私一人ぎりであつた。もう薄暗い湯壺に浸つてゐると、ぽたりと何かが湯の上へ落ちた。手に掬つて、流しの明りに見たら、馬陸と云ふ蟲であつた。手のひらの水の中に、その褐色に蟲がはつきりと、伸びたり縮んだりするのを見る事は、妙に私を寂しくさせた。

湯屋から歸つて、晩飯の膳に向つた時、私は婢に槍ヶ嶽の案內者を一人賴んでくれと云つた。婢は早速承知して、竹の臺のランプに火をともしてから、一人の男を二階に呼び上げた。それは先刻上り口で、青竹の笛を吹いてゐる男であつた。

「槍ヶ嶽の事なら、この人は緣の下の五味まで知つて居ります。」

婢はこんな常談を云ひながら、荒らされた膳を下げて行つた。

私はその男にいろいろ山の事を尋ねた。槍ヶ嶽を越えて、飛驒の蒲田溫泉へ出る事が出來るかどうか。近頃噴火の噂がある、燒嶽へも登山出來るかどうか。槍ヶ嶽に峯傳ひに穗高山へ行く事が出來るかどうか。——さう云ふ事が主な問題であつた。男は窮屈さうに畏りながら、無造作にそれらは容易だと答へた。

「旦那さへ御步けになれりや、何處でも譯はありません。」

私は苦笑した。上州の三山、淺間山、木曾の御嶽、それから駒ヶ嶽——その外山と名づくべき山には、一度も登つた事のない私であつた。

「さうさな。まづ山岳會の連中並みに步ければ、見つけものと思つて貰はう。」

男が階下へ去つた時、私はすぐに床を敷いて貰つて、古蚊帳の中に橫になつた。戶を明け放つた緣側の外には、暗い山に唯一點、赤い炭燒きの火が動いてゐた。それがかすかながら、私の心に、旅愁とも云ふべき寂しさを運んで來た。

やがて婢が戶をしめに來た。戶の走る度に山の上の星月夜が、私の眼界から消えて行つた。間もなく私の寢てゐるまはりは、古蚊帳に四

方を遮られた、行燈ばかりの薄暗がりになつた。

私は大きな眼をあきながら、古蚊帳の天井を眺めてゐた。するとあの青竹の笛の音が、かすかに又階下から聞えて來た。

二

——山の岨を一つ曲ると、突然私たちの足もとから、何匹かの獸が走り去つた。

「畜生、鐵砲さへあれば、逃しはしないのだが。」

案内者は足を止めて、忌忌しさうに舌打ちをしながら、路ばたの橡の大木を見上げた。橡の若葉が重なり合つて、路の上の空を遮つた枝には、二匹の小猿をつれた親猿が、靜に私たちを見下してゐた。

私は物珍しい眼を擧げて、その三匹の猿が徐に、梢を傳つて行く姿を眺めた。が、猿は案内者にとつては、猿であるよりも先に獲物であつた。彼は立ち去り難いやうに、橡の梢を仰ぎながら、礫を拾つて投げたりした。

「おい、行かう。」

私はかう彼を促した。彼はまだ猿を見返りながら、澁澁又歩き出した。私は多少不快であつた。

路は次第に險しくなつた。が、馬が通ると見えて、馬糞が所所に落ちてゐた。さうしてその上には、蛇の目蝶が、澁色の翅を合せた儘、何匹もぎつしり止まつてゐた。

「これが德本の峠です。」

案内者は私を顧みて云つた。

私は小さな雜嚢の外に、何も荷物のない體であつた。が、彼は食器や食糧の外にも、私の毛布や外套などを、堆く肩に背負つてゐた。それにも關らず峠へかかると、彼と私との間の距離は、だんだん遠く隔たり始めた。

三十分の後、とうとう私はたつた一人、山路を喘いで行く旅人になつた。うす日に蒸された峠の空氣は、無氣味な靜寂を孕んでゐた。馬糞にたかつてゐる蛇の目蝶と蓬を煽つて行く私と、——それがこの急な路の上に、生きて動いてゐるすべてであつた。

と思ふと鈍い翅音がして、青黑い一匹の馬蠅が、ぺたりと私の手の甲に止まつた。さうして其處を鋭く刺した。私は半ば動顚しながら、一打ちにその馬蠅を打ち殺した。「自然は私に敵意を持つてゐる。」——そんな迷信じみた心もちが一層私をわくわくさせた。

私は痛む手を抱へながら、無理やりに足を早め出した。……

三

その日の午後、私たちは水の冷たい梓川の流を徒渉した。

川を埋め殘した森林の上には、飛騨信濃境の山山が、——殊にうす曇つた穗高山が、巉岏と私たちを見下してゐた。私は水を渡りながら、ふと東京の或茶屋を思ひ出した。その軒に懸つてゐる岐阜提灯も、ありありと眼に見えるやうな氣がした。しかし私を繞つてゐるものは、人煙を絶つた谿谷であつた。私は妙な矛盾の感じを頭一ぱいに持ちながら、無愛想な案内者の尻について、漸く對岸を蔽つてゐる熊笹の中へ辿り著いた。

對岸には大きな毛生欅や樅が、うす暗く森森と聳えてゐた。稀に熊笹が疎になると、雁皮らしい花が赤く咲いた、濕氣の多い草の間に、放牧の牛馬の足跡が見えた。

程なく一軒の板葺の小屋が、熊笹の中から現れて來た。これが小島烏水氏以來、屢槍ケ嶽の登山者が一宿する、名高い嘉門治の小屋であつた。

案内者は小屋の戸を開けると、背負つてゐた

荷物を其處へ下した。小屋の中には大きな圍爐裡が、寂しい灰の色を擴げてゐた。案内者はその天井に懸けてあつた、長い釣竿を取り下してから、私一人を後に殘して、夕飯の肴に供すべく、梓川の山女を釣りに行つた。

私は蓙や雜嚢を捨てて暫く小屋の前をぶらついてゐた。すると熊笹の中から、大きな黒斑らの牛が一匹、のそのそ側へやつて來た。私は稍不安になつて小屋の戸口へ退却した。牛は澄んだ眼を擧げて、ぢつと私の顏を眺めた。それから首を横に振つて、もう一度熊笹の中へ引き返した。私はその牛の姿に愛と嫌惡とを同時に感じながら、ぼんやり卷煙草に火をつけた。……

曇天の夕燒が消えかかつた時、私たちは圍爐裡の火を圍んで、竹串に炙つた山女を肴に鍋で炊いた飯を貪り食つた。それから毛布に寒氣を凌いで、白樺の皮を卷いて造つた、原始的な燈火をともしながら、夜が戸の外に下つた後も、いろいろ山の事を話し合つた。

白樺の火と榾の火と、——この明暗二種の火の光は、旣に燈火の文明の消長を語るものであつた。私は小屋の板壁に、濃淡二つの私の影が動いてゐるのを眺めながら、山の話の途切れた時には、今更のやうに原始時代の日本民族の生活なぞを想像せずにはゐられなかつた。……

四

——雜木の重なり合つたのを押し開いて、もう一度天日の光を浴びると、案内者は私を顧みながら、

「此處が赤澤です。」と云つた。

私は鳥打帽を阿彌陀にして、眼の前にひらけた光景を眺めた。

私の前に横はるものは、立體の數を盡した大石であつた。それが狹い峽谷の急な斜面を滿たしながら、空を劃つた峯峯の向うへ、目のとどく限り連つてゐた。もし形容の言葉を著ければ、正に小さな私たち二人は、遠い山巓から漲り落ちる大石の洪水の上にゐるのであつた。

私たちはこの大石に溢れた谷を、——「黄花駒の爪」の咲いてゐる谷を、蟲の這ふやうに登り出した。

暫く苦しい歩みを續けた後、案内者は突然杖を擧げて、私たちの左手に續いてゐる絶壁の上を指さしながら、

「御覽なさい。あすこに青猪がゐます。」と云つた。

私は彼の杖に沿うて、視線を絶壁の上に投げた。すると荒削りの山の肌が、頂に近く偃ひ松の暗い綠をなすつた所に、小さく一匹の獸が見えた。それが青猪と云ふ異名を負つた日本アルプスに棲む羚羊であつた。

やがてその日も暮れかかる頃、私たちの周圍には、次第に殘雪の色が多くなつて來た。それから石の上に枝を擴げた、寂しい偃ひ松の群も見え始めた。

私は時時大石の上に足を止めて、何時か姿を露し出した、槍ケ嶽の絶巓を眺めやつた。絶巓は大きな石鏃のやうに、夕燒の餘炎が消えかかつた空を、何時も黒黒と切り拔いてゐた。私は「山は自然の始にして又終なり。」——その頂を眺める度に、かう云ふ文語體の感想を必心に繰返した。それは確か以前讀んだ、ラスキンの中にある言葉であつた。

その内に寒い霧の一團が、もう暗くなつた谷の下から、大石と偃ひ松との上を這つて、私たちの方へ上つて來た。さうしてそれがあたりを包むと、俄に小雨交りの風が私たちの顏を吹き始めた。私は漸く山上の高寒を肌に感

じながら、一分も早く今夜宿る無人の岩室に辿り着くべく、懸命に急角度の傾面を登つて行つた。が、ふと異様な聲に驚かされて、思はず左右を見廻すと、あまり遠くない偃ひ松の茂みの上を、流れるやうに飛んで行く褐色の鳥が一羽あつた。

「何だい、あの鳥は。」

「雷鳥です。」

小雨に濡れた案内者は、剛情な歩みを續けながら、不相變無愛想にかう答へた。

（大正九年六月作）

薄曇る水動かずよ芹の中

炎天にあがりて消えぬ箕のほこり

初秋の蝗つかめば柔かき

桐の葉は枝の向き向き枯れにけり

自嘲

水洟や鼻の先だけ暮れ残る

元日や手を洗ひをる夕ごころ

湯河原温泉

金柑は葉越しにたかし今朝の霜

あてかいな　あて宇治の生まれどす

茶畠に入り日しづもる在所かな

白南風に夕浪高うなりにけり

秋の日や竹の實垂るる垣の外

野茨にからまる萩のさかりかな

荒あらし霞の中の山の襞

洛陽

麥ほこりかかる童子の眠りかな

秋の日や榎の梢の片なびき

春雨や檜は霜に焦げながら

庭芝に小みちまはりぬ花つつじ

漢口

ひと鉢の暑さ照りけり巴旦杏

病中

あかつきや蛼なきやむ屋根のうら

唐黍やほどろと枯るる日のにほひ

しぐるるや堀江の茶屋に客ひとり

再び長崎に遊ぶ

唐寺の玉巻芭蕉肥りけり

更くる夜を上ぬるみけり泥鰌汁

木の枝の瓦にさはる暑さかな

夏の日や薄苔つける木木の枝

蒲の穂はなびきそめつつ蓮の花

一游亭を送る　別情悄然

霜のふる夜を菅笠のゆくへ哉

園芸を問へるひとに

あさあさと麥藁かけよ草いちご

山茶花の莟こぼるる寒さかな

高野山

山がひの杉冴え返る谺かな

（『澄江堂句集』より）

上海游記

一　海上

愈東京を立つと云ふ日に、長野草風氏が話しに來た。聞けば長野氏も半月程後には、支那旅行に出かける心算ださうである。その時長野氏は深切にも船醉ひの妙藥を教へてくれた。が、門司から船に乘れば、二晝夜經つか經たない内に、すぐもう上海へ著いてしまふ。高が二晝夜ばかりの航海に、船醉ひの藥なぞを攜帶するやうぢや、長野氏の臆病も知るべしである。――かう思つた私は、三月二十一日の午後、筑後丸の舷梯に登る時にも、雨風に浪立つた港内を見ながら、再びわが長野草風畫伯の海に怯なる事を氣の毒に思つた。

處が故人を輕蔑した罰には、船が玄海にかかると同時に、見る見る海が荒れ初めた。同じ船室に當つた馬杉君と、上甲板の籐椅子に腰をかけてゐると、舷側にぶつかる浪の水沫が、時時頭の上へも降りかかつて來る。海は勿論まつ白になつて、底が轟轟煮え返つてゐる。その向うに何處かの島の影が、ぼんやり浮んで來たと思つたら、それは九州の本土だつた。が、船に慣れてゐる馬杉君は、卷煙草の煙を吐き出しながら、一向弱つたらしい氣色も見せない。私は外套の襟を立てて、ポケットへ兩手を突つこんで、時時仁丹を口に含んで、――要するに長野草風氏が船醉ひの藥を用意したのは、賢明な處置だと感服してゐた。

その内に隣の馬杉君は、バアか何處かへ行つてしまつた。私はやはり悠悠と、籐椅子に腰を下してゐる。はた眼には悠悠と構へてゐても、頭の中の不安はそんなものぢやない。少しでも體を動かしたが最後、すぐに目まひがしさうになる。その上どうやら胃袋の中も、穩かならない氣がし出した。私の前には一人の水夫が、絶えず甲板を往來してゐる。(これは後に發見した事だが、彼も亦實は憐れむべき船醉ひ患者の一人だつたのである。)その目まぐるしい往來も、私には妙に不愉快だつた。それから又向うの浪の中には、細い煙を擧げたトロオル船が、殆船體も沒しないばかりに、際どい行進を續けてゐる。一體何の必要があつて、あんなに大浪をかぶつて行くのだか、その船も當時の私には、業腹で仕方がなかつたものである。

だから私は一心に、現在の苦しさを忘れるやうな、愉快な事許り考へようとした。子供、草花、渦福の鉢、日本アルプス、初代ぽんた、――後は何だつたか覺えてゐない。いや、まだある。何でもワグネルは若い時に、英吉利へ渡る航海中、ひどい暴風雨に遇つたさうである。さうしてその時の經驗が、後年フリイゲンデ・ホルレンデルを書くのに大役を勤めたさうである。そんな事もいろいろ考へて見たが、頭は益ふらついて來る。胸のむかつくのも癒りさうぢやない。とうとうしまひにはワグネルなぞは、犬にでも食はれろと云ふ氣になつた。

十分ばかり經つた後、寢床に横になつた私の耳には、食卓の皿やナイフなぞが一度に床へ落ちる音が聞えた。しかし私は強情に、胃の中の物が出さうになるのを抑へつけるのに苦心してゐた。この際これだけの勇氣が出たのは、事によると船醉ひに罹つたのは、私一人ぢやないかと云ふ懸念があつたおかげである。虛榮心なぞと云ふものも、かう云ふ時には思ひの外、武

上陸の手順を決めるらしい。

處が翌朝になつて見ると、少くとも一等船客だけは、いづれも船に醉つた結果、唯一人の亞米利加人の外は、食堂へも出ずにしまつたさうである。が、その非凡なる亞米利加人だけは、食後も獨り船のサロンに、タイプライタアを叩いてゐたさうである。私はその話を聞かされると、急に心もちが陽氣になつた。同時にその又亞米利加人が、怪物のやうな氣がし出した。實際あんなしけに遇つても、泰然自若としてゐるなぞは、人間以上の離れ業である。或はあの亞米利加人も、體格檢査をやつて見たら、齒が三十九枚あるとか、小さな尻尾が生えてゐるとか、意外な事實が見つかるかも知れない。——私は不相變馬杉君と、甲板の籐椅子に腰をかけながら、そんな空想を逞くした。海は昨日荒れた事も、もうけろりと忘れたやうに、蒼黄と和んだ右舷の向うへ、濟州島の影を横へてゐる。

二 第一瞥(上)

埠頭の外へ出たと思ふと、何十人とも知れない車屋が、いきなり我我を包圍した。我我とは社の村田君、友住君、國際通信社のジョオンズ君並に私の四人である。抑車屋なる言葉が、日本人に與へる映像は、決して薄ぎたないものぢやない。寧ろその勢の好い所は、何處か江戸前な心もちを起させる位なものである。處が支那の車屋となると、不潔それ自身と云つても誇張ぢやない。その上ざつと見渡した所、どれも皆怪しげな人相をしてゐる。それが前後左右べた一面に、いろいろな首をさし伸しては、大聲に何か喚き立てるのだから、上陸したての日本婦人なぞは、少からず不氣味に感ずるらしい。現に私なぞも彼等の一人に、外套の袖を引つ張られた時には、思はず背の高いジョオンズ君の後へ、退却しかかつた位である。

我我はこの車屋の包圍を切り拔けてから、やつと馬車の上の客になつた。が、その馬車も動き出したと思ふと、忽ち馬が無鐵砲に、町角の煉瓦塀と衝突してしまつた。若い支那人の馭者は腹立たしさうに、ぴしぴし馬を毆りつける。馬は煉瓦塀に鼻をつけた儘、無暗に尻ばかり躍らせてゐる。馬車は無論顚覆しさうになる。往來にはすぐに人だかりが出來る。どうも上海では死を決しないと、うつかり馬車へも乘れないらしい。

その内に又馬車が動き出すと、橋の架つた川の側へ出た。川には支那の達磨船が、水も見えない程群つてゐる。川の縁には緑色の電車が、滑かに何臺も動いてゐる。建物はどちらを眺めても、赤煉瓦の三階か四階である。アスファルトの大通には、西洋人や支那人が氣忙しさうに歩いてゐる。が、その世界的な群衆は、赤いタバアンをまきつけた印度人の巡査が相圖をすると、ちやんと馬車の路を讓つてくれる。交通整理の行き屆いてゐる事は、いくら贔屓眼に見た所が、到底東京や大阪なぞの日本の都會の及ぶ所ぢやない。車屋や馬車の勇猛なのに、聊恐れをなしてゐた私は、から云ふ晴れ晴れした景色を見てゐる内に、だんだん愉快な心もちになつた。

やがて馬車が止まつたのは、昔金玉均が暗殺された、東亞洋行と云ふホテルの前である。するとまつさきに下りた村田君が、馭者に何文だか錢をやつた。が、馭者はそれでは不足だと見えて、容易に出した手を引つこめない。のみならず口角泡を飛ばして、頻に何かまくし立ててゐる。しかし村田君は知らん顏をして、ずんずん玄關へ上つて行く。ジョオンズ、友住の兩君も、やはり馭者の雄辯なぞは、一向問題にも

してゐないらしい。私はちよいとこの支那人に、氣の毒なやうな心もちがした。が、多分これが上海では、流行なのだらうと思つたから、さつさと跡について戸の中へはひつた。その時もう一度振返つて見ると、馭者はもう何事もなかつたやうに、悠然と馭者臺に坐つてゐる。その位なら、あんなに騷がなければ好いのに。

我我はすぐに薄暗い、その癖裝飾はけばけばしい、妙な應接室へ案内された。成程これぢや金玉均でなくても、いつ何時どんな窓の外から、ピストルの丸位は食はされるかも知れない。——そんな事を内心考へてゐると、其處へ勇ましい洋服著の主人が、スリッパアを鳴らしながら、氣忙しさうにはひつて來た。何でも村田君の話によると、このホテルを私の宿にしたのは、大阪の社の澤村君の考案によつたものださうである。處がこの精悍な主人は、芥川龍之介には宿を貸しても、萬一暗殺された所が、得にはならないとでも思つたものか、玄關の前の部屋の外には、生憎明き間はございませんと云ふ。それからその部屋へ行つて見ると、ベッドだけは何故か二つもあるが、壁が煤けてゐて、窓掛が古びてゐて、椅子さへ滿足なのは一つもなくて、要するに金玉均の幽靈でもなければ、安住出來る樣な明き間ぢやない。そこで私はやむを得ず、澤村君の厚意は無になるが、外の三君とも相談の上、此處から餘り遠くない萬歲館へ移る事にした。

三　第一瞥(中)

その晚私はジョオンズ君と一しよに、シェッファアドと云ふ料理屋へ、飯を食ひに行つた。此處は壁でも食卓でも、一と通り愉快に出來上つてゐる。給仕は悉支那人だが、隣近所の客の中には、一人も黄色い顏は見えない。料理も郵船會社の船に比べると、三割方は確に上等である。私は多少ジョオンズ君を相手に、イエスとかノオとか英語をしやべるのが、愉快なやうな心もちになつた。

ジョオンズ君は悠悠と、南京米のカリイを平げながら、いろいろ別後の話をした。その中の一つにこんな話がある。何でも或晩ジョオンズ君が、——やつぱり君附けにしてゐたのぢや、何だか友だちらしい心もちがしない。彼は前後五年間、日本に住んでゐた英吉利人である。私はその五年間、(一度喧嘩をした事はあるが、始終彼と親しくしてゐた。一しよに歌舞伎座の立ち見をした事もある。鎌倉の海を泳いだ事もある。殆ど夜中上野の茶屋に、盃盤狼藉としてゐた事もある。その時彼は久米正雄の一張羅の袴をはいた儘、いきなり其處の池へ飛込んだりした。その彼を君などと奉つてゐるのは、誰よりも彼にすまないかも知れない。次手にもう一つ斷つて置くが、私が彼と親しいのは、彼の日本語が達者だからである。私の英語がうまいからぢやない。)——何でも或晩そのジョオンズが、何處かのカッフェへ酒を飲みに行つたら、日本の給仕女がたつた一人、ぼんやり椅子に腰をかけてゐた。彼は日頃口癖のやうに支那は彼の道樂だが日本は彼の情熱だと呼號してゐる男である。殊に當時は上海へ、引越し立てだつたさうだから、餘計に日本の思ひ出が懷しかつたのに違ひない。彼は日本語を使ひながら、すぐにその給仕へ話しかけた。——何時上海へ來ましたか?——昨日來たばかりでございます。——ぢや日本へ歸りたくはありませんか?——給仕は彼にかう云はれると、急に涙ぐんだ聲を出した。——歸りたいわ。」ジョオンズは英語をしやべる合ひ間に、この「歸りたいわ」を繰返した。さうしてにやにや笑ひ出した。「僕もさう云はれた時には、so sentimental になつたつけ。」

我我は食事をすませた後、賑かな四馬路を

散歩した。それからカッフェ・パリジアンへ、ちよいと舞踏を覗きに行つた。

舞踏場は可成廣い。が、管絃樂の音と一しよに、電燈の光が青くなつたり赤くなつたりする工合は如何にも淺草によく似てゐる。唯その管絃樂の巧拙になると、到底淺草は問題にならない。其處だけはいくら上海でも、さすがに西洋人の舞踏場である。

我我は隅の卓子に、アニセットの盃を舐めながら、眞赤な著物を着たフィリッピンの少女や、背廣を一著した亞米利加の青年が、愉快さうに踊るのを見物した。ホイットマンか誰かの短い詩に、若い男女も美しいが、年をとつた男女の美しさは、又格別だとか云ふのがある。私はどちらも同じやうに、肥つた英吉利の老人夫婦が、私の前へ踊つて來た時、成程とこの詩を思ひ浮べた。が、ジョオンズにさう云つたら、折角の私の詠嘆も、ふふんと一笑に付せられてしまつた。彼は老夫婦の舞踏を見ると、その肥れると瘦せたるとを問はず、吹き出したい誘惑を感ずるのださうである。

四　第一瞥（下）

カッフェ・パリジアンを引き上げたら、もう廣い往來にも、人通りが稀になつてゐた。その癖時計を出して見ると、十一時がいくらも廻つてゐない。存外上海の町は早寢である。但しあの恐るべき車屋だけは、未に何人もうろついてゐる。さうして我我の姿を見ると、必何とか言葉をかける。私は前以村田君に、不要と云ふ支那語を教はつてゐた。不要は勿論いらんの意である。だから私は車屋さへ見れば、忽惡魔拂ひの呪文のやうに、不要不要を連發した。これが私の口から出た、記念すべき最初の支那語である。如何に私が欣欣然と、この言葉を車屋へ抛りつけたか、その間の消息がわからない讀者は、きつと一度も外國語を習つた經驗がないに違ひない。

我我は靴音を響かせながら、靜かな往來を歩いて行つた。その往來の兩側には、三階四階の煉瓦建が、星だらけの空を塞ぐ事がある。さうかと思ふと街燈の光が、筆太に大きな當の字を書いた質屋の白壁を見せる事もある。或時は又步道の丁度眞上に、女醫生何とかの招牌がぶら下つてゐる所も通れば、漆喰の剝げた壁か何かに、南洋煙草の廣告びらが貼りつけてある所も通つた。が、いくら步いて行つても、容易に私の旅館へ來ない。その内に私はアニセットの祟りか、喉が渇いてたまらなくなつた。

「おい、何か飲む所はないかな。僕は莫迦に喉が渇くんだが。」

「すぐ其處にカッフェが一軒ある。もう少しの辛抱だ。」

五分の後我我兩人は、冷たい曹達を飲みながら、小さな卓子に坐つてゐた。

このカッフェはパリジアンなぞより、餘程下等な所らしい。桃色に塗つた壁の側には、髮を分けた支那の少年が、大きなピアノを叩いてゐる。それからカッフェのまん中には、英吉利の水兵が三四人、頰紅の濃い女たちを相手に、だらしのない舞踏を續けてゐる。最後に入口の硝子戶の側には、薔薇の花を賣る支那の婆さんが、私に不要を食はされた後、ぼんやり舞踏を眺めてゐる。私は何だか畫入新聞の插畫でも見るやうな心もちになつた。畫の題は勿論『上海』である。

其處へ外から五六人、同じやうな水兵仲間が、一時にどやどやはひつて來た。この時一番可笑しかつたのは、戶口に立つてゐた婆さんである。婆さんは醉はらひの水兵達が、亂暴に戶を押し開ける途端、腕にかけた籠を落してしまつた。しかも當の水兵達は、そんな事にかまふ所かや

ない。もう踊つてゐた連中と一しよに、氣違ひのやうにとち狂つてゐる。婆さんはぶつぶつ云ひながら、床に落ちた薔薇を拾ひ出した。が、それさへ拾つてゐる内には、水兵たちの靴に踏みにじられる。……

「行かうか？」

ジョオンズは辟易したやうに、ぬつと大きな體を起した。

「行かう。」

私もすぐに立ち上つた。が、我我の足もとには、點點と薔薇が散亂してゐる。私は戸口へ足を向けながら、ドオミエの畫を思ひ出した。

「おい、人生はね。」

ジョオンズは婆さんの籠の中へ、銀貨を一つ抛りこんでから、私の方へ振返つた。

「人生は、──何だい？」

「人生は薔薇を撒き散らした路であるさ。」

我我はカッフェの外へ出た。其處には不相變黄包車が、何輛か客を待つてゐる。それが我我の姿を見ると、我勝ちに四方から駈けつけて來た。車屋はもとより不要である。が、この時私は彼等の外にも、もう一人別な厄介者がついて來たのを發見した。我我の側には、何時の間にか、あの花賣りの婆さんが、くどくどと何かしやべりながら、乞食のやうに手を出してゐる。婆さんは銀貨を貰つた上にも、また我我の財布の口を開けさせる心算でゐるらしい。私はこんな欲張りに賣られる、美しい薔薇が氣の毒になつた。この圖圖しい婆さんと、晝間乘つた馬車の馭者と、──これは何も上海の第一瞥に限つた事ぢやない。殘念ながら同時に又、確に支那の第一瞥であつた。

五　病院

私はその翌日から床に就いた。さうしてその又翌日から、里見さんの病院に入院した。病名は何でも乾性の肋膜炎とか云ふ事だつた。假にも肋膜炎になつた以上、折角企てた支那旅行も、一先づ見合せなければならないかも知れない。さう思ふと大いに心細かつた。私は早速大阪の社へ、入院したと云ふ電報を打つた。すると社の薄田氏から、「ユックリレウヨウセヨ」と云ふ返電があつた。しかし一月なり二月なり、病院にはひつたぎりだつたら、社でも困るのには違ひない。私は薄田氏の返電にほつと一先安心しながら、しかも紀行の筆を執るべき私の義務を考へると、愈心細がらずにはゐられなかつた。

しかし幸ひ上海には、社の村田君や友住君の外にも、ジョオンズや西村貞吉のやうな、學生時代の友人があつた。さうしてこれらの友人知己は、忙しい體にも關らず、始終私を見舞つてくれた。しかも作家とか何とか云ふ、多少の虚名を負つてゐたおかげに、時時未知の御客からも、花だの果物だのを頂戴した。現に一度などはビスケットの罐が、聊か處分にも苦しむ位、ずらりと枕頭に並んだりした。（この窮境を救つてくれたのは、やはりわが敬愛する友人知己諸君である。諸君は病人の私から見ると、いづれも不思議な程健啖だつた。）いや、さう云ふ御見舞物を辱くしたばかりぢやない。始は未知の御客だつた中にも、何時か互に遠慮のない友達づき合ひをする諸君が、二人も三人も出來るやうになつた。俳人四十起君もその一人である。石黑政吉君もその一人である。上海東方通信社の波多博君もその一人である。

それでも七度五分程の熱が、容易にとれないとなつて見ると、不安は依然として不安だつた。どうかすると眞つ晝間でも、ぢつと横になつてはゐられない程、急に死ぬ事が怖くなりなぞした。私はかう云ふ神經作用に、祟られたくない一心から、晝は蒲團の井川氏やジョオンズが

説に、耳を傾けない心算ぢやない。しかし支那の紀行となると、場所その物が下等なのだから、時時は禮節も破らなければ、溌剌たる描寫は不可能である。もし譃だと思つたら、試みに誰でも書いて見るが好い――そこで又元へ立ち戻ると、その一人の支那人は、悠悠と池へ小便をしてゐた。陳樹藩が叛旗を飜さうが、白話詩の流行が下火にならうが、日英續盟が持ち上らうが、そんな事は全然この男には、問題にならないのに相違ない。少くともこの男の態度や顔には、さうとしか思はれない長閑さがあつた。曇天にそば立つ支那風の亭と、病的な緑色を擴げた池と、その池へ斜めに注がれた、隆隆たる一條の小便と、――これは憂鬱愛すべき風景畫たるばかりぢやない。同時に又わが老大國の、辛辣恐るべき象徴である。私はこの支那人の姿に、しみじみと少時眺め入つた。が、生憎四十起氏には、これも感慨に價する程、珍しい景色ぢやなかつたと見える。

「御覽なさい。この敷石に流れてゐるのも、こいつはみんな小便ですぜ。」

四十起氏は苦笑を洩した儘、さつさと池の緣を曲つて行つた。さう云へば成程空氣の中にも、重苦しい尿臭が漂つてゐる。この尿臭を感ずるが早いか、魔術は忽ちに破れてしまつた。湖心亭は畢に湖心亭であり、小便は畢に小便である。私は靴を爪立てながら、匆匆四十起氏の跡を追つた。出たらめな詠歎なぞに耽るものぢやない。

七　城内(中)

それから少し先へ行くと、盲目の老乞食が坐つてゐた。――一體乞食と云ふものは、ロマンティックなものである。ロマンティシズムとは何ぞやとは、議論の干ない問題だが、少くともその一特色は、中世紀とか幽靈とか、アフリカとか夢とか女の理窟とか、何時も不可知な何物かに憧れる所が身上らしい。して見れば乞食が會社員より、ロマンティックなのは當然である。處が支那の乞食となると、一通りや二通りの不可知ぢやない。雨の降る往來に寢ころんでゐたり、新聞紙の反古しか著てゐなかつたり、石榴のやうに肉の腐つた膝頭をべろべろ舐めてゐたり、――要するに少少恐縮する程、ロマンティックに出來上つてゐる。支那の小説を讀んで見ると、如何なる道樂か、神仙が乞食に化けてゐる話が多い。あれは支那の乞食から、自然に發達したロマンティシズムである。日本の乞食では支那のやうに、超自然な不潔さを具へてゐないから、ああ云ふ話は生まれて來ない。まづ精精將軍家の駕籠へ、種ケ島を打ちかけるとか、山中の茶の湯を御馳走しに、柳里恭を招待するとか、その位の所が關の山である――あまり横道へ反れすぎたが、この盲目の老乞食も、赤脚仙人か鐵拐仙人が、化けてでもゐさうな恰好だつた。殊に前の敷石を見ると、悲慘な彼の一生が、綺麗に白墨で書き立ててある。字も私に比べるとどうやら多少うまいらしい。私はこんな乞食の代書は、誰がするのだらうと考へた。

その先の露地へさしかかると、今度は骨董屋が澤山あつた。此處はどの店を覗いて見ても、銅の香爐だの、埴輪の馬だの、七寶の鉢だの、龍頭瓶だの、玉の文鎭だの、青貝の戸棚だの、大理石の硯屏だの、剥製の雉だの、恐るべき仇英だのが、雜然とあたりを塞いだ中に、水煙管を銜へた支那服の主人が、氣樂さうに客を待ち受けてゐる。次手にちよいとひやかして見たが、五割方は懸値であるとしても、値段は格別安さうぢやない。これは日本へ歸つた後、香取秀眞氏にひやかされた事だが、骨董を買ふには支那へ行くより、東京日本橋仲通りを徘徊した方

が好きさうである。

骨董屋の門を通り抜けたら、大きな廟のある所へ出た。それが畫端書でも御馴染の、名高い城内の城隍廟である。廟の中には參詣人が、入れ交り立ち交り叩頭に來る。勿論線香を獻じたり、紙錢を焚いたりするものも、想像以上に大勢ある。その煙に燻ぶるせゐか、梁間の額や柱上の聯は、悉く妙に油ぎつてゐる。事によると燻けてゐないものは、天井から幾つも吊り下げた、金銀二色の紙錢だの、螺旋狀の線香だのばかりかも知れない。これだけでも既に私には、さつきの乞食と同じやうに、昔讀んだ支那の小說を想起させるのに十分である。まして左右に居流れた、判官らしい像になると、──或は正面に端坐した城隍らしい像になると、殆聊齋志異だとか、新齊諧だとか云ふ書物の插畫を見るのと變りはない。私は大いに敬服しながら、四十起氏の迷惑などはそつち除けに、何時までも其處を離れなかつた。

八　城内（下）

今更云ふまでもない事だが、鬼狐の談に富んだ支那の小說では、城隍を始め下廻りの判官や鬼隷も暇ぢやない。城隍が廡下に一夜を明かした書生の寃を聞いてやると、判官は町中を荒し廻つた泥坊を頓死させてしまふ──と云ふと好い事ばかりのやうだが、猫の肉さへ供物にすれば、惡人の味方もすると云ふ、賊城隍がある位だから、人間の女房を追ひ廻した報いに、肘を折られたり頭を落されたり、天下に赤恥を廣告する判官や鬼隷も少くない。それが本だけ讀んだのでは、何だか得心の出來ない所がある。つまり筋だけは呑みこめても、その割に感じがぴつたり來ない。其處が歯痒い氣がしたものだが、今この城隍廟を目のあたりに見ると、如何に支那の小說が、荒唐無稽に出來上つてゐても、その想像の生れた因緣は一一成程と頷かれる。いや、あんな赤つ面の判官では、惡少の眞似位はするかも知れない。あんな美髯の城隍なら、堂堂たる儀衛に圍まれた儘、夜空に昇るのも似合ひさうである。

こんな事を考へた後、私は又四十起氏と一しよに、廟の前へ店を出した、いろいろな露店を見物した。靴足袋、玩具、甘蔗の莖、貝釦、手巾、南京豆、──その外まだ薄穢い食物店が澤山ある。勿論此處の人の出は、日本の緣日と變りはない。向うには派手な縞の背廣に、紫水晶のネクタイ・ピンをした、支那人のハイカラが歩いてゐる。と思ふと又こちらには、手首に銀の環を嵌めた、纏足の足が二三寸しかない、高式なお上さんも歩いてゐる。金瓶梅の陳敬濟、品花寶鑑の奚十一、──これだけ人の多い中には、さう云ふ豪傑もゐさうである。しかし杜甫だとか、岳飛だとか、王陽明だとか、諸葛亮だとかは、藥にしたくもゐさうぢやない。言ひ換へれば現代の支那なるものは、詩文にあるやうな支那ぢやない。猥褻な、殘酷な、食意地の張つた、小說にあるやうな支那である。瀬戸物の亭だの、睡蓮だの、刺繡の鳥だのを難有がつた、安價なモック・オリエンタリズムは、西洋でも追ひ追ひ流行らなくなつた。文章軌範や唐詩選の外に、支那あるを知らない漢學趣味は、日本でも好い加減に消滅するが好い。

それから我我は引き返して、さつきの池の側にある、大きな茶館を通り抜けた。伽藍のやうな茶館の中には、思ひの外客が立て込んでゐない。が、其處へはひるや否や、雲雀、目白、文鳥、鸚哥、──ありとあらゆる小鳥の聲が、目に見えない驟雨か何かのやうに、一度に私の耳を襲つた。見れば薄暗い天井の梁には、一面に鳥籠がぶら下つてゐる。支那人が小鳥を愛する事は、今になつて始つた次第ぢやない。が、

こんなに鳥籠を並べて、こんなに鳥の聲を聞かせようとは、夢にも考へなかつた事實である。これでは鳥の聲を愛する所か、まづ鼓膜が破れないやうに、匆匆兩耳を塞がざるを得ない。

私は殆逃げるやうに、四十起氏を促し立てながら、この不可解な茶館を飛び出した。

しかし小鳥の啼き聲は、茶館の中にばかりある訣ぢやない。やつとその外へ脱出しても、狹い往來の右左に、ずらりと懸け並べた鳥籠から、しつきりない囀りが降りかかつて來る。尤もこれは閑人どもが、道樂に啼かせてゐるのぢやない。いづれも兩側の小鳥屋が、（實を云ふと小鳥屋だか、それとも又鳥籠屋だか、どちらだか未だに判然しない。）店を連ねてゐるのである。

「少し待つて下さい。鳥を一つ買つて來ますから。」

四十起氏は私にかう云つてから、その店の一つにはひつて行つた。其處をちよいと通りすぎた所に、ペンキ塗りの寫眞屋が一軒ある。私は四十起氏を待つ間、その飾り窓の正面にある、梅蘭芳の寫眞を眺めてゐた。四十起氏の歸りを待つてゐる子供たちの事なぞを考へながら。

九　戲臺（上）

上海では僅に二三度しか、芝居を見物する機會がなかつた。私が支那の芝居に通になつたのは、北京へ行つた後の事である。しかし上海で見た役者の中にも、武生では名高い蓋叫天とか、花旦では綠牡丹とか小翠花とか、兎に角當代の名伶があつた。が、役者を談ずる前に、芝居小屋の光景を紹介しないと、支那の芝居とはどんなものだか、はつきり讀者には通じないかも知れない。

私の行つた劇場の一つは、天蟾舞臺と號するものだつた。此處は白い漆喰塗りの、まだ眞新らしい三階建である。その又二階だの三階だのが、ぐるりと眞鍮の欄干をつけた、半圓形になつてゐるのは、勿論當世流行の西洋の眞似に違ひない。天井には大きな電燈が、煌煌と三つぶら下つてゐる。客席には煉瓦の床の上に、ずつと籐椅子が並べてある。が、苟も支那たる以上、籐椅子と雖も油斷は出來ない。何時か私は村田君と、この籐椅子に坐つてゐたら、餘程饑ゑてゐた南京蟲に、手頸を二三箇所やられた事がある。しかしまづ芝居の中は、大した不快を感じない程度に、綺麗だと云つて差支へない。

舞臺の兩側には大きな時計が一つづつちやんと懸けてある。（尤も一つは止まつてゐた。）その下には煙草の廣告が、あくどい色彩を並べてゐる。舞臺の上の欄間には、漆喰の薔薇やアカンサスの中に、天聲人語と云ふ大文字がある。舞臺は有樂座より廣いかも知れない。此處にももう西洋式に、フット・ライトの裝置がある。幕は、──さあ、その幕だが、一場一場を區別する爲には、全然幕を使用しない。が、背景を換へる爲には、──と云ふよりも背景それ自身としては、蘇州銀行とか三砲臺香烟とか、即ちスリイ・キャッスルズの下等な廣告幕を引く事がある。幕は何處でもまん中から、兩方へ引く事になつてゐるらしい。その幕を引かない時には、背景が後を塞いでゐる。背景はまづ油繪風に、室内や室外の景色を描いた、新舊いろいろの幕である。それも種類は二三種しかないから、義和が馬を走らせるのも、武松が人殺しを演ずるのも、背景には一向變化がない。その舞臺の左の端に、胡弓、月琴、銅鑼などを持つた、支那の御囃しが控へてゐる。この連中の中には一人二人、鳥打帽をかぶつた先生も見える。

序に芝居を見る順序を云へば、一等だらうが

ことである。たとへば今の梅龍鎭にしても、つらつら戯考を按ずると、當世に起つた出來事ぢやない。明の武宗が微行の途次、梅龍鎭の旗亭の娘、鳳姐を見染めると云ふ筋である。處がその娘の持つてゐる盆は、薔薇の花を描いた陶器の底に、鍍金の縁なぞがついてゐる。あれは何處かのデイパアトメント・ストアに、並んでゐたものに違ひない。もし梅若萬三郎が、大口にサアベルをぶら下げて出たら、そんな事の莫迦莫迦しいのは、多言を要せずとも明かである。

支那の芝居の第三の特色は、隈取りの變化が多い事である。何でも辻聽花翁によると、曹操一人の隈取りが、六十何種もあるさうだから、到底市川流所の騒ぎぢやない。その又隈取りも甚しいのは、赤だの藍だの代赭だのが、一面に皮膚を蔽つてゐる。まづ最初の感じから云ふと、どうしても化粧とは思はれない。私なぞは武松の芝居へ、蔣門神がのそのそ出て來た時には、いくら村田君の説明を聽いても、やはり假面だとしか思はれなかつた。一見あの所謂花臉も、假面ではない事が看破出來れば、その人は確に千里眼に近いのに相違ない。

支那の芝居の第四の特色は、立廻りが猛烈を極める事である。殊に下廻りの活動になると、これを役者と稱するのは、輕業師と稱するの當れるに若かない。彼等は舞臺の端から端へ、續けさまに二度宙返りを打つたり、正面に積上げた椅子の上から、眞つ倒に跳ね下りたりする。それが大抵は赤いズボンに、半身は裸の役者だから、愈曲馬か玉乗りの子供らしい氣がしてしまふ。勿論上等な武劇の役者も、言葉通り風を生ずる程、青龍刀や何かを振り廻して見せる。武劇の役者は昔から、腕力が強いと云ふ事だが、これでは腕力がなかつた日には、肝腎の商賣が勤まりつこはない。しかし武劇の名人となると、やはりかう云ふ離れ業以外にも、何處か獨得な氣品がある。その證據には蓋叫天が、宛然日本の車屋のやうな、パッチばきの武松に扮するのを見ても、無暗に刀を揮ふ時より、何かの拍子に無言の儘、じろりと相手を見る時の方が、どの位行者武松らしい、凄味に富んでゐるかわからない。

勿論かう云ふ特色は、支那の舊劇の特色である。新劇では隈取りもしなければ、とんぼ返りもやらないらしい。では何處までも新しいかと云ふと、亦舞臺とかに上演してゐた、賣身投葬と云ふのなぞは、火のない蠟燭を持つて出ても、やはり見物はその蠟燭が、ともつてゐる事と想像する。——つまり舊劇の象徴主義は依然として舞臺に殘つてゐた。新劇は上海以外でも、その後二三度見物したが、此處ではどれも慘憺ながら、五十歩百歩だつたと云ふ外はない。少くとも雨とか稻妻とか夜になつたとか云ふ事は、全然見物の想像に依頼するものばかりだつた。

最後に役者の事を述べると、——蓋叫天だの小翠花だのは、もう引き合ひに出して置いたから、今更述べる事はない。が、唯一つ書いて置きたいのは、樂屋にゐる時の綠牡丹である。私が彼を訪問したのは、亦舞臺の樂屋だつた。いや、樂屋と云ふよりも、舞臺裏と云つた方が、或は實際に近いかも知れない。兎に角其處は舞臺の後の、壁が剝げた、蒜臭い、如何にも慘憺たる處だつた。何でも村田君の話によると、梅蘭芳が日本へ來た時、最も彼を驚かしたものは、樂屋の綺麗な事だつたと云ふが、かう云ふ樂屋に比べると、成程帝劇の樂屋なぞは、驚くべく綺麗なのに相違ない。おまけに支那の舞臺裏には、なりの薄ぎたない役者たちが、顏だけは例の隈取りをした儘、何人もうろうろ歩いてゐる。それが電燈の光の中に、恐るべき埃を浴

ながら、往つたり来たりしてゐる容子は殆百鬼夜行の図だつた。さう云ふ連中の通り路から、ちよいと陰になつた所に、支那鞄や何かが抛り出してある。緑牡丹はその支那鞄の一つに、髷だけは脱いでゐたか、妓女蘇三に扮した儘、丁度茶を飲んで居た所だつた。舞台では繊細に見えた顔も、今見れば存外華奢ではない。寧ろセンシュアルな感じの強い、立派に發育した青年である。背も私に比べると、確に五分は高いらしい。その夜も一しよだつた村田君は、私を彼に紹介しながら、この利巧さうな女形と、互に久濶を敍し合つたりした。聞けば君は緑牡丹が、まだ無名の子役だつた頃から、彼でなければ夜も日も明けない、熱心な贔屓の一人なのださうである。私は彼に、玉堂春は面白かつたと云ふ意味を傳へた。すると彼は意外にも、アリガトと云ふ日本語を使つた。さうして——さうして彼が何をしたか。私は彼れ自身の為にも、又わが村田烏江君の為にも、こんな事は公然書きたくない。が、これを書かなければ、折角彼を紹介した所が、むざむざ眞を逸してしまふ。それでは讀者に對しても、甚済まない次第である。その為に敢然正筆を使ふと、——彼は横を向くが早いか、眞紅に銀糸の繡をした、美しい袖を飜して、見事に床の上へ手洟をかんだ。

十一　章炳麟氏

章炳麟氏の書斎には、如何なる趣味か知らないが、大きな鰐の剥製が一匹、腹這ひに壁に引つ付いてゐる。が、この書物に埋まつた書斎は、その鰐が皮肉に感じられる程、言葉通り肌に沁みるやうに寒い。尤も當日の天気は、發句の季題を借用すると、正に冴え返る雨天だつた。其處へ瓦を張つた部屋には、敷物もなければ、ストオヴもない。坐るのは勿論蒲團のない、角張つた紫檀の肘掛椅子である。おまけに私の著てゐたのは、薄いセルの間著だつた。私は今でもあの書斎に、坐つてゐた事を考へると、幸に風も引かなかつたのは、全然奇蹟としか思はれない。

しかし章太炎先生は、鼠色の太掛兒に、厚い毛皮の裏のついた、黒い馬掛兒を一著してゐる。だから無論寒くはない。その上氏の坐つてゐるのは、毛皮を掛けた籐椅子である。私は氏の雄辯に、煙草を吸ふ事も忘れながら、しかも氏が暖さうに、悠然と足を伸ばしてゐるのには、大いに健羨に堪へなかつた。

風説によれば章炳麟氏は、自ら王者の師を以て任じてゐると云ふ事である。さうして一時はその御弟子に、黎元洪を選んだと云ふ事である。さう云へば成程その横手の壁には、あの鰐の剥製の下に、「東南撲學、章太炎先生、元洪」と書いた、懸額の軸が懸つてゐる。しかし遠慮のない所を云ふと、氏の顔は決して立派ぢやない。皮膚の色は殆黄色である。口髭や顎鬚は気の毒な程薄い。突兀と聳えた額なども、瘤ではないかと思ふ位である。が、その絲のやうに細い眼だけは、——上品な縁無しの眼鏡の後に、何時も冷然と微笑した眼だけに、確に出来合ひの代物ぢやない。この眼の為に袁世凱は、先生を囹圄に苦しませたのである。同時に又この眼の為に、一旦は先生を監禁しても、とうとう殺害は出来なかつたのである。

氏の話題は徹頭徹尾、現代の支那を中心とした政治や社會の問題だつた。勿論不要とか「等一等」とか、車屋相手の熟語以外は、一言も支那語を知らない私に議論なぞのわかる理由はない。それが氏の論旨を知つたり、時時は氏に生意気な質問なぞも發したりしたのは、悉「上海日日」の主筆西本省三氏のおかげである。西本氏は私の隣りの椅子に、ちやんと胸を反らせ

た儘、どんな面倒な議論になつても、深切に通譯を勸めてくれた。（殊に當時は、通報「上海」の締切り日が迫つてゐたのだから、私は愈氏の御苦勞に感謝せざるを得ないのである。

「現代の支那は遺憾ながら、政治的には墮落してゐる。不正が公行してゐる事も、或は清朝の末年よりも、一層甚しいと云へるかも知れない。學問藝術の方面になれば、猶更沈滯は甚しいやうである。しかし支那の國民は、元來極端に趨る事をしない。この特性が存する限り、支那の赤化は不可能である。成程一部の學生は、勞農主義を歡迎した。が、學生は即ち國民ではない。彼等さへ一度は赤化しても必ず何時かはその主張を拋つ時が來るであらう。何故と云へば國民性は、——中庸を愛する國民性は、一時の感激よりも強いからである。」

章炳麟氏はしつきりなしに、爪の長い手を振りながら、滔滔と獨得な説を述べた。私は——唯寒かつた。

「では支那を復興するには、どう云ふ手段に出るが好いか？　この問題の解決は、具體的にはどうするにもせよ、机上の學説からは生まれる筈がない。古人も時務を知るものは俊傑なりと道破した。一つの主張から演繹せずに、無數の事實から歸納する、——それが時務を知るのである。時務を知つた後に、計畫を定める、——時に循つて、宜しきを制すとは、結局この意味に外ならない。……」

私は耳を傾けながら、時時壁上の鰐を眺めた。さうして支那問題とは沒交渉に、こんな事をふと考へたりした。——あの鰐はきつと睡蓮の匂と太陽の光と暖な水とを承知してゐるのに相違ない。して見れば現在の私の寒さは、あの鰐に一番通じる筈である。鰐よ、剝製のお前は仕合せだつた。どうか私を憐んでくれ。まだこの通り生きてゐる私を。……

十二　西洋

問。上海は單なる支那ぢやない。同時に又一面では西洋なのだから、その邊も十分見て行つてくれ給へ。公園だけでも日本よりは、餘程進歩してゐると思ふが、——

答。公園も一通りは見物したよ。佛蘭西公園やジェスフィルド公園は、散歩するに、持つて來いだ。殊に佛蘭西公園では、若葉を出した篠懸の間に、西洋人のお袋だの乳母だのが子供を遊ばせてゐる、それが大變綺麗だつたつけ。——だが格別日本よりも、進歩してゐるとは思はないね。唯此處の公園は、西洋式だと云ふだけぢやないか？　何も西洋式になりさへすれば、進歩したと云ふ訣でもあるまいし。

問。新公園にも行つたかい？

答。行つたとも。しかしあれは運動場だらう。僕は公園だとは思はなかつた。

問。パブリック・ガアドンは？

答。あの公園は面白かつた。外國人ははひつても好いが、支那人は一人もはひる事が出來ない。しかもパブリックと號するのだから、命名の妙を極めてゐるよ。

問。しかし往來を歩いてゐても、西洋人の多い所なぞは、何だか感じが好いぢやないか？

答。さう云へば僕はこの間、鼻のない異人を見かけたつけ。あんな異人に遇ふ事は、ちよいと日本ぢやむづかしいかも知れない。

問。あれか？　あれは流感の時、まつさきにマスクをかけた男だ。——しかし往來を歩いてゐても、やはり異人に比べると、日本人は皆貧弱だね。

答。洋服を著た日本人はね。

問。和服を著たのは猶困るぢやないか？　何しろ日本人と云ふやつは、肌が人に見える事は、

何とも思つてゐなかつたから、——

答　もし何とも思はずにゐれば、それは思ふものの不徳義なのさ。久米の仙人と云ふ人は、その爲に雲から落ちたぢやないか？

問　じや西洋人は猥褻かい？

答　勿論その點では猥褻だね。唯風俗と云ふやつは、何分ながら多數決のものだ。だから今に日本人も、素足で外へ出かけるのは、卑しい事のやうに思ふだらう。つまりだんだん以前よりも、猥褻になつて行くのだね。

問　しかし日本の藝者なぞが、白晝往來を歩いてゐるのは、西洋人の手前も恥しくもなからうね。

答　何、そんな事は安心し給へ。西洋人の藝者も歩いてゐるのだから、——唯君には見分けられないのさ。

問　これはちと手嚴しいな。佛蘭西租界なぞへも行つたかい？

答　あの住宅地は愉快だつた。柳がもう煙つてゐたり、鳩がかすかに啼いてゐたり、桃もまた咲いてゐたり、支那の民家が殘つてゐたり、——

問　あの邊は殆西洋だね。赤瓦だの、白煉瓦だの、西洋人の家も好いぢやないか？

答　西洋人の家は大抵駄目だね。少くとも僕の見た家は、悉下等なものばかりだつた。

問　君がそんな西洋嫌ひとは、夢にも僕は思はなかつたが、——

答　僕は西洋が嫌ひなのぢやない。俗惡なものが嫌ひなのだ。

問　それは僕も勿論さうさ。

答　嘘をつき給へ。君は和服を著るよりも、洋服を著たいと思つてゐる。門構への家に住むよりも、バンガロオに住みたいと思つてゐる。釜揚うどんを食ふよりも、マカロニを食ひたいと思つてゐる。山本山を飮むよりも、ブラジル珈琲を飮み

問。もうわかつたよ。しかし墓地は惡くはあるまい、あの靜安寺路の西洋人の墓地は？

答。墓地とは恐縮したね。成程あの墓地は氣が利いてゐた。しかし僕はどちらかと云へば、大理石の十字架の下より、土饅頭の下に横になつてゐたい。況や怪しげな天使なぞの彫刻の下は眞平御免だ。

問。すると君は上海の西洋には、全然興味を感じないのかい？

答。いや、大いに感じてゐるのだ。上海は僕の云ふ通り、兎に角一面では西洋だからね。善かれ惡しかれ西洋を見るのは、面白い事に違ひないぢやないか？　唯此處の西洋は本場を見ない僕の眼にも、やはり邪道に陷つてゐるやうな氣がするのだ。

十三　鄭孝胥氏

村田君に傳ふる所によれば、鄭孝胥氏は悠悠と、清貧に安んじてゐるさうである。處が或數人の午前、村田君や波多君と一しよに、門前へ自動車を乘りつけて見ると、その清貧に安んじてゐる家は、私の豫想よりもずつと立派な、鼠色に塗つた三階建だつた。門の内には庭續きらしい、やや黄ばんだ竹むらの前に、菊花なぞが匂つてゐる。私もかう云ふ清貧ならば、何時身を置いても差支へない。

暫くの後我我五人は、應接室に通された。此處は壁に懸けた額の外に、殆何も裝飾にならない。が、マントル・ピイスの上には、左右一對の燒き物の花瓶に、小さな黄龍旗が何本か垂れてゐる。鄭蘇戡先生は中華民國の政治家ではない、大清帝國の遺臣である。私はこの旗を眺めながら、誰か氏を批評した、「他人之退而不隱者、殆不可同日論」とか云ふ、うろ覺えの一句を思ひ出した。

其處へ小肥りの青年が一人、足音もさせずにはひつて來た。これが日本に留學してゐた氏

の令息鄭垂氏である。氏と懇意な波多君は、すぐに私を紹介した。鄭垂氏は日本語に堪能だから、氏と話をする場合には、波多村田両先生の通訳を煩はす必要はない。

鄭孝胥氏が我我の前に、背の高い姿を現はしたのは、それから間もなくの事だつた。氏は一見した所、老人に似合はず血色が好い。眼も青年のやうに、綺麗な光を帯びてゐる。殊に胸を反らせた態度や、盛な手真似を交へる工合は、鄭垂氏よりも反つて若若しい。それが黒い馬掛児に、心もち藍の調子が勝つた、薄鼠の大掛児を着てゐる所は、さすがに当年の才人だけに、如何にも気の利いた風采である。いや、閑日月に富んだ今でさへ、かう溌剌としてゐるやうぢや、康有為氏を中心とした、芝居のやうな戊戌の変に、花花しい役割を演じた頃には、どの位才気煥発だつたか、想像する事も難くはない。

氏を加へた我我は、少時支那問題を談じ合つた。勿論私も臆面なしに、新借款団の成立以後、日本に対する支那の輿論とか何とか、柄にもない事を弁じ立てた。――と云ふと甚不真面目らしいが、その時は何も出たらめに、そんな事を饒舌つてゐたのではない。私自身では大真面目に、自説を披瀝してゐたのである。が、今になつて考へて見ると、どうもその当時、私は、多少正気ではなかつたらしい。尤もこの逆上の原因は、私の軽薄な根性の外にも、確に現代の支那その物が、一半の責を負ふべきものである。もし譃だと思つたら、誰でも支那へ行つて見るが好い。必一月とゐる内には、妙に政治を論じたい気がして来る。あれは現代の支那の空気が、二十年来の政治問題を孕んでゐるからに相違ない。私の如きは御丁寧にも、江南一帯を経めぐる間、容易にこの熱がさめなかつた。さうして誰も頼まないのに、芸術なぞよりは数段下等な政治の事ばかり考へてゐた。

鄭孝胥氏は政治的には、現代の支那に絶望してゐた。支那は共和に執する限り、永久に混乱は免れ得ない。が、王政を行ふとしても、当面の難局を切り抜けるには、英雄の出現を待つばかりである。その英雄も現代では、同時に又利害の錯綜した国際関係に処さなければならぬ。して見れば英雄の出現を待つのは、奇蹟の出現を待つものである。

そんな話をしてゐる内に、私が巻煙草を銜へると、氏はすぐに立上つて、燐寸の火をそれへ移してくれた。私は大いに恐縮しながら、どうも客を遇する事は、隣国の君子に比べると、日本人が一番拙らしいと思つた。

紅茶の御馳走になつた後、我我は氏に案内されて、家の後にある広庭へ出て見た。庭は綺麗な芝原のまはりに、氏が日本から取り寄せた桜や、幹の白い松が植わつてゐる。その向うにももう一つ、同じやうな鼠色の三階建があると思つたら、それは近頃建てたとか云ふ、鄭垂氏一家の住居だつた。私はこの庭を歩きながら、竹の秋の上に、やつと雲切れのした青空を眺めた。さうしてもう一度、これならば私も清貧に処したいと思つた。

此原稿を書いて居る時、丁度表具屋から私の所へ、一本の軸が届いて来た。軸には二度目に訪問した時、氏が私に書いてくれた七言絶句を仕立てたのである。「夢奠何如史事強。呉興題識遜元章。延平剣合誇神異。合浦珠還好譲蔵。」――さう云ふ字が飛舞するやうに、墨痕を走らせてゐるのを見ると、氏と相対してゐた何分かは、やはり未に懐しい気がする。私はその何分かの間、独り前朝の遺臣たる名士と相対してゐたのみではない。又実に支那近代の詩宗、海蔵楼詩集の著者の謦咳に接してゐたのである。

十四　罪惡

評判、上海は支那第一の「罪惡の都會」だとか云ふ事です。何しろ各國の人間が、寄り集まつてゐる所ですから、自然さうもなり易いのでせう。私が見聞しただけでも、風儀は確に惡いやうです。たとへば支那の人力車夫が、追剝ぎに早變りをする事なぞは、始終新聞に載つてゐます。又人の話によれば、人力車を走らせてゐる間に、後から帽子を盜まれる事も、此處では家常茶飯事ださうです。その最もひどいのになると、女の耳環を盜む爲に耳を切るのさへあると云ひます。これは或は泥棒と云ふより、Psychopathia sexualis の一種が手傳ふのかも知れません。さう云ふ罪惡では數月前から、蓮英殺しと云ふ事件が、芝居にも小説にも仕組まれてゐます。これは此處では折白黨と云ふ、つまり無賴の少年團の一人が、金剛石の指環を奪ふ爲に、蓮英と云ふ藝者を殺したのです。その又殺し方が、自動車へ乘せて、徐家匯近傍へ連れ出した擧句、絞り殺したと云ふのですから、支那では兎に角前例のない、新機軸を出した犯罪なのでせう。何でも世間の評判では、日本でも度度耳にする通り、探偵物なぞの活動寫眞が、惡影響を與へたのだと云ふ事でした。尤も蓮英と云ふ藝者は、私の見た寫眞によると、義理にも美人とは評されません。

勿論賣婬も盛です。青蓮閣なぞと云ふ茶館へ行けば、彼是薄暮に近い頃から、無數の賣笑婦が集まつてゐます。これを野雞と號しますが、ざつとどれも見た所は、二十歳以上とは思はれません。それが日本人なぞの姿を見ると、「アナタ、アナタ」と云ひながら、一度に周圍へ集まつて來ます。「アナタ」の外にもかう云ふ連中は、「サイゴ、サイゴ」と云ふ事を云ひます。「サイゴ」とは何の意味かと思ふと、これは日本の軍人たちが、日露戰爭に出征中、支那の女をつかまへては、近所の高粱の畑か何かへ、さあ行かうと云つたのが、濫觴だらうと云ふ事です。語原を聞けば落語のやうですが、何にせよ我我日本人には、餘り名譽のある話ではなささうです。それから夜は四馬路あたりに、人力車へ乘つた野雞たちが、必何人もうろついてゐます。この連中は客があると、その客は自分の車に乘せ、自分は歩いて彼等の家へ、つれこむと云ふのが習慣ださうです。彼等はどう云ふ料簡か、大抵眼鏡をかけてゐます。事によると今の支那では、女が眼鏡をかける事は、新流行の一つかも知れません。

鴉片も中中は公然と、何處でも吸つてゐるやうです。私の見に行つた鴉片窟なぞでは、かすかな豆ランプを中にしながら、賣笑婦も一人、客と一しよに、柄の長い煙管を銜へてゐました。その外人の話では、磨鏡黨とか男堂子とか云ふ、たいへんな物もあるやうです。男堂子とは女の爲に、男が媚を賣るのであり、磨鏡黨とは客の爲に、女が猥戯を見せるのださうです。そんな事を聞かされると、往來を通る支那人の中にも、辮髮を下げた Marquis de Sade なぞは何人もゐさうな氣がして來ます。又實際ゐるのでせう。或丁抹人が話したのでは、四川や廣東には六年ゐても、磨鏡の事は聞かなかつたのが、上海では近近三週間の内に、二つも實例が見當つたさうです。

その上この頃ではシベリア邊から、男女とも怪しい西洋人が、大分此處へ來てゐるやうです。私も一度友だちと一しよに、パブリック・ガアドンを歩いてゐた時、身なりの惡い露西亞人に、しつつこく金をねだられました。あれなぞは唯の乞食でせうが、餘り氣味の好いものぢやありません。尤も工部局がやかましい爲か、上海もまづ大體としては、おひおひ風紀が改

まるやうです。現に西洋人の方面でも、エル・ドラドオとかハレルヤとか云ふ、如何はしいカッフェはなくなりました。しかしずつと郊外に近い、デル・モンテと云ふ所には、まだ商賣人が大勢來ます。

…r on satin, and a dance, white wine and gleaming laughter, with two nodding ear-rings ——these are *Lotus*,

これはユニイス・ティッチェンズが、上海の妓ロオタスを歌つた詩の一節です。「白葡萄酒と輝かしい笑ひと」——それは一ロオタスばかりぢやない、デル・モンテの卓に倚りながら、印度人を交へたオオケストラの音に、耳を貸してゐる女たちは、畢竟この外に出ないのです。以上。

十五　南國の美人（上）

上海では美人を大勢見た。見たのは如何なる因縁か、何時も小有天と云ふ酒樓だつた。此處は近年物故した清道人李瑞清が、贔屓にしてゐた家ださうである。「道道非常道、天天小有天」——さう云ふ洒落さへあると云ふ事だから、その贔屓も一方ならず、御念が入つてゐるのに違ひない。尤もこの有名な文人は、一度に蟹を七十匹、ぺろりと平けてしまふ位、非凡な胃袋を持つてゐたさうである。

一體上海の料理屋は、餘り居心の好いものぢやない。部屋毎の境は小有天でも、無風流を極めた板壁である。その上卓子に並ぶ器物に、綺麗事が看板の一品香でも、日本の洋食屋と選ぶ所はない。その外雅敍園でも、杏花樓でも、乃至興華川菜館でも、味覺以外の感覺は、まあ滿足させられるよりも、ショックを受けるやうな所ばかりである。殊に一度波多君が、雅敍園を御馳走してくれた時には、給仕に便所は何處だと訊いたら、料理場の流しへしろと云ふ。實際又其處には私よりも先に、油じみた庖丁が一人、ちやんと先例を示してゐる。あれには少からず辟易した。

その代り料理は日本よりも旨い。聊か通らしい顏をすれば、私の行つた上海の御茶屋は、たとへば瑞記とか厚德福とか云ふ、北京の御茶屋より劣つてゐる。が、それにも關らず、東京の支那料理に比べれば、小有天なぞでも確に旨い。しかも値段の安い事は、ざつと日本の五分の一である。

大分話が横道に外れたが、私が大勢美人を見たのは、神州日報の社長余洵氏と、食事を共にした時に勝るものはない。此も前に云つた通り、小有天の樓上にゐた時である。小有天は何しろ上海でも、夜は殊に賑かな三馬路の往來に面してゐるから、欄干の外の車馬の響は、殆一分も止む事はない。樓上では勿論談笑の聲や、唄に合せる胡弓の音が、しつきりなしに湧き返つてゐる。私はさう云ふ騷ぎの中に、玫瑰の茶を啜りながら、余君穀民が局票の上へ、健筆を揮ふのを眺めた時は、何だか御茶屋に來てゐると云ふより、郵便局の腰掛の上にでも、待たされてゐるやうな忙しさを感じた。

局票は洋紙にうねうねと、「叫、連至三馬路大舞臺東首小有天閩菜館、座侍酒勿延」と赤刷の文字をうねらせてゐる。確か雅敍園の局票には隅に毋忘國恥と、排日の氣焔を擧げてゐたが、此處のには幸ひそんな句は見えない。（局票とは大阪の逢ひ状のやうに、校書を呼びにやる用箋である。）余氏はその一枚の上に、私の姓を書いてから、梅逢春と云ふ三字を加へた。

「これがあの林黛玉です。もう行年五十八ですがね。最近二十年間の政局の秘密を知つてゐるのは、大總統の徐世昌を除けば、この人一人だとか云ふ事です。あなたが呼ぶ事にして置きますから、參考の爲に御覽なさい。」

余氏はにやにや笑ひながら、次の局票を書き

樂天が、青衫を沾した琵琶の曲は、斯の如きものがあつたかも知れない。時調がすむと、萍郷がうたふ。萍郷がすむと、――村田君が突然立ち上りながら、「八月十五、月光明」と、西皮調の武家坡の唄をうたひ始めたのには一驚した。尤もこの位器用でなければ、君程複雜な支那生活の表裏に通曉する事は出來ないかも知れない。

　林黛玉の梅逢春がやつと一座に加はつたのは、もう食卓の鱶の鰭の湯が、荒らされてしまつた後だつた。彼女は私の想像よりも、餘程娼婦の型に近い、まるまると肥つた女である。顏も今では格段に、美しい器量とは思はれない。頰紅や黛を粧つてゐても、往年の麗色を思はせるのは、細い眼の中に漂つた、さすがにあでやかな光だけである。しかし彼女の年齡を思ふと、――これが行年五十八歲とは、どう考へても譃のやうな氣がする。まづ一見した所は、精精四十としか思はれない。殊に手なぞは子供のやうに、指のつけ根の關節が、ふつくりした甲にくぼんでゐる。なりは銀の緣をとつた、蘭花の黑緞子の衣裳に同じ鞘形の褲子だつた。それが耳環にも腕環にも、胸に下げた牌にも、べた一面に金銀の臺へ、翡翠と金剛石とを嵌めこんである。中でも指環の金剛石なぞは、雀の卵位の大きさがあつた。これはこんな大通りの料理屋に見るべき姿ぢやない。罪惡と豪奢とが入り交つた、たとへば「天鵞絨の夢」のやうな、谷崎潤一郞氏の小說中に、髣髴さるべき姿である。

　しかしいくら年はとつても、林黛玉は畢に林黛玉である。彼女が如何に才氣があるか、それは彼女の話振りでも、すぐに想像が出來さうだつた。のみならず彼女が何分かの後、胡弓と笛とに合はせながら、秦腔の唄をうたひ出した時には、その聲と共に迸る力も、確に群妓を壓してゐた。

十七　南國の美人(下)

「どうです、林黛玉は？」

　彼女が席を去つた後、余氏は私にかう尋ねた。

「女傑ですね。第一若いのに驚きました。」

「あの人は何でも若い時分に眞珠の粉末を吞んでゐたさうです。眞珠は不老の藥ですからね。あの人は鴉片を吞まないと、もつと若くも見える人ですよ。」

　その時はもう林黛玉の跡に、新に來た藝者が坐つてゐた。これは色の白い、小造りな、御孃樣じみた美人である。寶盡しの模樣を繡つた、薄紫の緞子の衣裳に、水晶の耳環を下げてゐるのも、一層この妓の品の好さを助けてゐるのに違ひない。早速名前を尋ねて見たら、花寶玉と云ふ返事があつた。花寶玉、――この美人がこの名を發音するのは宛然たる鳩の啼き聲である。私は卷煙草をとつてやりながら、「布穀催春種」と云ふ杜少陵の詩を思ひ出した。

「芥川さん。」

　余洵氏は老酒を勸めながら、言ひ憎さうに私の名を呼んだ。

「どうです、支那の女は？　好きですか？」

「何處の女も好きですが、――支那の女も綺麗ですね。」

「何處が好いと思ひますか？」

「さうですね。一番美しいのは耳かと思ひます。」

　實際私は支那人の耳に、少からず敬意を拂つてゐた。日本の女は其處に來ると、到底支那人の敵ではない。日本人の耳には平すぎる上に、肉の厚いのが澤山ある。中には耳と呼ぶよりも、如何なる因果か顏に生えた、木の子のやうなのも少くない。按ずるにこれは、深海の魚が、盲目になつたのと同じ事である。日本人の

耳はそれから、油を塗つた髪の後に、ずつと姿を隱して來た。が、支那の女の耳は、何時も春風に吹かれて來たばかりか、御丁寧にも寶石を嵌めた耳環なぞさへぶら下げてゐる。その爲に日本の女の耳は、今日のやうに墮落したが、支那のは自然と手入れの屆いた、美しい耳になつたらしい。現にこの花寶玉を見ても、丁度小さい貝殻のやうな、世にも愛すべき耳をしてゐる。西廂記の中の鶯鶯が、「釵嚲玉斜橫。髻偏雲亂挽。日高猶自不明眸。暢好是懶懶。半晌擡身。幾回搔耳。一聲長嘆。」と云ふのも、きつとかう云ふ耳だつたのに相違ない。笠翁は昔詳細に、支那の女の美を說いたが、（偶集卷之三、聲容部）未嘗この耳には、一言も述べる所がなかつた。この點では偉大な十種曲の作者も、當に芥川龍之介に、發見の功を讓るべきである。

耳の說を辯じた後、私は他の三君と一しよに砂糖のはひつた粥を食つた。其から妓館を見物しに、賑かな三馬路の往來へ出た。

妓館は大抵横へ切れた、石疊みの露地の兩側にある。余氏は我我を案内しながら、軒燈の名前を讀んで行つたが、やがて或家の前へ來ると、ずつと中へはひつて行つた。はひつた所には不景氣な土間に、身なりの惡さうな支那人どもが、飯を食つたり何かしてゐる。これが藝者のゐる家とは、前以て聞いてゐない限り、誰でも嘘としか思はれまい。しかしすぐに階段を上ると、小ぢんまりした支那のサロンに、明るい電燈が輝いてゐる。紫檀の椅子を並べたり、大きな鏡を立てたりした所は、さすがに一流の妓館らしい。青い紙を貼つた壁にも、硝子を入れた南畫の額が、何枚もずらりと懸つてゐる。

「支那の藝者の檀那になるのも、容易な事ぢやありませんね。何しろこんな家具類さへ、みんな買つてやるのですから。」

余氏は我我と茶を飲みながら、いろいろ嫖界の說明をした。

「まあ今夜來た藝者なぞだと、どうしても檀那になるまでに、五百圓位は入るでせう。」

その間にさつきの花寶玉が、ちよいと次の間から顏を出した。支那の藝者は座敷へ出ても、五分ばかりすると歸つてしまふ。小有天にゐた花寶玉が、もう此處にゐるのも不思議はない。のみならず支那では檀那なるものが、――後は井上紅梅氏著、支那風俗卷之上、花柳語彙を參照するが好い。

我我はこの人の藝者と一しよに、西瓜の種を撮んだり、卷煙草をふかしたりしながら少時の間無駄話をした。が、その無駄話をしたと云つても、私は勿論口はきかない。余氏が私を指さしながら、冗談のやうな子供の藝者に、「あれは東洋人ぢやないぜ。廣東人だぜ。」とか何とか云ふ。藝者が村田君に、本當かと云ふ。村田君も「さうだ。さうだ。」と云ふ。そんな話を聞きながら、私は獨り漫然と、下らない事を考へてゐた。――日本にトコトンヤレナと云ふ唄がある。あのトンヤレナは事によると、東洋人の訛化かも知れない。……

二十分の後、やや退屈を覺えた私は、部屋の中をあちこち歩いた次手に、そつと次の間を覗いて見た。すると其處の電燈の下には、あの優しい花寶玉が、でつぷり肥つた阿媽と一しよに、晩餐の食卓を圍んでゐた。食卓には皿が一枚しかない。その又一つの皿は菜ばかりである。花寶玉はそれでも熱心に、茶碗と箸とを使つてゐるらしい。私は思はず微笑した。小有天に來てゐた花寶玉は、成程南國の美人かも知れない。しかしこの花寶玉は、――菜根を嚙んでゐる花寶玉は、蕩兒の玩弄に任すべき美人以上の何者かである。私はこの時支那の女に、初めて女らしい親しみを感じた。

十八 李人傑氏

「村田君と共に李人傑氏を訪ふ。李氏は年未二十八歳、信條よりすれば社會主義者、上海に於ける「若き支那」を代表すべき一人なり。途上電車の窓より、青青たる街路の樹、既に夏を迎へたるを見る。天陰、稀に日色あり。風吹けども塵を揚げず。」

これは李氏を訪ねた後、書き留めて置いた手控へである。今手帳をあけて見ると、走り書きにした鉛筆の字が、消えかかつたのも少くない。文章は勿論蕪雜である。が、當時の心もちは、或はその蕪雜な所に、反つてはつきり出てゐるかも知れない。

「一僮あり。直に予等を引いて應接室に到る。長方形の卓一、洋風の椅子二三、卓上に盤あり。陶製の果物を盛る。この梨、この葡萄、この林檎、——この拙き自然の模倣以外に、一も目を慰むべき裝飾なし。然れども室に塵埃を見ず。簡素の氣に滿てるは愉快なり。

「数分の後李人傑氏來る。氏は小づくりの青年なり。やや長き髪、細面。血色は餘り宜しからず。才氣ある眼。小さな手。態度は頗る眞摯なり。その眞摯は同時に又、鋭敏なる神經を思察せしむ。刹那の印象は惡しからず。恰も細且強靭なる時計の彈機に觸れしが如し。卓を隔てて予と相對す。氏は鼠色の大掛兒を著たり。」

李氏は東京の大學にゐたから、日本語は流暢を極めてゐる。殊に面倒な理窟なども、はつきり相手に會得させる事は、私の日本語より上かも知れない。それから手控へには書いてないが、我我の通つた應接室は、二階の梯子が部屋の隅へ、ぢかに根を下した構造だつた。その爲に梯子を下つて來ると、まづ御客には足が見える。李人傑氏の姿にしても、まつさきに見たのは支那靴だつた。私はまだ李氏以外に、如何なる天下の名士と雖も、足からさきへ相見した事はない。

「李氏云ふ。現代の支那は如何にすべきか？この問題を解決するものは、共和にあらず復辟にあらず。這般の政治革命が、支那の改造に無力なるは、過去既に之を證し、現在亦之を證す。然らば吾人の努力すべきは、社會革命の一途あるのみと。これは文化運動を宣傳する『若き支那』の思想家が、いづれも呼號する主張なり。李氏又云ふ。社會革命を齎さんとせば、プロパガンダに依らざるべからず。この故に吾人は著述するなり。且覺醒せる支那の士人は、新しき智識に冷淡ならず。否、智識に餓ゑつつあり。然れどもこの餓を充すべき書籍雜誌に乏しきを如何。予は君に斷言す。刻下の急務は著述にありと。或は李氏の言の如くならん。現代の支那には民意なし。民意なくんば革命生ぜず。況んやその成功をや。李氏又云ふ。種子は手にあり。唯萬里の荒蕪、或は力の及ばざらんを懼る。吾人の肉體、この勞に堪ふるや否や、憂ひなきを得ざる所以なりと。言ひ畢つて眉を顰む。予は李氏に同情したり。李氏又云ふ。近時注目すべきものは、支那銀行團の勢力なり。その背後の勢力は問はず、北京政府が支那銀行團に、左右せられんとする傾向あるは、打消し難き事實なるべし。こは必しも悲しむべきにあらず。何となれば吾人の敵は——吾人の砲火を集中すべき的は、一銀行團に定まればなり。予云ふ。予は支那の藝術に失望したり。予が眼に入れる小說繪畫、共に未だ談ずるに足らず。然れども支那の現狀を見れば、この土に藝術の興隆を期する、期するの寧ろ誤れるに似たり。君に問ふ、プロパガンダの手段以外に、藝術を顧慮する餘裕ありやと。李氏云ふ。無きに近しと。」

私の手控へはこれだけである。が、李氏の話

味を持たずにはゐられないのである。この場合は不快な私憤だけだが、もしこれを大にすれば、愛國的義憤に違ひないぢやないか？

×

何でもXと云ふ日本人があつた。Xは上海に二十年住んでゐた。結婚したのも上海である。子供が出來たのも上海である。金がたまつたのも上海である。その爲かXは上海に熱烈な愛著を持つてゐた。たまに日本から客が來ると、何時も上海の自慢をした。建築、道路、料理、娯樂、——いづれも日本は上海に若かない。上海は西洋も同然である。日本なぞに齷齪してゐるより、一日も早く上海に來給へ。——さう客を促しさへした。そのXが死んだ時、遺言狀を出して見ると、意外な事が書いてあつた。——「骨は如何なる事情ありとも、必日本に埋むべし。……」

私は或日ホテルの窓に、火のついたハヴァナを銜へながら、こんな話を想像した。Xの矛盾は笑ふべきものぢやない。我我はかう云ふ點になると、大抵Xの仲間なのである。

二十　徐家滙

明の萬曆年間。墻外。處處に柳の立木あり。墻の彼方に天主堂の屋根見ゆ。その頂の黄金の十字架、落日の光に輝けり。雲水の僧一人、村の童と共に出で來る。

雲水。徐公の御屋敷はあすこかい？

童。あすこだよ。あすこだけれど——叔父さんはあすこへ行つたつて、御齋の御馳走にはなれないぜ。殿樣は坊さんが大嫌ひだから。——

雲水。よし。よし。そんな事はわかつてゐる。

童。わかつてゐるのなら、行かなければ好いのに。

雲水。（苦笑）お前は中中口が惡いな。私は掛錫を願ひに行くのぢやない。天主教の坊さんと問答をしにやつて來たのだ。

童。さうかい。ぢや勝手におし。御家來たちに打たれても知らないから。——

童走り去る。

雲水。（獨白）あすこに堂の屋根が見えるやうだが、門は何處にあるのかしら。

紅毛の宣教師一人、驢馬に跨りつつ通りかかる。後に僕一人從ひたり。

雲水。もし、もし。

宣教師驢馬を止む。

雲水。（勇猛に）什麼の處より來る？

宣教師。（不審さうに）信者の家に行つたのです。

雲水。黄龍過ぎて後、還つて劍を收得するや否や？

宣教師呆然たり。

雲水。還つて劍を收得するや否や！　道へ。道へ。道はなければ、——

雲水如意を揮ひ、將に宣教師を打たんとす。僕雲水を突き倒す。

僕。氣違ひです。かまはずに御出でなさいまし。

宣教師、可哀さうに。どうも眼の色が妙だと思つた。

宣教師等去る。雲水起き上る。

雲水。忌忌しい外道だな。如意まで折つてしまひ居つた。鉢は何處へ行つたかしら。

墻内よりかすかに讃頌の聲起る。

*　*　*　*

淸の雍正年間。草原。處處に柳の立木あり。その間に荒廢せる禮拜堂見ゆ。村の娘三人、いづれも籃を腕にかけつつ、蓬なぞを摘みつつあり。

甲。雲雀の聲がうるさい位だわね。

草の殻を捨ててゐた。あの公園の花壇には、今でも鬱金香や黄水仙が、電燈の光に咲いてゐるであらうか？　向うへあすこを通り抜けると、庭の広い英吉利領事館や、正金銀行が見える筈である。その横を川伝ひにまつ直行けば、左へ曲る横町に、ライシアム・シアタアも見えるであらう。あの入り口の石段の上には、コミック・オペラの広告板はあつても、もう人出入は跡絶えたかも知れない。其処へ一台の自動車が、まつ直ぐに河岸を走つて来る。薔薇の花、絹、頸飾りの琥珀、――それらがちらりと見えたと思ふと、すぐに眼の前から消えてしまふ。あれはきつとカルトン・カッフェへ、舞踏に行つてゐたのに違ひない。その跡は森とした往来に、誰か小唄をうたひながら、靴音をさせて行くものがある。Chin chin Chin chin――私は暗い黄浦江の水に煙草の吸ひさしを抛りこむと、ゆつくりサロンへ引き返した。

サロンにもやはり人影はない。唯緞通を敷いた床に、鉢物の蘭の葉が光つてゐる。私は長椅子によりかかりながら、漫然と回想に耽り出した。――呉景濂氏に会つた時、氏は大きな一分刈の頭に、紫の膏薬を貼りつけてゐた。さうして其処を気にしながら、「腫物が出来ましてね」――とこぼしてゐた。あの腫物は直つたかしら？――酔漢蹣跚たる四十起氏と、暗い往来を歩いてゐたら、丁度我我の頭の上に、真四角の小窓が一つあつた。窓は雨雲の垂れた空へ、斜に光を射上げてゐた。さうして其処から小鳥のやうに、若い支那の女が一人、目の下の我我を見下してゐる。四十起氏はそれを指さしながら、「あれです。広東妹は。」と教へてくれた。あすこには今夜も不相変、あの女が顔を出してゐるかも知れない。――樹木の多い仏蘭西租界に、軽快な馬車を走らせてゐると、ずつと前方に支那の馭丁が、白馬二頭を引つ張つて行く。その馬の一頭がどう云ふ訳か、突然地面へころがつてしまつた。すると同乗の村田君が、「あれは背中が痒いんだよ。」と、私の疑念を晴らしてくれた。――そんな事を思ひ続けながら、私は煙草の箱を出しに、間着のポケットへ手を入れた。が、つかみ出したものは、黄色い埃及の箱ではない、先夜其処に入れ忘れた、支那の芝居の戯単である。と同時に戯単の中から、何かがほろりと床へ落ちた。何かが、――一瞬間の後私は素枯れた白蘭花を拾ひ上げてゐた。白蘭花はちよいと嗅いで見たが、もう匂さへ残つてゐない。花びらも褐色に変つてゐる。白蘭花、――さう云ふ花売りの声を聞いたのも、何時か追憶に過ぎなくなつた。この花が南国の美人の胸に、匂つてゐるのを眺めたのも、今では夢と同様である。私は手軽な感傷癖に、堕し兼ねない危険を感じながら、素枯れた白蘭花を床へ投げた。さうして巻煙草へ火をつけると、立つ前に小島氏が送つてくれた、メリイ・ストオプスの本を読み始めた。

竹の芽も茜さしたる彼岸かな

金沢

簀むし子や雨にもねまる蝸牛

小穴氏の描ける夏目先生の
カリカテュアに

餅花を今戸の猫にささげばや

寄内

ひたすらに這ふ子おもふや笹ちまき

悼亡

更けまさる火かげやこよひ雛の顔

留別

かげろふや棟も沈める茅の屋根

（澄江堂句集より）

江南游記

前置き

私はつい昨日の朝、本郷臺から切通しへ、ぶらぶら坂を下つて行つた。すると二人の青年紳士が、反對にその坂を登つて來た。私も男の淺間しさに、すれ違ふ相手が女性でないと、滅多に行人には注意しない。が、この時はどう云ふ訣か、まだ五六間距離のある内から、相手の風采に氣をつけてゐた。殊にその一人が、薄青い背廣に、雨外套をひつかけたのには、血色の好い瓜實顔や、細い銀の柄の杖と共に、瀟洒たる趣を感じてゐた。二人は何か話しながら、ゆつくり足を運んで來る。——それが愈すれ違つた時、私の耳は意外にも、卒然曖喲と云ふ間投詞を捉へた。曖喲! 私は心の躍るのを感じた。それは何も彼等二人が、支那人だつたのに驚いたのではない。この偶然耳にした曖喲と云ふ言葉の爲にいろいろな記憶がよみがへつたのである。

私は北京の紫禁城を思つた。洞庭湖に浮んだ君山を思つた。南國の美人の耳を思つた。雲崗や龍門の石佛を思つた。京漢鐵道の南京蟲を思つた。廬山の避暑地、金山寺の塔、蘇小小の墓、秦淮の料理屋、胡適氏、黃鶴樓、大明湖の煙草、梅蘭芳の嫦娥を思つた。同時に又腸胃の病の爲に、三月ばかり中絶してゐた、私の紀行の事をも思つた。

私は彼等を振り返つた。彼等は勿論悠悠と不相變何か話しながら、霜晴れの坂を登つて行つた。しかし私の耳の中には、未に曖喲の聲が殘つてゐる。彼等は何處の下宿から、何處へ出かける途中であらう? 事によると彼等の一人は、「留東外史」の張全のやうに、戸山ケ原の雜木林へ、女學生をつれ出す所かも知れない。さう云へばもう一人の留學生も、同じ小說の王甫察のやうに、馴染の藝者位はありさうである。私はこんな彼等にとつては失禮な想像を逞しくしながら、藍染橋の停留場へ出ると、田端の家へ歸る爲に、動坂行きの電車に乘つた。

處が家へ歸つて見ると、大阪の社から電報が來てゐた。文句は「ゲンコウヲタノミマス」である。私は度度薄田氏に、迷惑をかけるのに恐縮した。しかし正直に白狀すれば、重重恐れ入りながらも、腹の工合が惡かつたり、寢不足が何日も續いたり、感興がなかつたりする所から、ペンを執らない事もないではない。それがこの電報を見た時は、明日にも早速上海游記の續篇を書き出さうと云ふ氣になつた、曖喲! さう云ふ聲が私の耳に、忘れない響を殘したのは、薄田氏の爲にも私の爲にも、意外な仕合せになつた訣である。

私の知つてゐる支那語の數は、やつと二十六しかない。その中の一つが偶然にも、私の耳に止まつたばかりか、兎に角何かを目ざめさせた事は、大袈裟に云へば天惠である。尤も私の惡文の爲に惱まされる讀者の身になれば、天惠より寧ろ天災かも知れない。しかし天災と考へれば、讀者も諦め易さうである。かたがた曖喲の聲を耳にしたのは、御互に感謝して然るべきであらう。これが本文へとりかかる前に、かう云ふ前置きを加へる所以である。

一　車中

杭州行きの汽車へ乘つてゐたら、車掌が切符

を檢べに來た。この車掌はオリイヴ色の洋服に金筋入りの大黑帽をかぶつてゐる。日本の車掌に比べると、何だか敏活な感じがしない。が、勿論さう考へるのは、我我の偏見の祟りである。我我は車掌の風采にさへ、我我の定木を振り廻しやすい。ジョン・ブルは乙に澄まさなければ、紳士でないと思つてゐる。アンクル・サムは金がなければ、紳士でないと思つてゐる。ジャップは、――少くとも紀行文を草する以上、旅愁の涙を落したり、風景の美に見惚れたり、遊子のポオズをつくらなければ、紳士でないと思つてゐる。我我は如何なる場合でも、かう云ふ偏見に捉はれてはならん。――私はこの悠悠とした車掌が、切符を檢べてゐる間に、かう云ふ偏見論を發表した。尤も支那人の車掌を相手に、氣焰を揚げた訣ではない。案內役に同行した、村田烏江君に吹きかけたのである。

汽車の外は何時まで行つても、菜畑かげんげの野ばかりである。その中に時時羊がゐたり、臼挽き小屋があつたりする。と思ふと大きい水牛も、のそのそ田の畔を歩いてゐた。五六日前やはり村田君と、上海の郊外を歩いてゐたら、突然一頭の水牛に路を塞がれた事がある。私は動物園の柵內は知らず、目のあたりこんな怪物に遭遇した事は始めてだから、つい感心した拍子に、ほんの半歩ばかり退却した。すると忽ち村田君に、「臆病だなあ」と輕蔑された。今日は勿論驚嘆はしない。が、ちよいと珍しかつたから、「君、水牛がゐるぜ。」と云はうとしたが、まあ、泰然と默つてゐる事にした。村田君もきつとあの瞬間は、私も中中支那通になつたと、敬服してゐたに相違ない。

汽車は一室八人の、小さい部屋に分かれてゐる。尤もこの車室には、我我二人の外誰もゐない。室のまん中の卓子の上には、土瓶や茶碗が並べてある。其處へ時時青服の給仕が熱いタオルを持つて來てくれる。乘り心は餘り惡い方ぢやない。但し我我が乘つてゐても、この客車は正に一等である。一等と云へば何時か鎌倉から、ちよいと一等へ乘つた所が、勿體なくも或宮樣と、たつた二人ぎりになつたのには、恐懼の至りに堪へなかつたつけ。しかもあの時持つてゐたのは、白切符だつたか赤切符だつたか、其邊も實は慥ぢやない。……

二　車中（承前）

その中に汽車は嘉興を過ぎた。ふと窓の外を覗いて見ると、水に臨んだ家家の間に、高高と反つた石橋がある。水には兩岸の白壁も、はつきり映つてゐるらしい。その上南畫に出て來る船も、二三艘水際に繫いである。私は芽を吹いた柳の向うに、こんな景色を眺めた時、急に支那らしい心もちになつた。

「君、橋がある。」

私は大威張りにかう云つた。橋ならばまさか水牛のやうに、輕蔑されまいと思つたからである。

「うん、橋がある。ああ云ふ橋は好かもんなあ。」

村田君もすぐに贊成した。

しかしその橋が隱れたと思ふと、今度は一面の桑畑の彼方に、廣告だらけの城壁が見えた。古色蒼然たる城壁に、生生しいペンキの廣告をするのは、現代支那の流行である。無敵牌牙粉、嬰孩香烟、――さう云ふ齒磨や煙草の廣告は、沿線到る所の停車場に、殆見えなかつたと云ふ事はない。支那は抑如何なる國から、かう云ふ廣告術を學んで來たか？　その答を與へるものは、此處にも諸方に並び立つた、ライオン齒磨だの仁丹だのの、俗惡を極めた廣告である。日本は實にこの點でも、隣邦の厚誼を盡したものらしい。

汽車の外は不相變、菜畑か、さもなければ、[illegible]野であるが、どうかすると松樹の間に、古塔のあるのが見える事もある。

「君、塔があるぜ。」

村田君は今度は橋の時程、私の興味に應じなかつた。

我我は同文書院にゐた時分、ああ云ふ塔の崩れたやつから、度度頭蓋骨を盗んで來たですよ。」

「盗んで來て何にするのですか？」

「おもちやにし居つたですよ。」

我我は[illegible]を[illegible]りながら、[illegible]味噌の焦げたのは[illegible]の[illegible]だとか、人肉の味は羊肉のやうだとか、奇體な事を話し合つた。汽車の外には何時の間にか、花になつた油菜の上に、赤赤と西日が流れてゐる。

三　杭州の一夜（上）

杭州の停車場へ着いたのは、彼是午後の七時だつた。停車場の柵の外には、薄暗い電燈のともつた下に、稅關の役人が控へてゐる。私はその役人の前へ、旅行の鞄を持つて行つた。鞄の中には手當り次第に、着物だのシャツだのボンボンの袋だの、いろいろな物が詰めこんである。役人はさも悲しさうに、一一シャツを疊み直したり、ボンボンのこぼれたのを拾つたり、鞄の中の整理に着手してくれた。いや、少くともさう見えた程、一通り検査をすませた後は、ちやんと鞄の中が片附いたのである。私は彼が鞄の上へ、白墨の圓を描いてくれた時、「多謝」と支那語の御禮を云つた。が、彼はやはり悲しさうに、又外の鞄を整理しながら、私には眼さへ注がなかつた。

其處にはまだ役人の外にも、宿引きが大勢集まつてゐる。彼等は我我の姿を見ると、口口に何か喚きながら、小さい旗を振り廻したり、色紙の引き札をつきつけたりした。が、我我が泊る筈の新新旅館の旗なるものは、何處を搜しても見當らない。すると圖圖しい宿引きどもは、滔滔と何か饒舌り立てては、我我の鞄へ手をかけようとする。如何に村田君に怒鳴られた所が、少しも辟易する樣子がない。私は勿論この場合も、雀が丘のナポレオンのやうに、悠然と彼等を睥睨してゐた。しかし何分か待たされた後、怪しげな背廣を一著した新新旅館の宿引きが、やつと我我の前に現れた時には、やはり正直な所は嬉しかつた。

我我は宿引きの命令通り、停車場前の人力車に乘つた。車は梶棒を上げたと思ふと、いきなり狹い路へ飛びこんだ。路は殆どまつ暗である。敷石は凸凹を極めてゐるから、車の搖れるのも一通りではない。その中に一度芝居小屋があるのか、騷騷しい銅鑼の音を聞いた事がある。が、其處を通り過ぎた後は、人聲一つ聞えて來ない。唯生暖い夜の町に、我我の車の音ばかりがする。私は葉卷を銜へながら、何時か亞剌比亞夜話じみた、ロマンティックな氣もちを弄び始めた。

その内に路が廣くなると、時時戶口に電燈をともした、大きい白壁の邸宅が見える。――と云つたのでは意を盡さない。始は唯闇の中から、朦朧と白い物が浮き上つて來る。その次にそれが星のない夜空に、はつきり聳え立つた白壁になる。それから壁を切り拔いた、細長い戶口が現れて來る。戶口には赤い標札の上に、電燈の光が當つてゐる。――と思ふと戶口の奧にも、電燈のともつた部屋部屋が見える。聯、瑠璃燈、鉢植ゑの薔薇、どうかすると人の姿も見える。このちらりと眼にはひる、明るい邸宅の內部程、不思議に美しい物は見た事がない。其處には何か私の知らない、綺麗な小說があるやうな氣がする。スマトラの忘れな草、阿片の夢に見る白

孔雀――何かそんな物があるやうな氣がする。古來支那の小說には、深夜路に迷つた孤客が、堂堂たる邸宅に泊めて貰ふ。處が翌朝になつて見ると、大廈高樓と思つたのは、草の茂つた古塚だつたり、山奧の狐の穴だつたりする、――さう云ふ種類の話が多い。私は日本にゐる間、この種類の鬼狐の譚も、机上の空想だと思つてゐた。處が今になつて見ると、それはたとひ空想にしても、支那の都市や田園の夜景に、然るべき根ざしを持つてゐる。夜の底から現れて來る、燈火に滿ちた白壁の邸宅、――その夢のやうな美しさには、古今の小說家も私と同樣、超自然を感じたのに相違ない。さう云へば今見た邸宅の戶口には、隴西の李寓と云ふ標札があつた。事によるとあの家の中には、昔の儘の李太白が、幻の牡丹を眺めながら、玉盞を傾けてゐるかも知れない。私はもし彼に會つたら、話して見たい事が澤山ある。彼は一體太白集中、どの本を正しいとするか？　ジュディト・ゴオティエが飜譯した、佛蘭西語の彼の采蓮の曲には、吹き出してしまふか腹を立てるか？　胡適氏だとか康白情氏だとか、現代の詩人の白話詩には、どう云ふ見解を持つてゐるか？――そんな出たらめを考へてゐる內に、車は忽ち橫町を曲ると、無暗に幅の廣い往來へ出た。

四　杭州の一夜（中）

この往來の兩側には、明るい店店が並んでゐる。が、人通りは疎らだから、少しも陽氣な心もちがしない。寧ろ町幅が廣いだけに、如何にも支那の新開地らしい、妙な寂しさを與へるだけである。

「これが城外の町、――この突き當りが西湖ですよ。」

後の車に乘つた村田君は、かう私に聲をかけた。西湖！　私は往來の外れを眺めた。しかしいくら西湖でも、闇夜に鎖されてゐては仕方がない。唯車上の私の顏には、その遙な闇の中から、涼しい風が流れて來る。私は何だか月島あたりへ、十三夜を見にでも來たやうな氣がした。

車は少時走つた後、とうとう西湖のほとりへ出た。其處には電燈をつけ並べた、大きい旅館が二三軒ある。が、それもさつきの店店のやうに、明るい寂しさを加へるに過ぎない。西湖は薄白い往來の左に、暗い水面を廣げたなり、ひつそりと靜まり返つてゐる。そのだだつ廣い往來にも、我我四人の車の外は、犬の子一つ步いてゐない。私は背になつた旅館の二階に、去來する人影を眺めながら、晚飯だのベッドだの新聞だの、――要するに文明が戀しくなり出した。しかし車屋は不相變、默默と走り續けてゐる。路も行人を絕つた儘、何處まで行つても盡きさうがない。旅館も、――旅館はもうずつと後になつた。今では唯湖の緣に、柳らしい樹ばかり並んでゐる。

「おい、君、新新旅館はまだ遠いのかね？」――

私は村田君を振り返つた。すると村田君の車屋が、咄嗟にその意味を想像したのか、君よりも先に返事をした。

「十里！　十里！」

私は急に悲しい氣がし出した。この上まだ十里も先だとすると、新新旅館に著かない內に、夜が明けてしまふのに相違ない。して見れば今夜は斷食である。私はもう一度村田君へ、我ながら情無い聲をかけた。

「十里とは驚いたな。僕は腹が減つて來たがね。」

「わしも減つた。」

村田君は車上に腕組みをした儘、恬然と支那煙草を銜へてゐた。

——十里位何でもないですよ。支那里數の十里だから、——」

私はやつと安心した。が、忽ち又がつかりした。如何に六町一里だと云つても、十里となれば六十町ある。この空腹を抱へながら、まだ日本の一里以上、闇夜の車に搖られるのは、何としても嬉しい行程ぢやない。私は失望を紛らせる爲に、昔習つた獨逸文法の規則を、一一口の中に繰り返し始めた。

それが名詞から始まつて、強變化動詞に辿りついた時、ふとあたりを透かして見ると、何時か道が狹くなつた上に、樹木なぞも左右に茂つてゐる。殊に不思議に思はれたのは、その樹の間に飛んでゐる、大きい螢の光だつた。螢と云へば俳諧でも、夏の季題ときまつてゐる。が、今はまだ四月だから、それだけでも妙としか思はれない。おまけにその光の輪は、ぼつと明るくなる度に、あたりの闇が深いせゐか、鬼灯程もありさうな氣がする。私はこの青い光に、燐火を見たやうな無氣味さを感じた。と同時にもう一度、ロマンティックな氣もちに涵るやうになつた。しかし肝腎の西湖の夜色は、家の蔭か何かに隱れたらしい。路の左の樹木の向うは、ずつと土塀に變つてゐる。

——此處、日本の[illegible]ですよ、

村田君の聲が聞えた時、車は急に樹樹の中から、なだらかに坂を下り出した。すると、見る見る我我の前へ、薄明るい水面が現れて來た。西湖！ 私は實際この瞬間、如何にも西湖らしい心もちになつた。芒芒と煙つた水の上には、雲の裂けた中空から、幅の狹い月光が流れてゐる。その水を斜に横ぎつたのは、蘇堤か白堤に違ひない。堤の一箇所には三角形に、例の眼鏡橋が盛り上つてゐる。この美しい銀と黒とは、到底日本では見る事が出來ない。私は車の搖れる上に、思はず體をまつ直にした儘、何時までも西湖に見入つてゐた。

五　杭州の一夜(下)

新新旅館へ辿り着いたのは、その後十分とたたない内だつた。此處は新新と號するだけに、兎に角西洋風のホテルである。が、支那人の給仕と一しよに、狹い裏梯子を登りながら、我我の部屋へ行つて見ると、東洋人と見縊つたのか、餘り居心の好い二階ぢやない。第一狹い部屋の中に、寢臺を二臺並べた所は、正に支那の宿屋である。おまけに肝腎の部屋の位置も、丁度ホテルの後の隅だから、坐つた儘西湖を眺める

なぞと云ふ、贅澤な註文は持出せない。しかし車と空腹とロマンティシズムとにくたびれた私は、この部屋の椅子へ腰を下すと、やつと人間らしい心もちになつた。

村田君は早速我我の給仕に、食事の支度を註文した。が、食堂はもう締つたから、西洋料理は出來ないと云ふ。では支那料理と云ふ事になつたが、給仕が持つて來た皿を見るとどうも食ひ殘りか何からしい。何でも偕樂園主人の說によると、全家寶と稱する支那料理は、食ひ殘りの集成だと云ふ事である。私は無氣味になつたから、この幾皿かの支那料理の中、全家寶はないかと尋ねて見た。すると忽ち村田君に、全家寶はこんな物ぢやないですよと、水牛以來の輕蔑をされた。

給仕はこの間も珍しさうに、我我の顏を覗きながら、絶えず小うるさい御饒舌をしてゐる。しかも村田君に飜譯して貰ふと、穴の明いた銀貨を持つてゐたら、一枚くれろと云ふのだつた。ではその銀貨を何にするかと聞けば、チョッキの釦にすると云ふのだから、非凡な思ひつきには違ひない。成程さう云はれて見ると、この給仕のチョッキの釦は、悉穴の明いた銀貨である。村田君はビイルを引掛けながら、日本

へそのチョッキを持つて行けば、きつと五十錢には賣れるぜなぞと、つまらない保證を與へてゐた。

我我は食事をすませた後、下のサロンへ降りて行つた。が、其處には寫眞の額や、安物の家具が並んでゐる外は、一人も客の姿が見えない。唯玄關へ出て見ると、石段の上の卓子のまはりには、ヤンキイの男女が五六人、ぐいぐい酒を煽りながら、大聲に唄をうたつてゐる。殊に禿頭の先生なぞは、女の腰を抱いた儘、唄の音頭をとる拍子に、何度も椅子ごと倒れさうになつた。

玄關の外には門の左右に、玫瑰の棚が出來てゐる。我我はその下に佇みながら、細かい葉の間に簇つた、赤い花を仰いで見た。花は遠い電燈の光に、かすかな匂を放つてゐる。それが何だかつやつやと、濡れてゐると思つたら、何時の間にか暗い空は、糠雨に變つてゐるのだつた。玫瑰、微雨、孤客の心、――此處までは詩になるかも知れない。が、鼻の先の玄關には、醉つ拂ひのヤンキイが騷いでゐる。私はとてもこの分では、「天鵞絨の夢」の作者のやうに、ロマンティックにはなれないと思つた。

其處へ、靜かに門の外から、雨に濡れた轎子が二つ、四人の駕籠舁きに舁かれて來た。それが玄關へ横附けになると、まつさきに轎をくぐり出たのは、品の好い支那服の老人である。その次に玄關へ下り立つたのは、――私は正直に白狀すると、せめては十人並みの器量だと云ひたい。が、實際はどちらかと云へば、寧ろ醜い少女である。しかし青磁色の緞子の衣裳に、耳環の水晶のきらめいてゐるのは、確に風流な心もちがした。少女は老人の指圖通り、出迎へた宿の番頭と一しよに、ホテルの中へはひつてしまふ。老人は後に殘つた儘、丁度來合せた我我の給仕に、轎夫の賃錢を拂はせてゐる。この光景を眺めてゐる内に、もう一度私は變節した。これならば谷崎潤一郎氏のやうに、ロマンティックになり了せる事もどうやら出來さうな氣がしたのである。

しかし結局運命は、私のロマンティシズムに殘酷だつた。この時突然玄關から、ひよろひよろ石段を下りて來たのは、あの禿頭の亞米利加人である。彼は同類に聲をかけられると、妙な手つきをして見せながら、ブラッディ何とか返答をした。上海の異人はヴェリイの代りに、屡恐る可きブラッディを使ふ。これだけでも既に愉快ぢやない。その上彼は危なさうに、我我の側へ立ち止まるが早いか、玄關へ後を向けたなり、傍若無人にも立小便をした。

ロマンティシズムよ、さやうならである。私は陶然たる村田君と、人氣のないサロンへ引き返した。水戸の浪士にも十倍した、攘夷的精神に燃え立ちながら。

六　西湖（一）

ホテルの前の棧橋には、朝日の光に照された、槐の葉の影が動いてゐる。其處に我我を乘せる爲に、畫舫が一艘繋いである。畫舫と云ふと風流らしいが、何處が一體畫舫の畫の字だか、それは未に判然しない。唯白木綿の日除けを張つたり、眞鍮の手すりをつけたりした、平凡極まる小舟である。その畫舫――兎に角畫舫と敎へられたから、今後もやはりさう呼ぶつもりだが、――その畫舫は我我を乘せると、好人物らしい船頭の手に、悠悠と湖水へ漕ぎ出された。

水は思つたより深くはない。萍の漂つた水面から、蓮の芽を出した水底が見える。これは岸に近いせゐかと思つたが、何處まで行つても同じ事らしい。まあ、大體の感じを云ふと、湖水なぞと稱へるよりも、大水の田畑に近い位である。聞けばこの西湖なるものは、自然の儘任

せたが最後、忽ち干上つてしまふから、水を外に出さないやうに、無理な工面がしてあるのだと云ふ。私は舟縁に凭りかかりながら、その淺い水底の土に、村田君の杖を突こんでは、時時藻の間に泳いで來る、鯊のやうな魚を嚇かしたりした。

我我の畫舫の向うには、日本領事館のあたりから、湖の中に浮んだ孤山へ、長い堤が連つてゐる。西湖全圖を按ずると、これは昔白樂天の築いた、白堤なるものに相違ない。尤も石版刷の畫圖を見ると、柳や何かが描いてあるが、重修した時に伐られたのか、今は唯寂しい沙堤である。その堤に橋が二つあつて、孤山に近いのを錦帶橋と云ひ、日本領事館に近いのを斷橋と云ふ。斷橋は西湖十景の中、殘雪の名所になつてゐるから、前人の詩も少くない。現に橋畔の殘雪亭には、清の聖祖の詩碑が建つてゐる。その他楊鐵崖が「段家橋頭猩色酒」と云つたのも、張承吉が「斷橋荒蘚澁」と云つたのも、悉この橋の事である。——と云ふと博學に聞えるが、これは池田桃川氏の「江南の名勝史蹟」に出てゐるのだから、格別自慢にも何にもならない。唯その斷橋は、ははあ、あれが斷橋かと遙かに敬意を表したぎり、とうとう舟を寄せずにしまつた。が、萍の浮んだ水中に、白白と堤の連いてゐるのは、——殊に其處へ近づいた時、白髮を垂れた老人が一人、柳の枝を鞭にしながら、悠悠と馬を歩ませてゐたのは、詩中の景だつたのに違ひない。私は樂天の西湖の詩に「半醉閑行湖岸東。馬鞭敲鐙轡玲瓏。萬株松樹青山上。十里沙堤明月中。」云云とあるのは、たとひ晝夜を異にするにしても、髣髴出來るやうな心もちがした。勿論この詩も斷橋同樣、池田氏の本の孫引きである。

畫舫は錦帶橋をくぐり拔けると、すぐに進路を右に取つた。右は即ち孤山である。これも西湖十景の中の、平湖の秋月と稱するのは、この邊の景色だと教へられたが、晩春の午前では致し方がない。孤山には金持の屋敷らしい、大きいだけに俗惡な、門や白壁が續いてゐる。其處を一しきり通り過ぎた所に、不思議にも品の好い三層樓があつた。水に臨んだ門も好ければ、左右に並んだ石獅も美しい。これは何物の住居か、と思つたら、乾隆帝の行宮の址だと云ふ、評判の高い文瀾閣だつた。此處には金山寺の文宗閣(鎭江)や、大觀堂の文滙閣(揚州)と共に、四庫全書が一部づつ納めてある。おまけに庭も立派だと云ふから、一見の爲岸へ登つたが、どちらも凡人には見せてくれない。我我はやむを得ず岸傳ひに、昔の孤山寺、今の廣化寺を瞥見してから、その先にある俞樓へ行つた。

俞樓は俞曲園の別莊である。規模は如何にもこせついてゐるが、滿更惡い住居でもない。東坡の古址にちなんだとか云ふ、仟坡亭の後なぞも、竹や龍の鬚の茂つた中に、藻の多い古池が一つあるのは、甚閑寂な心もちがした。その池の側を登つて見ると、所謂曲曲廊の盡きる所に、壁へ嵌めこんだ石刻がある。それが曲園の爲に描いた、彭玉麐の梅花の圖——と云ふよりも本郷曙町の、谷崎潤一郎氏の二階に懸つてゐた、凄じい梅花の圖の原物だつた。曲曲廊の上の小軒、——扁額によれば碧霞西舍を見た後、我我はもう一度山の下の、仟坡亭へ下つて來た。亭の壁にはべた一面に、曲園だの朱晦庵だの何紹基だの、岳飛だの、いろいろの石刷がぶら下つてゐる。石刷もかう澤山あると、格別どれも欲しい氣がしない。その正面には額に入れた、鬚の長い曲園の寫眞が、難有さうに飾つてある。私はこの家の主人が、持つて來た、一碗の茶を啜りながら、つらつら曲園の人相を眺めた。章炳麟氏の俞先生傳によると、これはお引きをするのではない。

性不好華色旣喪母妻終身不肉食。」云云とある。成程そんな所も見えないではない。一薩藩東時時至門下此其所短也。——さう云へば多少の俗氣もある。事によると兪曲園は、この俗氣があつたおかげに、から云ふ別莊を拵へてくれる、立派なお弟子たちが出來たのかも知れない。現に一點の俗氣も帶びない、我我なぞは、未に別莊を持つどころか、賣文に露命を繫いでゐる。——私は玫瑰のはひつた茶碗を前に、ぼんやり頰杖をついた儘、ちよいと兪曲先生を輕蔑した。

七　西湖(二)

その次に蘇小小の墓を見た。蘇小小は錢塘の名妓である。何しろ藝者と云ふ代りに、その後は蘇小と稱へる位だから、墓も古來評判が高い。處が今詣でて見ると、この唐代の美人の墓は、瓦葺きの屋根をかけた、漆喰か何か塗つたらしい、詩的でも何でもない土饅頭だつた。殊に墓のあるあたりは、西冷橋の橋普請の爲に、荒され放題荒されてゐたから、愈索漠を極めてゐる。少時愛讀した孫子瀟の詩に、「段家橋外易斜曛。芳草凄迷綠似裙。弔罷岳王來弔汝。勝他多少達官墳。」と云ふのがある。が、現在は何處を見ても、裙に似た草色と云ふ騷ぎぢやない。掘り返された土の上に、傘靄しい日の光が流れてゐる。おまけに西冷橋畔の路には、支那の中學生が二三人、擇日の歌か何かうたつてゐる。私は匆匆村田君と、秋瑾女史の墓を一見した後、水際の蕭舫へ引き返した。

蕭舫は、岳飛の廟へ向ふ爲に、もう一度西湖へ漕ぎ出された。

一岳飛の廟は好いですよ。古色に富んでゐるですからね。

村田君は私を慰めるやうに、曾遊の記憶を話してくれた。が、私は何時の間か、西湖に反感を持ち出してゐた。西湖は思つた程美しくはない。少くとも現在の西湖なるものは、去るに忍びざる底のものぢやない。水の淺い事は前にも云つた。が、その上に西湖の自然は、落慶遊光の諸詩人のやうに、纖細な感じに富み過ぎてゐる。大まかな自然に飽き飽きした、支那の文人墨客には、或は其處が好いのかも知れない。しかし我我日本人は、纖細な自然に慣れてゐるだけ、一應は美しいと考へても、再應は不滿になつてしまふ。が、もしこれだけに止まるとすれば、西湖は兎に角春寒を怯れる、支那美人の觀だけはある筈である。處がその支那美人は、湖岸到る所に建てられた、赤と鼠と二色の、俗惡恐るべき煉瓦建の爲に、垂死の病根を與へられた。いや、獨り西湖ばかりぢやない。この二色の煉瓦建は、殆大きい南京蟲のやうに、古蹟と云はず名勝と云はず江南一帶に蔓つた結果、悉風景を破壞してゐる。私はさつき秋瑾女史の墓前に、やはりこの煉瓦の門を見た時、西湖の爲に不平だつたばかりか、女史の靈の爲にも不平だつた。「秋風秋雨愁殺人」の詩と共に、革命に殉した鑑湖秋女俠の墓門にしては、如何にも氣の毒に思はれたのである。しかもから云ふ西湖の俗化は、益盛になる傾向もないではない。どうも今後十年もたてば、湖岸に並び建つた西洋館の中に、一軒づつヤンキイどもが醉拂つてゐて、その又西洋館の門の前は、一人づつヤンキイが立小便をしてゐる、——と云ふやうな事にもなりさうである。何時か蘇峰先生の「支那漫遊記」を讀んでゐたら、氏は杭州の領事にでもなつて、悠悠と餘生を送る事が出來れば、大幸だとか何とか云ふ事だつた。しかし私は領事どころか、浙江の督軍に任命されても、こんな泥池を見てゐるよりは、日本の東京に住んでゐたい。……

私が西湖を攻撃してゐる内に、畫舫は跨虹橋をくぐりながら、やはり西湖十景の中の、曲院の風荷あたりへさしかかつた。この邊は煉瓦建も見えなければ、白壁を圍んだ柳なぞの中に、まだ桃の花も咲き殘つてゐる。左に見える西堤の木木に、青青と若葉した玉帶橋が、ぼんやり水に映つてゐるのも、南田の畫境に近いかも知れない。私は此處へ船が來た時、村田君の誤解を招かないやうに、私の西湖論へ增補を施した。

「但し西湖はつまらんと云つても、全部つまらん次第ぢやないがね。」

畫舫は曲院の風荷を過ぎると、岳王廟の前へ止まつた。我我は早速舟を跡に、「西湖佳話」以來御馴染の、岳將軍の靈を拜みに出かけた。すると廟は八分ばかり、新しい壁を光らせた儘、泥や砂利の山の中に、改修中の醜さを曝してゐる。勿論村田君を喜ばせた、古めかしい景色なぞは何處にもない。唯燒け跡のやうな境内には、土方や左官ばかりがうろついてゐる。村田君はカメラを出しかけたなり、落膽したやうに足を止めた。

「これはいかん。かうなつてはもう形なしだ。——ぢや墓へ行つて見よう。」

墓は蘇小小の墓のやうに、漆喰を塗つた土饅頭である。尤もこれは名將だけに、蘇家の麗人のより餘程大きい。墓の前には筆太に、宋岳鄂王之墓と書いた、苔痕斑斑たる碑が立つてゐる。後の竹木の荒れたのも、岳飛の子孫でない我我には、詩趣こそ感ずるが、悲しい氣はしない。我我は墓のまはりを歩きながら、聊か懷古めいた心もちになつた。岳王墳上草萋萋——誰かにそんな句もあつたやうな氣がする。が、これは孫引きではないから、誰の詩だつたか判然しない。

八　西　湖（三）

岳飛の墓前には鐵柵の中に、秦檜張俊等の鐵像がある。像の恰好を按ずると、面縛された所に違ひない。何でも此處に詣でるものは、彼等の姦を憎む爲に、一一これらの鐵像へ小便をひつかけて行くさうである。しかし今は仕合せと、どの鐵像も濡れてゐない。唯そのまはりの土の上に、青蠅が何匹も止まつてゐる。それが僅に遠來の私に、不潔な暗示を與へるだけだつた。

古來惡人多しと雖も、秦檜程憎まれたものは滅多にない。上海あたりの往來では確か字では油炸塊とか云ふ、棒のやうな油揚を賣つてゐる。あれも宗方小太郎氏の説によると、秦檜の油揚と云つたつもりだから、油炸檜と云ふのが本名ださうである。一體民衆と云ふものは、單純なものしか理解しない。支那でも關羽とか、岳飛とか、衆望を集めてゐる英雄は、皆單純な人間である。或は單純な人間でないにしても、單純化され易い人間である。この特色を具へてゐない限り、如何に不世出の英雄でも、容易に大向うには持て囃されない。たとへば井伊直弼の銅像が立つには、死後何十年かを要したが、乃木大將が神樣になるには、殆一週間もかゝらなかつたやうなものである。それだけに又敵になると、かう云ふ英雄の敵は憎まれ易い。今秦檜は如何なる惡因緣か、見事にこの貧乏籤を引いた。その結果は御覽の通り、中華民國の十年にさへも、散散な取扱ひを受けてゐる。私もこの新年の「改造」に、「將軍」と云ふ小説を書いた。しかし日本に生れた難有さには、油揚の名目にも遇はなければ、勿論小便もひつかけられない。唯一部分伏せ字になつた上、二度ばかり雜誌の編輯者が、當局に小言を云はれただけである。

次手にどの位秦檜と云へば、憎惡の的になつてゐたか。——その間の消息を語るべきコント

を一つ紹介しよう。これは清人景星杓の「山齋客譚」の中の話である。

＊　　＊　　＊　　＊　　＊

「何年前になりますか？　私が江上の或寺に、讀書かたがた住んでゐた時です。突然隣家の婆さんに、何か鬼物が乘り移りました。」

嚴曉蒼は話し出した。

「婆さんは白眼を吊り上げたなり、一家の男女を睨み廻しては、頻にかう罵るのです。――わが輩は冥道押使だぞ。今秦檜の魂を押しながら、閻王の府へ赴いた還りだが、途中此處を通りかかると、この死損ひの婆あの爲に、汚れ水を着物にかけられた。何とか扱ひをつければよし、さもなければこの婆あは、閻王の御前へ引きずつて行くぞ。……

一家の男女は仰天しました。が、婆さんについたのは、實際冥土の使かどうか、それをまづ確める爲に、いろいろ問答をして見たさうです。すると婆さんは不相變、傲然と正面にかまへながら、何でもはきはき返答をしました。して見れば冥使に相違ない。――かう云ふ事になりましたから、一家の男女はとりあへず、紙錢に火をつけるやら、地に酒を注ぐやら、百方祈願を凝らしました。御承知の通り冥土の下役も、人界の下役と同じやうに、賄賂を使ひさへすれば無事なのです。

「婆さんは小時たつた後、ばつたり其處へ倒れました。が、ぢきに起き上つた時には、もう鬼使も去つたのでせう。唯きよろきよろするばかりだつたのです。鬼に憑かれる、――それは珍しい事でもありますまい。が、婆さんに乘り移つた鬼は、一家の男女の問を受けると、こんな幽冥の事も話したさうです。

「問。――秦檜は一體どうなりましたか？　御差支なければ御敎へ下さい。

「答。――秦檜も今は輪廻の果に、金華の女に生れてゐる。それが今度大膽にも、謀夫の罪を犯したから、磔の刑に處せられたのだ。

「問。――しかし秦檜は宋の人ではありませんか？　金元明の三朝を閲した後、やつと罪を正されると云ふのは、遲過ぎるやうに思ひますが。

「答。――檜賊は、恣に和議を唱へ、妄に忠良を屠戮した。兇惡も亦甚しい。天曹はその罪を憎む餘り、磔刑三十六度、斬首の刑三十二度の判決を與へた。合計六十八度の刑は、さう手輕にすむものではない。

「まあ、かう云ふ調子なのです。秦檜の罪は憎むべしとは云へ、氣の毒なものではありませんか？」

嚴曉蒼は嚴瀾庭先生の曾孫である。決して譃をつくやうな人ではない。

九　西湖（四）

岳王廟に詣でた後、我我は又畫舫を浮べながら、孤山の東岸へ返つて來た。其處には槐や梧桐の蔭に、樓外樓の旗を出した飯館がある。「讀賣新聞」に出た紀行によると、武林無想庵氏の新夫妻は、この樓外樓で食事をしたらしい。我我も船頭の勸め通り、この店の前の槐の下に、支那の晝飯を食ふ事にした。が、私の前に坐つてゐるのは、押川春浪の冒險小說を愛讀した結果、中學時代に家を拔け出して、何とかと云ふ軍艦の給仕になつて、八月十日の旅順の海戰に、砲火の下をくぐつて來たとか云ふ、[illegible]骨稜稜とした村田君である。私は料理を待ちながら、村田君には內證だつたが、ひそかに無想庵氏を羨望した。

我我の卓子は前にも云つた通り、枝をさし交した槐の下にある。前にはぢき足もとに、西湖の水が光つてゐる。その水が絕えずゆらめいては、岸を築いだ石の間に、音を立ててゐるのも

寂しい水面には古風の支那人が三人、一人は毛を抜いた鶏を洗ひ、一人は青布子の洗濯をし、一人はやや離れた柳の根がたに、悠悠と釣竿をかまへてゐる。——と思ふとこの男は、急に釣竿を高くあげた。釣の先には鮒が一匹、ぴんぴん空中に跳ね返つてゐる。——かう云ふ光景は春光の中に、頗長閑な感じを與へた。しかも彼等の向うには、渺渺と西湖が開いてゐる。私は俄に、洋館、赤煉瓦を忘れ、ヤンキイを忘れ、この平和な眼前の景色に、小説めいた気もちを起す事が出來た。——石碣村の柳の梢には、暮春の日影が當つてゐる。阮小二はその根がたに坐つた儘、さつきから魚釣りに餘念がない。阮小五は鶏を洗つてしまふと、庖丁をとりに家の中へはひつた。鬢には石榴の花を插し、胸には青き豹を刺した、あの愛すべき阮小七は、未に古布子を洗つてゐる。其處へのそのそ歩み寄つたのは、——智多星吳用でも何でもない。大きい籃を腕にかけた、甚散文的な駄菓子賣である。彼は我我の側へ來ると、キャラメルか何か買つてくれろと云ふ。かうなつてはもうおしまひである。私は水滸傳の世界から、鞠のやうに躍り出した。天罡地煞百八人の中にも、キャラメルを賣る豪傑は一人もゐない。のみならず今は湖水の上にも、まつ白に塗つたボオトが一艘、日本人の女學生に漕がれながら、湖心亭の方へ進んでゐる！

十分の後、我我は老酒を吸つたり、生姜煮の鯉を突ついたりしてゐた。すると其處へ又畫舫が一艘、槐の蔭に横づけになつた。岸へ登つた客を見れば、男が一人、女が二人、男女いづれとも判然しない、小さい赤ん坊が一人である。女の一人は身なりを見ると、乳母か下女の類らしい。男は金縁の眼鏡をかけた、如何にも不思議な因縁だが、無想庵氏に似た大男である。跡に殘つた二人の女は、きつと姉妹に違ひない。それが二人共同じやうに、桃色と藍と縞になつた、セル地の衣裳を一著してゐる。器量も昨夜見た少女よりは、少くとも二割方美しい。私は箸を動かしながら、時時彼等へ眼をやつた。彼等は隣の卓子に、料理の來るのを待つてゐる。その中でも二人の姉妹だけは、何かひそひそ話しながら、我我へ流眄を送つたりした。尤もこれは懺悔に云ふと、食事中の私を映すとか云つて、村田君がカメラをいじつてゐる。其處が御目にとまつたのだから、餘り自慢にもならないかも知れない。

——君、あの姉さんの方は幾歳だと思ふ？——

——二十位さ。——

——僕にはどうもわからない。支那の女は三十を越さない限り、どれも皆御嬢さんに見える。——

そんな話をしてゐる内に、彼等も食事にとりかかつた。青青と枝垂れた槐の下に、このハイカラな支那人の家族が、文字通り嬉嬉と飯を食ふ所は、見てゐるだけでも面白い。私は葉巻へ火をつけながら、飽かずに彼等を眺めてゐた。斷橋、孤山、雷峰塔、——それ等の美を談ずる事は、蘇峰先生に一任しても好い。私には明媚な山水よりも、やはり人間を見てゐる方が、どの位愉快だか知れないのである。

しかし何時までも彼等の食事に、敬意を拂つてゐる訳にも行かない。我我は勘定を拂つた後、三潭の印月へ出かける爲に、早速畫舫の客になつた。三潭の印月は孤山から見ると、丁度向う岸に近い島のほとりにある。島の名は何と云ふのだか、これは西湖全圖にも池田氏の案内記にも記してない。唯この島の近所には、東坡が杭州の守だつた時、みをつくしの爲に建てたと云ふ、石塔が三つ殘つてゐる。その石塔が月明の夜には、水面に三つの影を落す、——と云ふ事だけは確である。舟は可也長い間、靜かな

湖水を漕ぎ續けてから、やつと柳と蘆との深い、退省庵前の棧橋に著いた。

十　西湖（五）

棧橋を上ると門がある。門の中には水の澄んだ池に、支那の八つ橋がかかつてゐる。兪樓の廊が曲曲廊なら、これは曲曲橋だと評しても好い。その橋の處處に、氣の利いた亭が出來てゐる。それを向うへ渡り切ると、眩い西湖の水の上に、三つの石塔のあるのが見えた。梵字を刻んだ丸石に、笠を著せた石塔だから、石燈籠と大した違ひはない。我我は其處の亭の中に、この石塔を眺めながら、支那の卷煙草を二本吸つた。それから、——露西亜のソヴィエット政府の話はしたが、蘇東坡の話はしなかつたやうである。

八つ橋をもとへ渡つて來ると、若い四五人の支那人に遇つた。彼等は皆めかした上に、胡弓や笛を携へてゐる。何でも長安の公子とか號したのは、かういふ連中だつたのに違ひない。水色や緑の太掛兒、指環にきらめいたいろいろの寶石、——私は彼等とすれ違ひながら、一一その容子を物色した。すると最後に通りすがつた男は、殆小宮豐隆氏と、寸分も違はない顔をしてゐた。その後京漢鐵道の列車ボオイにも、宇野浩二にそつくりの男がゐたし、北京の芝居の出方にも、南部修太郎に似た男がゐた所を見ると、一體日本の文學者には、支那人に似たのが多いのかも知れない。しかしこの時はまだ始めだつたから、他人の空似とは云ふものの、きつと小宮氏の先祖の一人は——なぞと、失禮な事も想像した。

——こんな事を書いてゐると、至極天下泰平だが、私は現在床の上に、八度六分の熱を出してゐる。頭も勿論ふらふらすれば、喉も痛んで仕方がない。が、私の枕もとには、二通の電報がひろげてある。要するに原稿の催促である。文面はどちらも大差はない。醫者は安靜に寝てゐろと云ふ。友だちは壯だなぞと冷かしもする。しかし前後の行きがかり上、愈高熱にでもならない限り、兎に角紀行を續けなければならぬ。以下何回かの江南游記は、かう云ふ事情の下に書かれるのである。芥川龍之介と云ひさへすれば、閑人のやうに思つてゐる讀者は、速に謬見を改めるが好い。——

我我は退省庵を一見した後、さつきの棧橋へ歸つて來た。棧橋には支那人の爺さんが一人、魚籃を前に坐りながら、畫舫の船頭と話してゐる。その魚籃を覗いて見たら、蛇が一ぱいはひつてゐた。聞けば日本の放し鰻同樣、この爺さんは錢を貰ふと、一匹づつ蛇を放すのだと云ふ。如何に功徳になると云つても、わざわざ蛇を逃がす爲に、金を出す日本人は一人もゐまい。

畫舫は又我我を乘せると、島の岸に沿ひながら、雷峰塔の方へ進んで行つた。岸には蘆の茂つた中に、河柳が何本も戰いでゐる。その水面へ這つた枝に、何か蠢いてゐると思つたら、それは皆大きい泥龜だつた。いや、龜ばかりなら驚きはしない。ちよいと上の枝の股には、代赭色に脂切つた蛇が一匹、半身は柳に卷きついたなり、半身は空中にのたくつてゐる。私は背中が痒いやうな氣がした。勿論さう云ふ心もちは、愉快なものでも何でもない。

その内に島の角を繞ると、水を隔てた新緑の岸には、突兀と雷峰塔の姿が見えた。まづ目前に仰いだ感じは、花屋敷の近處に佇んだ儘、十二階に對したのと選ぶ所はない。唯この塔は赤煉瓦の壁へ、一面に蔦蘿をからませたばかりか、雜木なぞも頂には靡かせてゐる。それが日の光に煙りながら、幻のやうに聳え立つた所は何と云つても雄大である。赤煉瓦もかうな

たのに違ひない。林逋七世の孫、洪の著した「山家清事」によると、洪の隠遁生活は「舎三寢一讃書一治藥一。後舎二、一以儲酒漿、列農具山具一安僕役庖廚、稱是。童一婢一園丁二犬十二足驢四蹄牛四角」だつたと云ふ。和靖先生も似たやうなものだつたとすれば、月五十圓の借家にゐるよりは、餘程贅沢だつたと云はなければならぬ。私にしても西湖あたりへ、母屋が一軒に物置が一軒――書齋、寢室、女中部屋等、すつかり揃つたのを建てて貰つた上、書生一人・女中一人、下男二人使つて好ければ、林處士の眞似などはむづかしくもない。水邊の梅花に鶴を舞はせるのも、鶴さへ承知すれば譯無しである。しかし私はさうなつても、「犬十二足驢四蹄牛四角」は使ひ道がない。これはそつくり君に上げるから、どうとも勝手にしてくれ給へ。――私は放鶴亭に一服をすませた後、岸の畫舫へ歸りながら、こんな理窟を發表した。岸には柳絮の飛び交ふ間に、白い着物へ黒いスカアトをはいた、支那の女學生が二三十人、ぞろぞろ西冷橋の方へ歩いてゐる。

十二 靈隱寺

私は薄汚い新新旅館の二階に、何枚かの畫はがきを認めてゐる。村田君はもう寢てしまつた。暗い窓硝子の一隅には、不思議な位鮮かに、一匹の守宮がへばり付いてゐる。それを見るのが嫌だから、私は全然わき見をしずに、ずんずん萬年筆を走らせ續ける。……

豐島與志雄に。

今日靈隱寺に出かける途中、清漣寺と云ふ寺を覗いたら、大きい長方形の池の中に、眞鯉、緋鯉が澤山ゐた。此處は玉泉魚躍とか號して、五色の鯉に名高い寺だと云ふ。尤も五色と云つた所が、實際は精精三色しかない。池に臨んだ亭の中には、籐椅子や卓子が並べてある。其處に腰をかけてゐると、坊主が茶や菓子を持つて來てくれる。くれると云つても唯ぢやない。つまり坊主は鯉を養つてゐるやうだが、實は鯉に養はれてゐるのだらう。君は柴又の釣堀に、夜通し絲を垂れる豪傑だから、この寺の鯉も見さへすれば、釣りたくなるのに違ひない。

小穴隆一に。

靈隱寺に詣る。途中小石橋あり。橋下の水佩環を鳴らすが如し。兩岸皆闇竹。雨を帶ぶるの翠色、殆ど人に[illegible]るに似たり。石谷の畫境に近きもの乎。僕大いに詩興を催す。然れども旅嚢[illegible]法なし。終に一詩なき所以。

――――

ない方が仕合せかも知れない。

香取秀眞氏に。

靈隱寺は中中大きい寺です。總門をはひつて少し行つた所に、飛來峯と號する山があります。(實は山と云ふよりも、大岩と云ふ方が好いのですが。)其處の石窟にある佛は、宋元の佛だと云ふ事です。が、僕にはどの佛も、好いのだか惡いのだかわかりません。難有いと思つたのはたつた一つです。尤も石窟の一部分は、連日の雨に水が出てゐましたから、中へはひらずにしまひました。今日も時時雨が來ます。高い杉檜、苔の蒸した石橋、――まあ、この寺の大體の感じは、支那の高野山と思へばよろしい。

小杉未醒氏に。

靈隱寺を見ました。杉の幹に栗鼠の駈け上る所などは、如何にも山寺らしい閑寂なものです。雨天だつたせゐか、赭塗りの大雄寶殿なぞも、甚落著いた氣がしました。賈寶玉がゐたと云ふのは、傳説かも知れないが、一應尤らしい氣がします。此處の空氣には何となく、[illegible]賈寶玉じみた所がある。あなたはさう思ひませんか? もう一つ次手に申し上げたいのは、この寺の五百羅漢です。これも勿論御覽だつた

事と思ひますが、少くとも二百倍位は、殆あなたと瓜二つです。冗談でも何でもない、實際あなたにそつくりです。聞けばこの五百羅漢の中には、マルコ・ポオロの像があるさうですが、まさかあなたの前生の魂はマルコ・ポオロだつた譯でもないでせう。が、僕は萬里の異域に、あなたと相見する事が出來たさうな、愉快な心もちになりました。

佐佐木茂索に。

曾て靈隱寺に詣りし歸途、鳳林寺・[illegible]寺を訪ふ。鳥窠禪師のゐたる寺なり。寺は殆ど見るに足らず。唯[illegible]ならぬ何かありしならん、鼠色の袈裟に海老茶の袈裟かけし坊主、何人も經を讀みながら、寺の廊下を歩みゐたり。白樂天、鳥窠に問ふ、如何か是佛法の大意。鳥窠答へて曰、諸惡莫作、衆善奉行。樂天又云ふ、三尺の童子も之を知れり。鳥窠笑つて曰、三尺の童子も之を知れど、八十の老翁も行ひ難し。樂天即ち服すと。から手輕く服された日には、鳥窠禪師も氣味が惡かつたらう。寺門の前に支那の子供大勢あり。[illegible]の花を持つて遊ぶ。西湖夕陽愛すべし。

手紙を書いてしまつたら、幸ひ守宮も見えなくなつてゐた。明日は杭州を去る豫定である。湧金門、[illegible]堂、——そんな物を見る暇はないかも知れない。私は多少の寂しさを感じながら、シャツ一枚になつた後、ベッドの毛布へもぐりこまうとした。が、思はず飛びのきながら、「こん畜生」と大きい聲を出した。白いベッドの枕の上には、碁石程の蜘蛛がぢつとしてゐる！

これだけでも西湖は碌な所ぢやない。

十三 蘇州城内（上）

驢馬は私を乘せるが早いか、一目散に駈け出した。場所は蘇州の城内である。狹い往來の両側には、例の通り招牌が下つてゐる。それだけでも好い加減せせこましい所へ、驢馬も通る、轎子も通る、人通りも勿論少くはない、——と云ふ次第だつたから、私は手綱を引張つたなり、一時は思はず眼をつぶつた。これは臆病でも何でもない。あの驢馬に跨つた儘、支那の敷石道を駈けて行くのは、容易ならない冒險である。その危なさを經驗しない讀者は、罰金をとられるのは覺悟の上、東京ならば淺草の仲店、大阪ならば心齋橋通りへ、全速力の自轉車を驅つて見るが好い。

私は島津四十起氏と、今し方蘇州へ來たばかりである。本來ならば午前中に、上海を立つつもりだつたが、つい朝寢坊をしたものだから、豫定の汽車に間に合はなかつた。——それも一列車乘り遅れたのぢやない。都合三列車乘り遅れたのである。其處へ島田太堂先生なぞは、その度に停車場へ來られたと云ふのだから、今思ひ出しても恐れ入らざるを得ない。しかも私を送る爲に、七絶を一首頂いた事は、重恐縮すべき思ひ出である。……

私の前には意氣揚揚と、島津氏が驢馬を走らせてゐる。尤も島津氏は私のやうに、始めて驢馬に乘つたのぢやない。だから腰の据り方が違ふ。私は島津氏を御手本に、内心は何度も冷や冷やしながら、いろいろ馬術の工夫をした。但しその後落馬したのは、正に御弟子の私ぢやない。御師匠番の島津氏自身である。

狹い往來の左右には、——實は最初の何分かは、何があるのか見えなかつた。が、その何分かが過ぎた後には、經師屋と寶石屋とが何軒もあつた。經師屋の店には山水だの花鳥だの、表裝中の畫が並べてある。寶石屋の店には、翡翠や玉が指の飾りなぞときらめいてゐる。それがどちらも姑蘇城らしい、優美な心もちを起させた。しかしあの優美な心もちも驢馬の背中に躍つてゐないと、もつと嬉しかつたのに相違ない。

實際一度なぞは箔屋の店に、牡丹だの麒麟だのを縫ひとつた、紅い布が壁に吊してある、——それを見ようと思つたら、もう少しで目くらの胡弓弾きと、衝突してしまふ所だつた。
　しかし驢馬を走らせるのも、平な敷石の上ならば、まだしも我慢が出來ない事はない。それが橋を渡るとなると、いづれも例の反り橋だから、上りは尻餅をつきさうになるし、下りも運が惡ければ、驢馬の頭越しにずり落ちかねない。おまけに橋の多い事は、姑蘇三千六百橋、吳門三百九十橋の語が、文字通りほんたうでないにもせよ、滿更嘘ばかりではなささうである。私はやむを得ず橋へかかると、手綱なぞを控へる代りに、驢馬の鞍へしがみついた。それでも橋を渡る時は、汚い白壁の竝んだ間に、細細と蒼い運河の水が、光つてゐるのだけ眼にはひつた。
　そんな道中を續けた後、やつと我我の辿りついたのは、北寺の塔の前である。聞けば蘇州七塔の中、登覽する事の出來るのは、僅にこの塔ばかりだと云ふ。塔の前の草原には、籃を携へた婆さんたちが、二三人摘草に耽つてゐる。この草原は案内記によると、昔の死刑場だと云ふ事だから、草も人血に肥えてゐるのかも知れない。しかし白晝に日の光を浴びた、九層の塔の聳える前に、青服の婆さんが三三五五、靜かに草を摘んでゐるのは、頗悠悠とした眺めである。
　我我は驢馬を飛び下りると、塔の最下層の入り口へ行つた。其處には支那の寺男が一人格子戸の中に控へてゐる。それが二十錢の銀貨を貰つたら、大きい錠を外した上、おはひりなさいと云ふ手眞似をした。塔の二階へ上る所には、埃臭い暗闇の中に、カンテラが一つともつてゐる。が、梯子を上りかけると、もうその光はさして來ない。その上手すりへつかまつたら、この塔へ詣でた善男善女何萬人かの手垢の名殘が、べとり冷たいのには僻易した。しかし二階へ登つてしまへば、四方に口もついてゐるし、もう暗いのに困る事なぞはない。塔の内部は九層とも、皆桃色の壁の間に、金色の佛が安置してある。桃色と金と——かう云ふ色の配合は、妙に肉感的な所があるだけ、如何にも現代の南國らしい。私は何だかこの塔の上には、支那料理でもありさうな心もちがした。
　十分の後、我我は塔の頂上から、蘇州の市街を見下してゐた。市街は黑い瓦屋根の間に、鮮かな白壁を組みこんだなり、思つたより廣廣と廣がつてゐる。その向うに霞を帶びた、高い塔があると思つたら、それは孫權が建てたとか云ふ、名高い瑞光寺の古塔だつた。（勿論今のは重修に重修を重ねた塔である。）町の外はどちらを向いても、水光りと綠との見えない所はない。私は欄干によりかかりながら、塔の下に草を食つてゐる、小さい二頭の驢馬を見下した。驢馬の側には驢馬引きの子供も、二人ながら石に腰かけてゐる。
「おおうい。」
　私は大きい聲を出した。が、彼等はふり向きもしない。——高い塔上に立つてゐる事は、何だか寂しいものである。

十四　蘇州城内（中）

　我我は北寺の塔を見てから、玄妙觀を見物に行つた。玄妙觀はさつき通つた、寶石屋の多い往來から、ちよいと横町をはひつた所にある。觀前の廣場に露店の多い事は、上海の城隍廟と違ひはない。うどん、饅頭、甘蔗の莖、地栗——さう云ふ食物店の間には、玩具屋や雜貨屋も店を出してゐる。人出も勿論非常に多い、が、上海と違ふ事は、これ程ぞろぞろ練つてゐる中に、殆洋服の見えない事である。のみな

にニイチェを聞いて見るが好い。毒藥を用ゐるツアラトストラは、即ちシイザア・ボルヂアである。水滸傳は武松が虎を殺したり、李逵が鉞を振廻したり、燕青が相撲をとつたりするから、萬人に愛讀されるのぢやない。あの中に磅礴した、圖太い豪傑の心もちが、直に讀む者を醉はしめるのである。……

私は又武器の音に目を見張つた。あの二人の豪傑は、私が水滸傳を考へてゐる内に、何時か一人は青竜刀を、一人は幅の廣い刀をふり上げながら、二度目の切り合ひを始めてゐる。——

十五　蘇州城内（下）

孔子廟へ來たのは日暮れ方だつた。疲れた驢馬に跨りながら、棗花の間に草の生えた、廟前の路へ、さしかかると、寂しい路ばたの桑畑の上に、薄白い瑞光寺の廢塔が見える。塔の一層一層に、蔦蘿や草の茂つたのも見える。その空に點點と飛び違ふ、この邊に多い鵲も見える。私は實際この瞬間、蒼茫懷古の意とでも形容したい、哀れにも嬉しい心もちになつた。

この蒼茫懷古の意は、幸ひにずつと裏切られなかつた。門外に驢馬を乗り捨てた後、路も覺束ない草の中を行けば、暗い柏や杉の間に、南京藻の浮んだ池がある。と思ふと池の縁には、赤い總の帽子の兵卒が一人、蘆や蒲を押し分けながら、叉手網に魚を掬つてゐる。此處は明治七年に再建されたとは云ふものの、宋の名臣范仲淹が創めた、江南第一の文廟である。それを思へばこの荒廢は、直に支那の荒廢ではないか？　しかし少くとも遠來の私には、この荒廢があればこそ、懷古の詩興も生ずるのである。私は一體歎けば好いのか、それとも又喜べば好いのか？——　さう云ふ矛盾を感じながら、苔蒸した石橋を渡つた時、私の口には何時の間にか、こんな句がかすかに謡はれてゐた。「休言竟是人家國。我亦書生好感時。」——但しこの句の作者は私ぢやない。北京にゐる今關天彭氏である。

黒い欞門を通り過ぎてから、石獅の間を少し歩むと、何とか云ふ小さい通用門がある。その門を開けて貰ふ爲には、青服の門番の上さんに、二十錢銀貨をやらなければならない。が、その貧しさうな上さんが、痘痕のある十ばかりの女の子と一しよに、案内に立つ所は哀れである。我我は彼等の後から、毒だみの花だけ仄白い、夕濕りの敷石を踏んで行つた。敷石の盡きる所には、戟門と云ふのだらう。大きい門が聳えてゐる。名高い天文圖や支那全圖の石に刻まれたのも此處にあるが、あたりに漂つた薄暗りでは、碑面もはつきりとは見る事が出來ない。唯その門をはひつた所に、太鼓や鐘が並んでゐる。甚しいかな、禮樂の衰へたるや。——今考へると滑稽だが、私はこの埃だらけの、古風な樂器を眺めた時、何だかそんな感慨があつた。

戟門の中の石疊みにも、勿論茫茫と草が伸びてゐる。石疊みの兩側には、昔の文官試驗場だつたと云ふ、廊下同樣の屋根續きの前に、何本も太い銀杏がある。我我は門番の親子と一しよに、その石疊みのつきあたりにある、大成殿の石段を登つた。大成殿は廟の正殿だから、規模も中中雄大である。石段の龍、黄色の壁、群青に白く殿名を書いた、御筆らしい正面の額、——私は殿外を眺めまはした後、薄暗い殿内を覗いて見た。すると高い天井に、雨でも降るのかと思ふ位、蕭蕭たる音が渡つてゐる。同時に何か異樣の臭ひが、ぷんと私の鼻を打つた。

「何です、あれは？」

私は早速退却しながら、島津四十起氏をふり返つた。

「蝙蝠ですよ、この天井に巣を食つてゐる。——」

島津氏はにやにや笑つてゐた。見れば成程敷き瓦の上にも、一面に黒い糞が落ちてゐる。あの羽音を聞いた上、この夥しい糞を見れば、如何に澤山の蝙蝠が、堂内の暗闇に飛んでゐるか、想ふだに餘り好い氣味はしない。私は懷古の詩境から、ゴヤの畫境へつき落された。かうなつては莽蒼どころぢやない、宛然たる怪談の世界である。

「孔子も蝙蝠には閉口でせう。」

「何、蝠と福とは同音ですから、支那人は蝙蝠を喜ぶものです。」

驢背の客となつた後、我我はもう夕靄の下りた、暗い小道を通りながら、こんな事を話し合つた。蝙蝠は日本でも江戸時代には、氣味が惡いと云ふよりも、意氣な物だと思はれたらしい。蝙蝠安の刺青の如きは、確にその證據である。しかし西洋の影響は、何時の間にか陰霞のやうに、地金の江戸を曇らせてしまつた。して見れば今後二十年もすると、「蝙蝠も出て來た濱の夕涼み」の唄には、ボオドレエルの感化があるなぞと、述べ立てる批評家が出るかも知れない。――驢馬はその間も小走りに、頸の鈴を鳴らし鳴らし、新綠の匂の漂つた、人氣のない路を急いでゐる。

十六　天平と靈巖と（上）

天平山白雲寺へ行つて見たら、山に倚つた亭の壁に、排日の落書きが澤山あつた。「諸君儞在快活之時。不可忘了三七二十一條」と云ふのがある。「犬與日奴不得題壁」と云ふのがある。（尤も島津氏は平然と、暦雲溪の俳句を題してゐた。）更に猛烈なやつになると、「莽蕩河山起暮愁　何來不共戴天仇。恨無十萬横磨劍　殺盡倭奴方罷休。」と云ふ名詩がある。何でもこの詩の前書きには、天平山へ詣でる途中、日本人と喧嘩をしたら、多勢に無勢のため負けてしまつた。痛憤に堪へないなどと書いてあつた。聞けば排日の使嗾費は、三十萬圓内外とか云ふ事だが、この位利き目があるとすれば、日本の商品を驅逐する上にも、寧ろ安い廣告費である。私は亭外の若楓が、雨氣に垂れたのを眺めながら、若い顏の男の持つて來る、抹香臭い茶を飲んだり、固い棗の實を噛つたりした。

「天平山は思つたより好い。もう少し綺麗にしてあると猶好いが、――おや、あの山の下の堂の障子は、あれは障子が嵌まつてゐるのですか？」

「いや、貝ですよ。木連れ格子の目へ一枚づつ、障子代りに貼りつけたのです。――天平山は何時か谷崎さんも、書いてゐたぢやありませんか？」

「ええ、蘇州紀行の中に。――尤も天平山の紅葉よりは、途中の運河の方が面白かつたやうです。」

我我は靈巖山へも登る必要上、今日も驢馬に跨つて來たが、それでも初夏の運河に沿うた、姑蘇城外の田舍路は、美しかつたのに相違ない。白い鵞の浮いた運河には、やはり太鼓なりに反り上つた、古い石橋がかかつてゐる。その水にはつきり影を落した、涼しい路ばたの槐や柳、或は青麥の畠の間に、紅い花をつけた玫瑰の藪、――さう云ふ風景の處處に、白壁の農家が何軒も見える。殊に風流に思つたのは、そんな農家を通りすぎる度に窓の中を覗きこむと、上さんだか娘だか、刺繍の針を動かしてゐる、若い女も少くない。生憎空は曇つてゐたが、もし晴れてゐたとすれば、彼等の窓の向うには、靈巖、天平の青山が、描いたやうに見えた事であらう。……

「谷崎さんも乞食に惱まされたやうですね。」

「あれには誰でも惱まされる。――しかし蘇州

の乞食はまだ好いですよ。杭州の靈巖寺と來た日には。――」

私は思はず笑ひ出した。靈巖寺の乞食の非凡さは、日本人には到底想像も出來ない。大袈裟にぼんぼん胸を叩いたり、地びたへ頭を擲け打ちにしたり、足首のない足をさし上げて見せたり、――まづ、乞食の技巧としては、最も進歩した所を見せる。が、我我日本人の眼には、聊藥が利きすぎるから、憐憫の情を催すよりも、餘り仰仰しいのに吹き出してしまふ。あれを思へば蘇州の乞食は、唯泣き聲を出すだけだから、手の內をやるにもやり心地が好い。しかし獅子山の麓か何かの、寂しい村を通つた時、うつかり一錢投げてやつたばかりに、村の子供だの女だのが、いづれも手をさし出しながら、驢馬のまはりを取り卷いたのには、少からず難澁した。如何に柳が垂れてゐたり、女が刺繡をしてゐたりしても、敬服ばかりすべきものぢやない。その村の白壁の一重內には、丁度巢食つた燕のやうに、恐るべき婆婆苦が潛んでゐる。……

「ぢや山の上に登つて見ませうか?」

島津氏は私を促しながら、亭後の山路を登り始めた。油ぎつた若葉の中に、土の赤い山路が、細細と岩を縫つてゐるのは、何だか嬉しいものである。その路を斜に登りつめると、今度は屏風を立てたやうに、巨岩の突き立つた所へ出た。此處が行き止りかと思つたら、岩と岩との迫つた間に、體を橫にしなければ、殆通過も出來ない位、小さい路が走つてゐる。いや、走つてゐるのぢやない。まつ直に天上へ向つてゐるのである。私は岩の下に佇んだ儘、樹の枝や蔦蘿に絡られた、遠い靑空を振り仰いだ。

「卓筆峰とか望湖臺とか云ふのはこの山の上にあるのでせうか?」

「さあ、多分さうでせう。」

「成程、これは登天平路らしい。」

十七　天平と靈巖と（中）

萬笏朝天の名を負うた、山頂の岩むらへ登つた後、又山路を下りて來ると、さつきの亭へ出る前に、橫に切れる廊下が見えた。次手に其處を曲つて見たら、龍の髯や擬寶珠に圍まれた、小さい池が一つある。――その池へ亜鉛の懸け樋から、たらたら水の落ちてゐるのが、名高い吳中第一泉だつた。池のまはりには白雲泉とか、魚樂とか、いろいろの名を彫りつけた上に、御丁寧にもペンキか何かさした、大小の碑が竝んでゐる。あれは吳中第一泉にしては、餘り水が汚いから、唯の泥池と間違はれないやうに、廣告をしたのに違ひない。

しかしその池の前の、見山閣とか號するものは、支那の燈籠がぶら下つてゐたり、新しい絹の布團があつたり、半日位寢ころんでゐるには、誂へ向きらしい所だつた。おまけに窓に倚つて見れば、山藤の靡いた崖の腹に、ずつと竹が群つてゐる。その又遙か山の下に、池の水が光つてゐるのは、乾隆帝が命名した、高義園の林泉であらう。更に上を覗いて見ると、今登つた山頂の一部が、かすかな霧を破つてゐる。私は窓によりかかりながら、私自身南畫か何かの點景人物になつたやうに、ちよいと悠然たる態度を粧つて見た。

「天平地平、人心不平、人心平平、天下泰平。」

「何です、それは?」

「さつきの壁に書いてあつた、排日の落書きの一つですがね。中中口調が好いぢやありませんか?

天平地平、人心不平、……」

天平山一見をすませた後、我我は又驢馬に乘りながら、靈巖山靈巖寺へ志した。靈巖山は傳說にもせよ、西施彈琴の岩もあれば、范蠡の

幽閉された石室もある。西施や范蠡は幼少の時に、呉越軍談を愛讀した以來、未に私の贔屓役者だから、是非さう云ふ古蹟を見て置きたい。――と云ふ心もちも勿論あつたが、實は社命を帶びてゐる以上、いざ紀行を書かされるとなると、英雄や美人に縁のある所は、一つでも餘計に見て置いた方が、萬事に好都合ぢやないかと云ふ、さもしい算段もあつたのである。この算段は上海から、江南一帶につき纏つた上、洞庭湖を渡つても離れなかつた。さもなければ私の旅行は、もつと支那人の生活に觸れた、漢詩や南畫の臭味のない、小説家向きのものになつたのである。が、今は便便と道草などを食つてゐる場合ぢやない。　兎に角靈巖山へ志した。處が十町と來ない内に、何時か道が無くなつてしまつた。あたりには草の深い墓地に、脊の低い灌木が茂つてゐる。可笑しいなと思つてゐると、驢馬を曳いて來た二人の子供も、其處に足を止めたぎり、何か不安さうに饒舌り出した。

「路が分らないのですか？」

私は島津氏に聲をかけた。島津氏は私の鼻のさきに、痩せた驢馬を乘り据ゑた儘、大澤に陷つた項羽のやうに、あたりの景色を見廻してゐる。

「分らないのださうです。――おお、あすこに百姓がゐる。おい、モンモンケ！」

但しこのモンモンケなる言葉は、驢馬曳きの子供に教へられたのである。既に百姓がゐると云ふ以上、これはきつとその百姓に、路を問へと云ふ事に違ひない。私の推察にして誤らなければ、モンは問答の問である。――私はさう思つたから、私について來た驢馬曳きにも、早速同様の命令を下した。

「モンモンケ！　モンモンケ！」

モンモンケは魔術の呪文のやうに、忽ち路をわからせてくれた。驢馬曳きの復命した所によれば、右にまつ直に行きさへすれば、靈巖山の麓へ出るさうである。我我は早速教へられた方へ、驢馬の頭を向け直した。が、又一二町行つたと思ふと、本街道へ來るどころか、寂しい谷合ひへはひつてしまつた。磊磊と横はつた石の間には、細い松ばかり生え伸びてゐる。おまけに水でも出た跡か、その松の根こぎになつたのも見えれば、山腹の土の崩れてゐるのも見える。更に困つた事には、少時谷に沿うて登つて行つたら、とうとう驢馬が動かなくなつた。

「弱つたな。」

私は山を見上げたから、ため息を洩らさずにはゐられなかつた。

「何、かう云ふ事も面白いです。あの山はきつと靈巖山ですから、　さうです、兎に角あの山へ登つて見ませう。」

島津氏は私を勵ますやうに、わざとしか思はれない快活さを見せた。

「驢馬はどうするのです？」

「驢馬は此處に待たして置けばよろしい。」

島津氏は驢馬を乘り下りると、一人の子供と二頭の驢馬とを松の中に殘した儘、猛然と山腹へ登り出した。勿論、登り出したと云つても、路などがついてゐる訳ぢやない、野薔薇や篠を押し分けながら、ひた押しに斜面を押し上るのである。私はもう一人の驢馬曳きと一しよに、負けずに島津氏の跡を追つた。が、病後の事だから、かうなるとさすがに息が切れる。その上十間ばかり登る内に、ぽつりと冷たい物が頰に落ちた。と思ふと、山の木木が、さあつとかすかに騒ぎ始める。雨！――私は體を辷らせないやうに、細い松の木につかまりながら、足もとの谷を見下した。谷の底には驢馬や子供が小さく雨に濡らされてゐる。……

十八　天平と霊巌と（下）

やつと霊巌山へ辿り着いて見たら、苦労して来たのが莫迦莫迦しい程、俗しい禿げ山に過ぎなかつた。第一、西施の弾琴台とか、名高い館娃宮址とか云ふのは、裸の岩が散在した、草も碌にない山頂である。これでは如何に詩人がつても、到底わが李太白のやうに、「宮女如花満春殿」なぞと、懐古の情には沈めさうもない。それに天気でも好かつたなら、遥に太湖の水光か何か、見晴らす事が出来たのだが、生憎今日はどちらを見ても、唯模糊たる雲煙が、立ち迷つてゐるばかりである。私は霊巌寺の荷廊に、蕭蕭たる雨の音を聞きながら、七級の磚塔を仰ぎ見た時、古人の名句を思ふよりも、しみじみ腹の減つた事を感じた。

我我は寺の一室に、ビスケットばかりの昼飯をすませた。が、一応腹は張つても、精力は更に恢復しない。私は埃臭い茶を飲みながら、妙に悲しい心もちがして来た。

「島津さん。この寺の坊主に掛け合つてくれませんか？　白砂糖が少し欲しいのですが、――」

「白砂糖？　白砂糖をどうするのです？」

「舐めるのです。白砂糖がなければ赤砂糖でもよろしい。」

しかし小皿へ山盛り一杯、どす黒い砂糖を舐めた後も、やはり元気にはなれなかつた。雨は中中晴れさうもない。蘇州へは日本里数にしても、四五里の路を隔ててゐる。――そんな事を考へると、愈心もちが沈んでしまふ。私は何だか肋膜炎が、再発しさうな気さへして来た。

この情ない心もちは、霊巌山を下る間にも、だんだん募つて来る一方だつた。風雨は暗い中空から、絶えず我我を襲つて来る。我我は傘を持つてゐたが、さつき驢馬を捨てる時に、二本とも其処に残して来た。路は勿論辷りさうである。時間は彼是三時過ぎになつた。――其処へ、最後の打撃だつたのは、山の麓の村へ来ても、我我の驢馬の姿が見えない。驢馬曳きの子供は大声に、何度も友だちの名を呼んだが、それこそ答へるのは谺だけである。私は吹きかける雨の中に、ずぶ濡れの島津氏へ声をかけた。

「驢馬がゐないとすると、どうしたものでせう？」

「ゐますよ。ゐなければ歩くだけです。」

島津氏はやはり元気だつた。それは私を慰める為に、強て装つたものだつたかも知れない。が、私はその言葉を聞くと、急に癇癪が起り出した。元来癇癪と云ふものは、決して強者の起すものぢやない。この場合も私が腹を立てたのは、全然弱者だつた祟りである。四百余州を縦横した島津氏と、白脈ばかりとつてゐる病後の私と、――困苦欠乏に耐へる上から見れば、私なぞは島津氏の足もとへもよれない。それだけに、平然たる島津氏の言葉は、私の怒火を吹き煽つたのである。私は前後四箇月の旅行中、この時だけ比類ない仏頂面になつた。

その内に驢馬曳きは驢馬を尋ねに、何処か村の外へ行つてしまふ。我我は或農家の戸口に、やつと雨を避けながら、驢馬曳きの帰るのを待ち暮してゐる。古い白壁、石だらけの村道、雨に光つた道ばたの桑の葉、――その外は殆人影さへ見えない。時計を出して見れば、四時になつてゐる。雨、四五里の路、肋膜炎、――私はなほこの上にも、日が暮れる事を懼れながら、風を引かない用心に、絶えず足踏みをする必要があつた。

すると其処へ、この家の主人か、ぢぢむさい支那人が顔を出した。見れば家の内部には、轎子が一台しまつてある。きつと此男の副業は、駕

世界一か何かに違ひない。
「此處から獅子は見へないのですか?」
私は業腹なのを我慢しながら、かう島津氏に尋ねて見た。
「聞いて見ませう。」
しかし島津氏の上海語は、相手の支那人に通ずるにしても、殘念ながら相手の蘇州語は十分島津氏に通じないらしい。島津氏は押問答を重ねた後、とうとう交渉を斷念した。斷念したのはやむを得ない。が、一瞬の後振り向いて見ると、島津氏は私に頓着なく、悠悠と手帳を擴げながら、今日得た俳句を書きつけてゐる。私はこの容子を眺めた時、羅馬の大火を前にした儘、微笑してゐるネロを見たやうに、喧嘩を吹きかけなければすまない氣になつた。
「お互に迷惑しますね、案内者がその土地を知らないと。——」
喧嘩面の私の言葉は、忽ち島津氏にも腹を立てさせた。これは怒るのが當り前である。私は今考へると、あの時島津氏に擲られなかつたのは、不幸中の幸と思はざるを得ない。
「その土地を知らない? 知らない事は前にも申し上げた筈です。」
島津氏は私を睨みつけた。私も足踏みを續けながら、負けずに島津氏を睨み返した。——これは讀者に注意するが、かう云ふ時には威張るにしても、ちやんと直立して威張るべきである。威張る傍、機械的に、行儀の好い足踏みを繰返してゐるのは、少からず威嚴を傷けるらしい。
雨は依然として降りしきつてゐる。驢馬の鈴音は何時になつても、容易に聞えさうなけはひがしない。我我は寂しい桑畑を前に、二人とも、血相を變へながら、ぢつと長い間立ち續けてゐた。

十九　寒山寺と虎邱と

客。蘇州はどうだつたね?

主人。蘇州は好い處だよ。僕に云はせれば江南第一だね。まだあすこは西湖のやうに、ヤンキイ趣味に染んでゐない。それだけでも難有い氣がした。

客。姑蘇城外の寒山寺は?

主人。寒山寺かい? 寒山寺は、——誰でも支那へ行つた連中に聞いて見給へ。きつと皆下らんと云ふから。

客。君もかね?

主人。さうさね。下らんには違ひない。今の寒山寺は明治四十四年に、江蘇の巡撫程德全が、重建したと云ふ事だが、本堂と云はず、鐘樓と云はず、悉紅殼を塗り立てた、俗惡恐るべき建物だから、到底月落ち烏啼くどころの騒ぎぢやない。おまけに寺のある所は、城の西一里ばかりの、楓橋鎭と云ふ支那町だがね。これが又何の特色もない、不潔を極めた門前町と來てゐる。

客。それぢや取り柄がないぢやないか。

主人。まあ、幾分でも取り柄のあるのは、その取り柄のない所だね。何故と云へば、寒山寺は、一番日本人には馴染の深い寺だ。誰でも江南へ遊んだものは、必寒山寺へ見物に出かける。唐詩選を知らない連中でも、張繼の詩だけは知つてゐるからね。何でも程德全が重修したのも、一つには日本人の參詣が多いから、日本に敬意を表する爲に、一肌脱いだのだと云ふ事だ。すると寒山寺を俗惡にしたのは、日本人にも責はあるかも知れない。

客。しかし日本人には氣に入らないのだらう?

主人。さうらしいね。が、程德全の愚を嗤ふ連中でも、西洋人相手の仕事になると、程大人と同じ事をしてゐる。寒山寺はその實物教訓だ

ね。其處に多少興味があるだらう？　殊にあの寺の坊さんは、日本人の顏さへ見ると、早速紙を展げては、「一跨海萬里弔古寺、惟爲鐘聲遠遂君」と、得意さうに惡筆を揮ふ。これは誰でも名を聞いた上、何何大人正とか何とか入れて、一枚一圓に賣らうと云ふのだ。日本人の旅客の面目は、こんな所にも窺はれるぢやないか？　まだその上に面白いのは、張繼の詩を刻んだ石碑が、あの寺には新舊二つある。古い碑の書き手は文徵明、新しい碑の書き手は兪曲園だが、この昔の石碑を見ると、散散に字が缺かれてゐる。これを缺いたのは誰だと云ふと、寒山寺を愛する日本人ださうだ。——まあ、ざつとこんな點では、寒山寺も一見の價値があるね。

客。それぢや國辱を拜見する訣ぢやないか？

主人。さうさね。事によると案外程徳全は、日本人を愚弄する爲に、あんな重修をやつたのかも知れない。たとひ皮肉でないにしても、あらゆる支那旅行記の著者のやうに、程徳全を嗤ふのは殘酷だね。敷島の大和の知事閣下にしても、あの位の英斷に出づるの士は餘りなささうでもないぢやないか？

客。寶帶橋は？

主人。唯長い石橋さ。ちよいとあの不忍の池の觀月橋と云ふ感じだね。尤もあれ程俗な氣はしない。春風春水春草堤——道具立てはちやんと揃つてゐる。

客。虎邱は好い處だらう？

主人。虎邱も荒廢を極めてゐたつけ。あすこは吳王闔閭の墓ださうだが、今日では全然塵塚の山だね。傳說によればあの山の下には、金銀珠玉を細工をした鴨が、三千の寶劍と一しよに埋めてあると云ふ。そんな事だけ聞いてゐる方が、反つて興味が多い位だ。秦の始皇の試劍石、生公の說法を聞いた點頭石、江南の美人眞孃の墓、——いろいろ因緣を承ると、難有い遺蹟が澤山あるが、どれも見てもつまらん物だ。殊に劍池なぞと來た日には、池と云ふよりも水たまりだね。しかも五味捨て場も同じ始末なのだから、王禹の劍池銘にあるやうに、「巖巖虎邱　沈沈劍池、峻不可以仰視、深不可以下窺」の趣は、義理にもあるとは考へられない。唯殘照を漲らした空に、やや傾いた塔を見上げた時は、悲壯に近い心もちがした。この塔もとうに朽廢してゐるから、一層每に草を茂らせてゐる。それに何だか無數の鳥が、盛に啼き聲を飛ばせながら、塔のまはりを繞つてゐたのは、一段と嬉しかつたのに違ひない。僕はその時島津氏に、鳥の名前を尋ねて見たが、確かパクとか云ふ事だつた。パクとはどう云ふ字を書くのか、其處は島津氏も知らないのだがね。君はパクなるものを知らないかい？

客。パクかい？　バクなら夢を食ふ獸だがね。

主人。一體日本の文學者は、動植物の知識に乏しすぎるね。南部修太郎と云ふ男なぞは日比谷公園の蘆を見ても、麥だとばかり思つてゐたのだから。——まあ、そんな事はどうでも好い。塔の外にもう一つ、小吳軒と云ふ建物がある。其處は中中見晴しが好い。暮色に煙つた白壁や新樹、その間を縫つた水路の光、——僕はそんな物を眺めながら、遠い蛙の聲を聞いてゐると、かすかに旅愁を感じたものだ。

二十　蘇州の水

主人。寒山寺だの虎邱だの外にも、蘇州には名高い庭がある。留園だとか、西園だとか。——

客。それも皆つまらないのぢやないか？

主人。まあ、格別敬服もしないね。唯留園の廣いのには、——園その物が廣いのぢやない、

屋根全体の調子の好いのには、奇妙な心もちになつた。つまり白壁の八幡知らずだね。どちらへ行つても同じやうに、廊下や座敷が續いてゐる。庭も大抵同じやうに、竹だの芭蕉だの太湖石だの、似たやうな物があるばかりだから、愈迷子になりかねない。あんな屋敷へ誘拐された日には、ちよいと逃げる訣にも行かないだらう。

客。誰か誘拐されたのかい？

主人。何、された訣ぢやないが、どうもさう云ふ氣がするのだね。今に支那の谷崎潤一郎は、きつと「留園の秘密」とか何とか、そんな名の小説を作るに違ひない。いや、未來は兎も角も、金瓶梅や紅樓夢を讀むには、現在一見の價値があるさうだ。

客。寒山寺、虎邱、寶帶橋、——いづれもつまらないとなつて見ると、蘇州は大抵つまらなささうぢやないか。

主人。そんな所はつまらないがね。蘇州はつまらない所ぢやない。蘇州にはヴェニスのやうに、何よりもまづ水がある。蘇州の水、——さうさう、蘇州の水と云へば、僕は當時手帳の端に、こんな事も書いて置いたつけ。「自然と人生」式の名文だがね。

——橋名を知らず、石欄に倚りつつ河水を見る。日光、微風。水色[illegible]の[illegible]に[illegible]、[illegible]、水上の影[illegible]けるが如し。橋下を過ぐるの[illegible]、まづ[illegible]の[illegible]見え、次に竹を[illegible]し[illegible]見ゆ。[illegible]の[illegible]にあれど、[illegible]に橋下を出づ。[illegible]花[illegible]枝流れ來るあり。[illegible]水色と共に浮かんとす。

——暮歸。寒燈に對す。[illegible]に水[illegible]。夜泊の船、苫篷を洩へるを見る。月明、水靄、兩岸粉壁の影、朦朧として水にあり。時に窓底の人語、燈光の赤きに伴ふを聞く。或は又石橋あり。僧橋上を過ぐるの人、胡弓を弄する事三兩聲。仰いで見ればその人既にあらず。唯橋欄の高きを見るのみ。景情宛として[illegible]芳樓の記を想はしむ。知らず、閶門外宮河の邊、珠簾重重月に垂るる事、薛家の[illegible]樓の如きものありや否や。

——[illegible]寺、兩岸の[illegible]、蒼色[illegible]なるもの少からず。水上に浮ぶ[illegible]、[illegible]の[illegible]係、[illegible]水に及ばんとす。畫とすれば或は[illegible]。實景を見るは惡しからず。舟あり。徐に橋下より來る。載する物を見れば棺なり。船中の一老嫗、線香に火をともしつつ、棺前に手向けんとするを見る。

客。へええ、大いに又感心したものぢやないか？

主人。水路だけは實際美しい。日本にすれば松江だね。しかしあの白壁の影が、黒い川に落ちてゐる所は、松江でもちよいと見られさうもない。その癖水に縁のない事には、とうとう畫舫にも乘らずにしまつた。しかし水には感服しただけで、更に角未練は殘つてゐない。殘念なのは美人を見なかつた事だ。

客。一人も見ない？

主人。一人も見ない。——何でも村田孜郎君の說によると、目をつぶつて摑んでも、蘇州の女ならば別嬪ださうだ。現に支那の藝者の言葉は、皆蘇州語ださうだから、その位の事はあるかも知れない。處が又島津氏の說では、一體蘇州の藝者なるものは、蘇州語に一通り通じた上、上海へ出ようと云ふ候補生か、又は上海へ出ても流行らないので、歸つて來たと云ふ落伍者だから、碌な女はゐないさうだ。成程これも一理窟だね。

客。それで見ずにしまつたのかい？

主人。何、別に理由などはない。唯美人の顔を見るよりは、一時間も餘計に眠りたかつたのさ。何しろあの時分は驢馬へ乘つたおかげに、すつかり尻をすり剝いてゐたから。——

客。意氣地のない男だな。

主人。我ながら意氣地があつたとは思へないよ。

二十一　客棧と酒棧

島津氏が何處か、出て行つた後、私は椅子に腰を下しながら、ゆつくり一本の敷島を喫つた。寢臺が二つ、椅子が二つ、茶道具を載せた卓子が一つ、それから鏡のある洗面臺が一つ、――その外は窓掛も敷物もない。唯白いむき出しの壁に、ペンキ塗りの戸が鎖してある。が、思つたより不潔ぢやない。蚤とり粉を盛に撒いたせゐか、幸ひ南京蟲にも食はれなかつた。この分なら支那宿へ泊るのも、茶代の多寡を心配しながら日本人の旅館に陣取るよりは、遙に氣が利いて居る位である。――私はそんな事を考へながら、硝子窓の外へ眼をやつた。この部屋のあるのは三階だから、窓の外の眺も可也廣い。しかし眼にはひるものは、夕明りの中に黑み渡つた、佗しい瓦屋根ばかりである。何時かジョオンズがさう云つたつけ、最も日本らしい寂しさは、三越の屋上から見下した、限りない瓦屋根に漂つてゐる。何故日本の畫家諸君は。――

私は物音に驚かされた。見ればペンキ塗りの戸口には、不相變青い服を著た、脊の低い婆さんが佇んでゐる。婆さんはにやにや笑ひながら、何か私に話しかけるが、唖の旅行家たる私には、勿論一言も判然しない。私は當惑し切つた儘、やむを得ず顏ばかり眺めてゐた。

すると、開け放した戸の外に、ちらりと花やかな色彩が見えた。水水しい劉海（前髮）、水晶の耳環、最後に緞子らしい薄紫の衣裳――少女は手巾を弄びながら、部屋の中には一瞥も送らず、靜に廊下を通り拔けた。と思ふと又婆さんは、早口に何か饒舌り立てては、得意さうに笑つて見せる。かうなればもう婆さんの來意も、島津氏の通譯を待つ必要はない。私は脊の低い婆さんの肩へ、ちよいと兩手をかけるが早いか、くるりと彼女に廻れ右をさせた。

「不要！」――

其處へ島津氏が歸つて來た。

その晩私は島津氏と一しよに、城外の酒棧へ出かけて行つた。島津氏は老酒に醉つた父の横顏と云ふ、自畫像めいた俳句の作者だから、勿論相當の酒量である。が、私は殆飲めない。それが彼是一時間あまり、酒棧の一隅に坐つてゐたのは、一つには島津氏の德望の力、二つには酒棧に纏綿する、小說めいた氣もちの力である。

居酒屋は都合二軒見たが、便宜上一軒だけ紹介すると、其處は白壁を左右にした、天井の高い店裏である。部屋の突き當りはどう云ふ訣か、荒い格子戸になつてゐたから、夜目にも往來の人通りが見える。机や腰掛けは剝げてゐたか、ため塗りのやうに塗つてあるらしい。私はその机を中に、甘蔗の莖をしやぶりながら、時時島津氏へ御酌をしたりした。

我我の向うには二三人、薄汚い一座が酒を飲んでゐる。その又向うの白壁の際には、殆天井につかへる位、素燒の酒瓶が積み上げてある。何でも老酒の上等なのは、白い瓶に入れると云ふ事だから、この店の入り口の金看板に京莊花雕なぞと書いてあるのはきつと大法螺に違ひない。さう云へば土間に寢てゐる犬も、氣味の惡い程痩せた上に、瘡蓋だらけの頭をしてゐる。往來を通る驢馬の鈴、門附らしい胡弓の音――さう云ふ騷ぎの聞える中に、向うの一座は愉快さうに、何時か拳を打ち始めた。

其處へ、門口にゐる男が一人、汚い籠を肩へ吊りながら、我我の机へ歩み寄つた。籠の中を覗いて見ると、紫がかつた臓腑のやうな物が、

幾つも渾沌と投げこんである。

「何です、これは？」

「豚の胃袋や心臓ですがね、酒の肴には好いものです。」

島津氏は銅貨を二枚出した。

「一つやつて御覧なさい。ちよいと鹽氣がついてゐますから。」

私は小さい新聞紙の切れに、二つ三つ轉がつた臓腑を見ながら、遙に東京醫科大學の解剖學教室を思ひ出した。母夜叉孫二娘の店ならば知らず、今日明るい電燈の光に、こんな肴を賣つてゐるとは、さすがに老大國は違つたものである。勿論私は食はなかつた。

二十二　大運河

我我は鎭江から揚州に通ふ、川蒸氣の上等室に腰をかけてゐる。と云ふと如何にも贅澤らしいが、この汽船の上等室は、奴隷船の船艙と大差はない。現に我我が坐つてゐるのもまつ黒な揚げ板の上である。揚げ板の下は、察する所、直と船底に違ひない。ぢや上等室なる所以は何處にあるかと云ふと、兎に角此處は室になつてゐる、下等は船の屋根の上だから、室と呼びたくも室ぢやない。

船の外は名代の揚子江である。揚子江の水の赭い事は、中學生と雖も心得てゐる。が、どの位赭いかと云ふ事は、江に泛ばないと想像出來ない。私は上海滯在中、黄浦江の水さへ見れば、必ず黄疸を思ひ出した。あれは今考へると、多少でも海水を交へてゐるだけ、やつと黄疸ですんでゐたのである。しかし揚子江の水の色は、黄浦江よりも遙に赭い。まあ似た色を捜して來れば、金物の赤錆にそつくりである。それが起伏する波の間に、紫の影を漂らせながら、何處までも無法に廣がつてゐる。殊に今日は曇つてゐるから、一層その色が重苦しい。江上には無數のジャンクの外に、英吉利の旗を翻した、二本檣の汽船が一艘、一心に濁浪と鬪つてゐる。勿論實際は鬪はずとも、航行出來たのかも知れないが、そのまつ白に塗られた船が、徐に江を溯る所は、どうしても鬪ふと云ふ感じである。私は彼是五分ばかり、揚子江に敬意を拂つてから、冷い板の上に寢ころんだ儘、眠るとも思はず眠つてしまつた。

我我は昨夜十二時頃、蘇州の停車場から汽車に乗つた。鎭江に著いたのは夜明け方である。停車場の外へ出て見ると、車屋もまだ集まつてゐない。唯曇つた葉柳の空に、鴉ばかり何羽も集まつてゐる。我我は兎に角朝飯を食ひに、停車場前の茶館へ行つた。茶館も今起きたばかりだから、麺類も急には出來ないと云ふ。すると島津氏は茶館の亭主に、何とか云ふ物を持つて來いと云つた。それならば今でもある所を見ると、上等な食物ぢやないに違ひない。又實際食つて見た感じも、海綿のやうな、湯葉のやうな、要するに二度と食ふ氣のしない、頗る怪しげな代物である。――さう云ふ觀察を嘗めた上、やつとこの汽船に乗つたのだから、ほつと一息すると同時に、眠氣を催したのも不思議ぢやない。

少時うとうとしてゐた後、汽船の外を眺めると、何時の間に瓜州を過ぎたのか、草の青い一帶の土手が、直と眼の前に動いてゐた。此處はもう長江ぢやない。隋の煬帝が開鑿した、延長二千五百哩と云ふ、世界第一の大運河である。しかし船から眺めた所は、格別雄大でも何でもない。薄日の當つた土手の上に、野菜の色がちらついたり、百姓の姿が見えたりするのは、何だか銚子通ひの汽船の窓から、葛飾の平野でも眺めるやうな、平凡な氣もちがする位である。私は又煙草を銜へながら、紀行を書かされる時の下拵へに、懷古の詩情を捏ね上げよ

うとした。しかしこれは取りかかつて見ると、思つた程容易に成功しない。第一私が考へる事は、悉案内記が破壞してしまふ。今その見本を擧げて見れば、大體下の通りである。

私。ああ、煬帝はこの堤に、萬株の楊柳を植ゑさせた上、十里に一亭を造らせたと云ふ。堤は昔の堤である。が、煬帝は今何處にあるか?

案内記。堤は昔の堤ぢやない。爾來五代以降元明淸、皆北京に都を定め、食糧を江南に需めたから、運河も度度修理された。この堤の草色を見ながら、煬帝の昔を懷ふのは、銀座尾張町に佇みながら、大田道灌を憶ふのも同じ事である。

私。水は今も昔のやうに、悠悠と南北に通じてゐる。が、隋朝は夢のやうに、忽瓦解してしまつたではないか?

案内記。水は南北に通じてゐない。とうに山東省臨淸州では、河底に田畑を拵へたから舟楫の通ずるのは其處までである。

私。ああ、過去よ。美しい過去よ。たとひ隋は亡びても、雲の如き麗姬と共に、この運河に舟を浮べた、我風流天子の榮華は、たとへば壯大な虹のやうに、歴史の空を横切つてゐる。

案内記。煬帝は佚樂に耽つたのではない。あれは大業七年に、遠く高麗を伐たうとした、その準備が暴露しないやうに、表面だけ悠遊を裝つたのである。この運河もすはと云ふ時に、糧食を送る必要上、特に開かせたと思ふが好い。お前は「迷樓記」や「開河記」などを正史と混同してゐはしないか? あんな俗書は信ずるに足りない。殊に「煬帝艶史」なぞは、小說としても惡作である。……

私は煙草を吸ひやむと共に、詩情の製造も斷念した。土手の上の春風には、子供を乘せた驢馬が一匹、汽船と同じ方へ歩いてゐる。

二十三 古揚州(上)

揚州の町の特色は、第一にみすぼらしい事である。二階建の家なぞは殆見えない。平家も眼に止まつた限りは、いづれも貧しさうな容子である。往來は敷石の凸凹した上に、至る所泥水がたまつてゐる。蘇州や江州を見た眼には、悲しい氣がすると云つても誇張ぢやない。私は泥だらけな人力車の上に、さう云ふ町町を通りながら、鹽務署の門前へ辿りついた時、腰纏十萬貫、鶴に騎して揚州に遊んでも、これぢやつまらないに違ひないと思つた。

鹽務署の前には石獅と一しよに、番兵がちやんと控へてゐる。我我は來意を告げた後、長い石疊の奥にある、大きい役所の玄關へ行つた。それから給仕の案内通り、アンペラ敷きの應接室へ通つた。應接室の外の庭には、梧桐か何かが立つてゐる。その梢を透かして見たら、糠雨の降つてゐる空が見えた。役所の中はひつそりした儘、何處に人がゐるか判然しない。成程今でもかう云ふ風なら、歐陽修とか蘇東坡とか、昔の文人墨客たちが、本職の詩酒を樂む片手間、役人を務めたのも當然である。

少時其處に待つてゐると、老人のやうな、若いやうな、背廣の御役人がはひつて來た。これが揚州唯一の日本人、鹽務官の高洲太吉氏である。我我は上海の小島氏から、高洲氏へ紹介狀を貰つて來た。さもなければ意氣地のない私は、揚州へ來る氣にはならなかつたかも知れない。來ても高洲氏を知らなければ、愉快に見物は出來なかつたかも知れない。私は甚失禮だが、此處に小島泥郎氏へ、感謝を表して置きたいと思ふ。「上海游記」を讀まれた君子は、多分記憶に殘つてゐると思ふが、小島氏はあの小さい庭に、櫻の咲いたのを得意にしてゐた、俳骨稜稜たる紳士である。——高洲氏は大きい卓子の向うに、我我二人を招ずると、快活にい

ていろ話をした。氏自身の説によると、外国人の揚州に官たるもの、前にマルコ・ポオロあり、後に高洲氏あるのみだと云ふ。私はこれを聞いた時、大いに氏を尊敬したが、今になつて考へて見ると、損をしたやうな気がしないでもない。今年今月今日今時、揚州の塩務署へはひつたのも、一足先には島津四十起、一足後には私のみである。

うどんの御馳走になつた後、我我は揚州一見の為に、高洲氏と塩務署の門を出た。すると番兵が二三人、一度に我我へ捧げ銃をした。梅雨はもう晴れてゐたが、往来は不相変ぬかるみが多い。私はこの泥の中を歩きながら、又古蹟なるものを見るのだと思ふと、甚心細い気もちがした。が、高洲氏に尋ねて見たら、見物は画舫でするのだと云ふ。画舫ならば勿論情無くとも好い。私はそれを聞かされるが早いか、忽揚州広しと雖も、悉経めぐりたい心願を起した。

高洲氏の庭に一休みしてから、門前の川へ繋がせた、屋根のある画舫に乗りこんだのは、その後まだ三十分と、たたない内の事である。画舫はぢぢむさい船頭の棹に、直と川筋へ漕ぎ出された。川は幅も狭ければ、水の色も妙に黒ずんでゐる。まあ正直に云つてしまへば、これを川と称するのは、溝と称するの勝れるのに若かない。その又黒い水の上には、家鴨や鵞鳥が泳いでゐる。両岸は汚い白壁になつたり、乏しい菜の花の畑になつたり、どうかすると岸の崩れた、寂しい雑木原になつたりする。が、いづれにした所が、名高い杜牧の詩にあるやうな、「青山隠隠水迢迢」の趣なぞは見られさうもない。殊に煉瓦の橋があつたり、水際に下りた支那の年増が、泥靴の洗濯をしてゐたりするのは、吟懐を傷けるばかりである。が、それはまだしも好い。一番私の辟易したのは、この大溝の臭気である。私はその臭ひを嗅ぎながら、ぢつと舟の中に坐つてゐると、何だか又肋膜のあたりが、かすかに痛みさうな気がして来た。しかし高洲、島津の両先生は、香料の川にでも泛んでゐるやうに、平然と何か話してゐる。私の信ずる所によれば、日本人は支那に住んでゐると第一に嗅覚が鈍るらしい。

二十四　古揚州（中）

この水路を行き尽した所に、城門へ穿つた水門があつた。水門にはちやんと番人がゐるから、舟さへ行けば開けてくれる。それを向うに通り抜けると、急に川幅が広くなつた。画舫の左右には高高と、揚州城の城壁が聳つてゐる。この城壁も丸の内に、蔦蘿が壁を蔽つてゐたり、灌木が生え伸びてゐたりするのは、杭州や蘇州と変りはない。水と城壁との間には、盛り上つた湖の土の色が、青むらの向うに明いてゐる。画舫の右には竹林が多い。その中に一軒、百姓家が見えた。百姓家の壁にはべた一面に、牡丹餅程のものが貼りつけてある。いや、現在もこの家の前には、鳥打帽をかぶつた男が一人、頻に牡丹餅を製造してゐる。これは何かと思つたら、冬の燃料を作る為に、牛糞を干し固めてゐるのであつた。

しかし水門を抜けてからは、水も前程臭くはない。景色も画舫の進むのにつれて、だんだん美しさを加へるやうである。殊に或竹林の後に、古い茶館が一軒ある、——その辺の名前を聞いて見たら、緑楊村と云ふのは風流だつた。実際さう云はれて見れば、茶館の卓子を囲みながら、川を見てゐる連中の顔も、緑楊村裏の住人らしい、泰平の相を具へてゐる。

その内に我我の画舫の先には、もう一艘画舫が見え始めた。この画舫に乗つてゐるのはいづれも女ばかりである。しかも棹をとつたのな

ぞは、日本めかしい御下げの髮に、紅い玫瑰の花をさしてゐる。私はもう五分もすれば、彼等の舟を追ひ越すから、その時この揚州の美人に、一瞥を與へようと思つてゐた。が、城壁が盡きると同時に、水路の分れる處へ來ると、彼等の畫舫は右へ曲るし、我我の畫舫は反對の方へ、冷淡にも船首を向けてしまふ。見送れば彼等の舟の跡には、兩岸の蘆の靜な間に、薄白い水光が殘つてゐる。「二十四橋明月夜。玉人何處敎吹簫」――私は突然杜牧の詩が、必しも誇張ぢやない事を感じた。どうも揚州の風物の中には、私さへ詩人と化せしめるやうな、快い惱ましさがあるやうである。

畫舫は船頭の操る棹に、水上の水草を押し分けながら、大きい石の眼鏡橋をくぐつた。橋のアアチの石面には、白墨かペンキか覺えてゐないが、兎に角白い字を並べ立てた、排日の宣言が書き立ててある。その橋の下を通り抜けると、畫舫は高洲氏の命令通り、斜に右岸へ進路を向けた。其處にはずつと水際に、柳ばかり枝を垂らしてゐる。

「今の橋？　今の橋が大虹橋、この岸が春柳堤さ。」

高洲氏は舟を止めさせながら、から私に教へてくれた。

その春柳堤へ上つて見たら、路を隔てた麥畠の向うに、草色の薄い小山がある。その又小山に幾つとなく、丁度鼹鼠が土を上げたやうに、小さい土饅頭が並んでゐる。墓もかうなると惡くはない。何だか揚州の土の底では、死人さへ微笑してゐさうな氣がする。私は徐氏の花園の方へ、ぶらぶら柳の下を歩きながら、うろ覺えのミュッセなぞを暗誦した。ミュッセ、――尤もミュッセだつたかどうだか當てにはならない。實は唯口の内に、柳、墓、水、戀、草、と云ふやうな、その場合に適切な言葉ばかり、好い加減に呟いてゐると、如何にもミュッセじみた氣がし出したのである。

徐氏の花園を一見した後、我我は又畫舫に乘つて、元通り川を上つて行つた。すると今度は水の向うに、名高い五亭橋が見え始めた。五亭橋一名蓮華橋は、やはり石の眼鏡橋の上に、中央に一つ、左右に二つ、都合五つの亭を構へた、頗贅澤な橋である。亭の柱や欄干は、皆淋びた丹塗りだから、贅澤でも格別惡どくはない。唯橋臺の石の色は、もう少し古みを帶びてゐても、差支へないと云ふ氣がした。が、大體感じを云へば、周圍に蔓る柳や蘆と、多少不調和な氣がする位、支那風に風雅を極めてゐる。私はこの橋の姿が、かすかに靑んだ空を後に、柳の中から現れた時、思はず微笑せずにはゐられなかつた。西湖、虎邱、寶帶橋、――それらも勿論惡いとは云はない。しかし私を幸福にしたのは、少くとも上海以來、何處よりもまづ揚州である。

二十五　古揚州（下）

「――五亭橋畔に喇嘛塔があります。この寺は法海寺と云ふのださうですが、紅殼を塗つた本堂は勿論、喇嘛塔もひどく荒れてゐました。しかし疎な竹林の空に、大きい辣韮形の塔が聳えてゐるのは、壯觀でない事もありません。我我は寺の中をぶらついた後、又畫舫に乘りこみました。

「川の兩岸には不相變、寂しい蘆の茂つた間に、柳や槐が立つてゐます。法海寺の對岸は確乾隆帝の釣魚臺だつたと思ひますが、その水郷らしい風景の中に、古い亭が一つありました。その水路の窮まつた所が、平山堂のある蜀岡です。遙に畫舫から眺めても、松林と麥畠と土の赤い崖と、斑に入り交つた蜀岡の景色は、頗畫趣に富んでゐました。これは一つ

には閣の上に、處處青空を見せた、春雲が靜に動いてゐる。――その微妙な光の工合が、手傳つてゐたのかも知れません。

―しかし畫舫から上つた後も、蜀岡・――少くとも歐陽修が建てたと云ふ、平山堂のあるあたりは。甚閑雅な所でした。堂は法海寺の境内に、大雄寶殿と竝んでゐますが、ひやりと埃の匂のする、薄暗い堂へはひつた時は、何だか難有い氣がしたものです。私は額や聯を讀んだり、欄外の見晴しを賞したり、少時堂の中を徘徊しました。この堂の主人歐陽修は勿論、此處に遊んだ乾隆帝も、きつと今の私のやうに、悠悠たる氣もちを樂んだでせう。その意味では私も凡俗ながら・古人と默會が出來たのです。堂の前には亭亭と、幹の白い松が二本、高い軒瓦を凌いでゐる、――私はそれを仰ぎ見ながら、鄭蘇戡先生のヴェランダの外にも、やはり此白松と云ふのが植ゑてあつた事を思ひ出しました。松の梢に遮られた空には、絶えず時鳥が啼き渡つてゐます。……」

私は手紙を書きかけた儘、「やあ」と高洲氏に御時儀をした。高洲氏は其時私の前へ、一椀の草決明を勸めたからである。――我我は名所の見物をすますと、高洲氏の邸宅へ引き揚げて來た。邸宅は手廣い庭を控へた、好く云へば支那の庵室のやうな、惡く云へば稗蒔きの家に近い、藁葺屋根の建物である。が、草花の多い庭は決して稗蒔きどころの騷ぎぢやない。殊に現在暮色の中に、シネラリアや雛菊の仄いてゐるのは、明星派の歌じみた心もちもする。――私は窓の硝子の外に、さう云ふ庭先を眺めながら、書きかけた手紙はそつちのけに、ゆつくり熱い草決明を啜つた。

「これさへ飲んでゐれば無病長壽さ。僕は珈琲も紅茶も飲まない。朝夕こればかり飲んでゐる。」

高洲氏はやはり茶椀を前に、草決明の効能を吹聽した。按ずるに草決明と稱するのは、はぶ草の實を煎じたものである。これは牛乳や砂糖を入れると、飲料としても惡いものぢやない。

「つまり可首烏の類ですか？」

島津氏は一口飲んでから、口髭についてゐる滴を拭つた。

「何首烏は君、婬藥さ。草決明はあんな物ぢやない。」

私はそんな對話を外に、もう一度手紙を書き始めた。

「――我我は今夜高洲氏の所に、一晩止めて貰つた後、鎭江へ引返す豫定です。島津氏とは多分鎭江から別れる事になるでせう。私は蘇州滯在中、島津氏と一度大喧嘩をしました。が、今ではかう云ふ好漢と、何故喧嘩をしたかと思つてゐます。どうかその點は御安心下さい。

―何でも坊間の說によると、高洲氏は年倖何萬圓とかの大官になつてゐるさうですが、この部屋も紫檀の寢臺があつたり、いろいろ骨董が竝べてあつたり、ホテルよりも遙に難有い位です。唯寢臺の足りない爲、私は島津氏と長椅子の上へ、同衾する運命を荷ひました。それも足と頭と竝ぶやうに、枕を反對にするのださうですから、私の頭は島津氏の足に何時蹴飛ばされるかわかりません。私は如何に島津氏の足が、赤縣の山河を踏破しただけに頑丈であるかを知つてゐます。その足が私の枕の近所に、夜中橫はつてゐるのだと思ふと、確に愉快ではありません。私は昔袈裟御前が、盛遠に打たれる覺悟をしながら、靜に獨り寢てゐた如く、今夜も豫め……」

私は急に手紙を隱した。

「大分長い手紙ですな。」

島津氏は何だか落ち著かなさうに、部屋の中

を歩きながら、私の手紙へ眼をやつた事によると島津氏自身も、私に頭を振られはしないかと、内心不安に思つたのかも知れない。

二六　金山寺

「聯の文句も變りましたね。御覧なさい、あすこに貼つてあるやつなぞは、獨立人格、共和精神としてあります」

「其他、此處のも新しい、文明世界、安樂人家と書いてあります。」

我我は人力車にゆられながら、こんな事を話し合つた。狭い路の両側には、茶賣屋だの、安宿だの、いづれも薄汚い家が並んでゐる。その戸口に貼りつけた、傍の紅唐紙の聯を讀むと、大抵今話した通り、新時代の文句を書いてある。我我が今通つてゐるのは、呉中の門戸たる鎭江ではない。正に「咸豐」八年六月、英天津條約により開港せられたる、民國十年の鎭江である。

「今綺麗な着物を着た子供がゐたでせう？」

「ええ、黒い犬を抱いてゐた。」——

「あれです。あれは天然痘ですよ。」

私は急にこの四五年、種痘をしない事を思ひ出した。

その内に我我の人力車は、鎭江停車場の前に著いた。が、時間表を調べて見ると、南京行の汽車に乘るのには、まだ一時間程餘裕がある。既に餘裕があるとすれば、あの山の上に寺の見える、金山寺を見ないと云ふ法はない。我我は評議一決するが早いか、早速又人力車の客となつた。但し早速とは云ふものの、例の通り賃錢を値切る爲に、十分ばかりかかつたのは事實である。

最初に車の通つたのは、掘立小屋ばかり軒を並べた、頗原始的な貧民窟である。小屋の屋根は藁葺きだが、土を塗つた壁は殆見えない。多くはあんぺらか蓆張りである。その内外には男も女も、陰慘たる顏をしたのがうろついてゐる。私は小屋の屋根の後に、長の高い蘆を眺めながら、もう一度疱瘡になりさうな氣がした。

「どうです、あの犬は？」

「毛も何もない犬は珍しい。が、氣味は惡いですね。」

「ああ云ふのは皆梅毒ですよ。苦力や何かに移されるのださうです。」

その次に車の通つたのは、川があつて、材木屋があつて、—要するに木場のやうな所である。此處には家家の軒に貼つた、小さい緋唐紙の切れ端に、「姜太公在此」云云の文字が並んでゐる。これは勿論魔除けのやうな、お呪ひの類に違ひない。その川を渡つたら、不景氣な町を通り抜けた所に、赤塗の門が立つてゐた。門の前には乞食が一人、松の木の根かたに坐つた儘、しきりに[illegible]呼[illegible]してゐる。事によるとあれは食を乞ふ爲に、苦しさうな容子をして見せたのかも知れない。

金山寺は勿論この寺である。我我は車を捨てた後、一通り寺内を歩き廻つたが、何分にも汽車の時間があるから、ゆつくり見物する氣もちになれない。寺は山に倚つてゐるので、（昔はこれが島だつたさうだが、）堂塔はだんだん高くなつてゐる。その間の石段を上下しながら、ざつと見て歩いた感じを云ふと、勢ひ未來派の畫のやうな、妙に錯雜したものになつてしまふ。しかも當時の印象に、それに違ひなかつたのだから、手帳に書いてあるのを寫して見ると、大體こんな調子である。

「白壁。赤い柱。白壁。乾いた石。廣い敷石。忽又赤い柱。白壁。額の黒。欄の彫刻。梁の金と赤と黒と。大きい[illegible]の畫。頭に殘つた六つの灸跡。揚子江の流。代赭色に泡立つた

波。無際限に起伏する波。塔の屋根。甍の草。塔の甍に區られた空。壁に嵌めた石刻。金山寺の圖。王士禛の詩。流れて來る燕。白壁と石欄と。蘇東坡の木像。甍の黑と柱の赤と壁の白と。島津氏はカメラを覗いてゐる。廣い敷石。簾。突然鐘の音。敷石に落ちた窓の色。……」

どうもこれだけ書いたのぢや、讀者には一向通じさうもない。が、通じる事にして置かないと、書き直すだけでも手數である。手數も勿論ふだんなら辭さない。が、私は今名古屋にゐる。おまけに道づれの菊池寬は、熱を出して呻つてゐる。どうか其處を御酌量の上、通じるとして置いて頂きたい。この一回を書き終つた後、私は又菊池の病室へ、出張しなければならないのである。

二十七　南京（上）

南京へ著いた日の午後、私は何とか云ふ支那人と、取り敢へず城內へ見物に、例の通り人力車の客となつた。夕日の光の流れた町は、西洋建も交つた家並の後に、麥や蠶豆の畑を見せたり、鵞鳥のゐる池を見せたりする、その上比較的廣い往來には、行人の數も稀にしかない。案內者の支那人に尋ねて見ると、南京城內の五分の三は、畠や荒地になつてゐると云ふ。私は路側の柳だの、崩れかかつた土塀だの、燕の群だのを眺めながら、懷古の情を催すと同時に、から云ふ空き地を買つて置いたら、成金になれさうな心もちもし出した。

「誰か今の內に買つて置けば好いのに。浦口（南京の對岸にある町）が盛になりさへすれば、きつと地價も暴騰するぜ。」

「駄目です。支那人は皆明日の事を考へない。地面なぞを買ふものはありやしません。」

「ぢや君だけ考へるさ。」

「私もやはり考へない。——第一考へる事は出來ないのです。家を燒かれるか殺されるか、明日の事はわからんでせう。其處が日本とは違ふ所です。まあ今の支那人は、子供の生ひ先を樂みにするより、酒か女かに嵌つてゐますね。」

その內に何時か往來には、吳服屋だの本屋だの、賑かな町も見え始めた。私は靈巖山へ登つた歸りに、何度も路に迷つた揚句、とうとう日さへ暮れたものだから、驢馬ごと田の中へ飛びこんだり、襯衣まで雨に通されたり、一方ならない難儀をした。その記念にはキッドの靴に、二三箇所大きい穴が明いてゐる。私は靴屋の見えたのを幸ひ、靴を買ふ必要を痛感したから、早速店の飾り窓の前へ、車を止めるやうに命令した。

靴屋は中へはひつて見ると、思つたより廣い店構へだつた。其處に職人がたつた二人、こつこつ靴を拵へてゐる。まはりには大きい硝子の戶棚に、西洋風の靴は勿論、支那の靴もいろいろ飾つてある。黑い靴、桃色の靴、水色の靴、——支那の靴はいづれも繻子張りだから、大小さまざまの男女の靴が、夕明りの中に並んでゐるのは、妙に美しい氣がしない事もない。おまけに帳場に立つた主人は、色の白い、口もとの優しい、それだけに一層氣味の惡い、片目眇の男である。私はちよいとロマンティックな氣になりながら、出來合ひの靴を物色し出した。この店には戶棚の何處かに、人間の皮を縫ひ合はせた華奢な女の靴があるかも知れない。——そんな氣も多少はしたのである。が、私の買つた靴はロマンティックでも何でもない。正價六圓の編上げである。色も、——その後この靴をはいた儘、村田烏江君と[illegible]つたら、「綺麗な色ですね、鞄をはいて歩いてゐるやうぢやないですか」と、殘酷な批評を加へられた。實際又

長江游記

前置き

これは三年前支那に遊んだ時、長江を遡つた時の紀行である。かう云ふ目まぐるしい世の中に、三年前の紀行なぞは誰にも興味を與へないかも知れない。が、人生を行旅とすれば、畢竟あらゆる追憶は數年前の紀行である。私の文章の愛讀者諸君は「堀川保吉」に對するやうに、この「長江」の一篇にもちらりと目をやつてくれないであらうか？

私は長江を遡つた時、絶えず日本を懷しがつてゐた。しかし今は日本に、——炎暑の甚しい東京に汪洋たる長江を懷しがつてゐる。長江を？——いや、長江ばかりではない、蕪湖を、漢口を、廬山の松を、洞庭の波を懷しがつてゐる。私の文章の愛讀者諸君は「堀川保吉」に對するやうに、この私の追懷癖にもちらりと目をやつてはくれないであらうか？

一 蕪湖

私は西村貞吉と一しよに蕪湖の往來を歩いてゐた。往來は此處も例の通り、日さへ當らない敷石道である。兩側には銀樓だの酒棧だの、見慣れた看板がぶら下つてゐるが、一月半も支那にゐた今では、勿論珍しくも何ともない。おまけに一輪車の通る度に、きいきい心棒を軋ませるのは、頭痛さへしかねない騷騷しさである。私は暗澹たる顏をしながら、何と西村に話しかけられても、好い加減な返事をするばかりだつた。

西村は私を招く爲に、何度も上海へ手紙を出してゐる。殊に蕪湖へ著いた夜なぞはわざわざ迎への小蒸氣を出したり、歡迎の宴を催したり、いろいろ深切を盡してくれた。（しかもわたしの乘つた鳳陽丸は浦口を發するのが遲かつた爲に、かう云ふ彼の心盡しも悉く水泡に歸したのである。）のみならず彼の社宅たる唐家花園に落ち著いた後も、食事とか著物とか寢具とか、萬事に氣を配つてくれるのには、實際恐れ入るより外はなかつた。して見ればこの東道の主人の前へも、一日間の蕪湖滯在は愉快に過ぎねばならぬ筈である。しかし私の紳士的禮節も、町に似た西村の顏を見ると、忽何處かに消滅してしまふ。これは西村の罪ではない。君僕の代りにお前おれを使ふ、我我の親みの罪である。さもなければ往來の眞ん中に、欠伸をする驢馬と向ひ合つた時も、あんなに不快を公表する事は、當分差控へる氣になつたかも知れない。

「つまらない所だな、蕪湖と云ふのは。——いや蕪湖ばかりぢやないね。おれはもう支那には飽き飽きしてしまつた。」

「お前は一體コシヤマクレテゐるからな。支那は性に合はないのかも知れない。」

西村は横文字は知つてゐても、日本語は甚未熟である。「こましやくれる」を「コシヤマクレル」、鷄冠を「トツサカ」、懷を「フトコロ」、「いやらしい」を「ガラムシヤ」、——その外日本語を間違へる事は殆ど擧げて數へるのに堪へない。私は西村に日本語を敎へにわざわざ渡來した次第でもないから、佛頂面をして見せたぎり、何とも答へず歩き續けた。

すると稍幅の廣い往來に、女の寫眞を並べた家があつた。その前に閑人が五六人、ぢろぢろ寫眞の顏を見ては、何か靜に話してゐる。これ

昭和三年一月　五日印刷
昭和三年一月　九日發行

現代日本文學全集　第三十篇

著者　芥川龍之介

發行者　山本美
東京市麴町區内幸町一丁目三番地

印刷者　杉山愛二
東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌　東京市麴町區内幸町一丁目三番地
幸ビルディング壹階
改造社
振替東京八四〇二一番
電話（銀座一七三三番
銀座四五五八番
銀座五〇四六番）

株式會社秀英舍印刷所